奥出雲

[2]

（第 101 ～ 200 号）

（1983 年 9 月～ 1991 年 12 月）

横田史談会

高橋一郎 編著

奥出雲51～200号内容項目別一覧表 （数字は号数）

中 世 編

① 奥出雲東部の旧家 — 未完
横田氏(99) 代官 小池・安部氏(100)
三沢氏(101) 馬来氏(104)

②○中世横田庄概観－年表・系間(127, 8)
○誇りうる中世横田庄－その社会と経済の動き (164, 165, 166)

③○飯島三沢氏物語 (106, 107, 109, 111, 112, 117, 119, 126)
○尼子家臣団の分析 (131, 132, 133, 134, 135)
○岡山県川上町の三沢氏－三宅隆道(81)
○地域史を考える －中尾慶次郎(81)

④○藤ケ瀬城主三沢氏の祖先は
木曽義仲ではない(51) 飯島氏である(52)
在来の偽系図の作者は(53)
○藤ケ瀬城の遺構－寺井 毅(167)

⑤ 陰陽の中世史・備北の山内・多賀山両首藤氏と奥出雲(150～154, 156, 158, 160)

⑥ 杠城興亡記－浅原公章 (84, 85, 87, 88, 90～92)

⑦ 惣と一揆の行動－序論 — 未完 (90～93, 95)

時代・地域と奥出雲

⑧ 朝鮮半島と奥出雲 (192～194, 198) — 未完

⑨ 太平記の時代と奥出雲 (193～200) — 未完

⑩ 出雲大川流域物語 — 未完
横田の両岸 (178) 安部吉重郎(184, 186)
漆仁の薬湯 (191)

⑪○出雲国風土記の神話(57)
○稲田姫の戸籍と斐伊川の地籍(86, 87)
○神話の基盤 (88, 89)
○書きなおされつつある日本－出雲風土記の位置 (116)
○風土記を読む会から－出雲の四大神(118)
○スサノオの開拓地 (135)
○ヒノ川＝斐伊川はどこか (130)
○横田郷は秘境であった (143)

たたら製鉄

⑫ 出雲で古い鉄師 — 未完
③大馬木の山本・杠家 (51, 56)
卜蔵家の原鈩－佐世川徳雄 (129)

⑬ 山陰の鉄の始源は－朝鮮半島に於ける古代製鉄と北九州 (141～144)

⑭ 砂鉄製鉄史 (76, 77)

⑮ 奥出雲のたたら製鉄史 (105～109, 113, 114
(中世) 117, 125 (近世) 160, 162, 163,
(松江藩政) 165, 171, 172, 176, 179, 180,
181, 183, 185, 190, 197) — 未完

⑯○たたらの手引－砂鉄たら鉄へ (144)
○やさしい鉄滓の見方－窪田蔵郎 (61)
○高殿以前の原始的な製鉄法
－仝 (65, 66)
○発掘された羽口－仝 (67, 68)

⑰ 鳥取藩政と伯耆国鉄山のうつりかわり
－影山 猛 (170)
横田たたらの里を確固なものにするには(175)

寺院関係

⑱ 岩屋寺 — 未完
○傑僧快円 (53, 58, 63)
○庶民の寺岩屋寺 (155)

⑲ 高田寺根元録 (79, 82)

⑳ 奥出雲の仏教 (130, 131)

㉑ 三沢蔭涼寺と安国寺恵瓊 (124)

考古学から

㉓ 出雲と吉備－東森市良 (54)

（1～50号の目録は50号に掲載）

㉔ 奥出雲と古代　日焼田遺跡ー仝
(56, 95)
㉕ 奥出雲の古代社会ー古墳文化
ー中浜久喜　(93, 94, 96～98)
㉖ 産業考古学のすすめー森口　保 (72, 73)

歴史と風土　— 未完

㉗ 横田と音楽 (55)　比波科学 (55)
㉘ 横田の茶道・前史 (74～76)
松平不昧と茶道　(102～104)
㉙ 経済更生指定村の生き方
ー過去から現代へ (177)
㉚ 人間と環境
教育の風土 (52)　美作の津山 (53)
北備大会から (54)
㉛ 洋の西と東ー聖母マリヤと観音 (152)

小字の歴史　— 未完

㉜ 稲田 (63)　横田町① (123)
大馬木西部 (137, 138)
尼子経久の母馬木氏の里ー宇波
(169, 172)　下横田㊤ (192)
散歩道　キミネさん (159)

人　物　— 未完

㉝ 井上栄太郎 (75, 77)　門野長造 (118)
卜蔵孫三郎 (78, 83, 86)
岡崎喜一郎 (109)　卜蔵梅之丞 (113)
郷学記念碑ー善徳寺子代記 (140)
細木芒角星 (171)
安部宙之助 (168, 173, 176, 178, 180, 186
187, 191, 193)
㉞ 奥出雲に関する研究書目録①と
研究者名 (69)　— 未完
荒木宗重 (52)

文　芸

㉟ 奥出雲の歌道
(64, 66, 67, 70～73)
㊱ 奥出雲俳諧史　— 未完
(80, 82, 83)
㊲ 奥出雲と文学・芸術　— 未完
大町桂月 (138)　与謝野夫妻 (161)
頼春風・杏坪 (174, 179, 180, 185, 187)
㊳ 湯の廻の文芸　(82)
㊴ 南画と奥出雲　(89)
㊵ 森欧外と中江藤樹 (99)
㊶ 松平不昧の書　(185)
㊷ 菅茶山と奥出雲　(170)

碑・石仏　— 未完

㊸ 石明しぐれ塚 (77)　路考発句塚 (87)
芭蕉の句碑 (158)　細木芒角星句碑 (171)
㊹ 三界萬霊塔 (150)　龍の駒 (151)
六日市三上さん (189)
㊺ 路傍に刻む歴史 (155, 162)
㊻ 妙厳寺と袖師が浦の地蔵 (135)
㊼ 宝篋印塔 (三沢為忠)　(195)

諸　史　— 未完

㊽ 奥出雲の民力　(120, 121)
㊾ 横田の生活 (明治35年)
(145～147, 150～152, 154, 158, 159)
㊿ 雲州そろばん国指定伝統的工芸品に (124)
(51) 仁多郡畜産小史　(148, 149)
(52) 仁多郡農談会　(58～60, 62)
(53) 庶民の中の旗本武士 (108, 110～112, 114,
116)

地　誌　— 未完

(54) 横田銘草木集ー丸山　巌
(66～81, 83)

(10頁へ続く)

(諸篤志家のお蔭により200号記念の増頁ができ総目録をつけ合併号としました)

56 船通山の鳥類を探る－内田　映 (86, 88, 90, 96, 101)

57 吾妻山・庄原・多里は海底であった (115)

58 自然との共生を文化の中心へ (184)

民具・民話・民謡 —未完

59 民具と民俗資料 (62)

除草見たら除草機へ (64)

高野山の田植早乙女ハマリさん

－岡村達男 (69, 70)

60 民間信仰

あたごさん (88)

61 むかし・いま・あす（行事）

(94～100, 102)

62 横田の民話

(145, 147, 153, 156, 158, 170)

わらべうた (145, 147)

63 鉄にまつわる話 (60)

親をいたわった話（古文書から）(71)

木地谷敵討ち事件 (120, 121)

妙好人－浅原才市 (122)

64 大東町下久野の番所 (155)

随想ほか

65 龍虎相搏つ(130)　辰のとし(153)

馬・うま・午・ご・むま (177)

年号考 (166～168)

66 東北夏の旅から (126)

もみぢのみちのくひとり旅 (139)

奥の細道と奥出雲 (182)

みちのく奥の細道ふたり旅 (189)

67 短　詩「少年の心」 (159, 168)

提言など

中世に眼を (76)

憩の丘に彫刻の森を (165)

たたらの里横田を確固なものにするには (175)

ロマンと亡霊 (90)

つくり出す文化への回帰を (119)

横田町本町の再生を (123)

イベント（偶発）的世相 (125)

歴史の真実を求めて (146)

栄光さりまた来る（7世紀の歴史） (153)

鏡・剣・玉をめぐる神話の作られた時代背景は

（7世紀の歴史） (157)

後世にのこすもの—像 (161)

古事記は偽書の重み (162)

郷土読本を読んで (163)

大岡昇平の文学 (167)

神話と歴史 (168)

歴史の面白さ楽しさと怖さ (173)

単身赴任－古代木簡から (147)

大嘗祭考 (181, 183)

このほか　町内の美術の各クラブから、写真・書・日本画をのせて頂いた（1～82）。文芸関係では、57号から短歌と俳句、78号から川柳を現在まで毎号のせて頂いている。

こゝに掲載したもので、書き直して学術論文として学会誌・研究紀要・著作集等に要請も頂いて収録して頂いた。

かなりの図書館・大学・研究所・学会等と研究物の交換の橋渡しとして、本誌が役にたっている。

（旧号がご希望によって－数号は複写－お届けできますので、ご連絡いただけばよろこびます。拙いものですが、篤志家の御協力で続いていることを、感謝しております）

祝

今、印刷はコンピューター時代！

電子編集組版＆電算植字システム

有限会社 植田軽印刷

〒699-15 島根県仁多郡仁多町大字三成453-1

TEL・FAX 0854－54－0114

会員頒布一部百五十五円／六九一六 島根県仁多郡横田町一、〇六一ノ二 編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0－601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成 植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 101 号
（9月号）
昭和 58. 9. 3
奥出雲編集集団

奥出雲東部の旧家③
新補地頭・三沢氏

――承久の変

五十四年のテレビ番組「草燃える」によってよく知られたように、後鳥羽上皇は「荘園整理」のため院政を強化し、さらに京都と鎌倉の公武融和を夢みたのであったが、その壁の厚いことを知ってからは、討幕の方向へと志が変わった。承久三年（一二二一）五月、北条義時追討の院宣を下した。これに対し幕府方の京都進撃の断を下したのは尼将軍政子であった。

義時の長男泰時は東海道を、それに北陸道と東山道の三軍あわせて十九万騎が京都に攻め上った。京側は美濃、尾張、木曽においてこれを防いだが総崩れとなり、やむなく残る全力を宇治、瀬田に投入した。六月の半ば、降り続いた雨で宇治川は濁水がみなぎり、防戦よく努める京方に、幕府方は攻めあぐんだ。しかし翌日の晴れ間を利用しての、東軍鎌倉方の強引な敵前渡河は、濁流にのまれる多くの犠牲を出しながらも、ついに勝利をつかんだ。追討の宣旨が出されてからわずか一か月、東西の二大勢力の正面衝突にしてはいささかあっけないくらいの幕切れであった。

――伊那源氏、奥出雲へ

乱後の幕府方の処置は厳しく、三上皇はそろって遠島に配流、武士の処分は大半が斬（ざん）罪というものであった。そして京方の貴族、武士たちの所領三千か所はすべて幕府に没収され、東国の御家人武士たちがそこへ新補の地頭として任命された。関東武士の西国入りによって、とくに近畿近国の所領紛争が激化し、その処理のため、頼朝以来京方に任せ切っていた方針を放棄して、六波羅探題を京都において直接幕府が処理してゆく体制になった。幕府勢力は深く浸透し、鎌倉殿の地位は格段に強化していった。

この渡河作戦についての吾妻鏡の記録は詳しい。このうえに「承久記」「承久兵乱記」さらに「三沢軍功記」を加えてみると――この方面の大将は北条泰時と三浦義村であった。成功したのは義村の子で十八歳の三浦次郎泰村ほか九十五騎の若手武者であり、この中に若い飯島広忠がいた。その功によって飯島氏一門の惣領である祖父の飯島太郎が仁多郡三沢郷地頭職に補された（後、地名にちなんで三沢氏を名乗る）。このとき伊那源氏同門の片切（諏訪部の祖）飯沼らのほか、伊那谷の住人で諏訪の神人中沢氏が、それぞれ奥出雲の地を領した。

――両源氏系の対立

しかし、これらの諸氏が奥出雲に入るのはしばらく後、十三世紀末ごろのことになる。元の来襲に備えて、鎌倉幕府が坂東武士に西国所領への封任を勧め、一方、それぞれの一族にとっても、本領の狭小さが移動を促したのである。

当初は別掲地図のように多くの関東武士が来たのであるが、十五、六世紀にかけて成長し、国人衆となったのは、信州伊那谷から下った伊那源氏系の中沢（牛尾に）飯沼（加茂に）諏訪部（三刀屋に）飯島＝三沢の諸氏である。そして出雲国平原部に早くから定着していた近江の宇多源氏系の諸氏と対立することになるのである。

やがて、宇多源氏系勢力の中から頭をもたげてきた尼子氏の前に、伊那谷の源氏系がたちはだかった。その中心が三沢氏である。奥出雲入部以来百七、八十年は三沢山（仁多郡仁多町）に城を構えていた三沢氏は、このころ横田盆地を見下ろす高鍔山（たかつばやま＝横田町）に進出、藤ケ瀬城を築いて勢威を誇示していた（この城の裏門が現在同地の晋叟寺山門として残っている）。

三沢氏は幾度も尼子を窮地に陥れた。尼子氏の成長後も、これと毛利氏との間に介在して、所領の拡大に努めた。それは「一所懸命」を本願とする坂東武士の伝統でもあったが、出身地の伊那谷と奥出雲が、地形・風土、従って開拓・生産の様式、さらに用兵の条件が似ていることが、経験第一のこの時代に大きく幸し、強力な地盤を育て、天険によってその勢力を温存し得たものといえる。逆に平野部に育った近江源氏は、出雲の平野部で地の利も得て成長したのである。

――原動力は砂鉄精錬

さらに伊那谷、奥出雲ともにカコウ岩の地質地帯で、この地に移ってからの砂鉄精錬の成功があったことを見逃してはなら

奥出雲東部の旧家③　船通山の鳥類を探る④　川柳・短歌・むかし・いま・あす

ない。銀山の場合は坑道を確保し掘り子を入れて採掘すれば、精錬も容易であり、すぐに多大な財宝を得ることができたから、石見銀山の攻防は華やかであり激しくもあった。それにひきかえ砂鉄精錬の場合は、総合的経営によってのみ成功するものであって、砂鉄採集、木炭製造、そして今日なお科学的に究明されていない経験による技術――タタラ操業と大鍛冶屋――の集積によるものであったから、攻防によって鉄山を奪うということもあり得ないし、たとえ地所を確保してもそれが直ちに財宝につながるものでもなかった。

とはいえ、砂鉄は武器・農具の原材料としては欠くことのできないものであった。このことが三沢氏が諸勢力の間に介在して勢力を保持し得た根源であり、その向背動向を定めた基でもあった。

◇三沢氏の祖と子孫◇

冒頭から三沢氏の祖は飯島氏であると書き起こし、その同門の数氏が奥出雲に下って土着し、中世を通じてあなどり難い勢力圏を形成したと、中世史に一つの新しい視点を提示した。

ここに至るまでには幾条の壁があったことを明らかにし、祖先探しの楽しさと、その一つの軌跡を披露しておくことにする。

仁多郡誌、新旧島根県史はいずれも三沢氏の祖を木曽義仲としている。それは奥出雲に流布している三沢氏の系図を基にしているからである。私はこの流布した系図は当地の諸資料と符合しないことが多いので、偽作であろうと考え、探究を進め、明らかになったので「山陰史談」に前述のように考証して発表した。さらに流布している十数種の三沢系図(偽)の由来も明らかにできたので小誌「奥出雲」に発表し、詳論は近く「山陰史談」にのせる予定にしている。

この系図の作者は、前回で書いた仙洞御所横田荘代官の末孫安部源太左衛門の孫の宗越(学者、医師でのち出家している)であることがわかった。元禄年間(一六八八―一七〇四)作である。これを原本として、分家のとき、あるいは養子縁組で出るときに写して持ち出したものがほとんどである。筆者、その年代、所持者、さらに筆写の時の誤りの変化から明らかとなった。

私が深めていた疑問をさらに勇気づけてくれたのは、故山上八郎氏である。昭和四年、二十七歳で「日本甲冑の研究」によって学士院賞を得た人。戦後三度この地を訪れ、その度に「三沢氏代々の名乗りに為の字があるから伊那源氏である」と示唆された。

かねてから仙台藩伊達騒動の中心である亀千代(綱村)の生母三沢初子は、この三沢氏の出であることが知られていたので、その弟で仙台藩の支藩主の系図を求めて岩手県前沢町を訪ね、その祖が飯島氏であることが明らかになった。間もなく鳥取市の南波冀志さんから近くの三沢猛さんを紹介されて、詳細な系図を拝見した。飯島氏が祖先であり、当地の資料に出る一族の名がほとんどこの中にはっきり書き込まれていた。

その後、山口市の文書館で三沢氏関係の文書をみるとこれとほとんど同一であった。さらに多くの文書をみると、奥出雲を去ってからは不遇であったとされている三沢氏が、実は毛利家高禄者十人の中に入り、長府支藩の二番家老となって幕末に至っていることが判明した。職員の好意によって末孫の方との連絡もとれ、はるばる西宮から家族連れで訪問をうけることになった。ドイツの著名な二つの会社の日本総代理店も兼ねている会社の重役さんで、未見の文書を拝見することができた。

残すは祖飯島氏だけとなった。たまたま、東京・八王子の私の弟宅の隣に伊那谷出身の飯島家があると聞いて訪ねた。当主は著名なカメラ会社の重役をしておられる飯島積さん。「飯島氏の研究」「北伊那郡史」を拝見した。さらに紹介をうけて「飯島村誌」「片桐村誌」を入手してみると、諏訪部、飯島、飯沼の諸氏が伊那源氏の同門であり、中沢氏はその付近の出身であることが確認できた。そこで「吾妻鏡」など諸書と「三沢軍功記」とでこの文の冒頭の記述を導き出したのである。山上氏の示唆が実に二十数年ぶりに真実となって現れた。こうして、三沢氏をめぐる奥出雲の歴史探究は佳境に入ることになったのである。

(横田史談会　高橋)

(四頁下段へ)

むかし・いま・あす ⑧

―旧暦八月　葉月・月見月　仲秋・白露

八月一日　八朔(はっさく)

八朔には桃を食れば無病だとして神前に供え家内中で食べた。秋の果実のはしり、美しい桃をめでて供えて食べた素朴な時代のならわし。季節感の失われた今日の食生活の感覚では考えられないこと。筆者は子どものころの思い出として放生会と桃は強く心に残っている。日当りも涼しくなり、野良もボツボツ忙しくなるので、昼寝はこの日をもって打切る。生活の一つの節目であった。

このころが二百十日、風を心配して平穏であれば、農家はもとより一般家庭でも、子どももともにホットしたものである。

このころまでに、ふらい米(焼米)は出廻って、秋来るの感を心から味ったものである。こほろぎが鳴き出す。やがていなごも飛びはじめる。

秋祭り

この地方で最も早いのは、十五日の馬場八幡宮の放生会、食

船通山の鳥類を探る④

内　田　　映
（島根野鳥の会会長）

— 本誌86・88・90号の続き —

以上の調査結果から船通山産鳥類の目録を次のように作成すると64種となった。船通山の鳥類についての文献は全くないので、この目録が最初である。今後更に調査が進めば、追加種が新しく増加することは当然予想されるので、将来の完全充実が期待される。

終りに、協力された千原幸夫会員に深甚の謝意を表する。（目録中記事のないものは千原会員による）

——もとの目録には学名があったが、当誌の性格上省略した ——

船通山鳥類目録

ワシタカ目
　ワシタカ科
　　ト　　ビ
　　サ シ バ

キジ目
　キジ科
　　ヤマドリ
　　1981. 5. 24　内田他
　　キ　　ジ

ハト目
　ハト科
　　キジバト
　　1981. 5. 24　内田他
　　アオバト
　　1981. 5. 24　内田他

ホトトギス目
　ホトトギス科
　　ジュウイチ
　　1981. 5. 24　内田他
　　カッコウ
　　1981. 5. 24　内田他
　　ツツドリ
　　1981. 5. 24　内田他
　　ホトトギス
　　1981. 5. 24　内田他

フクロウ目
　フクロウ科
　　アオバズク
　　フクロウ

ヨタカ目
　ヨタカ科
　　ヨ タ カ

アマツバメ目
　アマツバメ科
　　アマツバメ

ブッポウソウ目
　カワセミ科
　　ヤマセミ
　　アカショウビン
　　カワセミ
　ブッポウソウ科
　　ブッポウソウ

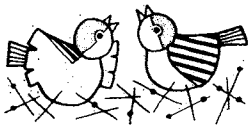
キツツキ目
　キツツキ科
　　アカゲラ
　　1981. 5. 24　内田他
　　コ ゲ ラ
　　1981. 5. 24　内田他

スズメ目
　ヒバリ科
　　ヒ バ リ
　ツバメ科
　　ツ バ メ
　　イワツバメ
　　1981. 5. 24　内田他
　セキレイ科
　　キセキレイ
　　セグロセキレイ
　　ビンズイ
　サンショウクイ科
　　サンショウクイ
　ヒヨドリ科
　　ヒヨドリ
　　1981. 5. 24　内田他
　モズ科
　　モ　　ズ
　レンジヤク科
　　キレンジヤク
　　ヒレンジヤク
　カワガラス科
　　カワガラス
　　1981. 5. 24　内田他
　ミソサザイ科
　　ミソサザイ
　　1981. 5. 24　内田他
　ヒタキ科ツグミ亜科
　　コマドリ
　　コ ル リ
　　ジョウビタキ
　　トラツグミ
　　クロツグミ
　　1981. 5. 24　内田他
　　ツ グ ミ
　　1968. 11. 16　内田他
　ヒタキ科ウグイス亜科
　　ヤブサメ
　　1981. 5. 24　内田他
　　ウグイス
　　1968. 11. 16　内田他
　　センダイムシクイ
　　1981. 5. 24　内田他
　ヒタキ科ヒタキ亜科
　　キビタキ
　　1981. 5. 24　内田他

オオルリ
1981. 5. 24　内田他
ヒタキ科カササギヒタキ亜科
サンコウチョウ
エナガ科
エナガ
シジュウカラ科
コガラ
1981. 5. 24　内田他
ヒガラ
ヤマガラ
1981. 5. 24　内田他
シジュウカラ
1968. 11. 16　内田他
1981. 5. 24　内田他

ゴジュウカラ科
ゴジュウカラ
メジロ科
メジロ
ホオジロ科
ホオジロ
1968. 11. 16　内田他
1981. 5. 24　内田他
カシラダカ
ミヤマホオジロ
アトリ科
アトリ
カワラヒワ
マヒワ
ウソ

イカル
1981. 5. 24　内田他
ハタオリドリ科
スズメ
カラス科
カケス
1981. 5. 24　内田他
ハシボソガラス
1981. 5. 24　内田他



斐之上川柳八月句会

水害でうらめし憎しほしい水　松浦木公
仏壇へ自分勝手な手を合わせ　児玉哲呂
高点の振舞酒を護符で飲み　渡辺好之
玉の汗流す幸せ今日を生き　若槻白馬
虻さして今日の草とり終りとし　藤原千代子
オヂーチャン孫が呼んでる帰ろかな　藤原のぼる
やれやれと淋しいけれどごろ寝でき　安部春恵
宇野千代さん百二十五日まで自信持ち　太田亀甲
茄子カボチャ胡瓜にトマトおらが畑　藤原英生
土用干し梅も行事のうちにあり　真綿よし子
瑠璃(はるか)の呼名の色香(とが)がくし　高木白虹
米値上げ達磨の目への空手形　松田牛歩
姿なき息(こ)を慕いつ、嶺(みね)を行く　安部正子
年一度見覚えのあるあの浴衣　松浦亜以
生き残る姉と電話で老い語る　目黒申楽

八月の歌

覚め易き老いの睡りか覚め合へば妻とかたみに声交し合う　常盤はるまさ
子らの顔はしゃぎ回れる子らの顔非行に縁なき輝ける顔　児玉敏郎
湯上りて孫と蛍を追う夜は田の草取りし疲れ忘れて　藤原信子
盆送りすませし夜半にリイリイと早やすず虫の秋を告げきし　松浦愛子
暑き日は続きておれど朝夕は涼風吹きて初秋を知る　目黒成生
吾が蒔きし松葉牡丹や金蓮花老いて楽しむ花は優しく　藤原美代栄
暑かりし山の畑も黄昏れて杉の木立にひぐらしの啼く　野村節子
牛の声もふるさとに似し田園や旅はるかなる四国路に来し　宮廻愛子
啄木の碑文(いしぶみ)よめばまなうらに面影の顕つそのさびしさに　岡田時子
雨に濡れ友との別れ杳き日の淡き哀しみ合歓の花咲く　畑八重子
整備田の作業にうなるパワー音の止みたる時に野球放送聞こゆ　佐藤喜代子
ひとすじに人恋ひそめし十八のわが下駄の緒の紅の愛しき　永井やよい
暮れなづむ杜の都はおぼろなり友と並びて城跡に立つ　景山悦子
匂やかに愛の想ひを秘めて咲く浜木綿の花の白き夕暮　安部夕波

物に用心の大切な祭であった。この地方随一の祭りで、露店・芸能・一ぱいやと長い参道の両側をうめつくした賑やかさであった。(祭については、あとでくわしく連載する予定)

月見

一年中でこの月の月が一番美しいとして、月見を楽しんだ。奈良時代宮中での月見の宴がおこりという。先例はやはり中国の風習にもとづくもの。

彼岸

春の彼岸と同じく、仏祭を営む。彼岸といえば、お墓まいり中心の敬虔な一日であった。春に残した札打ちをする人もあった。

あとがき

先に開催した　蓮岡先生の考古学入門講座は大変に好評でした。横田史談会には、年二回位はこうした講座を各種、ぜひともやってほしいと希望が出ております。

今月の俳句欄は句会の都合により休載致しました。

会員配布一部百五十円／六九九—一六　島根県仁多郡横田町横田一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎「頒布」／横田史談会　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 102 号
（10月号）
昭和58. 10. 1
奥出雲編集集団

「横田の茶道」④
松平不昧へ（上）

「奥出雲」第74・75・76号（昭和56年）で「横田の茶道」前史編を記述したが、漸く本編の連載に入ることになった。ものごとを理解するには、実物や実際に即したのが容易であるが、茶道について漸くその機会が訪れたからである。

絲原記念館では開館三周年記念特別展として、「不昧公の茶の心を探る」が開かれ、近接する茶室・庭園において、茶会・茶席も催されることになった。この絶好の機会を生かしたいと待っていたので、連載をはじめることとした。前記3号と「茶道の系譜上」と本号の「仝　中」を見ながら読んで、実物で確かめて頂けば幸である。

茶道の流派

千利休の先妻の子**道安**（紹安・天文15 1546～慶長12 1607）は、九州の細川家に仕えた。父利休を感嘆させるほどの奔放豪覇な茶風をもっていたという。父利休が自刃後飛弾にかくれ住んだが、義弟小庵（宗淳）が千家再興を許されてからは、豊前小倉藩主細川忠興（三齋）に招かれた。

こゝから今日の三齋流が発展し、一方道安の弟子桑山宗仙から片桐石州が出て石州流をおこし、それから松平不昧があらわれるのである。

道安の義理の弟すなわち利休の娘婿少庵（利休の後妻宗恩の連れ子）は、利休の死後しばらくして千家再興を許された。典雅で柔かな茶風を保つ宗匠へと成長したが、晩年は隠棲した。その跡をついだのがその子宗旦である。大徳寺112世春屋和尚（展示品1以下「**展**」と略記1千利休寿像の讃の詩作者）のもとで禅の修業をした。この宗旦を幼少から教育したのは利休の後妻宗恩で、まれにみる教養高い婦人であった。この祖母の指導で茶道全般を青年期にものにした。徳川家をはじめ地方の大名からも召しかゝえの招きがあったが、祖父の死から祖父利休の茶道の精神は庶民の間にあってこそ生かされるもので、こゝに於てこそ、「**侘**」（わび）が深まると一切応じなかった。千家再興の重荷を負いながら、相当苦しい生活（こじき宗旦ともいわれる）をしたが、茶の心はますます侘に徹した。「茶禅一味」とまでいわれるほどになって、千家流茶道の確立者となった。町人、文化人、公卿の間に多くの知己をもった。

宗旦には先妻と後妻との間にそれぞれ二人の子があり、三男宗左が表千家を、四男宗室が裏千家を、次男宗守が武者小路千家となるようになった。これを三千家という。

江戸時代中期になると、多くの茶道の流派が生まれた。利休と同じ武野紹鷗門であった藪ノ内紹智は、三千家が確立する以前から京都の下京に住み、藪ノ内流を称していた。世間では三千家が上京に住んでいたから、三千家を上流、藪ノ内を下流と区別していた。

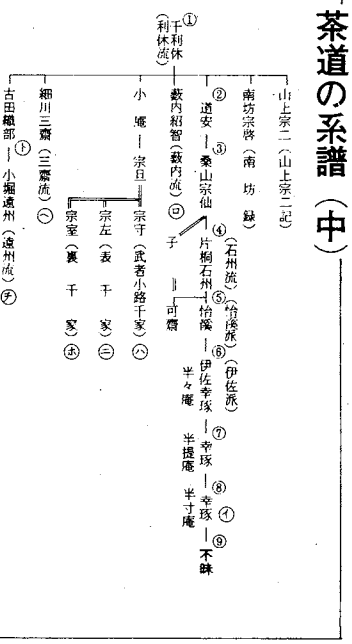
この三千家を中心として生れた流派は、庶民的なにおいの強いものであったが、次の諸流（南坊派のぞく）の始祖はみな一国一城の主人である大名であった。近臣のものを相手に茶道をたしなんでいたのが、いつのまにか一流の始祖にされてしまったのである。いわゆる大名茶といわれているもので、不昧流もこの流派に入る。雲州侯と呼ばれた不昧が始祖であるが、不昧は別に茶道の流派をたてようとは思ってはいなかったが、後世こう呼ばれた。不昧は諸流派を修業しながら、茶書や秘事や口伝を通して利休流の茶道の真随にも迫ろう努力した。そこを明らかにしてみたいが、その前に関係諸流派についてふれておく。

三齋流 ― 利休の七哲の一人といわれた細川忠興を始祖とする。今日その宗家は出雲市の森山観翠庵である。

織部流 ― やはり七哲の一人古田織部を始祖とする。創意に富んだ人で、いろいろな優れた好みの道具をのこしている。織部焼の陶器もその好みだといわれる。

南坊流 ― 利休の弟子南坊宗啓が初代になっていて、九州地方に盛んであった。宗啓は

茶道の系譜（中）



利休の讃話を筆写して「南坊録」と名づけたが、利休の茶道を知る上の資料となっている。

宗和流 — 金森宗和が初代である。利休の弟子でなく、その実子道安の弟子とも伝えられる。

遠州流 — 26才で近江国小室一万石を継いだ小堀政一が始祖であり、遠州と称した。大阪夏の陣後伏見奉行となり、のち普請奉行として豊臣秀吉・徳川家康・秀忠・家光に仕え、家光の茶道指南もつとめた。仙洞御所・大阪城本丸・二条城二の丸・江戸城西の丸の作事に当った。遠州の作事・指図による茶室には、大徳寺では龍光院ほかや南禅寺などのもので、今日伝わる著名なものが多い（近くでは岡山県高梁市頼久寺の庭）。交友範囲も親王・公卿・大名・僧侶（**展**ー不昧筆の本宗老宛の便りにみえる江月和尚も）と広く、茶道・歌道・書・陶芸などの多くの才能も、交友の中から得たものが多い。茶器の鑑定（目利）に特にすぐれ、大名物に次ぐ中興名物茶器を選定し、製作に当たっても独自の作風を示した。

石州流 — は利休の長男道安より桑山宗仙へと伝わったいわば利休流の茶道をうけ、これより出てさらに独自な境地を開いた片桐石州を祖とし、石州の直系および石州より教えを受けた門弟の伝えた流派を総括していう。石州は賤ケ嶽の七本槍の一人片桐且元の弟主膳正貞隆の子にあたる。片桐氏は信州伊那郡片桐村より起り（藤ケ瀬城主三沢氏の祖飯島氏は、片桐村の近くの飯島村の城主であって、片桐氏から別れた同族である。片桐氏の祖は清和源氏の流れ、信濃源氏が伊那谷に住んだものである）。のち近江に移住し、小谷の城主浅井長政に仕え、小谷落城後秀吉に属した。石州は寛永元年、30才にして従五位下石見守に叙任し、貞俊と名のった。彼が茶湯に志し、千道安の高弟桑山宗仙に学びはじめたのもこのころのことで、数年にして茶道の奥儀に達し、真行草三体の茶法を授けられた。貞俊の名はのち貞昌と改めた。全四年父の死とともに遺領大和・河内16,000石を継ぎ大和の小泉に住んだ。翌年幕命を受けて京都知恩院の普請奉行となり滞京九年に及んだ。

この間公務のかたわら、宗和や松花堂や遠州をはじめその時代の茶道の巨匠と交って啓発され、大徳寺の玉舟和尚に参禅し、心意の工夫と鍛練に努めた。一方堂上貴顕に親炙し、田舎茶人の彼はすこぶる都会的に洗練され、姫宗和と遠州綺麗さびの影響も色濃かった。石州好みの気品の高さもこの時代に培われた。57才で有名な「侘びの文」を書き、茶道の本義が侘びの精神に存することを強調力説した。のち千代将軍家綱の所望によって点茶式を行い、遠州の跡をうけて将軍家の茶道師範となり、「石州三百ケ条」（**展** — これを不昧が解説した三巻の直筆原稿）を上進し、茶道の規格を定めた。広範なる体験と高邁なる見識を堂々たる理論によってまとめた茶道の大規格といわれ、茶道各般の法則も、こゝに集大成を見た。その翌年上京して仙洞御所の庭園の築造にあたるとともに、門弟の妙法院門跡堯然法親王に対して、一畳半の極小座敷における茶法の伝授をした。（**展**ー不昧直筆の秘伝書ー一畳半極秘ー一巻がある）この茶法は利休相伝のものであり、乞食の異名をとった極侘び茶人の宗旦でさえ、あえて強調し得なかったところの秘法であった。

徳川将軍家の指南役であった石州の茶事は、当時の強力な封建社会においては、天下公用の規範性に富んでいた。しかも参勤交代の制度は、地方各藩の文化様式の模範を、江戸屋敷を中心とした晴れの舞台にとっていたし、上の好むところ下これにならうといったわけで、石州の茶式はたちまちに海内を風靡し大小の藩主・旗本・御家人にしてその門に教えを請う者踵をつぎ、御茶頭は石州ならでは勤まらぬといわれる程人気を呼んだ。直弟子には前記の他大小名では朽木植昌（松平家と姻戚）・伊達綱村（仝　前）ほか、僧侶では大徳寺の怡渓和尚ほか、長男・次男・家来の多くがあった。

しかし石州流はその伝授内容と様式がすこぶる厳粛をきわめていたことと、石州の肉親に特にすぐれた後継者がなかったために、極意秘伝の印可は、門下の多くの逸材に授けられ、江戸・京都・大阪・大和・越後の各地を中心とし、諸派に分かれて存続発展した。

不昧流概観 — （桑田忠親著日本茶道史の要約ー（　）内は筆者の註記）松江藩7代松平治郷は、佐渡守・出羽守を歴任した。17才で封を継ぎ、よき家老の補佐によって領内の治績をあげた。とくに製紙・製蝋の振興・陶窯の進歩（楽山院・希志名焼 — **展**ー楽山焼の権兵ェ作「舞鶴」・空齋「楽山青井戸之写」・布志名焼の雲永作の「仁清写秋草」ほか）　漆工の発展（**展**ー漆壺齋の棗「松風」ほか、この流れが春季展の蒔絵師・勝軍木庵につながる）に貢献するところが多かった。若年より三齋流の茶人無事庵志村三休について茶を学び、ついで伊佐流3世半寸庵幸琢について斯道を極め、20才にして真の台子の伝授を受けた。江戸麻布天真寺の大巌和尚に参禅し、「無関門」の百丈野狐の「不落不昧」の語から取って、不昧と名づけられた。半寸庵より石州流の秘伝を受けた証拠として、自ら注釈を施した「石州三百ケ条」（**展**ー不昧直筆原稿本三冊、この本には「参百

ケ条」と表記す）の三冊本や、「一畳半極秘」一巻（**展** — 不昧の直筆一巻ほかに「奥義書」一巻の直筆）が、雲州松平家に伝わっている。すでに明和7年20才の時に、「贅語」（むだごと）という長文の茶随筆を書き、茶会における奢侈贅決を排し、茶道が治国齋家の道であるゆえんを明らかにした。そして、利休の和歌と伝える「釜一つもてば茶の湯はなるものを、よろづの道具好むはかなさ」というのを唱えて、道具茶を卑んだ不昧であったが、家政が豊かになるにつれて、名物道具を買い集め名器の研究に没頭し、ついに陶齋尚老人の匿名をもって、「古今名物類聚」18冊の大著述（**展** — 和綴木版多色刷本の当時のもの）を完成した。

また茶入の窯別についての研究書「瀬戸陶器濫觴」三巻を著わした。なほ晩年の茶道観をうかがうには、「茶礎」という一文があるし、雲州絲原家所蔵の「不昧公茶湯心得」（**展** — 不昧公直筆原本軸装）も不昧流茶道の神随をよくいゝ表わしている。そうしてそれは大体において、石州流と合致しているといってよい。

以上桑田忠親の著書に出てくる不昧の最も貴重な茶道に関する文の直筆は、すべて記念館に展示されていることになる。不昧流の茶道研究にとってはまたとない得難い機会であることになる。このことを念頭において、これから時代を追って不昧の伝も追い、展示の美術品の解説をすゝめながら、不昧の茶道の成熟完成の跡を追い、筆者なりの追体験によって、これに迫ることができれば幸である。

系譜（1頁）について

数字は利休を初代としてみると不昧は9代目となる。

— は師弟　═ 血族関係

また「イロ・・・トチ」は、それらの流派を不昧が直接（自ら）、間接（有沢弐通ほか家臣によって）に学んだものをしめす。

弐通は不昧に茶道の手引をしのちその第一の門弟となった家臣で、また不昧の茶道完成への協力者であった。晩年は家老として不昧の治政の補佐をした。宝歴8年（不昧8才）には二条流歌人・茶人として大馬木の絲原家（当時住居）を訪ね、7代吉三郎（好覩という二条流歌人・茶人・鉄師土豪）と交遊を深めている。（**展** — この時の二人の和歌の懐紙）

こうして不昧は各流派も修めて、自らの茶道を深めて行った。

このころの状況をしめすものとして「茶事覚書」（天明7年37才）がある。不昧の門弟の一人である、一得庵 — 姫路藩主酒井忠以（幕末の日本画家酒井抱一はその弟）が、当時の不昧のものを乞うて書きうつしたものに署名したもので、その最初に「一、露地数奇屋は宗旦、物数寄好之物は宗甫どの、茶の湯の法は宗関どの、一人にしたら、天下一人也、其心にて可修業。」としるしている。すなわち

o **茶をやる場所** — 露路・茶屋は利休の孫**千宗旦**の好みがよい。

o **茶道具の類** — 物数寄・好み物は、かの中興名物を選んだという**小堀遠州**（宗甫）

o **お点前** — 茶の湯の法は利休の伝統を伝えた**片切石州**

として、不昧はこの目標・心構えで茶の修業をしたのである。そして点前の石州齋の三百ケ条の註解に入り（**展**に直筆原稿）さらに遠州の道具研究のあとを追った（雲州蔵帳については後述 **展**に蔵帳記載の茶碗・花入・棗などがある）。

その後の成熟は後述にゆずるが、晩年にはこれらをすべて昇華していわゆる不昧流を生み出した。すなわち「茶礎」に

「習にかゝわり、道理にからまれ、かたくるしき茶人は、田舎茶の湯と、笑ふなり。我が流儀立つべからず、諸流皆我が流にて、別に立派（たては）あるべからずと、可覚悟なり」とのべている。

また「**茶湯心得**」（**展** — 掛軸、入館時のパンフレットに写真と解読文）には三条に、「先達の仕置し事は、何れの流にもかぎるべからず。取用能事を我のちからにすべき事」　五条に「手前は、飯椀をとりてめしを喰、しる椀を取て汁を吸、箸をとりおきする如くなる趣、成就と可申也」と述べている。

こゝに不昧流の真髄があって、他流の如く作法、手さばきが固苦しくなく、従って教習過程というものが細かく定めてないことにあらわれており、それがまた家元制度というものが厳しくないわけでもあるという。

（横田史談会・高橋一郎）

むかし・いま・あす ⑨

旧暦九月　長月　菊月
季秋　晩秋

みみずがなく

新暦の九月に入って間もなくの夜だった。わが家の中庭で聞きなれない秋の虫の鳴き声が、突如とあたりをふるわせた。庭石にしみ通るようで、そして美しい音色であった。家内と二人で息をころして聞き入った。二匹いるらしく、二つの音は二度位の音程で響いていた。大分長い間続いたあと、小さい物音にパタリととまり、いくら待ってもあの美しい音は、とうとう耳には入ってこなかった。あくる晩はと期待して耳を澄ましたが待ちぼうけであった。ただジーと響く、床下のかび臭さを連想させるけらの鳴声だけだった。

いろりがまだ家の中にあった少年のころの初秋の夕食後は、うすぐらい電灯の下に、寄り集った家内中がひざをかゝえて、

その日の出来事を楽しく語りあったものだった（ラジオもなく新聞も社会面一頁の四頁建、一日遅れという情報源の時代）。そんな時かまどの方でジーと鳴くけらの鳴声は、冷涼を加え何かわびしさも誘って、胸の奥深くまでしみ込んだものだった。それはまた一方では孤独を感じさせ、家族の心をより寄り誘わせて連帯感をかきたてるよう、一きわ声高の談笑へと導いたものでもあった。祖母はあれは「みみずがなく」のでこわくないと、子どもたちに教えそう信じこんでいた。青年期松江に在学中、博物の教師が笑いながら教えてくれて、はじめてけらと知った。ところが最近柳田国男の「桃太郎の誕生」で、座頭ばなしに起源をおく説話が、全国にくまなくゆき渡ったために、みみずが鳴くと信じられたものであることを知った。蛇にたぶらかされ、その視力と蛇の美声をとりかえたという話に、一抹の哀愁をおぼえるが、多様多彩な今日の情報が味気なく真実味の少ないものであることを思うと、少ないが信じられる情報の時代の温かさがなつかしく思われる。（蓬頭子）

初秋の歌

平安の耳朶に雷とも大韓機サハリン沖に撃ち墜とさるる　常盤　はるまさ

啄木の記念碑に人はまばらにて水無月の風肌に冷たし　景山　悦子

左右の人に魚信しきりに吾に無く焦り覚えつ湖を見つむる　伊藤　萩雨

孫の呼ぶ食事の声にまびき菜を抱へて急ぐ夕映への径　野村　節子

サルビヤの花さかりなり三年をホッケーにかけし発ちし子思ふ　藤原　信子

みちのくの旅のしおりに啄木の短かき生涯よみてせつなし　宮廻　愛子

萩の花杏き日のまま咲きこぼるゲーテの詩よみし小径たどれば　松浦　愛子

神仏に願ひをこめし母刀自の英世に送りし手紙のかなしも　岡田　時子

夏草の茂れる川藻よおさな日にしぶきをあげしおもかげもなく　真綿　ひろ子

新潟の方言聞きてなつかしむ住まいしころのありし日しのびて　目黒　成生

故郷の山の小川で岩魚釣る大阪ナンバーの車をとめて　藤原　美世栄

タッチの差にて勝ちを得し子はにこやかに泳ぎしコースをふかへりおり　児玉　敏郎

ひとり居の老人の干すピンク色のタオルがひと日華やぎ見する　佐藤　喜代子

露ふふむ朝草のせて走り行く車に尾花の穂先の紅し　永井　やよい

孫達の成長してゆくうれしさは吾より遠くなりゆく思ひ　畑　八重子

断ち切れぬ女性への想ひ夜の闇に孤独の瞳静かに閉じぬ　安部　夕波

斐之上川柳

帰省せし子の飲みぶり又上がり　松浦　亜以

夢などが有る筈はない高枕　松田　牛歩

秋冷えに夏の暑さを恋しがり　松浦　木公

盆近し子供の声のここかしこ　児玉　哲呂

左うちわ探し求めて古稀の坂　高木　白虹

老いて知る医師と薬のありがたさ　藤原　英生

雑踏の皆んな異なる顔心　若槻　白馬

門札に妻も加へて新世帯　渡辺　好之

顔だに胴巻きとやらに痛められ　安部　正子

今頃の子供奉公など知らず　太田　亀甲

孫台風障子破って去って行き　佐佐木　千世

夕空に汽笛淋しい赤字線　藤原　のぼる

娘が去って今年も萩の道帰る　藤原　千代子

旅行して又来れるかと友は言い　安部　春恵

老い二人昔話に花が咲き　目黒　申楽

しばぐり句会抄

稚き文字たどたどしくて星祭る　浅野　としお

青蔦に絡まれひそと霊眠る　岡田　蹊花

雨近し土塀を急ぐ蝸牛　岡田　麗水

法師蝉宗祖の伽藍や作務の僧　小川　あきお

地麦の茶冷やして今日が始まりぬ　加納　信子

揺れ羊歯の葉裏にしのぶ秋かすか　高木　白虹

逝きし子の墓標小さく暑に耐える　新出谷　一華

伸びままの夏草ふみし朝の露　錦織　富江

稲穂見しあしたこころのときめけり　藤原　樵夫

孫と居て過ぎし幾世の夏想う　峯石　美代子

巌に佇って女にやさし秋の風　渡部　夕峯

会員配布一部百五十円／六九九—一六　島根県仁多郡横田町一〇六二ノ二　編集発行責任者・高橋一郎　領布／横田史談会　発行／奥出雲文協　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 103 号
（11月号）
昭和58. 11. 5
奥出雲編集集団

「横田の茶道」⑤

松平不昧へ（中）

不昧の雅号いろいろ

松平不昧は松江藩18万6千石の藩主松平宗衍（むね）の第2子として宝暦元年（1751）2月14日、赤坂の藩邸で生れ、幼名を鶴太郎、諱（いみな）を治郷（はるさと）のち治郷（はるさと）といった。明和4年（1767）17才で襲封し、7代の城主松平出羽守（それまでは佐渡守）に任じ治政にたずさわり、40年たった文化3年（1806）56才で致仕し、大崎の地（今の品川区御殿山町）に隠退し、六日後に剃髪して不昧と公称し（**展**ー紙本墨書・「無」「門出是草」「薫風自南来」その他）、悠々茶の湯三昧の茶禅一味の佳境を楽しみ、文政元年（1818）68才で没した。大崎の地は2万2千坪ほどのところで、ここは別邸でありこの中に常什の茶室もあったが、広い園内には利休堂をはじめ為楽庵（**展**ー関連の釜ーこれを拝領し、これを絲原家は常住の釜とし、本宅書院続きの茶室を、不昧ゆかりの有沢山荘向月亭を模して設け、為楽庵と名づけている）、独楽庵（**展**ー関連の棗「ねざめ」）など12カ所の茶室ほかがあった。不昧の茶道への傾倒ぶりが想像される。

雅号には、幼年時代には斗門・蘭室（**展**ー一行書「松高白鶴眠）・笠沢斎（**展**ー絹本墨画の「寿老図一）といゝ、のち末央庵（**展**ー達磨画讃「喝」、「千利休像画讃」）・一閑子・一々（**展**ー紙本墨書茶銘「中之白」仝書状「本宗老宛」「無尽庵宛」、仝面壁達磨画讃「是什磨」、茶杓「うき雲」、香合、竹花入の「蛙うた袋」「埋火」、棗「松風」、面取釜など）・一々斎・一椎舎・独楽（主人）・宗納（**展**ー一行書「道得也三十棒」「雲月図」、丸釜為楽庵常什ほか）・大円庵・瓢庵・等峨（**展**ー前出の「寿老図」）、出羽守雪羽・笊籬ほかに治好などがあった。

襲封のころ

不昧の幼年期は、他の藩もそうであったが、財政不如意の時代であった。例年の如く出雲地方は水害などにみまわれた。大きい年をあげると

5才	風害	68,000石減
9才	虫害	63,000石減
10才	水害	23,000石減
11才	風害	20,000石減

があった。

こうした中で藩財政は莫大な借銀をかゝえ、御勝手方御相続の筋相立たずという状態となった。父宗衍時代の明和3年（1766）16才の不昧ははじめて松江の地を踏んだ。間もなくの10月、家老柳多主計・三谷権太夫・有沢能登（弋道）の3人の仕置役が退けられ、朝日丹波一人だけを任命して危機打開を託した。だが万策尽きた丹波は半年後江戸に出て、打開の方途としては、帰国もしないで江戸でしか政治をとらない宗衍の隠退をすゝめ、不昧に譲ることと交際費の節減を提案した。そこで38才（54才まで生存）の宗衍は引責辞職をし、明和4年（1768）17才の不昧が藩主となった。これから朝日丹波の御立派（たては）の改革がはじまった。その後不昧の国元への帰国は一年交互に松江と江戸に滞在するという生活となった。

口切の茶事と茶壷

ずいずいずっころばしの俗謡の「茶壷に追われてトッピンシャン」は、将軍家御用の茶壷が「下に下に」とわがもの顔に道中するさまへの、庶民の反感をうたったもので、それほど大切にされた。後年不昧は、油屋肩衛の茶入（先年県立博物館で展示、雲州蔵帳では最高の宝物の部に、円悟禅師墨跡とともに位するもので、当時一万両の品、今日は国宝に指定）とともに、参勤交代に持ちあるくことになる。

むかしは今日のように簡単に抹茶が求められない。茶人はその年の新茶の採れる前に、所持の茶壷を宇治の茶師に預け、茶師の家では、濃茶の葉茶を幾色か20匁ずつの小袋にして壷に詰め、まわりに薄茶となる葉茶をぎっしり入れ、壷の蓋に封をして預け主にわたす。そのあと夏から秋まで、山の上や涼しい倉の中で保管され、茶の味が醸成され、この葉茶を茶人自ら石臼でひいて抹茶にした。

木の葉が色づき霜がくる初冬の時分、茶壷の口の封を切って当年初の濃茶を点てる。それが口切りの茶事で、厳粛幽玄な茶の催しであった。（**展**ー「奥義書」の、数奇十格の最初に口切がある。そして五体之道具のはじめに壷とあってヽをし「ハ余り」とある。すでに壷は道具より床の飾物の方に位置されるようになったことがわかる）

不昧の修学修業

不昧3才の時に弟雪川が生れた。7才にして書を学び（初期7〜18才は唐様を、以後50才までは定家流を、その後不昧流をあみだす）、8才で儒臣から書道儒学の基礎である漢学をならった。この年まだ側役であった有沢弋通は絲原家を訪問している（展ー弋通の和歌懐紙）、12才で弓、槍を学びはじめた。この年のちの夫人彰姫との定婚が行われた。

不昧は明敏な頭脳をもっていた。こうした厳格な訓育によっ

て鍛えられたのであるが、若き不昧は腕白小僧であった。（そこで「すぎた勇気」をためるため、茶道や仏道を学ぶよう指導されて行った。これがのち不昧流茶道を大成することにつながったのである。（**展示**の書簡の中にも不昧の茶目っ気振りのうかがわれるものが随所にある）

不昧は十代に入ったころ遠州流の茶道を、ついで三斎流をならった。そして18才で石州流を伊佐二代半提庵幸琢について学んだ（間もなく三代半寸庵幸琢に師事する）。こうした中でなお気慨横溢した性格はかわらず側近は不昧が血気にはやることを恐れて、参禅をすゝめた。19才で江戸麻布の天真寺の大巓和尚についたのである。

不昧以前の茶人たちは、すべて京都大徳寺に参拝したが、参勤交代があり京都より江戸が便利であったこと、それに天真寺は大徳寺派であり、その上藩祖と3代の夫人の墓がともにこゝにあったからであるという。

後年不昧は「ついに本年にして本来の面目を得、生死を出離して大自在を得た」といっているほど禅道に帰依が深かった。その後鎌倉の円覚寺の誠拙和尚や大徳寺の無学和尚等について生涯の求道をたすけられた。最もよく用いられる不昧の号は、禅の公案（問）の「不落不昧」からとったもので、「くらまされず」の意で、安永元年（1772）22才の時大巓和尚に参禅した三年目に定めてもらった。宗納の号は自らえらび大徳寺378世無学和尚を名付け親としている（明和5年の18才ごろ）

展—禅板は座禅の時、両手にてさゝえ、くぼみであごを支えるものであるが、裏には大徳寺での参禅の師東陽和尚の筆になる「道得也三十棒」がしるされており、裏には不昧が「道不得也三十棒」と書いている。座禅をしている時、棒（警策）で師家が修業者を激しく打つのであるが、三十は必ずしも三十回の意でなく、数が多いことをいう。「臨済録勘弁」にある言葉で、師が数多く修業したから道を得たであろうと言ったのに対し、まだまだ未熟であると答えたものである。他に**展**—宗納筆の「道得也三十棒」がある。

茶道の奥義を極める

18才で半提庵についで半寸庵の門に入って石州流茶道を修業する一方、19才から参禅もはじめた不昧は、明和7年20才の9月、茶道を論じて「むだごと」（贅言）をあらわした。このことは右の年代以前からすでに他流の茶道をも修め、仏門修業の門戸をたたいており、幼時より書や漢字を修めていたからこそ可能であったのである。

この中で不昧がいかに熱意をもやして利休へじかに参入しようとしたかがうかがえる。そのことはその後ものこした石州流三百ケ条の注釈をはじめ、そのほかの茶書の随所にあらわれていることである。

この書は若さに溢れた茶の湯論で、当世の茶が本意に違うことを痛論し、本邦茶道史を概観してあるべき姿をひき出し、それは「草庵一風の佗茶」である。これに徹せよという、若き不昧の正義感と情熱がみえるものである。不昧は後年の「三百ケ条」注釈でも「略」の文字をしきりとつかっているが、単なる「略す」という使い方もあるが、贅言にて述べている「略」の精神を強調している。即ち「はぶく」のではなく、あくまでも全体の精髄を簡素なものに上昇させることを言っている。

今日不昧流が虚飾虚礼をはぶき、あでやかでない器物が多く白木の清楚そのものを、衣服も質素な無地、ふくさも無地がきまりということ、器物の取扱いにもこうした心はみられるのである。ごく自然にかつ簡素を旨としているのである。それは後年の「茶礎」および「茶の湯心得」（**展**—紙本墨書とパンフレットにある写真と解説文）にもあらわれていることである。

この一書は国老朝日丹波が、若き不昧の茶の湯への執心ぶりをなげいていさめたのに対し、不昧が答えたものでもあるといわれ、文中に

「今の世、茶の湯というものはただ、慰み一通りの様に思わる。皆　人々此の道を得度して、これを以て天下を治むる時は、天下国家を治むる助けともなるべし」

といっている。

父宗衍の引責致仕のあとを引き継いだ不昧の治国は重要な課題であった。この中に不昧の政治観ものぞいている。茶道修業によって茶道界の堕落を批判し、参禅によって茶道の根本を究めて説かんとしたのである。この一書が、秘事の伝授を早めたともいえる。

不昧は入門3年にして師から20才で、真台子一ケ条の秘伝を伝授され、旬日を出でずして、南坊録をそして秘事書二巻と二冊を、「伝授された以上は御指図の外他言は致しません。右の趣相背くときは日本大小の神祇の神罰を蒙ります」と神文（神への誓い）をあずけて伝授された。

ついで数々の茶湯極秘を授かった。入門三年にしてこれほど極秘をうけたのは異例とされる（利休の一の弟子山上宗二にしても20年余の修業のあとで伝授されている）。

夫人彰楽院

安永3年（1774）24才の時、彰楽より子（23才）が入嫁した。

仙台候伊達宗村（藤ケ瀬城主三沢為虎の孫初子は伊達家夫人となるその末孫）の第9女で母は著名な林子平の姉である。以来44年琴瑟相和して（**展**—「奥義書」序跋の中にもこれをしめす言葉がある）不昧の茶道大成をもたらす上に大きい影響をもった。夫人は国文学の造詣も深

く、和歌は最も得意とするところで多くのものが残っている。（**展** ― 彭楽院直筆は、紙本墨書の「奥義書」序跋と、同じく彭楽院引歌「ねざめ」）

不昧の逸話に、「紅茶巾」がある。一日夫人のために茶をたてた不昧は、茶巾をしらべながらふとそこはかとなき紅の色の白い茶巾ににじむのをみとめた。その日は何事も語らず終ったが、その後夫人のために茶をたてる時は必ず紅色の茶巾を開いた。夫人もその後夫君の席へまいる時は口紅をささなかったという。又夫人は不昧の茶器集成に当って、これらの箱、特に仕覆（包みもの）の完備に力をそそいだ跡は歴然たるものがあるという。

夫人は不昧の歿後大崎にこもって面影をしのびつゝ、余生12年を送り、文政12年78才で世を去った。

なお弟雪川は不昧と二つちがいであったが、そのそばに影の形にそうごとく、茶事風流を共にしたしみ、俳句も得意とした。享和3年（1803）で51才で先だった。（**展** ― 紙本墨書「無尽庵宛」の書状の中に、茶碗、長二郎作「獅子」を雪川（三助）がうまく購入したことを、ひどく賞めている。――のち雪川の没後これは不昧の所有となり、雪州蔵帳上の部におめめられた）

諸著作

このころまでに不昧は、「三百ケ条」（**展** ― 直筆三巻）「茶事覚書」（37才）をあらわし、また著名な伝来をもつ茶の湯の名器を比較論評した「古今名物類聚」五冊を出している（これは序文にあるように、不慮の災に備えて名と物とのかたしろを残すため、そして諸家秘蔵の名物は天下古今の名物で、一人一家一世の名物ではないというもので、それはまた後世見誤りのないようにと書授したもので、今日の茶道研究にも必要欠くべからざるものとの評価が高い、著述の目的は十分に果されている。― 39才で5冊、41才で7冊、44才で2冊、47才で4冊計18巻を10余年かけて完成した）（**展** ― 全巻あり）。また**展示**に紙本墨書で茶銘「中之白」があるが、寛政8年46才の時のものである。

このころも出雲地方は連年災害にみまわれている。主なもの

33才　水害　147,000石減
34才　風水害　533,000石減
36才　風雨　933,000石減
42才　水害　288,000石減
45才　水害　550,000石減

このころまでは江戸、松江一年間宛交互に滞在しているが、46才ごろからは二年間交互となり、一方茶会の催が急速にふえている。有沢6代織部・明々庵が、不昧の茶湯の作法をまとめた「不昧公茶書」は享和2年（1802）52才の時である。この翌年弟雪川に死別し、文化3年（1806）56才で致仕し、大崎に隠退する。この年不昧が居間に自ら書いた「会席の法」の掛板を、側医の堀弘伯が写しとっているが、次第に不昧流が形づくられる。やがて「客作法の事」がうまれて完成へ向う。

文化8年（1811）は不昧61才、還暦の祝を2月14日に行う。その翌日は嗣子8代斉昭が結婚し16日には大崎の常什幽月軒において、茶道の高弟根土宗静に「一畳半極秘―真台子」を伝授するとともに宗静の号などを与えた。この時の覚書きが次回に述べるように、数奇な道をたどって今日残っている。（**展** ― 紙本

晩秋の賦

薄明りせる門灯に寄りし蛾のすくなくなりて秋闌けにけり　常盤はるまさ
白血病と知らずに逝きし姪婿の細き面輪太き眉想ふ　藤原信子
自らを戒めつつも繰りかへす過ち多し老化の吾は　目黒成生
戦国の昔を偲ぶ毛越寺芭蕉の句碑は老松の方　景山悦子
一服の薄茶に一日の始まるは妻職退きて得たるわが果報　児玉敏郎
嫁の手も借りて作りし鉢菊は生命新らたに朝風ゆれる　藤原美世栄
今ひと度逢ひたき思ひを葦のかげに空襲避けし十九の春　松浦愛子
もの言はぬ娘にいらだちて夢さめぬあかときうつつ虫し　岡田時子
きり鳴く
花をもて埋めし伯母の美しき面輪悲しも細き骨拾ふ　野村節子
激戦の候補者の声おさまりてその家の屋根に月静かなり　宮廻愛子
賑はひし水泳プールは人気なく壁の時計が刻きざみゆく　佐藤喜代子
わが袖の紅絹（もみ）にもがたを飾りつつ明日はこの牛　永井弥生
売らむと思ふ
夢ひとつに明日を信じて生きてゆく茜の空に鳶舞ひていし　安部夕波

斐の上川柳十月例会

朝茶だと縁起かつがれひき返し　松浦亜以
茶柱が立ったと弾む靴のひも　若槻白馬
御手前を賞めて縁談締めくくり　渡辺好之
汗流し味わうお茶の心よさ　真綿よし子
借金はお茶ものまずにかしこまり　児玉哲呂
大学を出ても当分お茶をくみ　太田亀甲
おなじお茶手前でそれぞれ味違う　藤原英生
旅さきでふるさとのお茶恋しがり　安部正子
茶柱にちょっと期待をかける朝　藤原千代子
丁度よいとことお客に茶をすすめ　藤原のぼる
老い二人話題もなくお茶すすり　横山まこと
言いそびれ茶柱噛んで過す刻　高木白紅
お茶だけでとても妥協点出てこない　松田牛歩
茶化されて次の言葉を見失い　久村美津
難題をうまく茶かした年の功　松浦木公
井戸端の会議も今は茶の席で　目黒申楽

訂正 前号2頁5段 楽山院×→楽山焼・希志名焼×→布志名焼

墨書「一畳半極秘」一巻はその実物である）。

なおこの二月には「古今名物類聚」と同じ目的をもつ、瀬戸陶器の起源や歴史に重点をおいた「瀬戸陶器濫觴」をあらわし、9月には「道具帳」をものした。これは不昧が集めた道具518点の品を分類し、諸注意を書加えて、これを嗣子斉恒に譲った書である。

61才還暦の年はまさに不昧の茶道道具研究の集大成の年であったといえる。これから不昧はいよいよ茶道の奥義を体得し、「茶礎」そして「茶湯心得」（**展**ー紙本墨書の軸物）を生み、茶禅一昧の境地に到達するのである。ある年は毎月のように茶会を催すということにもなっている。

「道具帳」と「雲州蔵帳」

前著ができてから不昧の歿年までは7年間あったが、この間にも道具の出入りがあり、総数900余点に及んだ。その後これらが版本となって出たが、いろいろの名称のものが出ているが、今「雲州蔵帳」と称せられるものを中心として概略をのべると、（**展**ー雲州蔵帳図鑑ー実物のカラー写真をのせ解説を加えたもの）蔵品分類の基礎は前二著の類聚と濫觴の研究を踏まえて、名器の伝来や由緒を尊重しながらも、独自の見識をもって六部門に分類している。

第一「宝物の部」　16点
ー天下無比の宝物で日本国の宝物

第二「大名物（おおめいぶつ）の部」　43点
ー天下の名物

第三「中興名物の部」　76点
ー小堀遠州の選び出したもの（奥出雲102号3頁小堀遠州参照　**展**ー遠州作　茶杓）

第四「名物並の部」　77点
ー中興名物同掛のもの

第五「上の部」　483点
ー類品は他にあっても優れたもの。上の部の最高購入価格500両である。しかし宝物の部の最低300両である。芸術的価値で分類

第六「中の部」　104点
ほかに「下の部」　103点
ーこれは茶会に使用しても差支えなく、他によいもの出会あれば、とりかえてよいと付言してある。

道具帳では「宝物の部」をさらに「一」（2点）「二」（5点）「三」（9点）とわけ、「一」は子々孫々にまで格別に大切にし、駕籠に入れて運び、大崎の蔵に保管し、茶会に使用してはならないとある。この中に「円悟墨書」と「油屋肩衛」がある。

そして「譲書」の末尾には、これらを大切にすることが孝行であるとしてある。そして家臣その他の者が拝領した道具は、第五「上の部」の中からだった。

今般の展示品は上の部のもの

花入　青磁飛龍耳　（南宋）
茶碗　伊羅保「山吹」（季朝）
　　茂川「秋風」（〃）
　　古三島「碪」（〃）
水指　伊部八角共蓋
棗　「秋野」（初代漆壺斎）

美術工芸品の庇（ひ）護と育成

名器の収集からさらに実践者となり、出雲では指物師・小林如泥、塗師・小島漆壺斎、陶工・楽山焼の長岡住右衛門と布志名焼の土屋善四郎らを育て、江戸の漆師・巻絵師らにも不昧のお好みのものを作らせている。数奇屋建築では菅田庵、明々庵などがある。自らもつくり（**展**ー茶杓、花入など）。これらの人の作品には**展**ー漆壺斎の棗・小板・膳・椀・如泥の煙草盆・布志名焼の香煎入ほかがある。

不昧の襲封前即ち5〜11才ごろは（1頁）不況時代であった。33〜45才ごろ（2頁）は第二次の深刻な時代で、全国的な天明の飢饉の時代でもあった。不昧の道具購入は朝日丹波の努力による藩財政好転とはいえ、密接な関係があった。25才前後の安永年間は22点、天明期をすぎた寛政年間（39〜50才）が66点、つぎの享和年間（50代初め）は16点、その後文化年間（54〜67才）46点である。しかし公金と私的な金の区別は明瞭であった。名器購入のために、用度係から隠退料の前借をしているし、最晩年にはすでに道具に手を出す余裕のないことを告げた書簡も残っている。このことは大名として知足と理財を兼ね備えていたことを示すものといわれている。

——文中の**展**は絲原記念館の特別展に展示中のもの。

柴栗十月句会抄

毛蟹売る女の訛り旅の果て　浅野　としお
口紅の娘へ朝顔の清々し　岡田　蹊花
隠沼蜻蛉育ちし水涸るる　岡田　麗水
台風過雨をこぼして萩こぼる　小川　あきお
孫去にておもちゃひとつの夏座敷　加納　信子
スクールゾン児等活気みつ新学期　門脇　花子
法師蝉系譜の文字さぶ五輪塔　高木　白虹
くりらくの味うれしくて茶を喫す　田辺　竹野
一と雨に遠山かすむそばの花　錦織　富江
一刻の午睡うつつに法師蝉　新出谷　一華
秋雨や帰省の娘の荷をぬらし　峰石　美代子

会員配布一部百五十円／六九九ー一六　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎　頒布／横田史談会　発行／奥出雲文協　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第104号
（12月号）
昭和58. 12. 3
奥出雲編集集団

奥出雲東部の旧家④
馬木城主　馬来氏

馬木氏の系図の発見

昭和四十六年の秋、北九州市門司の港湾業務会社の社長で、萩藩士の子孫であるという馬来さんから、突然電話があった。「萩のぼだい寺にかねてからわが家の祖先のことを尋ねていたところ、最近出雲国の馬木村の住人であったということがわかった。横田町役場に問い合わせると横田町誌の抜き刷りが送られた上、あなたを紹介された」という内容。数日後家族連れで来町されたので馬木を案内した。その後、再度来町された。地理に詳しい馬木の杉原清一君に頼んで、当地の重要な古文書の一つである「杠（ゆずりは）日記」の記述をもとに墓を探してもらったところ、記述の通りのところに墓石があった。近くの安養寺の過去帳にも記載してあることがわかり、丁重な供養をして帰られた。

私が横田町誌にのせた馬来氏の系図は、「『仁多郡誌』の馬木氏の系図は全くの虚構であり『県島根県史』のも虚構が多い」という見解のもとに「萩藩閥閲録」「杠日記」、横田八幡宮の棟札（県指定文化財）備後の「山内首藤家文書」などをもとに、考証して構成したものであった。馬来さんの二度の来町によって、私の構成したものが真実に近いものであることが裏付けられてきた。

その後、また横田町誌の縁で、若い海上自衛隊員の馬来正佑さんが来られた。本家筋に系図や文書があるとのことで連絡していただき、当時、三重陸上自衛隊航空隊司令で航空学校長の馬来さんから、系図、古文書の複写が届いた。私が構成した系図は基本的にはそれに近いものであることが判明した。三沢氏との縁組のことも書かれていて、三沢氏の略系図の祖が飯島氏であることがわかり「三沢の祖は飯島」が動かぬことと私が決める一因ともなった。

郡誌、旧県史の系図が偽作虚構であることは「山陰史誌」に詳論をのせているので一読していただければよい。ともあれ、この地方で長い間誤り伝えられていた三沢氏、明らかでなかった馬来氏が解明されて、中世の歴史がより明らかになってくることになった。

そして馬来氏の解明で浮かんだのが「尼子経久の母は真木氏」ということである。出雲私史は真木氏は仁多郡馬木村としているし、佐々木文書の中の新しく整理されたと思われる系図の一つには「馬来氏の娘」とある。しかし、その他の記述はすべて馬木村のことは書いてないし、姓も「馬木、真木」である。ここに私は疑問を抱いた。

経久の母は馬来氏の出身ではない

室町時代、山名一族は、全国の六分の一を領有し「六分一殿」と呼ばれて、足利氏と対立する一大勢力であった。その山名一族の師氏の子が氏綱で、摂津国馬来郷に居住し「馬来」と称していた。将軍義満より出雲国仁多郡阿井郷（仁多町上、下阿井と横田町大、小馬木を含む）を受け、神目山（大馬木の寒の峰）に居城を築いた。

明徳二年（一三九一）いわゆる明徳の乱 ― 仙洞御料所横田荘がこの乱の直接の原因 ― が起こり、氏綱は守護山名満幸に属して足利方と戦い、富田城下の吉田村で討ち死にした。二代は満綱で三沢為時の末子が養子として入ったものである。三代は行綱。四代は道綱で三沢八代義好（対島守為在）の子である。

この為在の時代が尼子氏の台頭期。文明十六年（一四八四）、為在が首謀者となって尼子氏を富田城から追放している。

七代久綱の時代は、仁多郡の大半は尼子氏の支配下に入り、総代官森脇氏は、親子二代十数年間、横田を中心に駐在していた。

八代孝綱は久綱の異母弟で、母は備後の甲山城主山内首藤直通の娘（経久の子興久の妻の妹）である。はじめは安芸五龍山甲立城主宍戸元家の妻となったが死別し、帰って道綱の後妻となった。宍戸元家の子隆家（毛利の重臣）は孝綱の異父兄である。元家の弟末兼隆忠に子がなく、孝綱の弟知綱がその養子となった。隆家の妻は元就の娘で、毛利隆元の妹、吉川元春、小早川隆景の姉である。さらに隆家の娘は輝元の妻となり、隆家の孫娘は三沢十四代為虎の妻となった。孝綱の妹は口羽伯耆守春良の妻となり、春良の娘は山内直通のひ孫の妻となっている。経久の母のことは全く記述されていないのである。

天正十七年（一五八九）毛利配下の各地の諸将が安芸広島城下に移住した時、乗綱は戦傷障害者、孝綱は病弱であったため馬木に残留し（輝元がそれを認めた手紙が二通残っている）孝綱の子元貞が外祖父（妻の祖父）氏俊とともに従っている。孝綱は毛利氏が萩に移ったのちの慶長十八年（一六一三）馬木で

亡くなり、残った家族もこの地で死亡したもののようである。

混同されてきた馬来、馬木、真木氏

最後に、偽系図などが原因で混同されてきた馬来、馬木、真木の三氏について述べておきたい。

「関西陰徳太平記」「雲陽軍実記」を丁寧に読んでみると、そこに出てくる馬木氏、真木氏はすべて能義郡奥部の住人と読みとれる。明瞭（りょう）にそう書いてあるところもある。さらに、永禄九年（一五六六）の「富田城下城次第」や元亀元年（一五七〇）の布部山合戦の記録によると、真木氏は能義奥の宇波出身者である。

馬来氏の方は、当地の神社仏閣の記録にも「馬来出羽守道綱子宗三郎乗綱」のごとく書かれてあって、系図と一致する。

「尼子晴久時代の分限帳」には馬来善太夫、馬木彦右衛門とはっきり姓が書き分けられており、馬木彦右衛門は「太平記」「軍実記」の記述とも一致する。そして馬来氏の所領は馬木であり、馬木氏は石見に領地を持っていた。ちなみに、尼子の直臣はほとんどが領国を出雲外に持っていた。尼子氏の成長によって所領を拡大した直臣の特色といえる。

馬来氏は尼子氏の直臣団の中になく、馬来氏は軍記に見える諸合戦に参加した様子をみることがない。三沢、山内の領国にはさまれてその地を静かに守っていたようであるし、そういう地形の中にあった。

もし尼子に最後まで従った馬木氏が馬来氏であったとすれば、毛利氏が尼子方諸将を居城まで徹底的に追いつめて血祭りにあげたことからみても、馬来氏を離れているという理由だけで独り残す理由はない。

なお軍実記の中に「尼子十旗」のことがあり、これが今日なお尼子氏の誇りとされているようであるが、誇り得るだけこの十人の国侍がそろって尼子氏に結束した時代があったであろうか、私は疑問に思っている。

この書の著者が「尼子十旗」のことを書いている時代は、諸将はすでに尼子から離れている時代である。著者が尼子氏をしのぶあまり筆を走らせて書いたのに過ぎないのではないかとも思っている。先学のご教示を願って筆をおく。

「横田の茶道」⑤

松平不昧へ（下）

この文の「上」で述べたように、「日本茶道史」（桑田忠親著）の最後の章には、千利休以後の諸流派、三千家・織部流・遠州流・宇和流・石州流について、それぞれ、二、三頁を、さらに石州流の不昧派と井伊直弼について、それぞれ一頁をあてている。

そこには不昧流が石州流の系譜をひくものであることをしめすものとして、不昧の「石州三百箇条」三巻と、「一条半極秘」一巻をあげ、さらに不昧流の神随をよくいゝ表しているのが、雲州絲原家所蔵の「茶湯心得」があるとしている。

絲原記念館の開館三周年記念展にはこれらがはじめて展示公開された。そして同じく不昧直筆の「奥義書」も公開された。

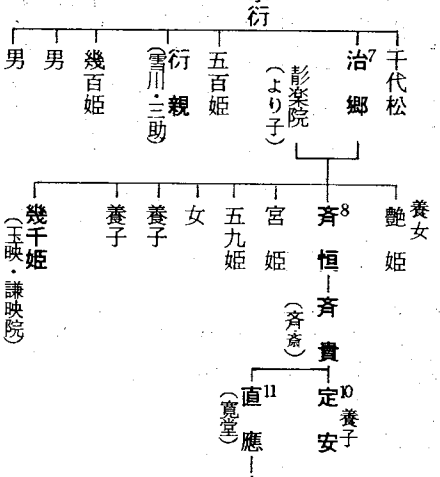
つぶさに読む機会を得たので、これらの秘伝書の概要と、奇しき因縁によって直筆の秘伝書が残ったいきさつについて、同時展示されていた根土きくから岩尾宛の手紙の中から紹介することにする。

三百ケ条

不昧直筆の「三百ケ条」（表書にはこう書いてある）の「参」の巻の末尾には、「…千道安桑山左近大夫ニ伝受シ　片桐石見守貞昌ニ伝フ　今世ニ石州流ト呼　全　石州流ニアラス　利休流ニテ伝ル所の道安流也　殊ニ貞昌ハ生質実丁ナル仁ニテ我意ヲ少シモ不用　私意アル所ハ私ノ申分ト覚書ニモ記タリ　此三百ケ条ト云ハ　桑山より宗関承リタル事ヲ　覚書ニ頭ヲ留メタルケ条ノ数三百ニ及トシテ依テ是ヲ世三百ケ条ト申也　宗関死後桑山可齋方ニアリシヲ東海寺広源庵怡溪和尚　可齋ト相談シテ注解シ　志ノ人ニ伝フ　此外寸書作事方表具台子ノ覚書留メアル事也　後世茶ヲ嗜人ノ為ニ　猶其ノ注解ノケシカタリ合点シニクキ所ヲ取縮メ今爰ニ記スルモノ也」（原文のまゝ）とある。

宗閑すなわち石州の師左近の孫であり、石州の弟子であった可齋と、同じく石州の弟子での

松平家略系図



ち、大徳寺254世となった怡溪和尚によって、石州の三百ケ条が注解されたのが、「石州流三百ケ条注解」である。

不昧直筆の「三百ケ条」は、一条毎に紙がかわり、さきの注解書の各条の頭書きが書かれ（これは不昧の筆蹟ではない）、そのあとに不昧の注解が書かれている。筆者は怡溪らの注解書に接していないので、「石州三百ケ条」（無住抄）――茶道古典全集――とこれを比較して読んでみると、不昧の茶に関しての諸文と同じ考えが、注の随所にあらわれている。縮められたもの、削られたもの、わかり易くなったものがほとんどで、「直伝ならではのべ難し」「口伝に及ばず」とのみ、記した条もかなりある。多くは一条一枚程度になっているが、茶の精神にかかわることの多い条では、より多くの枚数を費し（「無住抄」には勿論ない）、しかも線引きで消して書きかえられた推稿の跡も明瞭に読みとれるところも少なくなく、不昧の茶の心の成熟過程を知るのにも貴重なものである。

――筆蹟からみると、唐風の書を修得後、定家流の書風に打込んだ時代のもので、努力のあとと、若さにあふれているから30代ごろのものであろうかという書家の見解のあることをつけ加える。

一畳半極秘

「一畳半極秘」一巻は、文化八年不昧還暦の年の2月16日、幽月軒の御常什において、弟子根土宗静に伝授した秘事台子口伝を、不昧が書き、「此口伝ノ意書伝事ニあらすト云トモ、人々間違心得違もあるもの故、口伝して書て不伝事を覚ノため記し」（原文のまゝ）と結んであり、そのあとにさらに、十格についての覚と、宗静に与えた孤輪庵の庵号の出典などいずれも不昧が書いたものを、宗静が一巻の巻物にまとめたもので、13年の春、これを不昧に見せたところ、相譲るといわれて、もらったものである。

余白にはこの事を孤輪庵宗静が書きこみ、最後のくだりには、これを残し置くが、いつまでもあとへ残して置いてはならないと書いている。

奥義書

「奥義書」一巻は、やはり不昧が宗静に伝授した、「十格」「五躰之道具」「用之道具」ほかの不昧筆の覚書と、不昧の夫人彫楽院よ里子の添書をまとめた巻物である。それによると不昧没後の文政6年4月、彫楽院が宗静の子宗藤（不昧の弟子）からの、たっての願いに応えて書いたものである。文面から四十四年琴瑟相和し、不昧の茶道大成の蔭の力ともなった夫人の、うるわしい心も読みとることができる。

二通の手紙

「一畳半極秘」「奥義書」の二巻を入れた箱には、二通の手紙が添えられている。当時秘伝の伝授は弟子二人に限るとされ、それも口伝によるものとされていた。従って覚書などは外部には勿論見せることも出来ず、弟子に師の秘伝を誤りなく伝えるための、一代限りのものであった。そのことにからんでこの二巻は興味ある経緯を経て、今日残ることになったのである。

この二巻は、所持していた根土宗静の死後の安政2年、不昧の大切なる御伝書のゆえ、みだりに外部にもれることを恐れたその子の宗藤が、江戸において佐倉藩主堀田正愛に嫁いでいた、不昧の息女幾千姫（玉映・謙映院）に差上げたのである。――玉映は文化13年16才で嫁し、正愛は文政7年、玉映は文久3年歿す――ところが謙映院の死後その由来も周囲の人々の間ではしかとわからず、同じく次の藩主堀田鴻之丞に嫁していた。不昧の孫にあたる9代藩主斉齋の息女吉姫への、謙映院の譲物の一つとして入れられていた。

文久3年の暮、謙映院がなくなったことを知った宗藤の後家きくは、この二巻のことが心配になり、謙映院のそばに松江以来つき添っていた老女岩尾に便りを出したのである。

それには、この二巻は大切な品であるので、謙映院を通して御本家（松江藩主）にもどして頂くよう預けたものである。その行方がつねに気がかりであったが、この度謙映院がなくなったのでいよいよ心配となった。

それに私も出雲に帰ることになったので、このことを明らかにして置きたいと、くわしくお願いを書いたのである。

これによって事情が判明したので、岩尾とともに仕えていた松江藩士池田平馬が、手紙とともに、二巻をもって江戸藩邸の番頭格用人富永庄左衛門を訪ねた。富永ははじめは懸り合いを恐れて、しぶったがとうとう折れて、国元の家老宛に手紙を書き、これらの品物につけて送り届けた。こうしてこれらは松平家に納まったのである。

きくの流れるような水茎の跡鮮やかな美しい文字の裡には、秘伝を護ろうとする茶道人の妻の心根も汲みとることができる。

不昧の茶の手引者であり、のち第一等の弟子となった、のちの家老有沢弍通（能登）は、まだ不昧の幼ないころの宝暦8年、二条流の歌人として大馬木の絲原家を訪ねて交情を温めている。当主吉三郎（好親）が豊かな風流の持主であったことは、かつて本誌にくわしく書いた。それ以来明治の中期に至るまで松江藩主、松江藩と絲原家とは、公私ともに深い関係があったことは、たびたびこれも紹介した。

訂正　前号4P3段　中興名物同掛のもの ×→ 中興名物同様のもの　4段　茂川「秋風」 ×→ 茂山「秋風」

師走の歌

目覚むれば虫の時雨よ息ひそめこころ澄ましてききておりりたり　常盤　はるまさ

下肥のくさみに慣れて肥桶のかたえに秋の大根を蒔く　宮廻　あい子

あかね雲を背に穂芒のゆらめきて赤むらさきに溶けて暮れなむ　松浦　愛子

落葉してあらはとなりし鈴なりの柿の朱玉の夕日に映ゆる　野村　節子

鎌を研ぐ手元の日々に老いづけり明日のいら草誰が刈りくる　岡田　時子

青々と燃ゆる草原蒜山の酪農青年夕映えの中　藤原　美世栄

米袋の三十キロによろめきつつ働く夫の薄き肩見る　佐藤　きよ子

細々と樹木の謂れ標示あり船通登山の道に楽しむ　目黒　成生

山峡に草刈るわれに遠くより挨拶しゆく選挙カーのあり　藤原　信子

脱穀の音のみ高く我の手に握れる束のかろさ空しも　景山　悦子

万華鏡をのぞくがに見ゆ舞ふ紅葉木洩れ陽おだしくわが肩にふる　永井　弥生

枝もたわわに実れる柿の木の下にて選挙話かうなづきあいて　児玉　敏郎

霜枯の野面にひそと寄りそへる野菊に短き日脚集めり　真綿　ひよ子

祈りなき明日の来たるがうとましくもろくなりゆく心さびしむ　安部　夕波

柴栗十一月句会抄

月照らす盆地は瀬音のみ更ける　浅野　としお

蟐蜘を隅に追い遺り刈り詰める　岡田　蹊花

種南瓜一つを抱へて戻りけり　岡田　麗水

秋入日新表札の映ゆる家　小川　あきお

秋冷を肌にとらえし朝の庭　門脇　花子

行ずりに愚痴合う二人木の葉髪　加納　信子

暮れなずむ誰が棲む杣家鶏頭咲く　高木　白虹

秋たけて古代色なす小むらさき　田辺　竹野

療養のいつ癒ゆる身ぞ月今宵　新出谷　一華

病む部屋に秋の七草野のにおい　錦織　富江

芋畑が背丈の露を子にこぼす　藤原　樵夫

貧しさの中にも小さな秋実る　峰石　美代子

茶道の略系譜（下）

- 酒井雅楽頭（姫路侯・一得庵）
- 朽木近江守（福知山侯・不見庵）
- 松平上野介直義（支藩広瀬侯）
- 井伊兵部少輔
- 本多豊後守（信州館山侯・一点庵）
- 岡田将監善功（向月亭・宗月）
- 武藤祐兵衛（雲州茶道・清順）
- 奈良斗八（雲州茶道・斗斎）
- 坂本雄峯（〃　大雄庵）
- 村田青山（雲州家臣・玄峰庵）
- 小森玄可（雲州茶道・一松庵）
- 亀田宗振（江戸道具屋・伏見屋）
- **根土宗静**—根土宗藤（支藩広瀬侯茶道・良栄・玄風庵）（孤輪庵）
- 岡本宗修（松江藩医・有心庵）
- 伊佐栄琢（半寸庵幸琢の子・看山）
- 藤井長古（雲州茶道・提起庵）
- 有沢能登—[2]同織部—
  - （雲州家老・弐通・弐善・明々庵・宗意）—歩庵・宗佚
  - —[3]同弐悳—[4]同弐審（宗閑）—
  - —[5]同弐恒—[6]同弐也—（菅田庵・宗滴（菅田庵・宗也）

不味

斐の上川柳

上手へた抜きでそれなりの喉鳴らし　松浦　亜以

げんまんで別れた指を疑わず　松田　牛歩

勝はずのチームが負けて気がぬける　松浦　木公

客よりももてなす方が先に酔い　児玉　哲呂

焼いかを売る娘の媚をうけて買う　高木　白虹

凝りもせず下手な横好き又投句　藤原　英生

夕茜急ぐ鴉の西東　若槻　白馬

湯の宿で隠居の見栄が若返り　渡辺　好之

ダウンして盆の行事は目をつむり　安部　正子

風鈴に秋の便りを聞いている　太田　亀甲

電線で出立ち会議のつばめ族　佐佐木　千世

熟れるのが待ち遠しいか群雀　藤原　のぼる

菜を蒔いて心地よく聞く雨の音　藤原　千代子

針を持つ手に老を知る秋の夜　安部　春恵

適令期すぎた娘に気をつかい　藤原　ユキ子

若者と話をすれば老いが負け　目黒　申楽

あとがき

昭和58年も歴史の上に大きい足跡を残して幕をおろそうとしています。

1月増頁号は久方振りに「奥出雲のたたら製鉄」についてをのせ連載を続けるつもりです。日本のたたら製鉄史上に奥出雲が果たした重要な役割が一段と明らかになり、研究者の間で注目されて来ました。それを中心にすえて。また「尼子氏失墜の一翼を担って奥出雲を護持した三沢氏」の連載も考慮中です。

- 4代 有沢宗閑の門流
  - —太田直行・手銭白三郎ほか
- 5代 有沢宗滴の門流
  - 岡崎シマ子
    - 6代 有沢宗也（弐也）
    - 三島祥道（寸草庵）
  - 三島左次右衛門（祥道の先代）
  - 酒井粛子
  - 桑原羊次郎
  - 木佐徳之助
  - 三島祥道（前掲・後岡崎門）

この門下に横田では、故藤原璋夫・故白根定一郎・甲斐宝之助・糸原猪史夫らがいる。

会員配布一部百五十円／六九九—一六　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎　頒布／横田史談会　発行／奥出雲文協　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 105 号
（1月号）
昭和59. 1. 7
奥出雲編集集団

奥出雲のたたら製鉄史①

新資料にもとづく、特に東南部のその技術・経済・社会・文化の総合史

上古刀

昨年11月26日、島根大学で開かれた日本化学会中四国支部総会での講演で、佐々木稔氏（新日本製鉄KK第一技術研究所・工学博士）は、埼玉県稲荷山古墳出土の著名な鉄製の剣の六片の錆の科学的解析から明らかになった、古代刀の謎を明らかにされた。（筆者はそれから4日後、千葉県佐倉市に昨春開館された国立歴史民俗資料館において、稲荷山古墳ならびに鉄剣を含む出土品をみて、講演を十分にかみしめることができた。尚、研究の詳細は入門者向きとしては、新日本製鉄KK発行の「鉄の話題」43号、専門者向きには、東京国立博物館発行美術誌「ミューゼアム」378号にある）

日本刀以前のいわゆる上古刀の年代は、4～6世紀ないし8世紀の間とみられており、その形には、剣（つるぎ）（真直な剣身の両側に刃がつけられた刀）と太刀（たち）（真直なあるいは反（そ）りのある刀身の片側だけに刃がつけられた刀）がある。草薙剣については現代の各方面の研究家の間では「青銅製」であるとの説が有力で、この青銅の剣はわが国では弥生時代の墳墓から出土する例が多い。（これについて「奥出雲」29・30・31・33そして86・87・88・89号参照されたい）。

4世紀中頃からの古墳時代に入ると、副葬される剣は鉄製にかわり、ついで古墳時代中期の5世紀中葉からは、剣に代って大刀（無反りの直刀）の副葬品が増えてくる。古墳出土の鉄製上古刀をいく振りか研いだ経験のある小野光敬（研師、無形文化財・人間国宝）によれば、砥石にぴたりと吸い付くような感じの極めて良質の地金であり、正倉院の宝剣・宝刀とも同じような研ぎ心地であり、たたら製鉄の地金でつくられた後世の日本刀（外反りの大刀、平安末以降）を砥いだ感じに比べると、鉄の質ははるかに優れているという感想をのべられているという。

高い銅含有量鉄と錆びにくさ

当県出身の俵国一工学博士によって大正初期にはじめられて以来、わが国の古墳出土鉄器の金属学的研究は、数多くなされていて、これらによれば、古墳出土の鉄剣には含銅鉱石を原料にしていることを示す分析例が過半を占めている。このため従来から地金は中国の山東省から揚子江沿岸にかけての江南地方の含銅磁鉄鉱を、鍛錬してつくられた渡来品ではないかと推定されてきた。

稲荷山鉄剣の錆の解析は、古墳から出土した鉄器の多くの分析例と同じで、この考え方を裏付ける有力なデーターの一つとなったものという。

古代中国の炒鋼法と海綿鉄法

わが国における製鉄の始まりは、今までの考古学的観察中心によれば、石製農具が消滅する弥生時代後期（2～3世紀）とされているが、鉄に関する科学的立場からは古墳に埋納された鉄滓に、製錬滓（いわゆるたたら糞ー還元製錬過程で生成するスラグ（鉄滓）で、低チタン砂鉄の使用が推定される）が現われる6世紀中頃を開始の明確な証拠としているのである。それ以前の鉄滓はすべて鍛冶滓（鍛冶屋糞）で、鉄素材を加工して鉄器を製作する際に発生するものである。（詳細は「奥出雲」61号の窪田蔵郎論文参照）

したがって稲荷山鉄剣が造られた5世紀後半は（現在文字の「辛亥」などをもとに、471年とされている）、素材の鉄地金は大陸からの輸入に頼っていた可能性が大きいという。

この素材は中国で前漢時代（紀元前3～2世紀）に開発された炒鋼法によってつくられた、品質の優れたしかも安定した、その上大量生産されたものであったと考えられる。

炒鋼法（現代のすぐれた製鉄法である間接法と原理的に同じい）に対して、それ以前から行われていた製鋼法は海綿鉄法である。これは今日のいわゆる、たたら吹きによる方法と同傾向のものである。

炒鋼法は鉄鉱石を還元（酸化鉄の状態の酸素をとる）して溶融状態の銑鉄をつくり、鉄滓を分離したのち（還元製錬方法）、その溶融状態の中で大気中で撹拌をし、銑鉄中の炭素を燃焼させて（酸化精錬方法）鋼としたのである。

海綿鉄法は、還元されてできた鉄が炭素と反応して銑鉄にならないような、1,000～1,100℃以下の低い温度で還元を行い、直接に鋼を得る方法である。従って多孔質でありスラグ成分があまり分離せずに残っているので、鋼として使用できる素材にするためには、加熱と鍛打を繰り返してスラグ（鉄滓）を絞り出さねばならなかった。――今日刀匠が玉鋼から日本美術刀剣用の鋼を造る方法と同じ傾向）――（炒鋼法については、1,978年版北京文物出版社「中国古代冶金」ならびに1,988年版たたら研究会編「二十五周年記念論文集」を参照）

山陰と古代製鉄遺跡

現在全国で古代製遺の発掘は

50を越えているが、山陰では未発見である（ごく最近鳥取県東部で発掘されたという）。島根県内出土品の一覧表において、過去においては鉄器は別として、鉄滓については軽視されていた傾向がある。また鉄器についてもその傾向がなきにしもあらずであり、勿論鉄器・鉄滓の分析も等閑視されていて、まことに立ち遅れている。

鉄滓も十把一からげに「かなくそ」と処理してしまうわけにはいかない。これには製錬滓（当地方のたたら糞もこれに入る）鍛冶滓（かぢや糞）もあり、製錬滓についても極めて多種であることを忘れてはならない。

（「やさしい鉄滓の見方」については「奥出雲」61号に日本鉄鉱連盟公報部長、「鉄の考古学」の著者の窪田蔵郎論文参照。ほかに、関連するやさしい論文が65・66・67・68号に載っている）

専門的には、52年度たたら研究会に発表、「たたら研究」22号にのった、故丸山益輝（広大教授・たたら研究会長）氏の論文にある鉄滓の正しい認識から出発せねばならない。

要約すると、「鍛冶滓」（銑・鋼を鍛錬脱炭して包丁鉄（錬鉄）をつくる時に生ずるもの）はおいて、「たたら滓」（たたら吹きの時に生ずるもの）については次のようである。

流出滓——操業の途中湯路から極めて多量に出るもの。

炉内残留滓——は鋼が出来て炉内に残留するかな糞で、砂鉄が木炭の燃焼によって還元して、釜土と反応してゆく過程によって、すなわち時間の経過で還元期のもの、さらに高温になって分離する期のもの、造滓のおこる期のものとにさらに分類される。しかもそれが炉内のどこの場所のものであるかによって、さらに異ってゆく。さらに木炭が炉内で燃焼して発生した、一酸化炭素COとなる上部での間接還元反応状態のものもあり、下部で木炭のCと直接還元反応する二種があるから、実に複雑である。三つめには

鋼内滓——がある。柄実（からみ）ともいうもので、鋼の組織内にミクロ（微視的）に介在する鉱滓（一般的にいうと鉄滓）と言うべきかな糞で、一般に非金属介在物とよばれて、各種の鉄以外の元素が含まれている。これは局部的には1,500℃をはるかに超えた状態で生成したものであるから、この部分の固定は「たたら」技術の水準を判断する一つの基準——筆者が村下と討論して判断したことと通ずる。また送風方法の発達段階とも大きい関連があることも重要である——とされる。このように複雑な各種のものは、十把一からげにたたら——日刀保たたらの、今日的たたら吹きの詳細な調査研究報告も、戦中以前のこれらの研究に多大の寄与があるものと、大いに期待しているものである。

日々の歌

天墜ちるほどに篠つく雨にまじりて虫の声透り来る　常盤　はるまさ

酒かん器求めて見せりゃ息子等はものずき者と笑ってわかす　藤原　みよえ

残る雪鎌で除けつつ小草刈る真澄の空は鳶の舞ひゐて　景山　悦子

我が子の幼き頃の夢より覚めそれより冬の夜眠は浅し　児玉　敏郎

最終の峡庭辺飾る山茶花の雪かむりたるピンクの愛し　藤原　信子

苛立てる心抑えて仕方なく雲の動きを見つめ続けり　目黒　成生

会終えて夜道をいそぐ主婦達を霧の包めり影やはらかし　松浦　愛子

茸狩りもをさめとふみゆく霜柱小径に櫨の紅ふかし　永井　弥生

無縁かと着物の価見ておりぬ赤きのぼりの売出しの街　佐藤　喜代子

裸木の峡の棚田の夕昏るる時雨はげしき白き雨あし　岡田　時子

草も木も白く凍えて霜冷えの山の畑に煙ながるる　小早川　恵子

厨辺によき香の漂ふ夕べなり賜ひし柚子のとろとろ煮ゆる　野村　節子

相寄れば香代の肩にと手をふれし夜見の渚の夕映へに佇つ　安部　夕波

くそ（たたら滓ー通俗には鉄滓、**鉄滓の分析研究の多面的重要さ**

昭和58年度たたら研究会下田大会（58・12・3）で、さきの佐々木稔氏は、一連の古代鉄研究の結果をふまえて次のような提案発表をされた（要約責任筆者）。すなわち、鉄器（古代刀など鉄の製品）の材質を分析することによって、鍛冶（鍛錬する）による精錬法すなわち、どのような鉄をもとに鍛えたかの推定が可能であるということである。すなわち製品の中に分離せずに残って、製品の鉄器中に、非金属介在物として（精錬滓という）見られるから、それを分析して推定できる可能性があるとされる。そしてそれは鍛え方、炉の形式にまで追求論ずることも可能であると、分析例をしめされた。そしてこの鉄製品分析の中に含まれる「鍛冶精錬」滓の分類案と、その化学組成（組合っている元素など）の例もしめされたのである。

——筆者が刀匠といろいろ実際を垣間みて討論したことと、常識的ではあるが通ずるところがある。——

話はもとにかえるが、また同大会で大沢正己（新日本製鉄KK八幡製鉄所内研究所）氏は、古代の製鉄遺構36ケ所（製錬炉24・鍛冶炉12）から出土した鉄滓の鉱物組成と化学組成を調査し、製錬炉の型（箱型炉・竪炉・円筒状炉）との関係を、また鍛冶炉（火窪型・円形土坑型・舟底型）との関係を、また木炭窯の

（5頁へ続く）

—資料1—

風土記

（岩波古典文学大系より）

① 播磨国風土記

（霊亀2、716ごろ）

○讃容の郡の項

「…即ち、鹿を放ちし山を鹿庭山と号く。山の四面に十二の谷あり。皆、鉄を生す。難波の豊前の朝廷に始めて進りき。見顕しし人（注　鉄の発見者）は別部の犬、其の孫等奉発り初めき…」

○宍禾郡の項に「…大内川・小内川・金内川　大きなるは大内と称い、小さきは小内と称い、鉄を生すは金内と称う。……敷草の村……鉄を生す。

② 常陸国風土記（養老2、718以前）

○香島郡の項に「…慶雲元年国の司、婇女朝臣、鍛、佐浦の大麻呂等を率て、若松の浜の鉄を採りて、剣を造りき。此より南、軽野の里の若松の浜に至る間、卅余里ばかり、此は皆松山なり。伏苓、伏神を年毎に堀る。其の若松の浦は、即ち、常陸と下総と二つの国の堺なる安是の海のあるところなり。沙鉄は剣を造るに、大だ利し。然れども、香島の神山たれば、輙く入りて、松を伐り鉄を穿ることを得ず。」

③ 出雲国風土記（天平5、733）

○飯石郡の項に「…飯石の小川、源は郡家の正東一十二里なる佐久礼山より出で、北に流れて三刀屋川に入る。鉄あり。」

○仁多郡の項に「…横田の郷、郡家の東南のかた廿一里なり。古老の伝えていへらく、郷の中に田あり。四段ばかりなり。形聊か長し。遂に田に依りて、故、横田という。即ち正倉あり。以上の諸郷（注　三処郷・布勢郷・三沢郷・横田郷をさす）より出すところの鉄堅くして、尤も雑の具を造るに堪ふ。

—資料2—

延喜式（825年ごろ）

——主税・禄物価法より——

鉄1廷（10斤）の直稲（単位束）

—資料3—

1,111～1,591（天正19）　横田庄（領家、石清水八幡宮、北条氏、北朝仙洞御所、山名氏京都御所と泉涌寺内雲龍院等）

1,232（貞永元）　横田庄年貢鉄貢納

鎌倉・室町時代鉄仏の90％は関東

南北朝時代刀鍛冶と研師の分離（本阿弥家）

1,466（文正元）　中国系小銅砲堺へ

1,467（応仁元）　このころ仙洞御所代官安部氏鉄を商う。

1,511（永正8）　船岡山合戦に鉄砲あり（信濃熊谷家伝書）

1,525（大永5）　岩屋寺本堂再建

1,536（天文5）　大馬木村に於て杠太郎左衛門・市兵衛・足立四郎左衛門たたらを吹く（往古は小前であった）

1,543（天文12）　火縄銃　種ケ島へ伝来する。

（〃 18）　織田信長　国友鉄砲鍛冶に鉄砲500挺を注文する。

1,558（弘治4）　鉄業を武士が支配する（石見、坂根家文書）

1,585（天正13）　豊臣秀吉　八幡城下町に鉄砲町、鍛冶町をおく。

1,591（〃 19）　小池氏　毛利氏より横田6ケ村川粉鉄の権利のこと（他たゝら、鉄穴）

1,601（慶長6）　出雲藩主堀尾氏　国内巡郷　出雲坂根の村下炭坂を貰す。

1,610（〃 15）　〃　〃　鉄穴流し禁止（斐伊川水系）

1,635（寛永12）　飯梨川の洪水

1,636（〃 13））出雲藩主京極氏　鉄穴流し許可（鈩、かぢや御免）

（〃 14）　杠太郎左衛門小峠で、市兵衛五ノ旗で鈩を吹く。

（〃 15）　出雲藩主松平氏

（〃 16）　郡内で13ケ所鈩吹立てる（大馬木村では杠両家と小馬木村では六兵衛　矢入鈩を吹く）

―資料4― 17、8世紀東部奥出雲・たたら関係年代表

紀元	年号	松江藩鉄行政	鈩名	操業		鈩の状態					1代（四日押）		鉄1駄の	大鍛冶屋	鉄相場	
				年	季	炉	吹子	高殿	状況	涌ず	砂鉄消費	鉄生産	砂鉄量			
1,636	寛永13	許可									(年間総数の平均で単位は駄)					
	14		小峠	このころは毎年操業せず	秋	炉床あり	吹差		吹き立てる							
48	慶安元	鉄買上制														
56	明暦2		五ノ旗		秋				〃							
61	寛文元		矢入		秋				15夜吹続ける							
	2		〃		春秋											
	5		長野屋		秋				12夜であと涌かず							
	9		小峠						よく涌く							
72	12	藩収入の5%(雲陽大数録)	五ノ旗					鈩打つ	わきよし							
74	延宝2	買上止・運上銀制	〃	3	秋			(併行)	吹きやむ利運なし							
87	貞享4	ボ運上・鈩88匁余(3.5俵)鍛(半)54匁余－(各1ケ月につき)														
88	元禄元		小峠奥					鈩打つ		涌かず						
91	4	ボ 買上復,運上・天秤3割増114匁余(5.3俵)					天秤		生産量増大							
	5				冬も		(併行)									
	6		五ノ旗	5	(とびとびに)			鈩打替える								
97	10		湯舟谷	4	(〃)			鈩打替える								
1,705	宝永2		矢入	7	(〃)			〃						長野尾		
	4	買上止														郡内鉄師4人のみ
	5	〃復													鉄の大阪の相場毎年記入	
	6															
	7		糸原五右衛門坂根奥鈩					鈩打立てる								鉄師ふえる
15	正徳5						天秤禁									
	6						〃復									
19	享保4		大峠	4	秋より床あり			鈩打立て吹立てる						鈩と経営一本化		
	7	買上止	矢入	4	秋より			〃	〃							
26	11	イ鉄方方式				鉄師－郡内では		ト蔵・杠・糸原・山根・桜井			郡外では田部ほか4家					杠又右衛門大阪へ
	17														松江の相場もあらわる	
36	元文元		瀧の谷			3月末照入 7月21日照落				涌きよし						
	5		イ大原		10	鉄涌かず本照床										
43	寛保3		大峠						吹き立てる							
45	延享2	ボ運上・鈩108匁余(3.7俵)に減														
	3		矢入											小割1,200ダ		
52	宝暦2		九澍						吹立て涌かず損							
54	4		三森原					鈩打ち 冬から春照らし入れ焼く								日本山海名産図絵
	11	イ鉄方条目														
48	寛延元		＞イ小峠	4	5～10ケ月											
53	宝暦3															
	3		＞イ杭木	3	〃 〃											
	6															
					65夜											
	7								始、終わるく							
			＞イ叶谷	11.2	5～10ケ月											
68	明和5								中よろし							
74	安永3		イ大原	16.1	12～13ケ月					よろし						
81	天明元		〃		13ケ月		天秤吹きのみへ・大別模へ向い			操業安定へ	235	34.1	7			
	2		〃		12	1ケ月照入						33.0	6.8			
	3	イ運上付加9朱	〃		13							34.2	6.9			
	4		〃		12							34.5	6.5			(鉄山秘書)
	5		〃		12							29.2	6.8	経営赤・銀38貫不足		
	6		〃			2ケ月照入										
96	寛政8	イ運上付加6朱増	イ雨川	1,921(大正10)まで	9～10ケ月											
	10				11											砂鉄年間10,038駄
	11															雨川村鉄穴御鈩と
1,803	15															砂鉄年間12,417駄
29	文政12		〃		12						185.06	36.9	5.3			
	13		〃		12					前期	198.11	38.88	5.95			本場½ 川口・川½
										後期	207.7	41.05	5.05			(川 ⅓)

㊟ ○ 鉄価　文政9年×3＝明治2(1,969)
米価　〃　×6＝　〃　－高騰　｝経営困難
運上銀　寛政8年　＝　〃

○ 鈩吹く（新らしく）　鈩吹立てる（再開）
鈩を打つ・鈩打立てる(高殿を)　鈩打替える(新しく高殿を)

○ 鈩名で宝暦4年までの杠家ならびに絲原家などの経営のもの一部省略してあり。

○ 主要記事の出典
ユ及び1,754までの記入なし　は　出雲　杠家資料による
ボ　は　〃　卜蔵家資料による
イ及び1,755以降記入なし　は　〃　絲原家資料による

○ 春は旧歴2.3.4月　秋は旧歴8.9.10月のこと。

分類にまで検討を行い、貴重な私案を発表されて、たたら遺跡研究へ一段の前進がなされた。殊に鍛冶炉に関してのこうした類型化と検討を聞いた筆者は若干の既知事項を整理させられ、極めて有意義であった。

本号増頁分の資料について

さてこれから本号3、4頁に掲載した資料をもとに、奥出雲東南部における砂鉄製鉄史の概略を述べる。この資料は11月26日島大での総会の講演に用い、さらに12月3日のたたら研究会の発表の資料に用いたものである（いずれも拙稿筆者によって）。

前の会では、筆者が原案構成などを担当したビデオテープで「よみがえる鉄穴鈩」を上映し、奥出雲の鉄師の鉄業経営の経済基盤について、新史料にもとづいて新しい見解を述べた。

後の会では、4頁の資料をもとに、たたら製鉄における炉床・高殿・砂鉄採取・たたら吹き技術の、奥出雲東部における発達史の根本に触れる新らしい史実の概略を発表したものである。さらに、その資料に続くものもほぼ分析を終えていて、今までの研究に一部再検討を加えて頂かねばならないと思っているものであるが、正式論文とする前にそこまでを本誌で、易しく一挙に連載することとした。

なお、従来鍛押法は三日間、銑押法は四日間の操業と規定され、さらに鍛押法は鋼、銑押法は銑を生産するとされているが、明治初期以前から徳川時代のたたら吹きの実際をそれでもって類推することは誤りを犯すことになることが明らかになった。

即ち、かつては四日押（銑押法、鍛押法といわない）が主体で、次第に三日押となってゆくのが発達過程で、木炭・砂鉄の消費量も鋼と銑の生産量もともに（各々の割合も）同じであるという事実のあることを、鉄師の経営記録（勘定書・統計書）で明らかにして行く予定である。

各国の風土記（3頁資料）から

考古学的には先にのべたように、山陰地方の製鉄遺跡は空白である。今、手元にある1,981年伯太町教育委員会「岩屋谷古墳群他発掘調査」の報告書でも、鉄滓・鉄器について厳密な科学的考察がなされていない。鳥取県東部の遺跡報告書も未刊である。

従って筆者の領域である文書の検討を中心としてゆく。

3頁の資料1風土記は、現存する風土記の中で鉄に関する記載のある三カ国のものである。時代は8世紀（716～733）で奈良時代（720年日本書紀完成ごろ）のもので——いずれも吹子（構造は明らかでないが）や、それが製錬（海綿状鉄つくり）や精錬（鍛冶鍛錬）とどう組合ったかもあとで推論をする予定である——文面に深入りせず要点をのべると、

播磨国風土記の讃容郡（さよのこほり）の鉄は、記載の上からも、その地の地質上からも、鉄鉱石であろうとされており、宍禾郡（しさわのこほり）のは川砂鉄（花崗岩系の風化により分離堆積）とされている。

常陸国風土記の香島郡（かしまのこほり）では、国司が技術者をすべて、浜砂鉄（川上から流出し、海水中から打上げられた）と、松炭を用いて製鉄し、剣を造っている。（伏苓・伏神とは松の下に生ずる塊状の薬草）

出雲国風土記の飯石郡（いいしのこほり）の鉄は川砂鉄である。仁多郡では各郷で鉄を産し、質が堅くて、雑の具を造るによかったとある。これも地質的にみて川砂鉄である。（勿論、今日いう鉄穴流しによる採取ではない。その方法はあとでくわしく

忘年句会嘱目吟抄

人の世の騒き他所に山眠る　岡田蹊花
川鴉雪の芦州に動かざり　高木白虹
雑木林つらなる梢ふるえ居り　田辺竹野
振りむけば命流るる年の暮　錦織富江
山肌をかくす一夜の雪化粧　峰石美代子
園児等は杵より声で餅を搗き　渡部夕峰
鉄燃やすこれより奥出雲の冬深く　浅野としお
秋うらら電話の孫が何か言う　江角英夫
点滴の心は重し木の葉髪　岡田麗水
死者生者明暗想う萩の庭　小川あきお
鰯雲たなびけば天守身をゆする　柏木侑
動き蜂いだきて八つ手の花盛り　門脇花子
濡れそぼて菊花まつわる花ばさみ　加納信子
刈り終えて一家だんらん夕餉の膳　新出谷一華
草の実を土間に払ふてかまち踏む　藤原樵夫

斐之上川柳十二月詠草

責任をとって男の値が上り　松浦亜以
泥試合平和な村へ後遺症　松田牛歩
税調の帳尻合わず脂汗　渡辺好之
冬一番紅葉一夜で白くなる　安部春恵
解散の万歳無理な笑顔でし　児玉哲呂
紅葉を縫うて連呼の車ゆく　久村美津
云ったとてせんないものをお、寒い　松浦木公
選挙戦終り静かな世にもどり　安部正子
寿命延び百まで生きれば国忘ぶ　若槻白馬
恙ない便り電話に孫の声　藤原のぼる
献立てに困り食べたいものを聞き　藤原千代子
のきなみに大根つらねた田舎風　真綿よし子
とどかない柿は鳥にやるときめ　横山まこと
うつむけば項に北風しむ師走　高木白虹

推論するが、川べりに堆積した砂鉄を集めたもので、筆者は香島郡と同じく、郡司級の統率によって技術者が鉄をつくったものと考えている。（拙書「奥出雲をさぐる」、島根県横田町誌筆者分担参照）

鉄堅くしての解釈は、今日真砂砂鉄地帯であったから、とけにくく、また鍛錬の結果堅い鉄が出来たと解釈すべきか、明らかでない。三処、布勢両郷方面（郡北部）は地質的には赤目砂鉄が多く、飯石郡も同様である。次に「雑の具」は今日いう雑具（農具も含めて）と解釈するより、加藤義成説をとり、くさぐさのもの、即ち種々の器具と解すべきである。器具も庶民生活用品類はなく、（勿論鍋釜などをつくる時代ではない。これらが一般庶民に普及し出したのは、徳川時代に入ってしばらくしてからであって、それまでは土鍋時代である。）農具の鋤鍬も木製が主体で、時代がずっと下ってから次第に先がけに鉄が用いられはじめ出したのであり、それらの農具も郡司や郡司級豪族の所有になっていたものと考えられている。

鉄の生産量は技術的にも低くて少なく、それからの製品も官の用にたつものが製作され、しかもそれは貢納されて官人に給せられるのがほとんどであった。それは風土記と同時代の全国各地の遺跡で出土した農具の状況、出雲国風土記時代の国庁跡からの出土物などや、その頃の全国的な貢納品の記載をしめす木簡の検討からもいえるのである。

さらに、出雲国風土記によれば、意宇・神門・熊谷の三軍団があった。すでに成立していた大宝令（701）の軍防令には、その内容が詳しく規定されていて、平時には訓練を積んで非常に備え、戦時には非常編成をとって防衛に当った。（詳細は加藤義成著「修訂風土記時代の出雲」参照）

職員令から推定すると、意宇・神門は大軍団、熊谷（奥出雲三郡の接点地）は中軍団であって、平時は兵員の半数が常駐して訓練をうけていた。その数を計算すると、意宇は歩騎各600人、神門は歩騎で1,000人、熊谷は800人程度となる。この装備についても令に詳しく、軍馬・食糧はもとより兵器資材もおびただしい数である。この制度は極めて厳正に守られたものであることは、佐倉の歴史民俗博物館に展示されている、出雲国の古文書と解説にも明らかである。

また軍馬を養う牧（牧場で大根島に）、烽（のろしの施設）、戍（国境警備の駐兵所）などのくわしい令もあって、現存するものでも19種25巻がある。

兵器に関するものも数冊あるが、その中から鉄製品をあげてみると、瓮（瓶）・鎌は兵5人に一つ、剉碓・手鋸は隊（50人）に一つ、斧・鑿・鉗・太刀・刀子は各兵に与えられたから、その数は大量であり、これらの調製に向けねばならなかったから、全量が少ない鉄材の用途はせまかった。尚、出雲国の国造が神賀詞を奏上の折に献上した金装横刀・鏡なども造られている。

これに準じて地方豪族の古墳から出土するように、鉄剣・鉄鏃の製作もあり、宮殿・寺院建築の地方普及によって消耗工具（横引鋸・やりがんな・のみ）のおびただしい消耗の補給もあったから、鉄の使用は庶民の生活とは縁の薄いものであった。

延喜式（資料2）は、828年ごろ（平安初期・畿内に班田を実施・空海は学校創立）の鉄1廷（10斤）を求めるには、直稲（単位束）をいくら必要としたかを国別に示したものである。風土記の時代と100年も距っていない時代であるが、全国の各国で生産されている。今日と違い技術の伝播は極めて緩慢な時代であったことを考えても、風土記時代にはすでに全国各地で製鉄が行われていたことは確実である。

日本書記によれば、延喜式の成立の288年前（天智天皇）に近江・播磨で鉄鉱石を用いて鉄がつくられており、和銅年間（708）朝廷に鋳物師が置かれている。8世紀前期には近畿・中国が鉄を貢納し、それが官人に給与されているから生産は活発であった。関東はやゝおくれて8世紀後期である。

この図から生産量の多い国が安価であったことが推定できる。4束は出雲・石見・隠岐・安芸で、大陸からの技術伝来の古さと経験の集積度、従って炉や送風等の進歩状況、砂鉄の質にもよったであろうし、国司・郡司やそれら級の豪族の支配力、開拓地造成の難易（地質・地形）・降雨量と森林の成育・河川と地形などの諸問題もからんでいたであろうが、これらは今後出土するであろう諸資料の形態のみでなく、科学的な分析などによる解明によって総合的に判断されねばならない。

しかし、今のところでも出雲が、わが国鉄文化の発祥の地であるとすることができないことは明らかである。

（横田史談会　高橋一郎稿）

松江・岡田山古墳出土の円頭大刀に銘文あり

本文中で、県内の出土品中の鉄関係物についての関心の薄いこと（外見のみ重視）を指摘していたが、この度「保存上」の安全性にねらいがあったとはいえ、銘文が現われたことは喜びにたえない。しかも氏姓制度の解明が幾つかの見解に分れていたのに、有力な論拠があらわれたこと、また中央王朝と出雲王朝との関連の解明、出雲国風土記研究の深化にも重要な一資料を提供すると共に、出雲国風土記の価値も更に加わったものと思う。

本論文の主題は鉄の製法解明であるが、刀身は法上許されぬとも是非、錆による原料鉄解明によって古代史に光をあてられたい。

あとがき

次号からは、尼子氏の抬頭期に抵抗し、さらにその衰退をすすめ、仁多郡を護持した三沢氏の物語を併載します。

なお、「200字の地域文化教育随想」「あすのため」もはじめます。

会員配布一部百五十円／六九九—一六　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎　頒布／横田史談会　発行／奥出雲文協　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 106 号
（2月号）
昭和59. 2. 4
奥出雲編集集団

奥出雲を護持するため尼子氏の抬頭に抵抗し、その衰退に加担した

仁多郡西部の地頭飯島三沢氏物語①

尼子氏一辺倒の戦国史を修正するため、地方における地方を明らかにして諸将の動きを加えて、戦国史を豊かにしたい。幸に若い研究者の研究成果に勇気づけられ易しく連載することとした。（諸資料出典はいずれ専門誌にのせる論文にゆずる。文中の太字の人名・地名は、東部奥出雲に関係の深いもの）

宇多源氏佐々木氏の末流が京極氏・尼子氏

尼子氏は京極氏の分れで近江尼子庄（中部湖東）に住んだのでこう呼称した。京極氏は佐々木京極氏とも呼ばれ、近江源氏（宇多源氏で近江に住む）佐々木氏の流れである。

①成頼が近江国篠笥（ささき）郷（現安土町）が庄園化して佐々木庄が成立して、しばらくした十一世紀初め（平安中期）居住してから源姓から佐々木姓となった。⑤秀義は平治の乱ののち失脚し、相伝の佐々木庄は没収された。のち東国に下り治承四年（1180）源頼朝挙兵にあたり佐々木庄に復し、のち平家追討に大功をあげ、その恩賞で西国10数カ国の守護を得て子孫が繁栄した。そこでこの一門の宇多源氏は近江源氏と呼ばれるようになった。⑥定綱の嫡男の広綱は承久の乱（1221）に京方に味方したため、近江守護職は弟の信綱へ移った。定綱の弟義清は出雲、隠岐の守護に任ぜられ、鎌倉時代を通じてこの地方の各地に繁栄し、地名をとって姓を変えた（系図に主なもの）

近江佐々木氏は幕府の職柄京都にも居を構えたので、地名をとってさらに、六角氏と京極氏とに分れ、**坂田郡**ほか江北六郡を京極氏が、南近江半分を六角氏がそれぞれ分有した。南北朝時代（1336～1392）の代表的人物道誉（高氏で貞宗の跡をつぐ）があらわれ、その孫が**高詮**であり、その弟高久が尼子庄（**犬上郡**甲良庄内のもと尼子郷）に住んだ。

高詮は近江北部半国の守護のほか、出雲・隠岐の守護となった。京極氏所有の多くの所領の中で甲良庄が最もよいとされ、特に尼子郷は最良の在所と高氏（道誉）の時から思われていた。

その尼子郷を種々の経緯を経て（米原正義著「出雲尼子一族」を）、弟高久が尼子庄として領し尼子氏と称したのである。

さて京極道誉の時代のはじめ出雲の守護は⑦塩冶高貞であった。高貞は建武中興にあたり南朝方で功をたて、後醍醐天皇から美しい官女を妻に賜わった。これを奪おうとした尊氏の執事高師直の讒言で京都を出てたが、山名**時氏**・**師義**父子に追撃され宍道で妻の死を知り、腹を切って果て遂に滅亡した。時に暦応4年4月（1341）。これより前延元元年（1336）時氏は名和長年の戦死後尊氏の命で因幡、伯耆にも勢力をのばしていて、この事件の功で両国の守護に任ぜられた。

出雲国守護はその二年後の康永2年（1343）に佐々木氏の嫡流京極高氏が任ぜられている。もと高氏は鎌倉幕府では北条高時に属していたが、のち尊氏の権臣となり、この時は若狭・近江の守護にも任ぜられてた。横田庄―このころは北朝仙洞御料所―へは、その代官として**安部氏**が北元徳2年（1334）に来住した（横田町誌）。

やがて道誉は尊氏より、北貞和元年（1346）4月、近江甲良庄の地頭職を得（この庄に尼子郷がある）、文和3年（1357）出雲富田庄の下司職（庄園管理の実務者のちの広瀬）に任ぜられている。

出雲守護に任ぜられた道誉は、吉田厳覚を出雲の守護代として国政を司らせた（系図参照）。ところが塩冶高貞を討滅したのは山名時氏・師義父子であったため、出雲国人は早くから隣国因幡、伯耆に勢力を張っていたことも合わせて、山名氏の実力を認めざるを得なかった。

このことは横田庄（このころは京都御所領に属する時）をみることによって、出雲国内の情勢も判断できるのである。

横田庄は尊氏の勢力下にあり直接の支配は配下で伯耆に進出していた山名時氏の手にあった。その代官**良円**は時氏を笠にきて、北朝仙洞御料所横田庄で押妨をしていた。（岩屋寺文書北康永元年1342・仝3年文書）その後混乱は続き北貞和3（1347）には10通北観応元年（1350）にも時氏宛の院宣が出された。尊氏また西国に走っていた直冬討代に腐心していたので岩屋寺に願文をよせている。なお師直師泰誅伐に関する軍忠状がこの年、**飯島**（三沢）、**諏訪部**（三刀屋）両氏ほかに、尊氏より出されている。

一方尊氏直義兄弟の不仲はおさまり、尊氏は南朝に帰順したが間もなく（北観応3 1352）弟を殺し争乱は続いた。こうした情勢は地方にも影響を与え、出雲地方の各地の荘園に対する濫妨も続発し、中央の権威の失墜と戦国武士の登場が出現しだしていた。

北観応3年（文和元）の伯耆守護山名時氏の子師義の制札が岩屋寺にある。

出雲における山名・京極の対立

これから類推すると出雲に於ける支配力は山名方が強かったと考えられる。そこで文和元年（北観応3 1352）所領の問題から道誉と時氏父子の仲がいよいよ悪化し、師義は伯耆に帰り、父

仁多郡西部の地頭飯島三沢氏①・奥出雲たたら製鉄史②・川柳・短歌・俳句

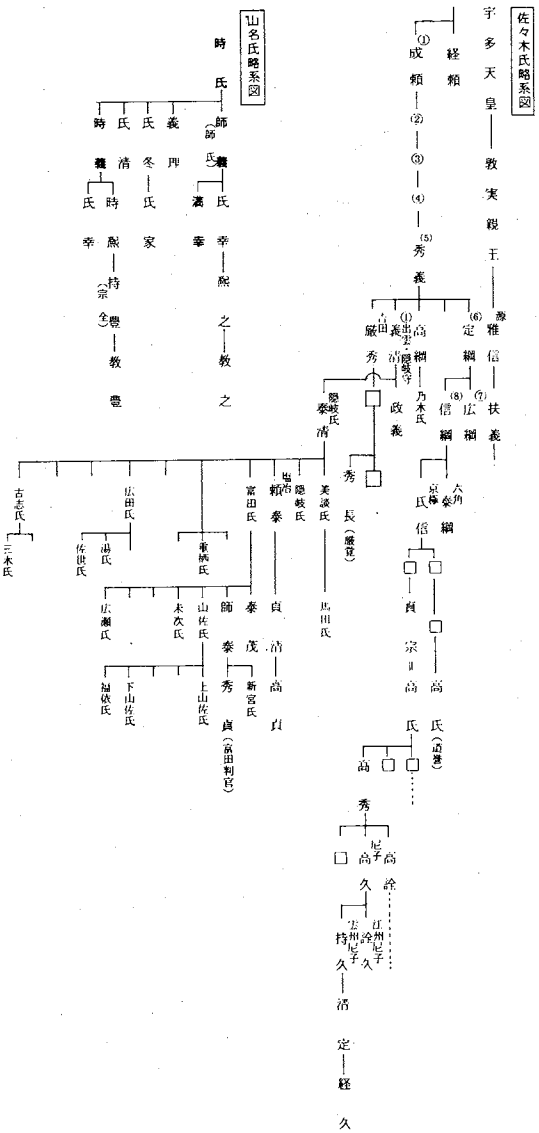
時氏とともに尊氏に叛旗をひるがえし(文和2)、吉田厳覚を追放して南朝に降り、塩冶頼泰の弟義泰の系譜につらなる富田秀貞(系図参照)を誘って、出雲の目代(代官・守護代)とした。

「出雲国守護次第」では「南帝より守護職に補せらる」とある(横田庄はこのころは一貫して北朝系であった。横田町誌参照)ことから、南北両朝からそれぞれ任ぜられたと見る見解もある。すると出雲にも南北朝の対立があったことになる。仁多郡内に於ても横田庄は北朝系、北の三処庄は南朝系で、対立にもまきこまれていた(横田町誌参照)

時氏父子は北朝に叛した文和2年と全4年の二回にわたり京都に乱入し、北朝尊氏方の一大強敵となった。やがて北貞治2(1363)9月以前、北朝の誘いにのって、これまで奪っていた因幡、伯耆、丹波、丹後、美作五カ国の守護職を宛行われるという条件で足利二代将軍義詮に帰順した。和睦であった。(出雲は入っていないが別系譜では、但馬・因幡・伯耆・丹波・美作の五ケ国を賜り、出雲・丹後の守護となるとあるという。——岩屋寺文書からするとこれの肯定が可能である。そして貞治5年(1366)8月10日、義詮が道誉の出雲守護を「元の如く補任」と復任している文書と符合する)

ばさら大名

京極高氏は21才で剃髪し道誉と号した延元4年(1361)に飛弾の守護職も得た。茶・香・花その他の芸道にも見識をもち、歌道を好み、連歌では一時代を画する功労者である一方、ばさら(婆娑羅=はでにみえをはること・だて、の室町時代の流行語)の傑物で、傍若無人の振舞いは有名で、変革期の一中心人物とされている。(筆者・高橋一郎)



奥出雲のたたら製鉄史②

より道—日本古代製鉄遺跡研究(土佐論文)の紹介と奥出雲からの見解 ①

日本書記にあらわれる6世紀以前の記事には、史料的に疑問の余地が多いといわれるとはいえ、半島から鉄鋌や鉄製品を輸入した記事がある。前号に記載したように、考古学上で想定し、冶金学上でも推定している例が多くなってきて、鉄鋌舶載そして国内加工鍛造の存在は確実となり、文献史料を裏付けることになっている。

やがて、7世紀半ばになると皇極元年(642)蘇我蝦夷が百済の使者に良馬一匹と鉄二〇挺を与えている。そして斉明6年(660)の阿部比羅夫の粛慎(中国古代の北方民族の一史書にみえる夷狄の一つ、今の沿海州方面におけるツングース族)遠征の記事の中に兵鉄が贈答品として使われたとある。これは国内しかも畿内で生産されたとも考える人もある。そして天智天皇の時(670)に近江・播摩で鉄鉱石を用いられたという記事があらわれる。そして前号の8世紀前期の「常陸国風土記」に続くのである。——古代は鍛冶が鉄をつくった可能性が強いという説に加担したい。後述で——そしてその他の国の風土記、日本書紀、延喜式・続日本紀、平城宮木簡その他の文献を研究した人によると、それらの資料からみると、この8世紀には、近畿(近江・丹波)・山陽(播磨・美作・備前・備後)・山陰(出雲)を中心に製鉄が行われている。

やがて前号でみたように、9世紀初めの「延喜式」によれば全国的に生産され、東北と土佐をのぞくとほかの国々は、4〜7束の間に入っていて、畿内や中国地方が中心という傾向はなくなり、全国的なほゞ平均的鉄生産となる（「古代日本の鉄と社会」福田豊彦論文参照）。したがって関東は前号でのべたように、8世紀後半から活発になって、この時代は全国的にほぼ平均的となったと考えられる。

この間の製鉄の原鉱は鉄鉱石・砂鉄どちらが先であるかは明らかではないが、天智9年（670）の記事や、美作での鉄穴に関する説話—これを日本霊異記（810〜824）は8世紀半ばとし、扶桑略記（平安後期）は8世紀初頭とする—のいずれも、鉄鉱石を原料とすると考えられるし、播磨国風土記の中の記事の一つもそれであるとすると、原鉱を砂鉄一本で押し通すことは、文献的にも誤まりとなる。しかし国内での鉄鉱石資源は地質学的にみても少ない反面、砂鉄産地は全国各地にあるから、急速に鉄生産が一世紀の間に、全国的に拡がったことを考えることは容易である。

こゝでつけ加えておくことは前号資料2の延喜式において、各国々が負担する税—調・庸—に鉄・鉄製品の納入国とされていない国は、早くから鉄を生産した近江・播磨や、交易雑物の鉄価格で四束という最低価格に定められた国で、出雲・石見・隠岐・安芸が、鉄・鍬を納めていないことである。後者の四カ国は低チタンの砂鉄資源に恵まれていて、生産時における収率も良くて、他国に比べて量産も進んでいて安かったから、税として納めさせないで、その安い鉄を畿内の市場に交易品として供給させたためであろうという見解が有力である（原島礼二論文）。これは当時としての経済状態にもとづく、当時としては高度の政治的判断であるとすると、律令国家の成熟をしめす一端であることとなる。これらのことは次の考古学的立場の二人の研究と符合するものである。そこで前号の繰り返えしになることを再度述べた。

日本古代製鉄遺跡分類—炉型中心に

こゝで先へ進めるにあたってもう一つ触れておきたいのは、土佐雅彦論文である。本誌読者は一般的地方のしかもたたらの古今の一中心地の歴史愛好者であるので、あえてこれらの方々に是非とも一読しておいて頂きたい、珍らしい好論文であるので、論者の了解を得て、全般にわたり要点を次号にもわたるが紹介することとした。日刀保たたらの操業や、戦中以前の村下の操業追憶談、さらに当地方のたたら関係古記録とも関連するところが多い。そこで筆者の管見する限り、それに基づく見解の補足や意見も加えてみたいと思う。（細字部分はそれである）

その論文は広島大学卒業論文をもとに、「たたら研究24号」に載せられたものである。

この拙稿の中心主題は奥出雲の近世以降の製鉄史である。筆者には重荷であるが、社会経済史的即面からする鉄の生産と流通の発達史と、技術の諸工程の解明をからみ合わせて進めたい。古代中世の考古学者からは、近世以降のたたら製鉄はよく知られていると言われるが、諸史資料の前にたたずむと、まだまだ不明な点が多い。これを明らかにすることは、中世・古代の考察に役立つことも多い。「日刀保たたら」もその伝統をついで発展した今日的技術であるが、解明もこれからである。

横田庄の中世の資料は、中央地方の社寺、公卿や当地方土豪の記録など比較的数に恵まれているが、鉄に関するものは側面的解明に役立つ二〜三のもののみである。検地帳と切図、地名の検討も深まっていない。国営農地開発事業によって、また水田圃場整備によって地形が変貌しつゝあって、遺物のあると思われる地も幾多失われているであろう。当地方で古代中世の生産遺跡があったと見られる土地は、大方が近世以降の鉄穴流しによって失われているが、いまに失われゆく運命の中にある。また第二の喪失期を迎え、永久

たたらによる生産技術は、大陸から影響の違い、原鉱の違いによって、古代から単一形式の製錬炉そして操業法ではない。近世以降わが国の主要産鉄国の大半を占める中国地方の特色も顕著であり、それも山陰と山陽との間にも、さらにそれぞれの地方に於ても差がある。発掘調

斐之上川柳正月抄

客寄せの門松やけに早く出し　児玉哲呂
門松に期待をこめて初春を待つ　藤原のる
門松をくぐった数ほどしわがふえ　松浦木公
門松を明治大正めてたがり　藤原千代子
春を呼ぶ門松に咲く梅一輪　藤原ユキ子
門松を派手に会社の大玄関　太田亀甲
豊作と幸せ祈り門松を　安部正子
晴姿門松バックの初写し　松田牛歩
店先の門松が客を呼んでいる　松浦亜以
幾度か門松過ぎて丸い女（ひと）　真綿よし子
手毬つき門松たてた世が恋し　安部春恵
門松もなき裏町の家並さび　高木白虹
門松の年輪過去を知って居る　若槻白馬
門松も笑って迎える千鳥足　渡辺好之

前号の訂正　6頁4段9行　283×……158に

査で知られる如く、生産の技術は伝承秘伝であることゝ、炉の本体は破壊されるのが作業工程上当然のこととなっていて、残存するものは炉底部・炉床下の構造・炉壁の一部である。比較的多量に残る鉱滓も前号で紹介した通り種類が多い。流出滓にしても、コモリ・コモリつぎ、上り、下りの諸段階もある。たたら炉で生産した粗鉄を精錬する大鍛冶屋における、左下場と本場にそれぞれ鍛冶滓がある。

（こゝでは、たたらでの製錬段階のたたら滓を鉱滓、大鍛冶での精錬段階のかぢや滓を鉄滓と呼ぶわけ方で進める）

またたたらに於て原鉱の砂鉄（鉄鉱石もある）から、粗鉄（還元鉄）をとり出すまでの化学的過程（製錬炉炉内反応）を冶金学的に解析する理論的・方法論的方法も十分でないという。製銑についてはまずまずとしても、鋼をつくりその中に粗鋼（和鋼今日玉鋼と呼ぶ。）を生み出すことはさらに明らかでないという。

なお古代遺跡については、年代を推定するための土器等の生活遺物を交えないものもあるが、幸にして最近は数種の自然科学的年代測定法が加わるようになった。（以下土佐論文要約）

製鉄遺跡と製錬炉の分類

全国各地で奈良平安時代を中心とする古代遺跡は60例以上にのぼるが、そのうちの45遺跡123基の製鉄炉および痕跡をもとにして論じてある。その例も地域的にも片寄りをみせず、各地で自給的生産が行われたことを裏付けている（この論文では既述の如く国司・郡司級の主導下かどうかまでは追求してない）。そして各地がそれぞれかなり集中的に分布していて、砂鉄を中心とする原鉱の所在と対応しているという。

勿論、製錬炉もその遺跡の中心であるが、それに伴って消費の多かった原鉱採掘場、木炭製造場、炉壁粘土採掘場も、運搬の問題を考えると、炉はそれら産地と有機的な場所に設けられていることは、当地方の近世中期までの実情で明らかである。

種々の条件（殆んど炉は破壊されているが、残る類型のものもあるし、廃棄された炉型の分析から復元その他のこと）を考えて分類されたものである。

（以下当地方を考察するに必要な点はやゝくわしく述べる。）

（筆者　高橋）

想い中味は

1位は99.7%のフィリッピン人アメリカ人は95.4%、最下位は77.3%の日本人——これは「余暇開発センター」による世界の先進・中進・発展途上の13カ国の価値観調査の中で、神の存在を信ずるとした者の割合である。

今年の1月は政治的ラジカリズム（根源主義）の昂揚した「東大砦」斗争から15年目であったが、それもそれ以来凋落していった。それと歩調をあわせるように宗教志向が高まったという。それをNHKの「日本人の意識調査」でみると、神仏の信仰、墓参りは年寄りに多いが、奇跡とか、易とか、超能力とか、おみくじ、星占い、御利益祈願は、若い者ほど多くなり、

調査年	1973	1978
10代後半	28%	48
20代前半	19	32

と急増しているという。現在はさらに高いに違いない。当地での話題傾向面でも急増している。松江の手相人相師？も急増している。新宿で札一枚ふん発して、手相はおいて世相を聞いた。

今は若い人がねらいだと。

（蓬）

きさらぎの歌

真夜しばし虫の時雨をききいしが眠るともなく眠りていたり　常盤　はるまさ
霜朝も雪の朝も足袋はかずカバン鳴らして孫は駈けゆく　野村　節子
釣りできぬ日々をかこちて冬籠り雪に埋れしダムを想ひぬ　伊藤　萩雨
雪の道わだちの中に向き合いて年の始めの挨拶交わす　児玉　敏郎
娘よ孫よみそかの夜にいきいきとその声きけり遠き国より　岡田　時子
こぞの秋主人亡くせし玄関に菊花寂しく壺に残れり　小早川　恵子
わが手相信じがたくも起伏あるこの一年のやすらげぬ日々　宮廻　愛子
初春にまれなる積雪堀りゆきて三本程の若菜迎へり　藤原　信子
ひたすらに無償に生きんと念ずれど吾あらがいて弱点さらす　松浦　愛子
縫ひとめて糸を前歯でかみ切りし沓き日もあり　義歯をわびしむ　佐藤　喜代子
群雀飛び立つ音のどよめきに手元離れて子牛馳けゆく　景山　悦子
忘却の波に消えゆく若き日よ六十路の鏡に思ひ出づる日　永井　弥生
還らざる人を憶ふは人の世のむなしき運命か友の死を聞く　安部　夕波

しばぐり一月句会抄

マスクして物言う事を疎く住む　浅野　としお
落ち尽し彩を収めて山眠る　岡田　蹊花
点滴の落つる音なき夜長かな　岡田　麗水
冬の夜や老爺と語る過去ごと　小川　あきお
明るさが哀しき通夜の冬座敷　門脇　花子
夜濯ぎの竿先寒星またたきぬ　加納　信子
残り陽に絽る枯蔦朶温くみ合い　高木　白虹
ふもとまで錦の紅葉雪に枯る　田辺　竹野
落葉路木洩れ陽肩に遊ばせて　新出谷　一華
病棟の小窓師走の風走る　錦織　富江
頬被りほどけ易くて峡に生く　藤原　樵夫
食い違う意見の背を這うすき間風　峯石　美代子
大夕映身は波任せ浮寝鳥　渡部　夕峰

会員配布一部百五十円／六九九—一六　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎　頒布／横田史談会　発行／奥出雲文協　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第107号
（3月号）
昭和59. 3. 3
奥出雲編集集団

奥出雲を護持するため尼子氏の抬頭に抵抗し、その衰退に加担した

仁多郡西部の地頭飯島三沢氏物語②

出雲は山名氏の勢力が強かった

道誉の子高秀が守護職をついだと「出雲国守護之次第」にのっており、「大社文書」「北島文書」によれば、北応安元年（1363）ごろが確められるという（高秀は北明徳2年（1391）10月、61才で近江の堅田で討死）。しかし在任期間は短かかった。すなわち、

一方、山名時義は応安4年（1371）に没し、長子師義が継ぎ、間もなく永和2年（1376）に死し（全3年足利義満の制札が岩屋寺へ）、弟時義が承けた。このころ師義（師氏）の子**氏綱**（満綱）が将軍義満から馬木郷を受領し摂津の馬木郷より来住した（戦国争乱の中をこゝで生きぬいて、毛利氏に従い萩に移って藩士として仕える——山陰史談12、13号参照）。時義は山名一門の嫡統として、全4年但馬、和泉、紀伊に進出し、京極高秀が討死した年より12年前の康暦元年（1379）閏4月の康暦の政変（将軍を補佐して決断をもつ幕政改革をしていた管領細川頼之が、諸大名の反感から管領の座を追われ、斯波義将がこれに変った）のあと、さらに出雲・隠岐・備後を加えて11カ国となし、三管領につぐ四職の一人として勢力をあげていたのである。特に横田庄では北永徳2年（1382）ころ、山名氏の代官として本貫地丹後の石原庄から**石原氏**が来住して横領し、御料所代官安部氏は帰農した。全3年には時義は父師義の菩提を弔うため、岩屋寺の寺領を安堵し、北至徳2年（1386）には横田庄の一の宮馬場八幡宮遷宮の本願となっている。全4年岩屋寺に寺領の寄進をしているが、すでに山名一門の実権は師義の四男**満幸**に移っていた。

北康応元年（1390）三月には三管領とともに、それに並ぶ重臣として満幸は将軍義満の安芸厳島神社参拝に同行している。5月時義が没すると出雲守護は満幸に相伝された。7月満幸は円通寺殿（時義）の冥福を祈祷するため、岩屋寺に**下中村**（のちの角村、横田町村）から寺領を寄進した。

かくて山名一族は、全国66ケ国の六分の一にあたる11カ国を領し、地位も高い山陰の名門であって、わが権勢の拡大をめざす将軍足利義満（金閣寺建立者）はもとより、諸管領も西中国の雄、大内氏等も、目の上の瘤として脅威を感じはじめた。

将軍義満はにわかに露骨な山名一族の分裂策を展開しはじめた。時義の遺児二人（前号系図）は幕府の命を受けた同族の氏清・満幸らによって追討された。

この結果、氏清は丹波、和泉の守護の上に但馬を加え、満幸は丹後・出雲の上に伯耆、隠岐を加え一族の中で最も秀いでた。

そこで満幸は心もおごり、仙洞（上皇）御所領である当地横田庄を横領し、御所からの嘆願による幕府の指令もきかず、かえって一部荘民を扇動して抵抗した。

北明徳2年（1391）管領はふたたび細川頼之がなり幕政に参画すると、義満は追討した兄弟を許して、逆に満幸の出雲守護職を解易し丹後に追放し、満幸やその舅氏清を挑発する構えをみせた。山名一族は義満の思うつぼにはまり、山名方の足並も揃ないまゝにその年の暮12月、満幸・氏清の一部山名軍は京にせまり、晦日京都北西部の内野で激戦が繰りひろげられ、きわどいところで義満は氏清の討死と満幸の敗走で勝利を得ることができた。

くわしくは「明徳記」にゆずるが、戦乱の中での挿話の一つは、140年後の天文年間の岩屋寺再興の快傑僧**快円**とつながるものである。山名方の若党の中の家喜九郎が討死に前に、形見にとことづけた手紙をお守りとして生きぬいた哀話があるが、その子孫が快円である（奥出雲34号に）

明けて明徳3年正月4日の論功行賞の結果は、山名一族11カ国の所領の、山城・丹波・丹後・美作・和泉・紀伊はそれぞれの諸氏に、山名一族は時熙が但馬、氏幸は伯耆、氏家は因幡と三カ国の守護職としての領有と減り、出雲・隠岐は道誉の孫佐々木京極高詮の所領となった。この時、京極高詮は飛弾、近江半国の守護であって、それに二カ国を加えることになった。

守護地頭設置から明徳の乱までに出雲国内に成長した国人衆

次頁推移表（上）を見て頂けばわかるが、要点を説明しておきあとで詳述する。

12世紀初頭出雲守護近江源氏佐々木氏が来住以来、次第に一門が出雲国北部の西方（中間は宍道湖）、東方の肥沃地を領有し、14世紀末までの200年間にわたって、営々と努力を重ねて勢力を保持し続けている。

さらに幕府の直接間接、守護の被護をうけて、杵築大社、日御碕崎神社、佐陀神社が古来からの庶民信仰と多くの社領をもち、信仰面では守護に並ぶ権威を保持していた。またかつての石清水八幡宮の荘園八カ所が、武将の信仰を集めていたことも見逃がせない。特に横田庄は中世期末に近い天正18年（1590）まで領家の変遷はあったとはいえ、領家にとって良い荘園であった。

以上の所領（表のⒶⒷⒸ）の

仁多郡西部の地頭飯島三沢氏②・奥出雲たたら製鉄史②・川柳・短歌・俳句

出雲における国人衆成長推移表（上）

1 1,184（寿永4）— 平氏亡ぶ　諸国に守護地頭を置く。
2 1,192（建久3）— 源頼朝　征夷大将軍となり、鎌倉幕府創設する。

出雲・隠岐守護　①佐々木　義　清

若干の地頭あるも　不詳

3 1,221（承久3）— 承久の乱　京方敗れ後鳥羽上皇隠岐に遠流、西国3,000余の所領没収　そしてそのあとへ

新補地頭 を任命一出雲は信州以東の関東武士がほとんどで、しかも源氏諸流が多い。当地来住は早期のものと晩期のものとでは50〜70年の差あるが。

4 **1,271**（文永8）— **出　雲　守　護**　②佐々木（塩冶）泰清

この一門は出雲北部の肥沃な各地に土着繁栄する。

	（出雲西部）	（奥出雲）	（出雲東部）	所有地面積
Ⓐ守護一族	古志郷（28）　塩冶郷（101）　美談荘（44）	佐世郷（26）	乃木保・平浜別宮・富田荘・吉田庄・美保郷（47）（27）（99）（91）（34）	守護一族領計 521町歩
Ⓑ諸社領（主なもの）	杵築大社領（6ケ所又は345）　日御碕神社領（?）		佐陀神社 佐陀荘（280）　仝社 国屋郷（60）	有力神社領計 685＋?
Ⓒ北条氏領	神文社（?）　須佐郷（30）	横田荘（55）	竹矢郷（62）	六波羅探題 北条時輔領計 150
Ⓓ地頭領（上段出身 下段上以外の東国出身）	（出雲西部）（浜田郡）（神門郡） 泉、粟原　平賀 多胡　佐貫、片山、古荘 深田	（奥出雲）（飯石郡）（大原郡）（仁多郡） 諏訪部（21）　飯沼（22）中沢（24）　飯島（4.4）（三沢氏） 目黒、逸見　大井、神保、中郡、品川、伊比、土屋　神保、多胡　神保、法華堂 土屋	（出雲東部）（島根郡）（秋鹿郡）（意宇郡）（能義郡） 築沢　村上、大島、中沢 西条 佐島、中村、土屋　土屋、大蔵、椎名　多胡、成田、恩田　成田、横瀬、色部 中村、波谷、中村　郡須、土屋、金子　江戸、別府、相馬 甲斐、加茂、別府　二宮、松田	計　3,000
Ⓔ地頭領（出身地不明 承久の乱以前からの居住者）	若干（内朝山167）	若干（内 赤名氏50 来島80 三処9）	若　干	計700〜1,300

総計 5,000〜5,600町歩

5 **1,391**（明徳2）— 明徳の乱のころ

Ⓐ守護一族　地名を氏として↓ほとんどそのまゝ土着

古志　三木　塩冶　美談　湯
保知石　坪内　駒崎　高岡

野木　富士名　末次　広瀬　新宮　上山佐
野白　羽田井　高岡　富田　田原　福依　山佐

左の守護近江源氏佐々木流は22系

Ⓑ諸社群（主なもの）　仝　上　　仝　上

Ⓓ地頭群
Ⓔ地頭群　> 衰退・滅亡或は新しく来住定着などあるが成長して各地の有力国人衆となったのはこの中より出でる。

Ⓐ Ⓓ Ⓔで成長して有力国人衆となったものはⒶは200年　ⒹⒺは120〜160年の領内経営を基盤として領地を拡大している。

（註）文永8年の表は、千家文書「出雲国杵築大社御三月会相撲舞頭役結番事」による。
Ⓑ杵築大社領については　藤岡大拙（松江南校紀要4号「出雲大社領について」）の研究にある康永元年（1256）12郷345町3反を年代が近いので参考として記載
日御崎神社については　藤岡大拙（島根史学）の研究あれどこれより200年後のもの故記載せず、しかし杵築大社にかくれ勝ちであるが、浦（港）中心に勢力あり。
Ⓓ地頭領　山陰史談18号松尾慶三論文および仝16号拙稿による。

間の各地や、出雲の奥山間部に新補地頭（表のD）が配置され衰退するものもあったが、土着し成長するものが多かった。特に奥出雲では、各地頭の手腕もあったが、奥地という地理上も幸いし、産業上の特色もあって、急速な土着成長をした。即ち筆者の三沢、馬来両氏の探究の結果と、三刀屋、赤名両氏への探索と、奥出雲製鉄史の探究の結果（本誌別稿で詳述予定）は、出雲中世史では重視せねばならぬ問題だとの論拠を得た。

一方、小野文書（新修県史史料篇321頁）の康正2年の三通の中にある「尼子殿御代官三沢対島守殿」に限りない疑問をもっていたこと、尼子氏の家臣団の構成のわかる、近江国竹生島の宝厳寺への奉加帳および尼子氏の分限帳の分析による、その弱体性の認識（毛利氏のそれとの比較によっても）、さらに「陰徳太平記」「雲陽軍実記」の洗いなおしによる、出雲十旗（尼子十旗）説、文明18年富田城奪回劇、三沢討伐の山中の謀略劇も軍談ものにすぎることへの考察、また京極氏代官として来国以来、尼子登場までの70年間の空白に対する弁護論の空虚さによる疑問などが次々とあらわれ

奥出雲のたたら製鉄史②

新資料にもとずく、特集南部のその技術・経済・社会・文化の総合史より道 —土佐雅彦論文の要点紹介㊤—

A類（半地下式竪形炉）

「シャフト炉」「ポット炉」（家庭にあるポット型の意）といわれているもので、製錬炉は円筒状や方柱状をなし、炉断面に比べて炉高の高いもので、土地の斜面に炉体を組み込む点に特徴があって、程度によるが、炉体の多くが操業時のまゝ残存している。

炉体の斜面への組み込みの深いものを **A—I（菅ノ沢型）**といって、群馬県菅ノ沢遺跡を代表として、北関東を中心に各地に分布している。

炉頂・炉内の外に、炉の背部に上部孔と下部孔があって、後者は送風孔とも考察されている。

鉱滓分析では砂鉄で、奈良期末～平安期初頭とされる。

炉体の組み込みが浅く、ほとんど地上露出した、前の型の変型とみられる、**A—II（西浦北型）**があって、平担地にあって前代の住居跡群と切り合う型で14基もあって、基数を多くして量的拡大を求めたもので、11世紀前半以降とみられ、立地条件の変化もみることができるという。これも群馬、埼玉両県に分布する。

前二者より広い低面積をもち平面積が長楕円形ないし隅丸長方形状で、炉高が1m前後のもので、**A—III（大館森山・西原型）**がある。青森と熊本両県にあるもので、炉底は炉門に向って傾斜し、炉背上手に小孔があって送風孔と考えられるものもある。原鉱は砂鉄で、古代末～中世前期に集中するようである。

B類（長方形箱型炉）—炉底をかため、吹子送風施設進歩

炉床部の平面形が100×50cm程度の長方形の焼土部や堀り込みのあるもの。このうち斜面を断面「L」字形にカット（切る）して作業平担面を整地することが多く、そのまゝ整地層上を炉床としたり、粘土をはって床としたもので、兵庫県一例と岡山県キナザコほか三例と中国山地の一部にみられる一群を**B—I（キナザコ型）**と呼ぶ、送風方法は炉底部より15cm上方を下面に向かって6度程度下降しながら、放射状に開いていく保土穴が、12cm間隔で3カ所あって、3孔の交叉する炉長辺の70cm以上離れた場所から、一つの吹子で分配送風したことが考えられる。そして炉長辺に作業台と認められる場所があって、吹子を設置したと考察されていて、原鉱は砂鉄である。これは近世たたら炉の重要な要素の原型をもつ、砂鉄還元用製錬鉄と推定され、6世紀末～7世紀初頭の古墳時代後期には出現し、奈良平安時代を通じて確実に連続していくことが明らかになった。これが近世たたら炉で異常に発達する地下構造につながる。それも当地では幕末期で、地下構造の記録と勘定書から知ることのできる操業技術の躍進とで明らかにできる。

しかしキナザコ製鉄遺跡で製錬周辺の整地層上に鉱滓を敷きつめてあったり、他の場所では炉周辺の堀り込みに、炉壁片・鉱滓などをつめこんで防湿施設としたと推定される程度のことがあるのである。

なおこれに似て炉床が堀り込みとして確認されている **B—II（石生天王南型）**もある。堀り込み内に後世の防湿施設の発達過程が考えられないかとしている。

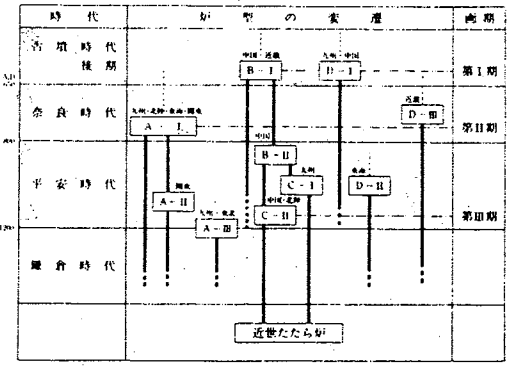
C類（原たたら炉）

C—I（門田型）—地下構造

門田遺跡では中央部直方体状の堀り込みは強く焼かれて、側壁面に粘土を貼りつけ、底部にはまず木炭を敷きつめ、その焼土・鉱滓などをつめこんで防湿施設としている。この上に炉本体が築かれたものと思われる。

たが、筆者の力では適確な論証に導くことが出来なかった。ところが昨年夏以来今岡典和論文（県中世史研発表、山陰史談19号、史林66巻4号）によって、康正三年文書の在来の解読の誤りの指摘も加えて、70年間が空白に近いものであったことを知り、私はこの連載を始めた。

第2表　製錬炉形変遷概念図



他の遺跡（丸ケ谷）では、内部に粉炭をつめこんで防湿施設としているものもあり、炉床部内法平面は80×40(円田)～30丸ケ谷cm前後とみられ、後者では炉長辺に沿うように2対づつ吹子を設置したとみられる方形の堀り込みが知られるが、あまり明らかでない。

原鉱はいずれも砂鉄を使用、平安時代のものと考えられる。

これが一層明らかな地下構造と考えられ、遺構がかなり大規模になるものに、**C－Ⅱ（大矢型）**―作業面が拡大し溝と地下構成の出現―がある。広島県大矢第5たたら・石川県天王山第1号製鉄址で、炉内容量も拡大したものと考えられる。

前者は整形した平担地の中央部に楕円形状（4×2.5m）に溝（巾0.6×深さ0.4m）をめぐらせ、その中央に舟底状（3.4×1.3m・深さ0.5m）の施設を堀り込んで、内部は強く焼かれており、なかで薪炭を燃やし乾燥させたであろう。舟底状の施設には粉炭が充填されている。これを近世たたらの炉の「床釣り施設」と対応させると、周囲をめぐる溝が小舟に、舟底状の施設が本床（大舟）に相当し、この地下構造の上部に製錬炉が築かれたものと考えうる可能性があり、地下構造が発達している過程を示すものとも考えられる。なお炉長辺に沿うように少なくとも一方には、鞴床状の土台がみられる。

後者では斜面を整形した平担面上を長方形状（4.3×1.5m深さ0.35）に堀り込み、底面に約10cmの厚さで木炭をつき固めている。その上面にやゝ狭い範囲に、厚さ25cmにわたり舟型状で上面のややくぼんだ状態に粘土を敷きかためている。焼かれた程度は不明であるが、この上部に炉壁片・焼土などが散乱しているところをみれば、やはり地下構造と考えられ、前者と基本的には同質の性格・構造とみることができ、この上部には、内法平面2～1m程度の製錬炉を想定することができて、**B類、C－Ⅱ類**より炉内容がかなり拡大している。原鉱は砂鉄、時期は12世紀以降と考えられ、より中世的な製錬炉型とみてよいであろう。

斐之上川柳二月抄

門松に留守番任せて初詣　渡辺好之
軸替えて一人見ている隠居部屋　太田亀甲
留守番は任しておけと鍵の空　若槻白馬
冬の山日射をうけて銀の花　安部春恵
今日も雪隣がだんだん遠くなり　松浦木公
大寒波狂った世となり地も空も　真綿よし子
災害は忘れもせんのにやってくる　佐佐木千世
静かなら静かで雪を心配し　児玉哲呂
甲高いスキーお嬢の声が邪魔　高木白虹
兄弟（おとどい）がかまくらづくりに日暮れまで　久村美津
雪降れど骨を休めるよいチャンス　安部正子
雪重く心細さが増すきしみ　藤原のぼる

早春のうた

雪五尺汗し堀りたる聖護院のみずみずしさに手を触れにけり　常盤はるまさ
如月の雪に籠りてちぎり絵の水仙花貼りつつ春を待ちおり　野村節子
屋根にあがれば隣の人も雪おろし晴れ間仰ぎつつ労い交す　児玉敏郎
出稼ぎに行きたる息子を案じつつ豪雪の日をただ耐えており　佐藤喜代子
深々と雪ぼこ冠る藁屋根の日昏れの窓に灯りゆれおり　岡田時子
雪かむる柿の実しばしついばみて鵯はすばやく林へ飛びぬ　小早川恵子
吾が視野は限りあるなりガラス窓点滴うけつつ冬の雲みる　宮廻愛子
ひねもすをゲートボールに過すといふ姉は戦争未亡人なりて　藤原信子
陽の落ちて街路灯にひたすら頼りつつ冬菜植えゆく木枯の中　景山悦子
新春の平安神宮の参道に日赤献血車はしきりに呼びかく　伊藤萩雨
智恵子抄をわれに残して征きしまま還らぬ君よ山茶花の咲く　永井弥生
風邪病みし昼の眠りの夢覚めて鉢の椿は窓辺に紅し　安部夕波

しばぐり二月句会抄

牛の息肩越しに来る冬の厩　浅野としお
葦揺れて鴨羽振りよく飛び翔ちぬ　岡田蹊花
逝く年を静かに硯洗いたり　小川あきお
年毎に餅数ふえて年用意　門脇花子
新年の挨拶孫の電話より　加納信子
雪おろし余人は知らぬ熱つ番茶　高木白虹
年迎うどの子も住まぬにしめかざり　田辺竹野
部屋毎に彩りそえし初暦　錦織富江
雪深く住むも運命（さだめ）か峡に生く　新出谷一華
冬至日の厩舎去らざる迷い猫　藤原樵夫
降りしきる雪に広げし傘おくる　峯石美代子
教え子の顔も見えてる出初式　渡部夕峰

会員配布一部百五十円／六九一二六　島根県仁多郡横田町一〇六一／二　編集発行責任者・高橋一郎　頒布／横田史談会　発行／奥出雲文協　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 108 号
（4月号）
昭和59. 4. 7
奥出雲編集集団

奥出雲のたたら製鉄史④

新資料にもとづく、特に東南部のその技術・経済・社会・文化の総合史

より道—土佐雅彦論文の要点紹介㊥—

D類（炉型未詳製錬炉）

炉型不明であるが、円形・楕円形・方形などの焼土部や、浅い堀りこみとしての炉底・炉床部のものである。

D—Ⅱ（大牟田型）——福岡県5・広島県1で、広島県のものは製鉄炉周辺の諸施設も整備され、廃棄鉄滓の量からも、他と比べてかなり大規模とみられる。大牟田のものは7世紀初頭築造されたとみられる古墳の下で、発掘されたもので、6世紀代に操業されたものとみられ、古墳時代との関係に意義がある。

D—Ⅲ（日詰型）——福島・秋田・静岡にあって、**A—Ⅰ・Ⅱ類**に共通する点の多いもの、静岡県の日詰と金山の遺跡から羽口が検出されており、原鉱は砂鉄、時期は平安中〜後期

D—Ⅲ（野路小野山型）——滋賀県にあるもので、堀りこみ内を防湿加工した上に製鉄炉があったとみられ、5基以上のそれと、製錬もしくは小鍛冶跡、岩窯などが堀立柱建物群とあらわれている。鉱滓は鉄鉱石が想定され、8世紀前半〜中葉と考えられる。

D—Ⅳ（祝子（ほうり）型）——岡山県では傾斜面に組みこまれて築かれたり、保土穴のある炉壁が検出されたりしている。宮崎県祝子では斜面を三方堀開したところに、斜面に平行ある長方形の堀りこみを作り、その壁面に石と粘土を貼りつけ、斜面下手に壁体を立て、炉前部から数基の吹子で送風されたとみられる、羽口が検出されている。さらに製錬炉底部に湯溜りや鉱滓溜りが考えられていることなど理解困難なものがあるが、一応古代のものとして置く。

D—Ⅴ（炉型不詳）——（省略—自然通風炉とみられるもの、羽口の装着された炉壁体のあるもの、また浜砂鉄を原鉱として利用するため、砂丘上に炉壁や鉱滓の集積があって、一カ所では、扁平な板石が集積中に混在し、これを砂地上に敷いて防湿施設とした可能性を指摘しているものなどがある）

製鉄炉炉内反応と操業

今日のたたら操業は構造や技術の発展は別として、その基本構造は古代と同じ系列にある。今日のたたら操業の研究のための分析研究は、古代にも遡及して考えられるものである。即ち原鉱・木炭・炉壁粘土・生産された粗鉄（還元鉄）・鉱滓などの製錬化学反応にかゝわる諸要素の綜合的考察が必要である。

〈即ちこの条件下の冶金学的立場の炉内反応は、現在の日刀保たたらの研究から想定される。戦中（聞き書きができる）・戦前そして明治初年以前から江戸中期まで、それ以前とそれぞれの段階が想定される（各段階は古文書により出来るだけ試みる予定）〉

それと考古学的考察を経た製錬炉の構造・送風方法・操業法などの推定と、互に検討を加えねばならないのは勿論である。すでに試みられているように、考古学的或は冶金学的古資料による倉林炉、或は刀匠の試みている実際などをもとにする復元実験によって、検討も重ねてゆくことが重要である。

既に本誌に紹介したように、また紹介した人々以外の方々によっても、鉱滓の組成観察、化学分析から遺跡の状況なども加えた研究へ一歩進んでいるのである。

冶金学的炉内変化過程

近代製鉄も同様であるが、たたらでも鉄の酸化物である原鉱（砂鉄・鉄鉱石）から、金属鉄を取り出す製錬工程には二つの側面がある。

①酸化鉄を還元させて金属鉄に化学変化させること（銑・鋼状化）

②原鉱中の脈石成分（不純分）を金属鉄から分離して排出すること（鉱滓＝たたらくそ＝通称鉄滓）

がある。

近代製鉄のように、原鉱が一気に高温によって融体化するのは別として、現在（日刀保たたらをはじめ）・戦中・戦前から近世たたらに至る製錬炉内の反応は、砂鉄（原鉱）と木炭が直接接触し（木炭のCとの直接還元）し合って反応するのは極めて少なく、既述（105号）のように主として低温還元であるので、主として一酸化炭素COガスによる半溶融状態での、間接還元反応が進行していて、即ち酸化鉄は融体としてではなく、赤熱固体もしくは固溶体のまゝ金属鉄となる。そして脈石成分や未還元鉄（この状況のため極めて多い50％前後）は、造滓材としても欠くことの出来ぬ（そのためそれに含む硅素量即ち砂質の量が重要であって、釜土は秘伝であった）炉壁粘土と反応し、流出滓（低融点のファイアライト系）として除去される。本誌105

号で紹介した丸山益輝論文は、炉内残溜滓から、このような炉内反応を三期に分けて考えている。炉内での砂鉄（原鉱）の降下にしたがい、熱力学とガス雰囲気に基づいた化学反応が、継起的に炉内において連続進行するものと考えられる。＜このことは現在当地の村下に聞く、作業中の炉内反応点検（経験による勘にもとづく）と相応ずるものであり、話をもとにつくった三昼夜の作業経過や炉内状況その他の変化の作者作成のグラフと一致する。（今までも今後も村下の話からの判断でも肯定できると思われる。＞

＜の文は筆者の見解）

土佐論文に「一般的に低炉段階の製錬炉では、低シャフト的な炉内反応が進行するものと考えられず、竪型炉・平型炉という形態的分類が必ずしも炉内反応を直接的には反映しないことを示すかもしれない」とあるが、報告書から推定される竪型炉の高さと、近世たたら炉（現日刀保たたらも含めて）の高さにそう差はない。問題は砂鉄の種類（チタン含有による溶融方向への時間）と送風方法の問題もある。さらに製品の素鉄の状態が、銑状か鋼状かのこともあるが、

炉内反応を規定するものには
①原鉱（砂鉄・鉱石・鉄）の還元率（種類別に）
②炉壁粘土の融合率（成分別に）
③炉内温度（送風機能と方法）
④一酸化炭素（COガス）の濃度（木炭と送風の関係あり）

がある。

①原鉱還元率　「鉄の高級酸化物の還元を前提にした製鉄技術体系が確立していた以上、各回の操業の巧拙を別にすればそれほど問題にする必要はない」とあるが＜論者は鎌倉時代ごろまでの炉内反応と操業を論じているものと思う。しかし近世たたら炉はその延長上にあり、炉の構造・規模の進歩（大型化を中心に）は送風方法の進歩（構造・規模の進歩と風力・風圧の増大）と歩調をあわせているから、近世たたらの問題は、論者の問題としている時代にも適用できると思われる。当地方（のみでもない）の各地に放置され残存している、「鉄涌かず」のもの（こっていがね）＝鋼状塊は少なからずある。操業の巧拙は近世にも現代にもあって、生産される量や質の違いは、毎代（回）起っている。技術者はもとより各種の条件（砂鉄・木炭・粘土など）が同じであっても然りである。「鉄涌かず」の記録は近世初期の記録にも少なからずあって、経営を破綻におとし入れている（往昔と違って規模が大であるによるが）。近世中後期にも操業の記録から如実にそれを知ることができる。操業成功率は良かったとは言い切れないと思う。＞

このあとに、Tio_2（チタン）などの成分がかなり多い例も知られており（今日は分析によって地方・地域別に明らかである）、これが製錬温度を高く押し上げることから、原鉱の選択について検討を続けねばならないとしている。これについては後述で具体的に触れたい。＜チタンの量と温度と羽口等の関係について＞

②炉壁粘土融合率

融合率とともに、炉壁としての耐火性も要求されるため、解析にあたっては困難がともなうものと思われるとあるが＜近世たたらにおいても徳川末期ま

大久保彦左ヱ門・大岡忠相
吉良義央・新門辰五郎
二宮金次郎・遠山金四郎

この名前を並べると、どういう面々であろうかと、ほとんどの方々は首をかしげられると思う。まず天下の御意見番、次は江戸町名奉行越前守、ついで赤穂浪士に首をとられた上野介、四人目は江戸町火消を組頭、次は薪を背負った銅像の人、最後は「遠山桜」の刺青で庶民に人気のあった南町奉行である。ほかにあげれば、薩摩いもの元祖青木昆陽、探検家で間宮海峡発見者間宮林蔵、幕末の三舟—山岡鉄舟・高橋泥舟・勝海舟、函館五稜郭に立て籠った海軍副総裁榎本武揚と幕末から明治維新の人、また徳川中期にかえって学者であり政治家であった新井白石、初期にもどって、江戸の伊達男・無頼派を幡随院長兵衛と競った水野十郎左衛門となると、いよいよわからなくなろうと思うもの、あまりにも庶民に親しまれた人であるから。徳川幕府における直参—旗本の面々である。徳川300年を通してその総数8万騎の中の人々である。

このところあまりにも堅い論文が続いたので、ここらで中央の武士でありながら、この地方の人々の心に強く残っている人々の足跡を追ってみるのもまたよからずやと筆をとった次第、あくまでも地方からの眼を忘れず、息ぬき場所にとも。旗本の解説の間にそれぞれの人を配し、人となりを紹介することとした。時々連載の予定

旗本とは

かって豊臣政権下最大の大名であった徳川氏は、知行高250万石で110万石が直轄地、残り140万石を最高12万石の上野国井伊氏ほか万石以上39人、残高40数万石を多数の家臣団に配分していた。

徳川幕府成立で家臣団のうち万石以上の大部分と万石以下の一部分とは譜代大名となり（松江藩主も）、万石以下の大部分は旗本・御家人となり、関ケ原の合戦後の新付の外様大名とは区別され、幕府政権の担手となった。

幕府の直臣とは知行高万石以上の大名（譜代と外様の大名）と万石以下の旗本・御家人をいう。このうち旗本・御家人が持

で、四日押・三日押或は二日半押、二日押、一日半押、一日押の例もある。それも同じ鉧場の同じ条件においてであることをつけ加えておく〉　次に「いくつかの化学分析例によると、SiO_2　CaO　などの造滓成分の含有量に特に問題はないようである」というのは、〈小数例からの判断では偶然性が多すぎるではないだろうか、これも後述の近代たたらで触れることにしたい〉

③木炭と酸素との反応（発熱量・ガス反応性）状況である。製錬炉周辺で検出されている木炭はいずれも黒炭で、発熱量において白炭にやゝ劣るが、ガス反応性が高く、近世たたら製鉄に使用された木炭の質状ともそれほど相反するものでなく、製鉄原料として適したものであるという。

〈現代から近世に遡のぼってみると、たゝら用木炭は家庭用木炭と窯も焼き方、焼き上げ（製品）に差異がある。（時代が古くなるほど家庭用木炭は需要は極度に少なくなる。いろりのある生活によるため）たゝら用木炭＝大炭は、まだ木質　分（木がしら）が若干残っていて、煙の出るものである。かっては不良品とされる状態に似たものである。出土する木炭は原材料置場の使用前のものである例がどの位あるであろうか。ほとんどの出土する木炭は、いくらかの燃焼を経たものであることが気になる点である。当地の古記録（近世初期）に、「若木のため鉄涌かず」とある。以来今日まで、たたら用木炭材は樹令30年を経た原木とされて来ている。極く最近聞いた一説によれば、若木は樹液の発散を防ぐために樹皮が密である。従って細胞の組成上から硫黄分が多い。30年も樹令を経ると、外縁の密な年輪によって、樹木内の保護が強化されるから、樹令にあわせて樹皮の役割が軽減され、時には亀裂を生じても、一部剥離を生じても差支えないから、樹皮の硫黄分の量は極めて少ないであろうということである。近代製錬では製品の質に影響があるため硫黄分の除去には十分の努力が払われている。ただたたら製錬の成否との関係については専門の書にゆずる〉

④炉風への送風

この木炭は原鉱とともに炉内に大量に投入されて、炉内反応の主役となるから、それを燃焼させるための炉内への送風（即ち酸素の供給）の状況が、技術の進歩と併行したというより、むしろそれをリードしていたと考えねばならないから、製錬炉（たたら）の構造把握にとって重要な要素となる。

炉下部に吸気口をもつ自然通風炉をもつ場合を考えた場合。一般的には炉断面に比べ炉高の高い竪型炉はそれだけ吸気力が強いことになり、平型炉に比して有利であるが、適切な送風装置があれば、製錬機能にそれほどの能力差はないものと思われる。現状では吹子そのものの存在を実証することはできないが、すでに弥生時代から吹子の存在を暗示する羽口が確認（但、青銅器造用に用いられたもの）されており、各地の製鉄遺跡で出土している大量の羽口がすべて自然通風に関したものとは認めがたい。

半地下式竪型炉（A類）は炉の構造がかなり解明されている。

この類の製錬炉は吸気力の強

に「直参」と称されたのは、領地在住を原則とする大名とは異なり、彼らが在府（江戸居住）を原則として将軍に近侍勤仕する直臣だったからである。もっとも譜代大名中から幕府の上級要職を独占する仕組みとなっており、その点譜代大名は直参に準じた性格をもっていた。旗本は軍陣で主将旗のある本陣にいることから直属の手兵親衛隊とされ、将軍に御目見できる階層で、御家人はそれ以下であった。

徳川家三河以来の旧臣の三河衆が旗本の中核であった。その最も誇り高い旗本中の旗本が**大久保彦左ヱ門**であった。

寛永9年（1622）74才の時二千石を領し、大久保一族の旗本は20数家が門戸を張ったという。彦左ヱ門は戦国生き残りの旗本の代表として喧伝された。その話の多くは水戸黄門と同じく、後世の作「大久保武蔵鑑」によるものであるが、その生き方に人々を納得させる旗本気質があったことは見逃すことはできない。これは旗本に通ずるもので、彼はその代表として歴史の中に生き続けている。いつの時代でも「彦左はいないか」の声がある。それも庶民の側から強く。

しばぐり三月句会抄

大欅冬天に雲を歩ましむ　藤原　樵夫
中空で交すことばや雪おろし　門脇　花子
雪原に只ひと筋のけもの道　高木　白虹
風邪気味の寝ぎわに少し卵酒　岡田　蹊花
火の用心街角まがる寒の明け　小川　あきお
幾尺の雪の深みに眠る峡　渡部　夕峰
見晴るかす限りの雪に只佇ちぬ　浅野　としお
眠る幼児の温り伝う寒の入り　新出谷　一華
着ぶくれて鈍る動作の重き日々　錦織　富江
餅搗機手引書頼りに寒厨　加納　信子
年迎うどの子も住まぬにしめかざり　田辺　竹野
降りしきる雪に広げし傘おくる　峰石　美代子

前号訂正 ①頁1段10行 山名時氏・5段22行 碕をとる ②頁16行神立社・38行島根史学16 ③頁題名の番号③・2行特に東

斐之上川柳三月抄

七転びもう転べない老いの年　若槻白要
酒煙草どちらやめても間がとれず　松田牛歩
往復は五時間会は一時間　児玉哲呂
春を待つ心一すじ雪に耐え　松浦木公
春一番恋人よりも恋しがり　渡辺好之
障子開け春の日差しをさそい入れ　安部春恵
朝起きて一番に見る新雪の量　安部正子
外は雪孫のハガキを又も読み　佐佐木千世
歳月に語る孤児らもただ涙　真綿よし子
そうだった今日は新聞休刊日　太田亀甲
威赫するようにつららがそり返る　藤原千代子
通院は見合せにする戻り寒　藤原のぼる

四月の短歌

降る雪に梅の下枝を移りつつ雀らは鶏小舎の前にいきたり　常盤はるまさ
抜歯せる夫の口元寂しきに言ひ度きことも裡に納めぬ　野村節子
ダムとなる噂を呼びし集落の山冷え冷えと夕映へていし　宮廻あい子
枝々に明るき色のしずくして山の里にも春の雨ふる　小早川恵子
早春の光差込む朝の部屋うから揃へば心安らう　岡田時子
冬に耐え雄々しき姿の故郷の山今日の門出を見守りており　児玉敏郎
部屋毎のカレンダーに大きく丸をつけ指折りて孫は入園を待つ　佐藤喜代子
ほとばしる温(あつ)き初乳はわが指をつたひて子牛の口に流るる　景山悦子
金色に落葉松そむる夕茜雲の彼方はみ仏のくに　永井やよい
ふるさとに帰ることなく世を去りし中也の詩碑に春の雪ふる　安部夕波

さがあるから、炉下部の開口部（炉門）からの自然通風が考えられる。しかし還元反応の進行により炉門は排滓口の役割をもつことになり、酸素供給が困難となるから、炉内状況を回復させる何らかの方法が必要で、前述のように炉背部の羽口装着や、抜き取り穴などの存在は、炉背後部からの人工送風を示唆している。したがってこの類では、自然通風と人工送風が両用され、点火時や操業の進行につれて、吹子送風を使用したものと考えられる。

そしてこれとともに、**長方形箱型炉（B類）**の存在は、古代においても一定の送風装置があったことを物語るという。

原たたら炉（C類）も既述のように、炉長辺側の少なくとも一方に吹子が設置され、分配された送風が木呂竹などを通して、保土穴から炉内へ放射状に拡散させる方法がとられたものと推定できる。

吹子の実態については明らかでないが、皮吹子や踏吹子だけでなく、箱型吹差吹子の存在を想定することができるとしている。吹子については別に一つの考え方を後述したい

追録

古代出雲6世紀後半に製鉄

能義郡伯太町の座王古墳の報告書（1981）で6世紀後半にこの地で製鉄が行われた証拠として、横穴石室の入口をふさぐために鉄滓などがつめてあるとしてあった。しかしそれが原鉱（鉄鉱石・砂鉄）の製錬の時に出来た製錬滓（鉱滓＝たたらくそ）か、それとも鉄鋌（素鉄）から精錬した鉄滓（鍛冶屋滓＝かぢやくそ）であるかを判別しなければ明確でないと調査者に話して置いたところ、新日鉄八幡技術研究部の大決正己氏から、砂鉄から鉄を取り出す時にできる製錬滓であるとの知らせを頂いた。すると105号で、出雲風土記（733 8世紀）以前にはこの地方の記録には勿論ないが、現在のところ遺跡遺物もないとしていたが、これで約200年さかのぼる時代に製鉄が行われたことがほぼ証明できた。製鉄遺跡の発見が望まれることになった。

約2000年前京都府扇谷遺跡から鉄滓

日立金属安来工場冶金研究所（清永所長）によって、鉄滓の分析が行われた結果、「砂鉄系原料による鍛冶滓」であることが判明した。これで鉄器製造技術があったことがわかり、同時に出土した鉄斧（てっぷ）もその製品とみられる。弥生前期後半から中期初めにかけてのものである。原料となった素鉄（銑か）は砂鉄よりの製錬によるものであるが、国内産か、朝鮮方面からの輸入品か明らかでない。

産業考古学会について

当「奥出雲」72・73号に森口保が紹介した、産業考古学会の**全国大会**が、今年8月28日（火）横田町で開催が決定しました。

そこで山陰支部の結成への準備として、全会**松江集会**が、来る5月19日（土）に、島根大学教育学部で開催され、島根県産業遺物遺跡調査報告」と「たたら遺跡とたたら操業の今昔」の発表が地方会員によって行われ、中央講師**大橋周治**「高炉製鉄と近世たたら」の講演が行われ、たたらの歴史の見なおしの提案が行われます。御参加下さい。

会員配布一部百五十円／六九一六 島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二 編集発行責任者・高橋一郎頒布／横田史談会発行／奥出雲文協 仁多郡仁多町三成 植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第109号
（5月号）
昭和59. 5. 5
奥出雲編集集団

奥出雲を護持するため尼子氏の抬頭に抵抗し、その衰退に加担した

仁多郡西部の地頭飯島三沢氏物語③

ふたたび守護京極時代

京極道誉の子高秀が出雲・隠岐の守護職をついでいたが、康暦の政変（1379）後、九カ国の守護職をもっていた山名時義がこれを得た。間もなくこの二国は伯耆その他の守護であった甥の満幸の手に移った。そして仙洞御料所横田庄を満幸が横領したことから明徳の乱（奥出雲既刊号で度々詳論ずみ）が起り、明徳2年12月満幸の敗走となり、翌3年出雲・隠岐は京極氏の手に再び移り、道誉の孫高詮が守護を兼ねることになった。

そこで一族隠岐五郎左衛門尉（清泰か）を守護代として、この地に派遣し領国の統治にあたらせることにしたので、3000余騎をつれてその年の春下向した。

出雲では塩冶駿河守（近江佐々木源氏で出雲守護の主流で塩冶に住した国人）が、満幸の指令をまって富田城によっていた。

隠岐氏が来国すると国人の大方はこれに従った。山名氏の20余年の統治の甘さのあらわれであろうか。（馬木郷の馬来氏は山名氏一族のため、これに味方しのち富田城下の吉田で討死した。当時西部の国人として成長していた三沢氏の動向は不明）

わずかの手兵をつれて富田城中に籠る塩冶氏の父上郷入道の許へ使者が来て、「出雲がふたたび佐々木京極の分国となって（初代守護近江佐々木源氏のちこの流の京極氏が守護であった。

途中20余年が山名氏守護時代——しかし延元元年（1336）名和長年討死後山名氏は伯耆に勢力をのばし出雲にも影響を与えていた。横田庄でみる限りでも北康永元（1342）からその勢力が入っていて、1366年ころまで続いている。この間に山名氏の一族馬来氏が、馬木郷地頭として入って、三沢氏とともに、戦国時代の終り（1589）まで国人として定着した。その後明らかでないが、明徳の乱の前十年程は横田庄を横領している）年来の本望を達した。かつて京極氏に属していたから、忘れてはおられまい。早く城を開いて当方に来られたい」と申し入れた。入道は子駿河守に相談すると、「父は久しく京極の被官であったから降人となられても人のそしりはありますまいが、私は山名に奉公し、長く出雲の国務をとっていた。今しばらく様子をみる」と仁義の道を貫いたので、父上郷入道はわびしく20騎をつれて降人となった。父を城下まで送ってから、麓の浄（城）安寺を訪れ、「先日の京都の合戦で討死すべきながらえ、しかも父が降人となられた今、京極氏に弓を引けば、父を敵とせねばならず、父子ともに山名を討てば、主従不順の名を残すことになる。こゝで泉下で忠を尽そう」と僧に語り腹を切った。70才の老将父入道は悲しみ、切腹しようとしたが慰められて思いとどまった（のちこの末孫が、岩屋寺と深いかゝわりが生まれる）

わずかの駿河守の生き残りの手兵は伯耆へ走り、満幸に報告したが、情勢はますます不利で満幸は因幡にて剃髪し九州へわずか5名をつれて落ちて行った。その後京との間を往復していた満幸は、翌4年出雲伯耆で挙兵し、塩冶遠江守父子も京極氏に叛旗をひるがえした。2月に入り三刀屋城に城主諏訪部（のちの三刀屋氏）菊松丸を攻めて出雲奪還の突破口を開こうとしたが、勇戦防禦に満幸は成功せず、各地での戦いも利あらず、満幸は京にのがれ応永2年（1395）京都の宿で誅せられた。

京極氏は三刀屋氏の地頭職を安堵して功を賞し、他の国人に安心感を与え統治をすゝめ、また杵築（出雲）大社・鰐渕寺等にも社寺領を安堵し、課役を免除するなどした。

応永6年周防山口を中心とする七カ国の守護大内義弘が、幕府に叛旗をひるがえした応永の乱に、のち飯石郡赤穴氏の祖となった佐波常連（邑智郡佐波郷とその東隣出雲赤穴庄を領していた）も、幕府方の京極氏の有力な一隊として出陣しているから幕府の権威を背後にもつとはいえ、次第に出雲国に京極氏の威令は、佐々木源氏の一流としてのかつての実績を土台に及びはじめていたのであろう。2年後の8月高詮は嫡男高光に譲って隠退し、9月50才で没した。

守護代についての在来の説

はじめは隠岐氏でまもなく尼子持久であったという。しかし明徳3年持久は10才前後であるから、守護代になったのは高詮の晩年であろう（応永8年が18才前後となる）といわれる。また著名な「多胡家家訓」をもつ多胡家（のちの津和野藩家老）の「多胡外記手記」の中には、高詮は侍所の長官であって在国できなかったから、「高詮の弟高久、江州尼子に居住していたのを富田に遣し云々」とあるから、高久が隠岐氏（2～3年間）についで守護代となったという説もある。

その後続いて三代目の孫経久になって、横妨もあって京極氏から追放され、その2年後の文明18年（1486）元旦を期して、経久が月山富田城を陥入れ、城代塩冶掃部介を誅し出雲の守護職を得るまで、95年間京極氏が支配したというのが在来の説であった。

仁多郡西部の地頭飯島三沢氏③・奥出雲のたたら製鉄史⑤・川柳・短歌・俳句

奥出雲のたたら製鉄史⑤

新資料にもとづく、特に東南部のその技術・経済・社会・文化の総合史より道—土佐雅彦論文の要点紹介(下)—

しかし3月号の2頁の表にあるように、佐々木流国人層は200年の、新補地頭流国人層は150年余の土着性と実力をもっていたのに、これらの動きは全く考慮されていないし、佐々木文書の完全なる検討もされないまゝ、諸軍記を中心として、これに符合する文書を裏付けとして語られて来た。それが今岡氏によって完全に検討し直され、文書の上から尼子氏の権力構造の中心部分が明らかになり、在来の説はほぼ根底から覆がえって来た。

そこで国人層のこの間の成長を明らかにし、それと京極氏直属の被官層の上に、尼子氏の権力構造があった故に、抵抗をうけまたその故にもろさがあったことを明らかにし、諸軍記物語も再検討をすゝめることにする。

諸作業について

近年製鉄遺跡に付設されたと見られる炭窯が増加しており、樹種も周囲の植生と矛盾することがないようである。〈近世たたらも木炭産地を中心に移動している〉 原木には比較的径の小さい冠孔材や、炭火したとき縦方向に亀裂のはしるような通気性の高いものが選ばれているという。〈この点近世たたらの炉型の大型化の場合の木炭の状況とは、既述のことゝ比較してみると相違があるようである。〉

炉壁粘土 — も製錬場の近くでまかなわれているようである。〈近世たたらでは後述するように、莫大なを使用している（大型化とともに連続操業のため）ので必ずしも一致しない。〉

原　鉱 — は一例をのぞいて調査例ではすべて砂鉄である。

操業は乾燥した場所に炉を築いて乾燥させ、木炭や砂鉄を入れて点火、送風によって炉内温度をあげ、さらに砂鉄と木炭を交互に投入し、やがて還元反応の進行に伴い、流出滓を押出し、さらに原材料の追加投入をし、炉壁の浸食や還元鉄の成長をみて操業を終了する。生産物の粗鉄（還元鉄）の形質は、調査遺物の小鉄塊や鉱滓内の還元鉄粒などから推定すると、共析組織から共晶組織前後の鋼や、やゝ吸炭の進んだ「セミ銑鉄」のようである。

〈このことは鉄涌かずと放置された、こってい鉄（鉧状塊）にも見られるし、今日生産されている鉧においても、時に顕著にみることができることからも推定できる〉

この粗鉄の形質を明らかにすることは、次の鉄素材生産のための作業を規定するものとして必要不可決である。〈製鉄史上粗鉄も銑がさきだったのか、それとも海綿状にも似た小さい鉧塊が先であったかの結論を出す上でも、また両技法がほゞ同じころに別経路で渡来したものかを知る上で重要となってくる。そしてさらにその後の作業—鉄器製作の前段階の鉄塊採取—の検討にも影響がある。これは古代刀の研究の上でも問題となるし、古記録に鍛冶工人がいて製鉄工人のいないこととも関係があって、鍛冶工人が如何なる炉によるかは別として、小規模な製錬の繰返えしによって、粗鉄（銑系か鉧系か）を造っていたであろうという。製錬方法の全国的普及への研究の手がかりにもなる点である。かつてはもとより今日でも、刀匠が原料鉄（粗鉄と呼ぶべきかもしれないが粗鉄といわないでおく）を生産して、いわゆる玉鋼と混用していること。生涯に一本でもよい、古刀に迫るものを鍛造したいと、原料鉄の生産を模索していることに通ずると思う。こうなると複雑になってくるが、単純にみてもいわゆる鉧押法のように炉内生成物であるか、いわゆる銑押法のように銑鉄を流し取ったものであるのかという点にあると思われるとしているが、東部奥出雲では105号で述べたように鉧押法は4割が鉧でその中から2割の鋼をとり出し、あとの6割は銑でほとんどが流出させたものである。その鉧押法も文化年間末までは生産品の割合は先と同じで、四日押（四昼夜で鉧押などという言葉は全く使っていない）であり、それ以後30年を経るまで一進一退で技術改良が進んだであろう。その後から三日押（これからのちも鉧押ということばは全く当地方ではあらわれない）一本となり、やはり生産品の総量は幾分増加気味であるが、銑、鉧、鋼の割合は同じである。砂鉄、木炭の使用量はぐっと増加しているが操業日数が一日減となっている。これ以上の検討はずっとあとで述べることにする。

さらに日刀保たたらでは真砂砂鉄1種を使用し銑は極めて微量で、3昼夜で鉧の育成を計っている。その前身の靖国鉧（戦中）や、鉄穴鉧などでは、数種の砂鉄を用い（木炭、砂鉄ともに日刀保たたらは、これらの鉧の⅔である）、はじめの二昼夜近くはとけ易い砂鉄を用いて、専ら銑をつくり出し（先の60％の量）、良質の銑が出ると炉況の良いことをしめし、それ以後投入する真砂砂鉄によって、よい鉧が育成されるとされていた。大づかみに言って、三日押によって、鋼20％（明治30年前後より30％に技術改良の結果なる）鉧20％、銑60％の生産ができるようになった（いわゆる俵国一説の鉧押法）のは、慶応年間のことで、それ以前はこれを四日押で行っていた。すると奥出雲が生産量と質において近世半ばから全国優位にたったのは四日押によったのであって、赤目砂鉄原料によって、四日押でほとんど銑をつくっていたのが中国地方の殆んどであった時、真砂砂鉄の産地のために、同じ四日押で、鋼と鉧を比較的多く（いわゆる赤目砂鉄による四日押でも若干の鉧もできる場合もある

— 諸条件がからむが）つくっていたのである。四日押はいつ完成したのか、近世初期なのか中世へ遡のぼるのか、炉型、送風方法とからんで来るが、管見の限りでは今のところ明らかでないので、この論文にはこの点に関し、全面的に賛意を表し難い。今後の課題であるがあとで一つの仮説は提示したい〉

次に銑鉄の流し取りを考える場合には、炉内で固溶体下の還元鉄を高温下で、さらに吸炭させて完全に融体化する必要がある。たとえば、近世製鉄遺跡においてときとしてみられるように、スラグ原に流動形態をとどめた小銑鉄片が散見されるのならばともかく、先の技術的側面からも銑鉄の流し取りが古代において一般的な方法であったとは考えにくい。ただもしこの方法が存在したとすれば、他の炉の類型よりは充分な送風の期待できる、B・C類にその可能性があるかもしれない。今のところ、粗鉄は炉内生成物として生産され、その形質は鋼〜吸炭過程の「セミ銑鉄」が固結したものと推定しておいたほうが妥当と考えたいにも、又続いてのべてある、近世における小鋼場での作業のようにこの粗鉄を割り必要な部分を選択的に取り出すことが行われていたのではないかにも、筆者は同感である。

〈しかし鋼も粗鉄（いろいろの状態の還元鉄として）と同じく、粗鋼（大まかには玉鋼もこれに属する）よりさらに不純物もある。還元過程の不充分な粗々鋼であったと思っている。（刀匠の体験談も加えて）〉

これらの工房機能を相定するような遺跡もあるという。— 群馬県菅ノ沢遺跡（平安期9〜10世紀）— それが粗鉄内の不純分（鉱滓分）の除去や炭素含有量の調節をおこない、一定規格の鉄素材を生産する精錬施設が（のちの鋼場や大鍛冶場のような役割場所）存在していたかどうかはあきらかではないが、原初的な形にせよこの工程が成立していなければならないと考えている。

〈この工程の成立は認めるが「和名類聚抄」などの鍛冶工人の道具から考えると、この作業工程はむしろ一般的には、これら鍛冶工人の手にゆだねられていて、これら工人が個々に製品目的に合ったように精錬していたと考えている。勿論荘園経営を軸として成長した武士団を組織して行く過程で、工房群として経営も行うものがいたことまでを否定するものではないが。〉

古代鉄生産の実態

古代の鉄生産については既刊号でみたように、全国的に広がりを示しており、弥生そして古墳時代（一部には豪族によるやゝ大規模なものもあったかも知れない）に予想される小規模自給的な性格を反映に、需給関係は各地での自給的バランスにあったと考えられる。この考えの基礎に立って先の製鉄遺跡からの製錬炉の分類とのかゝわりを考えると、製錬炉型が操業法を含めた製鉄技術体系を象徴していると考えると、古代には複数の技術体系ひいては工人集団が活動していた可能性があり、各地における鉄生産の動向が単純に推移したものでないことを示しているとしているのには同感である。

この分類試案も過渡期的なものであるかもしれないが、製鉄遺跡をめぐるものを総合的に把握して、炉型分類と鉄生産との関係をみている。

A類（半地下式竪型炉）と、**D—Ⅱ類**は、東日本では主体をなすものとみられる。そしてA類に属するものが北九州にも存在するところから、**A類**の基本型とみられる**A—Ⅰ**の出現時期が、奈良時代末〜平安時代初頭にとどまる時代のものであることをみると、これを律令体制下での新たな各地での自給形態を支えた中核的な製鉄炉と考えたいとし、その分布状況からこれらの果した役割分野は、律令体制周縁部におけるものと理解すると、畿内〜瀬戸内沿岸部を中心とする西日本の鉄需要関係とはやゝ様相が異なり、鉄生産から鉄器生産までの過程がより密接に結びついた可能性を推測するとしている。

B類（長方形箱型炉）・C類（原たたら炉）は、中世を通じて近世たたら炉へ発達していく系譜にあるものと考えられ、製鉄技術として単系的にとらえられるとしている。この類は中国山脈の南側の吉備地方を中心に分布しているが、その他の地域山陰地方でも予想されるとしている。

C類は安芸から北九州その他に分布していて、北九州に特徴的な製錬炉とみてもよいかとしている。文献資料・木簡から知られるところでは（既述）、調・庸として鉄・鍬を貢納しているのは、中国山地沿いの国々と筑前があるから、B・C類の製錬炉が高い生産力をそなえていたからであると考えられる。そして、B類が発掘例から6世紀末〜7世紀初頭にまで遡ること

斐之上川柳四月抄

残る齢聞けば奥には慾が居る　松田牛歩
送られし菊の苗手に雪みつめ　安部春恵
これからが何処まで行ける八十路　若槻白馬
眠れない耳に時計の音と雨　藤原千代子
春休み孫の出番を待って居り　真綿よし子
あきらめてあきれて今日も雪が降る　児玉哲呂
春を待つ心で雪へうらみごと　松浦木公
頼まれぬ事に汗かく世話女房　渡辺好之
長い冬もてあましてはぐちを言い　安部正子
雪があり彼岸に墓へ参られず　太田亀甲
豪雪よ何が気に入り長泊り　石原世以
山程の洗濯干して茶をすゝり　加納治江
カメレオンのように周りの色に似せ　藤原のぼる

さつきの歌

かたくなにわれを守りて悔やまざり枉げていくらかは世に出しものを　常盤　はるまさ

湯の宿の宴はさかりどなるごと軍歌を歌ふ歯の欠けし友　永井　やよい

渓魚釣り解禁となる四月馬鹿魚の数より釣り人多し　伊藤　萩雨

老ひづけど短歌の道に終りなく真夜に目覚めて指折りており　岡田　時子

桃の木のつぼみも見ゆる月の夜に風雪注意報告げておりぬ　小早川　恵子

残雪は尺余もあれど藤の実のはじける音に春の気配す　藤原　信子

霜柱鳴らして馳けゆく新入の二人の孫に手をふりて佇つ　景山　悦子

種蒔の日も定まらぬ今日なれど農耕肥料は配達されて　佐藤　喜代子

餌も水も凍てし朝を今産みし温き鶏卵掌にのす　野村　節子

さよならのただひ言に哀愁の想ひを秘めて君と別れし　安部　夕波

しばぐり四月句会抄

鳥雲の彼方に想い卒業す　浅野　としお

話題なく愚痴こぼし合う春炬燵　岡田　蹊花

祖国去る孤児の明暗春未だ　岡田　麗水

うづくまる砂丘の駱駝春隣　糸原　古志

春泥をとびとびして登校子　小川　あきお

職を辞す夫迎え佇つ梅の門　加納　信子

中空で交すことばや雪おろし　門脇　花子

雪原に只ひと筋のけもの道　高木　白虹

豪雪の底に堪えたる実南天　田辺　竹野

庭の隅何やら動めき日脚伸ぶ　新出谷　一華

夢を抱き瞳もときびしき受験の子　錦織　富江

風花の吹雪に変えて町遠し　藤原　樵夫

浜の香を背負い門入る若布売　渡部　夕峰

まだ癒えぬ身体に厚き雪の壁　峯石　美代子

が明らかになったことで、長方形箱型炉は、古墳時代後期から日本の鉄生産を支える重要な製錬炉として存在していたことがほぼ確実になったとし、さらに木簡資料の中の吉備地方分の記載からもこれを裏付けるものがあるとしている。

そして、近畿～瀬戸内沿岸を中心とする西日本の一部先進地域では、鉄素材・製品の流通をかなり広範に認めた。やゝ傾斜的な需給関係が成立していた可能性があるとみると、B・C類はこのような鉄の生産形態をになう中核的な製鉄炉といえるかもしれないとしている。

〈こゝで但馬の箕谷古墳から出土した銘文のある直刀、出雲の岡田山古墳出土の銘文入りの円頭太刀などの錆の分析からの原鉱判定、日立金属の安来の冶金研究所が分析した京都府の扇谷遺跡出土の鉄滓分析の結果（前号に）などから、これらの製錬、精錬の推定すると、中国地方に多いB類製鉄炉との類似があらわれて来るが、それとも日本海独特のものが浮び上るかもしれない。山陰地方における古代製鉄遺跡の出現が待たれる。〉

D類も6世紀代のものが含まれており、西日本の一定地域で古墳時代以降も伝統的に存在した可能性があると考えている。滋賀県に存在するD－Ⅲ類は8世紀のものとみられる。北牧野製鉄A遺跡と合わせて考えると文献上、前者の堀立柱建物群の整然とした配置、後者の状況や文献（日本書紀）との関連から、ともに官営的色彩が濃いゝと推測される。これはそういう特色なものとのみ判断すべきか、原鉱が鉄鉱石の製錬に適した炉として各地に分有したものかと推論している。

107号3頁掲載の表で古代の鉄生産の時期的画期を設定すると

Ⅰ律令制の成立期

Ⅱ奈良時代末～平安時代前期（下限は10世紀前半の「延喜式」制定時）にみられる調・庸鉄の課税倍化と鉄貢納国の再編成期（既述の理由とも符号する）

Ⅲ古代末～中世前期　の各地在地領主の活動の顕在化にともなう生産構造の変革期

の三段階を想定できるとしている。そしてB類（長方形箱型炉）が地下構造の発達したC類（原たたら炉）へ進化していくことやA－Ⅲが古代末～中世前期に位置づけられること。さらにまた鎌倉幕府の成立にも関係の深い伊豆・房総の両半島に多くの製鉄遺跡がみられることはこのⅢ期にかゝわる問題といえるともしている。一方中世期の工人集団のあり方の問題については、まだ文献資料の面からも明らかにされていない。中世製鉄非専業論もあるが、高度の専門技術者が一部に存在しなければできないし、近世に於ける鉄師を中心とする集落集団的労働編成まではないとしても、これらを掌握し抱えもつことの出来た経営主体のあり方がなければならない。

〈筆者はこれについて次回で関東に極めて多い鎌倉期の鉄仏の問題から少し迫ってみたい。

以上論者は現段階での考古学的立場中心の製鉄遺跡から考えた序論であって、鉄生産が多様性に富み、重層構造をなしていることは間違いないとしても、類別の仕方そのものも発掘によってなお流動的であるとしている。

これとは別に製鉄遺跡から出土する鉄滓・鉄器の化学的組成や分析によって類型化を試みている大沢正己氏の立派な研究があるが、機会をあらためて紹介することにしたい。〉

（会員　高橋一郎）

会員配布一部百五十円／六九九－一六　島根県仁多郡横田町一〇六一／二　編集発行責任者・高橋一郎　頒布／横田史談会　発行／奥出雲文協　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第　109　号
（6月号）
昭和59. 6. 1
奥出雲編集集団

横田で生れた人
横田を育てた人⑧

岡崎喜一郎

恵まれた師友

奥出雲横田の素封家の長男岡崎喜一郎は、横田小学校教員兼校長井上栄太郎のすすめで、松江の三州学校に進んだ。井上はラフカディオ・ハーンを同僚として迎え援助を惜しまなかった。松江中学校教頭西田千太郎と同校での同級生であり、首席を競った親友でもあった。

当時は士族階級を中心とする自由民権運動の台頭期で、井上は西田とともに松江の青年懇談会にも参加し、新しい気運に触れた進取の気性をもつ謹厳実直な教師であった。その影響は強く青雲の志に生きた多くの人材を育てた。三州学校は士族の子弟中心の松江中学に対し、庶民の中等教育校であったが、井上によって養われた岡崎の学力を、満足させるものはなかった。

そこで明治維新後の新興階級地主豪農層子弟教育の国立の、札幌・駒場（東京）ほかとともに創設されていた倉吉農学校に入学した。ここで岡山県津山市出身の太田清三郎（素封家の子弟のち初代津山市助役・晩年はキリスト教主義の感化施設家庭学校副校長）―津山は内村鑑三の影響下のキリスト教が布教されていたーを知り、太田が所持していた「新島譲」（同志社創立者）の伝記を読み、青雲の志の方向を固め、親に無断で同志社に進んだ。上級生には山室軍平（高梁市の北哲多町出身、キリスト教の布教と社会事業を行う日本救世軍の創立者）・留岡幸助（高梁市出身、同志社一期卒業生金森通倫牧師により入信、現北海道家庭学校創立者）がいた。岡崎はさらに早稲田大学の創立者大隅重信をしたって都の西北へ進み、信仰と奉仕の精神の上に、さらに経世の新知識を修めて帰郷し、家督とともに父から郵便局長を継いだ。

帰郷と理想境の夢

やがて八雲銀行（のち松江銀行に合併、現山陰合銀）を横田に創立した。こうした基盤の上にキリスト教の布教の陣頭にも立ち、体験から幼児教育の必要性を痛感し、県下で二番目の相愛幼稚園を創立、宗教性豊かな保育をはじめた。一方太田を介して留岡幸助（当時内務省嘱託で社会改良運動を兼務）の主張する、「教会・学校・病院・篤志家」の実践家も志し、留岡の滞米談の影響もうけ、通信大臣大隅重信の特別の計らいも得て、郵政事情視察をかねて渡米。種々献策のほか痛感した女性及び母親教育の重要性を、私費を投じて相愛裁縫女学校創立に結実させた。

大正初年山室との再会で救世軍に属し、その後援者（篤志家）ともなり、信仰の実践を地域社会に根づかせようとする方向を強めた。信仰の友であった医師藤原璋夫の帰郷をすすめ、永生病院の設立を援助した。「相愛」「永生」の文字は聖書中から選ばれた。やがてゴシック様式風な四階建で大時計と鐘を備える塔をもつ教会堂が完成した。

岡崎の信仰と学識、経綸と人望と財力と教育力によって、キリスト教は横田に定着し浸透しはじめた。

朝夕鳴り響く鐘には「労働に送り、休息に迎え、祈祷を促す」と刻まれてあった。その実践の一助にと信者による農耕田も設けて、勤労生活を重視し、農村横田の理想郷づくりへさらに歩を進めた。このころ横田に郡立横田農学校が創立されて、夢は一段と現実性を増して来た。

一路到白頭

松江における自由民権運動は、足軽階級士族を中心としたもので、全国的にも盛り上がりの最も高いものの一つであった。その台頭期研究時代の影響を岡崎も間接に受けたであろうが、のち成長した地主階級のその運動に加わらず、キリスト教的人道主義による村づくりの方向に進んだ。

岡崎の入信の糸口を与えたのも、幼稚園創設をすすめたのも太田であった。親交も終生続き、岡崎も晩年は一切を長男に譲り家庭学校（校長は元同志社大学総長牧野虎次・太田は副校長）でしばらく奉仕の生活を送った。

留岡も再度横田を訪れている。キリスト教精神を基調としながらも、二宮尊徳の報徳仕法を農村改良の方法とし、その指導普及にもあたっていた。理解ある岡崎家でも古い遺制にとらわれることもあり、両人の来宅には渋い顔をみせることもあったと言う。しかし岡崎は留岡の郷土づくりの四つの目標には固い決意の下、歩一歩と進んでいた。

留岡の座右銘は「一路到白頭」であった。滞米中にブロックウエーからうけた"This one thing I do"（われこの一事をつとむ）を翻訳したもので、芭蕉の「この道や行く人なしに秋の暮」も愛唱したという。一路白頭に到るまで日本の感化教育に生涯を捧げたように、岡崎も

横田で生れた人⑧　俳句・川柳・短歌　庶民の中の武士②

生涯を青雲の志を果たすのに捧げた。そして実践は山室の信仰と社会教化が手本であった。岡崎にはもう一人心の友があった。松江奥谷の万寿寺再興の僧で、のち臨済宗国泰寺派管長となった近隣出身の勝平大喜で、岡崎のあとを追い三高から同志社に学び、戦中「東亜の合掌」を唱導した名僧であった。

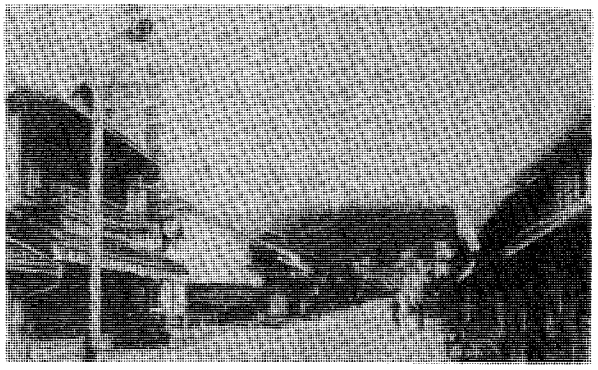
相愛幼稚園と女学校

岡崎の妹は明治四十一年、米子良善幼稚園で保母見習いとして青山春子の指導をうけ、上京して当時唯一の女子大学附属保母養成所に学び、他の特色ある幼稚園での経験も重ねて帰郷し、四十四年理想的な環境と設備をもつ独立園舎（夜間は教会堂）で、最新のドイツのフレーベルの提唱した、子どもの創造性を伸ばす教育内容と方法で、宗教的情操を養いながら保育にあたった。工作・絵画・遊戯・対話（幼児劇）など、当時の小学校低学年教育でも行われないものであった。筆者もここを終えて小学校に入ったが、読み書き算術以外は新鮮味のないものであったことを憶（おぼ）えている。その後横田町大火で焼失するまで三十余年にわたって続いた。

大正七年に創立された相愛裁縫女学校は幼稚園舎の広い二階があてられ、寄宿舎もあって乙種の教科内容に加えて、礼拝・聖書講義も行われ、二十余年間続いた。郡内で女子中等教育を受ける者の少ない時代、山間の女子に大きい恵みであったので、郡内各地・能義郡・鳥取県日南町各地からも入学者があった。教師陣もいずれも中央で教育を受けた人たちで、知識・技能も進んだものであった。郡立農学校の初代校長がキリスト教信者であったこともあって、隣接の洋風庭園で新しい野菜を用いた西洋料理を提供した園遊会方式を加味した生徒作品のバザーも行われた。さらに春や夏の休業中には学校を開放し、婦人のためのミシン使用の洋裁や、和裁・染色・調理などの講習会も開かれた。当時の生徒は今は孫の守りをする隠居の老婦人以上であり、幼児たちは五十代以上の人で、こうして育った心は横田の地域の教育文化の太い柱となった。今「相愛」の文字を刻んだ石碑が、千余名の教え子によって、かつての校舎の遺構横に建てられている。

信仰と文化活動

大正十二年に教会堂が完成した。舞台状の演台と一部二階付きで天井の高いホール（六百人収容可能）、各種の小部屋もある珍しいそして便利な木造建造物であった（現存し日本建築学会指定建造物）。



大正13年の横田町本町（大市）と教会堂

日曜日の朝と夕の大人の集会、午後の日曜学校は低中高別に、その中から育った青年も司会者となった。

土曜日の夜は和洋東西の童話・文学の物語と集団娯楽活動中心の集会が行われ、その中から日曜学校に進むものが多かった。小学校の中高学年の有志の集まりであった義勇会(男)・白百合会(女)は、聖歌と祈りのあと、勉強会・読書会・文芸その他の創作活動を行い、何年間か展示会や文集作りを自主的に行っていた。これがのち山陰で最初、全国でも十数カ所しかなかったボーイスカウト（救世義勇団と言った）二隊に発展した（ガールスカウトは計画だけに）。毎週一夜、宗教行事のあと結縄・救急・救難の各法の実際、手旗・モールスの信号までを修得し、団体娯楽競技にも興じた。毎年夏にはキャンプ生活を行い、一週間にわたって徒歩で荷物満載の大八車を押しての大行軍で、大社海岸・皆生の海浜での生活を楽しんだ。ほかに青年向けの聖書研究会も毎週行われ、新約旧約両書の研究を行い、テキストによって月一回レポートを東京に届けて添削もうけた。

さらに羽仁もと子提唱の友の会方式を加味した婦人集会も、家庭中心に行われ、衣食住の生活改良の研究実践、その発展としての衣類交換会やバザーも行い、各地の大災害発生の時には、一般にも呼びかけて物資や金銭による救援活動も行った。

地の塩

また毎年夏季修養会が一週間くらい開かれ、中央から講師を招いて深められていた。平素教会のみでなく、村内部落や他村においても集会が開かれた。自らを高める礼拝中心の信仰のみでなく、これを社会奉仕によって実践し、心の救済と社会文化の向上へと活動が続けられた。同志社の建学・留岡の地域づくり・山室の社会救済の重視等の精神は、教会を中心にみのりはじめ、奥出雲の一角に新しい地域づくりが萌え出でたのである。そしてキリスト教青年会（YMCA）・賀川豊彦提唱の生活協同組合への動きも胎動していた。

こうした各種活動の中から指導者もうまれた。出郷して学ぶ者、職についた者も帰郷の度に中央の文化活動や文物を土産物として持ち帰った。それをこの地のこの風土に生かしたから、

近隣の村に比べて二十年くらいの開きが生じた。山陰でラジオ受信装置の最も早く入ったのは、米子と横田であると当時いわれた。

十二月二十五日のクリスマスは、幼稚園女学校日曜学校義勇団や信者の集まりをこえて、村の年中最大行事の一つであって、昭和初年聖歌隊によるカンタータ、宗教色の唱歌劇、小演劇（幻灯映写つき）、さらに混声合唱まであり、舞台装置・照明にまで最新の工夫がこらされた。同九年松江放送局からは女学校を中心とする混声合唱の初放送も行われた。この活動の中で育った人で、西洋の音楽・美術・童話・文学さらに歴史に深入りして行くものも多かった。

戦後、信仰は静かに復活した。一般社会人は生き甲斐を文化活動に求めた。横田でもいち早く立ち上がったのは教会をめぐる活動で育った人たちで、戦前の豊かな土壌の上に先達として芽を吹き出させ、他村と比べて多彩でしかも香り高い文化活動の花を咲かせ注目された。

今日もその流れは続いているが、世代も変わりかつての連帯の絆（きずな）も薄れ、各地の動きと同じで、一人数役の自分のための稽古ごとのコンクールに堕した感はぬぐえない。

ここで「汝らは地の塩なり」の聖句の真の意味、キリスト教的人道主義から生まれた、自らを高めながら地域の奉仕者になるという、かつての心構えの再生浸透が望まれる。

（附記）

昭和33年の「郷土」5号（県内歴史研究誌・のち島根地方史研究と改題し、現在は山陰史談として発行）にたのまれて、「岡崎クニエ伝を掲載した。

その後、横田出身で松江で活躍され、幾多の貴重な著書を出版された伊藤菊之輔編「島根県人名辞典」（昭和45年刊）に、依頼をうけて「岡崎喜一郎」を執筆した。

昭和48年、山陰文化シリーズの一冊として「奥出雲の地の塩」（藤原道夫著）が刊行され、詳細な横田のキリスト教史が明らかにされた。

今年正月、米子高島屋において横田観光企画の主催で、「奥出雲の物産展」（工芸品と味と観光）が開催され、好評を博するとともに、絲原記念館の開館によって眼の向いていた奥出雲に一段と関心が集まり、特に横田の特色についても興味を示す人が多くなったので、その一端を紹介してほしいとの「新日本海新聞」の要望によって連載したものの再録が本号となった。五月中は筆者の在宅日数が一週間余に縮まり、それも追われ続けで、前号までのものの清書も出来ず、このようになった次第であるが、すでに岡崎喜一郎の掲載は予定していたものであった。

なお、文中の井上栄太郎については、75・77号の本誌に登載済みであり、また高梁市出身の留岡幸助・山室軍平、そして津山市の太田清三郎については、それぞれ数度現地を訪問し（横田史談会の史蹟めぐりほかで）調査を終えているので、いずれ登載したいと考えている。筆者が、留岡幸助の長男清男の教育観に若い時に大きい影響をうけていることは奇しき因縁であると思っている。岩波書店発行の雑誌「教育」を昭和十一年の創刊号近くから愛読していた。それは城戸幡太郎と留岡清男の編集によるもので、当時の執筆陣は、戦後の日本の民主主義教育を文部省・大学に在職して推進した若き時代の勝田守一、宮原誠一、宗像誠也、海後宗臣らであった。

その雑誌で知った若き福武直の「中国農村の社会学的研究」も私に大きい影響を与えていた。これも奇しきこと拙弟が、その人の下で学び、海後宗臣の子息とともにこの道を歩んでいるとは。

なお福武直氏（当時東大教授・津山市出身）は昭和31年、横田中学校において郡内小中学校教師のために講演し、社会学の立場から現下農村の甘えについても語られた。

（4頁最下段へ続く）

しばぐり五月句会抄

鳥雲の彼方に想い卒業す　浅野　としお
丹の花の椿の門を遍路衆　糸原　古志
母の手を離れ巧みに春泥跳ぶ　岡田　蹊花
雪解水谷間を出でて野に急ぐ　岡田　麗水
天平の甍ゆるやか春の雨　小川　あきお
呼びとめて花の噂や旅ごころ　加納　信子
捐介の誇りを忍ぶ山椿　高木　白虹
畦の雪消えてうれしく児ら走る　田邊　竹野
花に酔い一差し舞いぬ黒田節　新出谷　一華
雨音に解けし根雪の細まりぬ　錦織　富江
風花の吹雪に変えて町遠し　藤原　樵夫
春めきてつららの細り我に似て　峯石　美代子
浜の香を背負い門入る若布売　渡部　夕峰

斐乃上川柳五月抄

古傷を思い出させる桜咲く　若槻白馬
席取りに負けて花見がショボクレル　渡辺好之
畠を打ち年をとったと一人ごと　安部春恵
薬とも毒ともなると知って飲み　児玉哲呂
連休で兼業農家は地にもどり　安部正子
既になき命ながらえ今日の花　高木白虹
内緒だと聞いたが隣も知っている　松田牛歩
一輪の花かこつけて酒をくむ　石原世以
孫からの電話夫の歯が白い　松浦亜以
人形をあやす仕草も親に似て　真綿よし子
忙しいはずの女の立話　松浦木公
春めいて十日遅れの花だより　久村美津
小佐野公判フンケイの友何と思う　太田亀甲
子育てが上手と嫁が姑むかえ　藤原のぼる

六月の歌

雪消へのおそき年なり梅さくらともにふくらみ山椒の芽いまだ　常盤はるまさ
いつの日か美田となるを信じつゝ整備田に今日も石を拾へり　伊藤萩雨
晩鐘の峯にひびかひ植え終へし田の面に月光円かに照らす　野村節子
蒔き終えて鍬先洗う小川辺のよどみに紅き椿の花浮く　佐藤喜代子
南天にからみて蕾抱く鉄線を垣根にそっと戻してやりぬ　岡田時子
圃場田に寄りては離れるつばくらめ伽と思いつ肥ひろげする　小早川恵子
廃屋に惜しきつゝじの花盛り愛でにし人のありし日想ふ　藤原信子
妹の産れたりしをよろこびて来る人毎に孫は告げおり　景山悦子
田植待つ水田にからすただ一羽水鳥のごとしばし遊べり　松浦愛子
なだりたる蔭にひそけく群なしてうす紫のしやがの花咲く　永井弥生
別れたる想ひわびしく帰り来し夕べの闇に雷鳴ひゞく　安部夕波

大久保彦左ヱ門・大岡忠相
吉良義央・新門辰五郎
二宮金次郎・遠山金四郎

―庶民の中の武士②

日本史に登場する人物で、大岡越前守忠相（ただすけ）ほど有名な人はそう多くないが、近来はテレビによって水戸黄門さんに全く圧倒されたようだ。黄門諸国行脚の物語もほとんどが、つくり話の講談であると同じく、「大岡政談」で活躍する、機知に富み、人情味あふれた人物で、その上公明正大、胸のすくような裁判をする名裁判官大岡越前守の話は、実際に歴史上で活躍した大岡越前守忠相とは、これまたほとんど関係がない。

「実母継母の子供争」は、欲にからんだ継母が先妻の子どもを実子だといって争いになった。

越前守は、「子どもを中において両方から手を引きあい、勝ったほうに子どもを渡す」と申し渡した。痛がって泣きだすと実母は思わず手を離した云々の著名な裁判である。これは中国の裁判物の翻案であるという。

また著名な〝天一坊事件〟も実は忠相と同時代の有能な奉行稲生正武の仕事で、忠相若干協力したのみという。それでは「大岡政談」で庶民に親しまれた大岡越前守の姿は、政治家とは裁判官とはこうあってほしいという、庶民の願望が、大岡忠相という特異な政治家と結びついてできあがった、いわば歴史の虚像である。大久保彦左も黄門も同じである。四十七士の物語が今なお命脈をたもつのも、庶民のお役人への願望をあらわすものである。

忠相は三河以来の旗本大岡忠高の四子に生れ（延宝5 1677～宝暦元1751・75才歿）、八代将軍吉宗に仕えた希代の名奉行であったが、その実績は、目安箱の設置、町火消制度の創設、私娼の禁止、米価の調節などで、徳川中興の英主吉宗の行政面で大いに尽力したことであって、司法面では、白子屋おくま事件だけしか裁判していないという説が有力という。しかし人情の機微をうがって下情に通じており、簡潔明快な審理を行ったこと、部下にめぐまれ、与力・同心が奉行をたすけたといわれている。

1920石の旗本から三河に10000石を領する大名となったが、それは司法より行政の実績からという。

それから10年たって、横田小学校で県大会が開催された時、宗像誠也氏（当時東大教授・故人）は、このままでは教育の荒廃をもたらすと、教育制度を中心に鋭い指摘をなされた。今も思い起こし、当時の記録を読みかえしてかみしめている。二人の講演はともに、今日を予見したものであるから。

（横田史談会　高橋一郎）

産業考古学会全国大会は

8月28・29日両日、当町コミュニティーセンターにおいて開催されるが、すでに北は北海道、南は能本県から申し込みが届いている。地元の方の聴講を予定してある。

NHK面白クイズゼミナール

横田のそろばん業界の若手経営者の協力で、ようやく一年振りに実現した「そろばん」（四月一日放映）。鈴木アナウンサー、並木ディレクターに一言御礼をとNHKをたずね梶氏（前松江の放送部長）に案内頂いたが、丁度同番組の録画本番寸前で、伝言を依頼して辞した。この放送の反響は近来にないものという。

会員配布一部百五十円／六九一一六　島根県仁多郡横田町一〇K一一二　編集発行責任者・高橋一郎　頒布／横田史談会　発行／奥出雲文協　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第　111　号
（7月号）
昭和59. 7. 7
奥出雲編集集団

奥出雲を護持するため尼子氏の抬頭に抵抗し、その衰退に加担した

仁多郡西部の地頭飯島三沢氏物語④
（より道ー三沢氏の地盤形成時代は）

たたら製鉄と奥出雲

連載中の別稿で明らかにする予定であるが、奥出雲が今日、大変にたたらの本場だともてはやされていることに、いい気になっては、ほんとうの研究は進められない。本誌106号の日本全国の図をみて頂けばわかる通りである。今日いう「たたら」とは高殿をもつ砂鉄製錬のことをいうのは勿論であるが、こうした企業的方向の発生は、この奥出雲ではなく、他地方であり、奥出雲にこうした企業的製錬が入ったのは、先進地の山陽側からであると推定を越えた段階に私は立っている。

ところが、たたらの本場といわれるようになったのは（雲伯地方が）近世（徳川時代）半ば以降である。それは松江藩の鉄行政が当初はヂグザグな道を歩んだが、やがてとった施策が実に巧みであったことである。水田開拓に手腕をもつ土豪鉄師にしぼって（約半数以下）、株仲間方式をとらせて、消極的・積極的保護を加えたことである。チタンの少ない良質の真砂砂鉄地帯であり、盆地の少ない山林面積の多い、そして入組んだ谷々の多い、その上冬季雪の多い水田単作地帯で反収も少ない零細農地域であったことである。

また今日、「玉鋼」「玉鋼」ともてはやされているが、玉鋼と一般に言われ出したのは、第二次大戦中町内大呂に靖国鈩が設けられ、日本刀の貴重な材料とされたからであって、鉄師の記録の中では、全くこの言葉は見ることができない。しかも松江藩が鋼に注目したのも幕末で、外国船来国による海防問題がおきて、急に大砲・船の建造に眼が向きはじめてからである。それからのちでももとよりであるが、高殿たたらが出現してからはもとより、それ以前（後述予定）から、砂鉄製錬のねらいは銑（づく・鋳物鉄）であり、それのほとんどを、大鍛冶屋で包丁鉄（錬鉄・道具鉄）として売り出して、はじめて経営が成り立っていた。このことは忘れてはならない。しかも、幕末になるにしたがい、米価は6倍、鉄価は2倍の格差が大きかったから、経営はなみ大低ではなかったから、小土豪や水田開拓を怠った鉄師は廃業に追いこまれた。松江藩もそうした鉄師に保護を加えはしたが、米という財力基盤の弱い鉄師には保護にも限界があったから、見切りをつけ、水田所有面積の多い鉄師には藩が積極的に保護や便宜を与えたのである。

より道がさらに横道に入ったようであるが、引きかえして、三沢氏の出身地信州伊那谷の12〜13世紀の情況を次の三点から見ておきたい。当地方と比べて信州は、中央の歴史学者の発掘研究も、地方史家の研究も、極めて深いから残念ながら、当地来住以来の三沢氏の当地における地盤形成、勢力増強の様子も、三沢氏の出身地の伝統をみてそれから類推するよりほかにてだてがない。

すなわち、「砂鉄製錬」と「牧」（牧場における馬の飼育）と「土地開発」である。あまり時代を遡らせることは論旨をはずれるので、鎌倉幕府成立から承久の乱ころまで、即ち1200年前後、12世紀末から13世紀初頭ころから筆を起すことにする。

（参考）西岡虎之助の大著「荘園史の研究」の二巻、特に上巻。信州飯島町の桃沢氏の協力により頂いた長野県の「官牧考」（一素茂樹著）。信州の今井泰男著「信濃の鉄」（上）。駒ケ根市誌編さん委員倉田文和の紀要にのせられた論文。

さらにかなり前から数回来町もされ指導頂いている長野大学の野原健一提供の資料。および岩波新書「平将門」の諸研究と、「熊谷家伝記」（伊那谷の中世以降の開拓史を含む）に負うところが多い。

砂鉄製錬

これについての研究も当地より豊かである。こゝで特に強調し誤らないようにして頂くために述べておきたいのは、砂鉄製錬精錬には二つの系統があることである。今は簡単にのべるが、小（野）鍛冶がかつて自らやっていた、原始的なたたら製錬（今日ではこれが一部の刀匠に引き継がれて残っている）と、13世紀を少し遡ぼる平安末期から登場した、銅の鋳物（いもじ）師の系列か、或はこのころ渡来したかの、鉄の鋳物師の砂鉄製錬の発展したいわゆる今日のたたら製錬の二つがあることである。こう明瞭に述べるのは、素人の私の「めくら蛇におじず」の言ではじめてかもしれないが（後で論証）。

一般の人といっても当時はほとんど農民は、原始的な前者の方法で鉄を少々つくっていて、これを貢納させられていた。中

仁多郡西部の地頭飯島三沢氏④・庶民の中の旗本武士③・短歌・俳句・川柳

央の朝廷はこれらの貢納品や、占有しているやゝ進歩した鍛冶工の製作したもの（製錬から精錬そして製作）を納めて、荘園開発を行っていたが、次第に律令制のゆるみとともに、中央貴族や有力社寺が荘園を私有しはじめた。やがて地方の地頭武士が土地の私有をはじめた上に、中央で志を得られないものは地方に下って土着して行った。その下に各種工人（鍛冶も入る）が給田を与えられて居住し、主として製作にはげむようになった。当横田庄でも記録に明瞭にあらわれるのは、13世紀半ばで領家石清水八幡宮へ鉄を貢納している。これをめぐって当地方の武士間の争いも起っている。こうしたことは伊那谷に於ても同様であった。

牧

「牧」は大宝律令(701)の制定によって本格的になるのであるが、全国各地の軍団に供給する馬匹の飼育を目的とするもので、諸国に画一的に設置されたとみなされるものといわれるが、それが盛んであったのは、信州以遠の東国地方であった。官の制度はきちんとして、役人・牧の規模・構造から、繁殖に関すること、その奨励・賞与に至るまで定められていて、守られていた。

やがてこれが次第に、国の公牧から、個人の私牧へと変質し発展してゆくと、中央貴族の私有がはじまり、地方の豪族は自らの力によって開発した土地を護るために私兵を貯えるようになると、私牧の経営をはじめ、これが中心に騎兵武士を置く武士団の形成へと進んでいった。

特に東国に牧が多かったから、日常的騎馬習慣と、質的によくて数の多い騎馬をもつ武士団が西国に比べてはるかに多くなったから、次第に戦斗的となっていった。東国武士の頭梁としての源氏と、西国武士の頭梁としての平氏の成立となった時、そこに明らかな差が諸要因を加えて生じてきて、12世紀末の源平合戦へとつながったのである。

牧の多かった信州で、北部に比べて南部の狭谷地帯である伊那谷は数は少なかったが存在し、次第に私牧へと変質して行ったのである。

当地の土居・安部氏の祖は小笠原氏であるが、清和源氏の嫡流（摂津の多田庄に住した満仲、末孫が源頼朝）の支流が、甲斐国の小笠原牧の官人となって下ったものが武士化し信州に移った。その後胤が京に公役をうけて出仕し、やがて北朝上皇の御所にいたのが、命をうけてその御料所であった、当横田庄に代官として来住したものである。

三沢氏の祖飯島氏は（山陰史談16号・奥出雲100・101号ほか参照）満仲の六人兄弟の末弟満快が信州の北部に下って居住した分流で、伊那谷の飯島に住んだので飯島氏と称したものである。

土地開発

中世武士の土地開発のあとをたどると、大河川を潅漑用水として利用することは困難であった。わが国の中間・辺境地帯では一般に、台地の麓の自然湧水地帯や、河川の自然堤防の後背湿地、或は谷地（やち）田の開発、小川（谷川）の利用による開発が多いが、小河川の利用は多くの労働力を必要としたから、在地農民には無理であって、武士は在地農民の開墾地（即ち谷地田）を

二宮尊徳（金次郎）
庶民の中の旗本武士③

夏が来れば思い出す
はるかな尾瀬　遠い空
霧の中にうかびくる
やさしい影　野の小径
水芭蕉の花が咲いてる
夢見て咲いている水の辺り
石楠花色にたそがれる
はるかな尾瀬　遠い空

戦後のラジオ放送で人々の心に、この歌ほど（江間章子詞・中田喜直曲）なつかしさを充せた歌は珍らしかった。これが北関東の尾瀬に人々を毎年のように多く引きつける糸口ともなった。いつかと思いつゝもいまだ果せず、私にとっても遥るかな尾瀬である。

ことしの初夏、戦後はじめて箱根を訪れて一泊し、二日間かけて、車で内輪山を中心に一周もした。町立の仙石原湿生植物園に入ると水芭蕉の花の盛りであった。秘かにこの歌を口ずさんで写真で見た尾瀬も思い出した。こゝでは愚妻の見物時間にあわせたので、思いのほか見ることができた。親切な案内板と解説で、日本各地に点在している湿地帯の植物のほか、乾いた草原や林の植物、低地から高山へ、また初期の湿原から発達した湿原へと観察できるよう工夫されていた。素朴な飯石郡来島の湿原（枯死が憂えられている、救済の方途は）とも違って、周囲には大きい森林はなかったが、別な楽しさがあった。しかし歌からの印象は強く、深い森の中の尾瀬の水芭蕉がみたい気はより強くなったが、日程もとれず新宿の西武デパートで出版されたばかりの、黄版の新書「尾瀬」を求めて、わずかに心を満たした。

親切な運転手で、私の意図を察したのか、うまく廻ってくれて、関所趾はもとより、天下の険と歌われたあたり、旧道も味わって昔をしのんだ。酒匂川のほとりもすぎた時、金次郎が幼ない時、堤防工事に従ったというのはどこらあたりであろうかと思ったが、かつて読本の絵にあったような川岸は全くなく、コンクリートの河岸が続いていた。こゝもかと心を落した。小田原城内のさる人を訪ねて、ビルの谷間に再び帰った。新書を

接収する一方、これらの農民を組織化の方向へ向けることによって、小河川利用の開拓へ向ったのである。

横田盆地をみても、今の斐伊川の両岸は徳川期になってから水田化が進んでおり、特に中河原などは、斐伊川本流、山奥川・蔵屋川・五反田川の合流地にあたり、開田されたのは徳川中期からである。（横田町誌参照）

三沢氏が三沢に山城を築いて開墾を進めたのは、城の周辺の谷地田であり、次第に同心円の如く外縁へと開発を進めていることも、山陰史談で明らかにしたところである。それは代々領主がその庶子を次第に配置して、開発をすゝめて行ったものである。さらに城の周辺に眼をうつすと、城山の東の山麓は放牧場であり、柵があり厩が置かれ、こゝに野生の野馬を放して馴致・調教した。城山の西側には馬場がある。その牧場の下方に武士の館があり、さらに下って畑

七月のうた

鶉豆乾きておれば折りたたむ莚の中にざわざわとなる　常盤　はるまさ

サラ金のむごき記事のる新聞をたたみて牡丹の庭に下駄はく　永井　やよい

諍ひし悔い抱きつつ皿洗ふ厨の窓に月かげ淡し　松浦　愛子

ダム釣り場に急ぐ山径カンテラの灯りに入りし山百合の花　伊藤　萩雨

若葉萌える三瓶の裾のひとつ家に風に勢う鯉のぼり見ゆ　佐藤　喜代子

深山路に山芍薬を見つけたり卵の如き花の咲きたり　景山　悦子

草陰に一輪ありて昼顔の柔き花びら雨にぬれつつ　小早川　恵子

残されし三人の育児に悲しめるいとまなしといふ姪の目さびし　藤原　信子

春巡りつばくろ古巣に戻りたり牛舎の小窓すこし開けやる　岡田　時子

手をとりて教へ給ひし亡姑なりき農を守りて四十年を来し　野村　節子

わが旅も終りとならむ暮れてゆく越前岬に海を見て佇つ　安部　夕波

読むと、尾瀬を拓きそして育て守ったのは、平野家三代であることは知っていたが、初代長蔵が沼畔に山小屋を建てて40余年、三代ともつゝましく自然と「共生」する道を模索し、ときには電力会社による取水に、或は自動車道路の建設に身を挺して斗うことを余儀なくされたあとを深く知った。三代目はそのために若死し、二代が老いてなお、幾度も破壊の危機に瀕しながら、守ってきたその精神と行動には眼をうるませた。まだ未解決の問題があり、いつ環境破壊の状況が舞い込むかもしれないという。明治3年生れの初代長蔵が尾瀬を護るための努力をしている一方、利益を追う村民の反対は遂に長蔵を生れ故郷から追い出した。37年から大正11年まで、失意の時代住んで、夏の間尾瀬に通い続けたのは、尾瀬に近い栃木県日光の今市であった。

そして永住を決意し、村民だけでなく、波乱萬畳・孤軍、県・政府を相手としてこゝを守り通して育ててきたのである。失意時代の地今市は、実は二宮尊徳終焉の地であることを知って驚いた。天明7年（1887）小田原に生れた尊徳は、35才で活動の地を栃木に移し、安政2年（1855）ここで69才の生涯を終えている。キリスト教徒であった内村鑑三は「尊徳にはピューリタン（清教徒ー清純にして厳正勤厳な宗教道徳を追求するキリスト教一派）の血が通っているところがあった」と評価しているという。幼い時から教わって私の脳裡に焼きついている金次郎像は、今も変らぬが、尊徳の思想と実践は自らの信じたことを貫き通そうとした長蔵とは無縁ではなかったのだと思うことによって、より深められてきた。

今市では彼の荒地復興の仕法や人柄が、村人にしっかり生きていた。長蔵が生れたのは尊徳の死後14年目である。長蔵の子長英（大正7年）も幼児時代近所の人が「尊徳さん」と呼んでいろんな逸話を語っていたという。

尊徳の祖父は二町三反の小地主で、父利右ヱ門の長子が金次郎。14才の時酒匂川の氾濫で一家は没落、貧窮の中で父は病死、ついで母も歿した。幼い二人の弟をかゝえて死斗といえる生活苦の中に放り出された。しばかり、縄ないはこの頃である。24才で田畑一町四反をもち、26才で小田原藩家老服部家の若党となり、31才でやっと妻帯。天保13年（1842）幕府の水野忠邦の抜擢をうけ、利根川分水路見分目論見御用となった。この時士分となる。天保改革の実務者の一人となった。弘化6年（1849）幕命によって日光仕法に着手。仕法には彼の考えた「分度」と「推譲」を根本とした。この日光神領荒地開拓調査とともに山を歩き、土壌を調べ民情をたずねて集大成した大作が「日光仕法雛形」84冊であるという。のち各地の仕法をなし、農地を復興させ、剰余を農民に還元した。尊徳がもつ自然観察眼と合理主義精神は、幕府の改革を実践的に推進し、どれほど農村を復興したか数知れないという。晩年今市で過し、病気をおさえて杖に支えられ山野をまわり、安政3年こゝで歿した。身長180センチ体重90キロの偉丈夫であった尊徳は、寝ている住民を腕ずくで引っぱり出して復興作業に駆り出したともいわれ、「ヤクザより恐ろしかった」反面、「尊徳さんから褒美にもらったカサだよ」と保存されているという。

六月句抄

葱坊主揃へば季節定まりぬ　糸原古志
新樹光口笛誰にも憚らず　岡田蹊花
春愁やケースの中の京人形　岡田麗水
黒揚羽花満開に去らず舞う　小川あきお
夏めきて川面に子等のはしゃぐ声　門脇花子
二三本踏むにしのびぬ畦わらび　加納信子
山荘にしばし憩いの古茶うれし　高木白虹
老二人語る事なく山笑う　新出谷一華
川土手のタンポポかすか葉のゆるる　錦織富江
山はだをようやく芽木がつくろいて　峰石美代子
元気かと孫の電話や梅雨に入る　渡部夕峰

斐乃上川柳六月抄

ふり向いて見れば相手もうしろ向き　松浦亜以
パッチリと固めた城に虫がつき　渡辺好之
農政に頼らず天を頼るだけ　松田牛歩
綱引きは校長遂に立ちあがり　児玉哲呂
おぼろ火の炬燵うとうと春の雨　若槻白馬
南天が枯れて気になる隠居部屋　太田亀甲
泥おとし昔ながらの関参り　松浦木公
雨ふって今夜はホッと床に入る　安部春恵
サツキ展一目惚れして病みつきに　久村美津
つゝじ持ち登校する子の顔ほがら　佐佐木千世
ねぎらいもほしい田植の後始末　真綿よし子
病院で恋し我が家の音尋ね　安部正子
鼻歌が欠伸に変るしまい風呂　加納治江
老兵会お国訛りの花が咲く　高木白虹
孫の留守卓に一輪花生ける　藤原千代子
自由化に乗り害虫も上陸し　藤原のぼる

や、湧水を利用する水田が開かれていった。三沢氏が開拓して行った他の小字の地形や住居の位置をみる時、やはりその根本様態の名残りを留めているところが多い。今はないが昔土豪が住んだというのは、小河川の水を引くに都合のよい場所にあって、水利権を握って開拓をすゝめたあとをまざまざとみせつけてくれる。

こうした生活のかたわら、農具を馬具を、さらに武具、武器を製作する工人をかかえて、農鉱工一体となって力を貯えている。当時はまだ鉄穴流しではなく、鉄穴を掘って砂と洗って砂鉄をとったり、川砂鉄を集める時代である。

こうして造られた武具武器はもとより、農具も貸与したり給与していた。他方、酒・木工細工・鋳物・織物・染物・糸なども、かつて宮廷が部の民をもってまかない、やがてそれが庄園を有する貴族や有名社寺が庄園内に貢納を要求するようになっていったと同じように、土豪によって地方でそれが行われはじめた。そして武士化もして行った。土豪武士の一族は武装した騎馬兵で、数は少なかったが精兵であった。一般農民は専らその恩恵をうける側にあったから、事に望んでは領主でもある土豪武士に従った。しかしこれは武装というほどのものもない兵であったが、当時の戦いでは、これらの兵(夫兵)の数が多いと対峙した時に勝ることになり頼りになるものであった。しかし戦局が不利になると、戦場から離脱するのが常であった。従って庶子を各地に配置（小字位に）し、開拓を進め、馬を養い、武器を貯えて、これらの組織化も計って行ったのである。三沢氏の系図をみ、当地に残る古文書、棟札をみる時それを明瞭によみとることができる。

しかしこうした武士団の構成が大きく変るのは、巨大化する武士団の出現と領地争いの発生であり、弱小武士団は領地を護るための集合離散、そして遂に応仁の乱となってからである。技術工人の地方への分散、武士化しない土豪の成長、やがて農のかたわら技術工を副業とするものの出現は専業的傾向をうみ、自給自足から交易の必要性の出現となって、いくつかの生産物をまとめて交易するものの出現となってゆく。そして専業者集団地の出現、やがて城下町への集中となってゆくのである。しかし三沢氏が地盤を築いた14世紀そして15世紀前半は、まだまだ武士団中心の地域形態の時代であったから、環境と原料と才ある武士の統領に恵まれた地帯の武士団は強固であった。

その一つが三沢氏で、出雲の最奥にあって資源にも恵まれ、実力を貯えるにはもっともよく、隠然たる勢力をもっており、その余裕を下流地域に供給もしていたのである。加えて伝統ある騎馬兵も温存していたのである。

こうした三沢氏を理解しておいていよいよ15世紀のこの地の各地の諸氏武士団を展望することにしたい。

別途に以上のことを詳述したいが、素人あがりの郷土史愛好者の自然の成行きの巾広さは、基礎的研究の浅さというより、無きに等しい力ではまゝならない現状であることを痛感する。

（横田史談会　高橋一郎）

会員配布一部百五十円／六九九—一六　島根県仁多郡横田町一〇六一二　編集発行責任者・高橋一郎　頒布／横田史談会　発行／奥出雲文協　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第　112　号
（8月号）
昭和59. 8. 4
奥出雲編集集団

奥出雲を護持するため尼子氏の抬頭に抵抗し、その衰退に加担した

仁多郡西部の地頭飯島三沢氏物語⑤

新補地頭の定住地

本誌107号の2頁にのせてある④のⒹ地頭領の表にあるように、承久の変後、次第にこの地に来住した地頭は約60に達する諸氏で（中には同族とか兄弟が分散して入ってもいる）。その所領は5,600～3,000町歩にも及び、出雲国の5,000町歩の半分以上となる。鎌倉幕府創設とともに守護地頭が置かれ、はじめて出雲の守護となったのは宇多源氏で近江の佐々木氏であって、その一門は出雲国内の平原部に拡がっていた。やがて先の新補地頭が次第にこれらの諸氏の間や、主として国内諸川の流域奥地の所領に下って来た。そして40～50年を経た時には、守護一門や初期地頭の所領を上廻る面積となっていた。三沢氏ほどに奥地であって、ついに広い地域を支配したほどまでにも至らなくても、それに劣らぬ努力を続け、前号にのべたように、営々と開拓にも従い地盤を築きあげていったのである。

そして14世紀末の明徳の乱を迎えたころまでには長いものは160年、短くても120年余の開拓領主として土着していたのである。

乱が終ると山名氏にかわって出雲・隠岐は再び、かつての出雲守護佐々木氏の本家になる近江の佐々木氏（分れて近江北半国は京極氏、南半国六角氏となる）流の京極氏の所領に復し、高詮が守護に還補された。高詮はほかに飛騨一国の守護もかねていた。

山名氏が明徳の乱まで約40年出雲の守護であった時代の支配については明らかではないが、仙洞御料所横田庄内の岩屋寺、横田八幡宮の文書でみる限りは、事ある時には所領安堵寄進などの直書などを発している。推察するに庄内は荘官などを通して支配し、各地の地頭にはやはり所領安堵を通して行っていたと思われるから、六分一殿と当時いわれた山名一門の権勢によって支配のできる時代であったし、室町幕府も初期で権威も及び、地頭間の均衡もとれていたと考えられる。

京極氏が守護に還補すると、109号1頁最下段にのべたように在来は、守護代として直ちにその一門の尼子氏が下ったとされる軍記物に従っていたが、それはすでに否定され、はじめは京極氏の直臣隠岐氏ついで同じく宇賀野氏が、近江から守護代として下って来ていることが確認されている。

それでは京極氏が還補されてからのちの、出雲隠岐領国支配の実態を、さきにのべた今岡論文を主軸として、若干私が明らかにした当地の三沢氏の動きを加えて述べることにする。

三沢氏

三沢氏と京極氏との関係を、滋賀県の坂田郡誌・高島郡誌（三沢氏が京極氏からうけていた所領があったところで、のち天正初年三沢氏当地最後の領主14代為虎の異母兄が、これを分有してこの地に移っている。その後胤が、仙台伊達騒動禍中の人物亀千代のちの藩主綱村の生母三沢初子であって、その弟はのち、仙台の北今日の岩手県前沢町を領して幕末に至っている。近江時代の分流は鳥取藩士となったもの、久留米藩士となったものがあっていずれも末胤が現存している。）

より、当地から長駆して近江に遠征しながら力となっていることを知り、前号にのべたような一応の三沢氏の地頭としての成長基盤を明らかにし得たのである。

まだ開拓の跡を実地に考えてみること、そして成長振りを明らかにすることのために、集めた資料の整理が残っているが、たたら研究その他によって、そのまゝ机上に積み上げたまゝになっている。

こうして京極・三沢両氏の関連年表をつくってみると、在来のあまりにも劇的な物語りの多い尼子氏についての、物語りのみでなくその存在のし方にも疑問を幾つも持ち出したのである。文明18年の尼子経久富田城奪取の話（初期）と、中・晩期の尼子十旗の虚構であるなどのことで

の中から拾い上げてみて、三沢氏が並々ならぬ実力を有してお

産業考古学会
全国大会
8月28日（火）
午後1.30～5.30（研究発表）
横田コミュニティセンター

地元の方の傍聴について便宜をはかるよう取計います。

仁多郡西部の地頭飯島三沢氏⑤・庶民の中の旗本武士④・川柳・短歌・俳句

ある。そして新旧県史にのる資料にも疑問をもちつゝも、私の素人なるが故、進展をみずにいたのであるが。

尼子殿御代官とは

その文書は康正二年（1,456）の四通（七月～十二月）である。本文は省略するが、日御碕社と杵築大社との境界論争にまつわるもので、その成敗を求めた守護の文書である。その中の三通の充所（宛先）は次のようである。

尼子殿　（2通）
　御代官
三沢対島守殿　（為在のこと）

尼子殿
　御代官　（1通）
三沢対島守殿
神西三河守殿
牛尾神五郎殿
牛　尾　族中

今岡論文によって明らかにされたのは概略つぎのようである。

京極高詮から高光・持高・政経に至るまでの出雲守護の発給文書のうち、単なる書状や寄進状を除いて、公的な様式をもち、直接守護権限に関係するものは80通残っていてそれらはすべて、様式上は歴代守護の直状（60通）と守護奉行人（守護権限の一部依託代行者）の連署奉書（20通）である。

この80通のうち事柄の当事者に直接充てられたものを除いて、守護権限の現地における執行者に充てられたものを検討してみると、応仁・文明期（応仁元1,467～文明18 1,486）以前で14通ある。

先のように充所に、尼子殿と書いた文書の発給者（発信人）は、すべて守護奉行人の連署したものである。

今までは宛所をみて、三沢対島守を尼子氏の代官とみており、さらに発給者の連署奉行人も尼子氏の代官と解釈されていた。

しかし4人も代官がいることは考えられないし、「尼子殿御代官」の充所のある文書は、京極氏当主の直状には一通もないことを考えると、室町幕府の奉行人奉書（奉書は主人の意を奉じて発給する文書。この時代は盛んに行われた書式）が、細川・斯波・畠山の三管領を直接の充所としなかったとするのが、研究者の一致した見解であるのと同じく、これも尼子氏が京極氏の一族であったための表敬の書式であると考えるべきであるという。

すると尼子氏は、先の康正年間においては、三沢氏等の出雲の伝統的国人と並列的な立場で、守護権限の遵行にあたっている事になり、在来の尼子氏が守護代として一貫していたとして来ていたことの再検討が必要であって、それは否定されなければならない。

論文にある14通の一覧表をみると、充所がつねに動いていて、しかも同時に複数の者が守護権限の執行にあたっているから、出雲に於ては当時守護代のような制度はその存在を見出せないし、さらに下部の機構（小守護代・郡代）などに伝達した例もないから、京極氏の出雲領国支配機構は制度的に他に比べて、さほど整ってもいないことになる。

こゝで私は先にあげた両郡誌を再検討してみると、資料集がなく、引用されたもののみからみても、支配機構は京極氏の本貫地であるからでもあるが整っているようである。

三沢氏ら国人衆の地盤は堅い

さらに文書の内容をみると、著名な杵築大社三月会（国内の地頭すべてをあげて務める祭事）に関するものがある。これは国内の領主階級の共同秩序の維持にかゝわる重要なものであり（2通）、ついで日御碕社検校職（神官職）の相論に関するもの（6通）、そして日御碕社と杵築大社の境界論争に関するものであって（2通）、出雲の代表有力社寺勢力間の調停に関する裏要なものである。他の4通も鰐渕寺などのそれに近いもので、守護京極氏の下で出雲国における守護権限の何らかの執行機関の機能する場合が、国内の有力寺社や国人などの伝統的勢力相互の関係を調整し、国内の秩序（島大井上教授によれば、古代中世における出雲の歴史上における特質として重要視しておられる）を維持せねばならない場合がほとんどである。

逆にいえば、他の有力な勢力との競合が起らぬ場合は、そのような執行機関の機能する必要はなかったのであり、それは国内の伝統的勢力に対する守護権力の介入が極めて困難であったことを物語っていると考えるべきであるとしている。さらにいえばこれによらねば出雲支配の成立もしなかったとみるべきである。（こゝで私は横田庄内における横田八幡宮と大催杠氏の問題を想起する。このことについては今連載を中断しているが、やがて再開する考えでいる。）

杵築大社・日御碕社をはじめとする国内の有力社寺勢力は強いばかりでなく、大社の出雲国造家は、107号2頁にみるごとく、広い社領をもち、幕府御家人となって惣領的な武士団編成を遂げ、自立的な地域支配権力体制を構築していた。日御碕社もほぼ同様であったと考えられる。すると出雲に於ける守護権限のあり方は、こうしたところに特色がある。すなわち文書をみても国造家が守護権力に連なって権限執行の一端を担っているとされる。

次に考えねばならぬのは守護権限執行に携わっている諸氏即ち充所の性格である。ほとんどが京極入部以前からの出雲国の

伝統的国人層である。のち持清の時代に新しい支配機構として、「郡奉行」があらわれるがやはりそうである。私の見解も加えてみると、（107号2頁参照）

o初代守護佐々木氏の末流で南北朝期守護塩冶氏の分流の国人衆 ——

古志・大熊

o新補地頭からの国人衆 ——

松田 —（相模の源氏出身）

大西・毛尾（中沢）・三沢（飯島）—（伊那源氏出身）

であって、

oそのほか

神西—室町時代から神門郡住

若宮—京極氏の下での所司代の一族

であって、度々のべるごとく、土着といえるほど領内を堅固にしている国侍—国人衆である。

そして発給者が京極氏当主の直書以外はすべて守護奉行人であるが、ほとんどそれは京都或は近江における京極氏膝下の機関であって、出雲国支配のために編成されるような事はなかったと言えるという。

以上からみると、京極氏の守護としての出雲領国支配は、整然とした支配機構をもったものでなく、有力寺社、国人等の国内における伝統的勢力の自立性を前提として、彼等に権限の行使を委ねて行われていたと考えられることになる。京極氏の本拠近江と出雲との隔りにも原因があると考えられるが、大内氏が周防以外に領国にも一族・譜代を守護代に配置していたのと比較すれば、出雲の歴史的特質があり、伝統勢力間の秩序が根強く息づいており、京極氏の領国支配はそれに強く規制されていたことになる。

一地頭出身で戦国大名に成長し、尼子氏にかわって中国地方に君臨した毛利氏の領国支配についていずれのべるが、大きい基本的相違があり、しかも尼子氏はこの弱体といえる京極氏の権力構造を引継いで改造することなく戦いにあけくれた道をたどっていたといってよい。尼子氏の虚像は若干くずれる。私はすでに尼子経久の母（真木氏）は馬木郷の馬来氏と関係がないことを明らかにしたし、かねてから抱いている尼子十旗は虚構であることも明らかにしたい。いずれも尼子氏の権力構造にかゝわる問題である。今しばらく今岡論文を借りて考えることにする。

斐乃上川柳七月抄

言い合いを生きがいにして老二人　松浦木公
風鈴の静かな音を昼寝して　安部春恵
隠居部屋鬼の居ぬ間のコップ酒　渡辺好之
雨待って二日降ったらいやみ言い　安部正子
日川大会一生一度の風に会う　若槻白馬
保険満期これでは建たぬ隠居部屋　太田亀甲
遷る世に空蝉だけの仁王門　高木白虹
数々の作品遺して一人旅　久村美津
送り出す数だけやっとちまき出来　佐佐木千世
いやだわと云いつゝ女骨が抜け　松田牛歩
さわやかに風吹き予報みごとはずれ　児玉哲呂
優しい詩よんで優しい今日になり　藤原千代子
病める街濡れ色みせぬプラタナス　藤原のぼる

吉良上野介義央

庶民の中の旗本武士④

（原文）
滄浪之水清兮、可以濯吾纓。
滄浪之水濁兮、可以濯吾足。

（よみ）
滄浪（濁水の下流）の水清まば、以て吾が纓を濯う可く、
滄浪の水濁らば、以て吾が足を濯う可し

（いみ）
世が治まり、道の行われる時は、冠のひもを洗って出て仕えるがよし、道の行われぬ時は、足を洗って世をかくれればよい。世の成りゆきに従って生きればよいので、強いてわれ一人潔うして世に逆らわぬがよいではないか。

屈原（前339〜278の中国・楚の国—揚水江両側にわたる国の人）の「漁父の辞」の終りの一節にのる、当時の流行歌である。

屈原は楚の国の襄王によって高官から放逐されたが、楚の人々はすべてが、その弟子蘭の讒言によるものと同情していた。屈原は大江（揚水江）をさかのぼり、10年余り上流の江南地方を流浪した。その間の長文の詩は著名である。

しかし流浪生活にも何の望みも絶え果て、小人の讒は主君に聡明のない故で、いつかこのことは後世明らかになるであろう。

言いたいことは沢山あるが、言わずして渕に沈もうと、懐沙（沙石をいだいて）の賦を作り、石を抱いてついに自ら汨羅（長沙にある湖）に身を投げて死んだ。「漁父の辞」は屈原と漁父の対話の形式をとった詩で、漁父（漁夫）は、「なぜ深く考え高尚に振舞い、みすみす放逐を招かれたのか、濁りをより濁して波を高くし、衆人が皆酔っておればともによいしれぬのか」と問うたのに、屈原は「どうして潔白なこの身体に世俗の塵を受けられよう」と答えた。漁父はにっこと打ち笑い、船ばたを叩いてさきの流行歌を歌って船を漕ぎ去ったという文である。

その後、楚は北方の秦に欺かれつづけ、屈原が「懐沙」で予想した通り、国を亡ぼす結果となった。屈原のこの孤高の精神は、楚の国の人々のながく痛惜するところであったという。中国現代の文人郭沫若もこれを常に愛誦したという。

（前号訂正）2頁3段1行　安部氏の祖・　4頁3段17行　砂を洗って

八月のうた

暴走に死ぬ若者よ生きたきも死に征かされし兵の日ありしに　常盤　はるまさ

返したき言葉をのみて膝の上の皺深まりし手の甲を見る　永井　弥生

ふるさとは蛍袋の花群れし土橋のありてメダカ泳げり　岡田　時子

いま殻を脱ぎしか蝉の艶めきてけだるき昼を啼きてまた啼く　松浦　愛子

いつまでの付き合ひなるや老妻と女孫を中にし川の字に寝る　伊藤　萩雨

露草の藍のわずかに見え初めて梅雨の名残りの小糠雨ふる　小早川　恵子

孫たちの帰省にあわせ播きし黍の早うれそめて盆のまだるる　藤原　信子

勧誘の労にほだされ農協の共済加入の印を捺したり　児玉　敏郎

金髪を撫でつつその母は親しげにニホンノゴハン大好きと言ふ　景山　悦子

いくたびもいくたびも時刻表確かめて戦友会に夫は旅発つ　佐藤　喜代子

開パイの畑にいますと小三の孫に書きおき豆蒔に出ず　野村　節子

この愛をうしなひたくなしわがいのち消へ果つるまで炎燃やさむ　安部　夕波

六月互選句抄

新緑に一両列車の音曲る　錦織　富江

街の灯を泰山木の花は受け　渡部　夕峰

ひなげしやかよわき彩の吹きだまり　峯石　美代子

三月待ち蘭の開花を見るを得し　田辺　竹野

親仔牛引出す庭や柿若葉　岡田　麗水

せまきほどひろげ散らして衣更　門脇　花子

松平入樹上の人の上に天　糸原　古志

孫に手を曳かるる儘に鉄線花　新出谷　一華

鎌触れし山椒あたりへ香をこぼす　岡田　蹊花

母の忌日内輪ばかりの豌豆飯　小川　あきお

初夏の一夜かつて五年間生活をともにした十数名が、海潮温泉に一泊して久闊をいやした。

酒宴に入る前、今書家として活躍している野津渋生に、それぞれ卒業以来49年の思いもこめた、詞文の揮毫をたのんだ。植物を愛して専攻し京都府下の高校長を最後に奈良県境に、植物を友として自適しているYは、当時30才前の詩人であり漢学に学識の深かった木島俊太郎（元県教育長）先生の名講義の中で、最も印象に生涯を通じて残り続けたものとして、「漁父の辞」を空んじて所望した。私はそれに耳を傾けつゝ冒頭の句だろうと思いつゝ、集まった者の中でこれに反応するものは誰かと周囲もゆっくり見廻していた。筆をおいてからの反応は私の想像していたのと同じであった。教育の道をひたすら歩み、今もそれを貫いて自適しているものは誦和し、師の若き時代の名講義ぶりを想起して語り、49年の歳月なきが如きであり、屈原の心を肯定することを言外にただよわせる言葉を吐いていた。

一方在職中から上を向いて歩き、今も社会を泳ぎぬいて、政治らしいかゝわりにあるものは黙しているが、書生っぽいことだとうけ流していた。

赤穂浪士四十七士で知られる**吉良上野介義央**（よしひさ）の祖父は義弥（よしみつ）といゝ、室町幕府以来続いた名家であった。関ガ原の合戦後たびたび重なる功によって官位を進められたが、のち官位を進めることばかりがわが家の使命ではないと固辞し、将軍の相伴家として室町以来の伝統をまもり、典礼の使の家柄をまもったという。その子義冬も同様でその子が義央であった。

寛永18年（1,641）生れで、吉良家が幕府高家中の筆頭で、典礼に精通し京官の殿中接待の最適者といわれていたが、これが赤穂浪士襲撃事件をひき起す一因となった。義央は母・妻ともに閨閥もよく、13才にして幕府に出仕し、間もなく権門に連なり、典礼と有職故実（儀式・礼儀・服装など）に通じていたことから、一説には諸大名に尊大であり、性貪欲飽くところ知らず、上野と事を共にするには多分の賄路を贈って、その指揮を乞わざるを得なかったというが、一方封地の三河国吉良荘では領民の間に善政を称されたともいう。

赤穂城主浅野長矩が元禄14年（1,701）遂に刃傷に及んだ話はよく知られたことである。義央の子上杉綱憲は父の身辺を案じ、病気を理由に隠居をすゝめ、やがて幕府も世論を考え御役御免とした。転居したのが浪士の討ち入りのあった、本所松坂町であった。自身も赤穂藩の動静や、大石の身辺に警戒の目をむけていたが、仝15年12月14日不幸な夜を迎え、邸内炭部屋で間光興（はざまみつおき）のために刺された。時に60才、その養子であった義周は諏訪へ流罪となり、家は断絶した。

大石以下四十七士の処置に対して幕府は苦慮した。諸大名旗本の中にも庶民と同じ気持ちを抱くものも少なからずあったが、将軍綱吉に重用されていた荻生徂徠の説く儒学の本質は礼・楽・刑・政にありとした立場の建言を入れながらも、なお上野寛永寺の座主法親王の法衣の余恵にもすがったが、道を通すこそ仏の慈悲であるとの言葉で、処刑に踏み切ったのであった。

（蓬頭子）

会員配布一部百五十円／六九九—一六　島根県仁多郡横田町一〇六—一二　編集発行責任者・高橋一郎　頒布／横田史談会　発行／奥出雲文協　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原猪史夫書

第113号
（9月号）
昭和59. 9. 1
奥出雲編集集団

奥出雲のたたら製鉄史⑥

新資料にもとづく、特に東南部のその技術・経済・社会・文化の総合史
——在来説の修正と仮説——

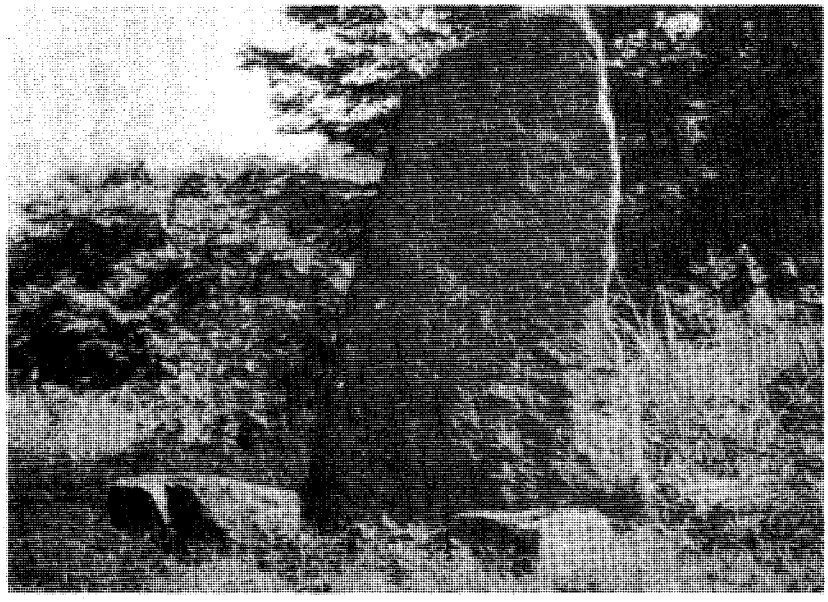
産業考古学会全国大会（横田会場）において、地元発表者として在来のたたらに関する歴史の基本的考え方に対し、文書資料にもとづいて、一部修正見解を提示するとともに、それによって近世初期以前のたたらについて仮説を提示したのが本文で、要点は全国大会予告をかねて地方紙（山陰中央新報）のすすめにより掲載したものを書きあらためたものである。

たたらに二つの流れを考える

（炒鋼法）　五世紀後期に築造されたとみられる稲荷山古墳の鉄剣からX線透視法によって発見された150の象嵌文字を精密に解読するため、とりのぞかれた表面の錆の一部分六個の小片（総量0.2グラム）の組織分析と化学分析の結果を検討した。新日本製鉄の研究所のグループは、その地金は古代中国で炒鋼法（後述）によって、中国江南地方の銅の含有量の高い磁鉄鉱石からつくられたもので、その鍛造はわが国で行われたものとみられることを明らかにした。承ればこの研究は、在来の考古学上の出土鉄器、鉱滓等の分析、それにもとづく時代推定、一部の日本刀の研究についても再検討の必要を誘発し、在来の説の修正にも及ぶ可能性があるという。

しかし科学の進歩はさらに再修正を誘発するから、結論はあせらず、次の世代さらに次の世代に託さねばならぬという、科学者の基本態度も強調されていた。

（海線鉄法）　かねてから古代の製鉄法の復元に、生活のすべてをかけておられる釜石の飯沼氏の、昨秋の実験をこの春くわしく聞く機会があった。私は二〜三回この方の発表に接し、そのひたむきな誠実な研究に感銘を受けていた。釜石地方に産する餅鉄（磁鉄鉱を含む原鉱）を砕いて、木炭によって還元を試みた実験で、近くの中学校の校庭で、一週間前に雨が降ったので薪木を燃やして乾燥させたのち行われた。送風は中古品の電気掃除器2台で両側から行った。谷合いから吹き上げる自然風よりもはるかに弱いものであったのに、5時間燃やして若干還元（鉱石の中に酸化鉄として存在する鉄を、木炭から出る炭素によって酸素を追い出して分離すること）の進んだ海線状の塊をつくり、それを鍛えて鉱滓などの不純物をのぞくために、種々試みがなされた。力を入れて打つとボロボロになったが、腕の力をぬいてハンマーの重みで打ったところ、延びがあらわれたので、加熱とその打ち方で根気よく続けて繰返えしたところ、鉄を造り出すことができたという。



卜蔵家経営の原鈩遺跡前の頌功石

上の写真の文面（撮影は横田史談会員佐世川徳男）一部省略

頌功石（裏面に卜蔵甚兵衛橘正喬建之）

明治廿六年旧三月十日出鉱
湧荷　五十七駄三歩
村下　狭門正竹
岩坂　荒木卯平

明治三十一年旧十二月廿六日出鉱
湧荷　六拾三駄一歩
村下　岸本亀太郎
岩坂　亀山秋蔵

奥出雲のたたら製鉄史⑥・横田で生れた人⑨・俳句・川柳・短歌

（お断り）鉄は大きく分けて、銑鉄、錬鉄と鋼鉄（ともに可鍛鉄）とする。錬鉄は時代によって鍛鉄、割鉄（種々名称あり）包丁鉄という。普通いう道具をつくる鉄のことである。本文ではわかりやすくするため、これをほとんど「鉄」と呼んでいる。

う。この方法は古代の日本でも古代の西欧でも行われた方法で海綿鉄法ともいう（私はこうした方法の系統を総称して、とりあえず自家用たたらと仮称しておく）が最も初期段階である。

（外国の海綿鉄法） 西ヨーロッパへ鉄が渡来し製鉄の中心地ができたのは、紀元前1世紀でアルプスの北側の地である。さきの実験のような鉄鉱石による段階からさらに進歩した方法として伝ったもので、それは小型の竪型炉（ポット型）で、鉄鉱石と木炭によって半溶融状態で還元のより進んだ海綿鉄をつくり、これを加熱と鍛打の繰り返えしで鉄を造った。（中国でも日本でも同じ方法原理で古代には行っていた）この方法は進歩発達を続けながら15世紀を迎えると、大きくて高い竪型炉となり、燃料も石炭となり、送風も足踏み吹子を水車で操作するようになった。そこで高温が得られ銑（鋳物鉄）がつくられるようになった。この銑を溶融の状態でかきまぜて空気酸化によって、炭素をへらして鋼をつくり出す（パドル法）ようになるのには、さらに18世紀後半までの300余年の歳月を必要とした。

（世界の先進地中国の炒鋼法） わが国の隣国である中国では、戦国時代（紀元前400～200年ころ）に、海綿鉄法による鍛鉄とならんで、銑鉄（鋳物用の鉄）を生産し、各種の鋳鉄製品を製作していた。戦後の考古学による発掘によってそれは実証された。次の漢時代になると炒鋼法とよばれる、18世紀半ばに西ヨーロッパで完成をみたパドル法と同じ原理による方法（滲炭法ともいう）を開発し、鋼造りを盛行させた。西ヨーロッパに先立つこと1800年も前のことで、驚くべき高水準の製鉄が行われていた。

（わが国の銑造り） わが国にこの技術が先進地中国から伝来したのは、平安時代の後半の11世紀で、西ヨーロッパで開発されるより400年前であるという。その拠点は、河内国丹南で、滅亡した高麗国からの渡来技術者がもたらしたものという。その後鎌倉時代前期の13世紀には、この鋳物師集団は東国地方へ第一次の分散移住をする。それを裏付けるのが、現存するその時代の鋳鉄仏50体で、30体は関東11体は愛知方面にある。やがて鋳物師集団はより宮中にとり入って、生産独占の組織体制をつくって中世を支配し近世へと続いた。この集団の存在と銑造りの技術を無視してはならないと思う。資料によれば自ら砂鉄製錬によって銑をつくり、鍋・釜などの鋳物を造るだけでなく、鍛冶工人に銑から鉄をつくらせ（大鍛冶技術）、農具なども鍛造させてその流通にもかかわっていたものもいる。中国の銑づくりの技法を継承しながら炒鋼法へ進んだ形跡はなく、海綿鉄の鍛造技術を駆使して、銑から鉄・鋼を造ったのである。その集団の実体は十分に明らかでないが、奥出雲の近世のたたら製鉄史から、この集団の砂鉄製錬技術を中世に位置づけて、仮説であり仮称であるが、初期企業たたら（銑造り）とし、同じく仮称した自家用たたら（発達した海綿鉄法）との二つの流れで、たたらの歴史を考えてみることを試みたいと思うに至った。

赤目砂鉄地帯から真砂砂鉄地帯へ

（わが国古代の技術） 数年前「風土記論叢」創刊号（県内出版）で、私は延喜式（828・平安初期の宮中の記録）と出雲国風土記（733）の読み方と、古代の砂鉄製錬法（原始的海綿鉄法）から考えると、原料さえあればどこでも鉄はつくられたもので、風土記時代には飯石・仁多両郡のみでなく、出雲国内各地で生産されているから、製鉄遺跡はもとより、鉄関連出土品の再検討や、発掘時の見落し防止、さらに分析検討が緊急を要することを指摘し、さらに延喜式の時代に製鉄は、わが国のすべての国で行われていて、東北と土佐が最も値が高く、安いのは隠岐・出雲・石見・安芸であって、安価な国ほど各地に技術が普及していたことをしめすとの説を紹介したことがある。

和名類聚抄（平安期950年成立の百科事典的辞書）をみると、吹子も含めて鍛冶道具は、基本的には今日とほとんど変らない。これは鍛冶技術の水準が高かったことをしめすものでもある。当時の鍛造原料である海綿鉄を造り出す炉には、現在発掘したものの検討から、大きく分けて2つの型に分けられている。いずれも小さいが、世界共通の竪型と、日本独自とみられる長方形の箱型である。これで生産された海綿鉄は次第に還元状態のよいものに進むとともに、鍛造技術も高度になり、鉄づくり鋼づくりの技術も進んでいたことは、古代刀がそれを証明している。

この技術がより進歩し、鍛冶工人に伝えられていたから、初期企業たたらが製錬する銑から、鉄をつくり出す工程（大鍛冶の技術）を受持って、初期企業たたらの発達を進めることができたものと考えてみることにしたい。しかし他方海綿鉄法はより進歩した自家用たたらとしても生き続け、鍛冶工人によって保持され、のちは刀工に間に秘伝として伝えられ、今日なお一部に残っている。

（鋳物師集団） 中国地方にこの集団が来住したのは、13世紀初頭に広島へ、14世紀初頭に邑久（岡山県長船附近）、三原（広島県）、15世紀初頭に用瀬（鳥取県）、16世紀初頭宇波（島根県）となっている。

今日のたたら研究では、中世の遺跡発掘上からも記録の上か

横田で生れた人⑨

卜蔵梅之丞

佐世川　徳雄

卜蔵梅之丞さんは私の住む竹崎で明治20年に生まれ、若い時代から敗戦までは、もっぱら中央にあって活躍、戦後竹崎の自宅に帰って、この地方のために長い経験を生かしてなお活躍、昭和44年10月、天寿を全うし79才で自宅で他界された。

鳥上(村)地区の人々は生前の卜蔵さんの功績と人柄をいつまでもたたえたいと建立したのが、写真の頌徳碑で、前の斐伊川から運んだ花こう岩の自然石で高さ2m、横1.5mのもので、田部元知事の筆蹟による、「卜蔵梅之丞農学博士　頌徳碑」の文字が刻まれている。

「喜寿記念　卜蔵七十年の回顧」という、自費出版の自伝書の中から、卜蔵さんの人柄や、功績を知ることの出来るところを抜き書きして、16回目の命日を前にし、20世紀梨の出廻る時にあたり紹介することとする。

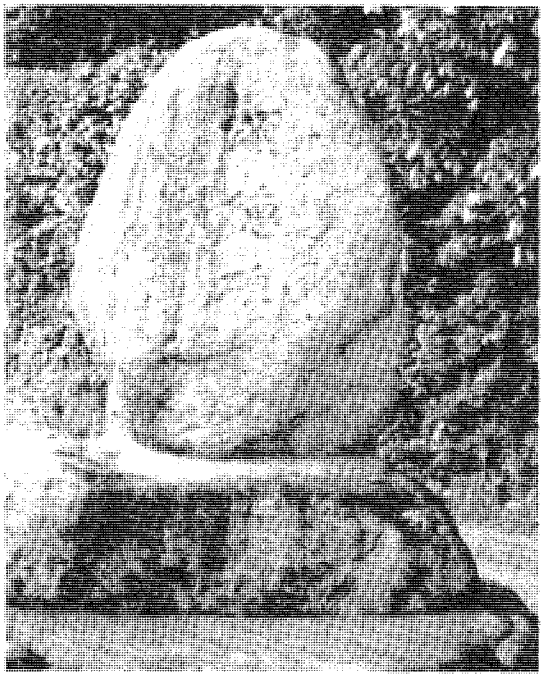
この道に生きて（大阪朝日新聞昭和32・11・5）抄

農学博士　卜蔵梅之丞氏

島根県にいて森鷗外と徳川夢声、卜蔵梅之丞を知らないヤツは「モグリだ」と島根農大押田教授がいったことがある。鷗外が文豪として名を残し、夢声が芸能界の至宝として現在君臨しているのに比べて卜蔵（ボクラと読む）氏は対照的だ。そうジャーナリズムもとりあげなかった。しかし博士の日本農業界に残した病害虫防除の功績は他に並ぶものがない。

（一斉防除を指導）「二十世紀梨の神さま」と今も博士は鳥取県の人々からうやまわれている。何故かといえば、大正十二年ごろ「黒斑病」が流行して先進地の千葉・神奈川両県は二十世紀ナシは全滅。鳥取県も播が り倒産や首つりをする者さえ出て、ナシ栽培で立上がろうとしていた鳥取県は大被害をうけた。

当時日本には、二十世紀ナシの木は育たぬとさえいわれた。博士はナシの木や芽を腐食する「黒斑病」菌を発見。当時農林省の嘱託だったが、鳥取県の招きで鳥取に行き、石灰ボルドウ液を撒布。パラフィン紙でナシを包む一斉防除を指導した。「卜蔵氏が黒斑病菌を説明、一斉防除をすすめられた時は、神の声と感じた」と当時の鳥取県二十世紀梨共同販売所長は語っている。それから二年間、一斉防除につとめた結果、「黒斑病」は減少し、鳥取県では山の中腹や庭にまでナシの木を植えた。現在三百二十万貫の二十世紀梨王国にのしあがっている。もし博士がいなかったら、文字通り日本には二十世紀梨は育たなかっただろう。



（学界の偏見を打破）りんごもそうだが稲の白葉枯病、イモチ病や麦の白渋病、赤銹病などの予防に、世界で最初に殺菌剤や展着剤の撒布試験に成功。

当時（明治四十年ー大正二年）は広い田にどうして、撒布するが、もし撒布できても、経済上不可能であると一笑に付された。

学界の偏見や圧力にも負けず、とうとうおし通した。それから農家は予防剤を撒布し始め、イモチ病などと防いでいる。「全く時代ですねえ」と博士は往時をしのびながら語った。

（おとなしい気骨）「おとなしいが忍耐心と負けじ魂はすさまじいものです」と博士の人柄を西ケ原農事試験場に博士が勤めていた時、同宿していた松江市朝酌町、農事試験場技師野津六兵衛（七〇）さんは語る。

農林省時代にある夏の夜を故郷の宍道湖で過したときのことだ。

当時あった山田水亭の辺に船をつけたところ、三階から小便をした酔っぱらいがいた。聞いたら其の酔っぱらいは、社会教育主事とのことで、職業柄けしからんと、「この野郎」と怒った博士はがけをよじのぼり三階にあがって、群がる酔っぱらいにどなりつけ、ゆうゆうと引揚げた。あの温和な博士がと皆んなビックリした。植物が相手だから、いたってもの静かだ。しかし筋金は太く貫いている。

松江農林学校六十周年記念にあたって　安達益之助（島根新聞昭和三十五年十月一日）

第三期卒業に卜蔵梅之丞先輩がある。その成果から見て先輩中の大先輩である。卜蔵先輩は

卜蔵梅之丞氏は本誌に記載の鉄師卜蔵家の末孫である。

初秋のうた

ささやかなるドラマにさへも涙もろくなりたるを知る生きは　常盤　はるまさ
かなしも
とく朝のいんげん畑の靄中に羽音せはしく蜂の移らふ　野村　節子
夏の夜のダムの釣り場に魚信待つガラスランプの灯の燃ゆる　伊藤　萩雨
音聞き
舗装路の歩みとどめてアカシヤの木陰に入れば蝉しぐれ降る　小早川　恵子
低迷のつづくさ中に牛を飼ふ気力矢はずと夜に集ひぬ　景山　悦子
孤独より死を選びにし友と聞く諍ひ合える夫の背を揉む　藤原　信子
孫去にてもぬけのからの片隅にガラガラひとつ夕陽浴びてお
り　松浦　愛子
七夕に芋の広葉の露すくひ色紙に満天星空と書きぬ　岡田　時子
夫病みて十一ケ月を看とるとふ友想ひつつ夫と畑打つ　佐藤　喜代子
紫は亡母の衿元恋うる色深山に哀しかたくりの花　永井　弥生
み仏の声聞くごとき想ひして唐招提寺の境内に佇む（大和路
の旅）　安部　夕波

六月互選句抄

銀河の尾南の杜を把みおり　浅野　としお
蝉時雨金屋子さんの杜はやす　糸原　古志
今日を謝し明日を信じて鎌を砥ぐ　岡田　蹊花
篠の子や祭近づく野の祠　岡田　麗水
おにやんま昼寝の孫の鼻に汗　小川　あきお
孫去にて手持ちぶさたに手花火を　加納　信子
蛍火をたしかに握り孫の笑み　門脇　花子
送り火を焚いて呟く老いのかげ　高木　白虹
逝く人を送る梅雨空晴れやらず　田辺　竹野
口笛を吹けば連れ啼く燕の子　新出谷　一華
今昔かわらぬ野の彩蛇苺　錦織　富江
ほうたるや川は幼き日の瀬音　藤原　樵夫
ピンボケの写真に遠い敗戦時　峯石　美代子
騒めきを外れ孤独の虫しぐれ　渡部　夕峰

わが校卒業の肩書きのみでなく天性のそう明と努力によって、病理学に専念し、我が国の植物病理学の開祖三恩人（白井光太郎、宮部金吾、堀正太郎の三博士）中でも郷土出身の堀博士に従ってその研究を助け、博士の学位獲得の資料を編みなすかたわら、日本植物愛護会を創立し、大隈重信侯、徳川頼倫侯等を名誉会員にいただいて名樹老木の保存に尽された功績は大きくその発行にかかる月刊誌「病虫害雑誌」は専門家の研究発表のただ一つの門戸となって、幾多の人材が輩出した。また別に日本植物愛護会附属植物病院を経営され、わが国最初のトリードクターを養成、名盆栽を預り出ては紳士貴顕の庭園診断や名木の治療に当たられた。当時の卜蔵先輩の盛業は今もって後人に目を見張らしめるものがあり、本校卒業生にして東都に遊ぶものは、直接間接を問わず卜蔵先輩の門をたたかぬものはなく、上は三浦博士より下は廬原常一弁護士に至るまでおかげをこうむった功績は大きい。私もまたその一人であって今日においても、卜蔵門下と名乗るを名誉としているが、その愛撫を慕う者は数百人を越えるであろう。卜蔵先輩はこうして後輩を育てられたほかに、永年の研究の成果の集積とぼう大な植物病理学の著述によってわが国植物病理学界に君臨し、学位を得られたのはもとより現在学界の名誉会員の地位にあり、北大の伊藤誠也博士、京大の逸見武雄博士とともに斯界の三長老の一人である。

主な経歴

明治31　鳥上村尋常小学校卒　昭和16　横田村高等小学校卒
仝　20　帰郷　仝　35　島根県立農林学校入学
仝　27　農学博士の学位を受く　仝　38　卒業
（横田史談会員）

斐乃上川柳八月抄

相好を崩しっ放し孫きたる　松浦　亜以
亭主より先に帰った忘れ物　渡辺　好之
朝仕事おえてヤレヤレひとやすみ　安部　春恵
太陽が中天で笑う朝寝坊　若槻　白馬
盆やはり岐阜提灯に風情あり　太田　亀甲
炎天下青田流れた風に会い　安部　正子
年だろとひとりつぶやき汗をふく　佐佐木　千世
プール番いもの子洗う程に入り　真綿　よし子
テレビで見朝新聞でたしかめる　松浦　木公
吾が齢に気兼忘れた湯の宴　高木　白虹
緊張が解けたぶんだけ汗となり　児玉　哲呂
劣等感何時も片手にもって生き　藤原　千代子
艶消しのポケットベルが呼んでいる　藤原　のぼる

らも資料が極めて乏しく不明とされている。そして近世初期以前の建屋を有しないたたらを一括して、「野だたら」という極めてあいまいな内容の言葉で呼ぶならわしになっているが、私はかねてからこれになじめなかった。ようやく先にもふれたように私は近世企業たたらの前の時代のものを、「初期企業たたら」の時代と仮称し仮説を立てて究明に入った。勿論自家用たたらの存在もあったが、鋳物師集団の動きと、後述する奥出雲の近世企業たたらの様態から考えたことである。先にあげた第二次の集団の移住時代は、南北朝期・室町期・戦国期にあたり、鉄需要が異常な高まりをみせた時代であり、小型の自家用たたらも地方土豪農民の間にも広がりをみせていたが、この集団の動きは中国地方を中心に量産へ進み、動乱期の需要を満たし、時代が沈静すると鋳物芸術の花も咲かせている。

奥出雲のかつての鉄師の家に保存される古資料、杠日記（杠）鉄山根元（卜蔵）、これらを集成した鉄山旧記（絲原）はともに、天文5年（1536）杠氏ほかが、横田町大馬木において、たたらを始めたとしているが、この時代にあたる。往時は小前（小規模）であったとしているが、土豪農民の間に伝っていた自家用たたらをさすものであろうか。この基盤があったから、各地に移住した鋳物師集団から分れて良質の原料を求めながら、生産拡大のため、地方の奥深く分け入った初期企業たたらの技術者を、容易に受け入れることができたのである。

（中国地方の先進地）　早くから初期企業たたらが盛行したのは山陽側の赤目砂鉄地帯で、中国地方以外の地方がほとんど同じ赤目砂鉄地帯でありながらチタンの含有が多いため、いつまでも竪型炉をぬけ出して発達しなかったのに引きかえ、山陽側はチタンが少なく、炉内を容易に高温にできる、解放的な長方形箱型炉をより発達させ、鉄の量産に成功した。わずかな資料からであるが、陽と陰とを比較すると、山陽側を先進地と認めざるを得ないようである。

奥出雲で近世企業たたら経営で後世大成した鉄師の多くが、山陽側からの移住者であることは、これと関連すると思わざるを得ない。

近世に入って25年ほど斐伊川水系の製鉄業は、鉄穴流しの禁止から、操業していなかったこともあるが（飯梨川水系は実施）、この地の企業たたらが成長するまでには、しばらくの歳月を費した。これについては本誌105号（59・1月号）の年表で明らかにしている（昨年度のたたら研究会下田大会で発表済みで、近いうちに本誌で詳述の予定）ように、ジグザグな道をたどっている。したがって松江藩も後世のような巧妙な鉄行政をとり得ず、ゆれ動き続けている。そのために真砂砂鉄地帯（出雲・伯耆・石東）の技術者の払った努力は並々ならぬものがあった。

先の表からも、原料問題、地下構造の問題などに払った努力を、垣間みることができるが、まず何としても最大の努力をして、根本的なる成功は天秤吹子の開発であって、これがまた先の問題もむしかえしもしたが、近世の企業たたらは高温を得すべてにわたって飛躍的に発達した。松江藩も直ちに反応している。建屋（のちの高殿）も炉などの保護の一時しのぎのものでなく、操業をよりやりやすくする方向で発達し普及していった。

高殿が出現しても、砂鉄採取法の初期段階のため、年間数ケ月の操業であり、一鈩場も三～四年の操業が限度であって移動している。操業が毎月行われるのはしばらくのちであり、終末段階にできていた鈩を割って鋼を選び出すようになったのはさらに時代が下る。最近たたらの地下構造の発掘が相ついでいるが、特に近世のものについては、時代と鉄の需要量、砂鉄採取法、操業技術、さらにこれらを総合して経営する鉄師の実態、そして藩の鉄行政をあわせ判断しなければ、地域差があるとはいえ適確にならない。誤まった報告も幾つかある。こうして雲伯の技術が躍進すると、鉄生産量も山陽側を凌駕することになる。やがてその技術は逆に山陽側へと逆に流出し、金屋子信仰も加わって、雲伯の近世企業たたらが高く評価される時代となる。在来はとかく山陰側がすべての時代、すべてにわたって過大に評価されすぎていたようだ。

近世たたらも銑づくりから

今日のたたら研究は浜田市出身の故俵国一博士の名著「古来の砂鉄製錬法」（昭和8年刊）が基準となっている。内容は明治31～32年における、備北・伯耆・石東の諸地方の、たたらの地下構造、鈩押法（一代三昼夜吹き）、銑押法（一代四昼夜吹き）と、大鍛冶屋技術の貴重な実地見聞による、正確な記録と分析検討の集録である。この時代の奥出雲もこの記述とほゞ同じである。三日押（鈩押法）で生産する鉄の量についても同様で、平均して一代の出鉱量の60％が銑、40％が鈩（この中から20％の鋼を選び出す）であった。よい銑を多量に流出させて鈩を育成すると良質の鋼ができるとされ、一代の操業をおおよそ四段階に分け、前二段階では、とくに溶け易い真砂砂鉄（または良質の赤目砂鉄）を「籠り粉鉄」として用い、「籠り次ぎ粉鉄」として用い、銑の流出に力を入れ、あとの段階で溶け難い真砂砂鉄を挿入して、炉内の羽口先以下のところに鈩を育成した。これが大正10年洋式製鉄法にたち打ちできなくて、一斉に廃業するまでの、

前号訂正　4頁俳句　松平入を松手入に

雲伯の三日押であった。

今まではたたらと言えば、この著書にもとづいて、鋤押か銑押かと見分けることに重点がおかれ、鋤押法（三昼夜で真砂砂鉄を用いて玉鋼づくり）　銑押法（四昼夜で赤目砂鉄を用いて、銑つくり）とするのが常識となっていた。ところがこの尺度でもって、時代さかのぼらせて判断することには限界のあることが明らかになった。真砂砂鉄地帯の奥出雲でも銑生産が主力であり、四日押であって、銑押法と変らないようである。終末段階にできた鋤も、赤目砂鉄地帯に比べて大きかったが、この中から鋼を選び出すようになったのも比較的新らしいことが明らかになった。旧鉄師絲原家の膨大な古文書を収蔵する(財)絲原記念館の詳細な調査によれば、四昼夜一代の四日押が普通で、幕末になって約30年間かかって、三日押に転換している。そして転換前も途中も後も、生産総量も製品の銑、鋤、鋼の割合も変っていない。銑つくりが本命で、終末段階に真砂砂鉄なるが故に鋤が育ったとも考えられる。そして総生産量の80％にあたる、銑と鋤を大鍛冶屋で鉄（割鉄、包丁鉄などという）にしてはじめて、鉄師の経営は成り立っていた。そして古い時代には鋼の生産はかえりみられていない。そこで私は近世の前の中世の未だ明らかでない時代のたたらを、先にのべたように初期企業たたらと仮称し想定して、自家用たたらとの流れと分けて究明することで、明らかにできるであろうと考えた。その後二～三の傍証資料も発見したがもう少し資料を補充してからにしたい。往古の小鍛冶（野鍛冶、刀工も含む）は、鋼造りの技術を持っていたから、製品としての鋼への需要も多いとはいえなかった。鉄師の記録で鋼のことが目立つのは、幕末に海防問題に端を発し、藩が鉄師が生産する鋼を御趣向鋼とし称して専売制にしてからである（のち有力三鉄師のみ）。　しかし値段はやはり包丁鉄が鋼よりかなり高値であり、増産するためには、鈩を増設せねばならなかった（鋤の量は既述のように一定）　し、そのためには莫大な建設投資を必要としたから、藩の方針とはいえ、その方向には進み得なかったから、出荷量は目標に達しなかった。明治中期にたたら製鉄業不振の折、せめて鋼の質の改良でもと努力をし、幸に値上りも重なった時代もあったが、安価な洋鉄に抑さえられてしまった。

昭和8年末満蒙を新天地とし砲火の下に制圧しているころ、今の鳥上木炭銑工場の一隅に靖国鈩が設けられ、たたら操業が10年振りに復活すると、刀工や日本刀愛好者の間で、玉鋼と愛称され珍重されるようになった。それが一般の話題になるようになったのは、このたたらが日刀保たたらとして復元操業した数年前からである。

（頌功石）　町内大字竹崎で徳川中期末から敗戦まで操業された、鉄師卜蔵家の原鈩のちの叢雲炉の遺跡のかたわらに立つ頌功石は、奥出雲の砂鉄製錬も銑生産が主流であったこと、私が推論しようとしている、近世企業たたらが、中世の初期企業たたらの成長発達したものであるということを暗示しているかのようである。今日なお優秀な真砂砂鉄を産する羽内谷鉱山（かつて鉄穴流しによって採鉱・今は磁力選鉱法によって）と、すぐれた籠り粉鉄を産する鉄穴を所有していた卜蔵家が打樹てた、三日押一代の偉業がそこに刻んである（1頁写真と文字参照、1駄＝30貫＝125キロ）。当時平均35～40駄の出鉱量からすれば、63.1駄はすばらしい生産量である。鋤の量は変らないから増加したのは、流れ出た銑である。砂鉄の歩留り（鉱滓にならない率）は変らないとしても、溶け易く還元の容易であった砂鉄を大量に挿入して、大量の銑を得たため、収益増をもたらし、卜蔵家の経営を良くしたものであった。

（遺跡の保存修復）　卜蔵家が明和元年（1784）から5年間操業した亀石鈩の遺構は、炉の地下構造を中心として関連施設遺跡のすべてを一町歩（一ha）余の地域内に抱えて、船通山麓の国有林の中の、交通至便の地に横たわっている。時代も経営者も明確で記録もある、わが国稀な第一級の遺跡である。さらに近くには10年前まで鉄穴流し（比重選鉱）が行われていた、わが国唯一のほゞ原形をとどめる羽内谷鉱山（鉄穴）の本場（洗樋）の遺構もある。前者は小舟が一部露出していて、全遺構の発掘保存が、後者は水害にもあって荒廃の恐れがあり、早急な補修保存が望まれる状態にある。

（産業考古学とたたら）　安来（鉄積出港・日立金属ー砂鉄製精錬ー・和鋼記念館）・西比田（金屋子神社）・横田（上述の遺跡・施設のほか鳥上木炭銑工場・絲原記念館）・仁多（可部屋集成館）・吉田（菅谷高殿）などを結ぶ「たたらの道」はわが国唯一のたたら研究のコースであり観光コースでもある。科学万博、計画中のテクノパーク（科学技術公園）には、ともにたたらが設けられる。直接製鋼法（日刀保たたらによる玉鋼造り）を現代科学の力によって実現するのは、今世紀末の最大の夢であるという。日立金属安来工場（砂鉄による間接製鋼法）では日刀保たたらの操業研究により、すでに成案を得ておられるかも知れない。産業遺跡を中心とし記録とともにその保存をし歴史的研究を通して現代での新らしい意義づけをし、再生の道を考えるのも産業考古学である。この度全国大会が横田で開催されるのも、古くて新らしく、そして時代の先端となろうとしている、たたらへの関心が総会の総意となったからである。

横田史談会　高橋一郎

会員配布一部百五十円／六九九ー一六　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎　頒布／横田史談会　発行／奥出雲文協　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原猪史夫書

第114号
（10月号）
昭和59. 10. 1
奥出雲編集集団©

奥出雲のたたら製鉄史⑦

新資料にもとづく、特に東南部のその技術・経済・社会・文化の総合史

―人間国宝隅谷刀匠の発言も加えて再論―

この文は前113号に掲載したものをよりわかり易く書きなほしたものである。産業考古学会全国大会についての新聞報道や放送が、字数や時間の制約のため一部を強調されたため、大変に嬉ばれた方や頭をかしげられた方があったため、誤まった認識となってはと思ったためである。

私はたたらの歴史を自家用たたらと企業たたらとの二つの流れに分けて考えることを提案し、近世初頭より以前から中世のものを初期企業たたら、そしてそれ以后を近世企業たたらと仮称した。拙ない仮説であるが、私の思わぬ反響があって、沢山な便りを頂いている。本文は自家用たたらについては、人間国宝刀匠隅谷正峯氏の「昭和の刀をつくる」（季刊考古学8号）ほかを引用させて頂いて、具体的にのべ、近世企業たたらについては、歴史の流れに副ってのべたものである。

隅谷刀匠の古刀地鉄作成

重要無形文化財日本刀技術保持者が、人間国宝の正式名である。

「刀剣においては、江戸中期で伝統が絶えている。名刀と呼ばれるものは、正宗に代表されるように鎌倉期に集中する。それ以後は下り坂の傾向にある。ためし切りで刀の優劣を決めるという、切れ味という意味では、完全なハガネが完成した江戸期がいい。しかし研いて鑑賞する段階では、やはり鎌倉期の刀におもしろさが出てくる。」

「四年前から上古刀の地鉄の研究に入った。飛鳥、奈良時代の刀のことで、古刀の地金をつくり、そして刀の発達工程に沿って時代を下り鎌倉期の名刀に達しようとしている。

在来は刀剣界における古刀地鉄に対する考え方として、砂鉄を木炭という燃料を使ってより低温で還元されたとする考えが圧倒的で、自家製鋼時代を作ったものであるが、今考えると軽卒だったと反省させられている。

作られた鋼での作品は現代刀地鉄の範囲から抜け出すことができず、小型の低温炉による製鋼と古刀地鉄がむしろ結びつかないことがむしろはっきりしたことが収穫だった。

現代→江戸→室町→鎌倉と時代を遡ってこの時代の地鉄を作ることを放棄し、発達しない上古刀の地鉄をつくって、500年ほどの発達の行程をたどれば鎌倉時代にたどりつくと発想の転換をした。

最近発表された古代中国における「銑下げ法」や「鈔鋼法」などはこれらを裏づけするに充分であり、勇気百倍でとりくんでいる。中国古代製鉄、タタラ研究などが貴重で、実験考古学も大いに力を与えてくれる」

自家用たたら（仮）再説

隅谷刀匠の鍛冶工房を石川県松任市に訪ねたのは昭和47年の秋日和の日であった。そのころは自家製鋼時代で、その小さい竪型の角炉を見学させてもらった、聞けば今はそれもなく、全く別な方法によっておられるという。先の引用した文から推察すると、吟味した状態での流れ銑を求め、その銑下しを行っておられると考えられる。或は前号でのべた海綿状の鉄塊がやゝ進んだ初期の鉧状のものを割って得たものを、各種の技法を用いておられるのかとも想像する。

これは古代の小規模たたら（仮自家用たたら）の実態をみるようである。

最近安来の和鋼記念館から出された報告書「高広古墳出上鉄滓の調査」によれば、6世紀後半の製錬滓（たたら滓）が、真

資料

（備前長船博物館調昭38現在）

○登録刀剣数　85万本

古刀　30万　内備前刀13万
新刀　55万　内備前刀若干

○指定された国宝・重要文化財の銘柄

山城	20本	
大和	6	118本
備前	46	261（40%）
相模	16	63
美濃	0	5
他の諸国	36	119
計	124	643

（出雲・石見はなし）

○古刀期に繁栄した時代

（紀元は上は元年・下は末年）

山城　永延987～正応1293　約300年内
大和　元暦1184～延徳1492　〃300〃
備前　永延987～天正1592　〃600〃
相模　元暦1184～応永1428　〃250〃
美濃　応永1394～文禄1596　〃150〃

○古刀

1,000万円以上分現存刀銘

備前	111人	大和	9
備中	38	伯耆	3
山城	7	他13カ国	61
計	209人		

○鎌倉初期の後鳥羽天皇御番鍛治に召された、7割が備前の刀工

奥出雲のたたら製鉄史⑦・庶民の中の武士⑤・短歌・川柳・俳句

砂砂鉄を操業規模を除き、近世たたらの技術と同等の高い水準の技術で操業されたものと推定できるという。するとこれは筆者の想像であるが、操業によって流出した少量であろう銑も良質であったと見ることができる。

投入した原料がすべて流出滓や流れ銑ともなっていないであろう。諸発掘調査報告書をみると地下構造と鉱滓（鍛冶場では鉄滓のとりのこしがわずか）のみで、炉壁も基本の型が復元できないほど壊され、さらに流出した銑、炉床に残ったであろう還元状況の低いものまで、すべてが残されていない。それは技術を秘匿するためと製品がわずかであるから、根こそぎ採取したためであろう。

幕末刀匠の意見

科学的な眼をもっていたといわれる水心子正秀は、現在の兵庫県千草町では慶長の初めから鋼が製造され、商売として砕いて白鋼（色あいから）・延刃金（打ちのばして形にしたもの）として販売したという。このころ石見の出羽でもできているという。

「古伝鍛刀術」（中瀬関次）によれば、慶長より2世紀さかのぼった応永年間（1470代）に和鋼として鋼ができたという。これらはいずれも小規模なもの（仮自家用たたら）であったとみられている。そこで次のような意見が生きてくる。

古来から赤目砂鉄地帯でも、かなり早くから、銑もでき海綿状鉄や初期の鋼状のものもでき、これらが地金となって道具にも刃物にも用いられていたであろうというのである。鍛冶の技術が古代において今日と同じ水準かそれ以上であったことは、前号でふれた。

鋳（造）法から鍛（挫）法

この二つの刀の製法が、14・15世紀（応永以前）に鍛法に一本化したという。江戸後期の「古今鍛冶備考」によれば、戦国時代の増大する需要に鋳法では、非熟錬の臨時雇傭者では、会得し難い技法であった鋳法がすたれ、生産量も上げるため非熟錬工でもやれる鍛法が適して、くわえて刀剣の強度においても鋳法による刀をしのいだという。

この応永から天文に至る間に将軍の輸出品として対明貿易が10万振以上も輸出した背景にはこうしたことがある。銑加工から鋼ないし鋼加工への転換である。鋳法は往昔は銑ばかりでやっていたが、次第に銑・鋼・鋼をも加えて行ったが、やはり技術が必要であったという。

こう調べてみると、隅谷刀匠の話がいよいよ生き生きとしてくる。

鋼から鋼をとり出すのは徳川時代半ばから—ただし企業たたら

「伯耆大山から石見の丸瀬山（石見の瑞穂町）の間」の奥地は、わが国唯一の真砂砂鉄の産地で、特に雲伯国境付近は、溶け難いがチタンの含有量が極めて少ない、磁鉄鉱の高品位のものの産地のため、今日なお美術刀剣の材料たたら吹きによる和鋼＝玉鋼の産地であるが、長い間の諸先人の努力の賜である。

中世の初期企業たたらの流れをついで、この真砂砂鉄地帯の人々が和銑を企業的に生産するのには、赤目砂鉄地帯ほど容易ではなかった。ようやく溶け難い砂鉄をこなし易くしたのは、この地帯で元禄4年前後に天秤吹子を開発してからである。それから和銑生産が比較的容易になったので、大鍛冶屋を抱えて包丁鉄（当時は割鉄と呼ぶ、普通いう鉄）として出荷する鉄師が出現し、近世企業たたらが成立してゆく。以来安永年間まで80余年、各種の改良をすすめ、鉄穴流しも川砂鉄中心から山砂鉄中心へと移り、量も増加して操業回数も多くなり、高殿をはじめ施設も整いはじめ、和銑→包丁銑の質も良くなった。安永元年（1770）ころ今まで捨てていた鋼を割って和鋼をとり出すことができるようになって、製品に加わることになった。絲原家文書によれば徳川期も半ばをすぎてしばらくした安永四年、鋼九分（9％）の記録があらわれ、間もなく20％となる。このころからたたら操業も年間を通して毎月行われている。技術も進歩し安定し、鉄師の経営も順調であることは勘定書で明らかである。しかもこのころの操業技術が一応完成の城に達していたことは、このころの一代（四昼夜操業で四日押と呼ぶ時代）の砂鉄・木炭の使用量そして出鉱量（製品の割合も）が、130年後の明治30年代まで、多少の増減はあるが、あまり変らないことからわかるのである。安永4年ころからこうして和鉄（包丁鉄）・和鋼の生産が増加していったのにひきかえ、鉄の需要の伸びは緩慢で、20余年後の寛政半ば以降から鉄の価格は暴落し、すべての鉄師は連年赤字経営の苦境にたち、長期にわたって松江藩の強力な保護政策の下におかれる。一方鉄師も各種の合理化を試み、20年後の文政5年（1822）ごろから、四日押を三日押に短縮する努力を重ね、30年を経た安政5年ころは完全に三日押に転換した。そして今日に続くのである。転換しても数種類の砂鉄と木炭の使用量や出鉱量（鋼からとり出した和鋼20％、大量の流出した和銑と和鋼をのぞいた残りの鋼あわせて80％）は、安永年間の四日押と変らない。安政5年には和銑、鋼でつくられた包丁鉄と和鋼の価格は、一駄（112.5キロ）それぞれ銀で（228.8匁余と107.6匁余で、製品の主流の包丁鉄が和鋼の二倍以上の価格であったから、鉄師の経営は好況時代であった。

明治維新以後

明治期に入ると洋鉄・洋鋼の輸入、やがて生産開始となって、生産原価の高いたたら製品は次第に販路がせばまり、末期には存亡の危機に立つに至った。かねてから海軍工廠の指導によって改良につとめていた和鋼（当初は人頭大の和鋼の商品名を頃鋼と呼ぶ。のちこぶし大にしたものを玉刃金＝玉鋼とも呼ぶ）を納入することで命脈をつないだ。大正年間に入ると小割鋼は陸軍工廠に納め、坩堝（るつぼ）製鋼の原料とされた。このころは目方吹きとかだめ吹きとか呼ばれ、鋼でさえあれば金になるといわれ、伝承・記録ともに明らかではないが、操業方法の基本は変らなかったであろうが若干変化したようである。

大正9年の鉄穴炉9代の記録の平均をみると、和鋼48％、和鉄52％となっている。価格を洋鋼並にて納入せざるを得なかったから、収入は生産量の3分の1にも達しなかった。当時の雲伯すべての鉄師が当面していたことで、遂に一斉に廃業するに至ったのである。

たたら復活は日本刀のため

その10数年後の満州事変を楔期として、軍刀の需要が高まると、奥出雲の三日押操業の技術の粋を集めて、横田町内に靖国鈩が創設され、和鋼の生産への操業が始められた。鉄穴流しによって大正期以前と同じく、数種類の砂鉄を採取して用い、銑も流出させ最良の真砂砂鉄で鋼を育成し、中の和鋼を玉鋼と名づけて軍刀の需要に応じた。銑・鋼は付設した大鍛冶屋にて包丁鉄としたり、安来の親工場に納めた。企業としてではなく、陸軍省内の（財）日本刀鍛錬会の依嘱をうけて、現在の鳥上木炭銑工場が敗戦まで生産に従った。

今日の日刀保たたらは、文化財としての美術刀剣への需要に応えるため、文化庁の指定によって日本美術刀剣保存協会が、靖国鈩の遺構を復元して操業している。鉄穴流しは禁止され磁力選鉱法によるため、需伯国境の優れた真砂砂鉄一種類が用いられ、和銑を流し出さず直接鋼を育成するという、かっての伝統にない操業をせざるを得ず、靖国鈩に続いて村下職をつとめる安部由蔵氏が、伝授の秘術を駆使して成し遂げた偉業である。

砂鉄の使用量も30％近くへらし、作業のすべてを鋼づくりにむけ三昼夜の作業を行う。鋼を割ってとり出した和鋼は60％、残りの鋼とその裏に生ずるわずかの銑で40％（大鍛冶屋用という）が製品である。しかし明治期の三日押時代の製品の約半分の量である。それは溶け易い砂鉄を用いて流れ銑を出していないからで、それに換算すると和鋼の量は変っていないから20％となる。この和鋼が美術刀剣用の今日の「玉鋼」である。

十月の歌

鶏豆の莢を割りつつ日向にてひとりといふは廃墟のごとし　常盤　はるまさ

孫たちは蚊帳の中より見る月にわれの臥床にきそひて入りぬ　永井　弥生

励まして子送り出せし晩夏の午心うつろに聴く蟬時雨　児玉　敏郎

老い二人住めるとぞ聞く山あいに残りし家の屋根は古びて　小早川　恵子

羽根振るわせ力の限り雌恋うるケースに飼われし鈴虫は哀し　佐藤　喜代子

釣友がくれしワンカップかたむけつつ秋の湖畔に魚信待つなり　伊藤　萩雨

紫蘇の実を畑に摘みとる吾が肩に蜻蛉の一羽つきまとひ来る　岡田　時子

亡き父と稲かけしつつ教わりし宵の明星今宵もきらめく　藤原　信子

過去もてる子らやすらけく学びをり少年院に薬鶏頭紅し　松浦　愛子

倒伏の稲起しゆく夕暮れを手元あかるく月の照らしぬ　景山　悦子

若鶏の産み小さき初卵朝の膳に夫と分け合ふ　野村　節子

相寄りし加代の肩にと手をふれて夜見の渚の夕映へに佇つ　安部　夕波

遠山金四郎

庶民の中の武士⑤

テレビ番組でおなじみ「遠山桜」の刺青（いれずみ）でおなじみの遠山の金さんは、江戸の治安を任とする江戸町奉行であった。

500石の旗本遠山景晋（かげくに）の次男として生れた（生年不詳）。名は景元で通称が金四郎であった。父景晋も通称が金四郎であった。景晋は長崎奉行・作事奉行・勘定奉行を歴任している。随筆・詩文も残していて、勘定奉行となって楽土と号した。そのころから音律を好み詩文に親んだ。随筆・詩文は役記（役柄の記録）とともに100巻を超えるという。老後の趣味を生かした旗本武士としては、見事なものの手本とされている。天保8（1837）74才で没した。「西蝦夷日記」の筆者のひとりといわれる。これは文化元年（1804）ロシヤの使節が長崎に来て対面し交渉した記録と、数年後ロシヤ人が蝦夷に侵入して来た時、幕命によって折衝した記録である。

中年のころの寛政元年（1789）幕府は昌平黌の規模を拡げて学政を中心にしようとし、旗本のうちから有能な士を求めた。この時太田南畝について首位で甲格した。南畝については別の機にゆずるが、狂歌をよくして蜀山人とも号した旗本である。

遠山の遠祖は源頼朝の重臣で加藤氏であったが、美濃国東山庄の地頭となった者で、鎌倉・南北朝・室町・戦国時代を生きのこり、徳川幕府の旗本となり300石のち500石取りとなった。

金四郎は次男坊で、一生部屋住みの運命にあったので、自棄になって放蕩にふけり、市井の

訂正　113号1頁3段3行　海線鉄→海綿鉄

斐乃上川柳九月抄

暁に佛送って風は秋　安部春恵
猛暑でも堪えよう秋の稲の出来　真綿よし子
行商人まずは孫を褒めてから　若槻白馬
台風のあとから秋がのぞき込む　松浦木公
半額にしても損せぬ商で　松浦亜以
送り盆済めば二人の閑古鳥　渡辺好之
艶もないトンボ眼鏡の女子の弁　高木白虹
夏休み終る日の子等あわて出し　安部正子
過疎の谷彼岸花だけ燃えている　松田牛歩
新築にさて駐車場をどこにする　太田亀甲
孫のまねして笑い合う盆のあけ　児玉哲呂
見送って今年も萩の花に遭う　藤原千代子
台風が真夏日しばらく置いて行き　藤原のぼる

九月句集

稲架襖にわかに峡をにぎわしむ　浅野としお
終の生命(いのち)埋むる郷よ霧罩むる　岡田蹊花
物売女目ざす家並みや稲穂波　岡田麗水
秋霖や黄蝶むくろの廊下隅　小川あきお
旅先の便り届くや青すすき　加納信子
更く庭の鳴く虫しずむ常夜灯　高木白虹
支えられ今日を生きたりむくげ咲く　田辺竹野
炎天下旗振る人夫舗道(みち)に灼け　新出谷一華
孫去にて秋立つ土間の乳母車　錦織富江
秋めけり伸びる家居の無精髭　藤原樵夫
はや咲きの白萩ぽつぽつしだれそむ　峰石美代子
おにやんま背戸の往来日に幾度　渡部夕峰

無頼の徒と遊びまわっていたが、養嗣子の義兄が病死し、家督をついだ。この時代の生活が大きくえがかれて人気を呼ぶし、この時代があったから、下情に通じた名裁判をしたといわれる。

江戸北町奉行になったのは、天保11年で35才すぎごろである。

当時は12代将軍家慶の治世で首席家老は水野忠邦であった。

史上著名な天保の改革の実施半ばであったから、金四郎も南町奉行鳥居耀蔵らと肩をならべて、江戸市中の改革に当たった。

だが忠邦の改革は相当きびしいもので、贅沢禁止令では町民の反発を買い、これを薬の効能書になぞって、

この妙薬の効能は、花嫁は裸足でやるによし、聟どのはさらしの褌だけでよし、三度の飯は香のものだけでよし、奥様は妾に暇が出てよし、一切の初物は食わずともよし、役者は衣裳に気をつかわずともよし云々

などと皮肉ったほどであった。

金四郎はこの政策に反対したわけではなかったが、江戸や大阪の一定の区割の土地を幕府の直轄とし、それを所有する旗本や大名たちに替地を与えるという上知令に、絶対反対の立場をとったところから、これに賛成する忠邦の腹心鳥居耀蔵と悉く意見が合わず、天保14年3月、北町奉行を罷免され大目付に転じた。しかし二年後水野忠邦が失脚し、鳥居が南町奉行を罷免されると同時に、金四郎はその後任となり、およそ11年その職を全うした。

天保14年3月金四郎が北町奉行を罷免される前、最後の裁判が、近江甲賀郡農民2万人が参加した大一揆の首謀者に関するものである。極めて苛酷な公儀検地を拒み、10万日検地延期を（30年間）勝ち取った甲賀一揆の先頭に立った庄屋と百姓8名である。

反水野派の旗頭とされていた老中土井利位（としつら）が、南町奉行鳥居耀蔵の明け番を待って、金四郎にそれを委ねたのである。首謀者8人は大津代官所では強訴の始末を一言も白状しなかったが、下情に通じ町民に人気のあった遠山の金さんの前では、一揆の一部始終を全員が陳述したという。

「遠山桜」の刺青については若いころ無頼の仲間と交っていたとはいえ、旗本の子弟としては彫れなかったのではなかろうか。ただ、手首に彫物があって布で覆っていたのは事実であったようである。嘉永5年（1852）3月隠居して帰雲と号し、3年後の安政2年、50余才で病歿した。

No.22　史蹟めぐり幻想

県立博物館特別展示358本の荒神谷出土銅剣とその現地見学を中心に、現代の民芸—和紙の安部記念館、絣(かすり)織の多々納桂子方（茶綿つむぎ・藍染・織の実際）出西窯場の見学後、出雲民芸館に古い民芸をたずね、県林業技術センターで緑化の重要さを学び、須佐神社に立寄った時「七不思議」の解説は私をフト、地方史研究の基本にしている出雲国風土記に思ひをはせさせた。

帰ってそれや奥出雲29・77・86号をよみ、叢雲の剣銅剣説、出雲の神社399が妙に気になった。

神社は氏族の守護神である。銅剣は各氏族の祭器説とすると今まで発見の横田八幡宮ほかの9本を加えても、まだ32本不足である。残りがどこかで早く発見してくれと叫んでいるようだ。

（蓬頭子）

会員配布一部百五十円／六九九—一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎　頒布／横田史談会　発行／奥出雲文協　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原猪史夫書

第 115 号
（11月号）
昭和59. 11. 3
奥出雲編集集団©

吾妻山・庄原市・多里は海底であった

―一、五〇〇万年前の化石から―

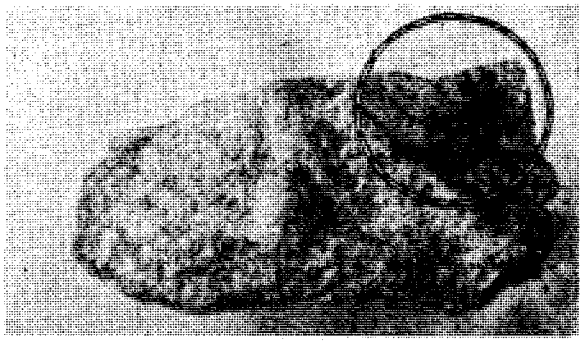
広瀬繁登さんは小学校長を退職した現在、鯨の化石の分類や、植物研究・民俗学などの研究を通して、庄原市を中心とする比婆郡地方の郷土の研究をしながら、今も小中学生を育てておられる。かって先生の教育をうけた生徒の中から、動物学・地質学・植物学で名をなしている人が多く、わが国で地方における自然科学研究の殿堂として、又集大成した大著作を出した著名な「比婆科学」グループを育てた指導者の一人である。広瀬さんに標題に関して短い紹介をお願いした。

武内寛さんは鳥取県多里の人で、農業のかたわら郷土研究に従い、多里層から幾多の化石を発見した人で、小中学生も続いて発見したことを短い文にまとめて紹介頂いた。**川角一則**さんは農業を営むかたわら、吾妻山の山小屋の経営者として、今年でまる20年、丁度還暦も迎えられた方で、吾妻山の遺跡の保存と公開を熱心に考えられておられ、その資料の提供を頂くことができた。これらはいずれも地質学上相互に関連のあることであるので特集を行った。誤まったところがあれば、その責任は編集者にあることをお断りしておく。

「吾　妻　山」

国の天然記念物としての指定そして保存が急がれる

昭和34年、鳥取・島根・広島三県にまたがる中国山地国定公園候補地学術調査報告の「中国山地の地質概観」の中で、当時の広島大学教授今村外治氏は、「当地域は中国地方に広く分布する、いわゆる後期白亜紀酸性火成岩体の一部である。この期の火成活動ののち、長く陸域であったが、第三紀中新世中期（2頁の表参照）の本邦に見られた大海進期に、地域の大半は海域に変じた。多里・備北両層群はその遺物である。その後海退があり、高位侵食面を形成、その一部に吾妻山等の礫層を形成した（3頁地図参照―大膳原の平坦地は礫層類地帯で、その中を通って頂上への登山道の両側に、少し下ったところに中新世層がある。そしてそれを頂上に進むと凝灰岩・集塊岩層が四層となって頂上をとりまき、上の層ほどうすくなっている）。その後当地域は著しく隆起し、それと前後して吾妻山・阿毘縁等の玄武岩の溢流（地殻中からあふれて）を見たとしておられる。



かって芸備線敷設工事の際、切割りから豊富な貝化石を産出したということであるが、捨石をさがすと化石を見付けることができた。この化石（名称省略）からみると、津山・新見・東城・西城・庄原・三次・作木・船佐を経て浜田地方に通じた、中新世中期の古瀬戸内海々域に堆積した海成層に属し、多里の岩層や化石からみるとこれと同じであるから、古瀬戸内海水域はこの線から北に分れ、道後山両側の狭い水道によって多里地域に通じ、恐らく安来・松江方面に連らなっていたものと解されるとしておられる。これ以上、横田・三井野・阿毘縁などについて言及することをさけ、常識的な話に移る。

昭和47年、今村教授は広島県側の吾妻山で、観光道路の建設で削られた山肌に海成層をみつけられたゝめ、標高の高い大膳原にもあると想定、調査を続けられたところ、吾妻山八合目の大膳原（休憩所近く）の1,010 *m* の草原の湧き水の所を、スコップで堀ると、砂岩と礫岩でできた海成層があらわれた。砂岩の断面にかっ色に変色した班点がみられたため、拡大鏡で確認したところ、貝やウニの化石であることがわかり、それは1,500万年前のものであることが判明した。1000 *m* 以上の高地での発見は中国地方では初めてである。

すると当時は先にのべたような地域が古瀬戸内海々域としてあっただけでなく、一躍して島根県全体がほとんど海底であったことを意味する、貴重な資料であることが判明したのである。

（写真の　の中は発見された貝の化石）

川角さんは四季折々に多くの吾妻山の好きな人々を迎えて、気象の移り変りとそれにつれて、樹木・草花・木の実・野鳥の美を、ともに味いめでておられる

吾妻山・庄原市・多里は海底であった。・和歌・俳句・川柳

が、是非共これを、国の指定の天然記念物として今のうちに実現し、愛好者にもみてもらうとともに、学問上もこれを日本列島の地質時代の歴史の貴重な証人として保存したいと熱意を燃やしておられる。**川角さん一人**のみの叫びに終らせず、また吾妻山愛好者や研究者のみでなく、この地域の人々の総意として、このことの実現を押し進めるべきものと思うのである。

クジラの化石は

中学生が発見（庄原市）

―広瀬繁登―

西城川は備後比婆山に源を発し三次で可愛川・馬洗川と合し江の川となって日本海に注ぐ。庄原市内を流れるこの西城川の約10㎞はその中流であり、クジラ化石など多くの化石を包含する海成堆積地層を貫流しているのである。そして日夜流水が川床を削るため、次々と新らしい層が現われ、化石採集に極めて有利な条件を与えているのである。

昭和56年8月5日のことである。呉市内の女子中学生が親戚を頼って遊びに来て川遊びをしていた時、棒状のクジラ下顎骨を発見したことが発端となって、付近に住む小学生や中学生の同好者が中心になって発掘作業がすすめられ今日まで、その中原と呼ぶ川原の50㎡の地域で約7頭と推定されるクジラ骨化石が発見されたのであり、特にその中の一体は大体完全な姿態を保存するという極めて珍らしいもので、現在鹿児島大学で研究に供されているのである。又この中原を中心にして約5㎞に亘る流域でも次々と発見されて、この3年間に約16体を数えているのである。

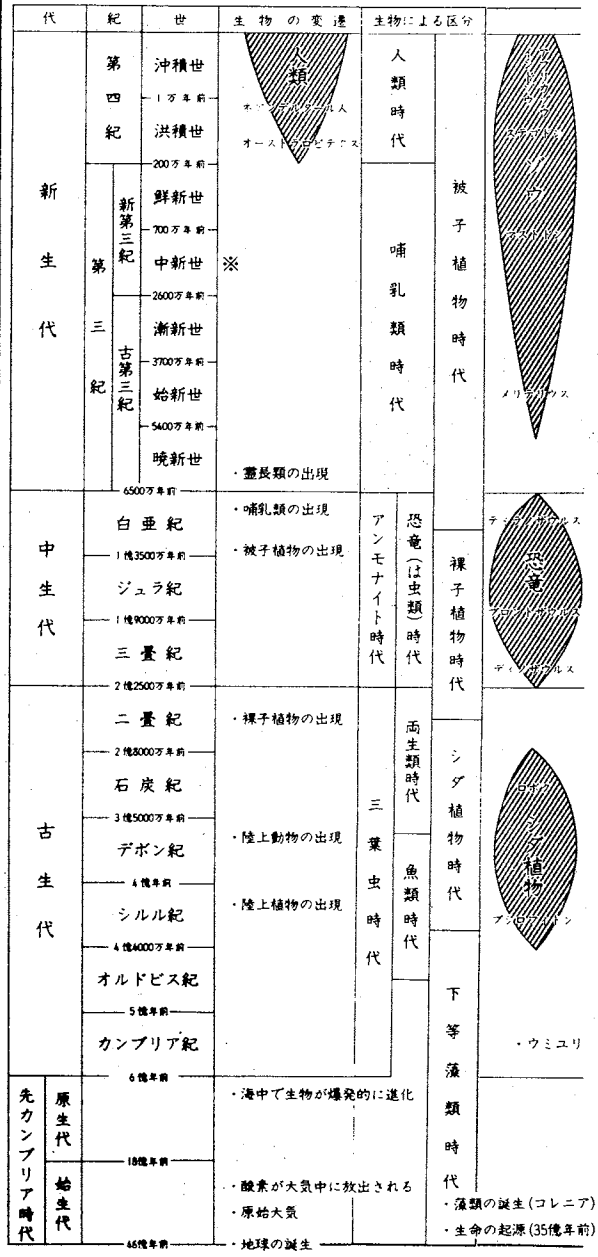
このように一カ所で数多いクジラが死滅したという事実は不思議な現象であるが、学者によっては、今日も世界各地で報じられているように、シャチに追われて陸に上り海に帰れなくなった集団死の現象が当時もあったではないかとしている。

庄原で産したこれらクジラは、体長4～5㎞でヒゲクジラに属す小型クジラであり、岡山県津山に産した体長20㎞に及ぶものに比べて遥かに小さい種である。

これらクジラやその他多くの種類の化石を含む海成地層は、昭和25年広島大学の今村・多井両教授によって備北層群と命名され、三次・庄原・神石など広島県北部中国山地南麓を東進し、岡山県では津山盆地に露頭を見せ、そしてこの同じ地層は更に岐阜県・愛知県にも広範囲に及んでいるのである。中でも岐阜県瑞浪市では、東名高速道路工事中に多数の化石が出土したので、道路公団は博物館の建設費を提供し、今日は日本随一の中新生化石博物館として名を馳せ、多くの大学人が参画して日本における化石のメッカの名をほしいまゝにしているのであるが、出土化石は同じ地層故に庄原産と酷以しているのは当然のことである。

またこの地層の年代であるが、第三紀中新世中期と目されており、今から約1500万年前に遡るのである。当時は生物の進化が頂点に達し、生物の種類も豊富で現生の生物と比較して研究することも容易である点も特に恵ま

地質時代と生物の変遷

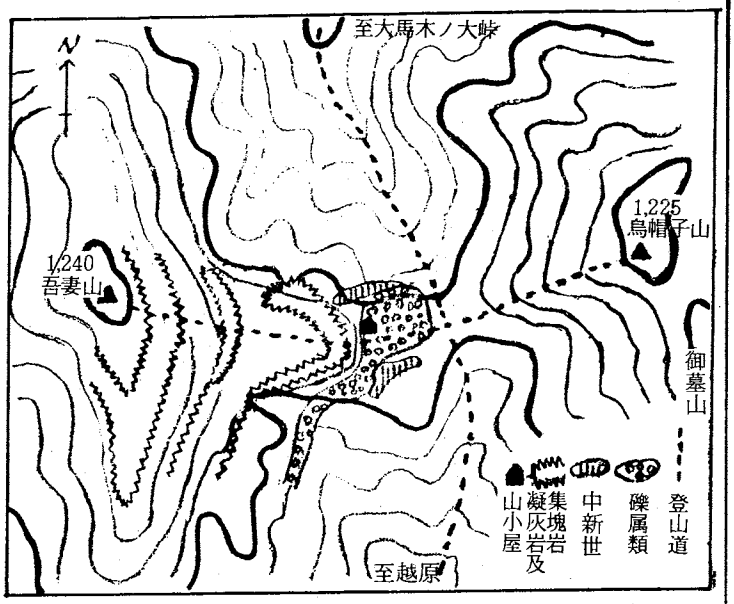


れた研究の特徴である。

なお備北層群が山陽側北部を中心にしているが、山陰側では江の川下流島根県瑞穂町と横田町に隣接する西伯日野町に小さい分布を見ることができる。

クジラ化石の外、13種のサメ類の歯も見られ、他にサンゴや大型玉貝など、亜熱帯性のものが多く、特にゲロイナと呼ぶ二枚貝は、マングローブシジミの別名があるように、熱帯ジャングルの産であり、当時の古瀬戸内海に属する中国地方中南部は現在より遥かに暖帯であったことを、これらの化石が物語っているのである。

これら貴重な化石の発見は殆んどが子どもの手によってなされている。昭和57年幻の動物。いわれたパレオパラドキシアの発見は岡山県の中学生、同じ年



吾妻山附近地層図
（25,000分の1）

多里層と化石

武田　寛

大正10年　一人の青年が多里を訪れた。鉱山で賑う多里に書生風な姿は珍らしかった。彼は岩手県花巻市での日本初発見の昆虫化石は小学校四年生。昭和54年、日本最初の肉食恐竜化石発見は熊本大学付属小学校五年生等々で、古くは西伯・日野中学の生徒が、学会論争に結着をつける貝化石を発見している。

庄原市でも同様で、今から丁度30年前、この地の高校生が河床でクジラ下顎骨一本を発見したのが端緒で広島県唯一のものであったが（広島大学所有で広島城博物館展示）、今日では次々に発掘が続き、西の庄原盆地は、中央を西城川が縦貫して不断の浸蝕としている故発見が容易であり、岐阜県瑞浪に対する「西の瑞浪」への期待がもてるものである。鹿児島大学からは今年末には完全な一体の整形復元が完成して送り届けられることになっている。

「比波科学」に新しい貴重な資料が加わることになる。

着くやいなや、日野川の河原に降り、石をひとつ拾っては暫く見入っていた。そして次から次へと石を拾って何やら調べている様子であった。人々は彼の無言の姿に、一種異様な雰囲気を感じとっていたが、口にすることはなかった。やがて鉱山に登ったが、彼の食い入るような瞳は変ることはなかった。そうした一貫した姿勢は、一年間多里で見ることができた。

彼、北村詮次郎（東京大学生、当時19才）は、一年間の多里滞在の調査を「多里地質瞥見」として卒業論文で発表した。現在定説とされている。新第三紀層に属する地層。名古屋—大阪—多里—三次を結んでかって存在したとされる古瀬戸内海につながる層の説のひとつの画期的なこととして彼の調査が存在したと言っても過言ではない。その後多里層の調査、研究が、多くの小中学生や愛好家によって発見された貝殻の化石によって進み、その裏付けがなされた。

「多里は海であった」ことが実証された。現在標高400 m の高地にある多里盆地が昔、海であっ

晩秋のうた

深みゆく空の青さよ黍の穂を鳴りゆく風の静かなるなり　常盤　はるまさ
電話口にわれとわかれば娘の言葉すぐにも変わる出雲訛りに　永井　弥生
お風呂場のタイルの上にどんぐりが並べてありて秋深みゆく　佐藤　喜代子
脱穀機の口より迅る籾粒の黄金匂ひて袋に溢るる　岡田　時子
ほの甘くやがて苦みの残るまで口いっぱいあけびかみしむ　小早川　恵子
霧雨の夕べ過ぎ行くオートバイの残せし煙草の香り漂ふ　藤原　信子
季節感気づけば仕事に追われ身の庭に木犀咲きて匂ひぬ　宮廻　愛子
戦国の昔を偲ぶ毛越寺芭蕉の句碑は老松の方（東北の旅）　景山　悦子
稲刈機より踊り出でつる稲の束向きを同じにひれ伏してゆく　児玉　敏郎
夫とわれの傍への孫はいつよりか少年の顔になりて眠れる　野村　節子
うたた寝の覚めてテレビを切りしとき遠く聞こゆる救急車サイレン　安部　夕波

訂正　1頁4段2行　炒鋼法・3頁1段23 24行の数字は価格の割合は30%と70%に・26行　生産費。

斐乃上川柳十月抄

鼠屑力士勝って晩酌ちとはずみ　松浦木公
ハンドルは握っても鍬は握らない　松田牛歩
くろねこ便きょうも親馬乗せて行く　松浦亜以
日々平和手綱さばきのうまい妻　若槻白馬
医者通い徒歩も運動の内でありお見合はめがねかくしてコンタクト　太田亀甲
裏口でそっと耳打ちした姑　佐佐木千世
八十五店の切り盛り翳鑠といい休みしたと寝起きの顔合わせ　渡辺好之
日々通い菊の花にも期待かけ　安部正子
不信感つのり心を閉じこめる　児玉哲呂
秋日和大根まびき鼻歌で　真綿よし子
人の目を気にし茸取るけものみち　藤原千代子
　　安部春恵
　　藤原のぼる

十月句会

行く秋や当て無き秋耕農の性（さが）　浅野としお
鰯雲天守の鯱（しゃち）は逆立ちて　糸原古志
朝寒の言葉交して小走りに　岡田蹊花
秋灯や吾が影大きく背負いけり　岡田麗水
川瀬音ねむれぬ夜や秋湯宿　小川あきお
夫の佇つ厨の音や秋を病む　門脇花子
ひと叢の白萩ゆるゝ門構え　加納信子
芒波幾代を継ぎし減反田　高木白虹
曼珠沙華お堀の土手に真紅（あか）に燃ゆ　田辺竹野
雨しきり無花果熟れて雑事の日　錦織富江
ちちろ虫いづこに鳴くや仕舞風呂　新出谷一華
一つまた一つ灯りて秋深む　峯石美代子
鄙びたる湯宿の渓のうすもみじ　渡部夕峰

たとは。無名の一学生、北村詮次郎の姿を、今変貌した多里で思い浮かべるのは不可能であるが、しかしなにゆえこの辺鄙な多里盆地に来て調査したかは、それ以後の幾多の調査発見によって初めて知ることができ、彼の知られざる偉大さに感嘆するのみである。

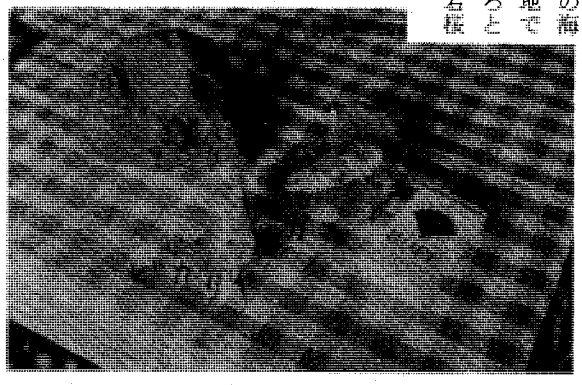
多里層から発見された珍らしい化石は、昭和46年に旧多里中3年の地質クラブ員の秋末連雄君が直径15㎝もある大きな「カキ」の化石を発見している。このような大きなカキの化石が完全な姿で見つかったのはこゝでは初めてである。「ホラドミヤ」という珍らしい化石も、全中学の福田幸弘君が、51年には旧日南中の3年の三沢達也君が、「メジロザメ」の歯の化石を発見した。旧多里中の地質班は、昭和47年5月までに、60種類に及ぶ植物や貝などの化石を発見している。

私がこゝで50年に発見した貝の化石「ビカリヤ」は、その当時にだけ生息し、以後絶滅してしまったため、前代を決定づける標準化石とされていて、極めて貴重なもので、多里の日野川沿いに横たわる新第三紀の地層中で偶然みつけたものである。

生息条件が熱帯―亜熱帯の海岸部で、潮が引いたさい砂地でなく、泥の海底を現すところ上限定されている。県内では若桜町で発見されている。海と陸との関係を知る上にも貴重である。

なお54年には珪化木の化石を発見しているが、その他数種の植物の化石もあるけれど、これは年輪が明瞭にわかるものであって、古代植物の形態や、内部構造、その分類を知る手がかりとなる貴重なものである。これも偶然であるが、灰谷えん堤の工事現場で「ウミニナ」のメノウ化した化石や「スナガニ」の化石を　年末に発見した。いよいよ定説を裏付ける資料がそろったことになる。

珪化木



会員配布一部百五十円／六九一一八　島根県仁多郡横田町一〇六二ノ二　編集発行責任者・高橋一郎　頒布／横田史談会　発行／奥出雲文協　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第　116　号
（12月号）
昭和59. 12. 1
奥出雲編集集団©

書きなおされつつある

古代の日本

技術の発達と技術史の進歩
—出雲国風土記の位置—

技術の発達と技術史の進歩で

こゝ7〜8年、わが国の古代史は次第に書き変えられている。高松塚古墳の壁画発見のころからで、ついで稲荷山古墳の鉄剣の銘文の発見、それから急に「東アジアの中における日本」という考察が避けて通れなくなった。さらに中国考古学者による三角縁神獣鏡の研究、当県の岡田山古墳の鉄剣銘文、さらに荒神谷の358本の銅剣の出土と、その要素は相次いで加った。ここ数年の「歴史公論」「東アジアの古代文化」等の専門誌や、「歴史読本」「歴史と旅」など一般向けの諸雑誌の特集号から、標題に副って問題を拾いあげてみることにする。これらの問題の底には、考古学の進歩以上に科学技術、特に分析や統計の技術の進歩が、それを促進していることを忘れてはならない。そしてこれが出土品の製作技術史も進歩させている。発掘発見ほどの華やかな報道はされていないが、見落してはならない。師の説を祖述してそれを豊かにすること、確実にすることを根本とする学界（山陰中央新報の銅剣シンポジウムにおける、松本清張氏の発見から）の中で、極めて広い視野と慎重な発掘の積上げや検討を通して、ユニーク（独創的）な自由な発言をしておられる、同志社大学の森浩一教授（横田に数回来町）の意見をまず引用してゆく。

7〜8年前までは、大学入試で大和朝廷の統一は4世紀とすればよかった。その理由の一つは前方後円墳の出現からで、もう一つは、戦後は神武天皇から9代までは考えられない。10代の崇神天皇からが実在であるとするのが通り相場となったこと。

「日本書紀」には「御肇国天皇」（はっくにすめらみこと）と書いてあるし、崩御の年が「古事記」でさぐると大体4世紀になるということからで、これが初代の建国者とされた。これも大雑把な考え方だが、国土統一はこのころとされて来た。

今日考えると前方後円墳の拡がりも、多くの発掘調査の結果、池に石を一つ投げ入れた波紋のように各地に伝ったのか、いくつかの石をバラバラとほうりこんだ波紋が拡がるようなのかという問題も生じて来ている。朝鮮半島の南部にもそれらしいものの報告もあらわれている。

その後井上光貞氏（故人東大教授）が、大陸の確実と思われる史料に基づいて、応神まで下げられた。その後稲荷山古墳の鉄剣銘文問題以後、それがより明瞭になって来たので、国土統一はどんどん後退して、今は6世紀という人が多く、中には7世紀という人もいる。これらは銘文解読という科学技術の裏づけがあったからである。

地域的な日本のとらえ方

わが国においても、地方史の発掘研究が盛んになって来ているが、大原郡加茂町の神原古墳出土の三角縁神獣鏡は「魏志倭人伝」にある、邪馬台国の卑弥呼がもらった100枚の中の一つと言われているが、中国において、地域研究が進んで来て、華北にはこういう類のものは全くなくて、大型のもの神獣のあるもの即ち三角縁神獣鏡の源流も地域が限定されて来て、在来の単なる中国からという考え方の基礎もぐらついて来た。そして中国の米作地帯の華中（揚子江中心地方）の工人たちが、日本に渡って来て造ったものという、中国の学者王仲殊氏の考えの重みが出たということになって、在来のわが国の鏡への考え方も変更を迫られることになって来たという。

また日本人の起源を考えるについても、地域性を重視しないとわからないということが、ここ10年で明瞭になったという。旧石器時代以来、いろんな人間がわが国のいろんな所へ入って来て、いろんな文化が入って来た。それがそれぞれの歴史を背負って、それぞれの日本人をつくってきたので、日本人は均質民族ではないという考え方である。シベリヤからも、朝鮮半島の北からも南からも来ている。弥生時代までに各地に郷土色豊かに住みついていたのが、古墳時代に予想外に多く渡来した人々の中で、非常に勢力をもったのが、大和地方に腰をすえて、在来の人を追い出したと考えることが、人間の骨格からも言えるという。土着の弥生人と、渡来した弥生人の二種に分れるという。後者は大陸から入った人と酷似していて、混血していない。古墳時代になると、かなり骨の形が変って、弥生時代の渡来組と土着の縄文人との中間形になってくるという。これが古墳人骨で、わかり易くいえば、埴輪の顔になるといってよいという。

それは日本の人類学ほど精密な、データーがあるところは世

書きなおされる古代の日本・庶民の中の武士⑥・俳句・短歌・川柳・記念事業案内

界中にはないという。しかし分析技術がなかったので、データーで放っておかれていたが、今それを活用する段階に来ているという。

それからみると、古代の日本人は均質民族ではない。単一民族とは考えられない。当時もうすでにそうであって、みな異人種だと思っていたであろうと考えられるという。そこで争いが起り、歴史的な事実が起った。言葉も文化も顔つきもそうであった。日本がみな均質で日本人がみな同胞となってきたのは、明治以後といいきれるようだということである。

すると考古学で進められている地域の実態に対する研究の重視からすると、極めて注目される視点となってくることになる。

三角縁神獣鏡の問題でも、中国の学者に反論する人は、向うの発掘が足らないからで、まだ出るという考え方がある。これを裏がえせば、日本列島の各地に、いろいろな時代にいた人たちの独自の知的な創造力というものに対する評価が、できていないからということになる。

6〜7世紀に大勢の渡来集団がきたが、大陸で戦乱があってそれを避けるためであったといわれているが、何年かいて帰ったものがいない。やはり日本列島は各地から集まる理由があったと考えざるを得ない。

その一例として、福井県の鳥浜遺跡は縄文の早期・前期であるが、漆の器が出土しているという。揚子江の下流域いわゆる江南の文化が、日本の縄文・弥生の時代に何度かの波で、影響を与えているという研究も、発表されているという。また魚や動物ばかりを食べていたとされる縄文時代は、そのため虫歯が少ないと考えられていたが、今では世界で一番縄文人が虫歯が多いという。即ち含水炭素を多くとっていたからであるとされる。すると稲の栽培が行われて、米を沢山食べるようになっていたという考えも生まれてくるといえる。

邪馬台国はどこか

北九州か大和かでなく、さまざまな地域を知った上でやらないといけなくなるようである。三角縁神獣鏡の優秀なものが魏の鏡だという前提も振り出しにもどってしまっている。(以上の後半の意見は植原和郎東大教授—人類学—の見解を中心に)

卑弥呼の時代は250年ころで、わが国の弥生後期とすると、その時代の中国は考古学上からみると、鏡は後漢式鏡（方格規矩四神鏡・内行花文鏡）の時代であって、それらをわが国で出土するのは、弥生後期の九州北部となってくる。

すると三角縁神獣鏡は、それよりのちと考えねばならぬとすると、関係がないことになる。三角縁神獣鏡が中国渡来のものとしても、別途に考えねばならぬことになるという。それに景初3年の年号を別とすると、和製漢文で、3世紀の魏で書けない。大和国家がつくったとしても、3世紀に和製漢文はできていない。中国でもないとすると、後世のつくりものとなる。そして景初3年をどうして入れたか、日本書紀の記述の中に倭人伝の景初の文字があるから、後世これを大和で鏡に入れて、古い時代のものとして配ったことだと思うこともできる。

地域国家像

次にシンポジウムに列席された門脇禎二教授の考えを引用する。

古代国家の形成史は、その多様さでは今日が最も著しい。かっては祖国の歴史像は、かっては国家権力やひと握りの専門家たちが提示していたが、今やそういう時代ではなくなり、国民の誰もが自由に、かつ自ら納得のできるかたちで再構成できるようになっているからである。思いつきや独断でなく、従来より一段と実証的・理論的根拠の堅実さ追求の真摯さが求められている。

邪馬台国を大和説・九州説いづれにとるにしても、大和朝廷を中心とした四方への統一過程と考えられてきていた。そしてこの王朝も古王朝（崇神期）と中王朝は王統を異にし、中王朝は應仁朝ののち九州統一ののちの仁徳朝が遷都したとされるようになった。そこえ騎馬民族説が提出されて、応神・仁徳王朝と結びついた。そしてこれが河内の河内王朝を形成したという説もあらわれたのである。しかし進展する考古学的調査は、従来の地方史理解に大幅な修正を迫る新らしい知見をあいついで提出した。そして4〜6世紀の日本列島には、九州のツクシ、瀬戸内のキビ、近畿のヤマト、日本海岸西部のイヅモ、関東のケヌが併立的に、地域国家を形成していたことが明らかになってきた。それらが6世紀末から7世紀にかけて、諸地域国家の交渉・競合の結果として、ヤマト地域国家が強力となって統一へ進んだと考えるのが常識となってきつつある。

しかしまだ、①地域に世襲王権と地域住民に対する支配組織がととのっていたこと。②古い血縁組織による社会結合を超える一定の政治領域が生れていたこと。③地域独自の支配思想（イデオロギー）や信仰形態が、確認されることなどが必要であるという。

358本の銅剣があらわれたことをもって直ちに出雲独自の地域国家、俗にいう出雲王朝があったと速断することは避けなければならない。

幸に出雲国には「出雲国風土記」というわが国で最も整ったとされるものがあり、加藤義成氏をはじめとする多くの方々に

よって貴重な研究がなされている。

いまこれを読むことから、私どもは誇りうる郷土を、どうみるかも考えねばならぬ段階にきている。せまい横田郷、仁多郡のみを追わないで、出雲国全体を眺めて、郷土を考えまた日本列島の状況も考えねばならない時代になってきている。

新門辰五郎

庶民の中の武士⑥

「最後の江戸っ子」と呼ばれた新門辰五郎は、若いころ江戸町火消に入り、のちその組の頭取となった。映像でも一ころしばしば発場して活躍したが、明治8年になくなっているから、やはり最後の江戸っ子といわれるわけである。

寛政12年（1800）江戸の町の職人の子に生れた。浅草の新門警備にあたったことから新門辰五郎と呼ばれるようになり、弘化2年（1845）に有馬家の火消と争って入牢した時から、彼の名が高まったという。辰五郎の娘は徳川幕府最後の将軍慶喜の妾であったためもあって、慶喜から大変愛され重用された。

幕末慶喜とともに大阪城にいた辰五郎は、慶喜が城内を脱出して江戸城へ帰った時、忘れていった将軍の金扇の馬印をかついで江戸まで駆けもどったという。のち慶喜が上野から水戸へ去った時、落涙しつつ従って身辺警護に尽したともいう。200人以上の子分を持ち、慶喜が禁裏守衛総督だったころは、辰五郎も上京し、御所や二条城の防火にあたり、特に後者での活躍は実に見事であったと伝えられている。のち彰義隊が上野に集結して官軍に抵抗をした時は、再度子分を動員して土俵を運搬させ、自らも参加するなど、旗本以上の働きをし、本当の江戸っ子気質を見せたことが庶民にこたえられないところで、講談や映像で実話以上に多くの話題に花を咲かせる原因となった。

辰五郎は大政奉還後、恭順の意を表する慶喜について、駿府まで下ったが、やがて生れ育った浅草にもどった。このころの物語も多くつくられている。幕末の動乱がおさまり、慶喜の安

十一月句会

眉細き野佛木枯に笑み給う　浅野　としお
陽に酔えるのろまの蛇や草紅葉　岡田　蹊花
かくれんぼ少し揺れいて花八ツ手　岡田　麗水
教場に菊を捧げて児等黙す　小川　あきお
夫の声病む身いたわる霜の朝　門脇　花子
神話の峰嶺より秋を深め行く　加藤　信子
名も知れぬ小さな白い冬の花　高木　白虹
満山は紅葉の錦句をなさず　田辺　竹野
はく息の白さに初冬の寒さ見る　田部　律子
山里は山を砦に冬を待つ　新出谷　一華
年重ね歩む足どり落葉道　錦織　富江
あれこれと行事終りて粂を洗う　峰石　美代子
鬼ごっこ庭に一輪返り花　渡部　夕峰

師走の歌

風吹けば泡立つごとくざわめける樅の大樹を見れば飽かぬかも　常盤　はるまさ
小春日のおだしき庭に広げたる豆のはじけぬさやけき音に　野村　節子
色づける楓を引き手に貼りこめて遠住む娘を待つ秋祭来ぬ　佐藤　喜代子
顔合わば買わざるを得ず知り合いの露店の前を急ぎ過ぎ行く　児玉　敏郎
小春日の庭をひねもす駈けあそぶ子牛とおりて独りの留守居　藤原　信子
優勝杯になみなみ注ぎし祝酒受けて子牛にそへる夫は笑みたり　景山　悦子
柿の木に霜をさけつつ朝顔は小さく小さく咲きのこりけり　小早川　恵子
亡き母と夜ごと挽きたる石臼が飛石となり庭に並びぬ　岡田　時子
亡き父の好みし柚子を手向ければ抗いしことのふとよぎりゆく　松浦　愛子
ひっそりと鯉は動かず池の面に映れる空のいろ寒ざむと　小山　正子
山裾のみ寺の屋根の反りふかく墨絵のごとくいまし暮れゆく　永井　弥生
ふかみゆく秋の吉備路の径遠く夕映えし野に鐘の音聞けり　安部　夕波

斐乃上川柳 十一月抄

何事もなくてよかった物足らず　松浦　木公
ふとん干し秋日のにおい夢を追う　安部　春恵
女房の機嫌伺い寄附の額　渡辺　好之
カメラ向き美人に写せと無理をいう　松浦　亜以
話し合い元前総理御苦労さん　太田　亀甲
大統領以上の歓迎コアラちゃん　若槻　白馬
子や孫が多くて余生楽しがり　真綿　よし子
写経して心のこりもほぐれるか　安部　正子
家も建て家具も揃えて銭が追う　松田　牛歩
八カ月タッチとチャンコの繰り返し　藤原　英生
疑いを知らない孫に嘘をつく　藤原　千代子
是非来いと海を渡った風が呼ぶ　藤原　のぼる

全が確認されたころ、安心したのか息を引きとったという。

これまでのべた庶民の中の武士5人は、いずれも旗本である。折にふれて紹介を続ける。ここでその旗本の人数を整理してのせておく。

旗本の数

Ⓐ享保7（1722）　5,205人　御家人 17,399人

Ⓑ寛政期（1789 1800）　5,205人　？

氏名知行高すべて明らか

Ⓒ正徳2（1712）大老以下台所掃除人まで氏名知行高明らか

イ.万石以上譜代大名 95人

ロ.万石以上旗本 5,398人

ハ御家人 17,399

計 22,882

旗本8万騎と通称されるのは、旗本の戦時下動員数をいう。

Ⓒのロ旗本の中で

地方取り（知行地）100俵以上

切米取り（蔵米を俸禄として）500俵以上

合計

この旗本が、軍役人数100石当り

5,398人　3,122人　2,276人

3人の家臣を動員すると 72,188人 でこれに旗本数を加えると 77,586人

となりこれに御家人を加えると 94,985人 となり

旗本（直臣・御目見層）とその家臣とで

幕府の威勢を諸大名に誇示できた。

横田史談会発足十周年記念

風土記を読もう会　案内

—観光と物産のパンフレットを入門手引として出雲国風土記を拾いよみする—

スブの素人ばかりで、ともに読みあい、その上で専門家の話を聞いて、その地域々々をバスで見学し（特別参拝・拝観も）、歴史を知り、観光を考え、物産も味ったりみたりしてみよう。

ねらい

○出雲の歴史は「出雲国風土記」を中心に考えるのが、まず**第一歩**である。

○**歴史**と**文化財**そして**民衆文化**と**緑**を大切にしない、まちやむらは発展していない（世界の柳田民俗学を足であるいて、充実発展させた　宮本常一氏のことばから）

○今日の観光と物産の源流は「出雲国風土記」の中にすでにある。観光80%物産30%

会合

15回位を予定

毎月第二日曜日 10時～12時前

会場は町民会館原則

第1回は 60年1月13日（日）

資料

①加藤義成著『校注出雲国風土記』

②風土記の丘編「古代への招待」

③山陰中央新報社編「万能島根県地図百科」

④その他「島根の物産」

各神社・旧蹟の案内書

会費

①②③の代金5,000円と会場費含めて毎月500円宛12回あとは150円宛（本を所蔵の方も納入途中で代金を返却する）

④は協力団体の提供で無料

講師を招く時は史談会より補助するが、若干出席者負担

バス代は　参加者分割負担（史談会員については場合により補助あり）

計画

第1期　1月～5月

大庭町・風土記の丘周辺（意宇郡の西部国庁附近）

（見学）風土記の丘周辺の各種古墳ほとんど、国庁趾国分寺尼寺、六所・八重垣・神魂・熊野の各神社

第2期　6月～8月

安来市附近（意宇郡東部）

（見学）各種古墳群・教昊寺跡、清水寺、月の輪神事見学参加

第3期　9月～11月

島根半島部

（見学）古墳群・佐田神社お忌祭行事見学参加

第4期　12～4月

大社・簸川平野

（見学）日御碕神社・出雲大社・平野周辺の古墳群

奥出雲については、各期の中で随時関連して読む。

例会のすすめ方

まず観光案内書、神社案内書物産案内書を読んで、一応それぞれの歴史と現況を知り、地図で確認し、お互で総合的に地理、歴史・風土を話合う。

次に「出雲国風土記」の中でそれらをたしかめ、話合いを深める。

その上で、専門家の方を招いて正しく理解して、見学に行くか。見学しながら説明とあわせて理解を深める。

このようにお互いの努力と話合いで進めてゆく。

（人数の多い時は先着順で〆切らせて頂きます。）

申込みは　横田史談会世話人か横田の福間新聞店へ

〆切　12月22日まで

次の機関の御協力により計画がたてられ、運営にあたっても御世話になる予定です。

島根県観光連盟・島根県物産観光館・山陰中央新報社文化センター文化教室・出雲国風土記研究会他の研究団体

会員配布一部百五十円／〒六九九—一八　島根県仁多郡横田町一〇六二ノ二　編集発行責任者・高橋一郎　頒分／横田史談会　発行／奥出雲文協　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原猪史夫書

第 117 号
（1月号）
昭和60. 1. 5
奥出雲編集集団©

奥出雲のたたら製鉄史⑧

新資料にもとづく特に東南部のその技術・経済・社会・文化の総合史

—中世から近世初頭へ㊤—

学会での発表ほかによってこの連載も申訳けなくも時代を前後し掲載した点お許しを願いたい。本連載の①ー105号59年1月号ーの3頁の「資料1風土記」の説明はその5頁で、「資料2延喜式」についてはその6頁で概略説明した。その後②～⑤では土佐論文を紹介し、⑥⑦は産業考古学会での発表を中心にのせたが、本号⑧よりは、①の「資料3中世の歴史」について述べ、ついで大馬木の山本（屋号）杠家とたたら製鉄にふれ、そして①の「資料4の年表」の説明に入る。その後で産業考古学会で発表した年表即ち先の資料4の年表の続きの説明に移る。続いて出雲松江藩の鉄行政、鉄師の土豪としての農林業と製鉄業の経営にふれる予定である。そして勘定書と記録上の地下構造と発掘した地下構造報告書等をあわせ考察して、たたらの技術の変遷にせまりたいと考えている。それにあわせて鉄師を中心とする奥出雲の社会・文化をのべてゆきたい。

しかし本誌は一般向けに書くことにしているので、専門的なことは別なところで私の力の及ぶ範囲で発表する考えで別にまとめつゝある。（横田史談会高橋一郎）

奥出雲中世のたたら製鉄

既述のごとくこの時代は全国をみてもいろんな面での実体が明らかでない。113号に述べた中世から近世にかけて、わが国の鋳物師の総家であった真継家の文書でみると、鋳物師集団が近畿方面から中国地方へ移住するのは、

13世紀初頭—広島
14世紀〃〃—邑久（長船附近）・三原
15世紀〃〃—用瀬（倉吉方面）
16世紀〃〃—宇波（能義郡）

ごろとなる。これらの鋳物師がどのようにして銑鉄（鋳物鉄）を入手したかは明らかでないが越後国では鋳物師が山中で砂鉄から製錬している記録があるから、鋳物師みづからが製鉄をしていたと推定して探究をすゝめる必要があると思う。この場合鍛冶工人もみずから製鉄をしていると推定して私はこれを自家用たたらと大雑把に仮称し、鋳物師が行ったたたら製鉄を初期企業たたらと仮称して仮説を設けて探究している。これはこゝではこれ以上はふれない。

そこで出雲（奥出雲も含む）と記録のある隣国備後とについて、古文書から拾い上げると、

①石清水八幡宮横田庄（横田町誌参照）の古文書をみると、寛喜元1229・貞永元1232・文永2 1265・仝9 1272等の年に、年貢鉄のことがある。八幡宮雑掌（荘官—荘園の一役人）から地頭（当時は三処郷地頭三処氏が横田庄を支配していた）へ、その完納を督促している。しかしその数量も明らかでなく、勿論その生産体制も技術もうかがい知ることはできない。

②こゝで**隠岐の重栖庄**のことにふれておくと。この庄は現在の五箇村内にあって、鎌倉時代末期は法成寺領であって、嘉元3 1305年貢鉄600廷を納めている。南北朝時代の(北)暦応5 1342には銭となっているから、このまえまでは鉄であったとみられる。鉄1廷を10斤、1斤を160匁とすれば1060貫となり、4.05トンである。延喜式で解説した如く隠岐でも製鉄は行われていたから、この時代もやっていたと考えてよい。これ以上のことは明らかでない。

③**備後国地毗庄**は現在の庄原市を含む広い一帯であって、地頭山内首藤家の文書によれば、南北朝の(北)延文4 1359には、鍛冶屋・鋳物屋が存在している。鉄の生産のことは明らかではないが後世たたら製鉄が盛んになっているから、製鉄者が存在したことはたしかである。製鉄業者と書かなかったのは、鍛冶屋・鋳物師が小規模な生産をしていた（自家用たたら）とも考えられるし、農民が農業の合間にこれに似た生産を行っていたと考えられるからである。文書からみると鍛冶・鋳物の職人は地頭山内氏の需要に応えていて、その余力で荘内農民の需要（農具の一部）に付属的に応じていたと考えられている。

延文5 1360の文書には、すでに三日市・新三日市・九日市・十日市などがあらわれていて、荘園内の商業の発達による市場の存在を裏付けている。こうなると年貢は物納から銭納へと移る。

先の横田庄の文書の中には、寛喜元1229銭納のことが明瞭にのっている。今までの研究では備中新見庄における銭納が最も古いとされているが、それよりさらに横田庄は古い時代となる。これらからみるとこれらの地の

奥出雲のたたら製鉄史⑧　川柳・仁多郡西部の地頭飯島三沢氏物語⑥　俳句・短歌

地頭が先にのべたような製鉄者を支配して、荘園の領家（持主）に貢納し、さらに自らの経済的・武力的基盤の充実に役立てていたことが想像される。

④横田庄代官安部氏は、横田庄が南北朝期の半ばから、北朝の仙洞御料所（上皇の）となるとこの地に下つた者である（奥出雲34 35 47 51 52 53 100号に）。途中明徳の乱をはさむ10年間は山名氏の代官に代られていたが、乱後復活し70余年後、朝命をうけて三沢氏が、地頭請所として横田庄を支配するまでその職にあった。この間の安部氏の記録に次のようなことがある。

4代宣豊の壮年時代（応仁の乱の前・15世紀半ばころか）に、日本海を渡って貢納のため京都に赴く途中、大風に出会い難行をしたことがあった。その時かねてから上洛の度に参拝していた、京都伏見の稲荷大明神を念じたところ、この難を無事にすごし公用を果すことが出来たという。この御霊験あらたかな話をしたところ、上皇の耳にも入り、その口添えで分霊を勧請したのである。今日なは現存し安部家は奉祀している。この時貢納品が鉄であったかは明らかではないが、上洛の砌かたわら鉄を商ったという。その子5代近豊の時代に応仁文明の乱となり、朝命によって有力な伝統的国人衆三沢氏が横田庄を支配することになる。安部氏は近世後半に一時製鉄を行っているが、この頃は明らかではないから、やはり先にのべたような人々によって生産されたものであったであろう。

⑤刀匠をひろってみると、室町時代の寛正5 1464ころ、備前系に属する則包（雲上）がいて、その子永則（道永）は八束郡岩坂村駒返りに定住して名をあげ、その後栄えたという。三沢氏の城下鴨倉にも、文明17 1485ごろ備前流の刀工忠貞が来住し、忠貞派の祖となって続いており、その派の刀匠の銘の明らかな、そして三沢氏一族の武士名もしるした天正年間のものも現存している。

⑥邑智郡坂根家文書を浜田高校の山根正明教諭の御厚意で送って頂いた写真でみると、弘治4 1558に坂根家（武士）が戦功によって、いままで所持していた四口の鉄山（出雲では木炭山をいうが、石見では鉄穴山をさす）を、末代までつかわされる旨のものである。これは地侍が所有しその支配下で、誰かがたたら製鉄をしていたということがわかるもので、製鉄者が専業者なのか兼業者（鍛冶・鋳物・農民）であるか不明である。しかし業鋳物師が布部地方にいたとある。製鉄者のことは明らかでないが、時代の需要・地形風土を重ねて考えると、109名はすべてが鋳物師でなく製鉄者もいたものと考えることもできる。

⑧地名から考えると、全国各地に鉄に関連する地名が多い。この文書は偽文書の疑いがあるとのことであるのでこの程度にしておく。

⑦布部村の鋳物師は16世紀にこゝに移住して定着したと書いたが、「鋳物師座法之捉」（天正4 1576 8月）によれば、すでに宝徳年中（1449〜1451）に、109名の専の地方でも徳川初期の検地帳をみると、当時の村単位（今日の小字）に関連地名が一つのまとまりをみせて散在するから、富農層を中心とする兼業製鉄者がいたように考えられる（くわしい考証略す）。

⑨島根半島北西に宇竜港がある。本誌111号の三沢氏物語に書いたように、この時代の生産体制その支配のあり方は別として、少なからぬ関与をしていたであろうことは、前項の地名の問題や次にのべる宇竜港のことから考えられるのである。

天文12 1543から尼子勝久は美保関とあわせて、日御碕の宇竜浦（港）における船役徴収の権利ももっていた。

（船役とは中世において船一隻ごとに課した税で反対給付として特権を与えた。帆別銭ともいった）

永禄4年1561 10月、仝6年5月義久が日御碕に出した条書の中に、こゝから北国船・因州船・但州船・唐船によって荷が積み出されたとある。鉄も出されていたとみえるのである。しかしこれは尼子氏が船役徴収権をもっていたということで、生産との関係は明らかでない。

⑩鉄炮についてふれると、県立図書館の藤岡大拙先生の教示により、「新修島根県史」の資料編の蒲生文書を読んでみると、永禄8年尼子氏が毛利氏に居城富田城を包囲されているさなかに、家臣蒲生氏が鉄炮をもって

斐乃上川柳会十二月抄

ふんわりと掛けた布団の二日酔い　渡部好之
いっときを逃れた嘘が仇となり　松浦亜以
妻の旗青と限らぬ至近距離　松田牛歩
粗大ゴミもうお迎えも遠からず　太田亀甲
価値感が愈々下がった新紙幣　若槻白馬
出来過ぎた菜っ葉漬込む昨日今日　安部正子
休場の手で横綱の座を守り　松浦木公
聳え立つ霊峰富士に身がふるえ　佐佐木千世
旅に出る前日までの忙しさ　安部春恵
早く来て夕陽が赤いと妻の声　児玉哲呂
褒言葉嘘と知りつゝ笑み浮び　真綿よし子
ちょろちょろとぼける間も無い孫の守　藤原千代子
子の招く海の向こうに虹が立つ　藤原のぼる

敵数人を討捕ったことに対して出した賞詞がある（翌9年11月富田城は落城する）。この鉄炮はどこで製作したものであろうか。

在来は資料3にある如く、天文12年火縄銃がはじめて種カ島へ伝来し、6年後の天文18年1549織田信長が国友鉄炮鍛冶に鉄炮500挺を注文したとされているが

それより前の永正8年1511の船岡山合戦にすでに鉄炮を用いており、中国系小胴砲はそれより46年前に堺へ輸入されている事実がある。まだ鉄炮製造の歴史も初期について不明の点が多い。（次回の中世—続は杠氏について）

①**岩屋寺**が天文年間に再建された記録のある快円日記には、工具はやりがんなが削りの主力であって、その修覆のための鍛冶屋の存在を記している。この時漸く大鋸（たて引鋸）が伝っている。

横田庄の貢納記録も荘園が終る天正19年1591まで少なからずあるが、鉄のことはない。戦国争乱がまねいた需要のため、また農地開拓増大のため、それに向けられたものであろう。このころを私は仮称する初期企業たたらの本格的時代と推定している。

奥出雲を護持するため尼子氏の抬頭に抵抗し、その衰退に加担した

—仁多郡西部の地頭飯島三沢氏物語⑥

京極氏時代から尼子氏時代概観

（北）康暦元年1379の康暦の政変で山名氏は出雲・隠岐・備後を加えた。このころ京極氏は近江北半国の守護であった。（北）康応元年1389山名満幸は丹波・出雲の守護職をつぎ、5月山名氏の嫡統時義の死後伯耆・隠岐をもついだ。度々のべるように（北）明徳2年　に明徳の乱がおこり、京都の北西部（上京区）内野で、山名一族を迎え討った細川頼之を将軍義満は自ら馬廻衆3000騎の精兵を率いて援助し、激戦が行われた。結果山名氏清は戦死、満幸は敗走した。討死したのは幕府方164人山名方879人（この戦で三沢氏5代尾張守為忠が討死したと、正系図にあるが、諸記録で筆者はまだ確認に至っていない）といわれる。のち義満は1100人の僧侶によって100日間、1万部の法華経を読誦させたという。

情勢は天下を分けるほどの一戦であり、凄惨な戦いだったと明徳記が記している。多数の怨霊の祟りを恐れたためであろう。

満幸は本貫地丹後に走り再起を計ったが、国人衆の離反によって、因幡・伯耆の所領にたよるべく下った。明徳三年春、出雲・隠岐の守護職は近江北半国の守護で、幕府侍所の長官であった京極高詮に与えられた。

西へ走った満幸は各所で叛旗をひるがえされ、富田城にいた出雲の守護代塩冶父子も期待できなかった（山名氏一門の一人馬木郷地頭馬来氏初代氏綱も、富田城北東の吉田で討死したとその系図にある）。

さらに西の三刀屋城も襲ったが、守備堅く落すことができず九州へと走った。のち京都に入ったが応永2年　、高詮によって誅せられた。その10日後の3月20日、高詮は正式に雲隠両国の守護職に補任された。その後高光—持光（持高）—持満—嫡孫の孫童子—その伯父政経（政高）と両国の守護職は相承されてゆく。そして政経が永正5年1508に没するまで113年、京極氏はその職にあった（永正6年には三沢氏10代遠江守為忠が藤カ瀬に移城する）

政経は晩年跡を孫の吉童子に譲るための譲状をしたためこれを一族の多賀、尼子両氏に託した。後で詳述するが、尼子氏は次第に京極氏の雲隠両国の家督と守護権を継承し、大永14年1529経久は幕府からはじめて正式に補任される。それから17年後の天文10年1541経久は84才で没した。

政経が没し実権を掌握しはじめてから33年目であった。在来説では尼子氏の山陰に於け登場は早く破竹の勢で成長したとされているが、実は遅くて苦難に満ちたものであった。この間のことを今岡論文に筆者の明らかにした三沢氏の動きを加えてのべることにする。

尼子氏の登場

出雲で確実な史料に尼子氏の名を見出すのは在来、永享11年1439とされている（経久の父の清定か、祖父持久か）。しかし尼子氏は既述のように守護代として認めることはできず、国人衆

十二月句会

神集う出雲は今日も小春なり　浅野としお
薬飴ほほばり婆と年用意　糸原古志
時雨るるや焼酎をのみ便り書く　江角英夫
寄るべなき冬蜂陽の縁よろよろと　岡田蹊花
懐炉抱き今日の身支度整いぬ　岡田麗水
毒茸あやしき色を砂に朽ち　小川あきお
ささやかな庭も一と日の冬囲い　門脇花子
黄落や由緒ある石狐の耳欠ける　加納信子
あるなしの風に舞い飛ぶ枯れ尾花　高木白虹
南縁に小春日うれし古書曝す　田辺竹野
廃屋の窓へからみし蔦紅葉　新出谷一華
荒れし手にしわの重なる今朝の冬　錦織富江
雲樹寺の或る日の山茶花しのぶ日々　峯石美代子
道すがら数えて帰る冬の星　渡部夕峰

がそれぞれの事件・問題毎に代行させられているから、尼子氏は京極氏の一族として（幕府の奉公衆となっていない。奉公衆となることは、一方では幕府は奉行衆を介して守護の柳圧に利用した）、京極氏の出雲領国支配機構を支えている、国内の伝統的勢力である国人衆に対抗させるものとして、正長（元年1429）永享（元年1430）のころ、出雲に下らせられたものとみられる。

それから20数年たった康正年間1456～1458には、前回でのべたように、漸く尼子氏は国人衆と並列的な立場に立つようになった。

これから抜きんでた地位を得るのは、清定が応仁・文明の乱（1468～1475）に活躍してから以降である。当時守護持清はこの乱中は、京都・近江にあったため遠く隔たった出雲における、隣国守護山名氏との抗争、さらにそのさなかでの出雲の国人衆の定かでない去就とに悩まされたから、一族の清定を強く頼みとし、清定もこれに応えたのである。その結果尼子氏へ発せられた感状があり、出雲東部で数々の所領を宛行われたのである。この実績に支えられて尼子氏の守護権力の体系における地位も変化し、他の国人衆宛の発給文書がなくなり、尼子氏のみを執行者とするものがはじめて登場するのである。さらにこれをくわしくのべてゆく。

応仁の乱の勃発（1468）で尼子氏が抬頭し、文明16年1484失脚まで㊤

応仁の乱は細川勝元（東軍）と山名宗全（西軍）の対立に、各地の守護が双方に分れて、全国的規模の争乱となったもので、京極持清（近江北半国）は東軍に、一族の六角高数（近江南半国）は西軍にそれぞれ属し、お互は近江国完全制覇をねらって戦った。

応仁元年1468 7月、京極方で出雲の国人衆赤名・牛尾・三刀屋の諸氏が洛中（京都内）で戦っている。全2年閏10月30日出雲から出陣した三沢信濃守為清は一族や部下とともに戦い討死したという。

（これについては滋賀県蒲生郡誌によれば、寺院の古文書をあげて信濃守為清討死が明記されている。全県高島郡誌にもその記述がある。ところが三沢の正系図にはこのことはなく、文明7年10月晦日に信濃守為清が江州にて討死とある。このことは高島郡誌には応仁元討死の上に「長与宿禰記」を引用して、7年10月28日江州に討死としている）。

翌文明元年5月京極氏は遂に近江国を制覇するが、その翌2年持清は没した。

このころ出雲では応仁2年6月、安来・十神山城主の松田備前守（日御碕社小野氏の支族で承久の乱で北条方に属し、安来庄地頭職を得て土着した）は東部の国人衆の中で最右翼の勢力で、伯耆守護山名氏のあと押しを受けて、尼子氏の富田城に攻撃をしかけたのである。尼子氏はこれを撃退することができたのに勢を得て反撃体制に移り岩坂・外波（八雲村）の三沢氏の代官福頼十郎左ヱ門を討ち、その他各地へ兵を進めた。

（文書によれば、この年持清は、この際為清（惣領とすれば）の留守中の手薄をねらって（討死前のこと）これを押さえることを考えたものかとも思うが、史料不足で明らかにできない）

尼子氏は続いて十神山城とその支城を攻め、遂に十神山城を陥し入れ、山名党をけちらした。これに対して持清は感状をおくり、所領を宛行っている。

翌文明元年になると清定は、大原郡大東方面の山名党久野氏そのほかを討ちとっている。

先にのべたように上洛して持清に加勢していた奥出雲の国人衆赤名・牛尾・三刀屋・三沢の諸氏はまだこのころは留守中であったであろうか。

ところがその翌2年、国内制圧を着々と進めている尼子氏の前に、立ちはだかったものがいる。三沢対島守とその与党で、一揆をおこし、周辺の多くがこれにくみしたので国一揆となっていった。

—次回へ—

（この対島守が系図の上でうまくかみ合わないし、為清の討死とともに未解明である）

（横田史談会　高橋一郎）

一月のうた

おのがじし生きゆくべかり雲晴れし空支ふごと柿の大樹　常盤　はるまさ

幼きより共に入浴せる孫の今宵吾の背流してくるる　野村　節子

飯釜にてつくりし牡丹餅温かく膝塗りて食べし杳き思ひ　佐藤　喜代子

特選の賞に入りたる愛牛に頬よせかたる今幹のわかれを　景山　悦子

晩秋の音戸の瀬戸に返り咲く桜並木に日差しはあわし　藤原　信子

時雨降る芝生に四五人歩みつつゲートボールの音は澄みたり　小早川　恵子

あたたかき日ざしの庭に父愛でし山茶花咲きぬ去年は在りしに　松浦　愛子

亥猪さんにゃ餅搗くもんだと言ひし亡母新しき小豆は塩餡にせむ　永井　やよい

寒雷のとどろきわたる高原の街冷え冷えと明りともりぬ　安部　夕波

会員配布一部百五十円／六九一八　島根県仁多郡横田町一〇六二ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0—601）　頒布／横田史談会　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第　118　号
（2月号）
昭和 60. 2. 2
奥出雲編集集団©

奥出雲を育てた人⑨

門野長道

恐らく横田町内の人で、この方の名を知る人は極めてまれであろう。ところがこの方の功績を讃える石碑「門野長道君功徳偉勲之碑」が、（高さと巾各1.5m）、横田町馬場の横田八幡宮境内の最良の場所に、3段1m余の台石の上に、その偉勲をしのばせるように堂々と建立されていて、恐らく郡内にも例をみない立派なものである。碑文は600字に及ぶ長文のもので、明治23年10月28日の日付が刻してある。漢文で撰せられているので、これを平易に意訳する。

碑文の意訳

前仁多大原郡長門野長道君は在職中、庶民がよくその業に安んずるようにし、その業の永続を計った善良にして誠忠なる官吏であって、功名赫々その偉誉は後世を照らすものである。

文政10年1827 10月近江国犬上郡彦根に生れ、幼名を己之助といい後半内と改め、門野家を継いで彦根藩主となった。（筆者注—滋賀県犬山郡内には尼子氏の出身地尼子庄があり、のち三沢氏の一族が分かれ住み、こゝから、仙台藩支藩前沢藩主、鳥取藩士、久留米藩士となった三沢氏が分れている）

人柄は温厚篤実でしかも度量があり、志は高く該博な知識をもちさらに公務に精通していた。

明治元年4月、大津裁判所会計判事に任ぜられ、仝5年正月長野県に出仕したが、長野県が廃せられ犬上県が設置されると、権大属に任ぜられついで大属となった。仝6年4月島根県へ出仕して大属となった。仝10年1月制度改正により島根県一等属に任ぜられ、仝17年4月邑智郡長に転任し、仝年5月仁多大原郡長に任ぜられ、奏任官六等に叙せられ、上給俸を賜るが、いくばくもなくして正八位に叙せられ、仝22年5月願によって本官を辞して郷里彦根に帰られた。

門野君は久しく官務にあって、庶民本位の政治を行い、至誠至忠よくその職に尽し、その後君は勧業の官にあって英意牧民の務を完うせられた。そして仁多大原郡長として着任以来は、君の志最も厚い時代で、郡民を誘導し、耕作法の改良をすゝめ、山への植林と育成を教え、養蚕の利益の大なることを示してこれを奨励し、木炭の製法を改むるなど、一意専心朝夕を忘れ、業務のためには寝食も忘れて務められた。素望を忘れず、春来ればすなわち万花の開くとともに勉め、夏になれば緑草の茂るとともに勉め、秋に臨めば風雨の恵とともに勉め、冬の季節に移れば雪霜の積るとともに勉めた。君の心はもとよりこゝにあり、君の念ずるものは常にこゝにあった。

君また窮民を顧みる意に深く、しばしば義損金をもってこれを救い、役所から数回の賞をうけた。君はいつも親愛の念をもって庶民をなづけ、篤実の意をもってその職を務め、よって上天聴に達し恩賜をうけた。その忠これにすぎるものはなく、下郡民の欣慕をうけること、その誠の尽ることなきあらわれである。

あゝ君の誠忠こそはすなわちまことの誠忠である。あゝ君の篤実こそはすなわちまことの篤実である。どうして欣慕せずにおかれようか、どうして忝敬せずにおかれようか。ことに君の去るに際し、郡職員はもとより郡民哀別の情にたえず、あたかも赤児の慈母に離れる如く、泣き悲しみ愛慕する如く、その別れを惜しんだ。

こゝにおいて郡民有志相計り、君の功徳偉勲の数々を後世にまで記念し残そうと思い、こゝに石に刻んで、これを表わす碑とする。

今昔の感

壮大な碑の碑文中にある功績は、わずか5ケ年の短期間のものである。当時たたら製鉄は不況に向い、郡民死中に活を求めるため農鉱一体の農村体制の構造改善を模索しつゝあった時であり、その陣頭に門野郡長は立ったのである。その詳細な事蹟は今後明らかにする予定であるが、この郡長と一体となって努力した一人に鉄師絲原権造のあったことを忘れてはならない。その一端は「奥出雲」（58・59 60号・未完）に紹介した。門野氏の発した公文書或は書簡が多数、絲原記念館に所蔵されているので、折をみて了解を得て紹介したいと思う。その中には今日、「むらづくり」から「むらおこし」へ、また「ぢげづくり」と言葉の変りのみで、実のともなわない時代に、大きい示唆を与えるものが極めて多い。

調査は調査で申請に力点が、実施は基準の平均的わくにはめられて、木に竹をついだ目先のことの多い時代。中海新産都市から中海干拓への衣替え、今は淡水化問題の低迷状態。かく地方の公共投資にしても受益の主体はいずれに向っているであろうか。今と昔文明文化の進歩の

「風土記を読もう会」の第一回を終って

出雲地方の観光案内書を大ざっぱに分けてみると五つになるが、松江市は近世以降に成立し発展した街であり観光地であるから、これを除くと四地域となる。安来、風土記の丘周辺（出雲国風土記—以下風土記という—の意宇郡内）、島根半島中部東郡（仝書秋鹿・島根郡内）、簸川郡地方（仝書の出雲・神門郡）である。出雲には399の神社があって、そのそれぞれの祭神の中で大神は4あって、それは先の4地区にある。即ち「野城大神」「熊野大神」「佐太大神」「所造天下大神」（大穴持命）である。この4地区がこれらの大神を祭る社を中心に今日まで、1200年それぞれの地域を育て来て、また行事も育て観光地となっている。古代には人は自然に大変革を加えることなく、順応して定住しているから、これらの地域はそのためには極めて恵まれた地域であったことである。

さらに風土記で神社数をみると次のようで、あとのべるように多くの神々即ちそれを祖神として祭る氏族がよき定住地のためそこに多数いたことがわかる。

（郡名下の数字は官社・国社・合計）

	① 意宇	② 島根	③ 秋鹿	④ 出雲	神門	計
	48	14	10	58	25	184
	19	45	16	64	12	215
	67	59	26	122	37	399
	楯縫	飯石	仁多	大原		
	9	5	2	13		
	19	16	8	16		
	28	21	10	29		

上段が4地域にあたり、官社が多いことはより大きい豪族がいたことをしめしている。

これを考古学上の4地域の古墳・出土品（こゝでは省略）の図に投影してみると、全く重なるから、弥生時代・古墳時代の生活圏の中での氏族の発展・豪族の成長と集中があって、風土記時代に続き、その記録が「出雲国風土記」であり、今日まで生き続けているのである。残存する各国風土記の中でこれほどのものはほかにない。筆者はこの故に加藤義成氏の諸著をはじめ幾つかの研究書を通して、出雲の歴史はこゝに基盤を置いて考えるべきだと、昭和20年末から雑誌「郷土」に執筆後、拙著「奥出雲をさぐる」（山陰文化シリーズ16）、「島根県横田町誌」（分担）と一貫して来ている。なおこの奥出雲（29 30 31 33 54 57 60 76 77 86 87 88 89号）でもさらに詳論している。

この度横田史談会発足10年記念として、標記の会合を開き、奥出雲だけでなく、出雲全体を諸書を手引書として、誰も一緒に読もうとそれも手近な観光、物産の案内書や地図を糸口にして始めた。いずれ4地域をたずねて専門の方に説明して頂いて正しい理解に達しようという計画である。

第1回は当誌116号予告の諸資料を用いて読んだが、今後の会の在り方の基本となるものであるので、少し資料も追加してこゝに当日の話合いを再録した。

文中の略号「風」—校注出雲国風土記、「参」—修訂出雲国風土記参究、「万」—島根県万能地図百科、「八」—八雲立つ風土記の丘ガイドブック

四　大　神

○**熊野大神**（「風」16頁）を祭るのは意宇郡の熊野山（「風」16頁）（「万」13の天狗山か）にある、熊野大社（現熊野大社）（「風」13頁）である。

○**所造天下大神**（「風」62頁）を祭る社は、出雲郡出雲御埼山（今の北山「万」33頁）の西のふもとの杵築大社（今の出雲大社）（「風」57頁）である。

○**野城大神**は意宇郡の野城駅にいた大神で、そのため野城といい、その社は野城社（「風」14頁）である（現能義神社、「万」6頁）。

○**佐太大神**の社は秋鹿郡の神奈火山のふもと（「風」41頁）今の朝日山とも社の後方の弥山という（「万」9頁）にある。その社は佐太御子社（「風」41頁）（現佐陀神社）である。

このように風土記を読んでみると、これが勘造（かんがえっくる）された天平6年734（「風」162頁）には、かって肩をならべて互に競いあったであろう四大神（4大氏族がある）の間には差が生じている（背景には勢力の消長がある）。熊野大神と所造天下大神をまつる社が大社と呼ばれ、他はたんなる社である。小部族を次第にそれぞれの勢力の下において成長した4氏族のうちの2氏族が他の2氏族を抑えて、出雲国を二分し、そして風土記の時代意宇の豪族が他を差はあるが、碑文と比べて見て将来を展望する経綸については大きいへだたりを感ずる。

「21世紀を展望する」の言葉や掛声倒れに終らぬことを。

また緑と森、山と水に関する国内外の実態や研究報告書の地道なものを、わずかではあるが読んだ一読書人の感想であるが、各地を歩いて見て、山にのぼって見て、暗いかげが横ぎるのを感ずる。単なる書斉人の杞憂に過ぎなければ幸である。

映像の報ずるフィリピンの山と畑、実地見開者に聞くインドネシヤの同じい荒廃は、日本人の乱伐の代償という。蒙古の草原を畑地としたゝめ、その余波は他の草原を砂漠化して止まるところをしらずといい、そしてふただびその地を草原化することは不可能であるという。悠久の歴史を軽ろんずると、この様な現象となる。アフリカの飢餓もやはりこうした代償という。

この碑がこゝに建立された経緯等については、故山根栄太郎から聞いた覚書きによって、御遺族のことどもとともに、稿をあらためて紹介する。

（編　集　子）

抑さえて君臨したのであろう。そして出雲国の国造（くにのみやっこ—大和の支配下に入ったその国の首長名といわれる）になったと考えられる。他の一氏族がどのようにして抑さえられたかは諸研究書の見解にまかせる。

風土記時代の前は、7世紀半ばの大化の改新（大化元645）によって、中央地方の官制が確立し、それより中央より国司が出雲に下って政治を司ることになった。この時から出雲の国造は出雲国の中心（国庁の置かれた）で大郡の意宇郡の郡司の大領（4人の郡司の最上席）にすぎなくなった。しかし国内の郡司34名の中の8名は出雲臣の同族であり、ほかの郡司にも縁者があったとみられるから、やはり往時の最大の勢力豪族であったことがわかる。

その後、大宝元年701に大宝律令ができてさらに制度が整い、やがて奈良に都が置かれ奈良時代となる。大和王権を中心とする「記紀」の史書が編さんされ、和銅6年713各国に風土記を編さんして提出する命が出され、天平6年734出雲国風土記が勘造されたのである。勘造であるから一度できていたものを補修したものという説もある。すでにのべたように残っている風土記の中では最も整ったものである。

風土記以前の時代即ち奈良時代以前の四大神と氏族

下図をみると古墳時代には、四大神の所在地附近はともに大型古墳のある地方である。これらの4地域がそれぞれの地の最強勢力の氏族に統一され、それらが祭る祖神が大神となったことが考えられる。四大神の成立時代となる。そこでそれをさらに検討するため大型古墳をみると（図省略、配布済みを参照）、4世紀の古墳前期ごろからこの四大神をまつる4氏族の成長時代に入り、後半期より飯梨川の海岸方面中心に大型古墳が出現する。こゝに大神が発生する。

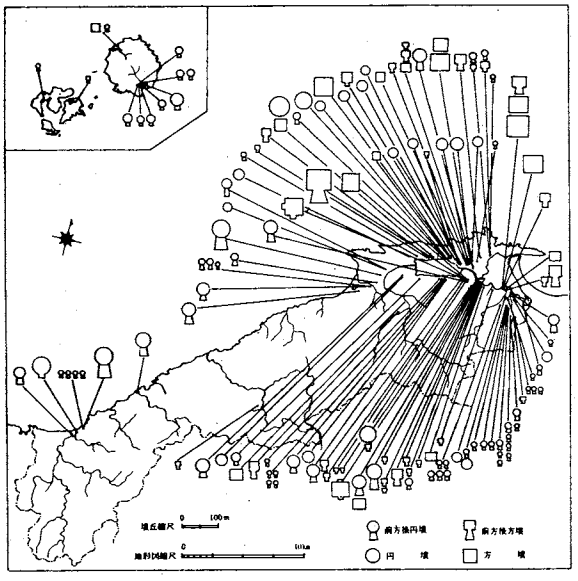
一方斐伊川の中流にも氏族が土着成長する。海岸から飯梨平野の周辺部へ古墳は移る。開拓の進展と勢力拡大のあらわれであろう。5世紀を経て6世紀になると意宇郡の平野部（熊野大社の北、現風土記の丘周辺）に大型古墳が出現する。そしてこの地に一豪族が成長し、佐太地方の湖北にも一豪族が成長し、6世紀後半にそれぞれその祖神が大神となって、その地域統合の中心となったであろう。

西部の現簸川地方は遅くれていて、神戸・出雲大川（現斐伊川）の下流の低湿地も、6世紀中葉以降土地造成へと成功し、大穴持命（「参」地主の神、開拓神）を祭ってきた。これがのち所造天下大神へとなる。

そして神門郡の現杵築大社（出雲大社）のある北山の南方の斐川町以西の山麓地帯に大型古墳が出現してゆく。その中心は神門臣・日置（へき）部臣であって、それらの神が大穴持命ともいう。またこれらの部族は九州から弥生文化をもって渡来し土着したという説もある。これが出雲に於ける二大勢力の一つとなる。

そして6世紀末から7世紀初

（島根百科大事典より）



きさらぎの歌

父も兄も共に僧なり僧ならぬわれも諳ず方便品寿量品　常盤　はるまさ
いささかのことに涙の浮かび来るわが老ひ噛みしむ落葉掃きつつ　永井弥生
凍てつきし朝を急ぐ登校児の列に混りて孫の鈴鳴る　佐藤喜代子
孫の祝いしマフラーオーバー装いて床を背にして起ちたり母は　児玉敏郎
しんとして凍へる道よ父母の住めるは長き坂の上の家　小早川恵子
甲高き声交しつつ園児らはしき降る雪の庭に遊べり　戸屋映子
還暦の朱盃を受くる夫の目は六人育てし充足のあり　藤原信子
遠き日に雪にかじかみ泣きし手を亡母はふところに温めくれし　松浦愛子
ほどほどに善が顔の化粧汗ばみて畜産視察の牧場廻りぬ　宮廻愛子
手造りの千両箱を負ひし牛贈られし日に子牛売りたり　景山悦子
とどろかせ舗装路堀りゆく土工夫を包むが如くぼたん雪積む　岡田時子
不機嫌に寡黙の夫と居る午后を明るき声に孫の帰へり来　野村節子
北国の山脈はるか夕映への消えゆく空を雁渡る見し　安部夕波

二月句会

還暦となり子の温き心知る　浅野　としお
在りし日の面影うつつ屠蘇の酔い　高木　白虹
七曜とかかわりのなき日向ぼこ　糸原　古志
巽傘片手は重き包み提げ　岡田　蹊花
松納め生活のリズム戻しけり　岡田　麗水
独り居も何時か馴れて年の暮　新出谷　一華
祝白寿と書く尉斗紙や筆始め　加納　信子
音もなく降りつむ雪に松ありし　峯石　美代子
旧姓を呼ばれてふりむく年の暮　門脇　花子
雪道や始業チャイムが遠く鳴る　江角　英夫
眼を塞ぐ街一面の雪げむり　錦織　富江
八十路積む母も笑顔の初鏡　渡部　夕峰
厨窓の湯気のしまめや牡丹雪　小川　あきお

斐乃上川柳会一月抄

冬至から寒気どっしり腰をすえ　安部　正子
お喋りが一寸すべったプライバシー　若槻　白馬
音無しの構えで泣かす銀世界　渡辺　好之
居心地が悪いか諭吉おちつかず　松浦　亜以
冬の夜心身のこりを風呂でとり　安部　春恵
豊年のしるしの雪が降り積り　松浦　木公
降る雪をいいことにして朝寝坊　児玉　哲呂
子や孫と大晦日だけ顔も合い　真綿　よし子
熱いから火葬は嫌やと言ったとか　太田　亀甲
丑の年いいこともあろう牛安値　松田　牛歩
くどい婆あさもあれ小さい殻の中　高木　白虹
禁煙の我が家灰皿出しおくれ　藤原　千代子
赤ちゃんになってと孫にせがまれる　藤原　のぼる

頭にかけて、意宇郡の出雲臣がこの氏族を抑えて支配者となり国造となってゆく。この間の微妙な経緯が熊野と杵築の両神を四大神の中からともに地位を高め、両大神をまつる社を大社としたのである。

熊野大社と杵築大社

現在の場所に杵築大社が建てられたのは、7世紀末葉以降であろうとする説が多い。そして新開地で穀倉地帯を控えるこゝえ出雲臣も根拠地を一部移した（これが千家・北島両家に分立するのは南北朝ごろという）。今までの経緯からすると出雲臣の地盤でありその氏族の祭る熊野大社が上位にあるのは当然であるが、それは時代によって変ってゆき、明治初年の国による社格決定によって国幣大社と官幣大社と逆転の差が生じ今日に至る。しかし祭祀における儀式をみると、そのむかし社格上宗儀上は上位であったことを歴然と残している。変遷をみると

時代	熊野	杵築（上〉下）
奈良	〉	
風土記	〉	〉
平安初	貞観13 871 従二位勲七等	〉 全 勲八等
全	中世	〉
中世	〉	〉

（この時佐陀従四位下・野城正五位下）

となる。こゝで両社の関係をみると、まず記紀には熊野大社のことは全くない。しかし風土記をみると（「風」12頁及「参」参照）

熊野大神は、最高の神で食糧を主宰する神であり、

大穴持命（所造天下大神）は右の神の霊を奉じて多くの鋤をもって、食糧生産を中心として国造りをした神と、

明瞭にしるしてある。前者は祭られる神、後者は祭る神としてある。これが風土記時代当時の信仰であった。勢力を得て政治の中心ともなった出雲国造の出雲臣がもたらした信仰とも考えられるが、素朴な古代人の食糧重視の立場からは、そこまで考えず素直にこれを認めてよい。そして国造家はこの両者を祭る人となると、熊野は最高神で祭られる神、杵築はその神の霊を奉じて食糧生産中心の国造りの神であるとし、祭る神であったが国造家が祭る人となると、杵築は祭られる神ともなるという二重の性格となった。従って熊野大社が長らく上位であった。これは神賀詞その他でも立証できる（「参」参照）

これが平安中期には対等となり中世以来は熊野は熊野権現信仰に押されて、熊野三社と伊勢宮を主祭神とし、本来の祭神は忘れられた（時代は食糧神ではうけず、修験道の神が勢力を得る）（縁起パンフレット、「ハ」96頁参照）そして遂に須佐之男命をまつって上昇を計ったが、杵築大社は大穴持命＝大国主命として記紀の普及とともに上昇し、社領を加えて上位は決定的となった。

神魂神社は（総起書、「八」88頁）風土記、延喜式にもない新らしい神社である。近くの国造一家の住居（別館）は明治初年まであったという。墓所（「八」90・91頁）もある。そこで政治的宗儀的立場から国造邸内社として、平常両大社を祭る場所として建立されたものといわれ、大庭の地名もこれに由来するといわれる。

今日なお、国造相続の火継式の火はこゝでもとめられ、出雲大社の祭礼の神饌をととのえる火は毎年秋10月、熊野大社から求められることは、原初の信仰の型を残すものといえる。

（横田史談会）

会員配布一部百五十円／六九一一六　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎　頒布／横田史談会　発行／奥出雲文協　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原猪史夫書

第 119 号
（3月号）
昭和60. 3. 2
奥出雲編集団©

奥出雲を護持するため尼子氏の抬頭に抵抗し、その衰退に加担した

仁多郡西部の地頭飯島三沢氏物語⑥

（より道—いままでの要約と今後の要点）

奥出雲中央部の新補地頭三沢氏を明らかにして尼子氏の虚像部分を明らかにする

「雲陽軍実記」は尼子氏中心の軍記物語で、文明18年の経久の登場から永禄9年尼子氏滅亡までと、のち勝久の再起をかけた上月城合戦までとが書かれている。この中で尼子大内両氏対立時代から尼子毛利両氏の対立時代を通して、常に有力国人衆の陣頭に立ってその去就を左右したのが、奥出雲仁多郡西部の地頭三沢氏である。在来この氏の祖は木曽義仲とされていたが当地方の神社寺院の棟札や記録諸旧家古文書及び各地の古文書を渉猟すると、初代から7代までは系図とほとんど符合しないことが判明し、私は逆に資料を検討して別な系図を再構成し、その祖は飯島氏と推定した。他方当地馬木郷地頭の馬来氏の再検討はその正しさを証明した。続いて三沢氏の分流とされる東北仙台藩の支藩岩手県前沢藩主三沢氏、鳥取藩士の三沢氏、そして三沢氏の直系（西宮市）の系図をみるに及んで、在来の三沢氏系図は偽作であることが判明し、山口文書館の三沢氏関係文書で全貌が明らかになり、祖は飯島氏となった。そこで文永8年1271の「出雲国杵築大社御三月会相撲舞頭結番事」（千家家文書）にあらわれる、出雲国内諸将を吾妻鏡・承久記その他とともに考証したところ、在来国内の新補地頭は6人が定説とされていたのに、三沢氏を加えさらに20数名を追加することができた。そのほとんどが東国武士で関東と信濃を中心とする諸国の出身者であることが判明した。そして守護佐々木氏即ち宇多源氏流の近江源氏が平原部に、清和源氏流の信州伊那源氏が山間部に、補任や新補されていることも明らかになった。特に大原郡や飯石郡の口部と仁多郡の西部に来任したものは伊那源氏のほとんど一門であることも確認された。そうして14世紀末の明徳の乱（足利山名両氏が奥出雲横田庄をめぐって争った）後、出雲守護として再登場した京極氏時代までに、それらの諸将は出身地と土地柄の似た奥出雲で伊那谷での開発領主としての経験を生かして営々と領内の開発を支配を続け、150～200年間の強固な地盤を築いていたことも明らかにし得たのである（山陰史談14号と20号）。

幾多の疑問

こうして三沢氏を中心として出雲の歴史を考え諸古文書を読み直してみると、幾多の疑問が生じて来た。——①京極氏が

つくり出す文化への回帰を

—この町に住んでいて—

昨年の暮、ものを作りながらそれを分析検討し、よりよいものを作る研究をしておられる方数人と、車中で数時間さらに宿で深夜まで気安く話す機会があった。話題の一つに視聴率の高い鈴木教授のクイズ番組が関連してのぼった。大学に入った学生、大学を出て研究部門に入ったものが、鈴木教授風の知識人であるということである。入学時の成績はずばぬけるが、教養課程を終えるころから、問題意識もなく脱落してゆくものがかなりあること。就職しても関連の学際的視野が狭く判断に偏りが多いという話である。

私も**「そろばん」**重視をぜひ番組にと願い出て、一年振りに採用されて、喜んだ一人である。

機械でなく、指ではじいて数観念を養うという「はたらき」をも強調して頂いて成功だった。

今この番組や司会者を云々しているのではない。これに代表される番組の盛行が、知識人とはこういうものだという風潮が瀰漫（びまん）することへの恐れの話だった。受験地獄はすでに若者をそこまで追いやってはいるが。

文化とは何か。ものや知識ではない、**はたらき**であり、手を下すことであるという問題である。ものの世界で文化をみれば実利と力と地位にのみ向う。豊かな社会の暗い影の部分である。しかし働きに着目すればそこに尊い威厳や風格がある。昔の日本女性の美意識は、普段着につぎが当っているのは決して恥ではなかった。まめに丹念に繕ってあるか、洗濯がきいているかであった。これを重視し誇りを保ちお互いに評価し合った。

今日の日本の日常生活には、こういう働き優先の美意識はうすれている。働きの製品の民具民芸も、ブームで怪しくなっている。私どものまわり農村でも生活の場はもとより生産の場からもどんどんはたらき＝手づくりが消滅している。今昔の違いを考えても、そら恐ろしい程である。はたらき＝手づくりのな

仁多郡西部の地頭飯島三沢氏⑥・川柳・短歌・俳句

出雲守護となると尼子氏はその守護代として降ったというが果たしてそうであろうか。②文明18年1486経久が富田城を奪還して出雲守護となったのは虚構ではないか。③経久は果たして11カ国の大守であったのか。④度重なる毛利氏の謀略によって新宮党をはじめ一族側近者を退けたために弱体化したのが、毛利氏に敗れた主因であるのか。⑤三沢氏をはじめとする国人層の節操なき動向によって遂に命脈を絶ったのか。⑥今日富田城は尼子経久や主家再興を計った山中鹿介を象徴するすべてであるのか——講談流の一方的強調が多過ぎるのではなかろうか。

今岡論文の要旨

昨年の夏奇しくも広瀬町で開かれた島根県中世史研究会で、京都大学大学院生今岡典和君が発表し、やがて「山陰史談」（19号）、「史林」（66巻4号）に掲載した論文によって、私は私が抱いていた疑問は、その理論的根拠を与えられることになったのである。今岡君は尼子氏の研究は今までは、軍記物的ものみ多く、本格的研究特にその権力構造については全く研究がなされていないことに着目し、「雲陽軍実記」「関西陰徳太平記」などを棚上げし、佐々木文書（尼子氏末胤所蔵）の根本的再検討を行った結果、次のような結論に達したのである。

守護京極政経が殁したのは永正5年1508であって、その後経久は出雲における京極氏の家督と守護権を次第に継承している。大永14年1524はじめて幕府と経久との関係は明確になる。すなわち出雲隠岐両国および伯耆の一部の守護に認定されているからである。

京極氏が守護となった明徳3年1392以降、出雲国内における重要な守護権限に関する問題の処理は、初期守護の一門の古志氏や、新補地頭である松田・三沢・神西・牛尾・大西の諸氏に命じている。中でも杵築大社・日御碕社の論争では三沢氏を中心にして、解決にあたらせている。このことは150～200年の間土着して開拓領主（国人衆）となっている諸将の力に期待したいものであり、裏を返せば尼子氏を筆頭とする京極氏の家臣層の力の及ぶところでなかったことの現われでもある。文明16年京極氏の命をうけた国人衆三沢氏そのほかが、尼子氏を富田城から追放したのは尼子氏が国内多数の国人衆を掌握することができず、段銭の収納力の弱さがあった上に、自らの財政基盤確保のためにとり易い美保関公用銭の横領を行ったためからであろうと考えられる。

尼子氏の家臣団の構成

軍記物語では2年後に富田城を奪還するとなるのであるが、これまでの経過から考えるとこれは後世の作り話に過ぎない。経久が殁するのは天文10年1541であるが、それは京極政経の死後33年を経た時となる。その前年の天文9年の京極氏の本国近江国竹生島の寺院造営の奉加帳で尼子氏の家臣団をみると、10数名の「御一族衆」の中には京極氏の一族が少なからずおり、そして側近の「富田衆」（37名）は京極氏或は尼子氏の被官人として出雲に下って来たものである。次に「出雲州衆」（68名）がいるが、これはかつての守護であった佐々木氏一族や、私が確認した新補地頭たちの末孫で、出雲国生えぬきの有力国人衆である。これをさらに「分限帳」（天文

いことが、近代化だ文化だと思いこんでいることである。文化はものの豊かさに換算されて高さが計られ、そして享受や消費が文化の高さと考えられている。

あふられた「お客様は王様だ」「中流意識」の暗部のみが拡大している。

文化はカルチャー（耕す）が語源で、フリー＝自由とともに明治に入ってから日本で造られた言葉である。長い間かかって生まれたものでないので、文化＝消費、自由＝放縦となってしまった。しかし日本人は再生する伝統をもった民族である。

最近二人の研究者を、町内の**算盤**製造職人の職場に案内した。

一人はものを作りながら、よりよい道具はどのようにして昔から職人が工夫し来ったかの研究者で、手削りの珠削り（動力）ろくろをみて、その工夫の巧みさに舌を巻かれた。明治初年に開発その半ばに一大飛躍した工具である。後日この方の研究論文を二つ頂いたが、深い研究であった。このような方でありながらなお驚かれたということは、地元の者として嬉しかった。

もう一人の方は地質学者で金属・岩石の成因・堅さ、その製錬あるいは切削・研磨・削穴についての豊富な経験の持主であった。職人が珠の穴の仕上げに各人独得の個性ある錐を工夫していて、材質と芯竹の大さによって、十数分の一ミリの差を削り出していること。堅木を削る鉋の刃の各種の角度そしてその各々の刃と小刃の問題。同じように手削り珠における微妙な手の感触による（異なる材質はもとより、同じ材質でも一つ一つ）十数分の一ミリの差の削り出しや、鉋の刃や小刃の角度とその動きに深く感動された。

研究者には研究者の気質が、職人にも同様の気質がある。両者にはともに共通する点がある。

職人たちは自分の仕事にとことん誇りと責任感をもっている。

二人の作品には風格がある。しかもそろばんは実用品であって、使うほどそれも長く、ますます味わいが増さねばならない。

そしてより正確にならねばならない。これは実用の美というものであろうか。置いて眺めるものとは次元が異なる。

自然条件（地域・季節の乾湿の差）や材料の特性、同じ材料

10年以前とされるが若干疑問もあるが、大筋はこの通りとみて）によって検討してみると、出雲国内の所領のほとんどは、この土着国人衆（出雲州衆）のものであり、側近である富田衆はもとより御一族衆の所領はすべて出雲国外にある。さらにその国外の地を調べてみると、そこには三沢氏などと同じ国人衆が土着していて、決して唯々諾々と尼子氏に属してはいないのである。従って経久の時代でも軍記物語を通しても、また各国の古文書をみてもそれは明瞭で、尼子氏は一族や側近層のために、東奔西走その経済基盤確保のために戦わねばならぬ宿命を負うていた。尼子氏は内外ともに京極氏の余光を背景に、その戦術的巧みさの故に、権力を維持していたといわざるを得ないようである。武力は別として権力構造確立への努力は極めて薄く、次の晴久になってもその状態のままであった。従って国人衆は自らの所領を確保するためにはこの弱い構造を知る故に、三沢氏を旗頭として、大内尼子両氏毛利尼子両氏の間に立って、安全な方へと去就を定めていたのである。

三月のうた

かさこその葉鳴りひそけき秋山を歩みをりたり足音を連れて　常盤　はるまさ
動かざる鯉を底ひに沈ませて池面の水の澄みて透れり　野村節子
山鳴りの突如響きてゲレンデも山なることを我れに知らせ来　小早川恵子
霜除けのタイヤ燃やすに集落をたゆたひながら煙流るる　宮廻愛子
遠き日に綾とり遊びし縁側に弟月ならべて母は水やる　戸屋瞑子
み仏になりたる義兄は念願の思ひ果たせし安らぎにあり　児玉敏郎
ほのぼのと軒端の梅のほころびぬ頬よせて見る日射しのなかに　松浦愛子
留守まもる吾に好物の手打そば出で湯の宿より嫁が買ひ来ぬ　岡田時子
中尊寺藤原四代のミイラ画に対ひ佇つとき息詰りたる（東北の旅）　景山悦子
吾が体の一部に収まる日のあるや義歯十本を入れて三日目　佐藤喜代子
塩を抜くぜんまい桶にひとしづくの波紋小さし夜の厨に　永井弥生
君去りし部屋に忘れしハンカチにふれなばほのかに香水匂ふ　安部夕波

尼子氏と同じく戦国大名にのし上った毛利氏が、地頭出身者として着実に領内支配を基盤に近隣諸国の国人衆を次々と密接な関係に置いて、権力構造を強固に構成していったのと比べると、全く対象的である。それを三沢氏ほかの国人衆が知らぬはずはない。尼子氏の衰退はこの国人衆の離反と軌を一にしていることは明らかである。

そこで毛利氏は三沢氏の領内経営の実力と、経世の力をよく知っていたが故に、毛利氏重臣層11人の末に加え、のち支藩長府藩の家老に差し向けている。三沢氏は明治維新までよく主君を支えてそれに応えた。

経久の歿後、永禄9年1566尼子氏が毛利の軍門に下るまでが25年間である。この間に晴久は天文21年出雲隠岐をあわせて8カ国の守護となったが、この期間中は戦にあけくれる年ばかりであった。

毛利氏の出雲支配の評価

永禄9年からは毛利の一族吉川広家の支配下に入り、関ガ原合戦後の慶長5年、堀尾氏に替って去るまで35年間、大戦役を数度戦ったとはいえ、領国内体

でもその部位の違いによる材質の差、それは制約や抵抗となる。

職人はそれを眼でみ指先で感じて判断し瞬間に手加減をし、あくことなく毎日はたらきを繰返えしている。作品はいつどこでも長らく適応せねばならない。その良否を職人は注文の受け方で間接に、使用者との対話で直接に判断する。人格的ふれ合いの中で生まれることになる。そうして職人の風格が、品性の陶冶がなされてゆく。自らの五体五官を存分に働かせてつくるところに文化の本質がある。

私どもは古い文化の伝統に対する自信・衿持・安心感をどれほどもち得ているであろうか。つくることから離れて、もののみの使用に走っていること、たとへつくっても、流行を追いまねることのみで、働きの根源を体得した上でつくることを素通りして先走る時代である。

新らしい若者にうける音楽は別として、私の環境でいえば、クラシック音楽でもテレヴィジョンで見聞きする今日の演奏と音は、FM放送できくかつての指揮者・演奏家の生み出す同じ音楽とは郷愁をのぞいても違う。後者に私は人間味のある味わいを感ずる。それは現代の風潮がその価値を再認識させることにプラスにもなっているといえるが。（この件は近く某紙の依頼により届けている、数回めの拙文に別の角度で掲載予定）

ある種のジャンル（分野）の作家は、もうドタバタ一笑時代の先を見越し、新らしい開拓へ真剣に取組み始めているという。わがまちの文化的雰囲気は華やかであるが、ここでかってのように衿持をもって、自らつくり出す風潮へもどさねばならない。この農村の生き甲斐である生産にしても、努力している人の輪を大きくせねばならない。

もののみに突走ることにまず歯どめをかけねばならない。

数人の話合いに加われたのも以前に岩波の「図書」8月号を読んでいたからできたと思っている。収穫の多い小旅行となったことに感謝している。最近、さる中央紙の囲み枠の短文の中でも、少しふれてあったので、勢を得て自らをかへりみず原文作者の考えも借用し、私の最近の見聞によせて、平素いだく所感をまとめた。（蓬頭子）

前号の訂正　4頁5段16行　縁・起書

三月句会

南天の実ほどのあかり雪の道　峯石美代子
雪解水中州を狭め走り行く　浅野としお
とんどの火吉書の写経天に舞う　新出谷一華
風花や児らのにぎわい下校時　渡部夕峰
鄙なまりわらしべほどに日脚伸ぶ　糸原古志
寒禽の昏に馴染みて庭漁る　岡田麗水
孫去し小部屋に玩具春隣　小川あきお
バス停の陽溜り話題を集めくる　加納信子
傾きつつ鴉群れ翔ち吹雪衝く　岡田蹊花
老いたれど装こらし初鏡　田部竹野
硝子戸に貼りつく朝の凍み模様　錦織富江
休日を茶の間に黄沙の便りきく　高木白虹

斐乃上川柳会二月号

こけし棚整理しながら旅をする　安部春恵
何も無いが飲めと馳走を並べられ　松浦木公
同年がボケて我が脳たしかめる　安部正子
伝統の技を伝える目がきびしい　上田方々
師の不正球児無念の涙呑む　松浦亜以
新築で肩に重たいローン乗り　佐佐木千世
鍋物の湯気を払って箸が出る　児玉哲呂
孫達とカルタ取りしてはずむ息　真綿よし子
老い易し去年の鍬が手に重く　松田牛歩
私一人にウント開いた自動ドア　太田亀甲
日曜日朝はまだかと日は昇る　若槻白馬
口下手で返論出来ぬままでいる　藤原千代子
数の子のお替り渋る目の素振り　高木白虹
気象台もったい付けて色直し　渡辺好之
咳一つ風邪じゃないかと尋ねられ　藤原のぼる

制は整えられていった。経久が幕府から守護とされてから尼子氏滅亡までが42年、しかも戦の絶えない時代であったのに比べ吉川氏時代35年は政治の内容の充実は格段の差がある。今まではこの期間の出雲の政治のことは余り考慮せられていなかったのである。即ち封建制確立の基盤の毛利検地の上に打ち樹てられた、「八ケ国御時代分限帳」にみる権力構造は実に見事なもので、出雲は完全にその組織下にあったのである。

富田城をめぐる尼子氏と毛利氏

ここ10年以来実施された富田城とその城下町の調査は、富田城に対する評価を大きく変えはじめている。すなわち毛利氏支配下の35年の実績のことである。①富田城の調査によれば、背後に山城月山城（一の平、二の平三の平、西裡カ平）のせまる山中御殿平は、月山城にとっては主要な部分であるが、これは尼子氏滅亡後の毛利氏一族の吉川氏の天正年間1573～1592に、穴太積技法で築かれたものと比定されている。勿論三次にわたって造成されたものであることが明らかであるが。また遺物として出土した日本産の陶磁器、中国産の青磁白磁その他が少量含まれているが、大部分は瓦類等でこれらの時期は、16世紀後半から17世紀初頭に集中していて、勿論尼子経久の時代に遡るものはない。②また塩谷遺跡と新宮谷遺跡も現在の調査状況からは武家屋敷が両谷に集中していたとは考えられないし、遺物も16～17世紀初頭にかけてが中心で、この両遺跡は尼子氏時代後期から堀尾氏の松江城移城（慶長16年－1611）までのものと推定されるという。③富田川河床遺跡は戦国後期の尼子氏によりある程度形づくられ、毛利氏の時代に徐々に整備拡大された城下町遺跡で、城が松江へ移った後も飯梨川流域の重要な町として繁栄していたが1666年（寛文6）秋に襲った大洪水によって壊滅したものである。出土物からみても、江戸初期の唐津焼、伊万里焼があり、天正末年にわが国に伝わった煙草の喫煙に用いる煙管が多数あった。かなりこの風が浸透した時代を示すから、徳川初期を濃厚にあらわすものであり、また「慶長」「卯年」1603の線刻のあるもの、「寛永21年」1644が記載された木札も共伴しているという。その他のものをみても　世紀前半に遡れるものは石積井戸一基などに過ぎないという。　以上①～③ともに、遺構の時期的上限はいずれも、16世紀半ばであることは、重要なことであって、中世の歴史を考える基礎となってくる。

（お断り）こゝで一息入れて今までのまとめをし、今後の展開の要点をのせた。読み物風と心掛けているが、も少しやさしくという声に応ずるため。

これは昨年秋、数年振りで開催の県中学校長大会で二時間話をしたものを、研究紀要12号にとのことで、文章体に短くまとめた。その前半部分を転載させてもらった。

（横田史談会高橋一郎）

奥出雲編集について

読んで頂く方が、中世史、たたらについて関心をおもちの方がふえ、難かしくなり勝ちですが、硬軟織まぜる努力しております。とうとう次号で120号10年となり、御協力に感謝一ぱい。120 121号合併特集しお届けします。

会員配布一部百五十円／六九一一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0－601）　頒布／横田史談会　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

発刊十周年記念号

奥出雲

題字　糸原風亭書

第120・121合併号
（4・5月合併号）
昭和60. 4. 6
奥出雲編集集団©

統計で読む 奥出雲の民力

古くから統計に親しみ、統計書やそれに関する本も読み、かつては仕事柄統計をとって、いろいろ判断の材料として助かったことが多い。しかし統計のとり方によっては誤まりを犯すこともある。勿論作為を加えたりすれば統計とはいえない。また正しい統計も読み誤まることもある。10数年前数年間集めた統計が、極めて正確であったため、仁多郡に一つの貢献ができたこともある。

本誌50・51合併号は8頁すべてを「三成と横田」という特集で埋めた。統計数字の裏付けもして、両町の成立と発達のあとを比較し、現在の性格の違いのよって来るところを考えてみたものである。それから6年を経ているが、やはり基本的には変っていないが、三成の追い上げは急速で、一部では追い越しているものもあらわれている。

この本誌発刊10周年記念の120・121合併号は、**奥出雲三郡の町村の民力**の比較できる数字をならべてみたものである。後述するようにこの統計は全県的な立場で構成されたものであって、性格上明らかにその違いをしめしていないが、丁寧にみていくと各町村の特色をあらわしている。

それを昭和40年以後出版された、横田・木次・大東・赤来・三刀屋・加茂の諸町誌の記述を下地に置いて、昨年3月刊行の「昭和56年島根県統計書」もひもといてみると、この民力統計にあらわれない、具体的な違いも読むことができる。

この元の統計とは、山陰合同銀行・山陰経済研究所発行の昭和58年度版「山陰の民力」である。全所からは毎月「山陰の経済」が発行されていて、古くから頂いて趣味として読ませてもらっているが、新聞にみる各地の動きを総合的にみたり、特色を知るのに都合がよく、楽しみが多い。時にはそんなことでよいのかなどと批判めいた見方をすることもある。全国的な白書とか統計の要点と比べて、いろんな思いも浮んで来る楽しさもある。

これも古くからの趣味だし、「山陰の経済」とのおつきあいのお蔭である。「山陰の民力」は54・56年度版に続いて3冊目であって、比較してみても面白いが、筆者にはそのような力もないので、58年度版の中から誤まりを犯かさぬよう、標題を浮きぼりに出来るものを抜出し、合銀に感謝し転載させて頂く。

民力とは

生産・消費・文化などの分野にわたって、国民が持っているエネルギーを意味する。そのため県内の各市町村が共通してもつ各種統計指標の中から、先の三分野別に5～8合計25の指標を選んで（一部後述）比較したもので（100分比でなく1,000分比を求めて）ある。

全国における山陰の位置づけ

朝日新聞社刊「84民力」によると、全国平均100とした一人当りの民力水準は、総合指数で（二年前比）

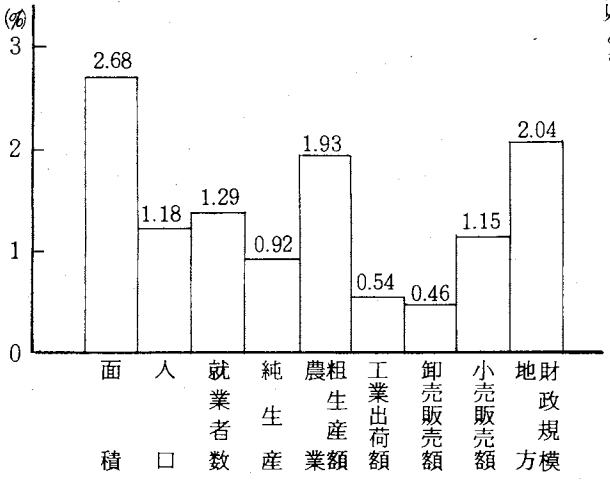
鳥取　88.5％で28位　1.9％拡大
島根　88.1％で29位　1.3％縮少

で両県とも、

- 世帯数・県民所得・税金納付は全国下位
- 産業水準は中の下
- 消費水準・文化水準は中の上
- 教育費は過疎地が多いこともあって、島根2位、鳥取8位
- 高校、大学進学率は、鳥取が上位、島根は中位にある。

両県はともに東西に細長い山がちの地形という条件下にあり経済の特徴は

①素材型産業に傾斜していて、
②経済力が低く財政依存度高く
③産業立地の基盤となる社会資本の整備が遅れている。



第1図　山陰の主要指標の全国シェフ

等の構造的な問題を内包している。

これを**産業別就業者数**の割合でみると

奥出雲の民力・木地谷敵討ち事件・川柳・俳句・短歌

第1次産業20％（全国平均10％の2倍）
第2次産業30（全34％より低い）
第3次産業51（全56％より低い）

工業出荷額では、軽工業約60％（全国30％強）で、そのうち70％は、食料品・木材・木製品・パルプ・紙・窯業・土石の地場資源型の業種に偏り、近年電気機械、エレクトロニクス関連の組立産業の進出で、高度化傾向がみられるものの、波及効果をもつ核となる業種は少ない。第1図の如く主要経済指標も極めて低く当地方が1％経済といわれるゆえんである。県民所得水準は1人当全国平均の80.2％で、従って住民1人当の財政規模は全国で島根1位鳥取2位となり、全くの財政依存の体質である。

第3点の社会資本整備の後進性については、1960年代からわが国の高度成長が、太平洋ベルト地帯への集中投資により、当地方は疎外され、基幹労働力の急激な流出をまねき、とり残されて来た。安定成長期に入り、ひずみ修正で地域開発がみなおされて来てはいるが、まだまだであるが、40年代後半から変容もみることができる。

①以来人口が増加に転じたのは

②電気・輸送・精密機械などの加工組立型を中心とする工業が誘置されたことによる。

③県民所得全国比が45年度67.1％から、56年度80.2％まで上って来たのもそれをしめす。

④産業構造は完全に第2・3次産業主体となり、第1次は50年26％から57年10％に、純生産額は13％から8％まで低下し、農林水産業主体の山陰のイメージはほとんどなくなって来ている。最近のエレクトロニクス関連企業の進出などと相まって、今後急テンポの経済の発展に期待するという現状である。

こうした山陰両県が全国にしめる特色とその変化は、そのまま島根県全県の中に占める、奥出雲三郡の特色とその変化をそのまゝ縮少した如くである。

島根県の民力概要

上の総合指数（25指標をあわせた1,000分比）の分布図（一部掲載）をみると、59町村中10以下が38町村で60％を占めている。奥出雲では10町村中6町村である。

第5表　工業と農業の民力指数上位

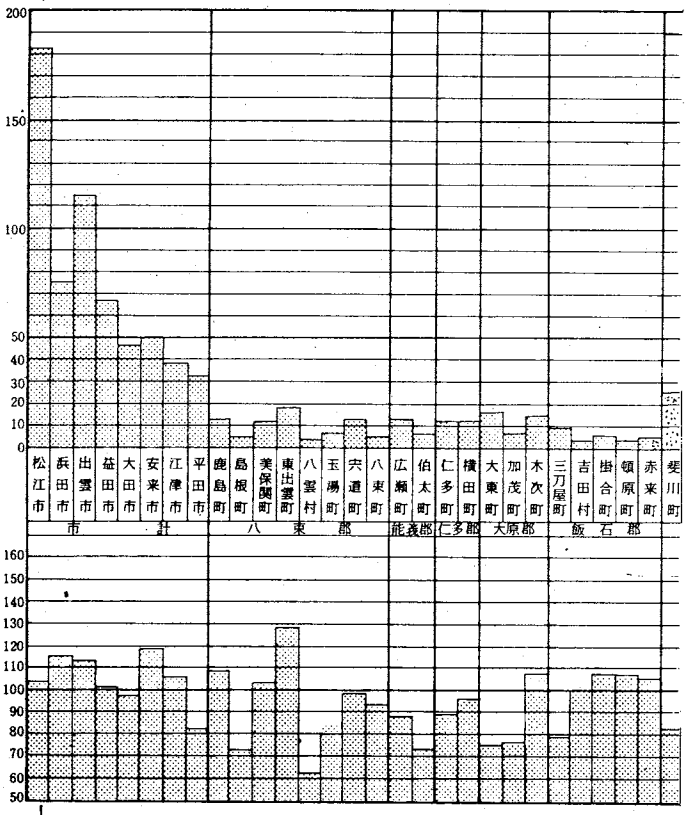
順位	工業出荷額 市町村	工業出荷額 指数	農業粗生産額 市町村	農業粗生産額 指数
1	安来市	145.8	出雲市	90.2
2	出雲市	135.0	安来市	71.1
3	松江市	107.2	松江市	64.0
4	東出雲町	83.7	大田市	63.5
5	益田市	80.3	益田市	58.6
6	江津市	74.8	斐川町	56.4
7	浜田市	64.4	平田市	44.7
8	大田市	34.7	大東町	33.4
9	木次町	30.3	大社町	25.0
10	斐川町	25.2	横田町	24.5

これを県平均を100とした場合の1人当りの民力水準は、下段のようである。上段の民力総合指数で上位10市町村は、左端の八市に続く、斐川町・東出雲町である。

全産業の産業活動指数（表略）をみると、10位までは松江・出雲・安来・浜田・益田・江津・大田・東出雲・平田・斐川の順であるが、工業と農業の民力指数の上位は右の表の如くであって、工業出荷指数は安来が一位で、使用電力量指数の一位と相応じている。これは日立金属とその関連工場によるものである。4位の東出雲は農業機械、5位益田は木材・繊維などの第2次産業により、6位江津は石見瓦の地場産業である。浜田は漁業型の都市の故7位、9・10位の木次・斐川は電子部品業界の進出がもたらしたものである。

消費指数をみると、その構成

島根県市町村別民力度（一部分）



（図や表の順序数は「山陰の民力」のもの）

は商店数・商業従事者・商業販売額・自動車保有台数・普通建設事業費・電灯使用量・預金残高である。(表略)。

松江の絶対優位は圧倒的である。こゝで宍道が5位に入っているのが眼を引くが、木材、機械はどの卸売業の大手企業も集まっていることによる。この両指数で上位5市を合計すると、534.5と県全体の過半を占めて、限られた地域に集中していることをしめしている。

文化指数は教育費・テレビ契約・開通電話数・医師数・給水人口から構成されている。松江を1位に7市が続き、次に斐川があり、10位は東出雲に変って西郷が入っている。(表略)

この中の一部分である上記の表をみると、県内唯一の医科大学をもつ出雲が、54年度調査で一位の松江を抜いて、第1位の不動の位置を築いている。医師数で大東、西郷が9・10位に、教育費で大東が9位に入っている。

第6表　商業と預金の民力指数上位

順位	商業販売額 市町村	指数	預金残高 市町村	指数
1	松江市	380.7	松江市	311.4
2	出雲市	125.3	出雲市	114.4
3	浜田市	107.7	浜田市	91.9
4	益田市	75.3	益田市	67.3
5	宍道町	45.5	大田市	44.8
6	大田市	36.2	江津市	42.8
7	安来市	35.5	安来市	35.0
8	江津市	20.2	平田市	28.2
9	平田市	17.1	大社町	24.8
10	斐川町	14.4	西郷町	19.5

第7表　医師数と教育費の民力指数上位

順位	医師数 市町村	指数	教育費 市町村	指数
1	出雲市	272.8	松江市	178.1
2	松江市	221.8	出雲市	84.8
3	浜田市	74.8	益田市	55.4
4	益田市	66.0	浜田市	51.8
5	大田市	48.3	大田市	39.0
6	江津市	34.7	安来市	37.6
7	安来市	26.5	平田市	34.3
8	平田市	23.8	江津市	30.8
9	大東町	17.7	大東町	22.8
10	西郷町	15.6	斐川町	22.7

1人当民力水準

これは市町村民力指数を人口指数で除したもの。こゝで注意しておかねばならぬことは、統計採用の指数が、地域についてのもので、人を対象としたものでないので、民力水準といっても生活水準を表わしたものではない。1頁のグラフの下段と第9表である。このように今まで登場しなかった町村が多いのは、すなわち民力水準が高くなるのは、

①生産、消費施設の大きな集積があり、他の地域から労働力や消費購売力を引きつけている場合

②開発が急速に進み、生産や消費が人口の伸びを上廻って急速に伸びた場合。

③人口が減少している場合が考えられる。

東出雲・安来は産業活動指数が高く①の類型、西ノ島・匹見は人口が減少していて③の類型、出雲は②の類型、従って奥出雲三郡では総合で9位木次(前回16位)は、②の類型による上位進出である。7位瑞穂(前回14位)も同傾向である。

産業活動における掛合・木次・吉田・頓原の7〜10位はともにそれを示すものである。

逆に低くなる場合は

①人口増が急激で、工業・商業の集積がそれに追いつかない場合——斐川(49位)・八雲(59位)

②他地域のベッドタウン化して消費購買力が他地域に流出している場合——平田(48位)

③商業、工業の集積がない場合——その他の町村となる。

第9表　1人当り民力水準の上位10市町村

順位	総合 市町村	指数	基本 市町村	指数	産業活動 市町村	指数	消費 市町村	指数	文化 市町村	指数
1	東出雲町	129.4	布施村	125.0	東出雲町	263.6	松江市	132.4	知夫村	146.2
2	西ノ島町	121.7	匹見町	118.2	安来市	197.6	布施村	125.0	都万村	144.4
3	匹見町	121.2	弥栄村	115.4	鹿島町	176.7	浜田市	120.0	海士町	134.9
4	安来市	119.9	川本町	110.4	美保関町	176.6	川本町	119.5	出雲市	131.4
5	浜田市	114.3	松江市	107.9	西ノ島町	173.3	宍道町	117.5	布施村	125.0
6	出雲市	112.4	浜田市	107.8	匹見町	172.7	羽須美村	(117.1)	多伎町	121.1
7	瑞穂町	111.6	知夫村	107.7	掛合町	142.1	海士町	116.3	西ノ島町	113.3
8	鹿島町	108.6	温泉津町	107.2	木次町	137.7	知夫村	(115.4)	松江市	111.3
9	木次町	108.0	瑞穂町	105.8	吉田村	137.1	旭町	107.8	旭町	109.8
10	掛合町	107.0	玉湯町	105.0	頓原町	132.6	瑞穂町	107.2	温泉津町	105.8

註　(　)内は指数の算出基礎となる指標の一部に数値不明のものがあり、加算している項目の数値が不足しているもの。

市郡別特性

これらを総合してみると、

①消費・生産の場が住居に近接して**住みやすい**市郡は

—出雲・邑智・那賀・益田・鹿足

②仁多・美濃は**林業型**で、こんど飯石が加わった。

安来・八束・江津は**工業型**。

浜田は**漁業型**

③松江・大田は近隣の購売力を吸収する**商業型**

④**住宅型**は平田・能義・大原・簸川・邇摩と隠岐という。

尚成長力指数（表略）上位に総合で、2位加茂町　3位吉田村が入っている。その急上昇は吉田が歳出と事業所数、農業粗生産・工業出荷数・商業販売額の増加。加茂は入口増加・工業出荷額と商業販売額の指数の上昇によるものである。

総合民力では　左の表をみると、59市町村中、加茂(32)・掛合(36)・赤来(39)・頓原(45)・吉田(52)と中以下となっている。これらの町村は、指標の基本・産業活動・消費・文化ともに低くい。

これは製造業事業所数。全従業者数・全出荷額も同じである。

地方税も同様で、農業粗生産額でも農業地帯でありながら指数が低い（あとでふれるが、冷細地帯でありながら農業機械の普及率は平均的であることが数字の上であらわれている）。

林業生産額においては、加茂を除く飯石郡の4町村は高い指

1.　市町村別民力指数（総合）

指標	総合（25指標）	基本（5指標）	産業活動（8指標）	消費（7指標）	文化（5指標）
総数	1,000.0	1,000.0	1,000.0	1,000.0	1,000.0
松江市	① 182.1(179.2)	189.5(187.0)	110.8(109.1)	232.5(231.9)	195.5(188.7)
浜田市	③ 73.6(274.2)	69.4(69.1)	80.3(82.2)	77.3(77.7)	67.5(67.8)
出雲市	② 113.9(112.2)	103.5(102.5)	110.4(109.2)	108.5(106.4)	133.1(130.6)
益田市	④ 67.1(66.6)	69.5(69.2)	66.7(65.8)	66.6(67.1)	65.7(64.4)
大田市	⑥ 47.3(45.8)	49.4(49.6)	43.7(39.0)	49.6(45.5)	46.7(48.9)
安来市	⑤ 50.0(50.7)	42.2(42.5)	82.4(86.6)	38.6(38.3)	36.6(35.5)
江津市	⑦ 38.0(38.5)	37.2(37.5)	45.7(46.6)	32.3(32.2)	36.7(37.8)
平田市	⑧ 32.6(32.8)	35.4(35.7)	30.0(31.2)	31.7(30.6)	33.4(33.7)
市部計	604.6(600.0)	596.1(593.1)	570.0(569.7)	637.1(629.7)	615.2(607.4)
斐川町	⑨ 25.2(24.1)	27.5(27.5)	25.7(23.4)	23.3(23.1)	24.1(22.5)
東出雲町	⑩ 18.5(19.0)	13.2(13.1)	37.7(37.8)	11.3(12.9)	12.0(12.2)
仁多町	⑳ 11.0(11.5)	11.5(11.7)	12.3(13.3)	10.0(10.2)	10.1(10.9)
横田町	⑲ 11.0(12.0)	10.6(10.7)	13.9(17.3)	9.5(9.9)	10.2(10.1)
仁多郡計	22.0(23.5)	22.1(22.4)	26.2(30.6)	19.5(20.1)	20.3(21.0)
大東町	⑬ 16.1(16.3)	17.8(17.8)	14.4(14.7)	13.5(14.2)	18.6(18.7)
加茂町	㉜ 6.8(6.3)	7.6(7.6)	6.9(5.6)	6.2(5.6)	6.3(6.3)
木次町	⑭ 14.9(14.7)	13.8(13.9)	19.0(15.9)	14.3(15.4)	12.7(13.6)
大原郡計	37.8(37.3)	39.2(39.3)	40.3(36.3)	34.0(35.2)	37.6(38.6)
三刀屋町	㉙ 9.4(9.1)	10.3(10.3)	7.9(8.0)	10.0(9.4)	9.5(8.9)
吉田村	52 3.5(3.2)	3.1(3.1)	4.8(3.6)	3.2(2.9)	2.9(3.4)
掛合町	㊱ 6.1(6.3)	5.5(5.5)	8.1(8.2)	5.5(5.5)	5.4(6.0)
頓原町	㊺ 4.6(4.7)	4.3(4.4)	5.7(4.8)	4.4(5.1)	3.8(4.3)
赤来町	㊴ 5.6(5.3)	5.2(5.3)	6.3(4.4)	5.5(6.1)	5.2(5.3)
飯石郡計	29.2(28.6)	28.4(28.6)	32.8(29.0)	28.6(29.0)	26.8(27.9)

指標	⑤ 地方税			⑥ 農業粗生産額			⑦ 林業生産額		
	54年度版	56年度版	58年度版	54年度版	56年度版	58年度版	54年度版	56年度版	58年度版
総数	1,000.0	1,000.0	1,000.0	1,000.0	1,000.0	1,000.0	1,000.0	1,000.0	1,000.0
松江市	234.9	234.5	252.7	60.7	60.8	64.0	15.0	9.9	6.8
浜田市	78.1	76.2	75.5	23.2	24.0	23.2	19.0	24.3	24.7
仁多町	8.0	8.7	8.2	18.9	23.1	23.4	50.0	41.3	46.0
横田町	7.1	7.5	7.3	23.0	24.1	⑩ 24.5	40.0	32.5	43.0
仁多郡計	15.1	16.2	15.5	41.9	47.2	47.9	90.0	73.8	88.9
大東町	11.7	11.9	11.9	31.5	31.6	⑧ 33.4	31.0	20.1	18.1
加茂町	5.2	5.9	5.8	10.1	12.4	12.5	4.0	4.2	3.3
木次町	12.5	12.9	12.7	10.7	11.4	11.6	12.0	14.8	12.9
大原郡計	29.4	30.7	30.5	52.3	55.4	57.5	47.0	39.1	34.3
三刀屋町	6.8	6.7	7.2	13.3	13.1	12.6	11.0	14.6	16.4
吉田村	2.2	2.2	2.1	6.4	8.2	8.4	19.0	18.0	31.5
掛合町	3.8	3.8	3.7	7.3	7.6	7.8	35.0	25.7	26.7
頓原町	2.8	2.5	2.4	10.8	12.0	12.3	33.0	21.7	32.7
赤来町	3.6	3.6	3.5	13.5	15.0	14.9	17.0	19.4	32.5
飯石郡計	19.2	18.8	18.9	51.3	55.9	55.9	115.0	99.4	139.7

指標	⑨ 製造業事業所数			⑩ 製造業従業者数			⑪ 製造品出荷額		
	54年度版	56年度版	58年度版	54年度版	56年度版	58年度版	54年度版	56年度版	58年度版
総数	1,000.0	1,000.0	1,000.0	1,000.0	1,000.0	1,000.0	1,000.0	1,000.0	1,000.0
松江市	118.4	114.0	110.6	95.4	93.1	98.4	102.5	99.8	107.2
浜田市	81.5	80.1	89.8	67.5	67.0	64.2	66.0	60.0	64.4
仁多町	18.7	18.8	13.5	12.9	11.2	10.2	7.7	6.3	6.7
横田町	33.4	31.0	16.7	17.4	17.8	14.0	8.0	9.2	7.9
仁多郡計	52.1	49.8	30.2	30.3	29.0	24.2	15.7	15.5	14.5
大東町	22.5	22.3	23.7	15.1	16.3	14.9	7.2	7.3	6.3
加茂町	8.9	8.4	7.8	6.1	5.6	6.8	4.0	4.5	9.5
木次町	13.8	14.8	20.0	17.5	18.0	21.8	27.2	25.1	30.3
大原郡計	45.2	45.5	51.4	38.7	39.9	43.5	38.4	36.9	46.1
三刀屋町	8.1	11.3	10.6	8.2	7.9	7.5	5.0	4.5	4.7
吉田村	1.2	1.2	1.6	3.5	3.1	3.2	4.4	3.4	4.1
掛合町	6.3	7.2	7.8	9.3	10.0	9.6	7.6	7.4	6.3
頓原町	4.0	4.0	5.7	4.3	4.1	4.0	1.7	1.5	0.9
赤来町	4.0	3.5	6.5	3.2	2.9	4.0	2.5	1.8	2.1
飯石郡計	23.6	27.2	32.2	28.5	28.0	28.3	21.2	18.6	18.1

指標	⑮ 商業従業者数			⑯ 年間商品販売額			⑳ 預金残高		
	54年度版	56年度版	58年度版	54年度版	56年度版	58年度版	54年度版	56年度版	58年度版
総数	1,000.0	1,000.0	1,000.0	1,000.0	1,000.0	1,000.0	1,000.0	1,000.0	1,000.0
松江市	276.2	260.5	262.1	400.5	372.0	380.7	331.3	331.1	311.4
浜田市	94.7	90.4	89.0	103.0	100.5	107.7	93.5	92.9	91.9
仁多町	8.2	8.9	9.2	4.7	4.7	4.6	6.8	7.7	8.4
横田町	6.8	7.3	6.7	4.3	4.1	4.9	7.2	7.5	7.3
仁多郡計	15.0	16.2	15.9	9.0	8.8	9.5	14.0	15.2	15.7
大東町	10.1	9.8	10.0	5.0	5.1	5.5	11.2	10.6	11.1
加茂町	4.9	4.7	5.5	1.8	1.9	2.5	3.2	3.6	3.6
木次町	17.1	16.4	15.4	12.7	12.4	10.6	16.0	15.3	14.9
大原郡計	32.1	30.9	30.8	19.5	19.4	18.6	30.4	29.5	29.6
三刀屋町	8.6	10.3	11.7	4.8	6.8	7.0	7.0	7.7	8.1
吉田村	1.4	1.4	1.6	0.5	0.6	0.9	—	—	—
掛合町	3.9	4.2	4.2	1.5	1.7	1.6	4.3	4.6	5.1
頓原町	2.9	3.0	3.2	1.2	1.3	1.3	2.7	2.9	2.9
赤来町	5.5	5.3	4.3	3.1	3.0	2.5	3.3	3.2	3.3
飯石郡計	22.3	24.2	25.1	11.1	13.4	13.3	17.3	18.4	19.4

数を示している。

その他商業従事者数・年間商品販売額も低い。従って預金残高も、以上に見合った指数となっている。また避地であるにもかゝわらずこれらの町村の自動車保有台数の指数（表略）が低いのは、これらの活動が低いことと関連がある。（⑤～⑳表参照）

農業粗生産額で県下8位の大東

10位の横田

	大東	横田
農家数	2402	1470
農業主	379	377
農業専業	117	140
1.5ha以上耕作者	236 ha	172 ha

普通畑　大東の2倍

であって、横田に大農が多いが、これには三井野開拓地を含んでいる。それは

水田作付面積　1100 ha　911 ha

水稲生産高　4900（1ha 452）　4330（1ha 445）

と差が少ないことでもしれる。

畑作を見るとその収穫量は

いも類　横田の2倍

豆類　〃　1.5倍

野菜（きゅうり　ほうれん草　ねぎ　ごぼう　さといも　なす他）　〃　2倍

（はくさい）

木地谷敵討ち事件

―旧上阿井村における―

杠　誉　富

これは今を去る約三百前、江戸時代の初期、旧上阿井村、木地谷と言う所で起きた。三助による親の敵討ちの史話である。

現仁多郡仁多町大字上阿井より広島県新市に通ずる県境の木地谷と言う所に、長兵衛と言う、木地挽（きじひき）を職として居る職人が住んで居た。（木地挽とは堅木を使い盆やその他器類をつくるロクロ細工）

又、同じ木地谷に同職の長兵衛の甥、七郎兵衛が所有地を隣りあわせに住んで居た。この七郎兵衛は生来の貧欲に加えて同職と言う事もあり、常に耕地の境界、職業上の事等にて二人の間に争いが断えず、時には庄屋の計いで二人の不和のとりなしとして、七郎兵衛が長兵衛に詫証文一札を入れるなどの一件もあったが、伯父・甥の間柄であり乍ら不和の状態が続いて居た。

延宝五年（1677）七月十七日、長兵衛が木地谷奥の王貫谷に木地挽の材料を採りに出たまま帰宅せず、夜に入り家族は近所の者達と探せども発見出来ず、翌朝になり鋭利な刃物により首を切られ、鮮血に染まった哀れな惨殺死体として長兵衛は発見さ

斐の上川柳三月抄

手がつかぬ止めたタバコが気にかゝり　田中芳春
医者に行け先に逝かれては困るから　松浦亜以
がんばれやまめでと送る母気丈　上田方々
来る春を冬はじゃけんに通せんぼ　松浦木公
週刊誌目の色変える離婚記事　渡辺好之
手馴れしたお針を友に冬すごす　安部春恵
スコップの雪はやさしく菜っぱ堀る　児玉・哲呂
温泉で皆くつろぎの床につき　真綿よし子
おでん屋の花輪二三の店開き　太田亀甲
嫁いびり笑顔の裏に含み針　若槻白馬
絵のように咲いてはくれぬ花の種　佐佐木千世
負けて勝つ言葉をつぐむ悲しい日　藤原千代子
無情風哀しく受けて六十路　安部正子
ポケットの秘密見つけた洗濯機　松田牛歩
本流を外れて溜りの隅で飲む　高木白虹
慎ましく理性が勝って咲きそびれ　藤原のぼる

されて親に離れ、家職も習わず鉄殺された長兵衛の家族は、妻の外、四人の伜があり、長男は作兵衛と言い吉田村の綿屋（田部家）へ奉公にあがり、残るは二男五兵衛、三男三助（十二才）四男七兵衛の三人であり、その後の生活は、三人の伜が幼少に

方にて炭焼きをし貧しい生活を立てて居た。

長兵衛を殺された家族は、下手人は七郎兵衛に間違いなしとし、二男の五兵衛は敵討ちを決心したけれども、長兵衛の兄、太郎兵衛の計らいで、庄屋を通じて隠密にとの事で長兵衛一家は泣く泣く一応これに応じた。

事件以来十六年の歳月は流れ元禄五年（1692）の秋、近所に住む清三郎の妻より、長兵衛を殺した下手人は七郎兵衛である事を聞き、長兵衛の妻は綿屋に奉公して居る長男の作兵衛を呼び

〃　1.5倍
（こんにゃくいも）
〃　7倍
（トマト）　大東の2倍
（大　根）　〃　1.5倍
（キャベツ）　〃　10倍

である。大根・キャベツは三井野原産が主で、県内の総生産額12,100tの20%を三井野が産して、斐川町と肩をならべている。

果樹では
（ぶどう）　加茂199t横田23tであって、開発地に作付されたものである。
（かき）
（葉たばこ）　横田の2倍
ともに

であり、（茶）は　大東・加茂ともに県産額の10%

こうしてみると、大東町の農業経営は、近郊農村型の野菜中心の各種の農産物生産の特色を出していて、現金収入の道を確保しているようで、横田が毎日の必需品である野菜生産の手薄であること、郡外から多数移入していることには、頭をかしげたくなる。消費者が賢くなれば、これは転換できるであろうとも思われる。

次に飼肥料作物（青刈りものや牧草を含めて）

横田が多いのは放草地が遥かに多いことによる。4375t　6806

畜産をみると、数字数（）内戸数

	大東	横田	頓原	赤来
乳牛	700 (35)	520 (50)	485 (25)	530 (39)
肉用牛	2,620 (980)	2,270 (700)	1.315 (350)	1.720 (400)
豚	80 (4)	420 (9)		380 (5)
鶏	140,300 (110)	600 (140)		

これをみると、牛についてみても、大東・赤来が、横田をしのいでいる。種牛としての優秀さは別として。

鶏は大東、県下94万羽のうちの15%を大東が占め、平田市とあわせて30%となっている。

以上からみると、大東の8位は、鶏と農作物の多様化の特色によるものであり、横田の10位は三井野の地の少数の農家の大根キャベツの生産高に負うものということができて、農家の経営は全般的にみると劣るのではないかと思われる。（他の町村の実態分析は省いているが）

ほかに参考としてあげるとしいたけ（干）　三郡では、飯石についで仁多郡が多いが三郡で漸く県産額の約10%

戻し、敵討ちの心を探ったが、その意も無く失望し三人の伜だけに希望を託した。

一方、七郎兵衛は、或る時、五兵衛との小口論の末、「その方は俺の親の敵じゃないか、昔に覚えがあろう、覚悟しておれ」と荒々しく申し渡され、一瞬心に大きな不安と苦悩を感じた。以来、日に日に驚怖はつのるばかり。

そして年は明け、元禄六年春、七郎兵衛は、十七年前王貫谷で言い争って怒りを押え切れず、木切をもって長兵衛を殺し、それ以来五兵衛兄弟による仇討ちへの驚怖の毎日の中で、何とか精算したいと、番所役人、梶野源左衛門に頼み、五兵衛との不和の仲をとり成してもらう様に計り、これにより立会人を、番所役人梶野源左衛門と、木地谷の住人善兵衛と六左衛門とし、五兵衛側より五兵衛・三助・七兵衛。七郎兵衛側より本人、弟の徳右衛門、八郎兵衛、長男安右衛門・二男弥三兵衛の面々の前で、七郎兵衛十七年前の一切を白状し謝罪し今後の親交を求め、酒宴して別れた。

これにて一件落着したわけであったが、それは七郎兵衛だけ……五兵衛等兄弟三人は、母に「今年は父の十七回忌に当り、伜達も成人いたしたれば、敵討ちいたす所存は無いか」と問われ、五兵衛、三助、五兵衛の三兄弟は母の心を察し、尚の事愈々敵討ちの決心を固めた。

折りも、五月五日の節句に七郎兵衛が伯母の所へお礼にゆく事を三助は聞出した。五月四日るもよいが、先ずは役所に届けるが順序と、其の足で番所へ行き、梶野源左門に対し、只今親の敵七郎兵衛を討ち取った事を届け出た。これを聞いた兄弟の五兵衛・七兵衛も番所にはせつけた。

一方庄屋の六郎兵衛もこれを聞き、番所にはせつけ、当分の処置として、敵討ちとは言え人を殺した者は、科人（とがにん）であるとして、三助を村人茂兵衛に預け、他の二人の兄弟も村預けとなった。また七郎兵衛一族十三人は全員召捕りと成った。

其の後、出郷役人吉川太郎兵衛・土居嘉兵衛、下郡大阪勘右衛門（下阿井）組頭吉川又兵衛（下阿井）により、この事件の一々につき、委細吟味の上、当時の松江藩主綱近公（第三代）に、口上書をもって注進されたのであった。

程無く藩主より、今後城下において御吟味がある筈によって当分の間、次のようにせよと仰出があった。

1. 五兵衛・三助・七兵衛の三名は、未決定で当分入牢。
2. 三助の長兄作兵衛は親不孝物に付入牢。
3. 三助の母と五兵衛の女房は村預かり。
4. 七郎兵衛の伜安右衛門・弥三兵衛と、同人の弟徳右衛門八郎兵衛は入牢。
5. 長兵衛の兄の太郎兵衛（福原に住む）と従弟五郎右衛門（米原に住む）は入牢。
6. 善兵衛・六左衛門は入牢、
7. 七郎兵衛の女房は村預かり、

その後、三助兄弟は松江での御取調べがあり、愈々敵討ちであったとお認めに成り、数日後郡奉行、佐々安右衛門より、下郡・大阪勘右衛門（下阿井）組頭・吉川又兵衛（下阿井）・野津助右衛門（八川）宛に次の内容の通知があった。（元禄六年酉七月九日）

一、上阿井村三助儀は、親の敵討ち致したにより、御吟味の

三月句会抄

聖職（しょく）を去る春宵一つの星流す　浅野　としお
孫去りて障子穴より春の光（かげ）　渡部　夕峰
裏も見せ表も見せる猫柳　錦織　富江
うすら氷を踏み割り興ず登園児　高木　白虹
猫の恋菩薩のおん前禅らず　岡田　麗水
庭の隅名もなき小草春を告げ　新出谷　一華
土の温みかすかにうごき蕗のとう　田辺　竹野
豊漁の春鯖箱のまま羅らる　糸原　古志
地の温みしっかと蕗の薹蕗の薹　岡田　蹊花
棄て雪の泥を抱きて細りけり　藤原　樵夫
艶ややかに装うマネキン春を呼ぶ　門脇　花子
窓越しに背を反らし見るぼたん雪　加納　信子
頬よせてそばすゝりけり旧国道　峰石　美代子
野仏や枯葉の群れにも春隣り　小川　あきお

しいたけ（生）　大原・飯石が多く、三郡で県産額の約10%である。

栗は飯石郡が多いが、県下の主産地は大田・那賀・鹿足である。

たけ、わさびはともに飯石郡に若干あるだけである。

横田の農業のあり方を三郡内で比較してみても、また全県的にみても、いろいろ見聞きする当地の情報とは、よほどへだたりがあるように思われてくる。

以上の中で、吉田村がほとんど頭をあげていない。森林の吉田村も今は林業・木材の低迷から、新らしい村づくりをめざして、「鉄とアクションとグリーンシャワーの森」をかかげている。観光も必要ではある。生産も最低限は必要である。観光も線光花火にならぬよう、特色あるいつみてもなにか味いのあるものがほしい。今後地元の資源を生かしたこの地ならではの、特産物の出現が望まれる。読書人の独りごとではない。次の機会に県下町村（市は除外）の観光の特色を眺めて、当地の新らしい方向を模索してみたい。

（編集子誌）

（前号訂正）1頁5段10・19・20行と3頁4段22行の働きをすべてはたらきに・4頁5段3行に16世紀と「16」を挿入

処、此度委細お聞き届けに相成り三人の者今月牢舎を許す。

一、土民には珍しく神妙の事と思召めされ、委細江戸へ言上なされて居る故、御下知は追って仰出される故、労（ねぎらい）置く様に、又飯米等これ無き時は此方へ訴え出るよう。

一、三助の兄作兵衛儀は、詮儀の上、親不孝者につき入牢仰付けらる。

一、太郎兵衛・五郎右衛門儀は、先年長兵衛果てたる様子を委細存じながら、今度の詮儀にも委細申さず、隠密に致し身隠したることは、御掟に背きたるにより入牢仰付けらる。

一、七郎兵衛伜安右衛門・弥兵衛、同人弟徳右衛門・八郎兵衛儀は、伯父を殺せし大罪人の伜、兄弟故入牢仰付けらる。

一、善兵衛、六左衛門儀は、七郎兵衛と五兵衛兄弟どもとの相論を取扱い、前後の委細を知りながら、一旦わだかまり委細を申さずにより入牢中のところ、今度、委細申し出たるにより出牢仰付けらる。

一、七郎兵衛妻子共に村預かりとする。

一、五兵衛母・女房・兄弟共に村預りであったが、五兵衛兄弟共に出牢と相成った上は、別条なく三人の者へ引渡すよう。

そして城下へ召出されて居た五兵衛・三助・七兵衛の三人は殿様より、脇差し一腰、帷子（かたびら）一、を拝領し、元禄酉六年七月十一日再び上阿井村木地谷に帰った。

同年九月初め、五兵衛兄弟は再び御城下へ呼出され、当分の米十俵宛褒美としてつかわされた。

以上は、延宝五年の春より十七年にわたる、仁多郡の片隅の阿井の県境、木地谷で起きた事件であり、当時としての孝行の鑑として一切を顕孝禄に託し後世に残してある。

（筆者・横田史談会員）

四月のうた

秋の陽を浴びて豆干す莚に座し希む未来のなしとは言はず　常盤はるまさ

参道の桜並木を振り返り征きにし人は遂に還らず　野村節子

手に触れし肩の薄さは言はずして夫に誕生日の赤飯を炊く　佐藤喜代子

巫女の舞みじろぎもせず見詰めゐし出雲大社に若き異人は　藤原信子

反戦の歌に児童はきき入りて今日静かなりランチルームは　児玉敏郎

生れしは牝牛なるらし門口に母は笑みつつ牛舎指したり　小早川恵子

ふつきれぬ思ひ払ひて庭見れば春陽を浴びて児ら遊びおり　松浦愛子

クリスマスの準備はかどらず朝からの霰はいつしか雪となりたり　土屋暎子

朗々と唱え給へる師につぎて鉦打つ音のやや揃ひたり　景山悦子

硝子戸の氷の花を爪で消す小さき視野に光る蒼空　永井弥生

寒さむと外は雪ふり独りくむ酒は身にしむ夕べの酒場に　安部夕波

米五俵を戴いた。

その翌年五月、江戸在勤中の殿様も松江に御帰城になり、改めて、木地谷敵討ちの件につき次のように達せられた。

三助儀は、下賤の身にして親の敵を討ちたる事は神妙である。まぬけ武士も恥ずべきであると思召され、元禄六年暮より生涯

奥出雲編集について

そもそも横田町誌余録として残された資料とともに、郷土の動き、歴史、先人のこと、庶民の生活を残したいと印刷してお求め頂いた。昨今は編集子が主力を注いでいる、奥出雲の中世史とたたら製鉄に紙面が多くなった。当初のねらいに共鳴し、経続して求めて頂いているお方には申訳けないと思う。

一方主力となっている読みものに県内外各地から関心をもって経続して求めて頂くお方が多くなり、そのためについ堅く難しく（頁数の関係もあり）なってゆくので、やさしくと注文をうけている。そこで硬軟おりまぜているつもりである。最近は何かに追われる上、10年前とは回転も能率も低下したようである。無理もききにくくなったが、もう続けるだけ続けよう、何とか執筆者もふやそうと努力中である。よろしくお願いしたい。

よくぞここまで御協力のお蔭様

本号で満10年になりました。横田史談会も10年　ともに手をつないで今日まで。感謝で一ぱいです。お蔭様で健康に過させて頂きました。

「奥出雲」は毎月中央誌「歴史手帳」で内容を紹介されています。地方紙でもよく紹介されています。「横田史談会」も中央誌「歴史研究」で紹介されましたし、県内の季刊「文化財」で2回、年末には旬刊の島根の「教育広報」で、ついこの間は「島根史学会報」で紹介して頂きました。素人の集まりとして文字通り10年1日のごとく、続けていろいろのことをやっているというところに、意義を発見して頂いているようです。私どものねらいもそこにあり、それでよい、できれば輪を大きくしたいと思っているところです。

横田史談会員・その世話人・各文芸集団（グループ）の方々の御協力と、植田軽印刷所の犠牲的な御協力の賜です。御礼申し上げます。

次に数字を掲げます。昨年の決算の見通しは次のようです。

㊨ ○印刷費　249,350
（増員，増刷含め）

㊧ ○横田史談会会費より84名前後　144,800

○町内外の誌友　99,000

○旧号売上げ、贈呈の返礼に頂いた文献等換算編集者引取代　5,550

○封筒ほかの雑費は「あるくみる横田」の収入から

県外の三大学・研究所・図書館・出版社も申込み頂いて届けています。当初は編集者の自己学習・健康保持の出費と思って赤字は自弁、三年後からは「あるくみる横田」の若干の利益をもって、トントンとして来ました。

カラー写真入りに改版一新と思っていますが。此上共宜敷。

会員配布本号限三百円／六九一六　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替）松江〇一六〇一　頒布／横田史談会　仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第　122　号
（6月号）
昭和60. 6. 1
奥出雲編集集団©

温泉津の浅原才市・短歌・川柳・俳句・

凡にして凡ならざる

妙好人

―温泉津の浅原才市―

妙好人とは

仕事場でコツコツとゲタを作りながら、64才を過ぎた才市は頭の中からほとばしり出る感想を、カンナくずや木片に矢立から筆を出して書きつける。

あさましや
わしの心は魔道のこころ
かかあの心も魔道のこころ
あさましや
おのれおのれとねらみ合い
これが地獄の証拠よ
あさまし　なむあみだぶつ

詩というか、仏教賛歌と呼ぶか、短い作品か、ときにはやや長いものがあって、何百何千と作られてゆく。ひらがなの方言のままの表現。

同郷の教育者寺本慧達が若い時才市と仲良くなり、ハワイへゆくことが決って、餞別にこの作品を帳面に清書した覚帳をもらってゆき、のち大震災で一部焼いたが残った何十冊かを、哲学者鈴木大拙に進呈したのが、才市が世に出るもとになった。

才市が書きはじめた作品は、83才で死ぬまで幾千を数え、百何十冊にもなったという。昭和23年大拙はこれを「妙好人」で詳述して出版し、世界哲学者会議やコロンビア大学で紹介したので著名となった。妙好人浅原才市は本人も周囲の人もサイチといっていたという。

大拙の著書の冒頭に、「妙好と云ふは、もと蓮花の美はしきを歓称しての言葉であるが、それを人間に移して、その信仰の美はしさに喩へたのである。」といっている。浄土系信者の中でとくに真宗、真鸞の数えそのままに、本願他力、専修念仏に生きた純粋他力の信心の人のこと、言いかえれば、とくに信仰に厚く徳行に富んでいる人を妙好人という。従って妙好人には法悦三昧（ほうえつざんまい）に浸われた。それまで全国各地から篤志家はもとより団体視察が続いていたというが、この年を記念し毎年才市忌が催されて来ているという。

先ごろ絲原記念館へ一人の背広姿のいんぎんな方が、タクシーで来られ、6月6日に見学して昼食し大阪へ帰るので下見に来たとのことであった。前晩はどちらでと尋ねると温泉津とのこと、当節わざわざ大阪からひなびた温泉宿に泊られるのは何か趣味の集りの方々ですかというと、5日の才市忌に在家の方と団体で参拝し、帰途かねてから聞いている奥出雲の人情にふれたいとのことであった。

今から35年ほど前にさる方から頂いた大拙著「妙好人」を思い出した。書斉の本棚があふれ客間をのぞく至るところの部屋や廊下にまで本棚にあふれる本や書類の中で、階段上りがけにあっていつも眼に入っていたからであった。一読以来の再会である。キンヨリ腰で仰臥の多い時だったので、読みかえした。縁とは異なものである。

詩一編

宮沢賢治

手は熱く　足はなゆれど
われはこれ塔建つるもの
滑り来し時間の軸の
をちこちに美しくも成りて
燎々と暗をてらせり
その塔のすがたかしこし
むさぼり厭かぬ渠ゆえ
いざこゝに一基をなさん
正しくて愛しきひとゆえ
いざさらに一を加えん

生いたち

才市は温泉津駅から温泉へゆく道が港に出たところの小浜で父要四郎・母スギの一人息子として嘉永3年（1850）に生れた。

11才のとき両親は離婚。大工の年期奉公の後、船大工として県外で働き、25才で結婚し壮年時代の生活はこれを職業とした。郷里に帰って落着き下駄の製造にかゝわったのは50才を過ぎてからである。

その店は小浜の本通付近では一流だった。そこから100㍍とないところに本願寺派の安楽寺があり、住職は勧学（浄土宗・真宗本願寺派における最高の学階）の位をもつ梅田謙敬。一生つづけて詣った。寺の娘の尚子はその大正時代は少女で、そのころのことをよく知っていたという。

その回想を引用すると、

「毎朝寺へ来られ、5時からの御朝事（おちょうじ）のときもあれば、終ってからのこともある。そして自分の心持を書いたもので…と父にメモを渡される朝が多かった。父とその内

容について話合う。父が他所へ出かけていたとき代理に来ていた僧がこのメモを見て、このままでは散逸してしまう。帳面に書いておきなさいと勧めた。それで当時5銭くらいだった小学校の清書帳を買って、昼の間二畳ほどの仕事場で思いつくままに木片に書きとめたのを、夜、帳面に清書された。これが百冊ほどにもなったのです。」

そのころ同寺の親戚の寺本慧達さんが、竜谷大学への往復に寺へ立寄って才市と仲よくなったのである。

「あのころは、お念仏のなかのご恩報謝の生活、寺へは仕事着でなく、きれいな着物に替えて来られる。寺で法座があると一番前にすわって、まばたきもせずに聞き入り、ときどき立上っては、ああアリガタイと声を出す。近くの西楽寺では、あとで、今日は良い説教を聞いて、トミクジがあたったような気がするなどの感想をもらす。しかし周囲からはよくお寺参りをするおじいさんと見えるだけで、他人に信仰を説くこともない。店に出れば、もうけたいとのボンノウが起ると商売は奥さんにまかせきり、正月とお盆には必ず父へキリのゲタを持って来られた」

驕慢・邪慳・貧慾の悪才市

△あさまし、あさまし、じゃけん、京まん（驕慢）、あくさいち。

じゃけん、京まん、あく（悪）さいち

あさまし、じゃけん、京まん、

あくさいち。

あさまし、あさまし、あくさいち。

ひとのものわ、なんぼでも、ほしい。

とうても、とうても、ほしい、

ほしい。

ほしいのつの（角）がはゑ、あさまし、あさまし、あさまし、あさまし、あさまし。

じゃけんのもとわ、このさいちがことよ。

このさいちにわ、ひとがをそれてをります。

それに、ひとがしらんと、をもをて、をります。

彼の罪業感は主として、「あさまし」「じゃけん」などの言葉であらわされている。自己批判であって、まだ倫理的段階である。これは64才ころの、はじめられたころのもののようである。この驕慢・邪慳・貧慾に克とうともがけばもがくほど、ぬけ出られない。こゝに他力の要請があらわれ、懺悔が出る。自分の力で超えられぬものがある。

△ままらの（ぬ）、ままに正てて、ままにもならの。

ままに正とわ、そりゃむりよ。

と感ずる。この時そのままでありがたく愛用する。即ちあさましの世界が「御恩報謝」の世界となり、慚愧と歓喜との交響楽となる。

△ありがたいな、ごをん（御恩）をも（思）ゑば、みなごをん

「これ、さいち、なが　ごをんか。」

「へゑ、ごをんがありますよ。このさいちも、ごをんで　できました。

きものも　ごをんで、できました。

たべものも、ごをんで　できました。

あしにはく、はきものも、ごをんで、できました。

そのほか、せかいにあるもの　みなごをんで、できました。

ちゃわん、はしまでも、ごをんでできました。

ひきはまでも、ごをんで、できました。

ことごとくみな、なむあみだぶつで、ございます。

ごをん、うれしや、なむあみだぶつ」

かつての「あさましや、あさましや」が、これほどまでにごをんにつゝまれるとは、人間一生において、容易ならぬ転換を意味する。

才市は体験そのものから涌いてでてくると書いている。

△こんな子が、でんなちうのに（出るなと言うに）、またでた。出どこがないので、口から出た。

なむあみだぶつと、くちからでた。

自分の意志や知性で、何とも押へつけられぬものが、才市の心の底に動いている。何か自分より大きなもの、強いもの、慈悲深いものに抱きとられた結果であろう。

△わしがねんぶつを、となゑるのじゃない

ねんぶつの、ほうから、わしのこころにあたる。ねんぶつ。

なみあみだぶつ。

△「さいち、よ、いへ、たりきをきかせんか　いへ」

「たりき、じりきはありません　ただいただくばかり。」

大拙はこれはキリスト者であった、トマス・ア・ケンピスが「わが希ふところは、悔い改めの定義でなくして、これを心に感ずることである」に比すべきで、妙好人才市はこの感じ或は味いを中心として生活していたのであるといっている。

父の感化

最近のさる中央紙のこころのページに、才市が64才をすぎてからこのように妙好人への道をたどりはじめたのはとして、新しい研究がのっていた。父要四郎は父を亡くした6才の時、寺に小僧として引き取られ、剃髪して西教といった。成人してから他家の漁業や農業を手伝って手間賃をもらうことはあったにしろ、寺役が中心の生活であった。49才で本格的に出家したため、妻はそれを認めて離縁した

らしい。父西教はよれよれの衣をまとって歩いて、ほいと（こぢき）坊主と呼ばれた。母は間もなく再婚するが、その家は父の住む小屋の近くにあった。息子にとっては異常で悲しいことであった。それが長らく故郷を離れ50才をすぎて帰ることになった原因であろう。青年の一時期にはとばくにも走ったようだ。

両親に愛憎二筋の心を抱いた。才市自身も一人娘が二度離婚したのち好きな男と駆け落ちする悩みもあった。そうした苦しみに耐えて懸命に生きるうちに、身を苦しみごと預けられる大きなものがあるように思え、それは次第に父が歩いている仏の道とわかってくる。父西教は破れ衣の下に純粋な心を持つ真の念仏の人だった。それが鬼才市を妙好人に導く元にもなったものであろう。流行のなんとか競演と称する、念仏とははるかに次元が高い。十余年前寺の経蔵前に立った記念碑をみたことがある。北原白秋が十首ほどの中から選んだもので、「すばらしい、こんな歌は作れない」と感嘆したという話も残っている。

六月のうた

若さとはよきかな狭き部屋に住むも未来信じし戦後を思ふ　常盤　はるまさ

映像の消えたるのちも眼裏に難民の子のうるむつぶら目　岡田　時子

繋がれて丸く眠れる犬の背に木蓮の花ひそと散り来し　佐藤　喜代子

田の端の草焼くうすくたちやがて霞の空にとけゆく　小早川　恵子

萌え出づる草生の丘に新築の黒き甍に陽炎燃ゆる　野村　節子

幾声も幾声も鳴く鶯に耳はゆだねてわらび摘みゆく　藤原　信子

在りし日をめくる思ひに亡姑のこと子らと語りぬ十七回忌　景山　悦子

大きめの学帽深ぶかかぶりたる孫は走りて列に加わる　松浦　愛子

亡母の手になれる絣はしっとりと肌に馴染みて四十年を着る　永井　弥生

恵美眠る奥津城訪へば新緑の吉備路は遥か夕映へていし　安部　夕波

△かぜをひけばせきがでる。
さいちがごほうぎ（御法義）のかぜをひいた。
ねんぶつせきがでるでる。
尚子さんの好きなのは——
さいちよ
お前はなんしにお寺に参るかい。
わしは虚空（宇宙）を負かすほどの力をもろうたで、そのお礼に参るのよ。
なむあみだぶつ。

ざんげの半面、強いプラスの一面を押し出しているところ、仏と一体だという点がすばらしいという。昭和7年83才で死ぬまで書きつらねた作品は数千という。以前、出版もされた。

余　録

隠岐の横田武著、花蓮陀の本「慈」。彼が県立図書館へはるばるやって来ているのに出あうと、いつもまだやっている葉書通信だといって、いろんな便りの内容を話してくれる。戦時中数ケ月机をならべて学んだこともある。この中の詩は才市とはちがって、洗錬されたことばで輝いている。

ついこの間よく立寄る、松江殿町裏通りの古曽志そばへ入った。いつものように御主人とそば湯を飲みながら話した。全国でも珍らしい、いのちの電話をはじめた方で、中央地方多彩な交遊する人をもっておられ話題豊かである。島根県の自殺者数は全国一の高率、なんとかしたいとはじめられた。多くの人が救われている。多くの奉仕者（ボランティアのことばは私は好まない）に支えられた結果である。人柄の魅力もある。だがこの奉仕は、他人の悩みは奉仕者の心の重荷となり苦しみの連続らしい。細心の注意が必要である。障害者への点訳や録音の奉仕のように一方通行的なものでない。そこで今はその奉仕者の減少にも、補充難にも悩まされるという。奉仕はきれいごとではできない。自己犠牲が伴う。私はよく気違いでないと出来ないと言う。飼馴らされて上品で、余分なことをしない人が尊ばれる傾向が強くなる世の中である。あくまでも責任をとる腹を切る底の人が少なくなった。軍人の猛進もこまる。役人根性とか言われるものもこまる。

十日余り前、ホーランエンヤ

文化情況診断
合唱教育のすゝめ

この春退官された島大名誉教授森山俊雄先生と今年になって数回話し合った。昭和21年から30年代半ばまでは、島大の音楽部は横田の文化祭（11月3日）に出演するのを目標にけいこし、それを皮切りに各地での演奏活動に出かけたものだとの話をされた。確かによく来て頂いた。しかも薄謝。当時学生今は年輩の教師諸君で毎年やって来たという人は多い。今島大音楽部40年史編集中で、このことは特記されるらしい。特設音楽課程創設寄附一番乗りも当郡だった。

小中学校は児童生徒数の減少と、行事に狩り出される器楽合奏に追われる日常では、合唱には手が廻らないのが現状である。

しかし音楽の基礎は合唱とピアノである。今合唱に参加する人は青少年のころ合唱経験者である。横田町青年団の合唱団が冴えなくなったのは、その経験者がいなくなったからである。

カラオケよろしい。マイクで歌うもよろしい。同じく名誉教授でピアノの長岡敏夫先生も音

（4頁下段へ）

斐の上川柳五月抄

先の事知らぬ幸せ今日も翔ぶ　若槻白馬
親馬鹿と承知しながら馬鹿になり　太田亀甲
あれこれと望をかけて種を蒔き　松浦木公
風薫る空に乱舞の鯉のぼり　田中芳春
連休はどこふく風ぞ空を見る　松浦亜以
胃カメラで心配消えて食すゝむ　佐佐木千世
初孫が男の子らしい鯉のぼり　安部春恵
魚心有って袖引く仕掛人　渡辺好之
田植機で植えてもらってまだ不服　藤原千代子
山菜が山から招くいそがしや　安部正子
チチハハと泣いているよな雀の子　高木白虹
宵闇に出かねる星の音がする　藤原のぼる

六月句会

少年は眉濃し花の影に立つ　浅野としお
由緒めく門の崩れや八重山吹　岡田蹊花
春愁や投薬口の窓小さし　岡田麗水
楼門に新芽かざすや鰐渕寺　小川あきお
山の駅ただひと株の八重牡丹　高木白虹
春雨に濡らして過ぐる葬の列　新出谷一華
ひっそりとすずらん小さき花ざかり　錦織富江
牡丹園めぐるふたりに雨しづか　峯石美代子

の行事を一泊して真上から十分に楽しんだ。朝六時すぎ人影は走る人、次に制服姿の警察官としきりと行きかわっている。

また古い話で恐縮だが、50年前、松江に日の丸おぢさんと呼ばれる人がいた。出征兵士を送る時、お祭の混雑の時、整理にあたっていた。この人が歩いていると人々は自ら規制して、混雑はなかったものである。近頃は混雑整理と交通事故防止に、いつも大わらわである。これは一人々々の自制で防げるものである。近代化、機械化は人をこんなことに退歩させるものであろうか。このことは六月はじめのさる地方紙の連載もので少しえぐり出して書いたのでそれにゆずる。

言葉か、裏をかえせば歴史理解の不足をしめし、ロマンだといって中味があるとみせかけているにすぎない。その一方、郷土文化だ伝統だといいながら、最も横田の特色ある中世の文化財が流出し破壊されている。これで文化の町と自負できるであろうか。「オロチ退治」もすばらしい物語であるが、活性化とかいうことにはつながらない。地方出版でイヤラシイマンガ本があらわれて不評をうけている。買った親に聞いても、中味のことは御存じない。話すと「へー」という言葉がかえってくる。執筆・出版の努力の労は多とするが。

立派な町誌も眠っている。古本の欲しい人は多い。あらわれても4万円はするらしい。町内の資料集めを第一にし、それを利用できる手引書とするという編集内容が評価を高めたが、読みものとしては昨今の各町村誌のようにくだけていない欠点はある。

町誌の中世篇、十分ではないが注目すべき横田がみえる。文化財の記述が全くないのは欠点。しかし貴重なものは多い。記述されなかったのがわざわいした

横田町の観光は中世から

横田の中世史の特異性、重要性はこの奥出雲では再三にわたり特集強調している。

「神話のふるさと」なる言葉は町起し、町の活性化とかいう会には、いろんな方から大前提として語られる。何と空疎なる

か、逸散の多いのは残念である。しかし残っている。中世の文化遺産をこれだけ生んだ横田庄、うんと見なおして頂きたい。

こうした認識なしに、神話をふりかざされては。

今年は第四回の陰陽郷土研究会の当番町になっている。島根県中世史研究会の協力を得て、広島、島根の大学、岡山、鳥取の研究者の発表を頂き、第二日には芸・両備・伯・雲と横田庄の関係を主題に討論会（シンポジウム）という考えも浮んで来ている。常に自費でやっているこの会を、町民の方に解放、横田の歴史に眼を開いて頂きたいとも思っている。横田史談会10周年にも当っている。

4・5月は追われつゞけで、「妙好人」の原稿によって紙面をうめたことお断りをする。

（編集子）

楽教育は合唱ですよ。200年前すでにシューマンの名言もある。合唱は指導するものも、されるものも楽器（発声法）づくりからで苦しい。とかく易きに流れる時代、少人数にめげずに。

会員配布一部百五十円／六九一一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0-601）頒布／横田史談会　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第　123　号
（7月号）
昭和60. 7. 6
奥出雲編集集団©

小字めぐり⑤

横田町（1）

（町村合併前の横田町大字横田町即ち大市・六日市の本通り両側の町並み）

郡内の町

記録をもとにしるすと、

○慶長6（1601）初代出雲国藩主堀尾氏が国内初巡国の折、横田町五反田屋で一泊した。

○寛永2（1625）横田町代官芦田瀬兵ヱ、大市大火に焼ける。

○仝　11　横田町代官同じ。

○仝　18　横田町に郡牢が置かれる。（元登記所現公民館）

○慶安元（1648）横田町御検地帳に町屋敷73軒余、代官屋敷あり。大市、六日市の周囲横田村に数軒あり。

○仝　2　阿井町地銭帳に20数軒町屋敷あり。

○寛文5（1666）三成に川方役所が置かれ下阿井山根より16戸が強制移住。町作りはじまる。

○寛文10（314前）横田町地銭帳に75軒の屋敷存在（次頁の図）大市46軒・六日市26軒。この年郡内に町は阿井・三沢・亀嵩。

○延宝4（1676）松平2代藩主綱近（18才）廻国、横田町六日市郡家に泊る。

○正徳3（1713）の郡家の記録では、横田・亀嵩・三成・三沢・上阿井の五町に、各々、目代（町の庄屋の呼称）がいる。大市・六日市に商業の神夷（エビス）堂あり。神門屋（現岩佐）と大黒屋の横に。市が立ち商業の発達をしめす。

○享保2（1717）横田町に大市場・六日市場、三沢町に四日市場の牛馬市が立つ。年末には亀嵩町でもたつ。

○寛保元（1741）横田で御役目屋敷（徴税対象）65軒と免除屋敷20軒余あり。この年の郡内4町の御役目屋敷は141軒であったから、横田町以外の4町で76軒、従って1町15～25軒位、平均約20軒、横田の増加発展の高いことは諸般の活発さのあらわれ。

○天保8（1837）大市のみで56軒であって当時としては急成長。

○天明4（1784）下郡格（待遇）の湯之廻絲原氏雨川に移る。この年郡家三成町へ。御役目屋敷は横田町65軒、三成町20軒。

横田町（大市・六日市）の起り

横田庄については度々述べているので省くが、その中心は中村（五反田・馬場・樋口あたりを言い、横田郷の中心の村の意）であった。

永正6年（1509）三沢氏が藤ケ瀬城に移って、その山麓に根小屋（居住地ー現田村宅から恩田宅にかけての一帯にそれらしい遺構がうかがわれる）を置いたころは、まだ角から以西は下中村と呼んでいた。天文12年（1543）尼子氏が横田庄を抑え、竹崎村・蔵屋村・原口村にそれぞれ家臣を代官として配置し、それに大呂村・下横田村・尾園村（八川村）を加えた総代官には、中村の代官森脇山城守家貞を命じた。（のち尼子氏の勢力が減退すると再び三沢氏が禁裡御料所代官に復するが、尼子氏時代は去就明らかでない）このころやはり下中村の文字があるから、横田町はもとより横田村はなかったようである。

総持寺（善徳寺の裏から永祥寺、とはなへかけての台地の北の端にあった寺、幕末まで跡あり）台地のほかは、斐伊川の氾濫にまかせる葦の茂った沼地や、砂の堆積地であった。中河原が完全に水田化するのは徳川中期ごろである（横田町誌参照）。

どのように堆積地が出現したかは斐伊川改修の折の現地見聞調査・写真撮影、強固な基礎工事を行う建築工事場の地盤調査書・写真撮影をもとに、土質・岩盤の分布状況図をつくり、検地帳の時代別にみる変遷とで検討すると、まず六日市が最初のようである。

かつての大坂渕（岩盤が高くこゝを徳川時代に苦心して道路を開いた）と、国道314号線の横田新大橋の下、横田31番札所定補庵の東は、各々藤ケ瀬山から岩盤がグッと突出していた。この岩盤突出部の間に自然に土砂が堆積して出現しはじめたと思われる。

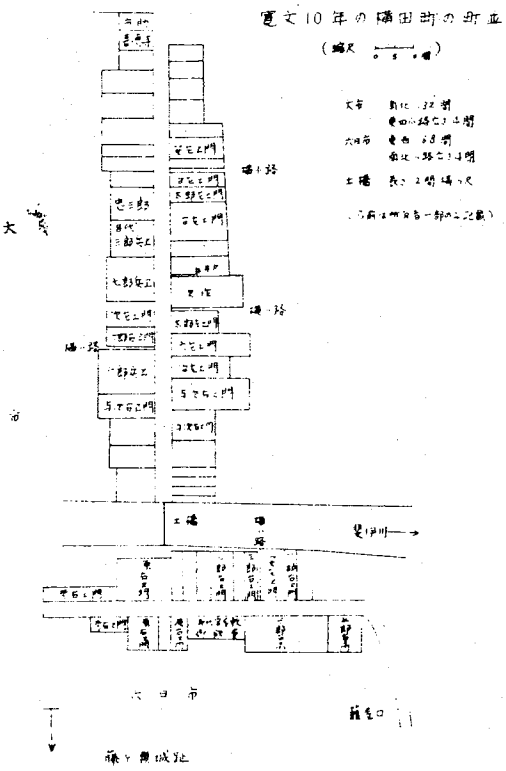
横田大橋のすぐ下流から福田理容店にかけて岩盤があり、この下流に瓜屋の堆積地が出現しはじめ、川は或る時は樋口からトモエ工場側を駅通りに向って流れ、総持寺台地で川は右折し流れていた。やがて瓜屋堆積地の拠点の岩盤を拠点として桐の木川の西側提防づくりに成功し、大市の沼地化、斐伊川の現在の流れづくりを出現させた。まだ中河原はしばらく沼地で、大市は今日の東本町へ向って砂地化、水田化へと進んだ。洪水の時には中河原は桐の木川・斐伊川の貯水池となって、桐の木川西岸（昔は西側がずっと高く堅固であったのはその名残り）以西への浸水を防いだ。藤ケ瀬城が築かれたころは、六日市地区はすでに堆積地化しており、大市を含めた南岸一帯は河洲時代で瓜屋地帯は相当堆積地となっていたと思われる。天文12年（1543）尼子氏の代官が入ったころから、ここに集落が出現し急速に水田化がはじまった。

天文20年伊賀多気神社が再興されている（それ以前の記録はない）。8世紀の出雲国風土記時代から存在し、郡内では三沢神社とともに別格社であったこの

小字めぐり⑤横田町・提言・俳句・短歌・川柳

宮も、若干の記録から推定すると、中村のどこかにあったと思われる。中世鎌倉中期に勧請され、岩屋寺・表杠氏の勢力とともに横田庄内守護神として近隣にも一の宮として君臨した馬場八幡宮の下宮となって人々の信仰も薄かったのが、町づくりの精神的支柱として、現在地に移転し再興したと考えている。

本願は総代官森脇氏である。今から430余年前である。この天文20年から50年を経た慶長6年（1601）堀尾氏は初廻国の折、横田町五反田屋に泊ったという。六日市の富田屋の前の屋号である。この時を記念して改号したと伝えている。五反田屋は元五反田に住んでいた豪農であったから、森脇氏の町作りの核として六日市にも居を構えさせられ、川の南岸大市及びその東方の開拓を手がけたものと考えられる。馬場（現横田）八幡宮境内中世の秋山神社の本願も五反田屋である（横田町誌）。鎌倉初期来住し明治中期まで八幡宮では神主とならび祭祀に重要地位を一貫して占めていた樋口の表（元小池改姓して杠）は、初代以後度々五反田屋と縁組をしている。慶長10年には表の分家が六日市に出て増屋と称していることはこれらと関係がある。



寛永14年（1637）伊賀多気神社の棟札には代官芦田瀬兵ヱ、本願は表と富田屋と田中氏（現在明らかにし得ず）であることは、さらにこれを裏付ける。

先にのべた慶安元年の六日市・大市73軒余は、町作りがはじまってから100年たった時代である。図にみるように、城と安楽寺（由来は町誌に）を結ぶ南北の線上に大市が、それと川に沿ってT字に六日市があるのは、意図的に開拓に伴って町をつくったあらわれである。藤ケ瀬城地内にある諏訪神社の仝3年棟札には、庄屋が表で本願は富田屋田村氏と諏訪中沢氏（現沢屋）である。諏訪中沢氏は信州から大原郡牛尾庄（海潮）に下った新補地頭のちの牛尾氏の旧姓である。その一門であるとみられるが来住の由来は明らかでないが、祖は信州諏訪神社の神領の地頭であるから、本願にふさわしい家柄である。尼子氏敗退後いつのころか武士の末流として郡内に入り、上三所を経て六日市に土着

ささやかな提言

横田町本町の再生を

——現状を逆手にとって——

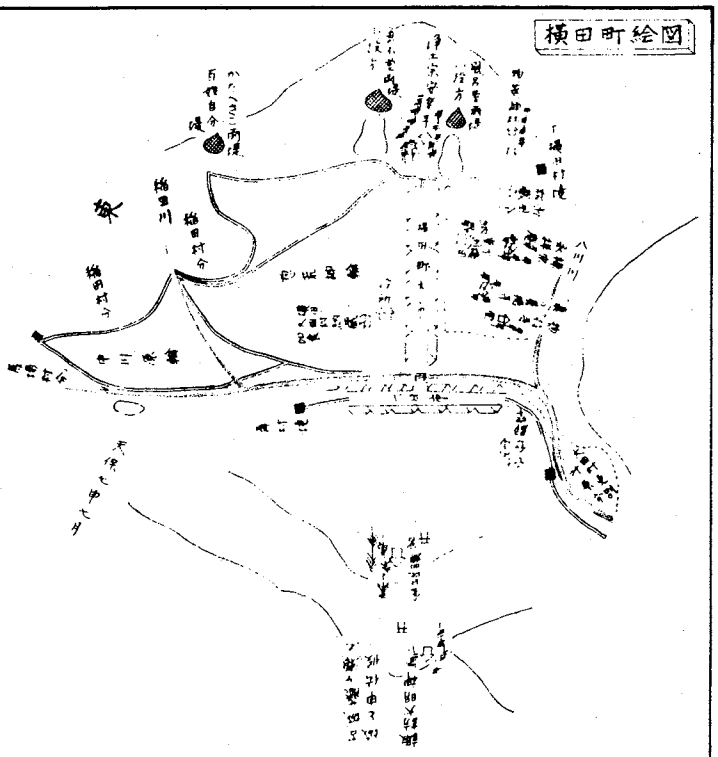
本号では横田町ー大市・六日市ーの起りと徳川中期までをあらましみたが、続いて商業活動ー昔の町人のーや牛馬市のことを交えて、昭和20年までの家と住人・職業の変遷を綴る予定。かつては郡内はもとより、能義郡奥部、鳥取県日野郡西部の中心地、牛馬市をめぐっては奥部の備中・備後との交易も深かった。それに岩屋寺・馬場八幡宮の信仰もからんでもいた。街並みは昔の面影をのこし、一つの風格がある。東の方に住宅が拡がり、商店街も移ったとはいえ、

役場、銀行二店、郵便局、商工会、商協がある。駐車場は近くに少ないが、歩行者天国に近い環境を生かして、歩いて楽しみ親味になってつきあわれ、買物できる街に、現状を逆手にとって生かすことはできないだろうか。

商店の種類も多い。街上（南）から食糧品、酒類、家庭用品雑貨類、旅館二軒、津具、薬局、時計眼鏡貴金属、ガソリン、食料品乾物、理美容、呉服衣類、新聞、豆富、菓子、印刷、時計眼鏡、そろばん、食糧品と点在する。吉重橋を渡ると鮮魚、電気器具、豆富、漆器類と多彩な店が続く。本町を一寸横に入ると肉類、書籍、中華料理、すし軽食、家具の店もある。

これらの店の間にはそのまゝで貸店舗になるもの、改造すれば大型店舗になるものが、10指に近い。ほとんどが家族経営店であり、多くの経営者が若い。誰か中心となってこれに活力を入れ、やたらに投資ではなく、現状を工夫で生かす道はないものか。中食のための一寸気のきいた食堂も不足している。役場、退行、組合も多い。寸時の商談、友人の話合いの場所がほしいところ。昼は休んでいる旅館の階下を改造しての、**軽食堂経営**もそうむつかしくはないだろう。

若い経営者・家族経営の利点を生かし、夜の時間を延長して更利を計るサービスの強味も発揮できると思われる。大市・六



武士ではないが、少し下って、広島屋（伊藤氏）平野屋（渡辺氏）も来住し、やがて町の中心に住居をしめる。

寛永10年（215年前）の街並み

2頁の町の図は寛永10年（1670）の横田町地銭帳による町並の復元図である。一軒一軒の所有者、間口、奥行、道路の巾と長さなど詳細に記入されているので（徴税対象のため）、それを縮尺で復元したものである（横田町誌より転載、原図は筆者作成）。基本的には今日と同じ状態である。

中世半ば以降と推定しているが、流し堀りによってできた跡地、流した砂によって埋った土地が、水田開発のもととなったのである。この流される土砂が洗われて川砂鉄の大量採取につながり、たたら操業数を増してゆく。一方谷川に洗い場（むしろをしいてその織目で砂鉄をとる）を設けて第一次の採取も工し、富田屋とともに開拓そして町作りの双壁となったものと思われる。（後述）

寛文7年（1667）の伊賀多気神社の棟札には、代官は龍野九郎右ヱ門（三成に川方をおいて町作りした）であり、郡家は横田にあった。この代官は相当酷吏であったが、郡内及び簸川郡では土木事業では功績をあげているが、農民に対しては厳罰主義で望んだことは諸記録に多い。本願は田中氏と富田屋田村氏、庄屋は表である。従って田中氏も町作りの立役者であったとみられるが明らかに出来ない。理由は明らかでないが前代官芦田瀬兵ヱは横田町目代としてしばらく名を留めている。

間もなく大市吉田屋が安芸吉田から来住する。元和5年（1619）広島城主福島正則が改易されると、その多くの家臣層は芸北山間地帯に帰農している。その中に可部屋桜井氏がある。吉田屋もそうした流れであるという。

日市の町名の起りに因んで、**毎月**の一の日と六の日、**1・6・11・16・21・26**の諸日を定例日として、六日市から大市への臨時店舗出張販売で、特殊な着想の売出しは如何が、ゆっくり歩ける歩行者天国もそう難しくないだろう。

また、

3・8月日	大市安楽寺 一畑さん	8・7	大市善徳寺 奥の堂さん
3下旬	春の彼岸、札打ち	8・中旬	お盆・盆踊り
4・8	各寺で花祭り	8・18	六日市 山上さん
5・10	六日市 金比羅さん	8・19	大市永祥寺 稲荷さん
6・28	大 市 荒神さん	9下旬	秋の彼岸
7・19	大 市 愛宕さん	9・22	六日市 諏訪さん
7・20	大市 恵比須さん	11・8	氏神さん
	六日市	12・24	クリスマス前夜祭

夏に多い。昔から街の人々が育ててきたもの。土曜市の比ではない。歴史の味がある。家族づれで楽しめる一日一日である。

山上さんにはのぼりはりあいという勇壮な行事があって、出雲地方に鳴り響いていた。装いを新しくして、斐伊川をはさんで、子供の花火大会を企画しては。やたらに費用をかけて他町村の人を集めて、商売繁昌もよいが、お互いが出し合って、子供を育て家族のきずなを固くすることも大切だ。カラオケも芸能人招待もよいが。自らの手で自分の街の伝統行事を生かし、連帯感のある雰囲気をつくることが大切である。「大市・六日市の人々の心づかい、そこの商店の心づくしは」の評判はやがて歓心をよび、人々の集まりを誘い、自分達・街を育てゆく。

記念写真のとれる場所もほしい。異国風なゴチック風建築の教会に加え、先覚者の絵になる新らしい形式の記念碑もほしい。

大型農道は観光客の流れをかえはじめている。一分間に二台の車が通るという。絲原記念館→川西ルートの開通、314号線の開通も考えると、本町の再生の望みは大いにあると思う。伝統産業そろばん会館の誘致も目玉となる。本町商店共同の奥出雲特産品売場なども設け、昔の街の風格を残す工夫によって本町は、地域の人はもとより横田へ泊る客、観光でしばらく立寄る客の、憩いや買物の場所となる。観光客の要望は強い。

訂正 122号1頁 宮沢賢治の詩「むさぼりて厭かぬ」

七月句会

夏蔭や髪すく女片膝し　浅野　としお
夜は夜の色持ち咲きぬ鉄線花　門脇　花子
調度品置き替え夏めく部屋構え　岡田　踩花
植え終えし棚田棚田に月おきて　岡田　麗水
遺作展観し六月の街眩し　小川　あきお
棕櫚の葉の母が遺愛の蝿叩き　高木　白虹
ホーランの絵巻を展べし初夏の湖　新出谷　一華
双蝶の交じりて紫陽花彩豊か　錦織　富江
梅雨の入りけだるき今朝のつめを切る　峯石　美代子
マネキンの衣の淡く春寒し　安達　紘子

七月のうた

たかる蝿に瞬きすらせず動かざる難民の子らの澄みたる瞳　常盤　はるまさ
一晩を湯槽に浸けし種籾の甘くにほひて農はじまりぬ　小早川　恵子
縁側に茶を汲む亡舅亡姑顕たしめて池の畔の白藤匂ふ　野村　節子
春浅き朝もみがらまさぐりて掘り当てし独活真白く匂ふ　景山　悦子
亡き父母の一鍬一鍬開きたるたんぼにブルのエンジンひびく　藤原　信子
山の緑澄める空気に響かせて朝の歌声教室に湧く　児玉　敏郎
年毎に農作業が減る夫の掌は細くなりゐて吾は戸惑ふ　佐藤　喜代子
鶯の鳴く声近き峡真昼妻乃上荘に人を待ちおり　松浦　愛子
老深し変りゆく世に三夫婦は愚痴の言葉も呑みて堪うる　岡田　時子
長き日をパンの間食に茶を摘めば塩ききし亡母のにぎり飯　永井　弥生
恋し
六月の風さわやかに若葉鳴り長谷の大仏静かにおはす　安部　夕波
（鎌倉にて）

斐の上川柳六月抄

操夫術飛んで火に入る妻のわな　渡辺　好之
白い腹哀れ蛙が鎌の先き　若槻　白馬
種まいて芽が出るまでのもどかしさ　松浦　木公
白ぼたん女神の精とまようよう　安部　春恵
ほろ酔いの平和ないびき今日も無事　松田　牛歩
年金で茶口求めて友を呼ぶ　佐佐木　千世
口止めをして大ぎょうに話し出し　松浦　亜以
掃く役目散らすも役目大家族　高木　白虹
野良の午後雨にくつろぐ針仕事　真綿　よし子
古本見る亡父もこゝに朱線引き　太田　亀甲
つかれてもやっぱり好きな山歩き　安部　正子
青葉若葉鍬の向うに妻がいる　児玉　哲呂
母の日のカーネーションが枯れかける　藤原　千代子
ローカル線存続運動上の空　田中　芳春
梅雨冷えも旧は四月と納得し　藤原　のぼる

夫した。今日の年輩の人の知る鉄穴流し（洗桶を設ける本場、川口場中心）の発生は徳川中期である。一方この流砂を引いて大市などの沼地・河洲地帯を次第に水田化へもっていった。そこで特に大市は埋立地のため、井戸水は鉄気が多く、上水道が出来るまでは、飲料水に苦労した。従ってこの図にみるように大市西側の上・下二本の横小路はその先端即ち総持寺台地のすそにある良質の水の出る井戸へ通じていた。今日なお良質の水の出る善徳寺前、永祥寺下の井戸である。当時善徳寺も永祥寺もない時代であった。上の小路は井戸の上手に藩の凶荒にも備える籾蔵がのち置かれ（明治初年小学校の校舎となる）、下手の小路のつきあたりの台地には総持寺があった。中央の小路は新出谷と梅木の間の小路で奥に井戸があった。この三本とも今日残っている。

東側の一本の小路は、景山と岡崎の間のもので、ニッポー電気の地あたりにあった藩の年貢納蔵に通ずるものであり、その近くに水質の良い井戸があった。

現在の学校小路は明治20年代に町役場ができた時に新設され、上方屋小路は大正初年蔵屋新道が出来た時に設けられ、それが西へ突き抜けたのは新らしい。

マルホ工場横も新らしいものであり、斐伊川沿いの道は河川改修に伴い設けられたものであることは今の人の知るところ。

図をみると、六日市には御代官屋敷があり御鉄屋となっている。このころは藩が鉄の専売をしていた時代のためで、昭和電気から山本までである。のち天明年間代官所が三成に移ってから、須山氏が入りそのまゝ鉄屋と名づけて今日に至っている。その後藩主巡郷の時こゝが本陣となったこともある。

大市から六日市へ板橋を渡ると川沿いに道があり、富田屋の上と虎屋の旧宅横の小路から六日市の本通りに通じていた。

「源右ヱ門」宅は富田屋田村所有家、「三郎右ヱ門」宅は沢屋中沢所有家で、既述のようにこの二氏が六日市の町づくりの中心で、大市の開発にもかゝわったことをしめしている。

市の発生により、六日市名が、ついで大市が立つ大きい大市名がついたものである。今後その変遷を昭和20年まで続篇として書く。（筆者　横田史談会高橋一郎）

9月号伝統産業そろばんの特集、10月号より、たたら製鉄・三沢氏の続篇を連載する予定。

会員配布一部百五十円／六九一一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0-601）頒布／横田史談会　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第　124　号
（8月号）
昭和60. 8. 3
奥出雲編集集団©

雲州そろばん
国の伝統的工芸品に指定

伝統的な手工業工程と特得な工具にある価値、素朴さの中にも温かさと芸術的な美しさをもち実用性のすばらしさで日本人の計算力を高めた。

今日の日本のそろばん発生地そのための工具・工法を生みだした人々はみなこの地の人**郷土の誇る**べきそろばんの創始者は三～四代前の当地の人**播州は明治末**年に大阪をへてこの雲洲型を知り、その製作工具・工法を学んだ。

略　史

播州ではそろばん使用が盛んになって、需要が増えるのにこたえるため、生産性を高める方向に進み、量産する職人が腕の良いものとされたのにひきかえ、雲州はあくまで手工業手法を維持し質を誇って来た。その後、時代に応ずるため、問屋は手作り工具の動力化を計り、やがて工場を設けて一貫した生産体制をとり、量産にも道を開いた。特に戦後、職人の創意工夫によって機械というより、動力工具として次第に改良が加えられ、あくまで手作りの良さの維持をはかりながら、合理化による量産へと進んだから、質の雲州の名声を保った。

戦中までの一貫完全手作り職人は稀となったが、半製品から一貫完全手作り職人とかわらぬ優秀品をつくる職人も育ってきた。私は前者をそろばん手作りの名工、後者をそろばん仕上げの名工と呼んでいる。これらが将来伝統工芸士と認定される人達である。半製品も問屋工場がそれぞれの特色を一貫して出して、優れた仕上げ職人に託するから、高級品・中級品は雲州の大半である。

播州は阪神工業地帯に近いため、半製品の部品工場はそれぞれ分業専門工場で量産され、それを職人が買い集めて組立てるという仕組で、問屋は職人からそれを買求めて販売するというゆき方で、大衆向けの普通品・中級品に重点がある。

雲州の問屋は工場を経営し、半製品づくり（家内工業経営者である下請け仕上げ職人に依託する）の他工場内仕上げ職人も抱えている。従って職人の職場の環境はもとより本人の健康にも留意し、災災、失業などの保険事務、厚生事業にも力を入れている。播州の問屋の販売業務一本と違っている特色があった。珠算教育界との接触や宣伝には雲州はそのため立遅れていたと考えられるが、質の雲州の伝統の重みは強かった。しかし時代は移り、電卓の普及、学校教育に於ける指導時間の減少は需要の急速な落ち込みをみせ、雲州の販売・宣伝も転換期にあるが、新しい時代則応の拾頭も産地にみなぎっている。

指定技術の重点

完全手作り職人でも仕上げ職人でも、一丁の製作工程は平均して183にも及ぶ。むしろ仕上げ職人が上廻る状態である。183の工程の一部を二工程位複合して、合理化・省力・能率向上を試みたこともあるが、この工程の次には必ず手作業を伴う工程があって、いわゆる流れ作業式の生産は不可能である。外来者の方に説明しても、一日もかけて一貫してみてもらわぬとわからない。そして次に述べる苦心と配慮を了解してもらうと、そろばんの値段への理解がつくし、なるほど伝統的工芸品産業だと認識される。

そろばんの原材料は物理化学的製品（今日外材不足のため、普通品には木材に圧搾加工を施した積層材が枠に用いられる）でなく、自生した樹木や竹で、しかも乾燥し切った堅木である。

その上製品は計算という機能を要求され、地域や国々・季節

伝統的工芸品産業となれば

○後継者の確保難　○原材料の入手難　○伝統的な技術・技法の消滅を防ぐのが、この振興法の目的である。

そのためには

△後継者育成事業

△技術保存・研修事業の場としての　伝産会館の建設

それに付設して

伝統的な作品・工具・文書などの展示による

地域住民の保存意識啓蒙

職人の継承への意欲振起

さらに

観光資源としての利用

伝統的工芸品の宣伝販売の場　ならびに

会議場となる。

△国としては

優秀職人に対する。

伝統工芸士としての認定

功労者褒賞

のほか、

普及活動・産地振興・作品コンクール

が行われ、伝統工芸品の品位の向上とその永続も計る。

伝統産業雲州そろばん・歴史の謎ときに・川柳・俳句・短歌

の乾湿にも十分耐え、使うほど使い易くもならなければならない。そのために職人は工具と工法に苦心を払って来た。最も重要なのは珠の芯竹との適合である。珠には材料の種類が多い。竹にもある。それぞれ材質に個性がある。珠には、つげ・うめ・こくたん・したん・かば・いす等があって、国内産のほか外国（熱帯地方）産のこくたん・したん、数は少ないが、つげ・象牙もある。外国産もアフリカ・東南アジアその他と地域が異なり、樹令・生育環境が異なり樹種にも違いがある。一本の木でも中心部と周辺部があって、それらの珠の仕上げ削りするのには、全く職人の刃物をあてた手の感触即ち永年の習熟によって得た勘によるのである。均一に精製された金属材料を工作機械で削り出すのとの違いがある。

係官がなぜ機械珠より手削り珠が良いのか、合点がゆかぬとしつこく聞かれたのもこゝに原因があることがわかってはじめて了解された。

さらに珠と芯竹の間隔は機能上の根本条件となる。その上珠と珠がどう廻ってもいずれもがピタリと吸いつくように静止せねばならない。どんなに速い場合にでも。使えば手の脂もにじむ。使うほど使い易くしようと、職人はそこまで責任をもって製作にあたっている。

高級品の珠は職人の勘により作られる。経験者は幾人かあるが今、仕事をしているのは一人で、その人の妻の補助で励んでいる。後継者の養成が急務である。そのためには国の養成製度による安定収入の方途も考えねばならない。

材質によって削るために荒珠を固定する軸も異なる。鉋の刃、その小刃の研ぎ出しも異る。小刃の扱いによって珠の仕上げが異なる。

この珠は仕上げ職人の手に移って、穴の仕上げが行われる。その穴ざらへ、穴の仕上げの錐は、職人それぞれに型にも経験が生んだ特色がある。これにも小刃があって、このあたりが強くなると穴が固くなって珠がすべり易くなり、入れた感触が落ちる。あたりが弱いと逆でありその程の良さが大切である。その錐も度々とりかえたり、再生し直しせねばならない（本誌119号参照）

次は芯竹である。これにも乾燥していても、竹の成育年数その他による硬軟・密粗の差があり、一本々々削り完成が重要である。

この点も通産省の係官にはなかなか理解してもらえなかったが、わかると驚きであると、職人の腕についてそろばん製作についての認識を新らたにされた。

陶磁器ブーム峠を越したという。失礼だが陶芸家には材料選択そして混合という今日的自由さ（昔は独自を誇ったもの）がある。窯変という面白味もある。

実用品より鑑賞用として奇を競うこともできる。

そろばんは奇をてらうことはまずない。速算にたえる実用性である。1/10秒を競うに耐えねばならない。実用品のため特殊な場合をのぞき、安価の要求は強い。

こうした職人を大切にし、後継者を育てることのできる地盤を確立せねばならない。それは職人のみではできない。口はばったいことだが、業界全体でとりくまねばならない。それを国指定は期待し援助するのである。

大講演会とシンポジウム

「中世横田庄は五百年間中央とつながり今日の横田の基盤を築いた時代である。それを見直して明日の活力に」

（源氏・北条氏・北朝足利氏・山名氏・京極氏・三沢氏・尼子氏・毛利氏の時代）

いきいき横田ふるさと事業の一貫として、横田史談会（創立十年）が担当し、三沢・庄原・西城・東城・新見及び周辺・日南の各市町の研究会、島根県中世史研究会の協力を得て行う、「第4回陰陽郷土史研究会」とします。**11月17日（日）予定**

講師陣の交渉を終りましたので予告いたします。

講演「陰陽の舞台から横田庄を」明らかにする＝「横田庄の全体像」

「戦国武将の対立相克の中で」「陰陽経済の流通特に鉄」「陰陽庶民仏教の弘通」

以上4名は**広大②島大①島根女短大①**の教授陣、他に新見・日南からも発表。

シンポジウム（午后四氏によって）この種の企画としては中国地方初めて乞期待

教育上におけるそろばんの見直し

一昨年の京都での国際珠算教育シンポジウムで、世界的数学者広中平祐教授は、「小学生の教育でそろばんを使うと、足し算、引き算、掛算といった数計算の観念が非常にはっきり頭に入る。そしてそろばんがなくても暗算にプラスになる。いわゆる演算の原点をはっきり身に着ける道具である」と力説された。

これをアメリカでは重視し、日本人の計算力能力の確さはこゝにあると、南カリフォルニア大学では珠算教育センターを設け、研究を進め実効をあげ、全米へ波及する勢である。その他東洋諸国はもとより、ヨーロッパでも研究や実践が進み、計算能力のみでなく能力開発への効果も指摘されている。

国内でも一流企業では入社2年以内に3級以上を必ず取得させるところもあり、電卓時代の基礎であるとともに、その欠点を補うものとして重視している。

玉選手も投手時代も監督になっても常に珠算式暗算で利用しているという。文部省も教育上における見直しをはじめている。

歴史の謎ときに挑戦してみませんか

三沢の蔭涼寺と僧侶で大名の安国寺恵瓊（えけい）

謎ときの長い楽しさ

仁多町郡村にあったという高田寺について知ったのは、戦中三カ月松江での長期研修中だった。40数年前、焼ける前の県庁南側の古びた図書館であった。鳥上の青年との読書会用の巡回文庫借用に行った時、旧島根県史をめくったら、「高田寺根元録」があったことを知った時だ。

戦後横田の大同書店で、日野郡から出たという古本の「旧島根県史」の重要部分が揃っているのを見つけたが、2,000円という月給一カ月分の値であった。漸く町にたのんで求めてもらい。読むとすぐ、根元録を亀嵩方面の人に尋ねるが所在不明である。

それからまた10年たった布勢中学勤務中、担任のない教頭の家庭訪問中の仕事として、社寺・旧家を訪問して資料集めや、聞きこみをしてあるいた。中村の神官多根さん方でこの話をすると、私が所持しているとのこと、郡村の大領神社の世話を私の縁続きの者がしているという好みで、門外不出となっているがと断りながら貸出してもらった。その夜宿直を交代してもらい、根元録や神社昇格関係の文書をすべて写しとったら夜明となったことをよく憶えている。それから25年余これとのつき合いが折にふれて始まった。

奥出雲の古代・中世史にとってはみのがすことができず、岩屋寺研究でも関連があって重要となって来た。（今もって私は「三処郷」「高田庄」については未解決のことが多いが）

しかしそれに集中することができなかったが、中世史研究会が横田で開催されるにあたり、56年11月号の奥出雲79号に、多根氏の了解を得て、全文と研究の中間報告をのせ、57年2月の全82号に続きを載せた。

その後「出雲国風土記研究会」の世話人とつい約束をしてしまい、59年暮に不満足ながら（一・二点不十分であるが、傍系記事である）、その後の調査をまとめて脱稿した。機関誌「風土記論叢第2号」に、150枚の長いが拙い論文を載せてもらった8月には発行される。調査書はすべて自分で支弁したから、至らぬものでも、値千金という満足感がある。大いに検討して指導頂きたい。

蔭涼寺と文書

さて本論に入るが、気にはなっているが、時間的余裕がないので、一応のべて、どなたかの挑戦に期待したい。私の知る限りのことは、踏み込んで頂けば提供したい。

これの追求によって、蔭涼寺と毛利氏・三沢氏・僧恵瓊との関係が明らかになり、天正19年（1591）前後の歴史が明らかになり、意外な興味ある事実もあらわれるかも知れない。

蔭涼寺は当時は妙厳寺といった。現寺名になったのは、出雲国内に同名が多く、天明2年（1782）に改称している。従って貞享5年（1697）春に五反田村（現横田町の小字）の野々村六兵ヱが作った、仁多33番札所めぐり御詠歌では、打どめは老松山妙厳寺となっている。

蔭涼寺の古文書はお願いしながら実物までは見ていない。仁多郡誌をみると、毛利氏配下に

斐の上川柳七月抄

過去の事みんな忘れた事にする　太田亀甲
眠れぬ夜障子が少し明くなる　若槻白馬
奥様の井戸端会議は今茶の間　目黒甲楽
よく咲いてくれたとさつき褒める日日　松浦亜以
大事で無くてよかった物足らず　松浦木公
記念樹も古木も消えた圃場整備　佐々木千世
茄子胡瓜よその畑も気にかゝる　児玉哲呂
雨ふってからみ合ってる豆のつる　安部春恵
夢まぜて子の風船がふくれ出す　松田牛歩
このちまき行く先々で味でもて　真綿よし子
町議選早くも旦那火付役　渡辺好之
くしゃみひとつ誰かが噂をしてくれる　藤原千代子
夏祭り待つ子相手の針仕事　高木白虹
くつろいで梅酒一パイねむりこけ　安部正子
悪戯をほくそ笑んでる老夫婦　藤原英生
プライドが淋しい時の邪魔をする　藤原のぼる

八月句会

栗林の歩道を徠ぬ梅雨の傘　浅野としお
蜘蛛の囲は顔蔓草は脚絡む　岡田蹊花
濃紫陽花別れ啼合う親仔牛　岡田麗水
法被着け一瞬児の顔祭顔　小川あきお
一日を謝す夜の祈の遠河鹿　門脇花子
羅の和服姿や京訛り　高木白虹
眠る幼児の枕辺そっとホタルかご　新出谷一華
白さつきこぼれて終る身のほとり　錦織富江
うす紅のほのかに匂う朝曇り　峯石美代子

なってからの、三沢為清・為虎親子の四通、毛利氏の直接支配下に入ってからの二通、徳川時代初期の三通のほかに、安国寺恵瓊のもの二通がある。

ずっと下って徳川中期半ば、三沢氏時代を180年すぎた、宝暦14年（1764）に、藩へ書出したものをみると、旧布勢村馬馳から現木次町旧温泉村、旧三沢村の、末寺辻堂など40余りがその支配下に属している。また県指定文化財となっている白隠禅師（貞享2 1685～明和5 1843）――出雲にも来国し松江の天倫寺にも滞在した。のち南宋画家のわが国における祖池大雅が、その足跡を慕って来ている）の真筆とされている「辺微意知吾」（へびいちご）一巻がある。備前岡山藩主池田氏に近侍していた時、求めにこたえて書いた訓戒の書である。白隠は徳川中期に、説教と著作を通して民衆教化とした、第一流の臨済宗の高僧で、これらの由来も明らかにする必要もある。

恵瓊の妙厳寺あての文書二通の年が不明であるが、内容はこの寺から訴えでたことに対し、上洛前の多忙のため、来春まで待たれたい旨のことがしるしてある。後述するように毛利輝元宛にしたためたものであろうか。

毛利氏の直接支配下になって岩屋寺が（元備後神辺城主杉原将右衛門広亮が入り、横田141石に大減石されたためであろうか）、寺領のほとんどを失い寺僧の芸国に去ってからのことと思われる。三沢氏にゆかりある寺であったから、三沢氏を介したものであろうか。今後の探究者におまかせしたい。

安国寺恵瓊

安国寺は夢窓国師のすすめに各国に設けられた。天平時代の国分寺を模したとの説もあり、幕府は守護統制にも役立たせたともいわれている。出雲では松江市竹矢町の安国（円通）寺という守護は佐々木氏であろう。

恵幕は（生年不詳～1600）安芸の安国寺に入り、のち本山東福寺住持となった恵心の法弟となる。恵心は毛利一族の帰依をうけ、毛利氏と中央や尼子氏ほかとの和平交渉にも奔走した。恵瓊も師の代理から、やがて独立し使僧（外交僧）として活躍する。そして師の跡をつぎ、さらに備後鞍の安国寺住持もかね、遂になくなる2年前の慶長3年本山安国寺の住持となる。この間天正6年将軍足利義賢と織田信長の不和調停のため上絡し、木下藤吉郎（秀吉）を知り、将来天下とる器と予言している（吉川家文書）。そして鞍の安国寺を拠点に小早川隆景と協力し毛利輝元の東上策を進めた。秀吉の水攻めで備中高松城が危くなった天正10年6月、慎重派の小早川隆景の和平論によって、輝元をして秀吉との講和に奔走し成功させた。これが秀吉の天下制覇を有利にし、豊臣の直臣としても働き、朝鮮出兵にも従い、中国九州他であわせ6万石の知行を得る一大名ともなった。出兵の折毛利氏の目付と豊臣氏の奉行を兼ていたが、その武将党の吉川広家（毛利一族で富田城主）と衝突し、のち関ヶ原の戦では文吏党の石田三成と結び、家康を討つため輝元に味方するが、毛利家内部の広家らの裏切りで敗れ、石田らとともに斬られた。年63とも64ともいう。

三沢氏と高松城水攻め

奥出雲3号にはこの戦における三沢氏の動きをくわしくのせている。三沢氏を中心とする動きが、毛利方陣営に大きい動揺をもたらし（除徳太平記にくわしくはゆずる）たという。戦国時代の常であるが、この間の動きをみても三沢為虎の戦国国侍としての才覚をうかがい知ることができる。

こうしたことを記録する、毛利家、小早川家、吉川家などの文書、あるいは軍記書を渉猟すれば標題の蔭涼寺上訴理由も明らかにできるであろう。

（横田史談会　高橋一郎）

八月のうた

戦ひをひたに憎みて来しことも老ひのきざしか薄らぎにつつ　常盤はるまさ
覚束なき手元ながらも我れにきて粽巻くとて孫も真似るる　景山悦子
音もなく葉蔭に入りし雨蛙指で追ひつつ夕の菜を摘む　小早川恵子
紫陽花の紫の花匂ひ来る人なつかしき追憶蘇る　岡田時子
九九算をくりかえし言ひつ寝し孫の枕辺にホタルは夜すがら点る　佐藤喜代子
草帚持ちて追ひたる幼な日の顕ち来る夕べ蛍群れとぶ　野村節子
宮様もお憩ひなされし館にて歌評交され刻は移れり　藤原信子
身を伏せて石橋十一くぐり来ぬ舟ゆるやかに柳川くだる　松浦愛子
この山に恋に泣きたる昔あり今年も朴の花に逢ひけり　永井弥生子
臨終の迫りし義姉（あね）は目を閉じて呼吸はげしくうめき　安部夕波子
もらしぬ

毛利氏は横田以外の545石を亀嵩に入った冷泉民部に358石を与え、のこり187石を58人に分け与えたから、蔭涼寺も同様な立場になったことが上訴の原因であろうか。すると天正19年三沢氏が安多くが四散した。のち徳川期に入って松江藩に上訴もしている。

が、平和を祈願し、元弘以来の戦死者の遺霊を弔らうために、暦応元年（1338）ころから約10年かけて全国66カ国2島に、それぞれ設けたもので、光厳上皇（北朝）の院宣によって、安国となづけられた。大和をのぞいて

会員配布一部百五十円／六九一一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江01601）頒布／横田史談会　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第　125　号
（9月号）
昭和60. 9. 7
奥出雲編集集団©

奥出雲のたたら製鉄史⑨

新資料にもとづく特に東南部のその技術・経済・社会・文化の総合史

中世から近世初頭へ㊦

毎日のようにテレビジョンに登場する侍のチャンバラ場面を見て、殆んどの人々は、侍が刀を抜くのは御法度（禁令）であったことを忘れられているだろう。十手というものは、抜刀御法度のため刀を鞘のまゝ振廻して、斬るぞとあばれる元侍の浪人どもを取締るため、抜刀現行犯で逮捕するため、十手を用いて鞘を引きはずして「御用」とすることがねらいであったという。チャンバラ劇を創作したのは明治中期のさる講談師で、大いにあたりをとったという。こうした誤まった歴史認識はわりと多い。戦国大名と国侍（三沢氏など）とのつながりも誤まられていることが多い。徳川時代はかっての国侍もすべて、封建大名（藩主いわゆる殿様）から扶持米を給せられるサラリーマンとなった。転藩はむづかしい。

ひたすら儒教精神を支えとして忠節これつとめたのである。その前の戦国時代は、戦国大名と国侍はともに領主であった。力関係からいってみれば諸条件による契約による主従関係であった。これを考えないと、中世史も見誤まる。

ところが最近高まりをみせた「たたら」についても、一般の人はもとより、学問の世界でもその例が多い。本連載でもすでにいくつか述べてきた。それは唯単独に論じただけではない。これから連載する各種事実と密接に関連させて考察したものである。本号では「鉄穴流し」について在来の説について疑問を出し、奥出雲の実情を明らかにする。

砂鉄採取について

8世紀の次の国の風土記には

出雲・播磨は　川砂鉄
常陸　　は　浜砂鉄

である。それから時代が下るとその浜や川の砂鉄のもととなる産地を求めて川をさかのぼると、風化した各種花崗岩や安山岩の山にゆきあたり、それを堀り出して水洗いして砂鉄をとり出すことを考えたのである。日本は火山によってできた列島である。至るところに火成岩即ち花崗岩、安山岩類があるから、各国ともに砂鉄を産する。砂鉄の採取のはじめは、

川や浜で　これは今日までも続いていて、自然流砂の斐伊川中流の木次、皆生・大社・江津などの海浜で。つぎは

山を堀って

㋑谷川で洗って砂鉄をとる。
㋺谷川へ流して、下流の砂の堆積地で砂鉄をとりあげる。
㋩谷川へ流して洗い、その下にむしろを敷いて砂鉄をとどめる。さらに下流の砂の堆積地で砂鉄をとる。

山を流し堀りし

㋥風化した山肌の下へ、谷水・井手水を引き、山肌を崩して流し、㋑㋺の方法を用いる。これは容易に大量の土砂を流すことができるから、川砂鉄の採取も多くなる。
㋭やがて池樋をつくって、勾配をゆるやかに、距離も長くでき、むしろによる採取量も多くなる。
㋬ついで洗樋を幾つももうけた。そこで採取率はさらに多くなった。

諸文書からの総合による採取方法の発達段階の推定である。次頁の絵は、宝暦4年1754・大阪で出版された「日本山海名物図絵」のもので、横に「浅い谷川にむしろをしいて云々」と説明があり石見・備後の国名と備中の古代の鉄のことがしるしてある。当地で㋭㋬の方法が発達するのは元文初年1736ころで、急速に普及するのは、宝暦11年、下流農民の要望も入れて、鉄穴の制限をした「鉄方条目」制定以来からのようである。あとで詳述するが、解禁された寛永13年1636からでも、たたら吹きは毎年行われていないし、それも炉内の条件がよくなり、労働によい秋のみたたら操業は行われている。そして農閑の秋から早春にかけて山を崩し、夏の間に川砂鉄をとりあげている。

延宝2年1674ころからは、鉄買上制廃止のため、生産意欲がでたり、操業体制が整いはじめたであろうか、毎年秋に操業するようになる（藩へは運上銀制で、操業月数に応じて納める）。

元禄4年1691に天秤吹子となると、高殿も完備し冬の操業も行われはじめる。そこに目をつけた藩は買上制を復活した。するとまた、毎年操業しなくなる。

砂鉄採取量が多くなる、元文元年1736ころからは、年によっては年間10カ月の操業も行われる。

別途に詳述するが、このころから地下構造（床釣り）が本格化する。安永3年1774からは毎年12～13（閏）カ月操業となる。以上は大馬木の山本・杠と、湯の廻絲原の毎月の記録による実

際である。砂鉄も川砂鉄がはじめは主であって、半分が山砂鉄となるのは宝暦年間の終りころである。

桶口・表ー杠（元は小池）家の文書の検討

それでは流し堀りはいつごろを起源とするかであるが、表ー杠家（元和7年1621から小池を改姓する）によると、（当家については本誌90 91 92 93 95未完や100号参照）

㋑天正十九、七月晦日、井上本助（毛利家家臣）より、29代大催・二郎右ヱ門への「覚」の中の9項目に次の二つがある。

一、鉄穴たゝら之用内々支度し而置候へと可申付事

一、鉄広島へ送り候へと申越候はゝ日限無相違可被申付事

また袖判文書（中世の古文書で、文書の袖ー右端ーに花押をもつもので、多くが認証の意味をもつもの）が三通ある。

㋺横田村之内ひのくち鉄穴之儀如前々其方へ預り置候　何方よりいかやう申分候共　気遣者間敷候　其為一筆をまゐらせ候依如件

慶四（1599）三月二日

野　津　兵　へ

大催　甚十郎殿

㋩横田六ケ村河こが年之儀前々より有来候ことく可被申付候

相違有満じく候　恐々謹言

卯月二十三日

長弥左ヱ門

祝猪右ヱ門

大催　甚十郎殿参る

右の二通は30代甚十郎に宛たもので、㋺は毛利藩領時代。

ひのくち鉄穴とは砂鉄採取場のことであり、六ケ村河こがねは、流し出した土砂を川原に堆積させ、沈殿した砂鉄を採取することを言ったものである。当時斐伊川の横田盆地内は堤防もなく、出水のたびの蛇行にまかせていた時代である。従ってその川床は巾が広かった。（くわしくは横田町誌参照）斐伊川の河こがね（砂鉄）採取のできたのは、川上から、竹崎・大呂・五反田・樋野口・角・横田の各村々の六カ村である。その後から最近まで、鉄穴による砂鉄採取の行われたのは、竹崎・大呂・五反田・樋野口とその奥の蔵屋・角・原口・稲田の各村で

鉄穴を堀りそして流す（下にはむしろ）

イベント（偶発）的世相

あれよあれよと思っている間に、どこでもかしこでも、わいわいとイベントという言葉が氾濫し出した。次々と新らしい言葉それも外国語をさがし出して、それをかぶせないと中味の新鮮さが訴えられないらしい。土着の芸術なり伝統行事、個人の生涯かけた仕事の結果をみて、地域づくりの話題にとり入れて歩るき廻られる○○所長さんが多い。そしてイベントだといえば、すぐさまそうなると思いこまれるらしい。とりあえずこゝ10年間の新聞切抜帳（スクラップといえばよかろうが）をみると、2～3年で言葉は変るが、中味は変っていない。どこかの真似である。地域の人々の心の中に、日常の生活に根付いていない。すべてが商業主義にふりまわされている。がそうばかりも言ってしまえない。高令化の進んだ結果の現象の一端でもある。

自発活動より、動員割当請負団体化した婦人組織が、変質し解体した影響もある。県内外各地の各種の趣味グループ、研究グループの高令化を聞く。昔は若い者は高年層の中に恐る恐るでも入って指導をうけ、日常生活もともにして参加もしていた。

今日は自分達でやるのだと理想が高いのはよい。過程をみず過程なしで、高い結果に一気にかけのぼろうと、遠くの肩書きのある人を招いてそうだと自答する。役員の交代もはげしい。地味なこと、軌道の経続では役員の資格がないらしい。

運動もよろしい。多様化したといっても、9000人の人口の一部の人がやるのであるから、日曜日はしょっちゅうである。プロ的意識ならよいが、動員回数が多いから組織の代表にして応援者も動員せねばならぬ。無理がいかぬことがかんじんだ。前はすきなものが自然にやっていた。全く商業ベースにのせられている。町の日常生活や生産を無視した催しはイベントと称して進められる。イベントとは偶発的なできごとの意味である。事件である。この言葉もいつまで続くか。行先は見えている。ボタンを押せばそこに出てくる結論のみで生きる操作人間が生れ

それらの村々の流した砂はさきの六カ村の川床に堆積したのである。この文書の当時は川に堆積した砂をとる時代であったから、需要は少なくても後世と違い歩留りが悪るいため、相当流している。それは前々号123号で述べたことがそれを裏書きしている。

杠家家譜ではこの二つの文書を同年の慶長4年と誌しているが、翌5年には徳川時代初代の出雲藩主として堀尾吉晴が来国しており、その翌年当地方にも巡国し、坂根（広島県境）でたたらを吹いていた、村下の吉兵ヱと岩坂の新右ヱ門にその労を賞して銭を与えている。小規模なものであったろう。砂鉄の量から考えても自家用たたら程度であったであろう。鉄を重要視していることは慶長12年1603に鉄奉行津井猪助を亀嵩の槙原に駐在させている。（毛利氏時代郡内上阿井村と大呂村において、その鉄奉行暗殺事件があった－本誌42号参照－ので、堀尾氏は仁多郡の頭百姓をすべて富田城下へ集めてしばらく人質としたという）。そこで後者は当地を巡国した堀尾氏が、当郡内最高の家格をもち実力者である杠家の既得権を安堵（認証）したものと考えたい。後になるが杠氏が大催（既号参照　横田庄の中心馬場八幡宮（今日の横田八幡宮）の神事司祭権を背景とする地方支配の実力者）として、自己の所有する広大な水田のうち、八幡宮祭典用として10石余（25俵）の免地を別にうけている。

また慶長10年の八幡宮の遷宮には、棟札には国守は堀尾吉晴であり、大催は小池甚十郎吉久（慶長14年没）である。なほ寛永14年の堀尾家給帳には600石どり家臣で重臣馬廻りの中に、長瀬弥右ヱ門の名がある。㊀の文書には虫食いがあるので、署名者はこの人物とも考えられる。

ところが松江城を築くにあたり、鉄穴堀り流しの土砂が多いのが（当時の量は幕末期から明治初年斐伊川水系で、20余名の鉄師がそれぞれ、年間操業し鉄師が数カ所から十数カ所の鉄穴流しをした時代ほどの量よりは遥るかに少ないことは既述のことで判断できる。）下流の簸川平野を拡げ、宍道湖の防備上の用を損うのを恐れて、14年その

初秋のうた

盆過ぎてとみに秋づく朝戸出は野良着の下に肌着を着たり　常盤はるまさ
明日も亦雨は降らぬらし西空は真紅に燃へて陽の没らむとす　野村節子
灼熱の峻しき山に墜落の五百余人は日航機とともに　岡田時子
肩おとし遺体確認くり返す遺族に今日も夏陽が強し　佐藤喜代子
悠然と動かぬ墓蛙を越しかねて吾れ庭奥に立たされており　小早川恵子
紫蘇味噌のわがつくりしを上出来と子らに書き添へ　小包おくる　景山悦子
盆提灯軒にかざりて目をやれば稲田の空を蜻蛉飛び交ふ　戸屋暎子
落葉ふみ秋に逢ひたくて山行けば幼な記憶の径おぼろ　宮廻愛子
じいちゃんの顔は四角よと孫書きし似顔絵残し夏は過ぎゆく　松浦愛子
かろやかに帷子着たる母杳し露草の藍のふかき朝に　永井やよい子
還らざる人を想へばせつなくて夜の酒場に孤独をさらす　安部夕波

つゝある。主催者の自己満足だけの低俗な催しものも多い。やるきを起すというが、その原動力はどこにあろうか。

特産品づくりも、一村一品運動もイベント（偶発的）的である。しばらく依頼をうけて松江を中心に県内各地の特産品、土産物を調査した。旅行帰りに沢山くばるものときめて、500円見当にしぼってみた。買って使ったり食べたりしなければならない。手当はないから、私の年金生活の小使の範囲内である。その物を月に四回位は出かけて訪ねる松江の各種職場等に手土産として持参し、平素の御礼にとお茶の時間に食べて頂く。そしていろいろと批評を聞いた。時には製造元もたずねた。原料、製法の工夫、各種包紙・箱、説明書の紙の質、意匠、文字の筆者に至るまで聞いた。すべてが各専門家の協力でできている。

だから好評である。長年の積み重ねである。イベントではない。補助金にありついたからやったものでもない。全く脱帽最敬礼をしたくなる。幸にいくつかの委員の末席に列して正当旅費が頂ける。その一回分で月に三～四回は松江に出られる。中食はそばですまさねばならないが、味みをかねて心安くもなれる。展示会諸芸術展、演奏演劇も見聞きできる。島根牛の歴史も仁多郡が築いたもの。その源は100年前である。さらに徳川後期にもさかのぼる。一時の指導者の力のみではない。個人の力である。「島根県ふるさと伝統産業」のことに柄にもなくかかわらせてもらって6年を越した。100年以上の歴史がないと指定にならない。調査書をみると、全く個人の独力による（補助金のない）若心の結晶である。黙々としてつくり最底生活さえ長く続けた人が多い。心意気が根本、もうけは長い間の苦労の結果。昨年からおくり盆のやり方に規制がされた。まことに本末転倒のことである。あとをきれいに美しくすればよいことである。長い伝統のある祖先の水辺のたま送りの行事であって、仏いや○○像をつくって魂の入らぬイベント時代のこととは違うもの。

来月号は一億円で開館した東北の**鉄の歴史館**の紹介をしよう。本場の島根県の研究や各方面の動きは低い。全く当地の株をとられていることを知って驚いた話を。（蓬　頭　子）

斐の上川柳八月抄

安部正子
今日もまた元気な証し多種多様
老先生教え子の講演聞きにいき
孫三つ我が家のスパイここに居る
カナカナが鳴いて夕方忙しい
やせ薬売れるお国で味を云う
雲行きが怪しくなってゼロに下げ
だまし合い許しゆるされ夫婦坂
この相手軽いと見たがしてやられ
長雨にキャベツ高嶺の花となり
ボケという文字が気になる下り坂
ぎらぎらと舞台に上るメーキャップ
夏休み成長みせて孫集合
手間賃も出ぬがと森の手入する。

太田亀甲
若槻白馬
安部春恵
松田牛歩
渡辺好之
高木白虹
松浦木公
田中芳春
松浦亜以
藤原千代子
佐佐木千世
藤原のぼる

九月句会

釜山港遥かに望み涼をとる　浅野としお
一日終え安堵の鎌砥ぐ夕ひぐらし　岡田蹊花
蝉時雨午睡の病棟静もれり　岡田麗水
雲の湧き緑の明暗原爆忌　小川あきお
夏帯をきりっとしめて踊の輪　門脇花子
出揃いし稲穂にそそぐ蝉時雨　楠房子
沈黙を破る原爆地獄絵図　高木白虹
ハマナスや北漠の浜彩ちらし　新出谷一華
人の波押されて覗く金魚店　錦織富江

停止の意向をしめした。この年甚十郎は没し、子が幼いため実弟七良右ヱ門（吉秀）が大催職をついだ（のち横田町に分家した。20数年前まで六日市に末孫居住）。16年松江城に富田城から移ると翌17年、この水系の鉄穴堀り流しを禁止した。その後18・19年と願ったが許されず、2年後の元和2年1616にも聞き届けられず、20年を経ることになる。しかし自然流砂に堆積する砂鉄による自家用たたらは、小規模ながら、しばらくも細々と続いたと思われる。

小池家では甚十郎の娘に大馬木の山本ー杠家より養子をもらい31代大催職をつがせたのは元和7年で又右ヱ門久如といった。

㈡横田六カ村之川こが年之事前々より有来候ことく可被申付候　相違有間敷候　恐々謹言

十月十五日　岡田半右ヱ門
神野才右ヱ門
大催　又右ヱ門殿参る

この文書は杠家家譜によれば、元和6年としてある。この年養子縁組約束が成立し（5年に申込み、改宗・改姓を条件とされたのを、承諾したために）、翌7年に婿入りしている。この年の八幡宮の遷宮棟札には大催杠又右ヱ門久如とある。藩主堀尾氏から、先々代に続いて（先代は中継ぎ）　既得権を安堵されたものとみられる。（小規模なたゝらはしばらく川砂鉄によって経続していたから）　別に考えられることは、禁止より25年たった寛永13年藩主京極氏によって解禁されたと同時に、古格に準じ杠氏が安堵されたとみることもできる。

又右ヱ門久如は翌14年に中継ぎを終えたとして33代又右ヱ門久胤に大催職をゆずっているから、又右ヱ門はこの33代又右ヱ門かもしれない。（堀尾家世嗣なく断絶、寛永11年京極忠高が入部した。直ちに解禁を申入れて仝13年解禁された。京極家にも世嗣なく、忠高の没により京極家廃絶す。寛永15年松平初代藩主直政が入部する）　松平直政の給帳によると、700石とりの侍に岡田半右ヱ門の名がみえるから、33代又右ヱ門が直政から認証されたとも考えられる。

京極氏が寛永11年から簸川平野で堤防工事を行って水田保護を打ち出した。その最中の13年に、下流農民の反対を押し切って（上流農民は鉄穴堀流しや、炭焼などができなくて、賃仕事がなく困窮のどん底にあって嘆願を続けた）斐伊川水系の鉄穴堀流しの解禁をしたのは次のような事情が考えられる（堤防工事は忠高没後に完成、京極若狭守の若狭を名づけて、若狭土手と呼んでいる）。

鉄生産の重視はかわらない。松江城のための鉄需要が一段落すると禁止したが、せまい飯梨川水系のみの在来の鉄生産量を以ては需要に応じられなかったから、乱堀りが行われた結果、20年余りの間に山肌の露出はひどくなり、寛永12年1635豪雨による山崩れとなった。そこで京極氏の入部とともにはじめた奥出雲農民の嘆願も、翌年かなえられたのである。そして鉄穴堀流しが直ちにはじまり翌14年秋から、山本ー杠家ほかがたたらを吹きはじめる。

次回から近世編に入る。先の事情を検地帳や、たたらの記録で裏付けして論をすゝめる。鉄穴流しについては学者の推定による在来の説に疑問を出したことになる。（高橋一郎）

会員配布一部百五十円／六九九ー一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0ー601）頒布／横田史談会　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第126号
10月号
昭和60年10月5日
奥出雲編集集団©

奥出雲を護持するため尼子氏の抬頭に抵抗し、その衰退に加担した

仁多郡西部の地頭飯島三沢氏物語⑧

応仁の乱1468から抬頭した尼子氏が文明16年1484失脚するまで㊦

東部奥出雲で三沢城を本拠として、尼子氏と匹敵する実力をもったのは三沢氏で、出雲国人中の最右翼にあった。尼子氏が勢力拡大をめざせば、既に述べた如く勢力を扶殖しつゝあった三沢氏も、その発展を企図するし尼子との対決は当然のことであった。応仁2年三沢氏の代官福頼氏は岩坂・外波の合戦で討ち取られている。京極持清も応仁2年と思われる清定あての感状の中で、前回㊤でのべたようなことを書きつけているほどである。これに力を得た守護側の清定は、守護持清に三沢党の知行差押えを要望した。一度知行を押えられた人々に、多胡（出雲郷か野波で京極氏の被官）・山佐（山佐の土豪、かつての出雲守護佐々木氏の末孫）・佐方（三沢と同門の三刀屋一族）・飯沼（三沢と同門の伊那源氏で加茂）・下笠（能義附近）・野波（八束郡）・小境（平田市）の諸氏があげられる。地域は出雲東部・中部・西部の広範囲で、これらの頂点に立つ三沢氏の有力さが知られる。

応仁2年ころは出雲安定のため持清は三沢氏の討伐を考えていたが、この時点では尼子氏の勢力拡大を好まなかったようで、知行を押える指令を出した時にも、国人たちが叛旗をひるがえしたのは、何かいわれがあるからであろうと、暗に清定の行動を非難している。

この年8月持清は没した。嫡孫の孫童子は幼少であったので、幕府は出雲のことを京極氏にのみまかせることができなくなった。翌3年の中央の戦局は膠着状態が続いた。この年大社と日御崎社の永年の論争に対し、幕府は守護孫童子と清定に判決執行を命じている。守護幼少なるが故とはいえ清定は、はじめて実質上の守護権限執行者となった。しかし翌4年3月の文書によれば、幕府は両社論争に対する尼子氏の実力権限の及ぶことの弱さを認めたか、牛尾・松田をはじめ国内の伝統的有力国人衆との合力によることを要請して命じている。この時守護の名がみえないのは、守護が孫童子から政経（政高）に交替したころであるから、その混乱のためだといわれる。この不安定な時であったから、幕府は出雲国内にその権力を発動させるには、直接把握した国人層を個々に把握せねばならなかった。その後守護職は政経の保持するところとなって一応安定した。

文明5年1473中央における争乱の東西の両雄が没して、乱（応仁の乱）は峠を越したようであったが、政経の実権行使は、直接の家臣団の分裂によって、また苦しい立場に立つことにもなった。

翌6年、清定は嫡男又四郎（のちの経久）を上洛させ、これまでの所領を守護京極政経から確認をうけた。富田城下の飯梨川流域や、その東方で恩賞として与えられた安来庄・利弘庄は穀倉地帯でもあった。松田氏のあとをうけて、安来庄代官職・能義郡奉行職と、美保関代官職を得た清定は、それらを使用して余分に段銭その他の諸役を申し付け、出雲国内における飛躍の基盤を固めようとした。しかし郡内の土民はこれに全面的に協力しようとせず、永年の松田氏の支配下になれ、うけた恩恵の豊かさを追慕し、首謀者が出現して采配をふれば、一揆に発展する情勢下にあった。

遂に文明8年4月14日に発した土一揆は火だるまとなって、遂に国一揆へと発展した。清定は不意を突かれたがわずかの手兵で奮戦、ようやく撃退した。が多数の被官人などを失った。

このころ清定は、京極家領である大原郡立原（加茂）を所望したが、三沢信濃守もほしがっていると逃げられている。

この一揆の黒幕は本領の中心部をもぎとられた松田備前守の同族とみられる松田三河守であったとみられる。三沢叛乱の後所領を差し押さえられた下笠氏も、この時尼子方に属していたが、心服せず松田と密約して一揆蜂起へと進めたものと思われる。それは清定の奮戦により一揆の形勢が悪くなると叛旗をひるがえす機を失ったからであろう、逃亡している。

守護政経は清定の国一揆鎮圧後直ちに感状を与えている。（経久19才、政経は出雲に入国していたもののようである）しかし清定も虚々実々で守護に協力する一方、美保関公用銭（舟役運上銀が主で、舟役とは中世において舟一隻ごとに課した税で、勘過料、櫓別銭、帆別銭など同性質のものもあり、荷にかゝる駄別諸役などもあった）の守護への上納を懈怠しはじめた。

父清定の死で経久は文明10年か11年家督を相続した。文明11年京都の清水寺再興奉加帳には、

三沢氏の実力を再評価すべき時代である

経久は湯・土屋・佐世・隠岐ほかの国人11の諸氏とともに20貫文宛を進上している。(2〜3の諸氏は妻も20貫文宛)三刀屋氏は60貫文とある。この数字をみても国人衆の実力の強さがわかる。

話は少し遡るが、応永13年1406の文書によると、出雲国においては杵築大社・神魂社・安国寺などは段銭免除(段別に賦課した税)をうけていた。それが次第に拡大方向にあって、文明年間には守護が幕府に勤仕すべき諸役まで滞るということになったので、文明14年1482に段銭免除棄破を命ずる幕府奉行人連署奉書が、守護政経に発せられている。それと同日付でほとんど同一文言のものが、経久にも充てられている。ここで尼子氏が守護権限代行者としての地位を保持させられ、実力も上ったとみられるが、実態は空疎なもので、権限を押し進めて寺社・国人衆に対する段銭の給与寄進を行わせると、結果は逆にそれらの所領に対する守護権力の及ばぬ状態不介入を招来したのである。

すると幕府から諸役免除、守護不入の特権を与えられている、有力寺社や奉公衆(幕府への)の所領の上に、これらが大巾に加わって、守護はもとより在地の代行者尼子氏さえも、守護権執行の及ぶ範囲が狭くなった。

岩屋寺に対して三沢氏は文安元年1444、寺領の内裏段銭(横田庄は禁裡御料所)を独自に免除している。これは三沢氏が自分の所領内や、自分が地頭請所としている横田庄内の岩屋寺領に対して自由に振舞っていたことを示すもので、国内の有力国人間にも同様なことが少なからずあった片鱗とみられる。

憶測してみると、それは伝統的有力国人衆の力が強くて、出雲国内に於ける守護権力体制が未成熟であったことに由来するとともに、尼子氏の実力に対するあなどりもあったであろう。さらに後世の尼子氏の動きとも考えると、尼子氏が周囲の諸氏と融和を計って開発や所領の拡張を計るという方向でなく(諸氏即ち諸国人衆は長い間かかって兵農一体で開発と拡張を計って地盤を築いている)、かえって拡張へのあせりを武力行使優先によって押し進めたため、国一揆などとは変った形で、段銭の徴収人としての尼子氏への抵抗という形であらわれたとみるのは考えすぎであろうか。

ところが2年後の文明16年1484 3月、経久は幕府から寺社本所領押領、御所修理料段銭難渋等の科で追放される。(資料は乏しいが)これは京極氏の領国支配の性格や機構の未熟さによる、前述のような国内事情からの当然の帰結であったであろう。尼子氏の横領の科というより、経久は徴収に難渋もしていた。

そこで在来の文明18年元旦の奇計による経久の富田城奪回の物語は一片の虚構にすぎないことはいよいよ確実となる。

尼子氏討伐の命令をうけたのは、出雲の中・西部の国人中の三沢・三刀屋・浅山(朝山)・広田・桜井・塩冶・古志の有力者で、東部に進み尼子氏を追放した。その結果、三沢為忠・牛尾氏に対し守護政経は賞を与えている。また10代三沢遠江守為忠は、笠置文書によれば三沢氏が、この成功により笠置氏に新給として所領を与えている。このことは三沢氏の主体的な行為である。さきの岩屋寺領への段銭免除とともに考えあわせると、

風土 ——東北 夏の旅から——

花巻の宮沢賢治記念館

賢治との出会いは約50年前、友人が記念にくれた「宮沢賢治選集」からである。本誌の節々の号に「詩一編」宮沢賢治 をのせるのはこゝに由来する。一般には「雨ニモマケズ…」の詩で著名である。今話題のアニメーション(動画。漫画と区別したい)映画「銀河鉄道の夜」の原作者である。かつて賢治が散策に好んだ丘の頂きの、活躍の舞台花巻を一望におさめる場所に、3年前落着いた清楚なたたずまいで建っている。彼の深遠な思想を、環境・信仰・科学・芸術・農村・総合・資料の7部門に分けて展示し、視覚的に賢治の全体像に迫られるもので、スライド・ビデオ・音楽テープも加えて、短時間に充分に堪能できる。「星の王子さま」の作者サン・テクジュペリ、「マッチ売りの少女」の作者アンデルセンと並ぶ、世界三大童話詩人と呼ばれる賢治にふさわしいものである。小泉八雲の街松江の記念館を思い出すと、良いと思っていたそれが構想・展示ともに貧弱で淋しかった。豊かな八雲・ハーンの全体像が館の中でも、ゆかりの市内の旧蹟でも浮んでくることが少ないのは、国際観光文化都市松江の文化感覚の低くさとしか思えない。帰ってからも訪ねてみてしみじみ思った。

賢治の本領は「農民芸術概論綱要」にある如く、「世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」をめざし、科学者として農業先達者として、あらゆる面から当時の自分の住む農村から、心を豊かにし、生活を豊かにする農業そして農村の改良に、農民とともに取組んだことである。花巻農業高校内に移転されているかつての農村青年指導の場所とした、羅須地人協会の建物も、彼が愛した「イギリス海岸」も訪ねた。海岸即ち川べりにたたずみ「春と修羅」の詩を思い出しもした。長雨後の増水のため、本来の姿をみることはできなかったが、夢と詩情を育んだ風土は感ずることができた。この地には「智恵子抄」で著名な彫刻家高村光太郎の疎開先の記念館もある。

鉄の博物館・歴史館

開館九日目の釜石市立鉄の歴史館と

三沢氏の堅い実力のほどが明らかとなるのである。

こうして尼子経久は失脚する。その後尼子氏に関する史料は存在せず、一時的な没落は間違いない。勿論2年後の富田城奪回のことなどはあり得ない。しかも守護京極氏も守護職として未熟であった機構の上に、尼子氏を失ったから、その職務の機能も弱体であった。すなわち経久失脚から8年たった明応5年1496 4月、幕府は御料所朝山郷をめぐる相論について、新代官飯尾清房に合力すべきことを奉行人連署の奉書をもって、出雲国内の幕府外様衆宍道兵部少輔及び国人衆神西越前守、三沢遠江守に命じている。このころの京極政経は近江で一族の高清との争いに追われ、しかも将軍足利義材の怒りに触れて惣領職を剥奪されており、事実上出雲守護は不在の状態であった。この件についても失脚した守護権限代行者としての経久の名は勿論ない。経久失脚から次にのべる明応8年までの15年間、守護京極氏ははじめは個々に直接把握した有力国人衆をたよりとして、権限の執行をし、不遇の時代はこのように京極氏の一族で、幕府外様衆である宍道氏を中心として有力国人衆神西・三沢氏らによる協力体制の形などで乗り切ったものと考えられる。

この件後3年たった明応8年1499 9月、政経・経久の復権がみえはじめる。この時政経は神西越前守を神門郡奉行に補任しており、翌9年4月には宍道氏らがかかわった朝山郷の年貢について、幕府奉行人から奉書をうけているから、宍道氏らによる守護権限の執行体制は一時的であったことになる。また仝年9月経久は、三刀屋忠扶の熊谷上下郷買得について、それを保証すべき旨の幕府奉行人の奉書をうけている。京極氏復権と時を隔てずして右のように現われるから、京極・尼子氏の幕府との関係における一体化を想定することができるが、これ以後は直接の資料はあらわれない。

そして10年後の永正5年1509 12月守護政経は出雲で没した。

奇しくもかねてから横田庄内に築城を進めていた**三沢氏10代遠江守為忠**は、翌6年横田・藤

斐の上川柳九月抄

飛行機に乗る心配もない暮らし　松浦亜以
老醜は洗脳できぬ城に居る　松田牛歩
老いてなおおさえきれない腰の虫　安部春恵
落ちこぼれおしゃべりだけは生きている　渡辺好之
賢婦人目玉商品だけあさる　田中芳春
夏休み終り親子で総仕上げ　安部正子
嫁の無い話花火を待つ間　松浦木公
耳遠く記憶も失せて老夫婦　太田亀甲
卒直に言へず手を添え足もそへ　若槻白馬
さびしさも整形美人の酌に溶け　高木白虹
しきたりが肩に重たい年になり　佐佐木千世
こっぽしで孫は昼寝の夢につく　藤原千代子

訂正　124号2頁3段21行ー三次・3頁3段1行ー調査費・4頁2段11行ー545石・

第4回陰陽郷土史研究会は3月17日(日)開催　案内状は近日中に発送

10数年前にも一度訪ねた釜石製鉄所史料館を見学した。(鉄に関するものでは他に、東北大附属資料館と和鋼記念館と絲原記念館くらい)千葉県佐倉の歴史民俗、大阪万博跡の世界民族学の両博物館をみても、今日の博物館の基本には「動く」と「映像」が必要である。子供が使って遊べることもまた。奥出雲、特に横田は徳川中期以降「たたら」の一中心地であった。かつてのものをどう生かして臨場感ある資料館群とするかである。新設分散を避けよそにはない既設のものをどう拡充するかである。

①**絲原記念館**では、水利が良いから水車を設け、吹子送風や米搗き施設、たたら炉と天秤吹子の実物大模型と、その横断面をみせ、光による操業の動きの実現である。(鉄の歴史館に高炉のものがある)ビデオテープに鍛刀の実際を録画して、既存のものとあわせ、自由に希望のところを見るようにすること。鍛冶場とかつて鍛冶職人がやっていた差吹鈩(自家用の小規模たたら―絲原家古文書にある)の実験と、実験後の施設の公開。2.5坪程度の鉄と子供の遊び場などが必要となる。今、他の場所にいくら金をかけて設備しても、それはたたらという玩具にすぎない。現存鉄師の環境が何にも勝さる資料である。②**羽内谷鉱山**の展望所、③その下流の全国唯一の**本場**の早急な修復(砂鉄採取場―流水装置を作る)④**亀石鈩**の全遺構の発掘保存(相当な長期計画の下で)。⑤桂の木の元の鉄穴井手の保強と標識。⑥**大峠鈩の地下構造**に上屋を設けて保存(発達史上重要。位置づけは近刊の学会論集に登載)⑦**角炉2基**の説明板・案内書・できれば送風施設の復元――鳥上木炭銑工場主導の下での事業。⑧**日刀保たたらの踏施設**。こうして西は絲原記念館から東に進んで日刀保たたらで終る一連の施設は、横田のみがなし得るわが国唯一の、すべてが完備した和鉄資料館群となる。

この上多数の観光客はこれまた全国唯一の、**雲州そろばんの資料館**兼製作者・後継者の実演場を望んでいる。(蓬頭子)

11・12月の127・128号は合併号とし、11月17日の第4回陰陽郷土史研究会特集号として発行　地図・年表・系図を交えて横田の庄の中世を浮きぼりにし、未解決問題も提示する。大会の概要はそれぞれ了解を得て2月号から　新春1月号は「歴史を踏まえた横田の初夢」号

訂正　125号1頁4段20行ー高く　2頁2段13行ー採掘場　3頁1段17行ー炭坂　3頁3段2行ー左ヱ門

が瀬城に移城したのである。前述のような実力と情勢から為忠の胸中には、奥出雲にありながら雲備伯に接する要衝にある横田の地から、遙か富田城の尼子氏を横眼でにらみ、出雲国内一円への思いが鬱勃と湧き上がっていたのに違いない。

詳細は別稿としたいが（骨格は横田町誌に）、三沢氏の支配領域は最大で絶頂期にあった。南の馬木郷の馬来氏、山を越えた北備の部山城主（奥備高野山）多賀山首藤氏、その本家で北備の雄地毘庄（庄原市とその周辺）をもつ甲山城主山内首藤氏、その他とは、縁組・提携ともに最も密接、加えて禁裡御料所横田庄（この中に皇室の菩提所京都・泉涌寺領もあり）請所代官としての、京都との交渉それを背景として生かせる立場、庄内の当地方で最も古格高き有力土豪小池（のちの表・杠）・安部両氏の掌握、寺僧多数を擁する岩屋寺等々、すべて好条件が揃っていた。築いた城も、鉄を産し地味肥沃な横田盆地を一望におさめ得る要害備る一角に聳えていて、堂々とその実力を誇示できる構え。尼子氏にとっては再起の前に立ちふさがる一大障壁であった。そこで間もなく大挙して攻撃をかけるが落ちず退去する。10余年経てはじめて再度の攻撃でこれを降し得た。三沢氏降る報国内に伝わるや、有力国人層は漸く相ついでこれに従った。しかし一城落つとも三沢氏の勢力はあなどり難く、事ある毎に雲備の有力国人衆は三沢氏と去就を共にし、尼子氏の力となる反面度々尼子氏を窮地に追いこんだ。

政経は死の前に、孫の吉童子にあてて、出雲・隠岐・飛弾の守護職及び惣領職、諸国所領の譲状を認め、経久と、やはり一族の多賀氏両人にあてて書状を以て、右の譲状と代々の証文を託していたのである。

託された京極氏代々の文書は尼子氏の子孫である毛利家中の佐々木氏に伝えられ、「佐々木文書」として今日、京極・尼子両氏研究の基本史料となっている。京極氏代々の幕府からの宛行状、補任状、当主の譲状などの重要なものも含めて、代々の文書が伝来していることは、尼子氏が京極氏の家督と守護権を引継いだという（但し出雲・隠岐についてのみ、他はその子孫が伝領した。のちその一族は松江藩主堀尾氏3代のあと、松平氏が藩主となる前1代ほど藩主として出雲に在国した）根本的意識の表われであることは疑う余地がないことを示す。かくして14世紀末の明徳の乱からのち、出雲における京極氏の守護権は、永正5年まで110余年間にわたり続いていたのである。

度々のべる如く、京極氏の出雲国支配体制と尼子氏の立場は、多くの有力な伝統的出雲国人衆の勢力の消長と動きに大きく左右されていたのであり、尼子氏はその間をぬうて、在地性の強みを生かして伸び上ろうとしていたのであって、政経の死によって漸く時が来り表面にでるようになったのである。しかし京極時代の支配構造の弱体は、それをそのまゝ継いだ尼子氏の権力構造の弱点となり、一新されないまゝ最後までつきまとうことになったのである。

これについてはあらためて分析をし、国人衆の実態、三沢氏の実態を明らかにし、在来の華やかな尼子物語りの幾つかは、全く虚構であることを明らかにしたい。（横田史談会　高橋一郎）

十月句会

長客へ声せきたてる法師蝉　岡田蹊花
庭下駄の緩き鼻緒や萩揺る　岡田麗水
所在なく客待つ室にも蝉時雨　小川あきお
久々の孫はかたこと稲は穂に　門脇花子
みのむしや故郷捨てて早十年　楠房子
風鈴の哀調奏ずる夜の秋　高木白虹
遠来の友人と出合いし盆の径　新出谷一華
法師蝉梢に日暮れの声残し　錦織富江
孫去んで朝顔かぞえる事もなく　峯石美代子
日焼がお並んで二学期始まりぬ　渡部夕峰

十月のうた

かつて勤めし郵便局を手伝ふは若さを保つひとつか知れぬ　常盤はるまさ
新しき芒の穂波きらめきて夏のほてりの消へゆく夕べ　永井弥生
水打てば向日葵の花いきいきと空に真向ひ夕日あかるし　岡田時子
稔るまでの作業のことを語りつつ孫と刈田に落穂を拾ふ　佐藤喜代子
朝露にしとどに濡れて輝けり夏を過ぎ来し畑のいもの葉　児玉敏郎
銀杏の薄き緑の実のたわわに風の通れる本堂に見る　景山悦子
稔り田に老いたるがゐて歩むごとかかしの足を風が吹きゆく　小早川恵子
盆休みの泊り仕度はあきらめて横になりたり頭痛のしつつ　戸屋映子
こだわりの霧れやらぬまま佇つ縁に秋の始めの月光の射す　松浦愛子
重ねたる齢を思へり稲刈りし夕べを夫とサロンパス貼りつつ　野村節子
草原は径はるかなり秋草の花は朝の露をこぼせり　安部夕波
（カルスト高原にて）

会員配布一部百五十円／六九九ー一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0ー601）頒布／横田史談会　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第127・8合併号
（11・12月合併号）
昭和60年11月2日
奥出雲編集集団©

中世 横田庄概観

横田庄のおこり

出雲国風土記時代以降の横田郷（今日の横田町内の大字、竹崎・大呂・中村・稲原・横田・下横田・八川）が荘園となった（この地域のわずかの部分は組み入れられていないよう）経緯は明らかではないが、この地の豪族が律令体制の崩壊によって、自ら開発した耕地＝墾田を基盤とした自墾地系荘園と、班田農民の口分田（律令制下の法によって一定期間給せられた田）――当地方にまでこの制度が及んでいたかも明らかでないが、若干の地名に「名」のつくものの存在が史料や現在名にある――や、零細な開発耕地を寄進や買得などにより集積した既墾地系荘園（これを初期荘園とよぶ）を含めた、大規模な私的所有地を、中央の権門勢家に寄進してその保護下に、荘園の自己領有化を確実にしようとした寄進地系荘園であろうか。最近では寄進が契約関係に基づいて行われているところから、これを寄進地型荘園と呼び、寄進地系荘園と区別する説もある。

ともあれ「横田庄」が文書にはじめてあらわれるのは、初期の源氏に変って平氏が抬頭をはじめるきっかけになった保元・平治の乱の、はじめの保元の乱の終って間もない保元元年1158 12月3日であって、それは京都の西南男山にある石清水八幡宮の荘園としてである。関連史料からすると1072～1111年の間に出現したものと推定している。

源平対立時代に終止符をうった三大合戦の第一戦、寿永3年1183 2月の一の谷合戦のあとの5月（4月元暦と改元）、源頼朝は梶原景時をして、終始一貫源氏方であった石見の豪族益田氏に、平家方であった出雲の岐須木次郎兄弟と横田兵衛尉を討つことを命じさせた。当地に平家にまつわる幾つかの哀話が伝っているのはこれにまつわるものであろうか。

横田氏は滅亡したと筆者は考えていない（横田町誌に）が、「源平盛衰記」の「一谷城構への事」の中の記載からすると、横田兵衛尉維之といゝ、播摩・美作・備前・備中・備後・伯耆・出雲・安芸・周防・石見・長門の諸豪族とともに参加している。これらの中には郷司・郡司を名乗るもの、それと同じ立場の豪族もいるから、横田氏は仁多郡の郡司の流れと筆者は考えている。郡司の長子が京に出仕し、兵衛府に勤めて帰り兵衛尉と名乗ったものと思う。在京中得た情報や縁故によって、平家・上皇と緊密な間柄にあった石清水八幡宮に心をよせ、こゝに横田庄を寄進したものであろうか。その時代は先の時代推定からすると、維行の父か或は祖父の時であろう。

荘官・領家の変遷

翌元暦2年・文治元年の2月（平家滅亡の三月の前月）、源頼朝は出雲国内の横田庄ほか8か所の石清水八幡宮領の安堵をしている。当地の現在の大字中村字樋口の表（屋号）杠氏（徳川初期までは小池姓）方所蔵の記録によれば、その祖は頼朝の命をうけてこの地に下った、同門の武士であった。年表にもみる如く、中世半ば以降は当家以外の諸文書にも、「大催」（当地ではおおもよほしという）職として明治中期に至るまで、その家格を保持し、横田八幡宮の神事においては神職の上に位置した。中世三沢氏もこの点一目を置き、徳川時代は松江藩より持米を給せられていた。

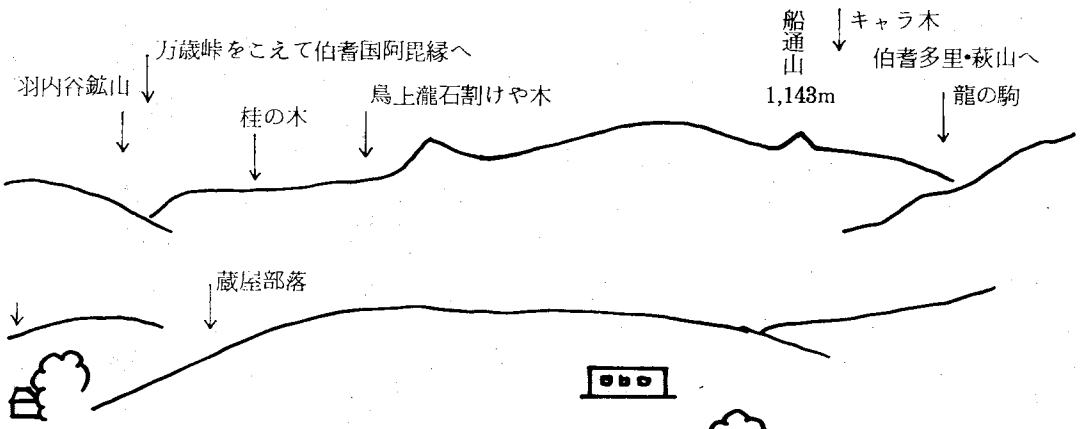
承久の乱後、横田庄の北隣三処郷（南北朝時代南朝方鰐渕寺の僧頼源が軍功によりこゝの地

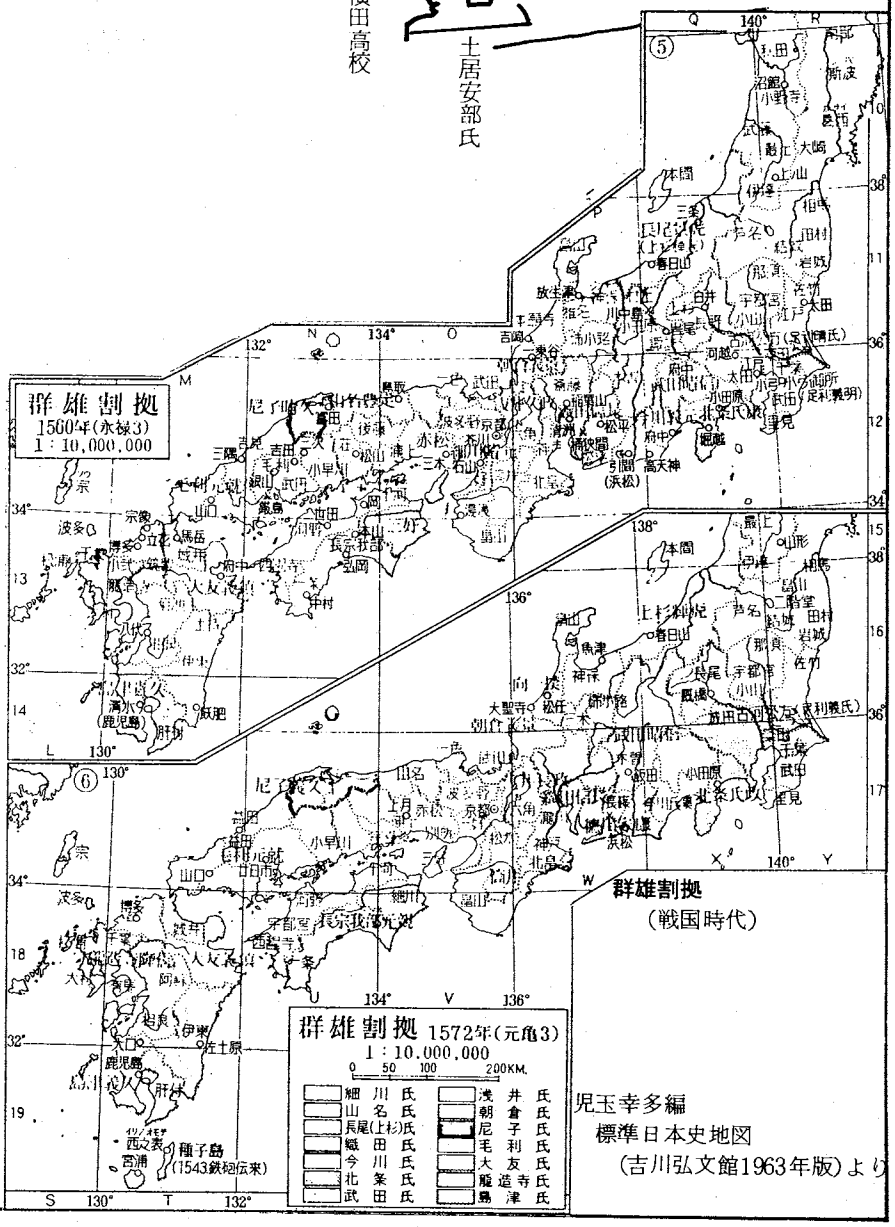
（8頁へ続く）

第4回陰陽郷土史研究会のための特集号目次

大会の参考のために、これまで奥出雲に載せた年表等を再録しました。

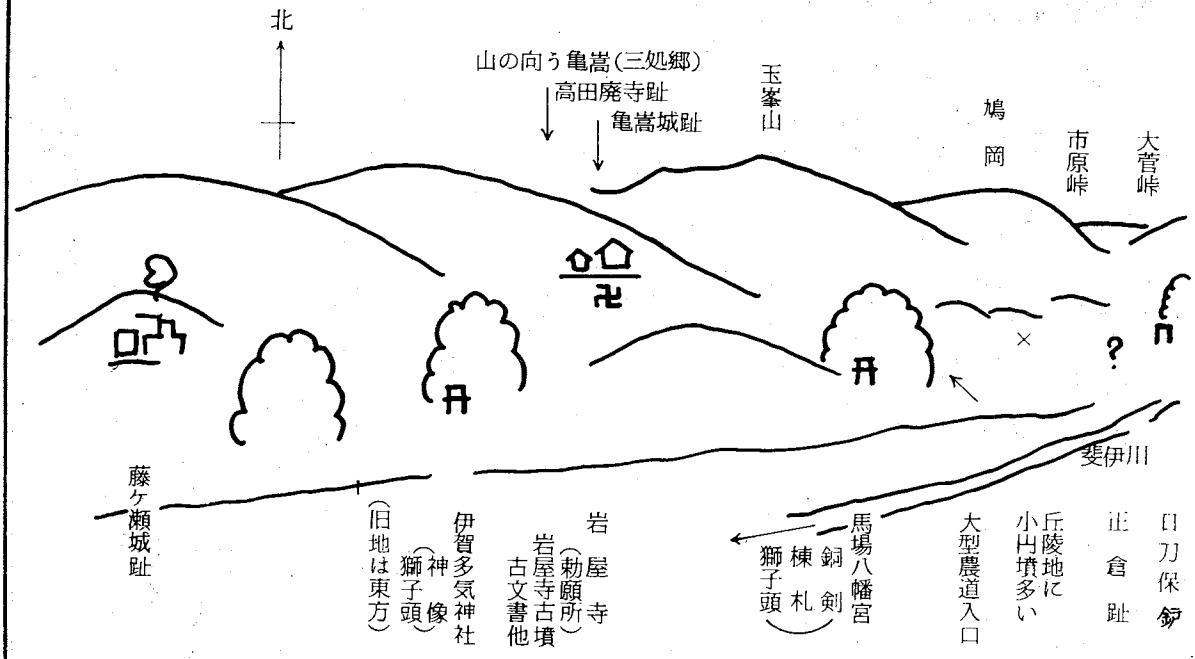
○横田庄概観　では、再録した年表の若干の訂正もしました。
○横田庄中心部のスケッチ（2頁）
○横田町図　○群雄割拠の図
○中世の関係諸氏略系図（4頁）
奥出雲の有力国人
備后・安芸の有力国人
これらと地頭から成長した有力国人、三沢、馬来両氏との関係もしるしてある。
○中世横田庄略年表　（5頁）
今大会で解明の期待されるのは中世の
△横田庄の特殊性。
△三沢氏など陰陽の山間地域領主層（国人層）の実力と戦国期における位置づけ。
△庶民の歴史　仏教を中心とし神社史の側面からも。
△戦国期の物資流通の中から鉄の流通が引き出され、中世から近世へと発展した、当地の企業たちの研究の貴重な資料があらわれるか。



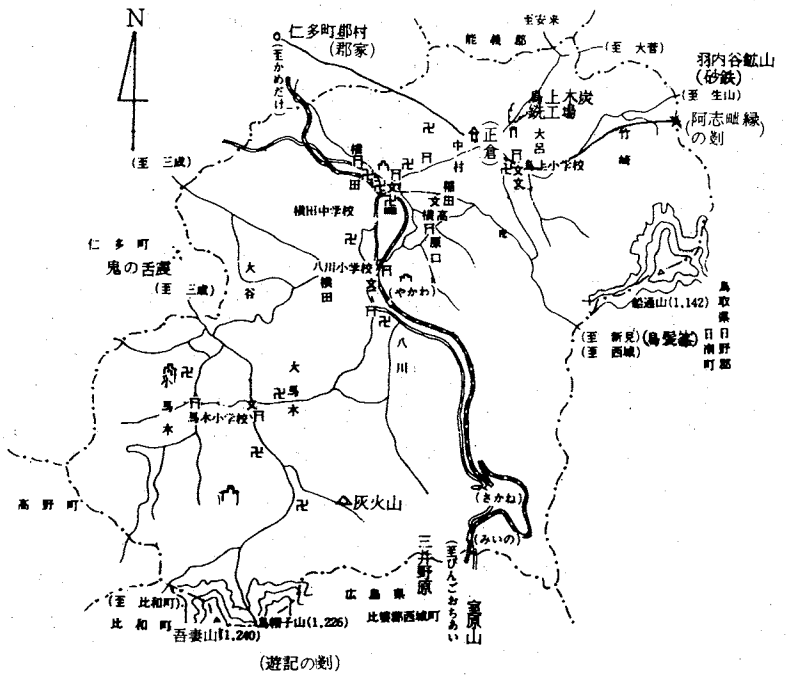


群雄割拠
(戦国時代)

児玉幸多編
標準日本史地図
(吉川弘文館1963年版)より



横田町全図—附 出雲風土記の地名—



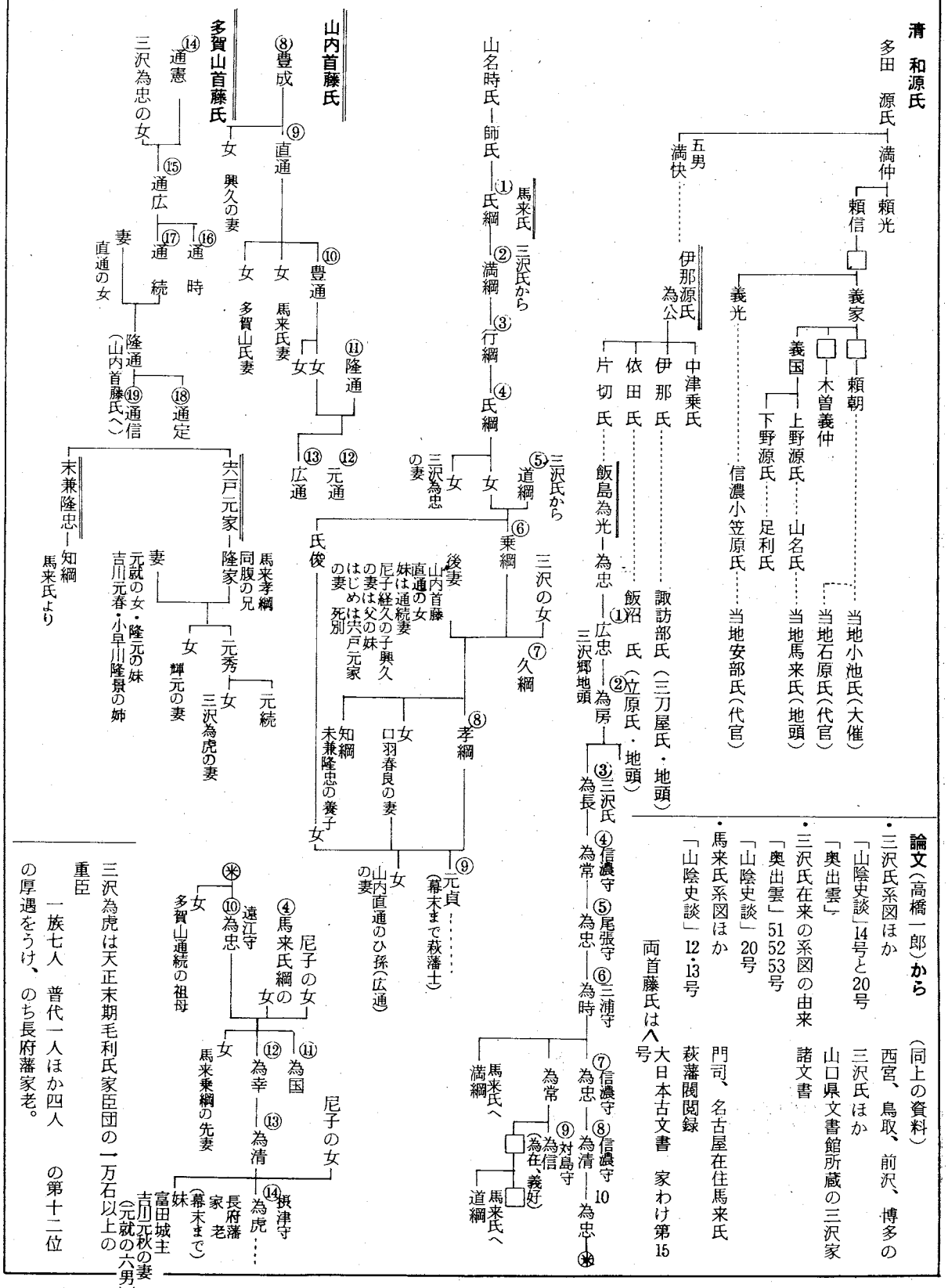
横田史談会編「あるくみる横田」より

上のスケッチは、横田コミュニティセンター大ホールのステージ方向（北）をみて描いたもの。

上のスケッチの左３頁は、横田コミュニティセンターのステージ方向（北）をみて描いたものであり、右２頁はステージ右横方向（東）をみて描いたものである。

コミュニティセンターのスケッチ上の位置は、左端「藤ケ瀬城趾」の右下あたりである。

新補地頭三沢氏をめぐる系図（高橋一郎作成）



三沢為虎は天正末期毛利氏家臣団の一万石以上の重臣

一族七人　普代一人ほか四人　の第十二位の厚遇をうけ、のち長府藩家老。

論文（高橋一郎）**から**（同上の資料）

- 三沢氏系図ほか　西宮、鳥取、前沢、博多の
- 「山陰史談」14号と20号　三沢氏ほか
- 「奥出雲」　山口県文書館所蔵の三沢家
- 三沢氏在来の系図の由来　諸文書
- 「奥出雲」51 52 53号
- 「山陰史談」20号　門司、名古屋在住馬来氏
- 馬来氏系図ほか　萩藩閥閲録
- 「山陰史談」12・13号　大日本古文書　家わけ第15

両首藤氏は〈号

荘園「横田庄」と三沢氏一族をめぐる略年表

時代	紀元	年号	事件	横田庄	三沢氏一族	資料
奈良	701	大宝元	備後・調を鉄と願う			類聚国史
	733	天平5	出雲風土記成る	仁多郡にて製鉄、正倉あり		
	747	天平10頃		岩屋寺建立		
平安	799	延暦18	出雲を最多量として中国は調として鉄、歌			
	879	天慶3				
						類聚三代格
	1072~1111の間に			石清水八幡宮横田庄出現（寄進地系か）		石清水・文
鎌倉	1184	寿永3	源平合戦	一の谷に於て、横田兵衛尉維之平氏方で、益田氏横田氏を幕府の命で追討する。		源平盛衰記 益田氏文書
	1185	文治元	西国へ源氏一門下る（地毘・山内首藤・沼田・小早川・吉田毛利他）	源頼朝　石清水八幡宮領安堵（横田庄も）		石清水・文
	1196	建久7		八川八幡宮創建（小池氏／現杠氏一下るか）		
	1199	正治元	源頼朝死す			
	1221	承久3	承久の乱			
	1229	寛喜元		これより以前三処郷地頭三処氏　横田庄代官に横田庄、年貢銭納、御用鉄上納		石清水・文
	1232	貞永元		三処氏に我儘あり代官改易		〃
	1238	天福元		三処氏横妨し　岩屋寺良仙法師上訴す		
		2		〃　ふたたび代官に		
	1249	建長元		阿井・三沢・三処・布勢郷と馬木郷地頭のことあり		千家文書
	1264	文永2	北条時輔六波羅探題			
		5	に時宗執権に（時輔の異母弟）	（亀山上皇高田寺、大領権現に祈願）		
	1271	8		時輔は横田庄（55町歩）竹矢庄（62）須佐（30）いずれも八幡宮領を領有、地頭三処左衛門後家は三処郷、佐世白上八幡宮を、神保二郎は布施郷を、飯島太郎は三沢郷を、多胡氏は馬木郷を法華堂氏は阿井郷を領有。		〃
		9	時輔一族の争で殺さる			
	1274	11	蒙古来襲（文永の役）	文永の役による後宇多天皇の祈願文（岩屋寺へ　使は泉涌寺）		岩屋・文
	1275	建治元				
	1281	弘安4	蒙古来襲（弘安の役）	八幡宮八川より馬場へ移る　岩屋寺院主祐円、願主は妙音禅尼（時輔の実母で時頼の妻）小池氏はこのころまでは代々京都より妻を迎える。（亀山上皇綸旨、高田寺、大領権現へ）		馬場・文
		10		弘安の役による宇多天皇綸旨　岩屋寺へ（安堵状）		岩屋・文
	1302	乾元元		‖　① 為仲　雨川へ下る		
	1312	正和2		北條最明寺院のため妙音尼、4回目の土地寄進　のち死す		〃
	1312 1316	正和年中	花園天皇（院政後伏見上皇）	妙音尼死後　横田庄は鶴岡八幡宮仮殿造営料所となりついで六波羅密寺造営料所となる。		〃
	1318	文保元		内裏御料所となる。		〃
		2	後醍醐天皇	〃　の一部の岩屋寺領安堵		〃
	1320	天享元	院政廃止			
	21	2		（高田寺大領権現焼失　岩屋寺衆徒によって）		
	24		正中の変			
	1331	元弘元	天皇神器を北朝光厳天皇へ	内裏御料所は岩屋寺良円が代官　この年横田庄　北朝仙洞御所料に分けられ、安部氏代官として下る（現存）		
		(北)天徳3				岩屋文・安部氏文
	1332	元弘2	天皇隠岐へ	③岩屋寺へ天皇綸旨を　⑤祐円に、高田寺にも綸旨		
	33	3		光厳天皇廃し　論功行賞		
	34	建武元		（天皇　高田寺大領権現に寄進）		
	35	2	塩冶高貞出雲を領す	天皇　横田庄を石清水八幡宮へ寄進。その中の尾園村を岩屋寺へ		〃
	36	3		天皇①鰐淵寺僧頼源に行賞として三処郷地頭職に、高田寺へ寄進（土地）それを		鰐淵寺・文
室町				1340興国2　1351正平6.12安堵　南朝方である。		
		(北)延元元		馬木郷地頭は信原氏に		
				②山名時氏　名和長年戦死後、因幡伯耆へ入る。⑪天皇神器を(北)光明天皇へ渡す。横田庄北朝仙洞御料所になり、八幡宮領はなくなる。		
	1340	興国元	山名時氏因、伯守護に			
	42	(北)康永元		時氏の下で代官良円横妨し、岩屋寺は院宣で停止を上申		〃
		2		祐円死す		
	47	(北)貞和3		良円にかわって弘円が横妨、院宣下る。		〃
		5		時氏に2度院より文書下る。		
	50	(北)観応元		時氏に横妨停止の2度目の院宣。		
				足利尊氏　西国から岩屋寺に祈願文		大日本史料
					‖ 飯島四郎三郎に軍忠状（諏訪氏にも）③為家	
				（(南)後村上天皇綸旨　高田寺大領権現へ		
	1352	8	伯耆守護　師義（時氏の嫡子）		全国各地このころより1369年まで南北朝に分れて争う。	
		(北)文和元				

時代	紀元	年号	事件	横田庄	三沢氏一族	
室町	1353	北文和2		師義岩屋寺へ制札	三処郷と横田庄師義の勢力下に	岩屋・文
	61	康安元	時氏・師義・出・伯因の兵を率いて美作をうつ			
	70	北応安3			馬木郷地頭職三村氏から再び信原氏へ	信原氏・文
	71	4	時氏死す　後円融天皇即位			
	72	5		天皇　仙洞御料所を安堵		岩屋・文
	76	永和2	師義死す　時義がつぐ			
		3		足利義満？の禁制　岩屋寺へ		〃
	79	康正元	山名一族11ケ国領す			
	82	北永徳2		山名時義の安堵状（院宣により）岩屋寺へ 高田寺へも	山名満幸横田庄横領代官石原氏 馬木地頭に馬来氏下る 代官安部氏しりぞく	安部氏・文
	85	北至徳2		時義　馬場八幡宮遷宮本願	至徳年間に不見明見（④為毟の嫡男）	
		4		〃　岩屋寺へ下中村の地寄進	郡村で寺の寄進うける	総光寺・文
	88	元中5		（高田寺大領権現焼失　岩屋寺の衆徒により）		
	89	北康応元		満幸　時義の祈願を岩屋寺へ		
	91	北明徳2	出雲守護山名満幸解易	明徳の乱起る		明徳記
		3	京極氏出雲守護に代官尼子氏 南北朝合体後小松天皇			
		4	後円融上皇崩御	横田庄　後小松天皇に伝領　　岩屋寺領院宣で安堵 山名残党各地でしゅん動、馬来氏　楠（卜蔵）氏討死す。		
	94	応永元		山内首藤通忠　　横田庄伊賀村宛行わる 後円融上皇追善のため菩提所泉涌寺へ半分を寄進		山内首藤家・文 大日本史料
					④為毟　高田寺へ三処郷内から土地寄進　不見明見三沢氏の外護により総光寺亀嵩に	日本洞上併灯録
	1402	2	京都高詮満幸を京都五条門高倉の宿にて誅す。	この頃代安部氏千代他国へ鉄を商売す		
		9		横田庄半分の泉涌寺領安堵		大日本史料
	12	19		後小松天皇譲位後も半分もつが5年後花園天皇にゆづる。		看聞御記
	30	永享2		安部氏　稲田へ移る		
	39	11			⑤地頭信濃守為忠　馬場八幡宮棟札で本願	馬場・文
	44	文安元			岩屋寺へ文書　綸旨院宣にまかせて。大催小池氏の仲裁を行う。	岩屋・文
	57	長禄元				杠氏・文
	62	寛正3		岩屋寺一揆のため焼ける？		
	71	文明2		山内氏と馬来道綱の契約状	⑥為在　出雲北部へ進出、末子馬来氏の養子へ、尼子氏為在と与党の知行差押え	
		3		岩屋寺復興		海東諸国記
		7			⑤為忠　近江国で京極六角の戦で討死、備後の三沢領すべて山内領へ	長興宿弥記
		8			⑧遠江守為忠馬場八幡宮本願 大催職小池氏の安堵状だす ⑦為幸が幼ない為忠を後見す。能義郡土一揆の後押しをして富田城攻める	
		16	尼子氏富田を追われる	三沢他国人土豪の反抗により、中心人物は為在である		
	86	18	尼子氏富田城へ復す			
	88	長享2			山中逃亡返討ちで三沢氏尼子に下る。	
	93	明応元		横田庄（禁裡御料）年貢米進あり	三沢の代官　石原重国横田へ	泉涌・文
	1509	永正6	4年から為幸、経久に従い上落、この年京都にて戦う。		⑧為忠　藤ケ瀬城築く 三沢には為幸、安部氏111年間の代官退く	
		8			為幸　尼子経久とともに京都にあり。船岡山の合戦に参加	
		11	尼子藤ケ瀬を攻める	岩屋寺全焼		
		13	尼子経久出雲に帰る			
		14	経久奥出雲より庄原へ出陣	阿用の戦で長男政久討死 杠氏討死	為忠隠居して藤ケ瀬城は⑨為国 三沢城には為忠弟⑨為常	
		17		岩屋寺快円によって復興に20年後完成	為忠死す	
	21	大永元	尼子と大内と石見に戦う	（尼子の最盛時）		
		2	尼子と大内と邑智に戦う		尼子方で参加	
		4	尼子と毛利大内備後に戦う			
		6	毛利・大内結ぶ	仙洞御料所　7月11月貢納す		
	26	7	尼子と大内備後和智で対陣		尼子方で参加	岩屋・文
	28	亨禄元	経久山内隆通を攻める	〃　3月10月　〃		山内首藤家文
		2		〃　12月　〃		
	31	4	経久　藤ケ瀬を攻略す		為国ほか捕えられ天文5富田にて斬らる	
	33	天文元	興久　父経久に反す	安部氏、三沢氏の下で再び代官に	三沢為幸の代官石原義扶横田へ	
		天文3		仙洞御料所　3月に貢納す		

時代	紀元	年号	事件	横田庄	三沢氏一族	資料
		天文 5		たたら製鉄師、馬来氏元家臣杠氏ほかの名あり（今日のたたら方式となる）		杠日記
		6		仙洞御料所　4月に貢納す		
		8		〃　12月　〃		
室町	1350	9			⑫為幸　安芸吉田にて討死 ⑬為清4才　⑩為理が後見か	
		10	多賀山、山内、三沢他11人大内へ			
	1548		大内、毛利と富田城下に迫る。三沢ほか再び尼子に帰投、大内退却、経久それを石見へ追う。	岩屋寺8分通り完成、尼子横田庄直接支配　安部氏代官退く 総代官と中村は森脇家貞、竹崎は河本、大呂は河制、蔵屋は羽鳥、原口は本田で尾園は山内通続の所領で、こゝから勅定の旨に任せて岩屋寺に寄進	為清は三沢、阿井、三処郷にのみ	
		13	晴久伯、因、備後に侵入	このころ山内直通の娘馬来乗綱の後妻に		
		16		泉涌寺文書に横田庄云々あり		
		17		2月8月貢納		
		18		9月　〃		
		19、22		各　1回　〃		
				弘治2年に2回　同3年に1回貢納		
		20		伊賀多気神社再興、願主森脇家貞		
		22	晴久、備後より高田城を攻める。		為幸出陣す	為幸出陣す
		弘治 2	尼子、毛利と石見で戦い敗れる			
	1558	永禄 元	尼子、銀山を攻める毛利敗る。	4月　千酌郷とともに代替の御礼物献上	三沢は尼子方で	
		2			三沢は毛利の配下に	
		3	毛利、石見銀山攻める	暮より郡内から尼子の勢力は一掃される。	三沢は毛利方に度々請書で忠誠誓う	陰徳太平記
	1561	4	本庄毛利に降伏	（鍋坂城主　布広左東亮は尼子方へ返る）	三沢、毛利方にとどまる	
		5	毛利赤穴より出雲へ		三沢、郡内で勢力を復う	
		6	〃　白鹿城を陥落			
	1565	8	〃　富田城総攻撃	泉涌寺文書に尼子毛利の争乱のため滞納あった意味のことあり		
		9	富田城を開城す	7月貢納		
	1569	12	幸盛、勝久と隠岐へ作州高田城、豊後立花城を毛利攻める（三沢参加する）この時幸盛日登を攻める　留守隊大敗する		三沢、毛利へ人質を出す。 三沢多数討死す	
織豊	1570	元亀 元	尼子再起第1回の布部合戦、尼子方大敗		布部合戦、ついで末次攻撃に参加	
		2			伯耆高瀬城攻撃、真山攻略に参加	
	1575	天正 2	尼子、鳥取へ入る	朝敵赦免の綸旨（禁裡御料所）	為清隠居して亀嵩に城を築く。	
		3			為虎、毛利に三刀屋氏とともに誓紙出す。	
		5		日御崎神社仮遷宮棟別課当のこと	為清　亀嵩城へ	
		6	上月城の合戦		〃　為虎参加	
		7		禁裡御料所横田荘代官に菊亭晴季	為虎　毛利へ誓紙を出す	
		8			為虎　毛利へ誓紙を出す	
		9	秀吉鳥取城「渇泣し」の攻撃		救援に参加	
	1582	10	備中高松城攻撃和睦		三沢氏の去就の波紋 三沢雲波の手紙	
		12	輝元は山内、三吉、久城に人質を出させる。		三沢氏も人質を出す	
		13	多賀山善山城主　土佐へ		為虎誓紙を出し亀嵩城保持頼う	
		14		禁裡御料所　貢納可		
		15		仁多郡は輝元の領内	為虎　九州へ出陣	
		16			為清死す（53才）	
	1589	17		三沢氏、馬来氏、安芸へ下る。		
		18	小田原城攻撃	横田庄貢納品天皇官女に分ける。	為虎参加	
	1591	19	輝元出雲ほか8ケ国を領す（仁多郡は輝元領）	吉川広家　富田城へ 大催小池氏　毛利氏より村役人を仰せつかる		

（註）資料において　文は文書　石清水・文は石清水八幡宮文書　岩屋・文は岩屋寺文書
馬場・文は馬場八幡宮文書　泉涌・文は泉涌寺文書
その他の尼子・毛利・三沢関係の記事の出典は、陰徳太平記、雲陽軍実記、吉田物語などから考証により掲載

（作成　高橋）

頭職を与えられている）の地頭三処氏（これも郡司の末孫と推定しているが、この庄の初期の領家は明らかでない）がしきりと、横田庄を蚕食し続けている（年表参照、史料では年貢鉄のこと、年貢銭納のことがある）。やがて六波羅探題北条時輔（参照）。奥出雲は4頁に一部の

が下って来た（末孫現存）。やがて足利対山名の勢力争いの頂点となった14世紀末の明徳の乱は、横田庄をめぐって起った。そののち郡西部の地頭三沢氏が命をうけて地頭請所としてこの庄を支配する時代となる（年表

では虚構とされている。その後経久が京極氏のあとをついで守護職についたのは永正5年1509である。この年「山中逃亡返討ち」によって三沢氏が尼子氏に大敗を喫したとされているが、これも虚構であって、この頃三沢氏は横田藤が瀬城を築いて移り、岩屋寺21坊の僧も味方として絶頂の時代であった。経久も攻めあぐみようやく10余年後になりこれを降した。これによって、出雲の有力国人層は経久になびくことになったが、その後も事ある毎に雲備の有力国人衆は三沢氏の去就にあわせて、大内・尼子・毛利の諸氏の対立時代を通じて、尼子氏を窮地に追い込む。遂に尼子時代から毛利時代の出雲に移ったのである。経久が守護となってのち尼子滅亡までが50年、のち毛利時代は40年余年、三沢氏のち毛利氏に仕え重臣に列し、長府藩家老となる。

この間の庄内の動きは年表に譲るが、天正19年毛利氏がこの地を直轄地とするまで、京都御所及び皇室菩提所泉涌寺領としてかなり上りのよい荘園であったと記録がある。このように500年間続いた荘園であった。（高橋）

十一月句会

文交わし心重ねし神無月　浅野　としお
萩刈られ広く佗しき景となる　岡田　蹊花
ブロック塀狭き空地や秋海棠　岡田　麗水
炊きたての栗飯盛りし妻の指　小川　あきお
半袖の腕に秋立つ今朝の庭　門脇　花子
里芋の葉に光ころがす居待月　楠　房子
裏大山御机にて
みおろせば光芒ゆらぐ古戦場　高木　白虹
秋彼岸箒目清し坊の庭　新出谷　一華
燃えつくし土に墜ちゆく曼珠沙華　錦織　富江
追いかけて手をふる孫やいわし雲　峰石　美代子
朝寒や翁の散歩背をのばし　渡部　夕峰

時宗の異母兄）の所領となり、その死後も実母尼妙音が長らく所領としていた。その没後は一時石清水領となり、後醍醐天皇の力も加ったが、山名氏の勢力浸透によって、北朝仙洞御料所となり、代官として院の武士で信濃源氏小笠原氏の一族安部氏

せた如く、伊那源氏一門の諸地頭の地盤で、三沢氏はその筆頭勢力を維持し抬頭しようとする守護京極氏の代官尼子氏に、事ある毎に抵抗を続け、遂に京極氏の命をうけて尼子氏の追放をした。二年のちの文明18年尼子経久の富田城奪回は今日の研究

霜月の歌

色ふかき通草三つ四つ見上げっつひとり晩秋の岨道を行く　常盤　はるまさ
ただひとり留守居する孫に声かけて日暮れの門田に稲掛け急ぐ　野村　節子
側溝の僅かな泥の溜り場に己れ生えせし鳳仙花咲く　佐藤　喜代子
連ねたる選挙カーより聞へくる声うはずりて空にひびかふ　岡田　時子
日溜りの菊の葉先の赤蜻蛉立ちつ留りつ去りゆかぬかも　小早川　恵子
暗闇に稲掛けをれば一瞬に稲架浮き立ちて車すぎゆく　宮廻　愛子
やったぞと胸のときめき抑えつつ子牛に添ひて賞を受けたり　景山　悦子
体調を崩せし夕べ些細なることばにながくこだわりており　松浦　愛子
掌の黒子は幸と信じつつ息子と住まぬ家にちちろ虫聞く　永井　弥生
匂ひくる木犀の花ぬらし降る夕べの雨を聴きつつ眠りぬ　安部　夕波

斐の上川柳十月抄

降って湧く話にリズム狂う日々　藤原　千代子
波風が立たないように釘を打つ　松浦　亜以
紫蘇こいで指をながめて姑想い　安部　正子
酌をするふりしてひそといゝ話　佐佐木　千世
バイバイとちょっぴりさびし孫なでる　児玉　哲呂
余生とは言え平穏で物足らず　松浦　木公
帰るとこあるから楽しい旅がある　若槻　白馬
無投票になるから出ようか締切日　太田　亀甲
雨ふって愚痴を交えて友へ文　安部　春恵
千三つ言っても嫁様連れて来る　渡辺　好之
進むため尺取り虫が腰を曲げ　松田　牛歩
ふと出逢う呼鳴あの戦友がこの白髪　高木　白虹

合併号につき三百円／六九九—一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0—601）頒布／横田史談会　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 129 号
（1月号）
昭和61年1月4日
奥出雲編集集団©

松江藩五鉄師
卜蔵家の原鈩

佐世川　徳雄

松江藩五鉄師

幕末の松江藩五鉄師の一人、卜蔵（ぼくら）家の原鈩の大正末年の状態を、現在の遺構、二枚の写真、12代（30代）幹夫当主の話をもとに復元したものが次頁の図である。この機会に本誌113号で卜蔵家の分家故卜蔵梅之丞農学博士のことを書いた折に調べたことをもとに、卜蔵家の歴史をのべる。博士は明治末年世界で最初に、学界の偏見や圧力を排して、果樹・稲・麦の殺菌剤や展着剤の撒布試験に成功し、日本農業界に病害虫防除で残された功績では並ぶものがないといわれる。

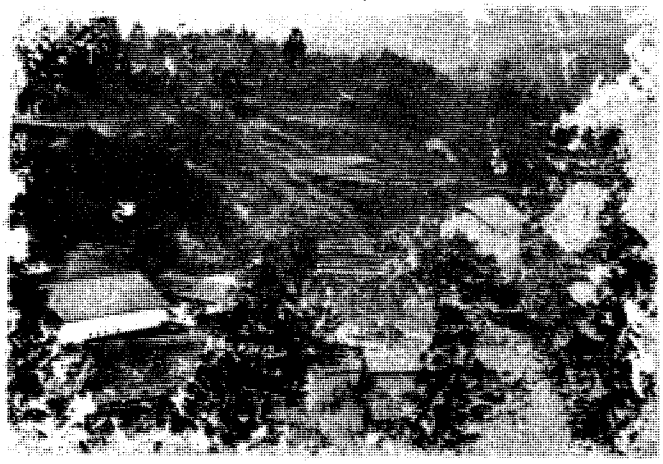
松江藩は近世企業たたらが軌道に乗るのをみて、その収益の前途に眼をむけ、10数人いた鉄師を享保11年1726、水田所有面積が多く経済的に安定した、9人にしぼって一種の株仲間を組織させ、統制をする一方保護を加えることにした。即ち飯石郡の田部本家と分家、仁多郡の桜井・絲原・杠・卜蔵・山根、神門郡の田儀桜井、大原郡の石原の諸家である。その後盛衰があって幕末には、奥出雲では経営規模の大きかった、田部・桜井・絲原・卜蔵・田儀桜井を通称五鉄師として遇するようになった。

卜蔵家の祖

楠正成の弟正氏（正儀）と、名和長年の弟太郎左衛門の娘との間に生れた勝太郎（楠太郎左衛門正秀）は、建武4年1337以来伯耆守護となった山名時氏によって、名和氏を中心とする南朝勢力は一掃されたので、伯耆にあってその勢力の下に服した。このあとが卜蔵家となるという。

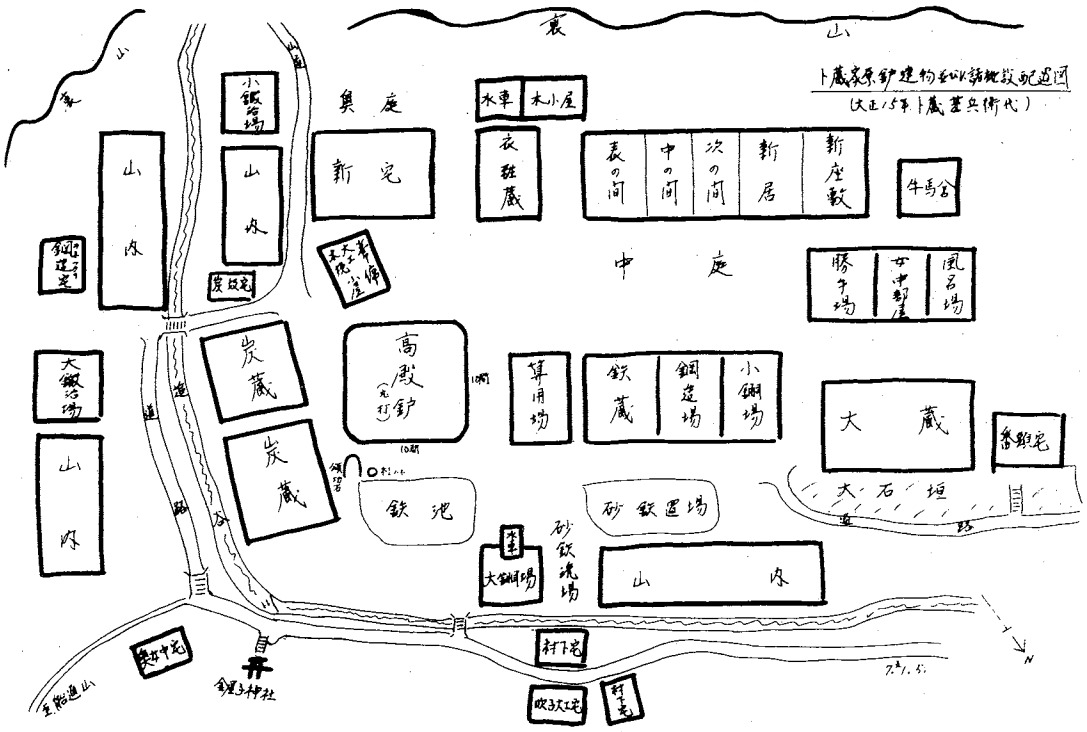
この楠氏はその後、山名氏一族と将軍足利義満との対立から、本誌で度々述べられている、横田庄を発火点として勃発した明徳の乱に、山名方で戦い、3代吉↓太郎（正利）が討死した。そこで弟吉次郎が跡を継ぎ、横田庄内竹崎村（現在の小字追谷入口あたりか）に来住し、その子惣兵衛が5代となる。

山名氏とのかゝわりからであろうか、在郷武士として開拓にあたり、かたわら自家用たたらにもたずさわっていたであろうか。明応3年1494楠十郎左衛門（甚右衛門）・八郎右衛門兄弟は、伯耆守護山名氏に従って備前に出陣し討死した。その弟六郎右衛門もやがて病死したので、翌4年甚右衛門の伯父で伯耆に住んでいた甚七の倅甚五郎が養子として入り、甚平正文と名のった（一説ではこの時姓も卜蔵と改めたという）。同家の伝承によれば、祖先が南朝系の武士であったので、遠慮したためという。



その後14代甚右衛門（竹崎原之庄卜蔵栄三か）が、永禄元年1558横田庄内の信仰の中心、横田八幡宮の神宮寺として勢力のあった岩屋寺に、土地を寄進している。当時岩屋寺への寄進は、守護およびその有力家臣、地頭出身の有力国人衆とその有力家臣に限られ、土豪ではもと荘官武士として下って土着した、大催職杠氏（頼朝時代から）・安部氏（14世紀中葉仙洞御料所代官として）であった。それに一時的にせよ加った卜蔵氏の成長ぶりはきわだったものだったようである。

19代五郎右衛門にも子がなく、能義郡十年畑村に住んでいた、伯父惣兵衛の五男甚吉を養子に迎えた。甚吉改名して惣兵衛といいい鉄師を業とした。以後実父惣兵衛（甚兵衛ともいう）を初代とするようになる。このことは後述の理由による。子九右衛門を故地十年畑に分家させ、横田屋といった。のち卜蔵家が鉄製品を安来港へ運送するにあたり、竹崎村から大呂村山奥越えで伯耆の大菅へ、こゝから能義郡へ越えて草野からこゝに至り、中継地となった。そして安来港へ送った。この道は大正末年廃業するまで続いた主要経路であった。この故地でありのち中継



（写真）下ー上図右上方向の山上より谷奥を望む　　前頁ー上図左下の山上より谷尻を望む

（→の場所に高殿）

地ともなった十年畑村についての話を挿入すると、

十年畑ト蔵氏

十年畑の饅頭屋に伝える話、その裏山にある金竜山城福寺の由来記とでまとめると、永禄年中月山富田城主尼子義久が、遂に毛利氏の軍門に降って、数人の家臣とともにその下に送られると、家臣の一人だったト蔵義範は若月入道・足立久純ほかの諸氏とともに、十年畑へ来住帰農し、のち高尾山麓に寺を創建した。それが城福寺である。今日城福寺の高い石段をのぼりつめ山門をぬけた左側、本堂の正面には初代の大き い墓石がある。本堂内陣本尊脇にはその大位牌がある。この子が竹崎村ト蔵家に入った。ト蔵家はこの初代を竹崎ト蔵家の初代とし、現ト蔵家の墓所にも墓石がある。ト蔵氏は伯耆の武士で尼子氏に仕えていたものである。従ってそれ以前伯耆から度々養子として竹崎ト蔵家に入ったのはこうした理由からである。実質ト蔵家を継いだのは2代からとなる。のちその次男九左衛門が十年畑の故地に分家し居住した。その7代和七の長男が天明6年1786に近くに分家し饅頭屋の元祖となったという。

竹崎ト蔵家3代は甚兵衛（正房）で鉄師として急成長をする。

その長男は大呂村堀の内に分家し堀の内ト蔵といゝ、次男次左衛門が家を継いだが、享保6年荒島村に分家し、荒島新田60余町歩の干拓を行う一方、船による運送業も行い、本家の鉄の輸送もうけもって栄える（詳細は本誌78・83・87参照）。三男清左衛門も大呂村に分家し山根ト蔵という（のち楠の姓。現存）。龍駒鈩の経営も行う（本誌23号参照）。絲原家所蔵の「鉄山旧記」は、当家所蔵の「鉄山根元」の写本である。よってト蔵家は

四男甚六（甚兵衛）が継いで鉄師となり頭取もつとめる。

以後大正14年まで鈩、大鍛冶屋の経営を行う。

卜蔵家の鈩経営の記録が確かなのは享保年中からで、竹崎村の龍駒鈩、仝赤川鈩、下布施村の下布施鈩、竹崎村の山郡鈩、仝万歳鈩、大呂村山奥鉄、竹崎村の竜駒鈩、仝亀石鈩（船通山登山道中に小舟遺構が一部露出し、関連施設趾が残っている）、そして明和5年1768より原鈩に移って、大正14年まで158年間操業を続けた。卜蔵家の元屋敷は今日の卜蔵庭園を中心としたところであった。元の敷石一部に現在公民館が建てられている。

その北東に墓地がある。現屋敷は原鈩の高殿を中心の関連建物に近接してのち移転し、絲原家の現屋敷が主力鈩の鉄穴鈩をとりまいてあったのと同じ形態である。村下以下の技術者や雇人も近くに住み、分家も居を構えるという、混住雑居生活で、いわゆる山内形態とは趣を異にしている。2頁の図の左手が谷奥、右手が谷尻となる。この主従の共存生活形態は極めて後世に大きい影響を与え、新しい時代の招来に積極的意義を生んだのである。それは特に絲原家において顕著であって、今日にも続いている。

原鈩は大正14年廃止後、10余年を経た昭和13年4月2日から（靖国鈩の開設に遅れること2年8カ月）、帝国製鉄株式会社がこゝを復活し、「叢雲鈩」と呼ばれて敗戦まで操業を続けた。

惜しいことに昭和38年高殿がのぞかれた。若干の遺構や、規模の大きい金屋子神社の一部や鉄池が残っている。本誌113号の写真にみえる頌功石は、鉄池のほとりにある。明治31年旧12月26日には、三日押一代の出鉱量63駄1歩という記録的な大量の数字が刻まれている。卜蔵家の最盛期であった。

卜蔵家のたたら製鉄関係の古文書はすべて町に寄附されていて、町の図書館に保管されている。一応の整理がなされ、貴重な記録の一部が利用されているにすぎず、根本的整理と組織的検討研究はこれからである。

かつての庭園は、町指定文化財となって維持管理がなされているが、わが国庭園史の上でも貴重な徳川初期築庭のものである。これや頌功石、前記の亀石

十二月句会

冠雪の嶺々けわしき貌で佇つ　浅野　としお
寒鴉ふてぶてしくも柿翔たず　岡田　蹊花
己が影背負いて老婆小豆選る　岡田　麗水
煮凝を昼に取り出しひとり飯　小川　あきお
三日月に事問うてみる年の暮れ　楠　房子
落葉積む底の底なる水の韻　高木　白虹
年忘れ湖にネオンを落す湯宿　新出谷　一華
蜆売り言葉も親し夕時雨　錦織　富江
すんなりと云えぬ言葉や霜くずれ　峯石　美代子
両の手に餅を遊ばせ園児の輪　渡部　夕峰

一月のうた

季来れば播かむ種子選る膝を病む妻店頭に呟きながら　常盤　はるまさ
四十年経しも肺炎でみまかりし二才の吾子を折りふしおもふ　伊藤　萩雨
生垣に白き山茶花咲きめぐる家覚めをらず霜深くして　野村　節子
吾れを呼びし君の口笛思ひ出づ風に空稲架鳴れば偲ばゆ　佐藤　喜代子
昏れはやき山田に晩稲を刈りいそぐ無口な夫も時雨を言ひて　永井　弥生
忘れゐし軒の風鈴木枯にひねもす鳴りて吾れひとりゐる　岡田　時子
走りゆく雲は三日月さへぎりて秋霖しばし裾をぬらしつ　松浦　愛子
出展の色紙を書かむと手習ひを繰返へしをれば夜はくだちて　戸屋　暎子
道の辺の芒はひくくなびきつゝ風吹くなかを家路につきぬ　小早川　恵子
原稿紙机上にひろげしばらくをためらひゐたり視力薄ければ　安部　夕波

斐の上川柳十一月抄

友と会い句友と握手除幕式　安部　春恵
里帰りよく寝て食べて母の愛　渡辺　好之
幾年せの努力輝き碑に集う　真綿　よし子
選挙戦茶呑み話をまきちらし　松浦　木公
ユニホームがその気にさせてゲートボール　佐佐木　千世
ほおずえでいねむりかくす聞き上手　加納　治江
いたらぬも句碑の仲間の幸想い　安部　正子
ナを聞き噛んでくだいてやっと一　若槻　白馬
もみじする農道の木々燃えるよう　植田　悦子
禁煙の先手は息子たちがとり　藤原　千代子
早や堀らにゃつぶやく老婆芋畑　高木　白虹
そんな腰とてもヒットなど打てわせぬ　松田　牛歩
きびしい過去があって翔び切れず　石原　世以

訂正 126号2頁最下段あとから5行「春と修羅」

◇報告◇

第4回陰陽郷土史研究大会は、横田町及び町教育委員会の御協力により、去る11月17日当町で開催、広島・岡山・鳥取の各県から約80名、県内及び町内会員を加えると150名に近い参加を得て、終日熱心に講演・発表・討議を頂いた。回を重ねるに従い各地に自主的な研究会が誕生し、組織の力が目に見えて来たのは、今後の陰陽各地の研究の交流に大いに役立つものと思われ、喜ばしい限りである。次回は是非共岡山県か鳥取県でお願いし、新らしい舞台が開くことを期待したい。今年は今までと違い援助があったため、中世横田庄に周囲から光をあてるという意味で、講師、発表者の方々にお願いし、小地域を視野を広めて研究する方法の御指導も頂いた。毛利氏研究に造詣の深い広島大学の岸田裕之教授は、在来とかく敗者或は滅亡した国人衆などは顧みられないのに、こゝに視点を置いて、地域のもつ固有の史的性格を掘り起さなければならぬとされ、石見国の東南隅にあって、雲芸石の要衝を押さえていた高橋氏の推移をえがき出すとともに、山口県の「林家文書」の分析を通じて、山間地域領主層の性格を浮きぼりにされ、中世のこれら国人の活動は、今日のこの地域の性格ともつながっているという、興味ある指摘もされた。続いて仝大学の秋山伸隆講師は、中世後期即ち室町期以後の中央と地方・地域内の流通（町と市）、そして守護・国人のその流通の支配にふれ、具体的に古文書によって戦国大名がどのように都市支配、海上・陸上の交通の支配を行ったかを、流通面からとき、さらに商人・職人の支配、これが大名の財政基盤を確立し、軍事力を確立したものであること、陰陽各地の情況を具体的にしめして明らかにされた。その中で横田庄の「中村市場」についての全く新らしい資料も紹介され、横田庄の中世史研究の前進に強い引綱を与えて頂いた。ついで島根女子短大の藤岡大拙助教授は、奥出雲の仏教の歴史について、出雲の歴史的視野の中で、当地の真言宗岩屋寺、曹洞宗総光寺の果した役割を、具体的に明快に語られ、それらが各々地域形成に大きい力を与えたことを興味深く浮上させて頂いた。

午後は日南町の安達三二氏が伯耆の歴史を通して出雲との関係を語られ、新見市の浅原公章氏は、当町馬木の杠氏（新見杠城主で落城後馬木に来住、たたらの一先駆者となった）が、新見の守護であったという系図を、諸文書の上から考証された。そのあと討議に移り、総括司会者の島根大学井上寛司教授によって、以上を踏まえて今後中世横田庄の研究の深め方とともに地域史研究のあり方をもまとめて頂いて、時間の少ないのを心残りとし幕を閉じた。午前の広瀬繁登・午後の山根正明の両氏の適切な司会とともに、内容豊かな会となったことに、深く感謝するものである。

逆夢か正夢か

21世紀後半への危惧（上）

福岡教育大学の赤木祥彦教授と徳山大学の貞方昇教授の共同研究によると、奥出雲の砂鉄採取地は、低い丘陵性の地であり、そこは雑木林に覆われ保水力が豊かであり、地盤の花崗岩は長年月をかけて、風化が進行した地帯であるという。この地の人々は中世末以来、こゝを掘り起して流して川砂鉄をとり、やがて流し堀りして洗樋による採取を続けて来たが、多くはこゝを雑木林に復活させ水源涵養につとめ、水田への湧水源とする知恵を働かせた。その配慮が徳川期を通じて少なかったのが、原口地区で今日でも水田用の水源の枯渇に悩まされる。今日こうした土地の多くが開発地となりつゝあるが、保水力の減少は免れまい。人口の動態は都市部へ集中し、工業用水、飲料水ともに需要が急増している。21世紀後半には竹崎地区、小八川地区がダムに変った夢をみた。大阪渕を簡単に堰とめて横田盆地が巨大ダムになったのも夢みた。

逆夢であってほしい。道路網の整備とともに奥出雲全般の定住人口の増加も考え、緑化の重視が必要と思われる。

神話の今日的意味

神話は古代の信仰の表現であった。今日ではまつりのスローガンにふさわしい、まつりを通しての融和が新しい意味を生んでいる。オロチの話も斐伊川全流域の共有財産にまつりを通してなっている。記紀の神話の正しい意味について当地に関係深い窪田蔵部氏は歴史読本増刊号で語っておられる。（蓬）

（3頁5段よりの続き）鈩の遺構等保存すべきものが多い。

奥出雲のたたら遺跡としては、砂鉄採取の羽内谷鉱山とその切羽、本場跡、鈩としては亀石鈩とその関連遺構、原鈩関係、大馬木の大峠鈩遺構、絲原記念館と鉄師の家及びその家の歴史と鈩用具及び操業の過程それに多数の古文書、さらに鳥上木炭銑工場、日刀保たたらと、実にすべてが豊かに揃っている。これらを生かして、野外たたら博物館を構成すれば、わが国はもとより、世界唯一のものが出現することになる。放ってある遺跡は荒廃してゆく。各地を訪ねてみて、たたらに関するわずかの遺跡に対し極めてその保存に力を注いでいるのを見ると、灯台もとくらし、紺屋（こうや）の白袴を感ずる。このまゝでは宝のもちぐされの他人事でなく、たたら研究の上でまた観光の上でも、全く責任を放棄しているようなものである。

（筆者　横田史談会員）

会員頒布一部百五十円／六九九－一八　島根県仁多郡横田町一〇K一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座　松江0－601）頒布／横田史談会　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

たたらとそろばんのふる里

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 130 号
（2 月 号）
昭和61年 2 月 1 日
奥出雲編集集団©

奥出雲の仏教（上）

藤岡大拙

この文は昨年11月17日の第4回陰陽郷土史研究会で講師の藤岡島根女子短大助教授の講演の要旨である。（要旨抄記の責任は編集者にある。）

仏教の歴史は各宗派単位のものは書かれているが、総括的なものはないのが現状である。本日はこの主題に対し庶民とのかかわりを通して迫ってみたい。

出雲国風土記の時代

幸に出雲には全国で最も完備した風土記（天平5年733勘造）がある。その中には神社が399社記述されていて、奈良時代の延喜式の各国の神社数からみると、風土記時代には一位は大和であろうが、出雲は3〜4位であったであろうと考えられる。寺院については11寺の記載がある。固有名詞のついた寺は教昊寺のみで、安来市（当時は意宇郡内）内に遺跡があるが、他は唯単に新造院とのみあるだけである。畿内は当時の仏教伝来の中心地で多かったと思われるが、加藤義成氏は研究書の中で、この数字でも多い国だったと言っておられる。

分布を見ると、意宇郡ー4、楯縫郡ー1、出雲郡ー1、神門郡ー2、大原郡ー3であって、飯石・仁多両郡にはないが、大原郡を奥出雲とする立場からすると、三カ寺あったことになる。これら11カ寺の記載されている所在地は、奈良平安時代に創立された密教寺院とは結びつかず、勿論今日の天台・真言の密教古寺ともつながらない。そこで風土記時代の寺院は、その後衰亡したものと思われる。

密教寺院（編者の註あとに）

奈良時代の終りから平安時代にかけて密教寺院が生れ、山伏・修験者の行場として、天台・真言の平安仏教の末寺となってゆく。天台宗の寺院として現在あるものを山陰の東から拾いあげると、鳥取の摩尼寺、三朝の三徳山三仏寺、伯耆の大山寺、安来の清水寺、平田の鰐渕寺などで、日本海岸沿いの山ふところにある。特に三仏寺・大山寺は修験者の道場として知られ、平安から鎌倉時代にかけて、大山寺は中央にも知られていた。

これらはそれぞれ末寺を有していたが、平田の鰐渕寺には島根半島を東に向って、枕木山の華蔵寺から美保関の寺まで数カ寺あり、南に向っては出雲市に一カ寺、その南飯石郡の鍋山の禅定寺、そして掛合の円通寺まで、西へいくと多伎町の華蔵寺が末寺であり、いずれも山岳修験の行場であった。

清水寺にはこれほど末寺もなく、延びはとまっている。そして備後・伯耆・石見へも、天台はのびていない。なぜ南即ち奥出雲の方向へ延びなかったかということを考察してみると、真言系の密教の拠点があったからであろうということに行きあたる。すなわち奥出雲横田の岩屋寺、三刀屋の峯寺の存在である。前者は密教として古く、平安末期には修験者の行場として、その地方の中心であり、後者は修験道の道場として特別な寺格ももっていたのである。

在来鎌倉時代には、新しい鎌倉仏教が発生し、雨後の竹の子の如く広まったとされているが、やはり天台真言が圧倒的に強く、出雲では末期まで天台の時代であった。鳥取県も三仏寺や大山寺があって天台の力は大きかった。従って一神教的色彩の強い真宗は、多神教的密教とはなじまなかったから、伯耆には全く広まっていない。しかし新仏教の中でも雑修的（いろいろの仏様を拝む）新宗教は入り易かった。だから真言密教の強いところほど、雑修的要素の多い仏教宗派が入っている。

（次回から新宗教流入の要因、および奥出雲の実情の要旨を掲載する。次に講演中の仏教用語について、種々関連もあるので、広辞苑などから引用をしておく。）

註1**密教**——秘密教の意（真言はその意味が深く、菩薩もうかがうことができないので秘密という）。大乗仏教の中の一系統で真言宗と同じ。

大乗仏教——解脱の理想に達するための偉大な手段を大乗といい、すべての衆生を救済して仏陀の境地にまで導くことを理想とする仏教の傾向をいう。これに対して小乗仏教がある。解脱の理想に達するための手段のうち劣ったものを小乗といい、俗世間を超越して修行と思弁に専心する出家教団の仏教に対し、大乗の人々が付けた名称である。

密教の中でわが国では、空海（弘法大師）が伝えた真言宗を東密といい、その他に最澄（伝教大師）らが伝えた台密（天台宗という）もある。ネパール・チベット・蒙古に行われるのも同じ起源であり、かつては東南アジアで最も盛んであった。

註2**修験（道、者）**——山野に

（3頁4段に続く）

奥出雲の仏教（上）・龍虎相搏つ・川柳・短歌・俳句

地球の恵みを再認識し愛護を第一としよう

龍虎相搏つ

❖ 昨年は十月半ばから何かにつけて追いまくられ、やっと年末で一息入れたと思うと、大晦日から珍客も交えて家族が帰郷してくると、節度を保ちつゝも話や遊びそれに食べること飲むことに、また時を過して仕舞った。だが調べること読むこと書くことに比べると、やはり楽しいから追われても気は楽である。漸く嵐が去ると、お返しせねばならない賀状書きは素早く片付けたが、新聞や雑誌、求めたもの、頂いた本の山には、どれからと思ううちに手をつけるのが億劫で日が経った。19日の日曜日は珍らしく暖かい日で、日射しいっぱいの部屋で、一人静かにいたことも手伝って漸くとりあげて見た。廻りをみると昨年からのやりかけのものが、あちこちに積み上げられている。

❖ 今年はトラ年だという読み物がやたらと眼に入ってくる。十二支ではトラは寅と書くことになっている。虎とは全く縁のない文字で、宀と大と臼の合字で、人が家に居て、身を敬める貌をあらわし、また宀は家、大は人体、臼は両手即ち両手にてキチンと我身をしめくくれる義という。大辞典からさらに引用すると、十二支に配して第3位「トラ」とし、方角では東東北、時刻では午前四時、月では夏の時代（中国の記録で明らかな歴史時代の最古）の正月に当るとある。またツツシムと読（訓）むとあり、熟語をみても、全く動物のトラとは関係なく、勿論人間がトラになるという意味もなく、しいて言えば酔ってトラになることをツツシムとつながるようである。

この字をそのまゝ身辺にあてはめると、今年わが国が外交上大きい問題として年頭からとり組んでいるものが、東東北にかかわるもので、春とともに雪解けが近ければよいという思いにかられる。時刻では午前4時という。だんだん朝早くめざめるようになったので、今年はこの時刻となるのかと思うが、何にしても一日の生活時間もうまく使いこなさねばなるまい。

❖ ところがトラ年に因んだ絵は、すべてトラ即ち「虎」の絵である。年新らたまってからさる方のお宅に伺って床を拝見した。そう古いものではないが、虎の本場中国の一地方の画家の作品で、線はすべて筆力十分な墨での一筆書き、竹林の間から虎がぐっとのぞいている。

二〜三種の色がさらりとほどこしてあるが、虎には生きているような気迫がある。気力の沈静をかきたててくれる活力がある。

一筆書きでの勢の良さということで思い出すのは、海北友松の墨絵である。昨秋の絲原記念館に展示してあった「鷺図」の双幅は、円山四条派の華麗な絵の中にあったので多くの人々はなにげなく見て過ぎる方が多かった。友松は室町期に続く日本のルネッサンス期安土桃山時代の画家（1533〜1615天文2〜天和元）である。近江北国の浅井家の重臣の五男で、幼少の頃は京都来福寺に入っていたので、浅井家が舅である織田信長によって滅ぼされた時にも難をのがれた。

のち還俗して海北家再興を念じたが果さず、狩野元信について絵を学び、武家の激しい気性と時代的おおらかさの融合をみせたと評せられる作品をのこした。筆に気迫があるのはその天性の流露で、どれも狩野派の技術をこえているという。さきの絵は、空間の多い画面に極めて素朴な静かな鷺のたたずまいを描きながら、一筆書きからもれて来る友松の気迫には、強く胸を打つものがあった。

❖ 「龍虎相搏つ」と同じ意味の語に、龍拏虎攫、龍攘虎搏がある。ともに龍と虎とが互いに拏（つか）み攫（う）ちて争うことで、力量の相伯仲した二人の強者のたとえにつかい、転じて英雄の相戦うにもたとえる。眼を転ずると世界の外交舞台は米ソ相搏つ前夜の感があり、和平討議も虚々実々である。今日は一触即発の場合も龍虎だけの傷付き合いに終らぬ地球消滅につながっている。それに低開発国をめぐっては、随所に龍虎の対立の渦が巻いている。世界の経済界は生命には直接かかわりないとはいえ、小さいが一匹の猛虎をめぐって、数多くの龍がどぐろをまいて対峙している。食うか食われるかに進むか。そこで今年の先行きは暗いという。外的条件が内的発展の根本要因となっているわが国は、それが欠陥である。かつてはそれを力によって解決しようとして誤まった。21世紀に向っての成長にど

う対処するか、龍虎相搏つはその道ではない。

新聞を賑わしているわが国の雲上では、龍虎のみでなく、ライオンも豹もさらに熊も狐も狸も加っている。松江は終ったが4年に一度の龍虎相搏つ場面は各段階で毎年のように訪ずれる。しかし、それぞれによって、それぞれの段階の地域が発展につながることを思うと、当事者の方はもとより、庶民にとってもこれほど嬉しいことはない。

新聞によると、トラ年は波乱の多い年という。明治には第一回衆院選挙という今日では考えられない画期的なことが、大正は第一次世界大戦開始、戦後は朝鮮戦争開始、金閣寺全焼、田中金脈退陣等々。さて今年は。

❖ 虎は実在の動物である。昨年プロ野球ではトラがライオンに勝った。ライオンは百獣の王というが、ライオンは草原の王者、トラは森林の王者で、実際はトラが強く、トラの出没するところにはライオンはいないという。

❖ 虎といえば年輩の者は、加藤清正が朝鮮で虎退治をし、三本の槍先の一本を噛み切られた話を思い出す。アジアはトラの庭で数が多く、トラの語源は中国という。50年前に10万頭も生息していたトラも、毛皮のための乱獲と森林伐採によって、今は小範囲に野生しその数も6500頭弱となったという。

日本ではトラの化石が出土しているが縄文時代には絶えているらしいという。欽明天皇6年545、百済からトラの皮を持ち帰ったというのが日本書記にある最古の記録で、本物のトラは寛平2年890に、子トラが日本に初渡来し、巨勢金岡が写したのがその後のトラの絵の手本となったといい、豊臣秀吉は朝鮮派兵の帰途、トラを檻に入れて持ちかえったという。江戸時代時々見せ物となるものが入ったことはあるが、公的飼育第一号は明治26年上野動物園が引きとったのが起りで、現在全国各地では200頭以上がいるという。

❖ さて実在の虎に対して龍は中国で鱗虫の長として、神霊視される巨大な想像上の動物で、鳳・麟・亀とともに四霊の一、よく雲を起し雨をよぶという。「たつ」ともいう。仏教では竜神・竜王をいゝ、蛇形の鬼神で、地上・空中・水中に住し、雲雨を自在に支配する力を持つとされる。そこで水害の多い井堰・河川の傍らにこれをまつってその加護を願うのは古くから行われている。この地方にも各所にある。こうしたことから偉大なるを意味する語となり、「龍顔」のように天子に関する物事に冠して用いる語となっている。

この実在と想像上の動物を何時頃から合わせ呼ぶようになったであろうか。調べてみると、中国の古典の易経にあらわれる。儒教が中国の国学と定められると、易経は儒教の経典「六経」の首位におかれ、中国伝統学術の根本とされた。成立したのは、わが国の縄文時代初期の紀元前8世紀で、夏よりあとの西周末期か春秋初期と推定される。古代中国の占いの原典であるが、広く普及すると、難解の上に、占なおうとする個々の事例にあてはめるため、統一的な解釈理論も必要となり、戦国末期から前漢初期（いづれも紀元前）にかけて、10種の書物が作成され易哲学が完成した。その中に「繫辞伝」がある。この書は易を単なる占いのものとして解釈において霊験を得るための法を修することを修験といい、修験道とは役小角を祖と仰ぐ仏教の一派で、日本固有の山岳信仰のおもかげを伝えている。護摩を焚き、呪文を誦し、祈祷を行い、難行苦行をして、神験を修得するもので、これを修行するものを修験者という。多く被髪で兜巾を戴き、篠懸および結袈裟を着け、笈を負い、金剛杖をつき、法螺を吹かし、山野をめぐり歩いて修業する。もとは太刀を佩びた。山伏・験者ともいう。太刀を佩びることから刀匠がこの中から生まれたともされている。今日の刀匠の正装がこれに似るのは、ここに由来する。

修験道には、醍醐天皇時代（897～930平安後期）に僧聖宝（真言）が開いた三宝院流と、堀河天皇時代（1086～1107平安後期）に僧増誉（天台）が開いた聖護院流があるが、室町時代には聖護院を本所とする本山派と、醍醐寺を本所とする当山派が対立した。当地方はこの時代は北朝系の荘園となっていたので、当山派に属していた。

註3 **大峰**——は奈良県吉野郡十津川の東の山脈で、最高峰は仏教岳1915米で、和歌山県熊野に及ぶ。昔は金峰山の頂上と考えられた。修験者の修行した根本霊場で、熊野から入るのを順といい、吉野から入るを逆という。岩場の荒行があり、当地方の各地に小規模の岩場が散在する。

横田町六日市の山上さんは、一般向けの大峰山上さんを勧請したもので、岩壁にそのことが刻んである。大峰へたびたび入って修験の功を積んだ人を大峰先達といい、大峰で修業する修験者を大峰聖という。

註4 **雑修**——念仏以外の雑行を修めること。

しばぐり句会正月抄

満天の銀河をわたす冬欅　浅野としお
風おちて乱舞の雪片池に入る　岡田蹊花
木守柿一夜に失せて百舌猛る　岡田麗水
初墓参香一束を雪に立て　小川あきお
南天のかかる小雪を赤に染め　楠房子
雪かむる梢の柿に群る鶫　高木白虹
新築の門燈あか〳〵大旦　新出谷一華
初日記文字ていねいにお元日　錦織富江
布を切るはさみの音や初仕事　峯石美代子
潜ること楽しくみえしかいつぶり　渡部夕峰

二月のうた

耳鼻の冷えまさりきて寝返るに凍結予防に流す水音　常盤　はるまさ
我が戸籍電算機にて出づるなり宇宙マンガのごとき音して　小早川　恵子
行儀よく膝を並べてお年玉いただく孫ら十二人の掌よ　野村　節子
いま一度故郷の水を飲みたしと切に思ひき北支の戦野に　伊藤　萩雨
幾度か霜をかぶりし鶏頭をゆすりていくばくの種子を掌にのす　永井　弥生
障りなき一年なりしと思ひつつ大晦日の星を見て佇つ　佐藤　喜代子
書初めをせむと窓辺に机出し溢れる春の光りに向ふ　岡田　時子
心なしか照れかくし得ず蓋ひらくこの贈りたる還暦祝　児玉　敏郎
松飾りようやく了へて義父母は陽当る縁に茶を呑みいます　戸屋　暎子
新年の祈りをこめて大社（おおやしろ）に還暦の夫としばし佇む　景山　悦子
寄り添ひて手をとりあへる若き二人茶房の窓に湖の暮れつつ　松浦　愛子
詩人犀星生みし金沢古き街人のこころの暖かき街　安部　夕波

斐の上川柳十二月抄

ボーナスも花ももらえぬ妻の愚痴　松田　牛歩
このとこ内緒だったが風に乗り　太田　亀甲
後一枚淋しくなったカレンダー　横山　まこと
サイレンに近くと聞いて身振いし　真綿　よし子
御無沙汰が以心伝心のくしゃみつく　若槻　白馬
これだけは国の機密とうまく逃げ　松浦　久寿子
入院の主のかえり待つ小菊　安部　春恵
ねんごろに焼芋作り孫そっぽ　安部　正子
真実もエゴが邪魔して嘘に化け　高木　白虹
遅刻して会終りまでとけ込めず　藤原　千代子
落葉掃き秋の深みを知らされる　松浦　木公
供米を終えてくつろぐしまい風呂　渡辺　好之
講師にはすまぬがいねむる農繁期　石原　世以
第三の人生だるまに眼を入れる　藤原　のぼる
舞う雪に喝をいれられ冬支度　佐佐木　千世
大正は温泉の湯がもったいな　児玉　哲呂
損ばかり誤解を招く舌足らず　松浦　亜以
延命といえず国鉄水を売る　無名士

せず、自然哲学と実践倫理をあわせ説く経典であった。

その核心は陰と陽（剛と柔、乾（けん）と坤（こん））の対立と統一という陰陽二元論である。これはわが国に早くから入り、わが国の思想従って古事記・日本書記をはじめ、史書その他の思想の根底に深く影響を与えた。従って陰陽五行説を理解しなければ、わが国でも古典の解釈も記紀神話の正しい解釈も生れないとされている。

人間にとって最も重要な行動原理は「中」（中庸）である。それは決して「足して二で割る」或る妥協ではない。一時の現象に動かされるのでなく、変化する事態の本質を見きわめて行動することであるとする。省略したが陰陽の対立と統一、これが宇宙の構成の根本原理であり、あらゆる変化はここから生れるという宇宙の法則と、この人間行動の原理を余すところなく明らかにした。

この「繫辞伝」の中に龍虎があらわれる。よく知られている「君子豹変す」「積善の家には余慶あり」の言葉はこの中にある。前者は態度・立場をからりと変える場合の弁解や、あるいは皮肉として用いるが、本来は社会の指導者（君子）が従来の面目を一新して、新社会の建設に努力することであり、後者は大きな幸も不幸もすべて、長い間の積み重ねだという意味である。

もう13年も前になる昭和47年の早春発表されて一大旋風をまき起した、奈良県の高松塚古墳の東壁画に、気品を感じさせる姿の青龍が、西壁画には白虎が描かれている。埋葬者については種々の推定がされている現状であるが、古墳時代の終末期（7世紀末〜8世紀冒頭）にあたるもので、大陸で確立してから10世紀即ち1000余年生きつづけた龍虎思想の産物である。それからさらに1200年今日なお龍虎の言葉は生きている。

❖ 虎の絵——昨秋の絲原記念館の記念名宝展には海北友松の絵の隣に岸駒の「虎図」があった。今年3月中旬からの春季展にはトラ年に因んで、「美術工芸品にあらわれた龍虎の世界」展が予定され、開館以来はじめて岸駒作の「絹本墨画虎図」が、三幅対揃って公開される。岸駒（1790〜1838寛政5〜天保9）は金沢の生れ、本姓は佐伯で岸（きし）と改姓、名を駒といったので人呼んで岸駒（がんく）といった。のちそれを号とした。京に住み有栖川家の侍臣となり蔵人町衆従五位下越前守に任ぜられたので、絵師となっても越前守を落款に入れた。画法は狩野・円山・四条の諸派を学び、花鳥山水わけても獣類を得意とし、円山四条派に対し岸派と称せられ、特にトラの絵にすぐれ「トラの岸駒か、岸駒のトラか」といわれる程であった。この作品は最も得意中の得意の猛虎三様を三幅に描いたものである。（写真はその一幅）

❖「フォト島根」新年号は昨年の暮らしと自然①「木を知る」に続いて今年は、②「鉄を知る」であった。昨年は奥出雲の森林や住居・銘木工芸品の写真入りであったが、今年はやはり奥出雲のたたらが主流で、「日刀保たたら」そこでの作刀研修・雲州そろばんが登場した。企画に参画した一人として、奥出雲へ県内全戸の人々の関心がむかうのを喜ぶものである。

（蓬　頭　子）

会員頒布一部百五十円／六九九〜一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0-601）頒布／横田史談会　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

たたらとそろばんのふる里

奥出雲

題字　糸原風亭書

第　131　号
（3　月　号）
昭和60年3月1日
奥出雲編集集団©

奥出雲の仏教（下）

藤岡大拙

新宗派流入の要因

天台真言密教が圧倒的に強いところに、新仏教が入るのは雑修的要素の多い仏教宗派が入ってくる他に、次のような要件で自立性の強い新宗教が入っている。その一つは新宗教の宗祖かそれに準ずる者が巡って来ることである。即ち伯耆因幡では時宗の一遍が廻って来ている。恐らく但馬から入って因幡・伯耆を巡り、どうしたわけか出雲へ入らず南の四十曲峠を越えて、備中の国へ入ったと思われる。その4代あとの一向も来ている。

その後ほかにも来ているから、時宗の地盤ができた。その二つは地元から名僧知識が出るとその宗派が入って来る。因幡・伯耆にも曹洞宗の名僧が出てひろまっている。仁多郡では地頭三沢氏の一族から不見明見が出ている。曹洞宗では大変著名な僧で、これが亀嵩に総光寺を建てた。

その三つは、それを地元在地の国人層・領主層が、積極的に外護（げご）することが大きい要件となる。伯耆で曹洞宗が広まったのは、在地領主野津備後守が、備中から曹洞宗の僧を呼んできて、領内の東伯郡中山町に退休寺を建て、寺領を寄進したのがもとで、そこから米子・黒坂とたちまち伯耆全域に広まった。あとで伯耆守護山名氏も曹洞宗を外護するようになった。（理由は省略するが、もともと守護級の僧が各地に派遣されて、爆発的に全国に広まった。不見明見もやはりその一人で故郷に派遣された。それは広永の頃である。

南北朝の終りから室町期が、この鎌倉仏教が広まりはじめたと考えてよい。

奥出雲の実情

寺数をみると（真宗）（曹洞宗）

飯石郡（五カ町村）	％	50	22
仁多郡（二カ町）		14	35

で、飯石郡では真宗が多い。その理由は明らかで、真宗の一拠点が広島県の鞆の浦にあり、ここから三次を経て出雲の赤名へ入った。一方江川を下って阿須那に入って次々と広まり、石見門徒といわれるほど地盤を築いた。邑智郡では75％をしめる。

赤名の西蔵寺を拠点として、来島・頓原・掛合へ、そして須佐へ越して神門川を下った。赤名では70％、頓原・掛合へとゆくと減少し、三刀屋町では25％となる。この方面から山を越えて北へ進むと真宗は急に薄すれる。神道の大社教の地盤で一神教的真宗は入れない。従って出雲の平原部は薄い。飯石郡の西北奥部の仁多郡へも伸びていない。岩屋寺の強力な密教勢力が強かったためである。民衆と岩屋寺の関係はどうか。どのようにして真宗の広布をはばんだかは、明らかにされていない。しかし私は雲陽誌（18世紀享保2年刊）の記述を資料として、民衆とのかゝわりを次のように推測している。

まず掛合町を調査した時、観音堂・毘沙門堂・十王堂（わ）・辻堂が多いところは、天台真言密教系の寺院が存在することがわかった。どういうことか密教系の寺院が退転（たいてん）（移り変って悪くなること）して寺庵ばかりになり堂として残ったのを、辻堂・観音堂・地蔵堂としたようである。真宗・曹洞宗の寺院のあるところにはない。仁多郡を雲陽誌でみると、寺75ケ寺（昭和42年までには統合廃止して45カ寺）以外に、

辻　堂	113	観音堂	28
地蔵堂	17	阿弥陀堂	10
釈迦堂	10	薬師堂	8
十王堂	8	毘沙門堂	6
不動堂	1		

で甚だ多い。規模と宗教行事から位置づけると、天台真言系の寺とか庵が、退転して無住となり仏像のみがのこり、村人の共同体制でそれが護持されて来た。即ち中世の前半（南北朝以前か或はそれ以後まで）岩屋寺の真言密教の勢力が仁多郡を覆っていたと判断せざるを得ない。そこで真宗が入り得なかった。横田八幡宮の勢力も強かったが、ここでは大社教ほどには影響は与えていない。この辻堂などが、真宗以外の新興宗教の拠点となって復興されている。馬木では法華宗が多くの寺庵を再興した。曹洞宗も同様に寺庵を復興した。例えばさきの総光寺は応永の初めであるが、末寺16カ寺（仁多7、大原5、飯石2）や大きい横田の晋叟寺もある。

三沢氏は臨済宗も外護している。一族の玉林和尚をして三沢の蔭涼寺（元妙厳寺）を（白隠禅師の書がある。県指定文化財

奥出雲の仏教（下）・尼子家臣団の分析①・俳句・短歌・川柳

尼子家臣団の分析①

仁多郡西部の地頭　飯島三沢氏物語⑨

分析の基本となった文書三つ

順序からすると、本誌107号の「出雲における国人衆成長推移表(上)」に続く(下)を掲載すべきであるが、推移表(下)の内容については本誌109・111・112・117・119・126の本物語の③〜⑧でのべているので、あとでまとめて(下)の表として掲載する。しばらくはその延長上にある。家臣団の分析を尼子氏滅亡までのせ、さらに尼子氏と出雲中心の国人層の動向年表（尼子氏の家臣団となったり離れたりの理由つきの動向）をのせる。

自尊上人江御奉加目録（以下奉加帳）

尼子氏が守護をひきついだのは主家の京極氏からであるが、当時なお京極氏は本貫地近江の守護であった。その近江の琵琶湖の北に浮ぶ竹生島の宝厳寺に残っている文書で、経久の晩年（天文6年82才、嫡男政久すでになく、嫡孫詮久—のち全10年8月、将軍義晴の一字をもらって、晴久と改名——24才に当主をゆずる。4年後の全10年84才で死す）に、宝厳寺の自尊上人が出雲に来遊し、同寺の造営の奉加を募った際、詮久が天文9年1540 8月19日付で、尼子一門をはじめ、出雲国人衆および富田城詰めの諸将に奉加を命じたものである。

天文7年詮久は播摩ついで備中を抑さえ、伯耆・因幡・但馬の名族山名一族も昔日の勢なく美作・備前・備後の旧族赤松氏の権威も地におちていたから、周防の大内義隆を背景とする毛利氏の勢力を抑さえ、安芸・備後を制圧して上洛し、祖父の志をついで覇を天下にとなえようとしていた。

天文8年血気にはやる詮久は一族の諫言もしりぞけ、遂に翌9年の9月毛利氏の本拠安芸北部の郡山城攻略にのり出したが、伯耆の諸将が、但馬の山名氏の勢力を頼りとして回復をはかり、因幡の山名氏の重臣が伯耆へと進出する情勢の中で、吉田の郡山城に肉薄したが、翌10年正月半ば戦利あらず、総退却をきめ遂に退陣をはじめたが、苦難言語に絶する敗戦となった。その出陣前の詮久の勢あなどるべからずという時に、自尊上人は富田城に入っている。

この時の家臣で奉加の対象となったのは中以上のもので、それが四つに位置づけられている。

①尼子一門と

②尼子御一族　③奉公の末

（今岡論文から——尼子御一族は幕府外様衆の家柄である。宍道両氏は尼子氏の祖高久の弟秀益を祖とし、鞍智右馬介は高久の祖父京極高氏（道誉—バサラ大名）の弟時満を祖とする。従っていづれも**京極氏の分流**で、尼子氏の一族としては遠すぎる。京極氏の一族たるによって「御一族衆」とされている。尼子氏自らが自らの支配権のよって来るのを、京極氏の後継者であると強く意識したことのあらわれであるとする。また奉公の末は、在来からの土着の朝山氏が、京極氏ついで尼子氏に属してよく仕えたことによって、御一族衆につぐ厚遇をうけたものであろう）

④出雲衆（＝国人衆—初代守護佐々木氏即ち京極・尼子氏の祖の一族やその家臣で、鎌倉初期から出雲に来住土着したもの、ややおくれて来住土着した新補地頭層、以上二者より以前からの土着者、京極氏の家臣で来住土着者等で、出雲国内に領地をもつ領主群をいう）と、**⑤富田衆**（かつて京極氏の側近で出雲にいた者、尼子氏の側近者、国人衆の中の二、三男で尼子氏の側近者となった者、これらは在地性があっても薄いもの全くないもの）である。

分限帳

これは佐々木文書の中にあるもので、この作成時期を「島根県史」は、天文10年以前としているが、筆者は天文21年であろうと推定して、一連の分析をしている。天文10年とすると、中老衆の山中鹿之助幸盛を34才死亡説で考えると、天文15年生れとなってあわない。39才死亡説をとると天文9年生まれとなる

（前頁下段より続く）

）興させた。これは京都五山派の相国寺に属す。出雲の他の臨済宗の寺はほとんど妙心寺派である。相国寺派が出雲に多くなるのは松江藩主松平氏が入国してからである。五山派の第二位にある（一位は天龍寺）相国寺派を興したのは、三沢氏の意図によるもので、臨済宗は領主がひろめる。支配するというより惣領制下の一族の菩提所として建てた。そして中央と結んでゆく。亀嵩の覚融寺も三沢為清によるもので同じ派である。そして臨済宗は奥出雲で発展した。

奥出雲のまとめをすると、飯石郡は奥部中心に真宗が、真言密教の岩屋寺勢力の強かった仁多郡は、三沢氏の力で曹洞宗が、ついで三沢氏が中央とつながるため臨済宗が入って来たのである。

（県立女子短大の藤岡先生のこの講演をきいて、15,16号の仁多郡内旧町村の辻堂等の一覧をはじめて意義づけることができた。岩屋寺の末寺をしらべていたが、この講演ではじめてその分布の意義が判明した。折をみて指導をうけて本誌に）

奉加帳（詮久の天文9年1540）

総数117名

① 尼子一門

詮久（嫡男政久の経久の嫡）　民部少輔

1 国久（二男経久）（天文10年晴久と改名）　新宮党（月山の北）（麓新出谷）　刑部少輔

2 誠久（嫡男国久）　〃

3 久幸（弟経久）　〃（月山の南）（麓塩谷口）　下野守

4 久豊（二男国久）（新四郎豊久）

5 清久（子か塩冶興久の経久の二男）（彦四郎）

6 詮幸（子か久幸の）（次郎四郎）

7 久尊（三男国久）（小四郎・敬久）

8 又四郎（四男国久）

② 御一族衆

9 宍道八郎

11 宍道九郎

10 鞍智右馬介

八東郡・松江平田方面

幕府外様衆の家柄

尼子氏の祖高久の弟秀益を祖とする

高久の祖父（道誉）の弟時蔵を祖とする

（詳細本文中に）

③ 奉公の末

11 朝山安芸守

分限帳（天文21年1552と推定）

総数103名（数字は石高）

㋐御一門衆	290,000石 5人	尼子下野守（播摩）100,000	京相模守極（備前）50,000；朽木河内守（備前）33,000；完戸大炊頭（隠岐）70,000；亀井淡路守（備前）70,000
㋺御家老衆（譜代・直臣）	494,700石 4人		
㋩中老衆	6人		
㋥御手廻衆（側近）	9人		
㋭侍大将（合戦時の武将）	42人	尼子式部少輔（備前）9,900	京極掃部佐（備後）5,233；宍戸右京進（備前）3,700；宍戸大輔兵（因幡）3,500
㋬足軽大将	3人		
㋣惣押大将衆（殿りの任）	6人		
㋠軍奉行（将の指揮下にその方面の主）	3人		
㋡惣侍衆（尼子家臣団の中堅）	27人	尼子部之介民（因幡）7,000	

が2才で幼少すぎる。御一門衆の尼子久幸（経久の弟　下野守）は天文10年に死している。その他の人物の考証は省略する。米原正義によれば、貫高でなく石高で所領があらわしてあるがこれはずっと後世のことだとであるから、のち詮久（晴久）の後継者である義久時代を中心に（或は義久本人が）、印象に残ったもの、記録のあるもの、側近の発言などをもとに、書き誌したものであろうとしている。

筆者が天文21年であろうとしたのは、天文20年8月、西国の大名大内義隆は家臣陶隆房の叛乱によって、戦国の舞台から姿を消した。翌21年4月2日晴久は、足利将軍から、出雲、隠岐のほかに、新しく因幡・伯耆・美作・備前・備中・備後六カ国をあわせて、八カ国の守護に任ぜられた。よって諸将に分限帳にあるように、所領を宛行ったものと考える。国名は全く一致する。その年7月毛利元就が備後に入り、翌22年12月には、甲山城（庄原）の山内（首藤）隆通、郡山城（高野山）の多賀山（首藤）通続も元就と和し、備後は完全に毛利氏の勢力下に入

訂正 129号2頁5段15行の次に太字で小見出し**トト蔵家とたたら製鉄業**挿入 4頁5段最初ー3頁3段に 130号ー頁3段の華蔵寺にルビ 23行けぞうじ 27行はなくらじ

二月句抄

雪の丘鳥居の見ゆる閑居かな　糸原古志
葺枯れて大斐伊に浮く砂鉄舟　浅野としお
雪間訪うそれぞれ伸ぶもの芽ぐむもの　岡田蹊花
凍鶴の一歩の影を移しけり　岡田麗水
山眠る湖の湯宿に今日泊る　小川あきお
春立てばとぎれとぎれの矮鶏の声　門脇花子
風の泣く川半の抗州もどり寒　楠房子
古戦場いづくよ雪の関ケ原　高木白虹
大ツララ雫の韻の春をきく　新出谷一華
冬籠囲炉裏囲みし遠い父母　錦織富江
ままごとの孫の語らい日脚伸ぶ　渡部夕峰

三月の短歌

敵陣に吸い込まるごとき曳光弾意決めし目に妖しく美し　常盤はるまさ
幾何模様の護岸となりて家の前の小川はひねもす奔る水音　岡田時子
畦の上の雪まず消へて山間の棚田は区画があきらかとなる　児玉敏郎
裡ふかく言葉納めて冷へしるき夕べの厨に明日の米炊ぐ　野村節子
時折りの山の息吹きか撓みたる木々のかえりて雪煙たつ　小早川恵子
叩けども引けども応えぬ吾が胸の扉の錆を研ぐ石の欲し　永井弥生
雪晴れの空を仰ぎて枝打てば音なく伸びる飛行雲かも　伊藤萩雨
それぞれの人を運びし長靴は一列に並び朝を待ちをり　伊藤喜代子
転ばずにすべれるを言ひ三井野原に連れ行けと吾子はむずかり止まず　戸屋暎子
鎌傷の痕もおおかたうすれいてふしくれ指のわれの双の掌　宮廻あい子
南国の菜の花匂へる丘に佇ち黒潮躍る早春の海みる　安部夕波
（南九州にて）

った。天文21年とすると山中鹿之助も39才死亡説をとると、13才となる。

天文23年11月1日、晴久によって尼子氏にとっては一門であるとともに最も精兵を有した新宮党の諸将を、手討ちにした（元就の謀略説もあり、新宮党の内訌説もある）。晴久の伯父（祖父経久の二男）国久は、月山の北麓新宮谷に居を構え、手兵3000人を擁する尼子軍の主力であった。国久の嫡男誠久も討たれ、三男敬久（久尊）、四男与四郎（又四郎）も、誠久の嫡男二男も切腹し、新宮党は全滅した。（誠久の四男孫四郎は、乳母によって備後にのがれ、成人して上洛、来福寺に入った。これがのち山中鹿之助が尼子再興の中心とした勝久である）

以上の如く考えて、この文書にあらわれる諸将の構成を、天文21年と推定したのである。

永禄九年十一月二十八日雲州富田下城迄相届衆中次第不同

は、「尼子家旧記」にあるもので、富田開城まで尼子氏に属していた家臣の氏名がつらねてある。

毛利一族の吉川氏の家臣香川正矩父子が、享保年中に毛利氏の歴史を中心にしるした「関西陰徳太平記」第40巻の末尾にもこれと同じものが載っている。

以上の資料を系統的に排列して表とし考証し、八年前馬来氏と馬木氏の違いをも明らかにして、山陰史談12・13両号のせてそのまゝにしていた。これ以上は浅学故に深め得なかったが、今岡論文によって論拠を与えられたので深めることができた。まだ十分ではない。未考証のものもあるが、たたら研究に追われているので、ひとまず本誌に載せ折をみて完成し、山陰史談にのせて、先学の御指導を得たいと思っている。（表の上段と下段の分限帳を比較し所領をみるためで、下段の氏名の上の｜は上段と同じ人）（高橋一郎）

斐の上川柳一月抄

新人のやる気を阻む見栄の雲　若槻白馬
プライバシー守る部屋だと鍵をかけ　佐々木千世
売り出しのビラも不用の年となり　安部春恵
愛の鞭持たぬ躾に独楽が死ぬ　高木白虹
あけまして皆んなでめでたい年にする　松浦木公
灰色の空を見上げて子を想ふ　松浦亜以
農機具屋不作の米を持って逃げ　松田牛歩
しきたりを一つはぶいた暮の膳　松浦久寿子
福の神腰を抜かした大笑い　渡辺好之
来月から煙草やめると笑わせる　太田亀甲
子供むけテレビに孫を預けとき　藤原千代子
お年玉孫の期待に応じたい　真綿よし子
男手はもう当にせず餅つき機　横山まこと
お年玉皮算用の孫の声　安部正子
除夜の鐘数えて春の夢をもち　藤原ユキ子
還暦に祝いの餅は嫁がつき　藤原のぼる
年賀状年に一度の渡し舟　田中芳春

会員配布一部百五十円／六九ー一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0ー601）頒布／横田史談会　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

たたらとそろばんのふる里

奥出雲

題字　糸原風亭書

第132・133合併号
（4月号）
昭和61年4月5日
奥出雲編集集団©

尼子家臣団の分析②

仁多郡西部の地頭飯島三沢氏物語⑩

この分析について

昭和42年に「島根県横田町誌」が編集された時、中世史も担当し、十分に集められた古文書を通してみると、在来の三沢氏の系図の主として前半に誤りの多いことと、三沢氏の国人としての、実力の評価をもっと高くし、尼子氏一辺倒の戦国史を、三沢氏を含めて国人衆評価で修正せねばならないことを痛感したが、時間の余裕がないのと非力のため、若干系図の修正をし、尼子氏との関係の追求も最少限にし、三沢氏再評価につながる文書を紙数の許す限り載せて終った。中世の横田庄の大筋は各方面から、はじめて明らかにし、一カ所をのぞき快心の記述だったと思っている。

一段落してから文書中心に、三沢氏と馬来氏の系図を構成したところで、教職を退いた。また、町誌で全く書き残していた「雲州そろばんの今昔」―その歴史と技術―の資料集めを終っていたので、執筆にとりかかり出版にこぎつけ、約束を果し重荷を下したので、三沢・馬来両氏の諸流の系図を求めて歩るき、直系の系図や、三沢氏関係の多数の古文書を見ることができ、私が文書から再構成した方向が正しいことがわかり、本誌に両氏の系図の概要をのせ、「山陰史談」に両氏ともそれぞれ上下2回宛、考証したものを登載し、そこには在来当地流布の誤まった系図がどうして生れたかも考証しておいた。その結果、角川版地名辞典の島根県版、新人物往来社版城郭事典の山陰両県版、山陰中央新報社版島根県大百科辞典等すべて、これに準じて記載され、最近の学会誌にのる論文でも承認されて、そのように記述されている。三沢氏ならびに馬来氏、横田庄の資料集を作成してはどうか、お互の集めたものを照合して、不足分を補いそして再検討もして完成してはと御厚意ある研究者の方から御指導助言を頂いているが、たたら研究の重い負担もあって、一応この連載を終えてから、それにとりかゝりそれが完成するまでに、たたら論集をまとめ中世横田庄と三沢氏を集大成したいと考えている。

前号から連載の尼子家臣団の分析表は、8年前三沢氏系図訂正と並行して作っていたが、いかんせん浅学のため考証に行き詰っていた。ところが度々のべるように、当時京都大学大学院生だった今岡和典氏の島根県中世史研究会での発表に続いて、山陰史談そして史林の論文を恵贈頂いて、前途が明るくなった感じがした。その上広島大学の岸田裕之、名古屋大学の加藤益幹の両教授の毛利氏研究の諸著・論文を読み、またそれぞれ資料を頂いたりしたことで、この連載をはじめ9回となったのである。そして前回から家臣団の分析となったが、これは三沢氏をはじめ多くの国人層の再評価をし、亡んで名もなくなった諸氏にも当時の評価をしたいためである。まだこゝに掲げた諸氏の出自も半数位が明らかになっているだけであり、それも誤りがあると思うが、未熟のまゝ発表し、同好の皆さんの御指摘や御指導で改めたいとも思っている。以前に作成したこの表を、今岡論文（私の誤まった解釈もあろうと思うが）を拠りどころにして解説をしているつもりである。この号からはさらに表を加えて考察を進めたい。今岡氏に御迷惑をかけないように努力するとともに感謝したい。

表A　（今岡論文より作成）

			出雲州衆 佐々木系	出雲州衆 新補地頭系	京極氏系	その他
9通	1392	明徳3	古志(2)	松田(1)	隠岐(1)	
			古志③		大熊上・大熊八	
	1396	応永3	古志②		大熊上	
5通	1438	永享10		三沢(1)	尼子	若宮・富尾(1)
				三沢(1)		
	1456	康正2	神西(1)	三沢 牛尾 牛尾一族	尼子	
	1464	寛正5		松田 大西 (1)		下河原
（ ）文書数			京極氏入部以前の伝統的国人層		……連名者	

守護京極氏時代の国人衆の実力

明徳の乱で山名満幸が敗れて（明徳3・1392）、出雲・隠岐の守護に再び京極氏が復し、高詮がその職を行うにあたって、出雲国内に公的な格式で守護職として権限にもとづいた文書は80通ある。そのうち事柄の当事者に直接あてたものをのぞいて、応仁文明期（応仁元1467・文明元1469）以前のは、表Aの通りである。本号の表にみえる出雲州衆にあてたものが殆んどで、京極氏はその実力を無視できなかったことをしめしている。

なお、文安元1444年に三沢氏は独自の判断で、岩屋寺に対する内裏段銭免除（横田町誌参照）をするだけの実力をもっていた。

尼子氏が出雲に入ったのは、正長から永享のころ（正長元1428・永享元1429）、A表の如く康正年間に尼子氏は漸く20年ほどを経

ため、推定した地方に書いたもの。
一字下りの侍は居住地が未確認のも記入した。
いたが念のためここにって、②③⑤に属して地侍的性格のものであ
（　）内はこの郎で成長した

隠岐
隠岐五郎左衛門尉豊清 ◎
（多胡）　直

④
下笠左京亮
（福頼）
母里土佐守 佐
吉田兵庫助 佐
松田越前守 ⊙

能義
（馬木）　直

8
福田
桜井大和守
蠟弾正左衛門尉
若宮孫十郎
野原
西谷
中原
若林

⑬
邑生
林
野波
加賀
（多賀）
白紙

平又衛
野右門
（雲州）
18,000

馬彦衛
木右門
（石見）
3,753

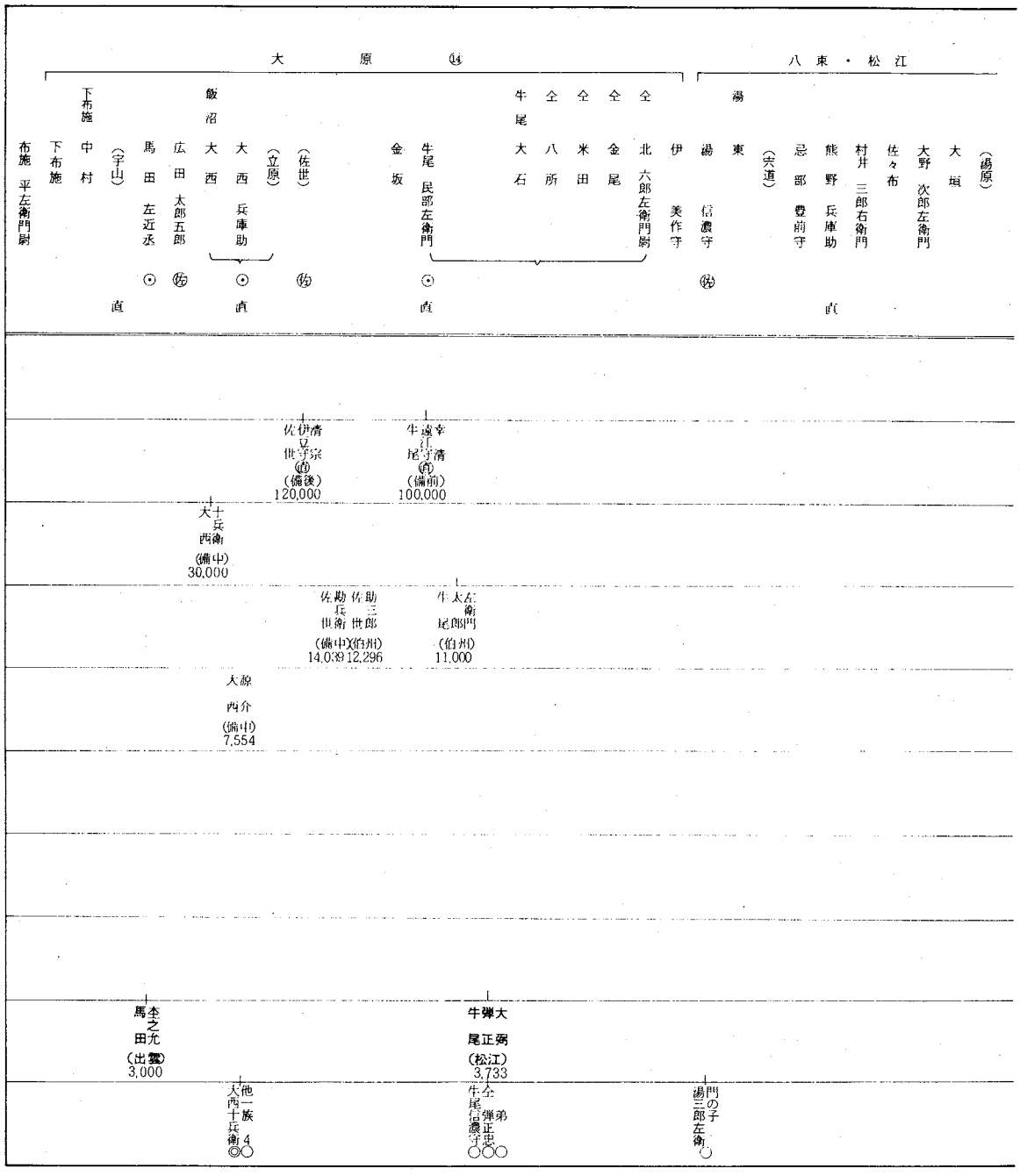
馬彦右衛門木 ◎
松田兵部丞 ○○
その子2
吉田八郎左 ○
衛門
他1 ○

て、出雲州衆＝国人と並列的となり、やがてその力倆を認められはじめ、尼子氏のみに宛た文書があらわれる。文明2年1470に京極持清が死んで嫡孫の孫童子が守護となったが、幼少であったので尼子氏を守護権限宛行者にした。しかしまだ尼子氏のみでは不足とみえて、国人の牛尾・松田氏等に合力をたのんでいる。文明16年1484経久は力不足のため追放される。明応5年1496の文書では、幕府外様衆の宍道、国人の神西・三沢の諸氏が明記されていて、明応8年1499漸く経久の復権がみられる。

本号の表、出雲州衆86人は、鎌倉・南北朝時代の出雲守護であった、佐々木、塩冶氏の一族や、古い地頭・新補地頭の子孫で、尼子氏が出雲に入るまで、新らしいもので200年前後、古いもので250年も土着武士として、宮々と地力を養い成長したものが殆んどであり、出雲国生えぬきの有力国人層である。表Aの守護権限の執行者の名はこの中にある。

次号の富田衆37人

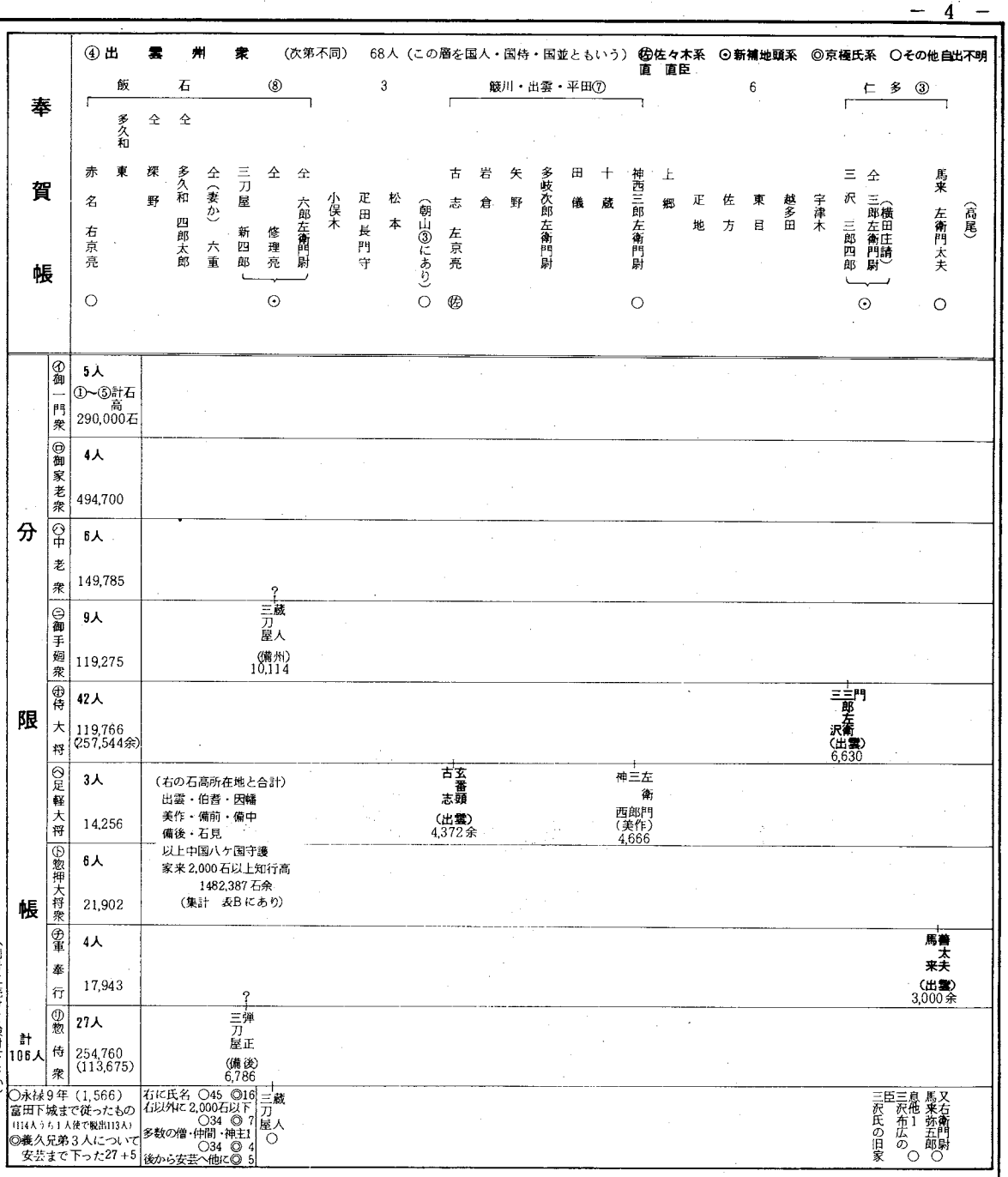
（この表には、富田衆以外の



出雲国内土着ならびに近隣諸国内土着の3000石前後の諸武士も記入してある。晴久の最も威力の行われた時代に従っていた、他国のその地の国人衆である。この中の古志氏（出雲州衆の佐々木一族古志氏の庶流であって、直系は出雲州衆に属している）以外の多くは、鎌倉・室町時代の史料には出ないもので、京極・尼子両氏の古くからの被官（録をはむ武士）のものと思われるから、富田衆という側近でありながら、所領は出雲国内にない。（今後十分検討したいが）この中からは、これまでの守護権限の執行者は一人も出ていない。しかし次号でくわしくのべるように、天文10年1541経久死して、子詮久（晴久と改名）が守護となり、領国支配の実質担当者になると、奉行人として文書の執行者となるものが、この富田衆の中から急増する。

次回は富田衆のこと、尼子氏滅亡への急速な傾斜の基本的要因を述べ、その次には加藤益幹氏の厚意で提供頂いた、毛利氏八ケ国分限帳の分析をもとに、尼子氏滅亡後の出雲を、尼子氏時代と対照しながら述べる。

（高橋一郎）



横田史談会 10周年を終えて

記念事業では

風土記を読もう会も、一年余にわたり、出雲国風土記を参加者が一諸に読み合って、曲りなりにも終わることができた。現地見学会も今後もう一回位と。

第4回陰陽郷土史研究大会を昨秋開催し広島・岡山・鳥取の県外から60余名参加、地元県内あわせて130名。横田町の後援で広島・島根県内の三大学の先生をはじめ、岡山、鳥取の研究者の発表は、中世史研究のあり方を教えてくれる意義深いもので、横田庄の研究も一段と深まり、陰陽の研究者の交流も深まった。

世話人代表高橋一郎さんの表彰について

地域文化振興に功績があったとして、文部大臣表彰をうけられた。ここに高橋さんの今日まで歩みを世話人一同で話合ったことをしるし、お喜び申上げ長い間の御慰労もし、かつまた今後の御精進をお願いしたいと思い、世話人の一人杠誉富がまとめた。

「高橋さんは教師として、音楽

（五頁へ続く）

教育者、郷土史の先生として私は接していましたが、小学校低学年のころから、キリスト教に触れ、そこのボーイスカウトなどにも入り、さらに聖書研究にも加わって西洋の精神史も学ばれ、また当時の横田の地域あげての郷土再認識の雰囲気の影響もうけて、郷土愛を育てられ郷土に関心をもち、音楽、読書の生活の習慣を得られました。

島根師範学校時代には、仁多郡誌を書写するという関心のほか、音楽にもぞっこん傾倒され山陰最初の吹奏楽団にも参加されるなど、一貫した道を歩まれました。

教師となってからは、本職では教育思潮上のいろいろの実践にも努力される一方、読書会の指導も行われ、それは戦後を通じても続き、土曜会・横田音楽協会を組織して、各方面の読書、音楽指導にも努力され、今日の横田の基礎をつくられました。もちろん学校教育においても仁多郡音楽教育の今日の基礎をきずかれるほか学校教育にも尽され、学校と地域社会の両分野に活躍されました。

私が同じ教職にありながら、直接心安くして頂いたのは九年程前からで、横田史談会の各種会合に出席し、長い間貯えられた郷土史の蓄積に触れることができ、私にとっては大きな出合いとなりました。私はこの出合いに、しみじみと感謝をしております。

月刊「奥出雲」もすでに一三三号となりましたが、著書も少なくなく、「奥出雲をさぐる」「雲州そろばんの今昔」「奥出雲のたたら製鉄覚書」「あるくみる横田」などで、地方・中央での研究会での発表や、地方・中央の専門誌への登載も数々あり、横田町誌の編集にも中心となられた一人であり、執筆はもとより史料を集めることにも力を注がれ、中世・近世・近代の史料は、地元はもとより県内外のものの、実物と複写が集められ、県内の町村では珍らしい程充実した古文書庫として、町の図書館に整備保存されているが今も尚、個人で史料集めに自費を投じて努力されています。

最近ではかねてから整理にかかわっておられた絲原記念館の古文書の完璧に近い整理と解読にあたられ、たたら研究に貴重な発表をし、研究者の間で注目を受けておられます。

記念館の開設前から研究を生かして協力され、一般向けのたたら研究のよき資料館となっており、研究の成果は島根史学会、陰陽郷土史研究会、たたら研究会、産業考古学会等で発表されているが、最近論文集にものり、今秋は国際シンポジウムにも招待講師として出席されると聞いています。

「ローマは一日にしてならず」という言葉があるが、幼ない時代から、時代時代をそれなりに充実して過され、その後も研修を怠ることなく今日まで来られたこと、本職の教員としての勤

表B　尼子家臣団（2,000石以上）配置表

（分限帳より作成）

上の表の主な侍の出身区分

∨ ゴジックは出雲に本貫地あるもの
は最後まで尼子氏とともに行動したもの

	石高（最高～最低）	（島根）出雲	石見	隠岐	（鳥取）伯耆	因幡	（兵庫）播磨	（岡山）備前	美作	備中	（広島）備後	安芸	備州	計（人数）	出雲州衆 守護佐々木系	新補地頭系（信州）	他	一門・一族・富田衆 守護京極系	尼子一族	明らかでない
御家老衆	一八七、七〇〇～八七、〇〇〇	○	一	○	○	○	○	一	一	○	一	○	○	四	佐世					
御一門衆	一〇〇、〇〇〇～三二、〇〇〇	○	○	一	○	○	一	三	○	○	○	○	○	五	宍戸	牛尾		京極・亀井・朽木	尼子	
中老衆	三〇、〇〇〇～二〇、〇〇〇	○	○	○	○	○	○	一	三	一	○	○	○	六		飯沼系の∨大西∨立原・∨津森			∨山中	
御手廻り衆	一八、〇〇〇～一一四	一	○	一	二	○	○	○	○	三	○	○	二	九	佐世2	牛尾・三刀屋		平野・隠岐		本田・米原横尾
侍大将衆	一三、〇〇〇～二三〇	八	二	○	五	五	○	八	二	四	七	一	○	四二	福頼	三沢・大西・津森		池田・多賀・高野京極・宍	尼子	本田∨森脇河本・神田・河副
足軽大将衆	五、二一八～四、三七二	一	○	○	○	○	○	○	二	○	○	○	○	三	古志					神西
惣押大将衆	四、二〇〇～三、四〇〇	三	一	○	○	○	○	○	○	一	○	○	○	六				多賀		∨馬木
軍奉行	五、八八七～三、一〇九	二	○	○	一	一	○	○	○	○	○	○	○	四						
惣侍衆	一〇、〇〇〇～三、〇〇〇	一五	一	○	一	三	○	一	三	二	一	○	○	二七	馬田	三刀屋・牛尾	馬来	池田∨多賀	尼子	長谷川
計		三〇	五	二	九	九	二	一四	一一	一一	一〇	一	二	一〇六						

前号訂正　3頁侍大将—京極掃部佐の—は除く・分限帳人数103名を106名に・軍奉行　3人を4人に

斐の上川柳会二月抄

複雑な響き残して「ハイ」と言ひ　松浦亜以
百才の姑と二人で冬炬燵　安部春恵
八つかみの姑も負けた嫁の智恵　渡辺好之
火と車雪にも人命奪われる　松浦木公
会長の口車にのるおひとよし　無名士
結果論こわれた皿を接いだとて　松田牛歩
五十路越すあせりを秘めて紅をひく　石原世以
会合に白髪かくした年は過ぎ　松浦久寿子
悪い子は一人もいない授業みる　児玉哲呂
馬になり横綱になって孫と暮れ　佐佐木千世
小さな足スキー疲れのサロンパス　真綿よし子
いたましいシャトルの星が七つ消え　藤原のぼる
七草が揃わぬままに粥にする　太田亀甲
勢いも絆があって丸るやかに　藤原ユキ子
宇宙船乗りくみ予定冒険だ　植田悦子
コーヒーがぬるいよ倦怠期のように　藤原千代子
其んな事知って居るよと子が叱る　若槻白馬
日記にも川柳そえてと年の計　石原トミ恵
買い言葉噛んでころして酒で飲む　高木白虹
友が来て腹から笑えた今日の幸　安部正子
可愛い手振らせて車走り出し　横山まこと
ヒット曲十年を経てナツメロに　田中芳春

俳句会三月句会抄

今日よりは流離の身なり春惜しむ　浅野としお
日脚のび蟹居の心ほどけ来る　岡田蹊花
白鷺の寄りそう中洲や雪解川　岡田麗水
雛の面喜怒哀楽も静かなり　小川あきお
穏かに心を添えて春を活く　門脇花子
黄砂降る靴に重たしいばら路　楠房子
背伸びして待つ子供等の春遅し　高木白虹
ときおりの水の囀き猫柳　新出谷一華
久し振り鼻緒の下駄や春の雨　錦織富江
日の流る疾さを覚ゆ初若布　渡部夕峰

あとがき

本号は分析表のため特殊な印刷をしました。次号も同様であって、したがって4・5月合併号とし、5月は休み6月発行とさせて頂きます。4・6月号とも6頁宛でありますので、5月号が4月と6月に分割し増頁となったということであります。誌代の方は従来通りということで、会計上御了承をお願いします。

最近他県の方からの購読がふえて、奥出雲に関心をもって頂くことに感謝しています。この方々は専門的な方向の方ですが、地元の一般読者の方が多いので、両方の傾向の方に同時に満足頂くことはむづかしく、右にゆれ左にゆれて編集しております。出典等をのせるとさらに固苦しくなりますので、本誌にのせたものを専門誌にのせる時には、きちんと論文形式にしていることで御了承願いたいと思います。

本誌にのせたものを一部系統たてて、最近つぎの論文集に載せて頂きました。関心のある方は御覧頂き御指導の程を。系統的な資料にもとづき、在来のたら研究の不備を補うものと思っています。

産業考古学会編「日本の産業遺産」に、「奥出雲における近世企業たたら発達小史 ― 産業考古学的側面から」と題するものです。（玉川大学出版部刊）

なお1月末から、新日本海新聞で毎週火曜日に、「たたら漫歩」と題して、毎回読み切りの連載をしております。毎回原稿用紙一枚程度で、易さしくという条件も満たしながら書いています。苦労ですが反響があって勇気づけられています。雪の降るころまで続くと思います。

（高橋一郎）

四月の歌

防犯灯の光の域に束の間を黒猫よぎりて闇に消へたり　常盤はるまさ
凍朝に餌を啄む鶏の垂れる鶏冠に淡き陽の差す　野村節子
山茱萸の実のまばらにつきしが風情あり老ひゆくわれの心に　永井弥生
しみる
姑をいびれる友に応へかね湯呑に浮ぶ茶柱を見る　佐藤喜代子
雪解けの溢るる水に蕪洗ふ冬陽やわらかき門の小川に　景山悦子
兵の日の古志原吹雪憶ひつつ五十年経たる今朝も雪掻く　伊藤萩雨
落雷によりて裂けたる杉肌にまつわる如く花粉舞ひつつ　宮廻愛子
帰庁する車のライト忘れいて春立つ今日の夕べ明るき　小早川恵子
雪堀りてとりあげしキャベツの艶めきて籠にぎしぎし春の音　岡田時子
かも
しんしんと雪降りしきる飯山の並木通りに暮れの鐘聴く　安部夕波
（信州飯山にて）

会員頒布一部三百円／六九九—一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0—601）頒布／横田史談会　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

たたらとそろばんのふる里

奥出雲

題字　糸原風亭書

第134号
（6月号）
昭和61年6月7日
奥出雲編集集団◎

尼子家臣団の分析③

仁多郡西部の地頭飯島三沢氏物語⑪

抬頭した富田衆と実力

しかし前号でものべたように天文10年1541、経久死して子詮久（その年晴久と改名）が守護となると、奉行人として文書の執行者が、本号表（2～4頁）の⑤富田衆の中から急増する。古志氏は出雲州衆佐々木一族の古志氏の庶流であるが、その他の氏は京極・尼子両氏の古からの被官人で、近江から来住したものが多いようである。従って在地性が薄く、尼子氏の領地拡張によって所領を宛行われ（ほとんど出雲・隠岐・石見以外）た者で、経済地盤は不安定であり、ひたすら主君尼子氏にすがる侍群であった。

表Cのようで（史林66巻4号の今岡論文より作成）、前号の表Aと比較してみると明らかに、出雲州衆（国人衆）にかわって富田衆が、在地守護としての直接支配の下で、大小の問題をごとごとく処理している。戦国の乱世故問題も急増して、24年間に総数115通にのぼっている。

表の氏名の横の書判奉書数を○で囲んだものは、この表の期間24年間を通してたずさわったもので　富田衆では立原24　森脇・津森6　その他では本田13　佐世9（これ以外の者も基本的には富田衆と同じ出自のものである）であり、他の者は1～数年間かかわっている。そして富田衆11/16（うち萩へ3）家　その他7/21（うち萩へ1）家が富田城落城まで従い（　）の数の家のものが萩まで従っている。

在地性の薄い被官（禄をはむ侍）人が、領地拡大により、他国に所領を宛行われ、急速に力を加え支配機構の整備にあづかり、このように執行人となったとみえる。しかし波に乗ってその地を制圧している時はよいが、基盤としては弱かった。

表Dを参照してほしい。伝統的国人層の出雲州衆が、京極氏の守護権を引継いだ尼子氏に対して、この情勢下に奉公が国の公的支配者に対する一般的義務として従うようになったとみられる。

京極氏の文書が佐々木家（萩で尼子氏は祖の姓を称する）文書に含まれているのは、在来説のような、幕府体制下にある守護京極氏への反逆による、尼子氏の守護権獲得ではなく、尼子氏が京極氏の家督と守護権を引継いだものであることをしめすという（文明18年正月の経久の富田城攻略物語は虚構である）。

そのことは天文21年1552、晴久が将軍から得た守護補任状をみると、出雲・隠岐については、惣領割分の旨によってとしるされていることで、京極政経から尼子経久へ、そして晴久へとうけ継がれたものと幕府もみとめている。この時晴久に発せられた6ケ国（因幡・伯耆・備前・美作・備後・備中）の守護職は、一国づつそれぞれ発給されているのである。

幕府が尼子氏に守護権を認定する上限は、大永4年1524（経久時代）であって、この時から天文初年にかけての時期が、尼子氏の進出が最も活発な時代であった。

守護尼子氏の力

尼子氏がこの後急成長するのは、京極氏には存在しなかったようである、富田衆のような直接の軍事的基盤に加えて、自立的権力として存在していた、伝統的国人層たる出雲州衆を早期に、かつ統一的に動員を可能としたからである。

独自な御家人制によって守護権力を確立した大内氏をのぞき、周辺諸国の守護が、応仁・文明の乱以来の内紛と抗争のために不安定な状態にある中で、尼子氏は優位に立つことができた。

（5頁へ続く）

表C　尼子氏奉行人一覧（天文11年1542～永禄8年1565）

－今岡論文より作成－

太字は永禄9年富田城落城まで従った者、◎はそのうちさらに安芸まで従った者、数字は書判奉書数。なお、この他法名のみで姓の不明のもの(3)名あり。

奉加帳にあり		6奉加帳にないもの(48)
4 出雲州衆(6)	5 富田衆(58)	・分限帳にでる小侍
牛尾幸清④	◎立原幸隆㉔	松尾重長1
	中井家清1	・多胡辰敬3
	亀井国綱3	
	尾葺幸保3	大塚家清1
	森脇久貞⑥	大石綱正1
	雑賀久清2	
	◎津森幸俊⑥	・本田家吉⑬
		仁賀左ヱ門尉1
馬木真綱2	横道久宗2	真鍋新兵ヱ3
		・佐世清宗⑨
		日置幸吉1
		大石秀綱1
		波根家豊1
		目黒重清1
	目賀田幸富1	・本田家興1
	河副久盛4	・本田秀親2
	河本幸忠1	
	湯原重綱1	・岸宗林2
	◎高尾又太郎1	・佐世清嘉1
	福頼久隆1	・小林久慶1
	亀井久清1	・多賀高信1
		町原彦右ヱ門尉1
		木杉佐渡守1
	安井久慶1	◎多賀久幸2

ある。に掲載の侍でものは本号⑤である。ない別の頭の番号④までの階層たものの①～々号に掲載し字は前号、前（）の上の数になる。にわかること家臣が領国別ると尼子氏の⑥の欄をみた。従ってこるので再掲し国に所領があてあるが当該①～⑤に書い（）内の侍は

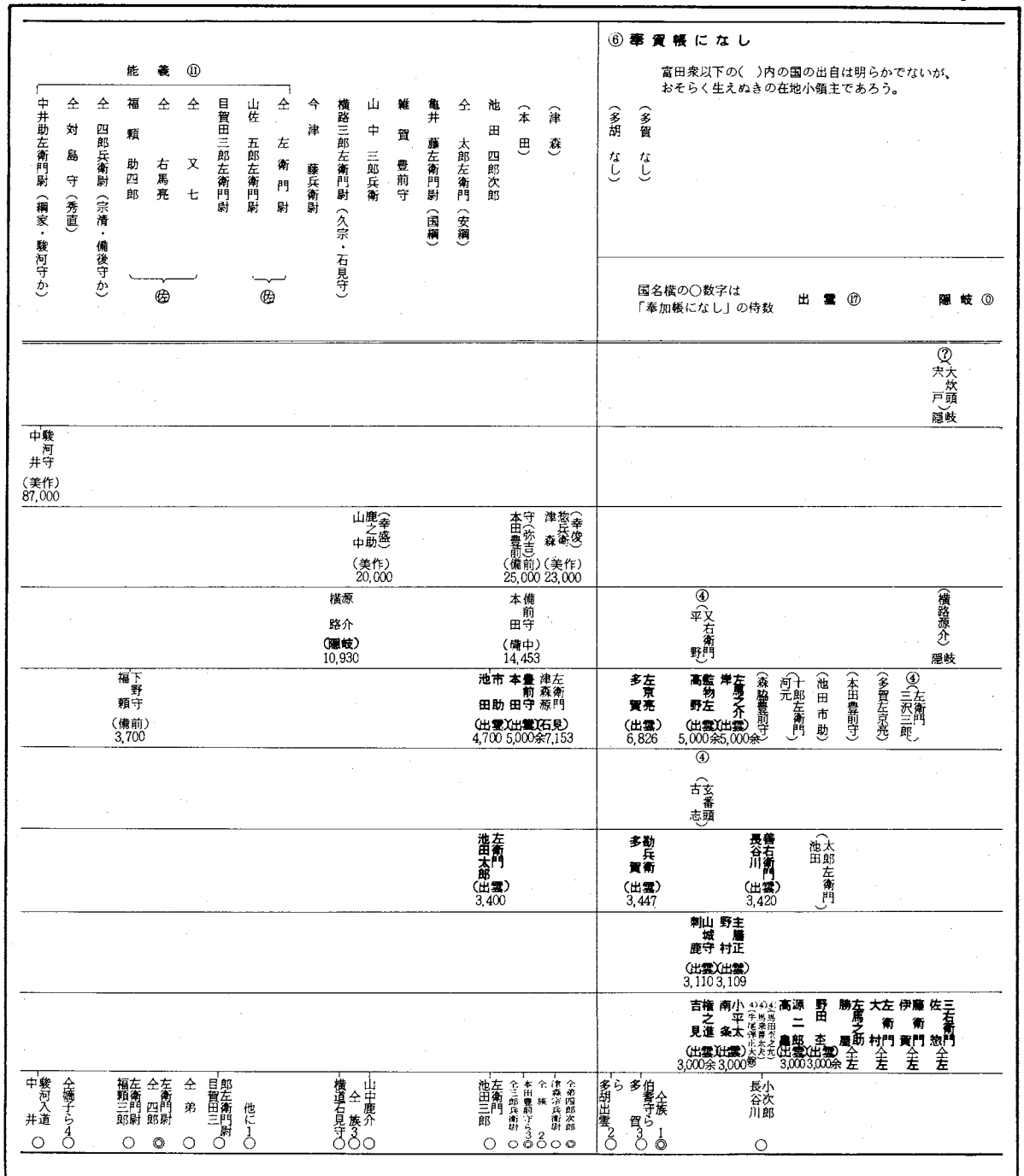
石見②	伯耆⑥ 因幡⑦	備前⑤ 備中⑦ 備後④ 安芸① 美作⑥ 播磨
（宇山飛弾守）		②京極相模守 ②朽木河内守 ⑦亀井淡路守 ①尼子下野守（播磨）
		④牛尾遠江守 ④佐世伊豆守 （中井駿河守）
		（本田豊前守） ④佐世勘兵衛 ④大西十兵衛 （津森惣兵衛） （立原源太兵衛） （山中鹿之助） （森脇東市正）
	④佐世助三 ④左衛門尾太郎	横尾源之允（備前）10,243 ④米原平内左衛門 （本田豊前守）④佐世勘兵衛 ④三刀屋蔵人
安芸権兵衛宅（石見）2,300 （津森源左衛門）	植下総守（伯耆）10,000 仝孫六右衛門（〃）2,87 仝美作守（〃）5,436 芦村神左衛門（〃）2,758 福井六左衛門（〃）3,356	淀井弥二郎（備前）6,873 本城越中守（〃）7,848 上野伊豆守（〃）8,000余 ⑦宍戸右京進 幸河尾参中守（備）2,730余 石塚九郎兵衛（〃）0,010 池田藤兵衛（〃）8,686 五月早苗之助（〃）8,013 稲富玄番頭（備後）4,000余 神代三郎兵衛（〃）10,000 秋宅庵之助（〃）10,066 高瀬備前守（安芸）4,858 豊居六郎衛門（美作）3,750 津々加賀守（〃）3,677
	井二郎（因幡）13,000 林二郎衛門（〃）2,737 隅野源蔵（〃）3,772 大河駿守（〃）3,233 ⑦宍戸大兵部輔	（高橋権之助） （福頼下野守）①尼子式部少輔 ④西大西源介 ②京極佐兵庫頭（備後）3,682 （河窓美作守） （湯原弾正弼） （湯原弥三郎） 加藤四郎彦（美作）5,218 ④左衛門西神三郎
④馬木右衛門（津森）石見		長谷川助右衛門（備中）4,200 ④力石兵庫頭（備後）3,682
	高橋十郎兵衛 本庄左衛門太郎（因幡）5,887	
安宅（石見）6,000余 細田左衛門太郎 内蔵助 仝左 成田 仝左 市之進 仝左 大 仝左 源太兵衛 伊与 仝左	松田蔵人正（伯耆）5,786	佐々木小五郎（備前）5,870 大塚図書（備中）6,000余 安宅神介（〃）3,000 ④三刀屋弾正 本城美作守（美作）10,000余 熊谷新左衛門（〃）4,000 大野十郎兵衛（〃）4,000
細井太郎○	鳥井主膳（因幡）6,500 岡左兵衛（〃）3,000 ①尼子民部之助	石塚西郎左衛門 仝子与一○ 力石三郎兵衛尉○ 力石兵庫助◎

上表（2～4頁）の注

富田衆とは富田城詰の侍である。文書上では室町期以前に出てこず、戦国時代になると頻りとあらわれ、天文期以降、尼子氏の発給文書の中で、奉行人が当主の意を奉じて発給する領国支配の根幹文書である奉行人奉書に、急に多く名をつらねる。さらにこの表にない者も、有力社寺・戦国大名・中央との関係にもたづさわってくる。（表Cの⑥「奉加帳にないもの」）そして領国支配の機能をになうのである。これらも勿論、富田衆と同じく室町期以前の史料にもみえないものである。尼子氏の下での活動は富田衆と共通しているから、京極氏の被官人であった者で、尼子氏の被官人へと組み入れられたものであろうか。

横田庄内でも天文12年に、三沢氏にかわって尼子氏が、その支配をするため、この表にある森脇・河副・本田とこの表にみえない羽鳥の諸氏が代官として庄内に分駐し、森脇氏が総代官をかねた。

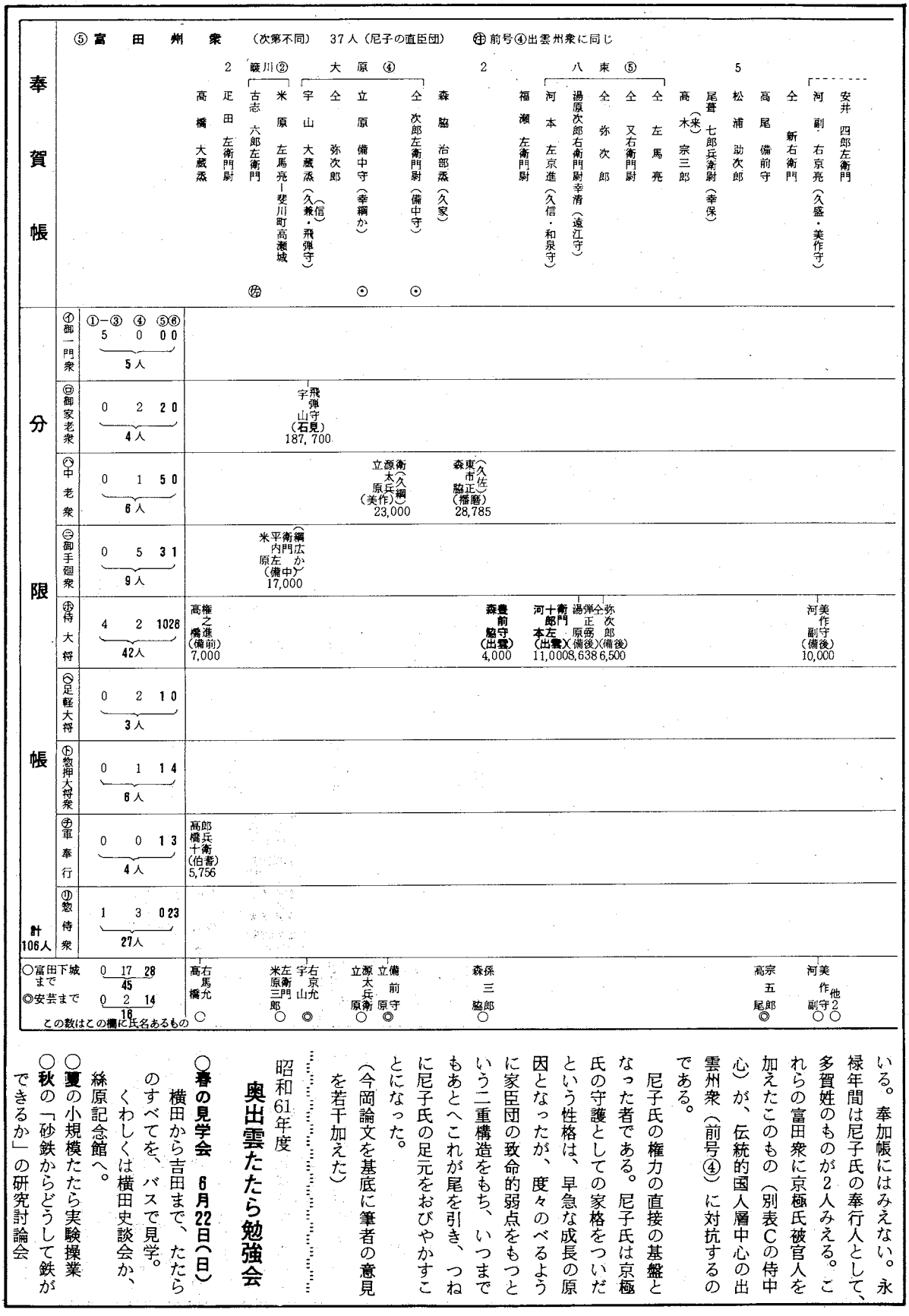
表中央上の（）の中の多胡・多賀両氏はここにはのっていな



いが多胡氏は、文永8年1271の記録では、出雲・平田・馬木の諸郷の地頭で、守護京極氏以前からの生えぬきの国人衆であったようである。他方、上野・近江の諸国にも所領をもつ。文明2年1470には三沢氏にくみして知行を押さえられてもいる。仝6年には京極氏の奉行人であり、永正6年1509政経死後は尼子氏の奉行人となるが奉加帳にはのらない。それは次の多賀氏と同じく近江国に所領や本拠があるために、近江国の宝厳寺の奉加帳に加わらなかったのかも知れない。

また多賀氏は近江国に本拠（犬上・坂田両郡）があった。（この両郡には十分究明していないが、のち三沢氏も所領を得ており、その一族がここに移り住み、その子孫から仙台伊達藩主の妻となった初子を出している）

多賀氏は幕府の御家人ではなかったが、室町初期よりの京極氏の被官人である（近江北国の守護は京極氏）。寛正6年1460には出雲国（島根郡長田郷・能義郡赤江郷）に領地があり、文明年間の4～5年1472～1473には出雲の住人となっており、京極氏ついで尼子氏の重要な役ももたされて



いる。奉加帳にはみえない。永禄年間は尼子氏の奉行人として、多賀姓のものが2人みえる。これらの富田衆に京極氏被官人を加えたこのもの（別表Cの侍中心）が、伝統的国人層中心の出雲州衆（前号④）に対抗するのである。

尼子氏の権力の直接の基盤となった者である。尼子氏は京極氏の守護としての家格をついだという性格は、早急な成長の原因となったが、度々のべるように家臣団の致命的弱点をもつという二重構造をもち、いつまでもあとへこれが尾を引き、つねに尼子氏の足元をおびやかすことになった。

（今岡論文を基底に筆者の意見を若干加えた）

昭和61年度

奥出雲たたら勉強会

○春の見学会 6月22日(日)
横田から吉田まで、たたらのすべてを、バスで見学。くわしくは横田史談会か、絲原記念館へ。

○夏の小規模たたら実験操業

○秋の「砂鉄からどうして鉄ができるか」の研究討論会

表D　分限帳の全家臣の領国別（出雲・隠岐・石見・その他）表　—天文21年　1552—

（太字家臣は永禄9年まで尼子に従った者）

奉加帳の階層 ／ 分限帳の階層	①尼子一門 ②御一族衆 ③奉公の末		④出雲州衆(68)		⑤富田衆(37)				⑥奉加帳にないもの		
領国別	隠岐	ほか	出雲	ほか	隠岐	出雲	石見	ほか	出雲	石見	ほか
㋑御一門衆(5)	宍戸 70,000石	4									
㋺御家老衆(4)				2			宇山187,700石	1			
㋩中老衆(6)				大西				5			
㋥御手廻衆(9)			平野 18,000	4	横道 10,930			2			1
㋭侍大将(42)			三沢 6,630			森脇 4,000石 河本 11,000 池田 4,700余 本田 5,000余 多賀 5,000余	津森 7,153	8	高野 5,000石 岸 5,000	安宅 2,300	24
㋬足軽大将(3)			古志 4,372	神西							
㋮惣押大将衆(6)						池田 3,400 多賀 3,447			長谷川 3,928	鳥木 3,753	2
㋯軍奉行(4)									刺鹿 3,110 野村村 3,109		2
㋰惣侍衆(27)		尼子	馬田 3,000 牛尾 3,733 馬木 3,000	三刀屋					以下12名 3,000石余 吉見・高橋 野田・大村 南条・安宅 勝尾・伊賀 佐惣・伊与 大廻・成田	細田 6,000余	9
計（106）											

㊟　富田衆は主として京極氏について下って来た被官人や、尼子氏と共に下った侍である。従って在地性が少ない。即ち生えぬきの小地域の領主でない。御一門衆・御家老衆（譜代・直臣）・中老衆の多くは、出雲・隠岐・石見以外の国に領地をもっている。侍大将も3分の2は雲・隠・石以外に領地がある。戦によって宛行われている。他国に領地のある侍大将は、戦略により帰服したその地の国人衆地侍で土着性が強い。藤沢秀晴は「大風呂敷の遠心的傾向をもつ」と評しているが、筆者はそれは表面的な見方で、実情は先にのべた理由であって、尼子氏が本号本文でのべたように京極氏のかつての権威を継承し、その上に立って戦術の巧みさによる領土拡大をした結果であると思う。こゝに尼子氏の弱さが宿命として胚胎した。⑥の「奉加帳にないもの」の欄の㋰惣侍衆22人は、惣侍衆27人の多数であって、しかも出雲国内に所領をもつ土着の生えぬきの侍である。これらは、④出雲州衆（惣侍衆の22人より領地多く伝統の古い一多くは新補地頭一国人層）と同じく、落城時までにすべて尼子氏を離れている。落城時まで残ったものは太文字（ゴチック）の者、即ち富田衆の侍がほとんどである。それとこの表にない、わずかの領地をもつ侍（以上計45人、うち萩まで16人）その他庶子や小侍（2,000石以下34人、うち萩へ7人）、他に僧など（34人、萩へ4人）あわせて106人である。（萩へ移ったのはこのうち32人）

（1頁より続く）

それが表Bの如くである。出雲・隠岐守護のわくを越えて、幕府から職責を果させられていたのである。くわしくは今岡論文にゆずるが、そこで論ぜられているのは、守護制度が守護職を保持できる家格が重要視されるような時代になっていたから、「惣領割分」としていた尼子氏は、守護家の家格をもつものとなり、周辺の国人を動員できるようになった。

富田衆が被官人として手足となったとはいえ、尼子家臣団の実力中核は出雲州衆（前号の国人衆68人）である。隣国守護大内氏が、出雲守護権を尼子氏と同じく代行する資格をもっていたため、出雲州衆は自らが開拓育成した所領に在地し、それを維持するために、反面では大内氏の動きに応じて向背常ならずであって、尼子氏はこの統制に最後まで悩まされたのである。

それと同時に直接の支柱である富田衆37人は、自らの開拓育成した領地がなく、尼子氏の領域的支配を前提（表D参照）としてはじめて、所領支配が実現するものであったので、領主尼子氏への依存度は極めて強かった。

従って出雲州衆（前号）及び富田衆（本号）の表の最下段及び表Cにあるように、永禄8年富田城落城後も尼子氏に従ったものは、この富田衆が殆んどであって、出雲州衆の中には特殊なもの（その庶流）が若干いるのみであることは、そのことをしめす。富田衆の所領はほとんど他国にあった。そこには古くからそこに居住する地侍（国人衆）がいたから、領主とはいえ不安定であったから、尼子氏に絶対的に従わねば自家の存立は不可能であった。それは尼子氏に奉公するというより、尼子氏がもつ守護という公的支配者の面に対して奉公するということであったとみられる。そのことは尼子家臣団の行動に複雑な動きがあらわれた原因である。

表Dの侍大将の42人のうち、富田衆14人中の5人だけが出雲国内に所領をもち、出雲州衆・富田衆でないもの27人のうち2人が出雲国内に所領をもち、ほかの25人は国外にもっている。惣侍衆をみると出雲州衆の4人中3人が国内にもち、富田衆はなく、この両者以外の実戦部隊

（前号訂正）　1頁1段終り4行　終った・4頁最下段　弥七郎・左側　奉加帳・馬来善太夫は一段下の⑪惣侍衆へ

簸の上短歌会五月詠

穏やかにものを言ふ女のほほえみて先の尖れるナイフを買へり　常盤　はるまさ
棟上げの宴終りて座す夫の小さき背中に顔伏せしわれ　永井　弥生
登校の児らにも馴れしか繋がれし犬は黙して列を見てをり　野村　節子
牛蒡播き薯を植ゑむと計画を定めし朝を菜種梅雨止まず　佐藤　喜代子
いつの間に燕軒にもどりしか初毛の雛の囀りはげし　岡田　時子
朝霧の束の間霽れて長谷寺はおぞましきほどの水子地蔵の　松浦　愛子
湯の宿のこころづくしの山菜にさくらニ片そへられてあり　景山　悦子
肥ひろげ終へて立ちたるわれの背を夕べの風が汗冷しゆく　小早川　恵子
山ざくらしきり降り来る峡の田に代掻あとの柄振り押すなり　伊藤　萩雨
飛び立ちしインコはいまだ帰り来ず夕窓ひらき口笛鳴らしぬ　安部　夕波

斐の上川柳三月抄

そう言えばおれもいじめたことがある　児玉　哲呂
おばさんになった娘にチャンをつけ　高木　白虹
追いかけじゃつかまりませんいじめっ子　佐佐木　千世
大盃を乾して十八番の語り節　渡辺　好之
宅配が娘の気づかいつめてくる　松浦　久寿子
ハンガーにいい服だけはソット掛け　古川　松次郎
暴飲の果て胃カメラがのぞきに来る　松田　牛歩
あきらめてエアロビックは見て終り　松浦　亜以
不遇の子愚痴を聞くのも姉の役　安部　春恵
同年配やたら目につく死亡欄　松浦　木公
電気炬燵のぞけば鎮守の森が見え　若槻　白馬
疑問符がついて延期か淡水化　藤原　のぼる
指先をこまめに使いぼけ防止　真綿　よし子
気にならぬ円高低辺に生きて　藤原　千代子
趣味という友に旅路を支えられ　安部　正子
歯車がきしみ油を娘が差し　横山　まこと
ニューリーダーも足して二で割りゃ丁度よい　若槻　愛散人
マルコスさん就任したがまもなく亡命　太田　亀甲
シャッターに収まる子孫十八人　田中　芳春

は12人が出雲国内に、10人が国外にもつ。また軍奉行3人、惣侍衆27人には、尼子氏庶流1人以外の出雲国内侍も15人・国外侍も11人いるが、それらは富田落城まで従っていない。それは国内における自分の所領を保持する意図があったからであろう。落城まで従ったのはこの層以下の2000石以下の34人、僧ほかの34人と、他国に所領のあった家老・中老・御手廻り衆や侍大将の一部の国内に所領のあったものであることがわかる。

毛利氏のような「家中」の形成は尼子氏にあっては、形成が困難であったと思われる。毛利氏は「家中」を形成して強固であり、国人衆の統制に努力して成長した。尼子氏は守護をついで、その支配雰囲気の中で早急に一国支配を実現してしまったので、毛利氏の「家中」に匹敵するような強固な家臣団を編成する過程がなかった上に（根本的なことであったが）一族興久の反逆、ついで尼子氏の親衛隊ともいうべき一族の新宮党を滅ぼすということもしたため、国人衆の信も失いその結集もできずして、遂に凋落へと向ってしまった。

京極氏の守護職家格を背景にしすぎて、急速に守護として前述のような諸国の混乱という風雲に乗じて、所領を拡大した尼子氏（そうした事実を追認することで、幕府は勢力を保持しようとする時代であった）。守護の系譜はなかったが、伝統的な強大な守護大内氏を滅ぼし、家中の強固さと、国人衆の掌握の巧みさによって、じっくりと成長していった毛利氏。このことを頭に入れて、戦国時代を眺め、三沢氏の去就を考え、その他の国人層の動きを考えなければならないと思う。すると尼子十旗というものは虚構としか、筆者の眼には入らなくなる。これは今後明らかにしたい。

尼子氏を引き下ろしたのは国人衆であった。その実力を過少評価してはいけない。経久の守護としての登場から、ひたすら戦乱を生きぬいた尼子氏37年間と、そのあと35年間専ら治政につとめた毛利一族の吉川氏時代の差を考えねばならない。「八ケ国分限帳」によってもそれは明らかにできる。

（横田史談会　高橋一郎）

しばぐり四月句会抄

雛の間は灯りて安堵子の眠り　浅野　としお
鶯やお茶一服を妻に請う　岡田　蹊花
落椿ポトリ音して女坂　岡田　麗水
梵鐘の綱薫風にゆるる昼　小川　あきお
春風に袖遊ばせてペタル踏む　門脇　花子
背をまるくせりつむ人や名残雪　楠　房子
春愁や仔牛の泣く声積まれゆく　高木　白虹
菜の花やはねる仔牛の健やかに　錦織　富江
芹摘みの行く手行く手に水光る　新出谷　一華
道よぎる白蝶追し孫の影　渡部　夕峰

会員配布一部百五十円／六九九—一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二
編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0—601）頒布／横田史談会　仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第　135　号
（7　月　号）
昭和61年7月5日
奥出雲編集集団©

出雲風土記を読もう会を終って①

スサノオの開拓地

横田史談会では創立10周年を記念し、馳け足の一年余りで、「出雲国風土記」（加藤義成編・修訂版）を読んで話し合った。その中で興味の湧いたところ、当地にかゝわりのあったところ、又話し合いで残したところを、研究者の諸説を列記して参考に供したい。（順序不同で）

出雲国風土記の重要性

358本の銅剣や銅矛・銅鐸が、出雲国出雲郡出雲郷附近から発掘されたことは、考古学の定説の再考を促すことになった。これは弥生時代であるが、その前の縄文時代では、さらに在来の定説を一新する発掘結果があらわれた。しかもそれが日本海沿岸沿いに続々とあらわれた。福井県の鳥畑遺跡は、縄文時代は狩猟採集時代であったとすることを修正して、栽培時代でもあったと考えねばならぬようにさせた。しかも高度の文化の存在を裏付けている。ひょうたんの栽培をし、水を貯える容器にし、浮きにも用いていること、エゴマの栽培、その油を用いて漆塗の器を作っていること、麻の縄が用いられていることで、当時の技術や生活の豊かさ、航海の様子など想像しても楽しいものである。また金沢市の近森遺跡のほか、新潟・長野・富山の各県、鳥取県の東郷池近くの遺跡からは、縄文時代の巨木建築跡や柱の部分が出ていて、それらのほとんどは潟を中心とする港の集落にあたるところという。

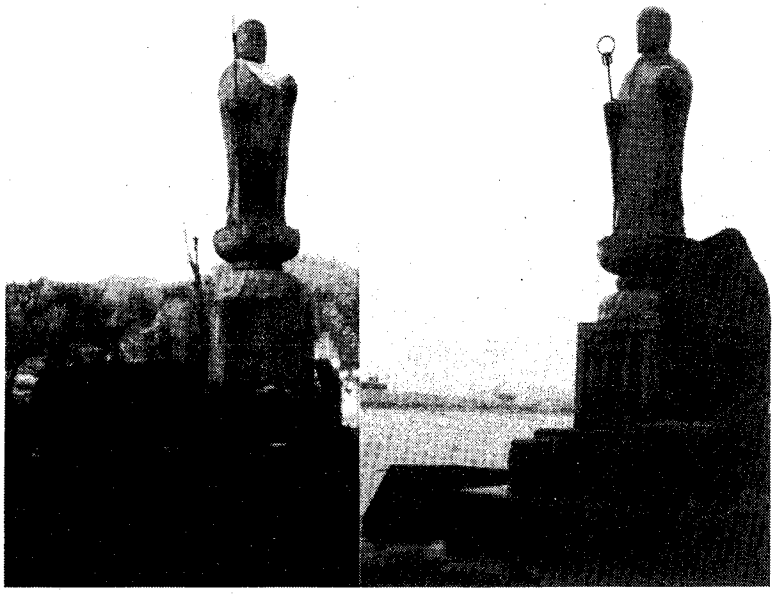
出雲風土記を読もう会を終って①・路傍に刻む歴史①・尼子家臣団の分析④・川柳・俳句・短歌

路傍に刻む歴史①

妙厳寺・袖師が浦の地蔵

まことに猪突な組合せであるが写真をみて頂きたい。

右が袖師が浦（松江市）の地蔵、左が妙厳寺境内の本堂正面にある地蔵である。姿・形・大きさ、諸文様ほとんど同じい。



袖師が浦の台座には

（右横）弘化五星宿戊申　仲姤吉祥日

（中央）現在未来天人象　吾今慇勤付嘱汝　以大神通方便度　勿令随在諸悪趣

（左横）願主　辰歳沙門　亥歳沙門　木次住　団野八兵衛　祥恭作

妙厳寺の台座には

（右横）天保十丑歳　辰仲冬日　現住　享峯代（寺再興）

（中央）「慇勤吾今」（順逆転）ほか　同文

（左横）願主　安部清三良　先祖のため　木次　団野八兵衛　祥恭

とある。福頼の栃木・安部家の言い伝えでは、2体とも同家の祖先が寄進したもので、木次の石工の手になるものという。

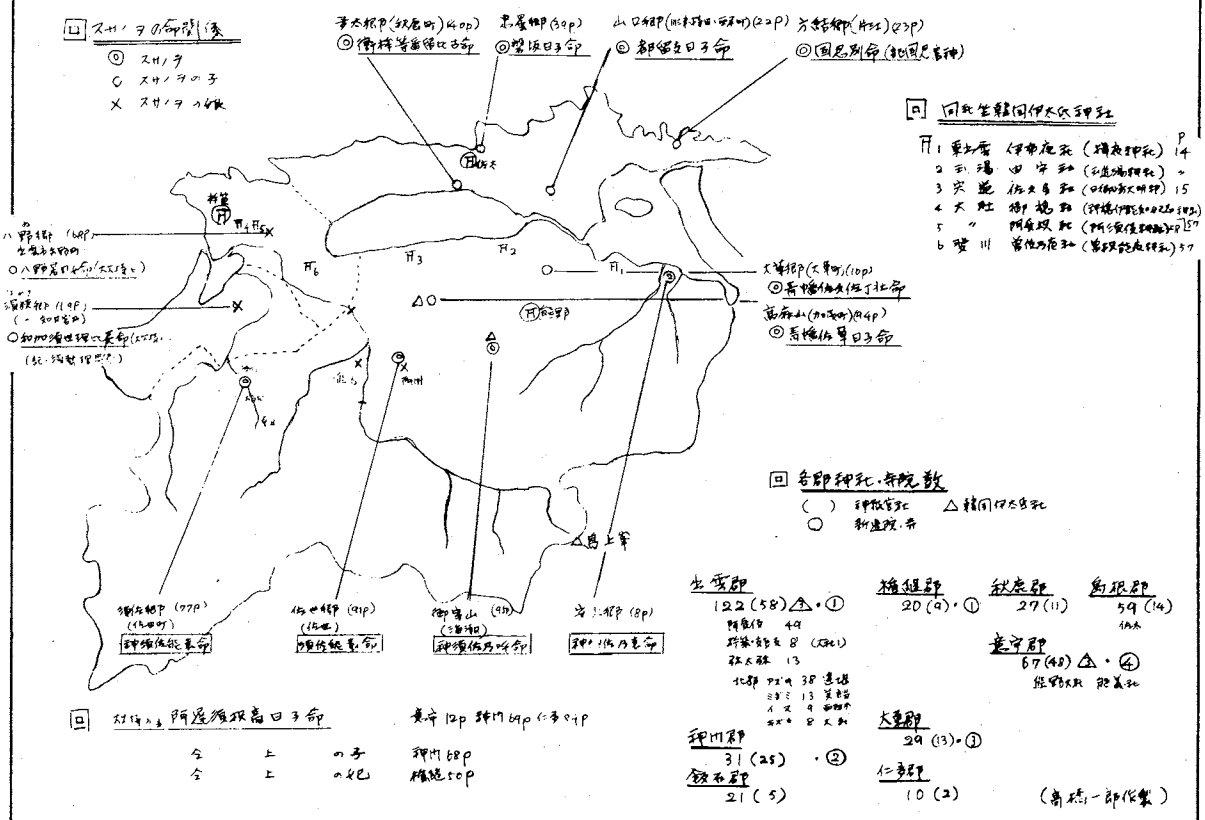
安部清三良は同家6代で、享和3年亥歳1803生れで、明治13年78才で死去している。すると、妙は天保10年1839・37才の時、袖の弘化5年1848はそれより9年後である。亥歳沙門を清三良（46）とすると、辰歳沙門は仝家5代（77）であろう。沙門はもとは出家して仏道を修むる者の通名であるが、江戸末期には、寺に尽す篤信者はこう呼ぶこと

半裸体と洞窟・狩猟の生活の縄文時代の様相は一変した感がある。

それから短くて数百年後の弥生時代、さらに数百年の古墳時代のあと8世紀初頭の「出雲国風土記」はこれらから考えると、文字に書かれた以上に豊かなものであったようである。しかもそれが発掘され遺跡・遺物があらわれている。加茂の神原古墳の銅鏡・出雲国庁跡・郡家跡・正倉跡等々「出雲国風土記」の内容の正確さは裏付けされ、その歴史的重みはさらに加わって来た。さらに記述の裏にひそむ事実への科学検討も随所で試みられはじめている。

五月下旬、古代史研究家の古田武彦氏が当町に再度来町され、近く三度の来町で、専門家とともにそうした調査を行われることになっている。こゝにも既説の解釈の中に疑問をもって取り組むことの重要さを知らされた。

また、ただ日本の古典をひとりよがりに解釈せず、その基本において影響をもつ大陸（朝鮮半島も含めて）との関係を、考古学、文献史学、さらに思想に影響をもつ神話学の各方面にお



が行われていたことをしめす文書もあるから、仝家の伝承と刻字と事実が、ピタリ一致することになる。妙厳寺への寄進の理解は容易であるが、袖師が浦への寄進はどういうわけであろうか。もとは山陰線沿いの山際の波打ちぎわにあった。この一帯は最近の干拓で広くなったが、往時ももっと深く入りこんでいた湖を干拓したと伝えられている。地形もよくそれを物語っている。安部家が福頼で成長した努力の跡と同じ努力がこゝに注がれたと思われてならない。乃木の善光寺の石倉慶道住職にたずねてみたが、古文書もあったが、松江市誌編集の折、所持者から提出したまゝの行方不明という。そこで私どもは抱いている推論を話して調査を依頼した。幸に乃木地区郷土史の編集が始まっているので、多数の方々の協力で解明ができるのではないかと、期待している。結びつきがあるらしいという一本の糸は、当地の古くからの、重要産業にかゝわりのあることで、きっと太い綱がみつけ出されるであろう。

（横田史談会鉄池正治・高橋）

いて、謙虚に眼をむけたり耳を傾けなければならない。日本書記編集にたずさわった史官69人のうち70％は朝鮮からの渡来人であるという。わが国の神話の中にも、幾多の紛飾が施されていることは明らかである。

スサノオの登場は4回

風土記の地名由来の中で、最も多いのはオオナモチで21回、国引神話の主人公ヤツカミヅオミヅヌは3回、スサノオとフツヌシが4回である。

地図の上で

Ⓐスサノオノの関係

◎スサノオの足跡地

○スサノオノ子の足跡地

×スサノオノ娘の足跡地

（数字Pはテキストの該当頁をしめす）

である。スサノオは宍道湖南岸沿いのみ、子は北岸4と南岸1であり、娘は簸川平野南と北とにそれぞれ1ある。

須佐郷は神須佐能袁命で、どこからかこの地にやって来て、「この国は小さき国なれども、国処なり。故、我が御名は石木には著けじ」といって御魂をこの地に鎮め、大須佐田、小須佐田を定めたとある。最も長い記述で、重要である。鎮座地とし今もその宮と思われる須佐神社がある。風土記の時代、須佐がスサノオの本貫地である。次の二カ所は大原郡内で、ひとつは

海潮郷　神須佐乃呼命

スサノオが御室を造って宿ったという。

佐世郷は須佐能袁命がサセの葉を刺して踊った時、それが地面に落ちたのでサセというとある。呪術的性格がみえる。

安来郷は神須佐乃袁命が、この地に来て、ここで気持が「安平けく」なった、つまり落着いたとある。

スサノオの子たち

娘は2人であるが、いずれもオオナムチと婚姻を結んでいる。

オオナムチの信仰圏とスサノオの信仰圏の結合としてという色彩が強い。

大草郷と大原郡高麻山に、アオハタサクサが登場する。麻をまいたという。増殖神と考えられる。山口郷にツルギヒコがいる。剣を象徴する武神か。方結郷のクニオシワケは開拓神か。恵曇郷のイワサカヒコは磐坂＝巨石神仰の霊場に奉仕する神か。多太郷にはツキホコトホルヒコがいるが桙を象徴する武神か。

以上からみると、スサノオには記紀にみる荒ぶる神としての印象は全くなく、素朴な神＝祖としか考えられない。子たちの中の武神の印象のあるものを加えると、荒ぶる神の姿も浮ぶようであり、麻をまいたという子の伝承を加えると、スサノオの増殖神の印象も加えられる。

そのほか風土記の中で関係ありそうなことは（地図の×印）

飯石郡**熊谷郷**（須佐郷の東）では久志伊奈太美等与麻奴良比売命が妊娠してこの谷にこもったという。これは紀の奇稲田姫・記の櫛稲田比売にあたるかともいう。

大原郡**阿用郷**（熊谷郷の東）では目一つの鬼がきて男を食った。その父母が竹林の中にかくれて、男が「あよあよ」という声を聞いたので阿用というとある。

風土記と記紀とのかゝわり合い

風土記にみえるスサノオとその子たちの伝承が（三つの面）あって、それを中央が利用して記紀の出雲神話に組み入れられたという解釈が生れる。他方この三つの書で成立の新しいのは風土記である。出雲国造の広島が記紀をみているとも考えられるが、わずか記が6年前、紀は3年前である。出雲は大和からは僻陬の地である。風土記の特徴は他のどの国の風土記よりも、在地性・土着性の強い正確な記述になっていることである。そしてスサノオもその子たちも、何かを基に再構成したとしても、不明瞭な点が多く、性格も断片的である。記紀のスサノオの話、特にヤマタノオロチ退治の部分はしっかりとした話であり、ペルセウス・アンドロメダ型神話の型であるから、風土記のスサノオとその子たちの伝承を合わせて、記紀が第二次的にスサノオ神話をつくり出したとする解釈が妥当と思われる。それは日本書紀編集の史（ふひと）即ち史官の構成からもいえる。それは朝鮮半島の神話や歴史をみるとさらに明瞭となってくる。諸説を紹介したい。今春来島根大学主催の二回の環日本海シンポジウムと、日韓の合同講演からも明瞭にうかがえる。

斐の上川柳会五月抄

耳遠い老母は話しを聞きたがり　安部春恵
生きていてよかった春の花が咲き　松浦木公
白木蓮今朝一せいに笑いだし　児玉哲呂
習字会小学時代が思われる　古川松
真心をくれた女が胸に住む　松田牛歩
スト止んで連休づかれ鯉のぼり　渡辺好之
図に乗ってしゃべったあとの空しくて　松浦亜以
玄関に男穿きおく寡婦の家　松浦久寿子
親の意見どこ吹く風と翔んでいる　若槻白馬
さあーて掛け声ばかりの老いの日々　高木白虹
久し振りボンボリ映える姫やしろ　若槻愛散人
一人居の淋しいでしょうか長電話　安部正子
日曜の予定腰折る憎い雨　横山まこと
農繁期連休レジャーは他所のこと　田中芳春
気が付くとさっきも咲いた農繁期　藤原のぼる
春風にブランコ一つ奪い合ふ　真綿よし子

訂正　134号＝3頁の上と4頁左上を奉加帳に・5頁表D④の下　馬来に

尼子家臣団の分析④

仁多郡西部の地頭飯島三沢氏物語⑫

まとめ—ひと息入れて

第131・132・133（合）・134号と続いて、尼子家臣団の分析をのせたが、たいへんに堅苦しい文書の表であって、十分な説明もなかったので（今後号を追って述べるにあたって、繰返し見て頂くことになるが）、こゝでもう一度ここまでの大要を、頭の中に整理しておいて頂くためにと、まとめたものである。

各号の上欄の①～⑤までは奉加帳に於ける、家臣団の階層別をしめすもので、その下の欄は、分限帳における上欄と同じいとみられる家臣の領地のある国名と石高である。それを整理まとめたのが、134号の5頁の表Dである。

よくみると、①～③までの一門・一族の所領は出雲国内にほとんどない。⑤の富田衆は京極氏の被官人でのち尼子氏に仕えたもの、尼子氏の被官人という、尼子氏の直臣層であるのに、出雲国内に所領をもつものが極めて少ない。

④の出雲州衆ははじめて置かれた地頭や、承久の変後新補された地頭として、出雲国内の所領に来住し、開発領主として200年から150年の実績をもつ在地性の強いものが極めて多い。

尼子時代以前の京極時代や、尼子時代の当初には、この④の出雲州衆が実力をもって、守護権の代行をしていたことはすでに述べた通りで、その有力者の中に三沢氏がいた。

その後急速に尼子氏の支配地拡張にともない、その地に所領を宛行われたのが、被官人の⑤の富田衆であることもべた。やがてこの層に権限の執行者が増加したことも、表Aから表Cへの推移で明らかにしたが、やはり実力の弱さは、所領が他国にある不安定にあった。

134号の、⑥の奉加帳にないものの層には、小侍が多いが、多くは開拓領主であるらしく（出自はまだ明瞭にしていないが）、出雲国内に領地をもっている。

弱小のため尼子家臣団に組入れられたものであるが、もともと④出雲州衆と同じく国人層で自主性は強かった。また⑥の層には出雲以外に所領をもつものがあるが、これらはその国の開拓領主であって土着性の強いもので、従って自主性も高かった。従って、表の①～⑥までの最下段をみると、尼子氏が富田城を下城する最後まで従軍したものは、さらに萩まで従ったものは、⑤の富田衆の他国に領地をもつものが、殆んどであることは、理由のあることである。④の出雲州衆や、⑥の他国に所領のあるもの（そこに居住しているものである）は勿論、出雲国内に所領をもちそこに在地している侍には極めて少なく、従ったものも、ほとんど庶流（直系でない）であることは、十分に読みとっておかねばならない。開拓領主の自主性の強かったあらわれで、終始一貫していることを忘れてはならない。

これが尼子家臣団構成上の特色で、弱点となって、ことごとにあらわれる。以下実際の戦いにおける動向に副って分析をすすめてみたい。

俳句会六月句会抄

新装の灯台五月の灯を巡す　浅野　としお
風牡丹ゆれ合い触れ合い妍競う　岡田　蹊花
水張れば棚田棚田に月おきて　岡田　麗水
霊場は紅曼陀羅の落椿　小川　あきお
藤咲きて旅人水くむ山の駅　楠　房子
子供の日孫よりちいさくなって棲む　高木　白虹
繰り返し語る古里夏わらび　錦織　富江
菜の花や灯台見えて海見えず　新出谷　一華
張り水の植田に遊ぶ雲の影　峯石　美代子
夏蝶のよぎる石庭水の韻　渡部　夕峰

新緑に誦う　簸の上短歌会

蒟蒻を今日はここまでと植ゑ終へて籾殻をかけ目印とする　常盤　はるまさ

新緑に混じりし藤が田の面に映れるを踏みつつ補植なしゆく　野村　節子

ショベルカーの音の止みたるあたりより春蝉の声ひときわ賑はし　佐藤　喜代子

幼かりし吾子のしぐさを語りては新茶すするに夜は更けぬる　松浦　愛子

天に矛を突き立つ如く竹の子の挑むを歌詠むわれに欲しかり　岡田　時子

鯉釣れぬダムよりの若葉の岩間径を釣具重たく喘ぎつつ帰る　伊藤　萩雨

郭公は谷を越えては鳴きつぎて風のすがしき山に蕗採る　景山　悦子

蕗の葉を重ねし上に七つ八つ苺をつみぬ朝の畑に　小早川　恵子

仰ぐたびに盛りあがる如芽ぶきゐる欅の上のひとはけの雲　永井　弥生

病める夜を亡母に看とられし夢をみき覚めて熱ある額を拭きぬ　安部　夕波

会員頒布一部百五十円／六九一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0—601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 136 号
（8 月 号）
昭和 61年8月2日
奥出雲編集集団©

出雲風土記を読もう会を終って②

ヒノ川＝斐伊川はどこか

土着の人の真実がありありと

「出雲国風土記」を読めばよむほど、おそろしくなる。

この書の編集の中心人物は、出雲国の国造・出雲臣であることは明らかで、この下に各郡の郡司が、それぞれの郡を担当して完成したもので、中央から派遣された国司の介入は全くない。このことは重要である。したがって、この書の伝承は「古事記」「日本書紀」にみられる、出雲神話とは別の体系をもつ、出雲国在来のものとするのが、今日の定説となっている（早くは、肥後和男・三品彰英ほか）。

前号でのべた、スサノオやその子・娘の伝承は、出雲における伝承そのものということである。こゝで疑ってみる。各郡からの書出したものを国造が操作したのではないかと。一つの郡に分布している神の伝承の背景には、そこに居住している人との密接な関係があり、そこの郡を支配し勢力をもっていた郡司達にとっては自らの、またその地域の民族がその祖先を、祖神とし氏神として崇拝したものであった。すべての生活の出発はこの祖神・氏神をまつることからであった（のちにくわしく）。

このことは郡司の支配にとっては根幹となるものであったから、国造が簡単に一方的に伝承を再配し、操作することはできない。それは各郡の一つ一つの記述を検討してみても明らかである。風土記は、出雲国の支配者国造の世界であり、その神話であるが、それはまたそれぞれの郡の郷の氏族の伝承で、人々と深い関係をもっていた（水野裕）。

したがって、前号でのべたスサノオ伝承は、本書の成立期およびそれ以前の出雲を考える極めて重要な論拠となるとされる。

次の話はそれを一歩すゝめた考え方である。

半島部のスサノオの子と言うのは、ここに渡来した海人集団のまつる祖神であって（前号でのべたように主に武神的性格。ただし国忍別は開拓祖神であり、湖南岸の大草郷・高麻山の青幡佐久佐日子は増殖祖神と考える）スサノオ（平和的素朴と、そして呪術的面ももつ）を祖神とする集団によって支配されてゆく過程で、スサノオの子とされたものである。それがスサノオをいろいろの性格に仕立てあげたことに通ずるのである。また娘2人は、スサノオ圏とオオナムチ圏の接点にいたので結婚したとされたとなった。さらにまた、スサノオは飯石郡須佐郷を拠点とする渡来系の集団が、祖神として崇拝したものとすると、飯石郡口部、大原郡、安来などのスサノオの足跡地即ち開拓地は、長い神門川・出雲大川の中流と、飯梨川下流と海浜という自然流砂による砂鉄堆積地と重なることになる。そこでスサノオは製鉄集団が浮んでくる。先の地帯に近い三刃屋の松本一号墳、加茂の神原神社古墳（いづれも成立は5世紀初期）とどうかかわるだろうか、時代推定の糸口ともなるであろうか。

一般的には神話の時代は、弥生時代の投影であろうとされる。（弥生時代は紀元前BC300年から紀元AD300までといい、邪馬壱（台）国の卑弥呼はAD140～239年ころである）

このように考えをすすめると、古事記・日本書紀が、特に書紀が多数の朝鮮渡来の史官によって、出雲に伝承されるスサノオ神話などを合せて、二次的副産物として新たなるスサノオ神話をつくりあげたという説が、一般的になる蓋然性が高い。

そこで本書の記述にあらわれた、土着性とその正確さについて「語部」のこと、「川の地名」の記述から、さらにみていく。

語　部（かたりべ）

本書の勘造（正確を期して記述した）の責任者は、秋鹿郡の神宅臣全太理（みやけのおみまたり）（金太理と読む説があるがこれをとる）であり、国造兼意宇郡の大領出雲臣広島であることは、既述のように、土着性が強いこと、そのために独自な神話をもっていることの証しである。出雲臣広島は、「日本書紀」が完成した直後に一年間おいて二度、平城宮に入り神賀詞を奏上しているから、その成立は知っていたと思われるが、その影響は本書には全くみられない。

安来郷の条をみると、ここの郷人（さと）語臣与（かたりのおみあたう）という実存の人物をあげ、60年前にその父の語臣猪麻呂とその娘の伝承（娘がワニに食われ、のちそのワニをとらえて殺した）を記している。語臣の話を採録するという在地伝承の重視（ワニの伝承は親の代の実話）の姿勢は、本書の随所にある。

出雲国には語臣のほか、語部広麻呂・語部君・語部首・語部君族・語部など語部集団がいたことは、ほとんど同時代の正倉院文書の「出雲国会計帳」や、

出雲風土記を読もう会を終って②・短歌・川柳・俳句

「出雲国大税賑給歴名帳」にでている。（語部ー大和王朝に仕え、儀式に際し旧辞即ち神話・伝承の口誦されたものや伝説を語ることを職とした品部である。品部とは世襲的な職業集団で、その管理者には姓（かばね）の君・首がついた。出雲・美濃・但馬などに分布）そのためにこそ神話伝承においても、独自なる内容を構成し得たのである。それは土着の事実に忠実であったことであり、他の事実の正確さの証明となる。次にのべる川についての記述にもそれをみる。

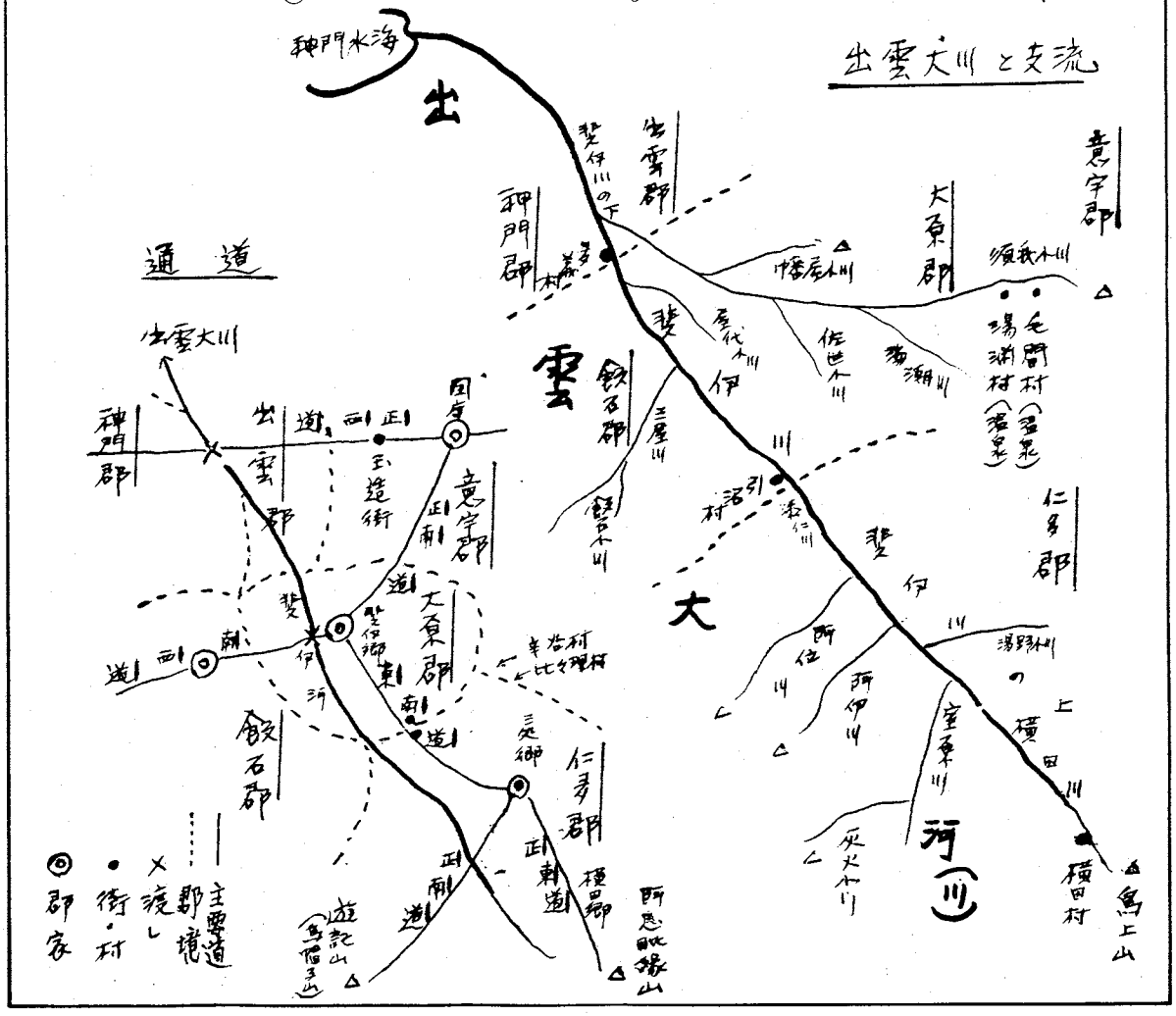
出雲大川

本書でいう**出雲大川**をいつのころから、斐伊川と呼ぶようになったかは明らかでないが、中世半ば以降であろう。**斐伊川**とは、本書の時代では出雲大川の中流しかもキチンと大原郡内の呼び名である。本誌86号にのべたように、14・16世紀には簸川（ひかわ）という呼称が、中流をさすのに用いられている。さらに遡って文永5年1268に高田寺（仁多町郡村の高田廃寺跡あり）へ、後嵯峨上皇が和歌短冊を届けて祈願している。その時右大弁藤原光俊も同様にその時届けている（詳細は近刊の「出雲国風土記論叢」第2号の拙稿参照を）。光俊は藤原定家の直系の門人であり、将軍の歌道師範を勤め、続古今集の編者ともなっていて、上皇とは歌道を通じて深いかかわりがあった。「簸河上」という短い歌論もある。その内容を読んでも、出雲大川全体か、中流か断定しにくいが、後者とみるのがふさわしい。

さて地図を見ながら読み進んで頂きたい。本書では**出雲大川**の説明は次のようになっている。

（出雲郡の文章で）

源は伯耆と出雲との二国の堺なる鳥上山より流れて、**横田村**に出て、**横田郷**・三処郷（現在の湯の原と下三所を含む）・三沢郷（馬木・阿井・三成・三沢・温泉を含む）・布施郷（現在の仁多町前布施と温泉の下布施と、仁多町上布施・佐白を含む）と流れ、大原郡側の堺の引沼村（現在の木次町引野のことで、これより上流は現在木次町に編入しているが、かつては仁多郡内）に出て、来次郷・斐伊郷・屋代郷・神原郷を経て、出雲郡側の堺の多義村に出て、河内・



出雲の二郷を経、伊努郷・杵築郷から神門水海に入る。ここはすなわち、**いわゆる斐伊の河下**なりと誌している。

川の名の由来

本書中の川の名を調べると、ほとんどが土地名（国・郡・郷・里・村・山）がつけられている。その数は

郡名	総数	国名	郡名	郷名	村名	村名か	山名
意宇	9		1	3	4	1	
島根	6			2	4		4
秋鹿	7			2	4	1	(1)
楯縫	4			1	2	1	
出雲	2	出雲大川	1				1
神門	2		1		1		(1)
飯石	5			4			1
仁多	8			2	4		2
大原	6			4	2		

斐伊川を含む

出雲大川は郷名か郡名か国名かをとったと考えられる。神門川が郡名であるから、郡名であろうか。あるいは出雲国最大の川であるから大川とし、国名をとったとも考えられる。斐伊川は郷名に由来する。

斐伊川は出雲大川の一部分

斐伊郷はもと樋郷といったが、神亀3年726から改めたという。ここに郡家があるが、もとはここより東北の今日の大東町前原あたりにあったという。このあたりは広かったから大原といい大原郡と呼んだという。

斐伊郷は、樋速日子が住んでいた。樋社（現斐伊神社）の祭神はこれで、斐伊郷はもと樋郷という、開拓者即ち祖神は樋速日子となる。その子孫の樋氏がこの当時もここに住んでいる。勢力を拡大し郡家もここに移したと考えられる。それは次のことからもいえる。

大原郡には、新造院が三カ寺ある。本書によれば

斐伊郷 郡家があり、もと樋郷という、樋速日子を祭る樋社（現在の斐伊神社）がある。

○新造院（現木次駅附近）

厳堂（本堂）あり　僧5人

建立者は大領勝部臣虫麻呂

○新造院（現木次駅近くの里方）

厳堂（本堂）あり　尼2人

建立者は郷の人樋印支知麻呂

屋裏郷

○新造院（現大東町仁和寺）

層塔（層ある塔）あり　僧1人

建立者は前少領額田部臣押島（今の少領額田部臣伊去奚が従父兄）

当時、国内で一郡に僧寺と尼寺があるのは大原郡のみで、他は僧1人が多いのに、ここの僧5人と尼2人は最高であって、寺の規模も最も大きい。そして後世の国分(僧)寺・国分尼寺の先鞭をつけたようである。出雲国内には14カ寺あり、郡では意宇の4カ寺につぎ、郷では山代の2カ寺と並ぶが、いずれよりも建立者が新しく、現存者などで、新興の寺と考えられるが、単なる信仰の厚さのみでは建立はできない。財力も必要とする。他の寺院のある地域とは違い山間部である。丁度出雲大川の中流（幡屋地区・春殖地区と大東地区の隣接地を含むところ）にいたとあるから、その管理者の豪族で郡司に任ぜられ、その家に屋裏郷の郷庁が置かれるという勢力家であったとなる。しかも岡田山一号墳の銘文入り環頭大刀の額田部臣との関係を考えると、それが一層鮮やかになる。勝部臣・額田部臣・樋氏の興隆交替のドラマをそこにみるようで、物語を構成したくなる。

簸川の「簸」(日本書紀)、肥川の「肥」(古事記)、斐伊郷の「斐」、樋郷の「樋」は、「火」「乾」とともに乙類の「ヒ」の共通の借字（字の意味によらず、唯、音または訓の同じものをあてて用いた字、あて字のこと）であるという。「ヒ」の言葉を表わすのに、当時はこれらの文字を用いたという。「火」を本来とし、それの借字とすると、ここでも製鉄につながるという考えも生れてくる。「火」を「樋」とし、のち「斐」という好字を用いて「ヒ」を表わしたといえる。これがのち「肥」「簸」と転じた。

以上で樋川・肥川・簸川そして斐伊川、これで出雲大川が大斐伊川が、仁多郡から流れでて急に勾配が緩やかになる、自然流出の土砂堆積地帯にあたる。すると砂鉄が浮んでくる。（本誌76号参照）

尼寺は樋速日子の末孫とみられる樋氏の建立。「印支」即ち「稲置」(大和王朝時代の下級地

梅雨のころ　簸の上短歌会

雨毎に木の芽は伸びて光る峡をハミングしつつ若者来たる　常盤　はるまさ

みのらざる初恋と故郷の山川は終生かなし川ぼたるとぶ　永井弥生

寺院より夕焼けのメロデー流れきてけふの田草も終りとな　岡田時子

野仕事に履きて古りたる靴なれど泥を洗ひて花蔭に干す　佐藤喜代子

その名にも似ず尖りたる蒟蒻のうすもも色の芽の出揃ひぬ　松浦愛子

庭中を足音のする心地して留守居の午後の雨垂れを聴く　小早川恵子

身請けせる十九才の慰安婦を朝鮮に還らせし老曹長をりぬ　伊藤萩雨

（張家口にて）

降りやまぬもの憂き昼を紫陽花の大き花玉濡れて色濃き　野村節子

経島に鳴く海猫の声かなし七月の海に夕迫りくる　安部夕波

原郡を流れる部分（中流の）の名称であったことが明らかになった。これがさらに、本書において、支流が流れこむ場所の記述に潔癖なまでに正確に記してあることで、決定する。

出雲大川と支流の合流点

本書の中に村名の記述が17カ村ある。恐らく里くらいをさすであろうか。里数は181あったから、村名はその位あったと思われる。郷以下の小さい区域をしめす必要のある時（川の源、堺、温泉のあるところ）、村が書かれている。極めて吟味した場所の表示である。これが川の記述の仕方にもあらわれている。

出雲大川を川上から下って見る。仁多郡内

横田川　源は鳥上山より出で

いわゆる斐伊河の上なり

室原川　源は室原山より出で

即ち斐伊大河の上なり

灰火小川（馬木川）　源は灰火山より出で

斐伊河の上に入る

阿伊川（馬木川）　源は遊託山より出で

斐伊河の上に入る

阿位川　源は御坂山より出で

斐伊河の上に入る

湯野小川　源は玉峯山より出で

斐伊河の上に入る

旧仁多郡温泉村の部分の出雲大川は漆仁川（飯石郡では当時温泉の川と呼ぶ）と呼び、川辺に薬湯ありとある。

以上、すべて出雲大川の中流のいわゆる斐伊河（川）の川上に入るとある。次に大原郡に入ると、斐伊川　出雲大川の大原郡内をこう呼び、出雲郡の多義村に入るとある。

海潮川　源は意宇と大原両郡堺の笑村山より　西へ

須我小川　須我山より出て西へ

佐世小川　阿用山より出て

海潮川へ

幡屋小川　幡箭山より出て南へ

右の四つの川は合流して西へ流れて出雲大川に入る。

この合流した川は、大原郡内で出雲大川の斐伊川部分に流れこまず、これと併行して流れ、出雲郡内ではじめて出雲大川に合流している。極めて正確に書いてあって、あくまでも大原郡内は斐伊川と別称で呼んでいる。

屋代小川　はその南を流れて斐伊大河に入る。

と正確に記している。

出雲郡以下については既述した。

飯石郡では

三刀屋川　多加山より出て

飯石小川　佐久礼山より出て三刀屋川に入る。

須佐川　琴引山より出て、神門郡門立村に入る。いわゆる**神門川の上**なりとあって神門川の地方名

通道（かよいぢ）でみると、飯石郡と大原郡との堺は

斐伊河の辺

大原郡と飯石郡との堺は

斐伊川の辺

神門郡と出雲郡との堺は

出雲河の辺

出雲郡と神門郡との堺は

出雲大河の辺

と正確に書いてある。

道　度（みちのり）では、

南西道は大原郡家から西の大原と飯石の堺の**斐伊川**に至る。渡り25歩44.5m・渡船一隻

正南道は出雲郡の郡家を経て、西の神門郡境の**出雲河**に至る。渡り50歩89.1m・渡船一つ

と極めて正確に記述してある。

斐伊川（来次郷）に入る。

斐の上川柳六月抄

旅の留守草が威張って待っていた　佐佐木千世

次ぎ次ぎと仕事に追われる五月晴　安部春恵

いたわって心で頑張る老の旅　松浦久寿子

幹事長ぬらりくらりと化けなまこ　渡辺好之

三選へうまく丸めて同日選　松浦木公

スカートが小さくなったと感違い　松浦亜以

老いたかな明日へ廻す気の弱わり　松田牛歩

せがまれて孫にひかれる乳母車　古川松

田植すみ一段落と妻見舞う　藤原のぼる

あこがれた名前の方に今日は逢い　太田亀甲

降りだした雨にプランを又消され　真綿よし子

病院のぬるい番茶に馴らされる　藤原千代子

持っている飛ばさぬだけの含み針　若槻白馬

子供の日孫より小さくなってやる　高木白虹

爺ちゃんのお嫁になると孫は言い　石原トミ恵

不順勝ち今年の天候気にかゝり　若槻愛散人

ぢいちゃんが死んだらみんなくれと孫　横山まこと

旬の物荷にあれこれと小走りに　安部正子

くつろいで今夜は飲めとすすめられ　田中芳春

俳句会六月句会抄

糊ききし浴衣をゆるく着て座せる　浅野としお

畑占めて我がもの顔や今年竹　岡田蹊花

鈴鳴らし小猫隠るる花豌豆　岡田麗水

粽笹取る手にこぼる小糠雨　小川あきお

水に映ゆあやめの彩や鯉あそぶ　楠房子

雫く汗仰ぐ山門磴なかば　高木白虹

新緑へ手足伸ばして山の宿　錦織富江

病む窓へ真白き蝶の訪れし　新出谷一華

幼子の開けし両の掌蛇苺　渡部夕峰

最近のたたらに関する論文紹介

○「日本の産業遺産」（玉川大学出版部刊）

"奥出雲の近世企業たたら発達小史"

○イギリスにおける国際鍊鉄学会報告

"たたらにおける鍊鉄"（英文）

○日本金属学会50周年記念論文集（近刊）

"奥出雲の近世企業たたら―特に経済と地下構造からみた技術発達史"（英文）

（右執筆者　横田史談会・高橋一郎）

会員頒布一部百五十円／六九一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0160 1）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 137 号
（9 月号）
昭和61年9月6日
奥出雲編集集団©

小字めぐり⑥

大馬木西南部（上）

大峠・上連・大畝・小峠・亀ケ市・湯舟・宮・堅田・野伏

地名の初見

大馬木は江戸期には犬馬木村で、西方の小馬木村と、明治22年1889に合併して馬木村となり、以来大字名となり、昭和32年に横田町・鳥上村・八川村とともに合併して横田町大字大馬木として現存している。

出雲国風土記733には、「馬木」という地名は全く見ることができない。136号でのべたように、風土記の仁多郡の条には4郷に里が12あったと記してあるが、馬木の属する三沢郷はあとでのべるように郡内で最も広域の郷であるのに里は3である上に、この郷内にある神社は、

大原社（現阿井地区）
三沢社（現三沢地区）
石壷社（現温泉地区）

であるから、里3は、これらの神社を氏神とする人々の地域を指すとみられ、神祇官社である三沢社のある三沢地区が中心であったとみられるから、馬木地区は、住民は極めて少なかったものとみられる。里を形成することはもとより、氏神を祀るまでの状態でもなかったとみえる。

当時の三沢郷はのちの馬木郷（明治22年以後の馬木村と八川村の大字大谷）、現高尾・三成地区、阿井郷（仝前の阿井村）、のちの三沢郷（仝前の三沢村）、のちの漆仁郷（仝前の温泉村）を含んでいた。

僻地馬木ではあったが、**遊託山**（鳥帽子山1225m）**灰火山**（仏山1012m）の山名が記録されている。そして、仁多郡家（現仁多町郡にあったとされている）から、郡内に通ずる大きい道は二つあって、その一つは正東道で、横田郷の東を経て鳥取県日野郡阿毘縁村に至るものであり、もう一つは正南道で、**備後国の堺**（遊託山）に至るもので38里121歩（20・336km）あるとある。恐らく郡より三成・高尾を経たものであろう。加藤義成氏の考証には鳥帽子山の西側を広島県比婆郡の油木へ越す道であったとしてある（風土記の道度の項解説）。ところが風土記の仁多郡の終りには、**備後国の恵宗郡の堺なる遊託山**に通ふには37里（19・778km）とあり、**常に剗**ありとある。剗とは関の一種で、「関は検判の処、剗は塹柵の所」と令義解にあるから、壕を掘り柵を施して非常を警戒するようにしてあったと考えられる。当時出雲で常置の剗が六カ所（このうちに阿毘縁境とこゝがある）、権置（必要の時臨時に置く）が五カ所（郡内では阿井の毛無山の西を越えて高野町和南原へ出る道にあった）あった。

すると通い道が馬木の大峠で二つに分れることになる。即ち鳥帽子山から比婆郡の油木（六の原即ち現在の広島県民の森のある所）へぬける道と、鳥帽子山とその北の吾妻山（風土記には記載なし）との鞍部にある越原越えの道とである。こゝは恵宗郡（現比婆郡西部）の越原から比和に出る道である。

文政年間（1818～1830）広島藩の儒者頼杏坪の通達によって各郡の村々の庄屋が出した報告書を通称「国郡志」とよばれているが、それの奴可郡（現比婆郡東部）をみると、六の原（旧油木村内）越えは、三井野原（旧油木村・現横田町）越えとともに、出雲へ通ずる主要道である。

又恵宗郡をみると、比和からの越原越えも、高野山（現高野町）からの和南原越えも、出雲へ通ずる主要道である。時代が1100年隔っているから比較にならないが、古来から現在までも通路となっている。そこでこの僻地に2つ道があってもよいが、あるいは、この道は記述からみると、同じもので、越原越えを言ったものであろうか。風土記と同時代の補後の資料がないので、今後の先学の研究に期待したい。

長い横道に入ってしまったのでもとにかえすと、川については

灰火小川　灰火山より流れて室原川に流れて横田川に合流する川。

阿伊川　遊託山より流れて出雲大川の上流・斐伊の川の上に注ぐ現馬木川。（阿位川があるが、現在の阿井川のこと）

恋山　阿伊川の下流にある現在の鬼の舌振のこと。伝説が記してあるが、これは「出雲風土記を読もう会を終って」にゆずる。

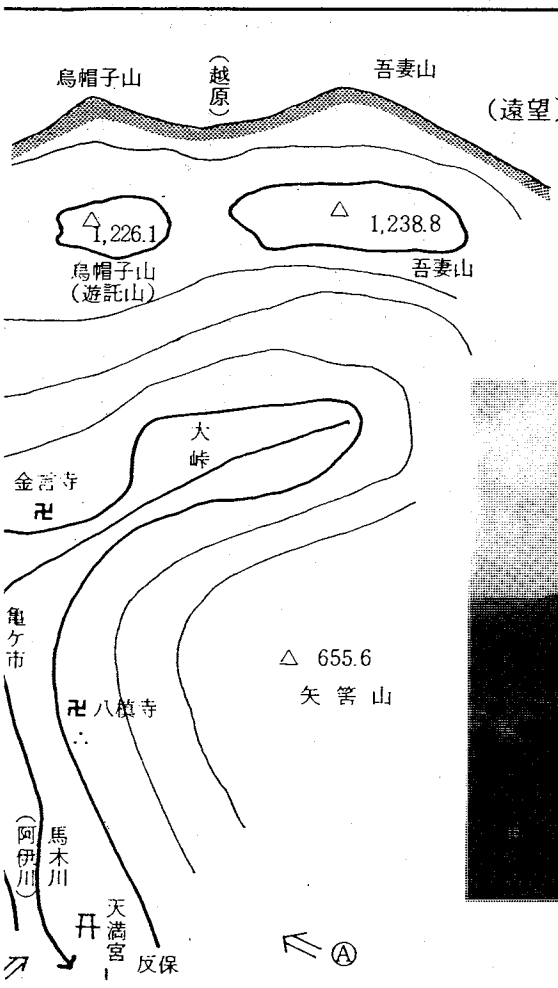
以上の太字に関するものが、馬木に関するすべてである。

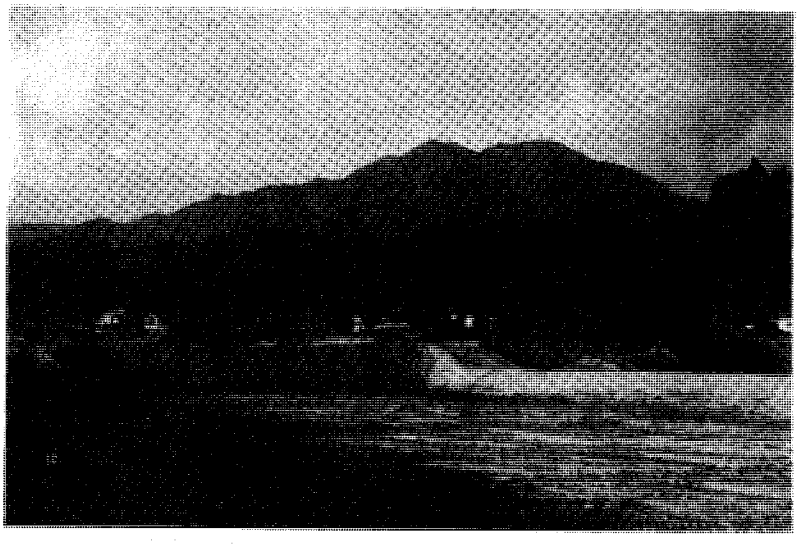
さて地名の初見ははるかに下って、500余年後の文永8年1271 11月の「杵築大社御三月会相撲舞御頭役結番事」の12番に属する郷に（千家文書・新修県史）「馬来郷35丁2反大　多胡左ヱ門尉」とある。地頭職は多胡氏であった。この時三沢郷は分れて馬来郷・阿井郷・三沢郷となっている。（多胡氏については本誌134 135号飯島三沢氏物語参照）

14世紀からは明らかに

小字めぐり⑥・俳句・短歌・川柳・夏下冷頭

信原文書（横田町誌）によると、建武3年1336 8月2日（南朝はこの年2月29日延元元年の改元）将軍足利直義（疑問あり）は、延元元年湊川の合戦（5月）の戦功として、雲州仁多郡真木村地頭職を、信原宗貞に与えている。その後応安3年1370 11月20日に、管領細川頼之（将軍は足利義満）は、宗貞よりその子秀朝への地頭職の伝護を、御教書をもって認めている。この間が34年である。信原氏の本貫地は備中国の北部にあったから、当人が来住したかどうかは明らかでない。その後間もなく、将軍足利氏と並ぶ勢力のあった、山名氏一族の馬来氏が、摂津国馬来郷から、地頭職を得て、この地馬来郷に来住した。（概要は横田町誌または本誌104号、詳細は山陰史談12・13号参照）





Ⓑ写真　矢筈山

系図によれば、初代は山名一族の嫡統師氏（師義）の子で氏綱といゝ、馬来郷を領して馬来氏と称し、出雲に下向の時将軍義満の満の字を賜って、満綱と改名、足利家の家紋「二つ引」をもらったという。そして馬木に来り神目山（寒の峰か）に築城して居住したとある。

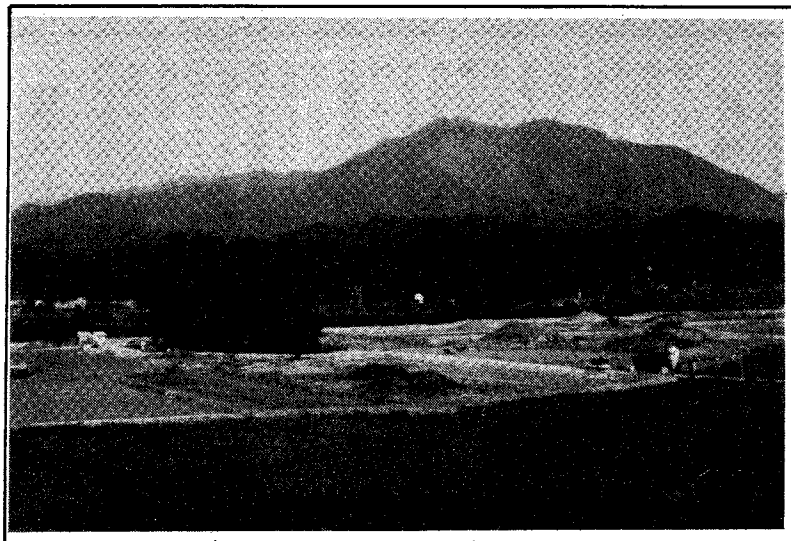
神目山は感目山、寒峰ともいう、現在の矢筈山である。はじめての築城か、それとも大改修をしたものか明らかでない。勿論今日の矢筈山の頂上ないし中腹に居所があったとは考えられない。山城の遺構はほゞ調査されているが、それらのことまでは明らかになっていない。頂上よりは、三沢氏の居城ほかを一望でき、一方籠城にあたっても要害堅固な山城である。

当時、伯耆・出雲は山名一族が守護であり、北朝の御料所である横田庄にも勢力を及ぼしていた。やがて横田庄を横領した守護山名満幸の改易（守護をやめさせる）問題に端を発し、足利氏と山名一族の対立は遂に明徳の乱となる。初代満綱は山名方で戦い、富田城下吉田村で討死する。2代も満綱である。⑤代道綱が小馬木の小林城を築いて移る。以来天正17年1589、毛利配下の各地の諸将が安芸広島城下に移った時、三沢氏とともに馬来氏も去ったが、⑥代乗綱、⑧代孝綱は老令や病弱のため小林城に残り、（⑦代久綱早生）孝綱の子元貞が、外祖父とともに移った。そして残留した者やその家族のために、若干の所領を馬木で与えられたが、大半は次のように分けられた。そして馬来氏一族がこの地で絶えたのは慶長末年1614ころのようである。

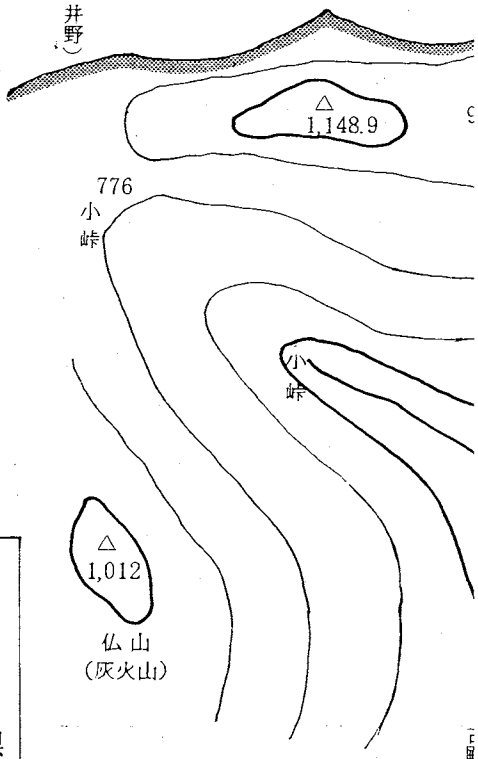
先の信原氏が馬木を去ったころのことは明らかではないが、その後天文元年1532 11月、備中国の井原を知行し、毛利氏時代になって再び浪人となったが、文禄5年1595 2月19日付の毛利家奉行佐世元嘉の信原朝定宛ての知行宛行状によると次のようである。

大馬木　1500石　信原弥五郎
　　116石　百弘三郎兵ヱ
小馬木　800石　星田内蔵助
　　500石　今井左馬之助
　　456石　那須惣右ヱ門
計　3372石（大谷も含む）

このころすでに大馬木・小馬木



Ⓐ写真
仏山　　森の中　天満宮　　山際　古殿



(概念図)

となっている。(但、知行は間もなく慶長中期で終る)

百弘以下の四氏は、寄親信原氏の寄子である。四氏は信原氏の被官でなく、戦国大名毛利氏の家臣（被官）で、信原氏に預けられたものであって、戦国大名の命によって、寄親とともにその軍事力となったものである。

信原氏や星田氏は来住したようで、記録や伝承に残っている。

杠氏・安部氏

杠氏については、横田町誌に。詳細は奥出雲46 47 51 56 84 85 88 89 90 91 92号にゆずって要点をのべる。文明4年1492、備中国新見庄の杠城々主であった杠惟久は、南方の大松山城（備中高松城）城主の上野広長の大軍にせめられよく防戦。敵は攻めあぐんだが、味方の中から敵に内通するものがあり、遂に落城し惟久をはじめ多数が討死した。嫡子常久は数カ所に深手を負ったが、家臣によって虎口を脱し、命を保ったが不具の身となり、雲州へのがれた。時に19才、備中国に縁のある馬木郷に入り、馬木城主馬来氏を頼った。

二男勝久は父の遺言に従い、家人高木源八郎とともにおちのび、将軍義政を頼り、奉公の道をひらかれ、その子孫は再び杠城に復城することもできた。

常久（当地杠家初代）がこの地に来住したのは馬来氏③代行綱の時代であって、その家臣馬来蔵之助の聟となり、向原（今の古殿）に住み、軍学兵道に志して生涯をすごし、大永2年1522 69才でなくなった。(写真ほか提供　横田史談会・石金章徳)

前136号追補ー額田部臣について

原稿浄書時に脱落していましたので、3頁5段9行の次へ

大原郡の郡家は、もとは当時の郡家（斐伊郷）の東北10里116歩にあった。この一帯は田10町ばかりあって平原であったので、大原といったとある。額田部臣の居住地である屋裏郷は、同じく郡家の東北10里116歩にあるとあるから、方角と距離、広い平地ともに全く一致するから、ここに郡家があったことになる。10町歩といえば広い土地・大原であり、穀物豊かな土地である。従って、郡家が置かれ大原郡の中心となっても当然である。額田部臣がそこに居住していた豪族であっても不思議ではない。郡司制成立七世紀後半説に従うと、二〜三代前の郡司大領は額田部臣であって、大原郡地域最大の実力者であったことになる。

俳句会七月句会抄

夏足袋の白きに木漏日来て遊ぶ　浅野　としお
妻扶け日曜百姓小豆蒔く　岡田　蹊花
昼灯す患者溜りや梅雨くらし　岡田　麗水
炎昼や風鈴怠惰をさそう韻　小川　あきお
梅雨晴れて乾くシーツの陽をたたむ　門脇　花子
在りし日を語る瞳や月見草　楠　房子
古りし過疎夕焼雲の下の村　高木　白虹
牛乳ビン音爽やかに初夏の朝　新出谷　一華
初胡瓜噛んで音ある今朝の味　錦織　富江
遠雷やみどり児母の背に伏せり　渡部　夕峰

斐の上川柳七月抄

自問自答納得せぬまゝ流される　石原世以
泥落しちまき一本清涼剤　渡辺好之
投票場どんな風かな同日選　安部春恵
通る人みなにすゝめる畦のお茶　藤原千代子
悔のない今日で安堵の高いびき　松浦木公
確実に脳細胞の数が減り　松浦亜以
新茶入れなごむ出合にとげもとれ　真綿よし子
うっとうしい梅雨も晴れよと選挙カー　古川松
長電話鍋の煮物が又も焦げ　佐佐木千世
父の日に婿の好みの贈り物　藤原のぼる
どちらでも変りはなかろう参院選　松浦久寿子
激流にもまれて石も丸くなり　松田牛歩
無いけれど投出して見たい時もある　若槻白馬
はっきりと電話でことわりするときめ　太田亀甲
思惑を秘めて選挙の幕があけ　若槻愛散人
鼻にまで泡をのませる生ビール　横山まこと
山開き息子の年数え香をたく　安部正子
徐えたばこ紫煙の行方見る孤独　高木白虹
恩数多報い足らないままに老け　石原トミ恵
嘘つきを如何に裁くかえんま様　田中芳春

終戦の夏　簸の上短歌会

髪薄くなりたるわれが対ふ碑の君は十九才いまも青春　常盤はるまさ
セメントの白く乾ける地下足袋を履きて息子は朝を出で行く　佐藤喜代子
夕ぐれを家路に向ふ水の辺を蛍はもつれる如く飛び交ふ　松浦愛子
けみほたる竿先につけて夜釣りする魚信しきりにはげしく動く　伊藤萩雨
燃ゆる如き青葉のなかの病葉は風なき庭に終焉告ぐる　岡田時子
みそ萩をめぐりて白き蝶の舞ふ母をおくりて六度目の夏　永井弥生
雨上りし朝の寺苑にほのぼのと沙羅双樹の花は咲きたり　安部夕波
（清水寺にて）

夏下冷頭

◈岩波の「現代産業情報」を読んでみると、現代科学の先端技術の恩恵を至るところで受けている。どこまで進むのか、21世紀を待たずとも、そら恐ろしい感もする。新日鉄の季刊「鉄の話題」を読んでも、某紙連載の新素材のポイントを読んでも、理解の域を越えているが、私共は至るところでそれらの恵みにあづかっている。世界の最先端をゆくわが国の開発者には、満腔の敬意を表したい。

◈歴史を学ぶことは、「現代の動向の根本を見わける眼と力量を養うことにある」とされている。読みながら、ふと流れの中で立止まってみると、進歩らしくみえる、保守化や右寄りがあちこちに見えるようだ。渦中の人はただ乗り遅れまいとしているのだが、巧みというのか、いつの間にかその流れにのめりこんでいる。イベント、イベントも活力を生み出すならよいが、求めるロマンが、いつとんでもないところに行かぬでもない。物語が歴史となって、真実が見失われる。

◈年間2回の芥川賞の入選作が、雑誌文芸春秋に登載される。石原慎太郎の「太陽の季節」、さらにしばらく前の、井上靖の「猟銃」ころから、入選作の登載号のほとんどが手元にある。今年前期は入選作がなく候補作品であった。批評にもあったが、うまい作文という感じだけが残った。

◈「山陰の経済」（合銀刊）8月号の―山陰地方小売商業の変貌と今後―と、別冊の「山陰の民力」島根県版を読んで、当誌10周年号の「奥出雲の民力」さらに、昭和45年の横田ブラザーズクラブ10周年記念「統計から見た奥出雲」（島大に検討依頼）とを読みかえし、県商工連合会の諸調査を加えると、木次の沈下と、横田と仁多の順位逆転が浮んで来る。これ以上は私の限界、及ぶところではない。

◈富民協会月刊の「農業と経済」は「農業白書」に続いて、「危機に直面する農協」の臨時増刊を出している。私の見聞しているわずかなことの背景と現状が、整然と整理されている。大変だと思うことばかりである。某紙連載の「転換期のコメ」も熱心な方々の苦闘記である。8月号の某総合誌の「第三次農地解放のすすめ」は、これらのことを一刀の下に切りすてた感があった。

すなわち、アメリカから輸入した米の陸揚げ価格はキロ当り101円、日本産米は380円。全部輸入米とすると、101円＋流通経費100円＋農民のキロ当り収益高65円で266円、100円も安くなる。65円は農家に「コメ輸入黙認代」として保障する額。米価は下る、地下も下る、米輸入によって貿易不均衡も是正される、うまい話。だが農民切捨てではないかと思いさらに読むと、農業保護の下に農民をカネ借り業者として、肥料や機械漬けにして真綿で首をしめている農業政策は転換すべきであるという。論者の大前研一氏は同じ分析と論理で、自民圧勝法を首相に進言した人。「開放経済のもと強い産業を益々強くしてゆくこと」以外に、日本の活路はないという。模倣から創造に進んでいる日本の科学はこれを可能にするという。

政府の「行革」の中で噴出してきたのは、食管と農業保護政策の撤廃である。

以上「シン四ツ谷怪談」。識とは予言の意。さて幽霊の姿は。

（無断転載御遠慮を）

会員頒布一部百五十円／六九―一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0―601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第138号
（10月号）
昭和61年10月4日
奥出雲編集集団©

奥出雲と文学・芸術①

大町桂月の「簸の川上」

時には、美文を掲載するもよからずやと、折りにふれ、故人をしのびつゝ、作品を紹介する。

夏は涼風に心を清め、秋は紅葉に心をなごませてくれる、「鬼の舌振」を美文で残した、大町桂月にまづ登場して頂く。

大町桂月

桂月は明治2年1869～大正14年1925を生きた詩人・随筆家である。和漢混淆の独得な美文で書かれた紀行文は広く愛読された。

桂月は東京（帝国）大学を明治29年に卒業した。在学中に結婚し長男をもうけた。次男が生まれた翌32年の夏、三年間の契約で簸川中学校（大社高校の前身）の教壇に立った。

津山から車で四十曲りの険を冒して出雲に入った。山陰の大古ながらの山水・古蹟は、桂月を待っていた。桂月は時間をつくっては、島根半島に遊び、美保関を訪れ、三瓶山・簸の川上・断魚溪・伯耆大山にまで足をのばし、山水の情をほしいまゝにした。

東京の博文館で評論を執筆していた、明治時代の一級の評論家高山樗牛が外国留学におもむくため、その後任におされたが、約束があるとて断った。その後己むを得ず、教職を退いて博文館に入社した。当時博文館は、わが国第一流の創作雑誌として著名だった「文芸倶楽部」をはじめ、「太陽」「中学世界」を発行していた。

桂月の批評には権威があって若い文学者達は、争って桂月の門をくぐった。

次の文は桂月、大社の中学在職中の明治33年のものである。

いまだかつて、この文に勝る「鬼の舌振」の紹介文はあらわれていない。声をあげて読む時いつの間にか、かの溪流の岩の間を歩んでいる感にひたる。

「簸の川上」

素戔嗚命が大蛇を斬り給いけむ跡は今たづぬべくもあらねど神話のうえになつかしき簸川の下流に住まえること一年あまり、去年の夏、妻子を連れて、六七里さかのぼりて、湯村温泉にやどりぬ。こゝに大蛇のこもりしと伝うる巌窟、足名椎、手名椎の墓と称する古塚あれど、附会の甚しきに、たゞ失笑したるのみ。昔も今も色はかわらぬ簸川の溪流に臨みて、香魚釣りつゝ永き夏の日を暮し、折もあらば川の源までと思いしが、宿痾温泉の為に却って甚しく、二三里歩まむこともおぼつかなく覚えしかば、むなしく帰り来ぬ。ことし夏の初め、再び簸川をさかのぼりゆく。湯村を過ぎ、北原を過ぎ、三沢を過ぎて、三成村に至る。こゝは仁多郡役所のある処なり。小学校に小憩しけるに、郡長井川列氏も来りぬ。舌振へ遊ばむことを告げけるに、

小字めぐり⑦

大馬木（中）

馬来氏初代氏綱が、信原氏に替って馬木郷地頭として来住した年は明らかでないが、馬来氏は山名氏の一族であり、出雲守護山名満幸が、横田庄―京都の仙洞御料所（北朝上皇の領地）――を横領して、本貫地丹波国石原庄から、家臣石原氏を横田庄の代官として来住させたころであろう。稲田の土居・安部氏が、山名満幸の横領によって、御料所代官を一時退いたのが、系図によれば、永徳2年1382であるから、そのころとみられる。

馬木郷の日蓮宗

小馬木の安養寺の開山は日尊上人であることは史実である。

日尊上人は、日蓮宗の宗祖日蓮の法孫である。文永2年1255奥州に生まれ、弘安6年（日蓮は5年に死去）1255、日目上人に出会い、日蓮宗に帰依し、翌7年身延山にて、その師で日蓮の弟子六老僧の一人、日興上人に師事した。永仁3年1295のころ（33才ともいう。）修業中、上人の勘気にふれ、諸国行脚の旅に出、応長元年1311許されるまで10数年間、各地に布教し36ケ寺を建立した。その最初に建立したのが、安養寺であるという。それは1295年ころである。

それから約90年後に、馬来氏綱が、地頭として来住した。このころの安養寺住職は、日尊の2世あと、3世の日源であった。

日源はのち京に上り、本山要法寺（日尊は京都に要法寺を建て、日蓮宗の一派を興した。日蓮本宗の本山である）の6世貫主となった日源上人である。（安養寺からは、のち本山8世となった日得上人、16世日恩上人も出している。）

氏綱はその信仰と学徳に帰依し、日蓮宗に改宗した。日蓮宗の布教は、折伏（悪法をくじいて心服させる）的伝道法をとっていた。

とくに領主を折伏することによって、在地武士の血縁的紐帯の支配体制に、法華信仰の精神的支柱を与えるようにした。そして領内寺院を日蓮宗に改宗させ、住持を折伏して弟子とし、

われも先年遊びたることありとて、名刺のうらに一絶書きて示さる。其の詩に曰く、

突兀巉巖扼急湍。
仰看絶壁聳雲端。
神排毒鰐千年古。
今日行人膽尚寒。

思いかけきや、山又山の奥なる寒隈の郡司にして、かゝる心憎き風流あらむとは。次韻せむと思いしかど、咄嗟の際、好句も思い浮ばずして止みぬ。郡視学山田氏、郡役所の小使の路をそらんずる者を呼びて導をなさしむ。二人の小学教員も共に行きぬ。千原氏となし、森脇氏となす。外に二人、これは簸川中学同僚の中の脚最も健なるもの、山本氏、阿部氏、是れ也。

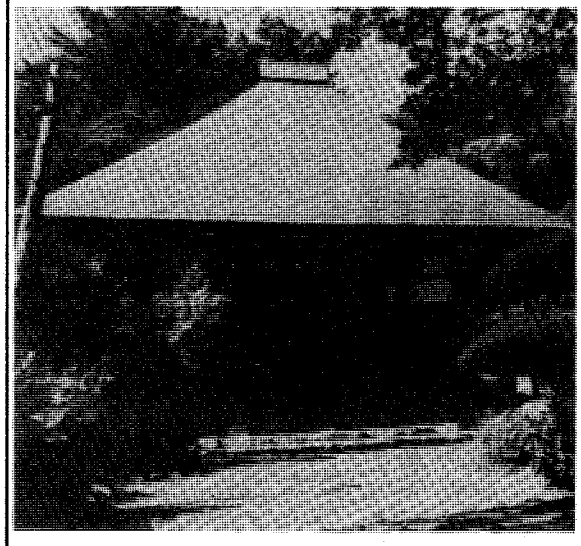
三成より横田さしてゆくに、馬木川の簸川に会する処あり。爪先あがりの坂路に、さびしげに立てる一軒の休茶屋より横田街道にわかれ、馬木川をわたりて、其の左岸をさかのぼること十数町、左に折れ、林樹を穿ちて馬木川に出づ。舌振の奇景はこゝより始まらむとす。而してこの奇景をさぐらむには、幾度か奔湍を渉らざるべからず、又滑かなる巨巖を攀じざるべからず。川下より上るべくして、川上より下る能はずという。亦以て其の危険なるを知るべし。

長さ数町に亙れる大磐石、溪中に横はり、溪を塞がむとして塞きつくすこと能はず。溪の一端に幅せまき長溝を余し、全溪の水、こゝに縮まりて流れ去る。その流れ駛く、水の色碧琉璃も啻ならず。こゝを過ぎ行けば、路窮まる。急流を横絶せざるべからず。こなたは掴まえ処のなき絶壁なり。かなたは対岸より大巖重畳し来りて、一間ばかりの処にて巖絶え、水流る。全溪の水、この狭き間を流るゝことなれば、流れは急に、且つ深し。底は巖なるが、その巖二筋にひだの如く隆起して、ひと足にて初めのひだを踏み、二足目に次のひだを踏み、三足目には少し遠けれども体を前に倒し、手にて巖につかまりて漸く渉ることを得べし。而もその底のひだ、水上に突出せるにあらずして、水、人の膝を没するばかりの水中に在り。このひだを踏みはづさば、水は腰にも及ぶべく、腰に及ばば、急湍の水、到底支え得べくもあらじ。下は二三歩にして、一落して瀑の形を成し、溪水巖に激し、飛舞盤旋して巨霊咆哮す。もし足を失えば、命はなきものと覚悟せざるべからず。一同看て、たゞ呆然たりしが、導者は流石に経験あることとて、先づそろそろとわたり終り、顧みて曰く、今日は水多けれども渡らるゝことを得べし。静かに気をつけて渡り給へと。導者のすぐあとに進み居りし山本氏渉りぬ。余之に次いで渉りぬ。こたびは阿部氏の順番也。然るに阿部氏は、わたらむとしては、急湍をながめて引きかえし、引きかえしては、又渡らむとし、渡らむとしては又引きかえす。此の如きこと数度、終に弱音を吐いて曰く、余はこゝに待ち居らむとて、其の次にありし千原氏に路をゆずらむとす。山本氏は年少かく、気鋭也。笑って曰く、僕なお渉れり。苟くも男子にして渉り得ざることのあるべきかと励ましたれど、阿部氏は猶ほ渉らむともせず。導者見かねて、湍の半ばまで渉りもどりて、其の手を引くに、漸く決心して渡り得たれども、色少し青ざめて、歯牙寒戦するさま、いかにも気の毒也。次に千原氏、導者の助けをからずしてその寺院を日蓮宗のものにした。

「馬木氏綱は、日蓮宗に成る。後馬木に法華宗多し、四か仏を焼捨てたるというはこの人也」との古記録がある。本山要法寺の貫主を3人も輩出した、馬木郷の法華宗の信仰的風土は、極めて豊かで根強いものであった。

大馬木にある八槙寺は、山本・杠家3代則久が（八槙寺の北の地山本に向原から居を移して山本を屋号とした）、天文13年1544居宅の近くに庵室を建立し、この地を訪れた日蓮宗の旅僧を留め、法華経を信仰した。或一夜、夢に法華経一部八巻を拾ったので、八巻庵と号した。二男甚七を分家させて八巻と呼ばせ、長男の4代重文とともに、心を合わせて八巻庵を寺とした。天正13年1585、京都の本山要法寺に願って住職を迎え、八槙寺と改号した。重久、甚七の弟源八郎は（天文20年1551生れ）、この信仰厚い家風の中で育ち、幼時より出家して、安養寺の弟子となり、博学多才遂に本山要法寺の16世貫主となり、日恩上人と称せられ慕われた。

この杠家は、天文5年1536当家の記録その他によると、鈴を吹き始めた家で、徳川時代半ばまで稼行した。郡内で明らかな家としては最も古いものである。



山根・安部家

この家の本家は、稲田の土居・安部であるが、本誌では、34 35 47

訂正136号・4頁4段7行　川の上に　仝13行笑村山

渡りぬ。最後に、森脇氏は、阿部氏の如く、導者に手をひかれて渡りぬ。阿部氏脚健に、平常好んで峻嶽絶峯を攀ぢ、危険なる山川を看ること席の上も啻ならざる概あれど、この小湍に躊躇せしは、余りに危険なれば也。必ずしも臆病とは云うべからず。此の処以て少年の士の膽気を試めすべし。されど、水の分量減ぜば、危険の虞れなかるべきも、水今少し増さば、渉ること難かるべし。後の遊者、水少なき時にわたりて、我が一行の躊躇せしことを笑うなくんば可也。

こゝより数町の間、巨石溪中に摺重し、連亙し、或いは起ち、或いは臥し、一片の土だにもなしと思わるゝ立岩の、有るか無きかの割目より小松生い出で、躑躅も生い出でて花をつけたるさまいとをかし。既にして、幾多の大巌全溪を厭して交錯する処に、三階造の家ばかりの大巌独り高く群巌の上に立つ。其の巌やゝ傾さて、一面の勾配は、やゝ急なる屋根の如し。これを這いのぼれば、巌の尖角に達す。これを腰伸し岩という。このあたりをさして、舌振と称す。導者曰く、昔鬼あり。美女を慕うて、こゝに来りしが、流石の鬼もこゝより上へは上ること能はず、舌を振うて去りしかば、鬼の舌振の名称起りぬ。今略して単に舌振と云うなりと。導者又曰く、されど、今一説あり。巨巌に厭せられたる溪水、くぐり物凄きこと言わむ方なし。岩の頂は、錐の如く尖れり。導者曰く、古来未だ会てこの巌頂に直立したるものなしと。われ年七八歳、若くして盛んに器械体操を稽古せし頃ならむには、直立して見せて、導者を驚かさ

帰燕秋信　簸の上短歌会

初生りの茄子を摘みて掌に紫紺つやめく触りたのしむ　常盤　はるまさ

萩桔梗紫苑コスモス秋草のひたすら咲けり風のうつらふ　永井　弥生

生涯の初め女体に触れたるは北京花街秋なりしかな　伊藤　萩雨

夏休もついに終りぬ枕べに作品まとめて子らは眠りぬ　戸屋　暎子

賑やかなりし帰省の客は去り行きて庭にコスモス咲きそめにけり　小早川　恵子

拳もて涙拭きゐる勝ち投手に思はずわれも涙ぐみたり　松浦　愛子

水撒けば生ある如く庭石の鮮やかにして夕風涼し　岡田　時子

盛り咲く芙蓉の花より花にかけし蜘蛛の巣に朝露はきらら光りぬ　佐藤　喜代子

確実に季移るらし照りつづく炎天の下に稲穂出揃ふ　野村　節子

遠ざかる祭囃子を聴きながらいつしか眠りぬ京都の宿に　安部　夕波

くぐりて、終に岩間より流れ出づるさま、恰も舌を出せるが如くなれば、称して舌振と云うなりと。いづれも附会の説なれども、いづれかと云はば、後者やゝ実に近かるべし。腰伸し岩に這い上りて、下を見おろせば、むこと、敢えて難きにあらざれども、この日溪風強くして、巌角に中心を取りがたし。殊に三十過ぎて、妻子まである身の、余り馬鹿げたる真似すべきにあらずとて、敢えて之を試みざりき。こゝより川下に向って、左

51 52 53 100号でのべてあるが、分家の山根については、山陰史談20号にやゝ詳細にのべているので、概要にとどめる。

土居・安部6代仁左衛門は、徳川時代になって国内各郡に大庄屋が置かれた時から、その職をうけ、のち下郡と役名が改められると、初代下郡（郡内における民衆側からの代表役）となった。（その後当家は代々下郡役を勤めた、中世以来の土豪であった）のち隠居して長男藤兵衛が7代を継いだ。やがて二男三郎左衛門が、大馬木村の庄屋を仰せつかった。のち大馬木村に居を移した。やがて父藤兵衛もそこに移り住み、分家を創立した。この山根・安部家が成立したのは元禄初年であった。屋敷が当時から現在地であったかは明らかでない。

中世以来の土豪・本安部家は、鉄師として隠然たる実力を貯えていた杠家の本拠地大馬木の中心に分家を構えた。それはもとより、中世以来の京都御料所代官であり、武士として朝鮮出兵にも参加し、代々大庄屋、下郡を勤めた、本家安部氏の声望と実力を背景としたからできたことであった。

伝えによると安部の5代前の時代に——大馬木川流域の開拓によって、堅田の地の殆んどを所有していた——不幸なことが起った。当主は稲田村の天満宮——氏神——に祈願して、願いをかなえられれば、一番よい土地に勧請して奉祀しますと申上げた。満願はかなえられたので現在地に天満宮を一力本願によって建立したという。原口天満宮そっくりの様式の建物である。

天満宮は菅原道真を祭神とする。今日では学問の神とされるが、平安時代には藤原氏との対立から九州の太宰府に配流された。

ところが藤原氏に後世、不幸が絶えず、その怨念のいたすところと、京都に天満宮を建立してその霊を慰めたのが起りとされていて、祟りを鎮める神とされたのが天満宮、天神さんの起りである。原口天満宮は中世期にやはり鎮魂の宮として、現在地に建立されたものである。

（写真その他提供　横田史談会　石金章徳）

——写真は八槙寺——

訂正137号・1頁5段の24・27行と2頁4段1行ともに馬木郷に

方を仰げば、一大嶂壁溪底より直立し、其の幾百千仞なるを知らず。其の頂上には二三の松生いて、更に風致を添えたり。これを天狗岩と称す。天狗岩は立ち、腰伸し岩は臥し、その他比較的に小なる大巌糾紛錯綜して、一溪中最も奇を極めたる処也。

路窮まりて、人は巨巌の下を這はざるべからず。このあたりの行路最も峻且つ険也。こゝを過ぎて、幾たびか溪流を徒渉したれども、幅ひろく、流れゆるく、随って水浅ければ、毫も危険の処れなし。水をわたり、巌隙をくゞり、ゆきゆきて、はんど岩に到る。この岩、山に拠りて直立し、其の高さ天狗岩にゆづらず。山をよじて、其の上部に達す。三四丈ばかりの巨巌、更に其の岩上に直立す。恰も大人の頭上に小児の被ぶる小さき烏帽子をのせたるが如し。其の烏帽子にかたどるべき岩をめぐりて、はんど岩の頂上を一周するを得べし。一周するに、唯々一箇所、稍々危険なる処あり。導者曰く、膽気ある者にあらずんば、こゝを過ぎて一周しつくすこと能はずと。されど導者を始め、我等一同膽気なきものになりて止みぬ。

こゝより上、十数町の間は、なお岩石流水の奇ありと、導者は云へど、時間と行程とに相談して思いとどまりぬ。凡そ此の溪、数十町の間、両岸は直ちに山に囲まれて、屏風を二重にたてたるが如く、巨巌の起臥するさま、溪水の激するさま、遊人の目を刮せしむるに足る。出雲国中、最も奇なる溪谷と云うべし。

はんど岩より溪にわかれて、帰路に就き、横田街道との分峻点なる休茶屋に来りて、しばし休息す。酒はと問えば、無しと云うに、已むを得ず、茶を飲み菓子を食う。我等より先きに休み居りし一美人、車に乗りて、横田の方に去る。一教員指さして笑って曰く、これ横田の団子なりと。

導者曰く、舌振より尚お奥に、大谷村あり。何代目かは忘れたれど、名妓高尾の出でたる地也。そこに傾城岩とて、小牛ばかりの石あり。女之を動かさむるするに、毫も動かざれど、男ならば、小指にてつくも動く、世にも奇妙なる石なりと。

斯かる話に、二三十分たちぬ。いざとて袂を分ち、千原、森脇二氏は導者と共に三成に向って山坂を上り、余は山本、阿部二氏と共に横田に向って山坂を上る。こゝより横田まで、なお二里の程あり。日暮れぬ程にとて、出来得る限り足を早めて疾行しけるが、負けぬ気象の山本氏、苦しげに喘ぎながらも、余に雁行し来れり。阿部氏は少しづゝおくれて、終にはその影も見えずなりぬ。待ち合わせむとて休みけるに、阿部氏漸く来りて曰く、われ是れ迄は健脚を以て誇りしかど、到底君等二人に敵する能わず。請う、今少し歩をゆるめよと。かばかりいそぎたれど、横田に着きて投宿したりしは、点燈の後なりき。

このあたりは、いにしえの所謂簸の川上にやあらむ。山間の土地とは云うものの、山と山との間あまり狭からず、くの字なりに開けたり。其の平原の中を一道の簸川、せんせんとして流れ行く。

平原の幅は十町乃至二十町、長さは三四里、土質よくして、稲よく実のる。出雲より備後の比婆郡に出づる衝に当り、時々牛馬の市の立つ処とて、横田は山村に似合わず、宿屋五六軒もありて、やゝにぎわえり。

（ふり仮名は編者にて付す）

斐の上川柳九月抄

当分はカーつき孫つきいい身分　児玉哲呂
台風の情報ひやひや稲穂みて　安部春恵
うまさます女が酌してくれた酒　松浦木公
涼風を淋しいなどと勝手云い　松浦亜以
親の夢子の夢みんな虹を追う　松田牛歩
素麺で暑いお盆を流しこみ　古川松
盆行事はぶいたわけを亡母に告げ　松浦久美子
いさかいは有っても矢張りいも背川　渡辺好之
還暦に心に残る法話聞く　藤原のぼる
畳干し妻の腕力見直され　石原トミ恵
破れ凧四季折々の糸つなぐ　若槻白馬
八十路生き顔色よいとおだてられ　若槻愛散人
皺隠し少し濃いめのサングラス　高木白虹
歳ですと断り切れず重い役　横山まこと
雄大で霊験あらたか我が本山　安部正子
やさしさを心の根にと今日を生き　真綿よし子
いらだちの心ほぐすか迷い酒　田中芳春

俳句会八月句会抄

葉裏がえす風どこまでもすでに秋　浅野としお
手不足の庭萩すすき驕らせて　岡田蹊花
風鈴の音高なりて秋を急く　岡田麗水
小豆選る筵の日ざし妻の刻　小川あきお
散歩道稲の香包む畦を踏む　門脇花子
生き抜いて茄子の葉裏の落し文　楠房子
更く秋を黍の葉擦れの韻にきく　高木白虹
鍬洗う農夫秋夕焼手で掬う　新出谷一華
白萩のこぼるる庭の乳母車　錦織富江
日焼せし童顔今日より露地みたす　峯石美代子
孫去にし部屋に転がる虫の籠　渡部夕峰

会員頒布一部百五十円／六九一一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0—601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 139 号
（11 月 号）
昭和61年11月 1 日
奥出雲編集集団©

もみじのみちのくひとり旅

——ほかを見て足元をふりかえる——

奥の細道

幾たびも東北本線、近くは東北新幹線の車窓から、「史蹟多賀城趾」の大きい標柱をみ、その向うの松林を眺めるだけだった。こんどは是非そこを訪ねたいと仙台駅に降りた。できれば松島、そしてよく歌でもうたった瑞厳寺もと予定していたが、私の歴史知識の浅さは、多賀城の意義の深さに驚くとともに、その遺蹟の発掘、保存、資料展示の良さ、そして受付をはじめ各部屋の職員の方の懇切な応接、説明に、つい一日をここで過してしまった。

いつものように、俳人松尾芭蕉の「奥の細道」の文庫本もポケットに入れることを忘れずにいた。この書に出てくる土地を訪ねたり、芭蕉の足跡をしるす碑に触れた数は、46カ所中の三分の一を越えた。千住・草加・日光・白川・仙台・壷の碑・石巻・平泉・越後・市振（いちぶり）関（親しらず・子しらず）・那古（なご）の浦・金沢・小松・那谷寺・山中温泉・敦賀・大垣などである。

俳句をものする習慣もない私が、他の所用の折々に、心にかけて訪ねるのは、こんなところからである。

詩人で国漢文の教師（元県教育長）木島俊太郎氏の、講義の第一声の響きからである。「奥の細道」の講義は、その序の朗読から始まった。その感動は一層強烈であった。

「月日は百代の過客にして、行きかう年も又旅人なり。舟の上に生涯をうかべ、馬の口とらえて老をむかうる者は、日々旅にして旅を栖（すみか）とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風にさそわれて漂泊の思いやまず……」

最初の20字余りは、一昨年の書初めにもしるした。

さきに「その感動は一層強烈であった」と書いたが、一層とは、その前に極めて淡い、「奥の細道」の知識があったからである。

私が小学校高等科の時の担任は、早く故人となられた小草繁郎（旧姓大野）氏であった。当時、文検（文部省中等教員資格検定試験）の国語科受験の難関に挑んでおられた。温厚で篤学しかも多彩な才能の持主の方であった（のち合格）。二年の時の国語読本の中に数句、芭蕉の作があった。その授業の折りに、一冊の部厚い書をひらいて、これは「奥の細道」という本だといって、中の数句の話もされた。

「古池や蛙とびこむ水の音」は、言いふるされた句でわかったが、あとはさっぱりわからなかった。文検受験勉強のなせる一駒であったであろう。しかし少年の私の心には何かを残したようである。

その年（昭和5年・ロスアンゼルス・オリンピックの前年）の九月五日から、朝日新聞の第55回の連載で、ほぼ芭蕉の日数と同じい吟行記である。今は理解が及ぶが、とても当時の私には理解できる文や句ではない。ところどころに線が引いてあるのは不可解である。

壷（つぼ）の碑（いしぶみ）

二面にかこい枠の文として、「奥の細道」を辿る——首藤素史吟行——が連載された。父の許しを得て毎日切りとって、スクラップ・ブックにはった。それが今、二枚ほどはぐれて空白になっているが、すっかりすすけながらも昔のままで手元にある。

仙石線多賀城駅を出ると、タクシーをたのみ、ここを訪ねた。「壷の碑」は通称で、「多賀城碑」のことである。今、碑は覆堂の中にある。その横に「あやめ草足に結ばん草鞋の緒」の、芭蕉の句碑がある。しばらく「奥の細道」の言葉をかりる（飯

晩秋低唱　簸の上短歌会

風にゆれふれあう稲穂のささやきを目を閉じ聞きぬ昼のし　永井弥生
じまに
マニキュアも宝石も縁なき掌なれども農に働きて五十年経つ　佐藤喜代子
空稲架のなかに烟りの流れるをたしかめて夫は煙草燻らす　戸屋暎子
食卓をゆるゆる進むきりぎりす指に誘うに糞をするなり　小早川恵子
朝毎にすがしきかなやみずみずとぬれ葉ひろぐる白菜畑は　常盤はるまさ
鎌倉の歴史を刻む大銀杏見返りながら歩みゆるめり　景山悦子
手を触るれば待ちゐし如く庭畑の鳳仙花は小粒の種をこぼせり　岡田時子
釣り友は二十尾われは鮒一尾餌かと思う場所かとも思う　伊藤萩雨
稲架けを急ぐ田の辺にすすき穂の揺れつつそこのみ白く暮れゆく　野村節子
秋ふかし再び来りし比叡山杉木立覆へば釈迦堂暗し　安部夕波

もみじのみちのくひとり旅・短歌・俳句・川柳

俳句会九月句会抄

孫の手に足を残してバッタ跳ぶ　浅野としお
燕去に虚空は鴉のものとなる　岡田蹊花
五輪搭崩れしままに彼岸花　岡田麗水
孫と遊ぶ団栗こまの日向かな　小川あきお
つかの間の山裾かけり秋の虹　門脇花子
うらなりの南瓜のかげの青蛙　楠房子
椎の実のひとつひとつの落ちる音　高木白虹
新涼や温り残る湯呑かな　新出谷一華
無花果に余命をつなぐ蜂の群れ　錦織富江
木犀の香りをたたむ日暮れかな　峯石美代子
あげは蝶限りの生命を石蕗の黄に　渡部夕峰

野哲二の通釈文で）

「嘉右衛門（画工であり俳人、芭蕉は「風流のしれもの」と賞賛し、当地での芭蕉の収穫をみのらせた人）の描いてくれた案内図にしたがってたどっていくと、おくの細道の山ぎわ……つぼの石ぶみすなわち多賀城の碑は、高さ六尺余、横三尺ほどもあろうか。苔がむしていて書かれている文字もはっきりしていない。当城から四方の国界の里数をしるしてある。この城は神亀元年（724）に按察使鎮守府将軍大野朝臣東人が築造し、それを天平宝字六年（762）に参議東海東山節度同将軍恵美朝臣朝猟が修繕したもので、十二月朔日と建立の日付がある。…聖武天皇のおん時（即位の年）にあたっている。…時代が変ってしまうとその跡のわからないことばかりが多いのに、この碑に至っては疑いのない千年前の記念物で（芭蕉は元禄2年1689 4月7日ここに）、現在こうして目の前に建立当時の人の心を見ることができるのである。これも旅の一得であり、長生きしている（元禄7年51才大阪で客死）おかげだと思うと、旅のつかれも忘れてしまって、涙が落ちるばかりにありがたい。……末の松山には寺があって末の松山宝国寺といっている。松林の間は皆墓地で、比翼連理などという夫婦の契りの末も、けっきょくはこの墓と化してしまうのかと思うといっそう悲しくなって……」

右の文中の仙台からこゝに至道の呼称「おくの細道」が、この紀行文の題名となったという。

この項には発句はない。素史吟行記には

「夏草に石にありあり昔かな
壷の石ぶみをみて山に上れば、多賀の城址あり、古き礎石夏草に埋れる中……」とある。

それから56年たった今日、25年の歳月を費して発掘された城址の中心部は十分に往時を偲ぶことができる。南の方では発掘に汗を流している姿も見えた。一日の仕事の量が眼にみえないような根気のいる発掘は、とどまるところを定め得ないという。21世紀へと続くようだ。多賀城廃寺跡発掘もある。現在は第4次5年計画の三年目であるが、107ヘクタールの6%が完了しているに過ないし、その上特別史跡として、800ヘクタールが追加指定されているという。わが国でも珍らしい徴税台帳である「計帳」の一部とみられる漆紙文書（資料館でみると1000年以上のものが、横田の表、杠家の400年前の漆紙文書と同様にみえる）・木簡をはじめ、井戸・鍛冶工房など、関心の深いものばかりで去り難かった。それらも6%の発掘による出土物である。底知れぬ東北の文化の発生の早いことを感ずること切である。

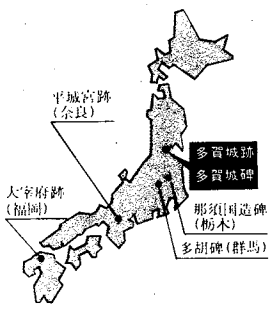
わが国の西の端に住む私どもはもとより、蝦夷地として東北を片づけていたことを見なおさねばならない時代となっている。358本の銅剣の発見は、弥生時代の日本史再検討を迫っている。

また出雲国風土記の存在も貴重であるが、東北と同時代の出雲を比較するとき、山陰は新らしい流れが通りすぎたところ、いやよけてしまったところであったであろうと思われてきた。

さて壷の碑は、上野の「多胡碑」、下野の「那須国造碑」とともに、日本の三古碑とされている。この碑の由来については芭蕉の文が要を得ていて、さすが文人であると思う。碑文は141文字がある。芭蕉の誌した文の前には次の文字がある（書き流して註を入れた）。

西。多賀城。
京（奈良の都）を去る一千五百里。
蝦夷国界（岩手県南部）を去る一百二十里。
常陸国界（茨城県）を去る四百十二里。
下野国界（栃木県）を去る二百七十四里。
靺鞨国界（中国・海国）を去る三千里。

（以下は芭蕉の文のくわしいもの。当時の一里は今日の670m）



多賀城の意義

かつては多賀城柵として理解され、蝦夷服従への前進基地といわれていて、関東から次第にこの地、そしてさらに北の奥州山脈の東側へ、ついで日本海側を北へと進められたとされていた。文書研究が進み、昭和35年以来の発掘調査と出土品によって、ここは、「奈良の平城宮」「福岡の太宰府」とともに「日本三大史跡」の一つに数えられ、国の特別史跡に指定されている。奈良は数え切れぬほど訪れもし、歴史書も多い。太宰府には三度おとずれて大要を理解していたが、ここに奈良時代初期から約600年の間東北地方の中心として政治をおさめた、陸奥の国府跡があったことを、はじめてこの眼で深く確めることができた。軍事面においても蝦夷征討の鎮守府としての重要な位置でもあったことは、あとでのべる製鉄遺跡と深い関連があるであろう。

山陰地方の国府跡の規模・出土品の数とは格段の違いがある。古代の製鉄遺跡はまだ当地方ではあらわれていない。歴史時代に入ってからの山陰地方は、後進地域であったとしか考えられない。

やがて奥出雲のたたら製鉄史を続けたいが、朝鮮半島に近い故、製鉄技術の渡来は、島根半島の北側と、宍道湖南岸に（半島と本土は海と湿地つづき）早く伝来はしていたが、その後の技術の発達は遅々たるものであったであろうと、現状では、東北製鉄遺跡を含めた全国的視野から考えざるを得ない。しかし近世に入り、企業たたら時代になって、砂鉄が良質であったこと、松江藩の鉄行政がよろしきを得、鉄師の努力もあって、わが国の中心地へと発達したものであることを再確認した。

この遺跡の近くに、東北歴史資料館があるが、県立とはいえゆとりもある上に、至れり尽せりの展示と工夫がなされており、専門職員の数も多かった。

末の松山

契りきなかたみに袖をしぼり
つゝ末の松山波越さじとは、
心変りける女に
人に代りて　清原元輔

（二人は約束しましたね。お互いに涙に濡れた袖をしぼりながら、あの末の松山を波が越すことのありえないと同様、心変わりすることは決してないと）

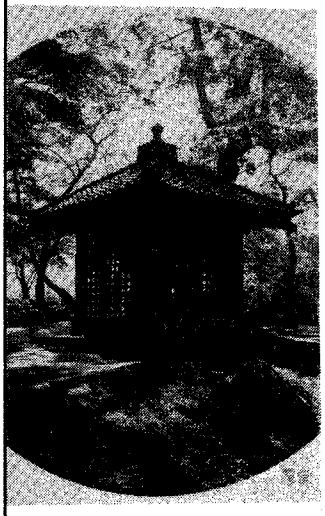
の百人一首の中の歌は、「スエノマツアン」と語呂あわせして、少年のころからよく憶えていた歌だった。今年の正月にも子どもらと、私はやはりこう読んで、打ち興じたが、それ以上はうっかりしていた。

案内してくれた運転手が「あれが末の松山ですよ」と指さしてくれた。そうですかと生半可な返事をした。帰って二、三の書をひもといて、はじめて詳細を知り得たのである。

「古今集」東歌のうち、陸奥歌「君をおきてあだし心をわが持たば、末の松山浪も越えなむ」をうけて歌ったものという。この歌の末の松山が、ここを歌いこんでいるもので、元輔の末の松山は、歌ことばとして用いたのみだが、元歌をこえる秀歌のため、より知られ、そしてこの地を後世にまで、名を留めさせたことになったものとも知った。

元輔（延喜8908～永禄2990）は肥後守に任ぜられ、老令にも拘らずその任国にも赴任した。歌人でもあり、三十六歌仙の一人、新古今以下、諸勅撰集にも歌が多く歌集もある。しかも紫式部と競いあった清少納言の父でもある。清少納言は父の歌人としての血脈は受継がず、散文学として古今独歩の妙味を発揮し、父の才を「枕草子」に開展させた。元輔は万葉集の訓読をはじめて完成させた人である。清少納言のいづるのもうべなるかなである。

元輔は、これもよく記憶される歌である　「夏の夜はまだ宵



壺の碑のある覆堂

斐の上川柳十月抄

行く夏を惜しみながらの衣替え　真綿よし子
秒針は後へは帰らぬ黄泉路　若槻白馬
さぐり芋孫と堀る手が暖かい　藤原千代子
松茸をもう取ったと話だけ　横山まこと
主婦の座が戻り料理の手が力む　安部正子
トンボ眼鏡女なくした党首振り　高木白虹
土曜の夜出番を待ってるコンバイン　田中有樹絵
酔うほどに本音がうまくでる不思議　児玉哲呂
白菊に心のちりを払われる　松浦木公
ありし日がポッカリ浮ぶ慰霊祭　渡辺好之
年老いてころばぬ杖にと法話きゝ　安部春恵
謝状手に何をしたかと悔まれる　松浦久寿子
年老いて一入の感墓詣り　若槻愛散人
ふところの内緒は女語らない　松田牛歩
言い過ぎてあとの祭りの悔いを溜め　松浦亜以
敬老の日に思う自分の年数へ　古川松
よかったと思って暮らそ残りの日　藤原のぼる

本号の掲載写真・地図等はすべて東北歴史資料館発行の「多賀城と古代東北」から転載

ながら明けぬるを雲のいづこに月宿るらむ」（百人一首中）の作者清原深養父の孫でもある。深養父にも歌集があり、数多くの撰集にも歌がおさめられ、中古三十六歌仙の一人でもあった。こうした渉猟に一日を費したため、二月以来から仙台のシンポジウムまでの私の苦労も、抜け切らなかった重い気分も一掃された。

因みに新選姓氏録をめくってみると、百済滅亡によって渡来して来た百済王の後なりともある。この書にしるす家々の出自の3分の1は渡来人であり、その他も遡のぼれば多くは渡来人となる。大陸文化の影響ははかり知れない。

素史子は、末の松山については「末の松山は僅かに二本の松を残し沖の石は野中に忘れられて、形見の巌に蘆萩の摩けるぞあわれなり…」としるしているが、今は風情を失って観光的に俗化してしまっている。

相馬市のわが国最大の七世紀の総合製鉄遺跡

福島県玉川村の小半弓遺跡は近世企業たたらのものである。

当該県の寺島文男文化財主事の調査にかかわるもので、白河藩主松平定信が老中を退いてから、藩内の殖産興業の一貫事業の一つとして、出雲から技術者を招いて設けたものであるが、高チタンの赤目砂鉄地帯のために、出雲方式の適用がそのまま行われず苦心したものであった。一度帰京し、再度北上して見学したのは、相馬盆踊うた、相馬馬追いで著名な相馬市の西郊の一大丘陵地帯の、大字大坪字山口の製鉄遺跡群である。新石器時代から古代中世までの複合遺跡である上に、七世紀のものとみられる、炭窯・砂鉄製鈩炉（中には銑が一面にのこる炉床の全部もあり、羽口も各種）、鍛冶炉、鋳物鋳型さらに各時代の住居跡などが、沢山な関連するものとともに発掘されていた。二年の継続大事業で、専門職員10余人の下で、100名に及ぶ作業員が、極めて科学的訓練をもった発掘・調査・分類を行っていた。

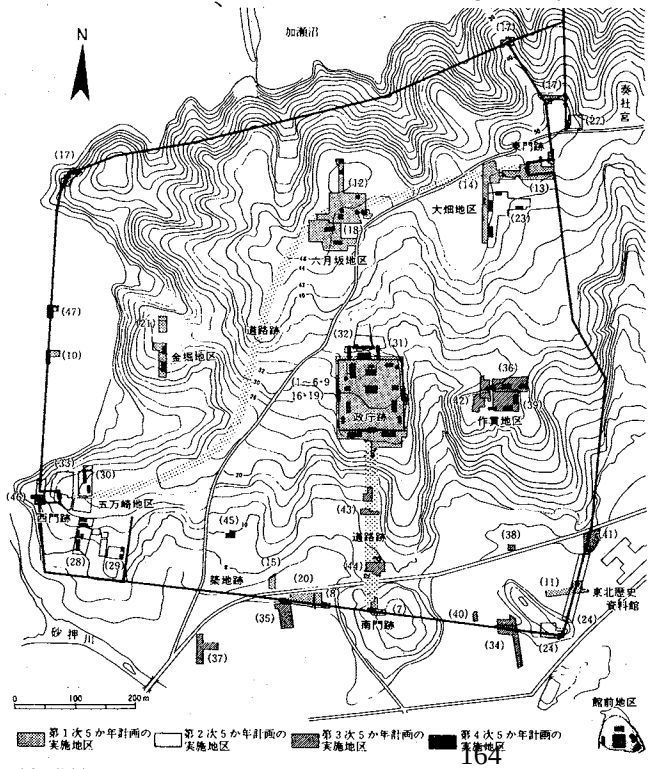
たたら発掘の本場は、広島・島根両県であるというので、事務当局が紹介したところ、そんな調査はしていないとのことで、本場がやらぬのに必要がないと、予算の大削減にあったが、やっと多少の復活をしてもらって、地元の大学、東北大学、東京の研究者、学者の協力も得て、とり組んでいるという。これなら単なる地下発掘調査だけでなく、たたら製鉄の技術の一部が解明できると、私は期待をこめて激励した。東北の古代史を書きかえるとともに、製鉄史に新しい地位を確立したいとの意気込みにも打たれた。

主事は、57年のたたら研究会・下田大会で、私の近世のたたらの話を聞いたのが、関心をもったはじめで、小半弓遺跡の発掘を経て今日に至ったという。上司に無理にお願いし、5人の同僚と共に仙台の国際シンポジウムの私の近世企業たたらの発表を聞きに参加したと聞き、恐縮するとともに、案内に感謝し、つぶさに現地を見学し、期待を胸一ぱいにして帰った。

おわび

編集者の都合により、このような内容の本号としたことをおわび致します。全く毎日の日程で一段落し、ホットしたところであります。幸に仙台でも反響があり、便りも続々頂き、末席を汚すことが、少なかったではないかと喜んでおります。年が明ければ要点を、既述のものの続篇として登載したいと考えております。深くおわび申上げます。

（横田史談会　高橋一郎）



多賀城跡全体図　（　）は調査次数

多賀城跡全体図

会員頒布一部百五十円／六九九—一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江01601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 140 号
（12月号）
昭和61年12月6日
奥出雲編集集団©

横田を育てた人⑩・短歌・川柳・俳句

横田を育てた人⑩

郷学記念碑

善徳寺寺小屋三代記

明治・大正から昭和のはじめにかけて、横田・鳥上・下横田の人で、地域や県内県外で活躍した人々に、人生の志を与え、実力をつけた、明治の新学校教育の確立者は、井上栄太郎（本誌75・77号参照）であることを明らかにした。その影響が今日の一般的に言う当地方の文化（政治・経済・生活も含めて）的風土を育てたことを忘れてはならない。そこで育った人々についても、すでに数人を紹介してきた。

本号では、その井上栄太郎が確立したその基礎をつくり、また井上に協力した人々について概略を伝えたい。

そのことを誌す碑が、標題の文字をしるして、横田町大市殿町、善徳寺の境内を入ると右手に高々と建立されている。明治34年1900とある。碑文は当時県内一等の漢学者によるもので、漢文でやゝ難解な語句をつらねてある上に、幾つかの磨滅した文字があるので、出来るだけ原文を生かして、わかり易い言葉を交へて書き流しとして、まず掲載する。

碑　文

封建の昔（徳川時代を指す）には、文武の業は専ら士（侍）にとっては必要欠くべからざるものとされていたが、庶民（工商農）にとっては、これを修めなくても責められることもなかった。そこで下じもの民は一丁の文字をも解しない者が多かった。そこで学ばんとする者は、必ずその師をえらんで、ひそかに教えを請うたのである。この師となる者には、社家・寺院の主が多かったが、その学の浅深は問わなかった。人々は唯自分たちの願いがかなえられざるを恐れるのみであったからである。従ってこれらのうち非才浅学の者でも、寺小屋先生と称する郷学の師となったのであった。

そこで往々にし、力のない者のわざわいを避け難いこともあった。

唯ひとり、善徳寺は然らずであった。当寺は出雲国仁多郡横田村光雲山に在って、その祖は六孫王経基の後胤源満（筆者註・碑文には義とあるが作者の誤認）仲の嫡子清水冠者義基の子三沢為仲七世の孫にして、幼名常盤丸といった、宮内少輔為忠（筆者註・遠江守という）が開祖である。京に出た為忠は蓮如上人（浄土真宗中興者）を知って弟子となり、削髪して善徳法師の号をうけた人で、以来当地に於て郷民を訓化し、もって仏陀の功徳にあわせて、子弟に文学を教えた。

その十三世を継いだ震道律師は、いみなは演暢、心樹亭と号し、俳号は喜遊または玉龍と言った。文化五年戊辰正月五日、簸川郡出西村の専立寺に生れ、全十四年丁丑の年、十才にして本寺の嗣子となり、二十才の文政十一年戊子の五月十二日住職となる。律師は性豁達にして簡潔、細事にこだわらず、寛ろくして衆を抱容せしため、旧悪を抱くものもなく、もってその故に徒弟ら心服して父の如くであった。律師は書を能くし、歌道にも深く、かたわら俳諧・囲碁も好んだ。一男一女をもうけ、一男は即ち天震法師である。明治二十六年十一月八十七才で没した。

十四世減度院天震法師の諱（いみな）は法剣、是外亭と号し、俳号は藤城または滝溪といった。文久元年辛酉五月住職となる。性は沈毅寡言にして威厳があり、一見して人を知るほどの逸材であった。よって門人この人を恐れるが敬すること厚った。悪しきことあって責められる時は厳刑をうけるが如くであった。法師は博学多材、あまねく諸芸に通じており、中でも最も俳諧・和歌に優れた。天保九年戊戌正月に生れ、明治五年四月三十五才で没した。

十五世直徳院寛雄法師は名は寛雄といゝ、字名は飛卿、一峯亭と号し、俳号は韜斎または桜江といった。弘化四年十二月松江の真光寺に生れ、父は吉田寂照といった。寛雄は明治五年五月、天震法師の義子となり、仝六年四月住職となった。資性剛毅、事にあたっては堅強不屈、つねに経書を読んで通じ、漢詩を好み書を能くした。そして師としてその教えは、諄々として飽くことを知らず、教えるうける弟子の進歩は著しかった。おしいかな二十八年六月廿七日に没したが、三男一女があった。

おおよそ横田の庶民で薫陶教育をうけたもの数多く、その数を知らず。現存する者なお百六十有八人、その教化は大きく、その文芸は深く地域にしみわたり、この郷に君子の風の満つるは、実に善徳寺代々の徳の致すところによるもので、一世・一世と経るにつれて盛んとなり、文政より明治へと至って、その極に達した。

明治六年八月、国の方針に従い横田小学校が創立せらるるや、寛雄はそこの教師となって、校長の経営を援け、全九年九月、その規模も大いに整ったことは知る人ぞ知る。

三十一年、旧教え子相謀って、善徳寺の累世の恩が子孫に伝わらざらんことを恐れ、ここに碑を建立して、その恩議をしるし、遂に完成した。高弟の田村成顕は、かねてから山村良行と、文字を通して交友があり、すなわちその概略を記し、銘に曰く、

光雲之山　善徳之寺
教訓従弟　功大業崇
郷俗従美　薫化心芬
其善惟光　其徳如雲

明治三十四年十一月
山村良行篆額并選文
田中荘次郎書

—碑の裏には—

建碑姓名
出金額　イロハ年全順
岡崎健蔵　妹尾柳太郎
永井武右ヱ門　足立富太郎
荒木定太郎
中沢和三郎
糸原猪太郎
村上堅之助
糸原繁之助
荒木升次郎
高河甚兵ヱ
内田市右ヱ門
田村権次郎
梅木嘉次郎
松原祐蔵
梅木徳太郎
渡部蔵太郎
森川文右ヱ門
磯田由五郎
藤原貞四郎
春田徳蔵
糸原儀兵ヱ
松原伝四郎
本田源右ヱ門
田村竹之助成顕
藤原寿太郎
岡崎増太郎
藤原佐之助
浅山常太郎
足立嘉一郎
鐘撞喜一郎
原田助三郎
足立政兵ヱ
渡辺慶太郎
足立文太郎
武藤琢瑞
安達末吉
勝部源太郎
三宅柳蔵
松浦慶太郎
妹尾儀右ヱ門
小池末重郎
武藤六郎兵ヱ
山田政次郎
中沢治兵ヱ
山田松太郎
宮田吉五郎
山本慶太郎
春田平次郎
景山儀四郎
藤原金次郎
恩田豊主
藤原大蔵
小池淡斉
吉田源四郎
枝木定市
田村竹之助
浅山常太郎
吉田富太郎
水近太郎

発企人
糸原蔵太郎
岡崎喜一郎
景山柳太郎

とある。

建碑にまつわる人々

山村良行——広瀬藩儒学教授

山村良実の長男として天保7年1836に生れた。良行は名、字は聞伯、勉斎・干城等の号がある。経書を広瀬及び松江藩学に学び後、江戸に出て文を塩谷宕陰に、詩を大沼枕山に学んで帰国して、広瀬藩学の教授となった。明治7年に私立「修文館」を起し館主となり、学生の教育につとめた。明治29年師範学校講師になり、39年退職、米子に寓居して漢学を教授、40年4月10日73才で没した。前記の詩文は、師範学校在職中の作とみられる。

田村成顕——名は竹之助、六日市・田村権次郎（富田屋・簸上正宗本舗）の弟で、早くから向学心に燃え、幼にして善徳寺に学び、当時（明治5年学制が分かれる前の時代、詳細は本誌75・109号参照）県内で最も俊才を集めていた私塾の一つ、広瀬の山村勉斎が館主であった、「修文館」に学んで帰る。のち善徳寺の寛雄の下で、これをたすけて、子弟の教育に従う。特に漢学に長じ、号を成顕という。頼山陽に私淑傾倒し、これにまつわる逸話もある。

成人するや現在地に分家し、西田村といゝ、醤油醸造ならびに物品販売を業とする。のち、推されて明治27年当時としては弱冠36才で横田村々長となる。

明治19年夏は斐伊川大洪水の年で中丁、五反田方面の川岸の家が多数流出し、横田六日市上の堤防（現在、龍神の碑のある附近）が決壊して、六日市全域も流失の危険にさらされた。そして当時、横田盆地の斐伊川の堤防は、名ばかりで石を積み上げた程度のものであったので、全域にわたってその形を失うほどであった。その復旧の願いを一身に集めた竹之助は、県会議員であった兄権次郎と相呼応し、堤防改修工事着工へ奔走し、松江方面中心の県政重点時代、しかも対中国交戦の半ば、遂に県議会の承認を得ることに成功した。この間の事情は、「島根県議会史」に議事録を引用した文章で明らかである。

着工にあたり、横田かねばら（叶原）の大市西方の山（頂上に清正公（せいしょこ）さんの石像あり、通称天狗松といゝ、横田盆地を一望に眺めることができて、今日でも　写真撮影絶好の場所）に登って、地形と河川跡、流水の傾向を勘案して、今日の河川の位置を定め着工に入った。県議会史の記事をみても、山間地帯としては稀有の巨費である上に、郡内全町村からの労働人夫の割当て繰出しが行われるほどで、（これが郡内に問題をも生じた）築堤の専門土建業者が自らの率いる労働者をもつれて工事にあたった。（これにまつわる話は本誌1号分を越えるものがある）。昭和40年代からの六日市側の河川拡巾に伴う改良工事着工に至るまで、極めて堅固な堤防といわれたものがこれで、現在、馬場と樋口を結ぶ、エヘン橋をはさむ上下流の堤防はその名残りである。

六日市側の改修以後工事は上流へと進められたが、工事施工者の話によると、当時の工事は堤防の河川側石垣はもとより、反対側も同様の石垣を組むとい

うもので、（今日は河川ののりめんのみである。両ののりめんにしたのは理由もあったが）さらにその河川側の石垣の下には、基礎となる石組も行われていたというものである。

この時から今日の地下足袋、西洋手拭（タオル）いが入って来て、ごんぞうたび、ごんぞうてぬぐいと呼ばれたともいう。

竹之助は昭和9年、当時としては長寿の75才で没した。

善徳寺

伝えによると、中世の16世紀はじめ、仁多郡西部の国侍（もと地頭）、三沢氏8代遠江守為忠は、京都御所（禁裡御料所）の命をうけて、その領地横田庄の治安を維持し（戦国争乱の初期）、年貢上納を請負うことを（地頭請所）命ぜられた。それまでの代官安部氏は帰農した。

三沢氏は、横田盆地を一望に見下せる六日市裏の高鍔山に藤カ瀬城を築いて移った。

晩年、京に上り、既述のように、仏道を修めて横田に帰り、横田に移城間もない永正16年1529隠退し、城山の東南麓の下中村の地（現字角）に居を構えたが、のち城の対南の山麓（出雲横田駅の上の南方台地安楽寺の東）に一庵を結び、念仏三昧の生活に入った。そして天文8年1539、中国地方の各国はもとより、近江国までをも駈け巡った武将としての、春秋78年の生涯を終えた。

伯州多里の西方寺、黒坂の光徳寺はその遊化の地であって、のち善徳寺の支院となった。のち前者は西の、後者は東のそれぞれ本願寺派に分れて属した。

その後、8世立意律師（元禄7 1694～延享3 1746）の時代には、大勧進をうけて仏殿僧舎を整えた。妻は杠元珉（樋口・表・杠氏の分家、蔵屋・和田・杠氏で医師、本誌64～73号参照）の伯母であった。

9世は恵海で、延享2年法嗣として、立意の跡をついだが、7年を経た宝暦元年、大風のため堂宇倒壊して、面影を全く失うが如くとなり、その心労のため、7月29日34才で没した。その妻は杠元珉の妹であった。

11世木立は恵海の弟で、寛延4年1751その職をつぎ、修覆に身心を労し、現在地を買い求め、遂に再建復興を成就した。住職として尽すこと42年、中興の主としての生涯を完うした。

11世　磻立律師
12世　覚言律師

13世が震道律師である。この在世中に正徳3年1713に境内に移築した易行庵（別に詳述予定）の本尊の修理が計画された。

大市の商人（現西田村の前の居住者）広島屋、伊藤元三郎・伝兵ヱ貞郷（この孫が、松江に移り住んだ故伊藤菊之輔で、県下にこの人ありとされた、元校長の郷土史家）が独力で本願となるものであったが、着工間もなく、天保7年の全国的大飢饉の来襲となり、当地方の記録でも、食う米にも不足し、近隣の山々の葛の根を互に競ってとりあさる状態であった。そこで中止し時の至るのを待っていたところ、天保8年6月22日夜、大市の町上よりの失火による火災は、本町通りを下へとなめつくし、46戸を焼失し、元三郎附近の家9戸を残すのみであった。

この時、善徳寺とその隣接地にあった元三郎の借家も類焼をまぬがれたので、これ偏えに霊仏の加護によるものとし、再び修覆を再開した。こうした災厄にあった人々も、元三郎の志に疑いをはさむものはいなかった。

天保8年7月これが完成をみた。その時の装仏匠は伯耆国の日野郡の住人、聞衡亭寤覚であった。

補　遺

碑文中の系図について　三沢氏の祖は木曽義仲とあるが、三沢氏の祖は同じ、六孫王源経基（清和天皇の子で清和源氏の祖）の後胤であるが同じ満仲の五番目の弟満快（信濃に住んで信濃源氏という）の末孫飯島氏である。このことは本誌で度々記述しており、木曽義仲を祖とされた理由にもふれてある。

当地方の俳諧について　このことについては、湯の廻（絲原氏）が濫觴であることを、本誌80 81 83号でのべた。幕末の当地方で出服された俳諧誌「雲南」や、伊賀多気神社・諏訪神社に掲げられた、奉納の句額の中に、善徳寺13世の喜遊・玉龍や14世の藤城、15世の桜江の俳号をしるす句もある。当地方の先達であったことをこれからも知ることができる。（横田史談会　高橋一郎）

斐の上川柳十一月抄

カエルコール退院間近と夫しきり　石原世以
飲む前に車たのむと嫁に電話　藤原のぼる
趣味一つ心のささえ老の今日　真綿よし子
物豊か心は寒い年は寄る　若嫁白馬
ごまかしは効かぬ外泊直ぐはがれ　渡辺好之
宰相の言の葉重し国背負い　若槻愛散人
書寝起き秋日が笑ふ大あくび　安部春恵
お祭りを先づ魚屋が積んで来る　松浦木公
杯をすゝめて本心さそい出し　佐佐木千世
テレビ料理よこ目に我流で味を付け　松浦亜以
いろいろとあったが仲良く半百年　松浦久寿子
あの世への通行手形は文化勲章か　田中有樹絵
ねぢれても鉢の松なら値が高い　松田牛歩
実行は出来ず空論だけで終え　横山まこと
その昔し張切り兵士の皺が泣く　高木白虹
嘉手名基地広さおどろく負け戦　安部正子
何くわぬ顔して割といける奴　田中芳春

前号訂正　2頁3段9行　至る道、4段20行　その後の律令制国家時代の東北と出雲を

前号訂正　3頁1段3行　蝦夷の服従、4頁1段3行　深養父（ふかやぶ）　2段1行　文隆

黄落唱　簸の上短歌会

重なりて過去よみがへるアルバムにまたしても弱き自分を見たり　常盤　はるまさ

涼みつつ盆に来たりしうかららの噂してをりこほろぎの鳴く　戸屋　暎子

日のくれを熱き湯を呑む掌の茶椀のひびのかすかになれり　小早川　恵子

時折を小鳥鳴きをる山畑に出来など言ひつつ夫と蕎麦刈る　景山　悦子

桜古木の二本は残して特別養護老人ホームの建築すすむ　岡田　時子

病みてゐる夫の乗らざる自転車のよごれを孫と時かけて拭く　佐藤　喜代子

新聞を配る少年は霜深き今朝もペタルを軽く踏み来る　野村　節子

ふたりして茸そろえて明日ゆく山など言ひつつ地下足袋を脱ぐ　永井　弥生

清盛に愛をささげし女人らの祇王寺過ぐれば化野（あだし）の径　安部　夕波

俳句会十二月句会抄

戦友会隊長未亡人の挨拶を胸迫り聞く老兵われは　伊藤　萩雨

灯台の嵩さが秋の海恐る　浅野　としお

犬猫のみ渡る土橋や草もみじ　岡田　蹊花

麓より昏れて行くなり秋の山　岡田　麗水

時雨るるや虹つかの間のいのちかな　小川　あきお

よく喋べる女去りて虫鳴けり　恩田　和美

文化の日綿菓子のごと雲遊ぶ　門脇　花子

柿落葉ふみてぬき足かくれんぼ　楠　房子

水車跡崩るる垣の苔もみじ　高木　白虹

畠打つ鍬の先舞う秋の蝶　新出谷　一華

風生れ落葉の走る吹き溜り　錦織　富江

冬仕度おわれて一いき茶をすする　峯石　美代子

菊師らのこころの業が花に満つ　渡部　夕峰

おたずねに答える

仁多郡誌を買ったが

—横田町誌・新修島根県史は

欲しい思っていた仁多郡誌を漸く最近複刻版が出ましたので求めました。ところが、角川版地名辞典、新人物往来社版城郭事典、山陰中央新報社版島根百科事典を読んだのと違うところがあるが、なぜでしょうかという問合わせを、しきりとうける。それには現在では仁多郡誌の記述は誤まりですと答えている。人によってはその理由を研究論文の複写を送って、知らせてあげることにしている。

最近の出版活動は盛んで、全く紙の洪水のようだし、整理陳列には全くまいるとは、各書店共通の悩みであると、松江方面はもとより、横田でも溜め息をもらしている。

選んで買う本も、あまりに多くてうんざりする。単なる読みものならいざしらず、歴史となると選択が大変である。派手な帯紙とそこの宣伝文も、眼につくものほど、きわものが多い。

雑誌、書籍の内容紹介誌、書評雑誌の数もおびただしい。それでもこれは選択がまだ易しい。

これらの小冊子や新聞には、紹介以外に、人柄のしのばれる随筆などがのったり、研究や取材の苦労話や、それにまつわる交友抄など、興味の尽きないものが多い。これも著者を知って本の選択に大変に役立つ。

山陰地方の出版もかなり活発である。しかしこれは、日本史とか東洋・西洋の歴史書と違って選択が楽である。手にとってみることが出来るという機会もあるからである。それに執筆者についても、平素から地方新聞などの紹介を通して理解しているからでもある。

約20年前に県で編集された、新修島根県史(6)巻も、もうすでに今日の史学の研究水準からみる、欠陥も多く、根本的な新らしい編集を必要とする段階に来ている。全国的立場からみても見劣りのするもので、地元研究者の奮起が促されているというし、県内の史学各界もその必要を認めて、動き出そうとしている。昨今の史学界の進歩は著しい。

横田町誌も合併10周年記念事業として編集されたが、20年たった今日、同様に改訂すべきところが多い。特に、特色の一つの中世にも一部は根本的に改訂する段階にあり、もう一の特色である近世のたたらに関しても改訂の必要があり、最もその中心的歴史部分が欠落している欠点が出て来ている。さらに書き残した、文化財・人物・考古学上の記述は必要性が特にあるものである。複刻版でという拙速的方途、安物買いの銭失い的文化事業の上べに終る通弊におちないことを望む。

仁多郡誌も、古代・中世は誤まりが多い（岩屋寺と杠氏の資料は別）近世史も空白に近い。まだ多い貴重な資料も登載してなくて、登載したものの誤読を恐れる。

発行当時としては良い編集とされたが、70年の歳月には、古さの良さは極めてわずかで、地城史研究の進歩には、明治時代以降以外は、全くとり残されたものになっている。

会員頒布一部百五十円／六九一八　島根県仁多郡横田町一〇六一二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0—601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第　141　号
（1　月　号）
昭和62年1月3日
奥出雲編集集団©

横田町の大市・六日市の本町の町並みの歴史的価値を再認識しよう

韓半島に於ける古代製鉄（上）　俳句・川柳・短歌

山陰の鉄の始源は

韓半島に於ける古代製鉄(上)

尹東錫講演要旨

別掲の国際（環太平洋）シンポジウムに於ける尹氏の講演の要旨（英文）を、やっと訳して当日出席したところ、忘れかけていると前置されたが、流暢な日本語での講演であった。訳文と講演のメモと録音から、標題にそってまとめていたら、受贈している「鉄の話題」56（新日鉄の季刊誌）に、ほぼ同様な論文が載っていたので、そこの地図などを転載させて頂いて（当日のものと同じで、写真撮影していたが）本文を構成した。誤まりないよう注意を払ったつもりである。折をみてこれに続く日本の古代製鉄を窪田蔵郎氏の講演要旨でのせる予定である。

仙台でも、また11月の富山でのたたら研究会でも話題となったのは「山陰の古代製鉄はどうなっているか」であった。答える資料に至って恵まれていないと言うより仕方がなかった。この方面への関心を高めるためにもと、特に年頭に掲載した。

日本とのかかわりと発達段階

さる日本の専門家は私見だとし、日本の弥生時代の初期鉄器文化を考える時、6割が韓半島を通して、2割は中国大陸から直接に、残りの2割はポリネシヤ即ち南方から入ったのであろうと慎重に述べられている。

韓半島は中国大陸に接しており、南は海を隔てて日本に近い。

韓半島は仲介役だけでなく、ある程度安定してから、日本へと伝播させたのであろう。これは世界各地に於ける一般的な例で、これに洩れるものではないと思う。

世界的にみると、東部地中海地域（紀元前12世紀頃）と、中国大陸（B・C7世紀頃）とに大別され、前者は鉄鉱石による海綿鉄を鍛錬して鋼製品を製造した（筆者註・日本では砂鉄によるこれに類する製法がはじまりである）。後者はこの技術と同時に鋳鉄製造技術が初期からほとんど同時に併用されていたことである。韓半島もこの中国の鉄器文化の刺戟をうけていることは明らかである。発達段階を、地域と相関させてのべてゆくと、

第一段階

いろいろの説があるが、韓半島の鉄器時代開始は、戦国時代（年表参照）の中国北部と相関関係があるとするのが妥当である。中国北部の戦国時代の燕の支配地域における鉄器文化の開始が、その版図拡大に従ってはじまり、戦国流民が青銅文化の段階にあった韓半島に鉄器文化を移植したと考えられる。それはB・C3世紀代である。

それを地域的にみると、**清川江の北方地域**では、龍渕洞ー細竹里ー蓮花堡型文化で代表される。中国戦国系鉄器の使用された時代で、明刀銭（中国・春秋戦国時代の貨幣の一種。青銅で刀子の形に鋳造されている）と同伴して出土する、鉄器（鏃（やじり）・鉾・斧・鎌・鍬・鉏（やりがんな））文化である。（地図BとA参照）

一方、**豆満江流域**では、他の系統の戦国系鉄器が発達したと思われる。茂山・虎谷洞から出土した鋳造品の鉄斧などであるが、やはりルートは地図Aのようでも、中国戦国時代の影響下にあったものと考えられる。

ところが清川江以北と、豆満江流域まで伝播したものは、それより**以南**の地域に拡大普及されたものではないと考えられる。

	韓半島	中国	日本
B.C 500		春秋・戦国 諸子百家 儒家ー孔子・孟子 道家ー老子 法家ー韓非子	縄文
400			
300		○鉄製農具使用 手耕発生 ○七カ国時代 (斉・燕・楚・秦・韓・魏・趙)	
200		国・泰 221 秦統一 始皇帝 202 漢統一	弥生
100	195 衛満朝鮮 108 四郡	・前 武帝 100 韓半島進出 四郡(開設)	
1	楽浪郡 玄菟郡 臨屯郡 真番郡 ○扶余国 ○高句麗	漢 史記	

A.D　110ころ　倭は弁韓、辰韓の鉄をさかんに輸入（魏志）

184ころ　倭　卑弥呼共立（239景初3、240正始元）

248　〃　〃　死す

第二段階

清川江以南、すなわち大同江—載寧江流域および一部慈鏡南道は、製鉄遺物や文化内容全体で、清川江以北とは大きい差があり、時代もずっと下っているとみなければならない。

代表的遺跡としては、台城里10号土壙（土中の穴）墓で、銅剣・銅鉾とともに鉄製の斧・のみ・鎌が出土しており、雲城里9号木壙墓からも銅剣とともに鉄斧・鉄剣等が発掘されている。

この地域の特徴は、土壙墓から**木槨墓**（棺の外側に丸太等を井字型に組んだ構築物をもつ墓で、スキタイ文化圏＝前6世紀から前3世紀まで、黒海北岸の草原地帯に強大な遊牧国家を建設した民族の文化で、武器や車馬具を発達させ、動物意匠を愛好した。その文化はユーラシア〈ヨーロッパとアジアの総称〉内陸地帯に広く伝わり、中国などの美術に大きい影響を与えた＝と、中国でよく発達した）へと、変遷しており、その上鉄製の剣と刀が広く使われているようで、前代より一層発達した様相をしめしている。

この地域の文化の様式は、細形銅剣——鉄器—土壙墓等の要素で代表され、時代が下るとともに副葬品としての青銅器は姿を消し、鉄器がその殆んどを占めるようになる。この土壙墓系墓制はB・C2世紀以前から、楽浪郡設置以後までも引続いて使用され、青銅器と鉄器が共伴して出土する韓半島**東南地域**の土壙墓とその文化類型を同じくしている。（筆者註、注意すべき点）。

梨花洞と所羅里で代表される**慈鏡南道一帯**の初期鉄器遺跡は基本的には土壙墓形式で青銅器と鉄器が共伴し、大同江、載寧江流域と同種の文化系列であって、この地域は**清川江以南**に準ずるとみるべきである。この地域の出土品は鋳造品と鍛造鋼製品とが混在していて（筆者註、要注意）、清川江以北に比較し相対的に製鉄技術が発達していたとみなすことができる。

第三段階

前漢の武帝による楽浪郡設置を契機に、韓半島**南方地域**へ広がっていった。一部南部地方では、**先住土着部族の固有鉄器文化**もあった時期でもある。

この地域の初期鉄器遺跡は、次の二つの圏内に集中している。

○漢江流域圏

馬場里・梨谷里・中島・西屯洞・大心里の遺跡は、大部分が住居址あるいは生活文化圏で、無文土器（文様のない赤褐色の粗質土器で、韓半島の青銅器—鉄器時代初期の土器）などの多数とともに鉄器が発掘されている。大部分の住居址が半竪穴であることから当時無文土器の伝統を強く引き継ぎながら、**鋳鉄と鍛鉄を同時**にうけ入れたと考えられている。

○洛東江流域圏

はさらに二つに分ける。

①大邱—慶州地域の遺跡は、さきの大同江・載寧江流域の土壙墓—木槨墓系統と文化的性格も同じくしていて、**西北**韓半島領域から流入した**移住民**によって鉄器文化が導入された可能性を強くしめしている。

②洛東江下流地域の遺跡は、これとは反対に、朝島・金海・礼安里等のように、後期に属する土壙墓が広く知られており、住居遺跡は発見されていない。漢江流域圏が主に住居址遺跡で形成されているのとは、大きい差異がある。

遺跡の分布からみると、洛東江下流地域に最も多く初期鉄器時代の遺跡が密集していることは、この流域がどの地域よりも鉄器文化が盛んであったことを物語るものである。

これは三国志魏志（邪馬壹—台—国を誌す倭人伝もこの中にある）東夷伝の弁辰条にある記録と符号するものである。

「……国、鉄を出す。韓・濊（わい）・倭（やまと）皆従ってこれを取る。諸市に買うに皆鉄を用う。中国の銭を用うるが如し、又もって二郡（楽浪・帯刀）に供給す」

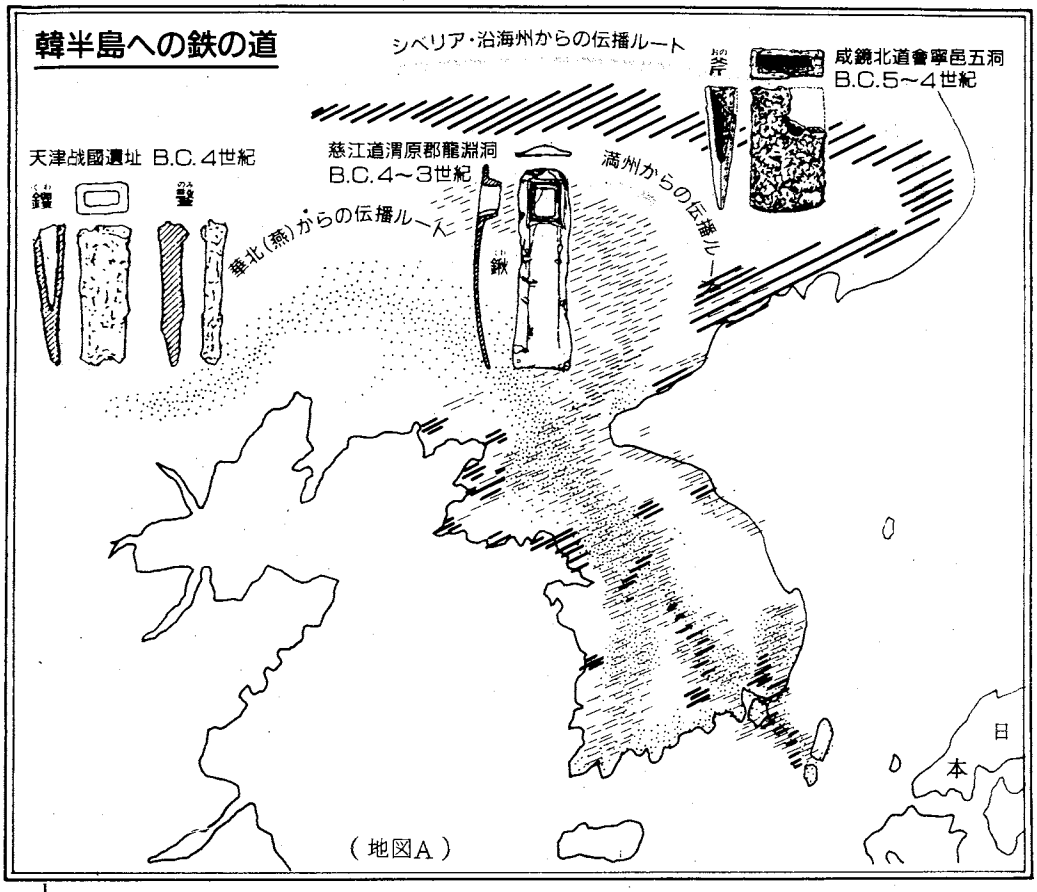
鉄を交換の手段に用いている。弁辰の地とは、この地域である。鉄とは鉄鉱石をしめすものといわれている。

この方面には、チタン磁鉄鉱・磁鉄鉱・赤鉄鉱を中心とした鉱脈がある。さらに

斐の上川柳十一月抄

大噴火三原の山を震へてみ　安部春恵
年毎に師走の寒さ身にしみる　若槻愛散人
負け戦史跡の下に濠を堀り　藤原のぼる
孫の手のぬくもり残る帰路の汽車　児玉哲呂
御長寿で民のへそくり金に化け　松浦木公
沖縄は今尚戦さの深いかげ　松浦久寿子
餅菓子のケース外から押えてみ　松浦亜以
誰が口にと語らいながら果樹植える　佐佐木千世
表情で上首尾だったとほっとする　藤原千代子
糸抜きは重い体を軽く見せ　渡辺好之
寒かろう裸になった落葉樹　若槻白馬
酒に嘘交ぜて女が酒飲ます　松田牛歩
大島で無事な正月祈ります　安部正子
あきらめて邪魔にならない位置さがす　高木白虹
柿たわわ取る暇もなし村貧し　横山まこと
柿の葉のじゅうたん敷いてヘタを取り　真綿よし子
大根よし白菜よしと冬仕度　田中有樹絵

韓半島への鉄の道



（地図A）

出土した鉄器の分析から前漢以後の発達した鍛造の技術もすでに使われていた。

（筆者註、討議の中で砂鉄から鉄を得ているかとの質問に対し、現在それは認められないとの尹氏の答えがあった）

紀元1世紀時代になるとこの地域で生産された短剣が存在する。金海系のもので、これが日本に伝えられていて、対島のシゲノダン遺跡出土例など、西日本の各地に分布するものが、そうであろうという。

済州島からも多量の鉄器が出土して、鉄器遺跡の分布範囲は次第に拡大されていく。

（対島から北九州については窪田氏の発表に話が引き継がれていった）

（文責　高橋一郎）

国際シンポジウムで発表した高橋一郎分は、その後半部分を、富山のたたら研究会で詳細に報告した。すすめによって、「金属」二月号（アグネ社発行）に、豊富な統計数字を加えて登載することになった。「真砂砂鉄地帯における近世企業たたらは、四日押銑生産から始まった」という新しい提唱である。

（地図B）

前号訂正　4頁俳句一行の短歌を前の短歌の終りへ、4段21行10巻、23行ると欠陥も

冬木立唱　簸の上短歌会

陣取りが喧嘩となりし友いまは腰まがりたる既に死にたる　常盤　はるまさ

獲りたての林檎を送るそれだけを書きたる君の絵はがき届きぬ　小早川　恵　子

植ゑ終りし田の面を渡る風ありて早苗ひとしく揺れの危ふく　戸屋　暎　子

歌友集ふ簸の川上のむらくもに松の緑の庭を賞でつつ　岡田　時　子

夢に見し母国に佇ちて呼びかけるタータマーマ早く来て　佐藤　喜代子

その昔戦場たりし沖縄を語るガイド嬢は戦争を知らず　景山　悦　子

木枯に吹かれて佇ちし山畑の案山子抱えて黄昏の径　野村　節　子

俄雪を除きてとりし去年を思い晴れし日を老妻と白菜を採る　伊藤　真一

菓子袋を小枝に担ひ友を訪ふ紅葉の峠に誰にも逢わず　永井　弥生

父われの寒がりを知る息子なれば今宵の電話にそれを言ふなり　安部　夕波

俳句会一月句会抄

空しさも残れり今年の歳忘れ　浅野　としお

瓶の菊枯れて久しや挨り溜め　岡田　蹊花

点滴の音無く長夜の刻つなぐ　岡田　麗水

虎落笛ブルの機音と峡通す　小川　あきお

ふと目覚む傷痕痛む霜降る夜　門脇　花子

肌寒し姫百合塔に戦知る　楠　房子

えり巻のひとに又会う帰り船　高木　白虹

ジョギングのコースへ銀杏の落葉敷く　新出谷　一華

焦げつきの鍋底磨く年の暮れ　錦織　富江

集い来て語る口許冬の顔　峯石　美代子

菊供う戦火の洞穴黙しおり　渡部　夕峰

仙台に於ける国際シンポジウム（環太平洋）

「日本およびその周辺の古代金属史」

日本金属学会創立50周年
金属博物館開館10周年記念
10月16・17日

招待講演者と演題

「中国古代の非鉄冶金」
朱　寿　康
（有色金属研究総院　高級工程師）

「東アジア古代青銅器の考古学的研究」
樋口　隆　康
（京都大学名誉教授　泉屋博古館々長）

「アジアに於ける初期金属使用の背景」
ジェームスD・ムーリー
（米・ペンシルバニア大学教授）

「東南アジアに於ける初期冶金」
R・マディン
（米ハーバード大学ピーボディ博物館教授）

「古代日本の非鉄冶金」
久野　雄一郎
（三宝伸銅工業㈱社長）

葉賀　七三男
（日本鉱業会調査役）

内田　俊秀
（元興寺文化財研究所文化財保存処理センター主任研究員）

「韓国に於ける初期鉄冶金」
尹　東　錫
（水原工業専門大学学長）

「日本に於ける初期鉄冶金」
窪田　蔵郎
（東北学院大学非常勤講師）

「近世企業たたらの成立」
高橋　一郎（絲原記念館）

（オーストリア国際大学教授ノエル・バーナド氏欠席）

発表内容については、金属博物館研究紀要第11号特集号に収録（英文）、61年12月発行

ごあんない

○風土記論叢第二号（61・12刊）
出雲国風土記研究会編集

「出雲国風土記」勘造の契機（上）　美多実

「高田寺根元録」考　高橋一郎

「出雲国庁周辺の計画地割私考」　勝部　昭

残部僅少（B5判74頁200部限定印刷）
実費頒価1,500円　〒250円（4頁欄外の振替口座にて御申込み下されば）

「高田寺根元録」考は仁多郡家附近にあった高田（廃）寺ー遺跡ありーの古文書によるその歴史の研究ノート（30頁分）

次に山陰歴史研究会機関誌**「山陰史談」**在庫若干あり。前記同様に申込みがあれば、取りつぎをします。

12号「尼子経久の母真木氏への疑問」（一）　コピー

13号「仝　右」（二）（A5版62頁）
在来説は誤まり、正説の論述

「日中交渉史における山陰海岸の位置」ほかに三編
右をセットにて　〒共1,000円

14号「奥出雲の新補地頭三沢氏」（上）
「中世出雲鰐渕寺領の成立と展開」（上）ほか
（A5判46頁）

20号「奥出雲の新補地頭三沢氏」（下）
「室町・戦国期の隠岐国守護代隠岐氏」
「松江の民権政社について」ほか　（A5判74頁）
在来の三沢氏の系図の前半は偽作につき正説の究明
右をセットにて　〒共1,300円
（仁多郡誌、旧・新県史とも馬来氏・三沢氏の記述は誤まり）

会員頒布一部百五十円／六九九—一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0—601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 142 号
（2 月 号）
昭和62年2月2日
奥出雲編集集団©

山陰の鉄の始源は 韓半島に於ける古代製鉄（下）と北九州（上）

先月号と今月号の年表をよせあわせて読んで頂きたい。（註）はすべて要旨執筆者による。

鉄器遺物の金属学的分類

初期鉄器時代の始まる年代とその展開の様相は、（註・3頁年表参照）どこの国でも地域によって異ることが多い他の文化要素の発展契機および受容と同じく、鉄器文化も、その中心地と周辺地域間の多角的な文化接触によって発生するのが通例である。（註・山陰での受容、発達もこの点を考えて考察する必要がある）

世界のこの発生の中心地域は、年表の最上段の二地方であるが、非常に大きい違いがある。ヨーロッパは海綿鉄（スポンジ・アイアン）（註・日本流にいえば初期の鍛状塊）を鍛錬して鋼製品を製造することに専念した（註・年表最下段の如く、16世紀高炉出現によって銑鉄が生産されるまで）。中国は、海綿鉄鍛造技術と同時に鋳鉄製造技術（銑鉄）が初期からほとんど同じ時代に併用されている。これは韓半島の初期鉄器文化にも影響を及ぼし、受容していることは、各地域の遺物の中の鉄器の分析を通しても明らかにできる。

便宜上、鉄素材を三つに分ける。

Ⓐ**塊錬鉄**（註・日本の初期の鍛にあたる。但大陸では鉱石は砂鉄でなく、鉄鉱石）

Ⓑ**鋳　鉄**（註・日本でいう銑（ずく）、但、原料は鉄鉱石）

Ⓒ**炒　鋼**（註・砂鉄からできた鍛の中に直接育成された和鋼いわゆる玉鋼と違い、前の鋳鉄を溶かし、それを脱炭して二段階即ち間接法でつくった鋼）

—以下は「鉄の話題」の要約

まずⒶ**塊錬鉄**は、弱い火力（たき火で得られる800～900℃位）で生まれた海綿状をした鉄素材（海綿鉄）の中に含まれている、雑物（介在物）をしぼり出してしまう。同時に結晶粒を微細にして強さをもたせる。この種の低炭素鋼の遺物は非常に多く各地で発掘され、その種類も多い。

しかし、こうした鍛打加工だけでは、いまだ相当の不純物が残っていて、材質は軟弱である。

そこで鉄質の強度をさらに高めるため、鍛打浸炭法が加えられる。それは、鉄塊を木炭の中で長時間1,000℃以上に保ち、たたきながら材料の表面に浸炭（炭素をふやす）する。すると、鉄の結晶がパーライト（註・炭素の含有量の違いによる、フェライトとセメンタイトという二種の鉄が層状になったもの）という組織になって表面の硬度が高められる。なおこの方法で全体の強度を高めるためには、これをさらに折り重ねてたたく、積層鍛造（註・日本刀の折返えし鍛錬もこれにあたる）をする。この断面を顕微鏡で観察するとパーライト層が交互に形成されている。（年表の固城の鉄刀子がこれで、B.C 3世紀に行われている）

この鍛打浸炭法と積層鍛造の後で空冷するだけでは強度は十分でないので、さらに熱処理法（水焼き入れ）を考え出したのである（註・日本刀などの焼入れはその最高度のもの）。それは高温鍛造後に水焼き入れをすることである。その断面を、顕微鏡でみると、マルテンサイトという組織をもっていることでわかる。このような発達した技術が韓半島南部にB.C 2世紀に駆使されている。（年表の馬場里の鉄片と熊川貝塚の鉄鏃がこれに該当する）

このような方法で繰り返し鍛造して結晶粒を微細化して材質を改良したものを、中国では百錬鋼と呼んで、漢代に広く普及したものである。この技術がすでに韓半島に導入されていたのである。製品としては、刀子、鏃、鎌、槍、のみ等の農工具利器と武器類がある。（註・発掘鉄器を種類と型と大きさのみで分類処理することなく、重量ついで材質——①原料は鉄鉱石か砂鉄か。②製錬法さらに鍛造法即ち精錬にもあたるが、どこまで行われているか——を、分析しさらに顕微鏡観察する必要がある。鉄滓の分析だけに終らないこと）

次にさらに高温を必要とするⒷ**鋳鉄**のほうは、炭素分の高い鉄が完全に溶融した状態（溶銑）になって（註・上記の諸鉄以上の炭素の含有量の多い銑鉄）、大量に生産される。これを鋳型に注入して鋳造鉄器が造られた。溶銑は炉の規模を大きくし炉内温度を高めて長時間加熱し、木炭を連続的に投入すると、鉄の中へ炭素が浸入して鉄の融点が下がり、1,200℃位で得られる。

この溶銑をいろいろの鋳型に入れて、各種の鋳鉄製品を製造したと思われる。そのまま大気中で自然冷却すると、いわゆる白銑鋳鉄ができる。しかしこの鋳鉄はもろくてよく壊れ、対摩耗（すりへる）性や対衝撃性がないので、工具、武器には不適当で、後世になるにつれ、冷却方法を変えたり、熱処理をしたりして、斑鋳鉄や灰鋳鉄を造った。年表の第3段階の礼安里の鉄斧は、刃部を再加熱して冷却の度合を調整し、片状黒鉛（註・簡単に説明しにくいので省略

韓半島に於ける古代製鉄（下）と北九州（上）・俳句・川柳・短歌

）を形成させ、耐衝撃性をもたせたものがある。このような方法が南韓地方でB.C1世紀に開発されていることは注目すべきことで、これも塊錬鉄の項の最後の（註）のように考察すべきことである。

最後に注目すべき炒鋼法によってつくられた、©**炒鋼鉄器**であるが、東北アジア製鉄史で最も重要なものである。溶鉄を脱炭して鋼をつくったこの方法は、中国のB.C3世紀の西漢から続く東漢の時期に行われたもので（鉄鉱石による）、ヨーロッパでは、年表の最下段の如く、近世の16世紀に高炉が出現して銑鉄が、そして17～18世紀になって初めてその脱炭法が開発された。これをパドル（撹拌）法という。韓半島ではすでに 2世紀に、すでにこの炒鋼法による製品があった。（註・製品として入ったものか。原料鋼として入って製品としたかは不明）馬場里の鉄片その他でのみ等がそれである。

その後

韓半島の製鉄遺跡は、鉄鉱床があって、鉄鉱石の生産地附近に冶金址がある。

以上の紀元前の初期鉄器文化は歴史時代には、半島南部の三韓そのあとの百済・伽倻・新羅にも継承され、長足の進歩を遂げ、ついに朝鮮・対馬海峡を越え日本へも渡り、新らしい製鉄文化を起こす契機となった。この一衣帯水の距離は、それを伝えるにどれほどの期間を必要としたであろうか。韓半島を下るに100年を要した程度である。すると日本へのその高度の技術は、その他の文化的情況も考えあわせると（交通、交流の）、極めて短いと考えられるが、考古学上の出土品では相当の隔りがある。それは北九州(上)の窪田氏の発表要旨で、どう考えるかとともに、現状を明らかにする。

よこ道

半島南端の伽羅諸国の（年表参照）南の伽倻に残る伝承は、日本神話に登場するものが多い。日本神話のふるさとと言われる。民族の心が渡来とともに日本に移されている。その他の文化もこゝで主題とする鉄器文化も濃厚に移されていると考えねばならない。

別の機会にふれることとするが、日本書紀の天孫降臨神話は、この地と北九州博多付近との接合を濃厚にしているし、日本語は韓国語のこの伽倻地方の方言と殆んど一致するという研究も発表されていて、それで韓文体の日本書紀や、漢字使用の古事記を読むと、在来まで意味不明とされている文が、生きいきと歴史の中によみがえったり、時には在来の解釈が変って来て、より真実性を帯びて来のである。

前月号で韓半島の砂鉄のことに触れたが、最近、前鳥上木炭銑工場長の並河孝義氏にこれに関連して次の様な話を承ったので誌す。

昭和37年、砂鉄資源を求めて、江原道の37度線付近の蔚珍郡の温井里の山地（日本海岸より20㎞奥地）を訪ねたところ、花崗岩風化の真砂砂鉄地帯であったが、中国山地の真砂砂鉄地帯ほど風化しておらず、粘土分も少なく砂粒に砂鉄がついている、片刃（砂に少し砂鉄がつく）状態であった。埋蔵量は多いが、粉砕しなければ砂鉄がとれない、滝で落す位では駄目で、電力によらねばならず、コスト高になる。現状では電力もないという結果であったという。横田町の現採取鉱山の羽内谷は、風化も進んで粘土化もしているが、この状態ならば70％に近い高採取率をあげることが出来ると、惜しい気がしたという。少し南の慶州の海岸で、川か海かで砂鉄を集めて製錬したという記録（時代は新らしいよう）に基づいての調査であったという。

北九州の古代製鉄（上）

—窪田蔵郎氏発表要旨—

鉄器文化の受容の時代

現在日本の研究者の間で考えられている ①日本が鉄器を受け入れた年代 ②日本で鉄器を生産するようになった年代について述べる。

①についてはB.C300～200年頃で農耕文化とともに、大陸から伝わってきたと考えられていることは、研究者の間でほぼ異論はないが、②の製造開始年代になると、2つの見解に分れる。

○5～6世紀説

前号に記したように、「三国史」の中に、弁辰から倭人が鉄を購入したことが書かれている。また、古事記・日本書紀・続日本紀でも紀元AD7世紀ころまで韓国から少量でも鉄の輸入があったことを記している。こうした点を援用し、さらに弥生時代～古墳中期の製鉄遺跡で的確なものが発見されていないことから、日本の製鉄開始期は5～6世紀まで下るものとする考えである。鉄を知った弥生初期以降700～800年間の前半期は、少量の完成鉄器を大陸から持ち込んだ程度であり、後半期は大陸から半製品を持参したり輸入したりして、これを原料として鍛造加工をしていたと考えるのである。

○2～3世紀説

操業の痕跡を残す製鉄炉の遺構や、時代決定のきめ手となるような伴出物の出た鉄滓堆積層が、発掘調査でまだ発見されないからといって5～6世紀頃まで製鉄がなかったと断定してしまうのは、遺物中心の考古学から言えば当然のことであるが、製鉄技能と言う点から考えると、そうも断定できない。

韓半島を100年余りで南下した製鉄技術が釜山近傍まできていて、しかも2～3世紀には彼我の間で鉄の取り引きがあったとされているのに、それ以来300～400年も、一衣帯水の北九州や山陰は製鉄技術が伝播しなかったとは考えられない。

多数の渡来人の中には当然、製鉄技術をもった人々がいたはずであり、しかも日本には原始製鉄に使用する程度の原燃料は十分にある。それにもかかわらず、海難の恐れのある海峡を、

韓半島A.D以降は岩波・新訂日本歴史年表により、日本の時代区分も仝上、日本の遺跡は窪田氏、他はすべて尹氏論文により。

	韓半島	中国	ヨーロッパ	日本
B.C 500	製鉄発生の中心地 ——→ 2地方 ——→	BC 7世紀中国大陸 Ⓐ**海綿鉄**を鍛錬して塊錬鉄にすること。 Ⓑ**鋳鉄**製造を併用。	B.C 12世紀東部地中海 Ⓐ**海綿鉄**を鍛錬に鋼に	
400				
300	（遺物）（鉄と製法）			
200	初期鉄器時代（青銅後期——鉄器1期） **第一段階** 北鮮 固城の鉄刀子 Ⓐ**海綿鉄**を鍛錬 ○積層鍛造（折返えし）	西漢 Ⓒ**炒鋼法**による鋼製造		弥生前期 鉄器受容
100	**第二段階** 南韓 馬場里の鉄片 熊川貝塚の鉄鏃 ○焼入れ 馬場里の鉄片 Ⓒ**炒鋼法**による			
1	**第三段階** 南韓 礼安里の鉄斧 Ⓑ**鋳鉄**の再加熱と冷却			中期 中・後期から鉄てい・鉄製品
A.D 100	三韓：高句麗（半島中・北部）、楽浪郡、馬韓（南部黄海側）、弁韓（洛東江流域）、辰韓（南部日本海側）			
200				後期 壱岐 辻の原 沖の島 岩陰遺跡 北九州 玉名ほか
300				
400	百済、加羅（南を伽耶）、新羅		Ⓑ16世紀（近世）に高炉で銑鉄 Ⓒ17～18世紀パドル法で銑鉄から鋼を（炒鋼法にあたる）	古墳前期 Ⓑ7世紀ころから鋳鉄か、12世紀ころから盛んに
650				

訂正（前号）1頁1段2行講演・年表ADの上の線の上に数字1・挿入

はつはる唱　簸の上短歌会

七草を揃えいただく椀のかゆ一期一会の思ひあらたに　永井弥生

気管病みて言葉無くせし義弟（おとうと）の筆談ノートに手垢の滲む　佐藤喜代子

何処あたり旅行く君か冷えやすき足に目覚めぬ今朝は初霜　小早川恵子

山峡の雪降らぬ田に月冴えてハウスは青く照りしづもれる　常盤はるまさ

ひたぶるにあこがれしことも遙かにて農を守りて年あらたまる　岡田時子

寝ては起ち尾をさし上げて庶まわる産近き牛を息つめて待つ　景山悦子

盛りつけし御節料理も十一人の孫らの寄れば一瞬にして　野村節子

富士の影写して駿河の海は凪ぎ天女伝説の松仰ぎ見る　安部夕波

七十の坂を越えたる老いふたり朝のドラマを泪して視る　伊藤萩雨

斐の上川柳一月抄

いい年を願って祝う屠蘇の酔　松浦木公

賀状かき老いたものよと淋しがる　安部春恵

この一年何とかおくれ只感謝　若槻愛散人

出来すぎと文句をつけて牛蒡掘り　佐佐木千世

これというニュースもなくて蕎麦すする　松浦亜以

網張って待てどつぶての年始客　渡辺好之

御供えを大きく作り期待かけ　松浦久寿子

名門の血は争えぬ初舞台　藤原のぼる

豆粒の地球が騒ぐ宇宙から　若槻白馬

ライバルの手を握って見ればあたたかい　松田牛歩

間接税真綿で首の心地する　田中有樹絵

初春や適令期なる末娘　藤原千代子

ごみの量よそより少ない老い二人　横山まこと

思う事残して六十路年の暮れ　真綿よし子

平凡に生きたい道巾せまくなり　高木白虹

旧友の顔がうかんで年賀書き　安部正子

おめでとう小さい手手にお年玉　石原冬明

俳句会二月句会抄

恙なく過ごせし日々の日記尽く　浅野としお

気前よく霰をはじく石の黙　岡田蹊花

眠れぬまま数えてききし冬時計　小川あきお

病みて尚感謝の祈り去年今年　門脇花子

歳明けて嫁かぬむすめに指折りぬ　楠房子

ひとりぼち駅の門松六日かな　高木白虹

荒れる海鎮めて今日の初日の出　新出谷一華

寒の入り箒目通し落葉掃く　錦織富江

煮直しのおせちの夕餉ただ夫婦　峯石美代子

冬耕や声をかけ合う影のなく　渡部夕峰

付加価値の高い完成品ならともかく、素材の半製品（時には精錬の鉄滓から類推すると還元鉄の塊）までも、常時韓国から輸送していたとは到底考えられない。

倭人は弁辰（洛東江流域の伽倻を含む加羅諸国地方）に鉄を求めにいって、工房を見てきても鉄を造らず、日本独特とされている鉄戈のようなものも、輸入半製品の加工であったのか。原始製鉄の工人集団ではいずれの国においても大部分の場合、製錬作業と成形鍛造作業を連結して実施している。それにもかかわらず300〜400年もの長い間、半製品の加工過程だけをやっていて、鉄鉱石にしろ砂鉄にしろ、製錬（いわゆるたたら吹きの初歩）は全くやらなかったと言うようなことは考えられない。

今後この古い時代の遺跡も、調査が進むうちに発見されるに違いない。

壱岐・対島・沖の島（福岡県の北の海上の小島）㊤

遺跡と遺物は左の通り。

（鉄に関するもののみ）

壱　岐（九州に近い）—BC1〜AD2世紀（弥生中後期）
原の辻遺跡、加良加美遺跡
（遺跡の上層部に後期の鉄てい）

対　島（半島に近い）—AD2、3前世紀（弥生後期）
シゲノ段遺跡

沖の島　—AD4〜10世紀（古墳前〜平安期）
5〜7世紀前半の鉄の財宝的半製品の鉄てい

半島南部から海上50㎞余で対島北端、こゝから約100㎞で壱岐の島。渡来する人々にとっては中継地、避難の寄港地であった。大陸文化のかなりの部分がこゝを経由して日本へ流入したであろうことは誰でも容易に理解できる。

壱岐の両遺跡の出土鉄器は、農具の鍬先・鋤先・鎌、木工具の手斧・鉞（やりがんな）、狩猟漁労具の刀子・鏃・銛（もり）・釣針、その他では鉄器の半製品である鉄てい地金などの**鍛造製品**である。鉄ていは日本での発見例では最古の時代のものである。いずれも住居跡などから出土していて、墳墓ではないので、刀・剣・槍・矛などの武具類は発見されていない。原の辻遺跡の上層部で得られた鉄ていは⊔形のものが中央部で二つに折損し、その一部が欠けたもので、長年の埋没で錆化が**進行**したものと考えられる。長さ13.5㎝で厚さ2㎜程度、ほぼ梯形を呈したものである。また鉄地金と考えられているものは、小鉄板状のもので、**低炭素**の柔軟な材質の**鋼板**と考えられ、古代鉄器の簡単な形状の道具には加工し易かったようだ。

会員頒布一部百五十円／六九九一八　島根県仁多郡横田町一、〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0-1601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第143号
（3月号）
昭和62年3月7日
奥出雲編集集団©

山陰の鉄の始源は③
韓半島に於ける古代製鉄と北九州（中）

窪田蔵郎講演要旨

壱岐・対島・沖の島（下）

対島の赤崎（対島の中部の豊玉村の西海岸）の墳墓遺跡の箱式石棺から、長さ15.4㎝の鉄斧が出土している。柄を入れる袋部をもつ弥生後期のものであって、やゝ大形で**鍛造品**であるという。この類形品が韓半島の平安南道の美林里より出土しているから、朝鮮製品とみられている。

美林里は韓半島において第二段階の時代の、大同江流域地帯に属し（141号2頁参照）、日本の弥生前期の後半にあたる（紀元前1世紀）。

（編者—赤崎の鉄斧の分析はされていないが、142号のように、すでに韓半島では海綿鉄を鍛錬して、折返へし鍛造や、焼入れの技術をもった製造をしている。やがて前1世紀には、その技術とともに、中国から渡来した鋳鉄を使用する技術もともに、南韓に伝っている。この頃から200年後が、日本の弥生後期である。しかも日本はこの後期には、韓半島に渡るものもいて、鉄や鉄器を輸入している記録がある。こゝに太いわが国への鉄・鉄器の流入の経路がある）

同じ豊玉村のシゲノダン遺跡からは、舶載（輸入）した青銅器や国産の青銅器にまじって、鉄器が多数出土している。専門的には種々の見解もあるが、それは21.4㎝の鉄剣、鉄鏃（やじり）、刀子、やりがんなどである。これらは弥生中・後期（紀元前1世紀～紀元後3世紀）に属することは確実という。

又、対島の北の上県部のクルビ遺跡からは、大型の青銅器の壺（高さ339㎝）が発見されているが、この壺の鋳型組立にあたって、鉄片を形持に使用し、鋳造後に、出張った部分を取りのぞき仕上げている。この技術水準や、同型品が朝鮮で出土しているから、この壺は船載品と推定されている。

沖の島は福岡県の地図をみると、釜山と福岡市の宗像とを結ぶ直線上にあって、57㎞沖の小さな孤島である。

壱岐・対島と並んで、朝鮮海峡・対島海峡の荒海を渡る海人にとっては、古代の日韓航路の中継地点として重要な島であった。長い間連綿として、神の島として今日まで崇拝され、航海の安全や漁獲の多いことを祈られていた。そして聖地となっていた。（編者—戦後発掘が進められた結果は、奈良の正倉院が古代のシルクロードを経て到来した文物を含めて、古代の宝庫とされているのに対し、この島は、大陸との交流をしめす、おい、あと215社は出雲国庁の神名帳に登録された国社であった。これらは地方の郷々の人々の精神的な支柱、また共同体の柱として、農作業はもとより、日常生活のよりどころであったから到るところの集落に神社があった。

出雲風土記を読もう会を終って③
横田郷は秘境であった
（八世紀はじめ）

神社の数から

古代人の精神生活を支えていたものは氏神であり、それをまつる神社であった。寺院は当時渡来して間もない仏教を中心とする新文化のセンターであった。前者は伝統的信仰生活の中心であり、後者は革新的な信仰生活の中心であった。一見相反するこの二つの信仰は、現世御利益と死後世界とで共存でき、出雲の国造家をはじめ、豪族や庶民が何を求めていたかを物語ってくれるのである。

神社でまつる、まつりの心とその表出の形式の変遷については、韓半島における古代製鉄と北九州（下）でふれる予定である。

さて出雲では当時399社あった。うち184社が中央の神祇宮の神名帳に登録された神社で、官社といい、あと215社は出雲国庁の神名帳に登録された国社であった。これらは地方の郷々の人々の精神的な支柱、また共同体の柱として、農作業はもとより、日常生活のよりどころであったから到るところの集落に神社があった。

出雲には62の郷があり、郷には里（こざと）が3つあって、まだ家数が少なくて里と称せられないものもあったが、それらを含めると里数は約200余で、そこに399社があったから里一つに平均2社があった。横田郷は里3で伊賀多気社のみである。郷に1社は62郷中横田郷ほか数郷で、出雲国の平野部では、里に数社もあるのはまれではなかったか。

一郷は50戸を標準としていて、そこには長一人を置いた。この郷を三つ位の里に分けていて、人口が増えて60戸になると、10戸を分けて余戸（あまべ）として長を置いた。それでさきの200余という里数となる。

戸というのは戸主によってすべられる家族集団で、一戸の中には戸主に直属する家族と、戸主の下にありながら、別に一家族を作っている、いくつかのグ

韓半島に於ける古代製鉄と北九州（中）・横田郷は秘境であった（八世紀）・俳句・川柳・短歌

びただしい奉納品が埋納されていて、極めて貴重なものであり、歴史を豊かに物語るものが多く、海の正倉院と呼ばれている。

膨大な出土品の写真集をみると、十分に楽しむことができるとともに、古事記・日本書紀でのみ知る、その中の神話の発生時代の古代人の豊かな生活、そしてすばらしい技術を、知ることができる。このことを知っておくと、とかくかたより勝ちな神話の解釈は、極めて幼稚であることに気づくであろう)

この島の発掘物の中の鉄器文化をみるとき、とくに古墳期から平安期(4〜10世紀)にかけての貴重品も少なくない。特に鉄の財宝的半製品と推定される、鉄てい(鉄材)の出土は注目すべきもので、5〜7世紀前半のものと推定される。

そのほか、鉄刀・儀鏡・刀子・斧頭・やじり・やりがんな・釣針・環、それに馬具類がある。

また中世の三叉矛と鰐口もあり、総数で5万点に及ぶ。

馬具などは新羅との関係をしめすものであり、その他韓半島から持帰られこゝに奉納されたと推定されるものが多く、中には、日本国内産のものが調達されて奉献されたものもある。

ここの調査は、九州大学の岡崎敬教授を中心に、第一次の昭和24年の調査以来、長期間の第三次の調査に至るまで大規模な発掘が行われ、そのすべてが明らかになった。

北九州地方の鉄器

農耕文化—稲作文化—の導入は、弥生時代の特色とされている。この時代は、銅・鉄両金属文化も同時に流入し、その中・後期には(注、BC1〜AD3世紀。2世紀後半から3世紀前半が、邪馬壱—台—国の卑弥呼の生存時代)。実用金属器が、青銅器から鉄器へと変化する移行期であり、石器が廃滅していく時期でもある。

弥生前期を代表する鉄器は、福岡県から山口県にかけて発見されている。小剣や鉄鏃(やじり)・やりがんなどで、日本が鉄器時代を迎えたばかりの萌芽期のものであって、韓国など大陸製のものが渡来人によってもたらされたか、或は製品として船載されてきたものであろうと推定されている。これらは中・後期になると、急速に発見例が増加してくる。

50cmを越す鉄剣などで、いずれも原形は中国に求められているが、注目すべきものとしては鉄弋の出土で、北九州で17本発見されていて、木柄を装着したと推定されているものもある。

こうしたものの類例は大陸にないので、わが国の製品と考えられている。すると**既に弥生後期には、かなり高度の製鉄生産技術が確立**されていたことになる。

出土鉄滓(金くそ)の特徴

鉄滓の出土は、わが国に於ける製鉄技術の発生を示すものである。

北九州には奈良・平安期あるいは、それ以前に遡ると推定されるような時代不明の鉄滓出土地が多数ある。ただ、今までは発掘にあたって鉄滓は、余り重視されていなかったために、時代推定が極めてあいまいである。

近年は発掘の時、鉄滓が製鉄炉の炉底部より採集されたり、あるいは住居跡または工房跡から、発見される例が多くなってきた。年代推定のキメ手となるような、生活遺物が一緒に出土

ループがあった。そこで中には一戸で100人以上を所属させているものもあり、一戸が数人で構成しているものもあった。

風土記には神社数は次のようである。

郡	官社	国社	計	郷数	里数
意宇	48	19	68	11	33
島根	14	45	59	8	24
秋鹿	10	16	26	4	12
楯縫	9	19	28	4	12
出雲	58	64	122	8	23
神門	25	12	37	8	22
飯石	5	16	21	7	19
仁多	**2**	**8**	**10**	**4**	**12**
大東	13	16	29	8	24
計	184	215	399	62	181

当時の正確な分布状態がこれでわかる。これは戸数従って人口を知ることができ、開拓状況をしめすものでもある。意宇・出雲の両郡の官社が郷名の多少をこえて断然他郡を抜いていて神門郡がそれに続いている。国社も同様であることは、当時の豪族の分布を推定することができる。

仁多郡内をみると

郷名	現地での範囲	里数	官社	国社
横田郷	**鳥上・横田**	**3**	**1**	**0**
三処郷	比田・亀嵩	3	0	4
布勢郷	上三所以外の布勢	3	0	1
三沢郷	馬木・阿井	3	1	3
	三成			
	三沢・温泉			
合計			2	8

(地区名横の数字は国社数・ゴチックは官社数)

神社数からみると、出雲大川の存在が大きいことがわかる。大原郡を遡った、温泉2、三沢1、阿井1で、三沢の官社は三沢神社で、祭神は阿遅須枳高日子命(あぢすきたかひこの)である。これにまつわる物語があって、出雲国造家出雲臣の一族がこの地に土着していたことは明らかであって、郡内唯一つの前方後方墳もあって、人口も多かった。

この出雲臣は郡司の一人で小領であった。三処郷の4社のうち2社は山上の社であるのに三沢郷の4社はすべて集落社であることは、下流との往来を通して開けることも早かったのである。(阿遅須枳高日子命にまつわる話については、近く中央の古代史家が、新らしい解釈を発

するような遺跡にはそう恵まれていない。

古墳に供えられた供献鉄滓にしても、築造時のものか、後世に供えられたものか判断がむづかしいところである。玄室（石棺などを置く場所）ならともかく、羨道の部分（玄室に至る通路）などのものは、後世の補修・改修の時の可能性も少なくない。

現時点では、北九州では、大谷（7世紀）、相原（6〜7C）野方（7C）などの古墳のものが、古墳後期築造時の供献にかかわるものと推定されている。

現在のところ、**5世紀とみられるものは岡山県に多く**、月の輪、佐古田・押入西1号などであるが、鉄滓出土のみで科学的調査がされていない。北九州では最近北九州市の潤崎の祭祀土拡遺跡出土の鉄滓を大沢正己氏が科学的調査によって、5世紀後半前期に比定している例があり、明らかに**砂鉄製錬**によって発生したものである。

この点から国産での製錬は5〜6世紀という説が強くいわれるわけである。

年代の点は一応おいて、北九州の鉄さいの出土地は、福岡県内では福岡市および周辺地のみでも、80カ所を数える。

このうち明らかに近世の製鉄遺跡とされているものをのぞくと、私が調査したものでも、15カ所ほどあるが、分析してみると、博多湾岸の浜砂鉄やその後背地の砂鉄の質が、チタンが少なく良質であることは、後背地の豊かな木炭資源とともに注目される。

この地方の鉄滓出土地には、韓国からの製鉄技術者天日矛（あめのひぼこ）の末である、五十手の伝承をもつもの、「肥前風土記」（8世紀）に記載されている渡来新羅工人、忍海漢人の製鉄兵器製作場所ではないかという伝承の場所もある。

私はこれらの出土鉄滓を分析してその特色をしらべている。

（具体例は省略）

この科学的データ（調査結果）は、同一時期、同一設備でも燃焼状態、天候、技術経験などにより、化学分析値、鉱物組成ともに、バラツキが甚だしい。

したがって任意に採用された試料の偶然性に左右されることが大きい。考古学的な解説に数表や顕微鏡写真などが使われると、このような点が薄れ、それが唯一絶対なものとなってしまうきらいがある。考古学的手法と科学的手法の連携が大切である。特に現場観察で平均的な流動状、海綿状の鉄滓を選択することは勿論であるが、数コの試料を対象にすることが望ましい。

まとめ

弥生期から古墳期へ、そして飛鳥、奈良期へと、日韓文化の関係は文献の残っている歴史時代に入っても続いている。例えば仏教導入で物部尾輿と論争を起こした蘇我稲目の祖、蘇我満智は百済人・木劦満致といわれている。その子の馬子は周知のように飛鳥寺を建設しているが、そこの住職として招かれたのは高句麗の恵慈と百済の慈聡の二人の僧であった。

それ以上に当時の寺院建設には、木工・石工・瓦工・鋳鍛造工・染織工・製紙工などが必要であり、施主の豪族が前から抱えていた各種工人群もあったであろうが、さらにそれらの技術者が、その都度招きに応じて渡来している。またそれが当時の

俳句会三月句会抄

春一番田畑の神は目ざめしか　浅野としお
着ぶくれて愈々亡父に似る仕種　岡田蹊花
減反の運命の田面に霙降る　岡田麗水
真向いに牡丹の雪や切り通し　小川あきお
鬼の豆手に園児等のはしゃぐ列　門脇花子
玉鋼生まる凍夜の炎かな　門脇房子
雪に散る二世紀踏み耐ゆ石鳥居　高木白虹
頑固にしきたり守り節分会　新出谷一華
おでん鍋大根主役に丸くたき　峯石美代子
孫の足日毎に伸びる日脚かな　渡部夕峰

斐の上川柳二月抄

エイズ来て少し品行正さねば　松田牛歩
臨月の重みに耐えて母となり　佐佐木千世
云ひ直せ云う事止めたと空転し　古川松
覚悟した雪降らないで気ぬけする　松浦木公
よたよたと一人相撲の機嫌酒　渡辺好之
神妙に頭を下げて厄払い　松浦亜以
生きること並々ならぬ年となり　若槻愛散人
補接して母の形見で羽織縫う　安部春恵
揃い踏みしても出番の来ぬ焦り　藤原のぼる
振り向いて言葉のほしい旅の朝　真綿よし子
父と子が語らいながら交す晩酌　松浦久寿子
適令期娘優しうなってくる　藤原千代子
古こってい望みは捨てぬ角をとぐ　若槻白馬
餅くえば頭をかすめる体重計　田中有樹絵
見込まれて又来てねだる幼児の瞳　高木白虹
閉山もよそ事でない荒れ田んぼ　石原冬明
墓参りいの一番に孫だより　杠京子
この歳でまだ負けられず夢を追う　横山まこと
独り居も気楽ですよとまけおしみ　安部正子
元旦の屠蘇延命の水で割り　田中芳春

訂正　前号3頁表のヨーロッパ「鍛錬し鋼に」

需要量のすべてとは考えられないが、天武・持統の天皇の時代（7C）に至っても、金銀銅とともに鉄が新羅から輸送されてきていたことが「続日本紀」の天武8・10、持統2の年の項にある。

これらの少し前の天智天皇9年670の「日本書紀」に、「この年、水碓を造りて鉄を冶す」とある。これは白村江の戦い（註 — 韓半島東南の新羅は唐と結び、半島の北と西南の高句麗と百済が結んで対立している。理由は略すが、倭国は百済救援のため数次の派兵をしたが、その対立の天王山となったのがこの戦であった。百済の白村江で、倭国主力軍400隻と百済兵は、二日間の新羅の攻撃に壊滅した。内部分裂に加えてこの敗戦は名実ともに百済滅亡となった。これが百済の知識人、一般人のわが国への多数の流入となって、大きな影響を与えた）の後に、韓国との交流が商品取引きも含めて、鉄類も一時途絶し、自主生産によらざるを得ないため、このような記事が記されたものと考えられている。7〜8世紀といわれる高松塚古墳は、百済高句麗との深い関連があるとされているが、鉄もその例外ではない。

こゝで韓国、尹氏の講演にあったごとく、中国やはるかに遠いスキタイ文化までの影響も忘れてはならないことを加えておく。

漢人亡命者やそれらの人々との通婚者その子孫が主体である。それらが韓国で育てられ、続いて日本にもたらされている。

それとは別に日中間には遣隋使・遣唐使などの公的使節による導入はもとより、土地を求め利を求めての私的交流による中倉のあった大呂と五反田の境あたりを中心に、谷地田（やちだ）をまもる人々が、ひっそりと生活を営んでいたと考えられる。

こうした点を、しっかりとふまえて、出雲国風土記をよみ、古代の郷土の歴史を考えねばならない。食糧生産を中心とし、わずかのすくい上げた川砂鉄と木炭を原始的なふいごの風も加えて海綿鉄をつくり、苦心して鍛えて鉄とし、自分が使用する用具をつくる、極めて小規模な自給たたらを、時折営んでいたのであろう。こうした状況下で、小規模な円墳があちこちに築かれたのであって、「出雲文化発祥の地」などという発想は全くできないのである。

鉄の渡来はまず海岸地域であることは本号でも明らかであるが、次号で更に詳説することとする。

立春唱　簸の上短歌会

息子の継がぬ古き宿屋に古稀すぎし夫と明日の献立あらたむ　永井弥生

乙女らの戦い果てし沖縄は緑のなかにブーゲンビリヤ咲く　松浦愛子

直ぐ樹てる椰子の並木を通りきて明るきに会うトーテムポール　景山悦子

舗装路を走りし犬は土堤に入り枯野の中に消えてゆきたり　佐藤喜代子

口笛におけさたくみに唄いたる兵は生れを佐渡と言いにき　常盤はるまさ

断崖の斑雪（はだら）のなかに枯芝のかすかゆれをり淡き陽光に　野村節子

隙間風の吹き込む土間の黒板に二割減反と息子の書きし文字　岡田時子

永年の釣友釣りをやめしと言う我れも殉じて釣りを捨てむか　伊藤萩雨

わが愛の女性（ひと）はさびしく竜胆の花咲く吉備路の丘に眠れり　安部夕波

表される予定である）

三処郷には郡家があって、意宇郡から来任した郡司大領の蝮部臣が住んでいた。（これについては最近刊行された。「出雲国風土記論叢2号の拙稿—高田寺根元録考——を参照せられたい）

横田郷には官社1社である。このことは古くからの土着の豪族がいたと考えられ、それは郡司主張の品治部であろうと思う。

出雲国中34名の郡司中唯一人姓（かばね）のない、身分の低い郡司である。横田郷の豪族とすれば、古くからの土着性によって、郡司に任ぜられ、その氏神が官社とされたのかも知れない。

仁多郡の人口は、郷4で推定200戸、5,000人位であったであろう（加藤義成著　出雲風土記参究）。神社数から考えると横田郷は、約40戸　1,000人位となる。（出雲国内では87,500人位の推定—前著による）

この横田郷1,000人の中での働き手はどの位であろうか。諸研究から推定すると、男500人でそのうち200人位　うち60人は木次の熊谷軍団へ訓練のため常住していたから、140人前後となる。正

「魏志」の辰韓伝には、次のようにある。この鉄産地、辰韓に居住した人々は、「自ら言う、古の亡人なり、秦の役を避けて来たりて韓国に行く、馬韓その東界の地を割きて之を与う」とあるところからみても、弁辰の人々は国からの直接流入もあっている。

倭人伝の記されている「魏志

その中に北京周辺や河南省南部の砂鉄地帯、さらに**福建・浙江省**などの大砂鉄産地からの渡来人があってもいる。**漢から宋あたりの期間**にそれらの人々や技術が流入しているに違いない。

予　告

たたら見学会とたたら実験に続く昭和61年度たたら勉強会

第3回「**砂鉄からどうしていろいろの鉄ができ、それはどう鍛えるか**」

3月末か4月上旬

たたらや実験の映画・スライド発表後、討論によって明らかにする。（講師交渉中）

会員頒布一部百五十円／六九九—一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0—601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 144 号
（4月号）
昭和62年4月4日
奥出雲編集集団©

中世横田庄・そろばんとたたらの里

山陰の鉄の始源は④
韓半島に於ける古代製鉄と北九州（下）と山陰

まつり

前号で沖ノ島遺跡にふれたので、そこの祭祀遺跡が発掘調査で四段階の発達過程を経たことが明らかになったことをしるす。

岩上遺跡　最も古い4～5世紀のもので6カ所あって、巨岩の上で祭祀が営まれたものである。

岩の上の極めて足場の悪い場所に設けられ、岩上には2×3m方形の石組みをつくり、その中央に磐座（依代）となる石を置いて、これを中心に、鏡や勾玉やガラス玉・武器・装身具などを奉献している。そこで踊りや何らかの儀式が行われたことは考えられないという。

この時代の古墳の埋葬施設をみると、古墳の上部から堀下げて、そこに竪穴式石室を設け、屍体と副葬品を納めているから、儀式といえるほど整ったものは祭の場合もなく、祭具の奉献が、最も重要な「まつりごと」であった。

この時代の前の弥生時代は農耕がはじまり、木製の人形や鳥が、水田地や溝の中から出ていることから、春、水辺で一年の農作を祈願したものであろうし、銅鐸も用いたとされている。

その前の縄文時代は、土偶の時代で乳房や腰を強調した女性像が圧倒的に多く、豊作祈願をしたものと考えられている。

岩陰祭祀　第二段階で6～7世紀のもので、岩上から下の地表に移っていて、場所も広くそそりり立つ岩は、神が降臨するためのシンボルとなり、祭の規模も大きくなり、大がめや器台、金銅製のものも奉献されている。酒や水や穀物も供えられ、楽器を奏し祝詞のようなものを読んだであろうと考えられ、儀式らしくなってきている。

半岩陰半露天祭祀　第三段階7世紀に発展したもので、祭場がひろがり岩陰の外まで遺物が出土し、その種類や量がふえ、平安時代の儀式帳にある神宝と一致するものが多いという。

露天祭祀　第四段階で8～10世紀＝奈良平安時代の遺跡で、近くには巨岩もなく背後にそびえる巨岩群がすべてその対象で、沖ノ島全体がそうなってゆくことになる。奉献物やそれを入れる容器も多種多様となる。玄海灘を渡る遣唐使は、必ずここで祭祀を行っている。

出雲国風土記の**三沢郷の御津池伝説**のある、字光田の池の北面には巨岩があって、依代とした場所もあり、一隅に今も清らかな水が湧きでている。7世紀の半岩陰半露天祭祀の遺跡の様相を残している。近く中央の学者の研究が発表される予定。

開かれた　セミナー・ハウス設置を

横田は何か特色がある町だといわれるとすれば、それは500年間の中世期に胚胎している（遠からずその全貌も明らかになるようである）。そしてそれが長い江戸時代を育て、幕末になって町内各地区に燃え上る。それ以後の50年間、それにかかわりのあったと思う幾人かの、中央の良きものをこの地の風土に生かして、尽された人々については、すでに当誌に掲載した。

51年の秋、三陸海岸の宮古市の北の田野畑村を訪ねた時であった。この村の海岸はリアス式の上にほとんどが絶壁状で、台地上に村があり豊かな森林に恵まれていた。その森の中にある珍らしい建物といろいろな夢のある標柱のあるのに気づいて尋ねたところ、昭和35年からこの森には早稲田大学の「思惟の森」と称するところがあり、そこに青鹿（ニホンカモシカの地方名）寮というセミナー・ハウスがあるという。大隈重信の建学の精神に基づき、この森を村と学校の分収林とし、その労働のあとこゝで学生の研修の自炊生活が行われているとのことであった。年間春・夏・秋合わせて60日をこゝで過し、余日は村の管理で同様な村の人々の研修の場となっており、教授・学生来村の時は村人や青年との膝を交えての研修交流も行われるとのこと、さらに教授と学生、家族を含めた職員、卒業生有志もこゝに集って来るという。

横田には千客万来、しかし期待に応えることの少ない面も少なからずある。高邁なそして土地に根ざした人を育てねばならない。中世と明治の両期の如き人物を育て、地域の雰囲気も盛りあげる必要がある。ここに横田町の力によって、是非開かれたセミナー・ハウスを設けられることを願いたい。数年前岩屋寺で島大の学生が自炊して夏の研修をし、再度訪れている。

島根大学その他県内や近県の大学のセミナー（教授を中心とする学生の研究）の宿泊所として、また横田町がその調査研究の対象としての資料提供地となり、その実習場として諸施設の

韓半島における古代製鉄と山陰④　セミナー・ハウス・たたらの手引　短歌・俳句・川柳

九州から西日本そして東日本

昨年九月、産業考古学会の部会で、古代製鉄の研究のトップにある三人によって、「古代の鉄生産の開始期はいつか——関東地方の場合」のシンポジウムが行われた。

穴沢義功氏は現在までの事実認定（発掘調査等）から砂鉄製錬の始期を、古墳時代中期（5世紀）と考えていて、北九州で開始されて、6世紀の後半から（岡山県北の大蔵池南遺跡）7世紀初頭にかけて、鉱石製錬も同時に伴いながら、西日本各地で広く行われるようになったとしている。このころの東日本では鍛冶工房の跡のみが発見されていて、製鉄技術は伝っていない。しかも現在のところ関東の7世紀末期（飛鳥期）までの古墳から出土する鉄器の地金は、鉄鉱石による舶載品の比率が高い。

鉄生産の開始を推測させる最初のものは、成田国際空港No.2遺跡の工房跡から出土した鉄滓である。これは製錬滓で近くに製鉄炉があったと推定される。時期は古墳時代終末期の7世紀後半である（出雲国風土記勘造の少し前）。製鉄遺跡の初見は、8世紀初頭とみられる千葉県流山市の中ノ坪Ⅱ遺跡であるから、北九州から関東地方に製鉄法が転移するまでに1世紀半かかったことになる。

8世紀はじめ奈良時代になると、その紀末ころから畿内で鋳鉄器の生産がはじまり、それが9世紀に入って関東地方に導入され、平安時代を通じて生産の主体となってくる。

それを鉄滓・鉄器の解折で裏付けたのが、佐々木稔・伊藤薫両氏である。それによると、鉄分と鉄滓の分離は良好であって、炉内でできた鉄は海綿鉄ではなく、流動性のよい銑鉄であると推測され、さきの考古学的調査と一致するという。

砂鉄製錬が始まって少なくとも1世紀を経過した奈良時代末になっても、関東地方においては、地域で生産した地金の使用が、一挙に進んだという状況ではなく、どうしてもそこに砂鉄を使用した鉄地金のゆるやかな東日本への進出を考えないといけないという。

考古学と金属学だけによって鉄生産開始時期を解明することは難かしく、鉄の流通という大きな流れの中という、総合的な研究によらねば、地域の鉄生産を考えることはできないと結論している。

しかし中世になると、東日本では製鉄遺跡は大巾に減少する。

未発掘の疑いが残るが、有力な製鉄基地が国内に成立したのであるとするのが通説で、その地域は砂鉄に含まれるチタンの量と、竪型と箱型の炉の分布と発達の検討から、西日本であるとされている。

全年11月、富山でのたたら研究会で、福島県相馬市の海岸の後背地丘陵で、数多くの製鉄遺跡（10月に見学）の発掘が行われているが、7世紀に入りこむと考えられると発表された。すると東日本で最古のものとなってくる。常陸国風土記（8世紀初頭勘造）にある。浜砂鉄による製錬地の北方に当る地である。

また富山市西郊の同じような遺跡は、現地説明とともに8世紀初頭のものとの発表があった。

この会に合わせて開催された「北陸の古代鉄生産の源流を探る出土展」をみて、山陰のこの方面の立ちおくれを感じた。両県の生産遺跡分布調査報告書からみても、これに匹敵する展示は難かしいであろう。

出雲国風土記（8世紀初め勘造）の仁多、飯石郡の条に鉄を造ったとあるが、川砂鉄によるものである。さきの常陸国風土記は浜砂鉄、播磨国風土記では川砂鉄である。私は出雲のこの二郡は秘境であって少ない人口で、わずかの川砂鉄で歩留りの悪るい還元鉄塊をつくる程度では（3頁の右側参照）自給用の鉄器が手一ぱいで、国内の需要にはとても応じられないし、当時の意宇・神門・熊谷の三軍団の相当の装備などは勿論まかなえない。各国の風土記時代から100余年後の延喜式の記録によれば、（本誌105号参照）全国の国々で生産されていたが、生産量が多くてしかも安価であったのは隠岐・出雲・石見・安芸で、東北諸国はその35倍、富山は2倍の高値であった。

先の福島・富山の遺跡時代は、各国の風土記時代である。さきの金属部会での結論では、その時代すでに西日本は製鉄の先進地であった。この連載の①～③もそれを如実に証明している。

従って出雲国風土記の時代に、仁多と飯石の一部のみが鉄の産地であったとは、いよいよ考えられなくなってくる。当時、海岸の多い日本の各地と同じように、浜砂鉄を用いた製鉄が、勿論原始的な自給たたらであるが、相当に行われていたに違いない。

（4頁へ続く）

提供を行い。大学のみならず、それらを通して、町内の各地域の人々、青年との交流も深めることは、相互の研修・啓発となって、回を重ねるとともに収穫は広く深くなるに違いない。横田町の諸機関の人々はもとより、青年をはじめとする地域の人々は、それにこたえ得る方々である。歴史資料も豊かであり、植物・昆虫にも恵まれ、森林あり、開発地や諸施設もあって、いろいろの便宜の提供が可能である。横田の明日への方向づけ、活力の振興に影響があることは眼に見えている。さしあたり、岩屋寺には30人収容のすべての什器等がそろっている。手近かなところから始められることも可能であるので提唱したい。（遠）

たたらの手引

砂　鉄　取り出した山砂1㎥＝1.5t の中に1％＝1ℓ＝15.0kg 砂鉄が含まれていて、鉄穴流しで20～50％の平均で5.25kg（現在は磁力選鉱で80～90％の平均で13.1kg）とれる。昔のたたらでは5.25kgから鈩が25％＝1.31kg できて、この中に1～2級の鋼が30％＝0.39kg とれる計算になる。（真比重は4.13～4.01である）

山陰の山砂鉄には母岩によっては次の2種類がある。

真砂砂鉄　日刀保たたらで使われているものがこれで、色が黒く、粒がやゝ大きく（60メッシュピーク）鉄の品位も高く不純物も最も少なく（チタン、燐、硫黄とも）良質鋼の原料であるが、産出量少なく、山陰側の伯耆大山から石見の瑞穂町の丸瀬山の間に点々と産し、福岡県北部と岡山県北西部にわずかにある。母岩は花崗岩系である。

赤目砂鉄　一般的にいえば、全国至るところに産する。実験小たたらに用いたものはこれである。赤褐色を呈していて真砂砂鉄よりやや微細（100メッシュピーク）、産出量は多いが、真砂砂鉄と比べると特に酸化チタンが3～17％と多い。（福島県相馬郡小高町産は38.02％）良鋼の製錬はできず、専ら銑を生産する。母岩は安山岩・閃緑岩系。

砂鉄は酸化鉄として存在しているので、金属鉄をとり出すのには砂鉄を溶融して、酸素を奪う（還元という）のである。砂鉄は鉄鉱石と違って**チタン**を多量に含んでいるので、製錬の時に出るかす（鉱滓・鉄滓・ノロ・スラグともいう）の中にチタンが含まれているとその原鉱は砂鉄であるとの判断の資料となる。**チタン**は溶けにくいため、たたら炉の羽口附近の高温になった部分に溶滓が粘着して通風孔をふさぎ、製錬をむつかしくする。中国地方の真砂砂鉄はもとより、赤目砂鉄も他地方と比べてチタンが少なかったので、近世以降は日本の企業たたらの中心になった。他地方ではチタンが多いので、難かしく大規模化へは進まなかった。

砂鉄を還元するには**木炭**を用いて、加熱送風し木炭が燃焼して発生する一酸化炭素（COガス）や木炭の炭素（C）で酸化鉄の**酸素**を奪いとる。この時**炉壁**の材料である**粘土**は、砂鉄や脈石などを溶かし易くする働きをしそれらとともに鉱滓となって流出する。

砂鉄の中の$\frac{2}{3}$**の鉄分**はこの鉱滓に入ってしまう。

砂鉄から鉄へ

成分＼鉱石の種類と産地	真砂砂鉄（仁多郡内）	赤目砂鉄（仝　左）	磁鉄鉱（富石）
全鉄分 T. Fe	53. 01	61. 45	55. 18
酸化第一鉄 Feo	22. 89	30. 41	—
酸化第二鉄 Fe_2o_3	64. 75	54. 03	—
ケイ酸 Si_o_2	9. 14	6. 64	13. 51
酸化アルミニウム Al_2o_3	0. 34	0. 35	1. 58
〃 カルシウム Cao	1. 18	2. 45	6. 28
〃 マグネシウム Mgo	0. 690	1. 330	0. 042
〃 マンガン Mno	0. 960	1. 550	0. 380
燐 P	0. 010	0. 040	0. 051
硫黄 S	0. 034	0. 061	0. 240
銅 Cu	—	—	0. 121
酸化チタン Ti_o_2	1. 470	5. 050	0. 090

（砂鉄は窪田蔵郎著「製鉄遺跡」　磁鉄鉱は「鉄と鋼」から）

小規模たたら

原始的な設備・技術であるため多孔質な海綿状を呈した海綿鉄ができた。低温のため砂鉄から酸素を奪ったというだけでなく、低温で溶解する脈石の一部流出も伴い、さらに砂鉄が焼結したり、部分的に溶解と凝固の働きでできたものである。鉄滓との分離もわるく、かなり劣質な金属鉄に近い性質の粗雑なものでもあった。これに加熱・鍛錬を加えて鋼へと近づけていた。この段階では不安定でしかも生産性も低く、品質も不均一なものであった。次第に送風も発達すると（1,500～1,600℃以下）、半溶融の還元鉄（鈩）ができるようになった。

実験した小たたらで出来たものは、鉄滓の取出し口がなかったので、炉底や炉底に近い周辺に鉄滓が出来ており、それにとり囲まれるようにして鈩ができていた。質は劣りそれを砕くと小さい金属鉄粒がとり出せるもので、時には焼結した砂鉄もあった。その中心にやゝ良い鋼ができた。

企業たたら

中国地方はチタンの含有量が少ない砂鉄であったので企業たたらが発達し、天秤吹子の開発で四昼夜の操業の銑つくりが盛んとなった。赤目砂鉄地帯ではほとんど銑をつくり（時には質の悪るい小さい鈩ができた）、真砂砂鉄地帯では大きい鈩ができていたが、はじめは割ることができなかったが、成功するとこの中から鋼をとり出すようになった。そして操業を三昼夜に短縮した。この真砂砂鉄と赤目砂鉄による三日押（鈩押法）は、銑50％前後鈩50％前後（20％前後が鋼）。一方、赤目砂鉄による四日押（銑押法）では100％近くの銑を生産していた。現在の日刀保たたらでは、三日押で鈩約100％（うち半分が鋼）を真砂砂鉄のみを使用して生産する操業をしている。　（文責　編集者）

前号訂正　1頁4段20行　神祇官・2頁4段7行　官・社に

春待つ抄　簸の上短歌会

生き生きと樹はめぐりより雪とかし黒き朽葉の湯気上げて乾く　永井弥生

ゆくりなく出で来し娘のセイタアの赤きがあまりに小さきかなしも　松浦愛子

箕をゆすり塵を飛ばすに新しき小豆は秋陽に白くかがやく　佐藤喜代子

どの家も署名し呉れしと運動員はスパイ防止法をこともなげに言ふ　常盤はるまさ

和服着て懐手温く雪原を駆けめぐりしは幼なき日のこと　野村節子

雪少なく納屋にしまひし除雪機を駆動（くどう）するなり　伊藤萩雨

春の深雪に繰返へす寒のもどりの雪の上にチュウリップの芽の並びのぞける　岡田時子

見はるかす伊豆七島は夕映えて潮の香ただよふ稲取の街　安部夕波

斐の上川柳三月抄

長い旅達者で金婚にたどりつく　石原冬明

川端の柳は水に春語る　安部春恵

川柳のおかげで余命遠く見ゆ　若槻愛散人

条件を並べこの縁まとまらず　松浦亜以

ストレスを溜めた女のはね箒　松田牛歩

姑より上手に逃げる嫁のこつ　渡辺好之

風呂場まで留守の話をもってくる　児玉哲呂

身に覚えあってエイズでちぢこまる　松浦木公

いかめしい顔も孫には仏顔　藤原ユキ子

山陰の空も明かるい暖冬異変　佐々木千世

売上税空転劇の主役です　古川松

家中が思ってくれる有難さ　藤原千代子

ご挨拶人間社会の潤滑油　若槻白馬

齢の功たかぶり押えて唖しとなる　高木白虹

寝たきりへ介護の老妻長き愛　横山まこと

病む叔母は田ぜりのひたしかみしめる　杠京子

俎上の魚国鉄の次は農政か　田中有樹絵

冬の花部屋を明るくしてくれる　真綿よし子

一人居の夕餉に梅酒一寸添え　安部正子

姑が逝き嫁の仕草が姑に似る　松浦久寿子

寝つかれぬ夜の深みに吸いこまれ　田中芳春

俳句会三月句会抄

神楽まわす孫に老いの知恵みな授く　浅野としお

杖は飾りよ鬘（かつら）と青き踏む　岡田蹊花

そば売りや湖畔の春灯窓におき　小川あきお

残留孤児心みだれに春を待つ　門脇花子

もどかしく走るライトや春吹雪　楠房子

減反に怒りの無口種撰み　高木白虹

風邪に伏し軒の氷柱を数へけり　新出谷一華

風に触れ人にも触るる弥生月　錦織富江

朝刊に啓蟄とありほのぼのす　峯石美代子

遠き地の孫の噂や雪安居　渡部夕峰

お断り

横田史談会の準機関誌としての当誌も、当初から独立採算を方針としている。印刷所の御厚意も頂いているが、写真・図表等を入れると苦しくなり勝ちである。広い各地の方々の御協力で微増もしているが、なんとかしてと、「あるくみる横田」の領布による余剰も加えて、今日に至っている。この冊子も残り少なになったので、口絵のカラー化、表紙一新等で再改訂版をというすゝめもあるが、なかなか踏切れないでいる。昨年二月から一年余、日本海新聞に毎週一回宛文化欄に連載した、「たたら漫歩」の謝礼（図書券）も、わずかであるがこれに加えている。

一昨年の陰陽郷土史研究会の資料として、当誌を特集増刷した例にそって、今回はたたら勉強会の資料もかねて編集し、増刷させて頂いた。

しばらく、たたら関連のことが続いたが、ふたたび身の廻りをふりかえる記録の掲載に努力したいので、資料提供など御協力をお願いしたい。

韓半島→九州→西日本→東日本の道すぢにある出雲であり、延喜式に於ける鉄価の安さは、どうしてもそう考えざるを得ない。

なお風土記勘造すぐ前の持統天皇六年692に出雲国若倭部臣徳太利が父母のために作ったと銘文のある、観音菩薩立像のすぐれたものが、平田市の鰐淵寺にある。天武・持統朝の金銅仏では唯一の銘のあるもので、海の向う新羅の影響の下に出雲で製作されたものであることをつけ加えておく。

前記の遺跡発掘地はいずれも開発に伴うものであることから、山陰の開発の遅れがあるからだと手をこまねいていたり、近世以降に於けるたたら製鉄の中心地であったという意識が禍いしていなければ幸である（中世の製鉄は山陽が山陰より先進の時代にあったとは、ここ数年来私の頭を去来していたことであるが、研究者の方々の協力で資料を頂きそれを明らかにし得る段階に来ていて、いずれ報告したい）。だが前記の地方の研究者が、今までないとされていたことへの反発でもあるまいが、製鉄遺跡発掘への関心と努力には、廻って見学させて頂いて頭が下る思いがした。山陰は大陸と至近の地、海岸地帯に注目を。

会員頒布一部百五十円／六九一一八　島根県仁多郡横田町一〇六一二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0-601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

緑の豊かさと湧水の豊富さが生活の基盤

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 145 号
（5月号）
昭和 62. 5. 2
奥出雲編集集団

横田の生活—明治三十五年① 歴史の真実を 鳥上の民話① 資料 川柳・俳句・短歌

横田（旧横田村）の生活

明治三十五年（1）

戸数と人口（数字は人口、ゴジックは戸数）

職業別＼戸口	専業	兼農業	兼工業	兼商業	計
農業	**278** 男 824 女 834 計1,658		**61** 84 15 99	**22** 22 5 27	**361** 930 854 1,784
工業	**33** 80 70 150	**6** 10 9 19		**1** 3 0 3	**40** 93 79 172
商業	**58** 142 158 300	**4** 4 1 5	**5** 4 1 5		**67** 150 160 310
雑業	**107** 184 187 371		**9** 10 0 10	**7** 1 10 11	**123** 195 197 392
合計	㈠ **476** 1,230 1,249 2,479	㈡ **10** 14 10 24	㈥ **75** 98 16 114	㈢ **30** 26 15 41	**591** 1,368 1,290 2,658

雑業中医師2戸
僧侶3戸
神職3戸

専業農家数	**278**（1,658人）	
農業兼工商数	**83**（126人）	
工商兼農業数	**10**（29）	1戸平均
以上農業を営む	**371**（1,813）	4人49強

農業労働に従事する男20才～50才までを壮丁とみて、その労働功程を100とすると

	男	女
15～20	65	45.5
20～50	100	70
50～60	80	56
60～70	60	42

となり、上記の専業者及び農兼工商業者、工兼農業者の家族のうち農業を主とするものを、右の功程率によって換算すると、農業労働力は壮丁902人に相当する。

生活水準

村内591戸の生活水準を分類すると

上位44戸　中位185戸　下位362戸

であり、上位を除きたる食物は村内他の商業者に比べると概して粗食である。従って上位44戸の中には、大市・六日市に定住して商業を営む家10戸（行商者や零細小売商のぞく）余りが入ることになる。

田畑所有並びに作付反別と等級

村内外をとわずその所有する反別を別けると、上段の戸数で、自小作の別なく作付反別戸数は下段のようであり、（上中下は農家の階級分けである）

反別	所有	作付
25町～	3	1
10～7	2	3
7～5	3	1
5～3	9	14
3～2	18	48
2～1	82	94
1町～5反	80	115
5反～	241	208
計	438	484
	上	
	中	
	下	

右の上中下の数に商・工・雑業の上中下を加えたのが、前記の横田村591戸の上中下の数となる。

—この表のあとに備考として、「五反歩以下の所有者は五割五分を占む、是に由て是れは耕地所有の配当宜しきを得ざるを知るべし」と述べてある。この筆者の眼は、随所にこうした観察をして、遠慮ない記述をしている。当時としては、数少ない学歴を有する人物であったことを伺がわせる。それは基準（県農会による）があったとはいえ、統計の精緻であることによってそう断定もできる。

住宅事情

農家の上・中・下各等級別の平均坪数（上段）と評価価格（下段）は

	家	倉	納舎	他	合計
上	**71坪885** 368円30銭0	**12.76** 194.780	**17.73** 90.770	**7.30** 46.732	**108.64** 701.482
中	**56.05** 98.890	**8.75** 42.500	**6.98** 25.168	**1.77** 5.758	**68.55** 172.316
下	**17.88** 53.380	**6.58** 4.851	**2.84** 8.615	**0.73** 1.923	**22.01** 68.769

「現今村内の住民の住宅を明治初年の状態と対比せば、殆ど別天地の観あり。則、素と本村農民は過半堀建柱に藁茅葺の屋根にて、座上は藁莚敷なりしが、漸次世の奢侈華美の風襲来するとともに、堀建柱を改めて礎、土台を設け、莚敷は藺呉座、畳敷と変化し、屋内の造作を極め、遂にこわれると新築をし、土蔵納屋を増築し、土壁は白亜を粧ふ。又四、五年前よりは、畳の上に座布団をも用いるようになれり」とのべている。衣食住の

畳所有数の推移（%）	明治35年現在	明治初年
部屋に全部あるもの	4	1
部屋の一部に	87	64
全くないもの	9	35

の中では住居が最も変りがはげしいとも述べている。(私の子供のころ大正末年には、農家の中位の家に入っても、客座敷の中央には平常でも畳は積み重ねてあって、吉凶の折に敷つめるならわしであったことを憶えている)

食物

農民の常食を農家の等級によって示すと、

	下位	中位	上位
朝食	漬物 粥	漬物 粥 団子 (4銭)	漬物 米飯 (4銭)
昼食	全上	漬物 汁 交り飯 (5銭)	漬物 煮〆 汁 米飯 (6銭)
夕食	全上	酒一合 漬物 茶漬飯 (7銭)	酒一合 煮〆 汁 米飯 (8銭)
一日食費	9銭	16銭	18銭

「団子はしいなを粉として製したもので、この団子に里芋又は菜類を沢山混入し煮たるものなり。交り飯は大根又は菜類を細く刻み、米飯に交ぜたるものにて、稀れに麦を交るものあり。又下位は主として粥を食すれども時には米麦飯を食す。

先の上位を除きたる食物は、村内他の商業者に比すれば概して麁(粗)食なり。又常食に欠乏するものあり、主として小作人とす。その季節は大概麦秋の頃(新米に就く間際)にして、米或は籾を借り入れ、新米を以て返済する。利子は年弐割位なり。現今の食物も既住に比較する時は、著しく上進せり、回顧すれば明治初年の頃は上中下の別なく、常食は例の交り飯・団子・粥等なりしが、明治二十年頃より漸次奢侈に風靡し、中流以上は交り飯を厭ふのみならず、魚類を欲し、且休憩時には煎茶を飯むに至れり」と誌るす。

衣服の況状——農民の四季における同じ品物でも男女各位に差がある。

級	上 男	上 女
春	羽織 袷(あわせ) 肌子 帯 褌(ふんどし) シャツ 足袋	円 一〇・三〇
夏	単物(ひとえもの) シャツ 帯 褌	三・〇〇
秋	袷 肌子 シャツ 帯 褌	五・一〇
冬	羽織 袷 間着(あいだぎ) 肌子 帯 足袋 シャツ 褌	二・六五

級	中 男	中 女	下 男	下 女
春	肌子 帯 褌 袷 袖なし	肌子 帯 腰巻 足袋	袷 袖なし 肌子 帯 褌	袷 袖なし 肌子 前掛 帯 足袋 腰巻
夏	腰巻 汗除き 帯 褌	腰巻 汗除き 帯	単物 帯 褌	単物 帯 前掛 腰巻
秋	帯 前垂 腰巻 肌子 帯 褌 袖なし 袷	袖なし 肌子 帯 前垂 腰巻	袖なし 袷 帯 褌	袖なし 袷 肌子 帯 前掛 腰巻
冬	間着 肌子 帯 足袋 褌 袷 天絆 肌子 帯 足袋 シャツ	袖なし 袷 天絆 間着 肌子 帯 腰巻 足袋	袖なし 袷 肌子 シャツ 帯 足袋 褌	袖なし 袷 肌子 前掛 腰巻 足袋 帯 間衣

歴史の真実を求め人間の営みの正しい理解を

あをによし**寧楽**の都は咲く花の、にほふが如く今さかりなりけりと、唐の模倣に発した平安文化は、その全盛を謳歌されたが、一歩踏み込んでみると、上下貴賤をとわず、迫り来る病に、それぞれの思いは違っても、**戦々競々**たる様であった。**遣新羅使**が持ち帰った疫病が、九州からまたたく間に全国に蔓延していた。かてて東北各地に反乱が相つぎ政治的にも動揺した。

この世情をおさめるべく、新来の**仏教の公布**に力を注ぎ、東大寺を頂点に諸国に国分寺、尼寺の建立が発願された。

その中心となった**大仏鋳造**も幾多の苦難にぶちあたった。こうしたうちに九州**宇佐八幡神**が平城京に迎えられ、**手向山八幡宮**にまつられた。都が**平安京**に移ると、真言密教系の**僧行教**によって清和天皇擁立の祈願がこめられて成就したの機に、南山城男山に**石清水八幡宮**が創建された。紀氏出身の行教は、この山にあった紀氏系の寺を神宮寺とし護国寺と称し、**宮寺組織**をつくった。のち清和天皇の子孫から源頼義・頼光・義家らが出たため、**源氏の氏神**とされ、宇佐八幡と並ぶ大社になった。

この流れは**中世横田庄**の支柱でもあり、岩屋寺と横田八幡宮との宮寺組織は、中世末まで奥出雲とその周辺もの信仰を集め、各方面の主導権を握った。この間の究明なくしては、武士の動き庶民の生活も語れない。従ってこの時代のこの地の文化財を保持するだけでなく、その中から当時の生活、信仰や思想、生活を描き出さなくてはならない。中世横田庄をぬきにしては**横田も奥出雲も**語れない。

神話は物語りである。古代史・考古学・製鉄史の上からも明らかにされつつある。最近の研究によれば、「とりかみ」とは東の山の意であり、**とりかみの地九州説**が、極めて説得力がある。これについては別の機会に(すでに数回本誌で考究しているがその発展した説を)ゆずり次回は「八幡神」信仰の由来と変遷をさぐり、時代と大陸の影響そして日本人の信仰そして横田庄を考えたい。本誌の明治35年も真実を知る資料として掲載した。

流行と生活

村民間に流行に属す被服及物品の所有数

二重廻し・吾妻コート	124枚		
時　計（柱・懐中）	384コ		
目醒時計	28		
帽　子	193	女掛肩	
マント	1109	洋　傘	
靴	88	毛布（赤ケット）	
	1289	1496	240

「今日、村民の衣服は前掲の如くであるが、祭礼その他休業日等に着飾る物は、上中下の差別を弁えざるようになった。明治初年を回顧すれば、一般に身に絹布を着くる者なく、下駄は藁緒にして平素萱簑竹皮笠を用い、羽織を着用するもの稀れにして、絆天を着用するを上等としたが、明治二十年以降は、漸次毛織マント、洋傘、帽子、時計を用い、絹布衣は稀れなるも、絹織交織の衣類は殆と所持せざるものはなきに至る。

（横田村農会編明治35年横田村農事調査よりの抜粋。編集子）

鳥上の民話 ①

鶯になった継子兄妹

昔あったげな。あ—とこにお父さんとお母さんと子どもが二人とおったげな。お母さんが死んで継母あもらーた。

そげしたーあ、お父さんは商売人で、商人さんで、上方へ商人に行かっしゃー。あの「また、上…商人に行ってもどーげんな。あの、ええ子をすちょらにゃいけん。いいものー買ーてもどってやーけん、いい子すておれよ。太郎、おまえは…」あの、子どもが太郎とお花さんで、花子さんだ。そかぁー「太郎、おまえは何買てもどってやらーかいのー」「鉄砲と刀と買ーてもどって…」「花子は何買ーてもどってやらーかいのー」「リボンとかんざしと買ーてもどってごさっ…（消える）」「あ、ほんなーええ子しておれ。もー…買ーてもどってやーけん」いーて、お父さんは出て。

ほいから、何日もおいて留守だ…から、お母さんが、ふ…あの、湯わかいて、湯わかいて、そこへ芋ガラアいーて、芋のからがあーけん、それぇずーっと並べて「ここの上へあがれ！」いーて。「あがらん」いやー叱られーだけん、二人があがったら、その芋ガラがずき折れてすまーだけに、け、湯の煮えたところへ入れ…　落ちて死んですまーて、かぁ、お母さんが置き場がない。かあ、池のはたへ持って行って埋めちょいたげな。

かあ、「子どもはどこ行ったかえ」「いや、子どもはありゃー、あの『迎えに出る』いーて出たが」いーて。「いや、会わじゃったが」いーやなことで。

へーから、まあ、そげして寝て起きて、池のはたへ行って、顔、洗わかーと思ったら、雌竹が……　あの、雄竹がスーっとはえて、ウグイスが来て、どこから来たやらとまって「ホホーケキョ」いーて、ほから「お父さん、鉄砲も刀もいりましぇの。継母にかかってこのごとく。ホホーケキョ」いーて逃げー。ま

斐の上川柳四月抄

国会が開けぬまゝに策をねる　松浦久寿子
愚痴きいてあげて自分をふりかえる　松浦亜以
川ねこを供えてぬかづく春彼岸　古川松
まだやる気あるが足腰まゝならず　松浦木公
八十路生き亡き父母、妻の恩を謝す　若槻愛散人
老（ろう）いても我がこと出来る姑は幸　安部春恵
戻り寒堪えたつぼみもやがて春　渡辺好之
嫁がせて無理の笑顔に光る涙　真綿よし子
知るやしらず七癖持って世を渡る　若槻白馬
わだかまり一つ残して事進み　藤原千代子
伊勢参り念願果して大あくび　石原冬明
念ずれば花開くなり彼岸日和　田中有樹絵
減反の怒りを農夫無口にす　高木白虹
オリオンが冷たく光る夜の冷え　横山まこと
ひなかざり急がれる時が親の華　杜京子
日向側で太陽の愛もろに受け　安部正子
エイズ来て内勤だけにし先ず安心　松田牛歩
ぼんぼりは女を美人に化けさせる　佐佐木千世

資料　八雲銀行株主表

（明治38年後半期調査）

株数	株主名
107	岡崎喜一郎
101	絲原武太郎
68	荒木富太郎
50	安部慶太郎
40	糸原猪太郎
33	西村又右衛門
31	岩田半三郎
20	妹尾嘉右衛門
20	宮田吉五郎
20	妹尾正治
17	史陀秀明
13	堀江伊三郎
10	岩田栄十郎ほか21名
8	3名
5	11名
3	12名
1	29名
計	1400株　134名

—旧横田町内某家蔵—

—旧温泉村を含む（仁多郡10ケ村在住）

（注）株式会社　八雲銀行（横田町）
明治33年10月　創立
資本総額　7万円（大正7年）
支払総額　7万円（仝）
積立金　22950（仝）
大正5・11・1　松江銀行に合併、仝支店となる

（株所有者の中の数人は小売業者、他は地主）

株数	株主名
102	桜井三郎右衛門
72	木村吉郎
50	景山文之助
42	田村権次郎
33	岩田助市
30	松原猪蔵
23	中沢治兵衛
20	景山儀四郎
20	長瀬平三郎
20	妹尾柳太郎
16	山田政次郎
12	長瀬吉五郎
6	3名
4	1名
2	29名

前号訂正　2頁3段23行「にある。浜砂鉄」

俳句会四月句会抄

胡麻まぶし芽ぶき午勞の夕餉かな　加納信子
山笑う里に工場の来る噂　新出谷一華
苑荒れて矢鱈群れ咲く黄水仙　岡田蹊花
春の日に曝して払う本の埃　浅野としお
畑打つや藪に藤の実はじく韻　渡部夕峰
遠峰もこぶしの花も光りけり　楠房子
白い歯のこぼるる野球黄水仙　錦織富江
花冷えの日々臨月の娘を想う　峯石美代子
夢いだきひとみかがやく入学生　門脇花子
涌く水を菩薩と共に飲む巡礼　小川あきお
春雨に雫く古毛やつなぎ牛　高木白虹
散る花に裏も表も無かりけり　岡田麗水

白木蓮抄

簸の上短歌会

頭陀袋に小さき短歌のメモも収め竹の杖大事に札寺巡る　永井弥生
ダンボールに北海道産と書かれゐて種馬鈴薯は芽吹きてをりぬ　佐藤喜代子
校庭に桜の花の咲き競ふ朝を夫と投票終へぬ　野村節子
道行くに職なき我れにも訴えて売上税反対を叫ぶ人々　常盤はるまさ
廃屋のかたへに群れ咲く白木蓮の素早く車窓をよぎりゆきたり　松浦愛子
晩霜に朽色となりて白木蓮は蕾のままに庭を埋める　岡田時子
瀬の音の清しきあたり一枝の三椏の花のやまず揺れをり　小早川恵子
売上税反対デモの列過ぎし日暮れの街に寒き雨降る　安部夕波

た、雌竹がスーっと、そげすたらはえて、ほから、また、ウグイスがスーっときてとまって「ホーケキョ。お父さんルボン（リボンのなまり）もカンザスもいりましぇぬ。継母にかかってこのごとく。ホ、ホーケキョ」いーてとんで逃げてすまーたげで。

そーで、継母いーものはきょーとい（おそろしい）もんだと。ほで、継母にかかっちゃーいけんけん、いい行儀しちょらにゃいけんと、こっぽす。

だらずムコとガニの輝はずし

昔、あったげな。あーとこねだらずムコがおったげな。嫁さんが親元へムコ入り、あ、していく。ほーから、あの「行っても、行かっしゃら、あの、ごおっつぉおぶりにガニ（カニのこと）が出えけに、ガニを食うてもガニのふんどしをはずいて食わっしゃいよー」いーていう。「か（それから）、昼飯食ってすまーたら、小屋にコタツに火がしてあーけん、そこへ行きてネコみたいに、ちゃーんと、け、だまって寝ちょうだけんね」「ふん、わかった、わかった」いーていった。

そげすたら、ほんに嫁さんがいーたやにガヌがごっつぉーに出ちょったげで「ガニのふんどしーいをはずいて食え……くわっしゃい」いわえたやつう、ガニのふんどしーはずいて食わんこーに、じぶ…わがふんどしーはずいて、くるくるーっともって、膳の先いちゃんとやっちょいて、ガニのふんどしをはずさんこーに食べた。

ほから、まあ、食ってすまーてから、ちゃーんと小屋へ行ってまがって……「こたつの上へネコのやにすて寝ちょれ」いーただけんなーと思って、こたつの上へあがって丸くなって寝ちょった。

かあ、どこへ、まあ、行きただろうかと尋めえだどもおらんだげで、そいから、またぁ小屋へ行ってみたら、ちゃーんとこたつの上に丸んなって寝ちょった。

そーでだらずはつまらんげな。かしこい者にならにゃいけんと、こっぽし。

—伝承者　田和朝子
（明治40生・昭和47採）

てまりのうた

うちのうしろのチイやぶに
スズメが三羽とーまって
一羽のスズメがいうことにゃ
よんべ呼んだる花嫁ご
けさの座敷にすわらせて
たたみ三枚　ござ三枚
合わせて六枚ぴようぶを立てつめて
キンランドンスを縫いかけて
しっぽり　かっぽり　泣かしゃんす
何が不足で泣かしゃんす
何だり不足はござらぬが
わすの弟の千松が
西のコウラへかね掘りゆーきて
一年待ってもどらんが
二年待ってもまだもどらん
三年ぶりのつい(日)たつに
人をごせとの状が来た
人はやらぬがわすが行く
あとの田地はどうしゃるか
あとの田地はかねにすて
親に三貫　子に四貫
思うおばごにスヤスットントン
スヤスットントン
四十四貫の銭金は
高い米買うて舟に積む
低い米買うて舟に積む
さぁさ押しぇ押しぇ都まで
さぁさこげこげ都まで
都もどりにゃなにもろた
一にコウガイ　二に鏡
三に更沙の帯もろた
くけてごっさいおばごさま
そこでおばごが申さるにゃ
くきょうくきょうと思えども
帯にゃ短かし　タスキに長し
山田薬師の鐘のつり緒にちょうどよかろ
ちょうどよかろ

—伝承者　森山庫市
（明治29生・昭和43採）

話された通りに文字に、方言には（　）の中に意味を

当時民話研究家で鳥上中学教諭酒井董美氏採録のもの

一部　百五十円（六九二八）　島根県仁多郡横田町一六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0—601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

緑の豊かさと湧水の豊富さが生活の基盤

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 146 号
（ 6月号 ）
昭和 62. 6. 6
奥出雲編集集団

横田の生活――明治三十五年②
歴史の真実を②
神原古墳の銅鏡
短歌・川柳・俳句

横田（旧横田村）の生活
明治三十五年(1)

土地と耕作

前号の概観に続いて、少し数字の上での詳細を紹介する。

	村内の面積 Ⓐ総面積	村内の面積 Ⓑうち他村の所有者分	Ⓒ横田村の者が他村に所有する面積
	町 反 畝 歩		
田	334 4 6 18	26.8 4 12	29.1 0 05
畑	60 0 0 08	2.6 5 14	3.9 8 12
宅地	23 3 6 01.7	1.3 4 28.5	8 2 00.8
山林	2619.6 5 12.8	617.8 8 00.5	209.3 1 27.6
原野	14.8 4 20	5 0 05	3 0 07
雑池	5 1 09		
池沼	1 16		
計	3052.8 5 25.8	649.2 3 00	243.5 2 22.4
所有計	2647.1 5 18.2 (Ⓐ－Ⓑ＋Ⓒ)		

水田のⒷの面積は大字横田村の中河原地区に多く、Ⓒの面積は、当時の八川村大字下横田の川東・川西地区に集中していた。

山林のⒷの面積が極めて多いのは、鉄師が明治6年1,873の地租改正により、藩政時代から有していた鉄山（炭材林）・腰林を確保したことによる。旧横田村には有力鉄師がいなかった。

自小作別田畑

	戸		町	
自作	203		146.1409	→240.3700
自作兼小作	193	自作分	94.2221	
		小作分	105.6905	→174.4215
		計	199.9126	
小作	88		68.7310	
計	484			414.7915

自作地は小作地より多く、戸数も多い。自小作地は最も多いが、戸数は自作者につぐ。一戸当り平均では

	反 畝 歩 厘
自作兼小作者	九・一・二九・七
自作者	七・一・二九・七
平均	八・五・二〇・余
小作者	七・八・〇三・余

である。

田畑の等級等

	上	中	下	計
田	町 72.8803	124.3702	137.2113	334.4618
畑	8.8510	22.7526	28.3972	60.0008
	平担地	緩傾斜地	急傾斜地	計
田	168.9518	134.4603	31.0427	334.4618
畑	14.9818	34.3400	10.6720	60.0008
	50％	40％	10％	
区画	大(1反以上)	中(5畝以上)	小(5畝以下)	
田	8％	36	56	
畑	10	35	55	

横田は郡内の他9村（温泉村を含む）に比べて、田畑の平担地は最も多いが、等級で下田が多いのは、斐伊川本流筋の特に南側が度々の洪水によるものであった。区画大きさは、自然の地形利用による開拓や水利によるものであった必然性である。

乾湿の状態と裏作は次の通りである。

		乾田	高畦田	普通田	鉄気田 深田	計
田		町 217.3704	52.8023	45.8807	18.4014	334.4618
裏作	大麦	6.6001	2.4112			
裏作	蕓台	1.1900	8326			
耕作法		人耕	牛耕のみ			
田		18.4014	316.0604			334.4618
畑		60.0008	0			

家畜	牡牛	牝牛	牡馬	牝馬	雄鶏	雌鶏
	219	117	14	183	143	280

耕作は馬を使用せず、牛のみを用いるとしている。下段の家畜頭数中の牛336頭に対す馬197頭は、後述する如く、たたら製鉄業を主とする荷運搬用として、養われていたものである。江戸時代にはこの馬の頭数は圧倒的に多く、牛の頭数は少なかった。

この地方のたたら製鉄業と関連が深かった。明治に入ってから、製鉄業界の先行きを見こして牛への転換を計るとともに、馬の改良へと進めた途上の数字である。（このことは奥出雲58〜60号でふれているが、畜産に関しては、改めて詳述したい）

金融等の経済

村内の建築物の数は

家屋	563	土蔵	226
納屋	397	社殿	10
寺院	7	計	1,203

である。

村内の民産等級別は（ ）％

	上	中	下
農戸数	39 (9)	121 (29)	260 (62)
工商雑戸数	5 (3)	64 (37)	101 (60)
計	44 (7)	185 (31)	362 (62)
総計	591		

次に村民の負債についての統計がある。前号でのべたように極めて質素な生活であるのにという疑問も感ずるが、それは殖産興業の波に乗った地主層の活動に理由がある。詳細は国内、県内の流れから、あらためて資料によって述べたいが、本号では数字のみに留めておく。

（借入先）	（金額）	（利子）
八雲銀行（本店横田）	二,四六二・七〇二円	三七五・三九五円

（日歩百円につき 4.5 4.2 4.05 の三種）

（前号で書き落したこと
同行の一株は12円50銭
村内の所有者の株数391株）

農工銀行（明治31年農工業改良育成への金融の目的により、各府県に設立した特殊銀行。大正末期に日本勧業銀行に漸次合併、現在の第一勧銀の前身）

	五、四四〇・〇〇〇円	五一七・八〇円（一カ年9分5厘）
信用借金	三、四三三・〇〇〇円	二、五五五・八四〇（一カ年1分）
抵当貸借金	六、〇二九・五一〇円	
内 村内個人より	五、〇三九・九五三	五〇三・九五三
内 他村個人より	九九〇・〇〇〇	九九・〇〇〇
他村への個人貸出金	二、一三三・六〇〇	三三・六〇〇

「村内金融の最も宜しきは、秋期米収穫時と春蚕上簇後とで、その他は概して悪く、本年は八雲銀行開店して至大の便が与えられた」としるされてある。

農民負債の原因は山林開墾、造林、或は農事の改良等の費用が重なるのが原因であるが、近年諸祝負担の益々多きを加えた上に、驕奢の風習次第に高まったのも一因である。

借金は八雲銀行開店当時であるため、多くの借入先は、村内又は村外の財産家からで、米或は金の融通講（志儀）を組立て借入した。貸借方法は多くは信用無抵当貸借が多く、抵当権を設定するのは極めて稀れであった。返済期限は、六カ月、一カ年で、長きは三カ年があった。利子は一カ年一割二歩～一割五歩、米では年利二割であった。

農工銀行より借入資本による企画事業については次のように誌してある。明治31年より35年末までに借入口数は13口で、その事業は概ね良好であったとしている。いずれも据置一年後から年賦償還による。

年	月	借人人員	借入事業目的	借入金	償還年限	年利率
31・12	1	3	開墾	五〇〇円	5	9歩
32・3	8	1	造林	一、六〇〇	15	8.7
	5	1	開墾	二五〇	5	8.9
33・7		2	〃	三一〇	5	8.9
34・3		1	〃	四五〇	5	8.9
	4	1	鋳物工業	一、三五〇	15	9
	4	2	開墾	一〇〇〇	10	8.9
35・		12	桐栽培	八五〇	12	9
計		13		六、一七〇		

諸税負担額の増加

年々増加し、34年からは急増しはじめ滞納者もふえた。物価騰貴も加わったからでもある。

	国税	県税	村税	区費	村税滞納者	計
26	3,287.033円	1,534.012円	2,689.808円	70.000円	0人	7,760.853円
27	3,335.961	1,778.661	2,497.757	70.000	7	7,682.379
28	3,381.245	1,842.177	2,175.099	70.000	0	7,468.521
29	3,236.501	2,266.199	2,745.511	70.000	8	8,318.211
30	3,350.883	1,740.643	3,673.102	70.000	9	8,834.628
31	3,384.804	1,989.403	3,740.012	70.000	12	9,184.219
32	3,943.793	2,663.880	4,705.478	70.000	9	11,383.151
33	3,700.326	3,510.903	4,267.822	70.000	7	11,549.051
34	4,437.424	3,831,030	5,753.696	80.000	13	14,102.150
35	4,262.570	3,765.590	5,886.784	80.000	7	14,004.944

（次回は教育・衛生について）

歴史の真実を求め、人間の営みの正しい理解を②

八幡信仰の推移の時代相—日本の神道（横田八幡宮と岩屋寺の歴史を考察する背景として）

宇佐八幡は平城京に進出して中央で注目されたが、その発祥は古い。古代の豊前国（大分県）の海岸には、海氏（あま）・宇佐氏の豪族が割拠していた。これらが祀っていたそれぞれの祖神は、ともに農業信仰の基盤に立っていたので、やがて統合されて豊前国の南半に宇佐神の信仰を形成していたという。この神社の主要行事の儀式はその農業神信仰に基づくものであった。

他方4～5世紀、豊前国の北部に新羅系の女性シャーマン（未開宗教で、人と神霊界の交流は専らシャーマン＝呪術（じゅじゅつ）をもつ呪師によって可能であるとする）を中心とする辛島（からしま）氏という祭祀集団が進出してきて、銅山採掘を行い、経済力をもち政治上にも支配力を強め、先住民の宇佐神信仰圏へも入って来た。その辛島氏の信仰神は神羅の神で亀卜鍛冶のシャーマンを神格化したものといわれ、これと宇佐信仰との南北両神の信仰が統合して八幡信仰が発生したといわれる。そして在来の豊前の土俗的信仰と、新羅や百済の仏教的陰陽道的色彩を帯びた土俗信仰が習合（相異る教理が折衷・調和する）したため、日本国有の神とは異った仏教臭の強い独得の宗教が形成された。

6世紀後半、半島に於ける日本の勢力の衰退は、北九州の政治的宗教的強化を必要として来たので、大和国三輪山のシャーマンを宇佐の神官として、そして、有力君主とみられていた応神天皇の神霊を持って乗りこませ、八幡神を皇室関係のものへと転換させたという。こういう変遷は、のちのちまで世相に応じてこれらの要素のどれかが浮び上って神力としてあらわれていったのである。こういう性格から八幡宮の周辺には、数カ寺の神宮寺が6世紀末から7世紀にかけて続々と建立された。それらは南鮮の土俗信仰と習合した呪術性の強いものであったといわれる。

神社の本宮には神殿の中に、中国の道教・陰陽道の影響をうけた仏教の色彩が濃く流れて、今日に至っているという。神職は僧形をなし、巫尼・巫僧が弥宜をつとめることにもあらわれているし、かれらはその卜占とともに加持祈祷の呪術や湯薬を用いて治療もしたが、こうした個人の行動、治療の指針ばかりでなく、大仏造営・皇位継承などの国家の大事についてもかかわりをもった。前号にのべたように平城京へ進出した。のち宇佐氏は道鏡の野心に迎合して、社勢を振興するため、769年道鏡の即位の神託を上奏するに至っ

た。道鏡もこの運勢判断や加持祈祷に堪能であって、宮中奥深く入るようにもなったのであったから、双方の暗黙のしめしあわせがあったともいう。反発する藤原氏らの貴族は、和気清麻呂を派遣して、虚偽を暴露した。

煩悩の神の身分を去って早く仏道に入りたいものであるという神。仏からみると神は人間と同じい煩悩に苦しむ衆生とみられ、読経・法会によって神の地位を高め仏に近づくとされる時代となっていた。神宮寺は宮の鎮守となって仏法をまもり、妨げるものを退けるとされ、次第に力をもった。

そして神に菩薩（成道以前の釈迦、仏陀となることを理想として修業するもの）号を献じることになった。普通、**八幡大菩薩**と呼ぶ。人間を救うように八幡神は解脱して菩薩に上昇したのである。

859年、前号のように南山城の国に、石清水八幡宮が創立され、京の都の鎮護ともされた。仏が本地（真実・もと）で、神は垂迹（仏・菩薩が衆生済度のため仮の姿をとってあらわれたもの）という。本地垂迹説があらわれはじめた。これは他の神々でも称えられはじめられた。その後いろいろの神道もあらわれたが、明治維新までこの神仏習合的信仰は根強く続いた。

この地の横田八幡宮の遷宮はもとより、例祭にも必ず岩屋寺が同席している（こゝではさらにこの上座を大催杠氏が占めているが別の機会に本誌でふれた。）また近郷の神社の遷宮には必ず岩屋寺が上座を占めていたことは、こうした背景があったからである。

幕末に国学の復興と復古精神の興隆、そして明治維新が神道を優位したことによって、排仏棄釈の運動も手伝って、神仏習合思想は地を払い、さらに山伏らの修験道への圧迫によって全く分離することになった。

（余白に――アメリカのトーマス・エジソンは、1878年から炭素フィラメントによる白熱電球をつくる研究を進めたが、竹が当時では最も適しているというので、世界中の竹の産地に人を送って集めたが、京都石清水のものが最上であって、翌1879年37才の時に成功し、以来10年間これを使用したという）

探究の基盤

奥出雲とくにその奥の仁多郡を中心として、「出雲国風土記」を原点にして、出雲神話・中世史、たたら製鉄、近世・近代の諸史を断片的に掲載して今日至っているが、ここらあたりでそれぞれをまとめる生活年令が来ていると思うけれど、力不足はそれを容易になし得ないようである。書斉はもとより、家の者の顰蹙を買いながら、各々の資料が至るところに積み上げられている。道遠しの感がする。一読書人の欲ばりが過ぎたのかも知れないが、わが郷土は余りにも資料が豊富である。ところがそれも売られたり、取り壊されたりする貴重なものが、かなりあるが、そのことまでは動き出してどうこうする余裕が生れないので、歯軋りしているだけである。

さて地域史の記述にあたっては独断によらぬよう精一ぱいの資料はもとより歴史の見方についても渉猟にこれつとめ、研究者の謦咳にも接し、助言もうける努力をしている。幸にも東アジアの古代文化を考える大阪の会での森浩一氏（同志社大学教授）の発表の中で、失礼ではあるが、私が模索している探究の方向を明瞭にいわれているのでそれを要約して、いましめとし指針とするためしるしたい。

昭和40年代から登場して来た、戦前の中央史観の絆を脱した第二次興隆期（特に古代史）の史観がある。それ以前の史観は大和朝廷4世紀成立論を中心とするもので、それには二つの柱があり、一つは三角縁神獣鏡（大原の神原古墳出土と同類）こそは、大和にいた邪馬台国の王卑弥呼が、古代中国の魏王からもらった銅鏡であり、服属した各地の族長にその中国王朝直伝の鏡を下賜したのであると解釈し、邪馬台国が大和朝廷へと発展し、好太王碑の「倭」となり、朝鮮出兵の主体を大和朝廷と見て、その成立は4世紀であるとする（小林行雄説）。もう一つの柱は「日本国家の起源」（井上光貞、岩波新書）にまとめられたもので、さきの銅鏡分有論に多くの疑問を投げてはいるが、4世紀大和朝廷成立論を結論としたもので、そこから前方後円墳は大和朝廷の権力のシンボルであること、大和の石上神宮の七

辛夷唱　簸の上短歌会

草を焼く煙は畦を這ひゆきて入日の山にこぶしのさかり　永井弥生

ようやくに巣作りしならむ開パイに削られし山に鶯鳴けり　戸屋暎子

電気料数へ差し出す若き主婦は夕餉のにおひまとひいで来る　松浦愛子

軒下に冬を過せし老犬の眼細むる春光の中　野村節子

窓枠の隅にひそみゐし亀虫の春の日差しに動きすばやし　常盤はるまさ

良質の腫瘍と医師は告げしとふも友の笑顔のさびしきものを　景山悦子

病みながら七月といふ何気なく抱きあげし児のあまりに軽く　小早川恵子

しみらにもわれにかかわる老夫の句にこころあらたに添ひとげゆかむ　岡田時子

山畑に草取りをるに柿の葉は人かと思ふ音たてて落つ　佐藤喜代子

訂正（前号）2頁1段2行の私を編集者とする・全4段4行は寧楽

斐の上川柳五月抄

愛秘めて燃える女の心電図　松田牛歩
すこやかに育てと五月に鯉のぼり　古川松
女党主後に続けと意気高し　松浦久寿子
ロマンスは日記の中からなつかしく　渡辺好之
伊勢参り日本やっぱり神の国　松浦木公
重症に握手求めて友おくる　若槻愛散人
引出す時渋い顔する銀行屋　児玉哲
鍬杖のあい間に畑少し打ち　松浦亜以
日曜日雨に降られてしょげる顔　安部春恵
花びらを酒杯に浮べ一句ねり　田中有樹絵
浪花節泣かせ笑わせ人の情　若槻白馬
所在なさ向きを変えては肱枕　高木白虹
連休が終ればつかれだけ残り　横山まこと
テレビから大人見ている聞いている　杠京子
お玉杓子子等にすくわれ別れ行く　真綿よし子

俳句会五月句会抄

眼鏡ごし接ぎ木名人口きかず　浅野としお
桜散り孫去にもとの夫婦かな　岡田蹊花
遮断機をくぐりて初蝶飛び去りぬ　岡田麗水
耳遠き父との会話牡丹咲く　小川あきお
カラフルに燃尽く彩の島牡丹　門脇花子
鯉のぼり自慢の孫の片笑くぼ　楠房子
かすむ過去単衣かすりの紺の褪せ　高木白虹
つまずいて腰の痛みや若葉坂　錦織富江
土堤焼いて炎裏の人のゆらめけり　新出谷一華
筍の皮はぐ夫の駄す顔　峯石美代子
職を辞し野良にも慣れて四月尽　渡部夕峰

支刀、九州熊本の江田船山古墳の鉄刀銘文も解釈されていた。

それが高松塚古墳、稲荷山鉄剣銘文などの大発見や新資料の出現で、新らしい研究世代の登場、外国人の参入もあって、前述の大和朝廷4世紀成立論の物的証拠のひとつひとつに、疑問点が強くつきつけられ、記紀批判も湧然と起った。これらの理論的背景にはやはり二つの柱があるが、それは在来では乏しかった歴史研究部分である。

一つは日本列島の歴史を東アジア地域全体から見直そうとする「東アジア史観」であり、二つめは日本列島の古代史像を、大和朝廷一元論から説くのではなく、各地域のそれぞれに独自の政治文化的主体性を認めようとする「地域史観」である。

私は今まで渉猟した結果、この方向をなんとなく歩んでいたようである。本誌にはその出典を一々あげると読みづらくなるので、時々まとめてと思い表を作成しているが、一般の方には紙面の無駄と感ぜられるので、そのままで今日に至っている。

この新らしい史観に立つと、在来の考え方を再検討せねばならぬことが、いくらでも出てくる。大和朝廷を東アジア騎馬民族の渡来とする説をとり入れると、大和朝廷こそ渡来人であり、その先進性が日本の古代文化を高めたことになる。河内・大和の大王陵より大きい古墳が吉備にあることの解釈、皇統譜の古代前期それ以前の大王陵が、極めて新らしい幕末時代以降に認定されたものであること（手近には歴史読本の臨時増刊の近刊号に）。東アジア史観からする記紀（古事記・日本書紀）の分析研究の進展による多くのものである。

出雲の神庭荒神谷の358本の銅剣の発見、能登半島の真脇遺跡の巨大な柱穴発見による縄文時代の固定イメージの一変、日本海沿岸一帯における潟文化の重要性認識は、古代史像も地域史観に立たねばならぬことになってきた。

さらに358本の銅剣のシンポジウムで、銅剣などは果して祭器であるとのみの解釈で正しいのか（松本清張）、銅の剣や矛や才の分類名称は妥当なのか（古田武彦）等が、東アジアの古代史観をふまえた中から意見がでている。

この二つの史観から、さきの三角縁神獣鏡は大部分が日本製であるという説も出ている。森氏は25年前からそう言いつづけ、古田・松本両氏らも言い出して、数が増加して来ている。さらに6年前、中国の王仲殊氏は、真向から日本製であると発表し、その後四つの論文で補強している。日本の論者が殆んど個人研究の説であるのに対し、王説は中国の社会科学院考古研究所のスタッフ数十人の頭脳の結集した結論である。この重みは昨年10月以来急速に反響を呼んでいる。

しかし考古学は発掘にもとづく学問であって、常に新らしい資料によって明らかにそして深められていくものである。この流れの中で訂正も行われるが、視野は広くなり、次第に深まって来た事実は後退もないし、大巾な変更はないであろう。

中世横田庄も資料の発見が加わっている。「たたら」研究も修正される点があらわれている。

さらにその実験の重視が要求され、科学的分析検討は時代の趨勢である。考古学もこの方面でさらに前進し、形体学的立場を脱しなければならない。

会員頒布一部百五十円／六九一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0-601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

緑の豊かさと湧水の豊富さが生活の基盤

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 147 号
7月号
昭和 62. 7. 4
奥出雲編集集団

新らしい視角で
単身赴任
—古代の木簡から—

木簡

6月25日の各新聞は、年号入りの木簡発見という見出しで、大きく記事をのせていた。聖武帝（724～749）は平城京（奈良）のほか、難波（大阪）、恭仁（京都府加茂川）としばしば都を移した。天平14年742には離宮として、紫香楽宮（しがらきのみや）を造営したが、事実上の宮都となったといわれるところから出たと考えられる木簡で、年号や皇族名が列記してある。今まで発見された木簡の多くと比べて、内容からみても使用目的が、今のところまだ明らかにできないという。

木簡とは、長方形の木片に文字が墨書されたものをいうのであるが、多く発見されるようになったのは昭和36年1,961からで、今までに全国で3万点位に及んでいて、中央は勿論、地方の役所や行政についてある程度の史料が得られている。郡内では墨書土器（土器に墨で一字の文字を書いた程のもの）が若干出土しているが、木簡はない。

木簡は役人が筆写の手習いをしたものから、役所からの呼び出し状、役人の生活、勤務評定、地方から宮廷へ貢進された品物の荷札、往来に立てられた告知札、役所の名前、仕事に関するものなどである。

ここでは近ごろ、現代の話題でもある評題のものを紹介する。

このことは先の宮都の度々の移転の理由に、今まで全く考えられなかったことも加わることになるという貴重なことである。

（東野治之著・木簡が語る日本の古代、その他から）

召文

奈良時代の役人で奈良の都に邸を構えるのは高級官僚であって、下級官僚は離れたところに住んでいた。それを呼び出すのが、木簡の召文である。その中の役人の居住地を調べると、都からかなり離れた今日の奈良県内の隣県近くである。その上「食馬を充つ」とあって、食料と交通手段としての馬の支給をしている。この召文木簡から、役人が意外に遠隔の地に生活の本拠をもっており、奈良に都ができた当初だけではないというところに見逃してはならない点があるという。

長上官と番上官

中央の官職だけでも1万人がいたという。役人には常勤で六日毎に一日休みをもらう「長上官」と、交替勤務制で休暇の不定期な「番上官」があった。（時によってこの職名が変ってゆく）この役人は勤務日数が140日を割ると、昇進に差支えるが、非番の時には家業に従ってよかった。役人の中では最下層の初位の位や（出雲国風土記、仁多郡の郡司主張品治部も）、位のないものがこれに属していた。

これらは単身赴任でもやってゆけた。こうした者が家にいる時に出したのが召文である。

本籍地

都に本拠を移していない役人の数は、本簡研究者が大量に発見された勤務評定木簡で調査したのによると、全体の51％が平城京周辺の五か国に本籍地をもつものであり、あとのものでも都の中にいるものは極めて少なく、下級役人では15％と推定できるという。

仮住まい

このことは、役人の個人の生活の問題のみでなく、大きい問題につながる。6世紀以前は天皇の住居だけは転々と変っていた。7世紀以降は天皇の住居のまわりに、ある程度の儀式の場所や役所的なものが付設されるようになったが、それでも平安（京都）遷都794までは都は度々変って、中国風の都である藤原京や平城京でも16～40年と短く、その次の長岡京は11年と短かった。

これだけ頻繁に遷都ができたのは、政治の中心として造られた都であったからではあるが、——経済の発達により自然に成立した都でない——首都に必要なすべての貴族・役人を住まわせたという都ではない。少なくとも政府の実務に当る下級役人の大多数は、都を仮住まいにしかしていなかった。都をとりまく周辺の数カ国に生活の本拠が分散していた。従って都が、大和・難波・山城の各地を移動している限り、役人たちは不都合を感じなかったのである。

これが宮都がめまぐるしく変ることができた、大きな原因である。

在来は壮麗な宮都、ケガレ（葬場）の問題の面からのみ、遷都を考えていた。また中国を例とするもの、道教思想のもたらすものという考えもあった。それらを認めたとしても、都形成の基盤における多数の役人の生活基盤に少しも変化がなくてやれたということは、木簡の大量発見と、その研究がもたらした結果から考えられたことである。

また貴族たちは、都に宅地を与えられてはいるが、やはり都の周辺に、後世の荘園とは異るが、土地をもって、必要物資の

単身赴任　明治三十五年(3)　資料「八雲銀行」　鳥上の民話(2)　俳句・短歌・川柳

供給をうける生活基盤があった。

平安京時代から

京都に都が還されると、著しい変化があらわれる。下級役人が都の中に本籍地を移し出しだした。それは人為的な政治の中心であるより、ようやく発達してきた流通経済の中心になって来た結果である。

奈良時代までの日本では、貨幣やまたは物品貨幣で、必要な物資がすべて入手できるほど、経済は発達していなかった。役人も地方から租税として（木簡にみえる）貢納される現物を分け与えられていた。一方役人は人に頼んで作らせるか（貴族・高級役人）、自らも作ら（下級役人）ねば、即ち生産に関与しなければやってゆけなかった。このことは当地方の生産物の租税貢納や、生活経済と関係が深かったことも見落せない。

8世紀になると（風土記時代）、現物租税が粗悪化し滞納されがちになる一方、流通経済が発達し商品の数も多くなると、役人の現物給与の支給をうける基盤も危くなって来る。逆にこの経済流通を利用し、都に本拠をもつものに、有利な条件が生れてきた。平安京が固定して来る原因もここにあったのである。木簡や延喜式によると、すでに奈良時代から（710～793）、蘇（牛乳よりつくった濃縮乳—バターやコンデンスミルク程度のもの）が、各国から順番に貢納されていることが明らかである。

そして延長5年925、出雲から11壷が貢納されている。尚延暦3年784には出雲・石見の産牛がわが国でも重視されている事実がある。

これらについては、次号か9月号で、第5回全国和牛能力共進会の宍道町開催にあわせて、「島根の畜産史と仁多郡の果した中心的役割」という古代から現代までの足跡をたどってみたい。その折に詳しく述べる。

お願い

尚二段組みで、「こども奥出雲の歴史」の連載を考えている。

この間も電話を頂いたが、各地区にある、五輪の塔、句碑、顕彰碑、三界萬霊塔などの写真とともに、それに刻してある年号、氏名などの文字、まつわる言い伝えなどお寄せ下さい。頂いたものから掲載致します。

横田（旧横田村）の生活

明治三十五年（3）

教育程度

小学校（四年制）のほかに、高等小学校が設けられたのは明治28年からで、漸次入学者数を増し、この年は尋常小学校卒業者中

男子——全員　女子—半数位

が入学し、高等科第二学年を終了するときは、年令が家業に従うに適するに至るため、男女とも退学するものはその半数以上であった。残余が高等科四年を卒業した。それは小学校入学者中

男子—約半数、女子—2割位

であった。

高等小学校四年卒業生や全校中途退学者は概して家にあって家業を補助し、まれに資産のある家庭の子弟は進学するが、農林学校・師範学校・中学校・女子高等小学校等に入学するものは一カ年に3～4名にすぎない。

実業教育施設　明治28年度よりこの方面では裁縫専修科を小学校の一部を仮用してあてていたが、31年度より尋常小学校に補習科を設置して裁縫を教授することとなって専修科は廃止した。

現在、実業学校及び中等程度以上の学校在学生、諸学校別人数は次のようである。

医学校　1（石原）
師範学校　2（赤水・茅原）
中学校　1（丸山）
私立中学校4（三沢・加納　渡部・金森）
農林学校　1（松崎）
実業学校　1
女子高等小学校　2
計　12人（男10人　女2人）

その後の進学状況については本誌50号を参照のこと、特に横田村に於て急速に上級学校への進学者数が増加することについては、その実態と原因については本誌75・77・109・140号を参照されるとよい。

参考に年度別の学令児童数と就学率をみると下の如くである。

年度	学令児童数 男	学令児童数 女	就学児童数 男	就学児童数 女	就学率 男	就学率 女
26	175	163	113	107	98.71	69.32
27	172	170	128	111	88.37	72.35
28	167	160	105	90	89.82	72.50
29	207	192	129	100	89.13	82.81
30	198	184	126	117	95.65	89.78
31	188	186	136	131	96.46	96.81
32	207	169	138	129	97.54	93.01
33	212	168	138	114	97.64	92.06
34	232	198	146	102	99.28	93.38
35	198	174	135	110	99.49	94.25

死亡を比較すると死亡の多い年がある（年号ゴチック）。従って人口の自然増は極めてゆるやかで10年間に50人の増加である。

衛生

出生（生産と書いてある）と

	生産人員数（出生） 男	女	計	死亡人員数 男	女	計
26	32	18	50	37	31	68
27	36	29	65	25	20	45
28	36	25	61	43	32	75
29	37	30	67	29	24	53
30	43	25	68	24	19	43
31	27	22	49	34	20	54
32	31	32	63	32	20	52
33	28	33	61	36	26	62
34	22	27	50	21	24	45
35	28	38	66	26	27	53
計	321	279	600	307	243	550

別の統計によれば、乳幼児を含めた若年者の死亡が多く（今日と比較にならないほど多い）、その中でも男子が多い。10年間に自然増50名のうちの男14、女36がそれをしめしている。

衛生の重点はどこに

横田村には常設の隔離病舎が建設されていて、伝染病者の収容にあてていた。村を各部落別12組に分けて衛生組合を設け、世話係を置き、若干の手当（一年間 10銭～1円）を給して、規約による励行をはかっていた。

○夏季の食物の腐敗防止、生もの食や消化し難きものの禁止、魚介類でも煮たものといえども食ふべからず。 ○蠅の駆除、戸棚押入れの清潔、蚊の就寝上の注意、夜ふかしの禁止。

○井戸水使用上の注意、溝・下水・厠の清潔に至るまで定めてあって、違反者には組合長戒告という罰則もある。

敗戦後の数年間を思わせるような状況が日常的であったことを知ることができる。

他方、細則によって、祭礼・盆・正月における過度の供応を、衛生上からいましめるとともに、奢移に流れることもいましめている。

衛生組合は当時、外国から流入したコレラ等の新らしい伝染病に対する対策として、法により強制的に設けられたものである。今日では全く日本人では周知となっている常識程度のことが、指導の重点となっているようである。戦時中は明治30年より50年経っているが、あまりの差がないように思われるが、戦後40年、衛生思想だけでなく、環境の改善は全くすべての点が雲泥の差で進歩していることがわかる。

資料 **八雲銀行** （追補）

明治37年1月現在の業務状況

——明治33年10月28日創立以来、信用の基礎鞏固となり、三成と大東に支店を設置して業務の拡張を計り、開業以来5年にして行運隆盛となり、明治36年上半期の決算表に於て県内20有余の銀行を凌駕して、その成長成績は本県内業者中第1位を占め、預金額8万有余円、貸付金7万余円となった。殊に明治36年12月1日以来、大東支店が雲南三郡に於ける国庫事務取扱を開始するに至ったのは、信用を博したる証拠である。その後間もなく木次にも支店を設けた。

創立当時の頭取は絲原武太郎、取締役は桜井三郎右衛門・岡崎健蔵・岩田助市・荒木定太郎・田村権次郎・岩田栄太郎、監査役は卜蔵甚兵ヱ・中沢治兵ヱ・糸原猪太郎・長瀬平三郎であった。

松江銀行への合併前から解散時の役員は、頭取絲原武太郎、常務取締役岡崎喜一郎・田村権次郎らであった。

県内20有余行とは

松江銀行、山陰貯蓄銀行、安濃銀行、粕渕銀行、矢上銀行、平田銀行、八東銀行、浜田銀行、●益田貯蓄銀行、浜田商業銀行、●大原銀行、●静間商業銀行、●雲州今市銀行、●今市商業銀行、●杵築銀行、●雲州西浜銀行、安来銀行、●広瀬銀行、簸川銀行、●古志銀行 ●湖西銀行、●出雲商業銀行

計22行（●は八雲銀行より小規模のもの、その後数行設立）

—旧横田村内の方よりの資料提供と、山陰合同銀行史より記述

なぞときむこ

とんとん昔があったげな。昔、播摩の国に糸長長者いうだんなさんのお宅があったげな。そこはタタラだったそうな。で、山の奥みたいにタタラだったそうで、そこに山子が三人、毎日、炭焼いて持ってく—と、一人の山子がい—ことにゃー「まーほんに、ここのだんなさんはお金たーくさんに持っちょらっしゃー、ほんに、お金、膳に一杯ほどもらやー、こげに世話焼かんでもいいげになー」いいたげなら、かぁ、一人の山子は「ほーんにだんなさん毎日毎日ごっつぉお食わっしゃあ、あげなごっつぉお一度食やぁええだに」いって「そげさー死んでもいいだにのう」いーていーたげなら、ふとりの山子がいいことにゃ「あー、こーにはいーい嬢さんを持っちょらっしゃーが、あれは嫁にもらやー、ええにな—思う」いーて、

三人、毎日その話して、か、だんなさんがその話聞いて、手代に「こな山子らちゃ、何いーか、毎日毎日ごどごどごどごど話して通ーが」いーたら「いんや、ふとーの山子は『だんなさん銭いっぱい持っちょらっしゃーけに、膳に一杯もらやーいい

俳句会六月句会抄

夏蔭やいつもの場所の無縁仏　浅野 としお
乱帙の埃り奪いて青嵐　岡田 蹊花
病床に坐して着更へる初袷　岡田 麗水
筆動く陶工の背や梅雨曇り　小川 あきお
清浄に生きたし老を衣更　門脇 花子
うどなます箸にからめて峡の宿　加納 信子
夕日染む楓の青葉や鰐渕寺　楠 房子
銀の粒散らす五月雨常夜燈　高木 白虹
若葉冷え一枚入れて旅に立つ　新出谷 一華
嶺の寺山門くらき青葉坂　錦織 富江
木洩れ陽をいだき人恋うしゃがの花　峯石 美代子
ででむしの歌口ずさむ散歩道　渡部 夕峰

予告 近く「出雲の地名とアイヌ語」という珍らしい寄稿を出雲出身の方から頂くことになっています、御期待下さい。

前号訂正　1頁　明治三十五年(2)・

みつまたの花それから

簸の上短歌会

落葉を縫ひ雪解の水のなだりゆく谷にひそけきみつまたの花　永井弥生

一年を小屋に眠りし田植機に〃出番来たよ〃と息子は油注ぐ　佐藤喜代子

節分の蕎麦の薬味にとゆく納屋に箱の白葱青葉の匂う　岡田時子

うろこ雲うす茜色に染まりつつニセアカシアの梢は暮るる　小早川恵子

機械植えの早苗活着したらむか田の面いちめん肥料花咲く　戸屋暎子

黄みどりに木々芽吹く山を訪ねきて双手ひろげて息深く吸ふ　松浦愛子

小石もて戦ひせしと岩肌に刻まれし句に涙止むなし　景山悦子

子育てにひたすらなりし日は遙か今日初めての年金を受く　野村節子

はるかなる安達太良山に向ひ建つ智恵子抄詩碑は夕映えの中（東北路二本松にて）　安部夕波

斐の上川柳六月抄

不足でもその手離すな紅一点　渡辺好之

長生きはしたし気になる高齢化　松浦木公

片身分け母の姿が散ってゆく　松田牛歩

ニューリーダー思惑秘めて言葉選ぶ　若槻愛散人

何年もはいと受けてた妻も老い　松浦久寿子

今宵また旅愁薄める濃い酒で　高木白虹

農繁期終りを待って旅話し　安部春恵

不足者同志かばい合って三十年　佐佐木千世

食欲は無くても何か直ぐねだる　藤原のぼる

台湾の連なる岩の雄大で　真綿よし子

宿題もせずに遊んだ子が教師　藤原千代子

早乙女の昔し懐かし田植唄　若槻白馬

衣がえ母の手形を偲びつゝ　田中有樹絵

ネクタイを外しそれから我が身体　石原冬明

漫画本親父テストへそっと置き　杠京子

生ビール看板が出て夏となる　横山まこと

ボタンから匂薬女王の顔で咲き　安部正子

揺れさがる鬼ぐも貓が手玉にし　田中芳春

に』いいなり、ふとーの山子は『あげにごっつぉお食やー死んでもいい、苦しーない』いーなり、ふとりの山子は『嬢さんー嫁にもらやーえーに』いーて、その話ばっかー、毎日しちょうます。』て手代がいーたら「やー、ほんならいいやにすてやったがえええわ」いってだんなさんがいって、ふとりの山子にゃー、膳にいっぱいお金やらぇだ。か、ふとりの山子は「あげなごっつぉお食やー死んでもいい」いっただけんと思うて、ごーっつぉお食って、け、殺されたいーてて、たらいに水入れて、その中へワラ敷いちょいて、パサーンと切ったげないーて。そーで、そーが一番りくつが悪いじゃねーかいーて、そーからふとーの山子はお嬢さんをもらって、か、お嬢さん、蝶や花やで育ててもらーて、ほんに何しちょられーに、山子の女房に行きて、さびしーいくらししちょらにゃならん、かぁ、あんまーさびしーていけんもんだけん、山子が留守にだまってでもええけん、泊りに行きてやらーかと思うて、で、字い書くことだーわからんなりして、この判じごとをしちょいてやらーかと思うて、そーから、膳を出いて小石い持ってきて入れちょいてやらーかと思うて、そーから針持ってきておいて、その針に長い長い糸をつけておいてそげしちょいて、で、泊りー行きてしまう。

か、もどってみいとこめが、嫁さんがおらんで、たそげなことして、こーしていーてああ・・なんーぼ・そのことがわからんで、か、となりの方に座頭さんがおって、座頭いーものは判じことが、えらいじょうずなもんだけで「なんと座頭さん、けーなことをしちょいて、嫁がおらんやになったが、こりゃーどげだらーかー」いーたら「さーてーなー」いーて「こりゃー、恋しくば尋ねてござれ播摩の国、糸長町お徳さん、いーことだー」いーていいたげで、そーから「あーそげーかね、そりゃいーかさまいーかさま、ほんならまた尋ねて行かにゃーいけんわー」いーて、ほで、また播摩の国の糸長町へ行きたら、また、その嬢さんが退屈がすんで、ついて帰ってごいて、また夫婦なかよく暮いたいうて、そげな話です。昔、こっぽす。

伝承者
安部イト（明45生・竹崎）
（45・6・28採録）

てまりうた

姉が十八　妹が二十　どこで算用が違ったのか
これでは困ると姉のあんさん大願かけた
かけた大願ならほどかにゃならぬ
一に一畑お薬師さまで
二には日本の高神さまで
三にゃ讃岐の金比羅さまで
四つ信濃の善光寺
五つ出雲の大社さまで
六つ村々お地蔵さまで
七つ七浦えびすさまで
八つ八幡の八幡さまで
九つ高野の弘法さまで
十でところの氏神さん氏神さん

伝承者　代山・森山庫市さん
（明29生）
（43・4・9採録）

(注)山の奥は大呂、山県のうちの地名。
座頭（ざとう）盲人で、はり・きゅうなどの業をするもの。

採録者・酒井董美氏は先日、わが国の民間では最高の児童文化賞である、久留島武彦賞を受賞されました。

会員頒布一部百五十円／六九一一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江01601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第148・149号
（8・9月合併号）
昭和62年8月1日
奥出雲編集集団©

中世横田庄内の精神面の再生（ルネッサンス）を考えてみよう。

仁多郡畜産小史（付年表・優良蔓牛系譜）・俳句・短歌・川柳

仁多郡畜産小史

古代から現代まで、島根県の畜産史の中心を歩んだ仁多郡は、近代日本の畜産の発展の一翼を担って、今日に至っている。

（本文の順序若干異なる）

① 遠い古代の話
② 中世の土着武士と馬
③ 近世—畜産改良の先駆となった八川牛
④ 近代—明治30年代までの畜牛の改良と普及
⑤ —明治30年代以降の馬匹の改良と普及

表　出雲の蔓牛発展の系譜

2. 中世土着武士と馬

寿永3年1,183　源平合戦の序戦越中倶利伽羅谷合戦で、木曽義仲は800余匹の牛を集めて、角に松明（たいまつ）をつけ、平家の陣屋へ追いこみ、一挙に制圧したという。勝ち誇って京に乱入した義仲を制するため、源義経は宇治川の合戦でその勝機を握った。この戦で佐々木高綱と梶原源太景季（のち一の谷の合戦後、奥出雲横田庄の横田氏が、平家方に味方していたので、頼朝の命をうけた源太は、石見の益田氏にこれを討たせた）との宇治川渡河の先陣争いがあった。一番乗りを遂げた高綱は、「池月」なる駿馬を褒美にもらったが、これは隠岐産という。一説には飯石郡掛合産ともいう。しばらく出雲に縁のある牛馬の話を集めると。

鎌倉幕府を創設した源頼朝の死後、将軍職の執権として、その実権を握った北条氏を討とうと計画した後鳥羽上皇は、ことと志と違い敗れ（承久の変）、隠岐島に流されこゝで生涯を終えた。この時から島民は闘牛をおこし、上皇を慰めたと伝えている。今日の名物のおこりという。

建武2年1,335　当時出雲守護であった塩冶高貞（鎌倉幕府創設時の出雲守護は佐々木義清で、先陣争いの高綱の弟である。その曽孫貞清が簸川郡塩冶に住んで塩冶氏を称していた。その子が高貞で出雲守護となっていた。

一方、高綱の子が松江市の乃木に住んで野木氏と称した。のち乃木氏と改めた。乃木将軍の祖）が、後醍醐天皇に千里の馬（すぐれた馬のこと）を献上した。この馬は鳥上村の龍の駒（現横田町）の産と伝えている（今日これにまつわる地名が残っている）。

佐々木高綱の長兄定綱は近江の守護であったが、その6世の孫の時、京極氏（近江北半国）と六角氏（近江南半国）とに分れた。京極氏初代高氏の孫高詮は、14世紀の終りに出雲守護も兼ねていた。嘉吉3年1,443　高詮の孫の高持が守護を継いでいた時、将軍に出雲産の馬を献した

は横田の町の北側の藤ケ瀬城である。伝えによると三沢氏は良馬を得るために市を開き、四隣の陰陽の諸国から（横田庄に市があったことは諸記録にある）買求めていた。この市は盛衰はあったが戦後まで続き、畜産行政の変化とともに廃された。戦国時代三沢氏が、尼子毛利両氏

たことも幸いしたのである。

これ以上は資料がないが、中世特に後半の戦乱時代に、一部に騎馬武士がいて重要戦力であったことから、いろいろの想像をすることはできる。

3. 近世—畜牛改良の先駆となった八川牛

江戸幕府が創設されると、中世の群雄割拠の戦乱時代は終りをつげ、新らしい徳川300年の封建制が発足した。出雲藩の新らしい大名藩主として、富田城に入ったのは堀尾氏であった。間もなく国内の巡国をはじめ、奥出雲には、慶長6年1,601に入り、備後との国境いの三井野まで足を運んで国境を確認した。その山麓の坂根では、たたらを吹いていた村下の吉兵衛と炭坂新左衛門に殊勝のことと、それぞれに20貫文宛を与えた。昭和12年までは坂根といえば奥出雲では最も僻陬の地であった。少し下ったところが小八川、ついで八川である。堀尾氏はこゝをすぎて横田町の稲田の土居・安部方で一泊した。

安部の祖は14世紀半ばに横田庄が仙洞御料所（石清水八幡宮

が、生産地は明らかでない。

奥出雲三沢郷の地頭三沢氏は、横田庄が京都仙洞御料所（一部は京都泉涌寺の塔頭（たっちゅう）、雲龍院領）であったが、戦乱の絶えない時代であったので、朝命をうけ、永正6年1,509　横田庄に移り、地頭請所として庄内の治安と年貢上納にあたった。その城

の間にあって、常に隣国備後にも拡がる地域の武士の動向の主導権を握り、戦局を左右した裏にはこうした事があったからである。信州から新補地頭として三沢に来住しているが、信州に於ける「牧」経営の経験も見のがせない。そして後述するように、当地方が畜産の適地であっ

領から）と変った時、そこの役人からこの地に下って代官となったものである。のち戦乱によって三沢氏が庄内に駐在すると帰農したが、一時は武士として備中の高松城の水攻め、朝鮮出兵にも毛利方として参加した。

この時源太左衛門は66才で、愛育していた芦毛の馬を引出して供覧したところ、賞せられ飼料として大豆20俵をもらった。ついで養子治良兵衛（弟の子）をつれて藤ケ瀬趾に案内し、10数年前この地を去った三沢氏（毛利氏の重臣となる）のことどもをつぶさに語ったという。

その夜は藤が瀬城下に天文年間からつくられていた町（六日市・大市）の五反田屋（この時より富田屋と改称した。現在清酒簸上の造醸元）に泊った。

源太左衛門は稲田新田10町歩余の開田もした。以後江戸末期まで代々、仁多郡の下郡役をつとめて重きをなした。この地に良馬の伝統があったことをしめす記録の一つである。

堀尾氏は二代で絶え、つぎの京極氏（中世の京極氏の末孫）も一代にして絶えて、松平氏が藩主となったのは寛永15年1,639である。間もなく松江藩では駒奉行を設けて、良馬の育成に積極的にのり出した。そして預け種馬を、名馬の産地、仁多飯石両郡に下付して繁殖をさせた。このころから各地で放牧も盛んとなっていった。

他方、八川村（横田町八川）に寛永のはじめごろ（1,620年代の前半）に徳兵衛というものがいて、備後より種牡牛を求めて、地元の固有種の改良をはじめた。これが後年の八川牛の祖といわれる（のち地名をとってこの系譜を春瀧蔓（つる）という）

寛保元年1,741ころより牛耕が盛んとなった。牛耕の普及はさらに遡るが、貧弱な百姓の懐では、肥料として堆肥がほしくてもまた牛耕を欲しても、そのためだけでは無理であった。そこで次のような方法が行われた。

即ち仁多郡では記録によれば、享保14年1,729 仝18年の2回にわたって、農民は生活に困まったので、藩は牛馬代を貸付け、牛馬を買い調えさせ、たたら関係の駄賃稼ぎをさせたのである。しかしそれも後世のようにまだ年間通して毎月たたらを吹くという時代でなかったから、そう多く行われたとは考えられない。記録によると（絲原家文書—以下記録と略す）百姓たちは、

この年即ち237年前の春、藩より拝借銀をうけて、作牛を購入している。当時の郡内64カ村のうち中南部9カ村のものが詳細に残っているが、それから当時の凡その状況を知ることができる。即ち購入数は、牡(雄)牛18頭、牝（雌）牛18頭で、個人購入は少なく、2～3人の共同購入で、購入先は備後（13）、大原郡（11）、郡内（4）、神門郡（4）、飯石郡（4）である。

宝暦年間1,751～1,763に八川村字春瀧より、名馬を産し、藩主の乗馬「八雲」となった。

寛政元年1,789の記録によれば、松江藩では領内の馬匹を検査しこれを乗馬と駅馬に分けて、乗馬は丈4尺5寸（1.36米）を以って標準とした。

また藩は奥州より良馬を買入れ、内厩に21頭、外厩に40頭を飼育し、ほかに預け馬15頭を所有した。預け馬は馬匹中の駿秀なるもので、選抜して良馬の産地である仁多郡ほかに下付して種馬として牝馬に配して繁殖させた。病死した時には馬医の証

1. 遠い古代の話

日本列島がアジア大陸から完全に孤立してから、1万年が経過している。その時代までに馬も牛も住んでいたことが、化石によって証明される。（上段馬・下段牛）

第3期中新世層（600万～2,000万年前）
岐阜県（馬の旧歯）— 発見なし

第3期鮮新層（200万～600万年前）
長野県（馬の化石）— 発見なし

第4期洪積層（1万～200万年前）
兵庫県（馬の旧歯）— 琵琶湖底（水牛の一種）
秋田・茨城県（馬の化石）— 瀬戸内海（野牛の化石）

第4期沖積層（1万年以後）
発見なし — 家畜牛と同型のもの数箇

以上は地質時代でみるもので、考古学上からみると埴輪に馬・牛が描かれているのは5世紀後半以降で（古墳時は3～7世紀で、その中期にあたる）極めて新らしい。

8世紀はじめに成立した日本書紀の神話は、この時代の感覚で、古墳時代の前の弥生時代に芽生えた物語を構成したものと言われるが、弥生時代以後の物語りも入り、編集した8世紀の編集目的でさまざまなものが入って見事に構成されているが、一応抜いてみると、スサノオが生き馬の皮をはいで投げつけたとある（紀）。オオクニヌシの子ワカフツヌシは、牛を使う術が上手で部下の多数の田人に教えたという（出雲国風土記）。

この物語りの芽生えた弥生時代が「魏志倭人伝」（3世紀）の邪馬台（壱）国であるが、牛馬虎はないとある。古墳時代末期の歴史時代になると、応神陵という墳墓の陪塚から、優秀な金メッキをした馬具が出ていて、次第にまづ馬が、そして牛が生活とかゝわり合いをもってくる。雄略天皇、継体天皇522時代には、百済から馬具造りの職人が渡来する。放牧もはじまり、欽明天皇540～571の代には百済より種牛として牝牡各1頭が入って来る。種牛輸入のはじめであり、搾乳法も入り、乳製品も地方から税として納められている（700）。出雲国では735年には軍団が3カ所にあり、軍馬と駅と駅の間には駅馬が置かれたとある。

延暦3年784には、出雲、石見の産牛は大和でも重視されている。間もなく、出雲から11壷、石見からは8壷の乳製品（蘇）

明を付して届け出ている。当時大馬木村（横田町大馬木）には伝八という馬医がいた。

寛政9年、今から182年前の1月の仁多郡内の二才駒41頭の調査報告書の控が記録の中にある。これは若駒については民間の自由販売を禁じ、まず一カ所に集めて藩吏が出張して検査することとなっていた。本郡では三成（横田から郡家が移っていた）で行われ、優秀なものは御上相場として一頭銭8貫文（当時玄米1石が約8貫文であった）を基準として買い上げた。残りの合格馬に対しては駒乗りという藩吏が時々出張して調教し、さらに不合格となった時は、さきの不合格馬とともに廃馬として飼主の自由に任せた。やがて合格馬を湯町（現玉湯）、上乃木（現上乃木）地方の者に限り、御駒預り人として飼育管理させた。飼育よろしきを得ないものがあれば他の者に預けた。三才の春になると是を城下の横浜（現松江市内）に集めて等級を定め、乗用に適するものを毎年50頭選んで藩買上げとした。また牝馬は2才の8月に優秀なものを毎年50頭藩買上げとし、その生産地に分けて飼養させ繁殖の用にさせた。飼養法には番飼（有力農家飼育）と楽飼（各人の希望による飼育）とがあった。

当時の年々の産馬数は牡牝合わせて1,000余頭であった。

この頃から藩内の鉄師のたたら操業も毎年操業が行われるようになり、しかも年間毎月操業も軌道に乗り出したから、原材料並びに製品の鉄の輸送に、多数の駄馬も必要としたので、軍用馬の需要による藩の奨励にあわせて、民間の馬匹の改良繁殖も盛んとなった。民間の豪農も乗馬の流行にあわせて競って良馬の飼育に力を入れた。その中でも鉄師たちは多数の馬を所有していたので、特に熱心であった。

藩主不昧（明治4 1,767～文化3 1,806）の夫人は仙台藩主伊達氏の女で、政宗は遠くアラビヤ産の駿馬を輸入して馬匹の改良を図っていたので、南部藩には逸馬が多かった。他藩には預けなかったが、松江藩はそれを入手することができた。不昧は馬術を好み良馬を集めた。三名馬と呼ばれるものがあったが、一頭は先の八川産の「八雲」あとの二頭は藩士矢島半兵衛がさがした飯石郡松笠村字瀧上産の「雲井」と、遠江の浜松駅の荷馬の中から得た「有明」であった。

明和3年1,766～享和3年1,802の36年間に松江藩が、10回も出雲産の駿馬を幕府に献上したことでも、出雲が名馬の産地としての名声のあったことが知られる。

また当時は冬季以外は放牧を常としたが、それは自由で規制がなく、牧場は郡内の鉄山（たたら用木炭材のある雑木林）全部にわたった。殊に小八川・坂根・金川（旧八川村）と、亀石（旧鳥上村の船通山麓）は枢要地で、面積は数千町歩に及んだ。牧場の周囲は粗造の柵を設け、或は天然の山峻を境とした。

鉄山は樹木草木が多く、従って牧草向きの雑草や水源地湿地も多く、平地あり急坂ありで、牛馬の飼育には極めて適していた。これが良き牛馬の産地を生んだ原因である。こゝで育った牛馬は骨格が頑強で忍耐力を備えていた。（当地方では山をした牛馬ほど丈夫だということから転じて、「山をした」といえば鍛えられていることを意味する言葉として今も用いている）

文化15年1,818藩には新らしく物産方が設置され、仁多・飯石の各郡で牛の飼育を積極的にすゝめた。

安政4年1,857絲原は藩主に青毛馬1頭を献上した。全6年には絲原に対して藩主は召馬「村雲」の飼育を命じ、その労に対が上納される。

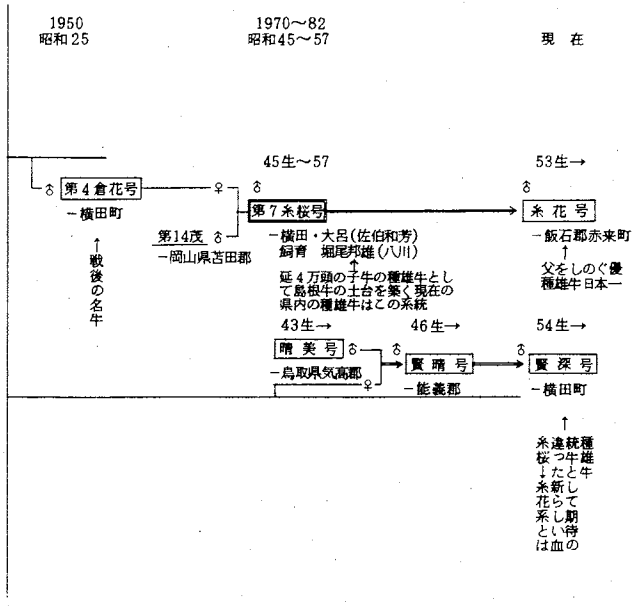
9世紀初めの平安時代に入ったころは麦苗を刈って牛馬の秣草にしている。また大和では公家が乗用牛車を使用している（最も盛んになるのは1,074～1,123のころである）。また農家では田の中で木を組み、これに稲束をかけ秋日で乾燥させることを奨励している。稲架のはじめである。一方水車の奨励、池溝の保全に唐の技術を導入している。

この時代の生産者といえば、農業がほとんどで米づくり第一であり、やがて荘園の発生に伴い、その領主によって技術の進歩をとり入れた経営もはじまり、梨（かしき）が普及した。牛馬が農耕に用いられたことを裏付けるものであろう。苗代田も工夫され、水車の普及、案山子（かかし）・鳴子などもひろがり出した。物産が豊富になったので、前号の単身赴任でも述べたように、京都の東西に市が発達し、貴族・社寺による市場圏の拡大が試みられた。

やがて地方にも市が成立し、港が重要な役割を持ち、宿駅も発達し、物資の運送をつかさどる特殊商人・問屋も発生し、牛馬の背を利用する方向へと進んだ。

900年即ち10世紀に入ると、律令制度はくづれ、有力豪族は未開墾地をえらび、国府に願い出て、家人、下人、放浪の百姓を集めて組織し、適地に館を設け堀をつくって住み、まわりに耕地をつくり、開発された各地の耕地に各人は住みついた。これらは自らを護るために武装して武士団を結成した。大きい者を大名、ごく狭いものを小名と言った。そして経済力をもち、牛馬は農耕の外、馬は軍事色が強くなって行った。特に律令時代東国に多く設けられた、宮延用の馬を飼育する牧も、中央の統制力がうすれると（律令制度のくずれ）、武士団の所有となった。東国の武士団が騎馬に優れる原因ともなる。そして東国が源氏の地盤となって成長して行く。

七九	12	洋牛種の増殖顕著となる	声あがる
八二	14	はじめて私立牛馬共進会開催（三瓶）	季間屋内）飼育した仁多牛いよいよ名
	15		純国産の黒牛を改良し放牧により（冬
	16	県内で牛の改良はじまる	数の大半を占める
八五	18	郡単位の牛馬共進会はじめて仁多・大	旧八川村で数十頭、仁多郡の牛が出品
		る	仁多郡、特に横田より輩出する
		大原郡有志デヴオン種牛貸付けをうけ	固有種の牛の改良に向い別記の蔓牛が
			得る
	19	原両郡で開催	（通称八川牛）わが国第一位の名称を
		八川牛の標準型が完成する	固有種中仁多牛は労役兼肉用牛として
		一等賞　絲原武太郎他二名	
一八九〇	21	島根県にて購入の種牝牡馬9頭仁多郡に貸与され2年間に225頭生産	仁多郡はシーメンタル種牛導入
			1/4を占め第一位
			仁多郡の面積は18カ所で6918町歩県内の
			島根県種馬所　横田町小八川に誘置
	22	御料局へ乳牛として出雲の牛9頭買上げ	
		絲原武太郎良馬を得「簸上」号とす	
	23		公立八川牧牛場を設立
			私立出雲国八川牧牛社創立
	24		業組合創設、牛馬市はじまる
			県下ではじめて仁多郡に牛馬売買商商
			絲原権造も同上の牛を農商務省より貸
			師団より種馬を購入する
			県下ではじめて絲原権造・広島鎮台へ
一九〇〇	26	日本ではじめての第一回私設島根県牛馬共進会開催（大東町）（社長　絲原武太郎）	
	33	第一回中国五県畊合畜産共進会開催（三瓶山志学）（のち兵庫県を加え六県に）	
	34	外国種牛各郡に入る	
		のものは良牛の産地	
		県内の牧場の中で特に仁多・飯石両郡	
	37	固有種と洋種と雑種とに分ける	
		島根県の牛改良の方針確立	
一九〇八	41	牛価暴落する	
一九一六 大正	42	第一回島根県牛馬匹共進会開催（大東）	
	5		



卜蔵蔓

鳥上村竹崎（現横田町）の鉄師卜蔵28代甚兵ヱ正恒と29代甚兵ヱ正昇は畜牛の改良に力を入れ、天保年間に牛番頭の金山覚助・金山杉右ヱ門・落合作十らと相談し、普通の牛の数十倍の価格に相当する金を出して、備中国阿哲郡から「竹の谷蔓牛」（黒毛牝）を購入し改良にとりくんだ。安政年間半ばになると再びこの蔓牛で褐色の牝を求め、地元の牡牛との交配をし、立派な牛を得た。これが卜蔵蔓の起りである。

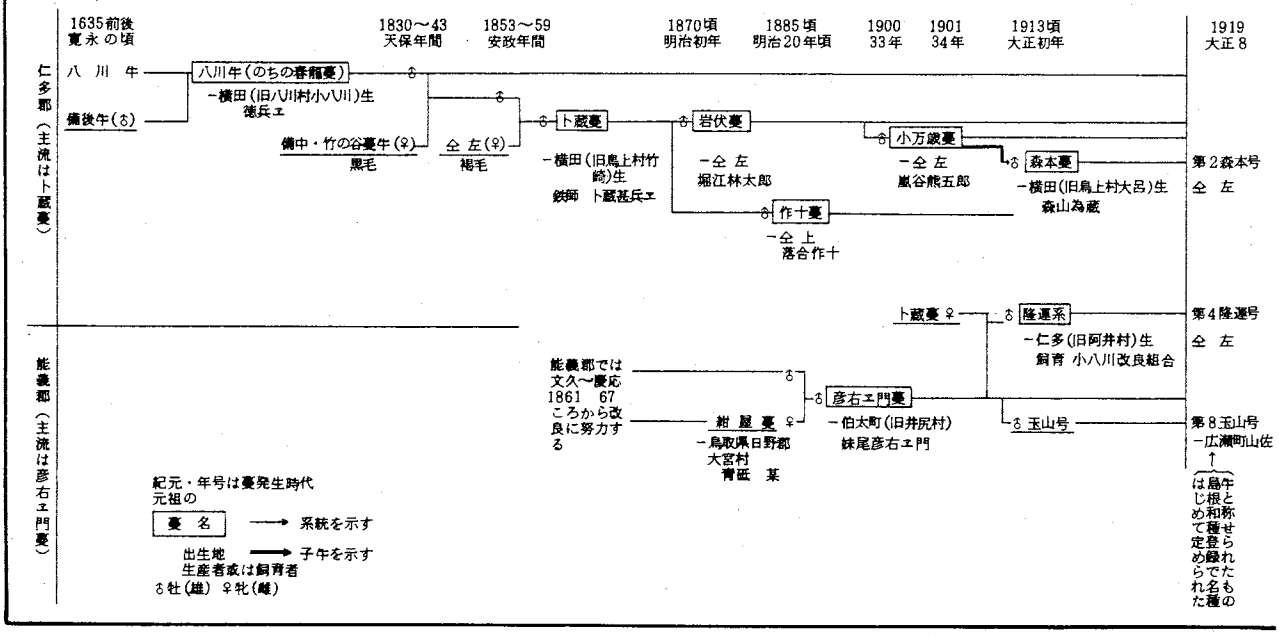
その後明治初年、この蔓の中から堀江村太郎によって岩伏蔓が、しばらくして落合作十によって作十蔓が育てられた。明治34年ころ近くの嵐谷熊太郎によって、岩伏蔓から小万才蔓ができた。その後仁多郡内では10幾つの良牛の蔓が出て仁多牛の評価を高めた。

彦右ヱ門蔓

能義郡では文久～慶応のころから和牛改良がはじまり10に近い良牛の蔓ができた。井尻村（現伯太町）の妹尾彦右ヱ門が、33年日野郡大宮村（現日南町）の青砥某から購入した牛で改良した。

紀元	年号	全国・島根県	仁多郡
一七七五	明治 8	洋種牛はじめて輸入	
一七七三	6	松江にてはじめて牛乳搾取をはじめる	
一六九	2	雲産	絲原家は御馬を拝領する
一六七		召馬「朝霧」「梅ケ枝」「篝火」は出	
一五四～一六〇	安政～慶応 7		仝 家へ召馬献上の礼下される
一五九	6		仝 家へ召馬「村雲」の飼育を命ぜら
一五七	安政 4		絲原家より藩主に青毛馬献上する
一八	文化 15	藩に物産方が設置され仁多・大原・神門・飯石の各郡で牛の飼育をさせる	
一八〇六	文化 3		石郡産）と「有明」（遠江国産）
一六七～九七	明和4～9	藩主松平不昧馬術を好み良馬を求める	その三名馬は「八雲」と「雲井」（飯
一六八九	寛政 元	郡内に馬医がいる	郡内の二才駒の報告書を駒奉行へ提出
一六三			を産する
一七四一	寛保 元		横田町旧八川村春滝より名馬「八雲」
五一～	宝暦年間		このころ牛耕も普及しはじめる
一六三八	寛永 15	す 松江藩駒奉行を設け良馬育成にのりだ	に下付す、このころ放牧盛んとなる
一六四三	寛永年間		その預け種馬を名馬産地仁多・飯石郡
一六二四			て改良し後世の八川牛の祖を育てる
一六〇〇	慶長 5	江戸時代・出雲藩主堀尾吉晴入国	町内旧八川村徳兵ヱ備後より牛を求め
			左ヱ門所持の馬をめで賞を与える横田
			堀尾氏廻国の折、横田の土豪安部源太
			伝える
一五〇九	永正 6		瀬城に入るこの頃より牛馬市を開くと
一四四三	嘉吉 3	仝 京極高持将軍に馬献上（出雲産）	横田庄に三沢氏皇室の代官として藤カ
			という
			この馬は横田町内旧鳥上村の龍の駒産
一三三五	建武 2	出雲守護塩冶高貞千里の馬献上	
一三三一	承久 3	承久の変で後鳥羽上皇隠岐へ闘牛はじまる	
一二八四	寿永 3	源平合戦の宇治川の戦の佐々木高綱の乗馬「池月」は隠岐産	
九二五	延長 5	出雲（11壷）石見（8壷）蘇を貢納	
七八四	延暦 3	出雲・石見の産牛は国内で重視せらる	
七三三	天平 5	軍馬・駅馬がある（出雲国風土記）	
七〇〇	（文武） 4	牛乳より蘇（濃縮乳）をつくる	
六七五	（天武） 4	殺生を禁ずる（牛馬の肉を食うこと）	

島根優良和牛蔓（血統）概略表



して賞を与えた。

安政慶応年間1,854～1,867ころの召馬「朝霧」「梅ケ枝」「篝火」はいずれも出雲産のものであった。

明治2年絲原は藩主より御馬「若松」を頂戴している。このころの当主は11代権造（明治初年に徳右衛門から改名）で、特に八丈流の馬術の奥儀を究めていた。他の鉄師豪農の間にも、競って馬術の習熟に精を出す風潮があった。

馬匹については官民ともに積極的に改良繁殖に努めたが、畜牛については口伝にも資料の中にも少ない。大原郡では、洪水やその後の飼料不足で斃死する牛馬の損害で、困窮する百姓が、余儀なく仁多飯石両郡へ移住する（たたら新田の株小作として）事態に対する救済策として、拝借銀による牛馬の購入を行ったという記録がある。

4. 近代—明治30年代までの畜牛の改良と普及

明治維新ごろの日本の牛馬の数は、馬450万頭、牛100万頭いたとされている。馬匹は幕府や各藩も軍事上改良繁殖に力を入れていた。松江藩ももとよりで、仁多郡はその中心地であった。

維新で廃藩となるとそれが弛む一方、牛肉を食用にする風も拡がったので、弱かった牛の改良藩殖に急に手がつけられはじめた。明治元年から13年までの輸入は、種牛1,117頭に対し種馬は183頭で10％という数字でわかる。輸入牛の60％は搾乳用、35％が洋雑種繁殖用であった。そしてその輸入牛の80％は民間人によるもので、その情況が推察される。こうした傾向は仁多郡もその例にもれなかった。

官営牧場の不成績、経験のない士族の俄か生業のために確保し貸与した種牛も、経験不足による成績不良に、病の蔓延も加わり、倒産するものが多くなり、明治10年代後半から20年代前半ころまでは下降線をたどった。仁多郡は幸にも伝統があったので、なんとかこれに耐え、次第に八川牛の伝統を充実し安定させ名声を確保した。

簸川郡杵築町（現大社町）の和田村吉は、出雲大社の奉仕者で幕末には江戸住いであったが維新とともに帰り茶園・養蚕を創めた。これらは、当時輸出品の花形であった。一方松江藩知事の畜牛増殖計画に副って、これにも手を染め、明治元年には3回にわたって21頭を、江戸へ乳用牛として出し、さらに育牛交配法・搾乳法を研究して帰り、神門・大原・仁多の各郡へ搾乳法の指導も行った。全6年仁多郡に牧牛社を設けて指導監督にあたった。さらに松江の原文平とともに、牛乳搾乳業もはじめ、東京・京都へ輸送し、牛種の改良も計った。

全8年和田は二種の種牡牛を東京より購入した。一頭はデボン種で県内への洋牛の最初のものとなった。これは大原郡に入って大原デボンの元祖となった。

その後和田のこれによる改良が成功し、田儀種という良牛系統を産出した。記念して和田号と命名された（ただし諸説あり）

明治33年第2回中国五県（島・鳥・岡・広・山・のち兵庫が入る）連合畜産共進会が三瓶山で開催されたが、その時発刊された「島根県畜牛馬沿革誌」（県立図書館蔵）によれば、明治5年旧藩士福岡世徳・尾原浜右衛門等は、廃藩後畜牛飼育法が日に日に廃頽し、出雲特有の名産が失われる慨き、首唱して仁多郡内の菅田久・中林嘉一兵衛・荒木暁一郎・杠太郎左衛門らと共に、旧藩有の牝牛360頭の払下げを得て、八川村に牧牛社を設立し、繁殖と改良を目的としたが、需要が少なく牛価低落、収支償わず、翌7年解社した（口碑）とある。ついで全13年三瓶山志学村にても殖牛社を設立し牝牡合わせて300頭を、預け牛として努力したが、全22年廃社した（主旨書と口碑）とあるが前者については、絲原の記録で確認できる。

明治7年の島根県告諭では、「吸利の実」を目標とする農業をめざし、富国強兵を目的に輸出振興のため、蚕糸と製茶とそして立地条件に見合った作物を選ぶよう強調している。

絲原権造はこうした世論のある一方で、洋鉄の輸入、洋式製鉄の開始は、たたら製鉄の前途は見えたとみて、当地方の前途を憂え、明治11年意見書を提出して訴えた。即ち今日の言葉にいゝかえると、第一は農業の構造改善—稲の改良、換金作物の栽培、畜産振興、第二は事業振興のための金融機関の設置、第三に交通の開発、第四に教育の振興であった。この年、県が農事試験係の制度を設けると、その依嘱をうけ、自費を投じて私立の植物試験場を設けた。

250種の作物栽培・稲の品種数十種の試作と、良種の種子の配布。養蚕業振興のための桑苗試験場の設置。さらに地主層有志による農談会を組織し、その実施普及につとめた。一方畜産の振興については、伝統の上にたって努力した。

明治12年絲原権造は、殖牛社の設立を企画した。前に解社した牧牛社のことがあって容易に進まず、預け牛を拡充する方向で進んだ。全14年の預け牛証の控えをみると、この年だけでも19頭（牝16牡3）増頭し、農家には1頭につき25％の出資をして（合計540円）援助した。

全19年になると、この年の勧業資本金をうけて、下横田・大谷・八川の三カ村連合牧牛場を設置して10数年来の宿願の実現に向った。**「公立八川牧牛場」**と称し（各村がうけた資金を出資したため）、小八川の自己の所有地270町歩を貸出し、資本金700円（勧業資本金）で発足し、

牡2頭牝18頭（このうち半数は鳥上村産で、作十蔓・卜蔵蔓のもの、他も郡内産）を購入した。取締人は絲原武太郎（12代）で毎年生産、販売を続け、購入増頭もして、100頭前後を保有し飼育した（詳細な記録がある）。

明治22年には町村合併により三村が八川村となったので、規約を改正し「**八川村牧場**」と改称した。その後順調であったので、明治24年「私立八川牧牛社」に改組し、社長は絲原武太郎がなった。さらに頭数を増加するとともに改良をすすめたが、仝37年事情あって解散し、その時の保有牛78頭をすべて社長が引きうけた。

隣の大原郡では、和牛産地の仁多飯石両郡と比べ、現状では格段の開きがあるので、和牛（内国種）ではこれを凌駕することは到底不可能であるとし、洋種による改良をねらい、既に標準型として充実し定評のあった八川牛のある仁多郡へ、農商務省が貸付け中であった、米国産有籍デボン種牛（原産はイギリスのデボン地方）を、明治18年大原郡内へ貸与を受けて、雑種生産を奨励した。容易ではなかったが、主唱者の努力で頽勢をくいとめ、仝26年10月、大東町で「島根県私立第一回牛馬共進会」を開催した。県畜産共進会の草分けとなった上に、未曽有の盛会であった。しかしその後は順調でなく、第二・第三・第四期と、再三再四のデボン種導入の山を迎えた。仝36年にはわが国では唯一の改良デボン種の育成地域と斯界の賞賛を得たが、40年代に入ると牛価の暴落により縮少せざるを得ず、やがて固有の和牛改良の仁多郡と能義郡がさらに優位に立った。

仁多郡では明治36年に仁多郡農会主催の第1回牛馬共進会が開かれ、定評のあった標準型の仁多牛—通称八川牛はさらに評価を高めた。第2回は32年で横田町で開催され、牛152頭・馬34頭（うち郡外7頭）の出品で注目を集めた。会長は絲原武太郎であった。（当時の絲原の所有数は牛のみで牡23頭・牝45頭）

こうして郡内の飼育農家の改良はさらに進展し、優良蔓牛を繁殖して、今日の基礎をつくった。その優秀さをしめすのは、33年の第1回の中国連合共進会をはじめとする各種共進会での上位入賞が多数であることであるが、紙数がなく省略する。

このころの牧場面積をみると良牛の産地は仁多飯石両郡であったが、仁多郡は18カ所で総面積6,918町歩、県内牧場の1/4を占め第一位でもあった。

明治37年、島根県でははじめて牛改良の方針を確立し、固有種・洋種・雑種とわけたが、固有種中仁多牛は労役兼肉用牛として最もすぐれ、わが国第一位と称せられているとしている。

41年牛価暴落による苦境が訪れた。このころから外国種導入による改良から、固有種の改良に向い、横田より輩出する蔓牛の独走の感があった。仝42年に大東町で開かれた、第1回県牛馬共進会では仁多牛の出品が大半をしめ、しかもそのうち旧八川牛が数十頭であった。

こうした努力の陣頭にたっていた絲原は、酬いられた牛改良の実績を、馬匹へと向けた。

明治42年の統計によれば、当県の畜牛数は74,185頭、生産数13,000頭で、わが国の第1位であった。頭数では仁多郡は飯石・邑智・隠岐の各郡に一歩ゆずっていたが、質に於ては数歩優って全国優位をしめていた。

絲原のほか、同じ鉄師の桜井・卜蔵の諸氏の努力も、共進会での表彰を受けるほど多大であった。特に卜蔵は広くて良質な船通山麓の牧場をひかえ、地元牛改良に多くの投資をし、卜蔵蔓をはじめ同系列の幾つかの優秀蔓を育てた。今日、これらを総称して卜蔵蔓と称し、今なお全国一の優良牛を（別表の如く）輩出している。

5. 近代—明治30年代以降の馬匹の改良と普及

維新による廃藩後馬政はゆるみ、乗馬の需要も減少し、土地所有権の確認から、放牧の自由も失われたため、繁殖の方法大いに乱れ、馬格漸次退却し、頭数も減少した。正確な統計はないが、県内の年産は、牡駒100頭牝仔200頭であったが、仝12年には各40頭という有様であった。これを憂えた有志達も多かった。仝15年絲原権造は広島鎮台より南部七戸産青毛花園号を購入し、16年には飯石郡より月毛種馬も購入し、ともに種馬として繁殖に努力した。19年佐白（仁多町）の馬庭又右衛門は大阪鎮台より南部産の種馬を購入し、21年までに130頭の駒を生産した。その後個人や郡共同での購入馬貸付馬での努力が実って、郡内での生産数も回復し、100～150頭になった。絲原の明治21～35年までの個人による繁殖数をみると、多い時は130頭の交尾をし3歩余の率で39頭、少ない時でも12頭の生産を毎年得ていた。

明治27・28年戦役が終ると政府は種馬所の官制を29年に施行し、全国に数カ所設置して馬匹の改良繁殖を行うことになった。絲原武太郎はこのことを知り各方面に働きかけ、30年に上京陳情し、度々の視察の結果もよく、33年7月中国地方では唯一つ、旧八川村小八川に誘置することに成功した。馬匹改良振興を念願とした父権造の遺志を実現することができた。陸軍省直轄（馬政局）の島根種馬所である。土地は絲原の所有地を提供したが、海抜600mの屏風山の北麓で、382町歩の中に建物と耕作地が20町歩あった。交通は至って不便であったが、気候温和で最高35℃、最低−5℃、年平均13℃で地味肥沃で植物の成育よく清水湧出る馬匹飼育には好適地であった。

その効果は直ちにあらわれ、35年こゝを中心に郡内の馬数は洋種0、雑種10、和種1,623頭（牝1,609牡28）、生産数は牝50、牡65で、受胎率は3,13%であった。このうち4才以上が1,602頭、うち使役専用馬は牝1,213頭、すべて駄送用で客車用、荷車用、農用はなかった（荷車386輌、荷積牛馬車216輌—多くは牛で馬は殆んどなし）。

参考文献―絲原家蔵文書・島根県畜牛沿革誌（明治33年刊）　島根県之畜産（明治44年刊・大正2年刊）　月刊「島根の畜産」ほか

俳句会七月句会抄

嬰の肌を軟らに流す菖蒲の湯　浅野　としお
青田潰す舗装縦横村豹変　岡田　蹊花
リハビリの杖で跨ぐや葛の蔓　岡田　麗水
草いきれ古代掘る手に汗滴く　小川　あきお
師を囲む瞳涼しく夏講座　門脇　花子
肩に当て母子で選ぶ浴衣柄　加納　信子
風鈴の音にも気づかう子の寝息　楠　房子
唄草紙うたい継がれし紙魚の跡　高木　白虹
留守の戸にはさみし朝刊梅雨曇り　新出谷　一華
片蔭に一息入れて風さがす　錦・織　富江
乳の香を残して去にし梅雨晴れ間　峯石　美代子
初採りのトマト朝餉の彩に添え　渡部　夕峰

栗の花枯る　簸の上短歌会

悔残る一日なりき家裏の栗の花褐色に枯れて揺れをり　常盤　はるまさ
かしましく梢を渡る鳥の声わが通る間を待ちてつづきぬ　小早川　恵子
跼りて草引くわれに語る如そびらかすめて燕飛び交う　岡田　時子
資料館ゆ出でたるわれに六月の草木は蒼く花紅く咲く　佐藤　喜代子
（原爆資料館にて）
斉膳を亡母に習いて杏き日に変らぬ紫のあやめ咲きつぐ　永井　弥生
七百年修行僧らの拭き込めし長き廻廊を静かに歩む　松浦　愛子
（永平寺）
辣韮は泥つきしまま軒下に放り置かれていく日も過ぐ　景山　悦子
小夜更けを夫とふたり遠住みの子ら噂しつつ粽まきをり　野村　節子
父を葬り母も世を去り妻も逝き訣別の詩忘ることなし　安部　夕波

積荷は鉄・米・木炭などで、ほかの牝馬約400頭は繁殖専用か、使用と繁殖を兼ねるものであった。当時の牧場は（町歩）

八川牧場　1,300　鳥上牧場（亀石）1,400
下阿井3カ所　120　計　5カ所　2,820

牧畜に供する原野では

八川　2カ所　160　鳥上（方才・山奥）
馬木　630　上阿井2カ所
下阿井　30　亀嵩
計　9カ所　2,670　630　50　1,000

33年の県の報告書によれば、隠岐種と出雲種が主で、出雲種は仁多郡を最良とし、悍威に富み訓練すれば騎乗に頗る良く品位があるとし、隠岐種は忍耐力あるが体尺が短いとしている。

大正元年の数は仁多郡、諸種牝牡合せて1,056頭、隠岐926ついで那賀、美濃で、県内5,769頭の約2割を占めている。全2年種馬所には優秀な種馬29頭がいたが、こゝを中心として、この年の生産は県内で605頭（仁多郡は牝牡計1,053頭で生産は157頭）、開設以来この年まで13年間の生産数は4,741頭となり、改良は馬格を一新し成績顕著であった。その生産数の約半数の2,073頭は仁多郡が（毎年少なくて119頭多くて223頭）占めた。それほど仁多郡は県内に、大の貢献をした。

全34年農商務大臣は創設にあたっての功労を感謝している。

大正10年5月8日には、種馬所誘置はもとより、多年にわたる絲原の業績を認め、産馬功労者として馬政局表彰をした。その間の受賞数等は省略するが、機構改革により功績をおしまれながらも、昭和初年鳥取県の赤崎へ移転した。その移動する馬の隊列を見送る人々が、町内の沿道にあふれていたことを、筆者はよく憶えている。その跡地は絲原の手によって耕地とされて今日に至り、当時の建物は数多く町内に移築されていたが、今は大市の町並みの中に2戸1棟建の官舎が1棟宛2カ所に残るのみである。時代の変遷は輸送機関の発達を急速に促し、戦時中の軍馬への徴用も加って、駄馬は急速に姿をへらした。昭和48年最後の1頭であった横田町五反田の馬も、乞われるまゝ備後帝釈峡へ観光用として売られ、さびしく去って行き、今は馬匹隆盛時代の遺物は、僅かの建物と記録賞状等のみである。しかし馬匹に注がれた仁多郡の畜産家の愛情は、ひたすら仁多牛にむけられ、わが国一の優秀牛を育て、今日なおその地位を保ち、血統を保持していることに花開いたとしてよいであろう。

（横田史談会　高橋一郎）

斐の上川柳七月抄

教わらぬに思春期少女の身繕い　高木　白虹
東北で竹下さんも褒めておき　松浦　久寿子
手間かけて母の心を笹で巻き　松浦　亜以
寸法は女が測る鼻の下　松田　牛歩
ふるさとを小包にして子に送り　松浦　木公
花菖蒲紫紺の色に目をみはる　安部　春恵
明月は我丹心を照してる　若槻　愛散人
楽しさに不安のよぎる雲の上　安部　正子
瑞穂の国見切りをつけて足洗う　石原　冬明
責任がないので好きな事を云い　藤原　千代子
名松も横に倒さりゃただの松　田中　有樹絵
幸な多忙で晩酌よく眠る　若槻　白馬
つる豆の主張決してゆずらない　杠　京子
月見草夜の蝶ともまぎらわせ　真綿　よし子
梅雨晴れ間花火の音へ天の川　横山　まこと

会員頒布一部三百円／六九―一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0―601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

「奥出雲」編集方針①（キャンペーン） 横田＝中世と伝統産業（たたら—美術刀剣・刃物、そろばん—工芸品、畜産）と教育と福祉の町

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 150 号
（10月号）
昭和62年10月2日
奥出雲編集集団©

山なみで分けられた陰陽の中世史

備北の山内・多賀山両首藤氏と奥出雲①

民話は別として、断片的な言い伝えの話の中には歴史的事実の何程かの断片が残っているから捨てられない。本誌でもそれらを考証した（平家の一夜城、高尾の傾成岩37号、和泉式部の墓39号など）。この中には、他地方であった話を地名に因んで附会したものもあり、こうありたいと言う願望もあり、また流浪して来たうためなどのもたらしたものもある。

八川に残る田部姓、備後屋、山内姓を、古文書でたぐってみると、八川八幡宮の棟札に天文22年多賀山新兵衛通続の文字がある。岩屋寺古文書の中にも尾園村（八川本郷地域か）権俗名を、同人が寄進したとある。このことはこの地が多賀山首藤氏の所領であったことをしめすものである。そこでしばらくこれを追って標題を明らかにしたい。

中世には山脈は障害とはならなかったほど、両地域は関係が深かった。近世もであり、木次線の全通がむしろ両地域を引き離したようである。こうした連載ができるのは、この八月下旬庄原市の山内郷土史研究会の招きで、講演をする機会を与えて頂いたのでまとめることができた。それに若干加筆したものである。

山内首藤氏の自出

鎌倉時代の末に、元冠来襲に備え東国武士で西国に所領をもつものに移住をすすめられた西遷武士団の一族で、相模国鎌倉から備後国地毘庄（庄原市一帯）に入ったものである。戦国時代の終り天文22年（1553）に毛利氏に属して重臣となり、慶長5年（1600）の関が原の役ののち萩に移り、家臣団の要職を経て明治維新に至った。

出自は藤原鎌足（旧中臣氏）といい、その15世の孫である資清は、国司として東国に下っていた父通家の任国で生れ、任地替りで上洛の折、美濃国席田郡の郡司守部資信の養子となり、武士となって守藤大夫と号した。

また主馬首であったので首藤の字を用いた。

通家—資清—資通—通義—俊通—経俊—重俊—宗俊—時通—通綱—通資

のち源頼義（八幡太郎義家と新羅三郎義光の父）の郎党となり、「首藤」と称し、曽孫俊通の代に相模国鎌倉郡山内庄（現鎌倉市内）に住んで「山内首藤」と称した。代々源氏に仕え、前9年の役（1051）（陸奥国の俘因の長であった安倍頼時・貞任父子は、衣川を根拠にして、しきりと近辺を侵したので、陸奥守に任ぜられた頼義は、子義家とともに九年間かかってこれを滅した）後三年の役（1083）（前九年の役に協力した出羽の清原武則は、その後鎮守府将軍となり、その勢力は全奥州に及んだ。陸奥守として入国した義家は清原氏を打倒した。これで源氏は大いに武威を高め、関東武士の棟梁たる地位を樹立した）には、資通および孫の俊通が、源義家の朗党として参加した。

義家—義親—為義—義朝—頼朝
為朝—義経

また保元（1156）（上皇と天皇のそれぞれの側近同志が、絶えず反目した。それに摂関家藤原氏、源氏平氏両氏の各々の一族内も両者に分れて戦った乱で、その後武士が中央政界に介入する糸口となったものである）・平治（1159）（前者は貴族間の争いに根本原因があったが、これは武士が主役で、武士である平氏が勝って、初めて政治の実権を手中にしたのである）の両乱とは、俊通は源義朝に従って活躍したが、平治の乱の時京都四条河原において討死した。

一方資清の娘（資通の姉）は源義家に嫁しており、俊通の妻が頼朝の乳母摩摩局であったことから緊密となり、鎌倉幕府成立とともに有力御家人として重用され、経俊のとき相模国早川庄（現小田原市）を領し、伊勢国の守護となり、源義経追討の功によって、元久元年（1204）に備後国比婆郡地毘庄本郷地頭職を与えられ、あわせて伊賀国（三重県）の守護となった。

これよりのち子孫相伝して維持してゆくが、建保元年（1213）の和田義盛の乱にあたり、一族が相模の住人とともに和田氏側となって北条氏に抗したために、本貫地山内庄を奮われて早川庄一得名（一カ所）に移った。その後、時通の代に地毘庄の所領も拡大され、本郷のみでなく河北郷・伊与東村・江木門田の三カ所を併有し、さらに信敷庄（庄原市内）も加わった。ほかに摂津国富嶋庄（大阪市）・信州下平田郷なども領有したが、鎌倉時代の末、通資の代に初めて早川庄を去って、地毘庄に移住し、本郷甲山に一城を築いて代々その地を本拠地とした。（一説には北方の現高野町の蔀山城に入って間もなく移ったともいう）

地毘庄は江川の支流西城川を控えた山間の谷迫の地であって、そう規模の大きくない武士団が

備北の山内多賀山両首藤氏と奥出雲①　野の仏①　明治三十五年④　短歌・川柳・俳句

根を下すには格好の地であった。補地頭を中心とする、西遷武士団の来住状況を考察した。そこで奥出雲の三沢（元飯島）・三刀屋（元諏訪部）・大西（元飯沼）の諸氏はともに信州の伊那源氏であり、牛尾（元神中沢）氏らとともに信州伊那谷から来住したことを明らかにした。これらの諸氏は150年後に、出雲守護京極氏の被官人として西下し、その代官ともなった尼子氏にとっては（本誌106～126号）、事ある毎に土着国人衆として、立はだかり目の上のたんこぶとなったことも述べた。前述の数多くの安芸・備後地方の西遷武士団とはその出身地は異っていたが同じ土着国人衆として、特に三沢・馬来両氏は、陽側との婚姻関係も深く結びつき、市場も共通するものをもって、常に提携を深めていたことは、歴史をみるのに見落してはならないことである。

土地の肥えたところは耕作に適し、また峠を越えて近隣への発展も可能な条件を備えていた。

もともと東国武士団は、比較的早くから在地支配の経験をもち、領主的性格が強かった。西国の新恩地に移住しても、その地に土着して直接に支配経営する自信があった。

このような事情から山内氏は、相模から離れるにあたって、本拠地として先進地帯にある摂津国富嶋庄を選ばずに、地毘庄を選んで入部したのは、名主・農民層の成長の著しい畿内では、直接経営をすることが困難であると判断したからである。

このような現象は、同じころに東国から西遷した武士団一般にみられることで、備後の三吉・和智、安芸の小早川・吉川・熊谷・阿曽沼・毛利・平賀・宍戸・石見の吉見、周防の三浦の諸氏などいづれも、同様な経過をたどっている。

奥出雲の三沢氏他の諸国人衆との類似性

山陰史談19号（奥出雲51 52 101号にも）では、出雲に於ける新

山なみを乗り越えた通婚関係

（この項は本誌127 128合併号の系図を、次項からは年表をそれぞれ参照のこと）

野の仏① 三界萬霊塔

この夏、五反田の公会堂の横から拙宅の方へ約100米入った左側の路端に、前から石塔らしいものが土をかぶっていたのを、近所の人に手伝ってもらって堀り出したところ、写真のような三基の石塔があらわれ、みんなで懇ろに祀った。

最中の石塔には「南無観世音菩薩」とあるのみである。右側の大きい自然石には「三界萬霊」とあり、その右に「明和七年九月」と刻んである。1,770年で、このころは八代将軍吉宗の時代で全国的に百姓一撥が起り（仁多郡でも宝永4 1,707・享保18 1,733に起っている）、享保の改革でそれが一段落したころであるが、全国的に沈静化したかにみえたが、明和頃になると再び頻りと発生しはじめている。そして天明期の連続する飢饉へと進み、一撥も最高潮へと向う。

「三界万霊」塔は、その字句からするとすべての精霊とする考え方もあるが、もともと自分にはかかわりのない無縁亡霊の意味で、それを祀った供養塔と解するが妥当であるという。

無縁亡霊の供養がいわゆる施餓鬼であり、寺院の盆行事はこの施餓鬼からはじまり、人々の先祖祭は副次的な行事である。柳田国男が「キリスト教に万霊祭がある如く、日本仏教が万霊祭をもつことが世界的宗教たるゆえん」と述べているように、古くは寺院の衆生教化の中心であった。

これが奥備後には極めて多く170を越え、全国でも有数の密集地帯といい、たたらで働く者が多かったことにもよるようであるという。（庄原市広瀬繁登調査）

備北の県民の森にあるこの塔には、たたら本床遺跡の傍にあって、天保四巳四月願主枝木徳右衛門、東城町内堀のものには天明六丙午七月吉日施主雲州人鉄師矢壁市兵衛（遺跡の傍に）とある。大馬木と蔵屋の人である。（横田史談会 松浦新吉提供）

町内の石仏、石碑、石像等のすべての調査に御協力下さい

渦　　巻　　雲　　昭和62.10.3

帰り帰てまた老いましし父母を心の中におろがみてみる

いつしかにしらがふえたる長兄の面ざし父にいや似たるかも

数年前に故人となった安岡正篤氏は，戦前・戦中・戦後を通し一貫して政界財界の多くの指導者の精神上の師となった碩学者であった。この歌は氏が10代の終わりごろ詠んだものである。私がこの人を知ったのは20歳の春で，講演を聞いてひどく感銘をうけた。その秋，著書が出されるやいちはやく求めて，むさぼり読んだが，それはきのうのことのようである。その本は「童心残筆」といい，氏が一高時代から20代の終わりころまでに綴った，随筆や詩歌がおさめられている。いまでも折りにふれて紐といている。以後最新刊に至る著書10数冊を座右に置いているが，今日精神史や歴史を考えるのにも，とても役にたっている。最初の一首は，横田に住む者以外のみんなは，こうした感懐を抱く期間が短かったであろう。二首めははてさて？　（「童心残筆」は著者が30歳に達した記念の出版）

鬼も笑う話をもう一つ。来年のお盆ころに，少なくとも当主と長子（好ましいのは全員だが）には集まってもらって，田舎の今昔を語りあってもらいたいと思っている。いかがでしょうか。

「山なみは　青くつらなり　　風立てば　雲はながれて
ふるさとの空のあかるさ　　あふれくるいぶきも若く
脈うつは　意気とのぞみよ」　（横田町民歌）

２番は「発展は人の和から」　３番は「くらしふまえて　ユートピアを」とうたいこんである。

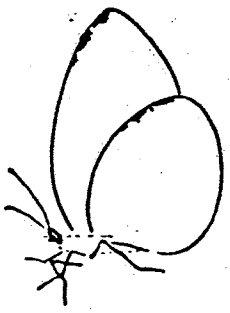
11月になると，横田町文化祭のうた（拙作の曲）が歌い始められる。この歌も40年の寿命をながらえている。

［渦巻模様］＝
ら旋形を描きながら，中心から外へ向かって広がっていく曲線模様。原始時代の殆どすべての民族に愛好された。左の紋様は町内の鳥取県近くの竜の駒で出土した後期（ｂｃ・2.000 ―1.600）縄文土器の破片の紋様。

＜付　　録＞　－－－島根県の教育広報には現職中からたびたび，巻頭言・新春随想・随筆などを依頼されたが，そのひとつ（昭和40.11.下旬号掲載）

一羽の雀

高橋一郎



小学校のころ、麦秋になると近所のよく熟れた麦畑に入っていたずらをした。麦の穂をしごいて両方のポケットにつめこんではい出し、すぐそばの小川のほとりにしゃがみ、両手の中で穂をゴシゴシこすり合せてのぎをはずし、それを口でフーと吹いて落し、口にほおばって繰返しくりかえし噛みしめる。ときどき小川の水で洗っては噛みしめて時間をかけると、ねばっこいもちが出来る。それが親指の倍くらいたまると棒の先にぬりつけて再び麦畑に入り、雀とりにかかる。土の上をはい廻ったあげく、とった雀をかごに入れて軒下につるすと夕暮になる。洋服の土を落してほっと喜びにひたる。学校へ行っている間に雀がいなくなることがたびたびあった。母に尋ねると、「バタバタしていたから逃げただろう。」という。飼うよりとるのがおもしろかったがおかしいので、祖母に聞くと母がこっそり逃がしてやったものらしかった。宿題などもなく、かばんを投げ出して夕方まで毎日、遊びほうけることの出来た昔の話である。いまは麦畑も小川もなく、そこはテニスコートと幼稚園になっている。

祖母は慶応の生れでわが家の良き時代に嫁いで来た。逆境になって逞ましくなった。芯の強いところがあり、私を叱るときには「おてんとうさんが…」と言って背骨のあるところをみせていた。その下で母は苦労した。敗戦の年の秋、祖母がなくなって間もなく母は看護と戦中の疲れが重って病み、祖母の四十九日の日にポックリとなくなった。入棺のとき、叔母が聖書を入れた。いつ読んだか知らないがボロボロになったものであった。

高等科を卒業して松江に学んだころの日記の間に、筆で書いた手紙が幾つかはさんで残してある。何日もかかって書いたものらしい母の手紙である。必ず「然るに汝らの父の許しなくば、その一羽も地に落つること無からん」（マタイ伝）「汝のわかき日に汝の造主（つくりぬし）を記（おぼ）えよ」（伝道書）という句が書いてある。またかと思っていつも読んだ。休みで家に帰ると夕食後に自信のあった針仕事をしながら、また同じことをボソボソと語ったのであった。

祖母はときたま本代のことで小言を言ったが、母はいつも弁解してくれた。私の本棚をみて弟が大学生のころ、その遍歴ぶりを笑ったことがある。自分の悩み、時代の激動とともにゆれ動いているはずかしいものが多い。いまに至るまで私の心は幼稚で、造主は影もない。

教職三十年。一羽の雀もみすてられないという句を、私の逆境に、友人の苦しい立場に、触れあった子どもに接する折に、思い出し、そのときに即して自分に説き聞かせてはいたが、それ以上には出なかったようである。まだこれからも長い。これからこの世に生きる人間としての値打ちを少しは作り出せるかも知れない。

「汝らは多くの雀よりも優（まさ）るなり。」

（横田町立鳥上中学校長）

－－－－－考えもしなかった，ワープロの高級品を恵贈されて，嬉しさのあまり手さぐりで挑んでみた。便利なものでついこんなことに及んだしだいである。次には。　お便りを乞う。いいニュースを。　＜アルジ イチ＞

馬来氏（木郷地頭・現横田町内）

2代には三沢⑦為忠の弟が、5代には全⑨為信の甥が入る。5代の妻の妹は三沢⑩為忠の妻へ。6代乗綱の先妻は三沢⑩為忠の娘、その子が7代久綱。6代乗綱の後妻は山内首藤⑨直通の娘（はじめは毛利氏の重臣宍戸元家の妻で隆家をもうけたが死別し、帰ってのち馬来氏へ）でその子が8代孝綱。その妹は邑智郡の口羽春良の妻となり、その娘は山内首藤⑨直通のひ孫の⑬広通の妻となった。

尼子経久の母の馬（真）木氏はこの馬来氏とは関係なし。（詳細は山陰史談12・13号参照）

山内首藤氏（現庄原市）

9代直通の妹は尼子興久の妻、直通の娘は馬来⑥乗綱の後妻、多賀山首藤⑪通続の妻となる。11代隆通は、分家多賀山首藤⑪通続と妻（山内首藤9代直通の娘）との間にできた嫡出子であるが、本家山内首藤の養子となったもの。

11代隆通の子で13代広通の妻は、馬来⑧孝綱の娘で口羽氏の妻となったものの娘である。

多賀山首藤氏（現高野町）

後で詳述するが、現高野町の蔀山城の領主で山内首藤氏の分家。飯石郡掛合町の日倉山城の領主もかねた。

8代通憲の妻は三沢⑨為清の子で⑩為忠の妹、その孫11代通続の妻には、山内首藤⑨直通の娘が。

宍戸元家の妻は山内首藤⑨直通の娘であり、その子宍戸隆家は、父の死後母が離婚して馬来⑥乗綱の後妻となって生んだ、馬来⑧孝綱と同腹の兄である。隆家の妻は毛利元就の娘（隆元の妹、吉川元春、小早川隆景の姉）であり、その子元秀の娘即ち孫娘は、三沢⑭為虎の妻。元秀の妹は毛利輝元の妻である。

三沢氏（三沢郷地頭・横田庄講）

7代為忠の弟が馬来②満綱に入り、9代為信の甥が馬来⑤代道綱となる。10代為忠の先妻は尼子の娘、後妻は馬来④氏綱の娘で、その子には11代為国・12代為幸と、馬来⑥乗綱の先妻とがあった。13代為清の子14代為虎の妻は、宍戸元秀の娘で、毛利輝元の妻の姪、為虎の妹は尼子滅亡後の富田城主吉川元秋（毛利元就の六男）の妻となったが、元秋が病弱で早逝した。そこで帰り、のち厳島神社の神官に嫁ぐ。元秋の病気平癒を厳島神社に祈願した願文が残っているが、切々たる心情が文面にあふれている。

俳句会九月句会抄

おくれ毛を風に任せて星祭る　浅野としお
この流れ鬼ヤンマの道風の筋　岡田蹊花
庭下駄のゆるみ引き摺り萩の庭　岡田麗水
湯上がりや雨よりつよき虫の声　小川あきお
病む友を見舞う窓べに鬼やんま　楠房子
迎え火を焚き足し睦む四姉妹　高木白虹
ねぶた舞い舞うそれぞれの宿浴衣　新出谷一華
夏帽子二つ並べて留守の孫　渡部夕峰

（重複をかえりみず各家毎にのべておいた）

中国山脈で距てられているとはいえ、陰陽の両地域のこれらの諸氏は、極めて密接な関係にあった。中世が終りを告げるとともにともども（多賀山首藤氏は天正末年後述の如く土佐に移されたが）、毛利氏に従い、萩に移りそれぞれ重臣として幕末に至っている。

この密接な関係が生じたのは婚姻関係が地域的な近隣であったからという理由からばかりでなく、経済上の物資交流を中心に軍事的にも必要性があったからである。後述する如く、飯石郡掛合町の日倉城は多賀山首藤氏の出城であったが、城主自らが長期滞在していた。蔀山との中間地吉田村の田部氏（現田部氏の祖）もその陣営の中に組入れられて、一時は武士としても仕え、重要な役割も果した。

横田（旧横田村）の生活
明治三十五年（4）

民度等級

(1)で数字をのせた農家の階層別数に、商工業雑業を加えて村内の民度を分けると

階層	農	工商雑	計
		5（商のみ）	44戸
上	39（9）	（3）	（8）
中	121（28）	64（38）	185（31）
下	261（63）	101（59）	362（61）
計	421（71.4）	170（28.6）	591

（　）内％

工商雑の中で商業者は上のすべてと、中の過半数と、下の若干（行商人）である。工業は職人であって、中と下に多く、雑業は日雇等で下の多数である。

このことは収入の統計の項で明らかにする。

横田村農会

明治20年8月創設されたが、全33年農会法の発布に基いて組織を改めた。

その目的は農事の改良発達を計るため、①講話会・共進会・品評会・競技会又は種苗の交換

斐の上川柳九月抄

一生涯米と夫に飽きてこず　松田牛歩
いい風が女の胸をひろげさせ　松浦木公
一雨に秋の気配が身にせまり　古川松
梅雨晴れて入道雲の足早し
カナカナが今日の暑さを忘れさす　若槻愛散人
カナカナが鳴いているかと老いた姑　松浦久寿子
おかしげな話大手を振って行く　安部春恵
居所が決っていない腹の虫　松浦亜以
施餓鬼の経聞くかたわらに蟬時雨　若槻白馬
亡き夫と語りあかすか月下美人　藤原ユキ子
人の顔見れば暑さを口走る　杠京子
後わずか思えば気がせく人の道　安部正子
同病の相憐れみが友の縁　横山まこと
置き忘れ置いたつもりで妻を責め　田中有樹絵
夏休みセンコ花火に明け暮れる　高木白虹
　　真綿よし子

ミニの虹立つ　簸の上短歌会

褐色に花は萎れてそのもとに毬やわらかき小さき毬栗　常盤はるまさ
空いちめん不気味に赤き原爆の日を想ひつつ署名したたむ　松浦愛子
朝ぬちを君が刈りたる畦道に残されし月見草大きく咲ける　小早川恵子
葉柳のゆれしづまりて雷(かみなり)の遠のきゆけり梅雨明くるらむ　岡田時子
雨霽れて巣立ちの朝か親鳴のしきり飛び交ひ子をさそう声　永井弥生
菜園に消毒すれば陽の差して噴霧の中にミニの虹立つ　佐藤喜代子
蟬の声のしげき真昼を水蓮はみ寺の池にひっそりと浮く　景山悦子
猿すべりの花散る寺苑は夕迫りカナカナ鳴きて夏終らむとする（信州飯山正受庵）　安部夕波

に関すること。②講習試験・調査・巡回教授又は農事模範に関すること。③種苗・種畜・蚕種・肥料・農具等の生産と交換分配に関すること。④動植物の病虫害駆除と予防　⑤農家の貯蓄又は普及に関すること。⑥農地の整理・開墾・耕耘・灌漑・排水・林産・畜産・蚕業・農産物の調整に関することである。今日農協の業務の主力となっている、販売、購売、信用の各部門はない。農会の会計予算額からみても前記の如き農家の指導に中心があるし、後述する生産物の量と価格が徴々たるものであることから明らかである。

上部農会としては郡農会があったが、協議連絡機関であった。この年明治33年の事業としては、稲作品評会と繭品評会が予定され、規定が設けられている。前者は第一期は苗代（一畝歩単位）、第二期は本田一畝歩以上（数畦でもよい）と採点が行われ、結果は水田に各等賞別の色付の旗を立てて表彰した。別に賞状と一等80銭、二等40銭、三等20銭、四等10銭、五等（賞状のみ）を授与した（或は金額相当の物品のこともあった）。

後者の繭品評会は、原質・形状・色沢・緊綾・殺蛹を各20点とする100点をもって一～五等とし、賞品は最高60銭とし、五等は賞状のみとしている。

次に農会又は村内団体の活躍は次のようであった。

①農会は蘭草の蕃殖を奨励するため栽培者に、一畝歩について30銭宛を補助したところ蕃殖の傾向があらわれた（筆者が子どものころの60年前には今の横田役場の庁舎の西側あたりで、栽培されたことを憶えている）。その後畳表織組合も出来るほどになった。

②加食部落では7～8年前部落一円となって三椏を栽培し、毎年の収益平均50円をあげ、各自は諸税にあてて幾分かは貯蓄にふりむけた。利倍増殖の結果金額600円に達した。145号(2)の統計を参照すると、当時としては大金であった。昭和初年まで続いていて、横田町尻の現公民館向いでは、三椏を蒸す場所があり、各家庭にてその皮剥内職が盛んであった。

③大字稲原の稲田では、実業会が組織され、部落共有林を焼立て、毎年蕎麦或は蓑苔の類を蒔付けその収益をもって、三椏苗を買入れ、翌年春季にその山に栽殖した。その面積は五町歩余に達した。これが収益を得るようになれば、その額はけだし莫大になるであろうと誌してある。

④稲田部落には、農学校卒業生によって青年有為会が生れ、農事一般の改良に心をむけるかたわら、園芸術即ち内外の果樹苗を仕立る他、諸作物の試験をはじめた。試験のための土地はおよそ一反歩であった。新らしい農業改良への動きの芽生えは、このように生じていた。

一方地主層有志による農談会が組織されて、品種改良等上からの農業改善への努力も行われた。これについては本誌58 59 60号を参照のこと）

予告

奥出雲150号記念として近刊
奥出雲文庫　3
「神話に強くなるため スサノオとさまよっている覚書」
（A5判　150頁）

会員頒布一部百五十円／六九九－一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0－601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

「奥出雲」編集方針（キャンペーン）① 横田＝中世と伝統産業（たたら＝美術刀剣・刃物、そろばん＝工芸品、畜産）と教育と福祉の町

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 151 号
（11月号）
昭和62年11月7日
奥出雲編集集団©

備北の山内多賀山両首藤氏と奥出雲② 野の仏② 明治三十五年⑤ 短歌・川柳・俳句

山なみで分けられた陰陽の中世史
備北の山内・多賀山 両首藤氏と奥出雲②

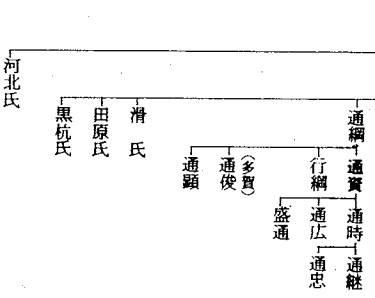
承久の変と山内氏

承久の変1,221に地毗庄（現庄原市ならびに比婆郡西部地域）の地頭山内重俊の長男俊業は朝廷方に、次男宗俊は幕府方にしたがった。俊業が死殁したので地毗庄その他（既述）の地頭職は幕府方であった宗俊に相伝された。しかし敗れ朝廷方であった俊業系にも、地毗庄内の若干とその他の所領が相伝されていた。

その後80年間のことは本論からそれるので省略し先へ急ぐ。

南北朝時代

乾元2年1,303には宗俊系の所領はその孫通綱から子通資に譲与され、通資は西遷して地毘庄に住し、（一説には、庄内の最北現在の高野町の蔀山域に入ったが、積雲寒烈の故に弟五郎兵ヱ尉（通俊）に譲り、山内（現庄原市）の甲山城に移った。そして蔀山城主の方は「多賀山首藤」と称し、甲山城主の方は「山内首藤」と称するようになったという）



相模国内を本拠とする**俊業**（以下この系統はゴヂックで）系**時通**は、鎌倉の警固役をし又高師直に従っていた。建武中興が挫折し、四條畷の戦（楠正行が討死し、南朝はこれより衰勢へ）の直後、**時通**は高師直に従い吉野の南朝（後村上帝）攻めに加った。これを機に師直は勢力を挽回し、足利直義との対立を激化させてゆく。これが直義と兄尊氏との抗争に発展する。

宗俊系（甲山城）の通時はこのころ直義方に従っており、戦場に向うにあたり子熊寿丸（通継）に地頭職など（地毗庄と摂津国富島庄等）を譲与したが、二年後に死殁した。

この年は直義と尊氏との抗争の最中で、直義の養子で備後国の鞆にいた中国探題の直冬が尊氏の討伐軍によって九州に逃げ、直義は出家した。通時の死の状況は明らかではないが、この激動する政治情勢と密接な関係があったものと考えられるという。

九州の直冬が、北九州の小弐・大友両氏の帰服を得て勢力を固めるのをみて、尊氏は討伐の決意を固め、師直以下の大軍を率いて出陣した。この時直義は京都から大和に走り挙兵した。翌観応2年1,351 2月、摂津国に於て両軍が決戦したが、尊氏・師直軍が敗北し師直一族は殺害された。その後の兄弟の間の和平状態は数カ月で、両者と南朝との三者鼎立、あるいは合従連衡による錯雑した政治状況が展開する。この時にあたって山内一族一揆（一揆とは道を一つとするのが元の意）が、惣領熊寿丸（通継）代道円ほか10名の連署契約で形成された。

内容は尊氏・直義の不和で動乱が激化し、在地領主層が、南朝・尊氏・直義の三派に分れて戦っているが、山内氏一族としては武家の御恩を賜ったので、その恩に報いるため、御方（直冬方）に軍忠を励むことをのべている、緊急の契約である。

備後国守護は直義党の上杉氏であったが、直義が北国に逃れたので、尊氏は備後国確保のため直系の岩杉氏を守護として下向させた。

この頃の出雲国馬来郷の地頭職は、備中国成羽郷の信原氏が、湊川の戦で直義の危機を救った切によって直義より与えられていたようである。

しかし来住した跡は明らかでない。間もなく出雲国守護となった山名時氏によって、その一族馬来氏が馬木郷地頭職として来住し、中世末まで続いた（横田町誌及び山陰史談12 13号参照）。このころ直義の勢力は三刀屋氏朝山氏を介して出雲に浸透しているし、尊氏は鰐淵寺を介し、南朝は鰐淵寺を介し横田庄にも浸透している。

やがて横田庄内には山名氏の勢力が強力に入り、山名満幸が守護になると、横田庄を横領した。これが明徳の乱1,391の発端となり、遂に満幸が敗れ翌年出雲守護は京極高詮に移った。

ところが備後国内では、守護岩杉氏と前守護上杉氏とが、それぞれに従う在地領主層を引き入れて合戦をはじめた。中央に於ける尊氏と直義との抗争の反映であった。さきの山内氏一族一揆は、尊氏直系の守護岩松氏と組織に戦うための一族内の直冬党が結束を固めたといえる。契約状に署名している11名はすべて宗俊系であった。直冬は山陰の山名氏との緊密な連繋を保

ち、石見・安芸・備後を中心に中国地域に大きい勢力を有していたから、山内氏総領家（宗俊系）はそれに賭けたということである。

俊業系はどうかというと、その時の当主**時通**の養子になった**杉若丸**（宗俊系の通時の次男、のち**通忠**という）である。文和3年1,354には直冬と山名時氏らの軍勢が京都に迫ったため、尊氏は近江国へ遁れた。翌年正月には直冬の山名の軍勢（南朝方）が入京した。しかし2月になると尊氏が近江国から、岩松らが南方から京都を挟撃し、一カ月あまりの激烈な戦争ののち京都を奪ったので、直冬軍は中国地域に引き退いた。

この間にあって**杉若丸**（**通忠**）は、京都で直冬軍を没落せしめるまでの軍事行動に、尊氏方の守護岩杉に属して、代官を差向けて協力していた。従って**俊業**系の**時通**と養子の**杉若丸**（**通忠**）は、一貫して尊氏・師直派に属して行動しており、直冬党の一揆衆（宗俊系）とは全くその立場を異にしていた。

そこで直冬党の軍事力として機能していた山内氏一族一揆は、その勢力の衰退によって、そのよって立つ基盤を失ひ、崩壊してゆくことになった。

やがて幕府方の攻勢の前に屈し、守護が岩松から細川頼有へと交替、その兄頼之が中国管領として下向することによって、通継は直冬方の機能を放棄し、離れて頼之に帰服してしまったのである。その後直冬も備後国から去り、山陰の山名時氏と幕府（尊氏）方に帰服した。

宗俊系（一族一揆の直冬党）の通継と、一貫して尊氏方に味方した**俊業**系の**通忠**との間はどうであったか。

貞治4年1,365年、通継は相伝所領すべてを、**俊業**系の**通忠**に譲与した。「子無きによる」としているが、前述の足利氏内訌の終結と無関係ではあるまい。承久の変後の宗俊・**俊業**二系統に分れて相伝されてきた山内氏の所領は、一貫して尊氏方に従って動乱を乗り切った**俊業**系の**通忠**のもとに統合された。

その後山内氏惣領**通忠**は広安4年1,371、九州探題今川氏に従って九州に渡り、北九州各地に転戦し、5年余りその地で過した。

その留守中、西隣の地頭三吉

野の仏②
龍の駒

「龍の駒」とは、斐伊川の支流で町内大呂の中丁で合流する福頼川の、上流一帯の総称名である。

本誌148149合併号の載っていたように、中世の建武、年間の昔、出雲守護であった塩冶判官高貞が、後醍醐天皇に献上した名馬（駿馬）を産したところという。

福頼川上流の右岸の山の一角の岩上にはその名馬が蹄の跡を残したといい伝えている。また向ひの左岸の高き処には、その天馬すなわち駿馬が、膝をついたという、窪地がある。

また福頼川の川の瀬に、天馬に乗って来た天人の用いた鞍が落ちたところという、鞍が淵がある。さらに鞍にあった鐙（足踏）が落ちたという、鐙が淵もある。さらにその下流左岸の道路脇には、天馬に乗って来た天人がかぶっていた烏帽子が落ち、のち岩となったと伝える烏帽子岩もある。

附近には馬が廻という処もあって、このあたり一帯には、馬に因んだ名をつけたところが多い。

（横田史談会々員　鉄池正治提供）

写真は**烏帽子岩**

道秀は、地毗庄は闕所（領主の欠けた荘園や所領のこと）であるといって乱入した。

この危機は九州から帰国した通忠によって克服され、領主制の進展の中で、一族庶家の統制に進み、一方村落支配への取りくみに向った。

以上の記述は岸田裕之氏（広大教授・第4回陰陽郷土

（4頁へ）

横田（旧横田村）の生活

明治三十五年(5)

—生産物と職業からみる収入状況①

農業収入

横田村の収入の主力をなすものは農林畜産物の収入である。統計数字をならべただけであるが、じっとみて今日と比べてみると当時の生産物と今日との比較ができるとともに、生活の様子をありありと知ることができる。素朴であった田舎の生活がよみがえってくる。そう言っても、大正の時代の経験が少しでもある者でないと、それは無理であるかも知れない。

飽食の時代と比較すると甚だしい差がある。このこともいろんな考えが浮んで来る。明治三十五年(1)で記述した生活水準の統計をもう一度みると、この生産物やその水準と、ピタリと一致する。

作物で読みのわからないものが少なからずあることは、これまた時代の差をしめすもの、若干読みを書いて置こう。

蕪青（かぶ）、胡蘿蔔（こらふく＝人参の異名）、諸蕷（しょよ＝やまのいも）、仏掌藷（ぶっしょうしょ＝つくねいもの異名）、巻丹（けんたん＝かのこゆりの異名）、薤（かい＝大にら＝らっきょう）、越瓜（えつか＝しろうり）、瓠瓜（ひさご）、上當帰（うど）、欵冬（くわんとう＝ふきの異名）、菠薐草（はりょうそう＝ホーレンサウ）、萵苣（ハチサ）、蒿菜（たかな）、薑（しょうが）、山菖菜（さんしゅさい＝わさびの異名）、蕃椒（ばんしょう＝とうがらし）、苹梟（ひょうか＝りんごの果実）

種類	作付反別	1反歩収量	総収量	単価	総価格	摘要
1穀類	町反畝歩	石斗升分	石	石につき	円	
粳米	309. 7. 2. 27	2. 1. 0. 0	5. 017. 880	11円000	5. 5196. 680	
糯米	24. 7. 3. 21	2. 0. 0. 0	494. 740	12. 000	5936. 880	
大麦	25. 6. 3. 13	1. 2. 0. 0	307. 608	5. 500	1691. 844	
小麦	6. 9. 4. 00	8. 0. 0	55. 520	8. 000	444. 160	
粟						
蕎麦	2. 1. 9. 10	1. 0. 0. 0	21. 933	7. 000	153. 531	
蜀黍			1. 250	6. 000	7. 500	
計					6. 3430. 595	
2豆類			石	円		
大豆	21. 0. 2. 00	1. 2. 0. 0	252. 240	8. 000	2017. 920	
小豆	6. 9. 4. 00	8. 0. 0	55. 520	9. 500	577. 440	
豌豆	2. 0. 9. 15	1. 0. 0. 0	20. 950	6. 500	136. 175	
茶豆	0. 5. 15	1. 0. 0. 0	555	6. 500	3. 575	
計					2685. 110	
3蔬菜類				円		
①大根	3. 3. 1. 05	120貫	3. 9751貫	メ 030	1192. 530	
蕪青	1. 1. 5. 20	80	9251	026	240. 526	
胡蘿蔔						
午蒡	3. 7. 28	50	1898. 4	120	227. 808	
甘藷	0. 4. 27	30	147. 0	200	9. 400	
馬鈴薯	3. 7. 21	20	714. 4	080	59. 312	
里芋	5. 1. 03	6石 0.0.0	30石600	石 4. 000	12. 240	
藷蕷	4. 29	300貫	139. 2貫	メ 200	27. 840	
仏掌藷	3. 20	200	74. 8	200	14. 960	
巻丹	1. 1. 02	60	66. 4	600	39. 840	
薤	9. 18	300石	2石880	石 4. 000	11. 520	
蒟蒻	6. 09	80貫	50. 4メ	メ 210	10. 584	
計					1956. 720	
②瓜類						
甜瓜						
西瓜				円		
茄子	5. 7. 03	18000コ	10. 0274コ	メ 005	501. 370	主に畦畔にて
南瓜	2. 3. 19	600	1415	050	70. 750	
越瓜	1. 3. 19	600メ	812メ	100	81. 200	
瓠瓜						
胡瓜		900コ	9284コ	010	92. 840	
計					746. 168	
③葉茎菜類				円		
葱	1. 1. 24	900メ	1065. 0メ	メ 080	85. 200	
土當帰	1. 05	60	23. 4	500	11. 700	
欵冬	1. 7. 00	900	2729. 2	050	136. 460	主に畦畔にて
菠薐草						
萵苣	4. 7. 20	300	1321. 7	060	73. 302	
蒿菜	6. 29	300	20. 9	060	1. 254	
蒿菜	5. 2. 18	500	2630. 5	060	157. 830	
計					465. 746	
④香辛料				円		
薑	27	300メ	26. 8	メ 350	9. 380	
山葡菜			3. 7	1. 000	3. 700	山野畦畔
蕃椒	4. 26	150	72. 9	200	14. 580	
紫蘇	4. 28	150	174. 6	200	34. 920	豆畑桑畑の間
計						
4果実類				銭	円	
梨	120		3148コ	コ 0. 8	25. 184	
枇杷	3		1. 7メ	メ 40. 0	680	
柿	639		440. 500コ	コ 0. 5	220. 250	
桃	15		150コ	コ 0. 5	750	
梅	113		14石700	石 500. 0	73. 500	
杏	87		13.メ620	メ 300. 0	40. 860	
葡萄	3		2.メ500	メ 500. 0	750	
苹梟	24		195コ	コ 3. 0	5. 850	
計					267. 824	

前号訂正　1頁4段24行・両乱とも、3頁2段20行・横田庄請

俳句会十月句会抄

灯火親し今朝届けらる新刊書　浅野　としお
それぞれに煌き異なる草の露　岡田　蹊花
洗髪おくれ毛かき揚げ十三夜　岡田　麗水
秋霖や天平甍を凝視せし（風土記の丘）　小川　あきお
秋の日をひろいこぼして徒歩の道　門脇　花子
新涼や墨ふくませて寿の一字　加納　信子
牛小屋にはじける様な秋の草　楠　房子
急死の子送らぬ慣らい秋の風　新出谷　一華
孫の置く赤い風船秋しぼむ　錦織　富江
秋を行く園児ら何を語らいぬ　峯石　美代子
髪長き女コスモス揺らし過ぐ　渡部　夕峰

女郎花 そして茜雲　簸の上短歌会

ホッケーのママさん選手の越前訛姑への電話をほのぼのと聞く　永井　弥生
天鵞絨のごと艶めける牛を牽く飼主の顔の皺ふかきなり　松浦　愛子
夕光に鶏頭の色ふかまりて養老院をつつむ黄昏　岡田　時子
女郎花の色ふかまりて暮れにけり茜の雲もとくうすれぬて　小早川　恵子
いくさありてわれは征きにきいくさゆえ汝は死にたりいくさ口惜し　常盤　はるまさ
若杉の育ちて暗き林道に水引草は紅くゆれをり　佐藤　喜代子
赤蜂に刺されたりしや駆けてゐし仔牛俄かに倒れ動かず　景山　悦子
叢に蟋蟀すだく畑に来て白露の朝を小さき茄子とる　野村　節子
対話なき一日暮れて灯ともればむなしき想ひ胸をよぎりぬ　安部　夕波

史研究会の講師）の論文の概要を掲載させて頂いたものである。これらは山内首藤家文書をもとに、時代の流れの中で解釈したものである。

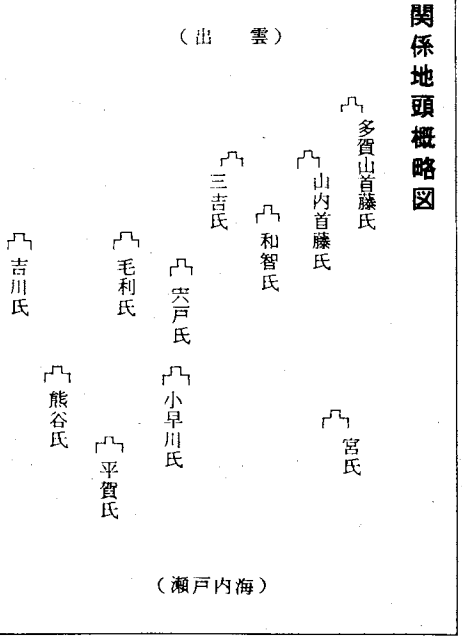
ひるがえって奥出雲の三沢氏についても、断片的な資料からみると、開拓に伴い庶家が増加し、これらの一族庶家の統制にいろいろと配慮したであろうことが推定できそうであるが、その数の不足と私の菲才のため進んでいない。山陰史談14号に三沢氏の初期における、庶家の成立については若干明らかにしたが、その続きを執筆していないのはそのためである。大筋は明らかにしているが、資料の裏付けができないためである。

奥出雲を深めるため、奥出雲の南の備北地方が、資料もあり研究も進んでおり、当地との関係も深かったから、それを調べることによって、三沢氏の研究も深めることができると思って、折に触れてまとめていたのである。

斐の上川柳十月抄

葉鶏頭真赤にもえて秋飾る　安部　春恵
息子にもまだ頼られて稲を刈る　藤原　千代子
全共で牛は泣くよな目をしてる　松浦　久寿子
病床をしきりに見舞う亡母の顔　藤原　のぼる
愛妻家小指で示す女も無し　松田　牛歩
肩書が邪魔して気持ちよく酔えず　松浦　木公
台風に泣かされ雨にもたたられる　松浦　亜以
総裁の行くえ秋空に似てけわし　若槻　愛散人
秋茄子を食べさせてやりたい嫁が無し　佐佐木　千世
夕暮れに峡をまたいで派手な虹　若槻　白馬
秋風に真赤に踊る彼岸花　横山　まこと
六姉妹とんと昔を笑いこけ　杠　京子
野良仕事せきたてられて秋深し　真綿　よし子
万灯会ゆらぐほのおに手をあわす　田中　有樹絵
花嫁は車せましと高島田　藤原　ユキ子
老いが来て眼やら耳やら故障する　安部　正子
見舞客ソット水割りしのばせる　渡辺　好之
手をあげて園児とまどう交差点　田中　芳春

関係地頭概略図



会員頒布一部百五十円／六九一一八　島根県仁多郡横田町一、〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江01601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

「奥出雲」編集方針① 横田＝中世と伝統産業（たたら—美術刀剣・刃物、そろばん—工芸品、畜産）と教育と福祉の町

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 152 号
（12月号）
昭和62年10月5日
奥出雲編集集団©

山なみで分けられた陰陽の中世史
備北の山内・多賀山両首藤氏と奥出雲③

山内氏代々と奥出雲

高野山の蔀山城に下っていた①**通資**は元享2年甲山城（庄原市）へ移ったという。その前年高野山の功徳寺の堂宇を再建し、真言宗を臨済宗に改めて菩提寺としたという。

②**通時**は養子で天徳2年1,330年譲りうけた。③**通継**は北貞和3年1,347に継いだが、25才でなくなり、子がなかったので、弟通忠が翌貞和4年譲られて跡をついだ。当時一族の庶子たちは、それぞれ近傍の地に拠点をもち開拓しながら蟠踞していた。

②通時の弟（①通資の三男）盛遠は、暦応5年1,342に池原のゆきむね鍛冶屋、文和4年1,355には高山門田池原田畠在家等地頭職（いものやを含む）を譲渡されている。また延文4年1,358の寄進状では、鋳物屋御堂は盛通のものであり、文和4年にはその妻乙寿女は鋳物を譲与されている。

これらからみると盛通、乙寿女は、鍛冶屋・鋳物屋すなわち鉄品生産との密な関係は疑う余地がない。出雲ではこうした事項のある中世文書は今のところ皆無である。横田に中村市場があって目代（代官）がいたことを示す古文書の写しを、11月中旬に入手したが、鉄のことは全く不明である。

庄原一体は砂鉄を含む大量の土砂が集積する、比和川と西城川との合流点である。盛通は恐らくこの上に立って、鋳物鍛冶によって、堂舎で精錬・金打・鋳造されるまでの技術工程の、経営管理にかゝわったと考えられる（規模は明らかにできない）。その後の文書はないが、230年後の天正14年1,586の⑪隆通時代の文書に鍛冶屋のことがある。山内氏が勢力を増して行った背景にこのことは見逃がせない（岸田論文）という。このことは横田庄に於てもあったと思われ、やがて三沢氏が地頭請所としてから急速に抬頭したこととともかかわりがあると思うが、文書がない。

山内氏は（岸田論文より）、当初は①代惣領通資を中心に、弟達が懸田・滑・田原・黒杭と周辺に居住していたが（その地名を姓として）、次弟に惣領家の嫡子の完全単独相続制へ移り、庶子に扶持を加え、庶子・一族を家臣化していく方向へ進んだことが認められ、宝徳3年1,451⑥時通は「恵蘇郡地毗庄惣領職」となっていくという。これは、三沢氏に於ては、系図の中の記入事項で明らかである（山陰史談14号）。しかしこれも初期段階で、中期以降は明らかにし得ないが、一族の配置状況と寺社文書から、山内氏研究の成果をとり入れて輪郭は明らかにできている。

④**通忠**は兄通継の跡をついだ。文書の発信者は明らかにできないが、応永元年1,394に表現は異るが、内容の同じものが2通ある。戦功による所領宛行状である。

山内下野守通忠給之
備後国恵蘇郡内上村事
同国奴賀東西事
出雲国横田庄事
伯耆国日野郡内伊賀村
備中国井原庄事
右依致忠勤宛行之状如件
応永元年八月一日

所領を加増されたもので、応永元年とあるから、明徳の乱による論功行賞によるものであろうか。明徳の乱の主謀者の一人山名満幸は、出雲守護職の権限をこえて、仙洞御所領横田庄を横領したので、乱が起った。敗れたとはいえ、横田庄は次のように厳として御所領であった。乱後の明徳4年横田庄は、北朝仙洞御所の後円融上皇より後小松天皇に伝領されており、その中の岩屋寺領は院宣で安堵されている。また応永元年には、後円融上皇追善のため菩提所泉涌寺へ、横田庄の半分が寄進されているから、右の横田庄とは、後世の文書を加えて判断しても、今日の八川地区内尾園村を中心とする小地域である。

明徳の乱の終ったのは、明徳2年あり、山内氏は足利尊氏以来、足利方として活躍に所領を拡大している。乱後将軍義満は山名氏の勢力を削滅したことによって、幕府権力を一応安定することができた。明徳4年通忠は地毘庄附近で所務職補任をうけている。これもかゝわりがあったからであろうか。

⑤**熙通**乱後一時期細川頼之が兼ねていたが、応永5年1,397に入ると備後国守護職は、山名常熙となり山名時代に入る。通忠は山名氏より所領の安堵をうける。8月に通忠は子⑤熙通にゆずる。翌6年10月義氏の下文によれば備後国信敷東方地毘庄七郷三上高郷の地頭職と、摂津国富嶋庄地頭職を安堵されているが、横田庄・伊賀村・備中国井原庄のことは見えない。横田庄は厳として皇室と泉涌寺領であった。応永19年に、後小松天皇は譲位後も5年間所持していた横田庄を花園天皇に譲っている。

⑥**時通**は父熙通より応永33

備北の山内・多賀山両首藤氏と奥出雲③　聖母マリヤと観音　明治三十五年⑥　俳句・短歌・川柳

年1,426惣領を引継いだ。文安元年1,444には備後国守護職は山名持豊（宗全）応仁の乱の西軍の旗頭）が兼ねた。この年時通は守護より所領の安堵をうけている。

永享11年1,430の横田八幡宮の正遷宮棟札によれば、地頭⑦三沢信濃守為忠が本願である。これは横田庄内へ三沢氏の支配が及んだことを示すものである。このころが、岩屋寺文書にある三沢氏が朝廷より命をうけて、地頭請所代官となったころであろうか。

⑦泰通　宝徳元年1,449泰通は父時通から家督をうけつぎ、引続いて守護山名氏と密接な関係をもった。

かっての出雲守護山名満幸の山名氏と、このころの備後守護の山名氏は、同族であるが、明徳の乱の時の山名一族結集の時加わらなかったので、乱後生きのび、それらはそれぞれ各地の国の守護となった。

備後国守護職もかねた山名持豊（宗全）は室町幕府に於いて将軍につぎ、実質の実力者であった。山名氏はこゝまでふたたび成長した。

中世が新らしい様相をしめすのは応仁の乱からである。こゝで若干それについてふれておく。

応仁の乱　室町中期の戦乱（応仁元1,467～文明9 1,477）。室町幕府は強大な守護大名とそれらの相互牽制の上に存立していたが、三管領の斯波・畠山両氏は内訌で衰え、細川氏のみとなった。明徳の乱で一時衰えたが、再興した山名氏がこれに対抗した。山名氏の荘園侵略の拡大等はそれを激化したが、幕府の制圧力は弱い上に、将軍義政・日野富子らによる政治の頽廃に対する民衆の反抗も燃え上った。更に地方守護大名も自己の基盤たる在地武士を中心とする下からの動きで動揺を続けた。時に将軍継嗣問題が起り、こうした各方面の対立が、細川・山名両氏の対立にもつれた。両勢力の衝突は応仁元年で、細川勝元（東軍）は天皇と24カ国10万の兵を率い、山名宗全（西軍）は、大覚寺統と20カ国9万の兵で京都で戦った。次第に周辺に及んだが勝敗定まらず、他方京都に集った守護大名が留守の地方も乱れた。11年間の戦乱の結果京都は焼野原、全国各地が乱れて戦国の世となり、室町幕府は歴史的生命を失った。

洋の西と東
聖母マリヤと観音

法隆寺を訪ねた数は駈け足見物も含めて、20回を超える。いつも数分間でもと足をとどめるのは、百済観音と夢違観音である。それらのいろんな写真も数多く手元にある。

60年近い昔、松江の出雲劇場（駅通りの今のやよいあたりにあった）の舞台で、リリックソプラノ歌手—関屋敏子の、グノーの「アベ・マリヤ」を聞いた印象は今も色濃い。三年位のちのドイツ映画「未完成」で、主人公シューベルトが、心の傷手をうけて、森の中の聖母マリヤの像に近づいてゆく場面で響いた、シューベルトの「アベ・マリヤ」も耳の奥に今も残っている。

先年ヨーロッパを訪ね、スイスのジュネーブから、ルッツェルンへ向う途中の片田舎の道端で、旅行中に是非出会いたいと思っていた、木作りの小さ聖母マリヤの像が、2米ほどの高さの丸太棒の上にのっかっているのを見た。

聖母マリヤの祭壇画や彫刻（石像・石柱など含めて）は、ヨーロッパの到るところの町や村にあるという。教会や家庭や外の路傍にも、橋の上にも立っていて、人々の無事を守り、畑の収穫を見守っている。ヨーロッパ人は、ヨーロッパを「マリヤの国」「マリヤが守護しているところ」と信じて来ており、ヨーロッパの精神風土、文化現象の中心にあるという。私共はとかく芸術的作品のそれにのみ出会うが、庶民の願いや感謝をこめた、幼稚と思われるような素朴なものは、至るところに奉納されているという。

それらは日本の絵馬にあたるもので、馬が暴れて転落したとか、伐採の樹木が思わぬ方へ倒れて下敷になったとか、雪崩・落石の不幸にあったとか、良き結婚相手が見つかるよう、子供が授かるようにとか、また飼っている牛や馬の数をかいて祈るもの、旅の平安・戦争・火災・海難などを祈ったものもあるが、やはり病気が圧倒的に多いという。そして「助けをいただきました」「願いを叶えられました有難うございます」とのみ書いたものもあるという。

これと似たのが、仏教における観音信仰であろう。近くでは33番の横田札・仁多札・出雲札であり、こうしたものは特に関東以西の日本各地に多い。

観音即ち観世音菩薩は、わずかな経典を拠り所とするに過ぎないが、この信仰は平安時代末期から、燎原の火が燃えるように、民間にひろがった。時代が待望していたのであろう。経典では観音は善男子であるが、それを無視して女性的、母性的なやさしさを示す存在ともなって下から湧き上り広がった。

マリヤ観音は隠れ切支丹が観音と呼んで、実はマリヤを崇拝したといわれるが、両者の親近性は、何か人間の心の奥は一つであることを感じさせる。

ともに暗黒と激動のさ中でも、人間の文化の理念のなかに生きて、人間に慰めと励ましを与えて来たようである。愛や信仰の情熱を生み出す原動力となってきた。常にしいたげられ、貧しかった庶民が、愛そのものを包容し、暴虐や無知のいたましさを浄化し、愛（仏教の慈悲は愛よりやゝ消極的だが）へと変様させる祈と力の源泉であった。

横田（旧横田村）の生活
明治三十五年(5)
―生産物と職業からみる収入状況㊦

前号に続いて数を中心にのせておく。ひまな時にじっくり読んで頂くと、生活の各方面に村内での自給自足状況がわかる。

それも衣食に強く、貧しかったその当時の生活の基盤がわかる。住については木材業というものも発生していない。木挽業を営むものが、依頼によって伐採し製材していた状況をしめす、木材収入はあるが、専業はもとより副業にもその業はない。他村のものが、その都度入っていたのであろうか。従って大工の専業や副業もみえない。以前に記したように、堀建ての家が普通であった。それは経済が許さなかったその上庶民に対する藩の抑制策が強かったことの名残りである。広瀬町の古い町並の家の大きさ構造はそれを多分に今日まで残している。

⑤特用作物では、明治になってから、養蚕業が重要国策としてとり上げられて奨励されたためである。10数年たつと郡内にも製糸（繭から生糸）工場ができる程になる。麻布も依然強い。

前茶が多いのは、明治になってからの急速な流行振りをしめすものである。これは菓子製造業④、菓子販売業⑬とも関連す

	作付面積	収入
⑤特用作物		
桑畑	15町	2895円
大麻	2.7	569
楮		101
三椏		31
	1.1	104
番茶	0.4	42
煎茶	1.2	249
藺	0.9	313
芥子	0.08	12
胡麻	0.02	29
蕓苔	2.00	118
計		5453

⑥畜産		
3才未満	牡牛	51頭
〃	牝牛	32
3才以上	牡牛	168
〃	牝牛	85
3才未満	牡馬	14
〃	牝馬	29
3才以上	牡馬	14
	牝馬	154
鶏	牡	143
	牝	280
仝卵売却		3338ヶ
蜂蜜	30箱	1.6943円

賃貸又は駄賃労働に従事する牛馬
64頭 1頭 年10円
但 馬は農閑の冬季労働の砂鉄運搬に用いるもの。

⑦林業収入	
木材	1263円078
薪	2955.000
竹材	101.400
筍子	252.800
松脂	7.312
木炭	1058.250
栗実	357.750
竹皮	9.260
樹皮	30.800
茅	190.500
五倍子	30.154
蘭物	31.500
苗木	425.000
計	6183.879

⑫産出肥料			
人糞	9303荷	0.300	2790.900
年間同1人 13.5荷として 2658人分			
人尿	1.1961荷	0.030	358.000
仝 4.5荷として 2658人分			
厩肥	1.1265メ520	10メ 0.040	5462.780
蚕肥	29メ250	0.060	175.500
鶏肥	1メ692	0.200	33.840
木灰	3546石	石0.300	106.380
焼土	250メ	10メ 0.005	1.250
紫雲英・苜宿	＞100メ370	1メ 0.010	1003.208
計			9931.150

	生産高	単価	差引利益
⑧工業収入			
酒類(3戸)	756石790	酒 升0円320	2876円500
		味 0.500	
		焼 0.700	
醤油(2)	211.00	0.100	211.000
酢(1)	41.0	0.100	41.000
麹(3)	51.0	0.125	195.000
笠(3)	4600ヶ	0.014	42.750
竹細工(3)	1587ヶ	0.172	156.640
傘提灯(4)	1700本	0.720	196.600
漆器(1)	400膳	0.600	120.000
算盤(14)	6060丁	0.350	660.540
畳床(1)	780枚	0.800	390.000
畳刺(9)	3686		480.200
簞笥建具(2)	簞 140本	3.400	＞223.500
	建 130本	0.500	
豆腐・コンニャク(12)	4.9745丁	豆 0.010	97.340
		コン 0.050	
菓子(4)	5.6800ヶ	上 0.010	181.000
		下 0.005	
藺枕(30)	1.8000ヶ		
織屋(5)	木綿 400反	50.000	＞317.980
	絣 402メ	25.000	
織工(88)	1.3700人	0.250	3154.900
花莚会社(1)	9608ヤード		欠損
仝織工(18)	245本	1.400	551.090
理髪(5)	5474人		207.440
写真(1)	120		80.000
鍛工(4)			392.500
煙火製造(1)			20.000
機業(6)	368反	0.350	114.400
鋳掛業(1)	500ヶ	0.050	18.000
紙すき(1)	150束	0.120	20.500
呉座業(3)	111	3.500	19.250
鋤作業(1)	38丁	0.600	9.500
計			1.0919.230

⑪副業収入			
砂鉄	1067ダ	3.400	
莚	1396枚	0.060	
縄	333	0.100	
ツマゴ	1650足	0.007	
藁草履	2250	0.010	
炭焼業	5.2458メ	0.060	
収入	475	原料 12.000	305.470
張物師	50日	0.300	12.000
駄賃業	588度	0.300	144.400
草屋根葺	50日	0.280	13.150
呉座業	111	3.500	19.250
水車業	60俵	0.120	51.900
洗濯業	25張	0.800	15.000
（蚊帳）			
計			3224.478

⑫労働賃金		
年季雇入	52人	1649.850
日雇入	229	567.500
奉公入	2	49.000
駄賃費	3	76.400
炭焼業	22	305.475
計	319	2342.750

	利益
⑨商業	
呉服反物(4)	975.000
酒酢醤油(1)	100.000
米穀商(7)	4183.700
荒芋(2)	58.580
魚類(11)	338.750
雑貨(13)	667.400
（小間物含）	
菓子(13)	460.000
煙草(2)	150.000
漆器・古物・古着(7)	810.000
牛馬売買(2)	1950.000
繭売買(5)	16.500
鋤先売(1)	6.000
雑商(6)	199.000
木材商(0)	0
計	1.0614.930
⑩雑業	
人力車夫(11)	829.000
神職(3)	189.470
医師(2)	550.000
僧侶(4)	184.500
代書(3)	149.000
荷車引(2)	95.000
産婆(3)	48.000
教師と小使(9)	1529.290
針術(3)	81.500
公吏と小使(11)	900.000
旅屋(6)	382.000
飲食店(9)	856.500
機業伝習(1)	75.000
水産(25)	168.000
計	6037.870

⑬他村より受取小作料	
410石172	4519円900
⑭公債株式貯金	
利益	4236.938
⑮雑収入	
扶助料	66.000
中作手数料	94.800
諸手数料	1483.250
不用雑品売却費	388.540
冠婚葬祭に貰い受ける金額	959.280
村外在住者の仕送り金額	151.500
計	3857.170

総収入
16,7884円932

前号①～④農業収入とあわせて全横田村分

当時の表記法は万の位に，

前号訂正　1頁1段9行・敗れた朝廷方、4段30行・功、4段25行と5段21行・岩松氏、2頁1段23行・岩松氏、2段11行・山名時氏も、4頁3段12行・その資料の

斐の上川柳十一月号

腰振って英語で踊る新人類　松田牛歩
投書欄そうだとしきりに共感し　松浦亜以
お祭を浜から魚屋つんで来る　松浦木公
大根菜膳に顔出し秋を告げ　佐佐木千世
余生の日々暖房親しき仲となり　若槻愛散人
酔客にとことんくされ反省し　松浦久寿子
こけしみて思い出偲ぶ旅した日　安部春恵
才能があると思うは親ばかり　藤原千代子
憲法が子に頼るなと老寂し　若槻白馬
文化祭又めぐり来て年重ね　安部正子
損な役男の美学と見栄をきる　石原世以
二次会に行かなかったと自慢顔　児玉哲呂
がまんしたにぎりこぶしがやっと開き　渡辺好之
お祝いをしたが総裁雲の上　石原冬明
パパに似てママによく似て美人です　杠京子
思い通りいかぬ多趣味の手の動き　真綿よし子
おふくろの味を知らない袋つ子　田中有樹絵
白髪より気分は若く先走り　横山まこと
喫煙者切り捨てご免と云わぬまで　田中芳春

晩秋雑唱　簸の上短歌会

照りかげりまたしぐれゆく山畑にやせて小さき蒟蒻を堀る　常盤はるまさ
人の影見えかくれして境内に煙立ちゐるお祭の朝　小早川恵子
密蜂は南瓜の花にふいときて花芯に入りてその羽音と　佐藤喜代子
む
何れの子に老後を托すかと人の問ふ長生きしますよと　永井弥生
せつなさにゐる
猫を追ふ声のたかきに鶏は莚の小豆けちらしてとぶ　景山悦子
わが指に羽根休めたる痩せ蜻蛉戸迷ひてをり首をかし　松浦愛子
げて
月の夜は泡立草のあわあわと門辺明るく見てひきかへ　岡田時子
す
追ひせまる選手がつひに抜く刹那さらに声援たかまり　安部夕波
ゆけり

る。藺は花莚製造業やその職人数と相関している。藁苔は自家消費肥料である。金肥のない時代には貴重なものであった。

⑥畜産　牛336頭、馬211頭の数は、専業農家278戸（他に農業兼商工83、工商兼農業10）数と比較すると頭数が多い。これも殆んど労役牛馬であった。（堆肥もつくる）。また、馬は運搬用として、たたら製鉄業に多数従事していた。蜂密用箱30はその移入の経緯が知りたいものである。

⑦林業収入では、薪木が半分を占めている。木炭が暖房用であったから、燃料源としては最大のものであった。筍子、栗実の数もみのがせない。五倍子は付子（ふし）ともいゝ、ヌルデの若葉、若葉に生ずるもので、タンニン材として薬用・染織・インキ用となった。婦人のお歯黒用でもあった。

⑧工業収入では、酒類が¼を占めている。それと肩をならべるのは、はた織業である。笠・竹細工・傘提灯の多いのは、当時の生活必需であったからであり、畳を敷くことの普及の波もわかる。箪笥は後出するが上と中の上の級の家庭の嫁入り道具であった。建具が少ないのは、家の新築などは、極めて少なかったことを裏付ける。鍛冶工はあるが、大工が専業にも副業にもないことと関連がある。鍛冶工、鋤工は農村には欠くことが出来なかった。写真・花火製造業を営んだのはどういう人か、また経緯がしりたいものである。

⑨商業では、米穀商の利益は高い。呉服商流行を追うて堅実。牛馬商2人の利益は高い。

⑩雑業の、医師の収入は昔も高い。教員と公吏を比べると賃金格差が大きい。当時は役場誕生から20年位のころ、職員は地主級が出かけて、戸籍と税務を中心とする事務をとる程度で、賃金は給料というより手当程度であった。飲食店の収入が多い。小作料・諸利子等、地租改正に伴い農村地主育成による国政の遂行という方針の結果がこゝにも現われている。これは第二次大戦まで続いたものである。その他、冠婚葬祭による貰いも金額の見積とか、人糞尿の計算とか面白い項目である。洗濯業蚊帳とは考えるとなるほどである。

（次回からは支出を）

俳句会十月句会抄

音も無く落葉降りつむ無人駅　浅野としお
蔦紅葉苔むす碑文読みとれず　岡田蹊花
枯られしままの一生鉢の菊　岡田麗水
子の逝きし友と語りし冬火鉢　小川あきお
名も知らぬ花に霜余け傘を添え　門脇花子
転作の畦にうつろな捨案山子　加納信子
柿落葉ままごと膳の彩をそえ　楠房子
蔦紅葉過疎の白壁陽を溜めて　新出谷一華
秋の旅手機の動き伊予絣　錦織富江
野良着解くぽつりと落ちし草じらみ　峯石美代子
戯れて落葉に笑みをこぼしける　渡部夕峰

会員頒布一部百五十円／六九—一八　島根県仁多郡横田町一、〇六二／二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江01601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

「奥出雲」編集方針① 横田＝中世と伝統産業（たたら—美術刀剣・刃物、そろばん—工芸品、畜産）と教育と福祉の町

奥出雲

題字　糸原風亭書

第153号
（新年号）
昭和63年1月2日
奥出雲編集集団©

七世紀の歴史

栄光さりまた来たる

—地方の歴史をうすめたもの

詩二扁

述懐　大友皇子

道徳承天訓、
塩梅寄真宰。
羞無監撫術、
安能臨四海。

天の教えをうけたまわって皇太子のもつべき「道徳」を身につけ、心を造物者に託してほどよい政治を行ない天子を補佐したい、これぞわが悲願。だが、はずかしいかな、つたない我が身には天子のまわりのことをおたすけする手腕がない、どうしてひろい天下に臨む大任に堪えようか。

臨終　大津皇子

金烏臨西舎、
鼓声催短命、
泉路無賓主、
此夕誰家向。

日は西のかたに傾き、時刻を告げる太鼓の音はわが短い命をせきたてる。
迎えてくれる主人もない黄泉路のひとり旅、今夕このわれいずこに宿るやら。

（以上岩波文庫「王朝漢詩選」より）

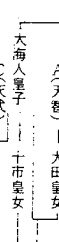
大友皇子（のちの弘文天皇）

天智天皇の長子、博学、文武の才幹があり、亡命の百済人らを師とした。天智天皇十年671正月史上初の太政大臣に任じられ、天皇没後、近江朝廷の中心となったが、翌年いわゆる壬申の乱で蜂起した叔父大海人皇子（のちの天武天皇）の軍と戦い、瀬田川の決戦に敗れ、逃亡も果せず、翌日縊死、首級は大海人皇のもとえ、25才。妃は大海人皇子の皇女で葛野王を生んだ。

右の「述懐」は、才ある皇子の謙虚な心中。こうした皇子を知る叔父（天智の弟）大海人皇子は、かつて皇太子を大友皇子に譲って剃髪し、吉野にかくれたのであったが。

大津皇子（天武天皇の第三子）

母は天智天皇の女大田皇女で容貌たくましく、壮年に及んで武を愛した。ことに幼時より文才に秀いで、天智に寵愛された。壬申の乱では父大海人（天武）に従う。天武朝では常に皇太子草壁皇子につぐ地位で朝政に関与、朱雀元年686天皇死後、皇太子に謀反したと逮捕され、処刑される。24才。妃山辺皇女（天智天皇の女）も殉死した。皇太子の地位を護ろうとする皇后（のちの持統女帝）によって挑発されたとする説が強い。



右の「臨終」は処刑の前の詩である。

壬申の乱

天智天皇の死の翌年672年壬申の年に起った皇位継承をめぐる大規模な内乱。後継者の決定がおくれたのは、皇后のほか蘇我氏・阿倍氏などの有力豪族出身の妃からは健康な皇子が生まれなかった。当時の慣例では、皇族または畿内有力豪族出身の后妃所生の皇子でなければ、皇位を継ぐことは困難であった。また天皇に有力な兄弟がある場合、皇子よりも兄弟がさきに位を継ぐことが多かった。天智には同じ母（斉明女帝）から生れた弟大海人皇子があり、早くから天智を助け、その妃は天智の女大田皇女で、関係は密接で、大海人が後継者であることは確実と思われていた。ところが天智が即位すると情勢が変化し、21才の大友皇子への愛情と期待が高まり、皇子を太政大臣に任じた。これは立太子と同様の意味があったので、大海人の地位は甚だ不安となった。そこで天智の処置を恨み危険を避けるため吉野に入って機会をまった。天智の死後半年にして挙兵、皇位を奪回して天武天皇となった。

天智の新政で特権を失って不満をもつ地方豪族・畿内有力豪族は特権的地位を保持したが、首脳人事に洩れて反感を持つ大伴氏ら、天智が多年の慣例を破って地方豪族出身の女を母とする大友皇子を後継者としたことへの不満を持つ豪族らが、大海人の再起を期待した。虎に翼をつけて放ったと同じだとある人が当時言ったという大海人への、適切な対策をとる暇もなく天智は没した。大海人は42才であった。原因にはほかに百済系渡来人と新羅系渡来人との対立、額田女王の愛をめぐる天智と大海人の争いがあるともいう。

反乱を起し実力で皇位についたため、天武の権力はきわめて強く、前代以来の貴豪族の勢力を抑え、律令制をとり入れた中央集権の政治を強力に進めることになった。天武朝の正統性を精神的に史実的に合理化するために、日本書紀の編さんが始められた。そして大和中心の、神話・歴史が出現した。こうした点を頭に入れて、諸説も併記している日本書紀から歴史を読みとる必要がある。

栄光さりまた来る　辰のとし　備北の山内・多賀山両首藤氏と奥出雲④　横田の民話③　川柳・俳句・短歌

辰（たつ）のとし

——十干十二支の由来

昭和六十三年戊辰（つちのえたつ）

配られてくる暦やカレンダーには、こう書かれているものが多い。戊辰とは干支の中の組合わせである。古文書を読み時代がわからぬときは、これが貴重な手がかりとなる。これは古代中国に由来する暦法である。

十干（甲、乙、丙、丁、戊、己、庚、辛、壬、癸）と、十二支（子、丑、寅、卯、辰、巳、午、未、申、酉、戌、亥）を組合せて、60種の干支をつくり年月日さらに時刻を数えた。

十　干

一カ月を3旬に分けて、1旬を10日とし、甲…癸の10種を用いる。干とは箇数のことで、十干とは10種の記号の意味である。当初は社会生活も単純で、日順記号は十干の10種でよかったが、複雑化する時代となったことと、また将来の計画のためにも必要性が生じ、次の十二支と組合せて、60組の干支ができた。

十二支

十干と同じく古代中国で定められた。天の周縁を12等分して、12の方位を定めた。支とは分支、区分のことで、その区分（方位）ごとに与えられたのが先の呼称である。

このように十干は本来の文字の意味でなく**日順**の記号とされている。十二支も同様に**方位方角**の記号として借用されたものである。これを合せて60組として、日順に用いはじめたのは、中国の殷王朝（紀元前B.C1500～1000）からで、これが年にも適用されるようになったのは、漢代（B.C200年）からであり、朝鮮・日本へ、蒙古・安南へと伝わった。

え（陽）と（陰）の成立

十干と十二支は無味乾燥な記号であり、憶え易くもなかったので、**干**に陰陽説と、五行説から（のち合体して陰陽五行説ともいう）意味づけがされ、**支**に12種の動物名があてられた。

ね（鼠）、うし（牛）、とら（虎）、う（兎）、たつ（竜）、み（蛇）、うま（馬）、ひつじ（羊）、さる（猿）、とり（鳥、特に鶏にあてることが多い）、いぬ（犬）、い（猪、中国では豚にもあてる）である。

陰陽説では世界の根元は、陰（と）と陽（え）の対立と和合で、これで万物が生成し衰退すると説く。**五行説**は万事万物一切、木火土金水という五種の根本要素で合成されて存在し、分散しまた消滅するという。この二説が合体して、世界の根源は陰陽二気で、これから五行が発生し、組合わさって世界が出現し万事万物が存在するという。そして五行にも陰陽がある。

甲＝**木**の陽　乙＝木の陰
丙＝**火**の陽　丁＝火の陰
戊＝**土**の陽　己＝土の陰
庚＝**金**の陽　辛＝金の陰
壬＝**水**の陽　癸＝水の陰

と配した。こうして十干には五行の陽と陰がつく。本来はこのように十干が**えと**であるが、今日十二支に配当した動物のことと解しているのは誤りである。「昭和63年のえとは辰である」は誤りである。

干支に生じた神秘性

こうして複雑になって、神秘性が生じて来た。今日は丙の日で火性である。自分は庚の年の生れで金性であるから、火金相剋の理で凶運が予想されるから何事も気をつけねばならぬとなる。またA青年は乙の年生れで木性、B嬢は癸の年生れで水性、水木相性で合性となるとする。これが次第に神秘主義となり、複雑な理論をもつ、運命論や予言となり、十二支の方位と夜空の諸星座の形に対する諸種の動物の連想と結んだ。動物そして動物神とが結合して、意味の深化をもたらした。一部ではうらないの基底となって神秘性をいよいよ加えている。世間で言う**還暦**とは干支が一巡するのが60年それにもとづくもの。**丙午**（ひのえうま）の丙は火の陽で激情を、午は奔馬をあらわし、無軌道で人をこまらせる意となり、女におおいかぶさる。この年に女の子を生むまいと、出生率は激減した。**辛酉**（かのととり）は、金性の重なりで、中国では革命の年とされた。天命によって位にある帝王は反省し政治を改新せねば王位を去らねばならぬ。そこで年号を改めて政治を改新した。これがわが国にも伝わり、人心一新のため改元が行われた。年号とは要するに政治の災害除けのまじないであった。

竜（龍）に因んで

登龍門とは、黄河の上流に急流があって竜門といった。それを登る鯉は竜になると伝えられ、栄達への関門をそう呼んだ。竜とは**仏教**では蛇形の鬼神で、地上・空中・水中に住し雲雨を自在に支配する神である。竜神とも呼び、密教では竜王は雨を祈る本尊とされた。**中国**では鱗虫の長として神霊視される巨大な想像上の動物で、鳳・麟・亀とともに四霊とされ、よく雲を起し雨を呼ぶという。大蛇とは龍のことである。

考古学的には中国では紀元前16世紀の商時代（3000～4000前）の青銅器皿に現われるとなっていた。数年前から内蒙古東部や遼寧省西部の地区で出土する竜形玉器によって5000～6000年前が起源であると改められた。最近の内蒙古自治区文物考古研究所の発表によれば、全区東南部で発見された竜紋陶器によって、竜の形は既に7000～8000年の歴史があることが分かったという。中華民族の象徴は極めて古い。

山なみで分けられた陰陽の中世史

備北の山内・多賀山 両首藤氏と奥出雲④

⑧豊成

長禄2年1458泰通は嫡子法師丸・豊成に譲った。やがて応仁の乱の時代に突入する。山内・三吉両氏ら備北の諸氏は、山名持豊（宗全）に従い西軍として戦い、南備の宮氏総領家（のち西城へ入る）・杉原氏（のち毛利時代に横田へ入る）は東軍の山名是豊に従って細川方として戦った。豊成は度々合戦に参加した。この年、備後小世良合戦（世羅で西軍と戦い、豊成の被官宗安三郎らは戦果をあげた）、備後苧原合戦（福山北方、神辺城主杉原氏の領内へ豊成が攻め入る）。翌3年（文明元年）には花坊夜討、備後国国重神上合戦。それぞれ持豊（宗全）より感状をうけた。

文明2年1470 5月12日付の文書に、**馬来**備前守満綱から山内新左ェ門（豊成）宛の契約状がある。内容は文意が十分に解せないが、年貢上納についてのものである。このころ山内氏が横田庄に所領をもっていたが、それとの関係ではあるまい。馬来氏とは山一つを距てたところであるから、関係が深かったことは間違いないが、明らかにできない。

戦乱は続く。文明3年には、久代（西城）要害の戦、大田庄河尻の合戦があり、それぞれ感状を宗全からうけている。今7年には自分の城、甲（冑）山城が東軍の山名是豊に攻められ、撃退した戦功によって5日後に知行増をうけた。それは備後国信敷東西之内増分で、**三沢**信濃守

斐の上川柳

陶工の苦心の色かと柿を見る　佐佐木千世
年の瀬や円高に泣く人もあり　若槻愛散人
木枯に追はれるように畑仕事　安部春恵
人にのみ救い求める老孤独　松浦久寿子
ヘチマ水孫もてのひら出して待ち　藤原千代子
三面鏡鼻の低さがよくわかり　松田牛歩
出まかせでとっさにその場を逃れて来　松浦亜以
退院の日どり暦を出して見る　藤原のぼる
も一人の私に酒がしてくれる　松浦木公
大根や葉っぱを終えて秋が行く　真綿よし子
初雪に緊急避難させる鉢　横山まこと
里帰り何時のまにやらズウズウ弁　杠京子
旅帰り顔色だけで妻思案　渡辺好之
灰皿を請求される寡婦の家　安部正子
のれん掛け今日も宜敷く頭下げ　藤原ユキ子
縁談をまとめないまま年の暮　石原冬明
待てまてと追っかけ廻すおむつ替え　若槻白馬
初雪が畑の気がかり皆かくす　田中有樹絵
遷宮祭息づく間なし冬将軍　田中芳春

横田の民話(3)
—大馬木①

あちら福福こちら福福

とんとむかしがあったげな。

むかし、あるところに、大きな分限者がおったげな。

それから、毎年来ることですが、としとり（大晦日）が来て、それから、下女が床前の方の大そうじをして、それから、あくる朝まに、飾りつけを全部すませて、だんなが新年のことばを述べて、それから、ずっと頭をあげてあちこち見まわいたら、なんだかきたないもんがあるようで、ように見たら、ぞうきんがあって、それは下女が、前の晩に忘れたぞうきんだって、たいへんにだんなが腹を立てて、それから、たまという下女を呼びつけてたいそうおこったげな。

そうしておるところへ、近くのとんちのいい人が年始にきて、

「だんな、おめでとうございます」

「なんだいおめでたいば（おめでたいどころ）ではない。ここに来てみ（みなさい）。きたないぞうきんがある。床の間にすえてある」

とたいへんにおこったげな。それからそのとんちのいい人が、

「まことに、あとにも先にもない縁起のいい、めでたいことでございます」

「なんがめでたいことがある」

そこで、とんちのいい人が歌をうたいました。

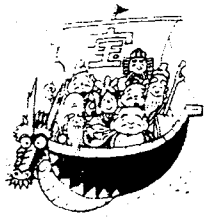
ぞうきんも、当て字に書けば
蔵に金
あちらふくふく　こちらふく
ふく

よく考えてみれば、当て字に書けば、蔵に金、あちらも福、こちらも福と、こんなめでたいことはありません。

「ああ、おまえはたいへんいいことをしてくれた」

と言って、いい正月を迎えた。

（話者・藤原広蔵—明治29年生、聞き手・大野幸夫—昭和47年「鼻きゝ甚兵衛」から転載）



前号訂正　1頁2段6行・女と、全3段23行・こうしたことは、全32行・とり入れると、全4段1行・ている、全5段6行・2年であり、全7行・活躍し、全30行・半分の横田庄、2頁1段31行・このように、全2段8行・領のうち斯波、3頁2行・(6)

十一月句会抄

煮凝りや目玉大きく魚の貌　浅野　としお
枯螳螂つまめば未だ生きていし　岡田　蹊花
ガードレール倒れしままに枯尾花　岡田　麗水
切り絵彫る指に陽あたる冬座敷　小川　あきお
影うつすくもりわびしく木の葉髪　門脇　花子
嫁の来て箸の触れ合う豆腐鍋　加納　信子
良き事も悪しきも過ぐる師走かな　楠　房子
幼子の小さき墓石へ落葉積む　新出谷　一華
語らずも足りし炬燵の老夫婦　錦織　富江
柿一つ孫の歯形のつきしまま　峯石　美代子
大根引見上げる青空飛行雲　渡部　夕峰

カラオケきこゆ　簸の上短歌会

ふたりとも長生きせよと子の電話酒場からからしカラオケきこゆ　永井　弥生
命令に従ひしごとひと夜吹きし風に峡の田の稲は伏しをり　戸屋　暎子
からからと乾ける音に振り向けば林の落葉吹雪のごとし　松浦　愛子
ささやかなる賞を受くると親指の絆創膏を剥ぎて出るなり　小早川　恵子
風花の舞ふと見たるに峡の村は寂かになりて雪降りしきる　常盤　はるまさ
久々に締めたる帯の締め過ぎに姪の婚儀の正座は長し　佐藤　喜代子
ひと夏を立ちし案山子の枯畑に帽子かぶりて野分に吹かる　岡田　時子
老犬の籠りがちなるに小春日は日向に出でて眼細むる　野村　節子
真実は語ることなく君と手を握り交して夜汽車に乗りぬ　安部　夕波

跡分とあり、それを宛行われた。

この年**三沢**信濃守為忠は、近江国での京極・六角（ともに近江源氏佐々木氏のあとで、近江国を南北に分けて所有していた）両氏の戦いで、出雲守護であった京極方についていたが、討死している。三沢氏が備後にも所領をもっていたことは、断片的記録でわかる。さきのものはそれであろうか。

文明11年より守護は宗全よりその子政豊へ移った。各地で合戦があったとみえて、やがて豊成は戦功によって所領を、備後・播磨両国で増領された。

文明16年**三沢氏**をはじめとする、出雲国人衆や土豪によって、尼子経久は富田城を追われ、2年後富田城へ復した。

長享2年1488経久は策を用いて、出雲国人衆中最右翼の三沢氏を下し、出雲制圧への鍵を握った。

翌3年、豊成は感状を得所領を加える。この年守護は山名政豊から誠豊に移る（のち延徳2年1490には山名俊豊が守護となる）。このころ西方の三吉涌善がかかわっていた、延暦寺千年堂領の備後国四カ村代官職にも豊成は補任された。こゝで涌善との間に争いが頻りと4年まで続いた。

全4年には守護山名俊豊より豊成は備後国守護代とされ、また頻りと代官職も加え知行増もうけた。こうして豊成は備後で屈指の大名へと成長した。そしてさらに着々と硬軟自在巧みな政略でそれをひろげていった。備後国国人衆のうちで筆頭の位置をしめ、着座についても備後国衆中の座上を認められ、安芸毛利氏と並ぶ戦国大名となった。

豊成の時代が数的には最大となったのである。応仁・文明の乱で派兵して手に入れた成果である。北は陸奥国から信濃・相模・遠江・伊賀・山城・摂津・但馬・播磨・伯耆・出雲（横田の八川方面の一部か）・備中・安芸そして備後が主力で、50カ所に及んだ。

明応元年1492に守護山名俊豊より、大和守（豊成）宛の文書「去る十二月十四日注進の委細を読みそれについての処置報告（意訳）」の第二項に

「三沢かたへ以案文如承候書状を下候　此事も於備州抽忠節候者則可相討奚其分可有存知候」

とある。豊成の注進によって、守護俊豊が**三沢**へ書状を出したようであるが、三沢氏文書にもなく、内容も推察できぬ。この頃の戦に三沢氏が山内氏と行動をともにして山陽道方面にて忠勤を励んでいたことを備後の国人衆随一で守護代の豊成が注進したものであろうか。他の項目も内容が明らかでないが、その様に推定できるふしもあるからである。

⑨直　通（上）

明応5年1496 11月12日守護山名俊豊は豊成の跡目を継いだ⑨直通に安堵状を与えているから、この前に豊成は没したのであろう。またこの頃守護山名秋豊から直通への書状に

「雲州両三人帰国云々儀……」とあるが、文意は明らかでない。

謹賀新年

今年もよろしくお願いします

島根近世史研究会から、今夏二日間の会合の世話をすゝめられています。陰陽郷土史研究協議会の協力も得て、初日は「雲伯芸備の四藩と近世鉄師」を主題としてとも考えています。

会員頒布一部百五十円／六九九—一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0—601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

「奥出雲」編集方針(キャンペーン)① 横田＝中世と伝統産業（たたら—美術刀剣・刃物、そろばん—工芸品、畜産）と教育と福祉の町

奥出雲

題字　糸原風亭書

第154号
（2年号）
昭和63年2月6日
奥出雲編集集団©

山なみで分けられた陰陽の中世史

備北の山内・多賀山両首藤氏と奥出雲⑤

中国地方の雄大内氏

周防山口の守護大内義興が父政弘の跡を継いだのは、明応3年1494 17才の時である。対する尼子経久は37才、まだ出雲国の守護職に正式に補任されていなかったが、ほゞ出雲を傘下に抑さえて隣国への野望を抱きはじめていた。

義興は既に、周防・長門・豊前・筑前・石見・安芸と中国九州にまたがる六カ国に勢力を拡げていた。そして筑前博多を根拠地として明と朝鮮との貿易を独占し、巨大な富を貯え、山口はまさに「西の京都」にふさわしい、経済的文化的繁栄をしていた。（僧雪舟は大内氏の招きでその下にあり、のち貿易船に乗って明に渡り3カ年を過し、帰国後水墨画を専らにし、単なる写景でなく、そこに禅僧としての思想も表出する画風を大成し、水墨画の一頂点に立った。雲舟が住んだ雲谷庵に因んで雲谷派ともいう）

こうした義興もさらに闘志をみらぎらせていたのである。

足利10代将軍義尚のあとは義稙（たね）が継いだが、管領細川政元のクーデターによって追われ、義澄が12代将軍についた。追われた義稙は6年間流浪ののち、山口の大内氏をたより6年の歳月を過した。永正4年1507洛中騒動の報を聞くや、義興は復位を夢みる義稙を奉じ大挙上洛した。恐れた義澄は戦わずして近江国へのがれた。翌5年義稙は14年振りに復位した。義興は功によって管領代にまで昇進した。時に32才であった。一方の義澄党も黙ってはいなかった。永正8年京都の北部の船岡山で激突した、船岡山の合戦である。義興はその時の活躍によって従三位に叙せられ地方武士としては破格の公卿に列せられた。

上洛の時義興に従ったのは25,000の兵で、その上周辺の国々から主だった武将も従った。出雲からは経久を筆頭に、三沢・三刀屋・牛尾・朝山・宍道その他が加わった。

奥出雲

三沢⑩遠江守為忠は、永正6年1509横田盆地の一角に藤カ瀬城を築いて移って、京都御所に近づくことになった。尼子氏は三沢氏に強く警戒心を抱くに至った。

永正11年になると尼子氏は兵を率いて藤が瀬城を攻めたが、守りが堅く攻めあぐんで、岩屋寺を焼いて退去した。（その後岩屋寺は院主快円の20年かけた努力によって復興した）

その後経久はしきりと伯耆国へ食指を動していたが、永正14年になると、富田に近い大原郡阿用城の桜井宗的の反抗にあいこの城を囲んだ。容易に落ちず長男政久を討死させる始末であった。このころ藤が瀬城は為忠が隠居して⑪為国であった。三沢城には為忠の弟為常がいた。長男を失った経久はその後総攻撃をかけ苦戦の末、宗的以下の城兵をことごとく討死させた。この時の戦いで馬来氏の家臣となっていた、杠氏（天文5年大馬木に於て、たたらを吹きはじめ、江戸時代半ばすぎまでその業を続けた家）が討死している。

続いて経久は奥出雲を経て庄原へと出陣している。

多賀山首藤氏

のち多賀山氏・多賀氏ともいう。

首藤①通資は関東から西遷して、高野山の部山城に入ったが、のち山内（庄原市内）の甲山城に移り山内首藤氏と称した。（のち山内氏という）通資の弟通俊が多賀山首藤氏②となった。⑤通忠—⑥通継—⑦通憲—⑧通広—⑨通時—⑩通続（⑨の弟・入道久意という）—⑪通定（通継の嫡男で山内に入った隆通の子）—⑫通信（弟）—⑬通次と続いた。

多賀山氏と惣領家山内氏とは重婚関係にあることは既述したが念のため。⑩山内豊通の女ははじめ宍戸氏へのち馬来乗綱の妻へ、その妹は⑩多賀山通続の妻に、その嫡男隆通は山内⑪隆通、その子通定は多賀山⑪通定その弟通信は多賀山⑫通信となる。山内氏は隆通の子元通が⑫をつぐ。

多賀山氏の飯石郡への進出

山内氏が仁多郡に進出するに従い、一方飯石郡中部へも進出したようである。

飯石郡の口部には三刀屋郷を本拠とする三刀屋氏が、南部には赤穴荘を中心とする赤穴氏が盤拠していた。その中間地帯の掛合郷へ、部山城から玉貫峠を越えて上阿井、そして福原から飯石郡吉田を経て（戦国時代の通筋）進出した。その時代は⑦通憲（妻は三沢為忠の女）の時代で15世紀末から16世紀初頭であろうか。通憲⑩通続の曽祖父である。

掛合の町並の上手、吉田川と掛合川（三刀屋川）が合流する地点の南方219米の日倉山に城を

備北の山内・多賀山両首藤氏と奥出雲⑤　明治三十五年⑦　短歌・川柳・俳句

築いて、出張所即ち本城に対する出城とした。今日城跡には削平地も少ない。些程度のものであった。

そのころは尼子経久が一度追われた富田城へ文明18年1486に復帰し、出雲国制圧へと向っているころである。その最初が有力国人衆の最右翼**三沢**氏攻めで、長享2年1488の合戦でこれを下し次々と拡げて行った。永正4年1507からは経久は三沢・三刀屋他の諸氏の有力国人衆とともに大内義興に従い上洛した。このような奥出雲の手薄すのころ、動乱の最中を巧みにくぐって掛合に進出したのであろうか。

多賀山氏は掛合町だけでなく、その一族はさらに南部の頓原地区内の花栗・佐見あたりにも領地をもっていた。⑩通続が永禄2年1559に記した「系図案」によると、永正11年1514 9月9日、通続の叔父（父⑧通広の弟）花栗弥兵衛が反乱を起こし、父通広と兄又四郎を殺害したという。翌年正月20日、井上八郎右衛門尉によって弥兵衛は討ち果され、事件は券着した。この時通続は9才であった。事件の内容は不明であるが、花栗を名乗っていることは、頓原地区内に大字花栗があるから、このあたりを領していたのである。

出雲→備後→安芸を結ぶ街道と、備後→仁多郡阿井→飯石郡吉田→掛合に至る道との要衝にあたっていた。その中間地点の吉田に田部氏がいたのである。

⑨直通㊦・多賀山⑩通続

⑩通続は入道して久意、号を露休といった。花栗事件後の永正12年10才で家督をつぎ、元亀元年1570 65才で没している。

大永元 1521　尼子・大内、石見で戦う。

仝　2　尼子と大内、邑智にて戦う。

仝　4　尼子と大内・毛利備後にて戦う。

仝　6　大内と毛利が結ぶ以前から多賀山氏は直通の女が尼子経久の三男興久に嫁するほどで、尼子氏とも結んでいたが、このような備後の情勢からこの年、尼子氏の支配から脱しようとしたため、その攻撃をうけた。

仝　7 1527　尼子氏は再び備後に出陣し、三沢氏も従い和智（庄原と三次の間）に陣を布いた。和智の和智氏は尼子方であったが、大内義興が遣した杉興道の進撃をうけ（7月下旬）たので、戦わずして迎え入れていたが、この時（9月）の加勢によって再び大内氏に反旗を翻がえした。この陣中へ**岩屋寺**復興に努力していた僧快円は、資金不足のための勧進に足を運び、経久や**三沢**為国らの協力を乞ひ、甲斐あって工事を進めることができた（詳細は本誌既刊に）ところが享禄元 1528　多賀山・山内両氏は尼子氏から離れようとしたので、尼子氏はこの年蔀山城を包囲した。

仝　2　7月には落城寸前まで追いつめられたが、大風雨が幸して尼子軍が退きかろうじて城を保つことができた。（別な資料によれば、この7月　大内義隆は毛利元就に、多賀山氏の蔀山城が落城したと報じたとある）

仝　4　経久は藤が瀬城を攻めた。容易に落ちなかったが、暴風雨の夜陰に乗じ、城の北方樋が谷から虚を突いて落とし、**為国**らを捕えて引揚げた（為国は天文5　富田城塩谷にて斬られた）。

天文元 1532　尼子経久の三男興久が父に逆いた。

興久の死

経久は簸川郡の塩冶の城に興久を封じて、出雲西部の堅めとしたが、興久は一門である自分の領地が少ないのを不満とし父に申入れた。父は備後国に幸に一貫文の地があるからと言ったが、気に入らずとし、これは父経久の側近のものが邪魔をしているからと烈火の如くいかった挙句に、これを討たんと出陣した。気はたかぶっても寡兵はいかんとも出来ず、退いて塩冶に帰り、さらに妻の父・甲山城主山内直通をたよった。直通もかばったが、経久はその引渡しを強く要求したので、興久はそこで自殺した。

こうした情勢の見方を研究者は次のようにしている。尼子一族内に於て惣領と庶子家の間がうまくいっていなかったこと。家臣団内に於ける複雑な対立関係の矛盾も露呈したとしている。

経久は既に77才、早くなくなった長子政久の子晴久（18才）の成長をまたねばならなくなった。経久の死後、二男国久も晴久にだまし討ちにされた。晴久の性格にも問題があったであろう。経久の子供たちは勇猛ではあったが、学問を好まず、性格は粗暴であった。晴久は直情径行で思慮に欠け、一族とも協調しなかった。毛利氏と比較すると雲泥差がある。年と共にその差は広がった。

天文4　その後多賀山氏は再び尼子方にくみしていたが、この年毛利元就の攻撃をうけ、一旦降伏したが、しばらくは旗幟を鮮明にしなかった。

天文5　3月尼子晴久は備後に再び勢力を拡げる。晴久備後に出張る。そして経久は隆通に山内家⑪を相続させた。

天文6　直通は惣領職を隆通に譲る。（次号へ）

横田（旧横田村）の生活
明治三十五年（7）

収入と支出

村民の年間総合所得は約17万円、1戸平均282円で一カ月10円余の収入である。支出は次回で詳細を明らかにするが、約16万余円で差引2424円の残額でこれが預貯金に廻るが、調査書にあるように、これは平均で差引残るものは上の部に属する家であった。中の下や下は赤字となり、小作は地主に前借り（主として飯用米）して、ただ奉公で返済するとか、出来秋に返済契約するかしてしのいだ。また農民以外は擬制親子の契りを結んだ親方より前借して、種々の方法で返済したが、不幸が続く場合は今日の如き社会保障制度はもとよりなく、金融機関からの借入の途などは庶民には縁がなかったから、不幸は不幸を呼び、悲劇はさらに深い渕へと沈んでいった。

Ⓐ横田村農事調査　明治35（1902）

旧横田村	人口 2,475	戸数 47,6
収入	（円以下四捨五入）	%
農業収入	10,6022円	63.1
林業〃	6185	3.6
商業〃	1,0615	6.3
工業〃	1,0919	6.5
雑業〃	6038	4.5
副業〃	3225	1.9
報酬及賃金	2343	1.3
本村民の他町村より受取る小作料	4518	2.6
産出肥料	9931	5.9
公債・株券・貯金借貸金の利子	4237	2.5
雑収入	3857	2.2
合計	16,7888	平均1戸 282円38銭弱
		1人 62円78銭弱
支出		
生計費	7,5088	45.3
冠婚葬祭費	1,1654	7.0
交際費	1,2015	7.2
教育費	2225	1.3
衛生費	1160	0.7
農業生産費	3,3806	20.4
報酬及賃金	3383	2.0
諸税負担額	1,5267	9.2
本村民の他村へ支払う小作料	3777	2.2
借金の利子	4071	2.4
雑費	3017	1.8
合計	16,5464	平均1戸 278円28
		1人 61円87
差引	2424	1戸 4円10
		1人 0円91

Ⓑ横田町振興基本計画（55年）昭和50（1975）

旧四カ町村	人口 9,243	全戸数 2,326
単位：円		%
	1,347,496	22.7
	181,746	3.1
卸小金融	1,139,257	20.0
製造	1,394,279	23.5
建設	900,257	15.2
サービス公務員	1,277,613	21.5
他は省略		
	5,929,887	

Ⓒ島根県の民力 昭和60（1985）

全人口 9,014	全戸数 2,321
26億13百万	
59	
販売 55 39	
57 25	

収入の中味

収入をみるにあたって、昭和50年（横田町振興基本計画書の中の町内純生産の数字）と、昭和60年（島根県の民力の中の数字）の統計と比較しながら、特色をそして70余年を経た今日の変貌ぶりを読みとることにする。

（以下表中Ⓐ Ⓑ Ⓒの略号を使用する）

Ⓐに於ては町民総収入の63％余は農業収入であって、その詳細は既にみた通りであるが、穀類60％、畜産16％が主力である。

Ⓑの昭和50年の統計は四地区である。旧横田村の戸数はその数の40％にあたり、金額も一応40％としてⒶと比較すればよいが、商・工及び賃金（サービス・公務員）については横田地区は高かったから50～56％と考えて実数を出す

Ⓑ50年の町民総所得は（％で）

農業22.7　商業20　建設15
製造21.8　賃金21.5

となって、農村＝農業の明治35年のイメージは全く変貌していることがわかる。

Ⓒ60年の数字は所得ではなく

農業　26億円　粗生産額
販売　55億円　販売額
製造　57億円　出荷額

であるが、さらに商業・工業の占める割合は激増しており、農業収入の落ち込みは極めて大きい。

昼の茶房に　簸の上短歌会

みのらざる初恋と故郷の山河はなはあざやかに六十路の冬日　永井弥生

互みにも空気の如き夫と吾れ垣根に咲きて白き山茶花　野村節子

剥ぎ捨てし林檎の皮を叢の窪みまで風が転がしてゆく　佐藤喜代子

気づくまで刻のかかれり師の君に五十余年ぶりの会ひにてありし　景山悦子

腰まげてゲートを狙ふ老人のボールさばきの年思はせず　岡田時子

手造りの注連飾ひろげ語りゐる老爺に待合室の視線あつまる　松浦愛子

家ぬちより障子をあけて雪もなき年のはじめの日の出を迎ふ　戸屋暎子

海見ゆる丘の上なる茶房の昼軽音楽鳴りて人影はなく　安部夕波

児玉一利君を悼みて

古稀の集ひを諮り日ならず忽然の永別はつゆ思はざりしに　常盤はるまさ

唐突の別れの嘆きくりかへし葬りの花に冬の日反へす

訂正—前152号3頁の⑥畜産の項で蜂蜜は9000円で、蜂蜜の数字は畜産の収入合計数である。また⑪副業収入の、炭焼業収入は下の数字475のように訂正のこと。317。

農業生産費について

Ⓐ明治35年の支出をみると、生計費　45.3％農業生産費20.4となっている。後者の中味は次回で詳述するが、種苗費・肥料費・農具新調費及修繕費—5％病虫害駆除予防費、養蚕費（蚕種・桑葉・燃料・器具）となっていて、農具新調費及修繕費はそのうちの5％に過ぎない。農業収入に対する割合は、金額が1,023円であるから1％に過ぎないのである。その農具も鋤・鍬鎌が主であるから、村内の鍛冶屋で、再生・補修で十分に間にあっている。

これと今日の農業生産費との比較という立入ったことは、本文のねらいからそれるので、省略するが、「横田町営農対策基本指針」（昭和60年の横田町営農対策会議編）から、農業生産の低コスト化という項目で述べてあることを抄録して、Ⓐ明治30年との変貌の様子と、今日の問題にふれることにする。

畑作機械を除く主要稲作機械は圧倒的に個人所有が多く農機具の過剰投資が行われている。トラクター→田植機→防除機→乾燥機→籾摺機の流の中で他の作業と兼用可能なのは、トラクターと防除機であり、しかもいずれも年間の使用時間は極めて少なく、その上最近の技術革新、購買意欲の刺戟等により、原価償却の済まない機械が、いとも簡単に更新されていて、その年間固定費が農家経営を圧迫しており、機械化の余剰労働力により農業の多面経営が行われて、所得の増大を招来する努力も見るほどでなく、その赤字補填には農外収入を求める結果になっている。経営規模に応じた機械投資と共同利用により、農機具負担の軽減による低コスト稲作に徹する必要を強調してある。

農村住民であるが門外漢の者が、言うまでもないことであるが、統計資料をみて感じたことを余白に。

農機具貧乏追放で所得の増大と言っても、減反に加えるに、基本米価の上に特別価格も減額、安価な輸入米との競争、その他輸入農産物・牛肉の問題もあって、明治35年と比べると大変な時代であるということである。

農機具に関してみると、年間80万円位の固定費が必要である。

自家用のトラック・乗用車・住宅資金・生活用具の電気器具とめまぐるしい新製品の洪水、生活水準の全般的向上、教育費の増大は農家ならずとも一般家庭も同様であるが、農業には共済とか補助助成金或は長期の低利資金の融資があるとはいえ、耕地整理、開パイと重なるのは地元へ公共投資による恩恵、基盤整備による将来への展望があるとはいえ、ただならぬ状況であることを感ずる。

農業粗生産26億を農家一戸当にすると年間170万円となる。明治35年にみる農林横田村は全く変貌したことになる。労働強化の時代でないとすると、円高経済と自由貿易の時代は、農家ならずとも、合理化そして生活水準の引下げの背水の陣しか考えられないと思われてくる。

斐の上川柳一月抄

欲言わぬ只健康を願うだけ　安部正子
齢一つもらって余生一つ減り　松田牛歩
いい年と勝手にきめて屠蘇に酔う　松浦木公
節々に思ふは亡夫のありし日を　安部春恵
日暦を一枚めくり今日を謝す　若槻愛散人
雪のない冬を泣いてる人もある　松浦亜以
誕生日ジンクス外れたうるう年　渡辺好之
気にかゝる事も多少は持って越し　松浦久寿子
年あらた一病息災気も新た　藤原のぼる
失敗は大事にしよう宝物　若槻白馬
くれの市みんなでかけて九千人　藤原英生
小包みの中にも入れるお年玉　藤原千代子
猫の手もあてにしている年の暮　田中有樹絵
仏様見せてあげます通信簿　杠京子
日めくりと時計が暮をせきたてる　真綿よし子
陽だまりに猫が脊を向け念仏講　田中芳春

俳句会一月句会抄

風邪妻をいたわり粥に卵割る　浅野としお
縁の陽を遮るものなし実南天　岡田蹊花
黙々と歩け『実篤の詩』冬籠る　岡田麗水
年玉の毘沙門騒ぐ孫ら声　小川あきお
初風呂や昔ながらの糠袋　門脇花子
雪の宿となり合せの里なまり　加納信子
街路樹に光るものあり冬の月　楠房子
鼻すすり夜業のめがね垂るるまま　高木白虹
買い足して両手に余る年用意　新出谷一華
あか切れの指にまつわる歌留多とり　錦織富江
頬よせて別れ惜しむや冬の駅　峯石美代子
神灯のかすかな揺れや年明くる　渡部夕峰

会員頒布一部百五十円／六九—一六　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0—601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

「奥出雲」編集方針① 横田＝中世と伝統産業（たたら—美術刀剣・刃物、そろばん—工芸品、畜産）と教育と福祉の町

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 155 号
（3 月 号）
昭和63年3月5日
奥出雲編集集団©

横田とそれをとりまく広い陰陽地方の庶民信仰を集めた 岩屋寺

岩屋寺の弘法さん

4月21日

かれこれ7年も前であったろうか。横田八幡宮の原っぱで、和服姿の2人づれの婦人と一緒になった。2人の横顔は美しくそしてとても明るかった。老婦人の方から話しかけられ、歩きながら合づちを打ちながら聞いた。横田大橋まで続いた話しだったが、筋はこうである。

備後の庄原市から、岩屋寺の弘法さんに御礼参りに登山し、汽車に間にあうよう急いでいるとのことで、若い婦人は孫娘、その背中の子負い着物の中で、キョロキョロしているのは、その子ども、老婦人にとってはひ孫で、四代目にはじめて男の子ということだった。小綺麗にした身づくろいからはわからなかったが、若い時から苦労の連続だったとのこと。老婦人は子供に恵まれず、庄原の方の話を頼りに、岩屋寺を訪ねて弘法さんに祈念した甲斐あって、やっと娘一人に恵まれた。御礼参りと思いつゝも、家業に追われて、今日まで心ならずも申訳ないことをしていたが、ひ孫ができしかも男の子であったので、殊に男の子に縁のある弘法さんに是非ともと、60年振りに念願を果すことができたということであった。

旧暦の三月二十一日（今日は新暦の四月二十一日）が、こゝの縁日である。盛んな時代には、仁王門あたりから、広い境内も所せましと、露店で賑ったもので、春の訪れとともに特に若嫁さんが赤ん坊を背負っての参詣で、華やかな風景でもあった。

こゝ数年前までは昔ほどまではなくとも、かなり賑わった。大雪のため老朽化していた大師堂の奥が倒れて、本尊は本堂に安置してある。それでも当日は賑わっている。子を思う親の心は時代は移っても変らない。

岩屋寺の弘法（大師）さんを安置する大師堂が再建されたのは、今から430余年前の天文8年で、尼子・三沢両氏の対立の中で、この寺が尼子の兵火によって全焼してから25年目のことであった。

快円和尚の努力によって、本堂をはじめ21坊ほか、堂宇・神社も復興された時、三沢氏の家臣・石原義扶とその妻が、弘法大師創建の高野山の大塔阿本上人のすゝめによって、息源三郎のすこやかな成長を祈念して、木彫の弘法大師坐像を寄進した。今日に伝るものである。

いとし子の平安を祈るのは昔も今も変らず、弘法さんへの信仰は今に続いている。

因みに石原氏は、当地方の今日の石原氏と称する家々の宗家の祖で、当時の横田庄にとっては功績のあった武将である。

岩屋寺の十日さん

8月10日

かっては旧暦7月10日で、早朝岩屋寺に登山、本堂裏山の奥の院前の、阿伽井の水を汲んで、傍らの三異万露塔に注いで、有縁無縁の諸霊にとどけ、さらに持ち帰って祖霊に供えて、やがて迎える盆にそなえたものである。今でもその日には最夜中に徒歩で詣でる人が多い。又こゝの仁多および横田の33番札所1番の観音さんに詣でる人も多い。堂に奉納されている祈願札には、簸川郡や松江地方の人々の名もみえる。

松江藩と岩屋寺

出雲観音霊場33番を定める時、どうしても数が余るので、その選定にあたっていた岩屋寺の和尚が、遠慮したと伝えられている。その当時、松江藩から最高の寺領をうけていたのは、安来の清水寺と、平田の鰐淵寺とこの岩屋寺とであった。記録によれば、この寺の和尚で、松江の石橋町の千手院の住職になった

岩屋寺　路傍に刻む歴史②　番所の記録②　俳句・短歌・川柳

者が多い。こゝの住職が代々松江藩主の相談役の一人であったことは、岩屋寺の地位をしめすものである。

また松江藩主は歴代が巡郷の折には必ず参詣し、時には宝物拝観のために来山したり、また、松江にあるいは宍道の八雲本陣にまで持ち出させてもいる。当寺の末寺は郡内はもとより、能義・大原・八束・松江の地にも多数あった。

輩出した名僧

明治時代に活躍した雲照律師は、わが国の仏教を興隆に導いた一人とされているが、修業時代は岩屋寺で過し、住職であり兄であった宣明を師とした。

今日なお雲照を追慕する仏教会もあり、上下二巻の雲照の伝記の復刻版もまたたく間に売り切れたという。今日残る岩屋寺の宝蔵というのは、かって雲照が修業のために建てた「求聞寺堂」であった。高野山に移ってからも時折りこゝを訪れて修業した。ひたすら修業する雲照の姿を拝して、人々は随喜の涙を催したという。当地方に残る雄渾な雲照の筆蹟はその人柄をしめしている。（詳細は当誌48号を参照）

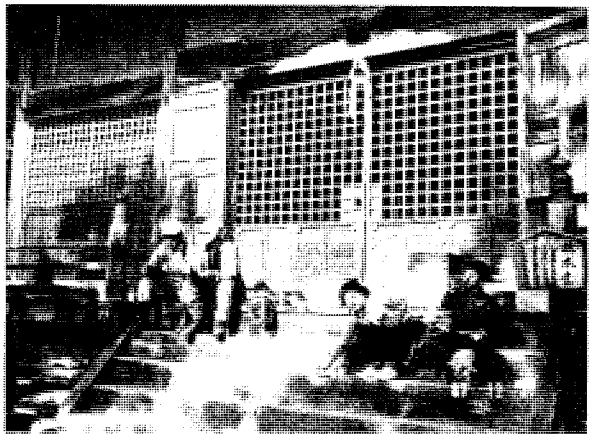
ほかに当寺の澄栄は本山高野山に入り、無量寿院主になった。

澄栄は徳川幕府に出仕し、三代将軍家光の側近にも加わり、幕政について献策したと伝えている。その師は当山28世の頼雄で、亀嵩の出身であった。

創建

奈良時代に聖武天皇の勅願所であったと伝えているが、その後400余年の歴史は明らかでない。

天福元年1233以降とくに中世の記録が多く、中でも当寺の中興僧快内の「快円日記」ほかは、貴重なものである。



本堂前

真言・天台両宗は、国家鎮護を中心として中央に勢を張ったが、修験道の盛行とともに、当寺はその当山派に属し、出雲では三刀屋の峯寺とともに、その拠点となり、郷村鎮護の寺として武将はもとより、庶民の信仰を集めた。

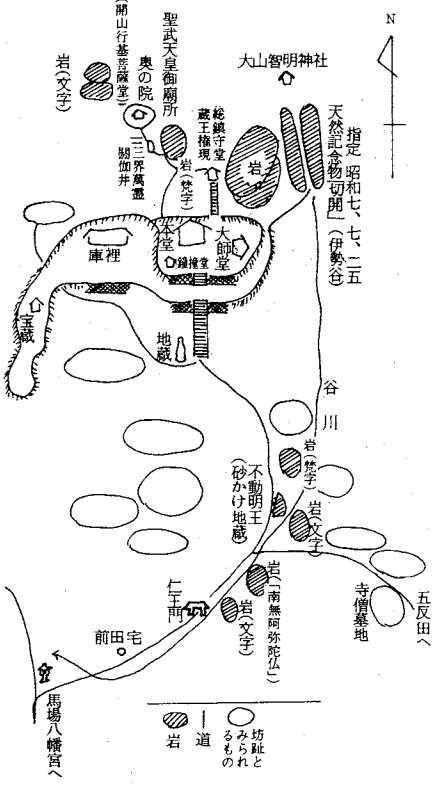
最近各地から、横田庄に関する古文書の発見があいつぎ、当寺が神宮寺となっていた、横田八幡宮とともに、その信仰の中心であったこと、経済的基盤が強固であって、中世半ばすでに市場が存在して、地方の中心であったことも明らかになって来た。そしてこの横田庄の役人として来住した、杠・安部両氏の古記録とともに、その全貌の判明する資料集の完成が待たれる。

天然記念物として指定をうけている「切開け（きりあ）」は、粗粒の黒雲母花崗岩の直立節理に、水蝕が加わって生じた、極幼年性U字形谷で苔むし、夏は涼風流れて幽谷の感を満喫することができる。

当山内を巡って弘法さんの跡をしたう遍路もよく、夏の早暁の雲海はさらによく、秋の紅葉もすばらしい。

広い庫裡の宿泊設備も整っていて、夏季の研修場としては特に好適である。籠に車を止め、ゆっくりと登山、美しい景観のうちから霊気をあつめ、心を養うにもよい。

江戸時代以降は庶民が支えて来た名刹であった。復興を期待すること切なるものがある。



金巌山岩屋寺見取図

路傍に刻む歴史②
六十六部回国供養塔
—亀嵩・梅木原の反谷尻に—

巡礼は日本だけのものではない。キリスト教徒のエルサレム巡礼、マホメット教徒のメッカ巡礼は、すさまじいというほどのものという。エルサレムに代る巡礼地でもある北スペインのサン・ティアゴは、今日でも西欧各地からの航空便もあり（ロンドンからは毎日）、日に一万人を越す巡礼者があるという。

日本でも四国88カ所には、年間20万の人々が詣でているが、瀬戸大橋の開通によって倍増すると見込まれているという。

人びとは尊いものを拝し、聖いものにあこがれ、美しいものに惹かれる。これは巡礼の心ともいえるであろう。

それだけではなく、西洋では懺悔贖罪と病気平癒の祈願が多かったという。日本の巡礼と遍路を考える上でも同様である。

四国88番弘法大師札所、西国33番観音霊場等をはじめ、出雲札33番、仁多郡、横田の各33番の札所（いずれも観音）等がある。岩屋寺は堂宇をとり巻く周囲の山に88カ所の弘法さんが、この地の庶民の手によって建立されて巡拝されてきた。今日流にいえば四国88カ所のミニ版。

巡礼は人間の「ものの歴史」の一面である。庶民は、独眼竜政宗や甲斐の武田晴信（信玄）にみられる、政治史の権力闘争や、その搾取をよそに、営々として働きながら、「心の歴史」を築いてきた。「心」だけは誰も犯すことができなかったからである。その「心の歴史」は村々の辻や路傍や広場に立てられた、巡礼碑が物語ってくれる。句碑・顕彰碑を今まで訪ねて紹介しているが、今号は大乗妙法典六十六部回国碑をとりあげる。この六十六部の名前や生国などは碑文からは読みとれない。勿論どんな事情で回国に出たかもわからないが、終焉の地を求めて遍歴、特別の病気を治す誓願を残して死んだものが多いから、これもそうしたものの一つであろう。

巡礼のうちで滅罪巡礼の色彩の最も濃いのが、**六十六部回国**であった。起りは奈良時代（9世紀）から平安時代にかけて滅罪経典である法華経を写経して、その一部ずつを日本66カ国の一の宮に納経するための回国であった。全土に及ぶ大巡礼で

俳句会二月句会抄

手を足を伸ばし立春仕舞い風呂　浅野　としお
犬ふぐり香煙縷々と墓碑に添う　岡田　蹊花
日々に増す筧の水や蕗の苔　岡田　麗水
厨より妻の鼻歌春立てり　小川　あきお
厳寒や朝の挨拶からむ息　門脇　花子
風邪に臥し錠剤遊ばす掌ごころ　加納　信子
雪山にたなびく煙動かざる　楠　房子
悠久の流れ音なし冬の川　高木　白虹
暖冬も一転美古登山眠る　新出谷　一華
コーヒーの熱きを入れて席なごむ　錦織　富江
幸せを願いて鏃の顔えらび　峰石　美代子
去年の風邪いまだ治らぬ二月から　渡部　夕峰

番所の記録②
大東町上久野字春石の
番所跡

本誌10号で、松江藩内38カ所の番所のうち仁多郡内には9カ所（横田町内7カ所）があることを載せておいたが、最近そのうち福頼の番所跡が、圃場整備で現われたから、春になれば写真とともに紹介したいと承っていたところ、大東町下久野の内田宏さんから、大東町大字上久野字春石に番所跡があって、若干資料もあるが、横田にもかゝわりあいがあるので調査したいと照会があった。詳しい調査が進めば紹介をお願いしたいと思っている。

この春石の番所は、松江藩から分封して置かれた広瀬藩のできた、寛文6年1666ころから置かれたもので、両藩の境界にあたるところにある。屋敷地は凡そ1畝歩で、御役御免屋敷（免租地）となっていた。最後の役人は川上善蔵で二人扶持を給せられていたという。

それより前こゝの役人として勤めていた永野氏が、のち横田町内の吾妻山の北麓、備後との

歌集拾遺　簸の上短歌

羽化終へし蝶は徐に探る如新しき空気に羽をふるはす　永井弥生

種籾を浸せし桶に花冷えのつづきし朝薄氷張れり　佐藤喜代子

亡き人を言ひつつ墓所を清めをり子の無き夫とわれ夕暮れ　小早川恵子

連れだちてプラットホームをゆく老爺ヌード少女のポスター見上ぐ　常盤はるまさ

乙女らの戦ひ散りし沖縄は緑の中にブーゲンビリア咲く　松浦愛子

春雨の北野天満宮の梅林を花びらかつぎ肩ぬらしゆく　岡田時子

やはらかに柳青めると啄木の短歌の宿題孫くり返す　野村節子

眼帯の瞳いたはり夜のドアを淡きひかりの中にさがせり　安部夕波

斐の上川柳二月抄

嫁ケ島橋がまたがる旅の窓　杠京子

進む世について行けない老いの足　松浦木公

冬ごもり暖冬異変でプラン変え　佐佐木千世

暖冬もいつまで続くか雪恋し　古川松

さがし物途中で妻を呼んでくる　児玉哲呂

来年も出来るか知らとおせち盛る　松浦久寿子

カレンダー見ずに梅は花咲かせ　松田牛歩

欲ばらず家内安全だけ願ひ　松浦亜以

キャリアではついて行けない新時代　若槻愛散人

寒椿励ますように赤く咲き　安部春恵

まだまだと臓器移植に不安がり　藤原のぼる

未だ未練あるので幹事居すわりし　渡辺好之

ピアノ弾くあこがれ孫が埋めてくれ　藤原千代子

足巾は縮むが日足延びて来る　若槻白馬

消えていく我が足跡を書いておく　石原冬明

親しさが隣りに座る新年会　真綿よし子

大寒になったが長靴出番なし　横山まこと

汚職なれしてないからだと自民党　田中有樹絵

子等はいき一人で薄茶たてて見る　安部正子

歯ぎしりを鼾で返す夫婦仲　田中芳春

あり、納経するのも神社であった。著名な一遍上人も、この回国を念仏によって果そうとした。

念仏踊りもこれに由来する。

江戸時代（17世紀以降）にはこうした信仰の厚い六十六部もあったが、多くは故郷に住むことのできない罪をもった者が回国に出た。これは全くの乞食の放浪者であったが、長年の放浪の結果、法力を得て人の病を治したり、予言や卜占をするようになり、信者ができると一カ所に定着した。多くは地蔵堂や観音堂に住み、傍らにこのような石塔を立て、村人の祈祷や相談に応じながら一生を終った。この場所は、かっての横田から郡村・上三所そして里部に通ずる要路にあたっていたから、好適の地であった。かくれた庶民信仰であるが、何とかさらにくわしい由来の発掘が望まれる。

写真の中央がそれで、

（年号であろうか）

右ハよこたひんご□□□

奉納大乗妙典六十六部塔

左ハかめだけかなやご□□

旧正月十四日

とあって、右は反谷越え、左は亀嵩をへて金屋子さん（神社）への、道しるべも添えてある。

左は馬頭観世音であり、右は地蔵で左右に

南無阿弥陀仏

為　与助菩提

とあり、いずれも年号不明である。中央の塔と地蔵と関係ありとすれば、回国者が与助であって、死後その供養のために村人が立てたとも考えられるが、他の塔の例からすると少しお粗末であるから別であろう。すると与助についても知りたくなってくる。

本紙40号には、戦国時代の天文4年1535に日向国の空妙という六十六部が、横田町竹崎の京が崎の経塚に納めた経筒のこと。幕末の寛政4年1792になくなった六十六部の墓石（仝町福頼）や、生前に用いた鐘のことなど、くわしく誌してある。

大正末期ころまでは、仏像の箱を背負って鐘を打ち、経文を唱えて各戸を巡って喜捨を得る巡礼者がかなりいて、六部さんと呼んでいた。

備後の北部には50基をこえる塔があって、くわしい由来も明らかであるという。

国境（俵原へ通ずる）小馬木番所に移っている。こゝは鉄をめぐっても重要な往来所にあたっていた。

明治維新以後、永野氏は海外に新天地を求めて進出、敗戦後町内に帰られ、現在大呂に居住し、歯科医である。

毎月発行の本誌「奥出雲」の**旧号**を御希望の方は、残部が若干ありますので、御申込み下さい。10号までは複写ですが、11～154号は実物です。

新らしく購読御希望の方は、くわしいことを次の各地の世話人に、お尋ね下さい。

横田町竹崎　佐世川徳雄

大呂　鉄池正治

馬木　石金章徳

八川　永浜栄子

横田　和泉儀吉　目黒亀雄

立脇隆一　高橋一郎

仁多町（下阿井）杠誉富

大東町（下佐世）加藤光雄

会員頒布一部百五十円／六九一—一六　島根県仁多郡横田町一〇六／二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0—601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

「奥出雲」編集方針（キャンペーン）1　横田＝中世と伝統産業（たたら—美術刀剣・刃物、そろばん—工芸品、畜産）と教育と福祉の町

奥出雲

題字　糸原風亭書

第156号
（4月号）
昭和63年4月2日
奥出雲編集集団©

山なみで分けられた陰陽の中世史

備北の山内・多賀山両首藤氏と奥出雲⑥

尼子毛利両氏の対立の中で

天文9年1540、晴久は祖父経久の忠言をしりぞけ、安芸吉田の郡山城の毛利元就攻撃の遠征を強行した。はじめに晴久は新宮党の尼子国久に命じて、郡山城下の動勢を探索させた。その後国久は3000余をつれて6月下旬富田を出発し、三刀屋・掛合・頓原・赤穴を経て、赤穴峠から三次に入った。途中の三刀屋久祐、多賀山通定らは、非協力や妨害はしなかったようである。国久は進んで甲立五竜城主の宍戸元源（山内⑨直通の女がその妻）に至ったが、宍戸とその一族に阻まれ、富田に帰城し備後からの攻撃の困難を報告した。

8月下旬、晴久は出雲・伯耆・石見の諸将士多数を従えて富田を発し、赤穴から邑智に出て、石見から吉田郡山城に向った。

この中には多賀山⑩通続、山内⑪隆通もいたから、日倉城にいた多賀山通定（のち多賀山⑪）も従軍していたであろう。

毛利元就は地の利を生かし、寡兵をもってよく守り戦った。その上大内義隆の援軍陶隆房（のち晴賢と改名）が到来した。その上冬に入ったこともあって、尼子軍の戦況は日に不利となり、翌10年1月晴久は多数の犠牲者を出して総退却し、富田城に逃げ帰った。この戦で**三沢**⑫為幸は側近の十阿弥十勇士をつれて毛利陣営に切り込み、元就に今一太刀のところまで切り込んだが、元就方の横矢七筋をうけ弱ったところを、井上七郎に首をかゝれて討死した。

この合戦の結果、尼子氏配下の国人衆の間に大きい動揺が生まれて来た。

⑩通続は晴久の催促によってこの合戦に出陣したが、尼子軍の大敗により、大内・毛利方へ傾むきはじめた。（天文22年1552惣領山内氏とともに完全に毛利配下となった）山内氏から入った多賀山通定（のち⑪代）は、このころは日倉城にいたようである（後述）。その後本城郡山城を継いだのは永禄初年前後であろうと文書から推定される。

13人の武将の大内氏加担

吉田合戦で尼子氏が敗退すると、まづ毛利元就は大内義隆に使を遣し、出雲へ出兵されるなら、安芸・備後の諸将とともに、先陣を承って出動しますと申し入れた。そのころ次の備後・出雲の武将13人も連署をもって義隆に書を送り、同様に先鋒を承って富田城へ案内しようと申し入れをした。

備後　三吉隆広（三次）山内隆通
　　多賀山通続　宮若狭守（西城）
出雲　**三沢**為清　三刀屋久祐
　　宍道正隆　河津久家
　　多賀山通憲（掛合）
石見　福屋隆兼　本庄常光
　　出羽助盛
安芸　吉川興経

である。いわゆる尼子から大内に寝返ったといわれるもの。

天文11年1542 7月27日、大内・毛利の4万の軍勢は、赤穴瀬戸山城を攻撃し、城主赤穴光清を討死させた。29日には由来（頓原）に陣をすゝめ、しばらく滞在した。こゝへ出雲の国人衆、**三沢**為清（4才で才童子丸という）・三刀屋久祐・多賀通定・宍道正隆・河津久家その他、さらに伯州浪人南条宗勝らが馳せつけて、義隆に見参と申し出た。

これから大内軍は多賀通定・三刀屋久祐の案内で、三刀屋力峰（地王峠）に進み、11月には松江の馬潟に本陣を置き、大庭・出雲郷・白潟・八重垣・古志原・平原などに陣を張った。翌12年2月、義隆は富田城を眼下に見下ろせる京羅木山に進んだ。

その重臣陶隆房は経塚山に、田子兵庫助は**三沢**・三刀屋・多賀・宍道らの出雲の国人衆を率いて、富田八幡山に陣どった。

3月中旬から激戦が展開され、戦局は一進一退をくりかえし、大内軍は攻撃の転機をつかめぬうちに、糧道を遮断され戦況は不利となった。この形勢の中で、13人の国人衆は再び動揺をはじめ、4月終りになって、三沢・三刀屋・吉川・広田などほとんどの者が、富田城内に逃げこみ、多賀山通定と宍道正隆がふみとどまるのみで、大内軍の敗色は決定的となり、5月に入ると義隆は本陣をひき払い、多数の犠牲者をのこして総退却し山口に帰陣した。

中でも内外から注目されていた義隆の嫡男晴持の討死は大内衰亡の前兆でもあった。毛利元就は敗走軍の殿（しんがり）として生死の境をさまよい、甲山城（庄原）にたどりつき、山内氏の庇護をうけた。隆通は元就を厚遇し、家臣のいわゆる山内36騎を護衛として、吉田郡山城へ送り届けた。

元就は深く謝し、「山内氏は末代とも粗略に扱うべからず」との起請文とともに、乗馬と朱塗の鞍を隆通に贈った。

多賀山通定は嫡子通安をつれて、宍道正隆とともに山陰路を山口へと走った。晴久はただちに白鹿城主松田左近将監を討手として、宍道正隆の居城をおと

備北の山内・多賀山両首藤氏と奥出雲⑥　川柳・俳句・短歌　横田の民話④

し、日倉城の留守をまもっていた、通定の二男通則とその朗党をあざむいて、白鹿城に呼びよせ詰腹を切らせ、城をとりこわしてしまった。（詳細後述）

横田庄と多賀山氏

天文12年岩屋寺は八分通り復興した。この年尼子氏は横田庄の直接支配にのり出し、家臣を送りこんだ。中村には森脇家貞（総代官）、竹崎村には河本、大呂村には河制、蔵屋村には羽鳥、原口村には本田の諸士で、尾園村は山内（多賀山）通続の所領であった。そこでこの年通続はこゝから勅定にまかせてと一名田を、岩屋寺に寄進している。

またこの年の10月21日付の、備後守護山名祐豊（宗詮）から、⑪山内隆通宛の書状に

「馬来家事　息又四郎甲付之奚　可知行之旨可申聞奚……云々」

とあるが、又四郎のこともこの文意も不明である。多賀山⑧通時は幼名又四郎といい、また通続の兄にも又四郎がいるが、いずれもこれとは別人であろう。

同じ日付けで、祐豊花押のある、塩谷左ヱ門尉綱の状がある。その中の一項目に

「雲州横田代官職事」

があるが、この横田の範囲は、右にのべたことからして、八川の尾園村を含めたやゝ広い地域であって、横田庄全域ではない。やはり同じ日付の別状（右の状の各項目の委細を記したもの）には

「横田庄御代官職事、弐千貫文御公用御進納候而、千貫文者多賀方へ被遣之由候」

「馬来事　被成御判候」

とある。したがって尾園村が⑩多賀山通続のものであろう。

10年後の天文22年の尾園村の八川八幡宮（横田八幡宮ははじめはこゝに勧請、北条氏によって弘安4年移された。そこに元宮として再建立されたもの）の正遷宮の棟札には、本願として通続の名がしるされている。後述するように、まつわる史実は今日にも現存している。

尼子晴久はこのころは、出雲・石見・隠岐・伯耆・因幡に加えて、備後・安芸・美作を含めた八カ国の守護となり優勢となっていた。

天文13年10月、備後の多賀山と久代の両氏は、尼子方へ人質を出して服従を誓っている。

天文13 1544、晴久、伯耆・因幡備後に侵入

⑨豊通の女、嫁ぎ先の宍戸から夫死去により帰り、馬来乗綱の後妻となる。

仝　20 1551

横田・伊賀多気神社、尼子代官森脇家貞によって再興、藤ガ瀬城下に町づくり（今日の大市・六日市）がはじまる（詳細は横田町誌に）

仝　22 1553

晴久、備後より高田城を攻める。

多賀山通定（山内氏から祖父にあたる多賀通続の養子として入り、⑪をつぐ）

山口へ走った通定は、大内義隆・義長の二代に仕えたが、弘治元年1555、陶晴賢（大内に叛いてこれを滅ぼしていた）が、毛利元就によって滅ぼされると、毛利の麾下に入り、仝2年石見の陣に参加した。この戦は毛利と尼子（**三沢**も加わる）両氏の戦いで、尼子は敗れた。

永禄元年1558、尼子氏は石見銀山に毛利氏を攻めてこれを敗り銀山を手中に収めたが、その後銀山をめぐって、尼子毛利両氏は一進一退の時代がしばらく続く（大内対尼子、毛利対尼子の対立と合戦と、出雲・石見・伯耆・備後の国人衆の去就についてはまとめて、後日、その分析を載せる予定）。

仝2年、**三沢**氏は毛利氏の陣営にくみする。

この年に、多賀山⑩通続が認めた「当家継図之事」の文書がある。これには

○通続9才の永正11年1514、叔父花栗弥兵衛の逆心のこと。

○通続の祖母は**三沢**腹の遠州兄弟（法名弁源）であること。

（遠州とは三沢⑩遠江守為忠）

○享禄元年1528、尼子氏が多賀山氏を攻めた時のこと。

などが書いてあり、継図は叔父の反乱の時焼失したため、44年後のこの年、聞き書きしたとある。

仝3年、この年退いていた毛利氏は、石見銀山の尼子氏攻めに入った。この暮より仁多郡内から尼子氏の勢力が一掃され、**三沢**氏も毛利氏へ度々誓書を出して忠誠を誓っている。

斐の上川柳三月抄

頑張ろうと思いつ遂に愚痴となり　若槻愛散人
若さまだあるかと鏡に聞いてみる　松田牛歩
春めいて体がじっとしていない　藤原千代子
暖冬で芽生えた春におそい雪　佐佐木千世
老が来てノーネクタイが良いと言い　松浦久寿子
耳遠い姑と手真似でお茶にする　安部春恵
金よりも意気と心で聖子さん　古川松
国際化知らない国が出るニュース　松浦木公
苦労した妻の笑顔が胸を衝き　渡辺好之
人見知りなくてあれこれ老多忙　若槻白馬
ねむってた晴衣を嫁にねだられる　杠京子
六十路すぎ母の紬が似合う歳　真綿よし子
ミニ流行昔のスカートはいてみる　田中有樹絵
独り風呂電話のベルを聞き流し　安部正子
大吉が次の札所で凶と出る　田中芳春

多賀山氏も八川地内の所領の支配も終りをつげたようで、吉田の田部宗右ヱ門は、そこで所有していた一貫文の地の替地を周防でうけた。

仝4年、石見銀山を守っていた尼子方の本庄常光は、毛利方の甘言にのせられ降った。**三沢**氏は毛利方であったが、かつての家臣で郡内の大原郡堺の鍋坂城に拠っていた布広左京亮は、尼子方に属していた。のち三沢氏はこれを降した。

仝5年1562の夏7月（旧）、遂に石見を平定した毛利元就は、いよいよ出雲に兵を進め、赤穴に到着し、瀬戸山城に入った。従った多賀山通定（多賀山氏の本城蔀山城には養父⑩通続がいる）は、この時旧領を安堵され、出雲掛合の日倉城に帰った。天文12年に出雲を去ってから19年振りのことである。

この年の7月16日付で、山内⑪隆通は、毛利隆元・元秋より

「牛尾七百貫・加茂五百貫・井能三百貫・左世七百貫之事進置候　全知行肝要候　仍而一行如件」

の文書によって、出雲国内にて4ケ所を宛行われた。10月17日付でさらに、元就・隆元父子より、

「於通前三百貫地進置候　全可有御知行候　又以富田（註出雲）一途上弐百貫地可進之候　猶隆家（註宍戸）可被申候　仍一行如件」

と、さらに道前を宛行われている。

これらの一連の宛行状は、出雲に進出した毛利軍の陣営を固めるための布石（他氏へのものは省略）であった。

やがて態勢を整えた毛利方の怒涛の進撃が開始されるや、これを防ぐ力はすでに富田城からは失われていた。晴久は3年前48才で急死し、嫡子義久が跡目をついでいた。尼子氏の動揺はおおうべくもなかった。出雲国内の有力国人衆**三沢**氏その他の大半は、すでに毛利方に属していた。

慎重を期する毛利方は、それから12月までこゝに滞在した。元就は腰をすえ石見の平定をさらに固めるとともに、出雲の状勢を見定め、地盤固めに前記のように知行安堵や宛行いをした。

一方、元就はこゝで、兵書・儒書・神書などをひもといた。特に神道関係の学習に力点をおいたのは、出雲大社を中心とする神社勢力や、神祇信仰の実態について十分な理解が必要と考えたからである。神道の講師は多賀山通定であった。瀬戸山城で、出雲八所八幡の由緒、出雲大社の祭神、八重山・須佐両社の由緒、須佐神社々司を国造と称する次第、その家系、八重山神社が須佐国造の火継社であることの由来、神在月の由来等々、神道に関する広汎な諸問題を講じた。通定がどうして神道に精通していたか理由は明らかではないが、当時の武将たちの教養をはるかに超えた、深い知識をもっていた特異な武将であったといえる。日倉城から出土した茶道具などは、それをさらに確認できるものである。（この項については「飯石郡掛合町誌」藤岡大拙氏述による）

通定が日倉城に帰ってみるとすっかり廃墟となっていた。直ちに整備され、毛利氏の兵站線が出雲北部にのびる重要な中継地となった。大内氏の富田城敗退の輙をふまぬことを心掛けたものであろう。

その年の冬12月、赤穴を出発

真青なる冬日の空　簸の上短歌会

真青なる冬日の空をオレンヂ色の長き線引きジェット機のゆく　永井弥生

日だまりに小さき背中を見する老母めぐりはくち色のほととぎす草　永井弥生

寝たるままの嬰は米寿を祝ふ席に表情動かず瞼閉じをり　野村節子

少年となりたる孫は籠り居てわれに馴染めぬ音楽鳴らす　野村節子

長靴の似合ふ女で通したる還暦過ぎし百姓われは　佐藤喜代子

吹雪く道を帰りし孫のオーバーのボタンつけやるに膝に温とし　佐藤喜代子

訪ひゆけど友はわれをも言葉をも忘れしやただ笑まふのみなり　岡田時子

けものらはわれの世界と昨夜降りし雪に乱れて足跡のあり　常盤はるまさ

吹雪く夜の原野の果てに灯火ひとつほのかに見えて心やすらぐ　安部夕波

三月句会抄

新居の灯朧ろ朧ろに灯りたる　浅野としお

春泥来し靴雑然と土間塞ぐ　岡田蹊花

啓蟄や亡き師の期待に報い得ず　岡田麗水

眼鏡置き深夜の雪や煙草吸う　小川あきお

流れ行く水に声あり春を聞く　門脇花子

老い母の綴る手毬や寒明ける　加納信子

病む友は耳さとくなれりおぼろ月　楠房子

春炬燵ひとり横臥や己が刻　高木白虹

春浅し受験に発つ児凛として　新出谷一華

触れて見し日差しに丸く蕗の薹　錦織富江

おくれ毛にかかる淡雪もの淋し　峯石美代子

古びなを飾る湯宿のあたたかさ　渡部夕峰

し北上、洗合(松江の西)に本陣を置き、まづ白鹿城(松江の北東)を落とした。富田城の外濠を埋められたのにもひとしく、周辺の諸城を攻略しながら富田城へと兵を進めた。

それから4年間、尼子籠城軍は、よく毛利の包囲に耐えぬいたが、永禄9年1566 11月、遂に城主義久は毛利の軍門に降り、富田城は落城した。この4年間の経過を若干のべると、

富田城を包囲された、永禄7年の終りころ、尼子氏は全く孤立状態であった。仝8年は5月に、将軍足利義輝が、三好義継・松永久秀によって殺され年であった。元旦には孫輝元が13才で元服し、その若武者ぶりを見て、元就は殊のほか喜んでいる。まもなく洗合城から富田城の西方星上山に本陣を移し、4月に入ると総攻撃を開始している。毛利方3万に対し尼子方1万であったが、守りは固く容易に落ちなかった。賢明であった元就は深追いせず、一旦洗合城に引き揚げ、9月に入ると再び富田城へ総攻撃をかけた。

この時、富田川の中州で、品川大膳(毛利方の益田七尾城主益田藤包の家臣)改め椙木狼介勝盛と、山中鹿介の一騎打ちがあった。

これより元就は、熾烈な兵糧攻めを開始した。永禄9年2月になると、落人の数が日増しにふえていった。

こうして、多い時は3万以上の兵力を有していた尼子方ではあったが、落城の時はわずか135人のみであった。その人名は、「奥出雲」132 133合併号にくわしくのせ詳述しているが、そこに多賀姓をもつものが4人いる。これは多賀山=多賀ではなく、別な松江地方の多賀氏(祖は藤原氏ではなく仲原氏、山内首藤は藤原氏、詳細は「掛合町誌」に)である。

白鹿城攻めや、富田城包国戦についての通定のことは、軍記ものにはその名が見えないが、健在であった。天正14年1586の高野山の功徳寺の無量堂棟札には、通定とのちその跡を継いだ弟通信の名がみえるから、高野山の蔀山城を本城として、統轄していたことがわかる。なお仝年に、弟通信(⑫代)が発給した文書があるから、この頃が交代の時であろうか。

横田の民話(4)

—大馬木②

長い名の子供

あるところに、たった一人子が生まれて、あんまり可愛うて、どんな名前を付きょうかと思って、ちいとその、長い名前を付けてやろうと思っていろいろ考えたあげくの果てに、父さんがつけた名前が、

「へいとこへいとこ、へいかんじ、きょうまいかきょうまいか、ちょこちょこべえのちょうまいじ、ながすか太郎べえ、十万八千ちょうぼくたあらあ、なあやら、ちょう太郎」

という名あ付けた。そしてまあ、可愛がっとったところが、ある時、川の方へ友達と水遊びに行きて、つい、あやまって川へまくれた(ころんだ)。そいから、友達があわてて、父さんのところにとんできて、

「へいとこへいとこ、へいかんじ、きょうまいかきょうまいか、ちょこちょこべえのちょうまいじ、ながすか太郎べえ、十万八千ちょうぼくたあらあ、なあやら、ちょう太郎さんの、川へまくれさっしゃった」

言うて、とんで戻って言うたども、あんまり名前が長あて、その名前を言うなかいに(うちに)けけ(とうとう)、水におぼれて、その子供が死んでしまあた言うて。

あんまり長い名前もいいこたあないそうにございます。

(語り手・荒金フサヨ
聞き手・岩崎　悦子
吉川佳津子
S47・12・24収録)

出典・「鼻きゝ甚兵衛」
「島根のわらべ歌」

とびとび

仁多郡横田町大呂
採集　酒井董美
採譜　高橋一郎

♩=約72

とびとび　まあてみせ　あさっては　ほうじょえだ　たいをかって　なげちゃる

「鳶とび　舞ってみせ　あさっては放生会だ　鯛を買って投げちゃる」

いずれも酒井董美編著

「長男の出家」(三浦清宏作)

昨年後期の芥川賞受賞作品で、最近では珍らしく素直で一気に読みこなせるもの。

ぼく夫婦の長男(妹一人有)が小学生の時から念願の出家を、中学生になると実現し、尼僧の養子となった経過が、ぼくの心の動きとともに綴ってある。随所に十分味えるユーモアがあるが、じわりじわりと身にこたえてくるこわさがある。これまでの家庭生活は、親子・夫婦・対人間の断絶と崩壊におろおろし、嘆くものばかりが多いのに、これはそれをあたりまえであるとして、前向きの方向を見すえている。その強さ豊かさに圧倒される。文明批評がある。

年二回の発表号の、戦後間もなくの井上靖の「猟銃」前後以降のものが、本棚のあちこちにある。石原慎太郎の「太陽の季節」もみえる。時の移りを思う。

(蓬)

会員頒布一部百五十円／六九—一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎(振替口座松江0—601)頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 157 号
（5月号）
昭和63年5月4日
奥出雲編集集団©

「奥出雲」編集方針② 神話と古代史の正しい理解をすゝめる

七世紀の歴史（2）

鏡・剣・玉をめぐる神話がこの時代に作られた背景を考える

―①ヤマタのオロチ退治の物語―

日本の正史「日本書紀（日本紀）」

前回（53号）の「栄光去りまた来る」は、壬申の乱（672）をめぐる話の、日本書紀からの要約であった。この史実については、敗戦までは統制によって研究者は公表できず、一般には知らされなかった。しかし昭和維新を唱導する指導者達は、一つのより処として秘かに語り、軍の将校養成学校の国史教科書には載せられていた。戦後は自由となって、奈良時代前の世紀の古代王朝成立の要として研究し尽されている。

敗戦までの皇国史観の要であった明治維新の先例としての「大化の改新」（①孝徳天皇645―以下〇は天皇の代数順）は、今日では書紀の研究から、①肯定論（実行のない名目改新の詔があった）②否定論（のちの大宝令―天武天皇千年700―をこの時代に転載したもの）③若干の基礎があった、とする三論に分れているが、現在は③が大方の支持を得ている。従ってその実体は極めて薄いとされ、高等学校の歴史教科書の中では、記述から姿をすっかりぼかされているものもある。

この「大化の改新」の語は書紀にはない。この語句は、明治の新政府となって、その政治の改革を「明治維新」と称し、その先例を歴史上に求めて、「大化の改新」と称しはじめた時から、使用されたのであって、それを唱えはじめたのは、杉浦重剛（安政2 1855～大正13 1924 明治・大正期の国粋主義的教育者で、その著「倫理御進講草案」は皇太子に倫理を説いた記録）であって、以来、皇国史観の一つの柱であった。また別の柱の一つに南朝正統説があったが、今日では南北両朝併立が定説となっている。

鏡・剣・玉

古代の大和やその周辺には、その覇者となることをねらっている豪族が、特に多くひしめいており、それぞれ大陸とも繋っていた。書紀に明らかである。大伴・物部をはじめ多くの豪族は次第に勢力をそがれていったあとでは、蘇我氏が最も強く対立する豪族勢力であったが、中大兄皇子（のちの天智天皇）と中臣鎌足（のちの藤原）とによって、645年その勢力は細まった。そして大和王朝の基盤が強化され、③天智天皇の即位後（662）、わが国ははじめて国号を日本と称するようになった。アジアの国際社会への積極的登場となり、急速に体制を整えるため、その制度の範のすべてを中国に求め、留学生や留学僧、さらに渡来人、亡命者によってとり入れた。王朝を確立し皇位をしめすものとして「鏡」が登場し、⑤天武天皇の時に「剣」が加わり、⑥持統天皇（天武の皇后で、天武の皇子のちの⑦文武天皇擁立の困難のため女帝として即位）の時代に「玉」が加えられ、中国からの道教思想に裏付けられ、三種が登場したが、書紀ではずっとあとまで、神器は鏡と剣の二種のみとしての記述が続いている。

その他のことは省くが、こうして古代天皇制は固まってくる。

（この間の4代の天皇30年間のことは、書紀執筆者は見聞きしていた事実であった）

日本書紀（日本紀）・続日本紀

書紀は⑤天武天皇10年681年に編纂の作業がはじまり、⑨元正天皇6年720年に完成した。わが国最古の官撰正史で、⑥持統天皇までの漢文記述で、以後は続日本紀へと続く。

中央集権後の統一国家を唐の制度をとり入れて完成したが、大陸を知るほどに大陸諸国に対する自国の独自な歴史を必要とし、国内に対しても現王朝の正統性を主張し、権威あらしめるために、中国で学んだ学者や僧、百済からの来朝や亡命の多数の学者を中心に、中国の史書を範とし、国内の各豪族の伝承・民話をはじめとする資料、留学者の日記、中国の史書（邪馬台国をしるす魏志も含む）、朝鮮の史書などを用いて日本書紀は記述された。

中には朝鮮の史書の記述をそのまゝ引用して、わが国の記録の空白も埋められている。さらに記述にあたって中国の古典（漢書・後漢書・文選ほか他数）の文章をそのまゝ用いて、文章を飾り体裁を整えてある。従って不合理な箇所のつぢつま合わせの潤色が多い。そこでこれら余分なものを除いて、正しい歴史を明らかにする研究は、今日もなお続けられている。「大化の改新」「壬申の乱」の新らしい記述はそしうて生れたものであり、考古学上の発見もまたそれを補強している。

こうして6・7世紀の歴史がまとめられ、それ以前の歴史も綴られ、その前へ王朝の由来を神話によって構成して置いたの

七世紀の歴史（2）　俳句・川柳・短歌

のである。

神話時代について書紀では、神話を作り上げた（本文）の元になった資料即ち神話の原像が、第一の一書、第二の一書……として、数多く載せてあって、その過程を知ることができる。

三種の神器の出現は先にのべたようであるが、神器は天の岩戸神話、天孫降臨神話、ヤマタノオロチ退治神話等の中に位置づけられて、大和王朝の建国の由来として冒頭に飾られた。

明治・大正・昭和初期に教育をうけた人々は、それを完全な事実であるとして来ていたのである。いま、書紀の記述をもとにして、オロチ退治の神話の構成がどうしてされたかの研究（神話研究の第一人者三品彰英ほか）も交えて記述する。

書紀の文の骨格を下の表のようにして考察する。表中の語はわかり易く簡単にしてあるが、正式には次の通りである。

イナタヒメ

書紀　櫛名田比売

出雲国風土記　久志伊奈太美等與

エノ川　広島県内江川上流の愛の川

麻奴良比売命

古事記　奇稲田姫

クサナギノ剣

倶娑那伎能都留伎

クサ　獰猛な

ナギ　青大将（蛇）

大蛇からでた剣の意

スサノオ

書紀　素戔嗚尊

風土記　須佐乃烏命ほかいろいろ

古事記　速須佐之男命

Ⓐのスサノオ降臨地名には第四の一書に、新羅のソシモリ第五の一書に熊成があるが、こゝではふれない

第一段階は出雲国に土着していた伝承で、出雲国から大和に出仕した語部が語ったもので、出雲国風土記の記述と同じである。（詳細は本誌87・88・135・136号参照）

出雲国風土記では、スサノオは須佐（現佐田町須佐）に土着し、そこのスサノヤツミミの女イナタヒメと結婚し、生れた子は出雲の各地の開拓に従う（本誌135に詳細）。そしてその後その子孫の一人の活躍舞台はヒノ川流域の大原郡である。素朴な国土開拓の歴史が誌してある。

当時ヒノ川とは出雲大川（今ノ斐伊川の古名）の中流大原郡内のみの呼名であって、今日の斐伊川全体の呼び名ではなかった（詳細は136号に）。

第二段階では、オロチ退治と剣の物語が加わる。剣の由来を説くためにオロチ退治が入ったのである。オロチ退治の物語は世界各地にあり、中国・朝鮮にもある。中国の史書の中の高祖本紀に「漢の高祖（前2世紀）の斬蛇剣」の物語がある。極めて類似し、スサノオの物語の原型をしめしている。書紀は別名で韓鋤剣と似た名も付けている。

さらに書紀によれば、天武天皇は即位すると、漢の高祖が漢の新王朝の始祖となったことに擬して、自らを新王朝の始祖と称している。このことは当時の書紀執筆状況を推察するのに見落せない点で、こうしたことは後述するように数多くある。

第三段階では、剣の奉献と祝婚の歌が加わる。「八雲立つ出雲八重垣……」の歌は、この雲がムラクモ（雲）ノ剣の起りとなるが、また漢の高祖の先の伝説の中に、そっくりの話がある。

八重雲の中で高祖は妻の呂氏と暮らしている。そこの文と同じものが書紀のこの部分にそのまゝ入っている。その歌を含めて、オロチ退治にまつわる話らしいものも、地元の出雲国風土

発展段階		Ⓐ スサノオの降臨地名	Ⓑ 結婚女性	Ⓒ 結婚場所	Ⓓ オロチ退治	Ⓔ 剣	Ⓕ 剣の奉献	Ⓖ 祝婚の歌
第一段階	第一の一書	ヒノ川上	スサノヤツミミの女イナタヒメ	スガ				
第二段階	第二の一書	エノ川	仝右	ヒノ川上	ヤマタノオロチ	蛇ノ麁正クサナギノ剣		
	第三の一書		アシナヅチの女イナタヒメ		オロチ	蛇ノ韓鋤ノ剣クサナギノ剣		
第三段階	本文	ヒノ川	仝右	スガノ宮	ヤマタノオロチ	十握ノ剣クサナギノ剣アマノムラクモノ剣	クサナギノ剣天神に献上	八雲立つの歌
	（古事記）	ヒノ川	仝右	〃	仝右	十拳ノ剣クサナギノ剣	クサナギノ剣天照大神に報告する。	仝右

記の中にはまったく記述がない。また前回掲載した皇子（みこ）の漢詩も、中国の漢詩をもとに作られたものであることは、当時の知識人の教養は中国の古典に基づくものであることを示している。

また、イナタヒメの父母が、アシナヅチ、テナヅチとなっていることは、古典の上では地名に結びつかぬ名は新らしいとされていて、これもスサノヤツミミから改名したものとされている。

そして日本書紀・古事記の神話体系の主潮は、政治意識がその基本にあることは、その序文にも明記してある。従って話はすべて征服者と征服されたものが明らかにされなければならない。そこで剣の奉献のことが加わってくる。一般の神話では、宝剣を得たものが天下をとるのが筋であるが、こゝでは中央に奉献して服属したとされることになっている。書紀には6世紀に、出雲が2回宝剣を献上する物語があるが、同じことである。

数奇な運命をたどった剣（本誌29号に詳述）書紀の記述によると、⑤天武天皇　674～686　は③天智天皇が政治の原則に儒教の合理精神を加えたので、諸豪族や民衆の反感を買い、壬申の乱の敗北の原因の一つとなったことを考えて、中国の道教思想で組み立てられた神道に傾いた。

伊勢の大神は、伊勢地方の太陽神の信仰に厚い部族が、その祖として祭っていた神社であった。東国経営に力を注ぐ大和王朝は、その海人族の力を頼りとしたので、この地の神社や太陽信仰を利用し、6世紀前半ごろからこの神社と関係を密にしていた。そして7世紀に入ると、伊勢の本来の祖神のうえに、大和の祖神（太陽に仕える巫女（みこ）が、太陽そのものとなり、天照大神となる）がさらに祭られることになった。その後壬申の乱には、伊勢の勢力の協力が絶大であった。のち天武天皇はこの社を王朝の祖先の神社とした。やがて神道は中臣氏（藤原鎌足）の登場で——中臣氏の職掌は祭祀を司る家柄——さらに強くなり、遂に天皇を現人神とする思想へと発展した。万葉集のこのころの歌に多く歌われている。

①天智天皇は皇位継承として、「鏡」を定め、さらに「剣」を加えようとし、尾張氏（後述）のもとにあった剣を欲した。

天智天皇7年668（このころはしばらく年号はない）、新羅の僧道行は、尾張氏のもとにあった（一説では他にあったとも）剣を盗み、新羅に逃げようとしたところ、暴風雨にあって逃げられず、捕えられて剣は天皇の下に保管された（書紀）。

研究者によれば、これは神器とするために仕組まれた事件であるとする。すなわちその年に道行は勅命をうけて、愛知県知多市八幡平井に法海寺を草創しており、それはのち天武・持統両帝の時代には勅願所となっているから、このことは道行のこの事件での褒賞と考えてよいという。

その後、剣は天武天皇6年678に奈良の石上（いそのかみ）神宮にわざわざ摂社を建てて祭られている。この時伊勢神宮に祭られなかったのは、このころはまだ伊勢は皇室の神社ではなく、石上神宮が日本最高の神社であったからである。

②天武天皇15年686、天皇は重病の床についた。古代呪術の奥儀に心を深くよせていた皇后（のち持統女帝）の願いで、6月10日占われたところ、剣のたたりであるとのお告げがあり、その日直ちに石上神宮から、尾張の尾張氏の下に届けられた。しかし天皇の病状は好転せず、不幸は加わる一方で9月9日崩じた。これは太陽神の象徴であった鏡をまつる伊勢神宮には手厚い待遇がされたが、剣の扱いは天皇の手元や、石上神宮へ置かれた程度であったから、崇ったと考えられたのである。

もし天皇が剣の崇りと思わなかったら、尾張へ返されることなく、そのまゝ石上神宮の宝剣とされたであろうし、そして書紀が書かれる時に、ヤマトタケルの野火の難と剣とは、結びつけられることもなく、さらにクサナギノ剣が、ゴロ合せで草薙剣と命名されることもなかったであろう。

③尾張の豪族尾張氏は、古くは景行天皇の王妃も出している尾張の名門で（出雲臣と同じく国造）あり、その上ヤマトタケル（日本武尊）の東国出征に果たした功績は大きく、首長のタテイナタネ（建稲種命）は討死している。これが剣を尾張に置いた理由の一つであろうという。その妹ミヤスヒメ（宮簀姫）は、このヤマトタルと結ばれている。

四月句会抄

朧夜は雪駄懐かしただ歩む　浅野としお
上向いて流るるもあり落椿　岡田蹊花
井手水のささやき奏でて草萌ゆる　岡田麗水
座卓拭く妻の手元や春埃　小川あきお
芽吹く雨雑木林の色けぶり　門脇花子
春一番峡の眠りをかけぬける　加納信子
一人言おぼろ月夜の千鳥足　楠房子
勅願の文字傾きぬ雪の果て　高木白虹
逝きし人門札錆びて春寒し　新出谷一華
行きどまり行方問わるる春の道　錦織富江
春疾風下校の子らの背を駆ける　渡部夕峰

斐の上川柳四月抄

はしゃいでぐんぐり返る入学日　藤原千代子
心臓は未だ衰へず痴呆症　渡辺好之
お彼岸に蓮のうてなに友は逝き　安部春恵
老いたのか友の手紙の字が乱れ　若槻白馬
成長のあかしのごみとあきらめる　石原冬明
大きくなった孫を見上げて我ほそく　安部正子
楽をして腹も減らず米余る　松田牛歩
その嘘は四月馬鹿でも許せない　高木白虹
暖冬のおかえし春が足踏みし　松浦木公
青春を鉄路に散った子等あわれ　若槻愛散人
お手伝いうまく断る知恵もつき　藤原のぼる
まん丸い地球の中で角を立て　松浦久寿子
不自由の覚えあるから捨てられず　松浦亜以
ジャスミンの香りほのかに春の部屋　真綿よし子
念を入れ目じりの年齢に厚化粧　田中芳春

冬から春へ

簸の上短歌会

芽吹くものになべてやさしき雨の音病み臥す妻よ　常盤はるまさ
梅はほころぶ
斑雪の山の畑に豌豆の頭もたげし芽吹き鮮らし　野村節子
枯草のなかに菫の花ひそと農夫は日暮れを野火焚　岡田時子
きてをり
まだ固き蕾のつける梅の枝にひねもす雪の降りつ　松浦愛子
ぎにけり
山裾の辛夷の苞に春の雨よりそふ如くひそやかに　永井弥生
降る
幾千の蛇うねり来る如くにて道行く吾れに地吹雪　佐藤喜代子
襲ふ
雪晴れし北丘山に山鳩はこもれるごとくひねもす　安部夕波
鳴けり
中国への旅思ひつつ地球儀赤唐辛子ほどの日本　常盤はるまさ
見ゆる
皺深き両手に息を吹きかけて冷えのきびしき部屋　永井弥生
に写経す

兄の死後尾張を支える中心となるヒメのため、尾張の人々のために、ヤマトタケルは剣を残して去ったのである。

ヒメの死後、その地の氷上山に剣は一族とともに祭られ、のち名古屋市内の松炬島に移されて祭られた。こゝにある時さきの盗難にあっている。そして18年を経て天武天皇から返えされると、新らしく今の熱田の地に神社を創建して奉斎されることになった。熱田神宮の起りである。尾張氏は壬申の乱の折、天武天皇側の強力な味方となって、勝利に導いているし、天皇が幼児の時その養育をつとめた大海人氏（天皇は大海人皇子と呼んだ）は、尾張氏の一門でもあった。

この崇りを楔機として、「尾張の守護剣」は「王朝の守護剣」として尾張に返されたのである。こうした歴史の舞台裏は神話と違い事実として迫ってくる。因みに、熱田神宮には今日では、「五座の大神」と呼ばれる天照大神、素戔嗚尊、日本武尊、宮簀姫、建稲種命が、剣とともに祭られている。

そしてこの剣は、358本の神庭荒神谷出土の銅剣と同類のもので、綾杉紋の美しいものであるという（詳細は本誌29号、さらに「歴史への招待」12巻参照）。

いろいろの神話は編纂方針によって作られ、歴史記述の前に置かれて、大和王朝の成立を古くそして権威づけるためのものであったことは定説である。こうした意義は十分に認めねばならないし、また、世界各地にあるこの種の、ペルセウス・アンドロメダ神話（英雄・女・対立者・剣）の中では、スサノオのオロチ退治の物語りは、構成といゝ内容といゝよくできた優れたものの一つであるという。

（付）当地の稲田神社の創建は、

文政5年1822年の3月2日、稲田の弥次右衛門（若槻）の夢じらせによって、原口天満宮（当時の原口村・蔵屋村と六坂をのぞく稲田村の氏神）の神主足立和泉とその子隼人久重が、旧社地に神社を設け、神話に因んで産湯の池も造った（本誌32号に詳述）。このことは明治6年松江藩庁に差出した原口村の住民が、見聞きした事実として書類を認め上申していることで明らかである。また「稲田」の地名は、15世紀に、14世紀以来仙洞御所代官として八川に住んでいた安部氏がこゝに移って開拓をはじめてからのものである。現在の神社はかって『神社への寄附の鬼』と雑誌「文芸春秋」が特集で紹介した、小林徳一郎が昭和初年（現在地）に独力寄進したものである（詳細本誌32号）。壮麗な社殿は寄進者の篤い神社信仰のあらわれである。

以上は、日本書紀、伊勢・熱田両神宮の縁起書などや、先学の研究を交えてのべたものである。信仰となれば別であるが、21世紀への飛躍のためには、この神話も正しく理解せねば、かっての時代のような誤まった思想に向うことになり、平和を忘れ後世に悔を残すことになる。

研究が進み、人智も進んだ時代には、わが国の歴史の中から、新らしい指標をみつけ出して育てる必要がある。

——次回（3）では世界各国の神話と比べ、日本神話の特色を明らかにし、その良さとおちいり易い危険性について明らかにしたい。

（篤志家の御協力に感謝します）

会員頒布一部百五十円／六九—一八　島根県仁多郡横田町一、〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0—601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

「奥出雲」編集方針② 神話と古代史の正しい理解をすゝめる

奥出雲

題字　糸原風亭書

第158号
（6月号）
昭和63年6月4日
奥出雲編集集団©

山なみで分けられた陰陽の中世史
備北の山内多賀山 両首藤氏と奥出雲⑦

多賀山⑫通信

天正17年1589、通信は堀江定順に懸合（掛合）代官職を与え、翌年堀江太郎兵ヱに、懸合郷梅原（掛合町多称）の内で、五貫文の土地を宛て行っているから、この年までは蔀山城にあって掛合城を支配していたことは確実である。

仝19年9月9日、通信は毛利輝元によって蔀山城を改易され、一子通次とともに土佐に落ち、代って城番として吉川広家が入城した。蔀山軍記によると、通信は泉四郎信行の娘を妻としていたが、久代兼秀（西城住）の娘に恋慕して妻を離別したため、泉との関係が悪化し、紛争が絶えなかった。その上通信は専横で、輝元の下知にも従わず、備中の高松城（秀吉方の清水宗治が城主）の水攻めや、冠城の後詰の催促も聞かなかったので、改易されたという。この時から掛合郷は多賀氏の手を離れたであろう。以後、堀尾吉晴の入国までの10年間のことは、明らかでない。多賀氏が掛合郷を支配していたは、15世紀末から100年間ほどの長きにわたったことになる。

なお、通定の子（真宗の僧籍に入る）については、一つの哀話があって、仁多郡内の亀嵩の聞善寺多賀氏、横田の善徳寺に、それにまつわる話があるが、別の機会にゆずる。

山内⑪隆通

永禄11年1569まで、将軍足利義輝に度々献上物をする。

この年、輝元は隆通が太刀を贈ったのをよろこぶ。

隆通・元通（隆通の嫡子で、のち⑫代を継ぐが、父に先立って天正7年33才で死し、弟広通が⑬代となる。妻は口羽春良の女）は、この年3度父子ともに輝元に誓紙を捧げ、疑心なきを訴える。（元通は吉川氏と兄弟の契約も結ぶ）

鞆の浦にいた足利義昭の入洛を援助するため、隆通は7回に及び、太刀・馬その他多額の献上をする。

輝元は⑬広通の家督相続を承認する。

戦乱は国内の動揺をもたらし、度々毛利に誓書を出す。

隆通は実子広通を人質として毛利隆家の下に出すことを申し入れる。

この年輝元は、**三沢**・三吉・久代の諸氏からも、人質として実子を差出させている。

天正14年2月12日付の山内文書304号は、毛利隆元・輝元の命により、隆通が注進（差出）した知行高であるが、合わせて18カ所6,790貫であった。

備後の信敷東西1,000貫、他7カ所の計4,735貫が中心で、芸州140貫、**雲州**では賀茂500貫、佐世400貫、大東300貫、大東の大西のうち200貫、三代神原300貫である。**横田庄**にはかゝわりは全くない。

この年10月15日隆通は死去。

⑬広通

隆通の妻も隆通なきあと、幼ない三男の広通について、家督のことに心配し、系図を整え、古今の書をひもとき、多聞寺の97才の法師の教えも聞かせた。

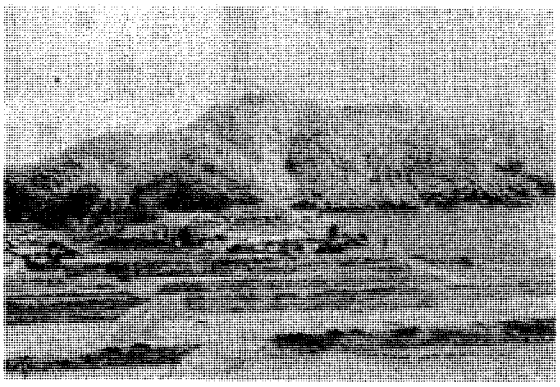
豊臣秀吉の高麗国出陣にあたり19才で従軍し渡海す。21才の時帰国し、24才の時再度渡海従軍し、25才で帰国した。58才で死去。

毛利氏に従い萩に移り重臣として仕える。

妻は口羽伯耆守春良の娘。

⑭元資・⑮就通と続く。

元亀3 1572
天正4 1576
天正7
天正12
文禄元 1592
慶長2 1597
寛永8 1631



甲山城（庄原市山内）山内首藤氏居城

備北の山内・多賀山両首藤氏と奥出雲⑦　明治35年⑧　川柳　句碑めぐり③　横田の民話⑤　短歌・俳句

横田（旧横田村）の生活
明治三十五年（8）

支出の生活費の中味今昔

今日の生活は、都市と農村の差は殆んどない。農村に於ても上流・普通の差もこれまた殆んどないようになっている。従って今昔といっても、明治35年の支出の中味を列挙するだけに止め、あとは読者の方でいろいろ考えて頂くことにしたい。

①被服費

品目は、単衣、袷、帯、肌子及びシャツ、汗除き、羽織、袢天、袖無し、間衣、足袋、褌、腰巻、脚絆、股引き、山衣、手掛がその主なものである。

夜具の洗濯費として一ケ年一戸平均30銭とみてある。昔は平常用いる夜具は敷布というものもなかったから、ほとんどほどいて綿を出し、洗濯してまた縫い直しするのが、衣類の虫干しとともに、梅雨明けの年中行事であった。

雨具はカラカサで年間一戸平均50銭と見込んでいる。

②食料費

粳米（うるち米）、糯（もちごめ）——食用とするほか、冠婚葬祭費として支出する。屠子（だん子等にする）、大麦（全戸の8割で醤油づくりに使用）、大豆（醤油原料に1/3、味噌原料に2/3）、小豆、きび、そば、豌豆、菜豆。野菜としては大根がその大半を占め、次いで茄子。他にかぶ、ごぼう、甘藷、馬鈴薯、里芋、にら、こんにゃく、南瓜、胡瓜、葱のほか10種に果物（いずれも151号に品名記載のもの）

その他加工品或は他地域からの購入品としては、食塩（一戸平均年2斗5升）、魚類（生・乾・塩）、酒（仝前3升3合で今日使用とは比べものにならぬ程少ない。時々晩酌する程度のものが上級10数戸の中にあるのみで、冠婚葬祭にのみ用う）、砂糖（仝前3斤）、菓子・煙草（喫煙戸数350／591戸）、牛肉（平均年間一戸200匁）、うどん、そうめん、焼酎、種油、海草類、奈良漬粕、酢等である。

③建築物及家具費

建築の新築棟数14棟952円他に修繕費2387円で一戸平均5.6円、家具の新調修繕費は一戸平均3.6円。

④消耗品費　％総計中の割合

薪　47％　木炭14％

石油　19　マッチ3

用種油　灯ろうそく　松脂　4

筆墨紙　5　びんつけ油　元結　8

⑤冠婚葬祭費（円以下切捨て）

	誕生	嫁取	婿取	嫁入	婿入	年賀	葬送	法事	諸講	建築祝	氏神祝	休業日	合計
上位 数	2	1	0	0		1	4	12	3	1	44	44	
上位 1戸高	30円	94				46	115	42	3	26（金刀比羅・稲荷の諸講 木家建築なし）	19	5	50円
中位 数	13	3	1	3		3	14	60	18		185	185	
中位 1戸高	14円	59	146	180		14	39	15	2		9	3	27円
下位 数	34	9	8	7		12		135	25	13	362	362	
下位 1戸高	6円	9	7	37		6	18	3	2	8	4	2	12円

あげ法事多し

⑥交際費

冠婚葬祭費に対する贈物費ほかで、年間一戸平均で上の上　75円　上　40円　中　25円　下　15円　総平均　20円余

⑦教育費

小学生　325人1人当4円37銭

筆墨・書籍・授業料

他町村修学生13人〃61円84銭

仝右の他寄宿費他

⑧衛生費

医師診察料・薬価売薬　1円69銭

伝染病予防費（春秋2回）27銭

農林業生産費

①種苗費として穀類、豆類、蔬菜、特用作物、果実苗、杉桧苗等で、70％は穀類が占めている。

②肥料

生産肥料としては、人糞、人尿、堆肥、蚕糞、鶏糞、木灰、紫雲英、苜蓿、生柴草で98.2％

購入肥料としては、硫曹肥料と油粕で1.8％である。価格としては10,851円である。

斐の上川柳五月抄

横へいな口の割には働かず　松浦亜以

ガットなど横目で睨む農繁期　藤原のぼる

苗箱に水をやりやり秋祈る　安部春恵

忘れたい事のみ頭にこびりつき　安部正子

年寄りを迷わすような手を使い　若槻愛散人

腰痛も口に出せない農繁期　松浦久寿子

新聞も見出しの太文字だけで済む　高木白虹

農機具がうなり田圃が目をさまし　松浦木公

清水の花びらやけに乱気流　渡辺好之

うかうかと申しておれぬ俺も父　藤原千代子

物豊か自由に育つ孫案じ　若槻白馬

仕事ふえ猫忘れがち春盛り　田中有樹絵

やっと春桜ニュースに花が咲き　真綿よし子

風邪引きも若さの順に床をあげ　杠京子

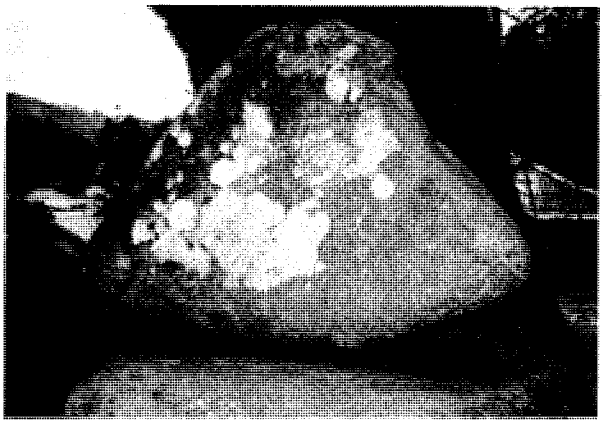
連休は人ごとですよ畦をぬり　横山まこと

③農具新調及修繕費は鋤先、鍬、鎌である。　1,023円で
④病虫害駆除予防費　90円で油類、薬品購入代である。
⑤養蚕費　4,726円で
蚕種　7%　桑葉　91%
籾殻　葉
他に木炭、石油、ローソク代167円、器具新調・修繕費として97円がある。
⑥家畜費
買入家畜　牛10頭　355円
馬11頭　486円
飼料代（全経費中の84%）
平均1頭で藁1500把　4円50銭
麦4斗　2・50
大豆2斗2・0
糠1石9升5合　2円19銭
笹225把1円14銭5
生草2500把7円56銭
籾がら1石5斗　65銭
豆がら他1円
計　20円52銭5
治療費　計　29円87銭
交尾料　牝牛170頭（1頭73銭）
牝馬50頭（仝50銭）
牛馬借入料　鞍下牛で本村92頭あって1頭平均10円
合計　11,597円

句碑めぐり③
芭蕉の句碑
——亀嵩・十萬寺境内

仁多郡における近世俳句の発生の地は大馬木で、湯の廻を中心とするものであったことは、本誌80 82 83号と句碑めぐりの77号①と87号②にしるした。その指導者は大田出身で出雲に住んでいた蕉門美濃派の巨匠・しのぶ庵魚坊であり、当地の中心は湯の廻の分家堀の内の石明であった。石明なきあとは87号にしるした阿井の若月路考であって、これらの人々は天明から寛政年間に活躍した。

亀嵩の聞善寺の住職宜啓は、石明の死後は路考について指導をうけ、言則庵硯獅といった。すでに郡内の各村々には同好者もふえ、ことある毎に句会が催され、社寺にも献句された。今日残るものはその頃のものである。「雲南」という木版刷の句集も号を重ねている。



硯獅のあとをついで、亀嵩の指導者となったのは桃酔（伊豆屋山根又十で、掬流斎と号す。天保5年没）で、硯獅の存命中の文政7年1824、美濃派の古梁と9世五竹坊子琴を当地方に招いて指導をうけた。その後12世の魯松庵調固は、雨川の絲原・吉田の田部の両家を歴訪している。

美濃派の俳風は根強くこの地に道統をのこし、明治時代にも大きい影響を残した。

亀嵩で桃柳のあとをついだのは汀柳で（赤名屋赤名彦七、夢中庵と号し、明治15年80才で歿）長寿を保ち当地方の中心として長く指導を続けた。この汀柳の時代に十萬寺の句碑は建立された。

自然石の表には、

者世越（芭蕉）

芭蕉
野分けして
盥に雨を
聞く夜哉

裏には、　夢中庵汀柳

とある。

上五字は字余り形式である。芭蕉は後年この形式を厭ったというが、こゝでは字余りの形式の方が鬱屈（うっくつ）した気息を反映していてよいという見方もある。

盥（たらい）の位置についても諸説がある。それによって句解も多くの相違がある。秋の野分の強い風が芭蕉に吹いて、広葉を破ってしまった。そうして屋内では雨漏りを盥にうけるその雨音の中で、台風の猛威にさらされた中で、ひとり座して寂しさにたえ、侘びの詩情を抱いているというのである。ところが幸田露伴は、雨漏りと盥では面白味がない。手水（ちょうず）の盥で、いつもは芭蕉をたたく雨を聞くが、この時は野分に折れてしまったので、雨音を盥にきくのであるとしている。どちらかそれは味う人であろう。

近世史研究会　予告

7月30日（土）10時～17時
午前　基調講演
午後　「近世企業たたらの発達史」の研究討議
○発表　備後と安芸
○発表　伯耆
○発表　出雲
主催　第5回陰陽郷土史研究会
第2回島根県近世史研究会
第6回横田たたら勉強会
協力　横田町町民会議
（財）絲原記念館

7月31日（日）9時～
研究発表　島根県の近世史について
島根県近世史研究会会員数名
主催　島根県近世史研究会
担当　横田史談会

訂正　前号4頁4段29行（本誌33号に）

⑦家禽費
買入数　55羽
飼　料　1羽に粉米・麦・籾・糠・籾殻等混合物凡1石で　1円75銭
⑧農産製造費としては
燃料　薪・木炭　45円
器具の新調及修繕費は
専業農家　287戸　417円
兼業農家　190　190円
で、加工製造は極めて微々たるものであった。

その他の支出

当時の村長の年収入は　120円
学務委員の手当　9円
賃金では
年季雇人　28人で平均　115円
季節雇人　11人　14円
他に神社寺院他の寄附金　88円
旅行遊興　1477円
通信運搬　319円
新聞雑誌書籍購入　169円
赤十字社他諸会費　220円
登録税収入印紙税　146円
諸手数料　25円
小　遣　費　295円
計　3,017円

以上の総支出額は、16万5,464円であった。（収入支出の項目別の総額や割合等については154号3頁に）

明治35年の横田村の生活の概要を終り、次回は、地主小作のこと、趣味のことなどを拾いあげて紹介する。

横田の民話（5）

―鳥上③

きびしょと土ひんの関参り

むかし、ああとこ（ある所）に、きびしょ（きゅうす）と土ひん（土瓶）とおったげな。土ひんときびしょが、

「なんと土ひんさん、関参りしょうじゃないか」

「うん、そりゃあ、きびしょさん、いい話だのう。なあ（それなら）参らあじゃないか」

「さあ、ほんなら、こしらい（支度）して出かきようず」

言いて、土ひんときびしょがこしらえして行ってきょったげなら、川あ渡らにゃならんに、川に、一本橋がかかっちょった。

「まあ、きびしょさん、先い。まい渡らっしゃい（おまえ渡りなさい）」

「あげ言わさあな。まあ、土ひんさん、おまえ先い渡らっしゃい」

「いや、きびしょさん。おまいが先がいい、おまえが先い渡れ」

「ほんなら、ま、おらが先い渡らあかい」

言いてどんどん橋い渡ったら、けえ、真中あたりでストーンと川へ、丸太橋だけん（丸太橋なのだから）すべって落ちて、土ひんが、

「いいきびしょ」

言いたと。

こっぽし。

（語り手・田和朝子
聞き手・酒井董美
S47・4・30収録）
―出典　鼻きゝ甚兵ヱより―

誓　書（1頁3段29行）

誓書・起請文ともいう。起請とは実行遵守することを上位者に請う誓約の内容を前半に書き、後半には神仏を勧請して、違背したら罰をうけることを神仏に誓うことを書いた文書をいい、南北朝以後は血判が行われた。

犬ふぐり咲き

簸の上短歌会

癒ゆるなき病なれども生き抜かむと眠りしはずの妻がつぶやく　常盤　はるまさ

さきがけて犬ふぐり咲く畑径を肥桶かつぎよろめき歩む　野村　節子

水際まで枯れて繁れる葦群を揺らし流るる冬川に佇つ　佐藤　喜代子

雨後の松色増し葉毎に白き玉涙こぼるるごとく光れり　松浦　愛子

種籾を池に浸すに水仙のほとりそこはか春を奏づる　岡田　時子

見はるかす比叡の山に雲流れたまゆら御寺の屋根の浮く見ゆ　景山　悦子

参道のお遍路さんもたんぽぽも杖つくわれも今日はみ仏　永井　弥生

ふり返る思ひに耐へて別れ行く夜汽車の窓にゆらぐ駅の灯　安部　夕波

五月句会抄

五月闇蛙声を深く沈めけり　浅野　としお
通り雨赤き雫を牡丹に　岡田　蹊花
杜鵑啼く一山の興亡誰れ識るや　岡田　麗水
大牡丹花びら散らして雨を享く　小川　あきお
一枚を重ね旅着の若葉冷え　門脇　花子
童顔の端午の武者は家紋付き　加納　信子
高く舞い蝶の渡りし川広し　楠　房子
三日見ぬ花の噂も葉桜に　高木　白虹
山峡の温泉宿静もり藤の花　新出谷　一華
葉ざくらや孫に文書くいろはかな　錦織　富江
臨月の娘をいたわりて木の芽和え　峯石　美代子

会員頒布一部百五十円／六九―一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0―601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

「奥出雲」編集方針② 神話と古代史の正しい理解をすゝめる

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 159 号
（7 月 号）
昭和 63 年7月2日
奥出雲編集集団©

明治35年⑨・横田郷土資料館・キミネさん・詩・俳句・川柳・短歌

横田（旧横田村）の生活
明治三十五年 ⑨

今から87年前ころの生活を描き出せる資料の紹介を終って、若干の話題を添えてこの連載を終わる。

農民の物品売買の状況

本村農民の販売する主な生産物は米・牛馬・蚕繭・家禽及卵・薪材・炭などで、牛馬は毎年2回の牛馬市（半夏市・秋市）場で販売し、稀れに臨時牛馬商の手によって売買した。蚕繭は上族収繭後直ちに仲買人に売却した。米その他とも別に一定の市場及売季はなく、随時に応じて行った。

主要な農業生産原料品を購入する季節は、肥料は春2・3月（旧）のころ、農具は春2月と秋の10月である。家禽は牛馬市場に於て購入した。物品の交換及び共同購販売はない。

農民の労働

勤勉で載晨踏月の労を厭う風がなかったが、近年車道開通して荷車挽の労賃金比較的多額であって、農を廃してこれに出る傾向があるので、農会及有志は農専副車を強調している。

季節別の労働は

2月下旬 ～ 5月中旬
苗代・荒田掘り・麦の中打・麻蒔

5月下旬 ～ 8月下旬
田植・除草・紫草刈・大豆蒔・麦刈

9月上旬 ～ 11目中旬
稲刈・麦蒔・大豆刈

11月下旬 ～ 2月中旬
稲扱・副業・薪材・砂鉄採取・藁仕事

労働時間休憩時間は

（月）	終業	始業	休憩昼食	昼寝	夜業	一日労働
2～4	6	5	3.30		12.0	11.30
5～7	8	4	3.10	1	0	11.50
8～10	7	5	2.40		12.0	13.20
11～1	6	6	2.50		2.0	11.10

勤倹貯蓄

質朴の人情が軽躁浮薄に変るのでこの年、村長は規約を設けて守らしめ、一方貯蓄組合を設けたところ、村民は村長の英断に感謝して励行につとめた。規約の主なもの、

婚姻・出生・誕生・帯直し・節句などの祝は、米粉たりとも禁止する。神仏の祭りに寺社への贈物、半夏生・盆・正月の贈呈も禁止。諸見舞・新築の手伝い硯水の禁止。葬送の折のことから諸寄附と細かく定めてある。

今日の生活改善申し合わせ以上のものであった。如何に贅沢虚飾の風が滔々と拡がっていたかがわかる。

そして一人が毎月必ず5銭から12銭貯金をしている。但神職・僧侶・医師への謝儀報酬は失礼にならぬようにとある。（3頁へ）

横田郷土資料館のどこを見るがよいか

横田（旧横田村）の生活・明治三十五年 をこの号で一応終わる。読みかえしてもらうと、当時の衣食住や生産そして生活の様子が浮び上るに違いない。この基礎資料によって標題について一考してみたい。

この建物は民具を収蔵展示する場所、和風な会合場所であるという以外に、意義を見出すことは少ないではないかと思う。案内書には、保存館（母屋）は明治中期の上層農家を移築したものとあるが、当地方の風土の中で生れた生活様式を生かしたその当時の上層農家の建物の建築構造とは、全くかけ離れたものとなってしまっている。従って建築学一般としては別であるが、保存の意義は失われている。展示館（土蔵）も同様である。

伝習館（納屋）は、農家の納屋のたたずまいを残すため新築したものとあって、伝習館の機能をもたせる必要上構造が考えられているが、当地方の納屋が必要とし発生し建築されるようになったものとはかけ離れている。納屋ではなく納屋の機能をもたない、はなれという建築様式と混合したものとなっている。

屋敷門に至っては論外である。当地方の豪農がもてる構造ではない。全体をみると大正末期から昭和初期の寄せ合わせの農家風のものということである。それは見るより使用する目的に重点を置かれた結果である。集められた民具は本物であるが、建物と違和感があり、その使用についての理解を深める付属物を加える必要を特に思う。

三次市の風土記の丘、高梁市の東・吉備高原都市（賀陽町）の体験学習農園、さらに四国の屋島の四国村（四国民家博物館）などを知っている熱心な人、またそれを知っている観光業者などは、一顧もしてくれない。今後この上は民具の展示に工夫をこらし独自なものを生み出す必要がある。

散歩道

キミネさん

—川西の貴船社址—

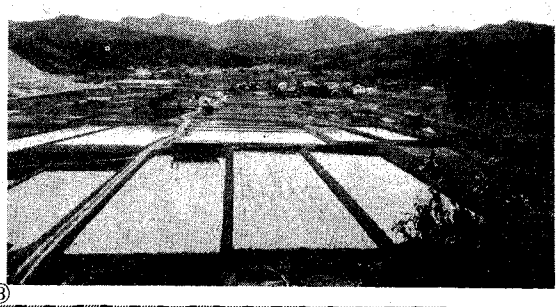
横田町大市・殿町の中央を走る314号線を南へ進むと、とはなの横を過ぎて森林組合へ向う。その西方室原川を渡ると天狗松の山がある。横田町の簡易水道集水場のあたりは、昔は子どもにとっては格構な水泳場で、キミネさんと呼んでいた。調べてみると、キミネはキフネで貴船或るいは貴布禰、木船で神社の名称である。その場所のつい山寄せに今日も神社のあとがある。

Ⓐ

写真Dの車のあるところには2段にわたって、がっちりとした石垣がある。その上は少し平地があるから小さい住居でもあったものであろうか。その上即ち写真の左上に石段がみえる。写真Ⓒでまだ手前下に続いている。写真に見える最上段が一坪よりやゝ広い位の祠のあった土台石が残っている。その祠の背後の山の上には、写真Ⓐの石などかなりの数の石が群がって、つゝ立っている。

いつのころまでかは明らかに出来ないが、こゝに貴船神社があった。今は古市の新宮神社の境内に移されている。町内にも洪水に悩まされた地形のところには、点々とこの神社があるが、遺跡や現状からすると最も大きいようである。また洪水を防ぐため、水の神とする龍神の文字を刻んだ碑も大小あちこちにある。この信仰はインドに発し、中国・朝鮮を経て日本に到来している。これにまつわる由来話など多いが、先へ急ぐことにする。

さてわが国で貴船神社の総本社は、京都鞍馬貴船町に鎮座する同社で、全国260社の元締である。祭神は高龗神（たかおかみのかみ）で、奥宮の主祭神は闇龗神。洛北賀茂川上流域に位置し、水をつかさどる神として祈雨、止雨の霊験があるといわれ、奈良県の丹生川上神社（同じ祭神で大和盆地の水源地にあったので、奈良時代以降応仁の乱ま



Ⓑ

少年の心

昨年の初夏のころ、受話器をあげると突然、「大阪に住む市川俊彦ですが」という声が響いて来た。話しているうちに、齢とともに望郷の思いにかられておられる心も伝って来た。

間もなく一冊の詩集「出雲」を贈って頂いた。読んでいく裡に、全く忘却の深渕に沈んでいた同じい、私の少年時代の心をとめどもなく次からつぎへと、湧き上らせてくれた。

詩はすべて四行詩である。序やあとがきによると、氏は出雲知井宮村の出身で、今は大阪の開業医。大社中学でつい先頃な

●大神楽

春三月　伊勢神楽がやって来る
太夫は短刀を次々と青空に投げ上げる
短刀はキラメキながら太夫の手に戻る
太夫の左手の小指が無いのを少年はみた

●おとぎ話

——椿の化けた木槌が階段を上って来る
コトン　コトン
「丁丁小法師はお家にか」
少年は祖母の胸にしがみつく

くなられた仁多阿井村の出身者日本の現代詩人の一人安部宙之介氏に教えをうけ、以来詩を通して交遊を続けておられた方である。序で安部氏は「対象に切りこんで無用の点を捨て美点を取り上げ、四行の中に珠玉の美をつくり上げる才筆は驚くほどである」と書かれている。

何程か奥出雲に縁りがあり、歴史が描かれているので、折りにふれて転載させて頂くことにした。遠い昔の思い出の中で、彼我の心が激しくぶつかり合い、カルシュム注射を打った時のように、全身がボーツと熱くなってくるのを憶える。近い地方でしかも同じ世代の生活の思い出の血の交りは濃ゆく、驚くほど憎らしくもある。☆

での間、100回余の朝廷の祈雨・止雨の祈願があった。中世以降衰微し社地も不明であったが、明治大正にかけて復活し官幣大社とされていた）とともに、丹貴二社と併称された。平安遷都後はとくに重視され、祈雨に黒馬、止雨に白馬を奉った。明治には官幣中社となった。社宝には伝狩野探幽画三十六歌仙絵額がある。

写真Bをみて頂きたい。貴船神社の後背の巨石の上から、南方川西田圃を撮したものである。

この田圃は古来から洪水の度に氾濫をくり返えしている。中央川西の集落の少し南（向う側）で、先年圃条整備がされた時、夥しい須恵器の破片が発見されたが、手遅れであり正式な発掘はされていないが、洪水による住居の埋没地であろうと思われる。写真の手前右手の八手小屋の右方の山際から、50年11月下旬に須恵器（6～7世紀頃）の大瓶（コミュニティーセンター陳列）と、冠の飾り金具の一部とみられるものが一緒に出土した（上方林遺跡）。その近くから精巧な陶馬が出土した（本誌31号参照）。陶馬は祈雨・止雨の祈願の折にまつったものであるから、これはそのためのものであろうと思われる。ただこの出土状態が6～7世紀の状態と判定ができていない。これらからみると、何としても古来から水害に悩んだところと思われる。

明治初年第二次の町村合併の折、横田村（現大字横田）は川西が合併を望んだのに（耕地の大半は横田村からの出作でもあった）、常に洪水に見舞われるからと拒否し、川西は八川村に合併されたという。

写真Dの男の人の右側の水田の中に圃場整備の前には一坪ほどの大きさの巨石があって、老母がこの石の上で踊ると、大雨そして洪水になると教えてくれたと、この写真をとる時、話してくれた。梅雨の月の水の話を一席。

全村の年間休業日

—は部落の休業日　数字は旧　○は新暦

1月①四方拝　1.2.3年始日　5 7七草粥　11田打正月　15.16トンド（半日）　20廿日正月

2月⑪紀元節　1正月

—11　大曲・天皇祭

—25　原口・天神祭

3月㉖社日祭　3雛節句

—10　横田金比羅祭

4月③神武天皇祭　8釈迦誕生

5月5端午節句

—24　横田町愛宕祭

6月—正月15レンゲ・稲田愛宕祭

—24　角・愛宕祭

—30　馬場・武内祭

7月③代みて　7七日日

14・15・16　盆

8月—八朔

15放生会　16馬場八幡祭礼

9月—11大曲・天皇祭

—20蔵屋・羽鳥神社祭

—21横田町諏訪神社祭

—25稲田・天満宮祭

10月—1横田郷社伊賀気神社祭

11月③天長節

休業日も近年は旧正月以外は重きを置かず、労働に従事する勤勉さは賞するに足るとしている。祭礼には飲食を伴うが、娯楽としては囲碁・将棋・花合せ。

養蚕の沿革と盛衰

明治10年以前に養蚕をするものは、神転・医師その他労働に従事しないものが、翫弄的飼育をしていたが、官の奨励によって下の者も悟り、18年ころより村費を以て桑苗を仕立て、村民に分ける一方、養蚕地に伝習生を派遣した。22年から養蚕講習所を開設して指導をはじめたので熱心なものもでてきたが、桑葉の手当もなく冒険的飼育をして損失をうけるものも出て、激減したが、桑樹の栽培を着実にはじめたので、農家の副業として盛んとなった。

稲作・麦作

稲作は古来からの習慣を墨守して、収穫はすべて気候に左右されるものとしていたが、明治16年仁多郡農談会を本村にも創立し、（本誌58 59 60 62参照）、年4回有志農民を集めて、稲の品種・肥料の堆積法の改良の端緒を開いた。仝20年は篤農家林遠里が巡回して、選種寒水浸法・苗代改良法・耕転栽培法を説いたあと、農事教師を招いてその実行を図ったので、稲作改良は格段の進歩をした。（4頁上段へ）

主な品種と栽培割合は、(%)

早稲　茶早稲　35　明神早稲20
　　堂明早稲15　赤　糯　8
中稲　妹　尾　7　石　田　3
　　深　野　3
晩稲　石　田　3　二ツ実り2
その他雑　種　4

で、70%は早稲が占めていた。

(註　茶早稲は横田町六坂の篤農家福田勘兵衛が60才の時、神門郡より茶早稲をもって帰り、試作の上善良と認めて弘播し近隣にゆきわたらせたものである。

嘉永4年1851、村年寄であった63才の時、藩庁から賞せられ米3俵を褒美としてうけた。明治17 18年大曲の渡辺慶太郎は茶早稲の中のさらに善良なものを撰び、隠居早稲として郡内にひろめた。政府は特効を官報に掲載し、島根県は之に賞を与えた)

当時の収量は反当り
上田2石5斗　中田2石
下田1石5斗
であった。

麦作は古来より多量ではなかったが、明治初年来さらに作付が減少して来た。その原因は①水田の裏作に行うものは、稲の挿秧を遅くする患へがあること、畑作は桑樹の植時に蚕食すること。②一般に奢侈の風習は麦飯を厭い、自家消費の減少したことなどで、今は自家醤油醸造用と牛馬食用のため僅かに栽培する位である。

品種は六角種とコテツコであったが後者は収量少なきため、30年ころは舶来種のコロテンメーロンにかわった。

六　角　種　85%
ゴロテンメーロン　15%

耕地別では　畑　70%
　　田　30%

である。古来種に比して舶来種が収量が多いので、今後これがほとんどを占めるとみられる。

上畑　1石8斗
中畑　1石2斗　下畑　6斗

中畑1反当りの収入は
8円38銭　1石2斗代
36銭　麦稈24束

で、支出を差引くと2円56銭8厘であった。　(了)

六月句会抄

牡丹園老母の歩巾で一巡す　浅野　としお
草束に一枝卯の花添えもどる　岡田　蹊花
リハビリに暫し憩へり青嵐　岡田　麗水
瀬戸渡るバスの喚声梅雨晴れる　小川　あきお
葉桜の陰濃くなりて無住寺　加納　信子
谷深き大樹をつつむ藤の彩　楠　房子
濃き匂い残す車窓の栗の花　高木　白虹
退院と知らされ街は既に夏　新出谷　一華
梅漬けて六十路の坂の独り言　錦織　富江
ひなげしや一人住いの庭明り　峯石　美代子
石臼の杵音なつかし五月雨　渡部　夕峰

大神楽(だいかぐら)

伊勢神宮で行われる神楽をいう。伊勢信仰がひろまるにつれ代神楽とも呼ぶ、雑芸が生れ、御輿を積んだ車を引いて村々を廻り、獅子舞・品玉・皿廻しなどの曲芸を演ずるものも、こう呼ぶようになった。

斐の上川柳六月抄

老夫婦収穫夢見て苗を植え　松浦　久寿子
一泊の温泉友とわらべ歌　安部　春恵
夏山に消えた子二十五忌めぐり　安部　正子
恋女房六十年のねばり勝ち　渡辺　好之
控え目もやがて本音をちらつかせ　松浦　亜以
答弁ののらりくらりが板につき　松浦　木公
波風をよそに余生を軽く生き　若槻　愛散人
判一つ尻の下まで人が取る　松田　牛歩
ものの怪も恋をささやく片輪月　高木　白虹
横車押されて道が通れない　佐佐木　千世
記念にと買った鉢花もてあまし　藤原　千代子
顔そむけ固く手にぎる注射針　若槻　白馬
古里へ本音で話す電話口　杠　京子
走り梅雨傘が行き交う交差点　真綿　よし子
ピーマンに新たな夢をかけて植え　石原　冬明
老農は気力も腕も共に萎え　藤原　のぼる
年金にゲートボールがついて来る　田中　芳春

にほふ菜の花　簸の上短歌会

坂道を下れば街は夕映えてビル建築の鉄塔ひかる　安部　夕波
病癒えて野良着を着けし夫もゐて小昼の車座に菜の花にほふ　佐藤　喜代子
わかれ霜きびしき朝を子育てか山鳩はくぐもる声に啼きつぐ　永井　弥生
公園の花見の唄か流れきて夕櫻散る峡に畑打つ　岡田　時子
人間の叡智と言はむ白鳥の天翔くるがに瀬戸の大橋　松浦　愛子
馴染客の顔も見えきて病院の廊にひろげし山の味　景山　悦子
昨日いちばん咲き誇りゐし白木蓮霜降りし今朝は閉もりてゐぬ　小早川　恵子
各部屋の時計それぞれ異なれる音して午前零時を告げぬ　野村　節子
汚れたる池に溺れて跪きもがき老ひたる犬はわれの幻　常盤　はるまさ

会員頒布一部百五十円／六九—一六　島根県仁多郡横田町一〇六二ノ二　編集発行責任者・高橋一郎(振替口座松江0—601)　頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第　160　号
（8　月　号）
昭和63年8月6日
奥出雲編集集団©

「奥出雲」編集方針②　神話と古代史の正しい理解をすゝめる

備北の山内・多賀山両首藤氏と奥出雲⑧　奥出雲のたたら製鉄史⑩　俳句・短歌・川柳

山なみで分けられた陰陽の中世史
備北の山内多賀山
両首藤氏と奥出雲⑦

高野山→吉田→掛合

　蔀山城（現広島県高野町）の城主多賀山（首藤）氏が、途中19年間の不在の時代があったが、100年間にわたって掛合郷を領し、出張城として日倉城を維持することができたのは、今日の吉田村を所領としていたか、そこの支配者と密接な提携がなければ不可能である。雲陽軍実記には両地を結ぶ通路としては、高野山から仁多町上阿井村・福原村を経て飯石郡に入っている。

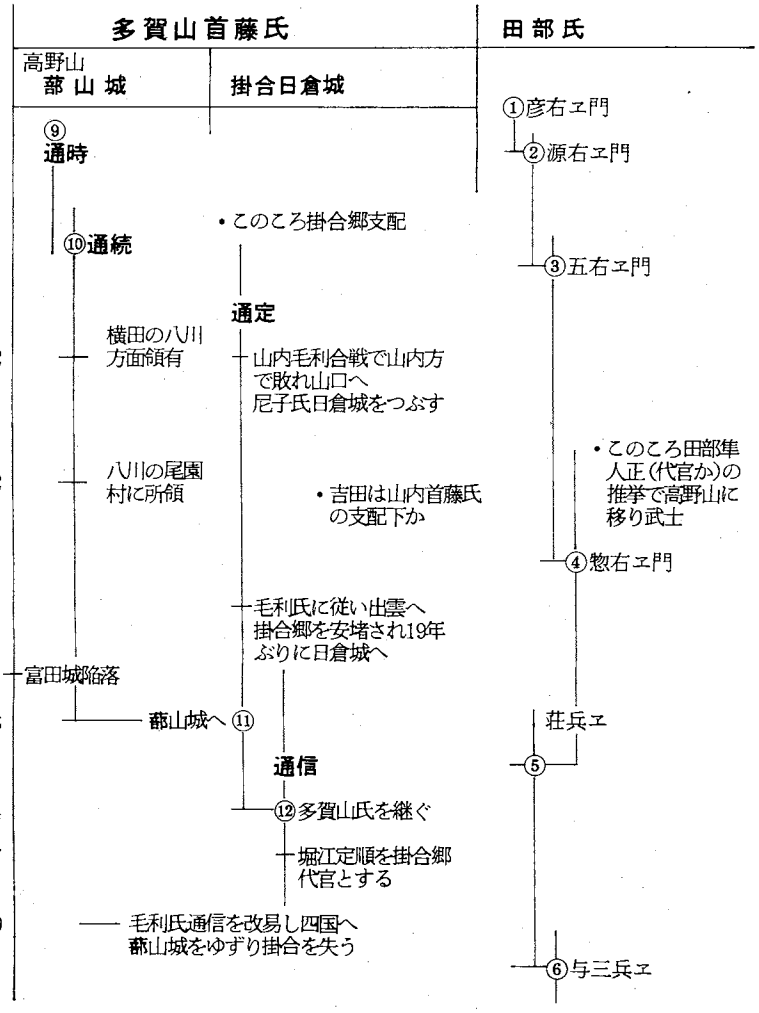
　古代に於ては今日の掛合・松笠・多根・吉田を含む地域が多称郷であった。中世末には現吉田村は大吉田・川尻・菅谷・杉戸・梅木の各村に分れていた。

　多賀山氏の文書・吉田村の西の赤穴氏・東北の三刀屋氏・東隣の仁多郡の三沢氏の文書にも全くこゝのことはあらわれてこない。するとこの時代には、吉田は掛合郷とともに多賀山氏の所領であったとも考えられる。そこで考えられるのが多賀山氏の家臣田部隼人正のことである。

　吉田に住んだとの記録があるから、代官格としてこゝに駐在していたものであろうか。天文12年日倉城はその主を失った（既述）。尼子氏の支配下に入ったであろうか。天文弘治年中に吉田村にいた田部隼人正の推挙で、綿屋惣(宗)右ヱ門は高野山に移り、多賀山氏に仕えたという。吉田には先住の製鉄者であった鉄屋がいて、両者の対立の結果、綿屋（のちの田部氏）が移ったとも伝えている。

　このころ尼子氏は三沢氏を押さえ、横田庄内へ多数の代官を送り込んで、その支配下に置いていたが、蔀山城主⑪多賀山通続は横田庄内の南方尾園村はなお維持していた。これから考えると、山口へ去った通続の子通定の掛合の日倉城とその周辺は尼子方に押さえられたとしても吉田は通続の支配下にあったと考えてもよいと思われる。

　綿屋が蔀山城下に移ったのは通続の時代である。すると田部氏文書にあるという、永禄3年と仝4年の通定の文書は偽文書となる。父である当主が、去っている子の名儀で出すとは考えられない。永禄6年の通定の文書は、前年に通定が毛利氏に安堵されて日倉城に入っているから肯定できる。（高橋一郎記）



奥出雲のたたら製鉄史⑩

新資料にもとづく特に東南部のその技術・経済・社会・文化の総合史

近世編①

本号に一挙に登載した表①～③によって、近世の当地方の製鉄史を続けることにする。前回はしばらく前の125号であったが、そこで若干近世について触れた。それは「鉄穴流し」についてであって、その発達については、本号の表③の(a)(b)であるが、あとで詳述する。他に141～144号で「山陰の鉄の始源」を載せた。

表①の下に掲載した拙稿の目録は、諸学会での発表、編集者の要請によって紀要や論文集に掲載して頂いた主なものである。これらを読み物風に書いたものは、59年夏、山陰中央新報紙上で二度にわたり連載した、産業考古学会横田大会で発表の、「近世後期の四日押から三日押への技術革新」(新事実の発見)と、今年3月と6月に同紙に掲載された、古代中世のたたら製鉄である(第五回横田たたら勉強会報告)。なお、この秋には中世横田庄をめぐる鉄の市場を連載の予定である。60～61年にかけ日本海新聞で一年間「たたら・鍛冶・日本刀」を連載した。以上を総合してこの連載を続けるつもりである。なお目録についてふれておくと、①は松江藩の鉄行政と奥出雲の鉄師。②は読み物風な古代からの歴史と靖国鈩の操業技術。③は近世の鉄師の操業の発達史。④は奥出雲でもはじめは四日押の銑つくりが主体で、のち鍛を生かして鋼をとり、やがて三日押へと合理化したこと。⑤たたらと大鍛冶技術について(英文)。⑥は④の詳論と地下構造の相関関係。⑦前年秋金属学会創立50周年・金属博物館創立10周年の記念国際シンポジウムでの招待講演の実録(英文)。⑧は④をさらに掘り下げたもので、⑨はそれを関連するすべての数字を拾いあげて論証したもの。⑩既述のもの。⑪は以上を総合して紹介したもの(英文)である。

(横田史談会員　高橋一郎)

七月句会抄

雲の峰豪快に立ち梅雨明る　浅野としお
羅をずらり衣桁に開け放つ　岡田蹊花
風鈴屋夜店のざわめきかき立てる　岡田麗水
病窓に雲の流れて梅雨晴るる　小川あきお
夕餉の膳薬味たっぷり冷奴　門脇花子
塀に添う咲くあじさいの花雫く　楠房子
一事終え一事に追わる妻の汗　高木白虹
梅雨寒や老母炬燵を離れざる　新出谷一華
長雨に耐え来し朝の初胡瓜　錦織富江
うすき背に孫おんぶして宵祭　峯石美代子
母を呼ぶ仔牛の声や夏の夕　渡部夕峰

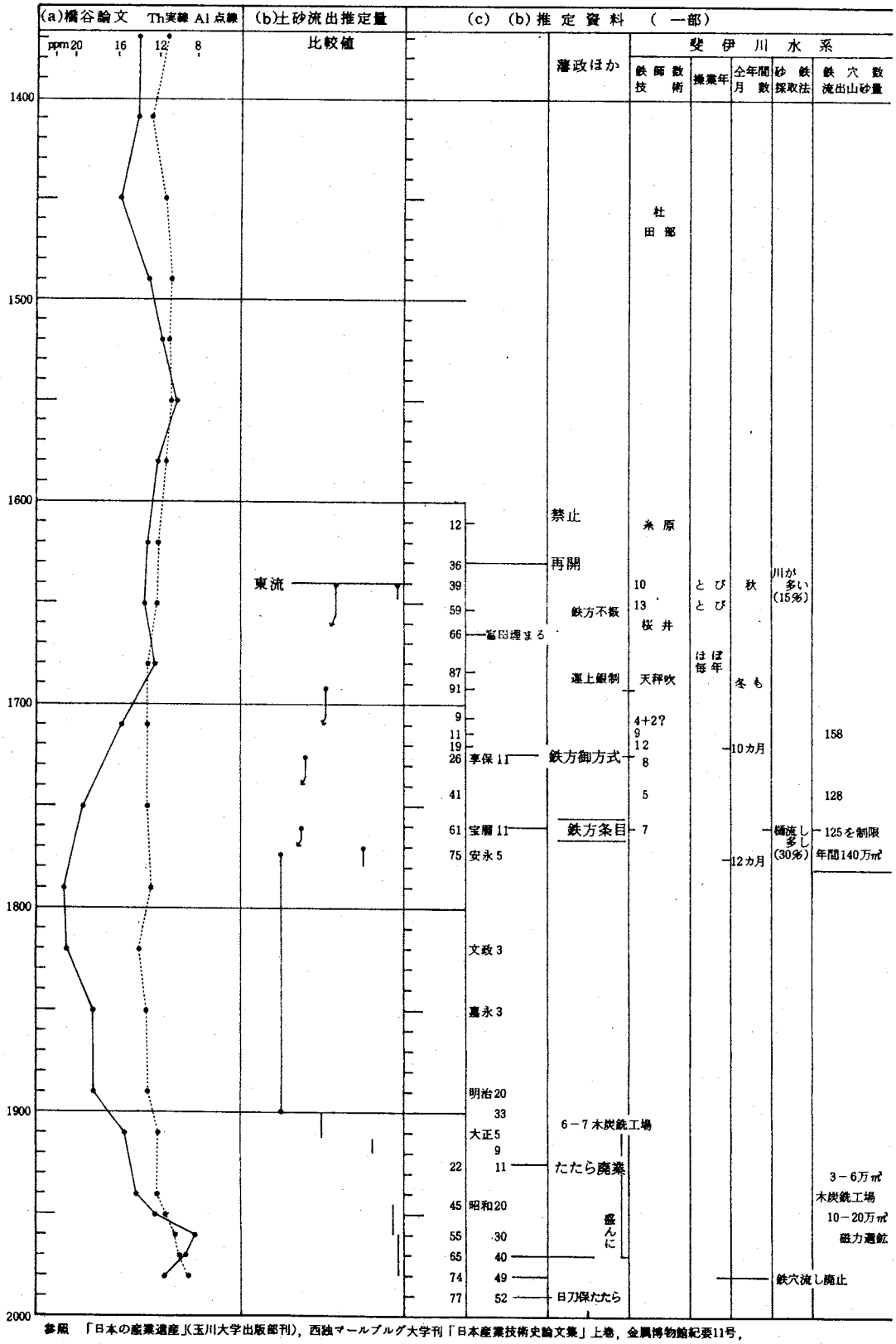
（表 2）

			イ	ロ	ハ	ニ	ホ	ヘ	ト	チ	リ	ヌ
			鉄穴鈩					菅谷鈩	価谷鈩	靖国鈩	日本鉄鋼協会復元実験鈩	日刀保たたら
			1775	1818		1856	1879	1876	1898	1934	1969	1980
			安永 5	文化 15(試算)		安政 5(後期)	明治 12(後期)	明治 9(後期)	明治 31	昭和 9(7代)	昭和 44(第2代)	昭和 55
			4日押	4日押	3日押	3日押	3日押	3日押	4日押	3日押	3日押	3日押
原料	砂鉄	真砂	296.9駄	140	130	219.4	13.5t	11.1t	18.0	13～14t	5.4	9.0
		赤目									1.8	
	木炭		3,081貫	3,700	2,800	3,552.3	14.3t	11.9	18.0	14～15t	7.7	10.0
製品	銑(流れ・裏)		28.2駄(77%)	>30駄(75)	20(67)	17.0(53)	2.0t(49)	1.2(37)	4.5(94)	>2.3(76)	流れ銑 0.3(18)	裏銑 0.3(19)
	歩鍛		4.8(13)			9.8(31)	0.7(17)	1.0(32)	0.3(6)		1.4(82)	0.3(19)
	剣		3.6(10)	10(25)	10(33)	5.1(16)	1.4(34)	1.0(31)	0	0.7(24)		1.0(62)
	計		36.6(100)	40(100)	30(100)	31.9(100)	4.1(100)	3.2(100)	4.8(100)	3.0(100)	1.7(100)	1.6(100)

四日押から三日押へ転換　　伝統・復業

資料出所
イ～ホ　「金属」(1987　2月号)拙稿　絲原家文書から
ヘ　田部家文書
ト　俵国一著「古来よりの砂鉄製錬法」(1933)
チ　「刀剣美術」1981年2月号　靖国鈩記録
リ　「菅谷たたら復元実験」日本鉄鋼協会報告書(1971)
ヌ　「刀剣美術」1983年3月号　日刀保たたら記録

（表 3） **山陰産業考古学会例会　発表要項**　　1988. 4. 16　於　島根大学教育学部　　発表者 髙橋一郎



参照　「日本の産業遺産」(玉川大学出版部刊)，西独マールブルグ大学刊「日本産業技術史論文集」上巻，金属博物館紀要11号，「金属」(1087. 3)等に掲載の拙稿

					製錬（還元）半溶融・溶融				精錬（脱炭）鍛錬			鍛冶鍛造
鉄鉱石				西欧中国	竪型小炉 海綿鉄				鍛錬 鉄鋼			
				中国		炉 銑				炒鋼法 鋼		
				西欧			近世高炉 銑			パドル法 鋼		
				現中国 現日本				現代高炉 銑			電気炉 鋼	現存
砂鉄	地方	含Ti		自給たたら	小炉 粗鋼				（大鍛冶）鉄鋼			
	赤目砂鉄 全国各地	多い	△			竪型炉（小型箱型炉） 鋼・銑			鉄鋼			現存（美術刀）
	赤目砂鉄 中国地方	少ないやや	○	企業たたら		（初期）	近世箱型炉 四日押 銑（小鋼）		割鉄			
	真砂砂鉄 山陰山側地方	少ない	◎				近世箱型炉 銑 四日押→三日押へ		割鉄			
								鋼（含鋼）				
								現代箱型炉 三日押 鋼（含鋼）				現存（美術刀）
	砂鉄			ヤスキ鋼				現代角炉 銑			電気炉 鋼	
								スエーデン式 海綿鉄			電気炉 鋼	現存

近世企業たたらの前を初期企業たたらと仮称

発表拙稿（たたら関係のみ）

① 1968年刊「島根県横田町誌」（執筆）
② 1978年刊「奥出雲たたら製鉄覚書」（著）
③ 1983年度　たたら研究会下田大会発表（奥出雲105号）
④ 1984年度　産業考古学会横田大会発表（大会要項集）
⑤ 1985年　イギリス鍊鉄国際会議　提出論文（発表ＶＴＲとともに依託）（英文）
⑥ 1986年刊「日本の産業遺産」（玉川大学出版部刊）（論文）
⑦ 1986年刊　金属博物館研究紀要№11　国際シンポジウム講演の実録論文（英文）
⑧ 1986年度　たたら研究会富山大会発表（大会要項集と付表）
⑨ 1987年刊「金属」2月号　「古文書からみた山陰地方のたたら製鉄業」
⑩ 1988年度　山陰産業考古学会発表（本紙　表3）
⑪ 近刊　西ドイツ・マールブルグ大学刊「日本産業技術史論文集上巻」（英文）

斐の上川柳七月抄

夏祭り予定狂はす客一人　渡辺好之
孫の劇亡夫の笑顔がちらちらと　杠京子
騒がせておいて選んだ元の鞘　藤原のぼる
お隣りの看板だけが派手に見え　石原冬明
七十余年実りにかけて努力する　安部正子
手も足も思うに任せぬ老の坂　若槻愛散人
百日の孫の笑顔で和む日日　佐佐木千世
納得のいかぬ米価も泣きねいり　藤原千代子
耳遠く言い方悪いと角を立て　松浦久寿子
雑音は避ける歩巾で追いすがる　高木白虹
年重ね丸くなれずに角がふえ　松田牛歩
意地はればやっぱり齢だとうとまれる　松浦木公
喜寿の峠迎え亡夫にかたりかけ　安部春恵
次々と仕事に追れる世話女房　真綿よし子
根まわしが国際語となるご時勢よ　田中有樹絵
農政で親のレールが走れない　若槻白馬
面倒な事は聞かずに廻り道　田中芳春

合歓咲く温泉（いでゆ）　簸の上短歌会

み仏の前に座すとき亡父の声わが肩撫ずる亡母の掌のあり　永井弥生
子沢山を育てし夫の老犬に言葉かけつつ綱をつけをり　野村節子
杳き日をまさぐる思ひか片手のみ使ひつつ嬬粽巻きをり　景山悦子
いちにちを汗して田草終えてなお夕餉の仕度吾れに待ちをり　佐藤喜代子
穫らざれば日にいくたびも色づきし梅の実梅雨の雨に落ちたり　常盤はるまさ
ゆくりなく出会ひし友と合歓の咲く山の温泉にひと日語れり　岡田時子
稀少価値の歌集売りたる夜はいたく別離のごとき悔ひの残りぬ　安部夕波

会員頒布一部百五十円／六九—一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0—601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第　161　号
（9　月　号）
昭和63年9月3日
奥出雲編集集団©

「奥出雲」編集方針②　神話と古代史の正しい理解をすゝめる

奥出雲と文学・芸術②

与謝野鉄幹・晶子の歌と文

山陰の旅

昭和5年5月15日、東京を発った寛・晶子夫妻は、夜汽車で16日丹波・峰山町に着いた。待受けていた三島祥道（歌の門人・不昧流茶道宗匠・松江住）らの案内で山陰の旅を続けた。ここで4泊ついで宮津・天の橋立・城の崎・鳥取を経て玉造に入ったのは24日であった。翌25日は仁多郡に入り、絲原邸を訪れ鬼の舌震を探勝し、当夜玉造へ。26日は大社を訪れ日御碕・松江そして美保関を経て出雲を離れ、皆生・大山・三朝を訪ねて6月2日帰京の途についた。

簸の川上にて

（和歌は漢字・振仮名・仮名遣いなどすべて原文通り
晶とあるは晶子作でほかは鉄幹作）

「五月二十五日、今日は自動車で十二里の南にある簸の川上まで幾つかの峠と町村とを過ぎて、その支源の一つである馬木渓の奇勝『鬼の舌震ひ』を観に行った。先づ馬木山の麓に当る大谷村の絲原武太郎氏の邸に立寄ると、主人は宏壮な邸宅と泉石の美に富んだ庭とを綺麗に掃除して待たれてゐた。五百年来の歴史ある旧家で、江戸時代から明治年間にかけて沙鉄鉱を以て産を成した素封家である。主人は現に貴族院議員で銀行其他に関係してゐられる。応接室に司馬江漢の銅版画、書院に岩佐又兵ヱ筆と云ふ長崎交易図の屏風一雙、床には雪舟の山水が飾られ、また直入が此家に滞在して付近を写生した画巻をも見ることが出来た。鄭重な午餐の饗を受けたが、常に料理人を抱へてあるだけに、不昧公の趣味を伝えた出雲流の典型的料理であり、器物も悉く古雅優麗な家蔵の佳品ばかりであった。庭は直に山に面し、その泉石樹木の布置は江戸時代に京都の専門家を招いて造られたものである。主人の求められるままに、私は『石泉荘』の名を付けて歌を詠んだ。幾棟もある家屋は近年の新築で、桧・欅・杉・松等の立派な材料は一本も他山の物を用ひず、すべて自家の諸山から伐り出されたものだ相である。或る広い一室では数人の番頭達が静かに各自の机で事務を執ってゐるのを覗いて、私は昔後醍醐帝を迎へ奉った名和長年のやうな豪族はかう云う潤達な生活をしていたのであろうと想像するのであった」。（晶子の『山陰遊記』から）

○行く方に水車の音の木がくれて青き水田の山に重なる
○自らを五月の山の精としも思う卯つぎは思わせておけ（晶）
○出雲人古きを語る人皇の百世以降は昨日のごとく　（晶）
○山かげの仁多の長者の家ひろし泉の音に青すだれして
○泉よし出雲風土記のなりしのちいくばくもなく初まれる家　（晶）
○おのづから山のあるじの心なり岩清くして澄める水おと

鬼の舌震

しばらくして絲原邸を出でて、鬼の舌震に案内された。

「山を徒歩すること十町、路は険わしいが松に交る紅卯つ木その他の花が目を喜ばせ、鶯の類の小鳥のさえずりがしばし一行を立止まらせた。渓に達すると、山と山とが迫って岩の切厓を成し、巨大な奇巌が渓の到る処に乱立して、清澄な碧流がその奇巌の間を屈折している。是れに二つの伝説があって、昔下流にすむワニが上流の神女に恋をしたので神女は岩を以て渓を埋めワニの通路をふさいだと云われ、また一つには此の渓の岩の怖ろしさに鬼が舌をふるわせたとも云われる。今は絲原氏の意匠で渓の最も景勝の所に荒木作りの一亭が岩の間に架せられている。平生は無人の亭ながら、今日は私達よりも先に絲原氏の番頭達が来て待たれ、此処でも金紋蒔絵の古雅な重詰を開いて歓待された。一行は岩石をこえ、狭い桟道や橋を渡りて危い遊びの中に峡中の二時間を費して喜んだ。岩の中には百人を坐らせるものがあり、また切厓の石壁に龕のやうなアアチ型の凹みを七つの自然に並べた所がある。同行の三島さんが親戚である絲原氏の旨を承けて望まれるままに、良人と二人で切厓に画廊岩、その前の水に詩ガン渓の名を付けるのだった。」（晶子・前文続き）

○べに卯つ木なかに明るし駒鳥の昨日より鳴く山の青原
○みづからの心の軸をはなれたる「がく」の落花のあとかたもなし
○べに卯つ木花さく日には山にても結綿の子を見る如きかな
○霜葛身もへなへなに岩こえて簸の川上の荒きを渡る
○馬木の渓かさなる岩の荒きにも己が歌をば楽める水
○恋山まことに誰をしたふらん清き渓の岩こえて鳴る
○みづからの投げたる岩に驚きて舌慄ひたる鬼の渓これ（晶）
○渓けはし鬼舌ふるひ去りた

奥出雲と文学・芸術②　歴史の眼④　俳句・短歌・川柳

ればかじか誘ふ月させよとも　（晶）

○葛もて荒木を結へる渓の亭三尺はなれ岩の重なる

○渓行けば絲原氏の使きて更にすすむる金紋の杯

○水の精馬木の渓間に遊ぶとて白きころものはし岩に見ゆ

○渓の岩百畳をさへ敷きつべし鬼の童子も現れて舞へ

○渓の壁七つの龕のかたちしてその前の水廊に似るかな

○簸の川の中を伝ふは目におかず並べる岩の企つること（晶）

○奥山の橋一すぢのものならで岩より岩へ次次に掛く（晶）

一般には紀行のうたといえば、意あまってカラー写真の如く、美しい言葉の積み重ねになり勝ちであるが、二人のうたは、墨絵のようにさりげなく、平凡な言葉わずかな言葉で、深い情感を味わせる。それが紀行の間にどんどん生まれていることは、こゝにのせたうたを含めて、山陰紀行のすべてがのせられている「冬柏」第4号（鉄幹主宰の歌誌で同年6月刊）から知ることができる。

山陰紀行のうた、鉄幹218首・晶子198首の中の90首を自筆で集めた「碧雲抄」という折帖がある。奥書に

昭和五年六月二日、三朝温泉を発せんとして

与謝野　寛

与謝野　晶子

この一巻を三島祥道様にさぐるもの也

とある。

夫妻の水くきのあとも美しく、正しいくずし字は誰にも読もうという意欲をかき立てる、今日いう新詩文調の筆致でもある。そこには夫妻の推敲の具合もわかり、また作歌に際しての裏話めいたものもうかがえる、興味深いものである。

山陰の旅の最後の夜に夫妻が心をこめたさまが、あふれる如くである。さらにこの折帖の表紙は、晶子がわざわざ高島屋にあつらえて作らせた丸帯の裂で装幀され、中央には金紙に「碧雲抄　寛　晶子」と記されており、表紙裏は金箔による霞模様の豪華な仕立てがしてあり見事なものである。

（絲原記念館の現在の夏季展「絲原家を訪れた人々」で、この

歴史の眼 4

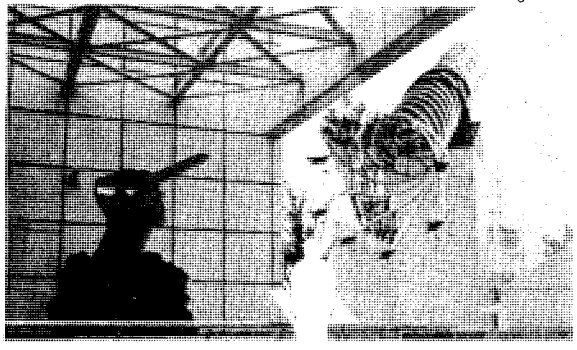
歴史の批判に耐えるものを後世に残そう①

像

スサノオをまつる神社が多いのは西日本。神話の中の人物で、スサノオほど暴れん坊で、数限りない悪業が多いのは例がない。これは国土創成の中心にすえられたアマテラスをより引き立てるために、こうなったというのは今日の通説である。もっとも神道の「みそぎはらい」の思想の源流としては好都合ではあった。

スサノオの語源については適切な解釈がなかったが、古代朝鮮語の研究の進歩で有力な説があらわれた。「**一番最初の御祖**」である。（アマノムラクモの剣の別名のツムガリとは、「すべて真の銅」という）

すると**弥生時代**（紀元前後600年の中ごろ）に、南朝鮮の加耶を中心とする地方から、各地に渡来した人たちが、それぞれの開拓地の祖をスサノオと称して祭ったものと考えられる。平和裡に土着したもの、先住民との確執のあったもの、戦って荒れたもの、あるいはその時代の食糧や樹木にまつわる新しい技術をもって来て畏敬されたものもあった。そこで各地毎スサノオの性格が種々に伝承され、感謝と畏敬の対象となった。日本書紀ではこうした伝承のすべてが



神話の中に組み入れられたので、スサノオの性格が混在することになった。これは一面この渡来人達が列島内各地で、しかも広く土着し功績があったことを示すものである。

出雲国風土記にみる当地方のスサノオは、神門川から大原郡・能義郡にかけて大陸から渡来し土着した人々の祖として、平和な姿であった。それが神話の中ではオロチ退治の主人公として、各地のスサノオの代表者としてまつりあげられたのである。

上の写真の像は、さる筑波の科学万博のたたら館の入口横の高い軒下にあった、スサノオとオロチである。電動で回転する招来ん人形。ギンギラギンのステンレス製。みる度に飽きず、その度に人々に心の糧を与えるという芸術作品ではない。一時の飾り物にすぎない。高価な建物の中で保存する値打ちのものではない。

この際俊巡せず早く町民に披露の断を下し、来年のオロチの火祭の行列の先頭でも動きながら進ませれば、異論の出るこの祭の活性化になること請け合いである。お疲れの時がくれば高天原か、常世の海原に御帰還頂けばよい。それが幸であろう。

古事記のみを国学的に解釈して、その神話をそのまゝ史実とする時代は、すでに遠い過去のことである。ロマンと言えばついてくる、ふるさと創成といえばいけるとは、これを内容とし

「碧雲抄」は夫妻の他の作品とともに展示中。三島祥道は同館理事長の義兄で故人であるが、夫妻とは北関東・北九州その他の探訪に従い、鉄幹没後も晶子に従い上高地などを探訪した。

○岩岩も水に聞き入るすがたして人と並べる渓のおばしま

○亭のまへ岩を重ねていかづちを伏せたる如き渓の音かな

○岩に置く荒木づくりの亭にゐて渓を見る日の漢(から)めけるかな

○岩のなか屋形をしたる岩にゐて更に見わたす岩岩と水

○馬木の渓七つの龕(がん)の岩過ぎて光れるきぬを引く泉かな

○白き花簸の川上の渓に散り早く夕を示したるかな

○しづかにも毒を服してのちに見る世界の色の朴の木の花

「再び絲原氏邸に帰へると、出雲特有の掛蕎麦を打って饗せられた。初めて経験する美味である。一椀を食べると給仕の女中達が別に掛椀と云ふ椀に入れた蕎麦の代りを客の椀に投げ込むやうにして入れる。固辞しても容易に赦されない。強ひて勧めるのに腕力を用いてもよいとされてゐるから平生の給仕人は男子であるらしい。よく勧めて十椀廿椀を客に喫せしめるのが給仕人の手柄だと云われる。私達は午餐と渓の重詰とに満服しているので、給仕の女中達を満足させる事が出来なかった。それでも一行の中に八椀を喫した木本氏があった。温厚な主人は微笑しながら、出雲の風俗其他について色々と語られた。」

（晶子の前文の続き）

○大気なる主(あるじ)すすめて重ねしむ八川の郷の掛蕎麦の椀

○遠蛙石泉荘の夕ぐれに聞きも合ひぬと思い出でまて（晶）

初夏の青葉濃き庭園も満喫し、暮色次第に深まるころ、夫妻は辞して車上の人となった。

○山暮れて一段ひくき水田のみほの光り我車ゆく

○車の火まへを照らせば山の蛾の羽ひかるなり飛ぶ蛍ほど

↙方向とする限り、先は見えている。お祭りワッショイならまだしも、観光とはいえ、町の象徴にまで持ちあげようとするのは、一時の**ブーム**に手とり早く乗り遅れまいとする頽廃に過ぎない。うしろ向きである。文化の町という言葉が言い交されるが、昨今はとかく内容の伴わぬことが多くなったというのが、心ある人々の間でささやかれている。

列島改造論が環境破壊をあちこちにむきだした轍を踏まぬよう。創成論が復古を招き、自由と創造を押さえ、21世紀を暗くしないように。

町の象徴にはもっと英知を集めることが必要である。

また高殿の模型についても、これは製作段階ですでに問題を含んだものであった。科学万博の会場のその前で、万博事務局の担当の課長から、弁解がましい説明をくわしく聞かせて貰った。これもオロチの火祭の祭壇にでも登場願ったが、祭りを盛り上げるによいであろう。

吉田村の行き方や施設の一部について、中央では疑問を抱き、警戒をする人もあらわれている。**観光は文化を核**としなければ永続しないことは、眺めても明らかである。「像」をめぐるその歴史。「像」そのものの価値。さらに長い時代の流れ。短いこと10数年の施策の流れも考えて、悔を残さぬようにしたい。歴史は過去ではあるが、将来への教訓を数多くもっている。

本誌でこゝまで直接指摘したことは初めてである。少なくない人々の意見があるからである。次回から「古事記偽書説を考える」「わたしたちのまち横田町」など

御礼

○7月末の**近世企業たたらの研究会**は成功裡に終了。110余名中北九州から関東までの県外の研究者の参加が半数。御礼状多数で好評。資料の申込みも相つぐ。若干残部あり。

○来年度の計画をたて、交渉に入る。予定は同じころ。

○本誌の旧号（バックナンバー）お求めの方のお蔭で、本誌もやっと印刷所への迷惑をかけていたのが、一まづ解消。これもまだ若干残部あり。

斐の上川柳八月抄

孫の居ぬ夕餉黙って箸をとる　藤原千代子
何してもエンジンかからぬ老朽車　若槻白馬
二人きり以心伝心花も咲く　松田牛歩
朝帰りうまい言訳けしたつもり　高木白虹
梅雨明けが逆戻りしてもたもたし　若槻愛散人
絵日記に子の感性をちらと見る　藤原のぼる
生きて来て山坂いよいよ八合目　松浦木公
きびしさを吹っとばそうと夏祭り　松浦久寿子
部屋の前あじさい今朝も色を変え　安部春恵
戦争は若者と共に風化され　安部正子
梅を干す日がなく今日も一人言　真綿よし子
仲から傘寿なんだと注意され　石原冬明
潜水艦めったに出せぬ命づな　田中芳春

八月句会抄

一切の音絶って滝落ち続け　浅野　としお
蜩に急かれていそぐ畑帰り　岡田　蹊花
戻り梅雨友の短信届く今朝　小川　あきお
打水をとめて郵便受取りぬ　門脇　花子
初茄子や精進揚の膳となり　加納　信子
焼なすのにおうとなりの夕支度　楠　房子
老兵の生きし皺数原爆忌　高木　白虹
広々と机一つの夏座敷　新出谷　一華
おき忘れせし風船の日々しぼみ　峯石　美代子
七夕や吾子願いごとの多きかな　渡部　夕峰

蟻の列　簸の上短歌会

長梅雨を畳につづく蟻の列盆に帰らぬ子を憶ひをり　永井　弥生
酸漿の色つく頃に会ふと言ひし友はみまかりみそ萩の散る　佐藤　喜代子
夕暮るる門に迎え火たゆたひて幼く逝きし児の顕ちにけり　岡田　時子
夏泊りに来し孫らみな帰りゆきて今夜妻と聴く地虫の声を　常盤　はるまさ
山畑に狭霧流れて夕闇の迫れば蝉の声も遠のく　野村　節子
み社のしげみに又も捨仔猫丸きひとみに梅雨晴の空　永井　弥生
登山道のガードレールに葛蔓はからみからみて花盛りなり　佐藤　喜代子
外孫が出雲訛を質してはおもしろがりて繰返へし言ふ　常盤　はるまさ
信濃路に君病みてよりふたたせの夏めぐり来て合歓の花咲く　安部　夕波

○わが眠り車に覚めて夜となれば山下り尽し田の蛙なく

与謝野晶子

明治11年12月7日、堺の菓子商駿河屋総本家二代目鳳宗七とその後妻つねの三女。本名志よう。父は働き者のつねに商いを任せ、市会議員をつとめ、俳句や画をたしなみ、読書も好み、ひとかどの蔵書家であった。店は時計をつけた二階建ての洋館としたり、長男を大学に進学させるなど新しい考えをもっていた反面、厳格で保守的でもあり、晶子は学校以外の外出は許されず寝室には毎晩錠をされたという。琴・舞踊・漢字をならい、学校の合間には帳場で帳つけもした。歌は17才ごろからはじめ21才ころ与謝野寛の「明星」を知った。箱入り娘の空想の恋愛が、一足飛びの大人の恋に変るのは、その翌年である。大阪に乳母を伴って訪ねてからである。

寛は寺へ養子ののち旅浪の生活を経験し、教え子と別れ経済援助をうける女性とに一男もあった。晶子の家は厳格この上もなくとうてい賛成も得られなかった。一大転機によって結婚したが、晶子は『みだれ髪』や「君死にたまふこと勿れ」の詩などで夫をしのぐ名声を得た。生活すべて晶子にかゝった。くじける夫を更生させるため渡欧させ、自らも後を追って渡欧した。大正期に入ると寛は慶応義塾大学教授となり、のち夫妻ともに自由主義教育の「文化学院」の創設にかゝわる。昭和期に入ると各地の弟子たちの招待で旅行することが多くなった。5年には『明星』の後継誌『冬柏』が創刊された。この年夫妻は、この奥出雲絲原家を訪れたのである。夫妻ともそれぞれ短歌全集を刊行しそれぞれの総決算を行った。間もなく10年寛は62才で肺炎のため急逝する。晶子は文化学院の学監をつとめる一方、源氏物語の現代語訳を行い、3回目のものは今日名訳となっている。歌集28冊で5万首を越えるという。童話・評論・歌論・小説等90余冊が刊行されている。この間、五男六女を育てる。堺は伝統に根ざした保守的な町である一方、歴史が語るように、新しいものを作り出す町であった。それはそのまゝ晶子の性格や生涯であった。

人間として、女性として、今日でも考えられない量の仕事をこなし、地位を確立した。晶子は寛あってこその自分であることをわきまえていた。思想と行動は新しいが、内面はむしろ古風であったという。それが晶子の人気であるともいう。

○やは肌のあつき血汐にふれも見でさびしからずや道を説く君

○鎌倉や御仏なれど釈迦牟尼は美男におはす夏木立かな

は人々に眼をみはらせた。そして寛の死にあたって詠んだ

○取り出でて死なぬ文字をば読む朝はなほ永久の恋とおぼゆる

は、「愛」に生き抜いた女性であったことをしめすものである。

昭和17年5月、64才で死去。

紙幣の図柄の女性候補に樋口一葉と晶子があがったが、一葉はイメージが暗い、晶子には「君死にたまふことなかれ」の歌があるということで没になった。

豊かな「情緒」の晶子。ひらめく「感性」のサラダ日記。

（二人の歌は「冬柏」4号と「碧雲抄」から）

会員頒布一部百五十円／六六—六　島根県仁多郡横田町二六ノ二
編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0　601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　槙田軽印刷所

「奥出雲」編集方針② 神話と古代史の正しい理解をすゝめる

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 162 号
（10 月 号）
昭和63年10月3日
奥出雲編集集団©

歴史の眼 5

「古事記は偽書」の重み

新しい時代を古い時代の考えで推進してはいないか

ついさきほど横田町から出された観光のしおりと、小学生用の郷土読本にこう書かれてある。

「七一二年に完成した古事記には、オロチ退治の神話が…」

「古事記は、奈良時代の天皇が大和朝廷の全国統一過程を神話にたくして…… 七百二十年に完成した『日本書紀』にも……」

（この問題については本紙ですでに幾度も書いたことである。教育の場への出し方については極めて慎重にすべきである。このことは「歴史の眼6」で）

日本書紀は720年に完成してから間もなく、宮中では講義と研究が始まっている。その記録は「日本紀私記」として残っている。その一つに奈良時代の太人（おおのひと）長（なが）の講義の記録「弘仁私記」（812）がある。古事記編纂のことは、国の正史である同時代の日本書紀はもとより、それに続く正史「続日本紀」「日本後記」そのほかにも、全く書かれていないのに、この私記の序文にのみ書かれている。こゝに偽書とされる第一の理由がある。ところが研究者は一致してこの「弘仁私記」の序文は「弘仁私記」と同時に書かれたものではなくさらに後でつけ加えたもの（ずっと下って平安時代中期説もある）であるとしている。

この序文は日本書紀の講義記録書のものであるにかゝわらず古事記のできた由来のみが、書いてあるだけで、極めて不自然である。なぜ古事記を宣伝する必要があったか。そこで「弘仁私記」にかゝわる多人長が、古事記の編者であったからであろうとされるのである。

日本書紀は持統天皇の697年までの記述があるのに、古事記は628年までである。この70年間の歴史は日本の古代史の重要な時代ー孝徳・天智・弘文・天武・文武・持統ーである。成立が八年の違いしかないのに、この重要な時代がなぜぬけているか、こゝにも問題がひそんでいる。

両書の研究の歴史

日本書紀は国の正史として、読みつがれ研究もされて来ているのに、古事記は主として神官の間で伝えられ、江戸時代の後期に、国学の発達とともに浮んで来た。賀茂真淵がとりあげその弟子本居宣長が生涯をかけてその研究にとりくみ完成したのは寛政10年1798でわずか210年前のことである。研究では日本書紀と900年差がある。それはそれとして宣長の功績は偉大である。その研究の根底には、神道と国学思想があって、神話は歴史であり、わが国は天皇中心でなければならないと考えていた。これに対し当時、市川匡磨・藤井貞幹は異説を唱え宣長と論争している。沼田順義は序文の疑問点から、古事記偽書説を唱えている。明治維新になると復古思想につれて宣長説はその業績とともに評価され、歴史観の中心となった。戦前に中沢見明の偽書説があらわれたが、皇国史観一色の時代となり、さらに特高によって筆を折らざる得なかった。同じく津田左右吉も日本書紀の研究を通してそうした立場にあったが、その研究の深さは戦後の研究の主流となった。

そして大陸の歴史との関連、考古学の業績をふまえた、井上光貞、直木孝次郎、上田正昭らがそれを修正補足し、津田の研究は今日、古代史研究の基本的方法論として確立している。

古事記序文の見方

弘仁私記の序文への疑問は、当然古事記への疑問となる。それはおいて、疑問の古事記の序文にもさらに疑問がある。その説を大きくわけると、

①序文・本文　偽書（後世の作）

②序文・本文＝偽書（後世の作）

本文は日本書紀をもとにその本文と第一の書（本文の他に多数の異説が書いてあるが、その第一番目のもの）をもとに、作られたものである。日本書紀には全く古事記からの引用はないが、古事記には日本書紀を用いて書いたところがあり、研究者もひとしく認めている。一般的に古事記の内容が特に神については、日本書紀よりも新らしい時代の書き方ともいわれている。

③序文　＝偽書（後世の作）

本文は後世の手が入っているが、当時各豪族が各々まとめていた古事記（そうこしき）（現在、ほかに一部分ではあるが四つがある）の一つ（太氏（おおうじ）のもの）が、残って古事記（こじき）となった。

である。これに対し、偽書ではないが、

④日本書紀の編纂の進行をにらんで、別な人が書いたものとするのがある。こゝでは③と④について述べる。するとやは

歴史の眼5　奥出雲のたたら製鉄史⑪　路傍に刻む歴史(3)　川柳・俳句・短歌

り、今日の日本歴史研究の主流が日本書紀中心で動いていることも明らかになるからである。

古事記の序文を偽作とみる理由

諸説を整理すると

1. 後で完成されたとされ、諸書を数多く参考にしている日本書紀が、古事記を全く参考にしていない。正史の続日本紀の和銅年間にも、古事記ができたことが全く書いてない。
2. 天武天皇が稗田阿礼の聡明を激賞したと序文にあるが、日本書紀には全くないし、続日本紀にもない。このような実在性の薄い人物が、重要な役割をすることはおかしい。
3. 太安万侶は続日本紀に度々記されているが、安万侶が勅命で執筆したという重要な事実がない。まして独力でできる仕事でもない。
4. 序文は他の書をみても当時は、学識才能については謙辞を用いているのに、これは阿礼の聡明を強調したり、表現技術を吹聴している。しかもこの序文は天皇への上奏文となっているから不遜である。
5. 上奏文の形式をとっているが、このような書き方は、平安朝以降からのものである。
6. 和銅五年の日付の序文が和銅六年以後に書かれた文書を参考にしているから、序文は和銅六年以降に書かれたもの。
7. 本文で厳密に使いわけている用語が、序文ではそうでなく、本文と序文の統一性がない。
8.〜10. は、勅命による書であるのに、署名や官名などに不明瞭さがあるなど。

である。

宣長説の流れをみる

こゝでもう一度このことについてまとめておく。

①古事記は形式内容ともに不十分不完全であったので、日本書紀で増補完成された。②前者は国内向けの古伝の書、書紀は対外的な国家正史。③古事記は日本書紀の資料とされなかった。④前者は天皇側近または後宮関係の者の私的作品、後者の書紀は朝廷の公的事業である。となる。やはり宣長説の踏襲で、古事記が古く、日本書紀が新らしいとしている。しかし比較すると書紀を古事記は明快に簡素化し一本化し、物語風にして和風文で書いたようにしかとれない。随所に新らしさがある。

さて、③の説を紹介するが、この説は、序文を偽作とみる10の理由をふまえた上でのもので古事記の本文を次のように考えている。

古事記は太氏のもっていた一つの古事記(ふることみ)である

弘仁私記の記録者、太人長(太安麻呂と同じ太氏の一門)が、太氏の家に伝わる古事記(ふることみ)に平安時代になって序文をつけて公開したというのである。従って、他の豪族の書いた古事記(ふることみ)と同じく原文は、古事記(こじき)の完成した時代には完成していた。したがってその中には太氏の立場や考え方が色濃くでている。

④の説は次のようである。やゝくわしく紹介する。

古事記(こじき)は日本書紀編纂に触発されてできた史書とする説

古事記の序文は、書紀の編纂がすゝみ、国家の正史が中国流の漢文記述であることをみながら書かれたものである。

古事記になくて日本書紀に書かれている時代(先にのべた70年間の重要な)が、官僚制の整備、律令制度の完成、政治の形式化によって、新らしい国家が成立して古事記的な氏族的国家ならぬ方向へと進むので、あえて別個の古代認識をもって主張された書が古事記であった。書紀が方針にあるごとく、異説も数多く書いて疑問は疑問として後世の検討にまかせるというのであるに対し、古事記は序文にある通り、あくまでも偽りを削り実を定めるという妥協の余地のない方針で貫いた主張の書である。書紀編纂が古事記的発想を激発させて古事記の編纂が始められた。

両書とも資料となったのは、当時まとめられていた帝紀、本辞であった。これに対し古事記の序文では「正実に違い多く虚偽を加う」と不信感をのべている。そして「邦家の真正の古伝が規範となるべき」であると述べている。序文を注意深く読むと、天皇の側近でこうした考えをもち、書紀の方向に不満をもつ一派が、天皇に進言して古事記をつくらせた。その尚古主義的歴史からみると保守勢力や国粋主義的勢力とも考えられる。書紀は百済からの渡来人を中心とする勢力が主流であった。これに対し新羅系の側近が神道派と結んで進めたと考えられる(あとで詳細に)。従って古事記の執筆は、書紀より遅れ、天武天皇の晩年である。そして書紀完成の前に急いで出された。

両書を比較すると書紀には、漢文的潤飾は強いが古い伝承を忠実に残しており、古事記には新らしいものが多いのはこゝに理由があるという。同じ帝紀・旧辞をもとに、他の古文献もともに集大成したのが書紀で、古事記は一つの意図のもとに書きなおした奈良時代の新書であるといえるともいわれる。

書紀は天皇の下にある律令制官僚「太政官」、そして進歩的近代的な人(百済系)による編纂で、律令体制の必然性とその成立の過程をつぶさに書いている。それで70年の重要部分が載る。しかも編纂の下命は諸皇子や有力官僚に対して公的最高の場大極殿で公式に行われている。

一方古事記は、天皇の下にある内裏しかも禁裡で、天皇の側近の舎人(とねり)太安麻呂に下命されている。そして保守的伝統的側近氏族(新羅系)が中心である。

この両派の対立は各方面にあり、天武天皇崩御後の葬礼に於

ても明らかであって、交互に両派の奉仕が行われていることは研究者の一致した見解である。

対立を生かして国づくり

日本の古代国家は百済と新羅の対立抗争を利用し、それからの働きかけをずっと利用して、整えられたことも通説である。壬甲の乱は避けて通れぬことであり、日本書紀はとくにくわしく記述している（古事記は既述の通り、それより70年前までの歴史）。

大化の改新は新羅系の氏族が百済系の渡来人蘇我氏を滅ぼし孝徳天皇が即位。すると百済系がとってかわり天智朝は百済と一体となるほど密接で近江に都。

壬甲の乱は新羅系の勢力によって起り、文武朝から持統朝になるころは百済系の勢力となる。

このころが日本書紀の編纂時代。「延喜式」によると宮中には韓神三社があって、新羅系と百済系(二)の神がまつられている。王朝交替の裏がうかがえる。

こうしたことから古事記は新羅を敵視せず、あこがれの国としており、日本書紀では新羅を野蛮国とみなしている。そしてこのころ既に百済・高句麗は亡んでいたから、それらの国は日本の属国のようにも書いている。

以上結論は求めないが、偽書説は今一歩のキメテを欠くが、これに対する反論は全く弱い。唯大上段に「古い」というだけである。新らしい資料は、奈良の長屋王邸跡の出土木簡の中にでも期待するほかないであろうか。

日本書紀と古事記をどう位置づけるか一つの知識が得られたと思う。歴史記述で日本書紀を中心に、古事記も資料として用いて研究し進められることが理解できたと思う。本誌の記述の底にあるのは、こうした見解に基づくものである。

（高橋一郎）

奥出雲のたたら製鉄史⑪

新資料にもとづく特に東南部のその技術・経済・社会・文化の総合史

近世編②——宍道湖の湖底から

鉄穴流し

この変遷については125号に詳述した。誤まってはならないのは、昭和四十七年まで実施されていた鉄穴流し（洗樋による）の始源を正確にすることである。

神話がわざわいして、古代から行われていると錯覚する向きがあるが、この方法が完成し普及したのは宝暦年間（1751～1763）で220～230年前のことである。それ以前は川砂鉄が多い。従って操業数も少ないし、そのため地下構造も簡単である。（ただし地域差や、水位の状況によって違いはある）

本紙160号の表3の(C)を見て頂きたい。斐伊川水系で鉄穴流しが禁止され、やっと解禁されたのは、25年後の1636年である。この年から奥出雲では一斉に流し始めた。そして斐伊川が東流して宍道湖に注ぐようになるのは1639年である。

(a)のグラフは、島根大学理学部橋谷研究室が調査した、宍道湖々底の堆積物の中に含まれる諸元素を分析して、その量を堆積年を追って示したものの一部である。実線はTh（トリウム）である。くわしいことは、島根大学山陰地域研究総合センター「山陰地域研究」（自然環境）第4号「宍道湖・中海の湖底堆積物に含まれる諸元素の鉛直分布」にのっている。

この曲線の推移は、鉄穴流しと相関関係があると推察されると結んである。

そして橋谷教授からは、たたら研究からはどうかと話を向けられたのである。

鉄穴流しについては、125号に続いて載せる予定にしている。（すでに断片的には、160号に載せておいた諸論文で発表）、そこでその変遷を数字的に把握し（操業鈩数・鈩毎の年間操業数使用砂鉄量そして採集方法による山砂の量を出して、積算する）それをグラフ化して両者が一致する方向となれば、相互の研究の正しさが立証されることになると思われる。

その計算をして、明らかなところを書いたのが、(b)であってほぼ傾向が一致することが明らかになった。

発表は4月16日の山陰産業考古学会例会に於て、論文としては、「山陰地域研究」（民俗伝

路傍に刻む歴史③

六十六部回国供養塔

——上阿井・大上、廻り堂の隣——

鉄奉行襲撃事件の犠牲者（本誌42号参照）をまつる廻り堂の隣に建つもので、高さ約 m。

由来などは今後の解明にまつ。近くの石の祠に、石造の仁多新四国第21番の碑と49番の大師像がある。

（会員 杠誉富）

九月句会抄

薄衣鳴らして締める一重帯　浅野　としお
酷暑なく残暑もなくて秋深む　岡田　蹊花
秋暑し老父の昼寝や鬼やんま　小川　あきお
旅プラン果たせぬままに萩こぼる　門脇　花子
洗い髪指にまつわる秋思かな　加納　信子
里芋の葉の露に晴着の袖ぬらし　楠　房子
薯づるをたぐる老婦の独り言　高木　白虹
夏休み終わりて教師の貌となり　新出谷　一華
砂山の孫の手形に秋の蝶　錦織　富江
稲を刈る背に声かけて一服す　峯石　美代子
飛火野や仔鹿のやさし瞳に遇えり　渡部　夕峰

馬追虫の声

簸の上短歌会

うちふかく紅をふふみてまろやかに吾亦紅は畦の風にふかるる　永井　弥生
敬老の祝日の夜を老ふたり障子のかげに馬追虫の声　岡田　時子
畦に立てし威し銃にも知らぬげに倒伏の稲に雀群がる　佐藤　喜代子
夏と秋と季移りゆく風の揺れ秋海棠の紅は愛しき　松浦　愛子
素足にて畑打ちしたる感触を思ひつつ何か不思議でならぬ　常盤　はるまさ
歌一首まとめて仰ぐ秋空に吸はるる如く息ふかく吐く　岡田　時子
家族みな勤めに出でて気儘なるひとりの忙しきひと日はじまる　野村　節子
ショウウインドに好色づらの映りしが街を行きつつ気になりてならず　常盤　はるまさ
梨剥きてわれに勧めし君の掌に触れなば熱き想ひつたわる　安部　夕波

承）に発表予定である。さらにこれをより確実にするため、斐伊川下流の簸川平野の地層調査を実施された、理学部地質学の三梨・徳岡研究室によって、流出土砂量の総量の算出が行われている。斐伊川東流と鉄穴流し再開がほゞ同じ時であり、以来出雲の近世企業たたらは発達し完成に向い、隆盛となってゆくのである。この三者が合致し、さらに調査が進んでいる福岡教育大学の赤木研究室の、奥出雲の地形学検討からみた、流出土砂量の総量の算出が終ると、この方面から見た奥出雲の企業たたらの実態は完璧となる。

使用砂鉄量の計算の基礎

幸なことに再開以後の連年のたたら操業の状況と鉄師の数は「杠日記」でほゞ知ることができる。そしてそれは宝暦5年1755まで記録されている。一方絲原家の記録は、享保19年1734年から明治5年までは完全にのこっていて、両者の記録は21年間が重複していて、それから考えると重複以前の「杠日記」の記録は十分に信用できるものである上に、卜蔵家の記録も重要な節目に属するものが残っていて、よりさらに正確さを加えている。

さらに次回に予定しているが松江藩の鉄行政が極めて良く、しかもその記録が残っているので（鉄師側の記録＝藩の規則とそれに対する鉄師の対応、運上銀・営業申請書の控・勘定書等）、計算の基礎資料は十分にある。

斐の上川柳九月抄

欠伸のみしていたのかなもう金婚　松浦　久寿子
中山に句碑を残して巨星落つ　松田　牛歩
盆送り子や孫送ってやっと盆　安部　春恵
酒うまくなったでしょうと虫が鳴く　松浦　木公
生ビール税金だけは泡で飲み　渡辺　好之
秋風に誘はれ啼く蝉の声あわれ　若槻　愛散人
同窓会みなが白髪を染めていた　藤原　千代子
物忘れしまいに夫婦で腹を立て　松浦　亜以
人の道苦労を背負い旅を行く　安部　正子
夏休み食事のメニューも若返り　佐佐木　千世
取るつもり無い責任は取ると言い　藤原　のぼる
盆終りゃ元の居場所で老夫婦　高木　白虹
お迎えが来たら素直に行くと決め　若槻　白馬
ふる里の愛が一杯宅急便　真綿　よし子
初任給追越しだけを得意がり　石原　冬明
あせってもひねり出せないしめ切り日　田中　有樹絵
稲刈りは未だかとあせるコンバイン　田中　芳春

御意見をお寄せ下さい

「文化財とまちづくりを考える会」（松江市）は、是非とも奥出雲横田で、この会主催によるシンポジュームを開きたいとのことである。

できれば、60余年の伝統をもつ陰陽庭球、或るいは野球・剣道・算盤の各大会のように、陰陽郷土史研究会も母体として、陰陽の文化財とまちづくりを考え、また実行している団体或は地域の情況を話合いたいとしておられる。

研究あるいは読んで知識を得るだけでなく、進んでそれを生かし文化財を守り価値を高め、町づくりに生かそうということである。

会員頒布一部百五十円／六九一一八　島根県仁多郡横田町一〇六一／二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江01601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第　163　号
（11　月　号）
昭和63年11月5日
奥出雲編集集団©

「奥出雲」編集方針②　神話と古代史の正しい理解をすゝめる

歴史の眼⑤

小学生用郷土読本「わたしたちの町　横田町」を読んで

画期的な本であるが故に

横田町発足30周年記念事業の中で最高のものは、この本の編集発行であろう。出来ばえはまことに立派なものである。将来を託する子供への愛情が底にあり、町発展への願いをこめた編集者の努力と協力、外部の方の協力の賜物と敬意を表するものである。

編集にあたっての教育的配慮については、現職を去って久しくなるので所感は控えるが、当誌に連載している「歴史の眼」で、歴史的記述については意見を述べて置きたい。既に他の方から誤りではないかとの指摘も、筆者の所に届いている。この本が単なる読み物ではなく、学校に於て教科書に準ずる取扱いが、恐らくなされるであろうと思うが故に、またさる方はこの誤まりは実害を伴うという言葉も出たほどであり、そして家庭の貴重な郷土認識の書となるであろうと思うが故に、あえて意見や誤まりを述べて置く。御考慮をお願いしたいし、再版の折には御検訂もお願いしたい。

そろばんの町　横田町

101頁から頁を追って、基本的な点についてのべると

○かめだけそろばん

「かめだけそろばん」とは、今日では横田町の「マルホそろばん」「つるぎそろばん」「トモエそろばん」と同じく、製造会社の「商品名」である。「雲州そろばん」の中に含まれるものであって、これと併記するのは誤まりである。併記することは業者から言えば一会社の商品の宣伝をしたことになる。

「雲州そろばん」が優れていて全国的に著名なために、他産地の業者が「雲州そろばん」と銘うって販売し、被害がでたことがある。そこで雲州ではこの銘称の不正使用を禁じ、より当地のそろばんの向上を期して、正式な制度上の手続きをとって登録し、その不正使用の道を断ったものである。それを推進したのが「雲州算盤協同組合」であった。ところが仁多町の某社は自己利益に関する問題から、この組合を離れたために、今日それを公称することができなくなったのである。

広い心で対処するのが理想である。雲州そろばんには間違いはないが、商業道徳上の問題と利益がからむ。さらに次の問題にも関連がある。

○雲州そろばんを地場産業として確立した横田の人々のことが欠落していることへの、業者の不満がある。この視点は横田の郷土読本としては、大きな欠点である。村上吉五郎伝説（作られた話が多い）を調査と資料で正しくして、拙著「雲州そろばんの今昔」に詳細に誌して置いた。吉五郎が細工がうまくて、芸州塩屋小人作のそろばんをみて、これに劣らぬものを作ったことは事実であるが、吉五郎は名人芸に止まっていただけである。これを今日の事務用そろばん型とし、商人販売に乗せたのは、横田町の人々の努力であることは歴然としている。

即ちかたくなに公開や伝授を拒否した吉五郎に対し、横田の高橋常作は、珠削りを量産することに心血を注いで工具を開発した。しかしこれではまだ小さい珠が出来なかった。横田の村上朝吉は遂に手廻しろくろを完成し、一挙に小さい珠を、揃って正確にそして量産できるようにしたから、そろばんの生産数は急に増えた。そしてそれを公開したから弟子も増え地盤産業が芽生え、それを売るために商人とを結んだのである。やがて横田に問屋が続々と生まれた。その後、問屋と職人の協力で工具の改良動力化が進み、その技術は雲州の職人によって大阪を経て播州そろばんの製法の変革をもたらした。播州の今日あるは実に雲州のお蔭である。この視点を落としては、地場産業づくり、町づくりへの関連は生まれて来ない。重要な点がぬけている。

○そろばんの始まり

『「たたら師」（この語は誤まり、後述）が砂鉄や炭を取り引きした時、数をかぞえるために使っていた道具が、今のそろばんにていました。それが今のそろばんづくりのもとといわれています』

の文に至っては、失礼であるが唖然とせざるを得なかった。

日本にそろばんが中国から入ったのは中世末であって、それは記録の上でも実物の製作年号からも歴然としている。そして出雲に到来したのは、入ってから20余年後の正保二年1645であり諸計算の基礎を誌する、「塵劫記」（寛永四1627吉田光由編）も入っている。そして当地の鉄師が、そろばんを用い塵劫記によって勘定書（営業決算書）を作ったのは大変早くからで、残っている帳簿でも1700年代の初めの

歴史の眼5　奥出雲のたたら製鉄史⑪　川柳・俳句・短歌

ものがある。「塵劫記」も組合の資料室にある。大津そろばんも入っており、当地でも作られていた。その実物も現存する。やがて鉄師や商人は、雲州広島の塩屋小八作のものを手に入れて珍重した。絲原・桜井・山根の鉄師のところにもあって、現存する。後の二家のものは組合の資料室にある。吉五郎は山根家にかってあった小八作のそろばんをまねて作った。細工がうまかったから他の者の作品に比べて優れていたので、絲原家では吉五郎にそろばん製作を依頼した（古文書が残っている）。

冬の間の大切な副業のみでない

当初そろばんを作ったのは、工具をもつ大工であった。大工の仕事は今日と違いそうあるものでなかった（本誌連載の明治三十五年参照）。従って大工にとっては干天に慈雨を得たようでこれに従った。技術を公開した横田の職人によって、それは需要を開き、副業が直ちに専業化へ向ったのである。これらの職人が腕が良くて優秀なそろばんを作り、雲州の名声を挙げた。

副業に作るものは問屋の在庫不足を補う程度の普通品であった。この事実を見逃しては今日の地場産業の成立がわからない。伝統産業の値打ちもわからない。

神話とたたらの里

神話のふるさとであろうか。それはさて置いて、神話の教科書登場については問題があるところ、軽るがるしい取扱いを避け慎重にすべきと思う。

「たたら師」の語を誤まって「鉄師」とすべきところに用いてある。当地では徳川時代初めから「鉄師」は正式呼称である。伯耆・備後では鉄師をたたら師と呼んでいるところもある。今日ではたたら師とは民俗学では村下・炭坂などたたら吹きに従う職人などを総称するのに用いている。

砂鉄採取方法についてもこの際正しく認識して置いてほしい。

また松江藩の鉄行政が巧みであったことも。（本紙4頁参照）

今日「玉鋼」と「真砂砂鉄」の信仰が強いが、当地方での産出量は真砂砂鉄と赤目砂鉄とは同じ位で、「玉鋼」の生産は生産量の2～3割で、鉄師の勘定書では最終的には利益の2割前後に過ぎない。銑が主力である。

○**たたら製鉄法**の項では、昔のたたらと日刀保たたらのことが混同されている。これでは日刀保たたらの真価が明らかにならない。従って安部村下の評価が単なる伝承だけに留まって仕舞い、たたらの歴史もあいまいになる。

たたら炉への通風管が左右10本宛とあるのは、ずっと昔なら別として、完成期の炉や今日の日刀保たたらでは誤まりである。

このことは重要である。また「炉はあとでこわし易いように粘土でつくる」とあるが、これは結果であって、粘土の良否は砂鉄から鉄をつくるのに重要な役割を荷負うことが忘れられている。地下構造は記述の通りであるが、たたらが大規模になり一カ所で経続して行われるから重要となったのでたたら吹きでは炉をつくる粘土の良否は根本条件の一つである。

114～115頁の作業は日刀保たたらの場合で、奥出雲での靖国鈩までの作業ではない。もともと近世の企業たたら、それ以前の初期企業たたらは、銑作りが本命であって、鋼はわかり易く言えば副産物であった。そしてとかく軽視どころか忘れられているのが大鍛冶屋である。鉄師は銑をこゝで包丁鉄として販売してはじめて（鉄を包丁鉄にすると倍の値段ー鋼よりも高い）その経営が成りたっていた。

鋼が江戸時代に松江藩の財政をうるおしたとあるが、このような事実もなく勿論記録もない。執筆者の誤解である。

ただ幕末に鋼の一部を松江藩が財政の赤字を補填するために専売としたことはある（本誌本号の4頁参照）。

鋼が玉鋼と呼ばれたのは明治20年代で、洋鉄に押されて包丁鉄が売れなくなり、洋鋼に比べて燐・硫黄分の少ない和鋼を、海軍省に売り込んだ時から、その形状を握りこぶし大に小さくして出荷したからこう呼んだ。そして和鋼の生産を挙げる努力をしたが、当地の三日押でもせいぜい銑6.5割に対し鋼3.5割位であった。横田町では大正11年に操業が終り翌12年廃業している。

戦時中の靖国鈩の生産量も同様であって、採算には合わないが、鋼を重刀材料とするため、赤字を補填して操業をした。

安部村下の偉業は三日押で鋼

斐の上川柳十月抄

ふれあいをゲートボールが連れてくる　佐木千世
古い家と見定め修理屋やって来る　松浦久寿子
国旗だけ揚げてメタルはもぎ取られ　松田牛歩
記帳の列老いも若きも主義もなし　田中有樹絵
かた越しの温泉で川柳が安産し　渡辺好之
まだほかに命をかける事がある　松浦亜以
敬老の日今日だけなんだかおはもじい　安部正子
美しく老いるに少しぼけていい　松浦木公
大相撲千代独走に興薄し　若槻愛散人
秋風が冬の用意をせきたてる　安部春恵
孫の手を孫が土産に買ってくる　藤原のぼる
秋冷えて寒さ感ずる床ひとり　若槻白馬
八勝七敗格好悪いが綱は綱　高木白虹
ナツメロに亡夫とふたりの詩がある　杠京子
シンクロの実可子世界に舞った笑み　真綿よし子
税金はいやだが福祉もっとくれ　石原冬明
食欲の秋ヤングには底がない　田中芳春

のみを、日刀保たたらで作っていることである。伝統にない技術の開拓者である。勿論採算には合わない官民の援助による文化事業だから操業されている

同じ砂鉄から作るヤスキ鋼で日本刀を作れば、たたら製鉄で生まれた鉄や鋼で作ったものに優るとも劣らぬ強さと切れ味のものができようが、美しさは生まれない。美術刀剣でなく刃物にすぎない。和鋼（玉鋼）はまだ不純物があるから鍛えに鍛えて、即ち百錬の鉄となるから、美しくなる。こゝに日刀保たたらの製品の値打ちがある。

念のために付け加えると、刀匠によっては戦時中の玉鋼を超えるものを期待している。玉鋼を別として自ら小規模たたらで赤目砂鉄も使用し銑などを作ってそれを鍛えなければ、正宗の名刀に迫ることは出来ないと試みている幾人かの名人刀匠もいる。

その他

120頁の**岩屋寺を保護**したのは北条氏とあるが、**三沢氏**とすべきで、北条氏とする資料や歴史的背景も少ない。横田町誌を参照してほしい。中央中心史観からはこう書き誤まるのが常である。また藤が瀬城が尼子合戦の舞台となったとするのも、中世戦国戦乱史観の庶民軽視のあらわれである。

除地製鉄遺跡は、絲原家のたたらであるとあるが、どこからこのような記述がなされたであろうか。絲原家の鈩の記録はすべて記録されており、現在地のかっての鉄穴鈩の前の雨川鈩については地下構造も明瞭に記録に残っていてかなり異るものである。

伝説について、この記述は伝説の域を脱して小説風となっている。孫引きがさらに孫引きを生んで大きな誤まりを犯している。慶長元年にはすでに毛利元就は死亡（25年前）している。毛利氏が当地方の鉄を集めたことは事実であり、毛利の家臣が岩屋寺の寺領をとりあげたため寺勢が急に衰えたこともあるが、記録では当地方で鉄の生産と輸送の監督をさせたのは、樋口村の大催小池氏（現杠氏）である。

どうみてもこの奉行は、一時の巡検役程度の人物と考えられる。この事件は同時に起きたものでもない。堀尾吉晴が頭百姓を集めたのは別な理由によるものである。この話のもとは「若月家古代大成記」と駒原邦一郎が集めた阿井の伝説を物語風に改作したものがもとである。伝説なら素直に記すべきである。伝説を幾つか採録した中の一つであれば別であるが、唯一つとり上げるにはもっと民衆の動きも配慮したものが他にある。副読本としてはそこまで考えるべきではないか。

現在県内にある地方史研究の正統な学会や研究会は五指をこえる。仁多郡の学校在勤者で入会している者は数人（すべて郡外の人）、学校への助言者級の方の中にも参加者は極めて少ない。郷土研究の盲点がありそうである。

この本のレポート風のものは小学生の程度をこえていると思うほど生き生きとしている。現代はレポート風文章の時代とも言われる。歴史考証が弱い。これは根本的欠陥となる。何はともあれ御検討をお願いしたい。苦言多謝。

次回から横田町の観光計画や都市計画に歴史の眼を移すことにする。（横田史談会　高橋一郎）

十月句会抄

梨剥きて病友の弱音を聞き役に　浅野　としお
曼珠沙華消えて墓地より妖気去る　岡田　蹊花
息災に深き秋夜の箸づかい　小川　あきお
秋灯を消せば夫の寝息かな　門脇　花子
老い母の歩巾に添うて秋彼岸　加納　信子
故郷や筧の水も涸れ果てぬ　楠　房子
ごそごそと老いの気忙し冬支度　高木　白虹
激論が果てて静かに虫の声　新出谷　一華
夕焼けて急ぐ野の道赤のまま　錦織　富江
ベル鳴りて秋刀魚焼く火をほそめけり　峰石　美代子
長々と脚を日向に秋遍路　渡部　夕峰

移つる季　簸の上短歌会

かなしみの底に通れるよろこびをわれと吾が問ふ子の継がぬ家業（いえ）　永井　弥生
立ち込めし朝もや晴れて山畑に誘ひ合ふごと小鳥さへづる　松浦　愛子
作業場の傍へに積みし藁束の下より匂ふどくだみ白く　岡田　時子
足裏の魚の目ひとつ長靴の固きにあたり長き一日　佐藤　喜代子
アナウンサーは事件を告げてそのあとにさり気なくひと言のコメントつけぬ　常盤　はるまさ
亡父とも母とも重なる老い人とむらくも苑に粽を作る　景山　悦子
物憂きとこぼす日ごろを紫陽花は色変はりつつ雨に咲きつぐ　野村　節子
向日葵の西に傾く日ぐれどき由美は二十歳（はたち）のいのち終りぬ（姪逝く）　安部　夕波

前号欠落補正　3頁4段終りから10行へ挿入　約1.5m

奥出雲のたたら製鉄史⑪

新資料にもとづく特に東南部のその技術・経済・社会・文化の総合史

近世編③　松江藩の鉄行政上

基本の三本柱

江戸時代最初の松江藩主（出雲国一円を知行）堀尾吉晴は斐伊川水系の鉄穴流しを禁止した。

農民は農外収入の最大の稼場を失うことになった。たたら製鉄が出来ず、鉄穴流し、炭焼き、たたら場の仕事、運搬等すべてが止まり、農民の困窮はその時から訪れた。その後毎年陳情を続けた。次第に山に住む動物が繁殖して、畑作物の被害や人畜への被害も増え、一段と陳情を重ねたが許可はされなかった。

25年振りの寛永13年1636やっと許可されたが、それも飯梨川が洪水によって被害を受けたため、こゝでの鉄穴流しを禁止したことに伴う、己むを得ざる処置であった。翌年から早速たたら吹きがはじめられた。既述の如く当時は川砂鉄が主で、夏採取し、たたら操業は秋の晴天の日を選んでの露天操業であった。

従って冬の操業はできなかったが、各地での生産再開が開始されると　慶安元年1648

○**御買鉄制**が敷かれ、その製品（銑のみが製品）を藩が買い上げて大阪へ移出し、現金収入を得る一方鉄師へは郷蔵から蔵米を鉄代金として放出した。利ざやと他国との交易に便利な現金を得るという現金収入の乏しい藩にとっては二重の利益がもたらされた。それから4年経った寛文12年　の「雲陽大数録」によれば、その金額は藩の収入の5%にあたっていた。その他のほとんどの収入は年貢米であった。

次にこの「雲陽大数録」にもみえるが、開始の年の不明な、○**先納銀制**があった。

これは藩が秋の年貢米が入るまでの現金収入を得るために、鉄師から年貢米16000俵（寛文12年）を担保として現金を銀納させた。藩の鉄師に対する負債で、秋に年貢米が入るとその利息分を加へて鉄師に、郷蔵から蔵出しした。それを養米（やしなめ）と称した。鉄師は職人の賃金は大部分をその米で支給した。そこで後には先納銀制ではあるが、鉄師が養米を藩に申出でるという形式をとり、藩の面子が立つようなことになっていく。

この先納銀制は先の御買鉄制と併行して行われたのではなくほゞ御買鉄の中止の時に行われていて、理由は明らかではないが、御買鉄の実施や廃止の変転に応じて変転した。　享保7年1722御買鉄制が中止されると（これを期に復活することもなくて廃止となった。ただ幕末期に鋼の一部が御買上制となる）、先納銀制が続き、明治初年まで絶えることなく続いた。この先納銀は後で詳述する如く、鈩と鍛冶屋（銑を包丁鉄とする大鍛冶屋のこと以下同じ）の数に応じて算出された。第三の柱は、○**運上銀制**である。一口にいえば営業税にあたる。鈩・鍛冶屋の年間の営業月数を一定の額に乗じて算出して納めたもので、基本額は、明治五年新貨幣制度まで殆んど変らず続き、明治6年の新税法に変った。

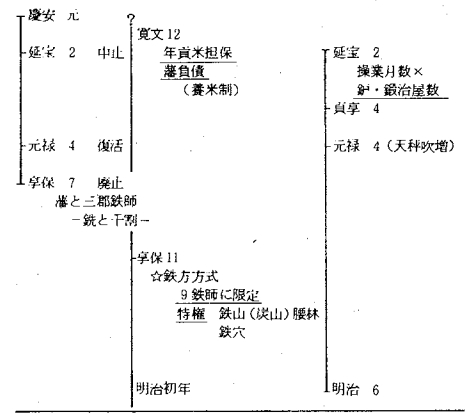
以上が三本建の概要であって上表がその経過の大要である。藩の鉄行政は運上銀と先納銀を中心としたものである。このうち先納銀は藩が鉄師への負債というものであったので、利息の上に種々の特権を与えた。

そのためには財政基盤（大水田地主）で経営実績のある9鉄師を限って許可した。当時松江藩は能義郡と飯石郡西部をのぞく出雲国を領内とした、仁多郡には20鉄師を数えていたが5鉄師とした。こうして後に詳述する如く9鉄師が特権をもち独占的にたたら製鉄業を行った。これを近世企業たたらと称することにしている。他に農民の間では（かってのたたら操業経験者を中心としたであろうが）、差吹鈩といって、吹差吹子送風による小規模たたらが露天で、自給を目的として行われた。これを自給たたらと称することにしている。

山陰の古代の製鉄遺跡やっと発見

去る10月下旬、八東郡玉湯町の玉の宮で、8世紀末から9世紀初めと認められる、古代たたら（箱型炉）の地下部分が発見された。出雲国風土記の時代から80年前後の後世のものである。来年からの本格的調査に大きい夢がふくらんできた。

松江藩鉄行政の推移



会員頒布一部百五十円／六九九－一八　島根県仁多郡横田町一〇六一／二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江〇一六〇一）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

「奥出雲」編集方針① 横田—中世と伝統産業とたたら

奥出雲

題字 糸原風亭書

第 164 号
（12 月 号）
昭和63年12月3日
奥出雲編集集団©

誇りうる中世横田庄
その社会と経済の動き（上）
——その歴史今も生きている

先月山陰中央新報連載の「中世を歩く」を二回程分担執筆した。その時の原稿に大巾書き加えたものが、この連載である。本誌90～95号に「惣と一揆の行動」をのせていたが、しばらく休載していたものの続編にもあたる。それでは中世に続いて近世もさらに近代の明始前半まで、当地で大催として遇せられた、小池氏（江戸初期より杠と改姓現在に至る）に焦点をあてたものであったが、それを当時の横田庄全体の歴史の中に含めて、その社会と経済の動きの中でのべたものがこれである。

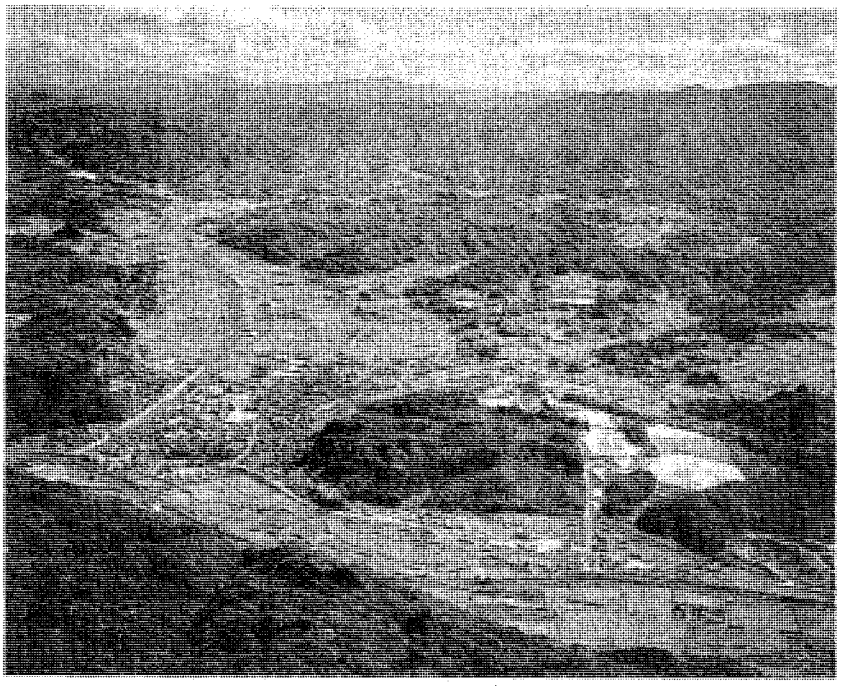
根本的には異ならないが、本文中に述べているように、秋山・井上両氏から頂いた、史料と助言によって、考察を深め記述を豊かにすることができた。学恩に感謝する。

横田庄の中心舞台

写真に見える盆地は、奥出雲の横田庄（よこたのしょう）の中心地である。庄の範囲は明確ではないが、出雲国風土記の横田郷（現横田町の鳥上・横田・八川—大谷をのぞく—の三地区）としてよい。荘園の出現は十二世紀初頭に京都の石清水八幡宮の寄進地系荘園としてである。

寄進者は在地武士で源平一の谷合戦平家方の将、横田兵衛尉維之の二代位前であろうか。

写真手前の町並みは現横田町の中心街で、川の左が六日市、（当初は六日市場という）。右が大市（同じく大市場）である。中央の水田地帯は検地帳と地下の土質調査から判断すると、近麓一帯で、特に中央左手の南に日を受ける中村であった。こゝの馬場と呼ぶ地に、庄の精神的支柱となった横田八幡宮と岩屋寺（真言宗）があった（現存）。それより手前の六日市の左手即ち背後の山が高鰐山で、こゝに内裏より、地頭請所としてこの庄支配の命を受けて移って来た、仁多郡西部の地頭三沢氏の築いた藤が瀬城があった。この附近一帯は当時は下中村と呼ばれており、永正八年（一五一一）移城後計画的に川を狭んで両町が作られていった。



右手の台地の向う一帯が原口村で、開墾に伴い次第に左方へと水田が開け、そこが稲田と呼ばれた。これらを含む一帯が横田庄中世の舞台の中心地である。

こゝで中世を生き抜いた諸氏のほとんどは、来住した武士の土着帰農者の子孫であり、その後裔はさらに近世を生きぬき幾多の功績をのこして、しかもすべて現存している。

市場に関する資料

横田庄五百年間にまつわる古文書は、地元も含めて相当な数にのぼる。その中に次のようなものがある。

「天文拾参年甲辰春ヨリ餓死飢饉是非ニ及ザル也　餓死人路次ヲ塞ギ、疫病死人数ヲ知ラズト申シ……米八百文ニ壱升俵壱俵ハ弐貫五百文ナリ、大豆ハ弐升麦モ弐升売買……甲辰年（筆者註五八四）天下世になってから急速に水田化している。昭和初年にもこの地帯は良田とはされていなかった。従って生産の主体地は周囲の山

誇りうる中世横田庄（上）・川柳・俳句・短歌

大兵乱飢饉ト聖徳太子伝ニ見ヘタリ
七月廿一日市ニ米ヲ三升五合売買　八朔市ニ米六升ニ成
秋ノ田毛上充満吉祥ナリ」（岩屋寺院主快円の「大永年中古記録」より）
「大永弐年壬午五月ヨリ本堂ノ柱山デ取仕ル　別所ニテ十本　鬼神ニテ三本　西谷一本　大呂ノキャラ木ノ下ニテ二本　馬場ノ八龍ニテ一本　原口ニテ四本　古市ノ天神ニテ三本　新宮ニテ一本……（註　地名はすべて現存、柱は計二十六本）」（「快円日記」）
「横田在番について申付ける条数　……中村市場目代の儀石原九郎左衛門尉に申付け候　近年の如く相違有るべからず候　ただし諸役等の儀は三沢の代にしかず申付けるべきこと……」（吉川家中井寺社文書九）
いずれも当庄の「市場」に関するものの一部である。はじめの原典二冊は、四十年前に初公開後十五年たって全文復写、「島根県横田町誌」に若干史料として使用したもの。
三つ目の文書は三年前、広島大学秋山伸隆氏より提供頂いたもので、これとその頃荘園の荘官に「催」職のあることを、島根大学の井上寛司氏から助言頂いたことで、快円の前記二書の分析をしていたのが、急に輝き出したが、浅学非才の上にたたら資料調査を抱えていて、心ならずも今日に至っていた。今度地方紙に機会を与えられたので、いそいで輪郭を紹介することとした。「市場」の問題に続いて、「生産—鉄」の問題に触れるようにとのことであるが、中世の製鉄については、全国的に研究者は全く暗中にあって模索も思うにまかせていない。しかし庄園の動きと「市場」をひもときながら、奥出雲の鉄生産の周辺にだけは迫りたい。

横田庄の歴史

まず横田庄五百年の歴史を一瞥しておく。庄園が成立してから領家石清水八幡宮との関係は安定して百年間を経過したようであるが、武家政治の時代となり十三世紀を迎える。その初頭の承久の乱後、この庄は北隣三処郷の地頭三処氏から蚕食され続けたが、文永八年（一二七一）から正和二年（一三一三）までは、六波羅探題北条時輔ついでその母の所領（八幡宮領も存続）となった。
その後は内裏御料所ならびに八幡宮領となり、間もなく内裏領は北朝の仙洞（上皇）御所に属した。十四世紀末の明徳の乱後の南北朝合体でふたたび内裏領へ。その一部は内裏の菩提所京都泉涌寺に寄進された（八幡宮領も存続）。そして天正十九年（一五九一）毛利氏の所領となるまで、実に五百年間荘園として存続し、後半期の当地および中央に残る史料によれば、かなり頼りになる荘園であった。
次にこの間この庄で生きた人々をみると、横田氏支配の時代のあとは、鎌倉幕府成立とともに、八幡宮の荘官の一人（「催」職）として来住し、中世半ば以降「大催」と呼ばれた小池氏は、近世では特に松江藩の庇護をうけ、八幡宮神事の中心となり、明治二十年代までその古格を維持した。
十四世紀半ば、当庄の一部仙洞御所領の代官として下って来たのは、院の蔵人所に仕えていた安部氏である。三沢氏がその代官を請けると退いて帰農し土豪となり、のち一時は尼子毛利両氏にも仕えた。その六代源太左衛門は稲田の通称「下馬田圃」十町歩余の開墾者でもあった。近世では代々が郡の下郡役を勤める家格を保ち、現存する屋敷とその周辺は、中世土豪屋敷の遺構も含め面影を十分に留めている。また近世松江藩の九鉄師のうちの卜蔵氏（楠・名和の末裔）と杠氏（新見杠城主の末裔）も中世に来住しており現存する。
さらに明徳の乱の中心人物出雲守護山名氏がその代官として現存する。この庄に送った石原氏の末裔も南で備後と境を接する馬木郷地頭馬木氏の末裔も、他県ではあるが現存し史料も少なくなく、ほとんど明らかになっている。さらにこれらと婚姻・所領で関係の深い、備北の山内両氏・宮氏、伯南の諸氏のことも明らかになるにつれ、中世横田庄が、政略軍略上、生産そして流通上枢要な位置を占めていたことが、くっきりと浮び上って来ている。

中村市場

「吉川文書」の提供をうけるまでは、「市場」の文字は当庄に関してはみることがなかった。ただ「市」の存在を伺わせる文面があるのみであった。
横田八幡宮は最初は現八川の当時の尾園村に創建された。それより百余年後に代官として下った安部氏が来住したのもその南方であった。後世庄の中心横田盆地に前者は遷宮され、後者は転居している。
また十四世紀末の明徳の乱の山名氏の代官石原氏が、現八川の古市の東端三笠山に山城を設け、十年を過したという伝承を認めると、現八川地区は明らかではないが、それだけの理由のある地であったと思われる。そこでその頃からこの集落で市が立ったとし、記録にあらわれる大永二年（一五二二）より十四年前の永正六年（一五〇九）—明徳の乱（一三九三）後十四年—三沢氏が藤が瀬城に入って、その足下に新らしい集落ができてやがて市がたち六日市と呼び始めたために、八川の市が古市となり、地名となったであろうと考えていた。
ところが吉川文書の「中村市場」の名称などによって、この

渦　巻　雲　　No.4　　昭和63.12.18

魚（うを）は　たい（鯛）
おとこ　で　たいち（太一）　ここ（宇宙）にあり
月　出　　鯛　（吟）

来年　は　東の方で　めでたいことがあることを　期待したい。

今年も、お陰様で　元気で　暮らさせて頂いて　有り難い事だった。二人ともども東奔西走、あれやこれやで　何程か　お役にたったようである。　まだ幸いに　声を掛けて頂けるし、集まって頂けるのは、この年では　有り難いことである。二人ともこういう生活が　続けられるとは、夢にも　思わなかったが、いい趣味を　拾ったものだと　喜んでいる。　それが　健康にも　明らかにつながっているのは　感謝である。まだまだ　続けてやれそうで、薬代を払うことを思えばと　奉仕しているが、それも限界にきているのが　悩みである。

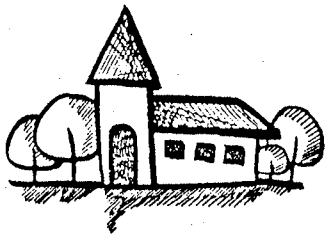
さて、ついこの間　二人とも　油絵やデッサンを　展示会に出品した。見られたものじゃあなかったが、それでも　お上手でもほめられると　まんざらでもない。つい進呈もしたくなる。だが　他人様は　贈られると、掛けるのには　気がすすまないであろう。これだけは遠慮したいが　子や孫　まあ　一族までは　傑作と思うものができたら、配らせていただこう。焼くのは惜しい　さりとて　飾るのにはもとより、積んで置くにも　我が家は狭い。生前の形見わけと言えば、嫌とは言えまいと。ふた月に一つは　難産だが生まれている。生まれてみると可愛いもので、あばたえくぼ、眺めしかめつしているうちに、油絵というやつは　手を加えることができて、楽しみが多い。そうそう　もう　一つは　どこかの家に運ばれた。大切にされているだろう。

こんな歌を　新聞でみた

また一つ老いゆく年を迎えむと　霜月きょうは障子貼り替う

五十余年の昔もそうだった。今　かたわらで　同じ仕事が続いている。こんな句も

着ぶくれて　　母の貫禄　　戻りけり



四月に　高橋寛市さんの三女のひとり娘
（母ひとり娘ひとり）が　所望されて
嫁ぐとき　親代わりとして　出席した
ー県教育広報の巻頭言を頼まれー
63.7ガツ下ジュンゴウ

「出家とその弟子」

横田町文化財専門委員
山陰産業考古学会長
高橋一郎

近くのキリスト教会や、その設立者などの熱心な信者の家庭の影響を受け、物心がついたころから、聖書物語や讃美歌に浸り、長じては、聖書研究や洋楽、そして西洋の歴史や欧米の文学に、かなり接することができたのは、私にとって大変幸せなことだった。

青年時代は、戦時中であり、東洋回帰の流れに乗るとともに、ささやかな悩みの中で、倉田百三の表題の本も知った。それを読み重ねるほどに、キリストと親鸞の思想と行動に、相通ずるところがあることに興味を抱いた。以来、唯円がまとめた親鸞の「歎異抄」に、折りあるごとに目を留め、注釈の本も買い添えて今に至っている。それぞれの本に記す書き込みは、その時代の思いをそれぞれ呼び起こしてくれる。今、ラジオで作家の高史明氏の歎異抄を聴いている。程度が少し高いが、心を打つものもあって、聴き漏らすまいと努めている。

五月の半ば、三瓶山麓の町のさる真宗の寺院の若住職の結婚式に、新婦の縁者として父親役も兼ねて参列した。虚飾の一切を取り去った、本堂や旅館での式や宴に、私は、二人の前途を心から祝福した。また、学友による思い出の数々をつづった素晴らしい男声合唱は、新郎新婦への最高の贈り物であり、人々の心を和ませ、豊かにし、その雰囲気を大いに盛り上げた。昨今、特に涙もろくなった私は、青春の心にも触れたのであろう、眼にハンカチを添える始末だった。式の終わり近くでの新婦側代表として祝辞を述べる際には、高ぶる感情から、準備していたものに代えて、こんなことをしゃべってしまった。

「歎異とは、異なることを歎くということであるが、それは、こういうことであろう。人は、生きる権利で生きるのではなく、許されて生きるのである。後ろから生かしている諸力によって人は生きている。だから、人は皆同じである。なまじかな知恵は無駄である。初心はひたむきに正しいものを求めることで、それが純であり真実であるなら、いつしか生かすものが見えてくる。これは、親鸞やキリストの中心思想で、そのために二人は、民衆の中に分け入って、念仏し、祈ったのである。抄の第三章の『善人ですら救われる、まして悪人をや。云々』は、仏の慈悲を、山上の垂訓の中の「幸いなるかな心の貧しき者、天国はその人のものなり。」は、神の愛を、それぞれに享けて生きるものであると教えている。素直に徹すれば真実は生かされる。」

二人の門出を祝って話しながら、こんなことの言える自分だろうかと思い、次の瞬間、これは私のざんげなのだと思い直したとたん、目頭が熱くなってしまった。

だが遅くはない、今しばらくの人生でもと、明滅する心を抑えながら座って、華やいだ新郎新婦の姿を見つめた。

考えは修正せざるを得なくなり、城下の町を、六日市場・大市場と呼ぶようになったのは、元亀・天正ごろ以後と考えねばならなくなった。

井上寛司氏の研究に、「古市」「中村市場」をあててみると、「杵築市」「赤名市」についで古く、富田城下の「三日市」、馬潟近くの「八幡市」、「末次市」荘原の「五日市」「出雲今市」「塩冶市」「大東市」「木次市」などは新しいことになる。これは記録上のことで発生期を示すものではないが、既述のことや後述のことからすると、横田庄の成立が極めて古く、領家の変遷はあったが、山間に位置して荒される被害も少なく、雲伯備に通ずる要衝にあったから、山間にしては「市」の発生も極めて早かったと考えて誤まりないと思う。

大永二年より二十二年を経た天文十四年、市が存在ししかもその以前から成立していたこともしめす文書が、先の吉川文書「横田在番について申付ける条数」で、尼子晴久が横田庄中村の代官で、庄内六カ村の総代官でもあった森脇家貞に下知したものである。

尼子氏が三沢氏にかわって横田庄を支配し（天文十二年）代官を派遣したのは、三沢氏の弱味をついたことに由来したので、両氏の間には緊張はあったであろうが、敵対関係はなかった。したがって庄内の支配については、この文面に見るように前例を踏襲したようである。

条数は十三カ條あって、人質を残すこと、六カ村の境のこと、要害の補修のこと、職人の取り扱いのこと、さらに横田庄から京都の内裏、泉涌寺・八幡宮の三領家への公用（貢納）のことそのあとの処分のことなどがある。（三領の区分は諸文書から推定すれば判然と区切られたものではなく、いくつかの名田毎にそれぞれが領家に属していたようである）

さきに引用したように、明瞭に中村市場（中村の馬場・樋之口あたり）があり、市場の支配や商人職人の取りしきりを行う目代が置かれ、それは石原九郎左衛門尉であったことをしるし、在来のように相違なく取りしきることとしているから、石原氏は三沢氏によって任命された目代で、引き続いて尼子氏がそれを留めていたものとみえる。しかし諸役（諸賦課）については、三沢氏の例にこだわることなく申付けることとしている。

これで快円の記録にあった天文十三年の「七月廿一日市」「八朔市」（八月一日市）の文字は、中村市場の一の日の市であることが明らかになった。そこでそれより前の天文元年に大催が、三沢氏の代官から限られた場所において諸役を免ぜられているなかの「馱の口」、さらに古い永正十七年に岩屋寺が同じく限られて諸役免除された中にある「地頭馱の口」の意味が重くなってくる。これを駄別銭とすれば即ち荷駄に課する通行税となる。すると単なる関所ではなく、流通のための市場に伴うものと考えねばならなくなり、寺・大催はともに、目代を通しての尼子氏と同じく、その数量は別として、特権を与えられていたことになり、中村市場は定期的に商人や人の動きとともに、物資の集散がかなり盛んであったと見なければならない。

目代石原氏は、三沢氏が横田庄に進出最初の代官としたその有力家人石原義扶の一族とも考えられる。義扶は当地の記録によると、明徳の乱の代官石原氏が失脚し、その後三沢氏を頼って復帰した子孫であるとする。義扶は理由あって間もなく庄内に帰農隠棲する。

岩屋寺には二十一坊があり、庄内の寺庵の僧・修行者を加えると百名を超えたとみられる。この復旧さらに根本堂ほか十指をこえる堂宇・仏像・境内社の再建復興を果した快円の功績は大きい。これを援助した三沢氏はもとより、精神的支柱八幡宮その祭事を司祭し惣の中心として農民に影響力をもった大催、これらの基盤である庄内の生産力も見逃せない。

岩屋寺と茶の湯

最近、三沢十三代為清が茶道の奥の奥をたずねたのに対し、千利休の高弟山上宗二が応え、それに贈ると誌した「山上宗二記」の第三の書一巻が発見され

斐の上川柳十一月抄

温かな味が溢れた村祭り　真綿よし子
風呂上り鏡に写るあばら骨　若槻白馬
あの世とはどんなとこだかのぞき度い　松浦木公
ひも落し親子着物の晴れ姿　安部正子
三瓶山すゝきの波に足をとめ　安部春恵
千三つ並べた嘘が化けて出る　渡辺好之
都市ビルのジャングル抜けてユータウン　高木白虹
あっそうだ待っててこない休刊日　松浦久寿子
夫が居る甘え仕事がはかどらぬ　藤原千代子
一畳で遊び上手な女の子　杠京子
辻褄が合わず言い訳もうひとつ　松浦亜以
産湯して一人前の大あくび　石原冬明
抜け道も時には足を踏み外し　藤原のぼる
きれいだと見せる手の裏よごれてる　松田牛歩
食欲の決め手は主婦の匙かげん　田中芳春

前号訂正　1頁2段9行　御検討・　2頁1段5行　芸州

て、その研究に史料提供の協力を願いたいとの便りを頂いた。当時岩屋寺には連歌の風流にまつわる記録があるが、今それに茶道を加えることになった。人の往来は文化を伝えるが、生産力の余裕なくしては人の交流もない。

横田庄と鉄（稲田の地名の起り）

「斉民要術紙背文書」（鎌倉遺文）によれば、横田庄では領家石清水八幡宮からの荘官と、この庄に手を染めたいとする隣郷地頭三処氏との確執が、寛喜元年（一二二九）から文永八年（一二七一）まで続き、御年貢鉄ならびに公事新銭をめぐって、地頭の横妨があった。この庄の荘官には下って来た預所・雑掌さらに公文もおり（催も加える）地頭も一時預所職を宛行われていた。年貢鉄・公事新銭の語は後世の記録からも考察すると、庄内の鉄の生産、それも含めた市が存在したであろうことを示してくれる。

この争いの記録の終る文永八年の「関東下知状」（当連載十八回参照）によれば、横田庄（五十五町歩—この数字は全横田庄より少ない）は、竹矢須佐両郷その他とともに北条時輔領である。時輔が暗殺されたのちは、その母妙音尼（時頼の後室）が関与し、正和二年（一三一三）の死までの記録がある。その後横田庄は鎌倉鶴が岡八幡宮仮殿ついで京都六波羅密寺のそれぞれの造営料所となった。これは造営用工具鉄材および資金用鉄としての調達に応じさせられたものであろうか。文保二年（一三八一）内裏領に復し、元徳二年（一三三四）には仙洞御所（北朝）領となって、代官安部氏が下って来る。それより前弘安四年（一二八一）八幡宮社殿は妙音尼の本願によって現在地中村の馬場に移される。

十四世紀末葉横田庄をめぐって起った明徳の乱で、山名一族は将軍足利義満に敗れ失脚し、出雲国守護職は京極氏の手に移った。

仙洞御所代官安部四代宣時は、開墾を進めていた原口村の東北の一角を稲田と称し、永享二年（一四三〇）こゝに屋敷を移した。間もなく宣時は禁中公用にて船で日本海を航行し、越前敦賀に向った。途中難風に出会い、かねて上洛の折参拝していた伏見稲荷大明神を念じたところ、難を切り抜け公用を果すことができた。このことが仙洞の上聞にも達し、その口添えで分霊を屋敷内に勧請した（現存）。京極氏の京の居館は仙洞御所の近くの京極にあった。敦賀から越えた北近江は京極氏の本貫地、湖を渡って大津から京都へ入っている。この折秘かに鉄の商いも行ったと誌している。当時代官自らが貢納のため上洛することがあったことは、同時代の「言国郷記」などにくわしい。

因みに北近江国友鉄砲鍛冶の地長浜市の北方姉川の上流には、古くから「出雲場」と呼ぶ地があって、出雲人が開いたといゝ今日なお出雲の神を祀る神社があり、鉄の生産地であったとも伝えているから、当庄とのつながりも推測できる。

十一月句会抄

初凍の白鷺孤独の影写す　浅野としお
風芒蜻蛉容易く寄せつけず　岡田蹊花
児の便り日向の縁で読む日和　小川あきお
ひと刻を野立のお茶や文化祭　門脇花子
野仏のほほえみを打つ初あられ　加納信子
紅葉の垣間に眺む文化橋　楠房子
さぐり詠む古りし碑文字や苔もみじ　高木白虹
火の山の秋風佗びし壇の浦　新出谷一華
紅もみじ銀杏黄紅葉の続く径　錦織富江
秋陽さす空のブランコひとりゆれ　峯石美代子
強霜や新聞配達足ばやに　渡部夕峰

稲架の砦　　簸の上短歌会

ごうごうと風の鳴る夜の月白く刈田の稲架砦のごとし　永井弥生
陽に焼けて歳重ねたる顔なれど田畑に立てば場を得たる顔　佐藤喜代子
コスモスの見ゆる日光浴室に寮母は老人の髭剃りをりぬ　松浦愛子
すれ違ひし女性（ひと）の香りか朝早き街のショウウインドの前にただよふ　常盤はるまさ
面影を追ふ術なきに四十余年ぶりの再会に心たかぶり　景山悦子
乱れ咲ける菊の花群起しゐる夫の丸き背に秋の陽おだし　野村節子
萩ゆれて露をこぼせる山寺の朝の読経静かにきこゆ　安部夕波
（信州飯山正受庵にて）

会員頒布一部百五十円／六九九—一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0—601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

「奥出雲」編集方針① 横田—中世と伝統産業とたたら

奥出雲

題字 糸原風亭書

第 165 号
（1 月 号）
昭和64年1月7日
奥出雲編集集団©

誇りうる中世横田庄
その社会と経済の動き（中）
—その歴史今も生きている

荘官で帰農した安部氏・小池氏

土着以来百五十年、守護京極氏の元では最右翼の国侍として重きをなしていた三沢氏は、横田庄進出を早くからねらっていた。永享十一年1439八幡宮遷宮棟札からその名が登場し、五年後の文安元年1444には地頭として岩屋寺の寺領も安堵する。

岩屋寺への三沢氏の願文によれば、院宣を受けて横田に移城したとある。そこで安部五代近豊は代官を退き帰農した。それから三十年後の天文年間の岩屋寺復興の折、本堂仏壇等の勧進には、三沢氏およびその有力家人数人とともに安部氏は名を連らねていて、当地有力土豪となっている（仏壇等現存）。近世ではたたら製鉄業も営んだ。

天文五年（一五三六）馬木郷の杠氏はたたらを吹いた。当地方の記録では最も古いものである。

横田庄への進出をと再度三沢氏を攻めても果たせなかった（一度は岩屋寺に火を放って引揚げたので全焼する）尼子氏は、天文十二年横田庄を支配下に収め、中村代官森脇家貞を総代官とし、竹崎・大呂・下横田・蔵屋・原口・尾園の各村に代官を置いた。二十年後の永禄五年、（一五六一）尼子毛利両氏の対立の中で尼子氏が守勢に転ずると、再び横田庄は三沢氏の支配に復した。この間森脇氏の本願で大市・六日市の氏神として、出雲国風土記にみえる神祇官社伊賀多気神社が現在地に移転再興された。やがてこの下中村は横田町へと成長し、中村にとってかわることになる。

大催小池氏の古記録によれば初代刑部久朝は八幡宮の分霊を奉じて当庄へ下り、中村五反田の田村氏の娘を妻とした。しばらく後幕府から奉幣使代参役を仰せつけられる。

二代目からは、代々京都から妻を迎える。弘安四年八幡宮が馬場に移されたころからは、代々の妻はすべて奥出雲の有力土豪から入れ、名前も農民と同じものを名乗るようになる。これまでは荘官の下級「催」として八幡宮の神事にかゝわっていたが、移転を期に荘官を離れ、半世紀余土着して貯えた実力をもって、土豪として、惣（中世に出現した村落共同組織で、こゝでは八幡宮を中心とする六カ村と考える）の中心者として神事を継承したのではないだろうか。

（大催小池氏は樋之口村が河床の水田化につれて拡がると、住居を南方の高地からその中心の現在地に移した。今その跡地は「催田」とよばれる水田となっ

〈新年の提唱〉
歴史を現代の芸術と融合させて昇華し将来への夢を育てる
憩の丘に彫刻の森を

近世企業たたらの中心地で、わが国の和鉄生産の主産地であったこの地が、こゝまで成長した根本原因の一つは、原料として優れた真砂砂鉄の母岩である花崗岩が、この地一帯にあったからである。この郷土の一隅に憩の丘を設け、そこの森に、この花崗岩と和鉄をもって作った彫刻を配置して、休養と健康と思索の場とすることを提唱したい。

彫刻の素材○**花崗岩**　地元産を中心に
○**和　鉄**　町内からの供出寄附の和鉄中心
（鋳直しや鍛え直しをする）
○**青　銅**　（温か味を加えるため）

製作者　郷土・わが国・外国の彫刻家に依頼
設置者　可能な限り次の方の協力によって
○町民、他町村・県外・国外在住の横田町出身者
○他県或は都市にある島根県人会に加入している横田町出身者のグループ
○当町と友好関係にある都市及び会社・団体等
○その他関連ある方

企画監督者　岡本太郎氏級の人
作品　企画監督者を中心に、専門家・町民代表の参加によって、標題の趣旨によって大綱を定め、あとは製作者の意欲にまかせる。

以上概要のべたが、長期計画のもと一歩々々と充実を計って完成は21世紀と考える。その道程で、町の内外の愛郷心を盛りあげまとめあげて行く。

（中海や益田地区等の土地造成の事後処理と同じ問題が、当地にもおこると思われるが、それは別として、その完成の記念として、その中心的地位に築造する）

誇りうる中世横田庄（中）・新年の提唱・歴史の眼・奥出雲のたたら製鉄⑫・短歌・川柳・俳句

ている）

その後しばらく記録では明らかでないが、こうした歴史的背景がなければ、後述のように突如として「大催」と称し称されて、大きい特権をもって過せられることはない。八幡宮・岩屋寺のみでなく、横田町の記録にも重要な地位を占める理由もない。それについて述べる前に、大催職をめぐる近世近代の動きを、豊富な史料によってみておきたい。

大催小池氏（江戸時代小池と改姓）の勢威

近世に入り幕藩体制の成立とともに、大催が中世に有していた特権は、祭事をのぞいてすべて失われた。そこで松江藩に願い出でた結果、藩は小池氏が神事を怠りなく勤めるため、格別の家柄と先祖以来の精励にかんがみ、特別に持高の半分二十五石については免地とするの取り扱いを許した。「雲陽大数録」（宝暦年間成立）によれば、大催の住む樋之口村は二百五十石岩屋寺は三十石、八幡宮は八石の持高である。

その後松江藩は財政不如意のため免地を取り上げたが、それにかえて扶持米を与えた。

近世の大催職（神事のみである）執行に関する文書は相当数にのぼり詳細を極めているが、その中で大催職についての伝統の重かったことを示す一事件に代参役の大催に、村人は数日奉し、行列だけでも三十四人がそれぞれの役に応じた装束をつけた。祭典では大催が上座ついで岩屋寺が座し、神主は下座であった。この前後の諸費用（奉納角力も含め）は一切大催の負担初年まで記録が残る）

この時の神主の藩への訴えに対し、樋之口村他七カ村町の村人一同九百余名が、村町毎に詳細に実情をのべて署名捺印し、神主に全く同情のない、その上訴の不当なことを上申している。建久七年八幡宮創建後間もなくから、大催の奉幣使代参は古格を維持し続いている。村人は以来奉仕し、費用はほとんど大催の負担であるなどである。

藩ではこの裁決にとまどい、地元有力者の調停にまかせたが多少の祭典の枝葉のことで譲歩するに留まり明治二十年代まで続いた。これに因んだ地名なども今に残る。大催の住居は宮の真南にあり、その間には専用参道があって相対し、庭内には近年まで八幡宮の遥拝社があった。これらのことは中世以来の強い「惣」組織の残影であるとしか考えられない。かって免地があって後扶持米を受けていること（荘園における荘官による年貢の残影か）、祭事にあたっての費用負担（仝公事の残影か）、村人の奉仕（仝夫役の残影か）、村人の一致団結した上申（かっての惣裁判の残影か）などはそによった。華々しい行列は伝統と権威を象徴し、歴史の重みを感じさせるものであった。一方祭礼の前後における大催の私生活に対する規制も厳しく、古格をしのばせるものである（明治

降られ野仏

簸の上短歌会

雪のごとけやきもみじの降る峠に合はせるお指の欠け し野仏　　永井弥生

わくら葉よ心して散れこの径は足病む夫の散歩する径　　佐藤喜代子

横浜駅のホームにわれを送りくれし術後の嫁の姿忘れじ　　岡田時子

蘇州にて新兵たりしわれ宛の今は亡き父の手紙ひもどく　　常盤はるまさ

大祖父の杖つき佇ちて愛でられし山茶花咲き満ち命日ちかし　　野村節子

亡き母の風呂焚きてゐる夢なりき細き背を見せ風呂焚きてゐし　　松浦愛子

いつの日か愛は崩れむ老いてゆくさびしさ想ふ雪ふる夕べに　　安部夕波

歴史の眼

『大国の興亡』

日本の敗戦後の国をあげての文化大革命は、何処へ行くであろうか。21世紀はより高きへ進むのか、またまた深淵に臨むであろうか。標記の上下二巻の本は、世界の指導国が軍事力の肥大と生産力の相対的衰退によって、次々と交替していったこゝ数世紀の世界を描き出している。

何んでも世界一を目指し、その実現を誇示した米国も、抬頭したEC（西欧連合）・ソ連・中国、そして技術とそれで得た経済繁栄と円高によって成金王国となった日本と並んで仕舞ったことは、かっては相像もしてみなかったことである。興亡はすべて前車の轍を踏んでいる。

わが国国内の治乱興亡の歴史を興味本位に読んで、多少は自戒の糧とはしているが、所詮、盥の中の同胞間のことに過ぎぬ。

この国際間の国々の興亡は、自戒の糧と、坐して瞑想にふけるのみでよいであろうかと思うことしきりである。

れを明瞭にしてくれる。

明治に入ってしばらくは続いたが、地租改正ほか政治経済の変革によって、これらの残影も消滅に追いやられた。

明治二十年の放生会の記録によれば、下関から阿波そして神戸までの陰陽の商人興業師六十余人が広い境内を埋めつくしている。戦前まで続き、江戸時代にも記録があるから、中世の市場につながるものではないだろうか。

中村市場と小池氏

中村市場のあったと思われる中村と横田村との堺には、今日「市場境」「金剛院」（岩屋寺の一坊）「堂の前」があり、「堂の前」では今日なお牛馬の守護神が中世以来その地の人々の講によって祭りつがれ、今日では二本杉荒神と呼ばれている。附近の字名は川原・砂田等で、牛馬市によって土地の肥沃化を計った名残りでもあろう。当地の鉄師卜蔵氏出身の卜蔵孫三郎が享保年間に著名な能義郡の荒島新田の造成でこの方法を用いている。

こゝで筆を中世にもどすと。

「大催」の語の初見は長禄元年（一四五七）で、大催職をめぐる兄弟の論争があって、三沢氏が庄内の惣裁判をうけて裁決を下している。このことは見落してはならない。

この時大催は免地三町歩を有しているから、かなり広い土地を有し諸役も負担する一方、免地分によって神事を中心とする大催職を執行、諸役のうち免除された役得の上に、中村市場に於ける特権も有していたから、本来の大催職の役柄の上に、庄内また惣に対する支配力も持っていたものと思われる。

天文九年三沢氏が大催に対して届けた文書の中には、八幡宮祭礼に於ける奉幣使代参の行列ー馬によるとうご（登御）ーのことについて指示がある。先に述べた近世に於ける大催の登御の行列そして祭事は、厳としてこの時代にも執行されていて、中世初頭に淵源のあることを推測させるのである。

当庄が尼子氏の支配下に入った天文十二年の翌年に、尼子氏の奉行人（命をうけての執行者）が、大催の横田庄六カ村村役人の確認をしているのも実力を認めたからである。

斐の上川柳十二月抄

同年の訃を聞き検診受けに行く　安部正子
寒む空に錦脱ぎ捨て木のヌード　松田牛歩
価値感が違えば有難味もちがい　藤原千代子
風邪の孫あづかり爺も婆も寝る　横山まこと
掃いたあと誰が業ざでもない落ち葉　高木白虹
年の瀬や亡き親友を追想す　若槻愛散人
夢に立つ亡妻少しも年取らぬ　若槻白馬
初雪に少し早いと文句つけ　安部春恵
これからがいよいよきつい老の坂　松浦木公
すんなりとあやまる心で今日が晴　真綿よし子
期待せずとは言へど空しくて　松浦亜以
ささくれた心田舎で癒やされる　藤原のぼる
しんみりとなりふり捨てて未亡人　渡辺好之
たよられる身には少々負担過ぎ　松浦久寿子
心配と希望を抱いて年を越す　石原冬明
寝つかれぬ夜を時計が三つ打ち　田中芳春

岩屋寺の復興資材輸送の路次奉行や寄進・本尊の修覆・阿弥陀堂の建立などは経済力を示すものであり、のち文禄慶長年間毛利氏がより広汎な権益と役柄を与えるのもこうした格式と実力を認めたからである。

中村市場と溝尻氏

もう一人「中村市場」にかゝわりを持った者に、溝尻清兵衛尉がいる。

大永七年（一五二七）岩屋寺再興の勧進に応じ、釘かね（鉄）と塩を寄進している。天文四年（一五三五）には、市庭（場）の溝尻清兵衛尉とあって寄進をし、十貫文に重ねて十貫文を加えている。尼子氏及びその家人三沢氏などに比べると多額である。その後路次奉行として名を連ねていて、岩屋寺復興資材の輸送にかゝわっている。さらに寄進を重ね、快円は数々の寄進その数知らずと特記している。その後の八幡宮関係の遷宮には願主・大壇那・奉行と棟札に登場する、本宮・摂社等の違いはあるが、次第に地位をあげている。市場に関与して蓄財した結果であろうか。

溝尻の姓は諸武士国、諸氏の系譜の中にも見えない。永禄五年尼子氏が横田庄から退くと同じくして、溝尻の名は消える。当地の者で成長した者とは考えられない。三沢氏が移城したころ来住し市場に関係したか、或は商人として往来し居住し、三十余年間に蓄財とともに急成長したものであろうか。

（4頁から）

めまぐるしい仕法替えはもとよりであるが、変転する理由は明らかではないが、（宝永4年の藩札禁止令もあるが）藩財政の動向や専売機構の内部により大きな理由があったとも考えられるが、今後の課題である。次回で宝永年間の経済の動き、鉄専売収入の藩財政に占める割合をのべ、また鉄専売制失敗による藩と鉄師の確執をのべて若干の問題に迫ってみたい。そして、失敗が先納銀制強化による新らしい鉄方法式による藩財政補強策となったことを述べる。

奥出雲のたたら製鉄史⑫

新資料にもとづく特に東南部のその技術・経済・社会・文化の総合史

近世編④ 松江藩の鉄行政2

〈御買鉄制 上〉

江戸初期の御買鉄制

御買鉄制とは松江藩の鉄専売制のことである。全鉄師の全生産品を藩の手を通して販売し、確実に利益を藩庫に納めようというのであるが、これは次にのべるように享保7年で終り、江戸期を通じて再開されることはなかった。

横田町内旧大馬木村の鉄師杠家文書『杠日記』には、慶安元年1648「今年ヨリ鉄方留買」とあって、斐伊川水系でたたら・鍛冶の操業が解禁されて、再開した寛永14年1637年から11年後のことで、生産される鉄の市場的価値を認めたものである。この頃備中・美作・備後地方に於ても生産されているが、その量は出雲に劣らぬ量であったから、松江藩が自らの手でその市場に進出しようとしたものである。前記の国の藩では、そのような動きはなかったようである。こうした藩の鉄行政の姿勢は、変遷はあったが、三本の柱によって進められ、鉄師を統制する反面に保護し義務を課していった。

これが砂鉄の良質であったことと重なり合って、奥出雲をわが国に於ける近世企業たたらの中心に育てたのである。これは他国にはみることのできないことであった。（今年7月下旬の横田に於ける第6回たたら勉強会に於ける講演と発表の如くー概要を奥出雲に掲載予定）

なお当地の鉄師絲原家文書『鉄山旧記』その原本である鉄師卜蔵家分家楠家文書『鉄山根元』にも、「慶安元年より御買鉄ニナル」とある。また仝卜蔵家文書『諸控』には「貞享卯年より売鉄被仰付」とある。

次にこの制度の変遷をしるす。

1636 寛永13　鉄穴流し、鈩・鍛冶屋操業を25年振りに藩主京極氏解禁。

仝　14　京極氏廃絶し松平氏藩主となる。秋より鈩吹き始まる。

16　これまで郡内で鈩13カ所吹く。この年大馬木村で両杠氏、小馬木村で六兵ヱ操業。

48 **慶安元　御買鉄制となる**

61 寛文元　杠氏秋15夜吹く

仝　2　杠氏春秋鈩をふく

59 仝　12　**御買鉄代金310貫文（『雲陽大数録』にみえる**運上銀制も有）

87 **貞享4卯**　約40年続いた**御買鉄廃止　私売となる。**運上銀制（操業した月数に応じて銀上納）となる。

仝　2　**御札座御買鉄制に**鉄方先納銀制止め

仝　3　**御買鉄**を「御札座へ**御所望鉄**」と名付け「荷数御極割合」とす。

仝　4　幕府の藩札禁止令によって**御札座御買鉄**郡奉行管轄先納銀制（鈩一に銀600貫匁）に

（竹崎村）卜蔵孫三郎・藤兵ヱ
（亀嵩村）山根儀右ヱ門
（上久野村）石原七右ヱ門
（松笠村）太左ヱ門

仝　4　8天秤吹鈩の稼業禁止
5　10天秤吹鈩の稼業を再許す。そのかわり作業員の減少と、能率向上による生産増をみて、一人につき1升3合の米1200人分飯米15石6斗を、鈩一カ所毎に上納させる。

禁止から再許まで12カ月は、この間藩と鉄師の間の対立交渉があったであろう。

20 享保5　8鈩一カ所につき御用銑750駄、先納米750俵を御買鉄と定める。

21 仝　6　秋13年続いた**御買銑制廃止。私売**となり鉄師頭取制しかれ、田部長右ヱ門がなる。

これで専売制である御買鉄は終ったが、整理すると、

慶安元ー貞享4　40年間
3年間私売
元禄4ー宝永元　13年間
1年間私売
宝永2ー仝　4　2年間
1年間私売
仝　5ー享保6　13年間
となる。この制度は宝永年間の

（3頁5段へ続く）

十二月句会抄

冬日浴び羅漢に懺悔の顔は無く　浅野　としお
冬の蝶渡るに余る川の巾　岡田　蹊花
炭窯に老爺の座る冬日差　小川　あきお
一病を捨ずに生る木の葉髪　門脇　花子
母の手の手毬に五彩の冬日射し　加納　信子
小柄なる山茶花狭庭に彩を置き　楠　房子
あと頼むひと言もらす旅コート　高木　白虹
息災を共に歓び年忘れ　新出谷　一華
老けゆくを止めるすべなし木の葉髪　錦織　富江
葉牡丹を鉢上げにして今日くるる　峯石　美代子
しじみ舟冬霞より出でて来し　渡部　夕峰

91 **元禄4　御買鉄制は藩の御札座によって再開**

仝　5　6　**鉄方**御買鉄制で再開。

『杠日記』に、大坂の銑の値段記録開始

11 正徳元　鉄師は松江藩内で次の10人

（大馬木）絲原徳右ヱ門・糸原五右ヱ門
杠　次右ヱ門
（高尾村）七右ヱ門（雨川村）石原喜兵ヱ

理由は明らかでないが、この年天秤吹子吹き鈩は運上銀3割増となるから、生産増に注目したものか。

『諸控』では13年）

1704 **宝永元　8　御札座御買鉄制止め　中止私売に。**その翌

会員頒布一部百五十円／六九九ー一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0ー601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

「奥出雲」編集方針① 横田—中世と伝統産業とたたら

奥出雲

題字 糸原風亭書

第 166 号
（2 月号）
1989. 2. 4
（M122・T78・S64）
奥出雲編集集団©

誇りうる中世横田庄
その社会と経済の動き（下）
—その歴史今も生きている

本号の時代

- 1504（永正元）
- 将軍 足利氏
- 神聖ローマ帝国時代
- マゼラン世界一周
- 16世紀 ドイツ農民戦争
- オランダ独立
- イギリス、アメリカに植民
- 織田信長
- 1590（天正18）

中村市場から六日市場・大市場

また戦前までは横田町の牛馬市は商品の市も伴って一カ月間にも及び、陰陽の牛馬商や商人が集まった。

江戸時代初期の明暦三年（一六五七）の横田町目代の記録によれば、中世の大永年間から三沢氏が軍馬買付けのため市を開き、農民は残りの売買に加わったという。その記録当時の町衆は以前から定められた、鉄方運送などに従う馬役銀、牛馬市に集まる牛馬の頭数に応じた鞭先銀を納入して来ていることがわかる。中世末に商人の抬頭が当町にも及び、中村市場から六日市場・大市場への転移が起ってこうした江戸時代の様相となったのであろう。

「快円日記」は貴重な記録

快円の記録がくわしく残るのは、三沢氏が横田に移城の五年後岩屋寺が尼子氏の兵火に焼失して院主が倒れ、快円が院主となった永正十一年（一五一四）から、尼子氏が横田庄を支配することになった年の翌天文十三年（一五四四）までである。この三十年間の記録のほとんどは岩屋寺復興の歩みである。山内の諸坊と僧侶その勤行のこと、飢饉による市場の物価の動き、復興への寄進者名その貫高・物件、建築用材の調達のこと、各棟梁名と出身地、大工・職人・仏師・庭師の数と氏名と出身地、工事の進捗と日数の記録、さらに遥るか備後の陣地にまで勧進に赴いた記録もあって、興味ある歴史が浮んで来るが、与えられた主題「生産—鉄」と「市場間の流通」に触れねばならない。だが鉄のことは極めて断片的でしかも少ない。

鉄生産を知る記録

まず当庄内で鉄が生産されていたことを示すのは、既述の十三世紀前半の御年貢鉄・公用析銭のこと、十五世紀半ばの代官安部氏のことであり、下って天文十一年と天正十八年（一五八〇）には、内裏へ横田庄から鉄が貢納されたことが、「御湯殿上日記」に誌されている。

鉄生産の実態を知る記録

次に鉄生産の実態を推定できる記録では、当地方の根本史料「鉄山根元」「鉄山旧記」「杠日記」がある。「天文五年（一五三六）杠氏たたらを吹く」（杠氏は近世に入っても松江藩九鉄師の一人）である。この十六世紀には当庄北方の能義郡宇波へ、河内国から鋳物師集団が来住定着している。たたらによる銑鉄生産を基盤とする鋳造業者である。

近世の記録から類推すると、近世よりは小規模な炉で吹差吹子送風によって一回の操業（一代）は四昼夜（後世四日押という）位かけて行われ銑をつくっている（初期企業たたら）。それも夏季に川砂鉄を採取し、秋季の晴天時に数代操業する程度であったと考えられる。そうした農業の傍らの製鉄者は、横田庄内では数人程度であったようである。

製鉄法の推定

やはりこの頃から天正年中にかけて、三沢郷には借前から刀工が来住し、三代にわたって刀の鍛造にもたずさわっている。三沢氏の文字のある刀剣数本が現存する。日本刀の製法には、銑を脱炭して（銑下し）用いる鋳造法と、鍛挫法があった。

鍛挫法とは鋼やその中の鋼を材料とするものであった。この後者の方法が容易であったので、このころから盛んとなった。だがこれは日本刀の質を落したといわれる。

この鋼造りのたたらは、極めて小規模で農民の間でも行われ、自給自足程度のものであった、（自給たたらと仮称）。

銑生産の初期企業たたら（踏み吹子か吹差吹子の送風）が、高殿を構えるのは近世の元禄期以後であり（近世企業たたら）天秤吹子が主力）、同じく銑生産をした。奥出雲ではこの時鋼が三割程度できていたが、割ることができず捨てていた。やっと割って中から鋼も取り出せるようになったのは宝暦年間ごろからであり、操業を一昼夜短縮して三日押とするのはさらに後世で、それから昭和二十年までこれは続いた。（日刀保たたらはさらに技術改良）従って中世は銑生産する初期企業たたらと小さい鋼を生産する自給たたら（吹差吹子送風）によって、鉄は生産されていたと推定している。

横田庄が終りをつげた天正十

誇りうる中世横田庄（下）・年号㊤・短歌・川柳・俳句

九年には、毛利氏は大催小池氏に対し、樋之口村の鉄穴と庄内六カ村の川粉（砂）鉄の権利を認め、鉄を広島へ速ることを命じている。

鉄の製品

次に製品にかゝわる記録としては、岩屋寺根本堂普請のために鍛冶屋二張場が置かれ、鉄蹄鍛冶屋も加わり、向う打ちや小炭焼きは岩屋寺の十五坊から交代で勤めている。こゝでは釘鍛造が行われ、消耗の激しい工具の鍛冶補修が忙しかったと思われる。

当時一般には杉桧材を縦割りし、ちょうな・やりがんなで仕上げる時代で工具の消耗が激しかった。

しかし当寺では十五世紀前半に中国からわが国に渡来した二人挽きの大鋸（おが）（縦挽き）が、すでに数多く入っていて欅材の使用が容易であったともある。意外に早い伝播である。

横田庄を中心とする物資の流通路

最後に横田庄をめぐる流通のことであるが、井上寛司氏が述べられた経路に次のことを乗せて実情を想像して頂きたい。

①横田ー広瀬ー安来　は重要な道で、代官安部氏の貢納の道であり、当庄への物資の移入の道、人々の往来の道でもあった。岩屋寺復興の仏師は越前・越後・京から、大工・庭師の職人は若狭・京・出羽・丹波から入っている。快円が求めた仏壇は富田の市場であった。

②木次ー杵築　への道は、神仏習合時代の岩屋寺と大社を結んだ。出雲では鰐淵寺に次ぐ真言宗の大寺として、祈願勤行の導師もつとめ、三処郷の高田寺を従えて参じている。建築材料の博などは杵築から買入れている。大工の多数は杵築・日御碕・大東からも来ているが宮大工である。本願をつとめた杵築の道清はそうした交易に尽した人物であろうか、その功労にむくいるため、三沢氏はわざわざ使をたて三貫文を贈っている。また来次市庭（ば）の文書の中には、横田の鉄がこゝを経ていることを誌している。大社ともかゝわりの深かった三沢氏である。宇龍港から積出した鉄は当庄地方のものであったに違いない。

③備中への道からは大工も入っており、のち天正年中八幡宮神主田中家断絶後、その跡をついだのは、備中から来住していた木山氏（現神主）であった。また新見庄の商人が出雲との間を往来し、日野郡にも来ているから、当庄との関係もあったに違いない。たたらを吹いた杠氏は新見庄からの来住者であり、その後そことの交流も続いている。

④南の馬木郷には地頭馬来氏がいて、南の山を越え備北の両山内氏とは婚姻を含めて交流が深く、地毘庄と当庄とは経済交流があった。そして毛利時代にはさらに重視された道であった。

最後に高野山で修業し来庄入山した快円は、明徳の乱最終の洛外内野合戦で討死して哀話を残した、家喜九郎の子孫である。快円の父は天文九年、尼子方で毛利攻め吉田合戦に加わり、討死したという奇縁もあった。

（横田史談会　高橋一郎）

参考
「島根県横田町誌」収録の史料及び関連の未掲済史料
「泉涌寺史」二巻（本文編・資料編）
井上寛司「中世山陰における水運と都市の発達」

年号㊤

古代から「平成」まで

明治

1868（慶応3）　天皇親政とし、3.14五か条の誓文が出されて新政府の基本方針明らかに。政体書によって新らしい政治制度となる。即位9.8明治と改元し一世一元となる。1869東京へ遷都。藩籍奉還により藩主を藩知事に。

（出典）『周易』説卦の「聖人南面而聴天下、嚮明而治」と『孔子家語』巻五帝徳の「長聡明、治五気、説五量一、撫万民、度四方」による。勘申者（選んだ人）不明。

大正

践作により明治45 1912 7.30からを大正元年とし、この時から新年号を適用する月日を指定することになる。

（出典）『周易』臨卦、象伝の「大亨以正、天之命也」など。勘申者不明。当時体系的に研究していた森鴎外は、正の字の語源の由来から、異見を述べたという。

昭和

践作による。大正15 1926 12.15改元。

（出典）『書経』堯典の「百姓昭明、協和万邦」と『史記』五帝本紀の「百姓昭明、合和万国」による。勘申者不明であったが、一月九日の朝日新聞によれば、当時宮内省御用掛であった吉田増蔵による（別誌によれば、吉田とともに国府種徳も参画し、昭和・元化・同和の案を提出したという。当時の首相は島根県出身の若槻礼次郎）。吉田は、太平洋戦争開戦の詔書を起草した。東条英機は「仕方なしに腰をあげたようなものは困る。士気を鼓舞し勇壮なものを」と迫ったが、吉田は「陛下の大御心はそんなものではない」と抵抗したという。吉田は新天皇の宮号、名前の原案も出し、その中から天皇が選んだという。

平成

新らしい元号法は1979昭和54年に成立し、政府が定めることとなったが、使用の義務はない。従って首相は理解と協力を要請している。

(出典)『史記』の五帝本紀の「内平かに外成る」と『書経』の大禹謨の「地平かに天成る」による。勘申者は宇野精一ら四人か。

「慶応」については、菅原在光（式部大輔）が、『文選』から選んだが、「平成」も候補にあったという。

年号（元号）は南北朝も含めて、大化から平成まで248、出典は殆んど中国の古典である。勘申者は、各時代を通じ、菅原氏（多くが文章博士）100人（若干複数で）、藤原氏（多くが文章博士）72人（若干複数で）。奈良・平安時代に大江氏14人（匡房もある）、平氏・三善氏各3人、紀氏・秦氏各1人、題醐天皇勅裁ー。その他若干名。不明45。

年　号（元号）

東洋に於ける紀年法の一種で統治者の即位・祥瑞・災異・辛酉革命・甲子革命の年に人心を一心し、政治理念を明示し、天災を避けるために行った。故に制定は厳重で中国古典を、勘者が勘文し嘉号をあげ、公卿の討議を経て天皇の勅裁を仰いだ。江戸時代は幕府の同意も得、年初に遡って適用。

（例）和銅（奈良）ー武蔵国より大きい自然銅を献上。**大治**（平安）ー疱瘡流行で。**斉衡**（平安）ー石見国より醴泉（醴酒の如き味のする泉）を献上。斉衡（金製の桝の意）　**正中**（鎌倉）ー甲子革命（甲子の年にあたるのため。**大永**（室町）ー兵乱により。**正徳**（江戸）ー即位。**弘化**（江戸）ー江戸城火災による。

248の改元の理由は、即位70（災害と併合3）、甲子・辛酉の革命の年のため28、祥瑞（めでたい）のため17、不明7、その他126は兵乱・災害（地震・水害・干魃・火災・疾疫）・天象異変（慧星）・怪異などである。

出　典

唯一つわが国の現存最古の漢詩集『懐風藻』ー中国の詩風にならった、天智天皇から奈良時代までの64人の詩120編ーによるものがあり、若干不明のものがあるが、他はすべて中国の古典の中の言葉をそのまゝ、或は組み合せて嘉号を構成した。

最も多いのが『周易』（別名易経）で、ついで『文選』『漢書』である。さらに、後漢書・**書経**（別名尚書）・礼記、そして群書治要・晋書・詩経・**史書**と採用数がへり、その他にもある。昭和・平成ともに史記と書経を出典とする。

史記　中国二十四史の一で、黄帝（中国古代紀元前2700年頃の伝統的皇帝で、天下統一・度量衡制定・音楽一定その他の功績）から、前漢の武帝（前100年頃、日本は弥生初期で国内百余国に分れていた。邪馬台はこれより350年後。朝鮮は高句麗の抬頭期）までの事を記した、紀伝体の史書。前漢初期に漢の司馬遷が著したもので同時史である。

書経　五経の一、上は堯と舜（徳をもって天下を治めた中国古代の理想的帝王）から下は、秦（前500年頃）の穆公に至る、政治史と政教を記した中国最古の経典。孔子の編といわれるが、成立年代一定せず、ことに古文は魏・晋時代（3～4世紀）の偽作とされている。

周易とは中国三易の一。中国古代の伏羲氏（黄帝につぐ神話的人物）の画した卦を、周の文王・周公（前1000～800）がくわしくし、孔子がそれに深奥な原理を付けた。陰陽二元論から八卦を考え六四卦をつくり、すべてのこと（自然・家族・方位・徳目）にあてはめ、哲学・倫理・政治の上の説明・解釈を加えたもの。周代に完成されたので周易といい、今日の易学のもと。

昭和は遠し　　簸の上短歌会

大欅の梢の先を透し見る冬のま空のふかぶか蒼し　　永井弥生

電線は冬の笛吹く夕ぐれを枯野の道に聞きつつ帰る　　永井弥生

山眠る冬は寂しも桧葉蔭に鵯一羽鳴かず隠るる　　佐藤喜代子

出荷して広くなりたる土間掃けば死にたる真似の小虫のをりぬ　　佐藤喜代子

大雪とふ予報に伽羅木囲ひたるビニールの紐の風に揺れ来ぬ　　松浦愛子

月ひと夜雨のひと夜と春めきて裸木芽吹く一月央　　岡田時子

天皇の崩御の報に牛撫でる手をとめ牛舎にて黙悼したり　　景山悦子

崩御されし今日のテレビに映りたる戦争の画に昭和は遠し　　常盤はるまさ

後任のなくて退けぬと古稀迎へし夫の朝出に雪花の舞ふ　　野村節子

夕冷えの吉備高原はひと筋の路しろくして遠き灯またたく　　安部夕波

前号訂正　2頁1段14行 江戸時代杠と・3頁5段1行 諸武士団・

一月句会抄

煤払い一気に古き物を焚く　浅野としお
影おとす一枝もなし冬の池　岡田蹊花
道具屋の日向ぽつり福寿草　小川あきお
福寿草傘寿の母も恙なし　加納信子
暖冬の川瀬にぬるむ風の音　楠房子
虎落笛夜警の杵の途切れがち　新出谷一華
去年今年つなぐ雨音傘の中　錦織富江
三世代女が守る雑煮味　渡部夕峰

斐の上川柳一月抄

お年玉モミジのような手をかさね　若槻白馬
思い切り泣けとっぱる子を諭し　藤原のぼる
献立は玉子御飯と孫がきめ　杠京子
顔に皺ひとつ刻んで年を越す　真綿よし子
嫁々と思っている内年も暮れ　田中有樹絵
あのいけずようも立派に新成人　石原冬明
流し目で見られた意味が分りかね　松浦久寿子
大あくび妻台所で返事する　児玉哲呂
短冊を軸に入れかえ春を待つ　安部春恵
門松を立てて終点また近くなり　松田牛歩
当選の皮算用に一票差　渡辺好之
川柳で年賀が届く友もあり　佐佐木千世
どっこいしょ三度の飯の膳につく　松浦木公
病状を気遣いながら年賀書く　安部正子
コシヒカリおいしく食べて薬服む　松浦亜以
ふるさとを託急便にする歳暮　横山まこと
除夜の鐘かぞえて蕎麦の店じまい　藤原ユキ子
ペンネームつけて私が二人居る　田中芳春

年号の発生

中国では漢代の武帝が即位の翌年（前140）を建元元年とした（一説）のにはじまり、アジア諸国に拡まった。明・清時代に一世一元となった。現在は用いず。この間改元は600余回あった。

日本では中国に倣い、大化645からとされているが、最近の研究では天武天皇の時代（680年代）から始まったものが、『日本書紀』編纂の時、遡ってあったとされたものと考えられている。

即ち645～654の間は大化と白雉以後22年間ない。686年に一年間（天武時代）朱鳥が用いられ、以後14年間ない。701年（文武時代）から大宝が用いられ今日に至る。

文字

読みは漢音訓であるが、宝暦（ほうりゃく、ほうれき）のように二様の読みのものもある。

普通2文字であるが、奈良時代には中国の流行に副って、5回だけ、天平感宝など4文字がある。また奈良時代には、和銅など出現した瑞祥を表現したものが多く、平安時代は儒教的政治理念を表したものが多い。247（平成を含め）の年号に使用されている文字は72であり、1回だけ使用が30であって、42の文字が繰返へし使用されている。中国と同一の年号は、貞観・建武・天和など約30あるという。中国では同じものが多いが、日本では同じものはない。年号はかっては皇権の象徴のため、源平争乱・南北朝時代の朝廷分裂の時には双方の年号がある。

（使用回数多いものゴヂック。数字の上段は上につく場合下段は下につく場合）

安5 12 雲・2 永16 13
廷11 5 応7 13 嘉11 1
化・3 寛14 1 観1 2
感・1 亀・5 喜・3
享4 4 久2 7 景・1
建9・ 乾1・ 元15 12
慶4 4 弘6 2 康10・
衡・1 国・1 護・2
興1・ 吉・1 斉1・
至1・ 勝・1 寿1 3
朱1・ 貞7 1 昭1・
承9 5 昌1・ 正13 6
字・1 授・1 祥・1
神2 1 政・3 成・1
祚・1 大6 0 泰・1
治3 18 雉・1 長11 8
鳥・1 中・3 禎・1
天27・ 徳1 14 同・1
銅・1 仁5 8 白1・
福・1 平2 10 保3 12
宝5 5 文15 4 万3 1
武・1 明5 2 養2 1
霊1・ 暦2 14 禄・7
老・1 和1 18 亨・1

（下）は年号にまつわる稀話・変った系統の年号について—

（高橋一郎）

横田史談会今年度予定

毎月（第一土曜日）**古文書を読む集い**（8月で150回）

3月 **藤が瀬城跡**現地での研究会

4月 島根の文化財と町づくりを考える会総会と**陰陽の懇談会**（会場の世話）

5月か第25回**史蹟めぐり**—岡山県成羽町—馬木初代城主の出身地

民芸とべんがらの銅と美術館の見学

6月か10月 山県**地区調査**

7月29 30日 全国的規模の**第8回たたら勉強会**

右にあわせて、奥出雲の増頁号2回考慮中、（なお継続発行の安定のため、**継続講読者の増加に**御協力頂けば喜びます）

会員頒布一部百五十円／六九九—一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0—601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

「奥出雲」編集方針① 横田—中世と伝統産業とたたら

奥出雲

題字 糸原風亭書

第 167 号
（3 月 号）
1989. 3. 10
（M122・T78・S64）
奥出雲編集集団©

中世の城郭
藤が瀬城の遺構

寺井 毅

一、はじめに

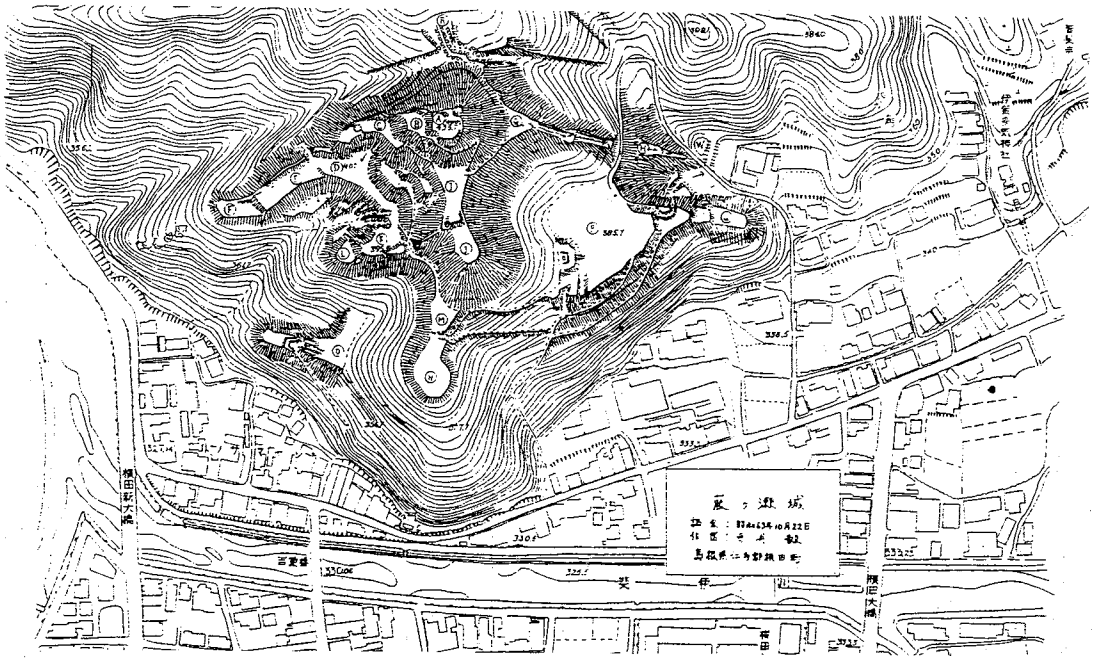
現在各地に残る中世城郭の遺構は、ほとんど廃城時のものであり、創築時のものではない。それは軍事・経済上の重要地点は、いつの時代にも繰り返し使用され、またその時代の持ち主（支配者）の経済力、経験に応じて改修され続けられてきたためである。仁多郡横田町に残る藤ケ瀬城は三沢氏によって築かれたとされるが、現遺構はあきらかに戦国末期のものである。本稿はこの遺構から最終改修者[註①]を推測し、さらに遺構の持つ価値について考察を試みるものである。

二、遺構の概要

藤ケ瀬城は、横田の町を見おろす標高433mの高鍔山に築かれており、北方のみが尾根続きで西と東に谷が入り、南は斐伊川に落ち込む地形となっている。斐伊川は城の南西で下横田川と合流し、城の西麓へ流れを変えており、天然の堀として使用されていた。したがって北方の尾根続きに対して、いかに防備をほどこしたら良いかということが最大の問題であった。築城者はこの対策として主郭櫓台[註②]より東西に延びる尾根を利用し、土塁のラインを先端まで落す形で防御線を造り出した。主郭櫓台北西角より始まる土塁は尾根北側に竪土塁[註③]としてF郭まで連続的に続いている。竪土塁はいずれも郭の成形時に、尾根を削り残す手法によって築かれている。D郭とE郭接点北側の北塁の切れは虎口[註④]であろう。主郭東の尾根は、地形が急峻であり、尾根が細いため郭としてはG郭しか築かれていないが、P郭を守るには欠くことができない重要な尾根であるため、かなり無理をして防御施設が築かれている。I部南西角より竪土塁が築かれており、K郭、L郭南へと続く。これはM郭が占領された時のための防御線か。P郭は当城最大の郭でありHと、Q郭と伴に追手口を構成している。居住地は吉重橋北側のO郭麓がその要害性などから三沢氏初期の居館と考えられ、さらにP郭、Q郭東麓へ移ったものと考えられる。

本号の時代

- 1504（永正元）
  - 将軍 足利氏
  - 三沢氏 高鍔山に築城（永正6）
  - 神聖ローマ帝国時代
  - マゼラン世界一周
- 16世紀 ドイツ農民戦争
  - オランダ独立
  - イギリス、アメリカに植民
  - 織田信長
  - 三沢氏、馬来氏安芸国へ（天正17）
- 1590（天正18）



藤が瀬城の遺構・年号㊥・文化活動回顧・俳句・短歌・川柳

三、最終改修者について

藤ケ瀬城の遺構の最大の特色は主郭から東西に延びる尾根を利用して外郭を構成し、これより外を城外とする防御思想である。これはかなり特殊なもので国内各地に数例認められる。そしてこれらに似ているのが倭城であると思われる。倭城とは文禄慶長の役の際、日本軍が当時の朝鮮国内に築いた城郭群のことである。[註5]それらは、対外侵略的性格ゆえに[註6]その構造（縄張り）に類型が生じた。すなわち、高地上にあって防御の基点となる主郭部と、主として岸側の山裾の船付や居住部を含んだ比較的広い外郭部とが、外郭線によって一つのセットになっていることである。[註7]これを念頭に藤ケ瀬城の遺構を検討すると、主郭櫓台を最前線に置く思想、尾根を利用した竪土によって守られる、P郭その他の生活空間の存在などから、藤ケ瀬城の防御思想は、まさに倭城のものと考えられる。また、文禄の役において倭城の普請を担当したのが、主に後方を担当した毛利輝元らであった。以上のことから、藤ケ瀬城の最終改修者は、少なくとも文禄の役を経験した毛利方の人物と考えられる。[註8]

四、遺構の持つ価値

倭城の、主郭部に対する外郭線の置き方には二通りある。一つは外郭線が主郭部と独立しており、主郭部を囲む位置にあるもので、もう一つは外郭線が主郭部に結合し、一連の防御線を構成しているものである。[註9]前者は、愛媛県の松山城や、兵庫県の州本城など、各地に見ることができるが、後者はほとんど見られない。これは後者が純軍事的色彩が強いためであろう。藤ケ瀬城の遺構は、主郭の位置から後者と考えられる。したがって藤ケ瀬城の持つ価値はここにある。すなわち、藤ケ瀬城は倭城の持つ純軍事的思想によって国内に築かれた貴重な遺構であり、その価値は高く評価されて良い。

五、おわりに

本稿は遺構から考察を試みたものであり、文献によるものではない。したがって最終改修者の断定、倭城系純軍事的城郭を、文禄慶長期に横田庄へ築く必要性について踏み込むことができなかった。今後専門家による総合調査が行なわれることを期待したい。

註① ここでは、総合的な最終改修を指し、極部的なものではない。

註② 主郭北東の土台は櫓台の北東角が崩れたものである。

註③ 等高線に対し垂直に築かれた土塁で、堀の場合竪堀と称する。

註④ 各郭への入口

註⑤ 佐賀県教育委員会　特別史跡名護屋城跡並びに陣跡3

註⑥ 外郭より外はすべて敵地であったため、生活空間や港などを、城壁で取り囲まなければならなかった。

註⑦ 倭城址研究会　倭城Ⅰ41ページ引用。

註⑧ 三沢氏は、天正17年に安芸へ移封されているため、三沢氏を最終改修者とするには、問題が多い。

註⑨ 註⑦と同じ。

（松江市・中世城郭研究家）

文化活動回顧

大岡昇平の文学

戦時中は紙の統制がきびしく本の配給も割当制だった。幸にして希望する本を手にすることが出来たのは、松江今井書店の宝田という町内の鳥上に縁のある婦人の方のお蔭だった。二冊しか入らない本を廻して貰ったこともあった。

敗戦直後は近くの小林薬店の先代が本が好きで、出版協会とつながりがあって書籍、雑誌をうまく取り寄せられた。やがて今日の大同書店のこれも先代が帰郷して店開きされたので、読書には恵まれた条件に置かれた。煙草を吸わないからその分だけは本を買うと決めて、戦時中から押し通した。乏しい財布の中から3人の弟妹を、やがて息子2人をいずれも東京に学ばせながらも続けて今日に至った。

世界・展望の創刊号が手元にある。文学界・群像も土曜会という読書中心の若い集りで購入し回覧した。

大岡昇平の1948昭和23年の文学界の「俘虜記」、ついで展望の「武蔵野夫人」「野火」も当時土曜会（奥出雲の前身横田文化は、この会でこの頃創刊された）でも話題となった。当時の記録をもとに回想すると。

「俘虜記」の中で敗走中の兵士（作者自身）が、銃撃の射程内に入って来た若い米兵を、「射つまい」と決意するくだりがある。これに対し私は情況にもよるが、明日のこともわからぬ身の上、撃ったであろうと言った。M君は自分もやがて死なねばならぬ状況の下で、敵という他人を殺すことへの嫌悪の情を、自分の意志として貫くことはわかると言った。文学青年だったので、すばやくこのように対応した。

「武蔵野夫人」は長い連載であったので、時々話題にのぼったが、さきのM君やC君は、社会的規制で我々は道徳的な顔をしているだけだ。人間の本心は同じだ。そういう家庭をとりまく情況にあれば俺だってそうなると言った。（作者が言いたかったのは、エゴの突走しる都会への批判であるということに気付かなかった）私は俘虜記にみる澄んだ眼と心との意志の強さに驚き、自分の意志は今まで周

年号㊥
古代から「平成」へ

同一年号の使用期間

改元は平安時代から、天皇の逝去・譲位の際の改元は翌年から（践祚翌年）とした。これを踰年改元という。

明治になって、皇室令・登極令によって改元は継承後直ちにとされ、大正・昭和はそれによった。今日では大平内閣の1979年（昭和54）6月、「皇位継承があった場合に限り（多少巾をもってと解釈）、元号を定める」となったが、現政府は昨年9月20日、当日決め翌日実施とした。明治から一世一元が原則となったが、例は古代にもあった。

奈良時代の孝謙（女）・称徳（孝謙重祚）の間の**淳仁**は、孝謙の時瑞祥で改元した天平宝字8年間の2～7年までの6年間在位した（途中で一元）。称徳の次で奈良時代最後の**光仁**（天智の孫）は、祥瑞とともに即位し宝亀と改元、11年間在位。その間道鏡を退けて和気清麻呂を復位した。祥瑞により12年元旦天応と改元。4月御子桓武に譲位。**桓武**は翌年延暦と即位改元。やがて京都に遷都（平安時代へ）。延暦25年桓武逝去即日御子**平城**践祚。大同と改元。在位3年で御弟**嵯峨**に譲位。一年後弘仁と即位改元。次の御弟**淳和**は譲位をうけ一年後天長と即位改元。次の仁明も即位一年後改元。在位中瑞祥により嘉祥と改元。

淳仁のように年号途中で在世し結果的に一元は、17世紀江戸時代初期の**明正**（女）で寛永6—20である。

一世で改元数の多いのは、後花園（在位36年で10）で、15世紀半ば戦国時代に入るころで世情不安な時である。堀川（19で9）は12世紀半ば後三年の役の頃、後醍醐（21で8）、以下一世7回（円融・二条・崇徳・四条・後士御門）、6回（後一条後冷泉・鳥羽・近衛）、5回（醍醐・村上・後深草）等である。いずれも世情を反影している。12世紀で36、13世紀で33、この時代の承久の変後は激しく、4年連続毎年改元、2年置いて3年続いて改元されている。しば

二月句会抄

風邪に臥し空間広く妻と住む　浅野としお
病む脚曲げつ伸ばしつ日向ぼこ　岡田蹊花
昭和史を購う店頭伸ぶ日脚　小川あきお
趣味講座終りて急ぐ永雨道　加納信子
山の端にのぞく凍夜の月の冴え　楠房子
死の退院むせぶ春雨非常口　高木白虹
吐く息も薄れ薄れて日脚伸ぶ　新出谷一華
寒卵一つおとして一人の夜　錦織富江
胃カメラの順待つ椅子の冷えつのる　峯石美代子
川柳の皮脱ぐほどのあたたかさ　渡部夕峰

囲から盛り上げられて出来たものだったことへの自戒を抱いていた。それがあとの小説をめぐる討論で私を気乗り薄すにした。

間もなく展望に「野火」が載った。敗走中の兵士（作者自身）は飢えて人肉食の誘惑にかられ、将校が絶命の時剣を抜いた。その時それを阻止する強い意志が働いて、獣とならずにすんだというのである。

これも話題にしたが、食ったものもかなりいたであろう。誰も帰還して言わない。うまいだろうか。よく生死の界で耐えたものだ。などの話に尽きていた。いまそれらを取り出して読んでみると、この「人間としての意志決定」は、天皇でも戦友でもなく、人類にとって普遍的な神と、自己の意志であったと書いてある。当時はまことに友人とともに浅い読みしかしていなかったと思ったのである。

さらにこう書いてある。私は彼らを阻止すべき何事もしていない。だから与えられた運命に抗議する権利はない。いま無意味な死に狩り出されてゆく自分の愚劣を笑わないためにも、そう考える必要があったのである。何がしか「自己の責任」を感じている言葉である。

大岡の死後、新聞・雑誌にその追悼の記が数多く載った。それらによって、やっと40年近い歳月を経て、大岡の真意を理解することができた。これは深浅の差はあれ、追悼する人々も同様であったようである。時代と文学も歴史をふりかえることで新らたな意義を見いだし得るのである。

戦後、だれも一億総懺悔だと戦争責任から逃げた。聖断を免罪符とした。何といってもあれだけの戦争は、統一された意志と責任の下でなければ遂行されない。「武蔵野夫人」の時代は欲望の自由が叫ばれはじめた時代である。大岡は小説に託して次のように指摘した。つまり意志的な生き方が否定され、欲望の自由へと進んでいる。「事故によらなければ悲劇は起こらない」という言葉は、自嘲であり、世相だけを言うのでもなく、次のことを言っていると思う。

宣戦布告によって、日本人は敵を殺害する決意をし、敗勢になると殺されることを覚悟した。この悲劇への意志＝戦争責任は

訂正　4頁　最後の行248.

雪の宿

簸の上短歌会

蕗の薹の芽吹くあたりを巡りゐるうちに朝からの怒り　常盤　はるまさ
うすらぐ
葬いの場に吾れいつしか年嵩となりて仕上げの膳を段取る　永井　弥生
信じゐし人への不信つのる宵干大根を小さく刻む　佐藤　喜代子
雪解くる滴の音は時刻むわが残生の鼓動と聞けり　岡田　時子
男の子ばかりもうけし娘は部屋に赤きリボンの人形飾る　松浦　愛子
四十路なる子に嫁のなき友の悩み聞きつつ言葉選びてをりぬ　野村　節子
数知れぬ人の出逢ひを拭き込めし手摺に宿は雪に暮れゆく　永井　弥生
リュウマチに苦しむ妻を扶けつつ死と言ふことを気にとめてゐつ
真実を告げてはならず汝の病やがて癒へると言ふがかなしく　常盤　はるまさ
　　安部　夕波

斐の上川柳二月抄

下積みが肩寄せ合って縄のれん　若槻　白馬
おせっかいかも知れないと口つぐむ　藤原　のぼる
連休は勝手にプラン立てており　藤原　ユキ子
病床に昭和史おわる謎をきく　高木　白虹
理屈ぬき母娘の絆に負けました　杠　京子
へそくりがつもれば揺れる女心　真綿　よし子
凍え手をかざす可愛い紅葉の手　横山　まこと
寒行を見ている人が震えてる　田中　有樹絵
見た事のある顔むこうもそんな顔　藤原　千代子
雪の日に友がニュースを持ってくる　石原　冬明
除雪機も手持ち無沙汰で大あくび　松浦　公木
褒めことば素直に受ける事にする　松浦　亜以
落ちもせずほどほどがいいとボヤく柿　佐木　千世
悪許し恩赦善には知らぬ顔　松田　牛歩
借金はいやだと言いつゝローンにする　松浦　久美子
雪なくて手持ち無沙汰の寒の入り　安部　春恵
歌出さずひそとしている新年会　安部　正子
棚ぼたで拾った椅子にがたがつき　渡部　好之
そんな筈ないとうそぶくリクルート　田中　芳春

らくして2年そして3年連続している。14世紀25（別に北朝18）15世紀14で後花園が10、16世紀14、17世紀13、18世紀12、19世紀13となっている。

期間の短いのは、749年の天平感宝（瑞祥）と天平勝宝（即位）で2カ月余り、同じく13世紀の暦仁（天変）と延応（天変・地震）の間。一年未満のものが他に11。1年強も多い。連続4年と3年は、即位改元をはさんだ天変・地震・飢饉・地妖で、兵乱、疱瘡流行によるものである。短いものは、12世紀源兵争乱中に8回、13世紀鎌倉初期の10回。14世紀南北朝期4回、幕末期2回と、政情不安が世情不安をかもし出したことを示している。

期間の長いのは、昭和の63年ついで明治の44年、天平729〜748の20年、平安時代の延暦24、弘仁14、承和14、延喜22、下って中世の15世紀の応永34、文明17、16世紀の永正17、天文23、天正19、近世に入って慶長19、寛永20、元禄16、享保20、文化14、文政12、天保14、現代の大正14である。

紀年法

年号は記年法の一種であるが、一世一元でも使用期間の短い時は、時代の識別が困難である。

紀元年数による紀年法では、歴史事件や事象の前後や、世界史との判断にとって容易であるので。研究者は年号より紀元年数を用いるのが普通である。今日以降国際社会に互して行くためには、政治、経済もいよいよ紀年法へとなって行く。外国の国際紀年法としては、キリスト誕生に由来する、いわゆる西暦が一般的である。中国や朝鮮半島でもすでに廃されている。メートル法の万国共通の問題もある。

元号はその時代を印象づけるともいわれるが、主として突出した時代のようである。その数は極めて少ない。

大化（改新）、**保元・平治**（源兵合戦）、**文永・弘安**（元寇）、**応仁**（の乱）、**文禄・慶長**（朝鮮出兵）、**寛永**（江戸幕府初期）、**元禄**（四十七士）、**文化・文政**（町民文化）、**明治**。

だれもとらない。こうした戦争が偶発的だったというのだったら、個人の悲劇は事故でしかない。二十世紀は事故の世紀であったことになる。武蔵野夫人道子の死を述べたところは、こうした意味を含んでいる。深い意志を問題にしている。退廃への時代を意志の挫折ととらえ、戦争責任を考えないのを、深い意志の挫折ととらえ、それが二十世紀だと結ぶのである。この小説の意味がようやくわかった。今日は意志が全く陥没している。意志のない行動が国内の上流も毒している。

また大岡が芸術院会員推薦を辞退したのは「元捕虜の身だから」が理由であったが、さる人はそうではないと「俘虜記」を読みなおし、一行の文の中に真の理由を認め書いたところ、大岡はよく見たとすぐに電話して来たという。私はその一行を求めて幾度となく読みかえした。それは、「なぜ死者は死に赴いたか云々」のところであろうと思うに至った。先に述べたところと通ずる精神である。

（特に伊藤正孝、伊藤駿両氏の文に負うところが多い）（蓬）

会員頒布一部百五十円／六九九—一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0—601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

美しい日本語を生かして

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 168 号
（4 月 号）
1989. 4. 1
（M122・T78・S64）
奥出雲編集集団©

奥出雲が生んだ日本の詩人

安部宙之介

—「ある自伝」より ①

「少年の心」（市川俊彦作、本誌159号）で、この人の師・安部宙之介のことにふれた。その後経歴を求め、馬馳の江角英夫さんから詩集などを借用、国立国会図書館の協力を得て、この連載を数回することができるようになった。本人の「ある自伝」の中から、この地方の様子や生活を描写したものをそのまゝ掲載しながら、その詩情や交友に及んでみることとする。——1983年（昭和58）

故人・日本詩人クラブ会長——

生家

私は出雲国の山村に生まれた…仁多と称した郡であり、私が生まれたのはその三処の郷である…風土記では三処、現在は三所である。その三所は上三所、下三所、三所と分かれている。私の生家はその三所の中央部にあった。私の家は分家で本家の家号を隠居というのが裏手の山陰にあった。私の家は分家して三代目であったが、本家は古い家で、その墓地には江戸時代の墓石が塁々としていた。本家の東に長者屋敷と称する畑があった。その長者の隠居のあと目を継いだ家だというのだった。

私の家は三所で二番目の地所持ちだった。数軒の小作人があり、集会などに出かけても子供の私など上席へ坐らされた。そんなことで妙な自尊心ができてしまった。

長男、長女、私、弟、妹、末弟の六人兄弟で、今日生きているのは私と妹と末弟である。

末弟が長男の養子となり家督を相続していたが、彼も東京で家庭を持ち、子供を教育し将来帰郷することに困難を感じた。本家の二番目の息子に家屋敷財産を与えて先祖代々の墓をみてもらい、私や末弟の家族の死後の世話をお願いする、という条件つきであった。

私の家の前は道路であった。大声でわめくこと、放歌すること、はしゃぐことなど家の品格を落すものとして厳禁されていた。自分達が音痴であり、歌が歌えないのは、幼時のこうしたしつけのせいではなかろうか、と長兄と語ったことがあるが、大声で歌を歌う楽しみなど現在でも考えられない。幼児のしつけは

本号の時代

1904（明治37）　安部宙之介生る
御前会議対露交渉打切り開戦決定
韓国政府　日露両国に対し中立宣言
清朝は局外中立宣言　小泉八雲没
与謝野晶子「君死に給うこと勿れ」を『明星』に発表
1905　ロシヤ第1次革命始まる　孫文ら東京で中国革命同盟会組織
夏目漱石「吾輩は猫である」発表
上田敏訳　詩集『海潮音』出版
1906　南満州鉄道株式会社設立
夏目漱石「坊ちゃん」発表

奥出雲で生れた人・歴史の眼・年号（下）・詩・川柳・俳句・短歌

歴史の眼

神話はとかく物語の限界を越えて歴史と誤まられる
神話を神道信仰は背骨としている

物語である神話の、おもな主人公やものは、すべてが神社の信仰の対象である、祭神や神体となっている。神社は個人の信仰の場であるが、かっては神話が歴史とされ、国家的信仰の場とされてきた。そしてとかく人々の考えの自由をせばめ、時には拘束（しばり）し、場合によっては行動を束縛した。物語として読み語るのは個人の自由であるが、わが国の神話は他国と違って、宗教の背骨となっている。神話は組みたてられた時代の事情から、信仰的物語としてできたことが明らかである。神道思想はそして神社信仰はこれを基盤に築かれたのである。

今、神話の中の人物やものを具象化（ものにつくる）し、それを公共の手によって公共の場に設置することは、宗教を援助し支援することにつながる。芸術的な像や絵画は、それによって美を味い、また自由な創造精神を育てるが、神話にもとづくものは、信仰と重って、個人や団体に対して、畏敬や崇拝の念を押しつけることになる。日本人ほど雑多な宗教が個人の中でも雑居している国はないといわれる。これがかってはあやまちのもととなった。宗教は個人の問題として慎重に処せねばならない。

「横田町議会だより」その他で、中山の一角に、剣・スサノオ・イナタヒメに関する各種の具像物が、町の象徴（シンボル）として、公共の手によって公共の場に出現するようである。ねらいは観光というが（人よせの営利事業）、極めて慎重を要するし避けるべきである。博覧会の如く一時的ならまだしも、永久施設・シンボルである。神社周辺に場所を選ぶべきである。

←

恐ろしいものである。

私の村は三成村といって（今日では仁多町）県庁の所在地松江市までは十里ある。仁多郡というと仁多猿がいる山村と見られ、仁多猿々々と町の人々から馬鹿にされた時代があった。火の谷と称する山地を越え下って行かねばならなかった。

私が生まれたのは明治三十七年三月三日である。私より上級生で中等学校へ入学した者は中学生二人、商業学校生一人、師範生二人だけである。私の兄は農林学校を希望していたが、母が腸チフスにかかり一家は門を閉じて謹慎するという事件にぶつかり希望を捨てて、独学を決心した。私も約一学期間自学自習で暮した。兄は講義録を取って勉強していたが、私はこの兄から自然主義を教えられ、蘆花の「自然と人生」や「黒い目と茶色の目」を教えられた。「みみずのたわごと」を、たまたま松江市へ行った父に頼んだが有田書店の主人が御子さんが読むには程度が高すぎるといったようで入手しないで帰って来たので私の失望は大きかった。兄の独学は認められ、郡役所に勤めるようになり、郡長の推薦により隣村の分校に勤務したが、そこで無資格者の悲しみを味わったのだろう。そこで尋常小学校正教員免許状を取得した。検定合格者には外地勤務がよいと、自ら進んで朝鮮慶尚南道へ渡って、そして終戦迄奉職したが戦後引揚げ、自宅で病没した。兄の事を思い出すとき、明治の終わり頃、無資格者でも実力あると認められると勤務できた点を面白いと思う。明治四十一年学制改革で、今迄の尋常小学四年、高等小学四年が、尋常小学六年、高等小学三年に改められた。一つの激動期であったともいえよう。

幼年時代

私の幼年時代はランプであった。明るい電灯がついたのは大正時代になってからである。水力発電所が隣村にできたのだった。

ぼくの小さい手は
火屋（ほや）のなかへ幾らでもはいる
ぼくなら汚れた火屋を
すぐ綺麗に掃除する
　ことができる
だが、姉はどうしても
　手伝わせない
姉は棒切に布を巻いて
　掃除する
姉の手ははいらないし
　指は届かない
火屋に映った青空や雲が
ぼくの哀しみや
　不満と一しょに
火屋の周囲をぐるぐる廻る
やがて姉は捩子（ねじ）を動かし
　芯を切る
煤煙や石油で汚れた指先で
錆びた鉄がちょきんと鳴る
ぼくも早く大きくなって
あのランプの芯を
　切ってみたい
きちんと砲塁のような
　形に切って
夜を明るく照らしてやりたい

ランプ掃除は姉の受持だった。私もやってみたかった。「幼年の歌」と題した私の詩である。掃除の仕上げは芯を巧く切るということであった。村に初めて電灯がついた時、ああこれで解放された、と感じたから、やはりランプ掃除は嫌な事だったようだ。それよりも文明開化の有難さを沁々感じたものだ。

農村では女子に教育するなど考えられない時代で、姉は補習科三年を卒業するとお嫁に行ってしまった。幼い日に遊び相手のない自分は姉が遊んでいるの

敗戦後、政教分離・人間宣言の先代天皇は、宮崎県巡幸の折、戦時中に建立された「八紘一宇」の塔にさえ、不快の情を示し訪問を避けたと、側近者の日記は伝えている。

「大嘗祭」が問題になるのは、これが物語である神話にもとづくもので、天皇が神と一体になる神道の宗教儀式であるからである。その儀式中の儀式である秘儀についての研究では、東アジアの北部の騎馬遊牧民族の首長（王位）継承の秘儀と同類のもので、これが大陸から渡来してわが国の神話の中にとり入れられたとされており、考古学的検討の上からも言えるという。今日しきりと茶の間におなじみの「シルクロード」もこれにかゝわっている。

町内外の心ある方々の心配が私に伝えられているので、適確な答えとはいえないであろうが、神話と歴史の問題はたびたび本紙に掲載して来た立場から、その上に立って以上は述べたもので、御検討いただきたい。世界各地で国の起源が比較的新らしい国ほど、神話は歴史とつなげられており、その最も濃いい国の一つがわが国と言われている。

敗戦後建てられた記念碑や像などは、日本の新生を象徴するものがすべてであることは、かみしめてみなければならない。

全国の極めて多い神社の祭神とその分布、そして歴史を調べているが、神社の半数が大陸進出の人々を祭った八幡宮である。鎌倉時代から江戸時代半ばにかけて、その地の武将や大名が、武運と領内鎮撫のために勧請したものが、ほとんどである。スサノオを祭る神社は山陰には少なく、近畿・瀬戸内海・北九州に濃密に分布している。検討の結果はいずれ発表したい。

を邪魔をして厄介者にされた記憶がある。姉は心やさしい女で身体も丈夫でなさそうだった。五十何歳で早く死んでしまった。

上の庭が庭園にあたるもの下の庭が農業用のもので、その境をなして、細長い四畳程の建物があった。機織小屋といっていたが、そこの機織機に母が坐っていたのは大抵冬の事だった。今度は誰の着物かと、出来上るのが楽しみだった。とんとんさつ、とんとんさつ、と音がする。目に見えて作られて行く物の、完成して行く喜びがあった。

機織小屋と並んで三畳程の葡萄棚があった。夏が来ると沢山の水色の房を下げた。それはやがて紫色に熟した。五月節句には幟が風にはためいた。熊谷と敦盛の武者画だった。白藤の長い藤棚、木槲は真夏の頃花盛りで幾百という蜂を集めた。秋になると金木犀が香気を立てた。

雪はかなり積った。多い年には一米位あったと思う。屋根の雪がずり落ちるので危険だからとて、晴れた日にも庭に出る事を禁じられた。そうした日によく鳥追いが行なわれた。雉が食べ物を求めて出歩いているのをわあっと大声で驚かす。雉はあわてて谷の一方へ逃げて行く。丘の上に立って雉の行方を見つめていた人が、その行方を皆にわかるように説明する。皆は、それっと雪道を駈足で急ぐ。谷の一方から他の方へと羽搏いて来た雉は、疲れた翼で雪上をよろめきながら、木陰などの雪の穴の中にたどりつき、首を雪の穴につっこんで美しい尻尾を外に現したままである。丘の上で説明する者は大抵私の祖父であった、わっしょいと掛声しながら十人程の人々が走って雉のあとを行く。そして、もっと右方へ、その上の方へ、と説明によってかくれた雉の方へ迫る。冬籠りで翼の弱くなった雉は簡単につかまってしまう。

兎追いも山一つ向うで行なわれたようだが、見る機会がなかった。小学校で兎追いをやったこともあるそうだが、私が入学してからは一度もなかった。

外部の他人と話をする機会に恵まれない自分であった。自分の意見を自由に発表することができなかった。言葉に対して自信が持てなかった。方言が邪魔をした。それは今日でも続いているようだ。

小学校二年の時のことは妙に記憶に残っている。修身の時間

少年の心

隣村

隣村の子供達は
道の端を一列になって歩く
隣村は外国の様なもので
何時攻撃されるかわからないから

ツグミ

雪の朝　友達がツグミを見たと言う
少年達はその子をとりまいて眼を輝やかす
皆明日はその畑へ行って見ようと思う
村に名所が出来た様に興奮して

（市川俊彦・詩集『出雲』から）

年号（下）

古代から「平成」へ

変った年号

民間とくに中世の戦国時代には、社寺関係では、弥勒・福徳などの、**私年号**が地域的に用いられている。また正史には見えなく、金石文・年代記などに記されたもの、6世紀にある、聴徳・白鳳・朱雀などの**逸年号**もある。

また**別な体系的な年号**がある。「海東諸国記」という歴史書があって、李氏朝鮮（1300年末建国）の碩学申叔舟（中国日本に使臣として往来もしている）が、成宗の命をうけて1471年に著したもの。「海東」とは朝鮮からみた日本列島、「諸国」とは日本国と琉球国を指す。

多くの地図もあり、天皇・国王の代序や、水田面積、里程その他がくわしく、外交の基本構想の軌範とするために作ったものである。出雲国に関する事柄もあって、貴重な資料となっている。

その中に、継体16年522に、善化という年号を建てたとあって、文武701の大宝まで、連続して32の年号が出現する（先の逸年号も入る）日本書記と比べると、大化はないが、白雉・朱鳥、そして大宝がある。これと同じ年号をしるす史書が、15・16世紀にわが国で出されている。

こうしたことから、この年号を用いたのは北九州を中心にして存在した、九州王朝であるとする説が生れて来る。そして大和王朝はその分流が東遷して独立したものとされ、別に出雲王朝もあったとされるのである。

だった。戦争の話が出て、皆は国のために命を捧げるか、と先生が問うと全員挙手したが、私一人はうつむいていた。次の時間に再び先生が同じ事をきいたが私一人挙手しなかった。死ぬ時は死ぬだろうが、そうした仮設に自らを立たせるという事が許されない気持だった。死は厳粛で怖ろしいものに思われた。

死という問題を考えさせられたかも知れないが、いつまでも

前号訂正　4頁4段終行　町人文化

記憶に残っている。

やがて高等科へ進んだが、一、二、三年の複式授業だった。三年になると先生が家庭事情で欠勤が多かった。二学期三学期は私も登校しないで自宅で勉強した。国、算、地、歴、理の数科目を復習して過ごした。

父と兄が相談して、私を師範学校へ入れてやるというのだった。養子などに行くよりも自立できるという点が嬉しかった。

いよいよ入学試験の日が来た。三月のある日だったと思う。その朝になって算術の問題が出来ないのにぶつかった。兄と二人で苦んでその問題を解いているうちに時間が立ってしまい、気付いた時は指定時刻を過ぎていた。驚いて自転車を飛ばして、小学校へ立寄ると学校長が、郡役所から電話があったので頼んでおいたから、早く行けと云ってくれたので、郡役所へ行くと郡視学が試験問題を私だけ別室にしてやらせてくれた。

そんなふうにして三十七名の合格者の中に私も加わった。仁多郡から三名合格した。

大正八年四月の事であった。……当時の師範学校は全寮制で、すべてが軍隊式であった。六つの寮に一年入学生は振りあてられ、最初の一年間は四年生の寝床を上げたり、部屋の掃除や、新聞をとりに行ったり、お茶を汲んで来たりせねばならない。……一ケ年立った三月に近づいて舎監長がかわった。……その新らしい改革案の不合理を訴える文書を学校へ提出、決意を示すために一同が寮を脱出し帰郷することにした。血判状をつくり盟約をかたくちぎった。

（「ある自伝」は、『文学無限』第49号　1979年から転載）

三月句会抄

老二人咳からませて春隣　浅野　としお
舗装路まで春泥の道もてあます　岡田　蹊花
紙雛を病児に折りて春を待つ　小川　あきお
春一番空缶転がる夜の舗道　加納　信子
気遣いの心いただく春の風邪　門脇　花子
早春や御霊は武蔵に永久眠り　楠　房子
料峭の中州を芯に鳶の輪　高木　白虹
みどり児へ語りつ選ぶおひな様　新出谷　一華
春ぼけて袋の中のもの探す　錦織　富江
春一番斐伊の川面を翔のぼる　渡部　夕峰
立寄りし本屋に若き春の顔　峰石　美代子

斐の上川柳三月抄

ことわって後味悪い日がつづく　藤原　千代子
今年はと思った新年裏目に出　若槻　愛散人
風雪に耐えて老松春を待つ　安部　春恵
雨の中昭和静かに去って行き　松浦　木公
七ころび八起きで孫は日日育ち　佐木　千世
澱みない話チラリと時計見る　松浦　亜以
豆を撒き心の底の鬼も追う　藤原　のぼる
明日の日見えぬから飲む酒うまし　松田　牛歩
老いた友同じ話しのくり返し　安部　正子
やぶ医者が長者になった処方箋　渡辺　好之
微笑んで見たがやっぱりあるしこり　松浦　久寿子
平成の文字が昭和を遠ざける　田中　有樹絵
死の退院夜雨がむせぶ非常口　高木　白虹
ねんざした足に老化を教えられ　杠　京子
春なのに時々寒波がふりみだす　真綿　よし子
取られるを覚悟の今日は申告日　横山　まこと
その母が一番小さい丈くらべ　石原　冬明
小競り合いしている平成の旅鴉す　若槻　白馬
借りのある店の通りは歩を早め　田中　芳春

早春賦

簸の上短歌会

薬屋は置ぐすりの箱をひきとりて春浅き夕べを帰りゆきけり　永井　弥生

華やぐものの乏しき夫と吾が部屋に明かるき薔薇の造花を飾る　野村　節子

裏山に木を伐るひとが楔打つ音返りくる蒼き穹より　佐藤　喜代子

あさごとに蘭の鉢植を日向縁に運ぶ日課をたのしみとして　岡田　時子

しのびよる殉りと言へば厨に立ち妻をみとりてひと日はおもし　常盤　はるまさ

うらら陽に舞ふ春の雪福寿草の黄にとどくまでにはかなくなりぬ　永井　弥生

春陽浴ぶる万年青の赤きつぶらみに雪花の舞ふたわむる如く　岡田　時子

けたたましきベルすこしづつ音量の違ふことなどこころにとめて　常盤　はるまさ

房総の海は果てなし潮騒のひねもすきこゆ灯台の丘　安部　夕波

会員頒布一部百五十円／六九九－一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江01601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

美しい日本語を生かして

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 169 号
（5 月 号）
1989 5. 6
（M 122・T 78・S64）
奥出雲編集集団©

字めぐり⑦

尼子経久の母　馬木氏の里

――能義郡宇波（現広瀬町内）（上）

中世の尼子時代に名のあらわれる宇波の馬木氏（尼子文書による。真木は誤り）については、その全体像を明らかにしていないが、それは今後にまつとしてそのあらましをのべる。その祖も由来も不明であるが恐らく宇波の通称「土居城」を中心とする開拓者が成長して、小さいながら領主として土着していたものと考えている。

軍記物語にみえる馬木氏

陰徳大平記――山口県周防国吉川家の老臣香川正矩とその子景継（1735享保20・78才亡）の手に成った、足利11代将軍義稙（1490より）より、関西を中心とした大内・毛利・尼子の諸氏の盛衰を述べ、1566年（永禄9）尼子義久が元就に降るところで終る毛利方の軍記物語本。

雲陽軍実記　疑問点もあるが、元尼子の家臣河本大八が、1486年（文明18）の尼子経久富田城再入城から、1578年（天正6）の勝久上月城自害までの出雲を中心とした尼子・大内・毛利の合戦物語本。

右の二書の中から馬木氏に関する要点を書き出してみる。両書とも長い短いはあるが、ほぼ同じ内容で、前者は馬木と書くことが殆んどで、後者は真木としている。こゝではすべて馬木に統一した。

尼子氏が富田に来て、経久が出雲隠岐の守護となるまでには、100年の歳月を要した。さらに拡張を期し石見から周防の大内氏の勢力を完全に排除しようとした時、そこに立はだかったのが、安芸吉田に居城する毛利元就であった。この1540年（天文9）、経久（翌年84才で歿す）は出雲隠岐の守護として、この国や伯耆の国人衆（国人層ともいゝ、13世紀はじめの鎌倉初期に来住した在地領主をいう）を押さえて味方とし、富田衆（14世紀末の明徳の乱後に来住し土着した守護京極氏の一族や家臣や、遅れて来た尼子氏の家臣群）を加えて勢力を拡大していた時である。この戦の時から馬木氏（富田衆並であった）が、はじめて登場する。

当時尼子氏の所領とは、これら各地の国人衆や富田衆の領地の総和であった。

その大部分は領民と密着し領域支配力の強い国人衆の領地であった。それらを経て吸収する年貢米や、軍役などの種々な名目で徴収する銭米によって、尼子氏は台所をまかなっていた。

これまで馬木氏は宇波の小さい土地の地侍（土着の武士）であったが、尼子清定の妻の一（経久の母）を出したため（後で関連説明）、早くから富田衆（尼子の直臣層）並の取扱いをうけていたようである。

国人衆は領地を堅持して守護尼子氏に仕える被官人であった。

富田衆は馬木氏のように土着の小領主で尼子氏の直臣に加えられたものは小く、近江から来住して尼子氏の直臣となったものが多く、所領はなくて尼子氏丸抱えの者であった。

のち石見の支配が大内氏から尼子氏に移ると、富田衆はこの地で所領を宛行（あてが）われた。天文21年の記録をみると、富田衆は石見の他、さらに伯耆・備前・備中・美作で所領を宛行われている。馬木彦右衛門は石見で3,753石を加えていて、平均的な石高である。

それより前の天文12年に東比田に出城の道城を築いたというのは（比田村誌）、一つの成長の段階をしめすものであろう。

この天文9年の吉田合戦には富田衆の湯原弥次郎を大将とする3500騎の中に富田衆の岸・匹田ほかとともに馬木氏は参加していて湯原は討死した。その後尼子氏は利あらず、年があけるともに富田に引きあげた。1553年（天文22）3月には尼子方の先陣となって、美作・高田城の戦いに参加した。この時、馬木（隠岐守）宗右衛門は嫡男上野介他8人と家子郎党500余騎をつれて参加した。尼子経久の[illegible]男政久の外戚とある。恐ら[illegible]騎のうちに多数の石見[illegible]所領内の武士が加わって[illegible]思われる。のち間もなく[illegible]毛利氏の支配するところ[illegible]ってそこを失い、以後は小[illegible]地元の兵を率いて参加するたけとなったから、馬木氏にとってはこの時が最盛期であった。

6年後の1558年（永禄元）3月、出雲の国人衆は尼子氏の下に従って、備後の山内氏を比和城に攻め、5月には江川べりの温湯城の小笠原氏を攻めたが、いずれにも馬木宗右衛門は参加した。翌年有力な三沢氏をはじめ、三刀屋・馬来ほかの国人衆の多くは語らって、毛利方に味方した。そこで所領基盤の弱い富田衆にのみ頼る尼子氏の戦力は急に弱体化へ向った。

永禄6年、毛利氏は出雲の国人衆の殆んどを含む大兵を動員湖北の尼子方の白鹿城を攻めた。この時こゝを守った尼子方は富田衆で、馬木宗（惣）右衛門・彦右衛門もこの中にあったが、

本号の時代

	1392	高麗滅び朝鮮李氏王朝建国
15世紀	1429	ジャンヌ・ダルク彗星の如く現われオルレアンの囲みをとき救国の天使といわれる（仏）
	38	南米インカ帝国拡大へ
	48	グーテンベルク活版印刷を発明（独）
	53	英仏百年戦争終る
	98	ダ・ヴィンチの「最後の晩餐」
	1515	マゼラン世界一周へ出発
	57	倭冠頭目汪直　明へ降伏2年のち斬首

彦右衛門は討死した。程なく近くの毛利方に服した伊藤城攻めには馬木宗右衛門・仝七郎左衛門が参加した。

翌7年、尼子氏は毛利方に従った杉原氏を弓浜に攻めたが、この時も富田衆のみが参加して、馬木宗右衛門と仝与市もいたが、宗右衛門は深手を負った。

翌年春、毛利の大軍は尼子の本城富田の総攻撃に移った。出雲の国人衆は殆んど毛利方で、城中の兵は一門一族と富田衆であった。城中菅谷方面には馬木宗右衛門が陣どった。

国人衆から見放され、戦いも利なく、経久が出雲隠岐の守護職を得てから40余年で尼子は毛利の軍門に降った。永禄9年開城し、義久兄弟は芸州へと降った。普代の臣（一門一族・富田衆）のうち69人が大社まで従った。この中に馬木宗（惣）右衛門・仝与一（甚九郎）がいた。こゝからは義久に14人（馬木彦右衛門も）、倫久に4人、秀久に3人とほかに6人の同行が許されるのみであった。

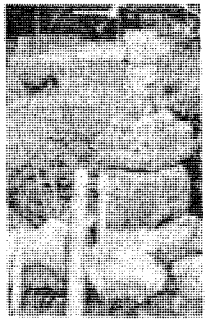
出雲は毛利氏の支配するところとなった。2年後1568永禄11年再起を期した、尼子勝久は京都から出雲へ下った。これに応じた旧臣の中に馬木宗右衛門と仝与一もいた。そして京都へ上り、山中鹿介・立原源太兵衛と合流した。この時の武士は残った一門一族と富田衆の一部であった。のち宗右衛門は使命を帯びて九州へ船で向い途中遭難し殁した。

一門一族・富田衆を集めて再起を期した尼子勝久は山中鹿介を中心として出雲に入った。ここに毛利方は、安芸・備後・石見ならびに出雲の国人衆を合わせた大軍をもって、富田を南奥出雲から攻めた。布部山に陣を構えた尼子方の水谷口に、宇波の馬木与三左（右）衛門と与市が50騎で陣どり、山佐の吉田人郎左衛門兄弟が300騎をつれて合流した。この戦で馬木与市は奮戦したが、毛利方の江田七郎右衛門と浅原助六の手によって首をとられた。戦は負けとなり尼子方は敗走し、松江の末次城へと向ったので馬木氏もこゝへ合流した。

その後牛尾氏の三笠城（大原郡）ついで、熊野城・高佐城・高瀬城・平田城・手崎城と、尼子方富田衆で強く毛利氏に抵抗した者の居城は、それぞれ毛利方によって撃破されていった。

馬木氏のことはこれ以後の記録には全く影をみせない。尼子義久に従った馬木彦右衛門のことは、毛利氏の下で佐々木と改姓して存続した尼子一門の数多い記録にも、毛利氏の諸記録の中にも見ることはない。いま、宇波のかっての土居城の南の谷の向いにある、馬木与市と馬木宗右衛門を弔らうために建てたものと言い伝えている、二基の宝篋印塔は、馬木氏の滅亡を物語るものであろうか。生きていたものがあったとしても、ほどなくかっての栄光をたたえるものもなく、ひっそりと住み絶えたであろうか。あるいは住み難くて他国へ漂泊の旅に出たであろうか。

宇波の東・日向山の向うの麓の下十年畑には、伯耆出身で尼子氏に仕えていた卜蔵氏（楠正季と名和長年の末孫という）が、富田城陥落後かくれ住んで生きぬいた。のち横田町竹崎の一族卜蔵氏の後を継ぎ、地主としてたたら製鉄にも従い、のち松江藩近世企業たたらの五大鉄師の一人に成長した。その末胤は現存する。



右　伝馬木与一の宝篋印塔
上　土居城
後は高い山に連なり母宗峠をへて富田へ

誇大視された尼子氏の成長（別表）

今まで尼子氏については、関係古文書研究が遅れていて軍記物語中心で語られていた。先学に導かれて少しまとめたのを、『奥出雲』131～135号の「尼子家臣団の分析」（近刊『山陰史談』に掲載）にのせているので、詳細はそれにゆずる。要点は、近江の守護京極氏が再び出雲隠岐の守護を兼ねて130余年間在職するのは1392年からである。当時出雲国内の各地には**国人衆**（国人層—出雲州衆ともいう）が所領をもち城を構え割拠していた。当地の国人衆とは、鎌倉初期に守護職が創設されて、近江の宇多源氏の一門佐々木氏が守護として降って、一族や家臣とともに当国の平野部の各地に土着し続いた在地領主と、その後の承久の乱の功賞で、新補地頭としてその残余の地に来住し土着し（主に関東武士）続いた在地領主たちで、来住以来100～150年間、土地開拓や住民の撫育に務めて生きてきた武士で、殆んどが尼子時代はもとよりその滅亡後も所領を維持し幡踞した実力者達である。当国内の8割はこれらの所領で、古志・松田・三刀屋・牛尾・三沢氏など20余氏で、馬来氏はやゝ遅れてこの中に加わった。

富田衆とのち呼ばれたのは、1392年の補任以降来住した守護京極氏の一族やその家臣、その一門で30余年遅れて来住した尼子氏の若干の家臣である。これらの所領は国内の闕所が宛行われたから狭く、それも少数の者のみであり、国内の2割に過ぎなかった。そこで守護が国人衆から徴集する年貢米或いは各種各自の上納米や上納銀銭の分与に預って、それぞれの分限を維持していたのである。

守護京極氏は補任当時からも1428年一門で家臣である尼子氏を当国に来住させてからも、国内

の支配に関しての諸問題の重要なものについては、国人衆の佐々木系の古志・松田や新補地頭系の三沢氏などに、対象事項に応じて処理を命じていた。

のち三沢氏はさらに実力を加えたので、尼子氏がこれら国人衆なみの担当能力をやっと持つようになるのは、30余年を経た1456年ごろからである。

1470年（文明2）守護の死によって孫の孫童子が幼小で跡を継ぐことになったので、本国の近江では、尼子氏を守護権宛行者（代官）としたが、やはり国人衆諸氏の合力を頼まねばならない状況であった。

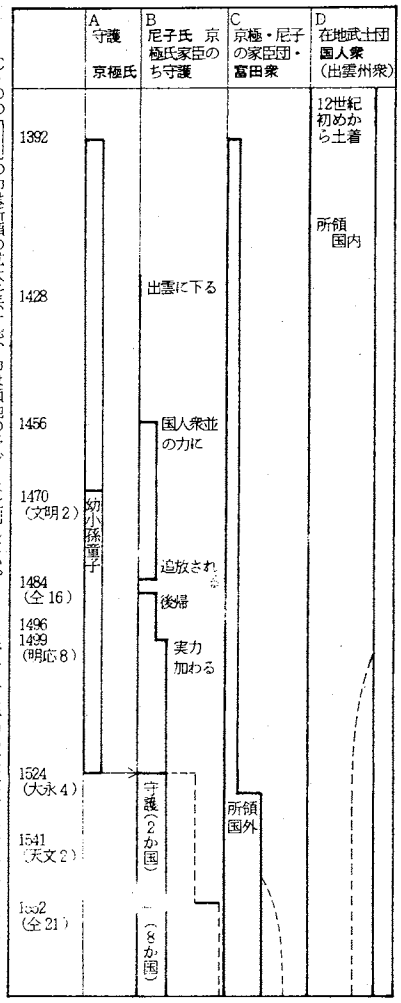
ところが勢力伸張をあせる尼子氏は京極氏の容るるところとならず、三沢氏を筆頭とする国人衆によって追放された。二年後に復帰がかなったが力の充実にはさらに10数年を要した。守護京極氏を背景に国人衆の懐柔につとめ、1499年ごろから支配力を増強しはじめた。1524年（大永4年）京極氏の死後、経久は出雲隠岐の守護職を得ると国人衆を結集し、出雲国以外への征圧に乗り出し、その地の国人衆を傘下に入れて支配範囲を拡大した。

1551年（天文10）経久の死後、晴久の膨張意欲は強く、その度に国外の各地を、所領の少ない富田衆に宛行ったので、名実ともに直臣層に成長し、それらがさらに晴久の戦意をかき立てた。合戦の度に大将となって国人衆を率いる富田衆が多くなっていくことは、克明に綴る二つの軍記が語ってくれる。

○尼子一族一門（20余人）、富田衆（20数人）―所領は国外
○国人衆（20余人）―所領は国内

だが国人衆は（馬来氏は馬木村等で6,630石、三沢氏は仁多郡西部等3,000石、それに横田庄―京都石清水八幡宮、御所・泉涌寺所領―数千石の代理支配権をもつ）、父祖以来の所領保持のため尼子氏に属していたから、有力層は常に大内・毛利・尼子氏の力と、各陣営内の情況を見ながら判断し、手を握りながらその向背去就をきめるのを常としていた。

1552年（天文21）晴久は中国地方のうちからさらに8か国の守護職を加えられた。しかし出雲州衆（出雲の国人衆）や他国の各地の国人衆に対しては油断がならず、尼子氏は緊張を続け常に東へ西へさらに南へと、その鎮圧に向わねばならなかった。やがて尼子一族間に亀裂を生じ弱点をあらわし始めると、一族間はもとより、諸国人衆をすぐれて統率する毛利氏へ国人衆は去った。所領基盤を他国にもった富田衆家臣団のみでは戦力は弱体で急速に支配力を失っていった。



C・Dの□の巾は所領の拡大を示すが、巾は領地の多少とは比例しない。……は、右へは勢力の拡大を、左へは縮少を示す。

横田町の旧馬木村の馬来氏と宇波の馬木氏とは別である

馬木村の馬来氏を馬木氏と誤まらせたのは、『出雲私史』である。これは松江藩学明教館の教授であった桃節山（好裕・1875明治8年44才没）の著作で1892に出版され、1914年（大正3）漢文が和訳されて一般に普及した。

その文中の注の、「其居仁多郡真木にあり」は誤まり。詳細は『山陰史談』12・13号や奥出雲104号にのせた考証にゆずる。馬来氏は14世紀半ばすぎ、出雲守護山名氏の一門として、摂津国の馬来郷から馬木村に移って来た地頭で、明徳の乱では山名方に属し防戦し、富田城下の吉田で討死した。

そののち三沢氏や南の隣接地の地頭山内氏との婚姻も重ね、国人衆の一人として成長した。尼子氏とは系図の上でもかゝわりなく、馬来氏は三沢氏と常に行動を共にし、一族の如き関係にあったことが諸記録から読みとれる。尼子氏が近江から富田に京極氏の一家臣として移って来たころ、馬来氏は出雲の最右翼国人衆三沢氏と結んで、阿井郷（旧阿井と馬木両村）3,000石の領主国人衆として地盤を確保していた。奥出雲の最南限に位置し東西北の三方は三沢氏に守られ、南は中国山脈の高地をもって、備北の雄山内氏と接し堅い契りの間にあったから、尼子氏の来住当時は、その実力には大きい開きがあった。

1566年（永禄の）富田城の落城後、最後まで尼子に従った富田衆の居城を次々と落した毛利氏の態度や、その後の馬来氏への次のような処遇を考えると、馬来氏は富田衆であった馬木氏と違って、国人衆としての取り扱いをうけている。これらのことは馬来氏を考える場合見捨てられない。

のち馬来氏は萩に移り毛利藩士となり、維新の吉田松陰の叔父玉木文之進や乃木希典との縁のつながりがあり、その末孫も数家が今日健在である。

毛利氏支配下の仁多郡

1589年（天正19）、毛利方であったほとんどの出雲国内の国人衆は、毛利検地にもとづく領内再編成によって、芸州へ集められ移っていった。出雲東部は富田城に入った毛利氏の一族吉川

氏の所領となり、出雲西部と奥出雲は毛利氏が直轄支配した。

『毛利氏八箇国御時代分限帳』（天正17（1587）～文禄ころの（1594）のという）によれば、仁多郡は次のようである。

○杉原将右衛門 1,409石余（旧横田町内）
○祖式源吉 589余（下横田　）
○宍戸元続 1,576余（横田町内か）
○冷泉民部 3,585余（仁多町内）
（亀瀧（嵩）城による）
右の配下50人 1,874余（仁多町内）
○長尾藤兵衛 195（　？　）
○直轄 474（　？　）
合計 9,803余石

で、馬木村3,000石を加えると、ほぼ仁多郡内の石高と一致する。

安芸国へ移る時に馬来氏は、幼少な元貞が叔父氏俊に伴われて下った。祖父乗綱父孝綱は老令や病弱のため家族とともに残った。この事実を認め所領保持も許した毛利輝元の文書が、再度元貞のもとに届いており、のち馬木村の所領を若干残して、長門国内へ所替えもされている。その後この地に残った一族は江戸時代の初期慶長末年までに相次いでこの地で歿した。（墓所があり後日談もあるが省略）

ところがこの3,000石のことがさきの分限帳にない。これについては後考にまつことにする。（なお、分限帳の中に、出雲国秋鹿郡200石馬木惣兵衛、長門国長門郡9石余馬木藤兵衛があるが、これと宇波の馬木氏との関連も後考にゆずる）

島根県史（旧）・仁多郡誌

県史の中の馬来氏に関する部分は「萩藩閥閲録」からの転載であるが、他の馬木氏（馬来氏と同じと誤まっている）に関するものは全く関係のないものである（山陰史談に詳述）。仁多郡誌の馬木氏（馬来氏と同じと誤まる）は殆んど創作されたものである（山陰史談に詳述）

（高橋一郎）

予告　6月の例会から「古文書を読む集い」に、掛軸の漢詩の読み方を加えていますが、開催150回を記念し、「日本書紀」の輪読も行います。

春愁抄

簸の上短歌会

亡母のあとをうけつぎ巡る出雲札に十年を経たり頭陀袋繕ふ　永井弥生

嫁ぎ来し杏かなる日よ曇りきて古びし鏡面愛しみて拭く　野村節子

夢のなかにて畑打ちてゐし妻なるに起こしくれよと起きぬけに言ふ　常盤はるまさ

本日は洗車しますとトラックに落書のあり春の日穏し　佐藤喜代子

竹の枝を搦めほぐしつつ三本の帚つくりぬ雨の日の午後　岡田時子

移転せし家跡に今日も佇める老婆の肩に雪しきり降る　佐藤喜代子

さくら咲く村眺めつつ若き日にこころ許せし人を恋ふるも　常盤はるまさ

一段づつ念じて登る蓮台寺苑（にわ）のこぶしは今日さかりなり　永井弥生

ひとり来し房総岬は夕暮れて春愁ふかくしばし佇む　安部夕波

斐の上川柳四月抄

後任が出来て今夜はよく眠れ　安部正子

日本中てんやわんやの消費税　松浦木公

消費税味気ない酒花見酒　渡辺好之

畑に出て春風頬に気持ちよく　安部春恵

バーゲンで目の色替えるオバタリアン　松浦久寿子

政界の雲行き何か暗すぎる　若槻愛散人

花言葉信じて女は蝶になる　松田牛歩

忘れるも大事なことです知恵の内　若槻白馬

春風が運んでくれる花便り　藤原千代子

居間時計主人（あるじ）が帰り歩きだす　高木白虹

それぞれの顔で咲すか六十路坂　真綿よし子

蜜蜂の浮気を許す花の精　藤原ユキ子

次の忌も無事を念ずる仏間の灯　杠京子

あれとならいいと親父も気をゆるめ　田中芳春

子の心判らぬ親の得手勝手　藤原のぼる

四月句会抄

孫と見る雪解の淵の水えくぼ　浅野としお

許し合う友と地酒で花に酌む　岡田蹊花

花吹雪休耕田の荒れしまま　小川あきお

木々の芽に光りて小さき雨雫　門脇花子

草萌ゆる一期一会を温めて　加納信子

踏まれても咲くタンポポの散歩道　楠房子

梅の香をちらす土踏む退院日　高木白虹

医師の手を離れ再び春耕す　新出谷一華

亡きし人の表礼かかり春の雨　錦織富江

一服の頭上掠めしつばくらめ　渡部夕峰

お願い　残念ながら印刷所での値上りのため五円増とさせて頂きますよろしく

会員頒布一部百五十五円／六九九－一八　島根県仁多郡横田町一〇六－ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（口座松江01601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第170号
（6月号）
1989　6.　3
（M122・T78・S64）
奥出雲編集集団©

藤が瀬城趾を県指定の遺跡へ

鳥取藩政と伯耆国鉄山業のかかわり

―日野町雨根・近藤家史料を中心として

影山　猛

この論文は昨1989年の7月下旬に横田で開催した第6回たたら勉強会（近世中心）に於いて発表されたものを、本人によってまとめて頂いたものである。（西暦紀元は編集者が挿入した）

前言

伯耆国日野川南部流域は、古くより鈩製鉄業が盛んであり、多くの鉄山師の活躍の場であった。鳥取藩も有力な財源として、次第に鉄山業に関与して来るが生産企業体の制限までは行なわなかった。このことは日野郡鉄山業者の自由競争をもたらし、景気動向と共に鉄山師達の盛衰がみられ、古くからの鉄山師の没落と共に鉄山に関する史料も消失して行った。その中で唯一根雨近藤家のみが、安永年間から大正期にかけてたたら製鉄を続け、また幾許かの史料を残すことが出来たが、この小論は流通過程の統制に重点を置いた鳥取藩の鉄山政策と、地元住民と鉄山師達のその対応を近藤家史料によって対比させてみたものである。

一、御手山制度（元禄7年10月～同11年8月）

日野郡鉄山経営は、民間業者を監督し、一定の運上金を上納させるため、元禄7年1694すべて御手山となり、鉄奉行、鉄山御目付などが置かれたが、元禄11年郡奉行等の進言により以前の如く民間経営となった。[1] 然し地元近藤家所蔵の史料によれば「殿様御郡中不残御手山ニ被為遊候へとも……当村之儀村中より子々係々ニ至る迄少しも申分無御座……。元禄14年花口村鉄山所買証文」などの記載があることは、御手山を望む向きも地元にはあったものと考えられる。

二、大坂鉄座の設置（安永9年1780 8月）

其の後寛延元年1748 12月、鉄山経営は在吟味役、郡奉行へ願出の以前、村々の承諾と、大庄屋等の奥書を必要とし、享保4年1719 3月に、鉄山・鉄穴・大炭・小炭役を5割増、[3] 宝歴4年1754、困窮村方救済のため鉄山林売買額の10分の1上納制、[3] さらに安永4年、小鉄（こがね）他領鉄山搬送が停止され、以来経営は盛んとなったが、大炭は不足した[4]といわれる。

安永9年、幕府による鉄座が大坂に設置され、鉄・鋤・銑は山元より大坂問屋へ出荷、右問屋より鉄座への売り渡しが命ぜられた。[5] 鉄座取立以来「鉄価下落、一駄漸銀70目～80目」[6]となり、郡中鉄山稼業が減少、村方も困窮したので、地払所154ケ所を代表して黒坂わりかね屋庄兵衛、印賀大宮村三郎兵衛が公儀勘定所へ出府、天明7年1787 10月、江戸より鉄座御差止の申し渡しがあった。[3] 其後鉄値段も引き立ち、一駄140目にもなったが、文化12年1815から27貫目入一駄95～98匁と下落した。[6] この時期は緒形長蔵、段塚五助等の活躍も目立ち、近藤家も安政9年、谷中山に鉄山をはじめて打ち込んだ。

三、海路為替廻漕仕法（寛政12年1800）

大口藤馬廻米奉仕により、日野郡産鉄の海路為替廻漕の方法が創案され、出来鉄は米子鉄問屋に集め、為替金を出荷主に交付、出鉄は鉄買船に売り渡すことになった。[8] 地元史料によると、これを「御廻船方御手掛鉄山」「御廻米御役所御手掛鉄山」と旨えているが、それによると藩は出来鉄の米子集荷と同時に鉄山林の買上、盪普請のための資金提供を郡内10ケ所にわたって行なっている（文化4年から文政3年1820の間）。在役人としては、緒形長蔵が江戸・大坂鉄運送取斗方（はからい）、段塚五助が鉄山締方として文化8年1811 7月に任命された。

四、大坂表御蔵屋舗御趣向御立願（文化12年3月）

願の主旨は、郡の鉄は殆ど大坂に出荷しているが鉄値段は20年来低迷し、特に10年以前より年々下落して来ている。両3年ほど全国鉄相場を調査してみたところ20年前の価格と大差はなかった。これは大坂問屋共が銀子不融通の理由で相場を下げている為である。近国に売り出しても大坂相場を引き合いにするので高く売れない。よって藩の大坂御蔵屋舗に出来鉄を集め、入札で売買させてほしい、として鉄山師17名の連名で願を出したものであるが、これは藩に取り上げられなかった。

五、鉄鋼銑江戸直廻仕法定（文化13年6月）

文化13年1813には丁大坂問屋共人気悪敷高利貸り不実之振舞」があるとして、郡中鉄山師の願いにより産鉄の江戸廻鉄仕法が定められ、山元締役に緒形長蔵・段塚五助が任命され、見改役・締役が鍛冶屋を巡行し、出来

本号の時代

1689	（元禄2）芭蕉の「奥の細道」成る
1702	（仝15）赤穂浪士吉良氏を討つ
16	享保の改革
28	ベーリング北太平洋探検
67	イギリスで産業革命
72	仝　のインド侵略
83	アメリカの独立
89	フランス革命
1814	スチーブンソン蒸気機関車発明（英）
40	アヘン戦争（中国で英）
53	ペリー浦賀へ来航（米）
58	日本米について各国と通商条約
61	アメリワの南北戦争

鳥取藩政と伯耆国鉄山業のかかわり　菅茶山と奥出雲　川柳・俳句・短歌・詩・民話

鉄束数を調べ、(住)の焼印をつけた差札を渡し、束数に応じて代価を内貸することとし、出来鉄は米子へ出荷、舟積にして兵庫の世話役高田屋嘉蔵へ出荷し、更に兵庫から江戸廻船問屋へ渡すことになった。[9] その取り極め内容は、年間小割鉄2万束、鋼7百束、銑は引き合いにより江戸へ出荷することとし、出鉄の残りは、北国・四国・九州以外は売ってはならないこと、代金は6ケ月目に支払うこと、山元鉄山で臨時入用金が必要なら内金を貸し与えること、難波船の入用は山元で負担することなどであった。当時の出荷鉄山師は8名内外であったが、そのうち近藤家が文化13年8月から12月までに5鉄山（呼子・平畑・大谷・金持・多喜山）で見改めを受けた産鉄量は3,946束、14年（年間）束、文政元年4,008束、文政2年4,986束であった。[10] 其後、史料[11]によれば、文政4年1821正月には「近来鉄値段去春以来不景気ニ而鉄山師一統難渋……已前之、通相対売被仰付可被為下候…」と郡内鉄山師12名の頭取役である近藤喜兵衛・近藤喜右衛門が鉄山締役に陳情し、また文政4年2月には「引続不景気に而……江戸値段出精不仕、代銀上納も延月に相成……諸色仕入高追々高値……江戸廻鉄取続難相成当惑至極仕……」との願いが根雨宿鉄山師5名より提出されたが、この制度も文政6年には産物方仕法廃止により取り止めとなった。なお近藤家の江戸廻鉄仕切惣高は文政5年中に10,137束、文政6年には5,948束であった。

六、大坂表御産物問屋御立願（文政9年10月）

文政9年には、「鉄山出来之鉄鈩是迄数年大坂問屋共江廻鉄、4年以前江戸表焼失より両3年値段宜敷、去歳以来値段下落……鉄問屋余り間銀余分取候ニ付鉄山師手前へ者追々不景気申立……此趣ニ而者大坂鉄問屋を肥し候而已ニ而……何卒大坂表御産物問屋御立被為遣……荷主共立合之上ニ而中買中江入札為致高値之方へ売渡し候得者鉄山師一同益筋ニ相成[19]……」とし、御産物鉄問屋は鉄山師持として支配人は地元より登らせる旨、根雨宿鉄山師6名、阿毘縁鉄山師3名其他2名計11名の鉄山師が在郡役人に陳情したが実現しなかった。

一方江戸廻鉄仕法時代の鉄売上金は鳥取藩に納入されたが、藩の財政難を救うためか、一部の納入代金は鉄山師達に還元されなかったため、この時期に度々郡内より藩へ支払方の催足がなされている。

なお近藤家の鉄鋼出荷は益々増加し、天保10年の『大坂出店諸勘定帳』[12]によると、他鉄山師の預かり鉄を含め9,000束余りを大坂に送り、同年『売懸帳』では岐阜、大垣、沼津など全国70ケ所へ鉄を売り捌き、嘉永4年の『大坂出店諸勘定控帳』では、年間販売量と越年を合わせて19,447束、同7年には23,298束もの鉄を大坂に登らせている。

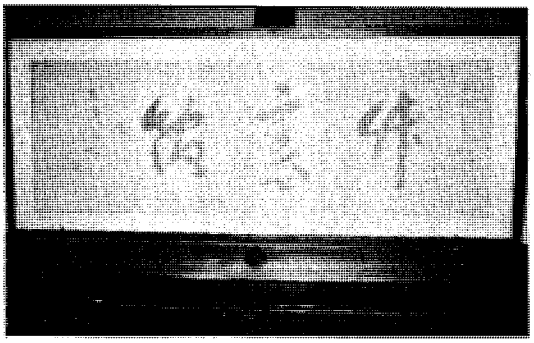
七、鉄穴砂流出問題

文政6年8月には「近来日野川下、別而鉄穴砂夥敷流出、川底高く相成、出水之砌御田地危急」となったので「鈩場所山林ニ応じ……（鉄穴流し）追々減少可申事」との制限がなされたが、安政6年以降鉄穴口制限のための基礎的調査[13]がなされ、その結果鉄穴口半減令も出されるに至った。郡内鉄山師達は、鉄穴口制限の見返りとして、郡内小鉄の他領販売を差し止めるか、

研究資料

菅茶山と奥出雲

福山市の北神辺で、江戸中・後期に私塾（廉塾）を開いた儒学者で詩人の菅茶山（かんさざん）1748～1827（文政10）は、山陽路を往復する儒学者・詩人で訪れないものがないほど詩文興隆の一中心をなした。頼春水・山陽の父子との親交が深く、山陽も一時廉塾の塾頭であった。詩材を生活に求め写実・実感を重んじたその詩風は、関西の詩風を一変したという。



写真は茶山が若い時、横田町加食の旧家石原（上栄）宅を訪れた時、主人のもとめに応じたものと伝える。（石原氏は明治中期松江へ移住。旧宅跡の裏には今も竹林がある。唐の詩人王維699～759の詩に五言絶句「竹里館」―竹藪の中の館（やかた）―がある。これに因んだものであろうか。

郡西部のさる名旧家に、茶山老人の「秋日渓流を汲み茶を喫する価千金なり」の意の七言絶句の書がある。若年と老年の違いがあるが、当地来訪は事実のように思われる。

雲州平田の報恩寺には、1786天明6年遊歴を縁に住職となった日謙道光がいた。1824年84才で歿したが、詩書ともにすぐれ、出雲の三詩僧と称せられた。もと大阪の生れで公卿の落胤とも伝えられる。若いころ京都で学び、茶山・頼杏坪（山陽の叔父で横田も訪ねている）と交遊があった。特に茶山の影響を強くうけている。茶山が晩年松江に住んでいた道光のために、松江の風景をも入れた詩を呈しているから、出雲を訪れたようであるが、その時代や来遊の道すじはまだ明らかにしていない。（蓬）

それが出来ぬなら他領から安価な大炭の搬入を藩の力で推進してほしい旨の次の願書を提出した。「会見郡日野川尻夥敷砂埋り、御田地より川底高く相成、危キ場所柄ニ付御捨置難被為遊旨ニテ……昨年より2来尾流し方半減被仰付……鈩稼茂半減ニ仕候。雲州者素より備中国松山領分、新見領分、備後国之儀者乍恐……生木沢山大炭下値ニ候得共……堅締合相立一切当郡江坂越為致不申、大炭価当御郡三歩一二而出来候由。当御郡鉄砂之儀者勝手次第坂越他国売仕候。……右3ケ国之儀者生木沢山取柄ニ御座候間、大炭当御郡江運送致し候得者右大炭相当丈鉄砂坂越御免被為下度、左候得者両全之交易と奉存候―奥日野郡鉄山師21名及庄屋14名より在役人宛（文久2年12月）[1862][91]」。これに対し、鉄穴持主、流し子、馬子達を代表して阿毘縁木下万作、黒坂緒形三郎右衛門が、鉄砂坂越差し止めに反対する旨の次の願書を、同年同月に提出した。「此度奥日野郡鈩師共連印を以鉄砂他国出し御差留之儀及願達候由、……眼目最寄之鈩師共他国出し小鉄差留、値段引下ケ押買致し度企、苦々敷次第ニ奉存候。……右他国出し之儀者100年200年之仕来りニハ無御座、往古より多里8ケ村、笠木8ケ村、大倉廻り久塚谷筋26ケ村、其外都而奥構之内凡70ケ村斗御百姓相続之根元と仕……。奥構者鉄穴多之場所ニ付、平年ハ如何程鉄山出精相稼候而茂小鉄余程吹余り候処、半減流しニ相成候ニ付而ハ、流し子共格別ニ出精相稼……是迄1,000駄取揚ゲ候鉄穴口ハ、1,300―1,400駄も取揚、殊更川鉄砂等夥敷取揚ケ候ニ付、小鉄取辻ハ不少事ニ御座候。鉄山所30ケ所茂有之趣ニ御座候共、右之内三歩一位ハ十分ニ相稼候得共、其余ハ兼而微力之稼人……年中代数ハ何程茂吹立不申、只今之小鉄取高ニ而茂決而吹足（たり）不申儀ハ無御座……実分ハ小鉄……下値ニ押買仕候所存ニ而、右等申立候儀者顕然と相分居申上候…。」

其後、日野川下流部の砂湛之浚渫は、日野郡内居住の各世帯より1人ずつ出歩して行なうことになったが、その負担に耐えかねて、慶応3年1867 6月出されたのが次の願書である。

「日野川尻連年砂支之候ニ付、右御郡中竈1軒より1人宛罷越相勤候処、奥村者不弁理之沢も御座候ニ付、右賃銀1人役3匁（銀）5分宛会見郡より雇出しニ相成候之処、右竈之内難渋人者之平等出銀難仕立、竈之内或者半数三歩一役と取決（きめ）致し、引足不申分鉄山所鉄穴口御運上銀ニ御割賦ニ相成候処……近年諸色高価ニ相成、右雇出し賃銀一々昨年7匁、一昨年ハ11匁、昨寅年20匁宛ニ相成……残銀不残取小鉄ニ御割賦被仰付、去暮分並洗小鉄100駄ニ付34匁8分余之懸り物と相成候。……鉄穴流し方相休候様相成候而者漸々鉄穴持者不及申上一同潰ニおよび候様罷成…右懸り物減少相成候様……偏ニ奉願上候。黒坂宗右衛内以下60名より中庄屋3名宛」。翌月には、この願書をうけて、「当年限人夫半減」願書が、奥口郡両大庄屋より鉄山方諸締役に出されている。

八、境鉄山融通会所設置（天保6年）

天保6年1835には、日野会見両郡の産鉄を境に集荷し、鉄商船に売り渡す方式[104]がとられたが、万延元年1880には仕法替えがあり、鉄為替はその時の値段で7割の金を貸し与え、6ケ月後返納することになり、蔵数料も一駄銀2歩の支払を必要とするようになった。文久年間には境への出鉄が減少し、船手が差し支えたので藩で調査したところ、郡の産鉄をひそかに安来へ送り出して船方に売り払っていることが判明したので、藩は「忍之者差出」と脅し、近藤家産鉄を除く他鉄山師の坂越（他領移出）を厳しく禁じた。但し積雪時の輸送経路は母里・安来経由境港送りが認められた。

其後明治元年1868 6月には、産物入札講制度もとられたが、間もなくして取り止めとなった。

史料

(1) 扣帳
(2) 鳥取藩史
(3) 在方御定
(4) 民政制度御法度
(5) 公儀御法度
(6) 近藤家史料『日野郡鉄山履歴（久連村六兵衛控写）

斐の上川柳五月抄

役引いて内助の功へも礼を言い　横山まこと
農に生き四季それぞれの旬（しゅん）に生き　真綿よし子
武者幟十二才の夢なびかせる　杠京子
痩せたねと云われて嬉し肥満体　藤原千代子
振られても返す釣瓶の竹もない　若槻白馬
減反はいいな田植が早くすむ　石原冬明
聞いてよし見ればなおよし音景色　田中有樹絵
飾りでは嫌だと後継気骨見せ　藤原のぼる
楽しみも中程でいい老いの道　若槻愛散人
年金が何に化けよと姑の知恵　松浦久寿子
巻込まれ悲劇さまざまリクルート　安部正子
楽しそな顔してつきあう呑めぬ酒　佐佐木千世
差し向い襖（ふすま）一重が邪魔になり　渡辺好之
五時すぎてそわそわし出した主婦の会　松浦亜以
札束の上で背のびをしてころび　松浦木公
金持ちの国竹やぶで金腐（くさ）る　松田牛歩
農政の貧しさ描（えが）く汽車の窓　高木白虹
爪をかむ女が妙に気にかかり　藤原ユキ子
サイレンが区切りをつける野良仕事　田中芳春

訂正　1頁年表　和冠・2頁1段35行与一(市)・2段15行吉田八郎・3頁年表Bの1470へ代官となる・復帰・5段12行(永禄9)

—文政7年4月』
(7)『黒坂郷土史料』
(8)米子御定
(9)近藤家所蔵文書
(10)文化13年9月『鐵御趣向諸控帳』備後屋喜兵衛
(11)文政4年正月『御趣向諸用控帳』備後屋喜兵衛
(12)大坂出店は天保7年設立
(13)安政6年秋より万延元年春『鉄穴口々円流壹村限小鉄取高取調帳』(郡内23万駄)
万延元年秋より文久元年春『同上』
文久元年秋より文久2年春『流方為相休候口々取調帳』
同年『鉄穴口々半減壹村限小鉄取高取調帳』
文久2年秋より文久3年春『流方為相休候口々取調帳』
元治元年5—6月『鉄穴口々取調帳』
(14)御国日記

(筆者　鳥取県日野郡江府町洲河崎)

横田の民話(6)

—鳥上④

尻尾の釣り

とんとんむかしがあったげな。

むかし、狐ん(の)ところへ猿がよばれて行きただ。そうしたら、土用鯖てえもの(というもの)を食べただ。こりゃ、その、おいしいものだけん、

「あ、狐さん。これはおまえ、どこから買わしたか(買いなさったか)」

「うん。買あだい何だいせんわ(買ったりなどしないよ)。こりゃ、その、池へ行きて、池の氷が張っちょらが(はっているだろう?)、あそこへ穴あいて(穴をあけて)、そいでしいぼ(尻尾)浸けちょくと(浸けておくと)、なんぼでも寄って来るからして、それを上げたら、土用鯖てえわね(と言うのだよ)」

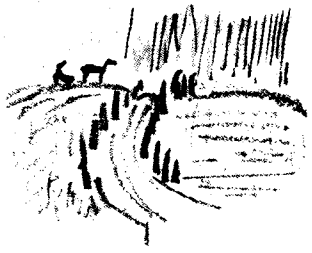
「ほんなら行って……」

そうから、ま、家へ帰って、その日のうちにすぐ行きて、しりぼ(尻尾)を浸けちょくと、びんびんしまって来るだ。だいぶんと、どじょ付いたろうと上げただもん(あげたけれども)、凍り付いて上がならいですが。から(それから)、ま、だいぶ付いたもんだと思って、いっしょうけんめい上げたら、しっぽが抜けてしまった。

で、その時にいっしょう力んだで、顔が真っ赤になったということですわ。

そいで、むかしこっぽりだ。

(語り手・永田甚一
聞き手・酒井董美
S45・7・21収録)



少年の心

神かくし

源さんが二日も家に帰らないので
神かくしに遭ったらしいと捜索隊が出る
人々は提灯を連ねて山へ入ってゆく
「帰せよ戻せよ　源さんヨーイ」

(市川俊彦・詩集「出雲」から)

五月句会抄

母の日や妻の好みの服とどく　浅野としお
通り雨牡丹に置きし露の彩　岡田蹊花
花冷えや孫と膝辺をもて遊ぶ　小川あきお
賛美歌の流れる窓辺に風かおる　門脇花子
薫風やこだわりほぐす湯に浸る　加納信子
わだかまり親友に残すや葱坊主　楠房子
母の顔覚えおはなし風薫る　高木白虹
泰然と武者人形は居間を占め　新出谷一華
うつる世に若葉の風のさりげなく　錦織富江
体調のくずれ気にして新茶くむ　峯石美代子
牡丹を心で愛でし庭に佇つ　渡部夕峰

月に匂ふ

簸の上短歌会

葬列とともに昭和も去りたりと昭和を生きたるわれの呟き　児玉敏郎
麻痺の手の爪切り終へばありがとう声弱々と嫗われ見る　松浦愛子
定まらぬ日和つづきて花冷えの夕べ重ね着に雨の音きく　岡田時子
寂光院尋ぬる人もまばらにて若葉映ゆる庭に滝の音をきく　景山悦子
蕗の薹を踏むかと思へど踏まず行く仔牛の後に吾れもつき行く　佐藤喜代子
リ疑獄をいま憎みゐるも総選挙となれば大物と見られゆくらむ　常盤はるまさ
互にも手足の痛みかこちつつ齢佗びしむ春の夕べに　野村節子
肉うすき母の肩より燃えつきし艾のすべるぬくき雨の日　永井弥生
旅終へて帰るわが家は暗くして庭の白ばら月に匂へり　安部夕波

会員頒布一部百五十五円／六九九—一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎(振替口座松江0—601)頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 171 号
（7 月 号）
1989　7.　1
（M 122・T 78・S64）
奥出雲編集集団©

藤が瀬城趾を県指定の遺跡へ

俳人 細木芒角星・奥出雲たたら製鉄⑬・俳句・川柳・短歌

句碑めぐり④
横田で生れた人⑪
俳人 細木芒角星

出会い

1958（昭和33）年の秋、長期研修で滞京中、町内稲田の出身で当時東京の国連社（広告代理業）の重役・藤原徳治さを、東京駅前右のビルの6階に訪ねた。良い機会だから仁多郡出身でそれぞれに活躍しておられる方を案内するから訪ねてはと、最初に仁多町佐白出身の藤原茂一さん（国会の議長が替る度に、その新らしい椅子を納めるという、銀座の富士屋家具店の社長）、ついで税理士開業間もなかった町内馬木出身の細木角造さを、店や事務所で紹介された。細木さと会った時は4人で食事をともにし、よもやま話に時のたつのも忘れた。

徳治さんには「奥出雲」をなくなられるまで購読頂いた。横田での青年時代から引続いて川柳を得意とされていたので、話は近作の披露となり、やがて細木さんの俳句の話となって、当時全国の数多い俳句誌の中でも指折りの「獺祭（だっさい）」の主宰者であることをくわしく知った。

3人ともども、故郷の小学校時代に教えを得た恩師の思い出に花を咲かせながら、盃をすすめられたので、その恩返えしを私が受けているような錯覚を起し、恐縮の至りであった。

この時の細木さんの話は、それから12年後に頂いた初の句集「此土」のあとがきに載っているものだった。それには

「俳句をはじめていつの間にか五十六年の歳月がたった。この小さい詩にこれほどの魅力があるものかと、自分ながら不思議なくらいである。

とにかく小学校のとき青木実坊先生から俳句の講義をきいたのがきっかけであった。

荒海や佐渡に横たう天の川　芭蕉

たうたうと滝の落こむ茂かな　士朗

春の海ひねもすのたりのたりかな　蕪村

139号）。

この席では、幼少年期の教育の大切なことに頻りと話が及び今でも育った故郷の方には、足を向けてねられない。形は別として恩を返えしたい気持ちは山ほどあると、ともども語られた。暖かいこの雰囲気に私は秘かに涙するとともに、わが身を振りかえって恥じたるものがあった。

まだ外にもあったが、教科書の中の一項であった。これらの句についてわずか一時間の講義をきいたことから端を発して、私の俳句はついに一生のものとなったのである。」

青木実坊とは青木実三郎先生のことで、教員生活のほとんどを郷里馬木村で過し、大正自由主義教育の潮流の中で、児童画開拓の先達としてあまりにも著名な方である（本誌17号）。教科書のこの項は、私も小学校時代に少なからぬ影響をうけたことは誌したことがある（本誌

俳句人生

芒角星は俳号で実名は角造。1897（明治30）年細木家の二男に生れ、馬木小学校高等科を卒えると村役場に勤め、実坊の指導をうけ地方紙の「松陽俳壇」「山陰新報俳壇」さらに「湖」「曲玉」等へ投句、やがて中央句誌「石楠」から「懸葵」へと投句して、終生の師吉田冬葉の存在を知った。この間兵役を勤め除隊後間もなく志を立て、1921（大正10）年上京し、法政大学に入学した。句作歴9年の青年はこゝで直接吉田冬葉の門下に入って指導をうけ、何となくはじめて何となくやっていた句作に別れを告げて、生涯を捧げる道に進むことになった。

「冬葉俳句は非常に純粋で何か他人を感動させる素質を多分にもっていたので、青年期の私の心を強く打つものがあった」と芒角星は述懐している。

本号の時代

1897	明30		尾崎紅葉「金色夜叉」
			正岡子規の俳誌「ほととぎす」
99		32	勝海舟歿
1902		35	日英同盟
04		37	日露開戦争へ　小泉八雲歿
05		38	夏目漱石「吾輩は猫である」
		43	柳田国男「遠野物語」
14	大 3		第一次世界大戦へ
16		5	松江の俳誌「曲玉」　木次線
			木次まで開通　「仁多郡誌」
20		9	日本最初のメーデー　1万人
21		10	郡制廃止

学業を終えると各地の税務署に勤務、前橋税務署長を最後に退職、税理士を開業した。私が事務所に訪ねたのは4年目の秋であった。

芒角星が上京して5年目の大正14年、34才の青年で師の吉田冬葉は「獺祭」を創刊した。その同人として以来32年間「獺祭」一筋に歩んだ。1957（昭和31）年恩師冬葉の死によって、冬葉の「獺祭」は終った。

出発点にもどった「獺祭」再建のために推されて主宰者となり、師が全国に残したあたたかい人脈に支えられ、芒角星のもつ飄逸枯淡の人柄と、懇切な指導とによって遂に再興、芒角星の「獺祭」時代を築きあげた。

その苦節13年を経た昭和44年同人の勧めで出版したのが初の句集「此土」である。

「一打ちは雪起しけり鍬初
畑打やひとり見送る天津雁
やすらぎの大地なりけり竹落葉
この土やさくら咲く国わが住む国
この土や蛙出てくる蛇もまた
たがやしてたがやしてこの土にあり

やはり一貫しているのは、私が農家の二男として生をうけたときからの匂いが見られることである。これは私という一個人の生涯を通じての郷愁の匂いかも知れないのである。土に生れて土に育った青年期の印象というものは、恐らく一生を支配するものであることがわかってくる。土を基盤とした句が非常に多いゆえんである。……足が土についている安心感こそすべての人のスタートであり、初心忘れることのない最終でもあり、また悠久でもあることがうなづかれる。……この句集をそのまゝ「此土」としたゆえんのものであろう。」と、句集のあとがきにある。

時代を追って

竈を吐く火の舌赤き夜寒かな
算盤の珠のはじけを冴返る
わがあとに蹤く人語あり道おぼろ　（右大正　初年）

疎開の長男を送りて（昭和19）
木の実食い足れば山の子となりきらむ

長男東大卒　（昭和31）
卒業論文のならぬ公孫樹の下に久し

弘法寺　（仝　32）
葉桜や拝めば人も仏なり

母は八十三才を一期として（仝　33）
新たなる年の天寿を悲しめり

文豪ヘルン旧居　（仝　35）
横顔の遺影のどかに慕わるる

ふるさとにて　（仝　39）
兄老いて我老いたりや更衣

わが俳句五十六年の師余倉梧月・吉田冬葉既に亡く、また郷里の青木実坊逝く（仝43）
行春やわが俳諧の三師亡し

わが故郷の「自然薯誌」百号を祝す　（仝　48）
大初中百中の威のかがやける
元旦やあらたに踏みて百一歩

八十一才

昭和33年より21年間の死の直前まで「獺祭」主宰者として、句作に指導に日夜を費やし、54年の2月号の編集を終え、2月3日は俳人協会の経理監査を予定していたが、その朝自宅にて突如として床に伏し、その夜急逝した。1979年、81才であった。

句集には「安良岐」「八十路」が、「此土」に続いている。

『読書人』54・3・12号より

「読書目録」　上笙一郎

二月某日

朝刊に眼をとおしていたら細木芒角星氏逝去と出ていた。乙字門下の俳人で俳誌「獺祭」の主宰者――というよりも、わたしにとってはやはり、都立第九中学校時代の親友＝細木常夫のおやじ様だ。敗戦直後の中学生時代、細木の家にだけは本が沢山あって、わたしは『古事記』や『芭蕉一代集』などを借りてはよく読んだものだ。わたしが初めて手にした〈おとなの本〉で、天金の立派な本の手ざわりが忘れられない。

細木の小説、この頃見かけない。芥川賞候補に二度ほど挙げられたのまでは知っているが。どしどし書けばいいのにと思うが、心労でしばらくは大変だろう。

葬儀にも行かず。悔み状も出さず。人は、死んだ当人の心にもっとも親しかった人たちのみによって送られるのが宜し――と信ずるものだから。

昨秋わたしの母がなくなったときも、誰にも知らせず、わたしと妻の関係の弔問客はひとりもなかった。少し経ったら、細木を誘って飲むことにでもしよう。……

（児童文学研究家）

1973（昭和48）年の賀状に、町内の4中学校が実質統合して、横田中学校として中山台に創立されることを書き添えて置いたところ、初の入学式に間に会うよう、色紙を届けて頂いた。

月は一つわがゆく旅も一人なり

44年の12月、馬木小学校の校門横に、馬木地区の自然薯俳句会によって建立された句碑（写真）の句と同じものである。

藤原徳治さんからの便り（54・2・27）がある。「東京仁多会の最長老がなくなられた。次が藤原茂一・大橋武夫と続いて私です。若返りを策しましたが失敗し、私が会長になりました。『獺祭』で芒角星追悼号が近く出されます。令息常夫さんに直送を頼みました。」

10年たった今、3人の長老もすべて故人。（会員　高橋一郎）

（獺はカワウソの異称。獺祭は詩文を作る時、多くの参考書をひろげてちらかすこと。俳人正岡子規は居を獺祭書屋と号した。）

（会員、杉原玄明・石金章徳さんに年譜・写真の御協力頂きました）

奥出雲のたたら製鉄史⑬

新資料にもとづく特に東南部の
その技術・経済・社会・文化の総合史

近世論⑤　松江藩の鉄行政3

（享保年間三郡御買鉄論争　1）

1721（享保6）年の秋、13年間続いた御買鉄制が廃止された。これまで御買鉄と私売はめまぐるし変転していたが、これ以後幕末に至るまでこれまでのような御買鉄は復活することはなかった。

この御買鉄制廃止後の藩と藩内鉄師との、その清算をめぐるくわしい記録が、絲原家文書の中に「享保年間三郡御買鉄ニ関スル一件」としてある。享保7年　寅11月11日付の絲原氏の記録である。冒頭に「これは鉄師の外には他見しないこと。日記をもとにこの件を抜き出し綴ったもので、心覚えである」としてある。少し長くなるが、藩役人と鉄師とのやりとりを通じて当時の武士の言動が巧みに描かれもしており、そうした点にも興味があるので、しばらく掲載することとしたい。（筆者によって経過を整理してある）

第一段階

（松江・茶町）

御買鉄の最終清算について出頭せよとの仰せにより、11月13日鉄方御役所に参上した。御算用御目録を渡され判形をせよと申し渡されたが、とくと拝見して判形致したいので明日までと申したところ、成るほどと申され預かって旅宿へ帰った。

11月14日に拝見したところ、先に議定した算用とは大分相違があるようだったので、15・16両日にわたって、一昨享保5年6月の算用目録と比べて検討したところ、その通りであった。そこでこの点を口上書にまとめ、御役所へ差上げようと思い、鉄師ども相談しているところ（金森屋孫右ヱ門方）へ、正午ごろ鉄方御役人桑原喜太夫様岡本善右ヱ門様の御両人が参られた。そこには大馬木村次右ヱ門（杠）がたまたま居合せた。御両人から「この間の帳面の判形が届かないので、今日は督促に来た。直ちに判形せよ」と言われたが、「この件については少々問題もありますので、書付を差上げる考えでありますから、今判形はできません。それに同宿している勘右ヱ門（絲原、仁多郡の下郡）も他出しておりますので、帰ったら相談致します」と答えたが、御両人は聞き入れず、勘右ヱ門のいる桑原屋へ会いに行くと言って出かけられた。

一方勘右ヱ門は桑原屋の主人からの耳打ちで、金森屋へ帰る途中御両人に出会った。恐縮至極と申して案内して帰ったら、先に次右ヱ門に申した通り判形せよと迫って来た。そこへ可部屋源兵ヱと卜蔵孫三郎の二人が口上書を持参し御両人へ差出し、この様に御了解頂けば判形致しますと申し上げた。御両人はとくと読んで、成る程願いの筋ももっともであるが、判形をしないでは願いも伝えるわけにはゆかぬから即刻判形をと迫った。私共はするせぬを言う前に、この口上書を取次いで頂かねば出来ませぬと答えたところ、御両人はまことに御立腹、先に次右ヱ門が言ったことからすると、勘右ヱ門が棟梁でか様な口上書を書いたであろうと申された。勘右ヱ門は棟梁の誰とか頭取の誰とかというのではなく、鉄師一統のお願いであると答えた。

すると喜太夫様はこれほどまでに御算用目録を直せと申すのは、出過ぎたことである。今日判形をとらずに帰ることはできぬと催促された。私共はどのように申されても、この口上書を差上げてお願い申上げねば、判形もなりませぬと申上げたところ、喜太夫様はなんとしても判形せぬとはけしからぬ、判形をとらねば帰らぬと脇指をひねくり、すでに抜打ちの構えにもなられたが、善右ヱ門様はしばらくお待ちなされと押しとどめられた。そこで勘右ヱ門が申すには、そのように荒らくれなされても、理が立つものでもありませぬ。綿屋長右ヱ門が筆頭者でありますから手代与次右ヱ門を呼出し、申し分をお聞きなされてはと申上げた。

善右ヱ門様は成る程と与次右ヱ門を呼びにやらせられた。参上した与次右ヱ門に喜太夫様は、長右ヱ門は役人（田部、飯石郡の下郡）であるから、判形せよと申された。与次右ヱ門は「私は手代でございます。ご歴々がおいでになるのに私一存では出来ませぬ」と申上げた。そのうち鉄師一同残らず判形出来ぬと

六月句会抄

閑けさをゆすりて滝も澄める色　浅野　としお
農厳しただ黙々と草を刈る　岡田　蹊花
真っ白は母の遺愛の杜若　小川　あきお
青葉山さかさに写す水面かな　門脇　花子
青嵐帽子真深に反抗期　加納　信子
病む友を送りてむなし走り梅雨　楠　房子
つつがなく生き長らえて衣更え　高木　白虹
バッサリと女のヘヤー夏に入る　新出谷　一華
峠バスいつか来た道栗の花　錦織　富江
鎌運ぶ音かすかなり竹の秋　峯石　美代子
大豆蒔く老農黙す転作田　渡部　夕峰

申上げたところ、突如として喜左ヱ門様は大声で可部屋源兵ヱに向って、「この青二才、何度申しても分からぬか」と激怒された。その時手にあった扇子で畳をたたかれたが、折れるほどであった。その上2度まで脇指をひねくられた。丁度その時、宿主金森屋孫右ヱ門の妻が、血の道のさし込みがおこり、医者や針立をとどさくれ出したので、卜蔵孫三郎が隣の私の宿伊豆屋へ移ってお話をされるのが、病人のためにも良かろうと申上げたが、聞届けられず、勘右ヱ門と与次右ヱ門の両人に話があるから、他の者は引退かれとのことで、みなみなは勝手元へ退いた。

そこで御両人より長右ヱ門も勘右ヱ門も役人であるから、両人判形せよと申し渡しがあった。それを聞いた私共は、これは御役儀にかゝわることではない。一同のお願い書を差上げずに判形は出来ない。御両人はいや判形をとらねば帰らぬと押問答の繰返へしが続いた。そこで御両人は、それでは郡奉行へ参ってうちを明けてもらおうと申された。だが私共は郡奉行へ参ることはないと言ったが、とうとう押し切られ止むなく、郡奉行所へ同道することになった。

御両人は勘右ヱ門・与次右ヱ門を召連れて、郡奉行拓植官兵ヱ様へ参られたが、お留守であったので勘六様にあい、改めて御両人が参上し、両人を呼出して話合い申したいと告げて引上げられたので、私共も宿所へ帰った。

11月18日朝

可部屋源兵ヱ　　卜蔵孫三郎
卜蔵藤兵ヱ　（大馬木）勘右ヱ門
（全）次右ヱ門　（全）文右ヱ門
綿屋長右ヱ門手代与次右ヱ門
同　庄右ヱ門手代孫右ヱ門
（上久野）七右ヱ門（松笠）太左ヱ門
（大吉）弥三右ヱ門　伊豆屋源之丞

そしてその日御勘定所鉄方御役所へ右口上書を持参したところ、話をとくと聞いて頂き、当方にて処置を考えてみようとのことであった。

——二人の役人のうち喜太夫は上席であり、なかなか威丈高な侍であったようであるが、鉄師たちもさる者、余程腹に据えかねる要求でもあったとみえるが、負けてはならじとこらえにこらえ、一致して対処している。（会員　高橋一郎）

の鉄師全員12人が願書を持って、岡本善右ヱ門様宅へ参り、取次を願ったところ、喜太夫様方へ持参するようにとのことで、そちらへ持参したところ、喜太夫様は判形をせざるような願書は取上げるべきものではないが、是非とも差上げたければ、役所へ持って参って置けば、そのうち兵左ヱ門様徳右ヱ門様へお話申上げると申されたので、そのまゝ引退った。

ごあんない

第8回横田たたら勉強会

7月29日(土)・30日(日)の2日間、横田コミュニティーセンターに於て。

○古代製鉄に関するシンポジウム
○小規模たたら操業に関するシンポジウム

（別紙案内書の通り）

前号訂正

標題の根雨
引用文書中の値段はすべて直段
1頁4段7行　出府
23行　史料
5段22行　かった。
25行　1816には「大

斐の上川柳七月抄

古いこと知っているのでいやがられ　松浦木公
消費税朝から晩までつきまとい　松浦亜以
お昼寝もプランも孫にこわされる　佐佐木千世
留守中のおかずは用意し旅に出る　藤原千代子
ぐうぐうと起床ラッパか腹の虫　渡辺好之
嫁のない理由に一つ政治あげ　松浦久寿子
毎日が引算減るのみ残る齢　松田牛歩
消費税小銭我が世と飛んで出る　安部正子
雑草の我が物顔に庭を埋め　藤原のぼる
ひとときの出合いの別れ泡ビール　高木白虹
あけはなす窓いっぱいに甘い風　真綿よし子
宅急便グチも詰めこみ送り出す　田中有樹絵
種蒔の畑できつねと根くらべ　杠京子
又暮れた知らず知らずに黄泉路　若槻白馬
たまに来る孫がストレス持って行き　横山まこと
四十坂越した子やはりいとおしい　石原冬明

朴の花咲く　簸の上短歌会

恋ごよみ杳くおぼろにかすむ今日五月の山に朴の花咲く　永井弥生
許せざること頑なに抱き来しこの歳月を思ひをりたり　松浦愛子
競市（せり）に行くトラックの牛みぎひだりとカーブに合せ足を踏張る　佐藤喜代子
さりげなく日は過ぎにつつ褥（とね）に臥しなすなき妻を思ひかへじぬ　常盤はるまさ
田水見に巡るほとりの朝靄にほのかに見ゆる月見草の花　野村節子
ひとり居の老の咳く傍にて猫眠りをり家族の如く　岡田時子
露ふかき街はいまだに眠りゐて始発列車の汽笛ひびけり　安部夕波

会員頒布一部百五十五円／六九九—一八　島根県仁多郡横田町一、〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江〇一六〇一）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 172 号
（8 月 号）
1989　8. 5
（M122・T78・S64）
奥出雲編集集団©

奥出雲のたたら製鉄史⑭

新資料にもとづく特に東南部の
その技術・経済・社会・文化の総合史

近世編⑥　松江藩の鉄行政3

（享保年間三郡御買鉄論争2）

本号の時代

1724（享保7）～1724（享保8）

江戸町奉行は大岡越前守忠相

幕府は諸大名へ追放刑の制限命ず

新田開発を奨励（江戸に高札）

諸大名に上げ米（100石につき1石の割）を課し参勤期限を緩和する

諸国の人口調査を6か年毎に実施

米価下落につき諸色の元値引下げを命ずる。　卜蔵孫三郎荒島新田数町歩を16年かけて行う。

石見井戸平左ヱ門甘藷栽培奨励す。

第2段階

11月20日役所より出頭せよとのことで全鉄師が行くと、勘右ヱ門・孫三郎・七右ヱ門・太左ヱ門・本分家綿屋手代与次右ヱ門と孫右ヱ門の6人を残して引下るようにとのことで帰った。その日には徳右ヱ門・喜太夫・善右ヱ門の3人様が出られ、先に差出した口上書につけた当方からの御付紙の通りである。鉄師どもの反対はないであろうから即刻判形せよと申し渡された。鉄師どもはこの御附札についてもお断りしたいので判形はできないと申上げたが、お聞きとどけになられず、むしょうに判形せよと申され、特に喜太夫様は荒々しく申されたが判形はしなかった。四ツ（午前10時）より暮六ツ（午後6時）になってもらちが明かなかった。私共が申すのは御附札をお渡し下されば、帰ってとくと拝見致しますとの願いであったが、貸せることもなかった。

徳兵ヱ様はどうもらちが明ないから、一人一人別々に論議するといって綿屋与次右ヱ門に、筆頭者であるがどうかと聞かれたが、「判形はできませぬ」とはっきり答えた。それから次々とたずねられたが、いずれも同様に答えた。そして暮六ツに帰った。

仝月21日、可部屋源兵ヱ、大馬木又右ヱ門、大吉弥惣右ヱ門の3人が呼出しによって、役所へ出頭すると、判形せよと申しつけられた。3人は私共も昨日の他の者が申した通り判形は致しませぬと言った。それ以上はお尋ねもなく帰った。

仝22日、役所へ出頭せよとのことで鉄師全員が行くと、役所の小使から今日は取りこみの故出頭は無用とのことで引下った。

第3段階

仝月23・24日は何事もなし、25日の夜役所より使が来て、明日全員出頭せよとのことで、26日四ツ時（午前10時）に、源兵ヱ（可）・弥三右ヱ門（大）・源兵ヱ（雨川）・孫三郎（卜）・源之丞（亀）・又右ヱ門・次右ヱ門（大）・綿屋本分家手代与次右ヱ門と孫右ヱ門・太左ヱ門（松）・七右ヱ門（久）の10人は出頭したが、大馬木勘右ヱ門は23日よりの病いのため欠席した。

役所では、兵右ヱ門・龍八・喜太夫・善右ヱ門の4人様が出られ、私どもが差出した口上書に一々つけられた御附札を読み聞かせられ、この通りで算用に間違いはないから判形せよと申し渡された。私どもは御附札のことは一つ一つわかったが心から納得できず、それについて申し上げたが聞入れられず、とにかく判形せよとばかり申された。

綿屋与次右ヱ門は筆頭者であるから、まず判形せよとしきりに責められたが断った。一向に聞き入れられずそのうちに、長右ヱ門（綿屋主人・頭取）は藩の御買鉄の定めを破って私売鉄もし、この役所をないがしろにするのみならず、この度も何かと断りの筋を手代与次右ヱ門に申して頭取にふさわしくないと、きびしく責められた。与次右ヱ門は心底では「この度役所を長右ヱ門がないがしろにした」との一言を聞いて気の毒に思い、与次右ヱ門は、納得した判形ではないが、長右ヱ門へお上の御意を賜りたいので判形はいたします。しかし何としても断りの件はらちを明けてもらいたいと申上げた。それに対し判形さえすれば、兵左ヱ門様よりお上へ十分に申上げて遣す。偽りは申さない。大小多くの天神地祇にかけて誓うと申されたので、七ツ半時（午後5時）判形して与次右ヱ門は退出した。

第4段階

続いてこんどは綿屋分家庄左ヱ門の手代孫右ヱ門に向って、与次右ヱ門は筆頭で判形したと告げられたが、孫右ヱ門は長右ヱ門は格別の理由があったから判形をしたのである。庄左ヱ門は今判形をしても御勘定の筋が通る心当てはない故、判形のことは幾重にもお断りすると申し上げた。しかし厳しく要求されるので申し上げようもなく、印判を持参していないので明日にでも判形致しますと申し上げたところ、その方が印判を持参しないことはないと言って、懐中や腰廻りをせんさくされその上不届き者である、小使市助に縛れと申しつけられたが、市助はじたばたのみしていた。そこで孫右ヱ門が印判は宿手代左兵ヱに預けてあるから取って参りますと申し上げたところ、早々帰って持って来いと言われ退去し

奥出雲たたら製鉄⑭・字めぐり・川柳・俳句・短歌

た。この時刻は夜の六ツ半時（午後7時）であった。

それから可部屋源兵ヱにとりかゝられ、与次右ヱ門は判形し、孫右ヱ門は請合印判とりに帰ったから両人は済んだ。お前は筆頭者の一人であるから判形せよと強くせまられた。そこで一同が申し上げる通りのお断りをしたが聞き届けられず、仕方なくこれも印判を持参していないと申し上げたところ、取りに帰れといわれ退出した。

先に帰った孫右ヱ門は食あたりなって出頭できないと使をもって申し上げ出頭しなかった。源兵ヱはそのようにも申されず、役所へ印判を持って出頭した。だが私の納得の判形ではないから、私の手で押すことは出来ない。どこへでも判をつかれたいと印判を差出した。この時ことの外立腹され、この度の鉄師仲間の張本人は可部屋源兵ヱに間違いないと判断され、御用人治郎左ヱ門様へ申上げ、今晩曲事（違法処罰）にするといわれ、書状を認め市助を呼ばれたが留守中であったので、時間がそのまゝたった。その間残った数人を別々に吟味されたが、誰も判形はしなかった。そして雨川源兵ヱが申し上げるには、2歩銀を8歩にと仰せられたのは迷惑であって、幾重にもお断りした。前の御議定の時のことは知らず、新らしく鉄師になった時に申し渡されただけであると断ったところが、兵左ヱ門様が喜太夫様お縛りなされと言われた。すると善右ヱ門様は今少し待てと押さえられた。

次に松笠太左ヱ門が申すには、千割（包丁鉄）を急に銑にとりかえ、さらに御所望鉄の千割まで銑にせよとか、まことに無茶なことを仰せられて困ると申したところ、判形をせずに色々な断りを申すのは聞届けぬ。必ず判形させると立腹された喜太夫様は、太左ヱ門をつかまえ首筋を下へ押された。太左ヱ門はあとすざりし、無作法なことを申し上げますが、かように御手をかけられたことは迷惑であると申し上げた。喜太夫様のこれに対する返事はなかった。この時は夜の九ツ時（12時）であり、早朝より出頭していて、誰も空腹をかゝえ迷惑した。

次に大吉弥三右ヱ門へ判形のことを申された。そこで私は当夏の御算用目録をもっておやりになり、残らずお取りになり不足分は保証人に対して負担をさせられ、その上またまた不足であると申されるが、何も差し上げようにもありません。私自分にて御書出しにみあう算用をすれば、過分になりますので判形はできませんと、はっきり申し切ったが、だんだん厳しくつめよられた。そこでこんどは弥三右ヱ門が、私がお手打ちになっても判形はとても致しませんと申し上げた。続いて残りの者にもお話があったが、それぞれ断わって判形はしなかった。

喜太夫様善右ヱ門様は、もう今日は七ツ時（朝4時）になったから、帰って明日出頭せよと申され、明日判形しない者に対してはこちらで考えがあると付け加えられた。鉄師どもは26日の朝食のあと、まる一日そして翌27日の朝七ツ時（前4時）まで、湯水もつかわず手をつき責めたてられるなど大変難儀をしたのである。

第5段階

27日勘右ヱ門は気分も少しよくなり役所へ出頭し、「昨日は気分勝れぬために出頭しなかったが、今日はごらんの通りでございます。昨日は昼夜話合いがありましたがらち明かず、今日最後の話合いをし判形をせぬ者は曲事にするという考えを皆に仰せ渡されたとのことを聞いて驚きました。このことは役所の方にてか様な御算用になったとは知らずに、御上にて御議定なされたものと推察しますので、皆様方お一人ひとりから申し上げて頂くよう御憐愍をお願い致します。昨日のようになされては気の毒に存じます。何とぞ今一日のばし下さいまして、かねて差上げておきました願書に御附札をもって御返答下さいました書類をお貸し下されば、鉄師連中へ私よりよくよく話をし、納得して判形するようにしたいという考えでございます。万一納得せねば明朝報告致します。それまで延ばして頂きたい。」と善右ヱ門様へお断り申上げ、さらに善右ヱ門様より兵左ヱ門様へこのことをお願い頂けば、神妙に存じますし、さらに書附札もともに預からせて頂きますようお願いします。そしてお互心よくこのことが運ぶことを念じます」と申し上げたところ、御意を動かされて、口上書と書附札ともにお渡しになり、請取って帰った。

（会員　高橋一郎）

字めぐり⑧

宇波の城

能義郡宇波（現広瀬町内）（中）

寺井　毅

1. はじめに

昭和62年、島根県教育委員会編集の「島根県遺跡地図Ⅰ出雲・隠岐編」によると宇波には宇波城、土居城の二城が記されている。これによると宇波小学校裏山を「宇波城」・北西の山を「土居城」としているが、先日地元の方々と調査を行なった結果、宇波小学校裏山を「土居城」北西の山を「高小屋」と呼ばれていることを確認した。特に高小屋は他に出城、見張場、馬つなぎ場などの名称で伝えられている。本稿では、この高小屋及び土居の地名に注目し、各遺構の評価をふまえ、各城の性格付けを試みるものである。

2. 土居城

土居城は尾根の先端を浅い堀切によって独立させ、地形を利用して数ケ所の削平地を造成している。土塁、虎口などはなく主郭と考えられる平担地でも大人が10人も立てば身動きが出来なくなる程度の広さしかない。又、麓の「殿様平」、「姫様平」と呼ばれていた拡大な削平地は、とても一豪族の守れるものではない。（守備面積の増大と守備兵の数は正比例する）有事に殿様平などを放棄し、主郭と思われる平担地に避け込んだとしても、この低さではとても籠城にたえうるものとは考えられない。さらに、土居城の「土居」とは館自体を指す場合が多い。益田氏の三宅御土居はその好例であろう。以上のことから土居城は、軍事的な面は他に求め、政治面を重視した「政庁」的な城であったものと考える。

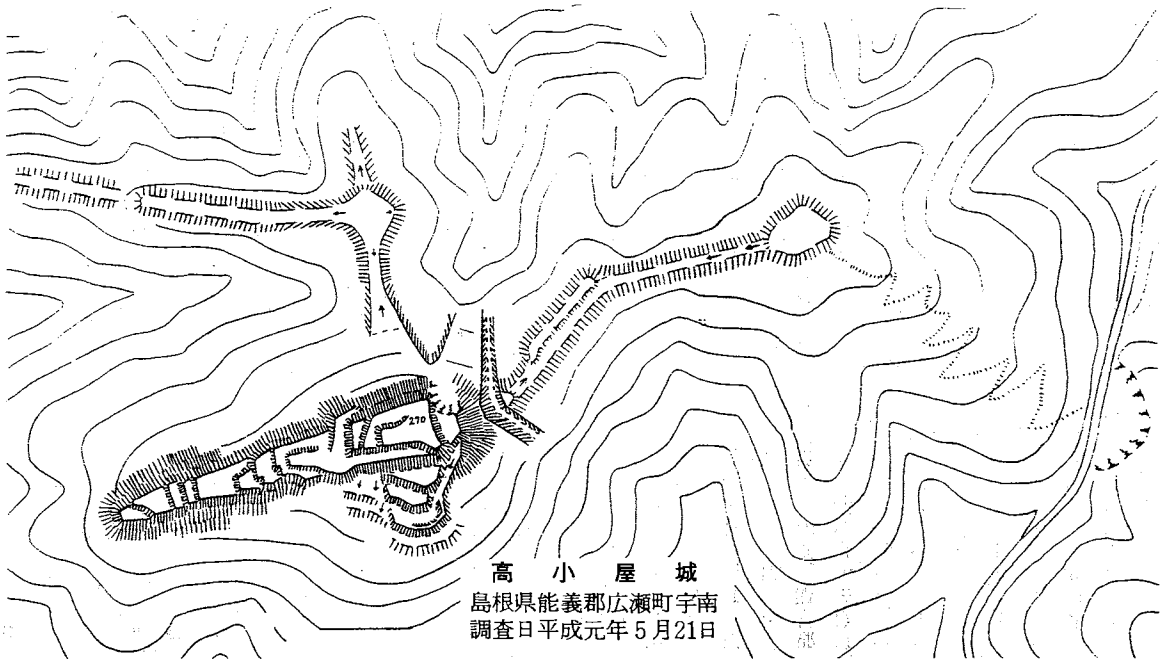
3. 高小屋の城

高小屋の城は約270メートルの山頂を中心に築かれている。東側、尾根続きは堀切によって遮断し、西側には削平地を10ケ所設けている。北側は急峻であるため手を加えておらず、南側に三ケ所以上の削平地がひな壇状に設けられている。主郭から西に対する壁の造りはしっかりとしており、平均1メートルの高低差がある。それ以外の面の壁はひどく甘い造りとなっており削平も十分ではなく、一部に地山も見られる。

高小屋の「小屋」について、龍ケ崎市史、引編Ⅱ、「龍ケ崎の中世城郭跡」において中村高男氏は「中世では、小屋を掛くる。小屋掛けをする。という場合〃粗末な一時凌ぎの家を建てる〃という意味のほかに〃戦争の折に、兵士がするように、野外に幕舎をつくる〃という意味があった。すなわち、小屋＝学舎、陣営という意味も内包していた。」としている。こうした小屋が山岳地方に形成された場合、山小屋と呼ばれた。高小屋も同意語だと考える。又、主郭付近より臼の破片が出土している。

以上のことから、高小屋の城は、平時は守り番が滞在する程度の設備しか持たない小屋であ

中央は高小屋
右手は土居城跡の裏手



高　小　屋　城
島根県能義郡広瀬町宇南
調査日平成元年5月21日

前号訂正　2頁2段3—5行　匂い　3頁4行　近世編

り、有事に土居城から避げ込む場所であったと考える。

ただし、市村氏の「小屋」は信州及び関東の事例による「山小屋論争」をふまえたものであること、又、それを出雲の地にしかも一例しか確認されていない高小屋に当てはめるには、問題が多いことを付け加えておく。

3. 尼子氏の台頭と高小屋の城

高小屋の城の主郭東側の堀切は他の造り、及び土居城の造りと比較すると、その差は歴然としている。出来すぎなのである。これは明らかに他の勢力によって改修されたものである。

改修者は次の事項から尼子氏と考えられる。

(1) 富田城南麓、塩谷から尼子道と称する軍道が宇波に通じており、宇波に緊急事態が生じた時、すみやかに集結、駐屯が可能である。（大軍駐屯のため、周辺の尾根が削平されている。）

(2) 富田城南方の防禦は、直衛の城を除くと、坊床山、比婆山以外は布部城程度しか知られていない。（知られてないだけかも知れないが）三沢氏の藤ケ瀬城などは国境に近すぎる。

(3) 宇波には中世より活躍した鋳物集団の存在が知られており、この特殊な技術集団を保護すると共に、監視した。

以上の事項により、高小屋の城は土居城の詰城的な性格から尼子氏の勢力下に含まれた時点で、その性格に変化が生じたものと考える。

（松江市・中世城郭研究家）

七月句会抄

草苺喰うを知らざる子等悲し　浅野としお
粽巻く老婆自信の手捌きで　岡田蹊花
ふっと舞う昼の黄蝶や初夏光る　小川月舟
氷雨降り十字架濡らし恩師逝く　門脇花子
青田風新居の部屋を吹き抜ける　加納信子
走る灯に浮かぶ闇夜の月見草　楠房子
紅すこし添えて調う夏の顔　高木白虹
閑けさや友と酌みつつ河鹿宿　新出谷一華
花ござの模様選びて夏を敷く　錦織富江
老独り田草取る背に日を負えり　渡部夕峰

時事偶詠　簸の上短歌会

熱帯夜の朝起きいでて病む妻に厳き暑さをひとり嘆けり　石原冬明
いちにんの非は遁れても驕りゐる政党への裁きはかり　高木白虹
そめならず　常盤はるまさ
消費税可決と戴れる新聞に売出しチラシの多く挿まる　真綿よし子
おおかたは兼業農家のわが里は植付時も人影まばら　横山まこと
滴るがに色あざやかなる蔦蔓を登りのぼらせ松の古木は　佐藤喜代子
夜の更くる厨に嫁は取込みし出荷野菜を秤にかくる　若槻愛散人
揺れ動く小舟に身体任せつつ熊手にかかる水雲をあげる　岡田時子
諸手そへて海底ひたに窺ひては熊手を入れて水雲を掬ふ　景山悦子
面白うてやがて哀しきと詠われし鵜舟の篝火川面にきらめく　安部夕波
山雀は巣立ちを終へし雛になほ餌を運びつつちいちいと啼く　永井弥生
梅雨冷えし高原の街夕迫りレコード店の音楽鳴れり　藤原道夫氏を悼みて
神を信じ真理を求めゐられたる君逝き給ふ東雲燃ゆる朝　安部夕波

斐の上川柳八月抄

据置は米の値下げを前ぶれし　石原冬明
生きてゐるライター時々点火する　高木白虹
珍客へあわてた音の台所　真綿よし子
富める国だから札束ごみに捨て　横山まこと
屁理屈の名すり合いの先議会　若槻愛散人
花を愛で家人を誉めて商いし　田中有樹絵
母の所作いつしか私の中に住む　松浦久寿子
無情風働き盛り連れて行き　安部正子
云い易いハイとイヤとが云ひ切れぬ　松田牛歩
生ビール泡にも足らぬ消費税　渡辺好之
旅に出たことが話題となる狭さ　松浦亜以
見いでもよい事よく見える老眼鏡　若槻白馬
御詠歌が涙をさそうバスの中　杠京子
初がつお一ぱいやれとほととぎす　松浦木公
ことわりが素直に出来ぬ日の不安　藤原千代子
何気ない女らしさに気を引かれ　藤原ユキ子
世話をして世話になったと礼を言い　藤原のぼる
子の仕草思わずひやり赤信号　中林もりえ
下手な字を個性があってとおだてられ　田中芳春

ごあんない

奥出雲文庫として、9月中旬に次のような内容の冊子を限定出版し、会員の皆様を中心におわけしたいと思っています。

横田の歴史
企業たたら　（書名未定）
中学上級生向きに執筆
わかり易いたたら読みもの
B5版120頁　予価900円
表紙カラー・写真4頁年表付き

会員頒布一部百五十五円／六九一一八　島根県仁多郡横田町一、〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江01601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第　173　号
（9　月　号）
1989.　7.　1
（M122・T78・S64）
奥出雲編集集団©

森林資源は大気資源・水資源の基——先人が残してくれた知慧を考えてみよう。

歴史の眼⑦

歴史の面白さ楽しさと怖さ

——（科学的というわな）——

とくに明治維新以後から敗戦までの間は、私どもの知らない日本歴史があまりにも多かった。それは「皇国史観」によって統制され抹殺されていたからである。

今日は自由になったとはいえ人々の頭の中にその抹殺された歴史の復権と認識が入るのはなかなか難しい。神話は全く歴史と思っている昔の人が多いのに対して戦後の若い人は全く知らない。ロマンを追う若い人に、昔の人は神話を登場させて、歴史観を混乱させてもいる。

本誌153号の「栄光去りまた来る」で壬申の乱の復権にふれた。157号では日本書紀編集の時代的背景を記述して、正しい読み方を考えてみた。162号では「古事記は偽書の重み」でふたたびそれに触れた。163号「わたしたちのまち横田町」では、この地方の歴史の見方の誤まりにも触れておいた。私どもは歴史の面白さ楽しさを求めるだけでなく、是非とも正しいものを、キチンと明らかにせねばならない。

歴史は資料を集めて正しく考証検討することが基本である。今日では時代の判明しない資料

考古学上の遺跡・出土品

については、種々の科学的方法が開発されて来たが、その適用範囲と限界を弁えていないと、大きな誤まりを犯すことになる。

科学的年代測定の諸方法

これについては別表のように10余種類の方法がある。これらの方法はそれぞれに、原理や前提条件の確かさ、使用する測定器の種類と精度、**最も適切に適用できる年代範囲**、そして対象となる試料の種類が異なる。このうち二種類を手がけている鈴木正男の論文によると、国際的研究の場に於て、同じ方法を用いて35組の測定値が交換されたが、それぞれに誤差が大きかった。特に日本からのものはその**誤差が甚だ**しく、各国のものに比較的近いものは3割しかなかったという。

この「**理科学的年代**」をとりあげても、これをそのまゝ「**暦年代**」と同一視することは、現代階では大きな誤まりを起すもとになるという。「**暦年代**」では地球規模で同一の年代が示されるが、これは**人間が5,000年前に暦を作った以後のことにしか適用できない。**記録（文書・碑文等）がなければ困難である。

これに対して考古学では、石器や土器の形の移り変りや、作り方の変化に基づいて、石器時代・土器時代の時間的変遷を明らかにする「**相対年代**」をとっているが、あくまでも**相対的な時代の序列を決定**することでしかない。（極端にいえば仮定である）日本国内で離れた地域間ではもとより、諸外国との間では勿論、比較は正確にできない。

こゝで考えられるのは、これら各種の理科学年代測定法を数多く行って、（結果の精度は極めて差異があるから、勿論一つに頼ることは盲信することは危険がある）**相対的**年代を算出することであるという。勿論**絶対年代**を明らかにすることは不可能である。当地方では古地磁気法が独走しているが、表に見る如く危険は極めて多い。

資料の解読の誤まり

こゝに二つのたたら地下構造の発掘報告書がある。一つは10年程の前のものであるが、文書の**主法**を**仕法**と混同して本文を読み誤まり、松江藩の鉄行政の在り方の無知からさらに大きな誤まりを犯している。仕法は個人が倒産して財産処分をすることを一般的にいう。主法は松江藩が鉄師のたたら経営再建のためにとった擬制倒産措置をい←

考古学に用いられる主な年代測定法。

種　類	主な試料	測定に適した年代
放射性炭素法	木片，泥炭，骨，貝殻	0～2万5000年
フィッション・トラック法	鉱物，ガラス	1000～3億年
熱ルミネッセンス法	土器，骨	0～数十万年
カリウム・アルゴン法	岩石，鉱物	100万～数十億年
電子スピン共鳴法	鍾乳石，化石	0～数百万年
ラセミ化法	骨，貝，角	0～数十万年
化学分析法	骨，貝，角，歯	相対年代として利用
古地磁気法	溶岩，湖成層，海成層	70万～500万年
黒曜石水和層法	黒曜石	日本なら0～10万年
年輪年代法	木　材	0～数千年
火山灰層位学	火山灰	0～100万年
型式学	石器，土器，金属器	石器などの使用期間

本号の時代

1922 大11 衆議院、国民党提出の陸海軍大臣の武官制廃止建議案を否決。昭和天皇成婚。
23 12 関東大震災。婦人参政権否決 益田まで山陰線全通
25 14 普通選挙法成立。相撲協会設立。若槻礼次郎首相に。
27 昭 2 岩波文庫創刊。地下鉄開通（上野・浅草間）
29 4 張作霖爆死事件の責任者処分について、天皇は田中首相を叱責し、内閣総辞職する。

歴史の眼⑦・奥出雲が生んだ日本の詩人②・川柳・俳句・短歌

奥出雲が生んだ日本の詩人

安部宙之介

「ある自伝」より②

青春 — 師範の寮生活

寮へ帰ると、その二年生の暴れ者の中には血染のバットと称するものを振廻して歩き廻り、私達への示威運動のようなことをしていた。11時が過ぎると私達は三々五々柵を超えて道を故郷へと急いだ。脱柵者は退校処分ということをきいてはいたが、いざやってみると平凡なことだと思った私達仁多郡出身者は3名だった。約十里の道を歩いて帰らねばならない、ぐずぐずしていて捕えられてはならない、と暗い夜道を急いだ。睡気が催して動けなくなると其処にしゃがみこんで休憩した。神社の一角に立寄り休憩したことも記憶にある。そのようにして翌日のお昼ごろ私の家までたどりついた。離れの二階で3人ぐっすり睡った。

父は何も云わなかった。云っても仕様のないことだと思ったのだろう。新聞にでかでかと書かれた。学校から手紙が来た。不都合の行為により無期停学にする。そして、一週間毎に日誌を提出せよ、というのである。

私は毎日日誌をつけた。学校というより新舎監長の考え方を非難した。自分達の立場を主張した。日誌を学校宛に送ると、電報で私にすぐ来いと呼び出しである。私は松江市まで出かけた。学校へ行くと、先生達はみな引上げている。4時か5時頃だったろう。教頭宅へ行けとのことで教頭を訪ねた。堀端の家であったが、教頭はにこにこしながら、君は学校をやめるというのではないだろう、と切り出して、こちらの云い分を訊き出した。日誌に書いた通りで、学校をやめる気はない、というとよくわかった、男らしくやってくれ、というようなことで話は終わった。

停学はやがて解かれて私達は復校した。1年だけ別に、2年以上は一しょに、という学校の方針通りにやりながら、私達2年生に対して上級生は遠慮した。自由の空気が流れ込んで明るい寮になった。

私達のストライキのあと、女子師範でもストライキがあった。また他の学校でもストライキがあり、流行のようであった。

県下の大新聞の松陽新報が「一年回顧」と題して懸賞募集をした。県下の中等学校生を対象としたものだった。学生の動向反省、今後の方針などを知るよすがと考えたものだったろうか。

私は自習室で一気に書いて投書した、結果は松江中学5年生が首席、松江女学校1年生が2席、3席が私であった。4席が農林、5席が工業だったと思う。学校の番付けのようなものだと感じた。私は短歌を作りはじめていた。その後も新聞に投書した。他校の入賞者は誰一人地方文壇に顔を出さなかった。私が処女詩集を出した時、松陽新報社の主筆が往事をなつかしがって手紙をくれて、詩集を出すまで、と題して書いてくれといってきた。

当時の師範学校は全寮制度であったことはすでに書いた。松江市西方郊外、阿羅波比の地に

斐の上川柳八月抄

夏休みルール違反の旅に酔い　渡辺好之
間違ったままで伝わるいやな口　安部正子
ひぐらしにさそわれ山の宿をとる　松浦木公
国民が地獄へ落したリクルート　高木白虹
音だけは負けない老のポンコツ車　松田牛歩
もう言はぬ思った矢先き又小言　松浦久寿子
いじめると面白いと言う目が光る　藤原のぼる
寝相など気にして居れぬ熱帯夜　若槻白馬
嫁ぎ先近くてよいこと悪いこと　藤原千代子
選挙戦女性パワーに花が咲き　真綿よし子
落選で片眼ダルマだけ残り　横山まこと
物忘れ認めないからもつれ合う　杠京子
おろちの火吾が故里の誇りとし　中林もりえ
ハンドルに無事を祈って送り出し　田中芳春

う（鉄師の家計の中心は鉄業収入の30倍にも及ぶ安定した小作米収入である）のである。この二点の誤りから、幕末から明治初年にかけての仝鉄師の土地所有の拡大の詳細な記録も読み落している。地下構造構築の時代を、唯一つの理科学年代絶対視に引っ張られて、仝鉄師がその地に居住する以前に推定するという四重の誤まりも犯している。

もう一つは極めて最近のものである。若干の古文書は正しく読んであるだろうと思うが、その文書が独り歩きし過ぎて、松江藩の鉄行政の歴史を無視している誤まりを犯している。この文書の時代の、その地方の鉄生産の支配は、鉄師絲原氏の下に集中していたのである。次に理科学的年代に振り廻されて、鉄生産に関する拡大解釈がなされるという誤まりをも加えている。地下構造はあくまでも地下構造で、たたら操業の補完的一構造にすぎない。地下構造の規模の大小をそのまゝ発達段階と結んで、操業技術検討を行わずに時代設定する誤まりも犯し易い。大原郡の神原神社古墳出土の景初三年銘の三角縁神獣鏡も、鏡、

舎監や娯楽室などの1棟、1舎2舎、3舎・6舎まで並び、更に食堂の1棟があった。その1舎が自習室3つ、寝室6つに別れていて寝室には寝台があり、銃架があり、すべて軍隊式だった。

起床ラッパで起こされ廊下に整列、点呼であった。そのあと1年生の新聞当番は新聞をとりに行き、それと共にお茶を持帰るのだった。それから寝室へ行き寝床を整頓しておきそのあと食堂へ朝食をたべに出かけねばならなかった。むろん次のラッパが鳴ってからのことである。

朝食をとって自習室へ帰っていると、次のラッパがなり登校せねばならぬ時刻をしらせる。授業が終わるとラッパが鳴る。夕食のラッパ、自習時間のラッパ、夜の点検のラッパそして消灯のラッパ。消灯のラッパは静かに物淋しく消えて行った。

青春の友人

8棟の寮を控え、その傍らに二階建ての校舎があり大講堂があり、広い校庭を持つ師範学校だった。そこで1ケ年を過ごし、**2年目**にストライキをやったが自由の気が流れ、何となく活気が溢れ出した。3年生になったころ4年生が中心となり同人誌をやろうと呼びかけて来た。土居茂登、佐々木茂久などいう人達だった。1年下級の木島俊太郎も加わった。誌名を何としようか、と迷っている処へ、生田春月が松江市へ来たことを新聞が報じていた。そこで私達は春月が泊っている皆美館を訪ねた。

生田春月は隣県の鳥取県の出身で『霊魂の秋』や『感傷の春』などの詩集で有名だった。長篇『相寄る魂』の第一巻を刊行し、第二巻執筆のために松江市に来ているのだった。

皆美館の2階の1室に通された私達4人は小さくなって坐っていた。

やがて春月が現れたが、机上には洋書が見えた。落付かない様子である。神経質に右手の人指指を動かして煙草の灰を落とす仕草を繰返した。自分達はいま雑誌を出そうとしているのだが、誌名をつけてほしいと上級生の1人がいうと、春月は一寸困惑した表情になり「宍道湖があるんだから湖畔詩人では、英国のワーズワース達の事だし、そうだ湖畔だけではどうだろう。まあ帰京して考えておきましょう。」と云って、きゅっと唇を引きしめるのだった。また、自分は所謂詩人達とは交際がないので詩壇の情勢など知らないとも云うのだった。

私は生まれて初めて小説家、詩人という者に接したのだし、春月の右手の指の神経質な動きと、きゅっと引き締める口許のあたりの表情を心に焼きつけながら一同と共に引退った。無論雑誌の誌名などに就いては其後音沙汰なしだった。私達は「湖畔」という雑誌を翌年になって1冊だけ出して、それきりだった。

「湖畔」同人中で木島俊太郎君は光っていた。母1人、子1人という生活だった。

いいしより多く来りし母よりの金握りしめ佗びしみにけり

などという歌があった。2年生の時、大阪朝日の懸賞に応募して「乱世の夜更け」という自由詩が1等に入選した。卒業後、中等教員国語科検定に合格、更に高等教員国語科検定を受けて合格し、久しく母校で勤めていた。

3冊の詩集を刊行していたが、その他折にふれて書いた創作集と随想集の二つを、先年私の木犀書房から刊行した。

人間の能力には限りがあるも

七月句会抄

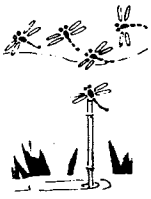
糸蜻蛉翅をたたみて夕焼けぬ　浅野としお
団扇弄りつつなかなかに言い出せず　岡田蹊花
蟬しぐれ昼寝の夢に溶けて入る　小川月舟
せみしぐれこわれた器合せみる　門脇花子
炎昼や納骨終えし戻り橋　加納信子
面影を個々に残して盆送り　楠房子
さまよえしあの日の川辺流れ星　高木白虹
炎天下人夫等黙して石を組む　新出谷一華
孫去んで無言の中の蟬時雨　錦織富江
手ぼたんをすませ静かな刻もどる　峯石美代子
枝蛙雨に追われて玻璃のぼる　渡部夕峰

の分類学の上からのみ論じて、邪馬台国との関係がいわれていたが、今日では中国の王仲殊論文によって疑問視され、最近の徐苹芳論文によって、中国の出土状況重視の研究にもとづいて、この鏡は邪馬台国とは関係がなく、魏が卑弥呼に送った鏡は、話題の吉野ケ里遺跡を含む北九州地方に出土していて、三角縁神獣鏡とは異質のものとなってきた。

鉄は錆びて失われもするが、常に鉄は鍛えて更生して使われ、鍛えて使われてうけつがれている。そこには今日にはない優れた鍛冶技術があったことを忘れてはならない。このことは別にあらためて紹介する予定である。

遺構と出土品を形状を中心とする検討では不十分である。実験考古学の重要性を考えねばならない。去る7月末の2日間の第8回横田たたら勉強会の報告によって認識を深めてほしいと思うものである。

（横田史談会　高橋一郎）



ので、全力をぶっつけて一事に当たる時は、そこに花開くもの。運不運もあるがそうした恵まれた人は進もうとする道の他を見てはいけない、と私はつくづく思うのである。

師範学校の4年間の生活を振返ってみても別に後悔するにとはなかった。2年生の時ストライキをしたのは、新しい時代の自由と正義を得るための止むをえないことであった。私達より1年上級は80名1年下級も80名が採用された。私達だけが37名であった。下級生は皆80名採用だったように思う。人数が少いと勢力の上でも圧倒されるのだが、別にそのようなことを意識したことはなかった。

堀割が学校の近くまで来ていた。そこにはボート小屋があった。放課後ボートを漕いだ。一、二年時代は選ばれてボート部にいたので、堀割を宍道湖までボートを進めた。宍道湖まで出ると広い水の上で楽しかった。嫁が島の近くで秋になるとボートレースがあった。各寮の競争で1位となりメダルをもらった。

その頃はマラソンが流行した。毎日放課後城山一周をやった。街の中をひた走りに走った。津田の松原まで走ったことがある。その時は10位まではメダルが出た。私は9番だったと思う。春の頃宍道湖一周というのがあった。大変な距離で、これには疲れた記憶があるだけ。

庭球部へ入って庭球をやり出したのは3年の頃からだと思う。放課後すぐにテニスコートへ集まり、日が暮れてボールが見えなくなるまでやった。一般の者は夕食をすましてコートの周囲へ集まり見ている。弥次を飛ばす。その中でボールを打つことは楽しみだった。

夏休みが来て私達は合宿した。真っ黒に日に焼けた頃山陰の中等学校庭球大会があった。いつも師範は負けていた。松江市では商業学校が強かった。

青春の師

その頃、西田幾太郎の『善の研究』を読めとすすめる教師があった。私も買求めたけれど純粋経験というものが分かったようで分からなかった。厨川白村の「近代の恋愛観」が朝日新聞に連載されたのは大正10年秋のことであった。至高な美しい恋愛が説かれた。白村の「近代文学十講」も皆が読んだ。この頃新潮社から出た文学や思想の十二講という本があって皆が読んだ。私もこれらの本を読み教科書にないことを教えられた。倉田百三の「愛と認識の出発」も多くの人に愛読された。百三は霊を重んじる考え方から、終には霊肉一致を唱え出したと記憶する。

芥川竜之助、菊池寛、久米正雄、志賀直哉、武者小路実篤そうした人達が文壇を賑わしていた。有島武郎は個人誌「泉」を出していた。「白樺」もあった。

新潮社に「文章倶楽部」という雑誌があった。私達はその程度でそこから新知識をえていた。佐藤春夫、宇野浩二などが新人として華やかな活動していた。島田清次郎が「地上」で騒がれたのもこの頃であった。

寮舎の一夜、寝床の中で皆それぞれ自分の将来の夢について語ったことがある。或者はベスタロッチを目標に大教育者になると云った。或者は法律を研究し花井卓三のようになりたいと云った。私は文学者になる。そして名をあげたいと云った。

中西悟堂氏が松江市普門院の住職、そして松陽新報の記者として居られたのは大正11年頃だったろうか。佐藤惣之助が多くの作品で新聞紙上を飾った記憶がある。

その頃山陰地方の歌人のアンソロジー「黎明」が山口広光によって編集刊行された。私も加わった。木島俊太郎も加わった。それも一集だけで終わった。

このようにして、私は大正13年3月に島根師範を卒業した。

（本文は『文学無限』第49号1979年から転載—数字は算用数字に直した）

秋の史蹟めぐり

岡山県成羽町（美術とべんがらの里）へ計画中。

蜩と百日紅と　簸の上短歌会

慰めの言葉かけつつわが裡に哀しくも小さき優越感のあり　永井弥生

ねんごろに洗ひし墓碑の艶めきて滴は仏の語るごとくに　岡田時子

口走りし棘はおのれを疵つけて月光る刻を眠れずにゐる　松浦愛子

梨剥きてわれにすすめし君の掌の素直なるものの形を保つ　常盤はるまさ

降るほどの蜩の声聞きたしと透析で生きる友の文来ぬ　佐藤喜代子

君葬りて帰る夜汽車の窓にみる若狭の海の漁火かなし　安部夕波

それぞれに暑くおもたき原爆の日のめぐり来ぬ百日紅咲く　永井弥生

藤原道夫氏を悼みて

賜りし一冊の著書をひもどけば君の温顔まぶたにうかぶ　安部夕波

会員頒布一部百五十五円／六冗一八　島根県仁多郡横田町一、〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎　振替口座松江〇一一六〇一）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 174 号
（10 月 号）
1989　10. 6
（M122・T78・S64）
奥出雲編集集団©

奥出雲と文学・芸術③

頼春風・頼杏坪の紀行（上）

頼一家

頼又十郎惟清
- 春水―山陽
- 春風
- 杏坪

頼山陽といえば江戸後期の儒学者で、その代表作はあまりにも著名な「日本外史」で、その説は当時よく世間に流伝し、幕末の思想の一つの支柱となった。

この書は父春水の志を継ぎ、著したもので、父と交渉の深かった松平定信に献じたものである。時に定信70才、山陽28才の1827（文政10）年のことであった。

松平定信は奥州白河藩主で、天明の飢饉（全国的に襲った飢饉で、出雲地方もひどかったが、とくに奥州はその被害が著しかった。いずれ当地については掲載したい）にあたり、倹約をすすめ窮民の救済の実をあげた。間もなく1785（天明5）年幕府老中首座となり寛政の改革を断行した。寛政の改革は前老中田沼意次（おきつぐ）時代の失政を正したことである。田沼政治には旧来の格式にとわれぬ新らしさがあったが、商人との結託による賄路政治の横行を必然化し、特に農村農民生活を窮乏に追いこみ、一揆や都市打ちこわしが激化し、その上に天明年間（1781～1788）の飢饉凶災はこれに一層の拍車をかけたので終った。

その後を引きうけた定信は、財政面での緊縮政策と重農政策（産業をすすめるのに農業に重点を置く）と商業資本の抑圧制策を中心として寛政の改革を進めた。間もなく辞して（1793寛政5）藩政に力を尽した（この間に出雲から村下を招き、たたら製鉄も試みた。いずれ紹介予定）。定信は自ら学問もきわめ、「字下人言」「国本論」ほかの著書も残している。藩政に専念してから36年後の1829（文政12）年72才で歿した。

本号の時代

1816文政元　松平不昧没
2　小林一茶「おらが春」成る。塙保己一「群書類従」刊行。
3　この年から対島藩、朝鮮から銀の輸入はじめる。スペイン・ポルトガルで革命。
4　幕府は民間の銀使用を禁ず。
5　このころ頻りと外国船沿岸に寄港し、薪水を求める。
6　ドイツ人シーボルト長崎の出島に着任。

頼春水は儒学者で大阪に遊学し、大阪江戸堀に開塾した。この時弟の春風・杏坪を呼び寄せて学ばせた。のち江戸の広島藩邸に出仕、尾藤二洲らの推挙で幕府の昌平黌でも学問を講じ、また藩主の世子や在府子弟の教育にも努めた。松平定信との交わりも深く、国史編纂にも関心を示した。1816（文化13）年71才で歿す。

頼山陽は頼春水の子で安芸国賀茂郡竹原下村（現竹原市内）に生まれた。はじめは叔父杏坪について学び、18才で江戸に出で上の叔父春風の師尾藤二洲の塾で学んで帰郷した。学問を好み博識、その上詩文をよくしたが、性格は豪放・奔放で、遊蕩の日を送り、21才の時出奔して罪を得た。自邸に監禁された3年間に「日本外史」の草稿をまとめた。1809（文化6）年30才の時、備後国神辺の菅茶山に招かれて、その廉塾の塾頭となった（本紙170号参照）。のち京都に出て子弟を集めて教え、多くの文人学者らと交り、とくに梁川星巌・大塩平八郎らと親交があった。晩年肺を病み歿した。史書・詩書が多数ある。（1780安永9～1832天保3）。

頼春風は春水の弟で町人学者で、大阪で学び医術も修めるが、儒学の師で兄の師でもあった尾藤二洲の代講を勤めるほどであった。21才で帰郷し医者を開業した。やがて塩田経営に乗り出し、30才ころから春風館を建設し、41才の1793（寛政5）には竹原書院の創立に努力し、子弟の教育にあたり、竹原文化に貢献した。1825（文政8）年73才で歿した。旅行を好み紀行文を残している。1806（文化3）年54才の時の「雲行日記」という雲伯紀行を紹介する（次回㊦で）。

頼杏坪は春風の弟である。長兄春水に師事して儒学を修め、28才で兄春水の家来となり江戸詰となる。江戸で山崎闇斎派の儒学を学び、30才で広島藩儒に登用される。56才で御納戸奉行上席そして郡役所詰となって郡政に関与する。その翌年には三次・恵蘇両郡の代官となり、たたら製鉄をめぐる役人層の不正を摘発した。その翌1813（文化10）年58才でさらに、奴可・三上両郡の代官も兼ねることになった。

学者杏坪の地方政治への起用は、封建社会の行き詰り、村内矛盾の表面化、百姓一揆の頻発、社会不安といった社会情勢に、力による上からの一方的抑圧に限界を感じた藩側が、朱子学者杏坪の人格識見による仁政に期待したものといえる。

杏坪は地方政治のあり方について、一、父母の慈をもって民衆に接し、細やかな人情を察し教え諭（さと）すこと。一、遊民を糾（ただ）し、貧吏をしりぞけ、農を勧め、税を軽くすること。一、村むらをよく視察して、実情に即した政治を心掛けることなどを強調している。朱子学者の面目躍如たるものがある。加えて行政手腕は卓抜であり、常に奸吏を投獄

して厳罰に処し、郡内の醜吏を粛清するとともに、行財政の調整執行を図った。

戦前の高等小学校修身書巻一には、「敬老」という章があって、杏坪が代官の時代恵蘇郡からはじめて、各村々で敬老の催をしたので、民心が敦厚に向かったことをしるしていた。このことは杏坪の著書「老の絮言」にしるされている。杏坪にも著書が多い。広島藩は藩内の歴史地理をまとめたが、杏坪はその中心となって、代官時代5年の歳月をかけて「芸藩通志」を脱稿した。1825（文政8）年70才の時である。（松江藩の「雲陽誌」もすぐれた著作であるが、これより100余年後のものであり、産業経済の記事も豊富で、一段とすぐれている）。

本号で紹介する「しほゆあみの記」は、杏坪が「芸藩通志」編纂に入る前の65才1820（文政3）年の、くつろいだ和歌を交えた紀行文である。

その8年後73才で三次町（現三次市）奉行となり、75才で官を辞し、79才で（1834天保5）没した。

「しほゆあみの記」

4郡の代官を兼ねていた65才の杏坪は、休暇をとって広島を発し、三次・庄原を経て奥出雲へ入り、下って松江などを経て石見の温泉津温泉にしばらく滞在し、入湯療養をなし、邑智郡を経て広島に帰るまでの紀行文である。全文は長いので、杏坪の人柄、学識の深さ、交遊の広さを伝えている部分を、原文そのまゝや要約によって追うこととする。

「をのれあしのけをやみ、さして折にふれてはたちをこること侍るをしほゆあみこそよからめとすゝむるくすしのあなれとあかたのみことうけもたる身にてあれはそかためにためらわれてゆきもえせさりけることしあかたの春めくりする序につぬさはふ石見のしほにまかてはやとみに思ひ立てみゆるしをかうむり出たつは弥生の末の八日なり」

と書き出されている。漢学者であるのに、古語の多いやまとことばに、しきりと和歌ー杏坪はざれ歌というーを交えたもの。

私の足の病はさほどではないが、時折り再発している。医者は湯治がよいとすゝめてくれたが、郡の代官を勤める身のため遠慮して行かなかった。今年の春の地方（郡）巡視に出るついでに、足をのばして石見の（つぬさはふ＝つぬさわうは石見の枕詞）温泉にひたってみたいと強く思うたので、お上のお許しを蒙って出発したのは三月（陰暦）廿八日であった。

腰刀にに火打袋（火をおこす道具＝火打ち石・火打ち金・ほくち を入れた袋）をくくった軽装で出たが、単なる旅行でもなく（巡視である）足も悪いので、簡単なつりかごに乗り、伴をつれて村々を歩く。もう勤めも辞退してよい年なのに、しかも湯治に行くとは、村人に対して申しわけもない。深いお恵みのお蔭である。一日でも早く元気になって勤めねばと思い

年たけて世にふるほどのあらぬ身も恵み思へばすてまうき哉　（年ばかりとって、それほどのことも出来ぬ身であるのに、お上みの恵みを思うと）

の心境である。勤めはじめてまだ果せぬことも多い。誰にも言うべきことでもないので、

打いては燧袋もしりぬべしひとりおもいをつゝみてそゆく

腰の火打ち道具を打てば音がする。袋に入った道具のように、ひっそりとこの思いは包んでゆこうと、極めて謙譲な気持をのべている。

こうして各地を過ぎ、風景を和歌によみ、地名の由来や歴史をのべている。

かっての毛利氏の本城のある吉田では、丁度250年前のことだと感懐をのべ、廿九日船に乗り可愛川（江川の支流）を下って三次に着く。（4月1日出発して村々の村の長に会ったこと、その治政のさまを記している。またかって敬老の催をした村では思い出をのべている）

庄原から西城を経て田鋤、神鳥原、油木に至り、国境を護る役をいたわってそこに泊った。

丁度讃岐国人三野信平という儒者が泊っていた。西城で教えているが遊びに来ているとのことで、2人で夜をあかして語った。

をもはすも吉備と出雲のさかひにて讃岐の人と寝語らんと

は

そして4日には国の境である三井野原に着く。児が池という小さい池がある。干魃の時に出雲の人々は、この池に雨乞の祈りをするという。

たつね来て影うつす人もあらなくに誰にみいのゝ水はすむらん

里の童子がいたので聞いたら、蕨をとっているところという。

ほとろにもならんみ山の老わらび又折る人のあるよなりけり（ほとろ＝ほどろ＝蕨の穂がのびすぎてほうけたもの）

そこで菫が咲いていたので、

山かつの家ひとつたにあらぬ野に誰とすみれの花やさくらん

（と言葉遊びの歌をのせる）

こゝは山陰と山陽の分れる所である。

三井野の水は北に流れて肥の川に入り、南へ流れるのはもと来た道にそって江川にそゝぎ、石見へ至るが、そこは遠い。私は松江に出て時々の便りで招かれている道光法師に会うつもりである。

（奥出雲170号参照、道光は頼山陽とも、菅茶山とも交友があり、杏坪とも心安かった）

まつといふ松江はいつこしらま弓　出雲の山にまつそいり

ぬる

杏坪は日本書紀・出雲国風土記にもくわしかった。こゝでそれをもとに書いている。

イザナミ（伊弉冉尊）は出雲と伯耆の境の比婆山に葬られ、能義郡に陵があるという。また備後に比婆山（吾妻山連峰）があって伊弉冉社もある。続いている高い山の頂上には、故あるらしい石が重なりあい、老木の繁みもある。その南には熊野三社の古い宮がある。山の北面は仁多郡で伯耆の境は遠いから、出雲人はこの山をもとせ山と呼ようであるが、すべての山はひの山であろう。もとせとの意はわからぬが、尊がはじめて葬られたということであろうか。

いさなみのをさまりますはいつこそと問わや比婆の峯の白雪

鳥上の峯は遠くはない。スサノオが大蛇を斬ったのもこのあたりであろう。斬った剣は吉備の神部がもとにあって、すなわちひの川上の山はこれであると、「日本紀」（日本書紀）にもみえ、神部とはさきの熊野社の神の司で　ろう。吉備とあるが出雲のひの川上に続く山は備前備中にはなくて、この備後の国のこの神である。今備前石上（いそのかみ）の社にあるとは、後にこゝから移されたであろう。地理をもて書紀の文理を考えればよくかなっていて、心に疑うこともない（と考証している）。

また書紀の一説に、安芸国の可愛川の川上とあるはどの川であろうか。備後・安芸より流れて石見へ入る大川があるが、石見の江の川といって、安芸の江の川とは言はない。旧事記に出雲と安芸との境鳥上の峰に降りとあることから、ひの川上と可愛川とを一つ所によせ合わせようとしたもので、地理にくらいからである。（と考証を加えている）

天飛（そら）ぶや雁のつはさをわれにかせ　とはばやもとの鳥上の峯

三井野は高いので峻（けわ）しい坂を下って矢川（八川）の里に入る。

弓木の山まがりまがりてすき行けは　やがてすくなる矢川なりけり

里人が馬を引いていたが、みな新笹をそろえて負わせていて草を負わせるのは全くみられない。

風土記にみえる横田の里へ出て川を流る。ひの川の川上だという。

ひの川の水はやまたに流るめり　大蛇のかげを今もうつして

三所・八代をすぎて狭代（佐白）で泊る。

5日狭白をたって、大原郡に入る。伯耆（ほうき）大山をと思ったが見えなかった。

雲霧をはらへはゝきの大山をわれに見せんと風のをもはは

と。（杏坪は地理上の判断を誤まっている）

この地方でははぜ（ハゼノキ）を沢山植えている。蝋を多く作るのであろうか。（と土地の生業にも眼を向けている）

大東・玉造をすぎて初めて湖（宍道湖）をみた。思ったよりも大きく驚いた。景色も美しい。

湖を右に巡って松江の府に入った。松江の目代（町庄屋）—代官のためであろう—の案内で八軒屋という宿に入った。

家は狭くてしかも小暗く、二階への階段も暗くて、上り下りも難しかった。便りをして置いた道光法師が訪ねてくれて悦んだが、旅人は一夜しか泊られないい掟（おきて）があり、法師の庵は松江の西二里ばかりの九谷村で遠く、明日一日ほどでも話そうと、その夜は別れた。

翌日は法師の案内で府内を見物し、小豆沢某（本紙72 73合併号参照、松江末次の豪商小豆屋勝延のこと。二条流歌人でもあった父勝興＝常悦と同じく歌をよくする）の百忍庵を訪ねた。巧みにつくられた茶室で茶を喫し、庵の裏に出たところ舟があった。法師の心尽しで来ていた建田某とともに乗って西へ向うと、東の伯耆の大山西の石見の三瓶山までの山々が美しく、松江の城は樹木にみえかくれし、漁船も浮ぶ景色は、書や絵にもあらわすことができないほどである。

舟で狭田神社（佐陀大社であろうか。秋鹿郡のあたりとあるから）をたずね、かえして大橋の下を下ると、湖は狭くなり鯉が沢山いた。東に行けば三保が崎・弓が浜があると誘われたが

をほやけの便とならはもろこ船　三保か崎をもさしてゆかまし

と断った。

道光と別れを惜しんで宿に入った。すると備中の小倉某がいて

八月句会抄

押されては流灯触れてまた別る　浅野としお
殺戮の世や稲熟れ山彩づく　岡田蹊花
吸殻を秋の出水に投げて愚痴　小川月舟
白鷺の群れなし翔ちて今朝の秋　門脇花子
通う度青柿太る歯科の窓　加納信子
いわし雲山のひる湯に肩沈め　楠房子
訪えば門辺にこぼる萩の家　高木白虹
大輪の花火が〆める踊りの輪　新出谷一華
にっこりと可愛いい百才秋を編む　錦織富江
娘に送る花切るはさみの音に秋　峯石美代子
揚羽蝶水面の吾が影よぎり行く　渡部夕峰

斐の上川柳九月抄

奥さんに浮気を詫びて励げまされ　松田牛歩
盆過ぎて風鈴の音に秋の色　安部正子
小細工をして醜聞をさらけ出し　松浦亜以
物騒な世相に仕合はせ祈る親心　若槻愛散人
仏前に初物あれこれ嫁姑　真綿よし子
米少し食べても子供よく育ち　石原冬明
目に見えぬ人の心のむずかしさ　若槻白馬
言葉にはならぬ悩みを持って生き　藤原のぼる
亡くなった母の年です香をたく　松浦久寿子
土曜日が休みで銀行のせいに出来　横山まこと
夏休み終れば尖る子にもどり　高木白虹
紅させば孫がめずらしげに見つめ　藤原千代子
盆終わり寝ても起きても我一人　田中有樹絵
朝夕の冷えを寒いともうぼやき　松浦木公
食卓の花に変って子の笑顔　中林もりえ
奥出雲来て見て蕎麦の味を知り　藤原ユキ子
三姉妹枕を並べるだけでいい　杠京子
新調を着せてハラハラ孫の守り　佐木千世
夏休み母さん宿題子はテレビ　佐田芳春

身辺有情

簸の上短歌会

主婦たちの言挙げざりし家事といふきりなき仕事に
おそれを持ちて　常盤はるまさ
八月の日毎夜毎に太りたらむ毬の中なる艶めく栗の　仝人
地下足袋の泥乾けるを朝の陽に強く叩きて子は履き
て行く　佐藤喜代子
垂れこめし雲の切れ目に陽の洩れて長病む伯父の顔
を照らしぬ　仝人
山に近き仮設厨の背戸庭に毬栗まろびて秋深むらし
台風の過ぎし夕べのしづもりに雲間に冴えて中天の
月　野村節子
ささいなることに拘わりし今日ひと日地に伏すコス
モスの上向きて咲く　岡田時子
楚々として風にゆれゐる吾亦紅夫への拘わりを捨て
むと思ふ　永井弥生
暮れなづむ斐伊の河原の堤径少年草笛鳴らして行け
り　仝人
藤原道夫氏を憶ふ　安部夕波
君すでにこの世にまさず教会の尖塔きらめく夕映え
の空　安部夕波

因幡（伯耆の誤まりであろう）の米子に同行しようと重ねてすゝめてくれたが、

いなはにもいなとはいはすゆきて見ん　いは見のゆあみ心いれすは

と翌7日は宍道の宿へ。オオナムチがしゝを追われた道によってこう呼ばれたと、出雲国風土記にある。向ひには一畑薬師がある。直江・今市のひの川をわたって杵築に泊った。

8日は出雲大社の神人の出迎えをうけて正式参拝をした。

天か下つくりてこゝにのかれすむ　大あなむちの神そたうとき　（他4首）

稲佐の浜をすぎ日御碕神社に参拝。9日油木村で会ってから同行していた儒者と別れ、多岐・波根・大田を経て天領大森のさる宿に泊る。

10日は大森銀山へ。山をめぐり、たたらを吹いての溶鉱のさまをみ、温泉津に着き湯本へゆく。

つのさはふいは見の国の岩間より　いつる出て湯は千代とぬるまり

日々湯治を重ねるほど、身も軽るく脚も運びやすくなった。湯かたびらや手拭やふんどしなど、みな湯がしみて色づいた。

13日、こゝまで槍を持たせて供をさせていた仲間の親が、病重しとのことで帰らせた。

近くを見物している時、しゃみというもの（三味線）を鳴らして歌っている女をみて尋ねたところ、土地の者ではなくはるか都から下った芸者と聞き、国の端まで下って浮舟の定めなき遊びをすることあわれである。

（2首の歌がある。そしてこゝで古典を引いて、石見のことをくわしくのべている）

18日出発、江津から江の川を上り、市木から陸路山を越えて安芸の国へ。各村々で庄屋の出迎えをうけ、20日夕方家に帰る。

幼い女の孫ども歩み出て出迎えてくれた。火打袋より出雲で拾った、いろいろの小石を出して分け与えた。

道すがらよんだざれ歌は、歌ではないが捨てるのも惜しまれて、後日のなぐさめにと書きおく。

（3週間余りの旅は終る）

頼杏坪と新井白石

白石は江戸中期の儒学者・政治家。6代将軍家宣に仕え、一体分身と家宣をして言わしめたほどの信頼関係のもとに幕政を展開し、ついで7代家継も補佐して功績をあげ、8代吉宗がつくと致仕し、隠遁生活をおくった。家宣への進講のために書いたのが「読史余論」「藩翰譜」等で、すぐれた合理的な歴史思考を示しており、史学史上に占める地位が高く、今日価値あるものが多い。宣教師シドッティから聞いてまとめた「西洋紀聞」ほかは進歩的な合理的思考を示している。言語学・文献学の著作も多く、学問領域の広さと先駆的な業績において近世屈指の大学者と目されている。

それに比べ杏坪は一地方民政家らしく、古典の史書には、地理的検討は加えているが、あくまでも儒学者らしい訓詁の学の範囲を抜け出ていない。この紀行文にもそれが張っている。また和歌も文中自らざれ歌といっている如く、抒情味には乏しい。

温泉津の元湯の主人宅の写本を写された藤沢秀晴氏の御厚意で拝見できたことを謝す

（横田史談会　高橋一郎）

会員頒布一部百五十五円／六六—一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0160 1）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

横田再認識への普及号（第1号）

篤志家の御協力によって増刷

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 175 号
（11 月 号）
1989　11.　5
（M122・T78・S64）
奥出雲編集集団©

よその人に横田を搔き廻させてはならない。横田のために黙っておれない。極めてくだいて、ズバリと要点を訴えたもの。

日本一のたたらの里・横田を確固なものにするための基本的考え方と具体化の要点

まず　文化財として保存し、それを生かしてこそ　観光上も役立つ

流行している　ゲテものつくりはやめよう

① 古代・中世のたたらは、学問上では貴重であるが、観光上は訴えが弱い

横田の古代の歴史は観光にはならない。横田の中世の歴史の中で生まれて、今日ある寺院・神社・土豪の屋敷などは、ほかにはない伝統あるもので、観光に十分生かすことが出来る。これは、第2号以下で再認識のため紹介する。

② 近世（江戸時代）・近代（明治・大正）のたたらは、観光に生かせて強い

近世半ば（宝暦年間1751～1763）以降の奥出雲の鉄師ー横田では杠・卜蔵・絲原ーは、日本の鉄の60％を生産していた。――中国地方で95％――

その実績・残された遺物・古い記録（古文書）の多いことでは、ほかの鉄師の及ぶところでない。

しかも、鉄師の住居とたたら場（工場）さらに事務者・技術者（村下などのたたら師）が、同じ場所で生活し、たたら吹き（操業）に従っていたということは、すばらしいことで、ほかにはないことである。この点を忘れてはならない。

④ 現代の　鉄穴流し、日刀保たたら、鳥上の木炭銑工場の角炉は　補修すればすぐに稼動する

それは観光にも役立ち、鋼や銑（木炭銑）をつくると、それが特産品づくりにつながることになる。

↖上の段の2～3頁には具体案がのべてある。

この下段の1～4頁は　**今までの誤まり**を明らかにしてある。

たたらについては研究者の間でも、誤まった考えを持つ者が極めて多い。県の先導的計画にも誤まりがある。吉田村の展示にもある。横田こそ正しいものを目指して、横田でしか出来ないものを実現せねばならない。

誤まった知識を正しくしよう

① たたらは　銑つくりが主体であり　大鍛冶屋と一貫して考えないと　理解できない

近世（江戸時代）以降の企業たたら（普通いうたたらのことで、正しくはこういゝたい。鉄師の卜蔵・絲原・桜井・田部の諸氏の経営した、たたらと大鍛冶のこと）の製品は、銑つくりが主で、これを大鍛冶場で割鉄（包丁鉄）として出荷していた。

鋼はわずかで、副産物程度であった。収入の上では、割鉄は鋼の2倍の値段がしていたから、営業収入の8割を銑から作った割鉄が占め、鋼は2割にすぎなかった。

製品の6割が銑（鋳物鉄にもなる）で、4割が鋼、この鋼の中に鋼（明治半ばから小さく割って出したので、形から良いものを玉鋼といった）が約½あった。残りを歩鋼といゝ、これと銑を大鍛冶場で割鉄（明治半ばから包丁鉄といった。普通の鉄＝錬鉄である）とした。

明治の半ばまでは村の鍛冶屋は大鍛冶技術（銑・鋼を割鉄にしたり、それを鋼にする技術）をもっていたが、洋鉄や洋鋼が入るとその必要がなくなり、次第に忘れ、小鍛冶技術（道具をつくり、鋼の刃をつける技術）のみを伝承して今日に至った。このことを基本に置かないと誤まりを犯すもとになる。

このたたら吹き（操業）は1922（大正11）年頃の一揃廃業まで続いた。戦時中に日本刀の需要が増えると、このたたらで作る

宣伝文句になっている言葉は　ほんものを見失わせる　まづほんものを知ることから　短歌・俳句・川柳

具体案＝二つの拠点で

① 現代のたたらと刀鍛冶・鋳物館及びその周辺　（大呂・竹崎）

㋑鉄穴流し－水路・本場の修覆と、観光向け実演と技術伝承

船通山中腹のカガラ峠に発し、大平山の中腹を上下二筋で走り、万丈峠に至る水路（大平井手）－途中に天然記念物桂の巨木－4キロを修覆し、万丈峠の池に水を引き（戦後も使用されていた）、谷川の水とともに、羽内谷鉱山に引き入れるようにする。羽内谷鉱山の麓の鉄穴流しの本場を修覆する。文化財保存と鉄穴流し技術伝承を目的として、春秋2回鉄穴流しの実演を行う。河川汚濁防止法の許容範囲内で、砂鉄採取より実演と技術伝承できる量の山砂を流すよう許可を得、春秋各10日間程度行う。

㋺木炭銑工場の角炉を二基補修し、電動の差吹吹子4挺を備えて稼動させる。

かつての水車動力装置も復元して水車の回転も行う。そして、鉄穴流しを実演する春秋2回の各10日間に合わせ、角炉の操業を行い。木炭銑を100トン余生産する。砂鉄・木炭があり、かつての技術者も健在である。観光にも公開する。

この木炭銑を用い、新設した小鋳物工場で、たたらの里の土産品にふさわしいものを、年間を通じて生産する。

㋩日刀保たたらと美術刀剣鍛錬

日刀保たたらの見学については、可能であれば、現在の高殿の外に見学用の桟敷を設けて、見学の便を計る。操業の行われない時は、操業などの映像を観光用に編集して見学できるようにする。

美術刀剣鍛造については、出来れば㋑㋺の春秋2回の実演公開にあわせて、各地の刀匠の協力実演を可能な範囲でお願いする。

② 鉄師とたたらの歴史館　（大馬木・雨川）

これからの博物館は箱入り模型の形式を脱しなければならない。その点当町にはすばらしい遺蹟・実物・記録があるので、その環境内で展示するのが最もよい。

㋑大峠の鈩の地下構造の保存

近世企業たたらの第3期に入る前のたたらである、杠氏経営の大峠鈩の地下構造を保存

鋼（和鋼・玉鋼）でないと、強くて美しい日本刀が造れないので（洋鋼では刀ができても美しさがない）、1933（昭和8）年から鳥上の靖国鈩などが設けられて、企業たたらが復活した。だが生産するものは、廃止前と同じ生産量であり、銑・鋼の割合も同じものであった。

知られる通り昭和52年より美術刀剣の材料としての和鋼がないため、靖国鈩を復活して**日刀保たたら**の操業が始まった。いろいろの条件によって、安部村下は銑をつくらず、鋼（中に鋼がある）のみをつくる、今までの**伝統にない操業に成功**した。だが**鋼の大きさは昔と同じ**であり、中の鋼の量も同じである。

（使用する砂鉄の量が少ないほど銑ができていない）

かって生産性が低くて、洋鉄に太刀打ち出来なくて、たたら製鉄は廃止されたが、今は採算を無視して文化事業として、数少ない日本刀製作に必要なだけの量を生産している。この技術の真随は現代の科学でも究明が出来ないので、村下の経験と勘によっている。そこに世界で唯一か所横田で操業されている理由がある。

ところが著名な刀匠の中には、古代の名刀（たとえば伯耆安綱の「童子切り」－国宝）とならぶものを鍛造するには、昔の銑などを鋼にした大鍛冶技術を修得してやらねばならぬと、研究しているものもいる。

② 今は1代（ひと操業）3昼夜であるが（三日押という）、もとは4昼夜かゝった（四日押という）。

浜田出身の故俵国一博士は、三日押を鈩押法、四日押を銑押法と呼んだ。そして鈩押法は真砂砂鉄の多いところで、銑押法は赤目砂鉄地帯で行われているとした。博士の論文には三日押（鈩押法）の製品の中味は、①で述べたような銑・鋼の割合が正しく書かれている。ところが玉鋼優秀ということに幻惑されて、真砂砂鉄地帯の奥出雲の多くは鈩押法（三日押）で鋼を主につくっていたと誤まられている。それが現在でも信じられて

する。

㋺絲原記念館の附近に新設するか、あるいは拡充して、たたらの歴史館を充実する。

宍道町の集古館・平田市の旧本陣記念館にみるように、財団設立者と自治体の協力と分担によって実現する。たたらの歴史館だけでは、多数の見学者を継続して、絶えず集めることが難かしいことは、吉田村資料館がよい例である。絲原記念館は鉄師の生活の姿、その美術品・民具の魅力が、見学者をひきつけ、ひきも切らず集ってくるのである。

拡充するのは絲原・卜蔵両氏の記録によって天秤吹子を復元し、たたら炉を設けその全容を展示し、動く工夫も加える。大鍛冶場も拡充し、その工程もくわしく展示し、動く工夫も加える。

砂鉄・木炭に関するすべてを拡充する。古文書による奥出雲の近世企業たたらの歴史をわかるようにする。わが国に占めるその主産地としての重要さをも、古文書から明らかにする。

鉄師とたたら場の生活のすべて、奥出雲の農村・農民とたたら製鉄のかゝわりの歴史を明らかにする。

その他、風習・習慣・民俗信仰も明らかにし、鉄師・たたら師の住んだその現地で、生き生きと見学できるようにする。

わが国のたたらの発達史の場所も設ける。近くにある隠地たたらの遺跡もこれに関連させ、大峠鈩の地下構造の位置づけも明らかにする。出来うれば、鉄穴鈩の地下構造の¼を発掘し保存し、この中に位置づける。

たたらに関する、実在したたたら場に於ける資料館として、恐らく全国唯一のものが実現する。気宇宏大に計画壮大に実現を計りたい。

物語風な読みもの　近刊　前編　横田の歴史　後編　企業たたら

横田とたたら

ー育てた人々と経済ー

A5(総合雑誌)型 120頁
わかり易くするため写真・図表・年表・注を多く　表紙カラー
十一月下旬刊行
注文数で800～900円位

①風土記時代　②縄文・弥生・古墳時代　③7世紀　④物語の多い神話時代　⑤奈良・平安時代、横田の古い家8氏　⑥古い寺と社　⑦明徳の乱　⑧中世の社会と経済　⑨近世から現代へ

①企業たたら　②自給たたら　③砂鉄　④たたら操業と製品　⑤奥出雲が中心地となったのは　⑥製鉄史　⑦美術刀剣と日刀保たたら

横田史談会員数のほかは予約分のみ印刷予定
一般の方は大同書店へ申込みのほど

いて、学会でさえ①の話のことを話すと驚かれるのである。

奥出雲の鉄師の記録では、三日押・四日押と呼んでいて、鋤押法・銑押法とは全く書いてない。そこで筆者は当地方の用語で三日押・四日押としている。（ただし、①で述べたように、日刀保たたらは三日押であるが、鋤のみをつくっているから、鋤押法といってよいと思うが、また誤まらぬように、新三日押ということにしたい）

近世企業たたらは、はじめは四日押で真砂砂鉄地帯も赤目砂鉄地帯も銑つくりが主目的であった。赤目砂鉄の四日押でも小さい鋤のできることもあり、割って鋼（質良くない）やそれに近いものを、ほんの僅かとっていた。真砂砂鉄の多い地帯でも二日半位で炉（釜）が破損して操業をやめると割れる小さい鋤もとれていたが、四日押の完全な操業では大きい鋤ができ割ることができず、捨てていた。それでも多量の銑がとれ割鉄として採算はとれていた。1751～1763（宝暦）年間からこれを割ることに成功したのである。そして1818～1829（文政）年間からは4昼夜を1日短縮する合理化をはじめ、30余年を経て1758（安政5）年ころから、完全に3昼夜になり、これを三日押と呼んでいる。したがって、奥出雲でも赤目砂鉄の多い飯石郡の大半はずっと四日押であった。このことも認識を新らたにせねばならない。

③ 近世企業たたらに対する自給たたらについて

大規模で製品販売を目的とするたたらを企業たたらといい、近世になって完成したものを近世企業たたらという。今日一般に言うたたらのことである。それに対し古代のたたら、中世から近世にかけて自家用程度の鉄をつくった小規模たたらを、自給たたら（仮称）という。この製品は近世企業たたらのような良い鋤でなく、粗鋤といってよいもので小さいものが出来ていた。これを自家用農具などの製作に、大鍛冶技術も合わせもつ鍛冶屋が役立てていた。古代はたたらを吹く者と鍛冶屋とは一体であったようである。戦国時代は明らかになっていないが、

本号の論旨はすべて学会で発表したものにもとづいたもの　くわしくは本誌及び本誌160号を

全国的に企業たたら（近世企業たたらに対して初期企業たたらと仮称）がひろがり、自給たたらもかなり普及したようである。江戸時代には当地方でも自給たたらは、農民の間で自給用として必要に応じて操業されていた。

ところが明治時代になると洋鉄が入り、わが国でも生産されると、たやすくしかも安価に手に入るようになったので、急にすたれたようである。ところが昨今は各地で、鉄を作ろうと手に入り易い砂鉄を用いて、小規模たたらの操業が試みられていて、昔のような粗鋤ができている。刀匠の中にはこれに類するたたらで粗鋤などを作って、鋼を作り出している者もいる。

たたらについては、企業と自給と二つの規模別に分けて考える必要があると提唱し、次第に研究者の中に理解者が増えてきた。従って「野だたら」という言葉は使わないことにしている。

これはたたらの分類や発達を考えるのに誤まりを犯す恐れがあるからである。

④　奥出雲の鉄師の本業と功績

こゝでは詳しく述べないが、松江藩の鉄行政の巧みさから、大水田地主層のものにのみ許可し、保護も加えたので、近世企業たたらは完成し、日本の主産地となった。しかし鉄師の経済の中心は所有田の米収入であった。歴史を振りかえると、鉄価は不安定で収入の上では副業程度であった。だが殆んどの農民は、鉄穴流し・炭焼き・それらの運搬、さらに製品の運搬に従って賃金を得で、その生活の維持ができたから、鉄不況の時も藩の保護で操業を続けたので、農民は中国地方の他の藩と違って、百姓一揆などをおこすこともなかった。

横田町内鉄師は、高殿のあるたたら場を中心に、職人と共に生活したから、農村や農民の事情に明るく、明治維新以後、企業たたらは洋式製鉄に対抗できないと、農村の構造改善——農作物の多様化と畜産の振興の陣頭に立って成功し、次々と金融・交通・教育などの新らしい事業も導入し成功させた。

斐の上川柳十月抄

水筒が空らになる頃鮪一尾　高木白虹
今昔で変らぬものは女性観　田中有樹絵
旬の味母の自慢の栗ご飯　真綿よし子
おいしいとはずむお箸の行方追い　中林もりえ
人の道開けてもあけてもドアがある　若槻白馬
楽しい日暦に印をつけてあり　松浦久寿子
老女とは言はず女性と言って欲し　松浦亜以
追悼式黙悼の向うに亡夫が立ち　安部正子
余る程出来るつもりが雨続き　松浦木公
庭木作りお隣りさんと栗ごはん　杠京子
横文字がやたらにふえて老思案　松田牛歩
違うとは言えない辛さもどかしさ　藤原千代子

秋韻唱　簸の上短歌会

千巻の写経を果せし友の庭はコスモスの中にひとすじの道　永井弥生
木犀の匂ふ日向に物干すにあきつ止りて羽根をふるわす　岡田時子
若き日の子にかかはりし諍ひも杳かとなりて夫の肩もむ　野村節子
先行きの生思ひつつ夕されば病む妻と採る食事をつくる　常盤はるまさ
背をまるめバイクを飛ばして競ふごと逃げ行く人を雷雨追ひかく　佐藤喜代子
藤原道夫氏に捧ぐ
葬りて君愛唱の讃美歌をうたへばおもかげ瞼に浮かぶ　安部夕波

九月句会抄

古墳来て溝蕎麦の紅またぎけれ　浅野としお
半ば朽ち残る土橋や草紅葉　岡田蹊花
友逝てまた訃を聞きし秋夜かな　小川月舟
小さき店守る灯をともしけり　加納信子
ふみ石にこぼるる木せい金の粒　楠房子
名も告げず別れし釣友や秋の暮れ　高木白虹
秋風やヤカン転がる人夫小屋　新出谷一華
秋ざくら心の揺れをやらわげし　錦織富江
秋彼岸明けて今日より風変わる　峯石美代子
石見路やひと畔占めり曼珠沙華　渡部夕峰

会員頒布一部百五十五円／六九一一八　島根県仁多郡横田町一、〇六一／二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0＝601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 176 号
（12 月 号）
1989　12. 5
（M122・T78・S64）
奥出雲編集集団©

奥出雲のたたら製鉄史⑮

新資料にもとづく特に東南部の
その技術・経済・社会・文化の総合史

近世編⑦　松江藩の鉄行政3

（享保年間三郡御買鉄論争3）

本号の時代

1924　関東大震災、虎の門事件犯難波大助の死刑判決で山本内閣総辞職

1925　政府労働組合代表の国際労働会議参加を認める政策転換。松本女子師範附属小の川井訓導の自由教育を視学官が攻撃する。学生社会科学連合会結成孫文来日し大アジヤ主義提唱、婦人参政権獲得期成同盟結成、荻野式避姙法発表。（歌）鵜の鳥、スットン節、月は無情か、からたちの花
メートル法実施
総人口　5,887万人

第5段階（続き）

その御附札（鉄師が差出した口上書への藩の意見）には、どのような御返答があったか知らないので、それを預って帰って写しとり、重ねての口上書を認めていたところ、その夜勘右ヱ門の気分が悪くなり意外に難儀をした。医者たちは（不明）のようであると言い、皆のものども も心配した。翌28日勘右ヱ門の病状は変らず、宿主金森屋孫右ヱ門は役所へ出頭し、昨日口上書の御附札を御貸し下されたので、いろいろ話合いをしたが、鉄師一同は納得ができず申上げようもない。勘右ヱ門は意外に難渋し私が頼まれて参上し、御附札をお返へし致しますと申し上げたところ、兵左ヱ門様の話によれば、昨日勘左ヱ門がまいっていろいろ申すことから、この書を受取ってとくと話合いをする考であるとみてとったから、渡したのであると申しながら受取られた。

一方御附札への鉄師の返答の口上書を認め、28日朝卜蔵孫三郎手代宇兵ヱと卜蔵藤兵ヱの代りの兄五右ヱ門の両人が、善右ヱ門様喜太夫様へ持参し取次いでもらった。御覧になられると、前の口上書と変らないこと、ことにその後当方が申し聞かせたことが少しも考慮してないことから、取次ぎ申すことは出来ないと言って突戻された。

一方翌29日、久野七右ヱ門、大馬木又右ヱ門、亀嵩源之丞の3人が、御勘定所へ出頭し、何卒この件を受入れて頂くようにと、いろいろと御断りとお願いをしたが、判形をせぬような断書を受取ることはできない。判形をすれば受取りさらに断りの件について考慮もする。しかしながら強いて判形せよとは言わない。お前たち鉄師一同の心構え次第であると兵左ヱ門様は大変に御立腹の様にみえ、書類は返えされた。

その月の末までは何の御沙汰もなかったが、12月朔日に善右ヱ門様が吉田村へ御越しになられ、錦屋庄右ヱ門へ申されるには、孫右ヱ門は判形をすると請合いながら、仮病をつかって役所へ出頭をしない不届き者であると御叱りになって、庄右ヱ門を御どしになったと見えて、庄右ヱ門殿は手代孫右ヱ門を役所、つかわし、これまでの事情を知らないまゝに（注鉄師どもの苦労を）、恐れて判形されたようで、4日に御帰宅されたと聞いた。5日までは何の御沙汰なかった。

4日に御役所より可部屋源兵ヱ手代三郎兵ヱ方へ仰せがあった。それは源兵ヱは帰宅していて、手代のお前が代りに居るようだから御役所に出頭せよ、御用があるとのことであった。三郎兵ヱは私は病気でございますので今日は参上出来ませぬ。明日にでも快方に向いますれば、参上致しますと返答申上げた。5日になると出頭せよと仰せがあったが、快方に向っていないので参上出来ないと申上げた。

6日の正午ごろ、桑原喜太夫様岡本善右ヱ門様の御両人が、可部屋手代三郎兵ヱの宿である桑原屋へ参られ、三郎兵ヱに逢いたいと申されたので、三郎兵ヱが出かけて逢ったところ、御両人が申されるのには、源兵ヱ儀26日に判形を請合いながら、印判をせず無断で帰宅してしまったのは不届千萬であるが、お前を代りにこの宿に残し置いたようであるので、この度のことの事情を知っていると思うので聞かせてほしいと思いやって来たと申された。

三郎兵ヱが申上げるのには、源兵ヱは母が病気であるとの急な知らせがあったので、急いで帰宅し手前を代りに残したのでございますが、私も御役所へも参上もせず、御無礼申上げておりましたところ、貴方様方からお越しになられ、様子を聞かせよとのことまことに有難き仕合せに存じますと申上げた。御両人が言われるのには、錦屋手代孫右ヱ門は判形を御請合い申上ると言ふばかりで実行しないので、庄右ヱ門が此度の棟梁として采配を振っているように思い御上へ申上げられ、きっと御吟味遊ばされることになったが、それがし善右ヱ門より、たってお断り申上げ、2～3日御猶予を願い、吉田村へ参り庄右ヱ門に逢い、この度の件についての判形に関する一連のことに関して話をしたところ、庄右ヱ門が申すのには、左様に御役所へ対して何かと偽って孫右ヱ門が申上げましたことは不届と存じます。なるほど御もっともなことで御座います。可部屋源兵ヱ儀松江に居る間に、孫右ヱ門にこ

の件について話して、判形を致させる筈であります。殊に源右ヱ門は御上の御高恩をうけておりまして、かれこれ申上げるわけは御座いません。孫右ヱ門の判形を源兵ヱがさし留め申すこともございません。私は判形を致します。源兵ヱは母の病気のため帰宅しておりますので、兄安右ヱ門より意見書を届けて、判形するように申伝えますと答えた。早速錦屋安左ヱ門より、源兵ヱへ飛脚をもって申伝えたとのことである。

ところが何の様子もない。鉄師仲間のうちより、源兵ヱが張本人のように言うものもあって、庄右ヱ門もその風聞も耳にしたとも思われるので、いよいよ源兵ヱ棟梁ときめられて気の毒に思われもするので、お前は源兵ヱ手代でもあるので、この度の件とくと分別弁えて判形するようにと申された。その上この度の件、御勘定御役所を疑い、断り書を差出したこと、筋道もなき事と思う。一切源兵ヱのやったことであるとして、御上へ申上げ源兵ヱを張本人とするとのことであった。

その時三郎兵ヱが申上げるには、錦屋庄左ヱ門は自分の判形をした上は、便りをたてたというが、このようなことはなく、また御役所を疑い申したことなど毛頭ない。子細は此度の御勘定の諸鉄の値段については、上方の帳簿をもとにして、その他2歩8歩米代の件御法式を元になされたことであって、御役所が無理を申されたということはないが、上方の鉄値段と私共の仕切（請求）とは大分違いがあり、その上御役所の勘定の法式の手前と、法米の通りとは大分相違があり、この件は御役所がなされたことではありますまい。

御上より御議定なされた様に思います。ただこの度の勘定においてさらに御取立て遊ばされますと、倒産するより他はございません。何とぞ右の件お上へ申上げられ、家督相続ができるように、御了解を頂けない間は判形をいたすことは、幾重にも御断り申しますと申上げた。

御両人より庄右ヱ門が申さざることを申上げたことよりが、源兵ヱの思うところとやはり変らない。お前の話で張本人であることには変らない。源兵ヱを引出して申させると、理不尽にも喜太夫様は三郎兵ヱの腕をとって、たたみ一畳半ほど引きづりまわされたが、三郎兵ヱは少しもさわがず、ごもっともでございます。すぐに馬を立て帰宅して源兵ヱにこのことをとくと話し、判形させますから、明日一日お待ち下さいと申上げたが、御承知にならなかった。そこで飛脚を立ててそれが帰るまでと申したが、これもお聞入れならず、是非なく明日判形致しますから、今晩一夜お待ち下さいと申上げた。心の底では判形しないという考えであったが、源兵ヱが張本人と言われる以上は、どのような処分をせられるかもわからない、源兵ヱのためによろしくないので、判形はしょうという心にもなっていたが、何とぞ今晩一夜考えたいと思い、色々品物を差出して一夜の猶予をと願った。するとそれでは明日判形するという書付をせよと申された。これも断ったところ、喜太夫様はまたまた左の腕をとり役所へ引きたてようとされたので、病気の故の義を是非なく書付けをして差出した。

暮六つ（午后6時）に此の書付をとり桑原屋を御立ちになり、金森屋へ到着された。

奥出雲が生んだ日本の詩人 安部宙之助

——「ある自伝より」③

赴任——邑智郡へ

私の勤める学校は石見国で邑智郡沢谷村だった。私のような次男坊は県下どこにやられても仕方のないものだった。電報が来たので川本町の郡役所へ行って辞令を受取り、それから沢谷村へ行かねばならない。

私は汽車で溷摩駅まで行った。そこで一泊した。

山国へ赴任するなる淋しさに
ふるさとの山を見つめている
も　茶褐色に芽を吹き出せる
山の色を悲しき色と泌々とみる。
ふるさとの山にし似たる山は
なし尖れる山を見つつ悲しむ

そうした悲しみの歌が出来たことを覚えている、翌る日は乗合自動車で山を越えて川本へ。川本町は中国一の大川である江の川のほとりにある町で、邑智郡役所や農産学校があった。

川本町で郡役所へ行き、郡視学から辞令をもらった。そして川のほとりへ出た。三里位川上に粕淵という村がある。そこまで蒸気船で溯らねばならぬ。そこからは人力車である。そうした交通の便を視学が教えてくれた。

川船の一方にプロペラが着いていて、推進力となる。騒音と動揺とを我慢すれば爽快といえる。川幅が少し狭くなったと思う頃、終点の粕淵に着いた。陸に上って人力車を求めて。沢谷村へと走らせた。沢谷村というのは細長く三里もある村だが、小学校は村の中央部にある。そこまでは粕淵からやはり三里あるとのことだった。

沢谷村になると約十軒位の集落がある。それからあっちの谷間、こっちの山陰と人家が点在している。中央部の学校の処在地のあたりにも農家が学校を囲んで十軒位点在している。

学校は道路から少し離れた左上方にあった。旧校舎が一の字

にあり、二階建ての新校舎がL字型に建っている。丁度、放課後らしく生徒は下校するところだった。まだ知らない私に丁寧な挨拶する子もあった。

校長に逢った。鼻下にひげをたくわえた四十歳台の人で、快活な調子で話した。福間といった。早速私が今晩から下宿する所を心配してくれた。

西福寺という真宗の寺で、川を狭んで学校の真向いにあった。

一年間ほど女教員が下宿していたが、彼女は出雲の方へ転勤する事になったので、その後釜ということだった。

私は彼女に連られて西福寺に向った。川の橋がある処まで下り、更に坂道を上って行くと西福寺のところへ出る。途中で彼女は語るのだった。こんな山の中へ来て、一年間がとても長かった。お寺に下宿しているのだからお寺のお参りにも顔を出さねば評判がわるくなるでしょう。石見国は出雲とちがって信仰が厚いところでしょう。一年間で帰ることになったので私はとても嬉しい。

西福寺は月八円の下宿料だった。私の月給は五十円でゆとりが充分あった。まだ酒などのめないし、お菓子といっても駄菓子か干菓子かで、お金の使いようがなかった。

朝起きると庭へ出て本堂の前を横切り右手へ行くと、そこに筧(かけい)があった。上手の谷から清水がこんこんと出て筧をみたしていた。私はその水で顔を洗い、口を漱ぎした。

寺の庭からは遥か道路の向うに学校が見えた。五六軒の農家が散らばっていた。

私の部屋は庫裡と本堂をつないでいる廊下の傍らの四畳半だった。机が一つ中庭に面した障子際に置いてあった。それだけで何一つ装飾もなかった、むろん床の間もなかった。初めの晩は女教師が何かと世話をしてくれた。女学校から師範の二部を出た人だった。明日は帰れるといって、とても楽しそうに語ったが、私の方は、どうしてここで暮そうかと沈んでいた。

恩師——雪吹敏光先生

沢谷村に赴任して間もない頃のことだった。石楠花の花ざかりの頃だったから五月頃のこと、母校島根師範の雪吹先生が突然に来村された。この沢谷村の谷の一つに花の谷と名づけられた谷がある。石楠花が野生して、谷一面を彩っている。それを県の方へ申出て、天然記念物の一つに指定してほしいというのだったらしい。雪吹先生はそうした私の三人の教え子が接待することになった。

雪吹先生というとアル中で、授業中でも僕達に自習を命じておいて、さっさと研究室へ行って、暫くして教室へ帰って来た。洋酒というよりアルコールの匂野外植物」という題名を冠した教科書を私達は持たされた。

学校の裏、寮の横手を進んで行くと法吉村という方へ行く田舎道があった。雪吹先生は私達約十人の先頭に立ちながら、時々立どまって雑草をつんで示した。暫く行くと向うに藁葺屋根の田舎の家屋が見えた。その家が雪吹先生の御宅であることを誰かに囁かれて私も知った。先生はこのようにして私達を教育された。一年生の時私達の組の担任だった。

「ほう、安部か」といって喜んで下さった。酒好きなことは有名だったし、岩森の一夜は酒で賑やかだった。校長も役場の人も皆酔払ってその夜は引揚げた。

翌朝、九時頃岩森へ行くと、雪吹先生はもう起きていた。昨夜のべろんべろんになった様子などはみじんもなかった。昨夜の連中で花の谷へ先生を案内した。

川底には岩石がごろごろしていた。そこの谷にも岩が多く、その岩陰に石楠花が花を咲かせていて美しかった。花の谷と云われるように全山が石楠花であ

小春日唱　簸の上短歌会

電灯の終点となる峠の家道より大きく声かけてゆく　永井弥生

玉葱の芽は青々と納屋のぬくく小猫をわらの上より抱き上ぐ　〃　人

長雨の止みたる今日は物干に乾きしシャツの西陽を返へす　佐藤喜代子

行商より求めし値札つけしままに山茶花は根付き花をつけたり　〃　人

秋の陽のにぶくきらめく神殿に御幣の滴り頭に受ける　岡田時子

宿痾ともなりし吾が膝かばひたる老夫は素直にポット運び来　〃　人

山道は地の見えぬまでに落葉して踏みゆく音のみ静寂にひびく　野村節子

柊の小花散りしく坂を登り久しく会はざる姉を訪ねぬ　〃　人

日あたりに眠りゐし猫が突然に起きたるときに陽の動きたり　常盤はるさま

藤原道夫氏を憶う　安部夕波

ペコニアの花にうもれし奥津城に君永遠に眠り給へり

た価値あるものかどうかを認定のためにこの村にやって来たものらしい。

宿は町のはずれにあるだった一軒の宿屋である岩森というのにきまっていた。役場側から二人、小学校側から校長、次席と一つは雪吹先生は「中国産野外植物」の研究者として有名だった。中国地方の野生の植物に対する学殖は深く、「中国産野

に生徒達から見られていた。もいがぷんぷんと匂って来た。だが、その事は非難よりも同情的

斐の上川柳十一月抄

座ぶとんを裏返ししておもてなし　藤原ユキ子
ゆく道があるようで無い路に佇ち　高木白虹
赤い柿顔が見られず淋しがり　安部正子
聞いて置くだけでは済まず腰をあげ　藤原のぼる
新漬は食べごろ待たず羽がはえ　杠京子
生きている証し今日も恥をかき　松田牛歩
秋晴れた皆でウキウキ芋を堀る　安部春恵
少々は薬になると見舞酒　渡辺好之
壁の奥さらけ出しての選挙戦　田中有樹絵
さよならねそれから長い立ち話　横山まこと
手遅れていらだちばかり多くなり　藤原千代子
ひい孫に又もやられた記憶力　若槻白馬
手作りの一品料理に得意顔　田中芳春

十月句会抄

鰯雲病む妻と見る無言よし　浅野としお
潜み居し虫慌てさせ落葉掃く　岡田蹊花
ちゃんちゃんこ脱がし孫の背秋日和　小川月舟
小春日やこだわりほぐす暖かさ　門脇花子
窓の柿色付き初めて義歯入るる　加納信子
暮脚の早きに農婦振り向かず　楠房子
人気なき杣家見守る冬鴉　高木白虹
秋冷や今日も籠りて雨一と日　新出谷一華
忘れ物重ねて廻る日の短か　錦織富江
冬夕餉空きし亡母の座おおきかり　渡部夕峰

った。隠岐の島にもあるが、花が六弁でここのより異っている。などと雪吹先生が口にされたことを思い出す。そして、この花の谷のことはどうなったか私の記憶にない。そのままで終ったのかも知れない。

やがて夏休みが来たが、その前に郡役所のある川本町へ行って徴兵検査を受けた。本来なら明春であるが学校卒業年度を基にしての検査だった。私は十九年余りで検査を受け、そして六週間現役兵として最後の教育を受けた。八月一日入営、九月十一日退営であったが、私達が最後で、一年下級生からは一年現役兵に希望者は繰入れられるようになった。

九月十一日に国民軍に編入されたが、後になって在郷軍人としてかり出されて苦労した。

私達は浜田二十一連隊に入営した。八月一日、暑い季節である。星一つである。一つでも星が多いということが、どんなに権力を持つものかということを知らされた。

私達は二班に分けられ、上等兵二人が教育係りであった。びんたをやられるような事もなく敏捷に物事をやる、員数を揃えることなどを大切だと教えこまれた。

人影さえ見れば、敬礼と叫んで礼をした。自分達より低い階級は居ないのだった。真夏の事だし喉が乾いた。夕方になって酒保へ行くことが楽しみだった。ビールを飲む楽しみを覚えた。

三瓶山へ行軍して行き、夜間演習をやった。行軍に疲れ倒れた者が銃を大切にするのを実際に見た。演習などというものはぐずぐずしているうちに終ってしまうものだとわかった。

今年一年の回顧（七月下旬）

第8回横田たたら勉強会

——古代のたたらと小規模たたらの実験とのかゝわり

わが国でははじめての試み、冶金考古学の分野に踏みこんだもので、好評を得た。

鉄の技術経済史学界の第一人者飯田賢一氏は、十一月中旬の吉田村のシンポジュウムで、吉田村はこうした研究会と結んで研究をすゝめるべきであり、特に境高校の岩田教諭の発表は、すばらしいものであると評価された。とかく観光的演技（ショー）に走り勝ちなことへの、頂門の一針と受取った。夜の懇親会の席でも多数の方が、同じような意見を筆者にもらされた。もって自戒すべきであり、横田町も考えねばならないことであると思った。

来年のたたら勉強会（7月第5土日曜）

——中国地方特に出雲から、企業たたらの技術が、村下らによって、どのように伝播したか

すでに全国各地へ調査協力の依頼を終えた。

「近世に於ける斐伊川の砂鉄採取について」（高橋一郎論文）

——島大山陰地域研究総合センター　研究紀要5号

は、今後近世の企業たたら研究はもとより、斐伊川の歴史研究の上で、その柱となるものであると、中央の学会でも評価をうけている。

正しい歴史。これからの横田を考える上での必読の書

「奥出雲横田とたたら」

会員配布800円会員外850円
郵送料共1000円で送付します

会員頒布一部百五十五円／六九九—一六　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0＝601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

美しい日本語を生かそう

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 177 号
（1 月 号）
1990　1.　6
（M123・T79・S65）
奥出雲編集集団©

馬・うま・午・ご・むま

馬のはじめ

馬の祖先は、何千万年の間に積み重った地層の中から発見された多くの化石をもとに、明らかにされている。最も古いのは北アメリカで約5000万年前の始新世という地層から発掘されたもので、これは狐くらいの大きさで頸と肢が長く、背は湾曲し、前肢は4本指、後肢は3本指で草を食っていた。3600万年前になると羊ほどになり、体形も今の馬に似てきて、肢指は前後とも3本で中指が伸んで、現在の馬のひづめ（蹄）になっている。

400万年前には指1本となり、体高も一m以上になった。

現在の馬があらわれるのは、170万年前からとなる。これが各地に分れて、ロバとなり、アフリカではしま馬となった。そしてアラビア・メソポタミア・シリア・イランなどの平原に分布したものは、今日の優良馬の祖となっていった。

家畜としての馬のはじめ

BC（紀元前）2000年ころ、ヨーロッパの黒海北部のウクライナとドナウ川流域に住んでいた、アーリア系の古代民族が、はじめて馬を使用しはじめた。そのころは小さく体高は1.35m程度で小さな二輪車を2頭で引き、戦車または運搬用として用いた。

これが四方にひろがったが、乗用にしたのは、BC750年ころペルシャのダリウス一世（BC522～486）で、乗馬による駅伝制度をつくった。中国ではBC1500年ごろ殷代に戦車が用いられていた。

8世紀になると、イスラム軍が砂漠の軽快な馬にのって、ヨーロッパに侵入した。この馬は当時のヨーロッパの大形の馬に比べて速力と持久力に優れていたので、ヨーロッパ各地では、この「東洋馬」と「西洋馬」に交配して改良に手を染めた。そして軍馬から輓馬（車を引く）・駄馬（背に荷物を）・農馬（耕作）・乗馬（狩猟の）と、それぞれの用途に適した体形と体格が生まれて今日に至った。

サラブレットは、イギリスの土産馬を東洋種の3頭の種牡馬により改良したものである。

詩一編

宮沢賢治

手は熱く　足はなゆれど
われはこれ塔建つるもの
滑り来し時間の軸の
をちこちに美しくも成りて
燎々と暗をてらせる
その塔のすがたかしこし
むさぼりて厭かぬ渠ゆえ
いざここに一基をなさん
正しくて愛しきひとゆえ
いざさらに一を加えん

本号の時代

1928(S3)　アムステルダム・オリンピックで織田幹雄ら初の金メダル
29　張作霖爆死の責任者処罰で田中首相天皇の叱責をうけ総辞職　教員俸給不払全国化（町村不況）政府緊縮予算へ
30　ロンドン軍縮会議　浜口首相重傷　世界不況波及
31　満州事変開始　のらくろ漫画登場　映画トーキー開始
33　東北の冷害凶作で娘身売り欠食児童自殺の惨状へ　東京音頭

馬と人類

馬の使用は、農耕民族が先かそれとも牧畜民族かと意見が分れていたが、今ではユーラシア（ヨーロッパとアジアの総称）の内陸草原地帯で、羊や山羊の放牧の群の管理のために、馬が用いられたのが早いとされている。そしてBC1000年紀には放牧騎馬民族が、出現するようになった。（これについては、日本の古代国家成立とかゝわりがあるので別に触れたい）

そうしてユーラシアの内陸地の遊牧民の間の信仰では、馬は天と結びついて天馬伝説を生んだ。中国古代では太陽は東海の果から馬車に乗って天を駆けるといわれたが、同様の神話はシベリヤ・ローマ・北欧・インド・バビロニヤ・ヘブライへとひろがり、それぞれの神話に入っている。

日本の河童駒引き伝説では、馬は水の精霊とも縁が深く、水界の霊物と馬との間にできる「竜馬」の伝承なども生み出されている。

馬と民俗

馬は神の乗りものとも考えられていたので、神馬として神社に馬が捧げられた。のち絵馬として額が納められた。また各地の流鏑馬や、相馬市の野馬追祭もある。

年中行事では、正月6日や4日を「馬の鞍起し」「馬の年越」というものもある。

馬頭観音が広く信仰されている。馬の死を弔ったり、馬が落ちるような険路に建てられている。

また神が馬に乗って降るという信仰から、その馬蹄の跡を残した石の伝説「馬蹄石」がある（本誌151号）。源平合戦で有名な「池月磨墨伝説」に出る名馬池月が、水中より出現したと伝える池もある（本誌148149号）。東北には蚕神とも農神ともされている、「おしら様」の伝承がある。人間の娘と馬の交情の昔

話が伝えられている。

午（うま）

十二支の第7番目「ご」ともいゝ、平安時代以降には「むま」と表記される例が多い。

この十二支、獣として馬があてられ、5月の異称に「午の月」もある。初午は2月最初の午の日で、京都伏見稲荷をはじめ稲荷の例祭が行われる。

時刻では今日の午前12時を中心とした前後2時間に相当し、正午・午前・午後などのことばが生れる。

方角では真南にあたる。真北が子で、南北を貫く経度線を子午線という。

わが国の馬の歴史

縄文・弥生の時代の遺跡から確実な馬骨の検出例は乏しく、たとえ検出されても、馬の飼育は当時盛んではなかったと思われている。古墳時代に入ると馬具・埴輪馬をはじめ、各種の関係遺物が出土するから、4世紀以後大陸から飼育技術とともに、本格的に入ったと考えられている。

古代には馬飼部があって、馬の飼育にあたる部民（べのたみ）（技術あるいは労力を、特定の朝廷や豪族に提供した支配される人々）がいた。厩牧令には左右の馬寮があって、宮廷馬や官牧の管理、貢馬の管理をすることになっていた。良馬は奈良時代より陸奥・出羽が有名で、718（養老2）年には蝦夷87人が都に入り、馬1000匹を献上している。

10世紀初頭の『延喜式』には甲斐・武蔵・信濃・上野の国々で32牧（牧場のこと）、駿河・相模・武蔵・安房・上総・下総・常陸・下野・伯耆・備前・周防・長門・伊豫・土佐・肥前・肥後・日向の17か国に27牧がのっている。東国が良馬の産地であったことがわかる。西日本は牛の産地であった。鎌倉時代以後、牧はへったが、武士の勃興で馬の飼育は一般化した。

（これ以後の歴史は本誌148 149合併号—仁多郡畜産略史—参照）

馬　市

平安時代から武士団の形成につれて軍事的に重要視され、農耕技術が進んで耕作用として使役がふえ、交通運搬にも利用された。そのため中世に入るとその商品化が進んだ。牛馬の取引を専業とする伯楽（はくらく）（馬喰＝ばくろう）がうまれ、一般市場から独立した市場として、牛とならんで馬市が立てられるようになった。

文献上では、1343（康永2）年に京都五条室町の馬市が最初で、石清水八幡宮に属する駒形神人が伯楽座を結んでその取引を独占した。

室町時代には洛外の鳥羽や奈良の馬市がある。戦国大名は軍馬の補給と馬匹の改良に力を入れ、領国内の馬市の育成を計った。そして短いものでも半月、長いものは半年の長きに（信濃）わたるものもあった。

江戸時代になると、商品流通の拡大につれて、各地で盛んとなった。横田では天文年間（16世紀半）に、中村市場で開かれていたと文書から推定できる。

（国史大辞典・日本百科全書ほかによる）

統計から

最高頭数は1930(S5)年の1,489,979頭
現在は(1984)
農家所有 24,106
在来馬 2,000
乗用馬 4,000
軽種馬(競走馬)を加えて 100,000頭
という。

歴史的風土論⑤

地域の過去から現代への提言

1930（昭和初）年代の経済更生指定村の生き方

——今日の活性化は庶民を救うことができるか

承前①三成と横田　49 50合併号
②横田と音楽　55号
③明治35年の横田村の生活　149～154号
④奥出雲の民力　120 121合併号

世界の大恐慌

1929年に始まる過剰生産（工業のみならず農業も）の影響は、金融・通貨にまで及んで、恐慌は世界各国（社会主義国ソ連をのぞく）を巻き込み、33年に至るまで広範囲にして長期となった。

大恐慌下のわが国

昭和初年の世界恐慌と結びついたもので、1929（昭和4）年秋のニューヨークの株式暴落に端を発した世界恐慌は、27年の金融恐慌から十分立直っていなかった日本に波及し、深刻な打撃をあたえた。29年から31年にかけて、工業生産高は33%、輸出高は47%と減少し、空前の不景気に見舞われ、弱小企業の倒産が相つぎ、約300万の失業を出した。これは農業面にも影響を与えた。筆者の小学校高学年時代で、いろんな生活の場でそれを感ずるとともに対処させられた。

なお当町ではこうした振動をもろにうけた、一つの大きい波も押し寄せていた。

1924年10月24日（木曜）のニューヨーク株式市場における互落は「暗黒の木曜日」といわれ、大恐慌爆発の楔機となった。以後2か月の間に株式は平均42%の急落をつげた。

アメリカは第一次世界大戦中に戦場となることもなく、戦争経済から得た過度の利潤を貸付資本として、「永遠の繁栄」のもとに、投機的に株式投下し、株価を水ぶくれさせた結果の破綻であり、そのアメリカの内部に過剰生産が進行していたからである。

過剰な資本の西欧・中南米への輸出と、国内成長産業である

耐久消費財（自動車・家庭電気器具など）および建築への投資であって、こうした産業の好況の反面に、農業・石炭・造船などの不況産業も抱えていた。

アメリカの過剰資本は、景気の進行とともに遊休過剰資本の株式投機、土地投機となっていた。過度の投機で自動車・建築その他耐久消費財に過剰がやってきた。

それに株式互落である。過度投資が累積し、自動車・建築・その他耐久財に過剰となっていた。それの滞貨の激増、生産の縮少、企業倒産の続出、失業者の増大となり、農業などは激しい価格崩落となり、深刻な慢性的恐慌となり長期化したから、農民層の分解と、土地喪失も起した。

アメリカはケインズ（イギリスの経済学者で、修正資本主義的な政策の支柱となった理論を生んで、一時代を画し、ケインズ革命と呼ばれた）政策を一部とり入れたニューディール政策をとっていたが、各国とも勢力範囲を固めて、いわゆるブロック経済の傾向を示し、自給自足をめざして、経済的にも政治的にもナショナリズム（民族主義・国家主義・国粋主義）の優勢を推進した。とくにドイツ・イタリヤ・日本等は、戦争準備と国内体制のファッショ化と侵略政策とに、最も早く移っていった。結局、恐慌は戦争準備によって、民衆の犠牲によって乗切られ、第二次世界大戦の原因となった。

横田の経済更生計画

昭和9年3月に、横田村は経済更生村の指定を受けた。指定に至る経過は、計画書の緒言に記してある。

「欧州大戦中に於ける我国経済界に及ぼした未曽有の好況に依って、国民の生活状態が頓に向上し従って生活費が著しく増加し、我が横田村の如きも之が渦中に投じ、数年間の継続は遂に之が習慣となって来たのに、戦後全世界を襲うた大不況は、農村唯一の収入として居る米繭価の大暴落となり、加うるに各種工業の不振は労働者を嚇かし、茲に各家庭には年々支出超過を来し所謂赤字となり、遂に今日に至っては殆んど回復すべからざるの窮境に遭遇したのである。此時に際し農山漁村各町村は夫々これが対策を講ずべきであるので、本村は左記五項を更生要項とし、㈠村民更生観念の確立㈡勤勉力行消費節約、㈢自給経済予算経済の徹底、㈣貯蓄と負債整理、㈤保健衛生と体力の増進、村民一般之を励行せん事を期し、勤倹矯風規約を協定して二月十一日の紀元節を卜し村内各戸に配布し、これが宣伝につとめ既に其実績をあげ得たるものも少なくないのであるが、更に本年三月県は本村の熱望を容れられ、経済更生村として指定せられたので、茲に愈々本格的に更生計画を樹立して邁進する事になったのである。」

ここでいう勤倹矯風規約は、八ケ条から成り、その第四条に「実行スベキ事項」として次のような各般にわたる施策が列挙されている。

（内容をみると、今日ではすでに完全と言ってよい程実行されていることもあるので、項目だけを記すことにする）

〈勤勉力行ニ関スル事項

一、稲ニ関シテハ

二、田地裏作ヲ増強スルコト

三、蚕業ニ関シテハ

十一月句会抄

魚臭き釣り銭秋刀魚と共に受く　浅野としお

控え目に藪より覗く藪柑子　岡田蹊花

風邪に臥し寝床の寂や二時を聴く　小川月舟

肝移植親子の絆冬日和　門脇花子

秋深し同期の語らい蕎麦の膳　加納信子

枯草を敷きて牛小屋産近し　楠房子

落葉焚き日課となりし修行僧　高木白虹

点滴の音無き韻を聞く師走　新出谷一華

回覧板隣家の古木八ッ手花　錦織富江

枯れ菊を焚いて煙の中に佇ち　峯石美代子

冬の蝶垣根に遊ばす日和かな　渡部夕峰

晩秋抄

簸の上短歌会

学校のポプラの裸木が夕映えに見知らぬ町の風景となる　永井弥生

饒舌の老女をときをり見かへしてパーマの少年ラーメンを啜る　松浦愛子

溜池に水脈引きながら真鴨らは楓紅葉を追ひつつ浮かぶ　岡田時子

譬ふれば熱き肌に触るるごと乳房喪失を読みつぎにける　常盤はるまさ

足太き孫の古靴履きやすく畑に履き行く笑はれつつも　佐藤喜代子

お母さんの服のサイズを尋ねたる嫁の電話の声はずみゐて　野村節子

晩秋の城址に佇てば遠き世の赤穂の歴史のささやき聞こゆ　安部夕波

前号訂正　4頁4段　**今年一年の回顧**の下の(七月下旬)は取消す

四、肥料ニ関シテハ
五、畜産ニ関シテハ
六、林業ニ関シテハ
七、雑件
八、矯風勤勉ニ関スル事項
一、太陽暦ニヨルコト
二、国民道徳ノ徹底ニツトメルコト
三、健康ナル宗教心ノ涵養
五、業務モ家計モ空費金品ノ徒費ヲナサザルコト
六、儀式会合等ハ実質ヲ重ンズルコト
九、時間尊重時刻励行ニツイテ
一一、婚礼其他祝賀ハ質素ニ
一二、疾病及葬祭モ物ヨリ心ニ
一三、貯金励行

実施にあたっては、村当局をはじめ村自治協会、農会、養蚕実行組合、畜牛改良組合、産馬改良組合、雲州算盤商工組合、養鯉組合、養鶏組合、養蜂組合養兎組合がそれぞれの関係部門を担当し、学校、軍人会、青年団、婦人会、保勝会などが協力することになった。また計画の推進にあたっては、数え歌までつくって普及徹底を行なった。

農業経営改善計画

経済更正計画ではその中心となる農業経営改善計画がつくられ詳細なものであった。大項目だけあげると、

一、土地分配の整備及土地利用の合理化
二、農村金融の改善計画
三、労力利用の合理化
四、農業経営組織の改善
五、生産費其の他経営費の軽減計画
六、生産の改良及生産統制計画
七、生産物の販売統制計画
八、農業経営用品の配給統制
九、実行機関の整備
一、経済更生計画実行督励に関する総合的奨励計画

で、今日、町や農協で樹てられている各種経営計画と比べて見ると、その内容には、55年の違いは歴然としていて、往時の内容は今日から見れば、大人と子供の違いほどもあるが、全村一致して更生へ向っている姿は、今日からは考えられない程な、ひたむきなものであった。

鳥上・八川・馬木の各村の更生計画も大綱は同じであるが、随所に各村の特色があらわれている。八川村では生活改善のなかで「婦人労働服の制定」があって、「もんぺい」の普及徹底が婦人会を通じて推進されている。八川村では郷土教育の徹底を期すとあるが、今日当時の小学校の郷土教育は当地方でも群を抜いているものであったことが、残されている資料で明らかである。横田村では人づくりの強調の中で、「県立農学校ノ利用ニツキテハ、村内ノ純農家ノ長男ハ全部義務的ニ入学セシムル方針デ」とある。鳥上村は当時の3か村に比べると、実情は深刻であったと見えて、その計画は細かいところまで努力をするよう定めがされている。

経済計画は、勤勉矯風規約の原則にもとづいて、生産増強—収入増加—消費節約—貯蓄増加のかたちであるが、明治期とは違って（承前③の明治35年の横田村の生活と比較して）生産増強も、一生懸命ただ働けばよいというのではなく、何を如何につくるべきか、そのためには何からなすべきかが提起されている。部落ぐるみの生産組織としての部落農会・部落実行組合の役割、共同化・機械利用の組織化などを計って、余剰労力を生す副業経営による収入増加などが考えられ実行されている。

（この経済更生計画は、5年の計画期間中にそのまゝ戦争体制に移行していくという、今からみると悲劇的時代へと向ったのである）——経済更生計画については横田町誌など参考に。

かえりみて

昭和初年と今日とは、経済情勢は対象的に両極にある。しかるに活性が叫ばれるのは何故であろうか。筆者の考え及ばざるところであるが、今日の情報社会と消費経済社会に、踊されているのではないかという感がする。消費拡大のために増収を計る。資源の消費は地球資源の涸渇につながり、地球汚染につながっていく恐れがある。

活性化は理性を麻痺させ、人の心をふぬけとすることに、通じているのではないかと思われてくる。

後継者問題も、嫁不足の問題はすべてこうした社会が生み出した問題である。

果しない欲望が果しなく続いてよいであろうか、理性と自制という言葉は必要ないだろうか。

斐の上川柳十二月抄

のの様と拝んだ月に人が住み　渡辺好之
忍び逢い積る話は壁も聞く　松田牛歩
夢一杯語りて親子飲みあかす　真綿よし子
同じ事言うて又かと笑われる　安部正子
自尊心邪魔して名句日の目見ず　若槻白馬
記念日へもてましたねと花の束　杠京子
木守柿畠仕事のみはり役　田中有樹絵
暖かい寝床にもぐる豊かさよ　藤原千代子
子を連れた隣りの嫁の顔しらず　高木白虹
パレットに色混ぜ合せ秋の色　横山まこと
初雪に母は淋しく吐息つき　安部春恵
ただいまと夕暮れ時の弾む声　中林もりえ
記者会見して子を庇う未熟親　松浦亜以
若そうに見せる秘決の総入歯　石原冬明
いい事は無いかと久し振りの人　田中芳春
道場の汗でモヤモヤ流し去り　藤原のぼる

会員頒布一部百五十五円／六九九—一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0—601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

美しい日本語を生かそう

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 178 号
（2 月 号）
1990　2.　3
（M123・T79・S65）
奥出雲編集集団©

出雲大川流域物語 ①

―江戸時代の横田村・角村の両岸の水田

はじめに

出雲大川（現斐伊川）の川を含む流域のことについて、上下流を問わず、時代を問わず、いろいろの問題を再録したり、考えたり、現代的問題も考えて提案をしたりして続けてみたい。

本号は1968（昭和43）年刊の「島根県横田町誌」に筆者が執筆したものをもとに、若干この物語史風にあわせたものである。

表①をみると、角村の検地帳は、1648・1670・1693・1820年と20数年おきに残っており、年号でみると慶安・寛文・元禄・文政と特色のある（幕府体制が整い農民への年貢徴収も負担加重へ。藩の体制が整いはじめた。町人の文化が江戸・京都・大阪で興隆した。そしてそれが地方にも及んだ各）時代のものである。そして数字をみると、耕作者が減少して半数となっている。そして御役屋敷数（屋敷を所有して納税している者数にあたる）は同じである。そうすると零細農民が耕作を放棄して（耕作反別や収穫高が減少している）逃散したとみることができる。これは他国に於ける時代的流れであったから、これから研究者の方は、出雲国でもそうだった。角村に典型的にあらわれているとされたのである。

そこで角村の成立状況、古い家の歴史や現状を知る者からみると納得がいかない。そこで検地帳と切図（明治初年の一筆毎の図面）を対照してみると、その原因がわかって来た。そして角村の大川を鋏んだ対岸の横田村の検地帳も、ほゞ時代を同じくしてあったので、これも地図と対象してみると、角村と相関するようであった。そこで大川の洪水の歴史を調べてみると（絲原家文書『古代よりの聴書』上下巻と『杠日記』ほか）洪水とも関係があることがわかった。そこで研究者が言われる説はこの角村には適用が出来ないことになった。これについて述べたのが町誌の記述である。こうした例は出雲大川の下流地方に於ても沢山にあることと思われる。今日の機械化時代と違って、幼稚きわまる土木工事（こうも言えない程度）によって、自然の流れに遡らわず、その力を利用しながら、生涯をかけた農民の水田造成の労苦が、浮んで来るのである。

本号の時代

1648（慶安元）ころ、「慶安御觸書」（農民心得30か条）で農民を勤勉と倹約でしばる　仙台藩伊達騒動　水戸光圀登場
1670（寛文10）ころ、西日本各地凶作　田畑永化売買禁止令再度出す　捨子禁止令出る
1693（元禄6）ころ、松尾芭蕉奥の細道の旅へ　江戸の人口35万人余　赤穂四十七士　諸国洪水頻り　町民文学演劇盛んに
1820（文政3）ころ、学問が地方の町民へとひろまる　外国の学者が長崎へ渡来する　イギリス船が浦賀に来る　これから外国船がしきりと北方や九州へも来る

検地と検地帳

検地というのは土地調査のことで、こうして出来た土地台帳を検地帳といった。これによって年貢を定めて賦課し、この財政的基盤の上に藩の政治が行われ、藩主以下の給与即ち蔵米の支給が可能であった。農民支配の組織の根底になるものであったから、そのやり方一つで農民の運命は左右されたのである。

まず一筆毎の田畑の地積を測量して地味を考え等級（上・中・下・下々のちには、上に上々田、下に新下々田が加えられた）をつける。等級は地力・灌漑・日照・二毛作の有無・年貢運搬の距離などを考慮した。等級によって石盛（斗代）といわれる田畑一反当りの高がきまっているから、一筆毎の地積に斗代をかけるとその一筆毎の収量＝分米が出る。

検地帳に記載された百姓を帳付（名請）百姓といい、土地の耕作権をもつとともに年貢の負担者になり、田畑永代売買禁止令、分地制限令などによって、農地を他人にゆずることも売る事も出来ず、他へ移住することは勿論転職も禁止され、その土地にしばりつけられてしまって、農地の維持と耕作そして年貢上納にむちうたれたのである。そして年貢は村に一括して、有高（上り高）に応じて割付けたから、村の結合は農民の日常の監視、年貢納入督励の組織として利用され、人組、組親そして年寄、庄屋と責任を持たせたのである。

さきの検地帳で御役目屋敷とは、本百姓として認められた者の屋敷であって、他に御役御免屋敷として載っているが、それは役人・御蔵・庄屋・神主・寺庵・医師・座頭・八屋などの屋敷をいう。（年貢米の出し方などは省略）

角村と横田村の検地帳から

表1によれば角村では慶安検地と寛文検地とでは品等の格付の低下以外は変化が少い。品等の低下はこのころに各地で松平藩の手直しがあったことによるものである。ところが寛文検地と元禄検地と比べると田積の大巾な減少と、筆数の減少、そして耕作者の減少があり、品等の割合の変化がある。田積の減少即ち水田として存在しなくなった箇所は、一筆の広さが数歩にすぎぬ、しかも下田・下々田の

極めて貧弱な田であり、大川沿（川原・古川）である。それを耕作していたのは、町・八川からの出作も含む六人余りの耕作者である。そこでもともと川原や川であったところを、少しずつ畦をきずいて水田として行ったところと考えられ、字名もその通りである。（消えた水田の箇所は筆数が多かったが、残った水田の一筆が広くなって筆数がへっているから、差引二〇筆減となっている）。今日でも角地区の良田とされているのは、寛文検地でも上々田・上田で山よりの地帯である。従って悪い田が減少したから、上々田の割合が増加している。（次頁の図参照）

ここに人間と川との戦い即ち洪水の影響を想像出来る。川原を水田としていたのが洪水で流された結果が、検地帳にあらわれたと見るべきである。

しかも古文書の中に、延宝二年（一六七四）同三年、六年の洪水の記録がある。それは元禄六年をさかのぼる一五年前のことであり、又元禄以後、横田川土手普請の記録もある（宝永元年・享保六年に）。

表　角村水田の変遷

		1648 慶安元	1670 寛文10	1693 元禄6	1820 文政3
田反別		町 7.6.8.0	町 7.5.0.2	町 6.0.5.3	町 5.2.9.3
田石数		石 110.5.8.7	103.7.4.8	84.2.9.6	74.4.9.7
品等	上々田	34弗	18	24	18
	上	18	29	21	30
	中	25	16	17	18
	下	13	14	18	16
	下々	10	23	16	14
	新下々			4	4
耕作水田別 広	3町以上				
	2町以上		1		1（8人分）
狭	1町以上	2	1	2	
	6反以上	8	5	5	3
耕地筆数		84	95	77	88
耕作者		20人(5)	20人(6)	12人	11人
御役屋敷		6	5	6	6
年寄数		2	2	1	0

（備考）（　）はその中の各数歩程度の耕作者、所在地は古川、川原
各年検地帳による。

次に文政検地をしらべると、角村の「川原」が更に若干減少しているが対岸の変化で流出したようである。又「伝十郎地下田」のように耕作者を書いた八人分の三〇筆で二町二反余の水田と若干の畑がある。そして各村にいるはずの年寄が姿をけしている。これはどうしたことであろうか。

これに横田村の慶安・寛文の検地帳の検討を加えると図のような、この頃の洪水、流水路を復元することが出来る。

斐伊川は低湿地を増水と共に自由奔放に流れていた。いつの頃か農民はこの低湿地にいどみ水田を作りはじめた。それが慶安検地帳に川原・古川・中川原・浜田堀とみえる水田である。寛文検地帳では中川原が若干減じているから、流水から考えると本流寄りと思われる。ところが延宝年間の洪水を経て元禄検地の結果は、川原・古川の水田殆んど失われ、本流が拡大し、中川原側に外新田が出現した。そして中川原の南側の水かれた川あと（古川）に新田が生れている。次の文政の検地帳によれば、角村の川原が更に若干減少している。その反対に内新田が生れて、古川（南）は全く沼地化して、そして新田が増加しはじめたと思われる。そして寛政七年（一七九一）の検地帳によれば、ここ即ち中川原輪（惣荒神輪五町余とこの中川原輪が横田村の区域であった）は、三町二段六畝三歩あった。その後、外新田、内新田が拡大し、古川が水田化した。従って一筆が極めて小さかった。そうして明治維新となり、明治十九年に大洪水があり、その後で再び大洪水があり横田町も水につかった。そして郡内各村の人を集めての、斐伊川横田堤防の大工事が行われた。

そして再び左岸角村のもとの川原・古川という字名で水田であったところが約半分ほど水田として復元し、本流の右岸の外新田が堤防の内側一ぱいに拡がり内新田、古川が完全に水田化してしまった。そして今日の田積七町二段二畝一歩の地域が完成したのである。

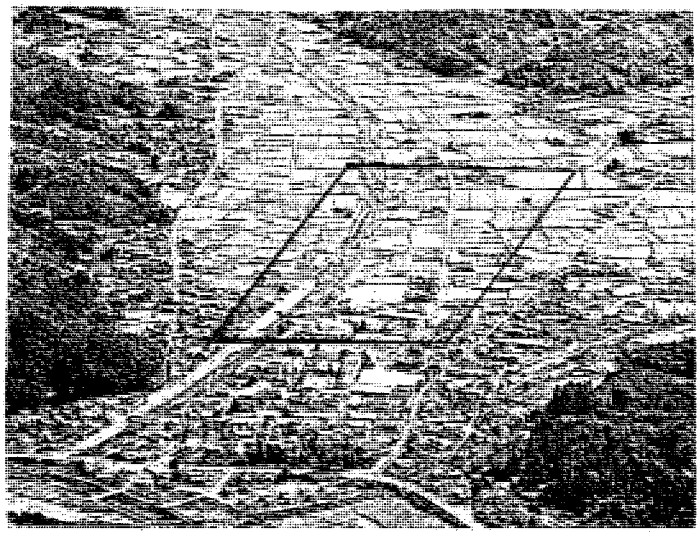
中島文書（横田町六日市岩佐氏）によれば、中川原新田という名称が嘉永年間にみえるからこのことを裏付けることが出来る。明治中葉の堤防工事は恐らくこの地方はじめての大工事であった。幾多この工事にまつわる人情話が残されており、まだ老人の記憶にも新らたである。その後堤防北側の川原・古川は埋立てられて、現在堤防と同じ高さになっているが、外新田は若干土地改良が行われただけで、今日まだ低く昔時の姿を留めている。

この地方では現存する水田の多くは、谷間や丘陵地帯にある、それら中世に於ける農民の開墾の賜である。その頃の農村の災害といえば、霖雨（苗代期の長雨）と大風で、河水の増水はあっても災害とならなかった。農民は増水の影響をうける処には水田を作るだけの技術も少く、それだけの工事をする経済的余裕もなかった。又、領主である武士も戦乱にあけくれる時代で、築城はしてもそこまでは考え及ばなかった。

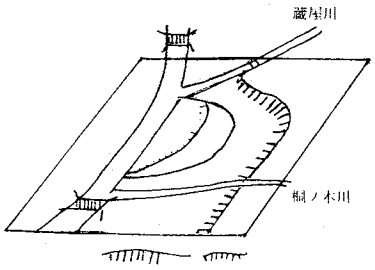
徳川時代になって増加した水田については、この地方には次の三つの型がある。①川沿の低湿地の自然力利用即ち水流の移動による干拓式で、多数の人々の個々の長い間の努力の集積に

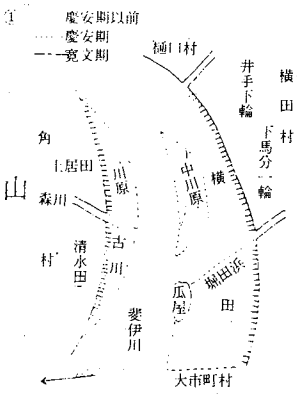
よるもの②鉄穴流しによる開墾で、鉄師の意図的なそして財力支出によるもので、比較的短期間に出来たもの③開墾による畑作りから、「田成」即ち水田化で、個々人の長い間の努力によるものである。

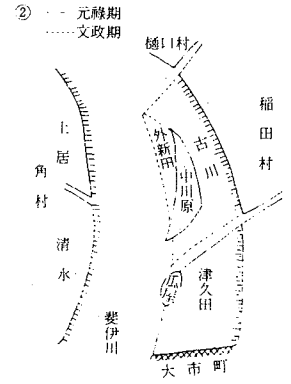
これらの方法によっても徳川時代は、それまでの時代に比べてさがあり、その近くに寛(かけひ)があってそこでいつも顔を洗っていた。

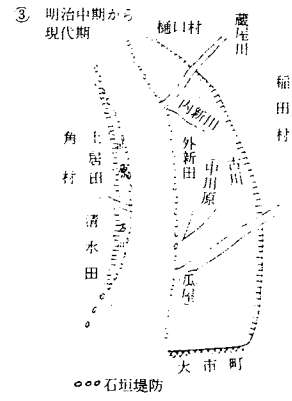


右現代の写真▱内と下図と図3枚は符合する。(但 写真は南西上空からのもので上下がひしげ若干縮少している)









奥出雲が生んだ日本の詩人 安部宙之助

―「ある自伝より」④

正富汪洋(まさとみおうよう)との出会い

初任地沢谷村で2年8か月勤めた安部は、12月邑智郡内の大規模校矢上村小学校へ転任したが、それまでに詩作を通じて中央とのつながりを作っていた。郷里の隣郡能義郡出身の新進小説家として知られていた、東京の須藤鐘一もとへ、自作の詩を送った。以前「湖畔」に発表した短歌に好意ある批評をしてくれた人であったことを思い出し、東京にいる先輩に見て貰いたいと思った。須藤はそれを一流詩人の正富汪洋へ廻した。正富からは雑誌「新進詩人」と同人規約が送られた。これを契機に詩作に専念して送ると、正富は毎号のように優遇し、「最近数回発表された安部君の前途には、相当大きな期待が持てる」とも編集後記に書いてくれた。

その時の詩に「鐘」がある。下宿している寺の縁側の先に鐘

沈黙の美しい詩集
青い幻火のような鐘
ひそやかに心の中に下がって
何か不思議を感知させる鐘

ほの白い朝霧がしずしずと
爽やかな行進を始めている
早朝
何を囁いているのか
行って聞くがよい

処女詩集『稲妻』

赴任2年目の1924(大正14)年12月、前年半ばから約一年間の作品で、正富が校正・装幀など

ほど面積が広がっていない。そのうちでも前二者がその面積の大部分をしめている。先にのべた角村は①の型に属するものである。徳川期になると従って急に洪水の記録がくわしくなり、そして多くなるのもここらに理由がある。

(横田史談会 高橋一郎)

一月句会抄

風が砥ぐ雪の庇が孤を伸ばす　浅野　としお
変貌の世を生き延びて雑煮祝ぐ　岡田　蹊花
病窓に鳩つがい来て冬時雨　小川　月舟
雪降りて旅路の心乱しけり　門脇　花子
幾たりか賀状の絶えし友のあり　加納　信子
雪庭に黒き穴置く焚火跡　楠　房子
老い鳥ひと声むなし雪の空　高木　白虹
木次線たった一人の冬の客　新出谷　一華
連れ添いて月日の重さ福寿草　錦織　富江
みかん食む刻を惜しみつ孫といて　峯石　美代子
母の座にはは亡く初場所始まりぬ　渡部　夕峰

一筋の道

簸の上短歌会

斗ひて摑める自由ルーマニアの民衆に眦裂きて見入りぬ（NHKスペシャルを見て）　常盤　はるまさ
二十一世紀への歩みとどろき日々伝ふ東欧よりの民衆の声　仝　人
最終の出荷米積めるトラックの尾灯の赤し雨降る中に　佐藤　喜代子
チャンピオンとなりし愛犬のこと語る老医師の瞳は少年の如　仝　人
吹雪く日を辞典枕にうたたねす探しあぐねし文字に疲れて　岡田　時子
一本の針を失くせしことのみにかかづらひしも茶柱に和ぐ　仝　人
朝靄にかすむ田の面の雪踏みて夫と鍬初の柏手を拍つ　野村　節子
厨辺に嫁らの声をききながら昼の居間にて夫と茶を汲む　仝　人
雪深き山門にわが登り来し一筋の道をふりかへり見る　永井　弥生
取り残せし甘柿に鵜の集まりて雪の裏庭は一とき賑はふ　仝　人
テレビ消し聖書ひもどく夕べなり心の支へ求めむとして　安部　夕波

すべて世話をし、序文・題字は自ら筆をとって年末に上梓した。

当時の毎日新聞では「休火山のような詩風である」と詩評をのせた。情熱を内に秘めている意味と解した安部は、いよいよ詩作に没頭する時が多くなった。

翌年1月、一級下で親しかった木島俊太郎（既出、詩人・島根師範教授・松江北高校長歴任・温泉津町に健在）が、詩集「祝電」を出版した。木島は安部が沢谷へ赴任したとき、

山村の小学校でただ一人オルガンひきて涙こぼすかを届けている。

今まで淋しい僻地とされていた山陰の島根県に、二冊の詩集が誕生し、急に詩壇には活気があふれて来た。

簸川郡遥堪村の錦織天秋が出していた詩誌「水明」から、誘いがあったので、安部は木島とともに加盟した。

上京

300余人の沢谷小学校から、1200余人の矢上小学校へ移ったが、3か月後には志を抱いて上京し、休職扱いで大東文化学院（現大東文化大学）へ入学した。

正富の誘いで三田文学（慶応大学内）の講演会にも出席し、佐藤春夫・三木露風に接した。第2年目になると正富の依頼で学生ながら、「新進詩人」の編集を担当し、「ベルレーヌ詩集」の訳本を出したばかりの堀口大学を訪ね、西條八十を訪問した。この年「新進詩人」は10周年を迎えていたので、多くの文壇人との交りが生れた。

芥川竜之介・横光利一・中里介山・島崎藤村・三木露風・萩原朔太郎・野口米次郎・室生犀星・生田春月・川路柳江・若山牧水・竹下夢二・野口雨情・金子光晴・中西悟堂ほか当時の一流の人ばかりであった。こうして大学入学間もなく、後年の安部の活躍の舞台は開けた。

この年の秋松江中学を卒業して浪人していた弟が上京、同宿し、慈恵医大予科に合格した。

第2年目の一学期に境町（鳥取県）出身の植田貞女が、生田春月に住宅を聞いて安部の前にあらわれた。日本女子高等学院（昭和女子大前身）英文科2年生であった。その後度々会ったが、貞女は大阪の「婦人世界」の雑誌記者として赴任した。

（文責・高橋）

斐の上川柳二月抄

のし紙を張り替え年始の準備する　横山　まこと
建前と本音二つの舌が要る　松田　牛歩
ゆづられてふと老い思う席に座し　藤原　千代子
あいあいと話す言葉に幸めぐり　中林　もりえ
大掃除古い手紙に坐りこむ　安部　春恵
よちよちの曽孫を軸の初笑い　高木　白虹
女房の表彰状に面喰らい　渡辺　好之
色々な思いを残し年を越え　安部　正子
なぞなぞの相手で気前よく負けて　藤原　のぼる
竹やぶでも覗いて見よう年の暮れ　若槻　白馬
女客席をきめるに小半時　松浦　木公
餅つきを嫁にゆずったいい笑顔　杠　京子
振り返る足跡日々の風が消し　真綿　よし子
年重ね師走は口だけの忙がしさ　田中　有樹絵
病む夫と話す言葉に気を遣い　松浦　久寿子

会員頒布一部百五十五円／六九九—一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0＝601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

美しい日本語を生かそう　カタカナ語は少くしよう

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 179 号
（3 月 号）
1990 3. 3
（M124・T79・S65）
奥出雲編集集団©

奥出雲と文学・芸術（3）

頼春風・頼杏坪の紀行（2）

頼春風の「雲行日記」

春風については174号で紹介した。頼山陽の叔父であり、『しほゆあみの記』（1820文政3年の旅行記）を書いた頼杏坪の兄であり、現広島県竹原市の江戸後期の文化に貢献した。旅行を好み紀行文を数多く残している。これから紹介するものは、1806（文化3）年の雲伯紀行のものである。

この紀行文は文学的にはそれほど面白い資料とは言えないが、土地の人情・風俗や行路の状況を簡潔に書いていて、19世紀初期の芸備・雲伯とくに中国山地の風土をうかがわせてくれる。

奥出雲については、三次から飯石郡の赤名・頓原・多久和を経て杵築に抜けているので、日数も2日間ほどであるが、各地で「たたら」に関する記述が少ながらずあるので、あえて日程を追いながら、記述することとした。

2冊からなっている。第1冊は1806年3月20日竹原出発から、4月5日までの記録で、巻末には全行程のあらかじめの聞書、注意書や備用品のこと、餞別の控もある。出発までに書いたものであろう。第2冊は4月6日から9日仏通寺（現三原市内高坂町にある臨済宗仏通寺派大本山で、開創は1397応永4年、一時は全国に3,000寺、山内に88余寺の末寺をもった。雲舟の古跡）に帰りついたところまでが書かれていて、ほとんどその日に書かれたものであるが、あとからの余白への追加書き込みもかなり多い。

本号の時代

1804（文化元）ロシア使節レザノフ長崎に来り通商を求める
1805（〃　2）紀伊の医師華岡青洲　初めて麻酔剤を用い乳癌手術
1806（〃　3）伊能忠敬出雲石見海岸測量　松平治郷退隠し不昧と号す
1807（〃　4）ロシア船北方へ　アメリカ船長崎へ来航　幕府ロシア船打払いを命ずる
1808（〃　5）イギリス軍艦長崎港へ侵入　幕府フランス語の通訳の養成もはじめる

芸備路

3月20日、親交の深かった医者で儒学を学んだ藤原伯恭が、従僕をつれて同行者として迎えに来た。9人の見送り人の中には、知人の仁多屋弥助・阿波屋岩次郎などの名も見える。その夜は石循坂の門弟の家で泊り、持参の酒肴も加えて賑やかに懇談を重ね、鶏鳴を聞いて就寝した。

21日は西条東村（現東広島市西条町）から北に向い、志和東村の浪滝寺に泊った。主僧不在であった。寺はすべて新らしく、ただ二王2像が古いもので、運慶の作という。

22日は高田郡に入り吉田村で泊り、翌23日には、墓守によって手入れの行き届いた毛利氏の墓所を見物し、川舟で三次へと下った。流れは急で矢の如くであった。舟賃は1人で6分、荷物1荷は1人と同じ。途中宍戸氏（毛利氏一門）の甲立城を見て、三次から雲石路へと進んだ。左右の山会いは芝のみで、牛馬が放牧されていた。その夜は上布野村の田中屋万蔵方で泊ったが、こゝは松江藩の官道で、この駅には常時20疋の駄馬が置かれているという。宿賃120文、みそ汁・平皿・かうたけ・わらび・わけき、米1匁に一升9合、塩は3つ俵下値の節2匁位、可部からとり吉田・三次を経て来るという。

飯石郡内

24日は2つの坂を越える。ここで三瓶山を見ることができたが、雪があり陽の光に映えていた。坂を下ると水田続きであったが、麦が作られていない。この間4里で、赤名に着いた。農具の犁（すき）・簀（すのこ）の類は三原地方とは型がやゝ異る。こゝは雲州広瀬藩である。

路は平坦で山桜1本が今を盛りと花をつけている。海棠（かいどう）の花を瓶にさした家も見られた。牧人が1人で駄馬4疋もつれている。酒を買ったが味は頗る薄かった。夜は頓原村の三成屋長八方で泊った。1泊150文。

松脂（やに）を熱湯でこねてかため、蝋燭の形にして竹の皮に包んで火をともしている（昔、横田でよじろと言ったものか）。酒は薄くて酔わなかった。

25日、坂の上で小雨が降ったので、かごに上った。山の土は赤黒黄壌の内に黒筋を交えているので、開いてみると鉄という（砂鉄）。民家で鉄を吹者多いという（筆者のいう自給たたらであろう。あとで明らかになる）。1里余り行くと道端に八重山権現の祠があり、満山皆石で、絶壁の下に置石燈数百基があり壮観であった。ゆくことしばし樹森欝々とし人家もない。野山には、またたび草・天南星（てんなんしょう）（珠茎があり、漢方薬に）・シャガ今着花・益母草などがあった。

民家の屋根には、干木・かっを木があった。掛合を経て、難路険路険橋を通って、夜に入り多久和村に到着、花屋忠助方に泊った。

簸川郡に入る

26日は栗谷から川舟で下った。川では砂を洗って鉄（砂鉄）を取っていた。三刀屋村を過ぎると急流となる。やがて丸山で舟を下りて小憩、今市に至る。今市の町は賑やかで、街も広く、

烟管・ハリの細工人が多い。東に豪農中村某がいて高1000石という。

平田に至ると、水道が縦横にあって、川上の高地から筧水をとっている。このあたりの民家には松樹の囲い（今日いう築地松）があって、暴風を防いでいる。夜に入り杵築に着く。先に行った従僕が走り帰って、今夜は鈴尾藤間大蔵大夫宅に泊ることになったという。

27日は杵築大社に参詣する。藤間大夫が抱える下僕の案内で、中門の2階で礼拝をさせてもらった。（中略）本社の千木が朽ち折れていた。千家・北島両国造家の泉水を見物。素鵞の社の題名と、銅の鳥居の銘は、大江綱広（萩藩主毛利2代）建立とある。

藤間宅で中食ののち日御碕へ小舟で行くが、風浪荒らく途中の黒田に上り、18丁ほど歩る く。遙るか海上西の端に、石州大浦の山がかすかに見えるほか山はなく、西海茫々と広い。

山路はけわしく日御碕社門前に足利義満の制札があった。社屋の破損は杵築大社と同じで、三重塔は瓦もなく柱ばかり立つと、両社の荒廃に驚いている。

神楽を聞いたが頗る古風であった。海岸には奇巌怪石があり、船頭がいろいろ由来を説明したが、いずれもとるに足らぬ説である。出雲の石質は荒らく欠け易く、風波のため打たれて怪奇な形相をしている。土壌は小砂をまいたあけ土のようである。

御崎よりみる弥山の峯は尖っていて美しい。毎年10月には海から龍蛇が来るのでこれをとって献ずるといゝ、この祭には松江藩主は使を遣すという。

雨もやんだので、こゝで泊ることをやめ、引きかえし黒田から乗舟し藤間方へ入る。珍味盛膳、鯉魚も出された。この魚はこの地順在という湖（神西湖か）にあるという。味よく主人と杯を重ねた。

28日には藤間太夫と別れてその家僕の案内で行く。やがて左右皆平かなる水田地帯へ。一帯は6万石を産するという。初めて雲上に大山をみる。平田駅にて中食、酔のため小憩。湖水の北を通り、山道4里、秋鹿村の新屋新四郎方で泊る。波音高く夢みることができなかった。

（意訳者・横田史談会　高橋）

奥出雲のたたら製鉄史⑯

新資料にもとづく特に東南部のその技術・経済・社会・文化の総合史

近世編⑧　松江藩の鉄行政（4）

（享保年間三郡御買鉄論争）

第6段

翌7日（12月）、三郎兵ヱ（可部屋源兵ヱ手代）は、御役所より使が来て、昨日約束した判形のために出頭するようにと告げられたので、かしこまりましたと返答したところ、鉄師仲間の卜蔵孫三郎から手代が使として来て、所用があるから樽屋へまいられたいと言ったので、そのまゝ樽屋久右ヱ門の所へ寄り鉄師仲間たちに、「昨日議論のあげく是非もなく判形を約束したので、これからそのため御役所へ参るところだ」と言ったところ、仲間一同が言うのには、それは驚き入ったことだ。議論不足で理に合わぬ。可部屋が張本人とは御あわれみに申されたことであって、源兵ヱの不届の仕方からだと仰せられて困まり、心得難きことと申せば、銘々誰も一身上もよく思われるであろうが、私共が知っており、お聞きなされたことのほかのことについて、判形をすれば、私共もつぶれ（倒産）て、源兵ヱ様がつぶれることでわけが立つということではない。その詳細は5年以前大坂での古い借銀のことについて御上（虫食いのため判読できず）も心配されて色々努力され、大坂での年賦償還ということになった。御年賦銀もあり、かれこれ考え合わすと、今度の不足銀についてのこと、このまゝ承知して判形すれば、つぶれて仕舞う。あとはどうするお考えであろうか。それとも去る6月御役所が御書き出しの通りに御算用された上に、また不足銀があって、私共がつぶれたならば仕方ない事であるが、筋道が違う。御上の御算用を承知して潰れたあとで、御上の御難たいにになる時は、潰ましたで済むことではない。その上ただ今まで源兵ヱは鉄方御役人が申された通り、御上の御れんみん（憐愍＝あわれみ）に役立っても、この度潰れたらば、これまでの御れんみんも無になる道理となる。頭筋（かしらすじ）の鉄方では埒（らち）がかないから、郡奉行様にも書付をだんだん出して見て頂き、奉行様でお請け込み頂くことができなれば、御目附様へなりとも差出したい。下役である鉄方役所へばかり申しても押し付けられるばかりで残念である。この通り御上へ申上げ、御上より鉄師の申し分無理だとなされ、判形せよと仰せられれば、仕方ないことであるが、何分にも御上へ申し上げない内は、判形はできない。お前（三郎兵ヱ）の印判はこの道理をとくと分別して、その上にて判形するというのなら、お前の心次第でとやかく言うことはない。もっとも昨日の書付の申訳けは、食事もせず病気中の者を、理不尽にお引き立てになられては、一命は終りますと申し開いたならば、よかったではないかと言っているうちに、三郎兵ヱの病気急にふるいつきはじめ、難儀をしたので、鉄師仲間一同取り扱いあん福（？）した。そこで御役所へは使いをもって、病気故三郎兵ヱは出頭できない旨申し上げた。

第7段階

（鉄方御役人　岡本善右ヱ門・桑原喜太夫）

その日8ツ時（午后2時）鉄方御両人が、樽屋久右ヱ門のところへ来られ、三郎兵ヱ昨日談合した判形のための出頭の途中、病気が差しおこって出頭できなくなったという、使の者の口上は承知したが、昨日約束したことは約束である、判形は済さねばならぬと申された。

その時三郎兵ヱは伏せていて、起き上ることができない程の状況であったので、枕元にいた太左ヱ門が申上げるには、ただ今振ひつき熱の出ばなであるので、お許し下さいませとお断り申上げたが、善右ヱ門様は苦しうないそのまゝで、印判をするようにと枕元へ寄って来られた。

その時三郎兵ヱは布団の中から、ただ今病中もうろうとしているので、本心にかえるまでお待ち下さいと申上げた。その時御両人様より、昨日の書付したことがわかるようでは、病気とは言えない。言語同断である。

どうするか返答せよと催促されたので、三郎兵ヱは腹をたて、御役人様方病気で看病をうけている所へ入って、病人をせめられるとは心外の至りある。判形することできないと申したのは、昨日書付したのは、喜太夫様理不尽にお引き立てされたため、病気の故もあって、息も切れる程でありましたので、昨晩一夜なりとも一命を継ぎたいと思ったが故に、書付致したもので、納得した書付では毛頭ありませんと申した。その時両人様大変に御立腹にて、三郎兵ヱに構わず、源兵ヱを呼びに使を出せと言って、立去られた。

8日、御役所より下級引立て屋2人が、源兵ヱを呼びに差向けられたと、桑原屋平右ヱ門がもれ聞いた。そこで三郎兵ヱは主人源兵ヱ（上阿井村）へ飛脚を立てた。三郎兵ヱは心配したが、鉄師仲間どもよりは驚かぬようにと言われた。

9日に三郎兵ヱは、経過の申し開きを口上書にしたため、郡奉行様へ差上げた。内容については別紙に控えてあった。それによれば、8日晩夜通しかけて帰って、翌10日四つ時（午前10時）に上阿井村に到着したが、前の内谷川は大水で渡ることができず、やっと八つ時（午后4時）になって、桜井源兵ヱ方へたどりついた。

9日に、下級引立て屋は源兵ヱ方へ到着したが、あいにく源兵ヱは備後の比和町へ一家揃って所用のため出かけていて、留守であった。引立て屋は厳しく申したので、源兵ヱの母はことの外に驚き、源兵ヱ方へも、直ちに知らせようとしたが、洪水で川を渡ることができなかった。

引立て屋はさらに厳しく言ったので、源兵ヱの母は手代藤兵ヱに言って、何分にもこの件については知らないが、早く松江へ出て判形し、引立て屋に引き渡せと堅く申付けた。そして10日朝上阿井村を立って、11日に松江へ参りすぐに善右ヱ門の所にて判形することとなった。

三郎兵ヱは道が違って、途中藤兵ヱにも会わず、帰ってこのことを聞いて驚き、そのまゝ早馬で松江へ出たが、すでに判形は終ったあとで、残念至極であった。

引立て屋両人を賄った上に、賃銭3貫200匁（1両1銀48匁＝4630銭）文で、これは銀38.66匁にあたり、玄米で2石＝米5俵にあたる）を渡したが、このことを鉄師仲間へは相談も勿論せず、隠しておいたため、段々吟味に対する言いわけが難かしくなった。

三郎兵ヱより言われて、源兵ヱは知らざることゝは言え、母の女の浅はかさが招いたことであって、大変に残念に思った。

第8段

今月12日に、樽屋久右ヱ門の所へ桑原喜太夫・岡本善右ヱ門の御両人が来られた。鉄師一同が残らず居合せたところで申されるには、伊豆屋源之丞に用事があるから、ほかの者は勝手の方へ退出せよとのことで引下った。御両人が言われるには、綿屋本分両家は判形をすませ、可部屋もこの度手代藤兵ヱが参上し判形すると申したが、前に三郎兵ヱに不届があったので、いまだ終っていない。そこで何とぞ判形せよと仰付け下さって、三郎兵ヱを特別に御許し下さるようにと嘆き申し、判形を済ませた。このようであるがお前はどうするかと御尋ねになった。源之丞が言うのには、私は幾重にも右願の筋道を御聞届け下されないうちは判形致しませんと。

そこで御両人が言われるには、

笹の鳴る道　簸の上短歌会

笹の葉のしきりに鳴れる野の道を足療えて今わが走りをり　小早川　恵子

おもおもと峡空低く雲垂りて湧き出づるごと雪降りやまず　松浦　愛子

選挙カーを止めて人夫らに呼びかくるにクレーン車の首は空にゆれをり　岡田　時子

己が身の一部をわけて生き抜けと子を守る父に春の風吹け　佐藤　喜代子

いくらかは痛みうすきと言ひし日は庭に出で来て草引きはじむ　常盤　はるまさ

諍ひもなき日々すごし互みなる性うべないて経にし歳月（とし）　野村　節子

柊の枝も鰯も言はずなりて一合の豆を煎りて節分　永井　弥生

歎異抄よまむと思ひしより年ひさし果さず今宵も炬燵にねむる　仝　人

寒ゆるむ夕べの雨を聴きながら春への想ひを秘めて眠りぬ　安部　夕波

前号訂正　1頁「本号の時代」6段　田畑永代売買　4頁4段　竹久夢二

お前の兄の儀右ヱ門は張口にある僅かの銀にこだわると、大事となって後悔し不便であると思うと言っている。さてお前はどうあっても判形しない心底であるかとお尋ねになった。成る程仰せの通り、私は判形は致しませんと源之丞は言い切った。

そこで、その方は何と言っても埒が明かず、当方も合点がいかぬ。兄儀右ヱ門が名請人であるから、引立て屋をその方へ遣すと言われた。源之丞は御意の通り名請は兄儀右ヱ門でありますが、この御買鉄については、初めから私が出頭し、銀米借用の諸願を致したので、儀右ヱ門は委細を知りませんので、私がしない判形を儀右ヱ門が致すことはありませんと申上げた。その方がどのように申しても、引立て屋2人を遣して呼寄せ、埒を明けると言って帰られた。

12日、亀嵩の儀右ヱ門を呼びに引立て屋両人が遣された。儀右ヱ門はわずらわしいこと故、出頭しないと言葉をつくして、両人に話したが、是非とも引立てて帰れと仰せられていると、二日間も逗留した。しかし気分が晴れないのでと書状に認めて引立て屋を帰らせた。15日に帰ったが、賃金3貫200文を渡して大変迷惑した。

9　段　階

12月8日の朝、右願書に御附紙をされ、御申し聞かせられた返答書と、さきの口上書と2通を認めて、矢島徳右ヱ門様宅へ持参し、御家来に渡しそのまゝ帰ったところが、御上への断書であるから御役所へ持参せよと言われ、桑原屋にいる鉄師仲間へ突き返された。

この日九ツ時（正午）、さた屋次右ヱ門・卜蔵五右ヱ門の両人が御役所へこれを持参し提出しようとしたところ、そのような断書見る事相成らぬ、早々に持帰れと、兵左ヱ門様が申され、仕方なく持ち帰った。

仝9日鉄師共相寄り相談し、この様に鉄方への断書を受取り下さらねば、郡奉行様へ提出するよりほかに方法はないときめ、一同揃って官兵ヱ様へ参上し、礼を尽してお断りしたが、了解いただけなかった。この上は御目附様へ申し出るよりほかはない。旦那様へ諸事頼みますが聞いていただけない、一同恨みますと重ねて申したところ、しからば、請け合うと申されたので、

最初の断書　壱通
鉄方御役所よりの算用目録
残らず
私共のもっている算用帳
壱冊
鉄方より申される算用目録
弐通
これは御見合のため
鉄方よりの御附札写
一通り
右御附返答書一通
上に口上書　壱通
〃　七通り

右の通り差上げ申します。何とぞ御れんみんを賜り、御上へ仰立て下さる様にとお断り申上げた。

（原文には方言と、お上に対する—それぞれの役柄に対しても変えてある—言い方にも理解に困しむところもあるが、意訳せず出来るだけ、原文を尊重してわかり易くしたつもりである）

斐の上川柳三月抄

こけし棚こけしが何か語りかけ　安部春恵
ねた切りの喉が泣いてるビール瓶　渡部好之
遠廻りしなけりゃ余生の後とがない　高木白虹
皮算用して待っていたお年玉　安部正子
職を退く朝茶柱に話しかけ　児玉哲呂
年金をチョッピリ上げて派手に言い　松浦久寿子
一票で誰にも書くような顔をする　松田牛歩
テレビからおけじゃご飯の味がする　佐佐木千世
難題にうまく逃げ道敷いておく　藤原のぼる
物騒な老眼鏡にも世界地図　若槻白馬
鬼の面かぶる下地も怖い顔　中林もりえ
東京の雪はニュースでさわぎたて　藤原千代子
消費税やめれば儲けになるつもり　石原冬明
シクラメン次ぎつぎ咲いて春を待つ　真綿よし子
今日も又嬉しや仕事に追れる身　横山まこと
この頃は鬼も内にと招き入れ　田中有樹絵
語らない人形に話す一人言　藤原ユキ子
参観日なかよし二人があくびする　杠京子
塩まいて女性は上げぬ土俵とか　松浦亜以
折り込みの目玉につられ無駄を買い　田中芳春

二月句会抄

綿虫や行く先々の日を奪う　浅野としお
股火して莨くゆらす豊かさよ　岡田蹊花
点滴の韻かすかなり冬日差し　小川月舟
着ぶくれて面影偲ぶ喪の座敷　門脇花子
凍て踏んで始発列車に急ぐ道　加納信子
古史語る心よせ聞く雪のバス　楠房子
初午や稲荷婆やの掛け樽　高木白虹
地吹雪や傘逆立てて下校の児　新出谷一華
煮凝りや戸棚の奥の皿一つ　錦織富江
春一番明けの雨音床に聴く　渡部夕峰

会員頒布一部百五十五円／六九一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0＝601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

美しい日本語を生かそう

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 180 号
（4 月 号）
1990　4.　7
（M124・T79・S65）
奥出雲編集集団©

奥出雲が生んだ日本の詩人 安部宙之介

―「ある自伝より」⑤

結婚

大阪へ赴任した植田貞女は、やがて東京詰めになったと報らせて来た。そして翌年（1928昭和3・24才）2月に上京した貞女と3月結婚し、吉祥寺に住んだ。

宙之介は二男であり、貞女の長姉は養子をとり、次姉は嫁いでいたので、今日で言えば学生結婚というものであったが、今日ほど身構えたものではなく、呑気な生活であった。家は新進詩人の先輩槙本楠郎が近くにあると紹介して呉れたもので、吉祥寺駅から近かった。やがて弟を下宿させた。宙之介はこゝから中央線を利用し、九段の大東文化学院へ通った。

そして結婚のことの了解を求めたところ、まもなくよかろうと手紙が届き、朝鮮の兄からも祝いの便りが届いた。貞女の家からはかなり日が立って了解の手紙が来た。あとでの話では貞女の義兄が、宙之介の実家（奥出雲・仁多の三所）まで出向いたらしい。突然の来訪者で父はそれとも知らず、行きずりの人として迎えたが、お茶で世間話をした印象を、義兄はよくして帰ったらしい。

槙本は正富と同じ岡山県の出身で、6才年長であったが、早稲田大学を中退して雑誌記者をしたりして、当時雑誌「前衛」に拠っていた。そして児童文学にこの方面では先鞭をつけ、のち一家をなした人物であった。

槙本の家は吉祥寺の公園の林の続きにあって、幼稚園児のナナコとスミレという女児と妻と4人であった。故郷を捨てた人として一抹の淋しさのかげを宿してもいたが、宙之介は妻と公園を散歩すると、同じ故郷を捨てた者のわびしさを、それとなくそれぞれの家庭の温かさで慰めあったが、干渉はしないことにしていた。

宙之介結婚の1928(S3)年

日本総人口　6,250万人
白米1石36円50銭　清酒1升1円90銭
流行歌―波浮の港，君恋し，出船の港
美人女給のカフェーがはやり出す
高柳健次郎テレビジョンの公開実験に成功
第9回オリンピック（オランダ）で三段跳織田幹雄，平沢鶴田義行ともに初の金メタル
医師野口英世　西アフリカで没す
衆議院議員（男）参政権初の総選挙
左派団体に大断圧を加える
満州で重大事件おこる　強硬外交へと進む
昭和天皇即位式

三木露風との出会い

その前の年の5月15日、「新進詩人十周年」記念の件で吉川則比古とともに三木露風を訪ねた。十周年記念の趣意書の件で、露風の心証を害したと吉川は妙に怖れていたが、宙之介が露風のことばの一句に感動したと言うと、ひどく喜んで、その日持参した「三木露風詩集」（第一書房版）の扉に、「暑き日の午後を送り、色赤き黄昏の日没を送り、今ははや甘き睡に、樹の梢小鳥の群、憩ひ沈む」の詩を書いた。雄渾な筆勢で当時の張切った気分を示すものと宙之介は喜んだ。

三木露風　1880～1964（明治22～昭和39）。明治・大正・昭和期の詩人。兵庫県出身、早稲田・慶応中退、口語詩に先鞭をつけ、抒情詩人として出発し、象徴詩人としても優れた才能を示した。晩年はカトリックの洗礼を受け、宗教詩集を出版した。有名な「赤とんぼ」などを収めた童謡集、『真珠島』ほかがある。『三木露風全集』全3巻。安部宙之介の『三木露風研究』は著名。

記念講演のあとで御礼に露風宅を訪れ、同じく講演された野口米次郎宅にも御礼に廻った。記念行事のあとで正富から休養を命ぜられ、宙之介はしばらく休むことになった。3年になった時学校では、私学派と官学派の教授間に紛争があって、学生もそれに加わった。正富は宙之介の保証人でもあったので、学校へ呼び出される迷惑もかけた。

そのころ吉川が露風のところでの詩の勉強に誘ったので、私淑を深めることになった。その上露風も吉祥寺に家を新築して引越して来たので、一層近づくという運命的な縁がいよいよ深くなった。

宙之介は露風との初めての出会いからのこと、対談したことのすべてを記録しはじめていた。

結婚間もない夏のころ、露風が新築した家を見に来た時、宙之介は家の近くで出会ったので、自宅へ案内されいろいろと話をした。

妻の郷里が鳥取県であると話すと、露風は播州竜野藩の家老の家に生れたこと、母は鳥取藩の家老の出であることなどを語った。

落着いた部屋の中で手にされていた扇子を見せられたところ、それには露風の近詠二句が書かれていた。

七夕や笹の上なる星のかげ

孟蘭盆の提灯白し簾越し

奥出雲が生んだ日本の詩人⑤・奥出雲の文学と芸術③・奥出雲のたたら製鉄史⑰・川柳・俳句・短歌

奥出雲と文学・芸術(3)

頼春風・頼杏坪の紀行(3)

松江藩府に入る

29日秋鹿村を出て1里先の浜佐陀から舟にのり、1里半ほど行くと松江に至った。その手前に定川（佐陀川）があって湖水の北辺の浦へ通じている。

松江では長年という人の案内で城下に入り見物した。稲荷神社があり、家老大橋茂右ヱ門・乙部九郎兵ヱ以下の諸館が建ちならぶ。大橋は92間、町の繁華さは雲伯一の大都会である。中食は八軒屋町伊野屋次郎右ヱ門宅、南1里半の佐草社へ詣る。祭神は素戔嗚尊で八重垣という。

大杉2株あり。細い道をゆくこと10丁で大庭社（注・神魂神社）に至る。祭神伊弉諾尊、諸祠8宇あり、下祠に小堂があって中に釜がある。これは穂日命が乗って天より降ったという。東に湖を望む絶景である。（十六嶋苫は夏にはないという）村の油屋善吉方で泊る。

計画では中食をした八軒屋町の伊野屋次郎右ヱ門で泊るとあるが、こゝで泊っていない。添書に「松江国禁ノコト、大社ヨリ添書可請」とある。松江城下では他国者の宿泊が禁じられていたもののようである。（初回に書いた頼杏坪の日記でも、代官であったが長逗留はできなかった。

すずきは冬にとり夏にはないが、冬の味は至妙という。鮒膾の味は極めて妙である。酒の味は薄すいが佳いなどとある（中略）。

宿の主人に道光上人（①の杏坪の日記の項に）の家を聞いたところ、その法音寺は西2里ばかりの湯町にあるとのみあって、面会はしていない。聽松庵について尋ねたところ、この地に登昌という山伏ありと、とんちんかんな答がかえった。

宿に柳井・海田の2客人があり、ともに酒を飲んで慰めた。

4月1日、再び大庭社に詣り、神主にたのんで宝物を見物した。吉川広家寄進の朝鮮円鏡、毛利輝元寄進の紀新大夫行平の刀、同じく尼子晴久寄進の豊後僧定秀作のもの、冷泉為村郷十二首、令内室信子歌など、さらに後鳥羽院の宸翰などをみる。

（中略）

湯町で中食。このしろ魚はこの地の名物という。意東・荒島を経て湖水を舟で八杉（注・安来）へ、そしてさらに江場田屋藤右ヱ門の舟を買って米子に至る。途中戸田川（注・富田川）を通るが川上には尼子の城跡がある。

米子はかって吉川氏の居城であった。こゝで一泊す。

伯耆路を行く

4月2日、米子の町をみて「市民の富は松江に伯仲す」と誌している。簸川（注・日野川）をすぎ安養寺を過ぎる。後醍醐帝が隠岐に渡られた折、皇女はこゝからは同行できず、この寺に留まって尼となった。帝が京都還幸の後召されたが、皇女はこゝに留まり幾ばくもなく逝去した。この寺の開祖である。

日野川の川上をわたって山にかゝること3里、銅の鳥居を過ぎ、豆腐屋領八のところで泊った。大山寺山内の諸宿坊に宿を乞うたが、安芸には壇家がないと拒絶された。諸寺の前には立札があって、国々の壇家が掲示されている。

山の内は芝が一面にあって石はなく、平陸の如くであり、民は常に牛馬の放牧をしている。鳥居に至って西をみると日まさに沈まんとし、天も水も赤々とし一大偉観である。

これまでの雲伯ではどこも茶の味はよくなかったが、こゝでは初めて味佳ろし、雲伯では水が悪いのか。

3日、初めて大山に上り、諸院を見物し、円寿院にて眺望を楽しんだ。隠岐国は40里余の東海の外にあり、三瓶山は30里余の西にあり、弓が浜・美保関は眼下にある。高台より北方の谷々は皆雪で、谷底に雪が積っていた。

出立前に「大山登山無用」と聞いていたので頂上には登らなかった。諸院は42坊あり。豆腐屋にて中食して山を下り、溝口村から二部村という市の立つところに着く。こゝから黒坂までは宿所がないので、日はまだ暮れなかったが、こゝの森屋源七方で泊った。夕方まで近くの天寧寺という小寺に上り、主僧と話をした。自家醸造という般若湯をすゝめられたが（次頁下段へ）

三月句会抄

峡の幅余さず冬の虹渡す　浅野としお
啓蟄や蜥蜴も蛇も憎まれず　岡田蹊花
街灯のともりて風花遊ぶ湖　小川月舟
風さそうやわにに触れてねこ柳　門脇花子
春愁や受話器の向うの変声期　加納信子
春泥をあびて野仏夕日射し　楠房子
片隅になにか失せゆく古りし雛　高木白虹
雛の顔見比べ選ぶ嫁姑　新出谷一華
ポスターも窓口も変り春の駅　錦織富江
老梅の枝に小さな命咲き　峰石美代子
春泥の靴無造作に脱ぎ置かる　渡部夕峰

奥出雲のたたら製鉄史⑰

新資料にもとづく特に東南部のその技術・経済・社会・文化の総合史

近世編⑨—番外編1

松江藩の職制と格と系統

はじめに

こゝで番外編として、松江藩の職制、その職と格（身分）、支配系統を明らかにしておく。

出典は『雲藩職制』による、この職制は1855安政2年11月6日「御目付所御給帳にもとづくものである。従ってこれ以前は多小違いがあると思われる。明治維新以後のものは『出雲藩治職制』があって、大巾に変っている。御目付所とは、現今の人事課に当り、御給帳とは職登録台帳の如きものである。

諸役所とその所管

一般藩政については、**中央部**（表①の仕置所の32の役所がある）と、**地方部**（表②で）(1)の松江城下の町役所は中央部の寺社奉行所に直属し、(2)の隠岐国の元締・隠州元方は中央部の御勘定所に直属し、他の各部は中央部の郡方に直属し、郡奉行がこゝにおり、この下に代官所があった。各郡にある郡家（はじめは横田町に天明2年から三成町に移る）は、各郡におけるその拠点役所であった。

国外部では、江戸役所・大阪留守居役所・京都留守居役所があり、それぞれ江戸藩邸・対幕府交渉・商業経済交渉・対皇室交渉の拠点となっていた。

藩候直属には表①の、表御殿など5役所があった。

表①

○藩の職制の大綱

松平家

- 藩主
  - 仕置所
    - 御用所
      - 御膳手方
    - 寺社町奉行所
    - 御目付所
      - 御勘定所
      - 札座
        - 駄屋
      - 御蔵
      - 登米方・廻米方
      - 人参方
      - 木実方
      - 木苗方
      - 山方
      - 材木方
      - 紙方
      - 御作事所・破損所・寺社修理方
      - 鉄方
      - 釜鍋方
      - 御鉄工所
      - 御小人方・御書請方・堀方・屋敷方
      - 御船屋
    - 軍用方
    - 武具方
    - 宗門方
    - 郡方
    - 地方
  - （表御殿）
    - 御近習頭
      - 御側役
      - 御納戸役
      - 御側惣役
      - 御作事所・破損所・寺社修理方
      - 中奥惣役
      - 御手廻
      - 御側医
      - 御茶道
- 奥御殿
- 御台所
- 御花畑
- 殺生方

表②

〔領内支配（地方支配）の職制と系統〕

(1)松江城下（末次・白潟）

寺社町奉行所—町役所（末次・白潟各一）
- 大年寄
- 大目代
- 小目代
- 町年寄
- 物書

(2)隠岐国（島前・島後）

御勘定所—隠州元方
- 隠州郡代（役所島後）
- 隠州代官（役所島前）
- 徒隠州元方頭取
- 小算用隠州元方
- 萬役人隠州元方

・郡代は「役組外」格の士で一二〇石。

・代官は「組士」格の士で扶持一五俵。

(3)出雲国一般

郡方
- 郡奉行（神門・出雲郡一名）（能義・仁多・大原・飯石南四郡一名）（島根・秋鹿・意宇・楯縫北四郡一名）
  - 郷中吟味役
  - 郷中吟味役頭取（木実方人参方勤）
- 代官所
  - 代官
  - 徒元〆頭取
  - 徒並元〆
  - 同内改
  - 小算用元〆
  - 万役人元〆

・郡奉行は「組外」格の士で一二〇石、小人一人・郡足軽四人ずつがつけられた。

・代官は「組士」格の士で扶持一五俵ずつである。

・郡奉行は郡内行政一般を監督し、毎年四月・十二月の二回管内を巡察した。

地方
- 地方頭取
- 組士地方
- 組士添地方
- 組士地方見習
- 徒添地方

・頭取は「役組外」格の士で扶持三〇俵。

「酒味烈冽可愛」（冷たく強くよろしい）と書き、雲州からこゝに至るまでの売酒は味薄くて甘くて飲めない。造る者が当分量宛しぼって売るので、白濁があり、糠のくさ味があったのだと述べている。

こゝの宿、森屋源七方は出雲の木綿問屋で、庭内には木綿の駄荷が一ぱいあった。昨日の分は今朝備中勝山へ出し、今日の分がこのようであって、年間3000駄は出荷するとその盛んなことを誌している。

1行季に75匁づつ4行季を1駄とし、1駄に古貝300端と書いてある。

前号訂正　1頁5行8行　聞いてみると　2頁4段20行　遺れまし　4頁1段2行　帳口

家格と役職

藩内支配の各役職は家格によって定められ、世襲が強かった。

士には、上士・並士があり、その数は約1000人で、在職者は、安政2年453人であった。

卒には、士格と足軽があって、その数は凡そ1700～2000人

その他に軽輩があった。

番頭以上は上士で特に格式高く、一国中の貴族であった。

組士以上は本士ともいゝ、功あれば昇進して奥列以上となれるが、功無ければ代々組士。

号を追って、よく記録にでる家格と役職について解説し、当地方とのかゝわりも明らかにしたい。

鉄師の中で功によって、格式を与えられたのをみると、小算用格→御目見格→御徒並→御徒並までの士格（士分格）どまりである。

また鉄師を通して製鉄業を所管したのは、**鉄方**でその役人は組士格で、本士の最下位格であった。これらを明らかにして三郡御売鉄論争の中間まとめをし、論争の終末に及ぶことにする。

（横田史談会高橋）

表③

○格と職

家格	人数	役職
士		
士 上士 代々家老	七	仕置（当職）、軍用方、城代
士 上士 不定家老	一〇	仕置（当職）、軍用方、城代
士 上士 中老	一三	仕置副（添）役、御近習頭
士 上士 番頭	一六	大番頭、惣従番頭、留守居番頭
士 並士 奥列	二六	新番頭、旗奉行、槍奉行、用人、寺社奉行
士 並士 者頭	四三	者頭役、奥家老、目付歩行頭
士 並士 使番	一八	使番役、側役
士 並士 組外	六六	宗門奉行、郡奉行、軍用方奉行、御納所役、人参方奉行、御花畑奉行、御小人奉行、京大坂留守居役
士 並士 役組外	七八	隠州郡代、札座奉行、御勘定奉行、御勝手方、御作事奉行、木実方奉行、御舟奉行、御廻、別当、御花畑奉行、御普請奉行、破損方奉行、献立指南、台所奉行、地方頭取、御小人奉行、隠州代官、木実方添奉行、御作事方添奉行、御供方、右筆
士 並士 組士	一五三	
士 並士 新番組（士）	一七	御勘定所押合、御勝手方押合、札座添奉行、御作事破損方
士 御徒		御目付所に属す
士 御徒並		
士 格 御目見 小算用	一七〇〇	諸役所に属し元〆を勤める
士 格 御目見 小算用 万役人	～	
卒 足軽 御譜代組		諸役所の下役人を勤める
卒 足軽 浮役（組）		
卒 足軽 新組	二〇〇〇	
卒 足軽 城代組		城内樹木の手入、掃除、小人を使役
卒 足軽 御旗組		旗持、旗奉行に属す
卒 足軽 同心組		市中取締、寺社町奉行に属す
卒 足軽 先手組		者頭役に属し所々の番所に勤む
卒 足軽 水主		御船屋に属す

○出典（『藩藩職制』）

○家臣団構成

①家臣団構成

一般的な家臣団については、「格と職」の項をみよ。

②郷士制度

この制度はない。

会員頒布一部百五十五円／六九ー一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0＝601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

斐の上川柳四月抄

春の風おかまいなしに持って逃げ　真綿よし子
若い娘にいい顔してる猫までが　田中有樹絵
何気ない仕草に亡父の姿みる　杠京子
飲み捨ての空缶むなしい音をたて　高木白虹
習い事夢中になって冬逃げる　安部正子
春風に心のしこり少し解け　松浦久寿子
雪消えてポツンと一人庭眺め　安部春恵
日当りは厭や顔のじわみんな見え　松浦亜以
孫の守り疲れは夜の安眠剤　佐佐木千世
信じきる味方ときには地所見する　松田牛歩
約束が違うと絵馬に恨みごと　渡辺好之
春間近かテレビ真夏のコマーシャル　横山まこと
立て続けマンガの見れるいい身分　藤原のぼる
瀬戸焼きの蛙に今日の無事を告げ　中林もりえ
宿題の春を探しに孫と出る　藤原千代子
山の神三寒四温のヒステリー　若槻白馬
ヘソクリが助けを買った日曜日　田中芳春

一行の文字　簸の上短歌会

せつなくて思ひ出ばかりが通りゆくと賀状のすみに記されしのみ　常盤はるまさ
出荷終えて鴨の居らざる鴨池を張り廻したる網に風鳴る　佐藤喜代子
我武者羅に吾れを引く犬の求むるは何ならむ時には逆にも向き　小早川恵子
いづこへか向ふ救急車のサイレンを夕餉ととのふる厨にて聞く　松浦愛子
売り出しの節句の雛の華やぐを贈る孫なき吾れも立ち見る　岡田時子
二百年忌を迎ふる先祖偲びつつ刻字うすれし墓石磨く　野村節子
大先祖（おおおや）も餅搗きまさむ二百回忌法要すると餅米を研ぐ　仝人
息吹きそめし雑木林にこもる風聞きつつ母のみ墓清めり　永井弥生
君逝きし病舎の窓は閉ざされてあかりともらぬ夕べとなりぬ　安部夕波

美しい日本語を生かそう　なぜカタカナ語を使うのか

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 181 号
（5 月 号）
1990. 5. 5
(M123・T79・S65)
奥出雲編集集団©

奥出雲のたたら製鉄史⑱

新資料にもとづく特に東南部のその技術・経済・社会・文化の総合史

近世編⑩—番外編下

本号の時代

1720（享保5）清の伊孚九　長崎に来り度々来日　日本の南画の発達に貢献（絲原記念館に作品あり）
水戸徳川家「大日本史」250巻献上
近松門左衛門の浄瑠璃作品多い。
22（全　7）出版規制令（好色本・徳川家にかゝわるもの）を出す
駝鳥（だちょう）船来、江戸市中の私娼を禁ず、寺小屋に手習いの充実を命ずる、芭蕉門下10哲のひとり支考（美濃派の祖）の活躍めだつ

禄を食む武士たち

武士たちは一定の身分と格式をもち、その格式に相応する軍事上もしくは行政上の職務を分掌し、その地位に応じて「知行」「切米」「扶持」などと呼ばれる「俸禄」を、領内の農民から徴収する貢租米のうちから支給された。俸禄は知行と蔵米の二つに大別されるが、知行は戦国時代からの伝統的な知行（支配する土地からの収穫の幾分かを収取する）を名目上残したもので、年々一定の割合（4割前後）を玄米で支給された（士分という上級家臣対象）。従って知行500石取の武士は年間200石の禄米を与えられるのが普通で、自家用を除いてすべて売却され、生活費に充てられた。藩によっては士分のものには給地を指定されて、その土地からの一定の貢租米を俸禄として支給された（地方知行）。これに対して土地の知行とは関係なく、藩主の米蔵から禄米を給せられるのを蔵米という（蔵前知行）。

松江では松平直政の時は別として、以後は蔵米知行であったといわれるが、判然とはしていない。地方知行は、土地所有権・行政裁判権・貢租徴収権をもっていたから、殿様（大名）に対する小型の大名であった。大名側へ求心的に家臣たちを従属させるのには、家臣たちの土地所有権を否定し、土地から切離すことが、都合が良かった。

横田の原口村に、古く家老某の知行地があったが、消滅の時期は明らかでない。のちその某が事情あって逃避行を企てたとき、たずねたのがこの地であって、岩屋寺にかくまわれることを望んだことがある。地方知行の名残りである。

この蔵前知行の租率は、松江藩では四ツ五（4割5分）を標準とし、元禄頃までは4割4分4厘〜4割5分位であった。すると500石取りでは222石〜225石を支給されたのである。

その全額を手取りするを本知または全知（まる）（丸知）といい、半分を半知といった。中級の藩士には切米、下級藩士には扶持米といった。切米100俵（約40石）とは1年間100俵の玄米。一人扶持とは1人1日5合の割で1年間の玄米（4.5俵＝1.8石位）を受けた。最下級の下女などは主として給金を受けていた。

格による俸禄高と鉄師

家老級	（1,000〜4,700石）	6〜7人
家老並	（700〜800石）	
中老	（400〜1,000石）	

で、ほゞ世襲永禄であった。

番頭は戦時には士大将（司令官）となるもので（200〜700石）16人ほか並士以上の軍事編成の中核となり、番頭1組は50人を常時抱えていた。

奥列	（100石以上）	26人
用人・寺社奉行になる。		
者頭	（〃）	43人
足軽による1隊の将で部隊長級		
使番	（200石位）	18人
他藩への使者などになる。		
組外（はずれ）	（100〜700名）	66人
番頭の組の下には入らず藩主直属（司令部付）で宗門奉行・郡奉行等。		
役組外	（100石内外）	78人
組士で官職をもつもので、御勘定奉行など		
組士	（100石以上）	153人
平時は諸下役をつとめ、文武を学び、戦時には戦士（士官）として、番頭・者頭の下に配属される一般将校以上が幕末の状況である。		

この「三郡論争」に出る

御用所（御用人）は		250石級
御目付所は		230石級
郡奉行は組外格で		120石（300俵）級

御勘定所は役組外格で140石級

鉄方役人は組士格で15俵で役組外の½程であった。

この幕末時代の鉄師の地主としての年貢収入高は、田部820石絲原696石であって、所得から言えば、家老並から中老級で、藩の重臣層にあたる。

したがって、組士格の鉄方役人などは、経済的に言えば足元にも及ばぬものであったが、士農工商時代、武士の威光をかさに着て、鉄師たちに横暴を働いた様が明らかになる。

こゝに登場する人々

この時の

御目付役	不明
郡奉行	柘植官兵衛（仁多・飯石・大原・能義）
御用人	□□治郎左衛門
鉄方御役所	矢島徳右衛門
	□□兵左衛門・桑原喜太夫
	・岡本善右衛門

であった。

この時の鉄師の松江滞在中の

定宿は、今日の末次地区（京橋堀以南）にあったようで

金森屋孫右衛門　可部屋
隣　伊豆屋　湯の廻　卜蔵
桑原屋平右衛門　可部屋
樽屋久右衛門　など

鉄師やその一統では

大馬木　山本　次右衛門
又右衛門
湯の廻　勘右衛門
全手代　平　助
竹　崎　卜　蔵　孫三郎
全手代　宇兵衛
卜　蔵　藤兵衛
右　兄　五右衛門
亀　嵩　伊豆屋　源之丞
右　兄　儀右衛門
上阿井　可部屋　源兵衛
松江手代　三郎兵衛
阿井手代　藤兵衛
大　吉　弥三右衛門
上久野　七右衛門
松　笠　太左衛門
吉　田　綿　屋　長右衛門
全手代　与次右衛門
分　家　庄右衛門
全手代　孫右衛門
松江手代　左兵衛

以上鉄師　12人

である。

これまでのあら筋

この論争の中心は、御算用目録である。銀米借用に関しての清算に関するもののようであるが、内容については絲原家文書簿冊約一万冊・文書約一万点の中にそれらしいものも見たらず不明であるが、この御算用目録が、銀米借用願当時のものと相違することから、奥出雲鉄師12人が、これに対して異議を申したてたもののようである。

1721（享保6）年秋、13年間続いた藩による御買鉄制が廃止された。察するに鉄買上に伴い、鉄師が経営上藩より代銀支払い前に、米を借用したものではあるまいか、その代銀を買上制が廃止になって藩の収入が減じたのにかこつけて、当時の金額に水増しでもして請求したものであろうか。鉄方役人の度重なる無理押しと暴力まがいの行動、暴力団まがいの下級引立て屋の押しかけ、それに対する応接や多額の袖の下の強要などは、何かそうしたものを感じさせるところである。この事件後4年して松江藩は「鉄方御方式」をしいて鉄師の統制に乗り出したようである。これは松江藩の企業たたらの発展に大きな寄与をしたものと筆者はみるのであるがこれは後で次第に明らかになる。

1722（享保7）年11月13、鉄方役所（以下役所とする）に出頭を命ぜられ、御算用目録を渡された。翌日みると先の議定と相違するので15・16両日、享保5年6月の算用目録と比較し、その点についての口上書を作成した。

17日正午すぎ役所の桑原・岡本両役人が、金森屋へ来て、鉄師の山本・湯の廻に判をせよとせまった。可部屋・卜蔵は口上書を出し、了解されれば判をすると述べた。目録をなおせとは何事と桑原は脇差のつかに手をかけたが、岡本が押しとめた。錦屋の手代に、そちらの主人が筆頭だとせまったが、手代と言い逃げた。一同の考えだという鉄師と、押問答が続き、それではと郡奉行を訪ねたが、柘植官兵衛は留守であった。

18日朝、全鉄師12人口上書をもって役所へ持参し、さらに上の勘定所へも持参した。2日おいて20日、全員が出頭すると6人を残して帰らされ、あとのものは、夕方6時まで「押せ」「押さぬ」の押問答で日が暮れた。21日にはほかの3人に出頭せよとのことで行ったが、押問答で判をせず引き去った。翌日全員出頭したが都合で会談は中止。26日は全員出頭が湯の廻の病気のため11人が出かけた。問答の末綿屋手代は主人の弱みを突かれて、已むなく判をしたが、口上書の件は必ずとりつぐという約束をとりつけた。

夕方綿屋分家手代についで可部屋もせめられ、印をとりに帰った。ところ手代は帰ってから食当りとなったと出頭しなかった。可部屋は判を持参しどこへでも押しなさいと差出したので、役人は立腹した。それから27日の朝まで次々と鉄師は呼び出されせめられたが、判形はしなかった。病気がなおったと湯の廻が出頭したところ、罰にするとせまられ驚いて、鉄師の口上書に役所の書いた反論を含めた附書を借りれば、鉄師と相談すると借りて帰った。それを検討して口上書を書いたところ、湯の廻は急病で難儀をした。

28日病状は変らず、宿の主人が代って附書きを返えした。一方、附書きへの返答の口上書を卜蔵が持参したが、これは駄目だ、判をすれば考慮に入れると言うばかりであった。

12月1日、岡本は吉田村に綿屋（分）主人をたずね、手代が仮病を使って出頭しないと膝詰談判をした。主人は事情を知らぬまゝ印をしてしまった。4日可部屋主人へ出頭を命じて来たが、病中と断った。6日鉄方両人は桑原屋に可部屋手代を訪ずね、主人の所在をたずねた。母が病気で帰宅中というと、桑原は手代に暴力を振った。このようなものに判をすれば倒産する他はないと、品物を差し出して断ったが、また暴力に及んだので、明日判をすると書付を出したので桑原は帰った。

7日可部屋手代に約束の履行のため出頭せよと使いが来た。たまたま居合わせた鉄師一同は、最初の約束に水増ししたものを実行されれば倒産してしまう。お上みの憐恣とは何のことか、鉄方では埒があかぬ、郡奉行かさらに御目附へ申上げよう。そうして駄目なら仕方がないとの話になった。ところが手代三郎兵衛は、急にふるいつき難儀をし、その旨他の鉄師が届出た。

ところがその日の午後、鉄方の両人が病床に踏み込んで仮病であると押問答をはじめ、あげくの果て主人の源兵衛呼び出しに下級引立て屋を上阿井に差向けた。ところが主人源兵衛は備後の比和町へ出かけ留守であった。

そこで源兵衛の母をおどしたので、家元手代藤兵衛を松江に出発させ判をさせた。松江の手代は急いで上阿井へ帰ったが、洪水のため交通が思うにまかせず、藤兵衛とも行き違いになった。主人源兵衛は女の浅はかい分別を残念がった。

次には樽屋に滞在していた伊豆屋源之丞へ鉄方両人がやっと来て、錦屋本分家、可部屋とも印をしたとせめたてた。それに対し私どもの言い分のきかれぬうちは出来ぬと断った。すると兄が名請人であると言って、亀嵩へ引立て屋を送りこんだ。兄は私は一切知らぬと断ったが、2日間も滞在し、饗応を求め問い詰めもしたが、袖の下を与え断り状をもたせて帰らせた。

12月8日の朝、一件書類をもって鉄方役所筆頭の矢島宅へいったが、役所へ届けよと差図され、正午に卜蔵五右衛門らが、役所へ持参したが、追いかえされた。

9日鉄師一同相談し、この上は郡奉行へと持参し、一同揃って礼を尽して奉行に願ったが、聞き届けられず、御目附所へ持参し、嘆願を重ねたところ、請け合うことを約束された。そこでこれまで交した関係書類七通すべてを揃え、お上へ仰立て下さるようにと届けた。

吉野裕子の 大嘗祭考

はじめに

吉野は民俗学者であるが、女性の細かなそして深い洞察を徹底に加える姿勢は説得力を生んでいる。一つの主題を古い時代へと追いながら、それぞれの時代とその時代の文献そして古典までも広く渉猟し、さらに東アジアとくに中国へと古典の源流を求め考察を深めている。

「鬼」「扇」「蛇」「龍蛇信仰」など、古代さらに原始時代にまで及ぶ、実証的な研究は恐らく吉野によってはじめて、解明されたものである。そしてこれら土俗の民俗と中国の陰陽五行説の関連についても精徴を極めている。やゝ難かしいが説得力は十分である。吉野の多くの著書や論文の中から、「大嘗祭」に関するものを紹介する。

みそぎ＝身殺ぎ＝禊

かつては大嘗祭（天皇即位後の最初の新嘗祭）の一カ月前に、「ミソギ」の儀式が重要視されていた。ミソギという脱皮によって生命の更新をはかる蛇の生態の模倣の儀式である。

信州の諏訪明神にこの古儀が祭の中に残っている。この神社の神体は蛇であることを、土地の人で知らぬ人はない。

祭で明神が着物をぬいで、八才の童子に着せ「御衣着（みそぎ）」と呼ぶのは脱皮を暗示している。表皮を脱いだ蛇は若い生命に生れ変る。「御衣着」は「身殺（みそ）ぎ」である。

古代人の考えは、蛇における脱皮新生に清浄観を抱いた。「身殺ぎ」が生まれ清まる証（あかし）であった。

それが神話成文化の時期にミソギ＝禊祓（みそぎはら）いとなった。京都の東方重視（後述する）は、太陽にまつわる蛇信仰であって、古社賀茂神社にもこれに似た行事がある。

そこで神社における禊祓いの祝詞（のりと）の中で、最初に出て来る、神話の中のイザナギが阿波岐原でミソギをするくだりの神話を、注意深く読むと、イザナギは身につけていた、杖・帯・ふくろ・衣などすべてを、さらに毛髪の一部も投げすてる。これは脱皮をあらわしているといえる。

さらに先の古儀では東方が重視され、儀式に用いられたものはすべて東方の川に流される。この古儀で、首長（のち大王そして天皇となる）は川の西の仮屋にこもり、蛇となって祖霊と交り、蛇神となり、蛇神から人への変身をとげて仮屋を出る。すべて表皮をぬがねば、蛇から人になれない。この儀式で麻や縄が「身殺ぎ」の物実（ものざね）として川に流され、人形（ひとがた）も流される。これは蛇から人に変心し、脱皮新生をとげる首長（大王→天皇）の若い生命を象徴する。

さくらを傘に

簸の上短歌会

恙なくこの冬越して夫とわれ少し派手なるコートに旅立つ　永井弥生

雨に散るさくらを傘にうけながら谷中の墓地を娘と語りゆく　仝人

友の顔思ひ浮べつつ贈るべく乾燥椎茸を箱に詰め居り　佐藤喜代子

鍬と鎌置きて札幌旧友の花信を読みし卯月の央　岡田時子

癌病みて五十一の人みまかりし葬りの庭に芝櫻燃ゆ　野村節子

鍬先に触れし蛙を連翹の花の根方に深く埋めぬ　仝人

栗の芽の雨に育ちてゆく日々を吾れの思ひはただ遅々として　常盤はるまさ

病む君を見舞ひて帰る夕庭に白木蓮は散りてゆくなり　安部夕波

四月句会抄

若布売り語尾面白き浜言葉　浅野としお
卒業や涙押えし母の笑み　岡田蹊花
寝足らずを炬燵に眠る春眠り　小川月舟
ひとときの出合重ねて桜の下　門脇花子
春眠やうつつともなき二番夢　加納信子
花かすみセーラー服の線白き　楠房子
散り残る花のむせびや雨の韻　高木白虹
観世音誰が手向けしや春の水　新出谷一華
山辛夷たった一人のバスに乗り　錦織富江
耐えがたき心おさえて花に逢う　峯石美代子
連翹のまぶしき庭の箒あと　渡部夕峰

斐の上川柳五月抄

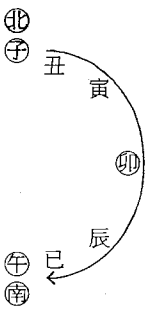
遠出旅足をひきずる二、三日　安部正子
先生と云われ割勘とも云へず　松田牛歩
ライバルに負けて寂しい独り酒　渡辺好之
卒業の労苦母親初化粧　松浦久寿子
夫の手を洗って手相ぢっと見る　安部春恵
手作りの人形もらい部屋和む　藤原のぼる
面倒な役割りだけが持ち込まれ　若槻白馬
外面は派手な上げ底暮しぶり　杠京子
合格へやっともどったいい目覚め　石原冬明
だまされて腹も立たない年になり　田中有樹絵
彼岸会の香煙につつまれ仏顔　真綿よし子
ふれ合いを大事にすると旅がえり　高木白虹
逝く戦友へ時代のずれた独り言　田中芳春
神仏絵馬に頼ってまだ足らず

これは蛇の永生に首長命をあやからせるためで、蛇の子孫として生れた首長は当然蛇体であるから、新生に際しては人への変身を必要とした。その結果蛇の殻を脱ぐことが即位式の重要な課題であった。ミソギは即位礼の前儀としてあって、原始蛇信仰にもとづく古儀であり、まつり（政）であった。このあとに新儀として、今日の大嘗祭が加えられ、まつり（祭）となった。これは北極星を宇宙の中心とする中国古代哲学によって構成されたものである。それは古代天皇制の確立期、神話の集大成された天武朝（七世紀末）からである。

この時代に、抽象的な穢れの観念が確立し、祭式も整えられ、「ミソギ」には禊の字をあてられ、ミソギは「身滌ぎ」の転化とされて、即物的の意味は消えた。そして大嘗祭に先行する前座の儀式として、形式的な「禊祓の儀」となってしまった。

大嘗祭

中国の古典によると、天皇は北辰即ち北極星の神霊化であって、それは不滅であるが、個々の天皇はこの星即ち「子の星」の徳を継ぐものとされる。



大嘗祭は古来は旧暦11月子月の中卯の日の前後の4日間に行われた。子から午へは（北から南へ）は、「陰から陽へ」「無から有へ」「懐姙から出生」への道である。即ち天皇の命の更新、新天皇の誕生を意味する祭である。

この祭りで重要なのは、悠紀・主基の両殿での神饌（食物）の供進である。その両殿の中央北に廻立殿がある。子の方向である。これは北極星を示し、これを中心として廻る北斗七星がある。

推古朝（七世紀初期）で、天皇は北極星の神霊化がなされ、天武朝では天皇の祖を内宮、北斗七星を外宮のそれぞれの神とした。それは両宮の儀式の中から裏付けができる。

北斗七星は「斗」という天の大匙で、これによって供饌は天帝に届く。北斗七星は北極星を中心とする天の大時計である。その位置は農耕の目安である。それは穀物の神に通じ、外宮は農業神となった。

「ユキ」とは人間から北斗に捧げる神饌であり（詳細略す）

これを通して天帝に届き、天皇の誕生がある。

「スキ」は北斗に対する南斗を通して、皇祖への神饌を捧げてはじめて北斗に届き、天皇の誕生が完成する。

第9回横田たたら勉強会

こゝ数年7月下旬に開催したが、この度は半年ずらし、1991年1月下旬に開催予定。

参加者100名限りとし、日刀保たたらの操業や鎧出し見学も行う。

研究主題は「中国地方の企業たたらの技術が、いつの時代どのようにして、全国各地に伝播していったか」で

全国的調査にもとづいて、地域別代表の方を中心に、討議を重ねる。

各方面に協力依頼ずみで、調査表を近く発送することにしている。

会員頒布一部百五十五円／六九上六　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座）松江01601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

美しい日本語を生かそう　なぜカタカナ語を使うだろうか考えてみよう

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 182 号
（6 月 号）
1990. 6. 2
(M123・T79・S65)
奥出雲編集集団©

『奥の細道』と奥出雲

―福島県中通りの遺跡をあるいて

はじめに

芭蕉が奥の細道の行脚をして昨年が300年に当たったので、各地で記念の催物が盛んに行われた。筆者もあやかって『芭蕉文集』とくに『奥の細道』を読みかえし、かねてから試みている奥の細道の跡をたずねた。著名なところはまずまず終わったが、まだ一歩も踏み入っていないのは山形県だけとなった。

『奥の細道』については、絲原記念館の展示にからんで、時間をかけて深入りをした。かねて本誌に館蔵品に貴重な物のあることを指摘したことがある。完全に究明はできてはいないが、さらに価値の高いことが判明した。

これについて述べ、昨秋訪ねた福島県の須賀川・飯坂温泉のあたりの紹介に少し触れてみたい。

筆者の知るかぎりでは絲原記念館に3冊、可部屋集成館に1冊ある。勿論これは古いものでこうした話題の対象とするに価いするものであるが、こんご皆さんの紹介によって、当地に埋もれているものが現れると、ようやく緒につきかけているこの方面の研究に益するところが大きいとおもう。

後者の館蔵の『奥の細道』は絲原氏を中心とする18世紀半ばの奥出雲における俳諧興隆期に、その指導的役割を果たした、太田のしのぶ庵魚坊の父であり、その俳諧への手引き者であり、蕉門美濃派の中央の俳人と交友の深かった芙川の筆写したものである。

前者の館にある3冊の内の1冊は1742（寛保2）の日付けの入った、当地のこの道の先達であり指導者であった絲原氏分家の石明の写本である。

魚坊や石明については、すでに本誌83号に詳述してあるので、参照して頂きたい。石明が写した原本は、素竜真筆の版本で京都の井筒屋の出版である。発行後30年たった安永年間に石明が写しとったものである。（註1）

素竜

京の人。初め大阪に住み、後江戸。生没年不祥。本名柏木儀右衛門。歌学を修め書に巧みで、蕉門10哲の1人の志太野波の手引きで芭蕉と接近、芭蕉は素竜から書をまなんだ。行脚の翌元禄3年落柿舎（洛北の子規の庵）でまとめたものは、野波が所持したが（今はなし）、没年の1694（元禄7）年の初夏、芭蕉は決定稿の『奥の細道』の清書を素竜に託し、これを最後の旅に持参した。かねてからこれを見たいと希望していた去来に、芭蕉は死の直前に貸し出した。去来は師の一周忌を前にして、嵯峨野の落柿舎で写した。素竜本は現存するが、去来本は消滅したというが、伝去来自筆本といわれるものがそれだと言う説もある。板行素竜本（井筒屋本）は、素竜本が去来の手元にあったとき、素竜の跋（あと書き）を省き、別の奥書を付けて、京都の書肆井筒屋から刊行されたものである（1702元禄15年説）。蝶夢本は跋によると1769（明和6）年伊賀上野で、素竜の跋、去来の奥書のある『奥の細道』の原本を蝶夢（本誌83号に、のち当地方にも来遊）が発見して井筒屋から刊行したと言うが、種々疑問もあるようである。その他あるがここでは次へいそぐ。

記念館にある版本は、去来の奥書と蝶夢の跋文のある蝶夢本の、明和6年の初版本を、1789（寛政元）年に再版したもので、絲原8代四郎左衛門（俳号以文）が手に入れたものである。この人によって当地方に俳諧は広まりだした。

残る一冊は写本で、研究者によると、専門家による透かし写し本で、年号なども不明であるが、先の研究者は紙質や表紙・綴じ紐など、素竜本そっくりで当時では、極めて貴重高価なものであったであろうという。この原本は今のところつきとめられていないが、2～3か所今後解明する価値のある貴重なものである。強いて言えば芭蕉没後8年目版行された、井筒屋本であろうか。

須賀川の宿

1689（元禄2）年3月27日江戸深川を旅たち、日光・白河を経て須賀川に着いたのは、4月21日であった。相楽（さがら）等躬を訪ねて1週間滞在した。こんなに長く滞在したのは、この『奥の細道』の旅では、他にもう一か所しかない。等躬はこの地の俳諧の重鎮であり、かねてから俳諧の中興の祖松永貞徳の門人を2人は師として、芭蕉とは知己であった。家は白河藩須賀川代官の家系で、当時は幕府道中奉行支配

本号の時代

1688　東大寺大仏殿、再建工事始まる。

1689（元禄2）　芭蕉奥の細道の旅に出る

江戸に天文台が設けられる。
長崎に唐人屋敷完成し、中国人の長崎市中雑居を禁ずる。
活躍した人
浮世草子では　井原西鶴
浮瑠璃では　近松門左ヱ門
絵本では　菱川師宣

1690　徳川光圀（黄門）隠居する。

奥の細道と奥出雲　・川柳・短歌・俳句

敗戦—国敗れて山河あり　21世紀—国在りて山河敗れたりか

下にあった、問屋職と諸色問屋を職業としていた。また、駅長の職にもあって、今日でいう市長に相当する役であったといわている。

芭蕉と曽良はこの家の田植にであい、

風流の初やおくの田植歌
旅衣早苗に包食乞ん　ソラ

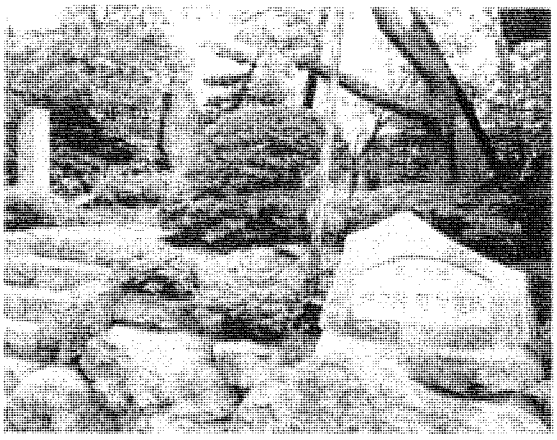
と興味をそそられた。

等躬は貞門から蕉風となり、門人も百数十人いたといわれ、編著書も多い。芭蕉が大阪で客死したとき、その死を悼み

とても死ぬ身なら難波の
枯野哉

と詠んだ。

ここで「この宿の傍に、大き成栗の木の木陰をたのみて、世をいとふ僧有。」としるしてる可伸（栗斎）を訪ね句会も催された。この文の続きに、世捨て人の可伸さんは、栗の木の下に庵をつくって住んでいる。栗の木といえば、聞くところによると、かの天平の聖行基（668～749）は、たくさんの土木工事を起こしたということだが、その用材に、栗の木をなんでもかんでも使ったとか。理由は「栗」の字は「西」の「木」と書くから西方弥陀の浄土に縁があるからだと言ったという。まことに有難い話ではないか。そう思ってこの栗の木の下に住む可伸さんの住居を眺めると、いかにも幽閑の趣きがあり、これはもう、主人の極楽往生もまちがいなく保証されていると思われますねと前置きし、



世の人の見付ぬ花や軒の栗

と、

詠んだ。栗の花は、椎の花などと同じく夏のはじめに花穂をだして淡黄色に小さく咲く。文芸の上では、その実は稀に歌に詠まれることはあるが、その花はかってかえりみられたことがない。その事実そのままに、世間からひっそりと隠れて暮らすあなたではあるが、心の中には美しく清らかな花が、つつましく咲いていることでしょう、と栗斎をほめたたえたものである。

ここで求めた等躬のものを読むと、『奥の細道』にはない句がのっていた。それは

まれに蛍
のとまる露
草　栗斎

と詠みいや、すぐに色あせてうつろいやすいツユクサのような心性さだまらぬ自分ですが、ときにはあなたのような方の訪問をうけて、蛍が闇に火をともすように、ありがたい教えを頂戴するばかりです、と応えて脇句としている。味わいのあるところである。

芭蕉のこの句は、当時この地で評判となり、栗の木はこの地の名物となってしまった。栗斎は、なかば得意下に、なかばはにかみながら、その評判を喜んだ。

いま等躬邸はのこっていない。跡地は当時をしのばせるほど、かなりひろく、電報電話局などの敷地となっている。近くの可伸庵は残っていて、三代目と称する栗の木が繁茂していたが、しばらくまえその西南の一偶に栗の木が三本記念樹として植えられたという。

大きく成長していた。そこには「軒の栗可伸庵」の標柱と、「軒の栗」と題する『奥の細道』須賀川の章の一節を刻した碑があった（写真）。北へ20米ばかり行ったところに万年山長松院があって、等躬の句碑があり、この等躬の菩提寺の奥まったところに、等躬夫妻の大きい墓があった。苔むした碑の文字をなぞってみたら、正徳5年と読めた。芭蕉死してから26年、8才年上であったから、長寿を保って蕉門の風流をこの地に、しみわたらせたのである。人々に尋ねてみたらそれを誇りとし、いまも句作を楽しむ人が多いという。

東方五百米ほどのところの十念寺の参道の右側に、

風流のはじめや奥の
田うえ唄　はせを

の大きい句碑があって、同好者らしい一団が眺め語り合っていた。

そこからさらに北東五百米余りの丘の上に、市立の博物館と歴史民俗資料館があった。ここでいろいろのものを拝見し、調査していることと関係のある貴重な資料も頂いた上に、今年建ったばかりの、芭蕉記念館へ車で案内していただいた。おかげで収穫も多く思い出に残る所となった。頂いた抹茶の味のよかったのは意外であった。

文知摺石

遠い昔の貞観年中（9世紀半ばすぎ）、陸奥国按察使源融公が、おしのびでこのありに来て日暮れとなって困っていたところへ、この里（山口村）の長者が通りかかって、その家へと案内された。出迎えた長者の娘虎女の美しさにうたれ、虎女も公の高貴さに心をうばわれ、滞留は1月余りとなった。

やがて公を迎える使いが都から来たので、始めて身分をあか

し、深まった情愛を再び会う日にと約して去った。

虎女の慕情はやるかいなく、「もぢずり観音」に百日詣りの願をかけたが、満願の日にも何の便りもなかった。

噴き悲しむ虎女が、ふと「もぢずり石」の面をみると、そこには公の面影が彷彿と浮んでいた。なつかしさのあまり駈けよると一瞬にしてかきうせた。悲しさの余り遂に病の床に伏す身となった。

みちのくの忍ぶもぢずり誰ゆえに　みだれそめにし我ならなくに

と公の歌が使いによってもたらされたのは、このころであった。

この歌を抱きしめ虎女はその短い生涯をやがてとじた。

「もぢずり石」を一名「鏡石」と呼ぶのはこのためだと伝えている。

この里即ち**信夫**の里は著名な歌枕であって、そこに文知摺石があったから、芭蕉は飯坂温泉への途中ここへよった。「しのぶもぢずり」とは、布を模様のある石の上に当て、忍ぶ草などの緑色の葉や茎をそのまま布に摺りこんで染めたものらしい。

「もぢずり」は、もじり乱れた模様をいうのであって、「文知摺」（文字摺）は単なる宛て字にすぎない。「しのぶ」も信夫の里から、忍ぶ草からと諸説あるという。

福島駅からかなりの時間バスにゆられ、相馬方面へ向う。バス停からさらに歩くと、文知摺観音に至る。境内に入ると正面の小高い所に、芭蕉の句碑がある。

早苗とる手もとや昔しのぶ摺

で、寛政6年芭蕉行脚100年の夏に建立されたことが、碑陰に刻してあった。

この句碑の背後の谷間のような所に柵に囲まれて文知摺石があった。東北は奥出雲より日暮れが1時間早いことをうっかりしていたので、薄暗い中でカメラにとらえた。

300年前の芭蕉は、すでに摺り染めが行われなくなっていることに落胆し、風流のおとろえを嘆いて綴っているが、巨石ともいえる文知摺石は苔むしていた。

受付けで出雲から来たと告げると、眼をまるくした老女が、精一ぱい愛嬌をふりまいてサービスして呉れた。

石段を登ると、「堀田正虎表碑」があり、その先に河原左大臣（源融）の歌碑があり、観音堂が建っていた。その横に、

涼しさの昔をかたれしのぶずり　子規

の句碑があった。

その奥に昭和58年4月建立のまことに立派な、源融・虎女の墓があった。

芭蕉はここから、医王寺をたずね、飯坂温泉に宿をとったが、私はとっぷり暮れて飯坂温泉に入り、翌日これらを訪ねた。

医王寺・飯坂温泉

飯坂温泉で、雲州そろばんの話をすると、戦前の小学校で五珠そろばんを使ったという女中さんが給仕してくれた。東京の北の保養地であったが、新幹線の開通で、東京の人はさらに北の温泉へと行くようになって、旅館の浮沈が激しいといっていた。それでも玉造と皆生を合わせたより遙かに宿は多いようだった。

医王寺は、悲劇の名将源義経に従った、佐藤継信・忠信兄弟の菩提寺である。兄弟は死に場所は異なるが、ともに義経を身

医王寺・忠信の妻「楓」継信の妻「若桜」

（観光パンフレットから）

明り摘む

簸の上短歌会

すずらんの花言葉など忘れしが今朝食卓のコップにすがし　永井弥生

さながらに明り摘むごとたそがるる畑にひたすら菜の花を摘む　佐藤喜代子

立夏過ぎて冷めたき雨に老二人ひねもす炬燵によりて動かず　岡田時子

ゆりかもめ翔び交ふ見つつ夫ときて水辺の茶房にやすらひてをり　松浦愛子

久し振りの風呂の嬉しさ語りつつベッドの父の溜息長し　小早川恵子

ボールペンにてすこし書きしにインク出ぬと臥床の妻がわれに問ひかく　常盤はるまさ

水の面に映つる若葉の影みだし広き田圃の補植をしゆく　野村節子

癌なりし苦痛に耐へて最後まで君は聖書を読まれしと言ふ（藤原道夫氏を憶う）　安部夕波

横田の街並（六日市・大市の中心街）を保存しよう

前号訂正　川柳の欄の「卒業の…」の句削除し、作者をずらす

五月句会抄

手の甲に初筍を賞味する　浅野としお
春愁やそこはかとなき目の置場　岡田蹊花
爺の真似孫のしぐさや五月晴れ　小川月舟
背に受けて春日やわらかし車椅子　恩田和美
五月晴乾くシーツの糊ききし　門脇花子
飛行雲若葉の梢を見えかくれ　加納信子
静かなる植田に月の沈みけり　楠房子
湯気の韻老ゆく伴侶のくむ新茶　高木白虹
鯉のぼり強くなれよと孫を抱き　新出谷一華
木の芽摘む香りの中の散らし寿司　錦織富江
泣き顔も今日は可愛や子供の日　峯石美代子
孫ら留守老いふたありの子どもの日　渡部夕峰

斐の上川柳六月抄

初帰省十八娘の甘え泣き　高木白虹
病名を聞いて医学書開けて見る　藤原千代子
いい夢の続き見たくて目をつむる　石原冬明
慌て者ポストに行きてハガキなく　安部春恵
トゲのある噂さ話は聞き流そう　安部正子
言いたくはないが嘘言う妻の役　松浦久寿子
六十の手習い空手の門叩き　藤原のぼる
連休を雨に降られて心ぜわし　中村もりえ
回診に今日もおしゃれでごまをすり　渡辺好之
連休は田植する人遊ぶ人　横山まこと
嫁姑どっちが狸で狐やら　若槻白馬
居れば邪魔居なけりゃ困まる父の席　松田牛歩
子のピアノ聞いてはかどる畑仕事　杠京子
雨の午後友と茶よびのいい笑顔　真綿よし子

をもって護った武士であり、そのそれぞれの妻は、夫の甲冑を着し、長刀を脇ばさみ、いさましげにして、老母に見せてその心を慰めたと、当地の人々は伝えている。

芭蕉と同行の曽良はともにこの物語に涙した。

本堂の右手に芭蕉の句碑がある。

笈も太刀もさつきにかざれ　紙のぼり　はせを翁

これは翁没後106年目の寛政12年（松平定信の在世中）に、建立されたものである。

この句は、この寺には義経の所持した太刀や弁慶の負うた笈箱と称するものがあるのでとしてよまれている。この日は5月の1日であった。

芭蕉は寺でお茶をよばれているが、それを寺僧に所望し、また弁慶・義経らの遺品の宝物を見る時間もなく、佐藤一家の墓碑群を眺めて、果樹園の多い長い道のりを歩るいて、電車の駅へ急いだ。

飯坂温泉駅前には行脚姿の芭蕉像が建っている。

温泉旅館街の花水館の横を入り、さらに小路の石段を川岸に降りて行くと、「俳聖松尾芭蕉ゆかりの地」と題する碑がある。

裏は水量豊かで清らかな摺上川が流れていた。

芭蕉はこゝの、土間にむしろをしいたような貧しい家で一夜を過したという。温泉の湯にはいって宿を借りたところがこゝで、燈火もない、いろり火のあかりで寝所をつくったという。夜になって雷が鳴り出し雨がしきり降って、上から雨漏りもあって寝つかれなかった上に、持病まで起こって息も絶え入りそうであった。夜明けとともに芭蕉は旅立ち、「道路に死なん是れ天の命なり」と決意し、気力で進んだ。『奥の細道』の記述は悲壮感に満ちているが、しかしかねてから常に野ざらし、すなわち野たれ死にを覚悟しているのであったから、生来の弱身を強靱な意力で突破する強さを裡に秘めている。

散策

一夜の宿のゆかりの地からすこし行くと、古い温泉街に至る。

公衆浴場の鯖湖湯がある。古い元湯であったと言う。

横の小さい朱の鳥居の奥に鯖湖神社がある。

こゝからしばらく坂を登って行くと、八幡神社があった。珍らしく、本殿と拝殿ともに巧ちはてたかや葺き屋根の神社で、広場の中に建っていた。

裏では色とりどりの服装の年寄りのゲートボール遊びが、2か所で行われていた。

芭蕉の奥の細道紀行に同行した曽良の、『曽良旅日記』によれば、温泉については、「夕方より雨降。夜ニ入、強。飯坂ニ宿。湯ニ入。」と簡単に書かれているだけである。古老の言い伝えによると、芭蕉は滝の湯の湯番小屋に泊ったのだともいう。曽良の日記の記事からは芭蕉の苦しみは読み取れない。「羇旅（きりょ）辺土の行脚」（辺地を旅する）を強調するための文飾であろうかとする意見もある。

（横田史談会　高橋一郎）

（註1）　絲原氏は1826（文政9）年　以文（8代四郎左ヱ門）・徐行（以文の弟）・石明（絲原分家）の追悼俳句集『春のおもい』を、京都の蕉門書林・橘屋治兵ヱから出版している。

（編集者の多忙のため、本号は書き置いた原稿を掲載・多謝）

会員頒布一部百五十円／六九—一六　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0—601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

山の緑を、景観を、長い間かけて住民が築いた歴史ある町並を、大切にしよう

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 183 号
（7 月 号）
1990. 7. 7
（M123・T79・S65）
奥出雲編集集団©

奥出雲のたたら製鉄史⑲

新資料にもとづく特に東南部の
その技術・経済・社会・文化の総合史

近世編⑪　松江藩の鉄行政⑤

（享保年間三郡御買鉄論争）⑤

本号の時代

5世紀（中国）　長安の都で仏教盛ん
中国雲崗の石窟の開削始まる。
（蒙古）　カガン（王）の称号できる。
（朝鮮）　加羅諸王中国と通交する。
（日本）　五王時代　稲荷山鉄剣
6世紀（中国）　万里長城修築　隋全国を統一　仏教は末法時代
（朝鮮）　新羅加羅諸国を併合国史を修選する。
（日本）　仏教伝わる。倭国の王が隋にはじめて使を送る。

5段階（続々）ー湯の廻分続き

湯の廻勘右ヱ門は大せうかん（漢方医学の傷寒ー急性熱性疾患の総称ーか）を患い、11月29日より心地不覚（意識不明か）となり難儀をし、松江には一家が出かけて詰めて看病し、医者も三人附添い、12月1・2日ごろは大変難儀をした。

6日には可部屋手代三郎兵ヱに対して鉄方役人の両人の吟味があって引き揚げたが、（181号のこの項で桑原やは帰ったとしているが、桑原やから帰ったと訂正）　夕方の4時には金森屋孫右ヱ門の所へ、その一人岡本善右ヱ門がやって来て、こゝにいる勘右ヱ門に用事があるといった。孫右ヱ門は今日はまだ快方に向っていない。人参などで命をつないでいる状況であるから、何といわれてもお断りすると言ったが、自分は勘右ヱ門と心安いものであるから、見舞を申したいと奥へ上り枕元にどかと坐り見舞を言ってから、例の話をし出した。可部屋が判形をするように手代三郎兵ヱに言ったところ、承知して明日印形をすると書付の約束をした。お前は格別な者であるから判形はするであろうと詰め寄った。勘右ヱ門は枕から頭も上げることができない状態であったが、段々と承知されるならば、私ばかりがせぬことは出来ないから、恢復次第印判致しますと申上げた。

ところが善右ヱ門様は今晩せよと言い寄られた。そこで勘右ヱ門は前に口口兵左ヱ門様が言われるには、判形さえすれば私共の断りの申し立ても取りつぐとのことであったので、最初の断書等を認めて（9段階での七通のもの）持参致したと申し、そばの者もその旨重ねて申上げ断ったが、重ねて言い寄られた。

しかし鉄師らは勘右ヱ門に対する取扱いは鄭重であったと話していたという。

10段階

14日午前10時岡本善右ヱ門様が、勘右ヱ門に会うため宿に来られた。宿主は今日は少し様子が良いが、只今寝入っているので、御用があれば明日でもおいで下されば、有難く存じますと申上げたが、是非会いたいと奥に入られた。看病していた杠又右ヱ門が起してもと代って挨拶をした。具合はどうかと聞かれたので、人参壱分づゝとらせておりますが、安定せず力なくうとうとしておりますと申上げた。

するとほかのことではない、判形のことであるが、前から致しますと言っているから、今日はそれをとりに来たといわれた。

私（筆者か）は判形の件を鉄師一同に伝える役であったが、この度の算用御法式をみると、去る享保5年6月のものとは大分相違があるのでお断りし、その口上書を差上げました。初めの断書は受け入れて頂いたが、その後2通の口上書はご覧にもならず戻されたので、仕方なく9日か8日に郡奉行へ鉄師どもより差上げて受け入れ頂くよう申上げた。しかし受け入れられないので仕方なく御目附様（旦那様ともいっている）へ差出したところ受け入れて頂いた。そこでそちらの御返答があるまでは、判形はできないと申上げた。

そこで善右ヱ門様が申されるには、勘右ヱ門様（様がつき急に丁寧語の語り口となる）は病気のため御引込りで、委細は又右ヱ門から聞いて、御存知のはずだからどう思うかと聞かれた。そこで又右ヱ門はなるほど勘右ヱ門が申した通り郡奉行様へ差出した。そこでこゝで詰められて判形すれば不審を抱かれ返答にも困まる。しばらくお差図があるまではお断りすると断れと申されたと言った。

善右ヱ門様はなるほどもっとものこと、郡奉行でも口上書を受け入れ御上へ申上げているであろうから、鉄師も何もできないのは当然であろうと帰られた。

しばらくして今度は、喜太夫・善右ヱ門両人様が勘右ヱ門が一人いる所へ来られ、只今のように兵左ヱ門様へ申上げたところ、其通り書付けせよと申されたと告げた。

勘右ヱ門は長い膝詰談合に退屈し困まったので、くわしくは心得ているが、患いのためどこへも出かけず様子がわかっていない。又右ヱ門・次右ヱ門から聞いただけでは判断ができないから、両人が戻るまでお待ち下さいと申上げた。

喜太夫様は左様にあれこれ言うことはならぬ。両人が言ったことだけでも書き付けて出せと言われた。勘右ヱ門は後日のために、両人からあなた方の前で経過を聞いて書付けをすること

が大切だと言うと、善右ヱ門様は次右ヱ門・又右ヱ門が戻って来るまでに、あら筋でも認めよと詰め寄られた。そこで勘右ヱ門は手代の平助に書くようにと言いつけながら、次右ヱ門の戻るのを待っていたところへ、帰って来た。

書きかけのあら筋を次右ヱ門に見せながら、私は病気でどこにも出かけず様子も知らない。ことに心もたえたえで、10時から午后の4時まで全く迷惑致しました。次右ヱ門にあらためて話させ平助に書かせて下さいと言った。

次右ヱ門がとくと考えて、このように郡奉行では申上げていないと思うがどうであろうかと言い出した。これ以上せめると顔色の悪るい勘右ヱ門は気を失うであろう。能海甚六様（職名不明。以下文意若干不明であるが、若干手直ししたようである）。そこで勘右ヱ門はあらためて又右ヱ門に見せようとしたが、善右ヱ門は先ほど又右ヱ門と詰合いした話と同じである。早く認めよと詰め寄った。

その時喜太夫様は、今日はそろそろものを申せといって、勝手へ向って、宿主金森屋孫右ヱ門の家内へ、今日は強くは申さない血の道などおこさぬようにと言われた（第一段階で、このようなことがおこったことから言ったものである）。それに対し孫右ヱ門は挨拶もしなかった。

さてせかれる平助は認印判をつき出した。主人勘右ヱ門が大病中に毎度来られては、退屈の上に難儀千万である。これで当分の難をのがれたいの一心であった。

第11段階

19日の晩、五助・又右ヱ門・七郎左ヱ門の3人が岡本様方へまいり、鉄師ども引きあげたいと申上げたところ、帰るとは何事だ、くわしくは御奉行御請合の上は、当鉄方へ役所よりは何とも申されない。それとも明日鉄方御役所へ出頭すれば、何なりと様子がわかるであろうとのことであったので、このように致したいので、よろしくお取り成し下さるようと申上げ帰った。

20日朝、七右ヱ門・太左ヱ門の両人、御役所へ出頭したところ、兵左ヱ門様善右ヱ門様が出られ、両人より永々逗留は気のに存じました帰ることを許可して欲しいと申上げたところ、兵左ヱ門様より成るほどもっともとのことである、帰ってよいとのことであった。

第12段階

勘右ヱ門は気分が勝れないので、駕で20日に出発し久野で一泊し、21日三成で一泊、22日に大馬木の自宅に帰った。

郡奉行様は、18日に大原郡加茂まで御出張、19日三成へ、20日御目録御取りになって、21日飯石郡三刀屋へ、24日松江に御帰宅された。

26日は御寄合、晩に源兵ヱ・太左ヱ門・宇兵ヱの3人、御長屋へ出頭しお伺い申上げたところ、郡奉行様中御代官様中御手元衆大勢入られ様子、御次衆へお目にかかった鉄師ども御機嫌伺いに参上しましたと申上げたところ、この件、左兵次様へお伝えになられ、何とも様子を知らなかった鉄方への断りは当然である。帰ってよいと左平次様が申された由である。

27日朝、源兵ヱ・太左ヱ門・五助・宇兵ヱ・又右ヱ門・新右ヱ門、岡本・桑原御両人様へまかり出で、今日まで逗留しましたが明日帰りますと申上げたところ、成るほど、何事も来る正月とならねばなるまいと申された。だが喜太夫様は何かと六ケ敷しいことを申された。

28日松江を出発、29日夜に帰宅した。前代未聞の事件であった。大晦日（おおみそか）を（この年の12月は小の月で29日まで）やっと宿でとったようなことで、諸事万端手廻しわるく、迷惑なことであった。言語に絶することであった。

あけて卯年の享保8年になったが、正月も2月もお上からは何の沙汰も無かった。

この論争とは何であったか

この件に関する文書は、現在絲原家文書はもとより、他家からも未だ発見されていないので、後述するような松江藩の鉄行政から推定する他はない。

「前代未聞の事件」と言っているところをみると、1648（慶安元）年、御買鉄が始まってから（途中3回、1～3年中止のことがある）、これが全く行われなくなった1721（享保6）年までの70余年間で、突出したことであったと思われる。

廃止にあたって、清算をめぐり水増し請求が行われたようである。そのことをしたのは誰であるか、一切わからないが、鉄方役人の強引さと、結末のあっけなさからみると、下級役人あたりであろうか。12人の鉄師のうち数人は家老級の石高をもつ土豪大地主である。その抵抗も土農の階級の違いの大きかった時代であるが、木端（こっぱ）侍のやんちゃとうけとめていた一面ものぞいている。

2年ほどたって、「鉄方御方式」ができて、松江藩独得の鉄行政がはじまる。これは奥出雲の近世企業たたらを、わが国最大とした功績の一面をもち、明治初期まで一貫して続いた。

松江藩の鉄行政については

このあと、先納銀制と運上銀制について詳述し、あとで御買鉄制（下）ー幕末ーにふれることにする。

糸（絲）原勘右ヱ門

絲原家6代で、1694（元禄7）年生れ1733（享保18）年、40才没。享保元年23才で、絲原家中興5代徳右ヱ門に替って当主とな

り、宗旨庄屋（国中10人）を拝命した。この事件の時は勘右ヱ門29才であった。

享保18年5月40才で仁多郡の下郡役となった。16・17年は天候不順で凶作、18年は大雪によって、住民は困窮の極に達した。

この時に下郡となった勘右ヱ門は、身をもって年貢減免の藩との交渉の陣頭にたち、5か年間5000俵宛の減免を得ることができた。数字の明らかな9年後の1741（寛宝元）年の年貢米でみると、その2割に当る。

この時の補佐役の与頭は、稲田村代畑の安部孫右ヱ門、馬馳室屋の村尾作右ヱ門、佐白花屋の馬庭与一右ヱ門であった。

勘右ヱ門はこの時の過労がもとで年末40才の若さで世を去ったが、5代が築いた家業を充実させ7代吉三郎に引続いだ。吉三郎はその土台の上に、和歌をはじめ数々の風流を育て、風格のある家風を醸成し、8代四郎左ヱ門に至ってさらに豊かとなった。

この事件記録は糸原清親誌すとあるが、5代にも勘右ヱ門にも子はなかった。分家堀の内が創立されるのはしばらく後である。

5段階（続々）の記入の場所や文章その他からすると、この約2か月に及ぶ論争の全貌を最もよく知る勘右ヱ門が、秘かに誌したものと考えられる。

表紙裏に、鉄師の外には見せないこと、一つ一つと書いたのは日記であり、文脈にも重複があり、字も乱れている旨が書かれている。絲原家の古文書には歴代の日記・旅行記・覚書などが頻しいことからも、こう推定ができる。

（横田史談会　高橋一郎）

折口信夫ほかの 大嘗祭考

民間伝承をもとにする研究の生みの親で、その後日本民俗学を樹立し発展させ、歴史や思想研究の上にもゆるぎない地位を確立し、世界的にも評価をうけているのは柳田国男（故）である。国文学者で歌人の折口信夫は、柳田に私淑し、民俗学の研究も深く、特に国文学者として民間伝承・古代研究・芸能史研究に新文野を開いた（故人）。

大嘗祭理解の二力点

大嘗祭の行われる大嘗宮の殿内（別図）での儀式の意味については、大嘗祭の秘められた真義があるとし、種々の理解がわかれている。大きく力点によってわけると、親供（供物）を主とするものと、神座を主とするものとなる。

前者（親供）は天皇が神聖な稲穂で炊かれた御膳を食し、神へも供えてともに食しあうことを主眼とする行事である。

その解釈は稲穂は神勅によってアマテラス大神から授けられたもので、その霊威が籠っている。穀霊も皇祖の霊も大八洲の霊もこもっている。それを天皇が食することによって、アマテラス大神の御魂を身につけて、天皇としての資格を得るという考えとなる。

後者（神座）は神座のみかたである。天皇は悠紀・主基両殿に籠り、寝具に包まれて休まれるのである。その神座は床にむしろを敷き、その上に大畳二帖と中敷一枚を重ね、その上にいく枚かの敷物、その上に茵を敷く。これは坐るため寝るためのものである。衾と同じ意味で寝具・夜具を意味するのである。

この神座の解釈はこうなってくる。神話の天孫降臨の場面で天孫ニニギが、「真床追（覆）衾」にくるまって天降る。これは床を覆ふ寝具のことである。この神話と付号する行為で、（この行事の成立は7世紀末の持続（女）天皇からとする説が多い。日本書紀即ち神話の構成される時代である。）天皇がこの寝座で衾にくるまると想定すると（記録にはこの部分は全く書かれていないので）、籠りの状態でそして何らかの外からの実体的なタマ・神が天皇の身体に憑りつくとみなしている。そのことによって新たな存在として生れ変ること、またその神と一体化することを想定する。新らしい王の誕生である。折口は、「天子として威力の根源の魂を天皇霊」として身につけて、天皇としての資格を完成するとみたのである。

このことに対しこういう解釈もある。神座の構造から、古く

もるる朝日は

簸の上短歌会

畦の径伯父の墓へと五年ぶりかたへのさくら今日をかぎりに　永井弥生

光りつつ木々の芽なべて出揃へば皐月の風が旅へと誘ふ　松浦愛子

親燕蜻蛉ひとつを運びくるに巣に子燕は眠りてをりぬ　岡田時子

天窓をもるる朝日は牛の背に黄の一線を引きてゆらぎぬ　佐藤喜代子

てきぱきとそしてやさしく介護する老人ホームの若き寮母ら　野村節子

軍國をうべなひたりし来し方の老いたる今はしみじみ憎し　常盤はるまさ

いゆるなき苦痛に耐えて最後まで君は聖書を読まれしと聞く（憶　藤原道夫氏）—前号の作品をこのように詠みあらためました病名誤認のため—　安部夕波

は一人ではなく他の誰かともいたのではないかと想定し、それを聖なる女性とみて聖婚がなされたとみたり、あるいはなくなった先の天皇であるともする。

これは真の天皇たらしめる祭祀とみることになり、前者（親供）は天皇であることをふまえて、アキツカミとして大神主として、神と人との両性格の位置での祭祀であるとみるなどいろいろある。

いずれにしても古代天皇制確立期の事情を反影する神事である。当時の社会情勢のもとのものである。

人権を中心とする民主主義の社会からみると、象徴天皇制の下では、古代文化を残す皇室の行事とするのが強まるのは、歴史の現状からすると必然となってくる。

この神話に類似するもの、源流と思われるもの

真床追衾は天孫降臨神話の他に、ヒコホホデミ（山幸彦）の海神の宮の神話の中にも出てくる。

近年特に東アジアに於ける歴史研究（考古学・文献学）が進み、国際学術交流も急速に進展して、戦後学問の自由によって登場していた、江上波夫の騎馬民族説、護雅夫の遊牧騎馬民族国家論などの仮説部分が、次第に実証されてきつゝある。

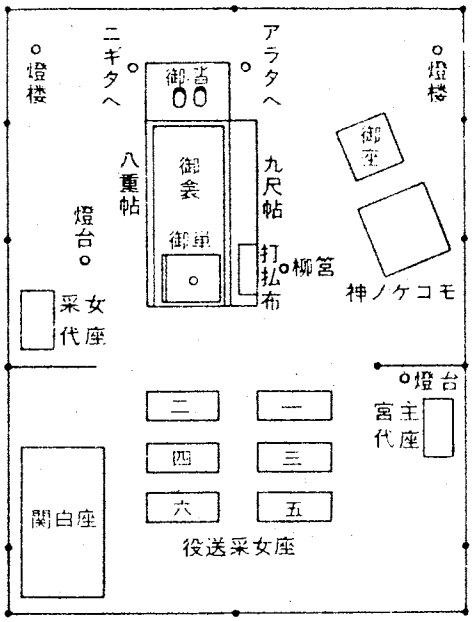
神話研究の上でも三品彰英によって、韓国の神話との比較研究も深まっている。

それらによると、こうした即位儀礼は、早くから大陸や半島に於て行われていることが明らかである。

5世紀にモンゴルにあらわれた遊牧狩猟民族、モンゴル系の契丹の君主の即位儀礼にあらわれている。契丹（きったん）は10世紀まで発展しそして中国の遼国に成長した。

また、モンゴルから中央アジアにかけて、6世紀半ばから2世紀の間勢力を拡げた、トルコ系遊牧民族・突厥（とっけつ）のカガン（王）の即位儀礼にも同様のものがあり、4～6世紀の朝鮮半島南部にあった小国家群（日本で任那と呼んでいる）の一つ、加羅国の建国伝説の中にも、類似したものがある。

（この問題は今回で終りとする。文責・高橋）



大嘗宮内図（大嘗会便蒙による）

六月句会抄

献血の心豊かに竹の秋　浅野としお
蝶吹かれ浮きつ沈みつ青田越ゆ　岡田蹊花
カッコ鳴く山拓かれて夏流転　小川月舟
風を恋ひ薄暑の窓を開け放つ　恩田和美
一人ぐちこぼす日照りややせ畑　加納信子
わだかまりほぐさぬ一年葱坊主　楠房子
踏み擦りし石段のくぼみや降る緑　高木白虹
窓いっぱい六腑へ吸い込む若葉風　新出谷一華
幾たびか人との別れ春は逝く　錦織富江
干し草の匂ひつつみし風わたる　峯石美代子
ひとを恋う鬼の舌振かじか笛　渡部夕峰

斐の上川柳七月抄

田植終え久方振りの茶のみ会　田中有樹絵
夢はるか空の色やら海の色　松田牛歩
そんな事聞いた聞かぬと論じ合い　安部正子
どぢ踏んで看護婦ばかり頼りにし　渡辺好之
好天気ひと雨欲しいと気まま言う　安部春恵
エゴばかり責めは他人になすりつけ　藤原のぼる
長生きと思った祖母の歳になる　松浦久寿子
虫喰いのキャベツこんどは俺が喰う　児玉哲呂
孫からの電話俄かに頬ゆるみ　松浦亜以
睨んでる入れてやれない貯金箱　高木白虹
減反の畑もてあます雨続き　藤原千代子
たのまれた買物メモして又忘れ　横山まこと
例会に常連居ないまめなやら　石原富栄
もう一歩そこが出来ない年を取る　若槻白馬
山菜が膳を賑わす新料理　真綿よし子
おせっかいかもしれないが念のため　田中芳春

会員頒布一部百五十円／六九九—一八　島根県仁多郡横田町二、〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0—601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

六日市・大市の歴史的町並みをより個性のあるものに育てよう

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 184 号
（8 月 号）
1990. 8. 4
（M123・T79・S65）
奥出雲編集集団©

出雲大川流域物語②・自然との共生を文化の中心に・川柳・短歌・俳句

出雲大川流域物語②

―加茂町赤川の川違い工事と簸川郡荒木村の八間樋工事―（上）

安部吉重郎

はじめに

横田町の旧角村の土工・安部吉重郎の業績で著名なものは、この二大工事――今日なおその地の人々は恩恵をうけている――と、横田町の現吉重橋の二代前の加橋工事である。（経歴や人となりについては次回の予定。概略は本誌15号の角村の3名工に）

赤川といえば

今日では大原郡旧海潮村から大東町、加茂町を流れ、簸川郡斐川町で出雲大川（斐伊川）に注ぐ川をいう。

『出雲国風土記』では、海潮川・須賀小川・佐世小川・幡屋小川が出合って、出雲大川に注ぐとある。この記述に注意したい。

『斐伊川史』（長瀬定市著）その他の考証によれば、現在の加茂町の町並の東南の北大西・南加茂の一帯から下流の流域は一面の湿原であり沼泥化していて、降雨後の水量に応じて、低いところを自由に選んで流れており、出雲大川も時にはこゝえ逆流して一帯は遊水地帯であったという。これは中世に至るまでそうであった。

従って古代中世の集落は、山狭の小高いところや台地上に展開していて、洪水の恐れのある平地には、懇田はなかった。（これは前回で述べた横田町の中河原地区と似ている）　戦乱の中世が終ると、検地帳からみると、この一帯に新田が開発されて来る。そして赤川の草枕の川遣い工事が完成し、川除土手工事が進められると、今日の川の流れが固定しはじめていっている。こうした度重なる工事は今こゝではふれない。川上から出雲大川に注ぐまでを、赤川と呼ぶようになるのは、江戸中期であり、加茂町の町並はこうして18世紀半ばから出現していく。

だが赤川は、天井川となって水位が上ってゆく出雲大川によって、洪水の折の流水は停滞し、現加茂町以西の下流は、常に水害をうけ、水との戦いを続けて来た。

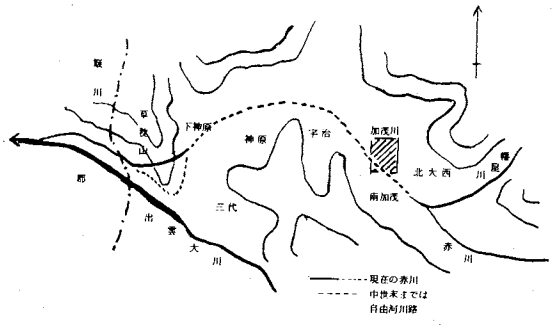
下神原・神原・三代地帯は、水下（みずした）といって、常にこの危険にさらされた。文政年間（19世紀の20年代）の水害の折には、住む家も牛も失った農民は、仁多郡へと多数移住していった。仁多郡村にはこの時代に移った家が少なからず、神原屋などと称して少なからずある。

こうして安政年間（19世紀50年代）の草枕切り貫きによる、赤川の川違いの画期的な大工事が始まった。

安部吉重郎の登場

水との絶えざる戦いにあけくれた農民は、当時土木工事の名工としても名を揚げていた、横田町内の角村の住人・安部吉重郎（吉十郎とも書いている）に頼んで、赤川尻の地帯を調査してもらった。その結果の意見は、「草枕を切り貫き、川違いをなせば、優に数町の水田を得ると共に、水引きが良くなり、赤川の下底が下るであろう」であった。

そこで地元農民は松江藩に建白嘆願し、藩もこれを認め吉重郎に請負わせた。そこで古来からの由緒ある草枕山（酔いつぶれて寝たヤマタノ大蛇が、こゝを枕としたという）を、切貫くからと、山頂に一小祠を建立し、大山祇他2神を合祀し、五穀豊穣と牛馬の安全、そして治水を祈った。これを横山三神社と呼んだ。



草枕の切貫き川違い工事

吉重郎は1856（安政3）年2月に着工した。まず赤川に水門を設けて、必要に応じて或は堰き、或は流し、切取った土は舟に乗せて、新土手筋へ運搬したという。工費の点については諸説があるが、加茂町役場蔵文書によると、安政3年11月20日付で吉十郎と署名捺印のある、下郡六郎兵ヱ宛の「覚」には、内渡金銭千貫文とある。それから安政4年5月までの7枚の受取証を合計すると、4520貫145

本号の時代

1856（安政3）
ハリス下田に入港する。
吉田松陰松下村塾を始める。
二宮尊徳・広瀬淡窓死す。

1857（安政4）
島津斉彬写真機で自分を写させる。ロビンソン・クルーソーの日本語翻訳できる。

1858（安政5）
日米通商条約締結　安政の大獄始まる　福沢諭吉慶応義塾を始める　イギリス、インドを直轄統治する。

文となる。これが受取証のすべてであると断言できないが、吉重郎の計画工費はこれ以上であったことは間違いない。

そして安政4年7月には、吉重郎はこの請負銭で、新川巾4間を切開いたようである。仝年10月21日付の8枚目の受領証には、「神原御普講所詰吉十郎」とある。いつからかは判然としないが、これより少し前に施工は、藩の御普請方の手に移り、吉重郎はその下で続いて工事を進めたと見られる。そして4間巾を12間巾迄拡張をして、安政5年8月頃に完成したと推定される。古文書では

安政5年5月 1905人 525貫 150文
6月 451.8人 115貫 596文
8月 53人 14貫 210文

とある。すると安政3年2月から、2年半の歳月をかけたことになる。

総工費については、仁和寺の木村家の記録の中に3821.5貫645文と誌されているという。文書の中の人夫賃2人880文とあることから、諸雑費も含むこの工費を、人夫賃のみとしてみると8685.3人余となる。これを当時の米価に換算すると約1萬俵となる。

なお、安政3年から米価は急騰し、4年には5割高となり、5年にはさらに高騰しているから、吉重郎の請負高では、12間巾が出来ず、安政4年7月、一応4間巾で工事を終え、その後藩の直営によって、12間巾の工事を吉重郎は施工したものと考えられる。

この工費の大半は藩よりの支出であったが、関係6カ村は備銭の中から支出した。すなわち古川新田を6カ村の所有とするとの約定の下に、6カ村の備銭から巨額を支出したという。

一説には、6カ村は工費は出費せず、古川新田を買い取ったとも言うが、考えるに前説が真実のようである。一片の文書からの推定であるが、川違いのために川敷並に土捨置場となって潰地となったのは、山林田畑3町5反4畝23歩であったので、それぞれ割戻があって、その余地2町9畝2歩は6カ村の共有地となったということがあるからである。

簸川郡荒木村八間樋の創成

旧荒木村の八幡宮の前に八間樋という高瀬川の箱樋がある。新内藤川はその直下を流れている。安政年間に安部吉重郎が新機軸を出して創成したもので、懇田用水の調整に多大の利益を与えているものである。恐らく施工は前記の赤川の草枕川違工事前の安政初年のことであろう。

この樋の設計はつまびらかではないが、優秀な材料を使用したものと見え、古材も潰しが利き、後年改築にあたり、近在の拡下げを受けた人々が、その松の赤身で酒樽や盥（たらい）などを造り、珍重しているという。1950（昭和25）年この樋をコンクリート造りに改架し、高瀬川堤防もコンクリートによって補強を行った。

右のいずれの工事も、今日に至ってもなお、流域の人々に多大の恩恵を与えているものである。

（加茂町の多田納哲道・斐伊川史の協力によった）

第24回史蹟めぐり

8月下旬か9月上旬に、島根県建築事務所協会が、松江市・大田市大森町に続いて、歴史的町並み見学会の対象に、横田町六日市・大市を選ばれた。一般の参加も得て、個性と特色のある町並構想を小冊子にまとめられることに決定。下見も完了済。

自然との共生を文化の中心に

――物その資源の消費節約の必要は急がれる

177号今年1月号に、年頭の所感の意味もこめて、「地域の過去から現代への提言」として、1930年代の横田村の経済更生指定村の生き方の概略をのべ、今日の活性化では、根本に忘れられているものがあるから、庶民を救うのは難かしかろうと結んだ。それを一地方の活性化だけでなく、地球的規模において考えねばならぬことがあるという点を、紹介したい。発展し続けた歴史的今日に於いて、今後の歴史とは何かを考えねばならないだろう。

私の書架には戦後出版されたマルクス経済学の古典や、解説書・批判書に交って、マックス・ヴェーバーの社会学の古典や解説書がある。特に敗戦直後の雑学に没頭した時代は、表面のみのなで読みに過ぎなかったが、ヴェーバーの見解の中で心の底に残るものもあった。

今日先学の解説に導かれて再認識してみると、80余年前にすでに今日の状況を予言しているということがわかった。それは不況を乗り超えるためというより、地球存続をかけるという重要課題に通ずるものであるようだ。単なる浅学者の読後愚感でもないと思われる。

マルクス主義にもとづく、ロシヤの生産者社会主義は失敗するほかはない。真正の社会主義は消費者社会主義でなければならない。これは経済の量的達成が、物量的の豊かさが主眼ではなく、むしろ文化の質と価値が重点である。新らしい文化理念を創造し、それによって国民の生活が内面から変革され、長期にわたってそれが国民の活力の源泉となり続けることで、それは経済活動を適正に制限することのできる文化の価値視点が重要であるというのである。

野の仏②

六日市 山上さん

六日市の藤が瀬城趾のある高鰐山の足下の岩山を刻って設けた祭壇が（写真）がある。上の方には石の坐像が置かれている。

中段あたりの石面に

寛政五
丑四月　前鬼
後鬼
願主透禅

とある。修験道の行場の文字である。

修験道の開祖は役行者で本名は役小角である。7世紀後半（奈良時代）呪術者であった役小角が、陰陽道神化術と密教を日本固有の山岳宗教にとり入れて、独自に確立したものである。多くの奇跡が伝えられていて、実在を疑う人もあるが、『続日本紀』の記録で確認されている。

奈良県の山上ケ岳（1718m）は大峯山とも呼ばれている（本来は大峯山脈の連峯の総称である）。この山頂に大峯山寺がある。役小角が開き、9世紀後半に聖宝が中興した修験道の霊場である。

この寺には蔵王権現が祀ってあり、周辺にはいろいろな岩場の荒行場があって、今日なお女人禁制をしている。

蔵王権現は役小角が難行苦行ののち感得したと伝える悪魔降伏の念怒相の像である。三つの目の顔で怒髪天をつき、右手は三鈷杵を握って高く振り上げ、左手は剣印を結んで腰部に当て、右足を振り上げ、左足のみにて岩石上に立つ形をとる。この像の成立は役小角のころではなく、平安中期とみられている。

修験道では険峻な山で忍苦の行をし、心中の悪魔を降伏して験力を得ようとするが、そのような中から生み出されたもので、他の各種仏像が経典などの中から生れたものとは違っている。

山上ケ岳の修験道は、大峯信仰、大峯山上さんの信仰として地方に拡がり、多くは各地の高所の岩場の修験場に祀られていった。岩屋寺の岩場にも蔵王権現が祀られている。この六日市のものは、庶民用の「山上さん」として、こゝ一帯の平地の岩場（かつてはこゝを中心に東西40mは岩場で、斐伊川の対岸へも続いていた）の一角に、1793（寛政5）年に透禅によって設

日本の社会の成長発展は、ひたすら物をいかに効率的にするかという生産条件至上主義で今日に至ったが、幸に経済大国へと成長した。その裏には、生産条件をよくすれば、自然に人間の生存条件もよくなるという論理にもとづいていた。戦中戦後の苦難を抜け出そうとする願望とも一致していた。

ところがいま、地球資源の有効性、環境破壊を前に、二つの条件の間に大きい矛盾が生まれ、これまでとは逆に、生存条件が生産条件を規定するという、新らしい時代に入っている。理念の切り替えが必要となっている。

現代は環境破壊や地球汚染に進み、遠からず人類と地球が滅びるかもしれないという不安が生じて来た。核保有の破壊力という明らかなもの、そしてそれが制限できるかという不安よりも、考え方によっては、もっと根源的でありながら、実感するのを忘れる不安であることである。

ただ単に、不況を切り抜けるためという甘いことでなく、経済生活を一定の量的質的規制の下に支配して、これを文化体系の中に正しく位置づけることのできる、そういう高次の文化理念が、切に今求められねばならぬことになった。このことをヴェーバーは、85年前に論破していたという。

自然の乱開発を続けながら、資本の自己保存のための自己増殖を続けるという、虚無的な状態となっている今日の資本主義は、いつまでも許されないことになる。

新らしい経済生活、消費生活、倫理観が必要となって来たといえる。

「人間のための自然」から、人間と自然の心の共生、自然を再生させつゝ進むという文化の理想を中心にすえなければならない。

人間のおごりの否定と、自然への謙虚を前提とするものである。

（横田史談会　高橋一郎）

七月句会抄

真竹の子音立てて取る雨上り　浅野　としお
たたなわる連山踏まえ虹鮮明　岡田　蹊花
夕立に消されし山の重機音　小川　月舟
切り通し抜けて夏山峡深し　加納　信子
はまなすや手押ポンプの水冷し　楠　房子
遠雷の唸り盆地に宥められ　高木　白虹
国訛り気軽く語りつ初夏の旅　新出谷　一華
老鶯や山ふところの何処啼く　錦織　富江
ねむ咲いて日記のはしに記しけり　峯石　美代子
噴水にネオンを遣し街眠る　渡部　夕峰

斐の上川柳八月抄

宿で出た茶菓子これだと土産きめ　横山　まこと
待った雨雨も宝のように見え　真綿　よし子
鴉す泣く騒ぐな俺はまだ元気　若槻　白馬
笹巻きが着いたと嬉しく礼を言い　中林　もりえ
冷や奴昼餉は夫と二人きり　藤原　千代子
輪の中でつい歳忘れ刻忘れ　松浦　亜以
大原女（おおはらめ）の絣に未練の旅終る　高木　白虹
ちまき巻き園児と遊ぶ小半日　安部　正子
干し物が雨よ隣りに電話かけ　安部　春恵
医者よりも婦長の注射恐くなり　渡辺　好之
立ち話時計見ながら一時間　松浦　久寿子
腰まげて杖をついても欲背負ひ　松田　牛歩
本人の気持を他所にいい話し　藤原　のぼる
この年で亡姑と同じ事くりかえし　杠　京子
待つ雨も長居をすればうとまれる　田中　有樹絵

けられたものである。この人については明らかでない。

今こゝにある石像は、蔵王権現ではない。かっての蔵王権現は失われたのか、信仰の中心の推移により行場の性格が失われ、平凡な仏像が置かれ、庶民大衆に親しまれ、旧名の「山上さん」がそのまゝ踏襲されて、「山上さん」と呼ばれて今日に至っている。（この附近を山上町とも呼んでいる）

かっては、中世からの行事と伝えられていた「のぼりはりあい」は、いつごろからか、この山上さんの祭の日に行われていた。「のぼりはりあい」とは、いずれ詳述したいが、奥出雲名物の唯一つの勇壮な行事であった。明治の中頃に広瀬町がこの行事を売ってほしいと申入れたが断られたという。六日市、大市の対抗の「麦わらたき」競争で、それをめぐって石合戦も行われたという。大人の行事から若者や少年中心の行事となり、大正年間半ばまで続いたという。

今は子ども中心で、ローソクの火をともすという、昔の行事の名残りが残っている。

なお、前鬼・後鬼とは、斧と水桶をもった上半身が裸体の鬼が二匹、役小角の像にはつきものであるが、それを言う。『続日本紀』に、役小角は鬼神を使って水を汲み薪をとらせたとあることから、絵像や彫刻に図像化されたものである。こゝには石面に文字のみが刻まれている。

道教には鬼神を使役する仙人の呪力が書かれており共通するが、仏教にも同様の物語りがある。

こゝの岩場の左手前にある「三界萬霊」塔は、宝暦十二年六月とある（1762）。別な場所に古くから建立されていたものが、いつのころが、この場所に移されて今日に至ったものである。当時は不慮の災厄に合った人の霊を慰めるために、その場にこの塔は建てられたものである。

紫陽花のころ　簸の上短歌会

幻のみ仏在すごとくにもたんぽぽの綿毛日暮れを灯す　永井　弥生
摘みどきを過ぎたる茶の芽に風そよぎ山の畑の昼しづかなり　仝　人
目を閉じて虫歯治療を受けしあとの風に揺れゐる柿の葉まぶし　松浦　愛子
空梅雨の風に煽られ蝸虫は紫陽花の葉裏に角ふるわせて　岡田　時子
しばらくは握手のままに立ちゐたり五十余年は光りの如し（林君と再会）　常盤　はるまさ
過ぎ去りし五十余年を宿の夜にひとたび語りふたたび語る　仝　人
使いこみし庖丁を手に思ひをり行商の女　ずなりて久し　佐藤　喜代子
ガスに火がついてゐぬかと前置きし遠住む妹の電話は長し　仝　人
かくれんぼしつつ食べては唇を染めし日杳し桑の実熟る　野村　節子
僧あゆむ朝の寺苑はあぢさいの盛りとなりて五月終らむ（鎌倉明月院）　安部　夕波

会員頒布一部百五十五円／六六—一六　島根県仁多郡横田町一、〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0—601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

山の緑を、景観を、長い間かけて住民が築いた歴史ある町並を、大切にしよう

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 185 号
（9 月号）
1990. 9. 1
（M123・T79・S65）
奥出雲編集集団©

©は著作権のある表示

奥出雲のたたら製鉄史⑳

新資料にもとづく特に東南部のその技術・経済・社会・文化の総合史

近世編⑫　近世のたたらの分類と企業たたらの発達略史

近世企業たたらの歴史を述べるに際し、こゝで今一度たたらの分類と、近世企業たたらの発達の概要を述べておく。

本文は5月26日東京における産業考古学会第14回（1990）総会の研究発表において、筆者（横田史談会・高橋一郎）が発表した要項で、「研究発表論文講演集」として当日配布されたものの転載である。過去各学会で部分的に発表したものを総合し要約したものである。学会でも次第にこの見解が定着し、論文に引用されはじめている。

はじめに

たたら用語については、古代のものから現代のものに至るまで、その統一の必要が言われながらも手がつけられていない。芹沢正雄によって口火がつけられただけである。ここではこの問題に触れるのが目的ではないが、たたらの分類に関連して、新しい用語を用いて述べざるを得ないことを、お許し願いたい。

このような提案は、次のような諸記録や見聞、先学や体験者の貴重な研究や談話の中から浮かび上がってきたものであって、いちいち明記しないが感謝するものである。

◇奥出雲の鉄師家の古文書＝絲原氏分ー簿冊1936点・文書9189点内たたら関係60％、杠・卜蔵両氏分ー簿冊30点・文書約900点、田部氏分ー簿冊250点、桜井氏分ー簿冊18点ー田儀桜井氏分簿冊16点（以上は松江藩9鉄師中、上位6氏）

◇たたら及び関連作業の実際の見聞＝靖国鈩・叢雲鈩・日刀保たたら、鉄穴流し等。

◇刀匠に関する見聞＝故川島忠善・小林貞照・仝貞法・仝貞永。

◇たたら研究会等による見聞＝発掘遺跡・仝報告、冶金学上からの報告　以下の提案について、ご検討とご指導をお願い致したい。

本号の時代

1806（文化3）頼春水「雲行日記」の旅へ。

幕府、沿岸諸大名に、ロシア船来航の際の処置につき指令する。江戸の大化で薩摩藩邸も類焼。幕府、大火後の物価騰貴を取締る。ロシア使節樺太に侵入、日本人部落を荒らす。

池大雅画法の著書を、田能村竹田は漢詩文の著書を出す。式亭三馬ほかの物語本など庶が流行し、盛んに発行される。歌舞伎も盛んとなり、庶民文化盛行に向う。フランスは皇帝ナポレオン。

提案　3点

①自給たたら・企業たたら

たたらといえば、一般的には製錬炉をさし、その古いものを野だたらとよんでいる。それを規模と生産品の上から、このように分類したい。

自給たたら…古代から今日に至る小規模なもので、その製品は少量の粗鋼（今日のごとき良質なものでないもの）で、これを砕いて各種の鉄をとり、それぞれに応じて精練鍛冶（大鍛冶技術）を行い、自家用鉄製品を鍛造（小鍛冶）するもの。筒（竪）形炉が多いとおもわれる。

企業たたら…中規模な箱形炉で、製錬した製品は銑であり販売を目的として操業するたたらをさす。文献の上では古代はもとより、中世においても明らかになっていないし考古学上の遺跡でも十分認める段階にないが、後述するように古代末か中世から操業されたものと推定する。近世になると奥出雲においてこの企業たたらが完成（天秤吹子と高殿をもつ）したことは明らかなことである。このものを近世企業たたらとよび、それ以前の企業たたらを初期企業たたらとよぶことにし、探究を続けたい。初期企業たたらについては、後述のようにさらに推定を深めるが、両企業たたらともに、銑の量産と販売が主流であった。

②近世企業たたらにおける、四日押と三日押

今までは、近世企業たたら（一般的にはたたら）の操業には、銑押法と鋼押法の2種類があるとされているが、奥出雲の古文書のなかには全く用いられておらず、始めは赤月砂鉄地帯はもとより真砂砂鉄の多い地帯でも四日押のみで、江戸後期になってはじめて後者の地帯で三日押が次第に完成する。そして両法ともに製錬の主目的は銑である。前者の地帯の四日押では小さい鋼が出来ることもあった。後者の地帯の四日押では大きい鋼が出来ていたが割る事ができず放棄していた。それを割る事が出来るようになったのは宝歴年間（1750年代）からである。それから50余年たつとこの地帯で操業を1日短縮する試みが始められ、30余年後に完全に三日押に移行する。製品は僅か減るが利益は若干上回って合理化が実現する。以来この両法は存続し、大正末期に企業たたらは一斉廃業する。のち1933（昭和8）年靖国鈩・叢雲鈩などが奥出雲地方で鋼（玉鋼）を必要として復活操業されたが、それは伝統の三日押であって、銑の生産が多かった。（別資料参照ー奥出雲160号2頁表2）

③近世企業たたらと大鍛冶

かって鍛冶職人は、精練鍛冶技術（大鍛冶技術）と鍛練鍛冶技術（小鍛冶技術）をあわせもっていた。近世企業たたらが成

町は歩るく楽しみのあるところ

長するにつれて、銑の生産販売のみから、鍛冶職人を抱えて銑に精練加工を施して割鉄とし販売し、利益を倍増して急速に成長した。収入のなかで割鉄は80%、鋼は20%の比率であってこの割合は、企業たたらの一斉廃業まで続いた。これが奥出雲の鉄師の実態である。

時代的変遷

①自給たたら

古代の律令制のもとでは、郡司級の豪族はこのたたらを一定地域にあつめて、操業させ鉄製品製作への一貫体制をとり、部族の土地開発等に役立てたと思もわれる（福島県の相馬地方の開発地区で、発掘調査された多数の製鉄遺跡は、こうした時代のものではないであろうか。）やがて律令制の崩壊とともに、技術者は地方へと分散して移り住み、各地の開発領主のもとで細々と営みを続けていたであろう。中世も戦国時代を迎えるにしたがい、武器・武具は初期企業たたらの量産する銑を用いる鋳造法ににたよった。然しこの技術は高度で難しかったので、戦乱の時代の需要に応じる事ができなかった。そこで自給たたらの生産する少量の粗鋼からの鉄製法である鍛挫法がきわめて容易であったので、各地で盛行して需要に応じはじめたから、乱世の波は至るところにうねりをあげた。それは14世紀末の応永のころからという。日本刀の鍛造法が鋳造法から鍛挫法に変わるのがこのころからであるという。

近世企業たたらの割鉄量産時代が到来すると、自給たたらは次第に衰退へ向かったであろう。だが良質な砂鉄地帯の奥出雲では続いていて、18世紀末の寛政年間には農民が自家用に操業するのに手を焼いた鉄師たちは、松江藩に善処方を願い出るほどであった。こうした自給自足は当地では、洋鉄が一般に普及する明治初年まで続けられている。近年になると構造その他が進歩しているが、刀匠の間で試みられ、研究者や素人の間でも行われている。

②初期企業たたら

1100年前後台頭し、朝廷とかかわりのふかかった河内国丹南の鋳物師が、東国地方へと分播していったことは、真継文書の研究によって明らかになっている。鋳物師の発達史は関東を始めとした各地の武士団の発生と軌を一にしており、今日文化財として残る中世の鉄仏その他の鉄器の分布も、ほぼ重なっている。この鋳物師の発展には、銑鉄生産の裏付けがなくてはならない。鋳物師と製銑者は同一人か、或は同一群内の別業者か、または全くの別業者かはいまだ、どの方面からも明らかになっていない。この鋳物師の需要に応えたであろうたたら製鉄を、初期企業たたらと位置付けて探究している。これは自給たたらの発達したものと考えることもできるが、紀元前に中国で極めて早くから発達した製鉄業、特に銑生産法が、宋代に我が国へ到来し河内国に拠点を作ったのではないかと考えられる。鋳物師の分播はのち13世紀に山陽へ、山陰の因播には15世紀、出雲には16世紀に及んでいく。

③近世企業たたら　—奥出雲における

第1期＝再開期

—1636（寛永13）年、斐伊川水系の砂鉄採取が解禁されてから、川砂鉄の採取が再開した（母岩の

奥出雲と文学・芸術3
頼春風・頼杏坪の紀行（4）

伯耆路を行く（続）

4月4日、夜明け前に二部の宿森屋をたち、やがて官道から右に折れ、谷合の川沿の細い道を登る。樹木多く日光見えず。矢倉坂という。峠の上に筧の水あり下りは登りの10倍のけわしさがあった。黒坂市で中食休憩。溝口にはたたらがあって鉄を産す。日野川を渡る。川上までまだ8里ある。1里ばかり行くと権現瀑があり、絶壁から20丈余ほどもある。水煙と老杉で行路は日光ももれず、瀑奇観といえども久しく居るところでない。

登り坂は前と同じく急である。路傍に鉄砂（砂鉄）がある。人家なし。花口村に駻牛儀右ヱ門の鈩場があり40～50軒の家がある。300～400人が従事し四日四夜を1槽（代）として操業する。鉄砂は馬1疋が2斗5升宛（1駄）運び、1槽（代）に120駄必要である。農家で中食をとり、小さい峠を経て上岩見村に宿る。こゝには豪戸あり問屋貞六といい、鈩場2か所をもち、鍛冶（大鍛冶か）8人も抱えていて、居宅は大変立派なものである。宿屋は宮本号与一兵ヱ方。

5日、早朝鏡坂にさしかゝると、一農夫が近くで狂った狼が作物を荒し、昨夜は鳴き叫んで垣根を喰い破って狂乱して死んだ。我が家の庭にあるから見よというので、輿（こし）を下りて見ると真の狼であった。主人父子は斧と鎗を持って、万一のためにと護送し、道々近年の害を話して呉れた。17人と馬2疋が害をうけ、死者も6人馬はみな死んだ。右手の高岡はその巣のあるところで、子を産む時に倉物を与えるのは、害をうけないためであるという。1里ばかりで高瀬に至ったので別れる。木の繁茂する山には狼はいないと言う。吉田を経て湯野にて小憩する。鳥取藩と備中松山藩の堺界標識がある。南は備中新見である。酒は辛口、やがて雨が降る。山川を渡ること数度、宝経坂をこえて頂上で小休し干子谷（昔小児を追って坂を越えるのに、頂上で乳を飲ませようと行くと、頂上遠くて小児を干殺したと伝え

中に一部含まれる砂鉄の15％）。山砂を掘って冬流し、夏川で採取し、秋操業する。それも10数夜（のち代という。一夜の時間は不明）程度。17世紀末には仁多郡内で地主層20余名が副業としているが、一夜の操業の出来不出来はひどかった。

第2期＝近世企業たたらの成熟と松江藩の鉄行政

——1691（元禄4）年、吹差吹子に替わって天秤吹子が導入されると、労働力の減少と生産量の増加をもたらし、本格的な高殿を設けて秋から冬へと操業が続けられはじめられたが、まだ毎年操業はおこなわれなかった。それが毎年となるのは、1707（宝永4）年ごろからであり、鉄師の出荷品は銑のみである。やがて鍛冶職人をかかえて、大鍛冶技術（精練鍛冶）によって銑を割鉄（のちの包丁鉄、錬鉄）として出荷し収益を倍増して経営は順調になった。1726（享保11）藩は「鉄方御方式」をとり、大水田地主層の鉄師9人に限って許可し、経済上の義務を負わせるとともに、保護を加え各種権益を与えた。これが奥出雲を我が国のたたら製鉄業の中心地とした根本原因である。

第3期＝経営基盤の確立時代

——毎年の操業月数が5～6か月となる。宝歴年間（1751～1763）洗い樋を用いる鉄穴流しが普及し、（採取率30％へ）採取量も急増し、10か月操業が普通となり、年間四日押65代の記録もあらわれる。地下構造の記録も複雑となってくる。そして鍛も割る工夫ができて鋼が製品に加わった。量は銑60に対し鍛40（歩鍛20・鋼20）で、銑・歩鍛80。これが70％前後の歩留まりで割鉄となった。従って鉄師の収入では、割鉄80％・鋼20％であった。

葉月抄　籔の上短歌会

ヌエバビスカヤにて戦死とありし兄なれど餓死ならず
やとふとも思へり（比島地震をききて）　常盤はるまさ

南部鉄の風鈴の音は透きとおり暑き日暮れをやすらぎてをり　松浦愛子

あけ放つ部屋に灯りを点けたれば華やぐが如き庭の紫陽花　岡田時子

誰からも年を思へと諭されて臥す身かなしく雨音を聞く　景山悦子

ほのぐらき雨の本堂に老婆らは小さくかたまりて経あぐるなり　永井弥生

片足を切りし蛙が気になりて今日孫と来て菜の花を供ふ　佐藤喜代子

滝壷に緑映えゐて夏椿の花びらの浮きて渦巻かれをり　野村節子

いくとせの恋にいのちを燃やすときまた夏は来て百日紅咲く　安部夕波

「地方史用語」

鉄師・鉄山師・たたら師

松江藩では、近世企業たたらによる製鉄業者を、一貫して**鉄師**と呼んだ。明治時代になっても引継がれている。鳥取藩その他では**鉄山師**と呼んでいる。したがってこれらを、たたら師と呼ぶのは俗称である。今日では**たたら師**とは、技術者の村下・炭坂（裏村下）などを総称するのに用いられる。

鉄山・腰林

松江藩では**鉄山**とは、たたら用木炭林のある山をいう。鳥取藩・石見・安芸・備後・備中などやその他の地方では、鉄山とは砂鉄をとる山をさす。松江藩ではこれは鉄穴（かんな）山と呼んでいる。

松江藩での鉄山を鉄穴山と解して、研究論文で大間違いをしたものが、まかり通っている。

腰林は腰林山ともいう。江戸時代には個人所持の山林である。

一般的には家屋敷、山麓の囲の森林に限っていうが、松江藩・広島藩などでは、すべての山林をさして呼ぶ。その中に鉄山は含まれるのである。

るによる）に下る。高山の横道を下るが、左は4丈の絶壁で下を見ると毛骨が寒くなる。村に至るが雨のため、竹下友二という者に宿る。岩見よりこゝまで雨にしばしば会い、今日の如き疲かれはこれまでになかった。

こゝで途中で聞いた物語りの覚書と詩作3篇が誌されている。支払いの記録もある。

今市で烟管2本2匁4分
春闇への土産の水牛櫛1枚1匁5分

ほかに旅行用所持や借用した旅行用品やその借用先も書かれ、中には絵図奥地（地図）・小絵図・出雲道のみちしるべ・出雲絵図もある。

また各地の名所・産物・著名人で、是非共見物したり買求めたり、会見するもの。また社寺の文化財・旧蹟なども出発前の計画も書かれているし、各地の藩の禁制や、風俗習慣の違いに至るまで書かれていて用意周到であり、単なる物見遊山でない、学者であり風流人らしい事前調査がなされていることがわかる。

（次回は「雲行日記」第2冊目に）

訂正　前号3頁標題の三上さん→山上さんに

第4期＝最盛期そして合理化に成功した完成期

＝1818（文化15）年ごろから、1代4昼夜の四日押を1日短縮して三日押とする努力が続けられ、1856（安政3）年には完全に三日押1本となる（資料参照）。鉄師によって若干年の違いがあるが、真砂砂鉄の多い地帯において三日押が定着したのである。そして、1922（大正11）年一揃廃業まで。

第5期＝1933（昭和8）年靖国鈩その他として、1945（昭和20）年敗戦までの毎年数代宛の生産再開時代。

第6期＝1977（昭和52）年旧靖国鈩を「日刀保たたら」として復活、新三日押操業として再開し、今日に至る時代。

終わりに

三日押の鉄穴鈩・菅谷鈩・四日押の価谷鈩のほぼ同時代の数字をみると、その特色が明らかである。この三日押の伝統を復活したのが、靖国鈩や叢雲鈩である。今日の日刀保たたらはこの靖国鈩を復活したものであるが、かっては数種類の砂鉄を用いて伝統の操業をして銑と鋼を生産していたが、今は河川汚濁防止法によって、砂鉄は磁力選鉱法によらざるをえず、真砂砂鉄1種類の採取がやっとでありここに復活操業にあたって安部村下の苦心があった。伝統の技術をふまえはじめて1種類の砂鉄をもちいて、鋼のみを生産するという先人未踏の操業をなしえ、すでに100代を越す成果をあげ、鋼の中の鋼（玉鋼）を出荷して刀匠の期待に応えている。別資料（仝前の表2）のように伝統の技術は脈々と生きている。

1969（昭和44）年、菅谷鈩の近くで操業されたたたらは、別資料（同前の表2の〈リ〉）にみるごとく操業もその製品も、伝統の菅谷鈩とは遙かに異質なものであった。

古い製鉄遺跡 続々と現われる

5月末の全国の中央・地方の各新聞が一揃に大きく報道した遠所製鉄遺跡は、丹後半島のつけね、丹後縮緬（ちりめん）の本場地帯に属する峰山町にある。人口6500余人の町であるが500haの国営農地造成を行っている（各種問題も発生中）。その一角から発見された。出雲地方の前方後円墳よりも遙かに大きい、出土物の豊かな古墳の幾つかも含む、5～6世紀の古墳密集地域から、古代住居趾、製鉄炉、鍛冶炉・炭窯の多くと鉄製品を出した。

大きい古墳のあること、伊勢神宮の外宮の豊受大神（食糧神）の出身地という伝承があることから、古代には丹波王国があったという説があるが、いままで鉄には全く関係がないと見られていた地に、広大な遺跡があらわれて、王国の実在がいよいよ明らかになったと、町をあげて古代史への関心は盛上っている。

古代日本では太平洋岸より日本海岸が人口が密集していたという説も有力となっている。

日本で現在では最も古いものである。ところが総社市東部で5世紀のさらに古いものが発掘中。出雲の製鉄の位置は低い。

ただし5世紀が上限である。

八月句会抄

己が尾の丈ほど虻追う牧の牛　浅野としお
慎しく合歓を映して沼孤独　岡田蹊花
踊り果て夏の校庭闇戻す　小川月舟
雨蛙空梅雨の空へ声乾き　恩田和美
風鈴のときおり我が身はげましぬ　門脇花子
ぐずる児を背中にあやす遠花火　加納信子
嫁して今幾十年ぞ女郎花　楠房子
口をあけ猛暑吐き出す池の鯉　高木白虹
雷一つそれより幼児眠りけり　新出谷一華
手花火を夜毎楽しむ児等の声　錦織富江
老の身の齢となりて門火焚く　渡部夕峰

斐の上川柳九月抄

この暑さ余韻は続く熱帯夜　若槻白馬
農叩きそのうち裏目がきっと出る　藤原のぼる
紀子様の手の振り方を真似てみる　田中有樹絵
神様に私の絵馬は目に入らず　松浦久寿子
中元の団扇で店の名を覚え　真綿よし子
浜ゆりの白さが冴える森の家　杠京子
炎天下木陰の風に救はれる　松浦亜以
みんみんが鳴くと一そう暑くなり　藤原千代子
扇風機今年は出番とフル回転　安部正子
夕立が誘う相傘ためらわず　高木白虹
夕暮れの涼風うけて子等思う　安部春恵
大店舗スケール馬鹿にでかくなり　渡辺好之
車から降りてこの世の暑いこと　児玉哲呂
風鈴も風無く猛暑で小休止　横山まこと

会員頒布一部百五十五円／六九—一八　島根県仁多郡横田町一、〇六一／二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0—601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

山の緑を、景観を、長い間かけて住民が築いた歴史ある町並を、大切にしよう

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 186 号
（10月号）
1990. 10. 6
（M123・T79・S65）
奥出雲編集集団©

©は著作権のある表示

本号の時代

1990（明治25）　吉重橋と命名
第2次伊藤博文内閣（元勲内閣）。
大本教開教。万朝報創刊。天然痘関東に流行（死者 8,409人）。小学唱歌第1編（雁，うさぎなど）発行。
日本軍歌集発行（敵は幾万，元寇など）。
井上哲次郎・山路愛山・北村透谷・尾崎紅葉・田山花袋・森鷗外・泉鏡花・坪内逍遥・樋口一葉・正岡子規・黒岩涙香・幸田露伴・国木田独歩
島崎藤村・岡倉天心の時代
ドストエフスキー『罪と罰』翻訳

奥出雲が生んだ日本の詩人 安部宙之助

—「ある自伝より」⑥

長男誕生

昭和三年十一月、月刊詩集「高踏」を宙之介達は創刊した。「詩の言葉」と題する小文を毎号露風氏は巻頭に発表した。時には新作の詩篇を書いてくれた。同人は毎号作品を発表した。十冊で終わったから、翌四年八月まで出したことになる。

昭和三年十二月のある日、早く目覚めた妻が起上ったとき、机許に電燈を持って来てあったが、そのコードに引っかかって、前方に手を突いた。そのとたんに羊水が出てしまった。隣りが医院だったので直ぐに行くと早期破水で、子供は育たないだろうという。

未経験ほど恐ろしいものはない。自身が若いのだから生命力を信じた。子供は幸いにも育った。八ケ月であった。

露風氏に和磨と名付けてもらった。奥さんが露風の祝いの短冊を持参して下さった。

誕生の祝

真名児生れて青雲にまで達す
時共にあれかし猶若き君　露風

と記してあった。

大社中学（旧制）へ赴任

昭和四年三月、大東文化学院を卒業した。不況の波がおしよせていた。幸にも郷里の隣村出身の糸原貴族院議員の紹介で、島根県立大社中学校に就職することができた。

宙之介夫婦は長男を連れて帰郷した。父母から見ると初孫である。嬉んでくれた。

麻布にあった別邸へも行ったが、隣村八川村にある本宅へ御礼に行った。県庁の学務部長に逢って、それから大社中学へ赴任した。学校の近くの一軒を借りた。七円か八円だった。東京の家が十二円五十銭だったから、当時の物価がなつかしく思い出される。

駒沢大学卒業生、青山学院卒業生、そして彼と新任者は三名だった。大学出が九十円、青山学院出が八十五円、彼のように三年制を出ると八十円だった。

出雲大社のある大社町の一角に学校はあった。町を本にすると南端といえる丘上にあった。校庭から北方を望むと宇迦山が青々と聳え、その松の青の上を青風が流れていた。その宇迦山の麓には出雲大社があるのだった。駅前から直線に来ると学校近くに日本一の大鳥居通りである。更にまっすぐに進むと坂道になる。その坂の頂上までが神門通りである。そこから下りのだらだら坂で、松並木道へ続く。更に進むと銅の鳥居があり、鳥居をくぐると神域で正面に拝殿があるのだった。拝殿を後ろの方へ廻ると本殿が神垣の向うに見える。雄大というべき建物で、これほどの建物に祭られた大国主命の威徳の大きさを思わせる。今日の出雲大社を祭っている千家、北島の二家は神代から連綿とつづく家柄のようだ。

勤めて二年三年と立つと学校の内情も次第に判って来た。剣道の教師のKというのがいたが、奏任官待遇で威張っていた。剣道は殆ど毎年県下で優勝していた。一つの伝統が出来ると優勝はた易いのだった。Kは更に野球部の部長を勤めた。これは剣道程簡易に勝てなかった。剣道部、野球部と花やかな部の部長としてKの行動は目に余るものがあった。それに口先も巧みであったので、古い人達は彼の云いなりになっていた。

ある日、職員会議が開かれた。Kが立って剣道部選手達を全員操行を甲にしてほしい、と辯説爽かにまくしたてた。剣道部選手には成績も優秀だし操行も甲の者もあったが、中には成績も操行もひどい者があった。それで会議はKの提案を拒否する態度の黙否の情態になった。

沈黙がつづいた時、宙之介はそうした沈黙がやり切れない。もっと意見をお互が交換したいと思うのだった。

「剣道部選手には甲にすべき者もあるのだろうが、悪い者を無理に甲にする必要はないと思う」と云い終らないうちにKは

「安部君、決闘しよう、外へ出ろ、庭へ出てやろう」

と大声でわめきたてた。Kは剣道五段位だった。備前候の指南役の家柄と聞いた事もあった。彼は馬鹿らしくなり沈黙した。皆は唖然としている。

「今日はこれでやめることにする」という校長の言葉で会議終了となった。

大人気ないことだと思った。誰もKの権力を怖れて何一つ云わない。

Kに決闘を申込まれたが、俺は負けるだろうな、と家へ帰って話すと、妻は時代錯誤の話だと問題にしないのだった。

彼は昭和四年十一月に詩集「

町は歩く楽しみのあるところ

出雲大川流域物語③

安部吉重郎—(下)—

——横田町　吉重橋——

京都で修業

安部吉重郎は1867（慶応3）年7月14日になくなっているが、生年従って歿年令も明らかでない。父清兵ヱ（屋号・新屋初代、五反田吉野屋から分家、妻は横田町六日市大津屋の娘）の歿年などから考えると、18世紀末の寛政年間の生れである。

若くして京都に出て、大工としてまた土工として腕を磨いた。

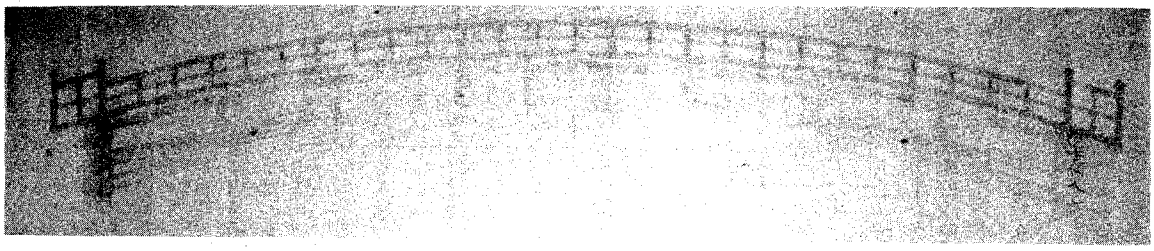
たまたま五条大橋の改架にも加わったと伝えられている。当地方で優秀なそろばんを製作しはじめた村上吉五郎も、少し前に京都に出て、やはり腕を磨いて帰っている。文化・文政時代は、上方の文化が地方への流れ出した一つの頂点の時代であった。

吉重郎は滞在中に妻キイと結婚した。公卿の娘とも武家の娘とも言われているが、当時田舎にはなかった、裁縫・抹茶・生花にも優れた腕をもっていて、吉重郎歿後30年の間、里の娘たちにこれらを教え慕われたという。京都から持参した諸道具を晩年ほとんど手放したが、それを一手に引受けたさる古物商は財をなしたという話も残っていて、京都の生家の生活の程を想像することができる。

長い橋脚なしの橋をかける

京都から帰った吉重郎の腕を見込んだ横田町目代（町の庄屋のこと）中沢助七（六日市前沢屋4代前）の発議によって、六日市・大市の間を流れる斐伊川（出雲大川）に橋を架けることになった。それまでは土橋であって、大雨の度に一年の間に何度も流出し、住民の悩みの種であった。

頼まれた吉重郎は岩国の錦帯橋の構造も参考にして、南北10間（20m）、中央の高さは両橋詰より7尺5寸（227cm余）上りの刎橋（はねばし）——橋脚のないそり橋——、材料は木材と板を用い、欄干も付けられた美しまれてくぼくでいた。床板も幾十年土足に荒されていたが、しかし、尚耐える力があった。



吉重郎作図の橋

白き頁と影」を高踏詩社から刊行した。新聞にも載り、生徒達の文学愛好者も彼の周辺に集まるようになった。そして彼等の同人誌を出すのを応援した。「なぎさ」とか「白い花」などいう誌名だった。現在医師であるが、先搬「賛歌」を出した市川俊彦とか、得能好喜とか、音羽融とか、詩集『夜の色』を出した大谷従、もいた。みな優秀な生徒だった。

まもなく校長の退職であった。次の校長は小さい中学校長から来た人で数年いた。その次の校長が来たばかりの時、十一年間勤めて丁度恩給の年限十七年に達したので、彼は退職して上京することになった。

大社中学校は今市町にあって、明治の頃は、塩井雨江にや大町桂月が勤めた学校だった。彼の勤めた頃は、桂月に教えられた人が国語主任をしていた。今市町から大社町へ移転する時は今市町の反対で大変な騒ぎだったようだ。中学の替りに今市には女学校や農産学校があるが、そうした政治的な問題を別にして大社中学は厳として在るのだった。校舎の入口の石階の石も踏

高村光太郎との出合い

昭和十四年夏、久し振に彼は上京した。明年三月で恩給年限に達するので、新しい職場を求めてのためだった。

まず正富汪洋氏を訪問して、明春上京したいからとお願しておいた。それから三木露風氏を訪問した。それから高村光太郎氏、北原白秋氏を訪問した。

高村さんは本郷林町だったと思うが、道路より少し高くなった段々を上ると呼鈴があった。それを鳴らすと左側の小窓が開かれた。運よく在宅して居られた。来意を告げると応接室に案内された。部屋の壁面は智恵子さんの切絵の作品で飾られていた。智恵子さんを亡くしたばかりの頃だった。彼はお悔みの手紙を出していたし、その礼状も貰っていた。

海にして太古の民の驚きをわれふたたびす大空のもと

高村さんが大平洋を越えてアメリカへ渡るときの歌だと思うが、「海に来て」としてある書

い橋を完成した。その上洪水に対しても心配もないこととともに、出雲国内に吉重郎の名は高まった。

その上さらに見落してならないのは、今もその片鱗が南側の西田村の東北隅に一部残っているが、この橋は牛馬の往来を禁止して、牛馬専用の通路が設けられていたことである。

当地はたたら製鉄による割鉄（包丁鉄）を中心とする製品の集散地で、六日市、大市には中継運搬業者がいた。当時は馬の背に菰包（こもづつみ）の商品を積んで往来していた。またこの両町は毎年秋には一か月余に及ぶ牛馬市が開かれ、中国地方に於ける三大市場の一つにも数えられていた。

その市に於ける繋ぎ場は、両町の本通りの両側であった。（道巾は当時すでに今日程度あった）。従って牛馬はこの橋の西側（下流側）の川を通らせた。そのため西側南北の堤防は巾1間程はなく道は緩やかな傾斜で川に入っており、石が敷きつめられていた。それは1971（昭和46）年川が拡巾改修され、橋が改架されるまであった。

こうした通路50m下流にもあり、さらに200m上流にも設けられていた。吉重郎の工夫の一端を、堤防改修の折にも残していたのである。

この橋が架けられたのは、文政に入る（1718）と間もなくのころであった。

この評判は高く、文政3年には大原郡加茂の赤川の川違いの工事を請負うことになった。

吉重橋の名称

この橋が「吉重橋」と正式に命名されたのは、ずっと後の1992（明治25）年になってからである。

明治19年は語り継がれる話によれば、大洪水の年で、出雲大川の沿岸の各所で堤防決壊、家屋に浸水、水田流出があっている。六日市は若干上流の、現在の金光教教会裏の川土手の決壊によって浸水の被害を受けた。筆者の祖母の生前の話では、大呂方面の家、そして五反田の川沿いの家が浮んで流れて来て、生きている心地がしなかったという。その堤防の場所には今も、1mほどの自然石が置かれている。

その表と両側には、

明治二十年
旧六月一日　六日市中

八大龍神

世話人　中沢丈太郎
　　岩佐寛四郎

と刻されている。丁度一年目に建てられ、上沢屋と中島屋の当主が世話人である。

1892（明治25）年、巾員を広く高さも高く、重量にも耐える橋脚2ケ所の橋が完成した。時の大原仁多郡の郡長毛利八彌は、「吉重橋」と記念の命名をした。

その後コンクリート橋（15年戦争中に）、1971（昭和46）現在橋となり、その名は引き継がれている。

余　話

吉重郎の家は角の現在の村尾宅にあった。子がなく甥（五反田土手紺屋安部氏）の松太郎を養子とした。のち五反田の実家の西に移り、屋号も小西屋と改めて現在に至る。菩提寺は角の晋叟寺で、墓所は五反田にある。

町の氏神伊賀多気神社の境内にある手洗鉢とその前の牛形の石は、吉重郎が1人で運んだという。今こゝに手水屋を建てる話もある。

（会員和泉儀吉・縁者大津屋老婦人の協力も得て本文は成った）（高橋一郎）

物もあるので、どちらでしょうか。と彼は聞いた。そして持参した画帖に、その歌を書いてもらった。「海にして」と書いてある。

「新進詩人」を編集していた時、アンケートを取ったが、「詩作について」の返答に「詩を書かないと死にたくなる人だけが書くとよい」という言葉が強く印象された。大社で刊行した小詩集を御送りすると、ていねいな礼状のエハガキを頂いた。後進と共に歩もう、大家ぶらないと、いう態度が彼を引きつけた。

上京してからのこと、戦局が激しくなった頃、或る講演会で彼は友人の詩を朗読していたが、ふと、後方の壁にすがって聞いている高村さんの姿を見て、すっかり恐縮してしまった。

そのうち、高村さんは花巻郊外の山口村に行かれた。終戦になって、詩集「典型」を刊行された。その詩集の読後感を書いて送ると、ハガキで返書が来た。昔の事をなつかしく思い出す、

斐の上川柳十月抄

小さな秋爪切る音にしのびよる　高木白虹
古里いい水も空気も涼しさも　安部正子
朝露にぬれた草刈る鎌の音　安部春恵
暑さ過ぎ我が世の中と虫が鳴く　田中有樹絵
豊作型一喜一憂米の出来　若槻白馬
減反もなんのそのとて稲実る　児玉哲呂
素直には喜び湧かぬ米の出来　藤原のぼる
収穫を祖先に知らせ感謝する　中林もりえ
よき時代嫁も自由に意見言う　藤原千代子
ジョギングの人急救車で急ぐ人　石原冬明
休肝日決めても信用しない妻　松浦久寿子
休み終え自信たっぷりの顔で行く　杠京子
猛暑ゆえ夏越すだけの余力なし　真綿よし子

前号訂正　1頁4段最後　赤目・砂鉄、5段24行　生産が・

と書いてあったが、某が詩集と一しょに、挿入してあったハガキも書斎から盗んでしまった。

昭和六年満州事変勃発してから我国は満州へ出兵し、七年には五・一五事件があり、八年には国際連盟脱退、九年には治安維持法改正があり、芥川賞、直木賞が設定された。昭和十一年軍縮会議を正式に脱退し、二・二六事件が起り、昭和十二年には日華事変となり教え子の出征者が目立って来た。昭和十三年、日本軍の進撃のため中国政府は重慶へ移転し、広東漢口も占領、国家総動員法が公布された。昭和十四年、ノモンハンで日ソ両軍衝突、国民徴用令が公布された。そして文芸銃後運動が始まりつつあった。

退職・上京・再就職

昭和十五年三月上旬、東京の正富汪洋氏から、高輪中学へ来ないか、と電報が来た。彼はすぐ上京し、正富氏に逢い、更に渡辺正知氏に逢い、そして、高輪中学校長に逢った。校長は退役の陸軍大佐で、大社町へも講演に来たばかりで、よく大社町の事を知っていた。浜田連隊区司令部で退役したようだ。話はとんとんと進んだ。四月に上京着任という事になった。

渡辺氏は高輪中学教諭であったが、たまたま東京駅で正富氏に逢ったとき、高輪中学で国語の教員を求めていることを話された。それで正富氏はすぐ彼に打電されたのだった。

前述のような情勢のとき上京するのは大きな冒険であった。反対して引きとめてくれた人もあったが、上京することにした。長男六年、長女二年、二女五才、三女二才それに私達夫婦計六人退職手当など出ない時代で、恩給がつくということが慰めであった。それに退職すると決心してから蓄えた金も知れたものだった。

昭和十五年三月末に上京したが、一家の住むべき住宅はなかった。初めに彼は自分の縁者の家へ、妻は妻の縁者というように分散した。そして、池上の町に新築の小住宅を見つけた。そこで一家がまとまったのは四月になっていた。家賃は確か三十八円だった。恩給が月割で四十円余りだったから、それで家賃の方はやって行こう、と考えた。学校から貰う八十円でどうにかやって行ける目安はついた。

上京した昭和十五年は戦事色が濃厚になろうとしていた。上京して暫くすると高輪警察署から呼び出し状が来た。何だろうかと出かけてみると、島根で雑誌を出していたそうだが、どんな雑誌だったかと問われた。ありのままを話して帰ったが、それきりだった。つまり要注意の人物とされていたらしい。

上京して「日本記録」を編集した。(宙之助は仁多町三成出身)

中国地方の近世企業たちの技術がどのようにして全国各地へ伝播したか

当史談会の第9回横田たたら勉強会（91年1月）の主題で、いま全国調査に入っている。全国各地で今まで判明しているものでも50を越えている。

各地の皆さんの協力を受け、地域別分布図と、年代別表を作成し、それらをもとに、各地域代表の方にお集まり願って、討議頂く計画である。現在、北海道をはじめ各地から、多数の回答を寄せて頂いている。感謝

風の秋づく

簸の上短歌会

修理さるるテレビの如く裕弥ちゃんは管つけられて息絶えたらむ　常盤　はるまさ

あれでもと恃みしものを裕弥ちゃんは二百八拾五日を闘い了へぬ　仝　人

形見ともなりし花瓶に友偲び女郎花活けぬ盆近き今日　松浦　愛子

庭木々の葉の間に仰ぐ星月夜天の川冴えて風の秋づく　岡田　時子

三十粁と生れし仔牛抱く息子秤の目盛われは確かむ　景山　悦子

電線に並ぶ燕は羽搏きてバランスとりをり激しき雨に　佐藤　喜代子

月見草も蛍の点滅も美しと夕べの庭より夫の呼びをり　野村　節子

ヨーロッパの地図を茶の間に貼り置きて紫苑の朝を夫旅立つ　永井　弥生

若き日にあきらめし恋かなしみの想い出となり忘ることなし　安部　夕波

九月句会抄

土用蜆浜の言葉で秤られる　浅野　としお

外つ国に住む娘や秋蝉の声切実　岡田　蹊花

どの窓も万緑の大山雲に浮く　小川　月舟

癒えし眼で見えたり空に去る燕　恩田　和美

稲刈機とめて憩いの家族づれ　門脇　花子

葛の花古寺の参道荒れ放題　加納　信子

残暑尚カンナの真紅燃えつきぬ　楠房子

しのびよる爪切る韻とに小さな秋　高木　白虹

初咲きのコスモス供え語りかけ　中沢　美紀子

石垣の崩れし城址くずの花　新出谷　一華

初さんま煙吹き出す換気扇　錦織　富江

鈴虫の初音か細く暁を鳴く　渡部　夕峰

鳥上の平野は黄金の波と化し　峯石　美代子

会員頒布一部百五十五円／六九一八　島根県仁多郡横田町一六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0—601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　槙田軽印刷所

豊かさとは何か　路地から車の排除を＝禁車区域が子供のために欲しい

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 187 号
（11月号）
1990. 11. 3
（M123・T79・S65）
奥出雲編集集団©

©は著作権のある表示

本号の時代

1941（昭和16）

スターリンソ連首相となる。日ソ中立条約調印

國民学校と改称

日米交渉決裂　12.8前2時日本軍マレー半島に上陸　仝3時真珠湾奇襲

仝4時過ぎ宣戦布告

「めんこい小馬」流行　高村光太郎

「智恵子抄」版

大日本詩人協会　大日本歌人会創立

軍報道班員として多数の文学者徴用

奥出雲と文学・芸術③

頼春風・頼杏坪の紀行（5）

頼春風「雲行日記」第2冊
——1806（文化2）

4月6日、備中神代村を発つ。こゝは備中松山領（高梁市の松山城）で、こゝでは安芸・出雲・伯耆・備後・備中諸藩の藩札の交易が行われるという。こゝから備後の東城への巡見使（幕府が将軍の代替りごとに各地に派遣した視察役人）の道で、巾広くしかも平担である。1里で矢田に至る。宮馬場という所には民家20ばかり、豊田郡の波右ヱ門という者はこゝに住んでいる。畠村の豪農杉三郎右ヱ門の門前を通り、二本松に至ると備後・備中の境界石があった。東城の入口に奇岩があり、松樹茂って風景妙であった。岸泰瑞を訪ね、酒食の馳走をうける。詩を乞われたので、扇面4枚に途中作ったものを写して与えた。

帝釈（峡）への道まで案内され「和泉川」という地酒の名酒を贈られた。泰瑞はその子を余が下に（塾）預けている。2里半で帝釈に至る。千尺の絶壁の下に穴をうがち、楼屋を設け、絶壁の中腹には小祠があるが、登ることはできない。下には鐘楼・閣摩堂があり、前には渓流があり、奇石の下を流れている。地獄の状を呈し、人数数十、だれが刻したのか知られず。帝釈は和同2年（和銅か709）の開墓で、毛利家の普請、我が藩主も修覆した。こゝは石雲山という。石雲山と誌す額は、宝永年間（1704～1710）のものである。

満山に石瑪瑙があり、足のあたるところ白瑩光りがある。坂本屋金太郎方に宿る。橋の下にある。橋その他の建物お上の普請のものである。海へは福山が最も近く12里ある。生魚を求むるには夏で、福山から夜通しで魚荷1荷に2人かゝり、従って値段が高いという。

7日、川を渡って向うの左側に行く。奇岩両立していて、川を渡って右岸へ、又川を渡って左岸へと登る。唐門をくぐり、甲の橋に至る。巾10間（20m）長さ30間余（60m余）で、高さは30間ほどある。北岸の橋の下に穴があって地蔵が置かれていた。里の童べにあったので、暮が峠まで案内させた。橋の西に茶亭あり小休止し、山に登る。けわしく曲りくねった道を頂上に至る。嶺上は平担で墾田（開拓地）があり、稗を植えていた。

山焼きをしたとみえて松の半数は枯れていた。小径を行くと名越という4～5軒の所に至る。また坂があって未渡・相戸を経て高光という20軒ほどの村に至る。次の福長村など南神辺の方への一帯は2万石で、奥平氏の所有である。神辺へ10里。農家にて昼食をとる。奥卒が酒を欲しがったが旗亭がない。つれの伯恭が曰く「ほととぎす先一声を聞く里は、酒屋へ3里とうふやへ2里」と。

やがて岩井堂についた。堂の上は1000尺（300m余）の絶壁で、穴が一つある。これは三次郡に通ずるというが、その奥をきわめたものがない。従僕に入らせたところ、暗くて行けずという。

堂に一木像があった。僧衣に唐冠をしているが、何の像か明かでない。

左に折れると奇石が多い、帝釈石の如くである。これまで4里登降数回にして、やゝ平なところに出る。水田あり日暮れんとする。一軒の大農家があり、投宿を乞うたが許されず、その隣の小堀村の卯兵次のところに泊った。こゝは幕府の天領であった。主人がいうのには、今日の道は険阻大変であったであろう、是からは上下市へ出るがよい道も平担距離も同じだと。

この辺りの水はすべて三次へと流れている。

一路竹原へ

8日、上下の町を過ぎる。家1000軒あるというほど繁富の地である。土地平担で豊沃に見える。

木江村に至る。村の豪農酒造業を営み、水車を2か所もっていた。奥卒酒を買う。こゝは三原領内で、豪農は根本屋といった。2里にして小童に到着、祇園に詣でる。20里四方の住民が崇敬する神社で、本殿も宏壮である。

廻廊下も頗る大きく、左右の末社、鐘楼等多いが、寺院内の僧の勤め振りは極めて良くないようである。唯額の文字はあの有名な湛山和尚の筆になる立派なものだ。鳥居前の茶店で小休止、甲山路へと急ぐ、道平担で広い。これは去年秋、公駕のために修覆されたという。坂にさしかゝるが小石一つもない。やがて向うに城山がみえる。吉田よりこゝに来る荷物はすべて人の背によるという。

こゝの寺は今高野という。観音堂・大師堂・鐘楼・灯籠堂や常夜灯があり、石塔2つ、文字は読めず。池があって中島に小

祠があり、近くに数社がある。

この山の地主は春日大明神で、空海この地に来り、この山を望むと紫雲がたなびいていたのでこの寺剛峯寺を建立したという。こゝにある空海の画像は、紀州高野・讃州善道寺のものとともに、天下の三幅と呼ばれている。寺領50石を有し、他に金剛寺・安楽院・福地院・浄土院の4か寺がある。昔12房あったという。

五葉松があるが大師の手裁といゝ、その木の皮をいただけば病悩が除かれるという。

宝物には真如親王の作った大師の像のほか、大師が天竺より持帰ったものなどが多い。

天正11年毛利元輔を元就が討った時、この山の城を焼討ちにしたため、寺も残らず焼失し、のち福島氏は寺領を没収した。のち御上によって普請された。近くの山に城跡あり、土人は小寺十兵ヱが城主であったと伝えている。この地の名物は豆腐であるが、ゆばも佳い。宿は西尾屋弥八でとった。

こゝから広島城へは16里ある。

本江村根木屋某はかっては、藩公入部の折、米300俵を献上したという豪農である。

9日、甲山を出発する。宏壮な稲荷神社、やがて八幡神社に詣でて進む。

神宮寺の主僧の案内で各所を巡るうちに日暮れとなり、宿泊をすゝめられたが、懇ろに断り去る。垣内村にて道案内人を雇い仏通寺に着いたが、雨降りやまず、輿かき等みな疲れはてて、日暮れて寺に至り、含暉院に泊る。この寺の主僧が言うのには、旱天続きであったが祈祷のお蔭で雨が降り、村人みな蓑笠にて参詣にやって来たと。

この寺の由緒ある宝物の数々を拝観した。

以上で「雲行日記」は終っている。翌4月10日には里程の上からみて、竹原へ帰着したことであろう。

20日間にわたる雲伯旅行の主目的は、出雲大社・日御碕と大山見物であった。頼春風は駕籠で旅をしているが、春閣も同様であったと思われる。

したがって、従僕と駕籠舁きが同行していたのであるが、春風が金を貸与したと書いている。

丈右ヱ門・幾七・吟兵ヱがその者の名であろう。なお、春風はこの旅行に金九両一歩と豆板銀7分3勿を持参している。

（後に註）

この紀行文は文学的にはすぐれた面白というほどのものではないが、土地の人情・風俗や行路の状況を簡潔に記しており、19世紀初期の芸備・雲伯、とくに中国山地の風土をうかがわせてくれる。（この項終り）

奥出雲が生んだ日本の詩人 安部宙之助

—「ある自伝より」⑦

上司小剣

宙之助著「白鳥その他の手紙」から

上司小剣は、文学青年として交友のあった堺利彦（4年先輩）のすゝめで上京し、1900（明治33）年24才で読売新聞社へ入社した。利彦はのち社会主義者としての道を進み、のち代議士ともなった。

小剣は30才頃の日露戦争前から、社会主義運動家であった幸徳秋水を知ったが、秋水は3年先輩で万朝報に入社し、片山潜・安部磯雄・木下尚江らと意を同じくし、退社して新らしい運動に入った。小剣はこれらと終生交ったが、37才で文芸部長兼社会部長となる傍ら創作にも入った。42才で（大正9）編集局長となり、47才で創作活動に専念しのち日本芸術会員となり、73才（昭和21）でなくなった。

小剣は読売新聞社で3年先輩の、島村抱月（島根・那賀郡金城町出身）と一年間編集にたずさわった。

以来抱月が死ぬるまで20余年の交友があった。抱月はイブセンの「人形の家」を飜訳し、その上演を通して主役のノラを演じた、女優深尾須摩子と結ばれ、早稲田大学の職をすてた。病に倒れると須摩子はその後を追ったので、当時の世間の話題を賑わした。

小説家でのち文壇の重慎となった正宗白鳥は、小剣の2才後輩であった。

上司小剣との出合い

宙之助は小説家になろうと努力していて、上司小剣先生に親しくして頂いた。初め平川虎臣が、上京して間もない彼を連れて、洗足の上司先生の宅へ参上した。15年の5月の一夜だった。平川は十数年前から御世話になっていた。もう一人の友人植村繁樹も十年位前からお世話になっていた。平川、植村、彼の三人で土曜日の夜を参上した。先生も土曜の夜を楽しみにして居られたようだ。雑談が主で、辛辣な言葉で時事を諷刺されるので楽しかった。戦争に対する批判もあった。文壇や文学に対する言葉は少なかった。

16年12月8日は米国への宣戦布告であったが、その時は上司先生も、よかった、気持がさっぱりした、と喜ばれた。

宙之助は上京した年の夏、現在の場所に小さい家を建てた。

120坪の北半分を残して、将来そこへ新しく建てる考えで、南半分の場所へ小さい家を建てた。門なし、塀なしで、周囲がのっぺらな野原である。区役所へ届けたが係員があきれた顔をしたようだ。だが、そんな事はどうでもいい。とにかく生きねばならなかった。僅か千円余りしか財布になかった。

ある日、上司先生が遊びに来られた。そして、彼が日曜大工して作った濡れ縁をみて、安部さんの小説のような縁だねと、つぶやかれた。全くその通りだと感心した。辛辣なことはであるが、うまい事をいったものだと胸を刺された。

先生の客間の床の軸は時々変った。田山花袋、幸徳秋水などの半折であった。先生が亡くなってから、先生の許へ来た正宗白鳥、幸徳秋水、島村抱月、堺利彦の手紙を基にして一冊の書を『白鳥その他の手紙』と題して宙之助は刊行した。4人の他に田山花袋、徳田秋声、田村俊子など珍しい手紙が沢山あったが、それらは皆、ご次男延秋さんが駒場の日本文学会館へ寄贈された。

花袋全集を一冊手にしてきて、その解説を見せられたことがあったが、それは先生が書かれた文章であった。花袋の半折が床にかかったのは花袋の命日の頃ではなかったろうか。至ってぼんやりにはわからなかった。

宙之助が小説を志して努力していることを正富汪洋氏は知っていた。

正富氏は昭和23年春に青山学院長の豊田実を訪い、山宮允氏を訪い、そして、西条八十、柳沢健、日夏耿之介、山宮、豊田、正富が発企人となり、日本詩人クラブを結成されていた。昭和25年5月に発会式並に第一回総会を開いた。

雑誌「詩界」も第1号を25年10月に刊行し、第2号準備中だった。或る日、遊びに行くと、正富氏は日本詩人クラブに入って自分を助けてくれないか、とのことだった。私は承諾した。クラブの例会は毎月第2土曜1時からあった。会員は140名。理事長が西条氏で実際の運営は山宮氏と正富氏とでやっていた。27年4月第3回総会で、宙之助は理事に選ばれ、30年には常務理事に選ばれた。そして45年に理事長、47年に会長に選ばれた。当時会員数も500数十名であった。

「和暢友愛の精神を以て詩及び詩学の興隆国語の醇化に努め、日本文化の進歩に寄与すると共に、詩の国際的交流を促して、世界平和の確立に貢献することを目的とする」これが会の目的である。

設立をまず主唱した正富氏は、25年が70歳である。岡山県邑久郡本庄村の出身である。竹久夢二と家が近くで、幼児の頃遊友達であった。県立岡山中学から私立閑谷黌に転入し、21歳の時上京して哲学館に入学、閑谷黌出身の者4人で四谷に一軒借り女中を雇って同居していたが、一人が隣家の人妻と通じたので、3人は神楽坂の一室に移った。更に本郷丸山福山町4の樋口一葉逝去の家に友人2人と間借りした。隣室に林滝野が友人と2人で間借りしていた。滝野と恋愛して結婚することになった。長男は明治37年に生まれた。滝野は与謝野鉄幹の夫人であったがこの時、鉄幹の子を郷里の山口県の親許に預けて自由の身であった。鉄幹の処には品子が来ていた。正富氏が同県の人尾上柴舟と共に牧水、夕暮、と車前草社を結成したのは、氏が25歳、明治38年の事である。露風、芳水もあとから加わった。

汪洋氏は鉄幹の弟子であって、師匠の細君を頂戴した下賜婚姻のようなものだと書いてある書物があるが、それは間違っている。

汪洋氏の処へ行くと、どうも奥さんらしい人がお茶を持って現われる、という噂をきいた父上はすぐ汪洋氏を呼び寄せた。

そんな4つも年長で子持の女を妻にしなくても、郷里にはよい女が沢山いる、と旧庄屋であった父上は畳を叩いて叱ったが汪洋氏は黙って頭を下げていた。そして勘当されて上京した。それから汪洋氏夫妻の苦難の生活が始まった。奥さんも勤めに出たりしたが、奥さんの実家が有富で助かったようだ。「明星」は第1号から5号まで林滝野が刊行人となっている。出資者の林家を立てて鉄幹がそうしたのである。滝野夫人は和服の似合う美しい方だった。写真を撮って雑誌に出る事を避けて居られた。汪洋氏が避けられるので、私達はおかしいと感じていた。終戦後、ある人が鉄幹、晶子の恋文を正富氏が持っていることを聞いて、見せてくれと迫り、それを公開せざるをえなくなった。

一方、佐藤春夫氏は毎日新聞に「晶子曼陀羅」を書いた。晶子を礼賛するためには、前夫人滝野をけなさざるをえなかった。悪しざまに自分の妻のことが書かれてあるのには、正富氏は憤慨せざるをえず、その事実を恋文によって反駁した。正富氏の著書『明治の青春』はこのような事情によって書かれたものである。

正富滝野夫人は昭和41年4月3日未明に逝去された。汪洋氏は「妻死にぬ」と題して

妻死にぬ嗚呼妻死にぬいとか

前号訂正　3頁1段最後の行　こうした通路は50m下流にもある（虎屋と亀田屋との間の小路、南側は西田村裏の南北道）

細きいきも今はも通はずなりぬ
いと深くまごころこむる君なりき痛みの中にもいたはりぬ我を
たらちねの母に知らえぬ恋心いと切なりと云ひてし君や

など十数百の歌を書いた。汪洋氏は翌年42年8月14日夕に永眠された。

宙之助は夫人の時は病院に見舞に行った。いつも年末に伺っていた彼のために、お酒のかんをして下さった優しい御姿を思い出し、眼前の衰えたお姿を悲しいものと思った。

汪洋氏が入院されたことを知りすぐに御見舞した、汪洋氏は約1ケ月、広尾病院で過ごされた。岡村さんが看病された。岡村さんは奥さんの妹の娘さんで嫁して岡村家で未亡人となり二児を持つ人である。百合丘に汪洋氏と新築同居した人である。

岡村さんは日夜看病された。宙之助は一日置き位に見舞った。汪洋氏が亡くなられ、その葬儀全般の事は自分がやらねばならない。汪洋氏は御子様とうまく行っていなかったので、自然とそうなってしまった。然し汪洋氏が亡くなられた今日では、よき子孫として生きて居られるので喜んでいる。

岡村良子さんは「正富汪洋全詩集」を刊行された。自分も手伝って宙之助の木犀書房から刊行した。汪洋氏が亡くなられて8日目に山王書房が汪洋氏の『明治の青春』を改版して出したいといって来た。それは『晶子の恋と詩』と書名を改めて出た。彼はその「後記」を書いた。汪洋氏が生きていたら、どんなに喜ばれたことだろう、と思った。

豆板銀　豆板・小玉・小玉銀・小粒・粒銀・細銀などともいう。江戸時代の銀貨の一つ。目方は5匁前後で、丁銀の補助として用いられた。

丁銀　江戸時代の銀貨。初期の銀80、銅20のものが最も品位がよい。ただしこれは豆板銀とともに秤量貨幣で、使う時品質を確認し、秤量したうえで交換された。金貨は計数貨幣で、枚数で高がきめられた。

斐の上川柳十一月抄

もう二度と会えないかもと後ろ髪　藤原のぼる
短日も手持ち無沙汰じゃ日が長い　高木白虹
出合いあり別れのつらさ又来たり　安部正子
扇風器彼岸過ぎたら邪魔にされ　児玉哲呂
廻り道出来てよかった花に会い　安部春恵
押し売りに居留守をつかい孫でばれ　松浦久寿子
口だけか心の窓を覗きたい　松田牛歩
鏡見てつくづく思う皺白髪　横山まこと
北と手をつなげば南不安がり　松浦亜以
大国の面子保つに金がいる　石原冬明
母の歳とっくに越して孫の守り　藤原千代子
赤ちゃんが泣けば年子の姉も泣く　渡部ミツコ
七回忌孫のピアノも聞いてもらう　杠京子
丹精の菊も仏にたむけられ　真綿よし子
お陽様やゝい土下座している稲穂です　田中有樹絵
扇風器やっと仕舞えばコタツの番　若槻白馬

萩のころ

簸の上短歌会

萩の縁にゼスチャー交へるわれを見つつ身をのり出でて耳遠き母　永井弥生
獅子舞を受けつぐ若者は町にいで鎮守の夏祭はやばや終る　仝人
秋晴れに干したる籾を返しつつ乾きたしかむ一粒かみて　佐藤喜代子
ひたすらに息子の帰国を待たれたる舅姑(しうとめ)いまさず秋霖つづく　野村節子
渡伯して三十余年義弟の今日帰ります秋空晴れて　仝人
やさしさに触れし思ひの膨らみて常より弾む二人の夕餉　松浦愛子
素気なく応えられしは生きゆきのたやすからぬを知らされさびし　常盤はるまさ
刈りあげし白髪の襟足さすりつつ束子の如き感触思ふ　岡田時子
暮れてゆく越前岬にたたずめば海上はるかに漁火ゆれる　安部夕波

十月句会抄

砂山の砂引きずりぬ秋の潮　浅野としお
栗盗む悪童もなく村寂びぬ　岡田蹊花
野仏に縋りて真紅彼岸花　小川月舟
妻臥せり吾は術なく秋の雨　恩田和美
深呼吸し触れ見る路地の金木犀　門脇花子
古寺尋ね頬にひとひら紅葉受け　加納信子
笹の葉に音立てて落つる栗のいが　楠房子
暮れいそぐ刑場跡のこぼれ萩　高木白虹
里帰りかみしめる母の栗ごはん　中沢美紀子
真夜に覚め中天にあり後の月　新出谷一華
送る人別れの小径露時雨　錦織富江
かたつむり風裏に棲み野分待つ　渡部夕峰
布団干す竿に可愛い赤とんぼ　峯石美代子

会員頒布一部百五十五円／六九一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0—601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 188 号
（12月号）
1990. 12. 3
（M123・T79・S65）
奥出雲編集集団©

©は著作権のある表示

豊かさとは何か　路地から車の排除を＝禁車区域が子供のために欲しい

松平不昧の書

―絲原記念館開館十周年記念特別展によせて

書道の最初の師

松平不昧（松江藩7代藩主治郷。1807文化4年56才にて致仕、江戸大崎の別邸に住み、不昧と号し、1818文政元年68才にて没）は、1757年7才の2月8日始めて書を、細井九皐について学んだ。

父6代藩主宗衍（むねのぶ）に似て筆蹟に優れていた。九皐（きゅうこう）は宗衍の師でもあった。宗衍ははじめ高井某について学んでいたが、16才の1744延享元年から九皐を師とした。

九皐の父は唐様書法の泰斗であった細井広澤で、赤穂浪士大高源吾・武林唯七と深交があった。2人は事件前に書をしたゝめ、その夜を知らせた。広澤の家は吉良邸に近かった。その夜ひそかに屋上の物干場に登って吉良邸を望み、部屋に帰って端座して吉報を待った。やがて2人は門を叩き、欣然として復讐の成功を告げ、それぞれが片身の品を渡して去った。広沢は人格崇高にして、終世までこのことを語らなかった。その死後九皐が文箱をあけてはじめて、このことを知ったという。

この人格がその書風に流露していて、一世を風靡したという。

その書は寛文の頃（1661～1672）来朝した明人兪立徳の流れを汲んでいた。1735（享保20）年78才にて没す。九皐はこの父に学び、松江藩をはじめ諸侯・名門の書道の指導にあたり、1782（天明2）年72才にて没した。

この九皐を師とした不昧の書は、唐様の筆法を伝えて、父宗衍の書に酷似しているという。

定家流の書風に転ず

唐様より定家流に一転変じたのは、茶道の趣味において、早くから小堀遠州に私淑したからである。遠州（近江国小室藩主で、秀吉・家康・秀忠・家光に仕えた。本誌102号参照）は茶道に於ては3代将軍家光の指南をつとめた。松江藩祖直政もこれにならったが、門下には江月・沢庵の両僧・狩野探幽・瀧本坊昭乗等（いずれの書も館蔵品に）を輩出している。遠州は土木建築にも長じ、築庭にも優れた技を有した。不昧は茶道に於て遠州を崇拝し、大崎の別邸に多くの茶室を建立し、また遠州に倣って窯業にも力を注いだから、書風に於ても遠州を手本とするこの時代のものとして今日残るものは、安来市の清水寺の「瑞光山」の文字のほか、松江市善光寺その他がある。

「茶事覚書」（不昧37才作）
から
茶の湯とはたゞ湯をわかし茶を立てゝ　呑むばかりなり本を知るべし
この歌は茶の眼也

のは偶然ではなかった。

遠州は定家の末孫冷泉為頼に（本誌　号参照）就いて、定家の書風を学び、その筆致は堂に入り神技を極めたといわれている。不昧の手本は遠州の肉筆であって、決して他見を許さぬ極秘の斯道伝授の秘本であった。

その本に遠州がしるしていることは、定家の書風に入るには、「筆の取様」「筆つかひ」「かみあたり」の三つの道が最上の大事である。そして不緩、不急、平等を旨として中庸を守る事。さらに九品の心得が必要とすると、細々と誌されてある。

『松平不昧伝　全』（1917大正6年松平家著作）によれば、不昧が定家流を学んだのは、いつのころか明らかではないが、不昧の侍医であった堀弘伯（本誌103号参照）が、許しを得てこの秘書を浄写したのは、1805（文化2）年11月で、その写本は今なお同家に珍蔵しているから、それ以前であろうとしている。また堀弘伯がさらに写したものに、『定家郷一月記』があるが、それには1811（文化8辛未）8月、不昧61才の時、土屋様所持の小堀遠州箱書の『定家郷一月記』を、金五十両にて求めて、浄写したものとあるし、6年後には同じく土屋候より為家郷（定家の子）の筆になる古今和歌集をも購入したとしている。

ところが、不昧が定家流に傾倒したのはそれよりはるかに遡ることが、絲原記念館の展示品で明らかになるのである。まず

藤原定家・為家詠百首和歌筆写巻子1松平治郷与梨子両筆2巻

である。

百首和歌とは、平安後期から鎌倉時代に盛んに行われた、1人または何人かの100の歌を集めたもので、いろいろな形式がある。

藤川百首はその中の著名なものの一つである。藤原定家が春・夏・秋・冬・恋・雑の部門毎に、10首（恋の部）か20首（他の部）宛、4文字の歌題（関路早春、紅葉写中、祈不会恋、海路眺望等）を設けて歌った百首である。最初の和歌（たのみこし関の藤川春きても　ふかき霞にしたむせびつゝ）にある「藤川」の文字によって、この形式を「藤川百首」と通称している。

定家の子為家にもこの形式に

松平不昧の書・縁は異なもの味なもの・俳句・川柳・短歌

よって詠んだ「藤川百首」がある。

この**上下2巻の巻物**には、定家と為家のそれぞれの藤川百首から、歌題毎に2人の和歌が列記してある。

この巻物の手本は定家流の書をよくし、遠州流の茶祖となった小堀宗甫（遠州）の書いたもので、それを不昧が写したものが展示してある。この書体と階上に展示してある藤原定家の「明月記」の断簡（県指定文化財）の書体を比べてみると、まことによく似ている。遠州が定家流をこなして書いたものを、忠実に写しながら、定家流の書風に迫ろうとしている、不昧の意気込みを感ずるようである。

この巻物は1782（天明2）年、不昧32才の時に写している。この時すでにこゝまで書風をこなしているところをみると、20才代にすでに傾倒していたものと思われる。

冒頭の春の部の最初「関路早春」の定家の和歌（既出）に続いて、

やすらはでこえける春のたよりとや　霞の関の名にやたつらん

の為家の歌がある。

だが上巻を写し下巻を写しはじめたが、半分ほどで退屈したので書き残したと書かれて終っている。（退屈というのは、忠実に写すのにまいったという意味でもあろうか）そのあとは不昧の奥方与梨子（彰楽院）が、不昧の死後思い出の多い、江戸大崎の別邸で、故人を偲びつゝ残りを写して完成した。

（一説によれば、不昧は18才ごろから茶の湯を学ぶに及んで、定家や定家流の遠州の書風に激しく傾斜するに至ったともいう。）

与梨子は仙台藩主伊達家22代の女で、1773（安永2）年23才で不昧に嫁した。生母は林子平の姉である。和歌に長じ不昧の歌にも筆を入れたと伝える。不昧の書の和歌は多くが古歌である。

与梨子の書の多くは自作のものであり、貫之流（平安中期の歌人・官僚、三十六歌仙の一人紀貫之）の艶麗な筆致である。不昧の愛用した道具の箱書きも多いという。子に恵まれなかったが、側室武井ユキ子・嶺カズ子らのもうけた多くの子女を、わが子の如く育て、不昧に44年間付添った賢夫人といわれる。不昧の死後12年、78才で没した。

不昧の4女幾千姫は16才で、佐倉藩主（千葉県）堀田相撲守正愛に嫁した。筆蹟は父不昧に似ている。（展示品中にあり）玉暎とも号し、1863（文久3）年暮59才で没す（謙映院という）。因みに与梨子（彰楽院）は、仙台藩主伊達家3代綱村（母は三沢初子）の流れであるから、横田庄藤が瀬城主三沢氏の遠縁にあたることになる。なお堀田家には玉暎の姪玉姫が、次の藩主に嫁している。

和歌五首短冊帳（展示品）

古今和歌集・拾遺和歌集などから、春・秋・冬の歌五首を書いたこれは、みごとな定家流の書風によるものとみられる。同じ書体の「茶の湯心得」（展示）は、「茶礎」とともに、茶の湯の真随を端的に述べてあるという。定家流円熟期のものともいう。

茶の湯秘伝書「三百ケ条」3巻

石州流の茶祖片桐石州齋の石州「三百ケ條」を、不昧が自らの考えで、随所を書き改めた草稿である。これは不昧流茶道確立の考え方や作法の原点となったものである（詳細は本誌102 103 104号参照）。これにも定家流の書風が色濃くでている。

これより少し下るころのものとしては、鎗術伝目録（展示）がある。松江藩は藩祖直政のころより、管鎗の一指流では、各藩の中でも最も優れた伝統を持っていた。その秘伝書の奥書きである。1803（享和3）年不昧52才の時の筆になるものである。

茶の湯秘伝書「奥儀書」「一畳半極秘」の2巻（展示）は、（本誌102～104号に詳述）不昧が61才の還暦の年に（1811文化8）、江戸大崎の別邸で、支藩広瀬藩茶頭の根土宗静に書き与えたものである。これは説明のための秘伝の要点の走り書きであって、あとで記憶すれば破棄するものであったが、該書に記してあるようにして残ったものである。定家流をこなし、不昧の味を出すようになり、世に不昧流と称せられた頃のもののようである。

書状「本宗老宛」（展示）もこれと相前後するもののようであるし、西山栄珉筆の千利休寿像への不昧の春屋和尚の詩の画讃も（展示）、このころのものであろうか。

展示してある次の書なども、禅の修業の深さとともに、達し得た心境も吐露した作品である。

達磨画讃一字書「喝」「是什麼」「出門是草」「道得也三十

棒」。

是什麽はもとは俗語であったが、禅語として用いられ、「これいかにも」の意とされていると註釈をつけているが、つい先だって11月20日、東京から来館された某氏夫妻を案内したところ、もとは「這是什麽」であった。今日でも「スージョンマ」と発音して、日常用いているとのことであった。What is this？（これはなにか）の意であるという。

写真（昨年の松江菓子博協賛の県立博物館での、雲州名品展のポスターから転写した）の、「薫風自南来ル」は、不昧の一行書の中で五指に入る気魄の書で、定家様をこよなく使いこなした、40才前後の作であるという。力の強弱、速度の緩急、その呼吸はまことによく整っているといわれている。筆者も不昧にまつわる展示会で出会うごとに見入る作品である。

「無」（展示）は不昧の書の中で五指に入る傑作といわれる。

禅道と茶道の極地を意味するものである。

「松平不昧伝」によれば、不昧の生存中、定家流の書をみてこれは不昧流であるとする人もあらわれるほどであったという。また側坊主に早苗宗也という者がいたが、不昧の筆致をよく模したので、時には代筆をせしめたこともあったといわれるが、やはり書の心には及ばなかったという。

当時の碩学者塙保己一は、不昧の跡をついだ8代斉恒の信任を得て、赤坂の藩邸に出入した。

彼の選により酒井抱一書（不昧の茶道の弟子で、姫路藩主酒井稚楽頭宗雅の弟）で、不昧の筆塚が、江戸の天徳寺の不昧の墓所の側に建てられた。その後嘉永の地震で損じ改建されて今日に至っている（それも若干欠け損じている）。それには不昧の書風が極めて高邁にして雄渾であったと讃えてあるという。

不昧の禅の修業については、別の機会に触れてみたい。

「茶事覚書」で不昧は、●露地数寄屋（茶室）については、千利休の孫宗旦（三千家の祖の父）。●物数寄好之物（道具）は宗甫（小堀遠州）。●茶の湯の法は宗閑（片桐石州齋）が手本で、これを一人にしたら天下一の人である。その心にて修業すべきであるとしているが、展示中の「茶の湯心得」「三百ケ條」3巻、「秘伝書」2巻は、禅道修業に裏付けられた、不昧の茶の心を知るに貴重なものである。いまだ究明がされてなく、今後の課題である。

開館以来満10年、数多くの不昧やその周辺の人々の、書その他を見て、筆者なりの所感も随所に加えて述べたのが本文である。一般の方への手引にもなればとあえてのべ、身の程知らずにもほどがあると思っている次第である。ご指導をお願いしたい。多謝（横田史談会　高橋一郎）

「茶湯心得」（不昧作）から

手前は、飯椀をとりてめしを喰ひ、しる椀をとりて汁を吸ひ、箸をとりおきする如くなるを成就と可ゝ申也。

十一月句会抄

また一戸閉ざせり隣家柿たわに　浅野としお
土堤芒揺れつほぐれつ風のまま　岡田蹊花
鰯雲鯖雲集め神集う　小川月舟
秋時雨る療母が傘寄す車椅子　恩田和美
廻り道一人好みて枯野踏む　門脇花子
移り行く世紀の儀式菊薫る　加納信子
澄み渡る空と山との線たしか　楠房子
陽の当る庭のそこだけ残る秋　高木白虹
ふりかえる青春枯野ひた走り　中沢美紀子
野辺送り済ませ佗しき枯野かな　新出谷一華
ゆるやかに日暮の里や柚子香る　錦織富江
鷺渡る禅寺の森も照葉かな　渡部夕峰

斐の上川柳十二月抄

もう駄目と言わせぬように気くばりし　佐佐木千世
終局を紅葉で飾り散る落葉　松田牛歩
曽孫（ひいまご）の笑顔は家を明るくし　安部春恵
ふと出した冗談村中駈け廻り　渡辺好之
目と鼻の先も対話じゃ遠くなり　藤原のぼる
五十肩もう過ぎ去って今は腰　横山まこと
お祭りのこづかい待ってる子供達　中林もりえ
花を生け胸のしこりが少し解け　松浦久寿子
お教話を聴いて納得すぐ忘れ　高木白虹
若そうと言われて胸を少し張り　児玉哲呂
紅葉に名残り惜しんで廻り道　藤原千代子
長年の垢をあつめて医者無料　渡部ミツコ
大掃除古本拾い読みあさり　石原冬明
さび着いてエンジンかからぬ粗大ごみ　若槻白馬
収穫期気ままな空が気をもます　真綿よし子
打ち込める物あり老の暮れ早やい　安部正子
もやもやを晴らしてくれた絵の心　杠京子
色づかぬ葉っぱにぐちをぶっつける　田中有樹絵

縁は異なもの味なもの

福知山藩主朽木家と不昧

『松平不昧伝』中巻の不昧の茶道門下の系図（抄出）には、

- 酒井雅楽守
- 播州姫路侯 得庵
- 朽木近江守
- 丹波福知山侯 不見庵
- 鈴木新兵ェ 朽木家臣
- 有馬涼竹 朽木家臣
- 不昧
- 藤田玄番頭 寄合衆
- 松平上野介 支藩広瀬侯
- 井伊兵部少輔
- 本多豊前守
- 永井伊予守
- 松平日向守 越後糸魚川侯
- 有沢弐通 雲州侯家老
- ○—○—○—弐恒

とあり、朽木隠岐守昌綱（のち近江守）は、福知山藩主朽木家8代である——1802（享和2）年53才没——。いつのころからかは明らかではないが、茶道を松平不昧から学んだ。不昧の大名門弟中最も熱心だったのは、酒井姫路侯と朽木福山侯であった。

朽木家の祖は、近江の宇多源氏佐々木信綱が、全国の湖畔北西の高島郡朽木庄の地頭となってから朽木姓を称した。元綱の時秀吉、家康に仕え、朽木25000石を領したが、死後廃藩となった。

三男稙綱は将軍家光に仕え、旗本から下野国鹿沼20000石に復活、ついで常陸国——土浦30000石を経て、1668（寛文9）年、稙昌の時に福知山32000石へ移封し、爾来13代200年明治維新に至った。

松平不昧が晩年になると、茶道具の愛玩蒐集に進んだが、昌綱も異常な執心を持って、名物の蒐集については、師の不昧と仲よく相競っていたという。それは伝中巻にある書簡にもあらわれており、福知山市蔵の書簡にもみえる（目利き＝鑑定が書かれている）。

なお、市蔵や市内の個人蔵にも、不昧から昌綱宛の書簡3通、昌綱の絵、不昧の書（定家の詠歌）の軸物があるという。

昌綱は、不昧の妹幾百姫を29才のときに娶ったが、病弱のゆえをもって37才で離縁している。

しかし二人の交情はきわめて厚く、老年に至るまで変ることがなかった。

これは、風流趣味において、両者の間に心性の相通ずるものがあったからで、両者が姻戚の関係にあったからではなかろう。

昌綱の茶道の傾倒は、さかのぼると故なきではない。初代稙昌は武家茶人で織部流諸派の祖、古田織部の門人で、小堀遠州と同門である。稙昌の弟稙泉守則綱は沢翁と号し、片桐石州の門人怡渓宗悦（怡渓派の祖）の門下である。同じく怡渓の門下伊佐幸琢を経て、不昧は石州流に接し、遂に石州の三百ケ條を超える不昧流を創始している。則綱＝沢翁の門人も多く、さらにそれらの門人、さらにそれぞれの門人と続いている。

沢翁の門人には朽木家6代綱貞がおり、7代舗綱（のぶ）はその門人である。そして8代昌綱＝不見庵となる。また6代綱貞は了庵星橋と号し、風流を好み書画に堪能であり、狩野派栄川ほかに私淑した。

朽木家と不昧夫人伊達家

当横田庄藤ケ瀬城主三沢氏14代為虎の弟為基は、兄為虎との不和で（本紙6号参照）、三沢氏の所領のあった近江国の坂田犬上両郡に去った。そこで、隣国美濃国大垣領主氏家氏の女を妻とし、清長・基次ら4男と1女紀伊をもうけた。清長は成長すると叔父の大垣領主氏家清直に子がなくそこに嗣子として入ったが、のち清直に実子ができたので辞し、三沢の姓にかえった。清長の妻は近江国高島郡朽木領主、朽木宣綱の女であった（桑名領主で大叔父である氏家清忠に養われていた）。

清長は三沢姓にかえってから浪人となり、鳥取藩士である再従弟の三沢為良の許に寄寓している時、初子と宗直をもうけた。

その後家族を伴い江戸に移ったが、志を得ずして病没した。墓は目黒区日蓮宗正覚寺にある。

時に初子13才、宗直7才であった。2年後に母を失い、2人は縁者に養われた。初子は叔母の紀伊の下へ。紀伊はのち家康の外孫振姫の侍女として仕えた。

そして振姫が仙台藩伊達忠宗に輿入れすると続いて侍女として従った。この時初子を伴った。

のち忠宗の眼にとまった初子は、その子の夫人となり、綱村（亀千代）を生んで、仙台藩の危機を乗り切ったのである。（蓬）

秋の蠅

簸の上短歌会

やりどなき悔恨今朝は捨てたしと髪にはげしくブラシ当てつつ　永井弥生

一匹の蠅を素手にて捕へたる秋雨の午後は冷えつつ暮るる　小早川恵子

すすき活け縁側に待つ老二人月出ぬ庭に木犀匂ふ　岡田時子

しとどをく露の山道萩の道またぎ通りぬ畑にゆく道　野村節子

ひと言も癌には触れず逝きし父葬りのことをメモに残せる　佐藤喜代子

老酒（さけ）甕を或る日は割りて捜ししこと何も割るまでするなかりし　常盤はるまさ

京極（にかたつく）高次の築きし城や夢の跡若狭の海は碧く静けし　安部夕波

会員頒布一部百五十五円／六九九—一六　島根県仁多郡横田町一、〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0—601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 189 号
（1月号）
1991. 1. 17
（M124・T80・S66）
奥出雲編集集団©

©は著作権のある表示

街の活性化に必要なのは、住んで、働く人が、現在の街を正しく評価しているかどうかが根本である。

北の文化・川柳・俳句・短歌

北の文化
未・蕨手刀・光堂
—みちのく奥の細道ふたり旅

ひつじ・未・羊とシルクロード

今年の年廻りは12支の8番目「未」で「み」ともいゝ、12支獣としてヒツジ（羊）があてられる。また時刻では今日の午后2時前後の2時間にあたり「未の刻」「羊の時」という。方角では南から西へ30度寄った南々西をいゝ、「未申（ひつじさる）」（西南）へ曲るといって、傾に曲ることにいう特殊な言い方もある。

野生のヒツジの産地は、ヨーロッパ南部、ソ連南部から西アジア、中央アジアから東部モンゴール、北アメリカ大陸の高山地帯、カナダのロッキー山脈であるが、前3者が中心地で、紀元前8000～6000ころ西アジアで家畜とされ、毛・肉・乳・毛皮が用いられた。今日話題のイラクやその北の地帯であって、動物で家畜となったのは、山羊とともに最も古いという。

10月はじめ、例年の如く早々と日記帳が届けられた。羊の絵が刷り込んであるので、例によってこれにまつわる話をと思い浮んだのが、西アジアとシルクロードのことであった。

シルクロードの終着地は正倉院で、その宝庫であるから、7～8度見た正倉院展の記憶をたどり、かなりの数の図録を持出して見た。8世紀の錦織の図柄（「紫地花卉双羊文錦」「樹下双鳳双羊之綾」等々）を中心にかなり多く、いずれも巻込んだ角、ふさふさとした毛、穏やかな風貌のものばかりであった。

東北へのふたり旅

そうこうするうちに長い旅に出てしまった。10月20日、岩手山の麗峰を眼前に眺めることのできる台地上の、全く自然に融けこんだすばらしく豪壮でしかも優美な近代建築の岩手県立博物館にたどりついた。東京から盛岡までの所要時間は、横田から松江にゆく遅い列車ほどであり、東北は遠いという感は昔のことである。そこでは開館10周年記念の特別企画展「北の鉄文化」が開かれていた。いままで数多くみた鉄の文化展（科学万博も含めて）では、和鉄に関しては最高の内容のものであった。

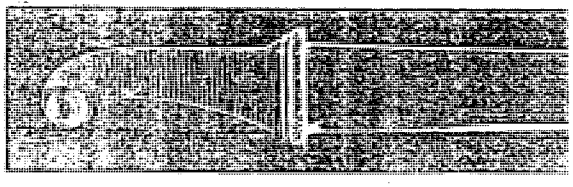
蕨手刀（わらびて）

たたら研究会第1日の発表会で、村上英之助会員（川崎製鉄副社長）の発表「蕨手刀のルーツ」は、先入観念の恐ろしさを反省させられた。それはつい年末に島根史学会例会で、縄文文化についての研究が、海について全く顧みられていないという発掘からの指摘と同様であった。

氏のこれまでの研究発表にはこうした貴重なものが多いが、常に世界的視野の中から、わが国の製鉄史を探究されていることからの当然の論である。

在来は左の写真のような型をしているから、蕨手刀だと誰も疑うことなく是認していた。その後の研究によって、170余本の出土した地方は、東北を最多に北海道とで70％を超えていて、南限は関東である。その時代は8世紀より以前には遡らず、平安初期まで（奈良時代～9C前半）である。

正倉院の蕨手刀



（出所）
正倉院事務所編「日本の刀剣」，日本経済新聞社
後藤四郎　1974年，11頁。

この類型の刀剣は、東アジア内蒙古、シベリヤの出土品と類似しており、動物意匠は北方ユーラシア（ヨーロッパ、アジア両大陸）に共通する羊である。

そこで村上氏はこの刀の由来を、北方渤海地方からの伝来を起源としていると提唱された。今までの一連の氏の諸研究と符号するところが多く、説得力もあり、今後の深まりが期待されている。展示場にも展示されていたが、蕨手刀の若干の分析も行われていて、鉄鉱石・砂鉄・鉄鉱石と砂鉄の三種類がある。

北の文化の最盛期

800余年前の平安末期1140年出家した佐藤義清（歌人西行法師）は、全盛時代の平泉をたずねた。

藤原氏初代清衡の建立した中尊寺（1109）、2代基衡の毛越（もうつう）寺・金堂・円隆寺　3代秀衡の無量光院は、いずれも「皆光色」で、建物も仏像も仏具もすべて金色燦然と光り輝やいて、まるでこの世の極楽を実現したかのような、それはそれは見事な光景であった。無量光院（現在跡のみ）はすべて宇治の平等院を模していたという。西行が訪ねたのは、これらが完成していた時である。折りしも春、北上川対岸の束稲（たばしね）山の桜花は、爛漫と咲き誇っていた。

聞きもせず束稲山のさくら花
吉野のほかにかかるべしとは

吉野といえば、都第一の花の名所。都のほかにこんな桜の名所があろうとは思ってもみなかったと歌い、みちのくにもう一つの都を見いだし、思わず感嘆の声をあげたのである。

それから幾らもたたない1189（文治5）年8月、4代泰衡は源頼朝の奥州征伐によって、住みなれたその館にも立寄ることもできず、火をかけて北へ落ちのびた。館、宝蔵も焼けおち、貯えた金宝、宝玉も瞬時に灰と化してしまった。『吾妻鏡』（鎌倉幕府側の記録）には

「倹は存し、奢は失う。誠に以て慎むべきものかな」

と事実記載のあとに誌している。

これより4年前、頼朝は西海の果て壇の浦に平家を討って滅ぼした。頼朝はまた『吾妻鏡』で、「奢る平家は久しからず」と、これを戒めとして、京に上らず鎌倉に留まった。

奢った平氏の時代は25年間、藤原氏平泉3代の栄華は100年間である。

3度この平泉を訪れたのも、5度東北の地をくまなく歩いたのも、すべて鉄にまつわる学会にあわせてであったが、何か私には、山陰と比べて、東北の力に引かれるものがあるからであるようだ。

みちのくとは古来から呼ばれている。「道の奥」である。私が教わったのは、この地は不毛の国、文化はつるところときめつけて教えられていた。文化も政治も育たぬ意であった。

山陰も（出雲は中央での出雲・的神話の中では、極めて比重をかけられていた。これも中央の作為とする説が主流）同様に思われていた。だがみちのくは、歴史時代に入り平安時代の初期になってもなお、蝦夷地である。

まつろわぬ者、無法者の蝦夷地であるとされてきた。さらに言えば、「内なる外国」とみる歴史観が多かった。

先年、多賀城遺跡（8世紀）を訪ねて認識をあらたにし、この度各所をめぐり、「北の鉄の文化特別展」を通して、文化を生んだ経済力をあらためて見なおした。山陰両県が束になっても、これに匹敵するだけの展示は難かしい。出土品が、中世末までの文化財がともに乏しい。

歴史に対する偏見を捨て去らねばならない。

藤原氏が亡んだ12世紀末までみちのくは、安倍氏・清原氏・藤原氏と中央に対して、半独立をしていた事実の背景に眼を向けねばならない。

平家が築いた文化とは、院政末期の古代貴族文化に寄生したものに過ぎなかったことは、その代表とされる安芸の厳島神社の平家納経をみてもわかる。藤原氏3代はこの平家に半世紀先んじて、系統的、本格的な文化を展開して花咲かせていた。やがて源氏の時代が来るが、その時代の文化と平泉文化とを比較すると、後者が遙かに遜色があることも明らかである。

前九年の役と安倍氏

1054年から1062年までの9年をかけて、鎮守府将軍陸奥守源頼義は、「奥六郡」の覇者として北方の支配を最初に打ち立てた安部氏を押さえた。奥六郡とは今日の岩手県北上川流域の峡谷平野地帯である。四国四県分もあろうという広い岩手県の中枢部にあたる地帯である。こゝに降伏した蝦夷たち、すなわち俘囚たちが、集団的に定住し、みち

斐の上川柳一月抄

老いの身は魔除けとしたい冬がこい　田中有樹絵
薬りづけ命のびても年は年　渡部ミツコ
ふとこれでよいのか自問自答する　藤原千代子
断わりの返事が出来る人のよさ　中林もりえ
相撲より懸賞の数気にかかり　児玉哲呂
ばら、つゝじ真似の出来ない返り咲き　佐佐木千世
善悪もことんと言えば酒が売れ　若槻白馬
過保護だと母も一緒に叱る父　松浦久寿子
気紛れで梯子掛けたり外したり　藤原のぼる
妻と旅邪魔になったり杖にもし　高木白虹
肥立ち良くなる身に心はずませて　真綿よし子
褒められて頑固な頬がふとゆるみ　松浦亜以
野地蔵にひ孫は小さい手を合せ　安部春恵
人質と油で地球儀曇ってくる　松田牛歩
いつまでも当てにするなと笑い顔　石原冬明

十二月句会抄

菊供養総てを燃して地に返えす　浅野としお
世の動き知るや知らずや山眠る　岡田蹊花
書き終えてしずかな日差密柑食う　小川月舟
捨てられし家を包みて山眠る　恩田和美
浄心を充たさぬままに年暮るる　門脇花子
峡深くダムを抱きて山眠る　加納信子
宇宙より声かけ声聞く冬銀河　楠房子
哀史秘め木枯むせぶ城の垣　高木白虹
裏山は師走の風と工事音　中沢美紀子
暮れなずむライトに浮かぶ枯尾花　新出谷一華
忘れ傘師走の町を廻り道　錦織富江
山茶花の彩重ね散る庭しずか　峯石美代子
綿虫のおちこちゆらぎ庭手入れ　渡部夕峰

のくのえみしの司、鎮守府の特別軍政府下に置かれていた。しかしそれは形式的で、実質には俘囚長の支配下にあった。ことに10世紀以降は将軍たちは遙任（実際に赴任することを免除され）して、多く都に留まったので、現地の最大の実力者俘囚長の独立支配が、鎮守府統治を意味するようになった。安倍氏はこの奥6郡の俘囚長を、少なくとも3代にわたって世襲して、安倍頼時にいたり、前九年の役の大乱を引起した。

俘囚とは蝦夷征伐が終ったのち、蝦夷が俘囚として人民に準じて扱われた。奥羽の現地にだけまとめて置くと、問題を起こすとみられ、全国66か国のうち35か国に移配された。

国別に見ると、10とか100とかの単位であったが、これらがさわぎ出すと、10数倍の官兵を必要とした。関東地方などは甚しかったが、時々とともに徐々に諸国の俘囚問題は歴史から姿を消したが、最も強固な地帯を形成していたのが、奥6郡ほかであった。

前九年の役のあと、安倍氏と縁があった清原氏が、これに替って奥6郡の王者となったが、20年後の後三年の役において清原氏は、源義家（八幡太郎）によって亡んだが、その一族である安倍氏の血もうけている藤原初代清衡は、後三年の役の生き残りとしてこれを継承し、北方の王者となったのである。そして次第に周辺に手をそめ、奥州王として覇権を確立したのである。

すると藤原氏は俘囚の系譜となるが、安倍氏などと同じ俘囚ではなかった。そこに安倍、清原両氏が達成し得なかった、北方の大統一を体制的になしとげた原因があった。

それは俵藤太秀郷流の藤原氏の別れであって、国司ないし武官として早く、11世紀はじめ初代清衡の曽祖父あたりが、土着していたのである。

有名な歌人西行（法師）は、1186（文治2）年奥州に向う途中鎌倉に頼朝を訪問している。東大寺再建のため重源上人の依頼による、諸国勧進のためであった。奥州では藤原秀衡からの砂金の勧進が目的であった。

西行は俗名佐藤義清であり、秀郷流藤原氏の別れである。西行はこの時、陸奥守秀衡入道は一族であると言っている。この平泉訪問のことも載っている西行の歌集『山家集』は、芭蕉の第一の愛読書であった。さきの「聞きもせず……」の歌はこれに載っている。

従って藤原氏は土着型（東北型）と西南型の融合した部族ということになる。それは1950（昭和25）年の、藤原氏4代のミイラ（中尊寺光堂に今も安置してあり、4代にわたるミイラが存するのは世界唯一）調査の結論からも、そうした日本人であるという結論になっている。この度ふたたびのその記録映画を繰り返えし見ることができた。

北の都　平泉

北上川の中流に位する平泉は、南北地域からの富の集中するところであり、中国の函谷関のように、天険要害の場所として重要視されていた。

初代清衡の創建した金色堂は、持てる財力を傾けて築きあげた精妙華麗な平泉文化の粋で、今日に伝わる世界的秘宝といわれる。前九年、後三年の両役（1051～1087）に勝ち残り、奥羽の実質的統治者となった清衡は、陣歿した同族の亡霊を弔い、不安におののく辺境の人心をも安んじたいと念願し、京と同等かそれ以上の文化を辺境に再現する必要を感じた。領内の豊かな砂金、馬その他の富の一切を傾ければ、京の貴族の文化をしのげるとの、からの宝石、遠くエジプトから伝わる工芸技法などもふんだんに用いたものであった。そして自らその遺体を堂内に収めて極楽往生を期そうとした。

毛越寺を建てた2代基衡も、3代秀衡も、さらに4代泰衡の首を置かれて、いずれもミイラ中央に対する反骨精神もあった。

天台仏教文化を摂取し、その様式に従って堂塔40余、禅房300余という中尊寺を、22年の歳月をかけて1127（天治3）完成し、「仏教浄土の世界」を現わす壮麗極まる規模であった。遠く宋となって極楽浄土の世界に生きている。こうした姿は世界にも例がない。加えて建築美と工芸美術の粋も組合わされているのは貴重な存在である。堂宇は戦乱により大方焼失したが、その後860年の風雪に耐えた金色堂は

夜業なつかし　簸の上短歌会

久しぶりの帰省の日々を語りつつ義弟は紅葉の朝を旅立つ　野村節子

無事帰ると晩秋の朝を義弟のブラジルよりのはるかなる声　仝

つぶやきの如き音して栗煮ゆる母在りし日もかかる夜ありき　永井弥生　人

死に絶へて守る人のなき君の墓銀杏の万葉に今風がゆく　仝

少しばかり歌に親しむひとりにて会へば瑣事なる生活をこぼす　常盤はるまさ　人

庖丁も剥く手も渋にねばりゐてわれの夜なべの干し柿つくる　佐藤喜代子

送り来しビデオに写る幼な子に父となりたる吾子を重ねて　松浦愛子

年とってお世話かけますと八十の老婆検診車にこわごわ乗りぬ　仝

天竜寺暮れゆく径を帰りくる嵯峨野の空に夕月淡し　安部夕波

前号訂正　1頁3段（いづれの書も館蔵品に）を狩野探幽の次へ　2頁3段—与梨子（彰楽院）と

往時を偲ばせてくれる。

平泉の駅から中尊寺に向う。大きい杉木立の急坂をのぼりつめると東物見の展望台（写真）に至る。美しい秋の平泉の盆地が展開する。左手が北上川、中央をよぎってこれに合流するのが衣川、前方一帯は衣川の古戦場で、前九年、後三年の両役が行われた跡である。左向うになだらかな起伏をみせる山が束稲山である。山のかたちから京都の東山になぞらえて、藤原氏が一万本の桜を植えたという。冒頭に掲げた西行の歌を刻した歌碑があり、往時の華やかさがしのばれる。折からの紅葉は、桜の美しさを思い浮ばせてくれた。

当時より500余年を経た300年の昔、松尾芭蕉は、西行法師の行脚の跡も慕ってこの地を訪れ、近くの高館にのぼった。かつて源頼朝の威圧におそれた藤原4代泰衡が、父秀衡の遺命に背いて義経を襲い、一代の英雄義経はこゝで31才を一期として妻子と共に最後を遂げたことをしのび、今は草生い茂るさまから、杜甫の「国破れて山河あり、城春にして草青みたり」を思い出し、笠を敷いて

夏草や兵どもが夢の跡

をしるした。

地蔵堂を経て積善院で「奥の細道展」をみ、芭蕉の句碑の拓本を一つ求めた。中尊寺本坊を経て金色堂（光堂）に至る。光堂脇に

五月雨を降り残してや光堂

と、（降りは古りに通ずる）光堂を通して平泉文化の生きた歴史に感激をのべている句であろう。

私は以前とは違った観点で、山妻といろいろの建物をゆっくりと観て、2代基衡が財を傾注して建立した毛越寺を訪ねた。京都の貴族の寝殿造りをしのぐ、そして中尊寺の堂宇の規模や数もしのぐ七堂伽藍の林立したものであったらしいが、今は当時の大泉ケ池やその遺構がしのばれる礎石が残るのみである。

芭蕉はこゝを訪ねていない。山門を入った右側に

夏草や兵どもが夢の跡

の句碑が移されてある。

基衡のあとは嫡子秀衡がついだ。秀衡をめぐる人物は、頼朝・義経・義仲・西行・平清盛・宗盛らがいて多彩である。とくに義経を終始擁護して、悠然と時流を明察していた。金売り商人三条吉次を通じて、京、鎌倉の動静をさぐり、陰に陽に義経を護った。

吉次の案内で16才で元服した義経は平泉を訪ねた。以来2人の堅いきずなが生れた。一の谷の合戦、屋島の合戦における義経の愛馬は、いずれも秀衡が特に贈った陸奥の名馬であった。その後失意の義経を平泉に温く迎えたのも泰衡であった。その風貌は東北の豪快な侍大将であったと、かつて大仏次郎は、光堂ミイラ調査時の描写に述べている。

義経に仕えて15年、衣川の陣に於て矢面に立ち、壮烈な立往生をした弁慶は、7才年上の38才であった。

仙台藩主伊達氏と中尊寺

初代藩主伊達政宗も中尊寺の修覆に力を入れた。2代忠宗も積極的で、平泉を殊のほか愛し、好きな鷹狩りもたびたびこゝで行うことにかこつけて参拝した。3代綱宗は同族内の謀略によって21才で隠居させられ、2才の子綱村があとをついだが、やがて著名な伊達騒動が起った。

綱宗の奥方綱村の母初子は、横田藤が瀬城主三沢為虎の末胤である。綱村は長じて「中興の英主」と呼ばれた名藩主であった。秘宝の散逸を防ぎ、金色堂の大修理をし、焼失した旧跡に小堂を建てるなどし、平泉の北にある支藩前沢藩主宗直（初子の弟）にも、堅くその保守を命じていた。こうした信仰心の厚さは、母初子からうけついだものであった。今日仙台博物館には、こうした初子の志をしるす、筆蹟や遺品や秘話が残されている。その10数代の末胤にあたる与梨子は、松江藩主松平治郷・不昧の奥方である。母は林子平の姉で学識も深く、それを十分にうけつぎ、45年よく不昧に仕えて名奥方といわれ、歌にも書にも秀いでていた。こうした縁で仙台藩から松江藩は、アラビア馬の系統を引く名馬をおくられた。その飼育は仁多郡にまかせられたとは奇しき話である。横田の大市場、六日市場は中世からの名馬名牛の大市場でもあった。

1919（明治44）年盛岡中学3年（16才）の宮沢賢治は修学旅行でこゝを訪れた。（桃青は芭蕉）

桃青の夏草の碑はみな月の
青き反射のなかにねむりき

（横田史談会　高橋一郎）

会員頒布一部百五十五円／六九九—一六　島根県仁多郡横田町一、〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0—601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 190 号
（2月号）
1991. 2. 1
（M124・T80・S66）
奥出雲編集集団©

©は著作権のある表示

街の活性化に必要なのは、住んで、働く人が、現在の町を正しく評価しているかどうかが根本である。

奥出雲のたたら製鉄史㉑

新資料にもとづく特に東南部のその技術・経済・社会・文化の総合史

近世編13　企業たたらの発達略史2—鉄師と鈩場

はじめに

奥出雲が近世企業たたらの中心地の一つとなったのは、水田大地主の鉄師を保護した、松江藩の行政が基本にあったからである。絲原氏をはじめ諸鉄師が所蔵する、経営記録・家の記録・書簡等にはそれがいつの時代にも歴然としている。

藩の鉄行政のうち、御買鉄制は1721（享保6）年に廃止されてからは一般的には復活しなかった。（幕末に和鋼の一部が御買鉄になった）

鈩・鍛冶屋の営業税に当る運上銀では、藩政初期からその率は基本的に変らず、幕末に若干付加率が加わる程度であった。

3つ目の制度は先納銀制であった。これは藩が春から秋までの年貢米の端境期に、鉄師から借銀して、秋に利息をつけて年貢米を放出したものである。それの見返えりとして、藩は大水田地主の者に、鉄山（松江藩では炭山をいう）や鉄穴山などを分割貸与したことである。その上種々の保護や援助もした。（これについては本誌163 165号で要点を述べてある）

この先納銀制が確立したのは1726（享保11）年からである。これを契期として松江藩の企業たたらは発展してゆく。それは「鉄方御方式」という。これが施行される裏には、「享保年間三郡御買鉄論争」が、鉄師と藩の間にあった。（これについては171号から5回にわたり詳述—これに対す在来の誤まった解釈も訂正した。鉄師の水田地主としての経済力と地域農民掌握の力の強さについてである）

こうして施行された「鉄方御方式」の解釈も、在来の研究に若干誤りのあることが判明した。これも考証し訂正しなければならない。その上で鉄行政の正しい評価をし、それから奥出雲の鉄師の経営の実態や、他地方と異なる性格、そして操業技術さらに鉄製品の質の特色にまで進まねば、奥出雲がわが国の製鉄史上に果した役割は理解できない。後日詳述する。

本号について

第9回横田たたら勉強会での報告資料にも役にたてたいと、次のように編集した。

1頁下段は、とかく誤まり考えられ勝ちな「鉄穴（かんな）流し」について述べ、2頁では3頁の表と横に関連して読むように、鉄師とその鉄師が経営した鈩場を年代を追ってしるした。操業は初期は秋のみで、天秤吹子の出現から秋から冬へと操業されたこと。初期は連年操業ではなく、連年操業となっても、しばらくは毎月操業でなかったことなど注意して見て頂きたい。また記録によって横田町内に於ける鈩の地下構造を図として置いた。

考古学的発掘では、地下構造が大部分を占めるが、300年近い鉄師の記録から操業技術をみると、立地条件（位置・土質・地下水）に左右されたことが大きいものである。たたら操業方法そして製品の質と量の問題は、送風方法と炉の構造がより重要であることを痛感する。また出土物の分析についても、その資料をどう位置づけるかという点が重要であって、今後の課題であると思っている。葉賀七三男氏が冶金考古学にとり組んでおられるが、実験考古学へのとり組みも急がれる。

鉄穴流し（完成した砂鉄採取方法）

砂鉄採取方法の発達は、当地方は一般的に下段の通りである。

鉄穴流し＝完成した洗樋流しが、普及するのは宝暦年間からで、諸契約書や、半期毎の勘定書その他から明らかである。1754（宝暦4）年大阪刊の「日本山海名物図絵」にある、むしろを急流にしいて土砂を流し、砂鉄をとる図は正しい。当地の杠・絲原氏は、すでに度々大阪に長期滞在している。

表2の(b)は記録をもとにして流出した土砂の量を図示したものである。鈩場の数、鉄の生産量とも符合する。さらに(a)とも符合する。この折線グラフは、島根大学理学部橋谷博教授が調査された、宍道湖々底の年次別のトリウムの推積量の推移である。花崗岩の中に含まれているその他の元素の推積量も同様である。これも砂鉄採取方法の発達とたたら製鉄業の発達そして衰退と相関している。

（横田史談会　高橋一郎）

砂鉄採取の場所

古い時代
- 海浜　（自然流砂）
- 河口　（自然流砂）
- 川の中上流（自然流砂）

中世以降
- 海浜　（自然流砂）
- 川の中流　（自然流砂）
- 山を掘って谷川へ流し下の上中流で採取

近世以降
- 海浜
- 山を掘って運びむしろでとる。
- 山を堀流し、洗樋で採取し（鉄穴流し）、その下の上中流の川でも採取。

今　日
- 海浜
- 中流
- 山元で磁力選鉱

表－1　**近世以降現代までの奥出雲の鉄師の操業鈩名**（鈩の字は表中省略）　－1933年よりは財団・会社による－

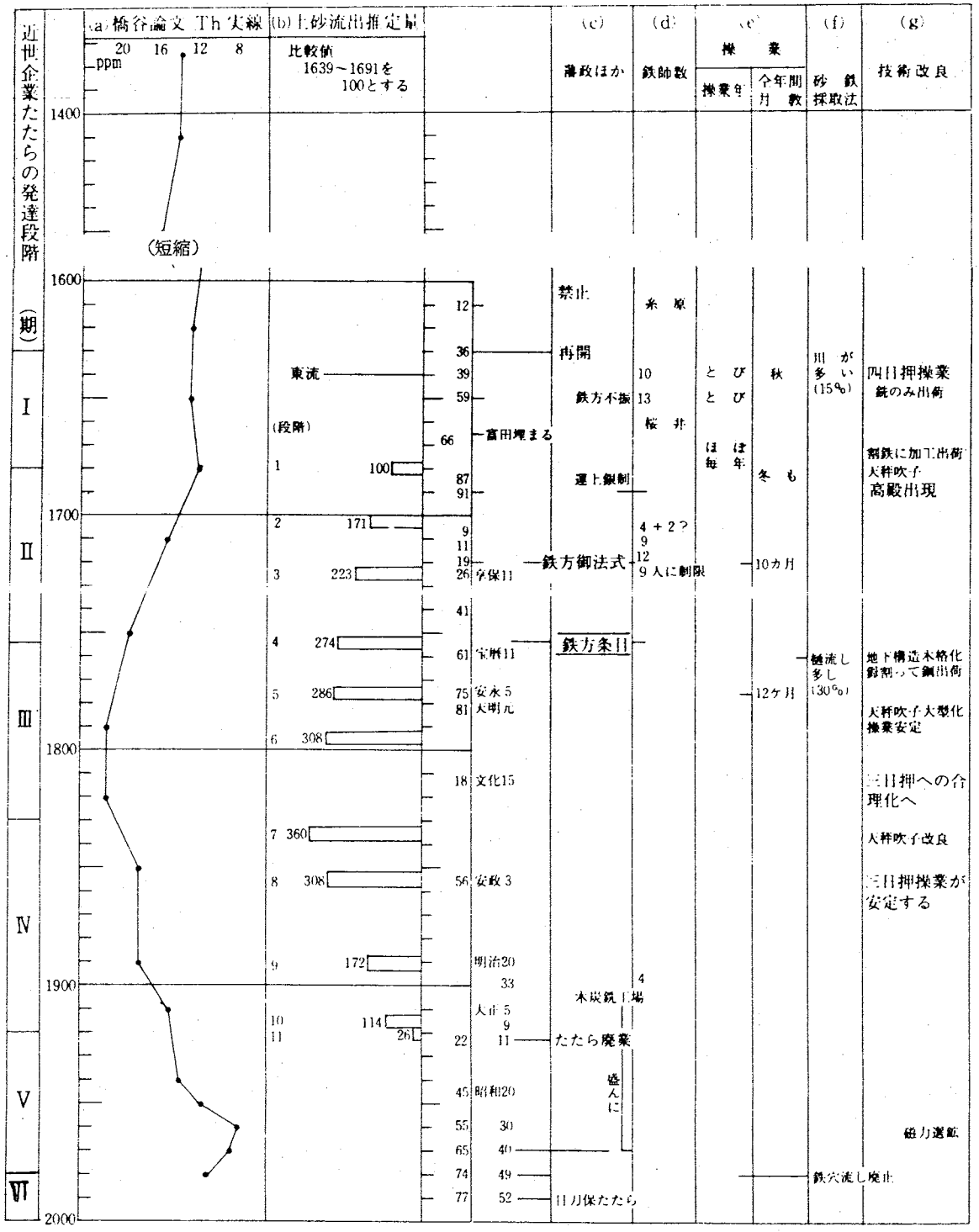
松江藩　9鉄師（1719享保11）に制限
- 斐伊川水系（仁多郡）杠、卜蔵、絲原、桜井、山根
  - （飯石郡）田部、田部（分）
  - （大原郡）石原
- 神門川水系（神門郡）桜井（分流）

広瀬藩
- 神門川水系（飯石郡）永田ほか
- 飯梨川水系（能義郡）家島、秦ほか

操業	松江藩　斐伊川水系						神門川水系	飯梨川水系
	ほか	杠	卜蔵	絲原	田部	桜井他	田儀桜井他	家島他
再開	小鉄師が1カ所で①～③年程度で移転操業	小峠など12カ所で①～③年程度で移転操業	転々と移動	転々と移動	1646 栗原 転々と移動	転々と移動	1675 越堂	
とびとびの年（秋のみ）—ほゞ毎年—								
天秤吹子で（冬にも）								
宝永年間より毎年操業	郡内16カ所				㊷志谷		各地で	
— 9鉄師に制限	鈩10カ所 大鍛冶2軒半	ⓐ大峠④ 坂根⑧ 矢入⑥ 丸淵④ 三森原② （廃業）	竜駒 赤川③ 下布施④ 山郡⑩ 万歳②	古屋野原④ 大原⑤ 雨川⑥ ⓑ小峠⑤ ⓒ杭木⑥	⑳川上 ⑬菅谷	宇根		
安永年間より								
毎月操業へ			山奥② 竜駒⑦ 亀石⑤ 原	ⓓ叶谷⑱ 雨川⑦ 大原⑫ 鉄穴 野土⑩ 向原① 野土③ ほか	㉗杉戸 ⑩菅谷 田代 郷掛 井原谷 郷掛 中谷 八重滝 ㉖ ㊵口掛 杉戸 中谷 ㉘ ㊼ ㊾	大吉 福原 槇原	1882廃業	（省略）
一斉廃業			㉟	㉟	㉜	（他は省略）	（他は省略）	
	創設 ⓔ靖国⑬ 復活 日刀保⑭		復活 叢雲⑧					

註　鈩名の原鈩、鉄穴鈩、菅谷鈩、槇原鈩等を原、鉄穴、菅谷、槇原等と記入
①～③ ㉕ ㉟ は継続操業年数
ⓐⓑⓒⓓⓔ鈩名は本誌4頁の地下構造図と符合する。
鈩名は各鉄師の主力鈩を中心にし他は若干省略。

表－2



出所　拙稿「奥出雲斐伊川水系に於ける近世企業たたらのたたら吹き操業と砂鉄採取の盛衰について
―それに伴う流出土砂量の推定―」
（『山陰地域研究（伝統文化）』第５号　島根大学山陰地域研究総合センター刊　1989年）

前号訂正　1頁1段10行　斜（ななめに）　4頁5段5行の支藩前沢藩主三沢宗直（初子

汲むほど温し　簸の上短歌会

ひとすじの生命見るごと紺菊は時雨るる庭に深きむらさき　永井弥生

まろやかな余生を念ふ年初め井戸水汲めば汲むほどぬくし　仝人

湖笛誌に伯父の歌消えてひと歳になりしと思ふ夜半嵐聞く　佐藤喜代子

久々にしめたる帯に息重く葬りの席の人なかに坐す　仝人

街はずれの古き神社に我がひとり手を打つ音の澄み透るなり　小早川恵子

裸木の梢は高く透きとほり我が拍手の風となりたり　仝人

病む妻が作りなかばの紙籠は縁隅に置かれて四たび春来る　常盤はるまさ　仝人

巡察の通り道なりし無錫城門カラオケテレビに須臾映りたり　仝人

売られゆく仔牛は追手に叩かるるもトラックに乗るを拒み動かず　岡田時子

亡き姑の愛でし山茶花背戸庭に咲きしづもりぬ霜深き朝　野村節子

思ひ出を辿り来りし奥能登の恋路が浜は時雨となりぬ　安部夕波

一月句会抄

峡田今年消ゆる年なり田打ちする　浅野としお

ふんだんに数の子食みし遠き日よ　岡田蹊花

雪晴れや老父の炬燵の熱すぎて
昏るるまで重機おんおん冬田噛む
着ぶくれてすれ合う人もきぶくれぬ
すねた子のブランコ揺るる冬日射し
かげ踏みて我が背を追いし冬の月
齢ひとつ加へ峠の雲を見る
ふりしきる雪に夜警の順となり
孫の数増えて年玉数のふえ
捨て切れず幾十年の冬着出す
日短か一輛列車の軋む音

斐の上川柳二月抄

孫の守りしばし童心終風船　小川月舟
二人居て手持ち無沙汰な日が暮れる　恩田和美
二日酔いのどもと過ぎて又も呑み　門脇花子
いつまでもあてにするなを口ぐせに　加納信子
子の賀状楽しい夢をふくらませ　楠房子
ペッタンという音もなく年暮れる　高木白虹
あてにされおせち料理に知恵しぼり　中沢美紀子
目的はお年玉だけの孫が来る　新出谷一華
年賀状書き終えホット足のばし　錦織富江
ブルドーザーごっそり山野姿替え　渡部夕峰
元旦の決意どこまで続くやら　佐木千世
我が身には株が上がろが下がろうが　佐原千代子
ゆく年はこれでよかった除夜の鐘　藤原久寿子
親の夢子の持つ夢と折り合わず　松浦冬明
指折ってやっと七草思い出し　石原京子
　　杠　児玉哲呂
　　安部正子
　　横山まこと
　　安部春恵
　　渡部ミツコ
　　藤原のぼる
　　若槻白馬
　　真綿よし子
　　松田牛歩
　　松浦木公

表1近世以降現代までの奥出雲の鉄師の操業鈩名

公開されている鉄師のものは、主力鈩を年表とした。それ以外は若干掲載したのみ。

尚、現代のものは、会社ならびに団体の経営するものである。

号を追って詳説したい。

表2近世以降の藩政・鉄師・その操業状況・技術改良・砂鉄採取法の全般の変遷年表

その都度解説、今後も載せていく。

図2　地下構造記録復元

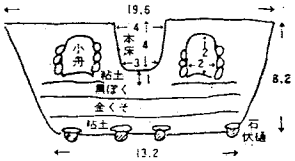
記録をもとにしたもので、表1の鈩の一部。（　）内は築炉した村下名）

（横田史談会　高橋一郎）

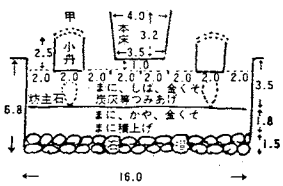
図2　鑪地下構造の（床釣）の変遷

単位は尺．全図とも構造の大要にとどめ、同一縮尺としてある。

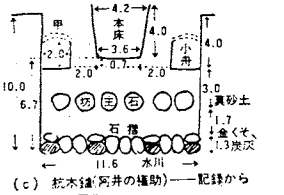
名の次の（　）内は築造した村下の名。丸は石で、その間記入なきところは金くそ・炭灰・粘土・黒ぼく・真砂土・木炭など。



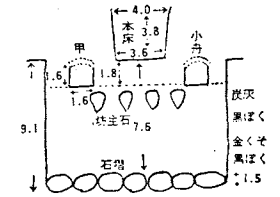
（a）大峠鑪——遺跡見取図
本床、小舟とも奥行23.0尺。
本床中央で両側へ若干広く。



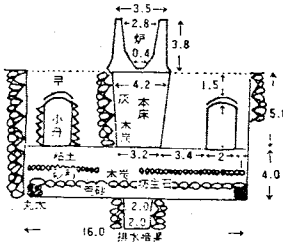
（b）小峠鑪——記録から模式図化
本床、小舟とも奥行20.0尺。
小舟は中央で両側へ0.5尺広く。



（c）枕木鑪（阿井の権助）——記録から模式図化
本床、小舟とも奥行20.0尺。
小舟は中央で外側へ0.5尺広く。



（d）叶谷鑪（玉郎左エ門）——記録から模式図化
本床、小舟とも奥行20.0尺。
小舟は中央にて内側へ0.4尺広く。



（e）日刀保たたら（旧頭国鑪）——島上木炭銑工場所蔵図の略描
本床、小舟とも奥行20.0尺。

出所　拙稿「奥出雲の近世企業たたら発達小史－産業考古学の側面から」——→
（『日本の産業遺産－産業考古学的研究』
玉川大学出版部刊　1986年）

会員頒布一部百五十五円／六九一八　島根県仁多郡横田町一〇六二ノ三　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0－601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 191 号
（3月号）
1991. 3. 5
（M124・T80・S66）
奥出雲編集集団©

©は著作権のある表示

街の活性化に必要なのは、住んで、働く人が、現在の町を正しく評価しているかどうかが根本である。

出雲大川流域物語④

漆仁（湯村）の薬湯

『出雲国風土記』時代

湯村温泉は現在大原郡木次町温泉地区に属しているが、敗戦後の町村合併までは、仁多郡温泉村であった。

今から1259年前の8世紀はじめの733（天平5）年に完成した（奈良時代は745年から、大仏開眼は752年）「出雲国風土記」では、仁多郡三沢郷に属していた。その後いつ分離したか明らかにできないが、935年にできた「倭名類聚抄」では、この温泉のある大字湯村字湯は、漆仁郷に属している（大字湯村字槻屋は三沢郷である）。漆仁は湯村の古名で、こゝを流れる出雲大川（現斐伊川）の部分は漆仁川と呼ばれ、近くの神社は漆仁社と称せられている。その後いつまでこの郷名があったか明らかにできないが。徳川時代の検地帳では湯村となっている。その他の村（大字となる）を合わせて、温泉村となるのは、明治期に入ってからの町村合併からである。

『出雲国風土記』の中にはこの温泉のことを次のように誌してある。「仁多郡の通路のうち、飯石郡との境になっている漆仁川の川岸に通ずる道にあって、道の距離は国庁から28里（14.967㎞）である。この川辺に薬湯と呼ばれる温泉がある。この湯に一度浴すれば、たちどころに身体がやわらぎ、重ねてこの湯で洗いすゝげば、すべての病気がみな治癒する。そこで男も女も老人も若い者も、昼夜をわかたず、引き続いてこの湯治場に往来しその効験をうけない者はない。そこで世人はこの温泉を薬湯と名づけている。」とある。

この書の中でもう一か所、温泉のことが書かれている。それは現在の玉造温泉である。当時は意宇郡忌部神戸（上古宮中の神事に従うを職とした部族・忌部氏に、その他の租庸調があてられたところ）にあった。こゝの温泉は、海陸の景勝をかねていて、毎日集って市場のように賑い　入りみだれて酒宴を楽しんだとあり、容貌も美しくし、万病にも効験があったので、神の湯と言っているとある。

1260年前の当時の湯村・玉造の温泉の繁盛振りをしのぶことができる。日本書紀や万葉集にもこの時代に天皇をはじめ大宮人が、道後温泉や有馬温泉に湯治に行っていることと思いあわせると、地方人も温泉を療養・慰安の場として重んじていたことがしのばれる。

本号の年表

1305	足利高氏（清和　源氏）
06	佐々木道誉（宇多源氏 佐々木京極氏出）
12	夢厳祖応
32	一後醍醐帝隠岐へ
36	（室町幕府創設）
	（近江・上総・出雲・飛弾の守護に）
58	
69	（上洛 東福寺へ）
73	
74	

『雲州樋河上天淵記』

という文章が、『群書類従』（江戸後期に編集された古文献の叢書で塙保巳一の手によるもの。530巻で収める文献は1270種に及ぶ）の神祇の部にある。作者は不明であるが、1523（大永3）年作である（三沢郷地頭三沢為忠が横田藤ケ瀬城へ移城してから14年目）。

天淵（あまふち）は湯村温泉から2㎞余下流の出雲大川の淵のことで、今日もなおこう呼ばれている。易しく書き直すと、――――

山陰道出雲国三沢郷の樋河上天淵は、古くは海水も流れ来た渓谷で、今も満々と水をたたえ、渦を巻く深い淵である。杵築の海から十里余り（40余㎞）上流湯村温泉から十余町（2㎞余）の下流にある。天照大神即位の234萬4650年の昔、八岐の大蛇が天地二神の交の中で住んでいた。それで八色雲が常にこの淵より湧き上り天空に達していた。この時素戔烏尊が天下って来た。途中逢う人も少なく、大原郡福武庄を経て八頭坂の麓の長者原にたどり着いた。そこには老いた老夫婦とその間に大変美しい少女が坐し泣いていた。尊がなぜ泣くか、名前は何というかとたずねると、手摩乳・脚摩乳で娘は稲田姫といゝ、この地の地主で長者と呼ばれている。河の西の山麓に泉が湧きでていて、それを樋をもって河の東に引いている。そこで樋河と呼んでいる。この河上2里余（8㎞余）に深い渓谷があって、天淵と名づけているが、そこには大蛇が住んでいる。その蛇は次々と人を食い、残る人も少なくなった。そこで毎年1人宛を犠牲としたがとうとう尽きてしまった。私に8人の児がいたが、これまで7年に7人が呑まれてしまい、今この娘1人となり、逃げることもできず泣いていると話した。尊が娘を自分に呉れれば、この悲しみを解決してやるといったので、老父母は喜んで承諾した。尊はまづ娘を隠くさねばと、7里（28㎞）離れた佐草の里に、八重垣（家）を造って隠くした。その時31文字の和歌をつくった。

八雲たつ出雲八重垣妻ごみに
これによって出雲の国名がはじまった。稲田姫は八重垣大明神

出雲大川流域物語④・奥出雲が生んだ日本の詩人⑧　川柳・短歌・俳句

とまつった。尊は長者原へとってかえし、蛇とはとたずねた。

老夫婦は、大変に怖ろしく、天にとどく大木の如き、八つの頭に尾が八つ、眼は日月の如く輝き、上下の牙がかみ合うと劔戟の如く、吐く毒気は火焔の如く、舌は真赤。その大きさは山の如くで、岩穴より出る時は雲を巻き起し、火をはき雷鳴の如きであると答えた。

尊は奇計を考えた。八つの酒の入った桶をおき、女の人形を作って東の山頂に置き、その影が八つの桶に写るようにした。蛇はこれを見て実の女と思い八つの頭を八つの桶に入れて酒を飲んだ。桶の中には女はおらずみえるのは山頂のみ、女を呑まず酒のみ呑んだ蛇は、もだえ苦しんだ。そこで尊は十握劔を抜いて蛇をずたずたに斬り、尾に至ると劔の刃が少しこぼれた。そこで尾を割いてみると剣が一振あらわれた。八雲はこれより起るといゝ、天叢雲剣と呼んで天照大神に奉げた。大神は「私が天岩屋にいる時、この劔を近江国伊吹山に落したもので、私の劔だ」と言った。孫の瓊々杵尊をこの国に降らせる時に三神器の一つに加えたのである。以来国宝とされた。その後素戔烏尊は杵築浜に居を定めたそれが大社杵築大明神である。

蛇をずたずたに切った所が木次の八本杉、腹の皮が流れて止まったところが皮原、八つの尾が流れ落ちたのが三刀屋の尾崎、蛇を枕にしたところが草枕（加茂の）のそれぞれの地名のおこりである。八つの桶を置いたのが天淵の一角である。その後、焼塩の浜であったが、今は田となって塩田と呼ばれている。蛇がのたうち廻った跡が今岩に残っていて、天淵の東岸にある。東岸に木こり道があって、それを登ると頂上に至るが、数十丈（百数十m）皆鉄のとりでである。蛇が淵より八頭坂に通った路であったが、昔長者が鉄をふいて、この蛇の道を塞いだという。今は條竹やいばらが生ひ茂り大木が生えているが、よくみると鉄壁があるのがわかる。東岸の渦の底には3尺余（1m余）の円い穴があって、水がたまっている。蛇のすみかにふさわしい。淵の東の山に手摩乳の墓が、西岸に脚摩乳の墓がある。考えてみると大昔は墓はなかった。これは後世の人が造って、そう言い伝えはじめたものであろう。

今から80～90年前、天淵の傍の杉に落雷があって、焼け倒れたことがあった。その時その中で大蛇が焼死していた。人々はその骨を拾って塚を築いたという。

又永正年中（1504～1520）大名京の劔もともに沈んだという。これ大蛇の霊魂のしわざであることは疑なしである。また八頭坂の左合に葛根があってはひ茂って長く山谷を覆っている。これ大蛇の遺子である。こうした話は多い。

酒が友呼ぶ　簸の上短歌会

語尾長きアラブ語耳に灼きつきて平和へのおもひふ　常盤　はるまさ
たぶるものを
曳光線爆音破壊爆屍体テレビはゲームの構図を見せて　仝　人
春待たずいのち絶ちたり在りし日はこよなく花を愛でられるしに　松浦　愛子
裸木をすきて真向ふ連山を借景として紅梅ひらく　岡田　時子
吾が歳にちかきが逝けるたより聞く山茶花の蕾そっと掌に触る　佐藤　喜代子
斑なる雪解の山の木洩れ陽に椎茸はやも芽吹きはじめぬ　野村　節子
中東にリトアニアにと世はきびしこの日たたらに火の入れらるる　永井　弥生
あけ方の虹色の夢は余韻ひきこころやさしきひと日となれり　仝　人
縄暖簾くぐりて汲みし一杯の酒が友呼ぶ民謡酒場　安部　夕波

う。これは大昔の蛇の末孫の蛇が住んでいたのであろうか。素戔烏尊が天の火で焼いたというのもこれであろうか。

村雲劔は内裏（宮中）におかれた三種の神器の一つである。人皇80代安徳帝が壇の浦で尼に抱かれて海底に沈まれた時に極光禄が樋河上に遊んだ時、地頭三沢遠江守（為忠）が、草木を刈って鉄壁をみせたところ、俄に雲があらわれ、雷雨しきりとなって人々は驚き、これは猶大蛇の気雲があるからだといったという。

そもそも天淵の八岐大蛇は、日本における正真正明の邪神であることの証明のあらわれである。

――このように述べたのち、これまでの長さの文を費して、日本書紀に誌されている、崇神・景行・仲哀の諸天皇時代の劔にまつわる話の要点を述べ、天智天皇の時代この劔を新羅の僧道行が盗んだ話、そして聖武・孝謙・高倉時代の劔にまつわる話を綴っている。

この天淵記が書かれたのは、日本書紀が完成してから800年後であり、今日からは400年前になる。この文の中に出る地名は、熊野・海潮・大東・加茂・三刀屋・木次・温泉・布勢の八東・大原・飯石・仁多の4郡にまたがる旧町村に今も存在していて、この文に相当する物語は今も語り伝えられている。オロチ退治の話を出雲大川の流域各地をはじめ出雲国内に十数か所あるが、この4郡が最も豊富である。

この文の作者は日本書紀にもくわしい、当地のことをよく知る出雲国の人であろうか。

横田でオロチ退治の話が記録にあらわれるのは、これより300年後の19世紀始めの文政年間か

らである。

ところが、この天淵記が書かれたより100年前に、既にこの話はこの地で語られていたことが、次の詩によって明らかになる。

夢巌祖応

この人は出雲の人であるが、姓も生年月日も明らかでない。幼年より英俊にして早くから仏門に入り、若くして京都に上り、東福寺（臨済宗東福寺派大本山—京都五山の一つ）13世潜渓処謙について得度し、大蔵経の一切の管理を司る係となった。のち出雲に帰って閑居していたが、名声を慕って訪ね来り、道を問う者が多かった。そして20年招きを受けて1369（応安2）年10月13日、東福寺に入った。当時京都で名僧といわれた、中巌円月（臨済宗禅僧で元に渡り修業し、漢詩文にもすぐれた）と並び称せられた。門人には太岳周崇（五山の一、天龍寺主）岐陽方秀（東福寺主）、東漸健易、大愚性智、性肖得巌ら室町前期の禅僧がいた。1374応安7年11月2日に没した。勅によって大智円応禅師という。著書には「草霖集」「語録」各1巻がある。前者には古詩・律詩・疏（注釈）、序・跋・説・銘・祭文ほかが収められている。その中の奥出雲に関係のある、律詩と疏を意訳してあげる。

簸川上に遊歴す

川は流れ巡り山は樹木が茂る。
とどろく音は浪だつ早瀬。
温泉の奥座敷は四季を通じ暖か。六月（新7月）であるのに滝の前は寒い。旅路は山中のいと細い道で危い。禅庵は狭く近くの牛小屋で宿った。蛇を斬った劔はすでに龍と化してなく、とがった峯だけは雲の上にみることができる。

遊簸川上（七言律詩）

野水榮回山麝蟠
壑雷裏虎見崩湍
温泉宮畔四時暖
飛瀑巌前六月寒
客路危乎径鳥道
禅庵叢爾宿中欄
斬陀劔已化龍去
留得尖峰雲外看

次に疏は「淇澳庵化縁疏」である。淇澳庵の教化の因縁の注釈と解すべきか。淇澳庵は山陰路出雲仁田郡三沢郷にあると冒頭に書かれている。出雲国風土記のころは三沢郷は今日の横田町内の馬木・大谷両地区と仁多町内の阿井・三成・三沢の3地区と木次町内温泉地区の範囲であったが、この頃は狭くなって三成・三沢・温泉の3地区を範囲とする郷であった。

ロチ退治の伝説の地となっていたこの地を詩に詠じこんだと思われる。奥地故　淇澳庵も狭く農家の納屋の一隅で休んだとみえる。文は極めて抽象的な仏語がならべてあって難解であるが、住民の純朴にして教化の益あるところとある。恐らく湯村温泉の近くの寺庵であったであろう。ほかには奥出雲に関する詩文はない。

すると天淵記に記する伝説の話は100年前すでに定着していたことになる。

（横田史談会　高橋一郎）

斐の上川柳二月抄

今日もまた予定狂わす炬燵番　高木白虹
気前よく九十億ドルだれの銭　若槻白馬
着ぶくれて吹雪の日でもお茶のみに　渡部ミツコ
やわらかな日差しへ春の色がある　真綿よし子
月を待ち妻をたよりに門に佇つ　松浦木公子
言いわけをしなくてよかったいいねむり　杠京子
針持つ手にぶくなったがまだ出来る　安部春恵
湾岸の地図を憶えること悲し　藤原玉呂
湾岸の話も少しお茶の会　児玉哲代
暗算で事済む夫婦の貸しと借り　松田牛千代
身勝手な言い訳をしてすっぽかし　松浦亜歩子
気が乗らぬ手持ちぶさたの老の冬　安部正以子
逃げ道を少しは開けて児を叱り　藤原のぼる
敷中ちらかし暮らす老一人　松田樹子
座敷には鯛より鰯を買って来る　横浦久寿子
体に着ぶくれさせる母の知恵　佐佐木まこと
湾岸のニュース世界を吸いよせる　石山千代
雪降れば孫ははしゃぎ老ちぢむ　佐原悠冬
省エネに着ぶくれさせる母の知恵　森子明世
ふと忘れふと思い出すお年頃

淇澳庵は今日の寺院のどこにあたるか、明らかにするすべがない。先の詩と関連して考えると祖応が京都から帰って出雲に閑居中、教化行脚のためこの奥出雲に遊行し、三沢郷に来たことは明らかにできる。詩からみると湯村温泉にひたり、当時オ

（4頁下段より）

った。その次の年は充分に固めて置いてと言っているうちに、露風は交通禍にあい没してしまった。「自分が露風氏より先に芸術院にいるのはおかしい」という西條の友情の深さに、宙之介は学ぶべきことだと思った。

第9回横田たたら勉強会　報告

1991年2月1日に開かれ、北は盛岡市から四国・九州まで100余名の一流の研究者が出席され、全国の近世企業たたらの調査の発表を基調に、東北・関東・中部・近畿・四国・九州・中国地方の実態の発表があり、近世に於ける先進地・中国地方から、どのように技術が伝播したかという、当日の研究主題も、学会では始めての取組みで、明らかになる糸口が出来た。今後の協力によって、さらに調査を完成したいという要望が多く、さらにいろいろの資料も頂いた。協力者に増えて来たのがうれしい。

町内の方も多数参加され、町民会議でも今後の拡充に協力したい。来年も経続したいと、意欲をもって頂けたことは、これまたうれしいことである。

奥出雲が生んだ日本の詩人

安部宙之介

—「ある自伝」より ⑧

安部宙之介と交友の深かった人々に触れてみる。

河井酔茗

詩人クラブの大先輩である酔茗を宙之介が訪れたのは、1942（昭和17）年で上京して3年目の38才の春であった。晩年は口語自由詩を主とし、死に至るまで詩作を続け、芸術院会員となった。

詩人クラブでは酔茗の詩碑を建てる話が出て、その場所を選ぶに苦労した。或る時場所がなければ、僕の家の前庭はどうか、そうすればこゝが名所のようになって、いろいろの人がやってくるよと笑って言われて、碑文は「老境」にしてはどうだろうと朗吟された。それは

老境一　酔茗八十六歳書

柴門を守るは
吾家の月
竹窓に吹くは
隣家の風

家境二

吾おいぬれど
老仙に入らず

茶烟軽く
紅塵の裏に住む

であった。詩碑は昭和36年5月7日、昭和女子大構内に、「新体詩祖」の碑とともに建ち除幕された。そして

空には新しき光
人には新しい言葉あれ

の言葉も刻まれた。

三木露風

夕焼け、小焼けの
赤とんぼ
負われて見たのは
いつの日か

山の畑の
桑の実を
小籠に　つんだは
まぼろしか

（三、四節略）

の、あまりにも著名な「赤とんぼ」の作詩者が露風である。宙之介と露風との出合いはすでに述べた。

宙之介はある時、ある雑誌の編集者に逢った時、三木露風は不遇な待遇を受けているから、もっと公平に取扱ってほしいと話したところ、それではお前が書けと言われたので、友人と昭和36年1月から創刊した雑誌『詩帖』に書きはじめた。河井酔茗・正富汪洋・有本芳水その多くの人から、折にふれて露風の近くでタクシーに跳ねられ、29日意識を失ったまゝこの世を去った。この間宙之介は看病に尽した。告別式は一月に入って井の頭公園入口のカトリック教会で盛大に営まれた。この死を中心に宙之介は「続三木露風研究」を刊行した。

三月句会抄

鴨帰る今年も一戸減る噂　浅野　としお
埃帯ぶ蟄居の我と葉牡丹と　岡田　蹊花
冬日射し喪庭に故人を偲ぶ声　小川　月舟
吹雪止めども砂漠の嵐はまだ止まず　恩田　和美
くもの巣の破れを揺らす隙間風　門脇　花子
ささやかな幸を刻みて根深汁　加納　信子
意のままに愛呼ぶ恋や猫の春　楠　房子
雪雫く碑文字を探り読み下ろす　高木　白虹
冬のバラ心うらはらに色冴えて　中沢　美紀子
お経聞く御堂の冷えの隙間風　新出谷　一華
着ぶくれて手抜きの家事や齢積む　錦織　富江
夜しずか窓にわびしき迷い雪　峯石　美代子
雪催い登校の吾子を急かす声　渡部　夕峰

思い出も語ってもらい連載した。

西条八十

それがのち『三木露風研究』として上梓した。今日露風の研究書としては最も権威あるものとなった。

この間宙之介は度々露風を訪ねたが、著作の上では独力で調査をし、直接たずねたことはなかった。昭和39年12月21日自宅

浪漫的幼想と甘美な感傷とが微妙にとけあった詩風で、多くの人に愛された詩人である。東京音頭などの民謡や、童謡にも秀作が多い。中山晋平・山田耕作らの作曲を得て愛唱されている。

唄を忘れた金糸雀は
後の山に棄てましょか。
いえいえそれはなりませぬ。
で始まる「かなりや」

誰が風を見たでせう、
僕もあなたも見やしない。
けれど木の葉を顫はせて、
風は通りぬけてゆく。

の「風」などがある。

西条八十は日本詩人クラブの初代会長であった。昭和45年に没した2年後に、宙之介は会長となった。

昭和41年宙之介が出した詩集の出版祝賀会には西条も出席して祝辞を述べた。

西条は露風の境遇に案じつづけていた。露風を芸術院会員に推挙したいが、露風に受ける気持があるかどうか、打診してほしいと宙之介は頼まれた。このことを伝えると、「健康上の理由から、一切会合にも会員にもならない」と簡単に断って、別室に去った。宙之介は奥さんを通じ詳しく説明をしたところ、「よろしくたのむ」といわれた。

その年は推挽期日が過ぎていたが、翌年改めて西条が推挙したが、僅かの票数不足で駄目だ

（3頁下段へ）

会員頒布一部百五十五円／六九九一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0—601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

街の活性化に必要なのは、住んで、働く人が、現在の町を正しく評価しているかどうかが根本である。

奥出雲

題字 糸原風亭書

第 192 号
（4 月 号）
1991 4. 6
（M124・T79・S66）
奥出雲編集集団©

朝鮮半島と奥出雲①

朝鮮通信使（上）

―全く教えられなかった歴史―

敗戦後しばらくまで、教育を受けた者は、朝鮮半島との交流の歴史と言えば、古代に於ては、半島南端の任那（にまな）に日本府があった。百済を経て中国から仏教や学問が、新羅からもいろいろな技術者が、渡来人として日本に来て技術を伝えた。中世では13世紀後期に元が来襲した時、百済が水先案内をした。16世紀末には、豊臣秀吉が2度にわたって朝鮮に出兵した。近世に入って江戸幕府時代は、鎖国政策をとり、外国との交流は、長崎の出島で、オランダ人を通して通商が行われたのみであった。明治時代になると韓国は日本に併合されたことなどであった。

ところが今日では、任那の日本府の存在は否定されており、古代に於いて朝鮮文化がわが国の文化に与えた影響も、極めて広く深いことも明らかになって来ている。また交流がなかったとされている江戸時代も、正式な国交があったことが明らかになって来た。それを当地方とのかゝわりを含めて、一側面から紹介する。

朝鮮通信使

1985（昭和60）年秋、東京上野の国立博物館で開かれていた、特別展「日本の陶磁」を一日かけて魅せられて見学して外に出ると、別棟に「特別展観―朝鮮通信使」の立看板が眼に入った。―世紀200年の日韓文化交流―の文字も眼に焼きついた。

簡単に見る程度であるだろうと、閉館30分前に入って見て驚いた。これはゆっくり見なければと日をかえて見ることになった。

本号の年表

文禄・慶長の秀吉の朝鮮出兵

1592年（文禄元）秀吉は約16万の兵力を9軍に編成し朝鮮に渡海させる。毛利輝元軍は半島東部の慶尚道を北上す。かって藤ケ瀬城主であった三沢氏もこれに加わる。

また毛利の家臣で亀嵩城に入っていた。冷泉民部も参加し討死した。その墓は亀嵩にある。稲田の安部源太左エ門も参加したという。

1598年（慶長3）秀吉の死により撤兵をし終る。

敗戦後いろいろと教えられなかった歴史を、次々と知ったが、このことについても若干の知識は得ていたが、これを楔機に読みあさり、いろいろとわかった。

江戸時代の鎖国下の日本にとって、朝鮮国は正式な国交のあった国であり、中国・オランダのような貿易通商を主とした国に比べて、より密接な友好関係にあったことである。

朝鮮通信使とは、最初は名称も違っていたが、将軍の代替りや世子の誕生などのおりに、朝鮮国王の親書を持って来訪した、信（よしみ）を通じるための使節団であった。しかも全員で300名から500余名にも及び、そのうちには学者・画家・文化人も含まれている。当時の閉ざされた日本にとって、大陸の文化や文物を伝えてくれる大動脈の役割を果していたのである。

研究史

研究論文は150を超える数に及んでいる。1910年代に3、1920年代に28、1930年代に13ある。多い1920年代のものも、部分的なことをとりあげた論文であって、朝鮮に於て発表されたものばかりである。敗戦（1945）後も、1960年代に数が増え、1970年代に44、1980年代に36と、研究の深いものが続々と発表されている。当県でも1981年に、雲石両藩と朝鮮通信使に関する論文が発表された。そこには当地方とのかゝわりが紹介されているが、それは郡内にある古文書の写しにもとづく研究である。

通信使の沿革

通信使の初めは、朝鮮国王が日本の足利・豊臣・徳川の武家政権の首領に対して派遣した公式の外交使節であった。

1392（明徳3）年―明徳の乱が終って、将軍義満の地位が固まったころ―に建国した朝鮮王朝では、3代太宗が1403（応永10）年に、明国の永楽帝から朝鮮国王に封ぜられた。その翌年には日本でも足利義満が永楽帝から日本国王に封ぜられた。日本も朝鮮もともに中国明を宗主国（盟主）と仰ぐ藩属国になった。朝鮮は大国である中国に臣下として仕えるとともに、隣国の首領としての日本国王とは、対等の外交関係を保持しようとした。

この際、律令制の頂点にあった天皇は、交隣の対象ではなかった。

室町時代には「通信使」の名称で7回計画された。第1回は1413年で計画だけ、第2回は1428年将軍足利義持の死と足利義教の襲職の慶弔を目的としたもの、第3回は1439年修好を目的としたもの、第4回は1443年に義教の死と足利義勝の継承の慶弔を目的としたもの、第5回は1459年で、これは海上で遭難して行方不明、第6回は1475（文明7）年であったが出発前に中止、第7回は1479（文明11）年であったが、対馬まで来て中止となった。以上15世紀における7回の通信使のうち、京都まで達して使命を果したのは、2・3・4の3回であった。

その後16世紀も終りに近い1590（天正18）年に復活した。豊臣秀吉から朝鮮国王の入朝を勧告するように命じられた対馬の宗氏が、間に入って苦心し通信使派遣が実現し、京都の聚落第で秀吉と会見した。その後文禄の役の講和交渉の時、1596（慶長元）年にも実現した。

徳川政権時代の通信使

（年代）	（総員）	（使命）
1607 慶長12	467	修好
1617 元和3	428	大坂平定祝賀
1624 寛永元	300	家光襲職祝賀
1636 仝13	475	泰平祝賀
1643 仝20	462	家綱誕生祝賀
1655 明暦元	488	家綱襲職祝賀
1682 天和2	475	綱吉仝
1711 正徳元	500	家宣仝
1714 享保4	475	吉宗仝
1748 寛延元	475	家重仝
1764 明和元	472	家治仝
1811 文化8	336	家斉仝

豊臣政権が命運を賭けた朝鮮出兵は1598（慶長3）に終り、対馬の宗氏は直ちに修好回復の折衝を始めた。6年たってようやく朝鮮は使いを対馬に派遣したので、宗氏は両使をともなって上京し、伏見で徳川家康・秀忠父子と会見した。徳川氏は朝鮮出兵の時には、一兵も参加しなかったことを告げて、修好回復を伝えた。

2年たった1606年、二つの条件（家康からさきに国書を朝鮮に送ること、先の戦争で朝鮮の先王の陵を荒した犯人を捕えて送る）が満されれば、「相報の道」は開かれると回答して来た。

これに対し、対馬では修好の回復を熱望するあまり、家康の国書を偽作し、対馬島内の罪人を犯人に仕立てゝ朝鮮に送った。

朝鮮側ではこの工作を熟知しながらも、当時の国際間の動向にかんがみて使節派遣を決し、表にあるように、1607年に467人の大使節団を日本に送りこんだ。日本からの国書に対する朝鮮国王の回答と、戦争のとき日本軍に掠奪された朝鮮被虜人の送還が主目的にうたわれた。一行は江戸で将軍秀忠に謁見し進物を献じ、帰途は駿府（静岡）で家康と会見した。半年に及ぶ滞在であった。事態は表面では平穏に進行していたが、朝鮮国王の文書は、対馬で偽作した家康の国書に対する返事であるので、宗氏はそのまゝ幕府に提出させるわけにはゆかず、こんどは朝鮮国の文書を改作して表面を糊塗した。

1609（慶弔14）年、宗氏は宿願の修好回復を達成した。己酉条約という。往来の港は釜山一港だけで、こゝに倭館（やまと）が設置され、対馬から役人が出張し、日本からの渡航者はすべてこゝで応接された。唯一の日本人海外居留地であり、朝鮮貿易の基地であって、明治維新まで続いた。

家康は朝鮮に対して通信使派遣を要求した。大坂の陣後、家康は朝鮮にかわって、豊臣氏を討ったという論理で、大坂平定の慶賀を求めた。朝鮮では家康の方から先に国書を送るならばと言って来た。ところが家康が死んだので翌1617（元和3）年、対馬の使者が秀忠の国書をもたらした。この文書も対馬で偽作したものであった。こうして第2回の通信が来朝した。428人からの大使節団の費用はすべて日本持ちで、沿道の諸大名にも盛んな歓迎陣を張らせた。こうして徳川政権にとって朝鮮は正式な外交関係のあった唯一の国家であった。

朝鮮の通信使派遣の目的は、ほとんど将軍襲職の祝賀であったが、日本国内事情の探索や、日本の各層との親善交流もその任務の一つで、学者・画家・文化人も来ていて、これらが残した功績も多い。

朝鮮側は日本の接待に対いし将軍や老中等、さらに宗氏以下の通詞（通訳）に対してまでも、人参・どんす・苧布・麻布・綿布・虎皮・豹皮・筆・墨・硯等々を持参した。

使節団の行程

ソウルを発して二か月かけて釜山に到着する。こゝには対馬が出向して迎えた。船は6隻でそれぞれに分乗し、各船には日本人が護衛の目的で乗りこんだ。

途中対馬の府中に寄り20日間前後滞在し、瀬戸内海を通過し、大阪まで一か月以上要して到着した。途中の諸大名は警護や迎接を勤めた。長州藩毛利氏のある時は、客館の修築や改造、老中や宗氏への音物、使節団の饗応、往復の音物、下行物資の調達、延9700名に達する藩主民の徴集や補給、1400隻におよぶ船舶徴収等で莫大な出費となった。

大阪から舟をかえて淀川を上り京に入った。出迎えの大名たちは各紋章の入った幔幕を張り、黄金で船上を飾って華美を競ったし、両岸の観象は歓呼の声をあげたという。

これから陸路15～16日を要して江戸に入った。一行の輸送には、馬260頭、人夫2600人が動員され、宿舎の多くは寺院があてられた。琵琶湖岸には朝鮮人街道と呼ばれる風光明媚な街道もあった。大井川は1400人をこえる人夫によって渡った。

休息地や宿泊地の接待饗応には、四国や奥州の諸大名にも負担が課せられて、沿道の大名に協力した。京都や江戸の饗応では、珍品の「あるへいとう」や「かすていら」も供せられた。

雲州藩にも少なからぬ賦課がかゝり、奥出雲の村々にも割当てがあった。

次回後は、江戸に於ける通信使、民衆に及ぼした影響、奥出雲の村々の対応等。続いて現代に於ける木次線工事と朝鮮人、そして古代奥出雲と朝鮮をとりあげる予定。

（横田史談会　高橋一郎）

字めぐり⑦

大字下横田（上）

『雲陽誌』巻之五　仁多郡には

新宮権現　速玉男事解男伊非冊三神をまつる。本社拝殿鳥居。慶長三年寛永十二年明暦元禄まで造営修造の棟札あり、祭日九月廿九日、奉幣神楽五穀豊稔諸民和楽を祝延す。

大歳神社　素盞嗚尊勧請年代しれず。

天神宮　菅公をまつる。川西といふ所に社あり。

貴布禰　高霊をまつる。

荒　神　八ケ所

若　宮　倉稲魂をまつる。

宗安寺　禅宗大慈山といふ。本尊十一面観音運慶の作。鎮守妙見勧請詳ならず。

地蔵堂　総龍院といふ。

辻　堂　六ケ所

石地蔵　こみ堂といふ。由来しれず。

大　岩　長さ六間横四間、世俗餓鬼岩といふ。

花立松　老松三株あり、此所より杵築の宮山みゆる。

とある。

『雲陽誌』は、1717（享保2）年松江藩の儒臣・黒沢長尚編によって成立した14冊の書で、内容は出雲国の各10郡の神社・仏寺・山川・池沼・橋梁・名勝・旧跡が記されている。出雲の地誌としては多彩な記述があり、内容的にも信頼性が高いものである。

下横田の地名のはじめ

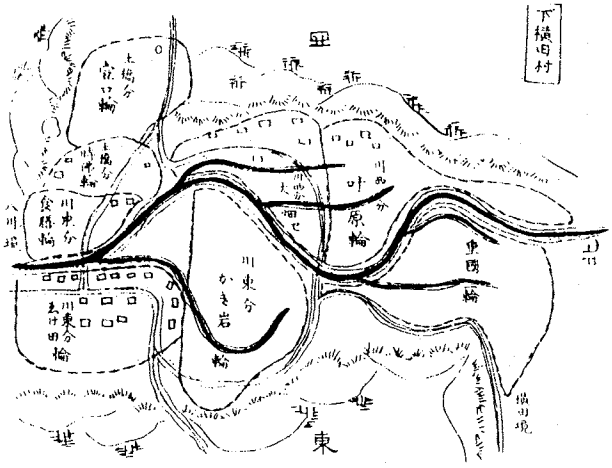
大字下横田は現在、古市・土橋・川西の小字の範囲である。江戸時代の初期には、現在の古市を川東と言っていたようである。別図（江戸末期のもの）でもそうなっている。ところが古市という地名は極めて古く、1522（大永2）年の岩尾寺文書の中に現らわれる。この文書の中で字名がわかるのは、ほかに馬場・原口がある。岩屋寺が焼失し本堂を再建立するために、古市の天神の山から木を切り出したとある。このころの古市が川東のどこの部分を指すのか明らかにできない。その後集落が発達して川東の中心地となって、いつのころからか古市と呼ぶようになったのであろうか。

下横田の地名があらわれるのは、これより古い1516（永正13）年である。このころは、平安時代以来、今日の大字八川・下横田は、旧横田町・鳥上村とともに横田庄と称せられ、京都の石清水八幡宮・京都御所・京都の泉涌寺の荘園（領地）であった。（大谷・雨川・両村は大馬木・小馬木両村・高尾村とともに馬木郷に）

この永正13年2月15日付で三沢為国・為忠の名で、晋叟寺の寺屋敷・山・畑・田を安堵（再確認）する証文が晋叟寺にある。

そこに「下横田道場分の田5反小」とある。

それから17年下った1543（天文12）年には、尼子氏が横田庄を三沢氏に代って荘官として支配することになり、荘内7カ村ー竹崎・大呂・中村・下横田・尾園（別に南方に八川村があったか。今後の研究で）蔵屋・原口ー に代官を派遣し、中村の代官森脇山城守家貞を横田庄の総代官とした。下横田村の代官は大石氏であった。中村は今日の五反田・馬場・樋口・角の配置で、横田庄の中心であった。



それから8年たったころから、横田の今日の町（六日市・大市）が作られはじめた。最初は、下中村と呼ばれていた。こうしたことなどから推定すると、「下横田」の地名は、横田庄内では下流域であることから、生じたものであろう。

尼子氏が衰退し、石見から出雲、伯耆までも毛利氏の所領となった。（ただし雲南と簸川平野一帯をのぞく、出雲地域と伯耆は毛利氏の一族吉川氏領で、他は直轄領）、そして下横田589石余は毛利氏の家臣祖式源吉が拝領し、横田（範囲不明）は1409石余を杉原将右ヱ門が、亀嵩には冷泉民部が拝領して来住した。

やがて江戸時代となると、（慶安元）年の検地帳では、竹崎・福頼・大呂・五反田・馬場・樋野口・角・横田町・横田村・原口・細田・加食・大曲・下横田の諸村町の名が見える。（尾園村はこの時はあったとみられるが検地帳は残存しない）

この時下横田村には、

田畑63町余　村高791石余

百姓155人

があり、検地帳は、川東・川西・土橋・町出作と別々に作成もされている。町出作とは、横田町村の住人の所有地となっているもの（作人は横田町村の住人で、7割に近い数となっている）である。

1672（寛文12）年には下横田村

斐の上川柳四月抄

人並みに変りばんこに熱を出し　藤原のぼる
税金の申告控除の歳となり　横山まこと
春の雪うわさ通りの靴の跡　田中有樹絵
もどり寒ずっしり重い雪化粧　真綿よし子
風ひきと勝手にきめて薬飲み　児玉哲呂
お帰りのその一言の家平和　若槻白馬
お互いに語り尽くせぬ別れの日　中林もりえ
頬ゆるむ孫からチョコの贈りもの　藤原千代子
寒もどり花も凍てつき〇下五度　安部春恵
春一番その気にさせて寒波来る　渡部ミツコ
老いひとつ加えた妻の耳に距離　高木白虹
春そこえ寒の戻りが大き過ぎ　安部正子
大雪をよいことに皆はや終い　森山悠子
冴えた夜蛇口ゆるめて床に入る　佐佐木千世
本気かと聞けばホステス酒をつぐ　松田牛歩
人柄にひかれて七十顔で行く　杠京子
カラオケが鼾に変る旅の宿　石原冬明

三月句会抄

自在鉤冬日とらえし煤の艶　浅野としお
軒下へ雀追い込む春吹雪　岡田蹊花
春の闇ベッドの我身あつかえず　小川月舟
冴えてゆく夜を怖るる手術痕　恩田和美
コハク鳥寒波に北帰戸惑いぬ　門脇花子
古着物ほどく糸屑日脚伸ぶ　加納信子
雪どけの水満ち川州の巾となり　楠房子
かずら橋春の微風に揺れて見る　高木白虹
谷川のよどみに椿もつれあい　中澤美紀子
薬袋の一つか減りて春はそこ　新出谷一華
春灯に広げし写真なつかしく　峯石美代子
待つことに慣れし通院春の雪　錦織富江
もどり寒部屋凍て鉢も凍てにけり　渡部夕峰

から土橋村が独立しているが、1717（享保2）年には、下横田村に含まれ、八川村が尾園村・二宮村・金川村・三井野を含める村名として範囲が明瞭となる。

「雲陽大数録」（1751～1763の宝暦年間の記録）では、下横田村は

石高　750石　（八川村は540石）

「天保郷帳」（1834天保5年）によると、

石高　961石余（八川村は908石余）

となる。それ以後の記録は明らかにできないが、

明治4年の「皇国地誌」では

田　86町余（102）畑　14町余
山林410町余
戸数122戸（226）人口　612人（1053）
牛　68頭（266）馬　80頭（134）

である。（右（　）内は八川村分）

明治22年（1887）には

戸数　138戸　人口　671人

であって、この年、八川村・大谷村（明治8年に雨川村と合併）とともに合併し八川村となる。

戸数　207戸　人口　2011人

であった。

秘話

1884（明治8）年、明治新政府の下で第1次の町村合併が行われた。明治17年ごろ、当時の下横田村戸長武藤六郎兵ヱより、こゝを横田村町と一緒にという申入れがあったという。田畑の地主や作人が多いことなどが理由であったという。ところが時の横田町村目代であった中沢治兵ヱ（別に紹介予定）は、雨川が洪水の度に被害をうけることが多いのを警戒して、合併を拒否したという話もある。（雨川の水害については次回に）

室原川は三国山に発して横田川に注ぐ川であるが、途中、鳥越・室瀧・丸淵・小八川・金川・叶谷・宮谷の七川を合して北流している。これが八川村名の起った由来であるが、明治21年の届出では室原川に因んで、室原村としていたが、翌年の町村制の施行にあたっては、郡役所に於て八川村と決定公布したと言う。

まんさくの花　簸の上短歌会

健やかに七十路の春の味噌作り栗の木桶の重きを洗ふ　永井弥生
縹渺たる砂漠に捕虜の列長くこの日イラクの敗戦を知る　仝人
雪解けの霞める山にさきがけて灯すがに咲くまんさくの花　野村節子
春の光あふるる朝を起きぬけに孫高専に受かりしを聞く　仝人
子づれなる母牛枠場に繋がるるも人の動きを絶えず眼に追ふ　佐藤喜代子
夕つ方降りたる雪を葉にのせて庭木々淡く宵闇に浮く　仝人
雪やみて陽のやさしさに梅の咲く庭に立ちたり日に幾たびか　常盤はるまさ
思ひ出の伊良湖岬に友と佇ち沈む夕日を見つつ遥けし　岡田時子
若き日は模範兵士と言ふ老爺「戦友」の歌に咽び聞きをり（特別養護老人ホームにて）　松浦愛子
亡妻と来し平戸の島の想ひ出を心に秘めてマリア聖堂仰ぐ　安部夕波

会員頒布一部百五十五円／六九九一八　島根県仁多郡横田町一〇六二ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0－601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 193 号
（5 月号）
1991 5. 4
（M124・T79・S66）
奥出雲編集集団©

学校へ行くと子供がいる　街で子供を見かけることがない

朝鮮半島と奥出雲②

朝鮮通信使（中）

―江戸時代は鎖国ではなかった―

江戸における通信使

通信使一行が江戸に着くと、市中の道筋で武家屋敷は大門を開き、金屏風を立て鍛子・紫絹の幕を張り、弓や鉄砲を飾りたて、番人は麻上下を着け、町々も華やかな幕で飾って見物させた。

品川からは幕府から警固の武士が楽隊をつけて出迎え、宿所に先導し使者（つねに3人）を輿に乗せてかついだ。翌日には幕府の上使が訪れると楽を奏して迎え、対島の宗氏が間に入って将軍の意向を伝える諸儀式を終えて、こんどは朝鮮の音楽を吹奏して上使を送る。次に通信使が江戸城へ行列を整えて楽隊の奏楽で入城する。

数々の手順を経て松の間に諸大名が衣冠を正して列席する中へ使は入る。献上物は大広間に馬は庭に引き入れ、国書は将軍に渡され、酒盃をうけてのち、将軍列席で饗宴が行われ退出する。

城内では能・狂言・式三番・高砂その他邦楽・邦技が演ぜられることもあった。将軍からは、朝鮮国王に鎧・大刀・屏風その他が贈られた。刀剣・絵画はすべて当代の名匠の手になるもので、「朝鮮御用御屏風」などは狩野家などの手になる華麗なるものであった（特別展観に出品してあった）。

諸行事が終ると帰還の途につくが往路同様に賑やかなもので、往復50～80日かけて釜山を経てソウルに帰り王に復命した。

その他

12回のうち3回は通信使が、日光山（東照宮）に参詣している。幕府は徳川政権の祖廟を外国からの献上品で飾ることは、威信を内外に誇示する有力な手段であるとして重視し、幾多の献上物の要求もしており、それは現在も東照宮に残っている。

朝鮮人の馬術にすぐれたことは早くから日本に知られていたので、通信使は演技者・駿馬を伴って来朝し、射芸に曲馬も加えて将軍に披露した。

8回目の1711（正徳元）年の通信使の広接は、老中新井白石があたった。この時10か条の改革案を出したが、白石とともに木下順庵の木門十哲の一人といわれていた雨森芳洲はこれに対して反対した。昨年韓国大統領が来日し、日本の国会でこの人を称揚したことは記憶に新らしいことである。芳洲は順庵の推薦で宗氏に仕え、対馬の文教と外交を担当し、36才の時釜山に渡り、ハングルを日本文に訳した著書もあり、見識ある外交官であり練達の事務者でもあった。

天皇は王者、将軍は覇者である。将軍が国王と称するは僭称であるとして、白石の将軍は王権も覇権ももつ日本の完全な統治者であるという考えと対立した。この一点が両国の間に立つ外交の第一線の政治家芳洲としては意見を異にした。

幕府が1回に投じた費用は5万両に達したといわれる。

（最後の1811文化8年でみるとこれは52000石で松江藩の支藩の母里・広瀬両藩の石高40000石を越えるもの、松江藩の石高の1/3弱である）

交流

通信使の派遣とその応接は日本と朝鮮を結ぶ最大の政治行事であったが、一面では文化交流の重要な行事でもあった。第1回の林羅山から第2回の古賀精里に至るまで、毎回有名な学者・文人が接触して経史の論議に熱中したし、詩客・文人も奥州・北陸や西国から江戸に集まり、また通過の沿道の人々も、機会をねらって詩文の交換をした。

この間の筆談唱和を集めた書類も百数十巻もある。

江戸・京都・大阪では一般市民も、つ手をさがし旅館で使節団に詩文の贈答を求め雑沓したという。

そこでのちには、使節団員に文才の優れた者を多く選んだ、彼等は帰国後、貴重な日本紀行をものにしほとんど残っているという。また画員も同行し、日本の道中、街や港の描写もした。そして日本人の要請に応じて、描き与えもしたという。

このように一般の武士をはじめ、文人ー墨客・庶民までが大きな関心を集めた。

華麗な行列図などは木版本として庶民の間にも流布し、また民衆との交流の名残りとして各地に、朝鮮風の行列や踊りが今日まで引き継がれている。

通信使を媒介として両国民が相互認識をどのように深め展開させていったかは、今後深めねばならない課題であるという。

「特別展観」は絵画が中心であったが、おびただしい記録・資料とともに、今日の研究対象である。

鎖国とは何であったか

最近の研究によると、この「鎖国」という言葉の生みの親は、日本人ならぬドイツ人のケンペ

朝鮮半島と奥出雲②・太平記の時代と奥出雲①・奥出雲が生んだ日本の詩人⑨・短歌・川柳・俳句

ル（1651～1716）である。今から300年前の元禄年間に、この一人のドイツ人は長崎に上陸し、2年間出島でオランダ商館の医師として勤務した。その間2度、江戸参府を体験し貴重な日本の情報を、ヨーロッパに持帰り、『日本誌』という見聞記を出した。日本についてとらわれない最初の本格的日本論といわれ、西洋の日本論に非常に大きな影響及ぼしたという。

幕末に来日したペリーもこれをもとに日本を観察していた。以来最近では1975年英国のエリザベス女王もこれを読んで来日したという。（先日ソ連大統領は210年前漂流してソ連に流れ着き、10年後にロシア最初の公式遣日使節の船で帰国した船頭、大黒屋光大夫のことを挨拶の中で口にした。詳細な外国見聞記もある）

ケンペルの影響は今日にも日本にある。それが鎖国である。『日本誌』にある付録の部分を蘭学者の志筑忠雄が1801年に訳して、「鎖国論」と名づけたのが起りという。ケンペルはヨーロッパから来てみて、海外渡航の禁止やキリスト教禁令、外国貿易の統制を徳川幕府がとった結果、非常に限定された海外との貿易・通信と書いただけで、徳川幕府には国を外に向って「鎖」（とざす）思想があったとは書いてはいない。朝鮮通信使にもよく表われている。この「鎖国」という訳語をつくった志筑にはロシアの南下に対する危機感があり、これを用いて強調した。

言葉の出現がこの時代に鎖国という意識を知識人の間にひろめていき、他方開国という観念も生んだという。そして日本人は鎖国という状態が実在するように錯覚してしまったのであると、比較社会学者園田英弘は述べている。

言葉の独り歩るきは今日、私どもの廻りに氾濫している。便利なものである。このことは別の機会にも考えてみたい。

御厚意をうけながら収支を保ち続けております。資料は豊富にありますが、だんだん調査に手間がかゝるようになるとともに、体にのしかゝる重みも一入感ずるようになりました。

厚くお礼申上げます。

（編集子）

太平記の時代と奥出雲①

―守護・地頭の系譜―

源　氏

平安時代に始まる皇室経済窮迫の打開策として、皇族に源（みなもと）朝臣（あそん）の姓を与えて臣籍に降した。

はじめは源氏が朝廷で多くの大臣を得ていたが、藤原氏が外戚となって摂政関白の地位を確保すると、これにつぐ有力氏族となって、近世までも続いた。平氏も同じであったが、源氏ほどではなかった。

源氏には諸派があるが、嵯峨・清和・宇多・村上など各天皇の皇子女がこの天皇名を冠して生まれた。

嵯峨源氏は政治志向より風流を好む貴公子傾向であった。武士では源頼光（清和源氏）の四天王の一人渡辺綱がいる。羅生門の話が著名である。

清和源氏が最も著名で、地方に続々と下って分派し、土着して武士の統領として栄えた。

源頼光系では八幡太郎義家・頼朝・義経・木曽義仲、やがて**新田・足利・山名**・畠山・今川・一色・細川の諸家となり、主として関東に地盤を固めた。信濃に移ったのは**信濃源氏**とよばれ、小笠原氏が宗家であった。この流れが、奥出雲の牛尾・**三刀屋・三沢**の諸武士であり、稲田の**安部氏**（土居）もそれである。

清和源氏には、大和・摂津・美濃・三河・甲斐にも流れがあり、**摂津系**の源氏が当地に来たのが、**小池**（現杠氏・表）氏である。

宇多源氏で栄えたのは近江国佐々木荘に土着した。近江源氏の佐々木氏である。出雲の初代守護**佐々木氏**はこの流れである。

佐々木氏は京極家六角家と分れた。京極氏の中から太平記時代の**佐々木高氏**（道誉）ーばさら大名ーが出て、出雲にもかゝわりをもった。

この守護佐々木氏の流れが出雲国内主として平野部に土着し、国人武士として根をはった。尼子氏もこの流れである。奥出雲は清和源氏系であったことは先に述べた。これらはいずれも太平記の時代までに、13世紀に出雲に地盤を築いていた。尼子氏は15世に入ってしばらくしてからである。馬木郷に土着した**馬木氏**は清和源氏の山名氏の末流で、14世紀太平記の時代の終りに、山名氏が出雲の守護となった時代に入って来た。

村上源氏には北畠・久我・岩倉など多数の流れがあり、ほかに花山・正親町の諸源氏があった

特に清和・宇多の両源氏は、国司や荘園の荘官として地方に下り、土着して帰ることなく、武士化し武士団の統領となり、やがて源氏が創設した鎌倉幕府においては、守護大名としてその体制を支え、地方の政治・経済を握って勢力を振った。そして一族はさらに国内の地頭へと進出した。特に承久の乱以後は、東国から西国へと地頭として移り土着し、なかには戦国大名へと成長するものも現われた。

（清和源氏についての詳しい系図などは本誌25号を参照）

悪　党

わるもの及びわるものの集団のことで、平安時代末期から近世に至るまで史料上に散見する。

花になる夢

戦争は花になる夢見るさへも罪のごと暗きわが　永井弥生
青春よ
晩霜になまじ紅の色まして藪椿あざやかに咲き　仝人
出でにけり
遠山も近きもなべて霞みゐて庭石濡らし降る菜　野村節子
種梅雨
進学に胸ふくらませ故郷を離るる孫に風は光れ　仝人
り
いつよりか掛声もちて起居する膝なれど今年も　常盤はるまさ
馬鈴薯植うる
刻置きて寝相変へくれと妻の声夜の静寂の深き　仝人
底より
日記書く手許に白髪ひとすじの落ちてゐたるを　佐藤喜代子
手にもて遊ぶ
庭木々は木肌濡らしてけぶり立ち降るとも見え　仝人
ぬ芽起しの雨
黄金虫青菜の裏にひそみゐて畑の春陽のかすか　景山悦子
動きぬ
八十路坂越へたる母が疾く起きて椎茸笊に背戸　仝人
より帰る
湖は深き眠りにある如く残月あわく西空にあり　松浦愛子
去りやらぬ悔懐に佇めば薄暮の空を鳥翔けゆけ　仝人
り
茶柱の立つさへ今朝はこころうきて足かろやか　岡田時子
に花の土堤ゆく
春の雲流るる空や岡城跡名曲荒城の月ここに生　安部夕波
れし（於　竹田市）

柴栗四月句会抄

花に酔い人に酔うたり髪洗う　浅野としお
髣髴と故人偲ぶや月朧　岡田蹊花
点滴壜かすかな揺れや春の雷　小川月舟
紙雛の倒れしさまはわれに似し　恩田和美
春愁や向う鏡に紅をひき　門脇花子
四月馬鹿老母に安堵のうそ一つ　加納信子
春麗ら二重の輪を描く恋蔦　楠木房子
花に酔い少し素れし女に逢い　高木白虹子
春愁や言いかけて止める胸のうち　中澤美紀子
眼裏に遠き日想う雛の家　新出谷一華
ホームにて汽車待つ足より花の冷え　峯石美代子
風邪引きが風邪ひきを看る春の風邪　錦織富江
畑打つや土に息吹きの生れけり　渡部夕峰

山賊・海賊・強盗・追いはぎ・人殺しなど社会秩序を乱すものに対する呼称である。

特に鎌倉時代中末期ー第2回の元来襲ごろから、畿内およびその周辺地帯で頻々と発生した。2つの類型があって、

①みすぼらしい乞食同然の者——社会情勢の変化に対応しえず没落した者の姿で、超時代的悪党

②立派な兵具をつけた、50騎100騎の集団——情勢の変化をたくみに利用しつゝ、自己の勢力を拡大し、これを抑圧しようとした荘園領主・本所・幕府に反抗した。彼らは社会全般の矛盾の激化により発生したものであるから、山僧・神人・荘官・有力名主など、あらゆる階級の者が含まれている。

基本的には反体制的なものであって、はじめは血縁関係を中心として、家人・所従・下人（使用人）を従えたものであったが、擬制血縁の親子関係も含め、さらに同一利害関係にある、非血縁者をも糾合して地縁的性格を強めるようになって、鎌倉時代末期になると、農民や浮浪民も動員するようになった。

南北朝に入ると、戦乱を乗りこえるため組織を拡大し、あるいは南朝に属し、あるいは武家方（北朝）に加担して合戦に参加するものも現われた。

楠木氏は河内を根域とした悪党と呼ばれる土豪（野武士）のような存在であったとされている。

楠木正成に対する戦前と戦後の評価の変りようは、日本歴史のスーパースターから忘れられた田舎武将に転落した。今日の中年層以下の人は「大忠臣」と思う人も少ないだろうが、さりとて「悪辣な武将」という人もいないだろう。もはや議論の対象にならなくなったという人もいる。

戦後小説や史論にもほとんど登場していない。テレビドラマでも今度がはじめてであろう。大阪府や奈良県の観光パンフレットにもほとんど登場しないし、中学高校の教科書の扱いも、足利尊氏の全国制覇に抵抗したという、あっさりした記述である。

実際楠木正成が歴史の上で武将として活躍したのは、南北朝期の戦乱のごく初期、1331年から36年の5年間であり、戦の主役となったのは、河内での鎌倉幕府との戦いと、敗戦に終って死んだ湊川の戦いである。

名和氏

名和長年以前の系図は作りものとされている。長年の素姓もはっきりしないが、『増鏡』では、卑しい民ながらも、盛んに富み、同族も多く、堅実な者であると書いてある。

増鏡は、大鏡・今鏡・水鏡につぐ、鎌倉時代の歴史物語である。後醍醐天皇が隠岐から京都へ戻るまでが書いてあって、執筆はこれ以後の40年余の間になされたものという。

当地方では、後醍醐天皇や、足利尊氏・新田義貞・楠木正儀の文書、山名氏からのものなどかなりのものが残っている。断片的ではあるが、テレビ放映にあわせて紹介することにする。

仁多町の高田方面は南朝—大覚寺統、横田町の横田庄は、北朝—持明院に属していた。このことについては本誌38号に詳しく説明してあるので参照を願いたい。

（編集子）

前号訂正　4頁4段　雨川×・2ケ所を川西に

奥出雲が生んだ日本の詩人

安部宙之介

―「ある自伝」より⑨

この連載は意外に長くなった。「ある自伝」を読んでいると、宙之介と交流のあった主な詩人は、わが国昭和前期の日本詩壇の黄金時代を築いた人であり、筆者の青春時代に夢を育てゝくれた人であり、詩の作曲されたものはほとんど、自ら歌い、さらに教えたものであったために、心の軌跡をたどる気持で長々と続けてしまった。

多くの詩人たち

佐藤春夫も室生犀星も深い交流があり、国語自由詩の創始者・川路柳虹もいた。

青い小鳥は　どこへゆく
青い小鳥は　とんでゆく。

小鳥のゐない　籠を手に
チルチル　ミチル
どこへゆく。
……

堀口大学・山田耕作（作曲家）・有本芳水もいた。

宙之助は自分が心血注いで出した「三木露風の研究」に続いて、露風全集全三巻の出版を計画した。協力者があったが、大半宙之助の肩にかかっていた。露風が交通事故でなくなり、裁判になった時、それまで三木家の収入を支えていたのは、「赤とんぼ」の歌で、年間100万を越す金額であることを知った。

全集3巻を3年かけて刊行して間もなく、露風の未亡人は、3巻の見本刷の製本したのを撫でて喜びなくなった。

この刊行のため宙之助は全精力をつかった。島根の県立大社高校ー宙之助が青年教師として勤めた学校に、昭和49年6月16日、安部宙之介詩碑が除幕されることになり、帰郷の切符を買求める準備をしているころ、学校（大東文化大学）で授業中突然、脳血栓で倒れたが幸に軽症であった。これより少し前、白鳥省吾が逝った。

その後

1976（昭和51）年、72才の春『安部宙之介詩集』出版。翌年には日本詩人クラブ名誉会員に推挙され、秋には「前会長安部宙之助に感謝する会」が開催された。

「ある自伝」は、宙之助編集の同人誌『文学無限』に執筆されたものである。

（昭和57）年（78才）の六月夫人に先立たれ、翌年8月にさだめ夫人の遺稿集『志のぶ草』を刊行後、晩秋急性肺炎にて死去。79才であった。

詩2編

旅

あの鋸の歯の山並のはずれに
青い海があり、
海のほとりが私達の行くところ
じながら
清澄な海辺の空気のなかで
一つのいのちに溶けあって
大きい粒子と太らう。
そして、地上をころがって
美しい音を立てて
その美しい音楽で
永遠を生きようよ。
長い長い水の棒が
突刺ってしまった。

残る青

枯芒がひとかたまり
かさかさ鳴っている
冷たい風が絶えず揺する
あの綿の穂はどこへ散ったのか
尖る芯が突き刺すのは何か
折れた茎や葉にはもう
あたたかいものは無いと
いうのか
ここまでたどり着いて
誰ひとり見えない
うつむくな
僅か空に残る
あの青を信じるがよい

（高橋一郎）

（完）

斐の上川柳五月抄

花粉症目鼻庇って花に酔い　渡部ミツコ
橋ぢゃないはりまや橋が残す唄　高木白虹
付き合いに出かけ我が身の老を知る　安部正子
庁舎建つ音に消されてボリュームあげ　横山まこと
笑うのも泣くのも同じ時きざむ　松田牛歩
焦っては縫った傷口また開く　藤原のぼる
キス攻めに合って転げる孫の守り　佐佐木千世
悪い時ばかりに予報よくあたる　児玉哲呂
人も花見事盛りは七分咲き　若槻白馬
若返る秘けつないかと本を読む　石原冬明
老いたとてやっぱり嬉しお雛さま　真綿よし子
落着けと無意識の顔笑み浮べ　松浦久寿子
川柳の投句活字で初対面　森山悠子
梅干の好きな友達つれてくる　杠京子
走る列車は
燃えるような青の日を絶えず身
震いしている。
こぼれた水銀の粒ほどの私達の
いのち
私達は、
はてしなく淋しい旅を自らに感

会員頒布一部百五十五円／六九九ー一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0ー601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 194 号
（6 月 号）
1991 6. 1
（M124・T79・S66）
奥出雲編集集団©

太平記の時代と奥出雲②

—足利・新田両氏について—

奥出雲での北朝派と南朝派

これについては、本誌38号の「北朝（持明院統）と南朝（大覚寺院）」で、両派の当地方での対立についてくわしく述べた。

そして横田庄は北朝派即ち武家派であり、北方の三処郷（高田庄ともいう）は南朝派即ち宮廷派であったことも述べた。

40号では14世紀前半における南北朝の対立と奥出雲の動向にふれ、42号では足利幕府の成立から、同じ清和源氏の一門山名氏の抬頭、そして足利・山名両氏の対立と、横田庄問題を発火点とする両氏の激突明徳の乱を述べた。この乱についてはその後も度々触れてあるが、この度は視野を全国的にひろげて、当地を回顧してみることゝした。

北条氏

足利氏が清和源氏の流れであるのと違って、桓武平氏の流れで伊豆国北条（韮山）に土着したのが北条氏である。北条時政が勢力を伸張した時源頼朝を援助し、のちその妻に政子をいれ、て外戚となり、その死後は地位を固めて将軍の執権となり、やがて執権政治が確立した。のち庶子家の分流が多くなり、惣領（得宗）系の地位を確立し、得宗専制へと進んだ。時に8代時宗は、2度にわたる蒙古の来襲を切り抜け難局を処理することができた。

桓武平氏
①時政
政子
②義時
③泰時
⑤時頼
時房
佐竹氏
大仏氏
名越氏
極楽寺氏
赤橋氏
⑯守時
⑮貞顕
金沢氏
登子（高氏の妻 義詮・基氏の母）
⑧時宗
⑨貞時
⑭高時
時行
時輔（異母兄）

その後一門と一般御家人の対立、やがて14代高時の失政、さらに社会矛盾も加わって、遂に北条氏滅亡そして鎌倉幕府に終止符が打たれた。

足利氏と新田氏

清和源氏
多田源氏
頼政
小池（杜）氏
義親
頼朝
義経
八幡太郎
義家
義国
新田
義重
義貞
足利
義康
①
高氏
義光
佐竹氏
武田氏
小笠原氏
安部氏
飯島氏
三沢氏

系図にみるように新田義重が嫡流であった。しかし父義国の所領下野国足利庄を伝承して、足利義康と名乗った弟の方が正統となり、隣接した上野国新田庄を開発して、新田義重と称した兄は庶系となった。

義重は立荘した新田庄を京都の藤原忠雅を領家と仰いだので、忠雅の子義雅の妻が、平清盛の長女であったので、平家全盛時代の新田義重の羽振りはよく、位も高くなった。

1186年頼朝が挙兵すると平家に臣従していた新田義重は、源氏でありながら頼朝を討とうとした。しかし成功せず、のち頼朝に降伏した。赦されたが信頼を得ることができず、鎌倉時代を通じて新田氏が振わなかった主因となった。

新田一族の**山名**・里見両氏は源氏でありながら平家側であることをはじて抜け出し、頼朝の麾下に早くから参じていた。こうして新田一族の団結はすでに崩れていた。

南北朝の内乱にさいして、大館氏ほかの数氏の新田一族は、早くから足利氏に走っていたから、新田氏の足利氏に対する劣勢はますます拡大していた。テレビジョンでの義貞のとり上げ方、その背景に関する描写の仕方も、よくなされている。

一方足利義康は、平家方とは婚姻関係もなく、保元の乱には反対側であったから、平家全盛時代には振わなかったが、源平合戦の初期以来源氏方に加わり、頼朝になっても、早くからその麾下に馳せ参じていたので、頼朝の妻北条政子の妹を、頼朝の声がかりで妻とし、頼朝の義弟となり、さらに鎌倉北条家と縁続きであった。

やがて平家が滅ぶと上総介に任ぜられ、鎌倉御家人中で特別待遇である御門葉にも列せられ、鎌倉幕閣で高い地位を占めることになった。

この時代を通じて足利氏が大族であった主因はこうしたことにあったし、さらに発展していった。本領足利荘のほかに所領は、下野・山城・相模・武蔵・安房・上総・下総・美作・上野・陸奥・越中・丹波・丹後・美

濃・備前・筑前・阿波等々に分布していて、関東の中枢や、東北・北陸・中国地方さらに九州・四国にも及んでいた。とくに東海道の要衝三河国には、吉良・上野・碧海・今川・設楽・額田・矢作・一色等々の荘郷が存在し、有力家臣団がそれぞれに蟠踞していた。そのいずれの上地も歴代の戦功によるものであった。

その上北条氏との姻戚関係があって、鎌倉末期にはほとんど北条一族と思われかねないほどであった。足利氏の当主で北条氏から妻を迎えぬものは二人ほどであった。

こうした足利氏の源氏、北条両氏にまたがる血脈と、各地の所領とそこの有力家臣団は、極めて優勢であり、考えると無気味なものであった。その上に高氏には人物に一つの魅力も加わっていた。

見劣りする新田氏

新田氏は鎌倉幕府の体制を確固にした承久の乱の大合戦をはじめ、頻発した諸合戦にも、全く参加することがなかった。その上新田氏4代政義は、家運挽回のためであったであろうが、京都大番役勤仕のため上洛していた時、幕府の許可も得ず、まず検非遣使判官に任ぜられんことを、直接朝廷に願い出たのである。（かつて源義経は頼朝の許可を得ず、朝官を拝して追放された）幕府禁令中の最高のものであった。

続いてこのことが朝廷の拒絶をうけると、立腹して勝手に仁和寺に入って出家した。自由出家と呼ばれる軍事力減少につながる大犯罪を犯したことになった。さらに上司や六波羅探題に申請することなく、本領に帰ったのである。京都大番役は鎌倉武士の職務である京都朝廷監視であったから、敵前逃亡の罪にあたる。

この三重の罪によって、極刑はまぬがれたが、惣領権剥奪、蟄居となり、4代続いたから、その間に60か郷あった新田荘も北条得宗家の手に移って半数以下となり、義貞の父の代にやっと赦免されたが、義貞が家督を嗣いだ時は、数か郷しかない一土豪にまで零落していた。

のち建武政権に取りたてられたのは、清和源氏一族の全国的な波の中で、新田氏が嫡系であるという血統と、鎌倉攻めの戦功と、足利高氏に対抗する武将がいなかったために、天皇から重用されたと見るのが支配的である。

義貞は『太平記』『難太平記』『梅松論』に見る限りでは、一騎討ちを好む、暴虎馮河の一猛将にすぎなかったとみられるようである。鎌倉の稲村崎で逞兵若干を率いての幕府急襲も極めて危い戦いであったという。そして最後の戦、藤島の合戦も敵は1万、義貞軍は約4万いたのにもかゝわらず、義貞はまたも逞兵50騎とともに敵中へ突っ走しり300騎の敵と遭遇して戦死した。

その翌月、高氏（尊氏）は征夷大将軍に就任し、室町幕府を開いた。

尊氏の人物と評価

『梅松論』にある夢窓疎石の尊氏評には三徳をあげている。（後醍醐天皇の冥福を祈るために尊氏が建てた天竜寺の開山で尊氏も帰依していた人物が夢窓で、評価も信頼性があるとされている。）

○合戦に際して身命を捨てて臨むのに、笑みを含んで恐れる気色はまるでなかった。○慈悲心が厚く人を憎んだり恨んだりすることがほとんどなく、多くの怨敵も許して、わが子に対する如くであった。○心が広く、物惜しみせず、武具、馬をはじめ物を人に分け与えるときは、公平にしかも自らの手で対応した。

このことは『太平記』でもまた『難太平記』でも同様である。武勇で「弓矢の将軍」である一面、心の声は政治家として、決断のためらいをみせる心の柔軟さがあったとしている。

それらはテレビジョンの映像の上でもこれまであらわれているし、ことある毎に見ることが出来ると思われる。

人間くささ

鎌倉時代末から南北朝時代に至る時代の申し子ともいうべき後醍醐天皇は、文字どおり波瀾万丈の生涯であった。

その幼少時代はきわめて不遇であったし、皇位継承問題をめぐる複雑な対立と抗争の渦の中にあったことは、本誌38号にゆずる。祖父亀山上皇から非常に可愛がられ、早く皇位につかせようとして、石清水八幡宮に祈願し、たびたび幕府に要請したが皇位についたのはこの時代では最も遅かった。

『本朝皇胤紹運録』には、皇子17人、皇女15人、その母（后妃）20人を載せている。この多くの皇子を分身として各地に派遣し、寺社勢力を中心に側近政治に向い、朱子学を柱として天皇親政、討幕の理論的根拠として専政の方向を強めて、鎌倉幕府を支えた全国の武士の期待を裏切り失望を与えたことは、大きい損失であった。

高氏の心中には、足利家に伝わる祖先源義家の置文「われ7代目の孫に生まれかわって天下を取るべく」が、7代目の孫で高氏の祖父家時が、自分の生命を縮めて、今から3代のうちに天下をと源氏の氏神八幡大菩薩に祈願して切服したことがあった。

高氏が天皇に背くときも、迷って鎌倉の浄光明寺に籠ったこともある。こうしたことは度々あって、絶対に天皇制否定でもなく尊敬の念は抱いていた。武

士として足利家を興し新らしい時代を、それも京都ではじめたいという念願をもっていた。

高氏には側室も少なく男子も4人という質素淡白な生き方があった。600余の和歌の作品にもそうした情景のものが殆んどであるという。

すでに挙げた同時代の諸書の評価とは別に、高氏は逆臣尊氏とされてしまった。それは『大日本史』頼山陽の『日本外史』の影響もあるが、明治43年の大逆事件を契機として、北朝系の明治天皇が親裁され、政府が決定した南朝正統の立場から、国定教科書が生まれ皇国史観一色となり、敗戦まで続いたからである。勿論その間正しい評価をする学者や著書もあったが。

南北朝から室町時代はわが国の政治体制（戦国大名を含め）土地、身分制から文化・芸能・生産・流通に至るまで、新らしい時代を育てた時代である。その点本誌も、当横田庄がそうした点の記録を多く残しているので、重点を置いて来たつもりである。今まだ、不足した見方を加えて、当地の動きを考えてみることにしたい。（高橋一郎）

朝鮮半島と奥出雲③

朝鮮通信使（下）

—仁多郡内の村々も負担した—

津和野藩は

1607（慶長12）年の第1回朝鮮通信使来朝のため駿府城普請負担に参加したことが、藩主亀井家関係文書にあるが、詳細は不明である。

第4回にあたる1636（寛永13）年の記録に、松平出羽守の名と大森銀山奉行に名の残る鈴木八左衛門の名がみえるが、十分符合するようではない。

浜田藩

第5回の1643（寛永20）年に、藩主松平周防守康映は朝鮮通信使が、将軍の嗣子家綱の誕生を祝って来朝し、日光山に参詣するにあたって、武州の栗橋駅にて饗応をつとめた。将軍家光が賀使の派遣を要請したのに応じ東照宮に国王親筆をはじめ数々の進物を奉献した。正使尹順之は東照宮の神前で朝鮮式祭儀も行ったという。朝鮮の高官の日記には栗橋駅での様子がくわしく書かれているという。この年の公文書の中には、松平出羽守即ち松江藩主直政も役割を分担したことがみえるという。

第6回の1655（明暦元）年からは中央の記録も多数残っている。

この時浜田藩松平康映は、日光の饗応を一人で引受け、通信使への進物も一人で出すなど、その額は莫大であった。

松江藩主松平出羽守直政は、来朝の時名護屋より三島まで、帰路の時三島より大垣までの負担をしている。この時の通信使の総勢は488人で日光参詣は322人であった。

1680（天和2）年の第7回、綱吉の将軍襲職の祝の通信使来朝の時は、浜田藩主は往路、復路とも大磯で役にあたった。この時の三島泊りの饗応は赤穂城主浅野内匠頭長矩があたった。

第8回は新井白石の登場の時であるが、松江藩5代宣稚・浜田藩主松飯康豊・津和野藩主亀井茲親、広瀬藩主松平氏の名もみえ、負担の分担をしている。この時大森代官都築小三郎の名がみえ、人馬割役をつとめている。

1719（享保4）年には浜田・津和野両藩からは、馬の繰出しを行っている。

松江藩

1748（寛延元）年の第10回には次のような記録がある。

松江藩6代藩主宗衍が江戸城に登城した時、多数の朝鮮人が諸大名の前を通ったが、宗衍の前ばかりは平伏して通ったという。あとで尋ねたところ宗衍は将軍と同じく、眼中に天意が備っていたので恐れをなしたと語ったという。それは宗衍が東照宮（家康）の血筋をうけ、母君は京都伏見家の姫君であったから、天意が自然と備ったであろう。

正式な記録では江戸在勤中であり、警備にあたり江戸城での饗応にも列席している。しかし右の記録は「雲南秘事記」の中にみえるもので、真偽の程は明らかでない。

この時浜田・津和野・広瀬の各藩主もそれぞれ負担に応じ、大森銀山代官佐々新十郎は、大坂・淀・大垣・舞坂・浜松・江尻での人馬割御代官を勤めている。

第11回1746（宝暦14）年には、大森銀山代官川崎平右衛門が、瀬戸内海の停泊地鞆での負担、岡崎泊での浜田藩主の接待、広瀬藩主の鞍等馬具の負担を記している。

松江藩の負担と仁多郡の村々

最後の第12回1811（文化8）年の負担になるものを記するものが仁多郡にある。それは『文化十年西七月　朝鮮通信使来聘ニ付御国役金村別割合帳』というもので、仁多郡三沢村永瀬家蔵文書である。これの写影本が県立図書館にあるが、これが県庁地下書庫にある時、町誌編纂のため複写し、横田町図書館文書庫に収蔵してある。

すなわち松江藩郡奉行井上善右衛門より仁多郡下郡宇兵衛（小馬木の富田屋中林）への文書である。その要点は、負担金を石高100石について金1両2朱の割で、さらに金1両を銀66匁に換算して、5か年間毎年7月に納めさせる。と命じている。

その対象は

高田村、郡村、上三所村、下

前号の訂正　2頁1段11行・影響を・全5段4行馬來・氏

斐の上川柳六月抄

腕枕ら疑いながら溶けてゆく　若槻白馬
呆けないで足腰達者で終りたい　松田牛歩
桃、桜ツツジ一度に笑いだし　児玉哲呂
一鍬が三日もたたる不甲斐なさ　田中有樹絵
鯉のぼり子供も鯉も口をあけ　渡部ミツコ
連休は働きばちで通り過ぎ　森山悠子
手伝いに帰り孝行したつもり　安部正子
計画は夢だけお先真暗だ　横山まこと
賑やかな家族客かと客が来る　藤原千代子
人生の旅路の果てにベルの音　高木白虹
反抗期と知っててひかぬお父さん　杜京子
覗きこむようにアラレが窓を打つ　真綿よし子
霜除けにわらを傘にし身を守る　中林もりえ
チャレンジを繰返しつゝ自信つけ　藤原のぼる

五月句会抄

髪の濡れ菖蒲湯の香残しけり　浅野としお
鍬振るう若妻ほどよく日焼けして　岡田蹊花
露天風呂無欲の痩身風薫る　小川月舟
砂遊びふらこ主を失へり　恩田和美
生形見にと配る手毬や母の春　加納信子
蛙鳴く植田にゆらぐ町灯　楠房子
三界の初夏を誘なう道標　高木白虹
全山萌え千本の木に千の彩　中沢美紀子
惜しまれつ六十年を花と逝く　新出谷一華
田植え田の山さかさまに水鏡　錦織富江
田植え終え水見る人の顔和む　峰石美代子
塗り終えし畦に佇ずみ亡父のこと　渡部夕峰

三所村、馬馳村、八代村、佐白村、小原村、湯村、竹崎村、大呂村、樋野口村、横田村、稲田村、原口村、下横田村、八川村、中湯野村、上阿井村、下阿井村、高尾村、小馬木村、大馬木村、大谷村、鞍掛村、鴨倉村、川内村の27村で郡内全村の4割の村々と、ほかに玉雲寺領、若杉大明神々田、大徳庵領、善勝寺領、星野権現十羅刹女祭田、大森大明神神田、大歳大明神々田、稲荷大明神々田とにそれぞれ負担が記されている。

この石高はこれらの村々の本田新田合計17,211石9斗1升5合であるから、100石につき1両2朱とすると賦課は203両余で一か年40両余となる。

寺社領は125石3升1合で、100石につき1両とすると賦課は1両余である。

他に三成村が411匁5分2厘で1か年82匁3分宛賦課されていた。

これを銀にて納めたから、27か村で1か年に銀2666.3匁となる。

寺社領を加えると、2,730.9匁余である。それを米に換算してみると、43石7斗余で109俵余りである。これを5年間上納した。

このようにして幕府の負担は諸大名そして奉行へと負担が命ぜられ、すべて農民の肩にかかったのである。

出雲、石見で通信使来朝12回のうち、8回までもその負担がかかったことが浮んでくる。大船図絵巻、行列絵巻にみる華麗・豪壮な使節団の来朝往復の裏には、苦しかった年貢負担、その他の数々の負担の上に、こうした臨時負担をうけた農民の姿があった。

本稿本号の前半部分は、1981年『山陰史談』第17号の杉原隆の研究論文に負うものである。

生きている臭い　簸の上短歌会

痛恨の君の叫びの聞えくる碑を撫ずるわれに風雨はげしき
（高野山同期の桜の碑前にて）　永井弥生

永年の公職退きてわが許に還れる夫に白髪光れり　野村節子

いねしままの妻の尿とるいくらかは日毎異なる尿の色はも　常盤はるまさ

明日はまた雨となるらし藤の実の弾ける音のしきりにするも　佐藤喜代子

新緑の山畑にきて茶を摘めば郭公の声山鳩の声　岡田田時子

山蔭にぽっかり白き山芍薬かなしきまでに一途な生命　永井弥生

手も足もままならぬ妻の尿をとるそのあたたかきは生きている臭い　常盤はるまさ

あの日のこと心に秘めて語らじと日記にしるす一行の文字　安部夕波

会員頒布一部百五十五円／六九九—一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0—601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 195 号
（7月号）
1991 7. 6
（M124・T79・S66）

奥出雲編集集団©

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

太平記の時代と奥出雲③・路傍に刻む歴史④・短歌・川柳・俳句

太平記の時代と奥出雲③

―山名氏について・太平記時代概観―

山名氏と出雲、とくに横田と

太平記の時代の後半から、次第に群将の中から抬頭し、遂に足利4代将軍義満の前に真向から対立するのは山陰地方を地盤とする山名一族である。そこで当横田庄と極めて深い関係のある山名氏について概略をのべて置きたい。山名氏の横田庄への進出は、岩屋寺・横田八幡宮の記録や中央の記録にも多く、太平記時代Ⅲ期に当地馬木郷に下った馬来氏はその一族であり、

戦国末期まで隠然たる力を保持したのである。今まで幾度となく触れたことであるが、角度を変えて述べてみたい。

発祥の地は上野国（群馬県）多胡（今は多野）郡の山名村で、下の系図の如く清和源氏新田氏族である。

家紋は種々変転して、桐系・笹系・引両系の三種が本・支流で用いられているという。当地方の山名氏は引両系の紋を用いている。これにも三種あって、新田氏本流は一つ引両である。「二つ引き」は足利将軍家の紋で、新田氏滅亡後山名氏は足利一族といっていたからであるという。三つ引きは本宗と区別するために多くしたものか。出雲守護の山名満幸は、横田庄に発した、足利と山名の対立の頂点「明徳の乱」には、三つ引きの紋を旗印にしている。山名一族の当地馬木郷の馬来氏は、二つ引きの紋であった。

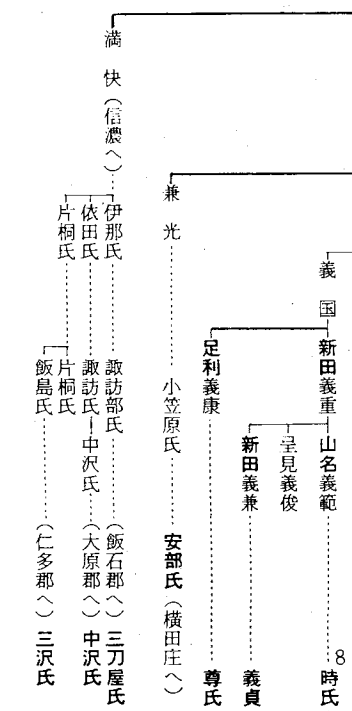
山名氏は同族の新田・足利・里見の各氏と比べて、大平記時代の前期鎌倉時代にはそれほど勢力を伸ばしていない。山名郷で百姓侍としての苦しさの中で、地力を貯えたようである。そして8代時氏によって、有力守護大名に成長する基盤ができた。

二つ引き

はじめは新田義貞に父政氏とも従い、のち新田一族内の義貞離れが相つぎ、尊氏麾下へと走ったものが多かったころ、山名氏もそれと行動をともにし、中先代の乱（後述）の箱根竹の下合戦では尊氏が勝利をおさめる殊勲者は政氏・時氏父子であった。その後功を重ね1338年伯耆守護に山名氏ではじめて補任され、伯耆に上野から本拠を移した。ついであとで述べる、建武政権成立時の功労者の一人であった出雲・隠岐守護（後醍醐天皇船上山へ脱出後に、これに味方した）塩冶高貞誅伐事件にあたって、これを追討したのが、時氏・師義父子であった。そして出雲と隠岐の守護を与えられ、丹後守護にも補任された。しかし理由は不明であるが、3年ほどで終り、1343年ばさら大名佐々木高氏（道誉）に、出雲守護は譲っている。そのかわり丹波守護に任じられた。

その後、足利尊氏、直義兄弟の対立と攻防は深刻化してゆき、政情はきわめて複雑となった。尊氏の嫡子義詮（母は正室の登子）と、直義の猶子となった尊氏の庶子直冬（テレビジョン太平記では、母は藤夜叉、実は不明）をめぐる争いもからんでいった。それは1349～1352まで3年間の観応の擾乱となり、直義の毒殺で終ったが、武家方の内紛は1363年まで14年間続き、天下は尊氏党・直冬党・南朝党の三つ巴の複雑な争乱の時代であった。

このころの関係文書も当地に多い。惣領が判断を誤まると、直ちに氏の衰退につながったが、山名時氏・師義は成功し、出雲守護職を再度得たが間もなく佐々木氏へ。やがてまた山名師義の手に返へった。このころになると、山名一族は丹波・丹後・但馬・因幡・紀伊・和泉・美作・備後・伯耆・隠岐・出雲（満



諸先人の墨跡・絵・著書等の目録作成に入っています　ご協力下さい。

幸が守護）と11カ国を占め、66カ国の1/6を占め、山名六分一殿と呼ばれ、将軍と対峙し、遂に明徳の乱へと突入する。

70年後に国内諸大名を二分して10数年間続き、京都を焼野原と化した、応仁の大乱の西軍の総師山名宗全（持豊）は、この山名氏の総領であった。

太平記の時代の概観

—次頁の年表を参照して—

この時代は一口に言って、14世紀即ち南北朝の公家と武家の90年に及ぶ動乱の時代であった。

—年号に北は北朝年元—

I期　1324正中元～1336延元元

京都公家の代表後醍醐天皇の鎌倉幕府討滅の計画が、正中の乱・元弘の乱を経て実を結び、1334（建武元）年公家一統の建武政権を樹立したのにはじまる。公家（天皇・公卿）の実力が武家を圧倒した結果でもなかった。公家が武家（北条氏一統）よりも一般から歓迎されたものでもなかった。

そこで間もなく高氏（尊氏）の建武の乱によって、僅か2年余の寿命で建武の天皇政権は崩壊した。すると公家に対する武家の反撃はとみに攻勢に転じ、尊氏は1336（建武3）8月持明院統の光明天皇を京都に擁し、（北朝）、北条氏の『貞永式目』（御成敗式目ともいう。51条からなり御家人統制のための源頼朝以来の慣習や判例を成文化し、裁判の法的基準を定めたもの。所領に関するものが多く、必要に応じて追加補足した）に加えて、『建武式目』（室町幕府の政治方針要綱。数人の僧ほか8人の答申によった、全17条のもので、幕府の居所と政道の事の2つの内容からなる）を制定し、て室町幕府を創設した。しばらくして横田庄の仙洞御所領（北朝系）の代官として安部氏が下って来た。

第II期　1336～1349貞和5・正平4

この年の12月、大覚寺統の後醍醐天皇は京都を脱出して吉野へ移り南朝を樹立し、南北両朝の出現となり南軍（吉野・後醍醐天皇方）と北軍（京都・尊氏）との激戦が続くことになる（全国的におよそ60年間、各地で繰り拡げられる）。

南北両軍の総師である天皇と尊氏の手も当地に及んで対立を生ずるが、当庄は武家の手中にあった。守護は北朝方の山名氏や佐々木道誉であって、伯耆を本拠とする山名氏が隣国から巧みに当庄は抑さえていた。やがて後醍醐天皇の死とともに、各地方はもとより、中央に於ても南朝勢力は吉野に逼塞する。

第III期　1358～1358延文3・正平13

1349貞和5（南・正平4）年から大きい表舞台となった北朝を擁する、北軍足利政権内部は、熾烈な権力斗争を繰り拡げることになった。

尊氏方の高師直（こうのもろなお）らの急進派と、尊氏の弟直義（ただ）ら現状維持派の争いは、尊氏・直義兄弟を二分極化して対立し、観応の擾乱（1350観応元年）となる。北軍の師直兄弟が討たれ、直義が毒殺された間を縫って、南軍南朝の正平の京都回復があったが、実らず仇花に終った。

時代はさらに泥沼化し、幕府尊氏方と足利直冬（尊氏の庶子で、弟直義の養子）方、南朝南軍方の三者鼎立の状況となり、有力守護大名は三方に分かれて対立、抗争に拍車がかかった。各氏毎の惣領の情勢判断と決断は、それぞれの氏族の行方の明暗を分けて行くことになった。尊氏の死後、その子義詮（第3子で正室登子の子）が2代将軍になったが、9年後に若くして世を去った。

この期に於ける、当横田庄の記録は（ほとんど北朝系）当地ならびに中央にも少なくない。

この期までが『太平記』に記述されている時代であって、これまでの南北朝56年の動乱に続く、『太平記』以後の動乱は、さらに約30年続くのであるが、これが次の時期であり、しかも横田庄が舞台の中心に一時登場する時代である。

第IV期　1359～

翌1359年足利3代将軍義満の登場、そして山名一族の抬頭と将軍との対立、さらに出雲守護山名満幸の横田庄に於ける荘園の横領は、遂に明徳の乱を引き起し、将軍対山名一族と対決となる。この間の記録は『明徳記』をはじめ中央や当地の文書に多く残っている。当地の文書はほとんど北朝年号のものである。

山名一族の団結は崩れ、足利氏の基盤の安定は室町幕府の充実へと向った。権威確立への義満の努力は、1992明徳3年閏10月南朝の後亀山天皇（大覚寺統）が吉野山を下り、北朝（持明院統）後小松天皇に神器を移すことになった。南北両朝の合体である（約束ではその後も両統交替であったが、足利氏はそれをすゝめず、そのまゝ持明院の皇位が続き今に至る）。

若き義満は一つの時代を創始することになり、対明貿易は「日本国王」へとすゝみ、その利益によって室町文化は各方面に花を咲かせ、平安時代の王朝貴族文化にかわった、鎌倉時代の武家の未熟な文化の停滞を打ち破って、新らしい室町の武家文化を築き、日本文化史上画期的な時代となった。それは近世、近代文化の基礎となりその余光は大きい。

大げさに言えば、横田庄に端を発した明徳の乱が、勝ちを制した足利氏によって室町文化を築いたとも言える。その後後小松天皇は横田庄の一部をさいて皇室の菩提所泉涌寺に寄進し、横田庄はその後200年、石清水八幡宮領とともに三領家の荘園として奥出雲の中心となり、三沢氏はその代官として、出雲の重鎮として戦国を生きぬくのである。

地方紙（山陰中央）の連載小説「虹の刺客」は　東北仙台藩主伊達家騒動をえがいている

世紀	西暦	年号	太平記の時代①～㊲	南朝	北朝	将軍	出雲の守護大名	横田庄	三沢氏ほか
13								初 代官小池氏来住	
	1300			後醍醐			佐々木氏	石清水帳宮領	三沢氏　三沢郷地頭
	32	元弘 3	Ⅰ 鎌倉幕府亡ぶ		光厳		塩冶氏	内裏御料所に分ける	
	38		Ⅱ 足利幕府成立	後村上	光明	尊氏（34才）	山名氏（伯耆も）	代官安部氏来住	（当地に）天皇、尊氏
	43	北 康永 2	Ⅲ 尊氏、直義対立 南朝加え三つ巴		崇光 後光厳		佐々木道誉		義貞、名和、山名 諸氏の文書多い
14	53						山名氏		
	58					義詮（29才）			
	67		Ⅳ 義満（日本国王と）			義満（10才）			馬木氏　馬木郷へ来住
	89			長慶 後鶴山	後円融 後小松		山名満幸	満幸横領　代官石原氏来住	
	91	北 明徳 2	㊲ 明徳の乱						（当地に）『明徳記』など 文書多い
	92		南北朝合体	後小松			京極氏	泉涌寺領に分ける	
			（金閣寺）			義持			
	431			称光				安部氏稲田へ	三沢⑥為忠（信濃守） 横田八幡宮棟札に
15	67		応仁の乱（10年間）			義政			三沢氏出雲の最右翼勢力時代
	70	文明 2					代官尼子氏来住（富田へ）	?	
	71					義尚			⑧為忠（遠江守）
	86	18					尼子氏追われのち復帰		
						義稙			
	509	永正 6							藤が瀬城へ入る
		11						尼子氏岩屋寺を焼く	
	24	大永 2					尼子氏守護大名に（30年間）	中村市場	
									（当地に）古文書多い。
	37	天文 5	（鉄砲伝来）						杠氏たたら
16		12						尼子勢力横田へ	
			（川中島合戦）					六日市、大市出現	伊賀多気神社再興
		20						尼子氏去る	
	66						吉川氏戦国大名に（35年間）		
	73		織田信長制覇			足利将軍終る			
	90	天正19	豊臣秀吉制覇				毛利氏の支配に	終る	三沢・馬来氏安芸へ移住

藤が瀬城最後の城主三沢為虎四世の孫「お初」（藩主の奥方）が登場している　今後を楽しみに

前号訂正　2頁1段9行・いずれの土地も

相合ふ人と

簸の上短歌会

札打ちてめぐる出雲路は春のさかり相合ふ人と言葉かはしつ　永井弥生

職退きし夫と時に噛み合はぬ日もあり畑に馬鈴薯を植う　野村節子

様々な思い出秘めて五十年薄くなりたる夫の髪をととのふ　佐藤喜代子

軒下の赤き唐辛し漬物を終へしこの夜をからから鳴りぬ　岡田時子

いまだ見ぬ人の詩ごころに魅せられて恋ぶみのごと歌集めくれり　松浦愛子

君からの電話四五日ひとりじめしたくて伝言のばす私　小早川恵子

腰下に腕をさし入れ梃子にして妻の尿とる何時までのこと　常盤はるまさ

嫁ぐ日を控へて病みし恵美かなし二十五歳のいのち還らず　安部夕波

斐の上川柳七月抄

失言を悔いて日記の端に書き　松浦亜以

鯉のぼり欲しがる幼女諭とす母　高木白虹

百万の機械にすわり田を植える　児玉哲呂

立ち話し憚ることと電話する　藤原のぼる

夏座敷とたんに冷えこみ炬燵出し　安部正子

美容院今日一日の顔で出る　松田牛歩

緑り風一枚脱いで風邪をひく　若槻白馬

検診に合格そばやへ足が向き　杠京子

じっとしておれない空の洗濯機　真綿よし子

好きだからふくれて泣いてすがりつく　渡部ミツコ

貴花田見たさに相撲好きになり　森山悠子

想い出の落書き残る里の家　藤原千代子

路傍に刻む歴史④

宝篋印塔

—三沢遠江守為忠—

宝篋印塔

過去現在未来にわたる諸仏の全身舎利（遺骨）を奉蔵するために『宝篋印塔陀羅尼経』を納めた供養塔をいゝ、石造は鎌倉中期14世紀半ばから造立された。基壇の上に基礎・塔身（角）・笠・相輪（円筒）をつみあげ、塔身の四面に梵字を彫る。ここのものは正面に仏（大日如来か）が彫られた独特のもの。

五輪塔

前記の塔とともに最も普遍的な石塔で、地・水・火・風・空の五大を宇宙の生成要素と説く仏教思想に基づいて、平安時代に創始され、全国的に分布する。

装飾のない五種の石を重ねて積み上げたもの

三沢遠江守為忠の石塔

藤が瀬城を築いて移り、三領家から請負って横田庄を支配した、三沢8代為忠のもので、横田町六日市の大黒屋・湯主屋の間の山道100mほどの上にある。絲原家の元禄期文書『古代よりの聴書』にも記載されている。石材は大理石で岡山県西南部に多い塔形で、高さ1.5m。写真は20余年前のもの、今は相当破損している。保存の工夫が必要。

六月句会抄

白樺に己曳きづり蝸牛　浅野としお

鯉棲まぬ沼の静寂や水馬　岡田蹊花

神の峰青田にはためく武者のぼり　小川月舟

病棟を義足の韻き梅雨暗し　恩田和美

鏡台に肩のうすきや更衣　門脇花子

たたらにて栄えし過疎村梅雨に入る　加納信子

山怒り青葉の底の地獄見る　楠房子

太平記偲ぶこの道著莪の花　高木白虹

父の日や肩に疲れの見えかくれ　中沢美紀子

衣更えポケット軽く旅に発つ　新出谷一華

言葉なき梅雨の雲仙火砕流　錦織富江

梅雨曇孤独の部屋に灯を点す　渡部夕峰

会員頒布一部百五十五円／六九九—一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0—601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 196 号
（8月号）
1991 8. 3
（M124・T79・S66）
奥出雲編集集団©

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

太平記の時代と奥出雲④

—得宗家と北条時輔（太平記前史上）

将軍・執権・得宗

鎌倉幕府の将軍は三代源実朝が殺されてからは、代々幼ない皇族を迎えその下に補佐役の執権を置いた。北条時政（頼朝の妻の父）が大江広元が退いてから、1203年その職をついたが、以後北条氏が世襲し、これが内外の枢要な政務をすべて、将軍は名のみの執権政治となった。そして時頼の時にそれが強力に確立した。（北条家の嫡流の家督を、父祖の執権義時の法名が徳宗といったことから、得宗ともいうようになっていた）　1256年時頼が出家して執権を退いた時、その嫡子時宗は数え6才であったので、北条一門の長老重時の子長時がとりあえず、執権となり補佐した。長時が死すると時頼の叔父で老令の政村が執権となった。しかし得宗時宗が幼少であったため、これまで時頼に押さえられてきた勢力の興起を許す可能性が十分にあった。

種々の問題が生じ、得宗の地位確立のためには、それを脅かす危険性のあるものとして　(1)庶兄時輔　(2)名越氏　(3)将軍宗尊親王の三者があがっていた。

まず相模三郎時輔は相模太郎時宗の3才年上の兄であったが生母の家柄が家女房といわれた小山長村の娘であったため、（時宗の母は北条重時の娘）はじめから庶子の地位に甘んじなくてはならなかった。官途もなかったが1264（文永元）年10月、京都六波羅南探題として任じて上洛させ、鎌倉から遠ざけられた。

名越氏は北条一族の中でも強勢を誇っていたが、その地位を廃止することによって、抑えこむことに成功した。ところが問題は将軍の存在であった。将軍に対して北条氏やそのほかの諸氏は、ひとしく御家人の立場にあって、北条氏といえども諸御家人たちを支配する権限はなかった。将軍が幼少であり在任期間が短いと問題ではなかったが、成長し長くなって御家人たちとの間に主従関係が緊密化すると、北条氏に対抗する有力な政治勢力になるのは必然であった。

そこで1266年時宗の私邸で「深秘の汰沙」を催し、宗尊の将軍解任を決定し、3才のその子惟康を坐えた。こうしたことはその後も繰り返えされたのである。

北条時輔

成人するまでとはいえ、14才で政治の表（執権につぐ連署）にたたされた時宗をみて、恐らくはなにごとかを期待していた時の心中は、決しておだやかものではなかったのに違いない。

六波羅探題は京都の南北両六波羅に置いた役職で、京都警備と京都における幕府代表機関たる任務をもっていた。幕府はこれによって京都公家政権を制圧することができた。さらに行政的には尾張、三河両国以世を管領し、重要事は幕府の命をうけたが、小事は悉くこれが裁決した。要転のため両探題職には北条氏の一門が任命され、組織は幕府のそれに準拠して漸次整備された。こゝからの法令は両探題の連署で出された。

1271（文永8）年11月付の千家文書によると、伯耆守護職ももっていた時輔は、隣国出雲国内にある石清水八幡宮の荘園の有力なものを、支配下においていたことがわかる。相模式部大夫（北条時輔）として、

横田庄　55丁　竹天郷　62丁
余　須佐郷　30丁余　ほか

とある。

因みに横田庄周辺は、三処郷が三処左ヱ門後家の9丁余、馬木郷が多胡左ヱ門尉35丁余、三沢郷の飯島太郎（のち三沢氏と）4丁余、阿井郷・布旋郷にもそれぞれ地頭がいた。

1271（文永8）年、モンゴルの世祖フビライは、日本への三度の使者に対する返事がないので、和戦両様の準備の下、使節趙方弼を送って来た。9月19日筑前今津港へ到着したが、これにも結局返答をしなかった。モンゴルはこの年の暮、国号を元と号した。

こうした情勢下幕府は異国警固番役を設けた。こうしたさなか北条氏内部では同族あいせめぐ合戦が起った。

1272（文永9）年2月11日、時宗は名越教時らを鎌倉で殺害した。ひそかに謀判を企てた時輔に組みしたとみられたからである。そしてその15日　京の街は浄金剛院の涅槃講で賑わっていたが、その晩に鎌倉からの早馬が到着し、六波羅北方の北条義宗はすぐさま南方の時輔を襲撃した。やがて六波羅に火の手があがり、在京の武士はのこらず馳せ向かい、猛火の中で合戦が行われて多数の人々とともに時輔は殺された。あるいは時輔は吉野へ走り行方知れずともいう。

これを二月騒動というが、単純な兄弟のうらみや権力欲の争いではなく、詳細は省略するが得宗権力の強化に伴う深刻な問題がからんでいたからである。（これより前、日蓮の国難来るの熱烈な布教は、日蓮を佐渡へ島流しへと発展させていた）

（2頁4段へ）

太平記の時代と奥出雲④・思想信仰形成の一断面・俳句・短歌・川柳

諸先人の墨跡・絵・著書等の目録作成に入っています　ご協力下さい。

考古学の成果と文献を重ねてみた

奥出雲

—東アジアの中における日本から—

（思想・信仰形成の一断面）

本文は1990年8月8日、松江の加藤記念館で開かれた地域宣教研究会の席上で、問題提起として述べたものである。

思想形成を比較文化論の立場で、人類の発生と成長そして移動、それに伴う文化の伝播を、考古学上の成果と風俗民俗、古代文字そして文献を通して考えようと試みたものの骨子である。

日本の神話も、8世紀初頭の中央の情勢によって編集されたことは、当誌でも度々述べたし、最近の拙著『奥出雲横田とたたら』でも要点をのべた。また、日本の神話を分析すると、世界各地の神話の吹きだまりの感があるといわれる。国内各地の国々の風土記の中には、その地独得の神話がある。これとは別に『日本書紀』などの神話は、中央の情勢を反映し、抽象性の多い高天原神話と、南方色の強い筑紫（日向）神話、南方色と朝鮮半島色の多い出雲神話が混在していて、大和王朝とそれをとりまく諸部族の出自と地位づけをしているのである。

大陸と日本の歴史を比較しながら、各種神話の発生の時代と由来を点描してみる。

旧石器時代

日本ではこの時代はBC7000年ごろまでである。野生動植物採集と魚撈物狩猟の時代で、山・川・海・野獣に神をみ、専業者でないシャーマン（呪術）の時代である。（BCは「紀元前」のこと）

縄文時代の早期はその後である。

この時代は東日本へ北のシベリヤから渡来人が続々と入って来る。植物保存のために土器をつくり、狩は海へと進出し、陸では槍から弓へと道具が変化し、移動する生活の拠点も出来はじめる。次第にムラの住いが発生する。東日本は落葉広葉樹林地帯（ナラ）で果実が多く、サケ・マスも多くて住み良く活動によく豊かであった。それに比べると西日本は常緑広葉樹照葉樹林地帯で貧しく人口も稀白であった。

このころの出土品には土偶（土製の人形）がある。中期（BC3000年）以降盛んになって縄文時代の終りまでつくられ、縄文文化を代表する造形品といわれる。

そのほとんどは完全な形ではなく、どこかがこわれたり、バラバラになっている。これはこわす目的でつくられていて、例外なく女性で、母や母になろうとする妊娠した女性を示している。縄文人の「死と再生」についての考えが、祭儀の根本にあったとみる。母なる女性は死によって新らしい生命が誕生するという神話的思考のあらわれであろうとする。

神話の中で、アマテラスの弟スサノオが、オオゲツ（女神）に食物を求めると、からだの穴から食物を出した。スサノオは怒ってこれを殺すと、女神の死体の各所から、蚕・イネ・アワ・ムギなどが生じたという。こんな神話はほかにもある。この種の神話は熱帯地域の根栽農耕民の間に広く分布している。昭葉樹林文化の特色で、焼き畑雑穀栽培地の農耕儀礼であるという。

時輔横田庄に潜んだか

ところがここに不思議な文書が一通簸川郡鰐渕寺にある。

時輔死後から12年たった1284（弘安7）年9月に出雲守護佐々木頼泰から、鎌倉幕府から出された、「時輔とその息子が所々を経廻している」との御教書の旨を通達したものである。

時輔は行方知れずとなっている一説のあること。伯耆守護であり出雲にも所領があったことも無視できない。

時輔の死後2年して元が来襲し時宗は撃退した。再来襲に備え西国防備のため御家人の再配置をした。亀山天皇（大覚寺統）は持明院統との対立の中で積極的に動き、1275（建治元）年岩寺にも、邦家安全・聖運達長の祈請文を届けている。1281（弘安4）年6月の元の再来襲の1か月前　横田八幡宮は現在地に移された。本願は時頼の後室妙音尼即ち時輔の母であり、時輔の死後もこの地を支配していた。或いは時輔は生存していたか。

時宗は弘安7年4月34才で歿した。先の教書はその年の8月のもの、時輔の動きを恐れた得宗派の処置であろうか。生きておれば37才。母妙音尼は健在でその後33年間生存し、年表の如く当地に寄進している。その間時輔次男の事件もある。寄進は常に時頼の供養のためとある。

これ以上は小説家にまかせるしかない。

1248	‖時輔生れる
1251	｜時宗生れる
1263	（2人の父時頼37才にて歿す）
1272（文永9）	‖時輔殺される（25才）
1275（建治元）	（亀山天皇岩屋寺へ祈願文）
1281（弘安4）	（5月　横田八幡宮現在地へ）
	（6月　元来襲）
1284（〃 7）	‖時輔（37才）親子経廻の文書
	｜時宗歿す（34才）
1287（〃 10）	（後宇多天皇岩屋寺へ御綸旨を）
1290（正応3）	‖時輔の次男を立てての三浦頼盛謀反が発覚し捕われ2人とも斬首
1309	‖尼妙音　岩屋寺へ寄進（角村ほかで）
1313（正和2）	‖2月　尼妙音　高畤大領権現へも
	3月　仝上　（五反田村で）
	4月　仝上　（八川村で）
	9月　仝上　（五反田村で）
	9月　将軍御教書で岩屋寺へ寄進
	12月　尼妙音歿す

う。

また**縄文後期**になると、仮面が東日本に多く出土する。人口の増大に伴い高まった社会緊張を緩和する文化的機能であったと考えられている。

やがて縄文文化とは異った稲作中心の弥生人が弥生文化をもって西日本に上陸すると、こうしたものは急速に姿を消していってしまう。

この時代の中東・東欧・中国社会

B.C 4000～2000は、エーゲ・エジプト（文字出現）・メソポタミヤ（イラク）・インダスの文化、中国文化がすでに開花している。

B.C 2000年以後は、バビロニヤ・ヒッタイトに文化の花が開き、中国では黄河流域はすでに青銅器時代へと入っている。

B.C 1000年には、イスラエル王ダビデの時代に、ヘブライの統一王国、そしてソロモン王の時代、さらにイエルサレムが一神教の中心となってゆく。中国のこの時代の前半は神話時代であるが、後半は殷王朝の歴史時代で出土品文化の質は高い。

地中海にはギリシャ都市が成立し、ギリシャ神話が生まれ、インドヨーロッパ語のギリシャ語が生まれる。このころのヘラクレス神話は、わが国のヤマトタケル・スサノオの物語の源流であるといわれる。そして旧約聖書の創生記ができ、ローマの建国がはじまる。第1回古代オリンピックがはじまり、予言者エリアがあらわれ、旧約聖書のエレミア記が生まれる。中国は春秋時代で歴史は豊かに、そして記録されている。

B.C 600～500年時代は、わが国の縄文後期晩期にあたる。定住性高い集落地が生まれ、共同体的宗教の時代に入る。大陸では遊牧民族が各地で活動し、騎馬族社会が生まれる。B.C 6～5世紀には内陸アジアの黒海・北海にスキタイ文化が生まれ、日本の三種の神器と同じ考え方の遺物が出土し、記録にもの る。そしてバビロン捕囚時代、やがてユダヤ人の帰国となり、インドには釈迦が、中国には孔子が生まれる。B.C 4世紀アレキサンダー大王の時代が訪れ、ユダヤはローマ帝国に亡ぼされる。このような大きい歴史のうねりの時代、わが国はやっと文字も持たない従って記録もしない弥生人が、大陸から北九州周辺に上陸し、弥生時代に入り、やっと農耕を基盤とし集団生活が生まれる。すると祭祀の形態が整い専業司祭が生まれ、人々の間に階層が生じ、数多くの神々にも階層が生じてくる。そして大陸の中国地方から、クニウミ神話が入って来る。

このころギリシャでは、ソクラテス・アリストテレスの学者があらわれ、シルクロードが西欧と中国とつなぎ、B.C 3世紀になると中国では泰の始皇帝があらわれ、万里の長城が築かれる。

B.C 2世紀には死海文書がつくられ、漢の武帝が立ち、朝鮮に楽浪郡等千郡を置く。そして初代ローマ皇帝への時代へ。ユダヤにハロデ王が、そしてキリストが誕生する。中国へは印度から仏教が伝わる。

このころのわが国は弥生時代で、北九州から弥生文化が急速に東日本へと伝播している時代で、稲作と銅剣の時代である。中国・東欧・西欧においては、文字その他の文化文明の基礎が確立し、歴史時代（記録の正確な時代）に入っているのに、わが国の2世紀は、魏志倭人伝にみえる弥生時代の耶馬壹（台）国の時代である。中東では新約聖書のヨハネ福音書が成立している。今日なほ現代人の精神の糧となる思想が確立している。単なる神話を中心とする信仰の世界から完全に脱却している。

3世紀に入るとわが国は古墳時代への移りはじめる。文化の中心となる文字はなく、さらに300年余を経ないと到来しない。思想は伝承する信仰の中心である、各地各氏族特有の神話が呪術とかみあっている時代である。

4世紀は西欧はゲルマン民族大移動の時代で、現在の中心地西欧の各国の基盤ができた。

6世紀になると祭祀を司る集団が発生する。単な呪術だけではなく、信仰の中味として階層高き氏族の神を中心とする物語が生まれる。祭祀集団として次第に勢を得るのは中臣氏（のち藤原氏に）、忌部氏である。古代中国の『淮南子』を借用してわが国の天地創造のイザナギ、イザナミ神話が登場、古代文明地帯の影響をうけ、征服者（天つ神）・被征服者（国つ神）の神話も生じて来る。

6世紀末になると仏教が伝来し、一神教的宗教も生れはじめ、国家統合のアマテラスを生む。

諸豪族（王）の中で勢力を得て大王となったものが、やがて中国の皇帝・天皇思想をとり入れて、中国では最高の天皇を称するようなり、アマテラスの系譜につながるとして国の中心になる。

7世紀には仏教の救済の教義が入って来る。672年の皇位継承の争い（革命）である壬甲の乱を経て、中国に範をとり、律令国家を固め、国外へも後進国の体面を保つためには、国内の統一のためにも、中国の史書を参考とし、朝鮮の史書も入れて百済の多数の学者も中心に『日本書紀』の編集がはじまった。わが国にはじめて歴史書が生まれた、既述のように先進地に遅くれること1000年以上である。自然発生の素朴な考えのよりどころの神話も、歴史の前段階へ権威づけのため、神話が構成されることになったのである。

神話の構成

中心となる高天原神話は、北方的なシャーマニズムにもとづく、太陽信仰・狩猟中心の話が

前号訂正　1頁2段20行・前の鎌倉時代・5段最後　伯耆、隠岐・系図中のゴジック中沢氏を牛尾氏に・里見に・2頁5段2行閏10月

寄せ合わされ理念的にまとめられる。出雲神話には畑作や海人の話の多い、水・蛇・電の神・水などのシャーマニズム、農耕的なそれぞれの神に階層のない並列な神々、韓土のものを地域的に集めている。

中国のオロチ退治の物語がこの高天原神話と出雲神話を結びつける。（古墳時代の出土品にはヘビ・オロチが多い）

高天原から支配者を降臨させるため、中国・朝鮮にあるオブスマの物語が、民族移動も重ねられて加えられる。また稲作中心の日蝕神話（天岩戸）も入って来る。

もう一つの特殊である筑紫（日向）系神話は、海神が多く海の物語が中心で、東南アジアの色が濃い。

こうして『日本書紀』の多くの神話は、中国の『漢書』の言葉・文章なども借用して構成される。そこで各国の風土記との神話の違いがあらわれる。特に土着の神話らしい神話をのみしるす『出雲国風土記』とは大きな矛盾が生じて来たのである。

具体的な検討については、すでに当誌でのべているので（29 30 31 33 57 60 87 88 89 116 135 136 153 157 162）ごらん頂きたい。

日本語の伝来と形成についても考えねばならないが、民族の渡来とほゞ軌を一にしているというのが常識である。

乱読にすぎない筆者のほんの眼を通しただけの雑誌をのぞくこれらに関する研究書、啓蒙書は3百冊に及ぶ。その中で最も共通の広場で価値あるとされている著者の見解を中心に要点を述べたものである。次に一般的に理解し易い本を数冊紹介して置く。

『日本の神話を考える』上田正昭著、『風土記世界と日本の古代』水野裕著、『大陸から見た古代日本』樋口隆康著、『古代日本人の外国観』井上秀雄著、『古代朝鮮』仝人著『中国からみた日本の歴史』全集、『日本神話と中国神話』伊藤清司著、『建国新話の諸問題』三品彰英著、『日本神話の起源』大林太良著、『騎馬民族国家』江上波夫、『遊牧騎馬民族国家』護雅夫。

（横田史談会　高橋一郎）

七月句会抄

落ち蛍掬って小川の風にのす　浅野　としお
変る世へ変わらず優し合歓の花　岡田　蹊花
郭公の遠音を聴きつ午睡かな　小川　月舟
介助食梅雨雲見つむ眼の虚ろ　恩田　和美
梅雨の明け庭のどこかに風生まる　門脇　花子
紫蘇もんで染まりし手もて小商売　加納　信子
東の間の古辺る梅雨の古都　楠　房子
古り褪せし想出絣の麻浴衣　高木　白虹
母の忌や想い出語り茗荷汁　中沢　美紀子
雨に濡れ額紫陽花の彩もどす　新出谷　一華
また少し老いる坂道蝉時雨　錦織　富江
落ち人の寄り添う峡や青嵐　渡部　夕峰

春から夏へ　簸の上短歌会

服一枚ぬげば香りの立ち出でぬ蕗のとうひとつ摘み来し夕べ　小早川　恵子
雲仙は青葉も灼けて火砕流に人ら数多も地に呑まれたり　岡田　時子
湯上りに初夏の夜空を眺めをり満天の星ひとり占めして　佐藤　喜代子
一夜にて成りし堡と見まがひて向つ山腹に山法師咲く　常盤　はるまさ
逝きまして二十年経ぬ舅愛でし白藤咲けり風薫る中　野村　節子
夢を掌にのせるすべ知らず諦めし痛みもはるか朴の花咲く　永井　弥生
雨あとのみどりをこぼす柳径犀星愛でにし犀川のせせらぎ　安部　夕波

斐の上川柳八月抄

行く道に噴煙もなく初夏の風　渡部　ミツコ
若い日の無理が今頃切って出る　藤原　千代子
夢と言う当てにならない宝物　若槻　白馬
ためらいもさらり忘れる若葉風　真綿　よし子
たった今聞いたばかりと仲間入り　藤原　のぼる
世の流れ孫に先取りされる歳　横山　まこと
米値下げ減反にまた石をのせ　松田　牛歩
いつ明ける天気予報に苦情を言い　中林　もりえ
ボケまいと浅くて広く今日も行く　安部　正子
昼さがり黙って茶をのむ老二人　田中　有樹絵
長雨に人も畑もしょげている　安部　春恵
父の日も母の日ももう遠くなり　松浦　亜以
金出して悪く言われる国もある　児玉　哲呂
背ぼんこを背負う老兵羅漢さま　高木　白虹
梅雨なれば二度も三度も衣装替え　森山　悠子

会員頒布一部百五十五円／六九七一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0—601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 197 号
（9月号）
1991 9. 7
（M124・T79・S66）
奥出雲編集集団©

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

太平記の時代と奥出雲⑤・奥出雲のたたら製鉄史㉒・川柳・俳句・短歌

太平記の時代と奥出雲⑤

（太平記前史下）

当地の社寺と北条氏

1271（文永8）年以前から横田庄は北条氏の勢力が浸透し、1281（弘安4）横田八幡宮は八川尾園村から、馬場村の現在地に移され、岩屋寺はその神宮寺（神仏混淆のあらわれによる神社と一体の寺）として、寺勢も大いに上った。

公卿のうちで西園寺は関東中次役として、京都と幕府との交渉にあたり、持明院統（のちの北朝）と北条氏との結びつきを深めた。このころは天皇・上皇とも持明院統であった。

このころから時輔の母尼妙音の寄進は（前号2頁・本誌1頁年表）、当地方とくに岩屋寺に続いて行われた。

横田八幡宮に現在所蔵されている獅子頭一つ（鎌倉期作）は尼妙音の寄進と伝える。弘安4年に八幡宮この地に移した時の本願は尼妙音である。このころ寄進のものであろうか。

かつて岩屋寺には、唐の張恩泰作の「楊柳観音」の絵があった。中国と朝鮮とこゝにあるという大作であった。これは尼妙音がこゝに寄進したものと伝えていた。その後明治28年これが盗難にあい、昭和7年木村小左ヱ門氏が池上秀畝の楊柳観音の模写絵を寄附した。豪華な大作であった。こうしてみると1313年尼妙音が没するまで、長くこの地は北条氏そして持明院統の地盤であったと思われる。

だがこのころは1308（延慶元）年以来、持明院統にかわって大覚寺統（以下、持・大と書く）の後二条天皇・後宇多法皇の時代であった。

両皇統の対立激化

ところが皇太子をめぐって、大覚寺統は後宇多の子尊治（のちの後醍醐）を、持明院統は後伏見の弟富仁（のちの花園）を推し、両統とも使者が東下し、はげしく幕府に働きかけた。迷った幕府は交互に位につける道を選び、持富仁が皇太子となった。

このころ宮廷には二人の法皇（持後深華・大亀山）、三人の上皇（時伏見・大後宇多・持後伏見）が出現していた。

五人はときにうち揃って蹴鞠（けまり）を遊び、朗詠・管絃に興じていたが、裏では当然どす黒い暗闘が渦巻いていた。一方武家側においても得宗の地位をめぐり同様であった。

持明院統には後深華の管領する長講堂領（後白河の所領）、大覚寺統には亀山が管領する八条院領（鳥羽の所領）があり、それぞれ莫大な荘園群を所有していたが、1300年に厖大な遺領をのこし、遺志もしめさぬまゝ室町院（後堀河の皇女）が没した。

その領をめぐって両統は、さらに激しく争った。これは所有することでたんに経済力を強めるだけでなく、その所職を廷臣にあたえることによって、政治的な勢力も強化できたからである。

思いあまった幕府は室町院領を両統に折中することで当面を糊塗した。

こうした両統の争いは、貴族たちや寺院内部の争いとも結びつき、亀裂はいよいよひろがっていった。どの貴族の家でも嫡家と庶家、父子兄弟の争いがおこっており、寺院内部でも所領や法流をめぐる相論がもつれていた。こうした対立は両統のそれぞれと、また幕府内部の対立するものともつながっていたのである。

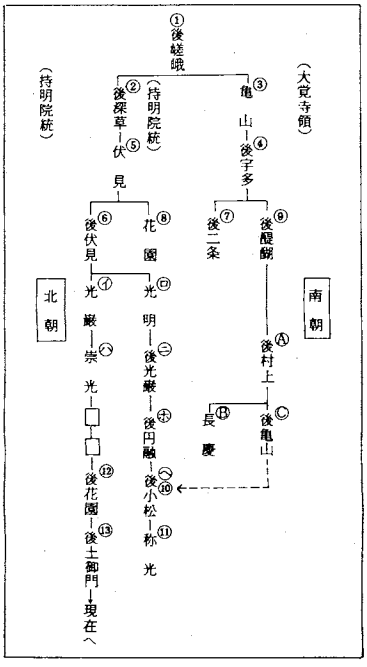
さらに社会の基底では、蒙古合戦の恩賞をめぐる争いが、武士の間で渦をまいていた。弘安の役から20年以上を経た時代に最後の恩賞地配分が行われたのは、1307（徳治2）年であった。

この年大後二条が没し、皇太子持富久が即位（花園）する。こゝで後二条の弟尊治（のちの後醍醐）を皇太子とした。花園よりも9才年長であった。

全国各地が騒然となる

このころ西国と熊野の浦は海賊が蜂起して、大規模となっていた。

1319（延慶3）年、異国降伏の祈祷が諸国の社寺に行われた。中国を中心とする異国の九州周辺への来襲に備える体制固めの補強のためであったが（これが最後となった）、海賊の鎮圧に加



街の活性化に必要なのは、住んで、働く人が、現在の町を正しく評価しているかどうかが根本である。

えて諸国に蜂起する悪党の鎮圧も加わり、異国警備を考えるどころではなくなった。

さらに京都の諸社・諸寺の嗷訴も頻発し騒然となった。諸大寺の中には、各地の悪党を使って荘園の拡張にものり出すものも出る有様であった。

これに対して幕府は、訴訟を圧殺し専制的・権力的な態度をあらわにしてきていた。

こうして独裁者得宗北条貞時は41才で急死し、9才の子高時が継ぐことになった。これを補佐したのが貞時が託した長崎円喜と安達時顕であった。

こうした渦中の人物タイプの貴族・僧侶が後宇多・後醍醐の周辺にあつまりつゝあった。

ほんの要点を述べたが、このように日本の社会構造は、このころ大きな転換を開始している。

農業民の世界の、非農業民の世界のそれぞれに残っていた未開の野性は、貨幣に接触、触発され文明の世界に引きこまれつゝあった。こゝに諸国における悪党の出現がはじまる。このころの情況を随筆に結晶させたのが兼好法師の『徒然草』という。

するどく事の本質をとらへて←

奥出雲のたたら製鉄史㉒

新資料にもとづく特に東南部のその技術・経済・社会・文化の総合史

近世編14　資料批判「鉄山旧記」

近世編の執筆にあたっては、『鉄山旧記』の資料批判の上に立たねば続けられないので、とりあえず要点を述べる。これは近く学術的論文として発表する予定である。それまでは転載ならびに引用については遠慮願いたい。

鉄山旧記（絲原家文書）

松江藩の鉄山行政を明らかにするのには、この書の内容を順序正しく整理し、それに「享保年間三郡御買鉄論争」（絲原家文書）（本誌171 172 176 179 180 181 183に詳述）と、「鉄方御条目」（絲原家文書）（後述）、さらに近世企業たたらの技術発達史（『日本の産業遺産』『金属の文化史』『島根大学山陰地域研究総合センターの山陰地域研究ー伝統文化No.7』の中の拙稿論文）を加えて述べなければならない。手前味噌の言であるが、やっとこゝまでたどりついたのである。

『鉄山旧記』の最初には「安政四巳六月（1857）大呂村山根卜蔵屋、当時野土炉支配人卜蔵民武左ヱ門方ニ有之写之置モノ也」とある。山根卜蔵屋は9鉄師（明治以后になると4鉄師）の1人、竹崎村卜蔵の分家である。

当家には『鉄山根元』一冊がある。これがすべて写されているが、さらに竹崎村の仲間文書（足立家）も、そして絲原氏所蔵のものも書き加えられている。

そこでこれを整理しなければならない。本稿では原文を省略するため、昭和三十九年十二月（1964）発行の、『たたら研究会資料集ー　故庄司久孝氏探訪糸原家文書』の頁と行数を書いてこれにかえた。なおそれには若干絲原家文書の原文からの誤写もあるが、本稿ではふれない。

次回から183号に続いて松江藩の鉄行政を述べる。「鉄方御方式」は藩のすぐれた政策で、藩にも鉄師にも、わが国製鉄業にとっても幸であった。（高橋一郎）

整理した研究上の使用文書順	原文書の順	原文書の頁と行	鉄山旧記 絲原家文書分	鉄山旧記 卜蔵家文書写し分 仲間家文書写し分	「鉄山旧記」外の文書で関連する重要文書（絲原家文書）
1	1	1〜3上2	たたらの歴史		
2		21上3〜29上	↓	↓	「享保年間三郡御買鉄ニ関スル一件」
	2	3上3〜5	**上書**　享保11・正18 鉄山・鷹林について藩へ書き出しためのの控（原文8と同じ）		
3	3	6〜7上6	**上書**　享保11・正と3 鉄穴場所についての藩へ書き出しためのの控（原文8と同じ）		
	4				
3	5	7上7〜8下8	**申触書**（正式文書） 1725享保10・12・21先納銀についての御法御改めについて藩より鉄師へ		
4	7	9上15〜10上5	**上書**　（正式文書） 1726享保11・正　右申触書に対する鉄師よりの請合書（鈩鍛冶ケ所分帳）		
5	6	9下9〜9上14	**布告**　（正式文書） 享保11・正　右請合により「**鉄方御方式**」		
6	8	10上6〜13下8		卜蔵文書「鉄山根元」原文⑥「鉄方御方式」の資料	
				上書　享保11・正・18 鉄師連署で藩へ 「鉄山ケ所分ケ帳」（鉄山とは木炭山のこと）	

はいるが、一つの思想体系とはなり得ていないといわれる。これがまた『徒然草』が時代をこえて読まれるところでもあるという。

横田庄では

1315（正和4）年、鎌倉鶴ケ岡八幡宮は鎌倉大火によって、将軍・執権の私邸、政所、問注所などとともに焼失した。北条氏の支配下にあった横田庄は、八幡宮仮殿造営料所とされた。当庄の年貢はこゝへ送られた。恐らく造営用の工具・金具製作用の鉄にかえて納められたものであろうか。（八幡宮の記録について問い合わせたが不明）翌年遷宮が行われた。この年高時は14才で執権となった。

その翌年1317（文保元）年、岩屋寺文書によれば、横田庄の一部が内裏御料所となっている。

このころ宮廷両統の対立と武家・公卿とに分かれての確執は次第に大覚寺統に有利となり、その翌文保2年持花園は譲位して大後醍醐が即位した。そして横田庄内の石清水八幡宮領一部—現八川の一角尾園村の1町5反の権俗名田畑（八川駅北東の地。現在も地名あり）が、供料田として岩屋寺（院主祐円）に寄進された。後醍醐の寄進は北隣三処郷の高田寺にも行われている。岩屋寺へ寄進の権俗名田は中世末まで、岩屋寺領として続いている。

大後宇多法主はやがて院政を布いたので、持花園上皇と対立することになったが、1321（元亨2）年、大後醍醐が進める議定所や再興した記録所（荘園整理のための役所）での親政には好意をよせた。それは持花園があくまでも「道」を学ぶ者として後醍醐に共感し、両統対立の垣根をこえての賛意であった。

この年岩屋寺衆徒が高田寺を襲い、東塔を焼失したと伝える記録もある。大覚寺統系の高田寺と持明院統の岩屋寺の対立によるものであろうか。

後醍醐の政治姿勢は、次第に父後宇多の強い恣意を受けついで、専制君主の相貌があらわになり、公卿日野資朝・俊基たちと討幕への道をつき進んだ。

そこで思索家・学者の道を歩む持花園（著作・日記がある）との間は、次第に対極に分れて進む方向へと溝が深まった。

加えて後醍醐は中宮である西園寺の娘禧子の女房として仕えた廉子の溺愛へと傾いて動かされることが多くなっていた。

前号2頁の年表訂正

1313（正和2）	2月　妙音尼高田寺大領権現へも
	3月　仝　岩屋寺へ寄進（五反田村で）
	4月　仝　仝　（八川村で）
	9月　仝　仝　（五反田村で）
	9月　将軍御教書で岩屋寺へ寄進
	12月　妙音尼　没
1315（仝　4）	3月　鎌倉大火で鶴岡八幡宮も焼失
（仝　5）	仝上　造営　この間横田庄は
	仝上の仮設造営料所となる
17（文保元）	横田庄の一部内裏御料所に（岩屋寺文書）
18（仝　2）	花園に替って後醍醐即位、そして石清水
	八幡宮横田庄内八川から岩屋寺へ寄進、
	一方郡村高田寺へも寄進
21（元亨元）	後醍醐、記録所再興、親政を行う
22（仝　2）	岩屋寺が高田寺を襲う
24（正中2）	正中の変
30（元徳2）	横田庄内の内裏御料所が仙洞（上皇）
	御料所となり、代官安部氏来住
31（仝　元）	元弘の変
32（仝　2）	後醍醐、隠岐へ配流

7	9	13 下19 / 14 上17	仝前
			上書　享保11・正
			鉄師連署で藩へ
			「鉄穴場所村分ケ覚」
8	10	14 上18 / 19 下20	仲間文書
			1754 宝暦4
			「仁多郡中鉄穴間取番附帳」（写し）
			天保10・安政4に若干移動あり
9	29 / 32 下15		
			宝暦11
			「鉄方御条目」
			鉄穴ケ所制限令
			仝12・2通
			仝14　1通
10	10	19 下21 / 26	仲間文書
			宝暦4以後　右文書の修正
			○弘化4　6鈩付
			○寛政5
			○文化6／文政6
			○文政7
			○嘉永7／明治11までの鉄穴年々流番

謝

「奥出雲」も今年末で**200**号。**横田史談会**も10月で結成満**15**年。**古文書**を読む集い**172**回。読書会（出雲国風土記・日本書紀）**30**回。**講座・講演会31**回。文化祭から横田の先覚者20人を語る集いを隔月開催。**史蹟めぐり**　遠くは京都・近県で**29**回。吉備路と第2回横田の太平記の時代遺跡めぐり今秋開催。

感

主催—陰陽郷土史2回。全国学会2回。全国的たたら勉強会9回。他4回。**出版**は奥出雲文庫1.2.3.—以上すべて経続中—「奥出雲」は篤志家のたえざる御寄附と出版物益金でやっと経続。

前号訂正　1頁3段24行　時輔・4段5行　要職・全17行　竹矢郷　2頁5段1行　屋寺　3頁2段6行　創世記　3段18行　等4郡　全20行　ヘロデ王

正中の変・元弘の変

こうしたことから、大後醍醐は後宇多旧臣からも遠ざかり、資朝・俊基をあつめて、美濃・近江の源氏（北条氏は平氏である。源平交替の時であると考えている）の武家と計画をねった。

その場所は「無礼講」と称して、衣冠をつけずほとんど裸形同然で、乱遊した折に行った。このことは持花園の日記にもあり、『太平記』にもくわしい。

1324（正平2）年、それは内部からもれ、六波羅は大軍をもって土岐氏ほかを誅した。正中の変という。後醍醐の弁明のために関東に下った万里小路宣房の努力で、追求の手は資朝、俊基らの処断のみに終った。

しかし追いつめられた後醍醐は、失敗にかんがみ、やがて周到な討幕の計画をふたたび進めた。大寺院の擁する武力に期待をかけ、1329（元徳元）年暮、皇子尊雲法親王（大塔宮のちの護良）を天台座主に再任した。山門への布石である。

1330（元徳2）年、諸国の乱れを案じた持花園上皇は仙洞御所（上皇の御所）横田庄へ、院の非蔵人・安部野氏（のちの安部氏）を横田庄へ差し向けたのである。

こうしているうち公卿吉田定房は、10カ条におよぶ諫言を後醍醐に呈し、幕府の衰退を待つべきと主張した。もっとも信頼する側近の一人であったが、受け入れられず籠居した。北畠親房も出家してしまった。

これらの反対で多少は予定が狂ったが、後醍醐の意志は変らなかった。1331（元徳3・元弘元）年4月、吉田定房の密告で大後醍醐の計画はふたたび幕府にもれた。そして後醍醐は笠置へ逃げた。元弘の変である。

持後伏見（上皇）の子で皇太子量仁は持光厳天皇となり、後伏見の院政がはじまった（これがのち北朝となる）。

このころの出雲守護は佐々木氏（宇多源氏で、近江を本貫地としていたので近江源氏ともいう。尼子氏はこの流れ）であり、仁多郡内の地頭では、三沢郷（三成・三沢・温泉）を有する三沢氏（清和源氏系の信州伊那源氏飯島氏の流）で、次第に開拓により地盤を固めていた。

（横田史談会　高橋一郎）

斐の上川柳九月抄

叱られた数でほんもの出来上る　松田牛歩
腰まげた背中にポッン又雨か　安部春恵
人並みに年金の身も夏休み　児玉哲呂
昼寝どき同じ恰好の猫とわれ　田中有樹絵
これからはどこも一緒と遺影抱き　松浦久寿子
おろち舞う過疎のわびしい夏祭り　横山まこと
想い出の細い糸絶つ蚊の唸り　高木白虹
その場所を動くな東京駅に着く　藤原千代子
よぼよぼ爺何が怖いか犬がほえ　若槻白馬
長雨でうんざり暑さで又だうん　安部正子
天の川いつ拝めるか長い雨　渡部ミツコ
汗拭いて盆の掃除の此所かしこ　真綿よし子

この平安の　簸の上短歌会

孕みたる猫が道路を横切りてふりむきしとき幼さのあり　小早川恵子
雨止みて愛宕夜祭賑はふかカラオケの声の遠くより聞こゆ　岡田時子
われなりの生き態と思ふ古稀過ぎて今日も降りつぐ雨に籠りて　佐藤喜代子
鳥の糞とともに落ちしか南天の竹藪中に一群ありぬ　仝人
たずさえて旅行く希いも長病みとなる妻なれば語らずなりぬ　常盤はるまさ
宙に遊ぶ胡瓜のまきひげを支桂竹に導きやりぬ今日のやすらぎ　仝人
時鳥鳴きつぐ山の畑に来て夫と豆播く梅雨の晴れ間を　野村節子
雨の音を聞きつつ夫と粽巻くこの平安のあと幾歳か　永井弥生
苔の下に寛政四年とある童子二百年忌の今日を香焚く　仝人
君逝きてひとせの夏めぐるとき主なき庭にあおさい咲けり　安部夕波

八月句会抄

木洩れ日や訪う人もなし苔の花　浅野としお
寝るだけは寝させよと帰省の子へ優し　岡田蹊花
老いてまた汗の教場懐かしむ　小川月舟
虫つまみ夜の指先気掛りす　恩田和美
新しきみ魂迎えのかがり焚く　加納信子
アドバルン穂揃う稲田に影落し　楠房子
咲く花火散りゆく花火湖の華　高木白虹
点滴の向こうにきらめく花火かな　中沢美紀子
くつろぎてふと見上げれば天の川　新出谷一華
古文書の紙虫跡ひも解く一夜かな　渡部夕峰

会員頒布一部百五十五円／六九一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0—601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第 198 号
（10 月 号）
1991 10. 5
（M124・T79・S66）
奥出雲編集集団©

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

朝鮮半島と奥出雲④・太平記の時代と奥出雲⑥・短歌・川柳・俳句

朝鮮半島と奥出雲④

近代から現代まで

―内藤正中論文から―

国際化とは

外に向っての国際化ばかりの中で（手段としての国際化）、この国の社会の本質を変革してゆく国際化が必要である。わが国は単一民族の神の裔であるという神話に汚染された。そこで外国人に対して排多的な意識を匡正してゆくことを考えねばならない。この視点をというのでこの「朝鮮半島と奥出雲」の連載である。隣国の朝鮮の国々、朝鮮の人々とわが国とを理解しなおす一つとしたいからである。

概　観

1910（明治43）年の韓国併合の翌年から、大阪では労働者の募集をはじめた。全国で790人から2,527人へと急増し、1918（大正7）年には22,605人となった。島根県ではこの時355人、職業はほとんどが労働者で、それも男子であり、賃金が安く真面目であったので増加の一途へと進んだ。一方これを阻止する動きも出たが、1935（昭和10）年には全国で62万人へと増加し、労働力として無視できなくなった。

戦時下になると1944（昭和19）年以降は徴用制が実施され、強制連行された。そして1945（昭和20）年8月には、200万人を超えて（島根県では1万人を超える）、47％が石炭山、9％が金属山、14％が土建業に配置された。

内地の一般労働者もほとんど徴用工として勤め、苦しい就労条件であったが、これらに比べると彼等はさらに条件が悪かった。

島根県について

明治になって旅行者が県内に来るのは早くからあったが、在住者としては、松江市の島根県商業学校に韓語教師として招かれた安泳中が最初の人で、のち山口高等商業学校に転ずると、あと4人の韓国人教師が、廃止の1912（明治45）年まで滞在した。

玄檳・玄君・鄭寅埼・李植君で、初代の橋本校長が浜田港は貿易港となり、将来朝鮮国との交通が頻繁となると考え、公費補助案が否決されると、有志者の義損金で設立し維持した。

こゝで山陰道産業株式会社について記しておく。この会社については詳細は明らかではないが、1907（明治40）年ころの日韓関係の中での、山陰の動きを知ることができる。

創立趣意書によれば、「山陰は桃源の夢をむさぼってはならぬ。一衣帯水の交通利便の地の山陰道人士たるもの、韓国の事業に指を染むるを冒険としてしりごみしてはならない。鳥取今市間の鉄路の開通は一両年中である」とある。

島根県会にても協力を決議されたので、創立するこの会社は、韓国に於ける農業上の経営を行い、物産の委託売買の業を行うこととするとした。

総資本金50万円で本店を松江市に置き、支店を釜山に置くとある。

大正年代に入ると在住者数は次のように増加する。これらは労働者で鉄道敷設工事従事者が主であった。

1913（大正2）	島根	51	鳥取 4
（仝 5）	仝	115	
（仝 6）	仝	385	
1918（仝 7）	仝	809	

1920年代（大正10～昭和4）

1920（大正9）年の第1回国勢調査では、在住者717名のうち女性は3.8％（全国11.6％）で、島根県では単身出稼型で、20才代が54.8％、30才代が23.3％、10才代が12.1％であった。

出雲に14人・隠岐13人。あと690人は石見在住で、浜田駅開業、益田駅開業をめざす鉄道工事に従事していた。このころ雲南3郡は0であった。

1930年代（昭和5～14）

	県内	郡内	大原
1930（昭 5）	1,308	29	42
（〃 6）		134	34
（〃 7）		160	44
（〃 8）		235	17
（〃 9）		447	23
1935（〃 10）	4,867		
1940（〃 15）	7,146		

木次線工事で仁多郡が増加する。1923（大正12）年の宍道～木次間の開通に続いて、1932（昭和7）年に木次～三成、仝11年に八川、そして12年に全通となる。

木炭の生産が鉄道輸送の利用で生産急増へと進む。

県下171町村のうち1930（昭和5）年に、朝鮮人の在住しないのは6町村だけであった。在住が山村に多かったのは、炭焼夫、土工・林業関係者であったからで、仁多郡内で10人以上

鳥上村	21	（男18　女3）
八川村	21	（男14　女7）
その他と計	62	（男49　女13）

であった。

そうして林業においては「業主」の立場に立つものがあらわれ、土木建築業でもあらわれ、技術者も出現し、商業者での業主も多くなった。商業者の多く

街の活性化に必要なのは、住んで、働く人が、現在の町を正しく評価しているかどうかが根本である。

は、土地・資本もなくてよい行商や露天商である。農林業でも少数の自作農が登場している。

学生・生徒・児童数の増加は、世帯持ちで定住傾向を強めていることの反映であった。

次に出身地であるが、朝鮮全土にわたっているが、圧倒的に多いのは慶尚南道と慶尚北道（現在当県と姉妹提携している）であって、全体の82.9％である。

教育程度をみると

小学校程度以上	昭10	28.1％	
	仝14	39.7％	

1940年代（昭和15～24）―県内―

1940（昭15）	7,146人	67	組内地人と結婚
（〃16）	10,316	慶尚南北道出身	
（〃17）	仝	83.7％	87.0％
9,803	仝	88.5％	

昔もであったが、今日でも最も在住の多いのは美濃郡美都町で、合併前の都茂村には現在も一世が健在である。木炭ブームに続いて、都茂鉱山・都茂丸山銅山があってこれに従事していた。1945年8月15日を期として多くが帰国したが、1950（昭25）年には男86女80計166人が在住し、人口の4.71％であった。1955（昭30）年には美都町全域で293名であった。

近くの鹿足郡柿木村では、村内第2位の多額納税者も出現している。

協和事業

「皇民化」政策が敗戦前にはすゝめられていた。1940（昭15）年の三沢村の出雲電気新北原発電所工事に従事していた、橋本健市外33名は、労銀の一部を拠出して感謝の意を表したという記録もある。

朝鮮人学校等の閉鎖

敗戦後　連合国総司令部の意向によって、1949（昭24）年、団体等規正令により在日日本朝鮮人聯盟等の解散が命ぜられた。県本部や県内各支部は早く解散したが、仁多支部は1年以上を経過した1950（昭25）年に三成町三成にあった仁多支部の建物は、居住していた金向泰から接収された。

学校は全国で90校あった。県下の出雲（64名）・浜田（61）・江津（60）・益田（126）・柿木（29）の5校（339名）は、1949（昭24）年秋閉鎖した。

3年後には方針が転換し、浜田・益田では夜間学校が置かれた。

1953（昭27）年　サンフランシスコ講和条約が発効してからは、日朝親善に向って両国民が立上ることになった。そして新らしい朝鮮総聯の組織が生まれた。

1985（昭60）年の在日朝鮮人の数は68万7,135人となって、30年前の1955（昭30）年の20％にあたる11万2,625人が増加した。これは来住ではなく、国内での自然増の結果である。

在住地は、首都圏・近畿圏・中京圏に集中をみせ、北海道・山口・福岡は減少した。

30年を100とすると、埼玉県（254）、大阪府（169）、東京都（157）そして、愛知・神奈川・千葉・奈良・京都の府県が増加した。

減少したのは、1/4の24.7まで激減した島根県を最高に、ついで九州の各県、西日本・東北・北海道である。これらは高度経済成長がはじまって日本人の大都市への人口移動の傾向と同方向である。激減地はエネルギー政策の石油への転換が、木炭生産地や炭坑をもつ産炭地に壊滅的な打撃を与えたのと軌を一にしている。

職業構成の推移では、農林業従事者・単純労務者が漸減し、管理職的職業・教員・公務員・自動車運転手が増加した。技能工（25.0％）・販売業（20.5）についで事務員（21.7）が、有職者全体の67％を占めている。商業者もかつて半数を占めていた古物商が減少し、店輔をもつ商店が中心となっている。

医療保健・教員・芸術家・芸能家など専門職も4.5％あり、高学歴化と民族差別の解消の結果がもたらしたものである。

1985（昭60）年、県内460人で医療12、技術者3、教員4、宗教家1、その他専門家、管理的職業44、事務69、販売業138、農村業18、魚業4、採鉱採石業3、運輸通信業33、技能工64、単純労務者15、サービス業51となっている。

そして居住地は70％以上が都市部であり、販売業・飲食業・古物回収業・金融保険業・パチンコ等の遊戯場経営の代表的職場である。

学歴も大学卒が20％であるが、その1/3が専門職（医師・薬剤師・教師・技術者）であとは、飲食業や遊戯場に就職している。

またサラリーマン・オフィスレディーOLも民族団体系の団体に多いこととともに、今後融和の実によって改善されてゆかねばならない点である。

ちなみに郡内においては現在、一世の方数人を含めて30余名が居住し、中には事業主として活躍し、この地方に貢献されている方もある。

―本項の記述は内藤正中著『日本海地域の在日朝鮮人』（1989年多賀出版）からの抄出がほとんどであることを記し感謝する誤まりがあれば筆者の責任である。

次回から古代にかえって関係をひもとくことにしたい。

（横田史談会　高橋一郎）

太平記の時代と奥出雲⑥

太平記の時代 第Ⅰ期

―鎌倉幕府滅亡から足利幕府成立まで―

悪党と天皇

天皇後醍醐と楠正成との結びつきについては二説がある。それはさておいても、正成の素性にも二説があるが、いずれにしてもまさしく職人的武士―悪党・海賊―であった点は同じである。大後醍醐はこうした職人的武士を積極的に組織しようとした。もともと畿内近国の山民・海民をはじめとする非農業民―職人は天皇と直結していて（網野善彦の大著『日本中世の非農業民と天皇』参照）、その集団を統轄する職人的武士団は、先にのべたように、幕府のきびしい禁圧におかれていた。これらの人々を従えるのには力量が必要である。後醍醐の強烈で専制的な、そして「無礼講」的―ばさら風な性格は、持上皇花園の道学者的性格とは対極にあるもので、悪党・海賊や野伏たちの奔騰するエネルギーを、噴出させるにはきわめてよかったが、後醍醐の目はこれら悪党・海賊だけに向けられてはおらず、鎌倉側内部にも、対立する持明院統側に対しても働きかけはあったという。

こうした動きを敏感に察した持上皇花園は、18才の皇太子量仁に、長文の訓戒を書き与え、大乱は数年後に起る。この時が皇太子登極の時である。処する道は学問であるとくわしくといている。しかし意外にその大乱は近かった。

出雲の情勢と諸情

出雲・隠岐の守護職は鎌倉幕府創設以来、宇多源氏（近江）佐々木氏にあって、出雲の平原部の主要地のほとんどを一門で所有し（出雲国内の二割余）、この時の守護職は簸川郡塩冶郷に本拠をかまえる塩冶氏2代定清の手にあった。守護佐々木義清の子泰清の子頼泰が塩冶郷に住み、佐々木氏の総領となったが、定清はその子である。やがて登場する守護塩冶判官高貞はその子であり、富士名判官義綱は、父頼泰の弟湯頼清の孫である。

郡内では三沢郷内鴨倉に城を構える、新補地頭飯島氏の流れ三沢氏4代（当地2代）為常がおり、この惣領の下に周辺の林原・堅田・鞍掛に一族（従弟）が配されていた。

横田庄は石清水八幡宮と仙洞御所の所領であって、それぞれ代官がいたが、仙洞御所料は持上皇花園の下にあり、1330（元徳2）年に院蔵人所の非蔵人安部野氏（のち安部氏）が下っている（横田町誌では1336建武3とも考えられるとしているが未解明）。

馬木郷は来住は不明であるが建武初年1334ごろから備中国成羽郷の信原氏が所持していた。

三処郷の地頭三処氏の姿は全く資料にあらわれず、高田寺、大領権現をもつ高田庄も含めて大覚寺統の勢力下にあったようである。

布勢郷に関しては全く不明。郡外では三刀屋郷には、飯島（三沢）氏と同族の三刀屋氏（もと諏訪部）が、新補地頭として入り、地盤を築いていた。

伯耆守護は石橋和義であったが、1338（暦応元）年ころ、上野国山名郷から新田支族山名時氏が、尊氏から伯耆守護とされて

簸の上短歌会

蛍　火

残照は木の欄干にほのぬくく陽の匂ひふふみ葦は
ゆれゐて　永井弥生

親子四人蚊張吊り団扇にあおぎつつ寝たる戦後の
遠くなりたり　常盤はるまさ

浮かびたる歌想メモせんと電燈を手さぐれば紐に
つけし鈴鳴る　佐藤喜代子

まだきより鵙数多も蜀黍の畑を荒らして遠くへ飛
ばず　岡田時子

川の辺を高く低くと光りゐし蛍火はらりと落ちて
ゆきたり　小早川恵子

舗装路に灯れる蛍よそのままで終っていいのかお
まえの命　仝人

亡妻と来し夏の終りの京の旅いま想い出の渡月橋
に佇つ　安部夕波

斐の上川柳九月号

団らんを地獄にかえた普賢岳　真綿よし子

縁と言う見えない糸にからまれる　若槻白馬

初盆が思い出だけをおいて去り　松浦久寿子

夕暮れにチチと鳴く虫秋はそこ　安部春恵

迎え火が目立つ様にともちあげる　田中有樹絵

息をするたゞそれだけで炎暑汗　渡部ミツコ

枯木だが緑の山の賑わいに　松田牛歩

ボケられぬ仕事も趣味も欲張って　安部正子

帰省した息子の白髪気にかかり　松浦亜以

ゴミ入れを見向きもせずにポイと捨て　横山まこと

経済は強いが走りに弱い国　児玉哲呂

足伸べるくせこの頃の膝がしら　藤原千代子

茄子胡瓜上手に客のおもてなし　中林もりえ

前号訂正　1頁1段10行・関東申・17行本誌2頁・2段2行八幡宮を・18行このころの政権を・21行の手にあった・4段8行折半・3頁下の表中2段最後　10→10（続き）

伯耆に移住し、のち出雲・隠岐の守護ともなる。

鎌倉幕府滅亡へ

1331（元徳3・元弘元）年1月、後醍醐は鰐渕寺を南院長吏頼源へに綸旨によって、天長地久の祈願所とする。4月吉田定房の密告で計画はふたたび幕府にもれた。

幕府の内紛の間に種々の後醍醐方の対策も講ぜられた（8月、再び綸旨が頼源に届けられ、南朝方で一貫する）が。8月24日やむなく神器をもって秘かに奈良に向い、笠置山にたてこもった。この知らせで幕府は承久の例にならって大軍を西上させた。

9月26日量仁は持光厳天皇となり持後伏見の院政が実現した。

京方利あらず赤坂城の正成は城を焼き行方をくらます（約1年間）。後醍醐は六波羅に送られ、神器は持光厳に移った。持花園は上皇後伏見の院政に協力し、「政道」の復興に全力をあげた。

間もなく光厳の即位の大嘗会も終ったが、大乱の兆しは、ふたたび足もとまで迫っていた。

1332（正慶元・元弘2）年、幕府は後醍醐を隠岐に配流した。11月楠正成挙兵。

1333（正慶2・元弘3）年2月、やっと腰をあげた富士名判官の協力も得て隠岐を脱出した後醍醐は伯耆へそして船上山へ。後醍醐から鰐渕寺頼源、高田寺聖乗法印に直接王道再興に協力の要請があり、高田寺には祈願も行なわれた。名和長年は大領権現神主右門に、郡内の豪族神主の所持する刀剣を集めるようとの勧誘状を届ける。新田義貞・足利高（尊）氏の挙兵で、5月北条高時以下自殺して一門亡び六波羅探題も壊滅した。この時伯耆ならびに塩冶高貞の率いる出雲の武士の戦はめざましかった。

船上山でこれを知った後醍醐は、その日からすべてを、元弘2年2月の隠岐配流前にもどし、持光厳天皇を廃し、鎌倉幕府の手になるものをすべて否定し、ふたたび専制君主の道を驀進しはじめた。

九月句会抄

異国にて喰うトマトなり味薄く　浅野としお
去ぬ燕しょんぼり朝の電線に　岡田蹊花
過疎廃屋こおろぎだけがしきり鳴く　小川月舟
十勝野や馬が貌出す霧の中　恩田和美
ゆずり合う小径の足元秋に触れ　門脇花子
ぐずる児に母言い聞かす夜店前　加納信子
如露の水雨乞うて蒔く大根種　楠房子
移す瞳に夕日捕らえし蜘蛛の糸　高木白虹
買いたての靴で小走り秋を行く　中沢美紀子
つく法師命燃やして夏は果つ　新出谷一華
空蝉を集めて帰る孫の箱　錦織富江
退院す庭に日焼けの夫が待つ　峯石美代子
鳴く虫を育て夜毎を楽しめり　渡部夕峰

岩屋寺へやゝ遅れて5月、祐円へ王道再興の願文が届けられた。6月御所に入った後醍醐は討幕の功労者への論功行賞を行った。その手続きや不公平から混乱をまねき、所領をめぐる裁判は紛糾をきわめ、その処理のため雑訴決断所も設置したが、人材不足から軽ろんぜられた。

尊氏と親王護良の政権をめぐる競合もはじまっていた。地方では各国々に国司と守護が併置されたが、混乱のもととなった。天皇の理想は高いばかりで、現状が無視されており、それを推進する機構と人材の不足、不公平が次第に不満となってふくらんだ。

これに対し尊氏は奉行所にあって、諸国から上洛する無数の武士を配下におさめつゝあった。

そして居ながらにして全国の推移を的確に把握していた。不安定な政情の中で各地の武将たちがだれを最もよく信頼していたかをはっきりしめしていたから、尊氏の占める地位は次第に重くなった。

建武と改元

1334（元弘4）1月、建武と改元された。紀元22年中国で漢王室を再興した後漢光武帝の年号を、この盛時にならおうと用いたものである。そして後漢の盛時を招くには、民衆の生活の安定が第一であるのに、天皇の絶対性を誇示するため、大内裏の造営計画を発表した。これには農民の間でも武士の間にも反対が強くなり、中止せざるを得なくなり、さらに人々の期待を失っていった。

そこへ護良と尊氏の対立は表面化し、6月後醍醐の暗黙裡に護良は尊氏の手にわたり、さらに鎌倉へ送られ幽閉された。

7月、高田寺、大領権現に忠勤をよみして寄進が行われたが、岩屋寺には記録がない。

1335（建武2）内裏御料所横田庄を石清水八幡宮に寄進し、武士の協力を期待し、岩屋寺にも祐円の歎願で寺領が寄進された。

1336（建武3）1月比叡山において頼源は後醍醐より三処郷地頭職を行賞としてうける。2月長年は高田寺に祈祷精誠の軍役状を届ける。尊氏九州に敗走。

3月尊氏湊川の戦で正成を討つ。5月頼源は三処郷内から高田寺、大領権現に寄進する。8月尊氏は鰐渕寺北院の一坊如意輪寺に祈願文を。寺院内も南北に分裂していたようである。尊氏の要請で持光明天皇即位。10月尊氏鰐渕寺に寄進。11月後醍醐神器を光明に譲る。尊氏「建武式目」を定める（室町幕府成立）。

12月後醍醐幽閉を脱出吉野に移る（南北朝の対立）。

会員頒布一部百五十五円／六九一八　島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二　編集発行責任者・高橋一郎（振替口座松江0—601）頒布／横田史談会　印刷／仁多郡仁多町三成　植田軽印刷所

奥出雲

題字　糸原風亭書

第199・200合併号
（11・12月号）
1991. 12. 7
（M124・T79・S66）
奥出雲編集集団©

ふるさと横田の先覚者を追慕し顕彰する小展示館を設ける運動を

太平記の時代と奥出雲⑦

太平記の時代　第Ⅱ期第Ⅲ期前半

―三つ巴の勢力で動揺する足利幕府―

一天両帝・南北京

1336（延元元㊟建武3）年　楠木正成の自害と新田義貞軍の敗走で、京都の驚愕はたいへんなものであった。足利の軍勢が迫まり、後醍醐は神器を奉じて近江東坂本に還り、そして山門（延暦寺）にのがれた。㊟上皇光厳は途中から病気を理由に京都にのこり、尊氏が石清八幡に本陣をかまえると、皇子とともに八幡に向った。

足利勢は山門攻撃を開始、名和長年の討死が続いた。

尊氏の種々の施策は、さしも衆徒3,000を要する山門を孤立化させることに成功し、八月㊟光明天皇をたて両統迭立を条件に、後醍醐の還幸を申入れた。

これを受け入れ後醍醐は京都へ向った。一方期するところあった後醍醐は、ひそかに皇子尊良を新田義貞とともに越前に下した。下山した後醍醐は、花山院に軟禁され、直義から神器を光明に渡すよう強請された。そして神器授受の儀が行われた。そして後醍醐の皇太子成良は、光明の皇太子となり、両院迭立の講和条件が形式上満たされた。

しかし後醍醐は北畠親房のすゝめで、神器を奉じて秘かに花山院を出て、吉野へ潜幸した。（渡したはずの神器は偽もの）

こうした天皇と直義との対立の発生は、足利氏において尊氏は軍事責任者、直義は政務の責任者という制度が確立したことによる。尊氏よりもはるかに徹底して建武政治を排撃する直義が、政務の責任者として登場してからは、対立は必然的に激化した。こうして「一天両帝、南北京」の時代、南北朝時代がはじまる。以後半世紀にわたり、室町幕府・北朝勢力と、南朝勢力との対立抗争を軸に、武士階つ進撃する軍勢の通過したあとには、「在家の一宇モ、草木ノ一本モ」残らなかったと述べている。

後醍醐天皇の晩年

抵抗する南朝の基盤には、堺浦の商人たちを背後にもつ悪党があった。歴史上は、13世紀末弘安年間のものを第1期とし、1300年前後の第2期の悪党があり、20年後には第3期悪党とするが、これが後醍醐と結んで、1340年以後は南北朝期の悪党となって拡まった。この中に楠木氏一族もふくまれるという。

こうしたなかで高野山に納めた後醍醐の願文には、真の天皇は自分の子であると、渡した神器は偽器で、直義の強請によるものであることを含んでいるが、直義は高野山立的立場を守っていった。

後醍醐は東国経営の計画によって南朝勢力を固め、足利氏討伐をよびかけようとした。しかし、1337（延元2・建武4）年、諸国は足利・北朝方と南朝方と分れて各地で争いをくりかえして行った。そのためには後醍醐の16人の皇子のうち生存する12人の多くは各地に降って、その地方武士の要となったが、容易ではなかった。

1338（応暦元㊟延元3）年5月、北畠顕家は後醍醐に、こうした情勢の下での諫言を行い、のち足利氏の執事高師直と戦って敗死した。7月には北陸にいた新田義貞が戦死した。その翌8月尊氏は北朝から征夷大将軍に任ぜられた。

時に、佐々木（京極）道誉（高氏）は、近江・飛弾・上總の守護となり、山名時氏は足利氏への功績を認められ、はじめて伯耆の守護に補任され、上野から移り、成長への足掛りができた。

この年は諸国に大飢饉があり子女を質入れ、売買して餓死を免れるとするものが多かったという。

詩一編

宮沢賢治

手は熱く　足はなゆれど
われはこれ塔建つるもの
滑り来し時間の軸の
をちこちに美しくも成りて
燎々と闇をてらせり
その塔のすがたかしこし
むさぼりて厭かぬ渠ゆえ
いざこゝに一基をなさん
正しくて愛しきひとゆえ
いざさらに一を加えん

太平記の時代と奥出雲⑦・短歌・俳句・川柳・総目録（51～200号）

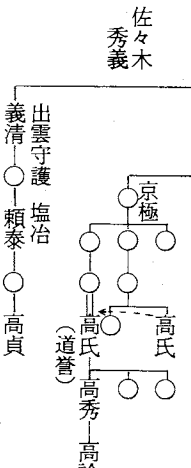
街の活性化に必要なのは、住んで、働く人が、現在の町を正しく評価しているかどうかが根本である。

吉野潜幸3年近く、不屈の精神を持ち続けてきた後醍醐も、1339（延元4㊥暦応2）年、病には勝てず床に伏し、無念の遺言を残し8月没した（52才）。10月尊氏・直義は後醍醐の冥福を祈るため、洛西嵯峨の地に天龍寺の建立をはじめる。

征夷大将軍となり、守護任命権を掌握した尊氏は、侍所長官に、足利家譜代の家臣高師泰を任命した。侍所は守護を管理する機関でもあった。そして恩賞の宛行をおこなう恩賞方の長官は、執事である師直を任命した。

将軍の執事は、尊氏の命令を下達し、全国の武士たちからの申請・嘆願などの上申をすべてとりあつかう立場にあり、侍所の長官はまた、全国の武士を統括するものであったから、幕府内における高氏兄弟の勢力は絶大なものとなっていった。そして高氏兄弟の発言力をさらに裏付けたものは、畿内近国の在地領主層を直轄軍団として組織した軍力であった。畿内の国人層（田代・淡輪氏など）が、師直・師泰軍の中核となったのである。次第に幕府の支配体制が、整備されてくると、守護人事、荘園政策、在地領主対策をめぐって幕府内部での矛盾・対立が発生し、直義派・師直派とも呼ぶべき党派が形成された。

法秩序を重視する直義派を形成したのは主として、鎌倉幕府以来の官僚層と足利氏一門であり、直義が惣領尊重の方針をうち出したことから、足利氏一門の中でも、各氏の惣領がこれに与みした。近江の守護佐々木家の惣領氏頼は直義に属し、庶子道誉が師直と結んだのはその典型である。佐々木氏は氏頼の六角家と道誉の京極家とにわかれた。（それぞれ京都の六角と京極に住んだからである。のち出雲守護となった京極氏はこれで、その一族が尼子氏である）



地域的には、関東、奥羽、九州など、同族的結合が強固に残っている辺境の武士たちが直義に属した。師直派には、畿内近国の反荘園制的な新興在地領主層や、戦功によって守護に補任された武士が集った。軍忠によって守護は補任されるものではないという、室町幕府創立時の建武式目の守護規定が、直義の守護観であった。

こうして幕府内部に二派が形成されると、諸情勢に対する直義と高氏兄弟の意見の相違は、性格の違いだけではすまされない段階へと展開し、ついに流血の内部抗争へと進んだのである。

ばさら大名として有名な佐々木道誉（京極氏）

道誉は1306年生れ、高氏といゝ執権北條高時の側近に仕えた。後醍醐の隠岐流刑の際には、途中の警固を担当している。しかし尊氏が鎌倉幕府に叛すると足利方に馳せ参じた。尊氏が建武政府に叛した時は、新田義貞に味方したこともあったが、内乱期を通じて室町幕府の重鎮として活躍している。

道誉父子は小鷹狩りの帰途のわずかな事件に端を発し、妙法院に放火し多くの寺が類焼した。

山門側の強訴で、尊氏ー直義は遂に折れて、それぞれ出羽・陸奥へ流罪にしたが、その下降の時も、300余騎をしたがえて、派手な見送りをうけるという大胆な行動をとったが、近江国守護として、長年にわたって培った軍事力と経済力とに裏付けられていたからのことである。下剋上の行動を特徴とする道誉は、一方では茶道の成立にとっても重要な人物であった。

道誉の邸宅では毎日のように、連歌の会や茶会が開かれ、闘茶がおこなわれた。『太平記』の中にも風雅の逸話がしるされている。かつて都をのがれるにあたっても、留守宅を見苦しくないように、畳替えをし整頓したという話もある。これが佐々木道誉の人となりである。ばさら大名の精神風土であった。

塩冶高貞の出奔

1340（暦応3㊥興国元）年8月三処郷地頭職（仁多郡内）が南院に安堵されている。ずっとのち1351年にも安堵されているが、三処郷内に頼源に背を向ける勢力があったともみられる。岩屋寺も後述のように勢力をもっていた。三沢郷地頭三沢氏も4代のころで、広い（木次町温泉・三沢・三成・佐白・阿井辺まで）範囲に地盤を固めているから、三処郷に進出をねらい、郷内に同調者が生れていたかも知れない時代である。しばらくすると三沢氏は山名氏に従い京へ兵を進めている。

この年は南北両軍が関東でも畿内においても交戦状況にあった。

1941年3月、出雲、隠岐の守護塩冶高貞が京都を出奔した。幕府は尊氏によって直ちに、桃井直常・山名時氏・師義親子に高貞を追わせた。一方直義は高貞の退路を断とうとした。出雲鰐渕寺北院衆徒に与えた命令書によれば、高貞が陰謀を企てて逃亡したので誅伐せよとある。しかし北院は高貞の祖に恩があって消極的な態度をとっている。また4月には尊氏の命をうけた杵築景連は、南北両院の衆徒に旅伏城へ陣を取るよう命じている。

高貞出奔の真の理由は不明であるが、桜井・山名などの有力武将に追わせている点からみると、幕府内部に深刻な矛盾が発

生していたからであろう。追われて妻は自殺し、播磨までのがれた高貞は、陰（影）山宿（兵庫県神崎町）で自殺した。

塩冶高貞は室町幕府の功労者の1人である。執事師直との対立もあったであろう。

また『太平記』には次のような物語がある。師直が高貞の美貌の妻に横恋慕し、兼好法師らに恋文を代筆させて送ったが、全く顧みられなかった。やがて師直は侍従の局という女房の手引きで、高貞の妻が湯からあがるのをかいま見ることができた。

それからというものは、いよいよ恋の病にとりつかれ、半狂乱となった。侍従の局は、師直のようすが恐ろしくなり、田舎へ逃げ帰ってしまったので、手引きをする者もいなくなった。師直は最後の手段として、高貞の陰謀をつくりあげ、尊氏に讒言した。（師直は零落した公家の娘をこゝかしこに隠し置いていたという）

なお、別の記録によれば、妻西台は追手に迫られて播磨の影山で自害し、高貞は本国に帰って一戦をと思ったが、山名時氏・師義の追跡で白名（出雲・宍道町）で自刃したともいうし、妻の死を知って馬上で腹を切ったともいう。これは権力闘争から、後醍醐の船上山からの功績をもって、出雲・隠岐守護の高貞が南朝勢力に接近しようとしたため追討されたともいう。

不思議にも高貞と同じく後醍醐から美しい官女を賜った者、新田義貞・楠木正成ともに自害し果てている。

この結果、山名時氏は伯耆守護の上に、出雲・隠岐の守護職をうけ、さらに丹後の守護となり、山陰ではもとより、一族の領有する諸国を合せると、あなどり難い努力へと成長してゆく。横田庄とのかゝわりは遂に40余年後の明徳の乱へと発展する。

8月には㊟後村上から鰐渕寺へは、朝敵（南朝の）追討の祈願が寄せられている。

天竜寺船と天竜寺

この年、直義は天竜寺造営のため「天竜寺船」を元へ遣すことを考え、大貿易商人である至本というものに、商売貿易の損益にかかわらず、5000貫文の銭貨を天竜寺へ進納させる約束をさせ準備をさせた。

1342（康永元・㊟興国3）年の岩屋寺文書によれば、横田庄は尊氏方で山名時氏が支配していた。岩屋寺の院主は、「代官良円が押妨し、寺が荒れて困っている。御所御料所であるから、院宣によって良円の横妨を停止し、安堵して欲しい」と時氏に訴えている。良円については明らかでない。三沢氏が陰であやつっていたのか。

この年の秋、船は博多を出航し、翌1343年夏に帰朝、至本は大利益をあげ約束の通り献納し、派遣は成功に終ったという。これがのちの室町幕府の対明貿易への発展、足利義満の日本国王に任ぜられる一つの発端である。一方倭冠の活躍も盛んであった。

この年の8月、理由は不明であるが出雲守護職は道誉に移り（3年ほど続く）、12月山名時氏は丹波守護となり、伯耆、丹後も兼ねた。（のちふたたび出雲は時氏の子師義に移り、一族の満幸へ移る）

献納された資金によって、着工以来遅々として進まなかった天竜寺も、1344（康永3）年9月にはほぼ完成した。

1345（康永4のち貞和と改元・㊟興国6）年8月、こゝで後醍醐の7回忌の法会が行われた。光厳院御幸の報が伝わると、山門衆徒はこれに反対し嗷訴した。3000の大衆法師が、「天子本命の道場たる叡山が荒廃にあるとき、それをさしおいて禅宗を厚く遇するとは、亡国の先非たる夢窓を遠島に追放し、天竜寺を撤却せよ」と迫った。叡山は東大寺・興福寺の助勢を乞うに至り、臨幸をとりやめて法会を行い、旬日後に落慶供養が行われた。

尊氏兄弟は数百騎にのぼる軍兵をしたがえてこれにのぞみ、その行粧は美をつくし善をつくしていた。山名時氏・高師直らの幕府有力武将も、それぞれ隋兵をしたがえて参加した。見物人は賀茂祭の100倍以上といわれて、幕府の力は山門を完全に凌駕した。これはかつて源頼朝が東大寺供養の際に行ったと同様、幕

年表1（1部は前号記述）（後後醍醐の略）

1331	天徳3	1月	後鰐渕寺へ綸旨
	（天弘元）	4	討幕計画もれる
		8	後頼源に綸旨
			〃奈良へ笠置へ
		9	持光厳へ神器うつる
			出雲守護佐々木氏総領塩冶高貞へ
32	正慶元		後隠岐へ
	（〃 2）	11	楠木正成挙兵
33	2		後伯耆へ、そして高田寺へも祈願
	（〃 3）		名和長年、大領権現右門へ勧誘状
			後船上山へ　**頼源高田寺の協力要請**
		5	**鎌倉幕府亡ぶ**　後岩屋寺へ願文
		6	後論功行賞
34			**建武政府**　後高田寺・大領権現へ寄進
	（建武元）		
35	（建武2）		後横田庄・内裏御料所から石清水八幡宮領へ
			〃岩屋寺へ寺領寄進
（太平記時代Ⅱ期）			
1336	延元元（建武3）		（代官安部氏はこの年下るか）
		1	後頼源に三処郷地頭職を
		2	名和長年　高田寺へ軍忠状
			中先代の乱－山名父子足利方で功績
			足利尊氏　九州へ敗走のち東上（山名時氏も）
		3	湊川にて正成討死
		5	高田寺・大領権現へ頼源寄進
		8, 10	尊氏鰐渕寺北院へ祈願文
			南院は頼源の下にあるから分裂か
			持光明天皇即位
			山名時氏大将格へと頭角あらわす
		10	尊氏鰐渕寺に寄進
			神器光明に移る
			尊氏「建武式目」を定め**室町幕府成立**
		12	後脱出して吉野へ　**南北朝の対立**

府の威光を人々にしめす一大示威行事（デモストレーション）であった。

この年時氏は侍所の頭人という重職になった。これがのち三管領につぐ四職の家柄（山名・一色・赤松・京極）になる基となった。

またこの年上皇光厳は、幕府が各国に建てた寺塔を安国寺・利生塔と命名することにさせた。

中央の波乱は横田庄にも

1346（正平元）年、世の乱れは諸国に山賊・海賊を横行させ騒然となったという。この年に、㊟後村上院が高田寺へ寄進したという釣鐘の銘を写した文書があるが偽文書と考えている。

吉野の朝廷＝南朝は幕府の動揺を見のがさず、すぐさま各地に南軍の蜂起を命令した。1347（貞和3）年、楠木正行らは紀伊で善戦し、河内へと兵を進めた。河内守護細川頼氏と紀伊の守護亀山国清を大将として、管内反乱の鎮圧に向ったが、戦は敗退続きであった。驚いた幕府は、山名時氏を大将に任命して救援におもむかせたが、結果は京都までの敗走となった。この報には武家のみならず北朝の貴族も驚愕した。管内の軍事諸条件（反乱・蜂起・合戦）の責任は守護にあったから、幕府は和泉・河内の守護頼氏を更迭し高師泰を任命し、侍所の長官として、畿内の在地領主層を配下におさめている師泰の軍事的手腕に期待した。法治主義の直義派にかわって、師直・師泰派が前面に登場し、幕府内部の諸勢力に、さまざまな波紋をなげかけることになった。

これに対し南朝方も畿内近国の南軍に総動員を下した。12月に入ると幕府は師直・師泰を総大将とする、中国・東海・東山諸道の大軍を進発させた。

この年には、横田庄での代官良円の横妨に関する文書が10通あるが解決せず、重ねて山名時氏にたのみ、㊝光厳院からの院宣をうけている。中央情勢の余波であろうか。（詳細は横田町誌に）

1348（貞和4・正平3）年1月南朝方楠木正行は四條畷で、高師直と戦い敗死する。師直軍は圧倒的勝利をおさめ、さらに吉野を攻めたので、後村上は賀名生へと落ちた。

師直のクーデター

このころさきに述べた幕府内部に、直義派・師直派が形成されていたが、主流派の法治主義の直義派に対して、南北両軍の門探題となった。このころから直義と尊氏の執事師直との不和が表面化しはじめた。8月師直は直義によって執事職をとりあの要求に屈し、直義の政務の停止、諸氏の配流など行い、成人したわが子義詮を関東から上洛させて政務をとらせることを約した。

この年横田庄には㊝光厳院の院宣が2度、時氏を経て下されているが、横妨はおさまっていない。

また鰐淵寺には光厳院の北院に対する知行安堵状が届けられている。このころ同寺の南北両院の対立はおさまっている時であった。

そののち夢窓疎石の調停で幕府内の両派は一時的に和解し、直義は政務をみ、師直は執事に返り咲いた。

しかし9月に入ると、師直は備後の地頭・御家人らに命じて、鞆津の直冬を襲わせ、直冬らを九州へ追いやった。直義の政務も師直の妨害で十分に行われず、尊氏の和解条件にしたがい、義詮を上洛させて、三条の直義邸に入ったので、直義は政務のすべてから手を引いて、12月出家して慧源と号し、日夜玄恵法師との文談に日を過した。

九州にのがれた直冬は、巧みに九州における南北両軍の対立軍事的緊張から、師直・師泰らの行動がグローズ・アップされて、両派の対立は決定的となった。

1349（貞和5）年、足利直冬（尊氏の庶子で直義の猶子）は長げられたので、師直は直義を討つため兵を集結した。洛中は両派の武将で大混乱となった。そして師直は直義が逃げこんだ尊氏の高倉邸を囲んだ。その兵5万余騎におよんだ。尊氏は師直

晩夏詠　籔の上短歌会

とめどなき老母のくり言に苛立てど晩夏の雨　永井弥生

にその背の小さし

家裏に啼く蟬の声しげくしてテレビジョンの声聞えぬほどに　佐藤喜代子

売られゆきし仔牛への思ひもうすれしか間遠くなれる母牛の声　仝

独り居の未亡人の家に若夫婦帰られしか窓々開かれてあり　仝人

夏休みの終りて下宿へ孫帰り空席となりし今朝の食卓　野村節子

満月は廃屋の屋根はなれりと厨のわれを老夫呼びたり　仝人

東支那海に弟死にしさま知らす手紙母よりあづかりて持つ　岡田時子

職退きて十年経たりためらわず無職と書くが慣いとなりぬ　常盤はるまさ

関ケ原の草生の丘に佇みて古戦場跡に秋の風聴く　仝人

安部夕波

奥出雲51～200号内容項目別一覧表 （数字は号数）

中 世 編

① 奥出雲東部の旧家 — 未完
横田氏(99) 代官 小池・安部氏(100)
三沢氏(101) 馬来氏(104)

②○中世横田庄概観－年表・系間(127, 8)
○誇りうる中世横田庄－その社会と経済の動き (164, 165, 166)

③○飯島三沢氏物語 (106, 107, 109, 111, 112, 117, 119, 126)
○尼子家臣団の分析 (131, 132, 133, 134, 135)
○岡山県川上町の三沢氏－三宅隆道(81)
○地域史を考える －中尾慶次郎(81)

④○藤ケ瀬城主三沢氏の祖先は
木曽義仲ではない(51) 飯島氏である(52)
在来の偽系図の作者は(53)
○藤ケ瀬城の遺構－寺井 毅(167)

⑤ 陰陽の中世史・備北の山内・多賀山両首藤氏と奥出雲(150～154, 156, 158, 160)

⑥ 杠城興亡記－浅原公章 (84, 85, 87, 88, 90～92)

⑦ 惣と一揆の行動－序論 — 未完 (90～93, 95)

時代・地域と奥出雲

⑧ 朝鮮半島と奥出雲 (192～194, 198) — 未完

⑨ 太平記の時代と奥出雲 (193～200) — 未完

⑩ 出雲大川流域物語 — 未完
横田の両岸 (178) 安部吉重郎(184, 186)
漆仁の薬湯 (191)

⑪○出雲国風土記の神話(57)
○稲田姫の戸籍と斐伊川の地籍(86, 87)
○神話の基盤 (88, 89)
○書きなおされつつある日本－出雲風土記の位置 (116)
○風土記を読む会から－出雲の四大神(118)
○スサノオの開拓地 (135)
○ヒノ川＝斐伊川はどこか (130)
○横田郷は秘境であった (143)

たたら製鉄

⑫ 出雲で古い鉄師 — 未完
③大馬木の山本・杠家 (51, 56)
卜蔵家の原鈩－佐世川徳雄 (129)

⑬ 山陰の鉄の始源は－朝鮮半島に於ける古代製鉄と北九州 (141～144)

⑭ 砂鉄製鉄史 (76, 77)

⑮ 奥出雲のたたら製鉄史 (105～109, 113, 114
(中世) 117, 125 (近世) 160, 162, 163,
(松江藩政) 165, 171, 172, 176, 179, 180,
181, 183, 185, 190, 197) — 未完

⑯○たたらの手引－砂鉄たら鉄へ (144)
○やさしい鉄滓の見方－窪田蔵郎 (61)
○高殿以前の原始的な製鉄法
－仝 (65, 66)
○発掘された羽口－仝 (67, 68)

⑰ 鳥取藩政と伯耆国鉄山のうつりかわり
－影山 猛 (170)
横田たたらの里を確固なものにするには(175)

寺院関係

⑱ 岩屋寺 — 未完
○傑僧快円 (53, 58, 63)
○庶民の寺岩屋寺 (155)

⑲ 高田寺根元録 (79, 82)

⑳ 奥出雲の仏教 (130, 131)

⑳ 三沢蔭涼寺と安国寺恵瓊 (124)

考古学から

㉓ 出雲と吉備－東森市良 (54)

（1～50号の目録は50号に掲載）

㉔ 奥出雲と古代　日焼田遺跡ー仝
(56, 95)
㉕ 奥出雲の古代社会ー古墳文化
ー中浜久喜　(93, 94, 96～98)
㉖ 産業考古学のすすめー森口　保 (72, 73)

歴史と風土　—未完

㉗ 横田と音楽(55)　比波科学(55)
㉘ 横田の茶道・前史(74～76)
松平不昧と茶道　(102～104)
㉙ 経済更生指定村の生き方
ー過去から現代へ (177)
㉚ 人間と環境
教育の風土(52)　美作の津山(53)
北備大会から(54)
㉛ 洋の西と東ー聖母マリヤと観音(152)

小字の歴史　—未完

㉜ 稲田(63)　横田町①(123)
大馬木西部(137, 138)
尼子経久の母馬木氏の里ー宇波
(169, 172)　下横田㊤(192)
散歩道　キミネさん(159)

人　物　—未完

㉝ 井上栄太郎(75, 77)　門野長造(118)
卜蔵孫三郎(78, 83, 86)
岡崎喜一郎(109)　卜蔵梅之丞(113)
郷学記念碑ー善徳寺子代記(140)
細木芒角星(171)
安部宙之助(168, 173, 176, 178, 180, 186
187, 191, 193)
㉞ 奥出雲に関する研究書目録①と
研究者名(69)　—未完
荒木宗重(52)

文　芸

㉟ 奥出雲の歌道
(64, 66, 67, 70～73)
㊱ 奥出雲俳諧史　—未完
(80, 82, 83)
㊲ 奥出雲と文学・芸術　—未完
大町桂月(138)　与謝野夫妻(161)
頼春風・杏坪(174, 179, 180, 185, 187)
㊳ 湯の廻の文芸　(82)
㊴ 南画と奥出雲　(89)
㊵ 森欧外と中江藤樹(99)
㊶ 松平不昧の書　(185)
㊷ 菅茶山と奥出雲　(170)

碑・石仏　—未完

㊸ 石明しぐれ塚(77)　路考発句塚(87)
芭蕉の句碑(158)　細木芒角星句碑(171)
㊹ 三界萬霊塔(150)　龍の駒(151)
六日市三上さん(189)
㊺ 路傍に刻む歴史(155, 162)
㊻ 妙厳寺と袖師が浦の地蔵(135)
㊼ 宝篋印塔(三沢為忠)　(195)

諸　史　—未完

㊽ 奥出雲の民力　(120, 121)
㊾ 横田の生活(明治35年)
(145～147, 150～152, 154, 158, 159)
㊿ 雲州そろばん国指定伝統的工芸品に(124)
51 仁多郡畜産小史　(148, 149)
52 仁多郡農談会　(58～60, 62)
53 庶民の中の旗本武士(108, 110～112, 114,
116)

地　誌　—未完

54 横田銘草木集ー丸山　巌
(66～81, 83)

(10頁へ続く)

(諸篤志家のお蔭により200号記念の増頁ができ総目録をつけ合併号としました)

の間に入って、諸氏に守護職を与えて、被官化し、独自の権力を樹立して行った。

そしてその勢力は中国地方にも拡大した。1350（貞和6・正平5）年になると、安芸の吉田経盛さらに石見の諸将が、直冬党として挙兵すると、周防の大内弘幸がこれに応じたので、尊氏・直義・師直の三勢力拮抗の状況は全国各地で展開しはじめた。また各地の武士団の一族の内部でも分裂をつゞけ、骨肉相争う戦乱が続いていくのであった。

直冬の抬頭と直義そして尊氏

1350（観応元・正平5）年、こうした情勢の中からであろう、岩屋寺には2月と7月の2度、尊氏からの凶徒退治の祈願文が届いている。また大領神社・高田寺へ2月、7月には高田寺へと、同じく尊氏の凶徒退治の祈願文があったという記録がある。（これも偽文書である。これらについては、『風土記論叢』2号の拙稿「高田寺根元録の研究」を）

（この年1月には、高師直、師泰討伐に功があったとする、尊氏の飯島四郎三郎—三沢氏4代か—宛の軍忠状がある。同じく諏訪部孫三郎—三刀屋氏にもある）

横田庄内での横妨は相変らずあったとみえて、6月にも院宣が届けられている。

一方簸川の鰐渕寺には、6月に尊氏代直冬の祈祷が行われている。尊氏代とは直冬の勝手に記したものである。地方武士団・寺衆への呼びかけが重視されているからこういう署名をした。

10月、直冬の反乱鎮圧のために、尊氏は師直を率いて京都を発した。京都の警備は義詮である。

その準備中、直義は大和へとのがれる。師直は直義の捕縛を主張したが、尊氏は応じなかった。身をかくすという風聞であったが直義は秘かに南朝と連絡をとり大勢の挽回をはかった。南朝は直義の降伏を認めると、京都への進撃を開始した。

11月には義詮は鰐渕寺両院に祈祷を行った。

義詮は佐々木道誉とともに京都の防衛にあたった。1351年、義詮は西走し尊氏軍と合流し京都へ帰った。この時山名時氏は尊氏軍の先鋒にあったが、洛中へ入ると山名時氏らは直義方へ走ったために、尊氏は敗れて播摩に退いた。尊氏、高師直ともに情勢は不利であった。そして高師直らをはじめその一族は、直義方の手で誅戮されるありさまであった。

2月になると、尊氏、直義・義詮の間は表面上は平和を保った。このころ南北両朝の講和交渉が行われたが、天下統一の方法についての両者の意見の相違は決定的で、ついに交渉は決裂した。また直義が義詮を助けて政務をみるということも、実権は次第に直義派に掌握されていった。

この年3月鰐渕寺へ、尊氏代直冬の祈祷が行われている。

4月、今度の分裂事件による所領裁判にあたって、直義派の有力武将が実権を握り、守護人事権も握った。尊氏に従った佐々木道誉は許されて本領は安堵されたが、出雲は時氏の選択が功を奏し、山名時氏が道誉にかわって出雲守護職を回復した。（しかし間もなく直義の死によって、再び道誉のものとなる）

このようにして直義と将軍尊氏との対立は必然化した。

7月には高田寺へ㊟後村上の

地球のこれからのあり方は　歴史に学ぶと　繁栄のアクセルよりブレーキが大切と思われてくる

十一月句会抄

胎の子動き確かに良夜なり　浅野としお
コスモスや妻に華やぐ衣も買わず　岡田蹊花
コスモスや朝の挨拶凛として　小川月舟
美幌径風飄々と霧流す　恩田和美
胃検診なにごとなくて秋日和　門脇花子
通院の道端むくげの残り花　加納信子
地蔵庵合す両手に赤とんぼ　楠房子
節くれし指の年輪みかん剥く　高木白虹
月冴えて通る人なし青信号　中沢美紀子
秋彼岸過ぐれば冷気肌にしむ　新出谷一華
孫の指障子に残し秋彼岸　錦織富江
公園のベンチに姥や敬老日　渡部夕峰

斐の上川柳十一月号

敬老の寂しさついて来る祝い　高木白虹
石頭軽石となり老いの坂　横山まこと
刈り終えてすぐに雨とは天の加護　安部春恵
秋だもの体重気にして食べる老　安部正子
気に入らぬパーマ鏡に文句言い　松浦亜以
黄金の派をすいすい赤とんぼ　若槻白馬
連休のプランは孫に逢える旅　真綿よし子
その時に居たばっかりに役がつき　藤原千代子
老いたとて気分しだいで紅もさす　渡部ミツコ
落ち柿にわがもの顔のいたち群れ　田中有樹絵
十九号屋根を替えろと持って逃げ　藤原のぼる
高齢社会手押し車に手をひかれ　松田牛歩
なにものの怒りか嵐駈けてぬけ　児玉哲呂

祈願綸旨が、大領神社には㊥楠木正儀の祈願が届いている（これについても前記論文参照）

鰐渕寺文書によれば、7月に前美作守富田秀貞が、阿井郷から寄進をしており、8月には義詮の祈願文が、9月には後村上の願文が届けられている。

衝突は時間の問題となった。

7月19日直義は尊氏にあい、政務の返上を申入れた。しかしまとまらず、細川・仁木・赤松・佐々木道誉・石塔らは各領国へ帰った。やがて尊氏は近江の道誉を、義詮は播磨の赤松氏を討つべく向った。これは事前にしめしあわせての行動であった。

挟撃説を聞いた直義は身の危険を感じて、京都をのがれ北国へと走った。北陸道一帯の守護職は直義派で独占していたからである。

この時山名時氏は直義に従ったが、のち関東へ赴く時は随従せず、直義と分れて伯耆に帰ったとみられている。

こゝで尊氏は和解しようと使を送ったが、直義はこれを拒否した。

一方、尊氏は政務を義詮にあづけ、仁木頼幸を執事とし、鎌倉入りをはかった直義を討つべく方策をめぐらした。そのため南朝に帰順して直義追討の綸旨を得ようとした。この真の目的は出撃中の尊氏派諸将の留守中において予想される、南軍の軍事行動を阻止することであった。赤松則祐の交渉によって、帰順し綸旨をうけた。そして㊤崇光天皇を廃し、北朝年号の「観応」をやめ、「正平」の年号を用いることとした。

11月上旬、尊氏は東国へ向った。やがて関東の諸将は相前後して尊氏派としての旗色を鮮明にし、ついに直義軍を圧倒した。

尊氏は直義の降伏をうけ入れ、1352（正平7）年正月5日に鎌倉に入った。浄妙寺境内の延福寺に幽閉された直義が鴆毒（ちんどく）（鴆という鳥の羽にあるという猛毒で、酒にひたして用いる）によって殺されたのは、師直の死後1年目の2月26日であった。

岩屋寺と鰐淵寺

1352（観応3）年正月10日の頼源宛の杵築景春の文書をみると、大社の神事、仏舎、山内のことまで、頼源の手で統一されていたことがわかる。これで当時の大社の神仏習合の状況がわかる。臨済宗の受戒和讃に大社祭神が三光国師から受戒されたという臨済宗のいう禅受戒の起源と相応するものであるという。

この中で内経衆等云々の語があるが、この意味は、大社神殿内において、大般若経転読の奉仕座を占め、次いで勅願寺となった鰐渕寺が第2座であったが、この頼源・三光国師の出現でこのころは岩屋寺が転落して、鰐渕寺第1座を占めていたことを証するものという。

直義の死後

（その後約2年間）。このような好情勢は南朝方に有利とみえたが、京都占領は1か月も続かず、1352（観応3・正平7・文和元）年3月には、美濃の土岐、近江の佐々木道誉、四国の細川らの諸軍を率いる義詮の軍勢がふたたび入京し、男山八幡山の南軍を包囲した。2か月の攻防によって南軍は崩壊し、後村上は身をもって賀名生にのがれた。（北畠親房もその二年後の1354正平9年に62才で死去した）

直義の死後、山名時氏は出雲守護職をふたたび道誉に譲らざるを得ず、さらに新らたな選択を迫られた。尊氏党に復帰か、南朝に接近するか、それとも中国以西に勢力のある直冬党に通ずるか。状況は初め南朝が優勢であったが、さきに一度去った義詮が再び京都へ向い、京都八幡で南朝軍へ総攻撃を開始する時点で決断し、嫡子師義に伯・因・雲の兵をつけて、義詮軍に参加させた。師義は輝やかしい戦功をあげた。勲功の賞として、若狭国今宮の地を元のごとく宛行われるよう、道誉に義詮への仲介を頼んだが、道誉は連歌会・茶会とこれをかえりみなかっ

斐の上川柳十二月号

ホステスは嘘の数ほど酒をつぐ　松田牛歩
ローソクを消して出たかと後戻り　松浦久寿子
黒幕の向うで何か動いてる　児玉哲呂
老いたとて小言が云えてまだ達者　森山悠子
食欲の秋スーパーがけしかける　真綿よし子
リクルートお偉い方は健忘症　若槻白馬
贈り物少し派手目の柄を撰る　藤原千代子
国よりも先づ身の為の永田町　松浦亜以
秋日背に豆をよりつゝ姑思う　安部春恵
空けて待つ席に偉げな顔が来る　高木白虹
長男と書いてお七夜盛り上り　藤原のぼる
もてなしの酒で腹から話し出し　安部正子
マンガだけ見てからと孫動かない　横山まこと
お年ですとも言えず医者薬出し　渡部ミツコ

者を意味し、かつてはその席次は、横田庄の岩屋寺が第一座（岩屋寺文書・大永の古記録）であった。これは後宇多天皇の綸旨により早く勅願寺となった岩屋寺が、後醍醐の初期には第1

尊氏は帰順したが、南朝方では、講和の行動ではなく、京都占領の行動を起し京都に入った。義詮は近江へのがれた。この間直義の死もあったが、関東の情勢は尊氏を関東に釘づけにした

198号訂正　3頁2段12行出雲の情勢と諸将・

た。師義は大いに怒って、8月伯耆に帰国した。時氏は憤激し、道誉が守護職をもつ出雲に攻め入り、守護代吉田厳覚を追放し、かわりに厳覚と同族の富田秀貞を守護代に任じた。隠岐の支配権も手中に入れたであろう。（『太平記』の道誉に頼んだという一件の記述は信用できないとの見解もある—藤岡大拙説）

ともかく時氏、師義父子は伯耆・因幡・出雲・隠岐を制圧し（守護職を得たという意味ではない）強大となった。

10月には師義は、岩屋寺保護のため諸武士の横妨の禁制を布告している。

勢づいた時氏父子は、1253（文和2）年5月、伯耆を発ち、南朝と呼応して京都へ攻めのぼり、義詮・道誉を敗走させ、京都を占領した。雲・伯の武士が戦いに疲れて勝手に帰国するようになり、義詮の上洛の風聞もしきりとあり、7月下旬止むなく伯耆に帰った。山名氏が直冬と結ぶようになるのは、おおよそこのころからで、直冬党の勢力は飛躍的に増大した。このころの三沢氏は先に軍忠状をうけてはいるが、地盤を築く時代であったと思われる。

観応の擾乱

内乱開始後20年を経て発生した観応の擾乱は、表面上は足利氏一門の内訌に終始したかにみえたが、しかし実は後進的な地域に基盤をおく足利氏一門の守護クラスの勢力と、近畿近国を中心とするより急進的な小領主・悪党的な勢力との、幕府の方向をめぐる対立・抗争を本質とし、これに諸将の勢力争いがからまったものだけに、容易に終息するものではなかった。

東北でも、関東でも起り、関東では熾烈で、新田義貞の子らの挙兵もあり、約二年尊氏を関東の地に釘づけにした。

九州から中国地方においては直義=直冬派の勢力が断然強かった。かれらは幕府の「観応」の年号を否定し、「貞和」年号を使った（南朝の「正平」の年号は勿論使用しない）。

1351（貞和7）年10月2日、当地の山一つ向う地毗庄（現庄原市中心の地方）を本拠とする山内首藤氏一族11人が連判して、一族一揆を結んだのは著名なことである。「元弘以来の一族同心の結果、将軍家より恩賞にあずかり、当地を相違なく知行してきた。この一族だけは武家のご恩を忘れることなく、一致して軍忠に励むことにしよう」と記されている。山内氏は分裂の愚をさけ、直冬派としての結束を誓いあい、その地の尊氏派の守護の被官と戦いも交えている。

全国各地で、南朝・尊氏・直冬の天下三分の情勢が奥地深くをも切り動かして展開していった。

（横田史談会　高橋一郎）

（このころの代官安部氏についてはあとで述べる予定）

感謝

とうとう200号を迎えました。横田史談会員・世話人の皆様、誌友として講読下さる皆様、詩歌や論文を御提供頂いた皆様、ほんとうに有難うございました。

皆様の御厚志に支えられて、苦しい時も乗り越えてこゝに至りました。

気持はあっても雑学凡才、思うように出来ないこと、申しわけありません。どうかこれを乗り越えて頂くことを期待して、今しばらくと思っております。よろしく宜敷くお願い致します。

印刷して下さる植田軽印刷所の皆様にも心から御礼を申し上げます。（横田史談会　高橋一郎）

秋陽うとまし

簸の上短歌会

わが念ひのとどかざりたる秋のくれ向いの山は　永井弥生

狐の嫁入り

白き雲流るる秋の空しづもりわがかなしみは年　仝

毎ふかく

墓道のところどころに栗の実のまろべるを拾い　仝

墓前に供ふ　野村節子

秀才のイメージありし旧友のもの腰やさし五十　仝

年ぶりの逢い

台風に野菜畑は荒されて千切れし白菜に秋陽うとまし　佐藤喜代子

折からの夕陽をうけて農薬のしぶきはミニの虹を立てたり　仝

敗戦に召上げられし日本刀のその後を知らずわれ古稀をすぐ　常盤はるまさ

風流も優雅も超えて朝来れば手足自由に今日も励まな　岡田時子

いくとせの想ひあたため君と来し秋ふかみゆく湯の街の宿　安部夕波

山の端をあふるるごとく流れゆく雲の切れ間の虹のかたはし　小早川恵子

十二月句会抄

小春日や繕う老母の鼻眼鏡　浅野としお

お茶の座ときめし此の部屋実南天　岡田蹊花

病窓の父の寝言に冬日射す　小川月舟

穂芝分け峠を下ればダム展く　恩田和美

湯上りの鏡にうすし木の葉髪　門脇花子

カルキ臭き水にも馴れて秋深し　加納信子

人生のうら枯れ詫す老いの園　楠房子

つぎ張りの亡母の布子捨てきれず　高木白虹

寂しさに落葉掃く日の口重く　中澤美紀子

秋深し歴史を刻む凱旋門　新出谷一華

山陰げの車窓に走る石蕗の花　錦織富江

寝息もる炬燵の孫や仕舞風呂　峯石美代子

枯蓮の水面平らに暮れかかる　渡部夕峰

⑤⑥ 船通山の鳥類を探る－内田　映
(86, 88, 90, 96, 101)
⑤⑦ 吾妻山・庄原・多里は海底であった　(115)
⑤⑧ 自然との共生を文化の中心へ　(184)

民具・民話・民謡　—未完

⑤⑨ 民具と民俗資料　(62)
除草見たら除草機へ　(64)
高野山の田植早乙女ハマリさん
－岡村達男　(69, 70)
⑥⓪ 民間信仰
あたごさん (88)
⑥① むかし・いま・あす (行事)
(94～100, 102)
⑥② 横田の民話
(145, 147, 153, 156, 158, 170)
わらべうた　(145, 147)
⑥③ 鉄にまつわる話　(60)
親をいたわった話(古文書から) (71)
木地谷敵討ち事件　(120, 121)
妙好人－浅原才市　(122)
⑥④ 大東町下久野の番所　(155)

随想ほか

⑥⑤ 龍虎相搏つ(130)　辰のとし(153)
馬・うま・午・ご・むま　(177)
年号考　(166～168)
⑥⑥ 東北夏の旅から　(126)
もみぢのみちのくひとり旅　(139)
奥の細道と奥出雲　(182)
みちのく奥の細道ふたり旅　(189)
⑥⑦ 短　詩「少年の心」　(159, 168)

提言など

中世に眼を　(76)
憩の丘に彫刻の森を　(165)
たたらの里横田を確固なものにするには　(175)
ロマンと亡霊　(90)
つくり出す文化への回帰を　(119)
横田町本町の再生を　(123)
イベント(偶発)的世相　(125)
歴史の真実を求めて　(146)
栄光さりまた来る(7世紀の歴史)　(153)
鏡・剣・玉をめぐる神話の作られた時代背景は
(7世紀の歴史)　(157)
後世にのこすもの—像　(161)
古事記は偽書の重み　(162)
郷土読本を読んで　(163)
大岡昇平の文学　(167)
神話と歴史　(168)
歴史の面白さ楽しさと怖さ　(173)
単身赴任－古代木簡から　(147)
大嘗祭考　(181, 183)

このほか　町内の美術の各クラブから、写真・書・日本画をのせて頂いた(1～82)。文芸関係では、57号から短歌と俳句、78号から川柳を現在まで毎号のせて頂いている。

こゝに掲載したもので、書き直して学術論文として学会誌・研究紀要・著作集等に要請も頂いて収録して頂いた。

かなりの図書館・大学・研究所・学会等と研究物の交換の橋渡しとして、本誌が役にたっている。

(旧号がご希望によって－数号は複写－お届けできますので、ご連絡いただけばよろこびます。拙いものですが、篤志家の御協力で続いていることを、感謝しております)

祝
今、印刷はコンピューター時代！
電子編集組版＆電算植字システム
有限会社 植田軽印刷
〒699-15 島根県仁多郡仁多町大字三成453-1
TEL・FAX 0854－54－0114

会員頒布一部百五十五円／六九年一八 島根県仁多郡横田町一〇六一ノ二 編集発行責任者・高橋一郎 (振替口座松江0－601) 頒布／横田史談会 印刷／仁多郡仁多町三成 植田軽印刷所

編著者　高橋一郎紹介

［略歴など］

大正五年十月二九日生まれ、昭和十二年島根師範専攻科卒。以後県内にて教員（音楽、社会科担当）。昭和五十年横田中学校長を退職後、無職のまま郷土史研究や、文化運動に専心。横田史談会、山陰考古学会結成に貢献、横田町文化財専門委員会、島根ふるさと伝統産業審議会委員等歴任。鉄師頭取・絲原家「絲原記念館」、「奥出雲たたらと刀剣館」、「雲州そろばん伝統産業館」の企画展示の責任者、開設後の委員・役員として貢献。横田町文化祭の歌、横田音頭など作詞作曲多数。

［著書　］

＊「奥出雲をさぐる―古代・中世の奥出雲―」　昭和40年、今井書店（松江）

＊「雲州そろばんの今昔」　昭和52年、松江文庫（報光社内）

＊「あるく見る横田」昭和53，58年、奥出雲文庫１（奥出雲文化協会―高橋一郎内）

＊「奥出雲のたたら製鉄覚書」昭和53年、奥出雲文庫２

＊「奥出雲横田とたたら」平成２年、奥出雲文庫３

＊「横田町誌」昭和43年、編集、執筆に中心的役割を果たす。

＊　たたら製鉄に関する中央・地方刊の専門誌や専門書に研究論文多数発表。地方新聞、地方刊行物に随筆、評論等多数執筆。

［最新執筆］：02年の「奥出雲」刊行中止前後以後

＊　横田町教育委員会「鉄師絲原家の研究と文書目録」05年。高橋一郎整理の分類目録を基礎に文化庁、県補助で悉皆調査、再整理、分類、研究した報告書。A4・514頁。

＊　鉄の道文化圏推進協議会「鉄の道を往く」平成14年、山陰中央新報社所収、「奥出雲におけるたたらの成立と発展―鉄師糸原家文書にみる―」

＊　不昧公生誕二百五十周年記念出版実行委員会「松平不昧と茶の湯」２００２年（非売品）所収「茶書を通して見る一貫性と深化」、「たたら製鉄と松江藩の関係について」

＊　共著「江戸時代における奥出雲たたら製鉄の経営の展開」「鉄と鋼」２００５年Ｎ０．１（ＶＯＬ．91）（日本鉄鋼協会刊）所収。

＊　特掲：「出雲の近世企業たたらの歴史―錬鉄が主要製品であった―」、「ふぇらむ」（日本鉄鋼協会）１９９６年11月号所収。（被引用が多い）

［受賞］

地域振興文部大臣賞（昭和60年）、産業考古学会長表彰（たたら研究、平成２年），通商産業大臣表彰（伝統産業育成強化、平成６年）、日本観光学会長表彰（鉄の道文化圏提案と推進、平成７年）、山陰中央新報社地域開発文化部門賞（平成７年）受賞。叙勲「瑞宝雙光賞」（平成16年）。

しめじだけ

しめじだけさん
れつをつくつて
遠足するのか
雨もふらぬに
大きなかさをさして
どこへいく

（評）きのこのかさは日がらかさ、
雨のふる日は雨のかさ

児童雑誌「幼年の友」の「私の童謡」入選。
濱田廣介選。大正15年1月号、小学3年生。

発行
「奥出雲　―　第二分冊」編著者代表・高橋一郎
（横田史談会・奥出雲編集集団）
発行２００６年４月

無断転載、出版を禁止します。
著作権は高橋一郎遺族が所有しています。